まんじ

No.131

2014.2.1

まんじ第百三十一号　目次

石川理紀之助の一生……三戸岡道夫…4
歴史を裁く韓国……新井宏…13
短歌　三十首……曽根竣作…21
関東管領始末記⑫　ふたつの大乱……千坂精一…25
アルジェ(三)―西欧とアラブの谷間で―……太田精一…33
「茶道史」勉強ノート(六)……忠内正之…39
短歌　行雲流水(四十)……石黒修身…51
老人会　会長のつぶやき(その四)……伊治哲…54
関門下関フグの旅……吉田忠雄…67
つれづれの源氏物語　第一回　問題意識と概観……小田紘一郎…69
目耕録(その十三)……山本鎭雄…89
シルバー諸君の力(農業分野編③)オリーブな夢……古屋富雄…100
漢詩　潮騒録(七十五)《漢詩の流れ63》……鯨游海…105
『自虐カレンダー』……漆原直子…109
殉教(二)……鍋屋次郎…112
千家尊福伝(二)……村上邦治…124
(司馬雑感三十四)「花神」と「世に棲む日日」の世界……山田嘉久…129
性と化粧(九)……鈴木守…141
村雨……横山正義…146
密室銀行(十四)……匠克仁…153
液体のてんとうむし……匠克仁…156
還暦からの考古学(二十九)……中山喬央…165
口紅(その十三)……池本勉訳　原作莉…186
編集後記……編集子…209
表紙……田寺怜葦…

石川理紀之助の一生

三戸岡道夫

石川理紀之助は、明治時代の、秋田の二宮金次郎と言われた人物である。

明治時代の石川理紀之助は、秋田地方の農村復興に尽した人であるが、毎朝午前二時に起き、板木を叩いて農民を起して、農作業を行った。

昭和に入ると、その精神主義的な克苦勉励が強調されて、「農聖」と呼ばれたが、その真髄は、綿密な調査に基づいた経験の分析と、その普及への熱意にあった。

「寝ていて人を起すことなかれ」

が彼の遺訓であった。

一、幼少時代

石川理紀之助は弘化二年（一八四五）、出羽国秋田郡小泉村（現在の秋田市）に、奈良周喜治の三男として生まれた。二宮金次郎の生まれたのは天明七年（一七八七）であるから、二宮金次郎より五十八年後ということになる。（なお死去したのは大正四年（一九一五）であったから、七十一歳の生涯であった）。

理紀之助の生まれた小泉村は、現在は秋田市になっているが、市の中心部からは北東に十キロメートルも離れた、小さな村であった。

奈良家は農家だったので、その幼少年時代は、手習師匠に一年、寺小屋に一年と、学問は二年間学んだだけで、あとは家業の農業を手伝って働いた。

それは父親が、

「農民には学問は必要ない。読み、書き、ソロバンが出来れば、それでよい。書物を読む暇があったら、働くことだ」

という考え方であったからである。しかしこれは理紀之助の父だけでなく、当時の農民の一般的な考え方であった。

したがって理紀之助が二年間も勉強できたのは、父の特別の配いだったといってよい。二人の弟や姉などは、満足に寺小屋へも行っていなかった。

が、とにかく理紀之助はこの二年間の勉学を踏み台にして、一生の間に、独学で万巻の本を読んだのである。現在残っている蔵書からみて、農業、和歌、修身、道徳などに、強い関心を持っていたことがわかる。また理紀之助自身が書いた書物も多く残しており、非常に勉強家だったのである。

理紀之助は十四歳になったとき、奈良家の本家である、大地主の奈良喜兵の家に、見習い奉公に出た。

そして理紀之助の、記録力、計算力などが、他の若者たちより優れていたので、すぐ主人に認められ、特別の仕事をするようになった。すなわち、下男、下女や、毎日仕事をしにやってくる人々の動静などを記録したり、また、毎日の仕事の計画と、人の割り当てをするような役目を与えられた。そして主人から、その将来に大きな期待をかけられるようになった。

理紀之助は生まれつき才能があった上に、子供の頃二年間も寺小屋などで勉強し、また学問好きの祖父からいろいろな話を聞いたりした。そして農業を手伝いながら、いろいろな草紙などの本を読んだり、書写などをしていたので、当時の農村の若者には珍らしい能力の青年と、主人の眼にうつったのである。

しかし、そうは言っても主人は、理紀之助に読書することを許していたわけではなかった。理紀之助は農家の見習奉公にきたのであるから、理紀之助を一人前の農夫に育てることが主人の責務であったから、

「一生県命に働け。書物を読むことなどは必要ない」

と、きびしく指導されていた。

だから夜おそくまで本を読んでいるのを見つけられると、ひどく叱られた。これは二宮金次郎が叔父の家に預けられていた時、夜おそくまで本を読んでいると、叔父に叱られたのと同じである。

しかし本を読むことが好きな理紀之助は、どうしても読まずにはいられなかった。そこで一つの方法を考え出した。それは朝、他人よりも二時間ぐらい早く起きて、読書するということであった。

普通、農家の起床時刻は午前四時ぐらいである。それより二時間も早く起きるのである。

理紀之助は後年、

「私は十五歳の時から、朝早く起きて勉強するようにしていた」

と語っているが、早起きの原因は、本を読みたいという願いから出たものであった。

そのようにいろいろな書物を読んでいるうちに、理紀之助は和歌にもふれることが多くなり、

「自分も和歌を詠んでみたい」
と思うようになった。
そして十六歳の時に、ひそかに、久保田町の歌人、蓮阿上人の弟子になって、和歌の勉強をするようになった。
蓮阿上人は久保田町の町はずれの西善寺という寺にいたが、藩内の三歌人の一人に数えられている歌人であった。
蓮阿上人の弟子になった理紀之助の勉強はものすごく、一年半の間に一万余首の和歌を添削してもらったといわれる。もちろん、夜昼となく寸暇なく働きながらの作歌であるから、その和歌に対する情熱と努力のほどが、わかろうというものである。
ところが運の悪いことに、この和歌の勉強が、ふとしたことから主人の耳に入ってしまったのである。主人は身をふるわせて怒り、
「昔から、和歌よみの家産つぶし、ということがある。和歌におぼれると、金持ちでも財産をなくしてしまうということだ。それなのに、お前は見習いのくせに、私の眼を盗んで、和歌を習っているなどということは、以っての外である。今後は絶対にこのようなことをしてはならない」
と、理紀之助が大切にしていた書物や、理紀之助の書いた和歌の原稿を、全部焼いてしまった。
見習奉公人である理紀之助には弁解のしようもなかった。ただ、燃えていく焔の色を、悲しげに見つめている以外になかった。しかし心の中では、
（私は断じて和歌の勉強をやめないぞ。もちろん、農民としても一生懸命働き、立派な家産も作り、家産つぶしにはならない。農業と和歌を両立してみせる）
と、堅く決意するのであった。
その後、理紀之助はこの志を達成するために、奈良家から逃亡して、江戸へ行って勉強しようとした。しかし、失敗した。
そして、その途中にあった雄勝郡稲庭村で奉公した。ここで、貧苦の中にあっても人の道を守り、歌道に精進している後藤逸女と出会って、その生き方に深い感銘を受けた。
しかし、そのような中途半端な生活をいつまでしていても仕方ないので、理紀之助はまた生家に戻った。

二、石川家の復興

慶応元年（一八六五）、理紀之助は二十一歳になった。この年、理紀之助は秋田郡山田村（現在の昭和町）の肝煎、石川長十郎の婿養子となり、石川家へ入った。そしてここから石川理紀之助としての人生が始まった。

山田村の石川家は、もとは裕福な地主であったが、先々代のあたりから家屋が傾きはじめ、理紀之助が養子に入った頃は借金も多く、先祖伝来の田畑の大部分は、借金の担保に入ってしまっていた。
養父の石川長十郎は温厚な人物で、
「私の家の状態は見た通りである。家政の一切、そなたに任せるから、一生懸命やってもらいたい。そして、そなたが書物を読むことや、和歌を勉強することについては、私はいっさい干渉しないが、しかし、まず家産の立て直しを、しっかりやってもらいたい」
と、頼まれたのであった。
理紀之助は五年で石川家をもとの財産に復興する計画を立てて、猛烈に働きはじめた。
一時、生家の父親奈良周喜治のまねをして、金貸しもやってみた。しかしこれは邪道であることに気がついて、すぐにやめた。
ひたすら家族一同が一致協力して農業にはげみ、節約につとめた。
これまで長い間、田畑で働いたことのなかった養母も、少しでも役に立とうと、田植えなを手伝い、妻のシワ子も、幼い子供をあやしながら、一人前の仕事をした。
そして生活費をきりつめて、これまでのぜいたくな暮らしをしないようにした。
そのため計画通り、五年で借金を全部返済することが出来、石川家の家産をもとの状態に戻すことが出来た。実に見事な財政再建といってよかった。
しかし理紀之助がその間にやったことは、それだけではなかった。石川家の財政再建の最中、すなわち二十三歳のときに（慶応三年）、村の青年たちと一緒に、
（農業耕作会）
という会を作った。そして休日ごとに集っては、
農業のこと、
村本来の姿の研究
備荒共済貯蓄（凶作に備えて米などを貯蓄しておき、困った時に、その米を貸出して助け合うこと）
などについて真剣に話し合い、自分たちの手で、山田村をなんとか向上させたいと、語り合っていたのである。
そのために皆で藁細工をしたり、貯蓄をしたりした。
慶応三年といえば、次の年は明治元年である。戊辰戦争などで世が騒然としていたこの時、理紀之助は村の将来を考えて、村の人々の助け合い運動を起していたのである。
そしてこの事が村での理紀之助の評判をよくし、近隣の人々から好感を持たれ、そして石川家の復興へ、村人から協力を得られたのでもあった。
村全体がよくなることと、自分の家の家産がよくなることと、切り離すことが出来ない。石川家を豊かにする

ためには、山田村全体が豊かにならなくてはならない。そして山田村が豊かになることによって、石川家も豊かになる。

そのようなスケールの大きな構想、考え方が、いつのまにか理紀之助の中に生れてきていたのであった。

これはかっての二宮金次郎の、農民が協力しあって村を強くする、農村共同体の強化によって、農村復興が可能であるという、農村復興の思想と同じであるということが言えよう。

三、秋田県庁役人となる

理紀之助は明治五年（一八七二）、二十八歳のとき、要望されて秋田県庁の県庁役人となり、勧業行政を担当した。

ポストは等外出仕という最下級の役人であったが、当時としてこのように農民が県役人となることは、珍らしいことであった。秋田県内では、理紀之助ただ一人であった。おそらくここ二、三年の間に、一大区の戸籍調査などを、理紀之助と一緒にやった旧藩士の誰かが、推薦したのであろう。

そして以後理紀之助は明治十五年（一八八二）まで、十年間、いろいろな形で県の農業行政にかかわるのであった。その業績として評価されているものは、

一に、稲の乾燥法の改善によって、米質の改良指導を行ったこと、

二に、種苗交換会を明治十一年に開設したこと、

である。

理紀之助が三十四歳のときであり、秋田県庁の役人となって六年目の時である。

さらに明治十三年に歴観農話連という組織を作った。理紀之助が三十六歳のときであり、理紀之助が会長になった。会員は百五十名程度であり、秋田県内農民の交流、親睦をはかり、団結して農事研究をしていく会であった。そしてこのメンバーが中心になって、種苗交換会を続けていったのである。

理紀之助の県庁勤めは約十年にわたるわけであるが、その勤務状態を見ると、三十数回も辞表を出しては、また勤めるという、ちょっと異常な勤務ぶりであった。

それは何故なのか。それは理紀之助の本来の志は、県庁に勤めることではなくて、農業に専念することであった。だから県庁の役人として出世することなどは念頭になく、一日も早く家に帰って農業に専念したいのだった。そのために県庁への勤務といっても、短期で辞めることが出来る、臨時傭いの形で採用してもらっていたのである。

臨時傭いは、期間が三カ月とか六カ月と短いので、短

期間で終れば、家に帰ることが出来る。理紀之助が辞表を提出する。しかし県庁の勧業課では、理紀之助に居てもらわなくては困るので、辞表を受理せず、継続扱いとする。こうした継続採用形式が延々と続いて、辞表提出回数が三十数回にも及ぶという、異常現象が起きてしまったのであった。

事実、県庁に入って四年目頃の、明治八・九年には、理紀之助は一度退職している。

しかしそれが再び県庁に勤めるようになったのは、勧業課にいる清岡行三、中村直三などと出会って、新しい農法、中央の農業事情などを知り、新しい時代の農民として生きていくためには、農書を読み、各地の農法などの勉強をして、自分達の新しい農業を創り出していかなければならないと、強く感じたからであった。

そこで生産性向上を目的として、勧業課の役人が中心になってやっている勧業義会という研究会にも入会し、前記の清岡行三や中村直三などとも、新しく交わっていったのである。

そして頼まれて臨時傭となって手伝ったりしていると、次第に勧業課の重要な役割りも担うようになっていった。

勧業課員としての理紀之助の施策は、農民のやる気を育てるということと、その地域の昔からの農法を重んじながら、互いに交流しあうことを土台にしたものであった。そのため当時の「中央政府の指導のもとに物事を進めるのが当然である」という官庁主導のやり方とは、表面上は必ずしも一致しないものがあった。

しかし農業の振興とは、それぞれの土地の上に成り立っている具体的なものであるから、その土地の農民の心や農法を重んじなければ成立しないものである。したがって農商務次官などをやった、中央官庁のリーダーの品川弥二郎などからは、高い価値を受けていた。

以上のように三十数回も辞表を出しての役員生活は、農業の実践を目ざす理紀之助にとっては、遠まわりの道のりであったかもしれなかった。

しかし勧業課の人のほかにも、樋田魯一、津田仙、織田完之、間崎勇之助などという、一流の人物と知り合ったことや、東北農事通信組合を作って、広く情報を交換しあって見聞を広めたことは、大きな収穫であった。

四、山田経済会の頃

秋田県知事の石田英吉は、理紀之助の県庁勤めがそろそろ限界に来ていることを感じていた。

県庁に勤めてそろそろ十年になる。その間、六カ月勤めては辞表を出し、これを継続して勤務させてもまた三カ月もすると辞表を出してくる、そうしたことを繰り返

して十年ほどになるが、最近は養父が老衰してきているので、婿養子の立場から理紀之助は一刻も早く家に帰って、家政をみなければならない状態になっていた。

県の勧業政策に必要だといって、いつまでも理紀之助を引きとめておくことは出来なくなっていた。そこで、

「県の方で必要なときには、いつでもすぐ出勤してほしい」

という条件で、明治十五年の一年間を過すと、明治十六年三月に石田知事も転出となったので、その期に理紀之助も正式に辞職し、念願の山田村へ帰ってくることが出来た。理紀之助は三十九歳になっていた。

その時、理紀之助は次の歌を詠んでいる。

足ひきの山田において行く水の
心やすくもなりにけるかな

(足ひきは、山にかかる枕言葉である。歌の意味は、私はいま県の役人をやめて山田の農民として働けるようになった。本当に心がすっきりした)

理紀之助は帰る途中で、小泉村の実家に立寄って、実兄の恒助に会い、県庁を辞職したことを報告してから、山田村に向った。

道は、歩き慣れた道である。

この道は、時には朝日のまだ出ない、まっ暗な早朝に通ったこともあり、また夜中に提灯を持って帰ったこともあった。だから踏みしめる足に力が入った。

蛇川村に着くと、もう山田村の山が見えた。

(これからだぞ!)

と理紀之助は心の中で叫んだ。

理紀之助はこの十年間、勧業一筋に、県庁の中で新しい農業を求めてきた。

しかし、農家の生活はよくなっていなかった。先祖伝来の田圃を売って小作人になる者がふえ、税金も納められない農家も出てきていた。

また理紀之助が若い頃から志していた和歌の方は、蓮阿上人は明治三年にすでに亡くなっていたので、その後は東京の加藤千浪の弟子になり、県内、中央各地の歌人と交流を深め、和歌の研鑽に努めてきた。しかし、宮中の御歌所長である高崎正風とか、中島歌子、伊藤祐命などの一流の歌人を知るにつれ、理紀之助は自分の力の貧弱さが、嘆かれてならないこの頃であった。

(人生五十年とすれば、私の人生は残り十年そこそこである。その間に、あの青年時代に燃やした志を、十分に果すことが出来るであろうか。私はこれから全力をつくさなければならない。農業にも、和歌にもだ。どこまで出来るかはわからないが、とにかく頑張るのだ)

四十歳にあと一歩という理紀之助は、奥歯をぐっと噛

みしめて、山田村へ入ったのである。

理紀之助は前々から次のように考えていた。

明治維新になったからといって、田から米が沢山とれるようになったわけではない。税金は金納になったからといっても、米で年貢を納めた時よりも安くなったわけではない。士農工商の差別がなくなったとはいえ、農民が偉くなったわけでもなく、金持ちになったわけでもない。

考えてみれば、江戸時代の藩政の時代と変っているところはあまりない。それなのに、衣食の生活だけが贅沢になってきている。

昔は、藩主が年貢米を確実に納めさせるために、農民に、よく働け、そして節約せよと、細かいところまで立入って取締っていたが、今はすべて自由になっている。そのため、今の人間は昔の人間より働かなくなっている上に、食べたい物が店に並べられ、村に売りにくるので、買うことが多くなっている。このままにしていると、農家は大変なことになる。いくら勧業に力をいれても、追いつかない。

誰かがしっかり教えなくてはならないのだが、誰もそれを教えようとはしない。しかし放っておくことは出来ない。

そのように考えている理紀之助は、山田村へ帰ると、それを調べてみた。すると心配していた以上に、ひどい状態であることがわかった。

秋になって米が獲れれば支払うからといって、店から品物をツケで買うのが、当り前のようになっていた。

物売りがくると、米と交換で買うので、飯べる米が足りなくなってしまう者もいた。

家のまわりの山の木を殆ど切って、売ってしまっている者もいた。

無尽の掛金が滞っている者も珍しくない。

田の手入れや、肥料作りをやらないで、手間賃かせぎに出掛ける者もいる。

一軒一軒の借金の状態は千差万別であるが、しかし全部を合計してみると、自分の田畑を全部売り払っても、払いきれない金額になっていた。

借用証文を書いた借金には、どんどん利息が積み上っていた。

「今のうちになんとかしなくては、大変なことになる!」

理紀之助はそう思った。

そこで理紀之助は自分が責任者となって村民と話しあい、明治十八年(一八八五)六月に、この借金を払うための山田村民の会、名づけて、

(山田経済会)

を作ったのである。理紀之助が四十一歳のときであり、

県庁から山田村へ帰って二年目のことであった。

「この経済会は、村の者が背負っている借金を返済することが目的である。しかし村の中には、借金をしていない者もある。しかし、借金のない者も一緒になって働き、同じように節約する。村の二十五軒が一家になったつもりで、働くのだ」

と、山田村の二十五軒、百四十三人の村民が、個人の借金を村全体として、村民が一丸となって借金返済のために努力することを誓ったのである。

そのために夜会を開き、借金返済の方法を相談し、研究した。

その方法としては、山田村の先祖の生活と働きぶりを手本にして、これに劣らないようにすることを基本にし、

勤勉による増産、
倹約による貯蓄、
副業による収入の増加（養蚕、藁細工など）、
生産品のまとめ売り、
必要品のまとめ買い、

などの実行を徹底することにした。

勤勉の方法としては、昔から行ってきた農閑期の若勢の早起きの法をとり入れて、村民全体が、一年中、午前三時の起床と決めた。そして理紀之助は午前二時に起きて、板木を打ち鳴らして、村巡りをして呼び起すことにした。

堆肥はこれまでの二倍を作り、さらに土肥も作り、これを田圃に入れて、一割の増収をはかった。当時山田村の総収穫は四百五十石であったので、その一割といえば四十五石であった。

また節約の方法としては、白米を食べられるのは老人のみとし、一般の者は一割以上のカテ（雑穀）を混ぜたカテ飯を食べて、節米することにした。カテの材料としては、稗、粟、じゃがいも、山野の野草などを使い、その調理法を研究した。そのため山田村では、次の年から、米の端境期でも、米買いや借米をしなくても、すむようになった。

また衣類はいっさい買わず、修繕用の布切れを買ってきて、それで我慢をし、盆や正月の休みは一日きりとし、年祝いは禁止、葬式や結婚式は簡単に身内だけですませる——といった申し合せをして、全員がよく守った。

そして五日ごとに夜会を開いて、それが実行されているかを確認し、農作業はその時期が遅れないように、注意した。

そして年一回、村民が全員集って一年の総まとめをした。これを農祝いと称し、この時だけは餅を食べ、酒を飲んで、互いに労をねぎらい合った。村全体の借金返済に苦労している村民たちも、この農祝会に参加することは、楽しくうれしいことであり、山田村に生れてよかったと思う一時であった。

（つづく）

歴史を裁く韓国

新井宏

「歴史を裁く愚かさ」という言葉がある。

おそらく、それを流行語としたのは、「自虐史観」に異を唱えた西尾幹二であろう。しかし、私が何も西尾幹二らの「新しい歴史教科書」に同調しているわけではない。

同じ「歴史を裁く」ということでも、日本と韓国では大分異なる現象がある。日本では一部の「自虐史観」によって自らを必要以上に裁く傾向があるが、韓国では「恨の文化」によって、自らを裁くよりも「日本を裁く」ことに代償を求める傾向がある。それを極端に表現すると韓国の「他虐史観」である。しかし、これも本質的には「自虐史観」によく似ているように思う。

ところで、法の原則には、「事後法の禁止、遡及処罰の禁止、法律不遡及」というのがある。簡単に言えば、「後で作った法律で過去を裁いてはならない」という法概念であり、国家権力が「後出しジャンケン」で何でもできることを禁止した項目である。見方によっては「歴史を裁く」ことを禁止した項目とも言える。

ただし、これに反する事例がいくつかある。

その代表的なのが、第二次世界大戦後の戦犯法廷である。それまでは、「国家機関として行為した個人には、刑事免責」が認められていたのに、ドイツでも日本でも敗戦国の指導者達が犯罪者として裁かれた。

また、近年は「不作為責任」、すなわち「何もしなかったこと」が「義務に反する」として罪に問われる事例、例えば「サリドマイド薬害」や「アスベスト問題」などで、国や製造者らの責任を厳しく認定する傾向があるのも、一種の遡及処罰とみなすこともできよう。

しかし、何よりも大がかりに「歴史を裁いている」のが韓国である。

その走りは、既に米軍軍政下に提出された「日韓併合に荷担した者を死刑等とする特別法」に見られた。これは流石に米軍政庁が拒否権を発動して公布されなかった

が、独立を達成した一九四八年には、さっそく「反民族行為処罰法」として制定されている。

解放直後の韓国では、反日を叫ぶことが「愛国者」としての身分証明であり、日本の残滓を排除することが、新たな国家建設の必要条件とする風潮がみなぎっていたからである。

しかし、現実には実行に移されなかった。米国の反対もあったが、李承晩政府を支える上層階級は、日本支配下で実効支配を担っていた総督府の官僚や地主層などの保守派であり、建前は反日であるが、本音はさほどでもなかったからである。「先ず新国家建設、後に親日派清算」といきなり修正されてしまったのである。

しかもその後の朴正熙大統領以下の軍事政権は、その経歴からも、また経済再建の必要性からも、むしろ「親日的」でさえあった。

貧しい家庭に生まれた朴正熙は「小学校に行けなかったのに、日本人が来て強制的に行かせてくれ、成績が良かったので、師範学校、軍官学校、東京陸軍士官学校に進み、卒業生を代表して答辞を読んだ」といろいろな場で述べている。酒席で日本の演歌を歌う朴正熙がどうして反日で有り得るか。日韓国交回復時の協定で相互の請求権の消滅を決めたのは朴正熙なのである。経済が最優先であった。

しかし韓国は忘れていなかった。「反民族行為処罰法」を大規模に復活させたのが、盧武鉉大統領である。大韓民国憲法で「遡及立法による財産の剥奪」を禁止していたにもかかわらず、二〇〇四年には「日帝強占下反民族行為真相糾明に関する特別法」、続いて二〇〇五年には「親日反民族行為者財産の国家帰属に関する特別法」を制定して、「反民族行為認定者の子孫の土地や財産を国が没収する」ことを可能にしたのである。しかも、親日反民族行為者の範囲は極めて広く、日本軍の軍人であった朴正熙さえもその対象とされたほどであった。もっとも、この法律には、盧武鉉の政敵、朴正熙の長女・朴槿恵を狙い打ちする目的があったと言われている。

ついでながら、その過程で、盧武鉉を支え、親日派攻撃の先頭を切っていた与党議長の辛基南が、実は、憲兵の子孫であったとわかり真っ先に失脚してしまうという悲喜劇もあった。

その他にも韓国では、粛軍クーデターと光州事件に関連し、元大統領の全斗煥を裁くため、時効を停止する特別法を制定して、遡及して死刑を課した例もある。

李氏朝鮮以来、政権交代の度に、残虐な報復を繰り返えしてきた韓国では、歴代大統領は必ず、暗殺されたり、死刑などの報復刑を受けたり、自殺したりしていて、軍事政権から文民政府に軟着陸させた盧泰愚大統領でさえ、

粛軍クーデターと光州事件で懲役十七年の判決を受けているほどである。もっとも、金斗煥も盧泰愚も後に巨額の罰金刑を課せられているが、実刑については恩赦を受けている。

このように、いわば、韓国は「後出しジャンケン」の常習国なのである。

この流れを知って始めて、韓国の大法院(最高裁)が昨年五月、元徴用工らの日本企業に対する個人請求権は「消滅していない」とする判断を出したことが理解できる。論拠は「日本による韓国支配は違法だから、強制動員自体が違法であり、時効は存在しない」ということである。これは今まで日韓両政府共に認めてきた「国交回復時の日韓請求権協定で請求権は消滅した」とする合意を頭から否定するもので、日本も困るが韓国政府でさえ頭の痛いはずである。そこには、弁護士出身の盧武鉉を支えた法曹系の人脈が、未だに「司法」に強い影響力を残している現実を見る。

そもそも、法とは「秩序のために人の行動を規律するルール」であり、「正義や理念」を実現することとはむしろ距離を置いている。だから、誤訳と言われているが、ソクラテスの「悪法もまた法なり」の言葉がしばしば引用されるのである。その法の世界に「正義や理念」を持ち込むところを見ると、韓国はやはり李氏朝鮮の朱子学(性理学)の国であり、イスラム原理主義と同じく、近代法の世界、すなわち妥協の世界とは共存しがたい存在に思えてくる。

昔なら、条約を守らなければ、それは即「宣戦布告」を意味した。だから、革命で成立した新政権であっても、旧政権の締結した「条約」を必ず守る。第一、それを守らなければ、相手国や国際社会から新政権が承認されるはずがない。

ちなみに、賃金未払いの時効は日本国内法なら二~三年である。どこか「時効の存在を認めない理念」が「歴史を裁く愚かさ」と相似る。

ついでに挙げておけば、対馬で盗難にあい、韓国に渡った高麗時代の観音像をめぐり、韓国の大田地裁が「日本側に渡さない」という仮処分を出した。盗品が元の持ち主に返却されることなど、当たり前のことであるが、瑞山市の浮石寺が「高麗時代に略奪されたもの」として訴え出たため、経緯が判明するまでの仮処分である。

それにしても、時効という概念がない。七百年も前のことを調べて、「略奪」か「売買」か「贈与」か判定できると思っているのであろうか。

韓国における「歴史を裁く例」には、これらのように現代社会が「何とか正義」と認め得るものを根拠として

いる場合だけではない。時には現代社会が困り果てている「不正義」を基にして、「歴史を裁いている例」もある。

現代社会の最大の課題は「テロとの戦い」である。政治的、経済的、民族的、宗教的に、少数派として追い詰められた勢力は、過激化するのが常であり、その主張を表現するのに、テロほど効率的な手法はない。巨大化した文明社会の脆弱部は、テロにいつも門戸を開いていて、ますます効率的な標的となる。だからこそ、「テロを総力」で防止しようというのが、近代国家の合意であり、それに従わない「テロ国家」をブッシュが「悪魔の枢軸」と非難したのである。

米国もロシアもイスラム圏も、更には中国も、民族的、宗教的、地域的な独立運動を掲げる「愛国テロリスト」に悩まされ続けている。

ところが、韓国は未だに「テロを賛美している国」なのである。

六月、朴槿恵大統領が中国を訪問し、習近平主席に会った際に、伊藤博文の暗殺者である安重根の銅像を犯行の地ハルピンに建てる許可を求めたのである。

中国側も驚いたことであろう。事前の外交交渉になかった件をいきなり首脳会談に持ち出すことも非常識であるが、テロリストの銅像を外国に建てようという国際感覚の欠如にも苦慮しているであろう。チベットやウィグルの異民族問題、すなわちテロ問題を抱える中国が、朴槿恵大統領の面子を立てるため、どこまでサービスするかが見物である。

それにしても世界各国の首脳に会っては、「竹島（独島）や慰安婦問題」を言いつけてまわる盧武鉉や朴槿恵に、聞いているふりをしながら、辟易している首脳達の姿が目に浮ぶ。しかし韓国はそのことに気付かぬふりをしている。

実は、韓国がテロリストを賛美しているのは、何も安重根ばかりではない。金九という抗日運動家・政治家を、盧武鉉大統領の時代に、十万ウォン札すなわち韓国の最高額紙幣の肖像にいったん採用したことがある。金九は、いわばウサーマ・ビン・ラーディンのようなテロリストである。

この件については、つい先日、『史遊会通信』に書いているが、共通する内容なので、以下に紹介する。

韓国にいた頃は、いつもズボンの左ポケットが、分厚い財布で膨らんでいた。最高額の紙幣が八百円程度の一万ウォン札しかなかったからである。だから数万円分を持ち歩くと、実に豊かな気分であった。

それにしても、不便なことこの上ない。そのため、一

般では小切手とか商品券で代用する便法もとられていたが、偽造や信用問題がつきまとう。だから当然、高額紙幣の発行やデノミがしばしば話題になっていた。

しかし、インフレ圧力になるとか、通貨の国外持出しが規制し難いとか、賄賂金の運搬が簡単になり汚職が増えるとか、韓国らしい理由で、なかなか進まなかった。試みに計算してみると、五億円ほどの一万ウォン紙幣の重さは一トン近くになり、賄賂をトラックで運んだというのもあながち誇張ではない。

しかし、高額紙幣がないのは後進国の特徴である。

先進国の場合、シンガポールの一万ドル札（六十万円）やスイスの千フラン札（十万円）、EUの五百ユーロ札（七万円）を別格とすれば、スウェーデン、デンマーク、ノルウェイの千クローネ札（一万七千円前後）、ロシアの五千ルーブル札（一万五千円）、米国、カナダ、豪州、ニュージーランド等の百ドル札（一万円）、日本の一万円札、英国の五十ポンド札（八千円）など、概して一万円程度である。

それに対して、中後進国の場合、インド、タイ、ベトナム、マレーシア、フィリッピン、南ア、エジプト、アルゼンチンなどが約二千円、中国、インドネシアそして当時の韓国が約千円である。

誇り高き韓国としては、高額紙幣がなく「後進国のイメージ」で見られることには我慢できない。そのため、二〇〇七年になってやっと、十万ウォン札と五万ウォン札を二年後に発行すると決定した。十万ウォン札ならほぼ一万円で、先進国入りできる。

さて、その後の進展であるが、五万ウォン札の方は、予定通り儒学者栗谷李珥の母で漢詩人・画家として有名な申師任堂の肖像を用いて二〇〇九年に発行された。ちなみに息子の李珥の方は、もう四十年間も五千ウォン札の表を飾っているが、母上の方はその十倍の価値である。母と子の絆が異常に強い韓国であるから、なるほどとも思う。

一方、十万ウォン札の方は、肖像に予定していた独立運動家の金九が、南北統一政府の樹立を主張していたことで保守系から激しく反対され、結局取りやめになってしまった。

そもそも、金九の肖像を最高額紙幣に用いようとしたのは、盧武鉉大統領である。金九が、李承晩の進める南朝鮮の単独選挙に反対し、南北統一政府を主張していたことを盧武鉉は高く評価していたからである。事実、もし金九らの主張が容れられていたなら、朝鮮半島における米国の影響は著しく削がれ、おそらく朝鮮半島には共産圏の統一国家が存在していたであろう。

しかし、米国と強烈な反共主義者の李承晩がそれを認めるはずはなかった。結局、金九は政権を手にした李承晩によって暗殺されてしまう。

実は、一九三二年（昭和七年）の李奉昌による昭和天皇暗殺を狙った桜田門事件も、同じ年の尹奉吉による上海天長節爆弾事件（白川義則陸軍大将が死亡、後に日米開戦回避に努めた駐米大使野村吉三郎海軍中将が右目失明、終戦時に降伏文書に調印した重光葵公使が右脚を失った事件）も金九の指示によるものであった。

更に遡れば、一九二一年（大正十年）にはソ連の政治資金が臨時政府に上納されていないという理由で、韓国人の共産主義者たちの暗殺を指示しているし、その翌年には刺客を放ち韓国の共産主義者金立を上海で殺害している。

しかしながら、ここまでは政治的な独立運動の一環と見なせないこともない。ところが、更に遡ると一八九六年（明治二十九年）には、ささいなことから憤慨し、閔妃殺害への報復と称して日本人商人の土田譲亮を殺害している。金九はこれを愛国的な行為に装うため、土田譲亮を陸軍中尉としているが、それが虚偽の主張であったことは韓国でも明らかにされている。それにもかかわらず、韓国ではこの事件をいまでも「鴎河浦義挙」などと持て囃している。

その金九は、因果はめぐるのであろうか、李承晩の指示で陸軍砲兵少尉の安斗熙により暗殺されてしまう。金九が今でも右派、左派を問わず人気のあるのは、独立後間もなく暗殺されてしまったことも関係しているのであ

実は、金九のことを初めて知ったのは、韓国の郊外をやたら歩き回っていた頃である。道端にみすぼらしい金九の碑がいわくありげに立っていた。読んでみると、著名な独立運動家で、中国に亡命政権を作り抗日活動を指導した人物らしい。

更に調べて見ると、第二次世界大戦の終結時に、思想犯、政治犯が釈放され、百にも達する政党が次々と現われたなかで、米国帰りの李承晩と中国帰りの金九が組んで大韓独立促成国民会を結成、李承晩総裁のもとで副総裁に就いている。それにしても日本ではあまり知られている人物には思えなかった。

しかし南北統一を国民世論とする韓国では、右派からも左派からもかなり人気があったらしい。さもなければ、いくら盧武鉉が推したからと言って、最高額紙幣の表を飾る案が生まれるわけがない。当然、高潔な人物であったのだろうと思う。

ところが、これがどうして生来のテロリストとレッテルを貼りたくなるような人物なのである。

まずは、終戦の年の十二月、中国から帰国早々に、韓民党の党首・宋鎮禹暗殺の容疑で米軍に召喚されている。

しかもその二年後にも同じ韓民党の党首・張徳秀を暗殺した疑いで召喚されている。いずれも確証が挙がったわけではないが疑われるのには背景があった。

ろう。二〇〇二年にはソウルに「祖国と民族を愛し、それらを守るために一生をかけて闘った民族運動家」として、彼の号「白凡」を冠した「白凡記念館」という大きな歴史博物館が建設されている。

以上のことから判るように、金九は今の基準から言えば間違いなくテロリストであった。だから、韓国が金九の十万ウォン札の発行を中止したのは本当に良かったと思っている。さもなければ、世界中から「韓国は政府でさえもテロリスト崇拝する国」と嘲笑を受けるところであった。

最後に従軍慰安婦問題についても一言。

韓国の従軍慰安婦の総数については未だ定説はない。そもそも女子挺身隊との混同もあるが、通説のように二万人くらいはいたかも知れない。ところが、いま韓国で従軍慰安婦であったとして名乗り出ているのは、既に死亡した方を含めてわずかに二百三十四名である。しかも、金学順さんが最初に名乗り出たのは一九九一年のことであり、戦後既に四十七年も経て六十七歳になってからである。

それは民主化が進み、やっと名乗り出ることができるようになったというのが韓国の建前的な説明であるが、韓国の人なら誰でも知っている。従軍慰安婦らがもっと

も、恨んでいたのは日本よりも、むしろ韓国社会の蔑視差別であったかも知れないと。その経歴が知られたら、結婚はもちろんできないし、親戚縁者にも迷惑となるので「ひた隠し」にしなければならなかった。

だから韓国の男性は、若き処女達を守ることができなかったことに加え、自らも消極的でもあれ加害者であったことに「うしろめたさ」を感じているのである。

おそらく、台湾やフィリピン、インドネシアにおける従軍慰安婦問題が、韓国ほど盛り上がらないのは、慰安婦達に対する社会の受入れに大差があったからであろう。

いま韓国は、従軍慰安婦少女像を米国各都市に建立しようとしている。これも安重根の像をハルピンに建てようとしているのと同じで「日本に対するいやがらせ」の一環であろう。ところで、どの位進んでいるのであろうか。

調べてみると、韓国系住民の多いニュージャージー州などで慰安婦関連の碑が計三個所あるが、少女像としては、大々的に報道されたカリフォルニア州グレンデール市のみであり、しかも新しく市長になったデイブ・ウェーバーは設置に反対しているのである。単純に言えば、韓国としては得点よりも失点が多かったことになる。

最近、朴槿恵大統領は、韓国を訪問したヘーゲル国防

長官に対して「歴史に逆行した発言をする日本の指導部のせいで、信頼を築けない」と「小学生レベルの告げ口」をした。その外交音痴ぶりにヘーゲルも辟易したであろう。いま日韓に亀裂を生じたら米国も日本も困るが、最も困るのは韓国である。

そのヘーゲル長官が帰路日本によって、ケリー国務長官と共に、千鳥ケ淵戦没者墓苑を訪れて異例の献花をした。靖国神社参拝ではなかったものの、意図するところは分るではないか。米国は、日本の「集団的自衛権問題」を、朝鮮半島のためと思っているのに、それに反対する「愚かな韓国」にあきれているのではないか。その上にケネディの娘である新駐日大使のキャロリン氏が赴任し、日米蜜月を演じていて、韓国は焦り始めている。

そのため、変わり身の早い韓国マスコミは、既に日本たたきに拍手ばかり送っているわけには行かなくなった。たまたまであるが、『週刊文春』は安倍首相の側近の発言として、安倍首相が「中国は嫌な国だが外交はできる。韓国は交渉もできない愚かな国だ」と発言したと報道した。これには韓国マスコミも韓国政府も激怒したが、その後は静かにしている。なぜか。

韓国は、外国での風評、とりわけ「馬鹿にされる」ことに極めて過敏である。まともに反論されるよりも「交渉もできない愚かな国」とか「小学生レベルの告げ口外交」とか嘲笑されるのが最も堪える。

だから、従軍慰安婦像を米国に設置する行為は、「日本を貶める」よりも「韓国の愚かさ」を広報することになると知った時に収まるはずである。もっとも韓国のマスコミは、そんなことには既に気付いている。

ポピュリズムに同調して「愚かな韓国」を演じざるを得なかった朴槿恵であるが、まもなく「梯子を外される」日が近づいている。

まともな「韓国政府」は、仏像問題、徴用工問題、そして行き過ぎた朴槿恵の「告げ口」に辟易しているし、日本たたきの好きな韓国マスコミさえ、その「韓国政府」に不安や不満が噴出し始めているからである。

韓国のジャーナリストで副総理まで務めたことのある権五琦は言っていた。韓国人が「いつも自分が偉いと自慢ばかり言っているのは、本当は自分に自信がないからなんだ、よその国があまり偉いと言ってくれないから、自分で云ってしまおうとむきになる」と。

また、ドイツ人で、漢陽大の元碩座教授のウェルナー・サッセ氏も、韓国人が自らの歴史文化に無知で国粋主義に走っていることを憂慮して「過度に自慢すれば外国では笑いぐさになる。誇張せず、体系的に、事実に基づいて韓国の歴史を紹介したほうがいい」と忠告している。

（十一月二十三日記）

短歌　三十首

曽根竣作

サンドミンゴ城

乗馬服皺もくすみて出でて来ぬ脾肉太りて騎乗あたはず

真白（ましろ）なる白魚食（は）めば身を透し紺碧の海ただに恋（こほ）しも

凪ぎし海かもめの少しうす汚れ悠然たるかな鳶の飛翔は

新しき翅をひろげて緑陰に大むらさきの羽化が終わり

指を鳴らし少年過ぎつ烏瓜三つばかりが西日に映えて

うす紅の木槿（むくげ）のまがき軽く越え海峡めざすや黒き揚羽は

しづかなる楕円のボールを立ちしままキックオフ待つ西陽のなかに

炎暑きびしき士林（しりん）の道を辿りたる〝台大・予科〟を今にし憶ふ

かつてこの地の演習にわが従ひき「淡水」のみぎは波頭変らず

三角の銃眼ゆ見るわだつみよサンドミンゴ城に夕霧ながる

サスペンス

取り出しし色くすみたる細きタイ　かの日の叛意甦（よみがへ）り来ぬ

角力部の一員たりし中学生　おそらく純潔を裡に秘めつつ

秋立ちて鵙（もず）の鳴きごゑ遠きこゆ朝の起き戸に風ひんやりと

やうやくに浅蜊うごめき泥を吐くサスペンスの夜半終りに近く

一碗のコーヒー入れて秋近き時の間ひとり年齢（とし）を忘れつ

爆音の低くひびける夕べなり　漠（ばく）としてわが青年期あり

山頂のやうやくかすみ夕づけば日光きすげはやをら傾く

早朝より蝉の鳴き声けたたまし精魂ここにとどめざらめや

近づきて去りし無数の足おとが昭和の画布に底ごもりゐつ

「桜花（おうくわ）」とふ兵器もありぬ　海軍の特攻としていくたり乗りし

黒のハンチング

池の辺に河骨（かうほね）小さく咲く見れば湿生花園も夕かたむきぬ

纏足のおうな鶏追う異土のさま振り返り見て心にとどむ

うす暗き海に船隊消えゆきて塔婆も立たず立冬むかふ

着古しと言へど気に入り愛用す黄のベストと黒ハンチング

海底に沈みしゼロ戦そのままに勇姿を持ちてグラマン追ひき

光りふる窓外黄葉かがよひて一碗のコーヒーとき掛けて飲む

リラ冷えの夕べ虫の音かまびすし秋もしづかに椅子たたみけり

白牡丹月の光りに影ふかくこよひ十三夜の名月を待つ

一メートル七〇センチは大柄と思へどけふも車中に埋もれぬ

「あっちょっと」と振り向き様に言って見る刑事コロンボ犯人に迫りて

関東管領始末記⑫

ふたつの大乱

千坂精一

一

上杉禅秀が蹶起に敗れて一族郎党とともに鎌倉の神宮寺雪ノ下御坊に立て籠もって自害したとき、嫡男憲方、五男憲春、六男快尊、七男禅瑾の四人は父禅秀に殉じたが、ほかの三人の子らは行動を共にしていなかった。

二男持房は叔父氏朝の養子になっていてこのとき京にいたし、四男教朝は常陸の大掾満幹の養子になって養父の許におり、三男憲秋は病床にあって父の異母弟千坂高春の屋敷に引き籠もっていてともに難を逃れた。

憲秋は内乱が鎮まったあと叔父の千坂高春に伴われて鎌倉を去り、兄持房のいる京の叔父氏朝を頼った。

将軍義持はこの三人を受け入れて幕府に出仕させた。

犬懸家を斃して管領職を山内家の独占にした憲基だったが、翌年一月四日に二十七歳で病歿してしまった。

憲基には嗣子がなく、弟義憲はすでに常陸の佐竹義盛の養子になっていたので、越後上杉を継いだ伯父房方の二男憲實を養子にして関東管領に据えたことから以後は同族の越後守護家が関東管領家になってゆく。

この争乱で持氏は山内と犬懸の両管領家を喪った。

新管領の憲實はこのとき僅か十歳の少年だったから公方の補佐などつとまるはずはなく、鎌倉府は二十二歳の持氏の専制となり、公方の独裁態勢に入ってしまった。

なにかにつけて口煩く、苦言や忠告で諫める眼の上の瘤の禅秀と、媚び諂ってうるさく付き纏う憲基の新旧管領を相次いで喪いさっぱりした持氏は、誰憚ることなく勝手気儘に振る舞い、ますます横暴が募っていった。

公方持氏は野心家でひそかに将軍の座を狙っていた。

将軍義持は三十九歳で十七歳の嫡子義量に将軍職を譲

ったが、病弱だった義量は二年後に病死してしまった。
義持はほかに子がなかったので、公方持氏は義持が烏帽子親で持の一字を戴いていることから建長寺の僧を派遣して自分を猶子にしてほしいと請うたが、義持は持氏の野心を見抜いて使者との対面を拒み追い帰した。
義持は義量のあとの将軍は弟たちのうちから選ぶほかないとは思っていたが、畠山、斯波、細川の管領家や山名、一色、赤松、京極の侍所所司家それぞれの思惑を慮ると、誰を指名しても差し障りがあるので躊躇われた。
ときの管領畠山滿家が義持に執拗に迫ったが、いくら督促しても埒が明かないので、滿家は義持の信任厚い幕府の最高顧問三寶院滿濟に真意を聞き質すよう依頼したが、それでもなお義持は指名しなかった。
滿濟は困り果てて、
「籤引きで決めてはどうか」
宿老たちに提案して、義持の承認を得た。
そこで滿濟は梶井義承、青蓮院義圓、大覺寺義昭、相國寺永隆四人の弟の籤をつくり、それを山名時熙に封をさせて畠山滿家に石清水八幡宮の神前で引かせておいた。
そして、三年間将軍空位のまま大御所として過ごした義持が應永三十五年（一四二八）一月十八日に四十三歳で逝去すると、翌日諸大名が一同に会した室町殿で畠山滿家が開封して四男青蓮院義圓が当籤した。
義圓は還俗して義教と改め六代将軍の座に就いた。
これが前代未聞の籤引将軍といわれる所以である。
公方持氏は、自分が候補のなかに入れてもらえなかったことに強い不満を抱き、実力で乗っ取ろうと京への出兵を企てたが、管領上杉憲實に制止された。
腹の虫がおさまらぬ持氏は、下野の那須一族の内紛につけこんで禪秀の婿で嫡流家の那須資之を攻めた。
資之は禪秀の乱後は幕府の御扶持衆になっていた。
那須郡に隣接する陸奥國白河郡の結城氏朝は資之と親交を深めていたため捲き込まれて攻め立てられた。
将軍義教は公方持氏の暴挙を赦せず稻村御所足利滿貞、蘆名、伊達らの東北諸将をはじめ越後、信濃、駿河守護らにも那須、結城の救援を命ずると、自身も出陣して持氏を斃そうとしたが宿老たちにとどめられた。
このころから将軍義教と公方持氏との対立がはじまり、二年後の永享四年（一四三二）に決定的になった。
この年九月、将軍義教が富士遊覧と称して駿河國に下向することになったとき、
（将軍みずから出陣して鎌倉の公方持氏を討つ）
噂が流れたので、管領上杉憲實が幕府に対して、
「雑説あり、中止されたい」
旨を申し入れたが聞き入れられなかった。
義教は駿河へ下り、今川の駿府館に入ると、
「将軍が下向したからには公方は同候するであろうから

討て。もし無視いたさば叛心ありと断じて処刑せよ」
そう命ずると、準備万端を整えさせていまや遅しと待ったのだが、持氏は病と称してついに現れなかった。
義教は、持氏の無礼極まる行為に怒り心頭に発した。
こうして将軍と公方のあいだは一触即発の危機を迎えたのだが、幕府では管領などの重臣たちが、鎌倉では管領上杉憲實が懸命に宥めてことなきを得ていた。
しかし、重臣といえどもいつまで主君を抑えられるものではなく、険悪状態はしだいに表面化していった。
おりもおり、甲斐守護武田信長が鎌倉府と紛争を起こし、追われた信長は隣国駿河の守護今川範忠を頼った。
持氏が信長を差し出すよう強引に要求してきたので、範忠は幕府に注進して持氏の理不尽を訴えた。
幕府は上杉憲實に持氏の非を咎めるよう命じた。
憲實は持氏を窘めて、その無謀を諫めた。
このとき持氏は渋々承知したのだが、翌年信濃の国人村上頼清が守護小笠原政康との境界争いで持氏に援けを求めてきたので小笠原攻めの軍を起こそうとした。
憲實は、またもや持氏の軽挙妄動に呆れ果てながら、
「信濃國は幕府の御分国、小笠原政康は幕府の御家人ゆえ小笠原を討つことは即ち幕府への不義でござります」
そう諄々と説いて懸命に諫止した。
だが憲實の大仰な物言いが持氏の癇に障って討伐されるとの噂が流れたので、憲實は素早く藤澤道場（遊行寺）に逃れ上杉の与党たちが鎌倉に馳せ参じてきた。
そのなりゆきに愕いた持氏は他意なきことを憲實に伝えて折れたのでことはいちおう収まったかにみえた。
しかしその燻りがふたたび燃え上がったのは翌永享十年（一四三八）の持氏嫡男賢王丸元服のときであった。
公方の名は将軍の一字を戴くのが慣例になっていた。
初代公方基氏は成人後の就任であるから例外として、祖父氏滿と父滿兼はともに三代将軍義滿の滿をいただき、四代の持氏は四代将軍義持の持をいただいていた。
ところが持氏は管領上杉憲實のすすめる現将軍の下の一字をいただく慣例を諾かずに、将軍家代々の名告りである義をとって十三歳の賢王丸を義久と名告らせた。
公方家は将軍家と対等であると主張したのである。
このとき執拗に慣例を迫った憲實は暗殺される風説が立ったので、身の危険を感じた憲實は賢王丸の元服式に出席せず領国上野に帰って平井（藤岡市）に築城した。
持氏は自身将軍義教を蔑ろにしておきながら、自分の意向に従わず元服式にも出席しないで勝手に帰国した憲實を赦せず、征討軍を率いて武蔵の高安寺に出陣した。
憲實は禪秀の二の舞を恐れて幕府に救援を求めた。
将軍義教はなにかにつけて幕府に楯突き横暴な振る舞いの多い持氏をかねてから苦々しく思っていたので、この機に乗じて抹殺してしまおうと思い立ち、持氏討伐の綸旨をいただくと諸国の守護大名に動員令を発した。

こうして公方と管領の対立は将軍義教と公方持氏の戦いに発展していった。世にいう〈永享の乱〉である。

将軍義教はみずから持氏征伐に向かおうとしたが管領細川持之らに諫止され、代わりに京にいて難を逃れた禅秀の二男上杉持房に二万五千を預けて出陣させた。

持房にとっては父の仇を討つ好機到来であった。

いっぽう持氏のほうは、管領上杉憲實に助勢する国人のほうが多かったので劣勢のうえに幕府の大軍に加わわれてははじめから勝敗の帰趨は明らかであった。

東海道を下ってきた上杉持房と駿府で合流した今川範忠の軍勢は箱根、早川尻、大磯らで持氏方を一蹴した。

寝返った三浦時高が鎌倉へ攻め入って放火した。

このころ、平井へ逃れていた管領上杉憲實は領国越後や上野の兵を率いて武蔵國分倍河原（府中市分梅町界隈）まで進んだが、そこに陣を取ったまま動かなかった。

「上杉管領軍出陣」

の報をきくと、持氏派だった諸将が馳せ参じてきた。

持氏は見限られたのである。

周辺に手勢が寡くなった持氏は海老名（海老名市）から鎌倉へ敗走の途中葛原（藤沢市）のあたりで管領家の家宰長尾忠政と出会ってしまい、忠政に護衛されて鎌倉に戻ると山ノ内の浄智寺に入り、さらに稱名寺（横浜市金沢区）に移って剃髪し、神妙に出家した。

幕府の管領細川持之は上杉憲實に書状で、

「公方持氏を早く自害させるよう」

命じてきた。

憲實は出家した持氏を隠居までにとどめたいと考えていたので、将軍義教に使僧を送って持氏の助命を嘆願したのだが、義教は使僧に面会を許さず追い帰した。

年が明けても憲實は持氏誅伐を躊躇っていた。

業を煮やした将軍義教からついに憲實に、

「わが命に従わねば謀叛人と看做して処罰する」

旨を通告してきた。

持氏を庇えば憲實自身も同罪になってしまう。

追い詰められた憲實はやむなく意を決して扇谷家の上杉持朝と千葉胤直に命じて永安寺（鎌倉市）を攻めさせ、謹慎中の公方持氏と篠川御所足利滿直を自害させた。

このとき憲實は、報國寺（鎌倉市浄明寺）に蟄居していた持氏の嫡男義久を十四歳の少年だからといって助命嘆願していたがこれも許されず、やむなく自害させた。

世の無情を果無んだ憲實は、自責の念に駆られて弟の越後守護上條上杉清方に管領職を譲ると、出家して伊豆の國清寺（伊豆の国市奈古谷）に隠棲してしまった。

その後の憲實は法体で西方浄土を目指して諸国を行脚し、〈應仁の乱〉勃発前年の文正元年（一四六六）三月六日周防國（山口県東部）で五十七歳の生涯を閉じた。

九歳で関東管領になった憲實は、将軍の座を狙う公方持氏を諫めたり宥めたりして幕府と対抗し衝突を繰り返

す強気の持氏と将軍家との調停につとめ、鎌倉府の安泰に腐心しつづけたが、結果は意に反して公方持氏を斃す破目に陥ってしまうという不本意な生涯であった。

この〈永享の乱〉によって四代八十年つづいた鎌倉府は事実上消滅してしまった。最後の公方持氏は治世三十年、幕府に反抗しつづけた四十二歳の生涯だった。

だがこのとき、義久の弟安王丸、春王丸は下野國に、永壽王丸は信濃國に逃れたので持氏の血統は残った。

二

このころ、下總國結城郡（茨城県結城市）の結城氏という豪族は、下野國（栃木県）の小山氏、常陸國（茨城県）の佐竹氏と並び称される関東有力の国人であった。

蛇足だが、結城市は栃木県小山市と茨城県水戸市を結ぶJR水戸線の沿線にあって、結城紬で有名である。

結城氏は平將門の乱を平定した藤原秀郷の末裔小山朝光が、源頼朝の挙兵に参加して活躍した功により結城郡を与えられて地名を名告りにしたのが起こりである。

朝光の嫡孫廣綱が南北朝争乱のとき足利方だったこともあって、末裔氏朝は禅秀の乱でも公方持氏を支持したので敗れて結城城に逃げ帰り、公方家再興を図った。

そして一年後に氏朝は逃散した公方派の国人たちに檄を飛ばして集めると、下野國日光山に匿っておいた春王丸、安王丸を迎えて棟梁にいただき兵を挙げた。

これを知った信濃國佐久郡の大井持光は、匿っていた永壽王丸に二人の護衛をつけて密かに結城城へ送った。

三兄弟が父持氏の弔い合戦に担がれたのである。

上杉清方は兄憲實の公方弑逆の怨みを蒙ることになったのだ。前任者の責任をとらされる迷惑な話である。

だが、愚痴ったところで相手は管領を倒して公方を復活させようというのだから、受けて立つより仕方がない。

清方は近隣の国人に檄を飛ばして集め、廳鼻和の上杉憲信を大将に白井の上野守護代長尾景仲を援将に命じて出陣させると、幕府に結城氏朝らの謀叛を急報した。

上杉憲信軍が苦林（埼玉県入間郡毛呂山町）に長尾景仲軍が入間川（狭山市）に布陣しているところへ、清方が管領軍を率いて合流すると結城を目指して進軍した。

管領軍と上杉与党の軍勢が結城城を包囲しているところへ幕府の大軍が到着した。将軍義教から結城攻めの総大将を命ぜられたのは禅秀の二男持房であった。

持房は幕府に仕えていた叔父氏朝の養子になっていて乱のとき鎌倉にいなかったため生き残ったのである。

父を斃した公方持氏の遺子攻めを命ぜられたことは、幕府軍を借りて父の仇を討たせてもらえることであった。

いま総大将持房には父禅秀の霊が乗り移っていた。

年が改まった永享十三年（一四四一）の元日に火蓋が切られたこの結城合戦は、いかに堅城と雖も救援のない籠城戦で勝てるはずがなく四箇月あまり持ち堪えたもの

のついに陥落してしまい結城氏朝・持朝父子は戦死、公方持氏の遺子春王丸、安王丸、永壽王丸は捕えられた。

三人は京へ送られる途中美濃國垂井（岐阜県不破郡垂井町）の金蓮寺で春王丸と安王丸は斬首されたが、末子の永壽王丸はまだ六歳の幼児だったので成人するまで守護土岐持益預けとなって一命をとりとめた。

その翌月将軍義教が赤松滿祐、教康父子に誘殺される事件が起こり、のちに〈嘉吉の乱〉と称ばれるこの政変によって永壽王丸は中途半端のまま放置されてしまった。

幕府は将軍の急死に慌てふためき動揺しているところへ細川、畠山両管領家の対立が因で土一揆が起こったりしてんやわんやであった。

ようやく足許が鎮まった一年半後の嘉吉二年（一四四二）十一月七日、九歳の嫡男義勝が元服して七代将軍になったのだが半年後に赤痢に罹り死去してしまった。

幕府は慌てて八歳の弟義成（後の義政）を家督相続させて八代将軍にしたのだが、三代将軍義滿のあと四代義持が九歳、五代義量が十七歳、籤引きで決まった六代義教の三十六歳は例外として、七代義勝が九歳、そして八代義成と幼将軍がつづき不安定期であった。

いっぽう鎌倉府のほうも公方持氏が斃れてからずっと公方空位のまま管領政治がつづいたが、その間管領清方は兄憲實が斃した持氏の遺子たちを自分の手で葬ってしまったことへの自責の念にかられて苦悩しつづけていた。

それが昂じてか、文安五年（一四四八）上洛しての帰途春王丸、安王丸が処刑された美濃國垂井のあたりまできたとき突然おもいあまって自害してしまった。

清方には三人の子がいたが管領は山内宗家が勤める不文律になっていたので、憲實の嫡男憲忠が就任した。

だが憲忠はまだ十七歳の若輩だったので公方空位の不安定な鎌倉府を取り仕切るのは無理と判断され、清方の二男で越後守護の房定が政務を代行することになった。

房定は、公方空位のまま鎌倉幕府の北條執権政治のような上杉管領独裁政治になるのは避けるべきだと考えて関東の国人たちと図り美濃守護土岐持益預りになったまま放置されている前公方持氏の遺子永壽王丸の公方就任を再三幕府に要請したが、なかなか承認を得られなかった。

幕府にしてみれば代々将軍家に楯突く公方家が忌々しく、空白期をさいわい鎌倉府を潰そうと考えていた。

だが、房定の当を得た説得に折れてついに承認した。

十四歳の永壽王丸は管領憲忠と房定に伴なわれて上洛すると、元服して将軍義成に拝謁し、その一字を賜って公方成氏となり、鎌倉入りした。

この時点で房定は政務代行を山内家の家宰長尾景仲と扇谷家の家宰太田資清に任せて越後へ帰っていった。

長尾景仲と太田資清は、

「東国不雙の案者」

すなわち、東国に並ぶ者ない智恵者といわれていた。

二

五代公方になった成氏が鎌倉府に入ると、永享の乱で公方派だったため疎外されていた国人や、公方の下の管領のそのまた家宰の長尾や太田が政務を預かっていることに不満を抱いている国人たちが成氏の周辺に集まり、管領を排除しようとする不穏な様相を呈しはじめた。

公方就任に尽力した恩を忘れて管領を遠ざけ、公方直裁を図ろうとする成氏の裏切りに腹を立てた長尾と太田は、機先を制して五百騎で御所を襲撃した。

江の島に後退した公方軍が盛り返してくると上杉軍は扇谷上杉の守護国相模の糟屋荘（伊勢原市）に後退、管領憲忠は七澤要害（厚木市）に移るなどして一進一退の攻防を繰り返し、容易に結着がつかなかった。

動乱に発展することを憂えた幕府が調停に入って抗争は落着したかに見えたのだが、火種は燻ぶりつづけた。

そして四年後の享徳三年（一四五四）十二月二十七日、公方と管領が全面的に対決する事件が起こった。

仕掛けたのは公方派だった。

結城成朝、武田信長、里見義實、印東式部らが成氏と謀議して管領憲忠を西御門邸へ呼び出した。

憲忠は警戒怠りなく二十名の供を連れて屋敷を出た。

ところが、西御門邸へ到着するや否や結城成朝の手勢三百が襲いかかってきた。予期せぬ多勢に防ぎようがなく、たちまちのうちに全員討ち取られてしまった。

管領上杉憲忠はこのときまだ二十二歳の青年だった。

騙し討ちされて上杉の当主を喪った管領派は直ちに臨戦態勢に入った。公方派と管領派の全面衝突である。

管領派は憲忠の後を継いだ弟の房顯を奉じた家宰の長尾景仲らが高安寺（府中市）に布陣した公方軍と分倍河原（府中市）で戦ったが不意を衝かれて敗れ、禪秀の三男犬懸上杉憲秋（顯）と扇谷上杉顯房が負傷して高幡寺（高幡山金剛寺）に入り自害した。

公方軍を倒せぬ管領軍は上杉の所領がある常陸國へ後退し、小栗城（筑西市）に集結して軍容を整えると、公方成氏の謀叛を幕府に訴えて救援を要請した。

幕府は越後守護上杉房定、駿河守護今川範忠らに成氏討伐を命じ、房定が上野平井城に入ったころには駿府（静岡市）を発した範忠軍はすでに鎌倉へ乱入して公方軍を掃討すると、御所をはじめ谷七郷の神社仏閣を悉く焼き払ってしまったので鎌倉は見る影もなくなった。

亡所と化した鎌倉へは戻れぬ公方成氏は武藏府中の高安寺から村岡（熊谷市）を経て下總國葛飾郡古河（茨城県古河市）へ逃れた。そこは鎌倉府の御料所であった。

公方派は下河邊荘の古河城を成氏の御座所にした。

成氏が鎌倉に君臨したのは、僅か五年であった。

この年今川範忠が歿すると、成氏はすかさず下總、武藏へ進出しては管領軍と小競り合いを繰り返した。

公方成氏と管領上杉との抗争は、利根川を挟んで北関東の国人勢と南関東の国人勢との対立でもあった。

山内上杉は領国上野にいずれも利根川に近い白井城（渋川市）と平井城（藤岡市）があったので、廳鼻和上杉憲信に深谷城（深谷市）を築かせて守備を固めた。

扇谷上杉は領国のうち相模に本拠をおいていたので北方の防衛に武藏の固めを急がせ、当主持朝に河越城（川越市）、家宰太田資清（道眞）に岩付城（岩槻市）、その子資長（道灌）に江戸城（東京都）を築城させた。

こうして管領家の上杉一族が上野、武藏、相模を支配したので、成氏はついに鎌倉への帰府は叶わなかった。

管領を斃して直裁を謀り動乱を起こした成氏は、幕府にとってもっとも危険な存在であった。

このころ名を義政とあらためていた将軍義成は、元服させて一字まで与えた成氏が鎌倉府を勝手に独裁しようとしたことは、そのさき幕府から分離独立して倒幕を狙うにちがいないと憶測して、叛乱の芽は早いうちに摘みとるに如くは無いからいまのうちに糾弾してしまおうと決断すると、成氏を公方職剥奪追放の処分にした。

そして、すぐさま香嚴院の禅僧で二十四歳の弟を還俗させると、一字を与えて政知と命名して鎌倉公方にした。

政知は幕臣に護衛されて関東へ下向したものの、鎌倉は前に述べたとおり戦乱で焦土と化してしまっていて入ることができなかったので、伊豆の堀越（伊豆の国市韮山）に留っていたがついにそのまま居座ってしまった。

成氏は公方を剥奪されてもそのまま自称していたので、利根川を境にして下總古河に成氏、伊豆堀越に政知と東西に二人の公方ができてしまった。

といっても南北朝のような帝を奉戴しての大規模な争乱ではないから、地域も規模も小さく限定されていた。

以後、関東の抗争は鎌倉を離れたところでつづいてゆく。

（つづく）

アルジェ（二）
—西欧とアラブの谷間で—

太田精一

九、金賞受賞

十月七日午後六時、表彰式が行われた。アルジェ見本市では、参加各国の中で、出品物や展示装飾の優れた国を毎年表彰する制度を設けている。高い評価を受けた国には、金賞が贈られる。

日本館にも、優秀な展示を行ったとして金賞が授与されることになった。政府はもとより、一般の来場者からも、高い評価を受けた結果によるものである。

アルジェ見本市に関わったジェトロの現地事務局員はもとより、小間（展示ブース）の設営に当った施工業者、通関業者全員が、夜遅くまで綿密な作業をした成果が認められたのである。

現地スッタフを含め全員が祝杯を挙げ、お互いにその健闘をたたえ合った。

金賞受賞国は、オマーン、アルバニア、リビア、チュニジア、日本、西独、フランス、スエーデン、ソ連、北朝鮮、ベトナム、ルーマニア、チェコスロバキア、キューバの十四カ国であった。

日本、西独、フランス、スエーデンを除けば表彰された国の多くが、当時の社会主義国と中・東アフリカ諸国で、金賞の選定に当っては、政治的意図も感じられた。

表彰式をもって見本市は閉会した。

すみやかに展示場をもとの状態に復し、アルジェ見本市当局に返却しなければならない。

復旧作業は閉会式の翌日、十月八日から開始された。

まず、参加各企業に、盗難被害の受けやすい出品物の会場での仮梱包をお願いした。次いでレセプションルームを倉庫にし、そこに盗難の危険性の高い仮梱包された出品物を一括保管することにした。

さらに撤去作業を容易にするため、出品物の一部及び装飾資材置き場を会場の片隅に設けた。そこにこれらの荷物を集積し、トラックやフォークリフトの通路を確保したうえで撤去作業に入った。

撤去作業は、比較的スムースに行われ二週間で完了した。

出品物は、売却、寄贈、廃棄、日本への持ち帰りに分けられる。

機械類などの高額な出品物は、出品者としては、出来るだけ売却をしたい。売却が出来ない場合、比較的少額な商品であれば、取引相手企業からの要望に応じて、寄贈されることが多い。

だが、売却はもとより寄贈についても、手続きが複雑で、容易には許可が下りなかった。

出品物は、基本的には外国貨物であり、見本市終了後、持ち帰ることが原則となっている。それを輸入品としての扱いに切り替え、内国貨物としなければならない。輸入品としての扱いは、対価を払おうが、寄贈を受けようが同じである。

ところが、アルジェリアでは、輸入には事前許可が必要である。輸入許可は枠があって、通常では容易に下りない。ただ、見本市の貨物に限って特別に輸入枠が与えられていている。その特別輸入枠を使って輸入割当を受けることが出来るのである。

この輸入割当をジェトロが、アルジェの見本市局ONAFEXを通じ、商業省に申請した。

ジェトロのアルジェ見本市事務局は、出品企業が、売却したいとする全出品物の輸入許可を取り付けるように努力した。が、一部耐久消費財の家電製品については、輸入割当を取得することが出来なかった。

しかし、まだ打つ手は残っていた。見本市の輸入枠がなくても、購入もしくは、奇贈を受ける需要家が、輸入割当を取得していれば、売却も寄贈も可能である。

そのため、割り当てから漏れた出品物については、出品者が個々に売却相手や寄贈先と接触し、購入もしくは引取り先の輸入枠を使って処理をするようお願いした。それによって引取り先の決まったケースも見られたのである。

十．松茸山

出品物や装飾資材が撤去された会場は、ガランとして、祭りの後のような空ろな寂しさをたたえている。

アルジェの街も秋の気配が漂い始めた。

地中海から吹き寄せる北風が、冷気を運んで、周りの山の木々もところどころ色づいて来た。

街の市場で松茸を見掛けた。私は思わず手に取って鼻に近づけてみた。ほのかに松茸の香りがする。日本の松茸ほど香りは強くないが、確かに松茸である。

私は、アルジェ事務所の瀬藤駐在員に松茸の獲れる場

所を聞いてみた。

「アルジェでは、季節になると松茸が獲れると聞いていたが、本当だった。一度その山に行ってみたいが、入山できますか」

「赤松林のあるごく普通の山だから、その林のすぐ近くまで車で行くことは出来ます。ところが、山の中に入って探すことは大変です。山にあるホテルに行って、従業員に松茸を買いたいと言えば、近所の子供にそのことを伝えてくれます。後は、テラスでコーヒーでも飲みながら待っていれば、子供たちが獲れた松茸を売りに来ますよ」

私は、山下事務局長を誘って松茸山を訪れることにした。

サイードの運転する車に乗り、私たちは赤松の林のある山に登った。

しばらく行くと赤松がところどころ視界に入って来た。さらに車を進めると山の中腹になだらかな平地があり、そこに一軒のホテルがあった。その周りは赤松林である。

私たちは、ホテルのテラスに座ってコーヒーを注文し、ボーイに松茸を買いたいと話した。

テーブルを囲んでしばらく赤松林を眺めていると、どこからともなく子供たちが松茸をビニールの袋に入れて売りに来た。

「一キロいくらかね」

そう聞くと、量りなど持っていない子供たちは、目分量で入れた袋をかざして言った。

「一袋百ディナール」

日本円にして約百二十円くらいである。袋の中には、三～四本の松茸が入っている。ざっと五〇〇グラムくらいであろうか。

実に安い。袋の重さは、多少ばらつきがあるが、一律に百ディナールだという。十袋買うことにした。

子供たちの持っていた袋の半分以上を買い占めることになってしまったのである。

早速、宿舎に持って帰って来て、松茸を思う存分食べることにした。

「松茸食べて腹こわそう」

その日は、松茸ご飯はもとより、焼いたり吸い物にしたりして厭きるほど松茸を食べた。それから数日間、私たちの食卓には、必ず何らかの形で松茸が添えられるようになった。

その後、アルジェリアに松茸があるとの情報を嗅ぎつけたパリの日本レストランの料理人が、空の旅行鞄を持って買い付けに来るようになった。そのため、値段も上がってしまい、アルジェリアの庶民には、手が出なくなってしまったという。

十一．城塞の町―カスバ

出品物の処理にも目途が立ち、仕事も一段落した。十月も半ばを過ぎた頃、私は、念願のカスバに足を踏み入れた。ずっと以前から、アルジェに出張したら是非訪れたいと思っていた所である。学生の頃見たフランス映画ジャン・ギャバン主演の「望郷」が、私の胸に残って離れなかった。

映画の舞台となった無法地帯に身を置くことによって、私は、不安と孤独と郷愁を肌で感じ取り、映画の世界の中に浸って見たかったのである。

また、エド・邦枝の歌う「カスバの女」も、私を魅了し、同地への想いを募らせた。異郷の中に身を置き、花の都パリに思いを馳せる女の哀愁が漂ったこの曲に、「望郷」のペペル・モコを重ね合わせ、私は、いつしかカスバのイメージを私なりに造り上げていた。

カスバは、アルジェの街の中心にあって、地中海を見下す小高い丘の斜面に、張りつくように広がっている。

アラビア語のカサバに由来するカスバは、北アフリカマグレブ地方の方言である。もともとは、中心都市や町を意味していた。後に城塞化した街（町）全体を表わす言葉になったのである。

一四九二年、スペインのグラナダが、キリスト教徒によって陥落したため、グラナダを取り巻くアンダルシア地方からのムスリムが、アルジェリアに移住した。

一八三〇年、フランスは、アルジェを占拠、フランス人を大量に入植させた。入植者は、カスバの外に住み着いて、アルジェの街はもとより、アルジェリア全体を支配し、その後アルジェリアをフランスの海外県としている。その頃から、カスバは旧市街、その周りは、新市街と呼ばれるようになった。

第二次大戦後、アルジェリアの民族主義者たちは、七年半にわたるフランス軍との熾烈な戦いを繰り広げ、その結果、独立を勝ち取った。

独立前、アラブ系アルジェリア人の多くは、カスバに住み、同地は、独立運動の拠点となっていたのである。

「カスバは、治安が良くない。観光客が案内も無く、一人で入り込むのは危険です」

ジェトロ・アルジェ事務所の現地スタッフ、オルシュ氏は私に言った。

そこで私は、カスバに知人がいるという運転手のサイードに案内を頼むことにした。

カスバは、迷路のような階段の通路が、縦横に走っている。階段の両脇には石造りの家が立ち並び、通路にはゴミや動物の死骸が散乱し、血が流れている。

階段通路の両脇に木造りの重い扉が見られる。その扉の奥が住居である。

階段を右に左に曲がりながらしばらく無言で登った。

五分ほどしてサイードが、一軒の家の前に立った。扉を叩くとその家の主人が、出て来て私たちを扉の中に招き入れた。

扉の内側には、中庭があり、花壇が置かれている。その中庭を囲んで部屋がある。部屋は、開け放たれていて外から覗くことが出来た。

私たちの来訪が事前に告げられていたためか、中庭も部屋も予想以上に綺麗で掃除も行き届いていた。通路の汚れがまるで嘘のように感じられた。

部屋の中から子供のはしゃぐ声が聞こえて来た。それを叱りつける母親やお婆さんの声、喧噪に包まれた大家族の姿がそこにあった。

私は、ふと昭和二十年代後半、戦禍から立ち直り復興が軌道に乗り始めた頃の郷里浜松の路地裏の混沌とした賑いを想い出した。

通路には、ゴミが放置され、ところどころ唾や痰の吐き捨てた跡が残っている。その通路には、いたずら盛りの子供たちが遊び、道沿いの家から派手な夫婦喧嘩の声が聞こえ、買い物籠を下げたおばさんたちが、立ち話をしている。そんな光景と似た雰囲気がカスバにはあった。

映画や歌の世界とは、ずいぶん異なっている。生活の匂いがそこにあった。サイードと一緒であったためか、身の危険も感じなかった。

夜と昼の顔は違うのかもしれない。

私の描いていたカスバとは、違った顔がそこにあった。社会主義になってから変わったのであろうか。ただ、貧困だけは、解消しないままでいるようであった。

訪問先の家の主人に礼を述べ、カスバの頂きに出た。そこから地中海が一望出来る。

その日の地中海は、青く澄んでいた。アルジェ港には大型貨物船が停泊していた。その船は、まるで私を日本へ連れ帰るために留まっているような気がしてならなかった。

十二、古代ローマの遺跡―ティパサ

帰国も迫った。

初参加ということもあって、予期しない出来事に遭遇したが、何とかアルジェ見本市は、成功裡に終了することが出来た。スタッフ全員の強い意志が、あらゆる困難を克服し、無事終了の日を迎えることが出来たのである。

ほっと肩をなでおろした私は、アルジェリアを発つ前に、古代ローマの遺跡で知られるティパサを見学することにした。

ティパサは、アルジェの西方七十キロ、車で約一時間。地中海に面した小さな港町である。そこには、ローマ時代の遺跡が、かつての繁栄を閉じ込めて眠っていた。

紀元前七世紀、フェニキア人の国カルタゴは、北アフ

リカ、ヌミディア地方のこの地に交易都市を開いて、西地中海貿易を盛んに行っていた。

その後カルタゴは、地中海の覇権を巡って三次にわたるローマとのポエニ戦争を戦った。その結果、敗れたカルタゴは、紀元前一四六年に滅亡した。

カルタゴの滅亡により、その衛星都市であったティパサは、ローマ帝国の支配下に置かれた。

ローマは、ティパサを植民都市とし、カルタゴ同様、地中海におけるアフリカ交易の一つの拠点としたのである。

その後多くのキリスト教徒が、ローマ文明を背負って、この地に入植した。

ティパサは大聖堂、円形劇場、水路、墓地、住宅跡など当時のローマ人の生活を物語る遺跡が発掘されている。

だが、一八八一年に発掘が開始されるまで、この遺跡は砂に埋もれ、人知れず眠り続けていたのである。

私は、アルジェからサイードの車で、ティパサに向かった。ティパサに近づくにつれ、地中海が右手に見えて来た。車の窓を開けると潮の香りのする風が吹き込んで来る。だが、その風は湿気が少なく、ひんやりと乾いた感じさえした。

ティパサは、小さな港町であった。少し進むと海岸沿いに廃墟となった建物跡が見られる。崩れた城壁の中に入り、街の中心部とおぼしき所に車を止めた。

石のモザイクで舗装された街路が、ところどころ土の中から顔を出して並んでいる。両脇にフレスコ画やモザイク画の残る住居跡があり、その周りには、崩れ落ちた石のモザイクが散見された。水槽や、オリーブ油を絞り出すための臼もあった。

断崖絶壁の海岸淵に船の入り込めるような洞窟の入り口があった。奥は入江となっている。ローマ時代には、この入江を船着場として使っていたに違いない。

私は、道端に転がっていたモザイクを拾い上げ、手のひらの上に転がしてみた。天然石で造られたモザイクは、二千年の風雪に耐えてなお色あせてはいない。モザイクは、無言のまま私の手の上でずっしりと歴史の重みを感じさせてくれた。

その後一九八二年、ティパサは、世界遺産に登録されている。

数々の想い出を残して、私は、一九七七年十一月三日アルジェを後にした。

街路樹も色づき街はすっかり秋色に包まれている。

三カ月の時は、瞬く間に過ぎ、風も南から北に変わって、街行く人のコート姿が季節の移ろいを感じさせてくれた。

（完）

「茶道史」勉強ノート（六）

忠内正之

明治維新と茶道（明治から昭和時代）

慶応三年（一八六七年）十月、江戸幕府の十五代将軍慶喜は朝廷に大政を奉還し、長かった江戸時代もついに幕を下ろした。

明治維新は、とくにその直後の時期において文化面で甚大な影響をもたらした。西洋の文化・文明への関心が高まる一方で、旧来の文化・芸術・宗教の後援者であった幕藩体制が崩壊したからである。茶の湯もそのひとつであった。

幕府からの扶持を失い、代々幕府数寄屋頭をつとめた野村家は浜松へ去った。三千家家元を含め多くの茶家も、茶道方として仕えていた大名家からの扶持を失った。その結果、江戸時代には将軍家や多くの大名家に支持され、最大の流儀だった石州流は力を失い、再び往年の勢力を取り戻すことはなかった。

三井家、鴻池家など豪商の後援を得ていた表千家も、紀州徳川家の扶持を失って苦労したようである。裏千家や武者小路千家の場合はいちだんときびしかった。

○茶道の凋落

茶道衰退の理由ははっきりしている。当時は、能と茶道は幕府・封建制と固く結びついたものとしてのイメージが強かったためである。

現在の茶道の中心勢力は千家なので、「千利休と千家の茶、堺の町人の茶」との印象が強いが、江戸時代を通じて、茶道はまず武家のものとみられていた。

また、三千家がともに大名家の茶道方をつとめていたことは、千家系の茶道全体にとって大きな意味をもっていたと思われる。

明治五年（一八七二年）十月に、京都府が「茶之湯指南」を芸者と同様に鑑札の必要な遊芸人としたとき、裏千家十一代玄々斎は之に反発し、茶道は儒教精神にもとづき「朝恩を奉戴して」行っているものだ、とする建白書を出して撤回させようとした。しかし、もはや大名に伝える身分ではなく、一般市民に芸道を教えているだけなのだからと京都府がみなしたのは当然だった。

実際、その後もずっと長く茶湯師匠や能狂言師は、長唄師匠・チョンガレ語り・曲馬乗り・手品遣い・相撲取りなどと一括されて、「遊芸師匠・遊芸稼人・相撲」として鑑札を交付され、営業税を課されていたのである。

江戸時代にさかのぼってみると、もし町人に茶を教えるだけだったなら、やはり長唄や三味線の師匠と同じ町の芸事師匠に過ぎなかったであろう。その時代、茶は武家のものであり、大名家に仕え、大名にその茶を教授する宗匠であるということが、大きな違いとして千家のステイタスとなっていたはずである。それは千家系（遠州流や石州流をふくむ）の茶を町人に教えるすべての茶匠に及ぶものだったと思われる。

茶道を習う町人の間にもそれは影響し、茶道を習うことのステイタスにつながっていたはずである。

江戸時代の町人は能・謡は習うことはできなかったが、茶ならできたのである。それが明治になって反転し、茶道を習う人が激減してしまったのである。

○煎茶の流行

加うるにすでに幕末期から、幕府に反発する公家や学者、勤王の志士たちには煎茶が愛好されていた。

摂関家の近衛忠熙、鷹司輔熙、一条忠香はともに煎茶小川流初代の小川可進と親しく、煎茶を通じた交流が深かった。

鴨川に面した「山紫水明処」（茶室）に住み、尊皇攘夷思想に大きな影響を与えた「日本外史」の著者である頼山陽の煎茶趣味はよく知られている。

また天誅組の藤本鉄石も自ら都門売茶翁と名乗るほどに煎茶に傾倒していた。幕末期の文人による煎茶は、反権力的、在野的、反骨的性格が強かったと指摘される。

そのため明治になってからは、茶道の凋落の一方で新政府の要人たちが愛好した煎茶が爆発的に流行することになったのである。

明治はじめの約二十年間に、煎茶道具の高騰とは対照的に、買い手のつかない茶道具の値段は暴落した。この時期には廃仏毀釈で荒廃した寺院からは佛教美術品が、旧大名家などからは調度品が安値で流出し、日本美術を評価した外国人に買われて国外に出ることも多かったが、幸い茶道具は外国にさえまったく売れなかったといわれる。

明治四年（一八七一年）に行われた姫路酒井家の茶道具売立てでも、ほとんど買い手が付かなかったという。外国物が流行して、維新直後二・三年の道具市は年間三組ほどしかなかったという。

○茶道の復興

茶道がそのようなどん底の状態から抜け出すことができたのは国粋主義的風潮のなかで伝統文化が見直されたことと、新政府の高官や政府と結びついた新興財界人が美術品の購入をはじめ、茶の湯の関心をもつようになったことが理由にあげられる。彼等は次々に海外へと流出する美術品の阻止と伝統文化の保存をめざしたのである。

明治から昭和にかけての幾人かの茶人をとり上げる中で茶道復活の流れをみてみよう。

○茶会行幸と和敬会

明治初めの代表的な茶人は井上馨である。世外と号した井上馨は天保六年（一八三五年）、萩藩士井上光亨の子として生まれている。初め藩主毛利敬親の小姓として出仕するが、やがて高杉晋作や伊藤俊輔（博文）らと討幕運動に参加して藩論を開国・倒幕に統一。明治政府では大蔵大輔、外務、内務大臣などを歴任し、政財界に大きな影響力をもったのである。

井上は幕末以来の不平等条約改正のため、欧化政策を推進して、東京の日比谷に鹿鳴館を建設し、連日舞踏会を催したものの条約の改正に失敗したことなどあって毀誉褒貶、さまざまな評価がなされているが、一方では茶の湯にも執心していた。

茶道具収集にみせた貪欲さを示す多くの逸話を残すが、茶道史の上で知られるのは奈良東大寺四聖坊の茶室「八窓庵」移築披露茶会であろう。

明治十三年（一八八〇年）頃、「八窓庵」は取り壊されることになった。廃仏毀釈の影響が大きかったといわれる。取り壊された「八窓庵」は風呂屋に三十円で売り払われていたのだが、これを買い取った井上は、明治二十年（一八八七年）、東京鳥居坂の私邸に移築し、四月二十六日に席披きを行ったのである。

この席披きで重要な事柄は、明治天皇の行幸を得た点である。維新以後、衰退していた伝統文化、特に茶道が息を吹き返すきっかけともなったからである。

天皇は席中の飾付けを見ただけだったようだが、翌日に訪問した皇后は川上宗順（明治上半期の東京茶道の指導者、江戸千家）の点前で茶を喫している。このとき邸

内の仮設舞台では余興に歌舞伎が演じられ、その天覧によって、庶民芸能の歌舞伎が伝統文化とみなされる大きな転機になったことでもよく知られている。

幕末に生をうけ、維新の激動を乗り越えて新政権樹立に尽力した井上のような人物が茶道に興味を注ぎ、その中心となって明治天皇の茶会への行幸を成功し得ることができたことは、これに連なる人々を茶道に興味をいだかせる大きな効果をもたらしたのである。

元肥前平戸藩主で伯爵の心月庵松浦詮が中心となった和敬会が茶の湯復興に果した役割も大きい。（松浦は石州流系鎮信派家元）

和敬会は明治三十三年（一九〇〇年）に発足、会員は十六人に限定されており、各自が持ち回りで釜をかける（茶会を司る）というものであった。明治三十年代の和敬会は十六人であったから十六羅漢とも呼ばれたという。

初期のメンバーは七卿落ちの東久世道禧、軍医部総監石黒況翁、安田財閥の創始者安田善次郎らであったが、これらは全て江戸時代に生をうけた人物たちばかりであったから、旧来の茶の湯の伝統を引いていたといえる。欠員が生ずれば順次、補充していったので、益田鈍翁（三井財閥）、馬越化生（日本麦酒醸造社長）、高橋箒庵（時事新報記者・実業家）、三井高保（三井財閥）、団琢磨（三井鉱山会長）、藤原銀次郎（王子製紙社長）らが加わり大正末頃まで続けられていた。これらの中から次代を担う新たな数寄者があらわれてくるのである。

○岡倉天心と「茶の本」

文部省に勤務していた岡倉覚三（天心）は、明治二十二年（一八九〇年）東京美術学校（現・東京芸術大学美術学部）の創立に尽力し、校長を務めた。明治三十六年（一九〇四年）には、ボストン美術館中国・日本美術部に迎えられ、明治四十三年（一九一〇年）にいたって、ボストン美術館中国・日本美術部長となった。

アメリカ滞在中の明治三十九年（一九〇六年）、茶道を中心に日本文化を紹介するための英文で書かれたのが「茶の本」（原題はThe Book of Tea）であった。わび茶の美意識と、歴史、茶室、茶花など日本の茶道文化の真髄を西洋に紹介した。アメリカで出版されたあと、スウェーデン、ドイツ、フランス、スペイン語などに翻訳され、昭和四年（一九二九年）になって日本語訳が後から出版された。

○近代の数寄者たち

益田鈍翁

鈍翁益田孝は佐渡奉行所の地役人の子に生まれ、早くから英語を学び、維新後は井上馨とともに三井物産の前身である「先収会社」を設立。明治十年代後半頃から茶の湯の世界に入り、明治二十七年（一八九四年）かつて絵師狩野探幽が秘蔵していたという弘法大師筆の「座右銘」一巻を入手、翌年の弘法大師の命日に自宅で一大茶会「大師会」を始めた。この大師会は佛教美術を茶の湯の世界に取り込んだもので、一度に多くの人達を招くという形をとった。

これには参加希望者が殺到したという。それは主催者鈍翁が井上馨や山縣有朋などの政治家と親しく、彼自身三井財閥の中心的存在で、政財界の名士多数が招待されているこの茶会に招待されなければ面目が立たぬと、当時評判になったからである。西の光悦会とならぶ大師会の始まりである。

因みに、光悦会は大正二年（一九一三年）に京都で本阿弥光悦の威徳を顕彰するために発足。同四年から現在にいたるまで、洛北鷹峯の光悦寺で毎年秋に茶会が行われている。（筆者も数年前参加した実績がある。その時ある席主の好意により、名物茶碗「紙屋光悦」を手にとらせて戴き、震え上る程の感動を受けた覚えがある。極めて水準の高い会との定評がある）。

化生・馬越恭平も鈍翁と共に茶道に熱中した財界人の一人であった。備中の豪農の出だが、生家の没落で大阪に出て、鴻池新十郎家に奉公することになった。

ある日、掃除をしている時、書院にあった青磁桃香合を取り落として番頭にしたたかに打ち据えられたことがあった。この時化生はいつの日か香合を買い取ることを心に誓ったという。

明治三十四年（一九〇一年）にいたって鴻池新十郎家の道具売立てがあり、この香合を落札・入手することができた。馬越化生にとって茶道はかつて憧れた富裕層と重なっていたようだ。茶道を嗜むことは、自らがその立場に登ったことを確認するに等しかったのである。

高橋箒庵

箒庵高橋義雄は水戸藩士の子に生まれた。福澤諭吉の影響を受け、慶応義塾に入り、卒業後は、「時事新報」の記者となる。井上馨の口ききで三井に入社、三井銀行、三越百貨店、三井鉱山、王子製紙などを経て、五十一歳で実業界から引退、茶道ジャーナリストとして執筆活動に専念した。

記者時代から「時事新報」に連載していた当時の茶会記は「東都茶会記・「大正茶道記」としてまとめられた。それまで少数のグループの内で楽しまれていた茶会が、多くの人々による共通の関心事へと変化していった。大衆化への道が開かれるキッカケとなったのである。

また箒庵は、茶入・茶碗九百点あまりを写真入りで詳述した名物茶道具集「大正名器鑑」を編纂した。同書の一冊目は大正十年（一九二一年）十一月に刊行され、七年後の昭和三年九月に九編十二冊が完成した。諸家に秘蔵されて人々の目にふれることのなかった名物道具も大正名器鑑の刊行により公の場に登場することとなり世間によく知られる結果となった。

高谷宗範

高谷宗範は、名を恒太郎といい、桂堂・如瓶斎と号した。福澤諭吉の勧めにより東京に出て検事になる。のち検事を辞して弁護士を開業する。

宗範が茶道に興味を持ったのは、「胃弱に茶が良い」と勧められたのがきっかけであったという。茶道は、初め平井貯月庵より遠州流宗鳳派を学び、のちに遠州流小堀宗舟を迎えて遠州流茶道保存会を結成、大阪の数寄者の集まり「十八会」の会員として茶事に奔走した。

大正七年（一九一八年）「茶道経国」（茶道を通じて国のために尽したい）を提唱して、京都府下木幡（宇治市）に十万坪ともいわれる土地を求めて「松殿山荘」を建設し、宗範は儒教的礼儀・道徳としての茶道の振興を求め、厳格きわまりない茶道を実現しようとしていた。

しかしこれは当時盛んであった益田鈍翁や高橋箒庵らを代表とする新興の政財界人らの茶とは相容れない面が多かったと思われる。

あくまで趣味として教養として茶道をとらえようとしていた箒庵との論争がこれを示している。この時期、宗範は孤高の茶人だったのである。

数寄者と美術館

一方少しおくれた時期の数寄者である根津青山、原三渓、小林逸翁、畠山即翁、野村得庵、五島慶太らは、それまでとは違った意味で茶道美術を一般化した身近な存在である。

彼等は貪欲に名物茶道具を集め、これをもって幾度となく茶会を行うものの、次々に美術館をつくって収蔵していったのである。

その主なものは、根津美術館（根津青山）、五島美術館（五島慶太）、畠山記念館（畠山即翁）、はじめ、藤田美術館（藤田香雪）、香雪美術館（村山香雪）、滴水美術館（山口吉郎兵衛）などである。

よほどの機会に恵まれなければ目の当たりにすることができなかった数寄者たちの茶道具が、わずかな入館料で自由に見ることができるようになったのである。またこの美術館によって、貴重な美術品や茶道具が散逸する危険から守られる結果となった点も大いに意義があった。

しかしながら美術館に収められた茶道具は使われることなく展観・鑑賞されることになった。元来、使われることを目的としていた茶道具が使われることなく保存されるのは、明治以来の数寄者の茶が終わりを告げたことを意味していた。

なお、財界数寄者の代表格である益田鈍翁は、道具がまた人の手に渡って使われることを望んだとして自分の美術館を作ることはなかったと言われる。

○学校茶道と女性の進出

明治時代初期の茶の湯の危機的状況からようやく脱した家元たちは、将来を考える上で次代を背負っていく若い人たちに茶の湯を広めることが必要だと考えた。

そこで学校で茶の湯を教えることにも力を注いだのである。

そのような考えに応えて、跡見学園の跡見花渓、同志社の新島八重子（ＮＨＫのテレビドラマ「八重の桜」の主人公）、東山女子専門学校（現京都女子大学）の九条武子、学習院の堀越宗円、成蹊女学校の奥田正造などが、学校教育のなかで茶の湯を教えることに情熱を傾け、また公立学校でも茶の湯を修身教育の一環として採用するところも出てきた。

ただ茶の湯を教育に取り入れた学校の多くが女学校であったため、茶の湯をたしなむ人のなかで女性の割合が急速に増加し、それまでは男性が大半であった茶の湯において、男女の比率が逆転してしまう結果となった。

そして一時期は「花嫁修業」として、つまり結婚する前の女性の嗜みとして茶の湯を習うことが必須条件であるかのような状況すら出現した時期もあった。

また比率のうえで女性の割合が大幅に増加したばかりでなく、茶の湯人口そのものも拡大を続けた。それらの人々のほとんどは町中で茶の湯を教える師匠を通じて流派に所属したため、各流派が抱える門弟の数も飛躍的に拡大した。そのため各家元ではそれまでの門弟との個人的な繋がりを重視するあり方から、多人数を抱える全国的な組織を整備していった。その結果家元の権威がかつてないほど強化されるとともに、大人数の門弟が行う茶の湯の型が崩れないようにするために、点前教育が組織的、かつ統一的になされるようになり、そこからはみ出ることは許されないという傾向が強くなり、茶の湯が窮屈になってしまったとの弊害を指摘する声もあった。

○大衆の茶の湯の時代

献茶の定例化

このように数寄者に替って新たに茶道界をリードしてきた、各地の家元、宗匠たちであったが、更に神・佛に

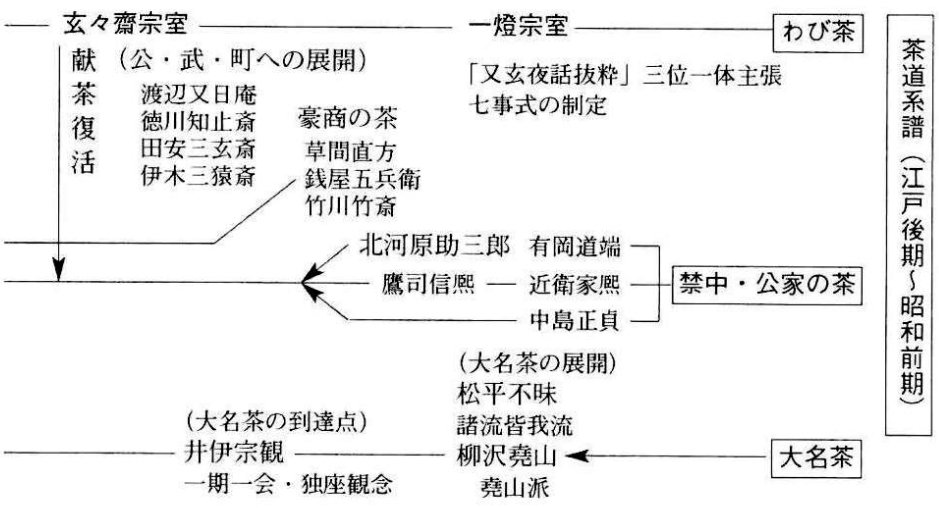
対する献茶も早くから進められた。明治十三年（一八八〇年）に北野神社での献茶が初めて行われ、以降定例化していった。奇しくも、この年には高山寺における明恵上人六百五十年遠忌の献茶も行われ、続いて明治十九年（一八八六年）には北野大茶の湯三百年記念の献茶、明治二十三年（一八九〇年）の利休三百年忌茶会、明治三十一年（一八九八年）豊太閤三百年祭における豊国廟献茶などが続いた。

特にこの豊太閤三百年祭では献茶のほか、北野神社、平安神宮、金閣寺、大徳寺孤蓬庵、樂家など四十余りの会場で、二十日以上にわたって茶会が行われたのである。

このような傾向が一段と高まったのは、昭和北野大茶の湯と、利休三百五十回忌であった。

昭和北野大茶の湯は昭和十年頃から計画され、天正十五年（一五八七年）に豊臣秀吉が行った大茶の湯の三百五十年を記念して昭和十一年十月八日から五日間の予定で実施されている。九月二十一日の茶壺の献上、十月八日の献茶にひき続いて北野神社内の各席を始め、光悦寺、大徳寺など市内約三十か所で茶会が行われた。

根津青山、鴻池善右衛門、野村得庵ら財界等のほかに道具商、家元社中らが席主となって延べ茶席百以上に、名誉会長前田利爲以下、一万人以上が参加した一大イベントであった。さらに北野神社宝物館では新田肩衝、北野肩衝、北野黒など茶道具の名品が展観され、盛況を博した。



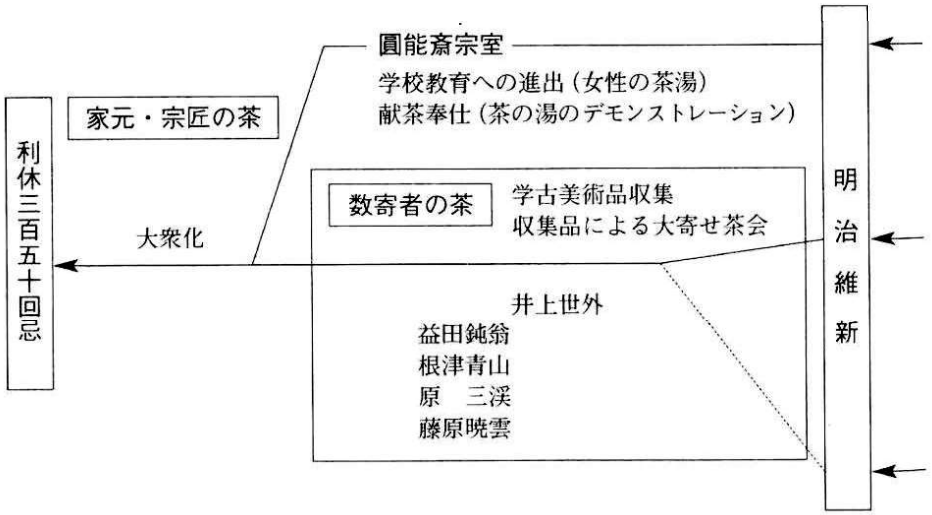
続いて昭和十五年（一九四〇年）四月二十一日から四日間にわたって、利休三百五十年の法要茶会が行われている。二十一日午前十時三十分、大徳寺法堂で始められた献茶式は、全国にラジオ中継されたのである。

翌二十二日からは大徳寺山内七か所に茶席が用意され、三日間で五千人以上もの参加者で賑わった。すでに昭和北野大茶の湯の実施で大規模な茶会は経験済であった。

更に京都三条の朝日会館では講演会が開催された。東大教授で美術史家の藤懸静也（テーマ「安土桃山時代の茶道と芸術」）。京大教授で、国語学者の新村出（テーマ「南蛮趣味と茶道」）、作家の吉川英治（テーマ「茶味即実生活」）の三人であった。

会場は満員で、茶人よりも学生やサラリーマン風の聴衆が多かったというから、多くの人々が茶道に強い関心を持つに至ったのであろう。茶道は大衆が中心となる時代を迎えていたのである。

この時代、このような茶の湯の普及、大衆化はだれがリードしたのであろうか。年齢順で、愈好斎千宗守（武者小路千家）、淡々斎千茶室（裏千家）、即中斎千宗左（表千家）という、三千家の若手の家元たちであった。



むすびとして
——現代の茶の湯について——

昭和時代になってその最盛期に向いつつあった茶道界であったが、第二次大戦との係わりを深く持ったことは否めない。

昭和十五年（一九四〇年）の裏千家淡交会、同十七年の表千家同門会の結成は、国家総動員法下の国民精神総運動員運動に対応するため、「精神的」茶道の振興を意図とした。

「茶道報国」がスローガンになり多くの流儀が参加して昭和十六年三月には皇国茶道会が結成された。その後の初釜では「皇国万々歳」「百戦百勝」「一剣平天下」などの掛物が競って用いられたという。

戦争協力したのはひとり茶道界のみではない。芸能界は慰問を通じて、作家や画家たちも従軍参加等を通じて協力したのである。

催物を通じての協力だけではなく、茶道界では、陸海軍に戦闘機まで献納したというから相当な肩入れがなされたのである。

昭和二十年（一九四五年）八月敗戦となった。総力を挙げて協力していただけに茶道界が受けたショックは大きかった。

文学者や画家などの様に戦争協力を咎められて追放される等のことは無かったものの茶道界のリーダーである家元たちは責任を感じて活動を自粛せざるを得なかった。

しかし世の中が落ちつきかけた昭和二十二年五月裏千家家元淡々斎宗室はいち早く茶道の海外普及を目指して国際茶道文化協会を設立した。また淡々斎の跡継ぎである十五代鵬雲斎は学徒出陣から特攻隊に入りながら生き残った人物で慚愧の念もあってか、海外への茶の普及に力を入れ「一椀からピースフルネスを」をスローガンに活躍を始めた。

経済の発展期の到来と共に日本の伝統文化としての茶道が見直され環境が好転してきた。之に対応して各流派共に全国組織を強化して結束が図られた。

茶道と密接な関係のある美術館もこの時期殆ど開館することになったのである。

また、この頃茶道の先覚者である大応国師その他の大法要が次々と営まれたのである。

昭和四十二年十一月、茶道家元会が発足し、表千家・裏千家・武者小路千家・籔内家・遠州流・宗偏流の六家元が第一回会合を開いた。（但し家元会は任意団体に留まった）。

昭和三十年・四十年と茶道界も世の中の高度成長期の波に乗って戦前の最盛期を上回る盛況を享受するに至ったのである。

ひとくちにその頃の茶道人口は一千万人とも云われる程であったが、それは超過大評価だったとしても一概に否定できない勢いがあった。

残念乍ら各流派の秘密主義から情報の開示が無いので正確な実数の把握は不可能であり想像にたよる他に手だてはないが、昭和時代の後半をピークとして茶の湯人口は減少してきた。

筆者が苦労して集め得た諸資料の中に、茶の湯人口の参考計数を漸やく発見した。

総理府統計局が行なった、「社会基本調査」にみる趣味・娯楽の種目における「茶道」の行動者（実践者の意か？）の数の推移である。

詳しくは省略するが、昭和五十一年（この年から統計が始まった）の男女行動者計三百三十万人が五年毎に減少を続け三十年後の平成十八年には二百万人と百三十万人もの茶道人口が激減しているとしている。業界は隠匿体質なので一切発表されていないが、この数字は官庁に近いところの公式発表なので信用できる。この減少傾向は現在も続いているものと思われる。

不況が長期化する中で趣味が主体とされる茶の湯ばなれはある程度は止むなしと肯定されるが、これが一過性の現象だけには限られていないと思われるので寒心に堪えないところである。

茶の湯は日本の生活様式のなかで形成され、発展してきたものだが、しかし現代はその生活様式そのものが急激に変りつつある。

新しく建てられる都会の住宅では和室や庭がないことが多い。正座することも、和食を食べる機会も減り、和服を着ることも稀となった。それ等についての作法も若い世代には伝わらなくなった。

茶道と関係の深い美術工芸品にしても、床の間がなければ掛軸をもつ必要がなくなる。硯箱も重箱もなくなって、本物の漆器をもたない家庭も多いだろう。まして室内で炭火をおこすこともなく、茶釜もない。

そうしたなかで茶の湯の立場は苦しくなり大衆から見離され、日本の伝統文化としては存在するが近寄り難いものに変質しようとしつつあると言える。

茶道人口の激変は、長びく不況や、少子高齢化による若年人口の減少だけが原因ではなかったのである。

茶の湯とは宗教か、芸能か、道徳なのか、と先達たちにより論ぜられてきたというが、歴史ある日本の伝統文化であり、このまま退潮を続けることがあってはならない。

筆者は茶道の振興策を提言する資格もなくその立場に

もないが敢えて一言申述べたい。

何といっても茶道界は家元たちの流派の消長にかかっている。幸い現在の家元たちは若手であり、実行力をもっている。

家元たちは、基本に立ち還って魅力ある茶道の実践に進むべきである。そのためには各家元たちは思い切って過去の閉鎖性や秘密主義を打破して横割りの大同団結を計るべきである。

公益法人を作って集団指導、体制のもと、情報公開、共同事業、政策提言、政治力強化、宣伝活動等々強力に推進すれば、必ずや国民大衆の支持を得て復活可能と考えられる。

愛知県西尾市では、平成十八年、市と商工会議所主催で市民を対象とする一万人茶会が行われた。ギネスブックのレコード（米国の七千人）を打破るべく挑戦して見事に約一万五千人の茶会を達成してレコードを更新したのである。

西尾市は茶どころとして全国有数の生産地である。殊に抹茶の生産高では国内トップという。茶会は市・商工会議所・茶商・地元商店街が連繋して街起こしの一環として行われたものである。

市内の中学校茶道部を地元の宗匠や社中の人達が指導して進められ、市内の盛り場に毛氈を敷いて一万五千人の茶席を設けた。

鐘の音を合図として一斉に喫茶する様は誠に壮観だったという。

西尾市は歴史の古い六万石の城下町である。街起こしと、茶道の普及に大きな成果があったと思われる。

全国には三十ヶ所近くの茶どころがあるという。好例として大いに参考にしてもらいたいものである。

来る平成五十二年（二〇四〇年）に、茶祖利休居士の四百五十年遠忌が到来する。各家元たちはこの時期を目指して一致団結、強力なリーダーシップのもと茶道界の復活・発展に努力すべきである。

因みに現在主要な茶道家元といわれるのは次の十一先である。

表千家・裏千家・武者小路千家・表千家久田家・表千家堀内家・鼓内流・遠州茶道宗家・宗偏流・松尾流・江戸千家・大日本茶道学会。

終

短歌

行雲流水（四十）

石黒修身

近詠二十首

望郷のバラード

「お誘い」は自筆で届くリサイタル「天満敦子」の誠意がにじむ

久に見る「天満敦子」は健やかにストラデを弾く風姿素にして

曲の間のトークで語る被災地を「天満敦子」は真情こめて

宵迫る紀尾井ホールの一隅で目瞑りて聴く「望郷のバラード」

歌　会

同門の歌会に入りて七年余歌友会場とともに馴染みき
会場は神田神保町夫々に由緒ある館蟠居せる地区
合評の会が終れば館内の酒房に寄りて歌友（とも）と語らう
会員は多彩な経歴有すれど人格誠見備えし紳士ら

改札口

改札は現世の結界時として幻想と紛う人の離合が
改札は人の集まる坩堝（ルツボ）かも邂逅もあり別離もありぬ
改札は人世の分岐振り向きて笑（えま）いし人は今に世になく
終電に近き改札手を振りし微醺の友の行方杳たり
人気なき深夜の改札さよならの同学の友逝きていく年

身　辺

七年余子会社の長勤めたる息（こ）は待命の身となりぬ
待命の後はパリの店長と商社勤務の悲喜は交々（こもごも）
パリなれば復（また）訪れる日もありぬ逸（はや）る心は老いに克てるか
文化の日瑞泉寺詣づ紅葉（もみじ）まだ楚楚と咲く「ふゆざくら」愛でり
鎌倉の瑞泉寺への通い道「平山邸」は主亡く寂し
街中（なか）の花屋の軒で竜胆（りんどう）の紺の淡さに魅せられて購う
曽遊のみちのく「安比（あっぴ）高原」に竜胆自生のさまを想起す

老人会　会長のつぶやき（その四）

―新米老人会長Aと親友Qとの対話―

伊治　哲

Q・・やあ！　A君、久しぶりだなあ。お互いに元気でなによりだ。何ヶ月ぶりかで、こうして皆と顔を合わせられるのも、このOB会が続けられているおかげだ。ありがたいと思うよ。

それはそれとして、例の老人会の話だ。あのあと、二回にわたって、オマエから懇切な解説の手紙をもらった。ありがとう。最初、オレの変な言葉尻から老人会を巡る議論になったが、オマエの手紙のおかげで、老人クラブというもののほんの一部を理解することができたよ。

ところで、オレの住まいの周辺にも老人クラブがあって、結構活発に活動をしていることが分った。オマエのいう老人クラブ観に刺激されて、つい最近思い切って入会したよ。先輩会員諸氏から大歓迎を受け、早速ペタンクとかグラウンド・ゴルフの仲間に入って、手ほどきを受けた。本物のゴルフからみると、子どものお遊び程度に思っていたが、やってみるとなかなか奥が深くて面白いゲームだなあ。スティックやボールも買い込んで、ちよっと夢中になりかけているところだ。

地元の人たちと付き合うのは初めての経験だが、オマエの解説が大いに役にたちそうだ。よく考えてみるとオマエの手口にすっかり嵌められた気がしないでもないが、とにかく毎日がわくわくして、えらく楽しくなってきた。その意味ではオマエに感謝しなきゃいけないなあ。ありがとう。

A・・えっ？本当か！入ってくれたのか。老人クラブの会員増強のために、オレも一役かったことになるね。ありがとう。

キミのことだから、入会した以上、タダの会員活動だけではすまなくなるだろう。こうなった以上、オレが手紙に書いてきたことは、ひとまず〝他山の石〟としてヨコにおいて、白紙の立場からこの集団の本当の姿をよく見つめてくれよ。そして、高齢者集団として、あるべき方向にリードしていってほしいと願うよ。

悪い意味じゃなくて、清濁併せ呑まざるをえないこともあるし〝賢いバカ〟にならなくてはならないこともある、と思うが、そこはキミ独特の度量の深さを発揮して、大いに発言してほしい。間違いなく大方の信頼を得られると信じている。活躍を祈るよ。

Q・・おい、おい、オレはまだ入ったばかりなんだせ。右も左も、まだ見当さえつかないんだよ。最初からあまり煽るなよ。

それより、過去三回の対話と手紙で力説したオマエの主張の続きを聞かせてくれよ。入会したばかりだが、オレのクラブの雰囲気を頭において、クラブ役員五年の経験がオマエに何を言わせるのか、今日はそれを楽しみに出てきたのだ。

A・・余談だが、最近手紙を書くのが億劫になって、キミへの手紙も一日延ばしにしているうちに、とうとう今日になってしまった。実をいうと、積年の弊が祟ったのか、ここのところ手が震えて、ご覧のとおり書く文字が金釘流というか、誠に情けない字しか書けなくなった。年をとるということは実に口惜しいねえ。

だから、今日このOB会でキミと会って、直接顔を合わせて話ができることはとても嬉しいんだよ。しかも、ひそかに、キミが老人会に入会してくれていたというんだから、よけいに嬉しいんだ。

一年ほど前に、なにかのきっかけで老人会についてキミと議論を始めたが、過去三回の対話と手紙で、オレの考えているところはほぼ言い尽くした。だから、オレのレクチャーも今回で終りにしよう。

あとは、キミが今後老人クラブ活動を通じて積み上げる経験から、なにを生み出してくれるか、だ。オレとしては、そっちの方を楽しみにしているよ。

それにしても、長い間、辛抱してよく付き合ってくれたなあ。ありがとう。礼をいうよ。

さて、今日が最終回だから、少し大所高所から考えてみることにする。オレの独断と偏見をまとめてみたから、それを読んでくれたまえ。

――日本の将来は本当に明るいのだろうか？――

去年の暮に、安倍政権に代ってから急に世の中が明るくなったような気がする。野田から安倍に変わるだけで、そんなに簡単に景気がよくなるのかねえ？〝病気は気から、景気も気から〟というから、希望や期待を抱かせるだけで気分がよくなり、株まで値を上げるのかもしれないね。

しかし、実際には国の財政赤字は年々拡大しているし、その赤字がいつ縮小し、いつ黒字に転換するのか、計画を裏付ける具体的政策は未だどこにも見えないままだ。消費税率の引き上げが既に決まっていることだし、国債の大部分は国内で消化されているのだから、まさか国が破産するようなことは万が一にもあるはずがないなどと考えているとしたら、危機感が遠のいたような錯覚を覚えて、却って心配でならない。

ま、当面の問題としては、一九九一年以来の失われた二〇年間の暗雲から曙光が洩れ始めたことだけはまちがいない。停滞を続けてきたGDPが、少しづつでも上昇気流に乗ってくれることを望みたい。

しかしより基本的には、政治が選挙の時だけ票田に縋りつく旧来の悪弊から早く脱しなくてはならない。票田たる有権者のわれわれ自身も目先の利害にとらわれずに、日本の国、あるいは社会をどう作り変えるかを考えなくてはならない。国や社会の将来の姿を視点においた正しい政治感覚を、今こそ定着させなければならない時だ。

――日本は貧困大国か――

ところで、この日本のGDPは、中国に抜かれたとはいえ、依然世界第三位の経済大国だと思っていた。過去二〇年以上も不況が続いたが、それでも世界の中では経済的に最も恵まれた国だと信じていた。

ところが、こともあろうに、その日本が世界有数の貧困大国であるという説にでくわした。経済協力開発機構（OECD）加盟の三〇カ国中、日本は、メキシコ、トルコ、米国についで四番目に「相対的貧困率」が高いというのだ。

「相対的貧困率」というのは、「国民の可処分所得の低い人から高い人までを順番に並べて、ちょうど真ん中になる人の所得の半分より少ない所得しかない人の割合」をいうのだそうだ。だから、貧困率が低いほど豊かだというわけだね。日本のそれは、一九八五年に一二%であったものが、二〇〇九年には一六%にまで悪化した、つまり貧困層が増加したというわけだ。

この間、政治的にも社会的にも、市場原理主義に偏向した政治がこのような歪みを生み出したことは明らかだ。典型的には、雇用問題、特に若年層にとって非正規雇用が当たりまえになった事実がそれを示している。因みに、今年の七月に総務省が発表した「就業構造基本調査」によると、二〇一二年一〇月現在、雇用者のうち、パート、アルバイトなどの非正規社員は全体で二〇四三万人になり、初めて二千万人を突破したという。比率も三八・二%と過去最大を更新したそうだ。二〇年前と比べると、この比率は一六・五ポイントも上昇した。小売りやサービス業などで、パートででも働かざるをえない若い人が大きく増えたためだろう。昨今の景気回復の裏

側で、世の中の矛盾のしわ寄せが若年層に集中しているのは間違いない事実だ。

つい最近の米商務省の発表によると、米国では二〇一一年の貧困率が一五%で、前年比一・〇ポイント低下、つまり改善したそうだ。因みに年間家計所得の中央値は五〇、〇五四ドルで前年比一・五%減少したという。円・ドル相場の変動が激しいが、大ざっぱに一ドル100円で換算すると、米家計所得の中央値は約五〇〇万円になるから、その半分、二五〇万円に満たない人が全米の一五%を占めるということになる。こうしてみると、多少の差はあれ、日米ともに同じような所得水準で、同じような貧困問題を抱えていることが分る。貧困問題までアメリカナイズしてほしくないねえ。日常茶飯事のように新聞を賑わす社会悪のほとんどすべては、貧困がその温床になっているのだから。

貧困問題で思い出したのだが、最近話題になる生活保護に関する問題だ。もちろん日本国内でのことだ。これまで生活保護についてはあまり関心がなかったが、新聞によると、二〇一二年六月現在、生活保護受給者が二一一万人で、年間三兆七〇〇〇億円を支出しているそうだ。もちろん、いずれも史上最大だという。しかも一〇年前と比較すると、六八%も増加したというではないか。それも、最近の世相を反映して、「働かないで生活保護を受けるほうが得だ」とか、「だから働けるのに働かない」とか、不心得者が増えているのが一因らしい。

しかし、こういう貧富の格差や社会の風潮を生み出したのは、明らかに政治の偏向、政策の誤り以外のなにものでもない。にもかかわらず、不正受給を防ぐ「生活保護法改正案」が今年六月の通常国会に上程されながら、与野党の党利党略のあおりで、閉会間際に廃案になってしまった。こんなことをやっているから、益々政治不信が増幅するのだ。早く政治の〝貧困〟から脱け出さなきゃだめだ。

暗い話から始めたので、なんとなく気が重くなった。気をとりなおして、足元の老人の世界を振り返ってみよう。

老人会のバス旅行や新年会、忘年会などのイベントでは、この時とばかり一張羅の洋服に身を飾って豪華絢爛を競ったり、行く先々でお土産を買物袋一杯に買い込んだりして、老後の人生を謳歌していることは以前に話した。今オレの周囲を見る限り、〝貧困〟などどこ吹く風なのかと疑いたくなるほど日本の老人は豊かだ。

貧困のどん底を経験した昭和一けた世代からみると、これだけの非生産年齢人口を、これほど豊かに食わせてくれる年金国家がよくも成り立つものだと、我ながら感心するばかりだ。

こんな老人天国をみるかぎり、「世界第四位の日本貧

困大国」論には疑問を感じてしまう。その疑問のわけは、所得の「フロー」だけをみて、「ストック」をみていないことにある。老人はそこそこの年金所得のうえに、かなり高い水準の保有資産を維持しているからではないだろうか。

まずフローをみてみよう。ちょっと古いが、二〇〇六年の厚生労働省の所得分布状況調査によると、年間所得三〇〇万円以下の低所得者の割合は、全世帯では三〇・八%であったのに対して、高齢者世帯に限ると六〇・九%であった。低所得層の割合は高齢者が全体平均の二倍ということになる。高齢者の所得は年金収入だけに頼っているのだから当然の結果だろうね。

ところが、これをストックの面からみると、個人金融資産約一五〇〇兆円のうち、六〇%、つまり九〇〇兆円は六五歳以上のシニア層が保有しているというのだ。個人金融資産というのは、預貯金だけでなく、株式、債券、生保等も含むとされるが、それにしても、六〇~六九歳の最高で二〇〇〇万円、七〇歳以上では一八〇〇万円を保有するという（総務省）のだから驚きだ。とにかく個人金融資産の半分以上を高齢者が握っているというのだからすごい。

つまり、預貯金などの資産が多くても、課税所得が少なければ「低所得者」とみなされてしまうところに問題があるのだ。

さらに、消費面をみてみよう。六〇歳以上の高齢者全体の国内消費支出は、二〇一一年では一〇一兆円、個人消費全体の四四%を占めている。六五歳以上に絞っても七〇兆円、三〇%を占めるとされる。とりわけ旅行、レジャー、衣料品あるいは通販などの分野では〝アクティブシニア〟と呼ばれるくらい、高齢者向けの商品やサービスが無視できない好調振りだといわれている。

シェアからいえば、六五歳以上の人口は、二〇一二年三月の時点で、総人口の二三、四%であるのに、金融資産では全体の六〇%近くを保有し、個人消費でも三〇%を占めているということになる。

つまり、高齢者は、フローは低いが、高いストックを背景に、第二の人生を謳歌しているという図が描かれる。だから日本は決して貧困大国ではない、といいたいところだが、これはあくまでも高齢者に限っての話、これを裏返せば、日本の働き手、とりわけ若年層は貧困に喘いでいるということになる。

――若者の貧困は超少子社会につながる――

前にいったように、十人のうち四人近くが非正規社員で、その中でも特に若年男女が不安定な雇用条件のもとで生活に喘いでいるとしたら、その結果はいうまでもない。結婚や出産をためらいがちになるのは当然のことだろう。

二〇一二年の合計特殊出生率は、二年ぶりに上昇したとはいえ、ようやく一・四一に止まっている。増えも減りもしない人口（静止人口）を維持するためには、二・〇七の出生率が必要とされるから、それには遠く及ばない水準だ。このままでは、静止どころか、人口が減少、そして国運が衰退する道を辿るのは必至である。

原因を探ると、婚姻数の減少、晩婚化、それにともなう初産の高年齢化、そして出産の抑制に辿りつく。心配なのは、生涯未婚率が、男、二〇・一%、女、一〇・六%にも達していることだ。（二〇一三年版・少子化対策白書）

そんなバカな、と思ってオレの周辺を注意深く見てみると、十軒か二十軒の隣り近所の中にさえ、母親か父親と二人住まいしている四十歳を優に超えた未婚の息子や娘がいる、それも一軒や二軒ではない、と知って愕然としてしまった。しかも、それらの家庭が、どこからみても貧困とは思えない生活環境のように思えるのだからなおさらだ。

そう遠くない昔〝産めよ増やせよ〟などと国民を煽った時代があった。今や、結婚や出産にまで国や社会が過剰介入することは許されない。しかし、上に述べたような実情を目のあたりにすると、仮に満足とはいえない環境であるにせよ、若者たちが個人の人格やプライバシーを楯にして、自然の摂理に反する道にはまりこんでいるのではないか、とさえ思ってしまう。オレの考えすぎだろうか。

昔の話をむしかえして恐縮だが、〝貧乏人の子沢山〟といわれるくらい、当時はどんなに貧しい家庭でも〝子どもは家の宝〟だった。貧しいうえに子沢山のため上級学校に進めなかった小学校の友だちが沢山いたが、年を経て立派に成功し、世のため人のために働いている例はいくらでもある。

その最高の例は、建築家の安藤忠雄さんだ。大阪で生まれ、大学教育も建築の専門教育も受けていない。独学で建築を学んだ。苦学力行の末、「住吉の長屋」で日本建築学会賞を受賞、遂には東京大学教授、日本芸術院賞、文化勲章受賞にまで登りつめた現存の偉人だ。

そこまでは望まなくても、今の若者たちに、せめてそのくらいの気概だけはもってほしいものだ。先日、今言った安藤忠雄さんの記事をコピーして、子ども会のお母さんたちに配ったが、残念ながら反応は今ひとつだった。

だいぶ話がそれた。話を戻そう。

現在の政治が少子化対策に苦心していることは事実だ。曰く、児童手当増額、保育所の増設、幼保一本化、待機児童の解消、出産後の仕事復帰、男性の育児参加等々、多方面に着目した策が練られている。

ところが、オレからみると、着眼点がどこかずれている、決め手になっていない。子どもを産み、かつ育てやすいための条件や環境の整備など、間接的な対策にとどまっている。環境整備ももちろん大切だ。だが、環境や条件にこだわり過ぎると、人間とかくそれに甘えてしまいがちだ。だからもう一歩進めて、少子化を改革し、直接多子化を促す具体策に踏み込むべきだ。

まず、若い男女の結婚を直接後押しする策を考える、結婚したら初産を早めるよう誘導する。例えば、国からの結婚祝い金はどうか。一組一〇万円として、年一〇〇万組で（二〇一一年は六六万組）一〇〇〇億円だ。続いて出産祝い金はどうか。出生児一人一〇万円としても、年一〇〇万人でやはり一〇〇〇億円にとどまる。

前にふれた生活保護給付の年間三兆七〇〇〇億円、後のふれる年金過払い一二年で七兆五〇〇〇億円（年約六〇〇〇億円）や、七〇～七四歳の医療費一割軽減で年二〇〇〇億円などの財政負担にくらべたら、物の数ではないと思う。

もうひとつ、オレは家族の概念を見直すべきだと考えている。哲学者ヘーゲルは「社会を構成する最小単位は家族だ」といっている。〝核家族〟とはいっていない。その核家族を見直し、多世代同居家族化を促す。もちろん、家父長制を想定する家族制度の復活ではない。同族の多世代同居もよいだろうし、他家族との多世代同居でもよい。新しい家族のありようを模索してみるのだ。

以前に、老人会と子ども会とで世代間の交流を試行したことを書いた。その折、核家族の下で父母の躾や愛情だけを受けて育っている今の子どもは、祖父母の愛情に欠けている、あるいは飢えているのではないかと痛感した。祖父母の愛情は父母のそれと違って、広い包容力で包み込んでくれる愛情だ。多世代同居の家族形態をとることによって、祖父母、父母、孫の三世代間の愛情の交流や、祖父母の生老病死に直接接して、幼いなりに人生というものについて考える機会を与えることになるのではないか、と思ったのだ。

そして、なによりも、子どもをもつことによつて育まれる家族愛、兄弟愛を、親子ともども再発見するのではないか。子どもをもつことによる家族団欒の楽しさ、未来への夢、そして生きがいを見出すのではないか。それが、自分たちの分身を一人でも多く産み育てることにつながるのではないか、と考えるのだ。

あるいは、そのあたりに高齢者の出番があるのではないか、とも考えた。

いずれにしても、そこまで踏み込んだ少子化対策を講じなければ、問題の解決にはならない。しかし、今の政治は小手先の、上っ面だけを糊塗するような、脱少子化

方法論に止まっているのが現状だ。はっきりいって、若者や中堅層に、真っ正面からしっかり向き合っていない。ところが一方で、社会福祉というと、まっさきに浮かび上がってくるのは、肝心の若年層ではなくて高齢者なのである。

――社会福祉はどこへ向かっているのか――

「なんで引退した父の方が優遇されるのか？ボクから税金や保健料をとって、父のような稼ぎのいい高齢者に回すのは不公平ではないか。父は六九歳、年金五〇四万円、ボクは三二歳、年収三九〇万円だというのに・・・」こんな若者のボヤキを聞いたことはないだろうか。

二〇一一年五月の新聞に、国別社会保障費の高齢者向けと家族向けの比較が載った。日本は高齢者に四七・六%、それに対して、家族には四・一%であった。米国では夫々、三二・一%対三・九%、フランスでは、三八・八%対一〇・四%であった。各国とも相対的に高齢者へのウエイトが高いが、それでも日本ほどではないようだ。

またこれも旧聞だが、菅元首相の妻、伸子さんが「あなたが総理になって、いったいなにが変わるの？」という本を書いた。その中に「社会保障費が高齢者に七〇%、少子化対策に四%は何故？」と、政治への不信を洩らしていたのを読んだことがある。

このような世代間格差、世代間逆転を助長したのは、ほかでもない、この国の政治なのだ。先述のように雇用や結婚問題で若者を置き去りにする一方で、〝シルバー民主主義〟などと揶揄されるくらい高齢者寄りの政治がまかり通った結果なのだ。

二〇〇九年の衆議院選挙の折の年代別投票率を見てみよう。高い順に、六五～六九歳、八五・〇四%、六〇～六四歳、八三・三六%、七〇～七四歳、八三・三四%、に対して、三〇～三四歳、六一・一五%、二五～二九歳、五二・一三%、二〇～二四歳、四六・六六%であった。一目瞭然、低年齢が低投票率、高年齢が高投票率であることが分る。

政治家は国会議事堂の赤絨毯を踏んでこそ一人前、落選すればタダの人だから、票だけが頼りのタダの政治家は、いきおい投票率の高い層にしがみつく。つまり、社会保障費の不均衡な配分にみられるように、高投票率の高齢者に擦り寄る政治に陥ってしまうのだ。高齢者に足を向けることはできないというわけだろう。

では、どのような政策で高齢者寄りになっているのか。主なものを二つ例示しよう。

まず一つは、年金の過払いが累計七兆五〇〇〇億円という話。

年金は本来消費者物価にスライドして上下するのが原則になっている。ところが、二〇〇〇年度の物価が〇・

三%下がったにもかかわらず、当時の自公政権が特例法を制定して据え置きの措置をとってから、二〇一二年度まで物価の変動に関係なく過去の水準をずっと維持してきた。その結果、現在では本来より二・五%高い状態が続き、過去一二年間のかさ上げ分の累計が、なんと七兆五〇〇〇億円を超す金額にまで膨らんだ。

前民主党政権はさすがにこれを無視することができず、是正のための特例法を二〇一二年一一月に制定した。それによると、二〇一三年一〇月から一%、一四年四月から一%、一五年四月から〇・五%、それぞれ年金額を引き下げ、三年かけて二・五%の上乗せ分を解消することになっている。現在の自公政権も、もちろん引継ぐはずだ。しかし、それは元の水準に戻すだけであって、払い過ぎた七兆五〇〇〇億円が国に戻ってくるわけではない。

二つ目は、七〇~七四歳の医療費窓口負担軽減問題である。

医療費の法定窓口負担は、周知のとおり、就学前二割、六九歳まで三割、七〇~七四歳二割、七五歳以上一割が原則となっている。問題は、現在、このうちの七〇~七四歳の二割が一割に据え置かれていることである。七五歳以上の後期高齢者医療制度の創設にともない、二〇〇八年から二割に引き上げる予定であったものを、当時の自公政権が高齢者の反発を恐れて施行直前に一割に据え置いた経緯がある。

その結果、例えば二〇歳のフリーターが三割負担して、貯蓄で裕福な七〇歳の老人が一割の負担で免れている、というような不公平がまかり通っているのだ。

前民主党政権は、特例措置を廃止し、二〇一三年度に七〇歳に達する人から順次二割負担に戻すことを決めていたが、果たさずして政権が交代した。新自公政権は、若者より投票率の高い高齢者にかかわる改革は、この夏の参院選後まで先延ばしするとして実施を見送った。これには日本医師会も一役かっている。いわく、「負担増で患者減を警戒、重篤な病気を起しやすい年齢だ」という理由の由だ。本心から患者のことを心配して言っているのか、どうか、オレは知らない。

この結果、超法規の一割負担は二〇〇八年から六年目に入り、年間二、〇〇〇億円、六年間で一兆二〇〇〇億円の国費を使い込んだことになる。

以上の他にも、例えば介護ケア計画作りの有料化、高額所得者の介護利用料引き上げ、外来患者の一〇〇円負担を求める受診時定額負担等、膨張する医療費軽減策が検討されながら、未だに陽の目を見ないまま推移している。

このようにみてくると、ばらまき農政と非難される農業保護と、世代間格差の不公平を拡大する高齢者保護が、全く同じ類型でこの国に蹲踞し続けているといっても過言ではない。選挙という政争のための農家への過度な温室政策が、結局はわが国農業の弱体化を招いたと同じように、高齢者がぬるま湯の中で自立できないまま、甘えの構造から脱却できなくなることを恐れるのである。

正直に言うと、まさに超高齢者そのものであるオレたちのような老人は、特別に目をかけてくれる政治の温かい保護策をありがたく享受しておいたらどうだ、と密かに囁きかける魔性の声も聞こえる。あるいはまた、戦前、戦中の苦難を乗りこえ、戦後の復興を立派に成し遂げて、充分国家社会への貢献を果たしてきた世代なんだから、せめて老後の楽園くらいは、ほどほどに楽しんでも罰は当らないだろうという誘惑の声も聞こえる。

だが、最近のギリシャやイタリア、スペインなど南欧諸国の屈辱的な債務危機脱却の苦しみを、オレたちはまざまざとこの目でみてきた。決して対岸の火事ではない。本当はわが国も財政危機が目の前に迫っているのだ。そのような状況の中で、日本を支えるべき若者たちの希望を失わせ、ひいては少子化にさらなる拍車をかけることになっては、子や孫たちはもちろん、回りまわってオレたち自身が火の粉をかぶることにもなりかねないと思う。口幅ったい正義感を振り回すわけではないが、もう少し気の利いた言葉で言おう。「オレたちの世代は一生かけてそれなりの貢献を果たしてきたからこそ、〝最期の有終の美〟は一層大事にしたい・・」と。

――公助のまえに、まず自助、共助を――

昨年一〇一歳を迎えた聖路加病院の日野原重明先生が主宰する「新老人の会」は、「七五歳以上を後期高齢者などと呼ばないで、『新老人』と呼び、少し持病があろうと足腰が痛かろうと、勉強会やサークル活動、ボランティアを一緒にやろう」と呼びかけている。七五歳以上はシニア会員、六〇歳以上はジュニア会員、二〇歳以上はサポーター会員と呼び、一、愛し合おう 二、やったことのない新しいことを創めよう 三、耐えて、人の苦しみ、痛みを分かち合おうをスローガンにしている。一一年間に一万二千人の会員を集めたそうだ。

特定非営利活動法人「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」(NALC)は、元松下電器産業役員の高畑敬一郎氏が会長を務める。「時間預託」が活動の中心で、月一回の自宅訪問、週一回の電話、緊急時の連絡、病院への送迎、室内掃除の手伝いなどの奉仕時間を貯蓄して、自分の〝まさか〟に備える。平均年齢六九歳、会員三万人である。

京都に「SKYシニア大学」がある。学長は京都府知事、京都府立大学はじめ在京の大学、団体が講師を派遣し、社会貢献活動の手段、方法や、地球温暖化などの環

境問題、万葉集や古事記などの古典から考古学まで巾広く歴史を学び、終了後はその知識を活かしてボランティア活動に携わっているそうだ。因みにSは「健やか」、Kは「快適」、Yは「豊かな暮らし」を意味するという。

このように、多くの地域や団体が、高齢者の自立を促すためのいろいろな智恵や工夫を出し合っている。

最近、「六五歳以上＝高齢者」という概念を見直そうという気運が目立っている。そもそも六五歳以上を高齢者としたのは、一九五〇年代に国連が六五歳以上を統計で区分したのが始まりといわれている。一九五五年当時の日本の平均寿命は、男、六三・六〇歳、女、六七・七五歳であったため、おおむね平均寿命を超えた人を高齢者と位置づけたと思われる。しかし今や、平均寿命は男、七九・六四歳、女、八六・三九歳（二〇一〇年）となり、世界でトップクラスの長寿国である。

こうした変化を背景に、高齢者は「弱者」ではなく、可能な限り「支える側」に回り、現役世代の負担増大に歯止めをかけるべく「高齢社会対策大綱」を政府が一一年ぶりに改訂した。

今では、年齢だけで人の元気度を測れなくなったともいわれる。そこでは、何年生きたかでなく、あと何年生きられるかに着目する。例えば、一九五五年当時の日本人男性六五歳の平均余命は約一二年であったが、二〇一〇年では約一九年に延びた。年齢は同じでも二〇一〇年の六五歳男性の方が元気で活動的だと推定できる。逆に二〇一〇年時点で平均余命が一二年の男性の年齢は七四歳、つまり、一九五五年時点の六五歳と、二〇一〇年の七四歳は同程度に元気だと推定できるわけだ。これを「等価年齢高齢化率」と呼ぶ。ただし、加齢による衰えは個人差が大きいので高齢者に社会参加を一律には強制できない。平均寿命が延びた恩恵を享受できるよう高齢者が活躍できる適切な場所を確保する対策が必要だ、と国立社会保障・人口問題研究所では強調している。

たしかに、六五歳以上になって直ぐに悠悠自適の人はほとんどいなくなった。なんらかの形で仕事を継続している人が、われわれの周囲に一杯いる。ある調査によると、「六五歳以降も仕事をしたい」と希望する人は、男、五六・七%、女、五九・五%になるとしている。理由は「生活費のため」が半分以上を占めるが、「健康維持」とか「社会との繋がり」を求めている人が三分の一以上を占めており、〝若手高齢者〟の元気度を如実に示しているといえよう。

そこで、老人クラブの話に立ち戻ろう。ここまでみてきた高齢者像から考えると、今、団塊の世代が六〇歳や六五歳に達したからといって、単に「さあ、老人会に入りましょう」と誘いをかけても、振り向く人などほとんどいないのは当然のことといえる。彼らは、自分の生活のために、健康のために、社会との繋がりのために、これからも働きたいと言っているのだ。第二の人生の生き方に自助、自立を求めているのである。

われわれは、これまでの旧態依然とした老人会組織や活動についての発想を根本的に変えなければならない。

まず、組織化という名のもとに慣れ親しんだ「形式」「一律」「画一」「前例踏襲」を排し、「自主性」「主体性」「独自性」「創造性」「有意性」を重視し、なおかつその上に、「楽しさ」「快適さ」「面白さ」を加えた活動を充実しなければならない。一言でいえば「老人会の魅力」を高めることである。

そのためには、「公の助け」を借りない「自分で自分を助ける」、そして「仲間とともに助け合う」という基本に立ち戻らなければならない。「公助」を求める前に「自助」「共助」に徹することである。助成金と引き換えの〝オカミ〟からのお仕着せに甘んじるのではなく、高齢者自身の、高齢者自身による、高齢者相互のための、老人クラブ活動を自ら起していくことである。

かなり昔だが、作家の城山三郎が、作品の中で、旧国鉄総裁の石田礼助が吐いた「粗にして野だが卑にあらず」という名言を引用した。粗野であってもいいが、いたずらに物乞いするような卑しい心の持ち主であってはならない、そのくらいの矜持をもてということだ。なにかというと、すぐ補助金だの助成金だのと公金ねだりに走る旧弊に、高齢者は侵されてはいないだろうか。ひどい言い方だが、〝公助乞食〟に堕してはいないか、胸に手を当てて考えてみたい。

ある地方の政治家との対話集会で、子育て支援の恩恵を受ける若い母親が、「新しいことはやらなくていいから、国の借金減らしに使ってほしい」と発言したそうだ。本来、これは高齢者が言うべき言葉なのだ。若者こそ、国の将来のために子育て支援を甘んじて受けるべきなのだ。この若い母親の気概に学びたい。

また、アメリカのジョン・F・ケネディー大統領が、一九六一年の大統領就任式で、「国が、自分たちに何をしてくれるのかではなく、国に対して何を貢献できるかを考えよう！」と訴えたことを想起すべきであろう。

――早朝の道路掃除――

オレは、毎朝早く起きだして、家の周りの掃き掃除をしている。いや、自分の家だけでなく、隣りの家の前も、さらにその隣りの家の前も掃いている。近所の家を囲む道路がすっかりきれいになると嬉しくなる。老年は、他人から見ると、小さくて、くだらなくて、つまらなくて、レベルが低いと思われるようなことに、喜んで働くことこそが、楽しいし、気持がいい、と自己満足しているか

らだ。

「ヨッ！老人のカガミ！」などと、散歩の道すがら、気合をいれてくれる老人クラブ同人が通りがかると、なおさら励みになるというものだ。

そんな気持が、人から人へ、その人からまた次の人へと繋がっていって、老若男女、みんなを巻き込んで街全体に広がっていってほしい。

ささやかな願いを老人会活動に託して足掛け六年、精いっぱい努めてきたつもりだが、そろそろ退け時がきたようだ。「高齢者よ、大志を抱け！」と念じつつ、この仕事を次世代に引継いでいきたい。

おわり

（平成二五年一二月三日　記）

関門下関フグの旅

吉田忠雄

私は昭和31年に大学を出ると、日本化薬（株）に就職し、下関に近い当時の厚狭作業所に勤務した。最初の1年間はニトログリセリン製造現場に勤務し、ニトログリセリンの怖さを知った。次の数年間はジニトロトルエンの製造現場に係員として勤務した。ニトログリセリンとジニトロトルエンでは、危険性に天と地ほどの違いがある。ニトログリセリンの職場では従来の方法を忠実に踏襲し、余計なことはしないように心掛けた。一方ジニトロトルエンの職場では、作業員の健康に貢献するような作業方法の改善に努めた。

ニトログリセリンやジニトロトルエンの製造方法は、ニトロ化合物を作る反応なのでニトロ化反応と呼ばれる。私の恩師の東大の難波先生はこの反応に興味を持っておられたので、頻繁に文通をした。

数年厚狭に勤めると私の親が心配して東京に帰ってく

平成25年12月に下関で開かれた火薬学会秋季研究発表会に親友の米田さんと橋爪さんと共に参加した。私はもう研究生活からは足を洗っているが、後輩の皆さんの研究を興味深く拝聴した。

下関はおいしいフグで有名である。せっかくおいしいフグで有名な下関に来たのでフグを堪能して帰ってきた。フグは身の引き締まった魚である。フグの刺身は食べやすいようにうすくそいで直径60センチほどの大きな赤絵のさらに並べて食卓に出される。フグは半透明になり、皿の模様が透けて見える。さすがフグの地元下関である。フグが隙間なく敷き詰められたこの大皿が一人に各一枚あてがわれる。

下関にいた3日間は、夜はフグ尽くしであった。フグの刺身、フグの鰭酒、フグの煮物、などなど、どれも旨かった。ただ、フグの卵は私の口には合わなかった。

るように言ってきた。日本化薬も辞められては困るということで、東京に転勤になった。しかし従業員のいうままではまずいと思ったのか、1年間京都大学化学研究所に派遣ということになった。ここで約1年を過ごした。

昭和38年に難波先生が東大の教授に昇進された。そして私を東大に招いてくださった。2、3の曲折があったが、私は東大に講師として勤務することになった。大学の教授または助教授であるためには博士号を持つことが必要である。博士号はふつう5年間の博士課程に相当する5年間を東大の難波研究室でニトロ化反応の研究を行い、学位を得て、助教授になった。私はその後東大教授、同名誉教授、法政大学教授、足利工業大学学長を経て教育者人生を終わった。

私の教育者人生は終わったが、火薬の研究に携わったおかげで、火薬学会前事務局長の米田さんと現事務局長の橋爪さんとのつきあいが残った。おかげで今回のフグの旅にも参加することができた。

つれづれの源氏物語

第一回　問題意識と概観

小田紘一郎

はじめに

源氏物語は、今から一千年前の平安朝時代に紫式部という女性によって書かれた長編物語である。原文は四〇〇字詰め原稿用紙でおよそ二三〇〇枚程、訳本も瀬戸内寂聴によると文庫本にして一〇冊という膨大なものである。

登場人物も五〇〇人近く、取り扱われている期間も実に七五年の長きに渡っている。四代の帝の御世が語られており、それは桐壺帝（譲位した巻は葵の巻）朱雀帝（澪標の巻）、冷泉帝（若菜下の巻）、今上帝であり　史実では醍醐、村上王朝にたとへられた歴史性を持っている。

内容は、よく主人公光源氏を中心とした恋愛小説だと言われているが、単にそれのみではなく、人生の諸相やすべての人間関係（男と女、男と男、女と女）が語られている。夫婦関係、親子関係も多く語られている。又、摂関政治の実態を描いている政治小説であるとも考えられる他、経済小説、社会小説、心理小説等であるとも言える幅広いものとなっている。

そこには、栄古盛衰や無常の人生が語られ、人生の意義、人間として持つべき価値観が繰られている。当時の政治的、経済的、社会的諸事情を背景に物語は展開されており、このような視点を持つことは極めて重要なことである。

そこに生きる人々の喜びと悲しみや苦悩が語られており、心理描写は素晴らしい。又、自然描写も細かで優れており、まるで俳諧歳時記のようで、読む楽しみの大きな一つとなっている。

評論（小説論、教育論、女性論、音楽論、春秋優劣論等）も多く含まれている。又、和歌文学でもあり、七九五首の歌には、自然と人間の心が一致した優れたものが多く、読む我々の心に響く。

日本が世界に誇る文化遺産であり、後々の文学や芸術のみならず我々の美意識や日常生活にも深い影響を与えてきている。

作者が女性であるということは重要なことである。その作者紫式部について一言触れておけば、宮廷の女房（中宮定子の教育係）であり、結婚生活三年で未亡人としての人生を送った。時の権力者、藤原道長との接点が多かったと言われている。なお中流貴族の出身である。

これらの経歴が源氏物語を書く動機や背景にあり、物語の中にある考えや思想となっていることは言うまでもない。作者の人生と物語とが重なり合っているのである。

一、私と源氏物語

源氏物語に最初に接したのは、今からもう五〇年以上前の高校時代であった。三学年の古文の授業で「いずれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひ結いける中に…」という出だしの文章を読まされ、文章が以下長々と続いており、なかなか難しいものであるという印象であった。この冒頭の文の他次いで桐壺更衣の死を天皇がいたむ「野分だちてにわかに肌寒き夕暮のほど…」等名文であって一生懸命朗読し暗記した。若紫の巻での美少女（若紫）の発見や賢木の巻における光源氏と六条御息所の別れ、あるいは須磨の巻での一人侘び住い等々を教科書で断片的に読んだ記憶がある。全体として何が書かれているか又作者が何を言わんとするか等はよくわからなかったが、何やら男と女の不思議なあやにくの世界があるぞと若い心に感じた。

高校時代は、いわば受験の書としてでありいつか原文で読んで見たいという考えを持った。

大学時代にすっかり忘れていたこの物語に対する思いは、役所に入って日常の仕事に追われ、空虚な忙がしい日々の中で心がかわき切った時何かそれを癒すものはないかと考え、王朝文学としてのみやびな世界だと思い、源氏物語に改めて接し、音楽（主にベートーヴェン）や山登り、旅、スポーツ等とともに生活の一部にすえたのであった。その時は原文は勿論読めず、もっぱら与謝野晶子訳の角川文庫版であったが、ここでも全体の大枠や物語の意味等はわからなかった。

その頃、まだ独身であり今の妻ではない女性と交際していたが、そのことが物語に対する関心をより強めた。「手につみていつしかも見ん紫の根に通いける野辺の若草」（若菜の巻）という歌を口にした若い女性は才女のように思えた。見るということは、古典語では結婚する

ということでありそれへの意思表示と受けとった。青春時代のなつかしい、しかし、にがい経験、思い出である。

役所生活も二〇年程経ち、地方勤務が続き、単身赴任であるので夜のつれづれのなぐさめにと思い岩波文庫の原文や円地文子の訳本は必ず荷物に入れ持ち歩き、宿舎に、帰ると一人ひろげて読んだりした。

しかし、この辺りでも、全体像はなかなかつかめなかった。源氏物語は大きく深いのである。検査入院した時、NHKのラジオ放送で全巻の講読をしており（講師鈴木一雄氏）その一部を聞いたりした。その放送が後になって二五〇巻（一巻一・五時間）という膨大なテープとなり市販され、かなり高価ではあったが、何ということなく購入し本棚に置いておいた。

これを本格的に聴き始めたのは、今から一〇年前であり、その契機となったのは人工透析を始めたからであった。

透析は、一日四―五時間かかり一日おきに実施しなければならず、ただ寝ているだけであるのでこのテープを聞くことは、絶好の源氏物語に接する機会となり、くりかえしくりかえし聞いていると段々すじも内容も理解できるようになってきた。

原文のみをカットしてテープにして通しで聴いたり、耳で原文を聞きながら目では訳本を追うといったやり方は実に物語を理解する為の有効な手段であった。そして朝早く起きて、あるいは深夜において、項目別にメモをつくったりしてより理解しようと努めてきた。

又、人に話すのは大変勉強になるのでその頃から高校の同窓会や放送大学、市民大学等から講師要請をたまにではあるが引受けている。カルチャーセンター等で九回連続講義したのは、物語がよく整理できて大変勉強になった。

退職して一〇年余、自分の好きなことに十分な時間がとれるので、この源氏物語とワーグナーのオペラ・楽園は、現在の生活の大きな部分を占めている。

二、源氏物語を考える（問題意識）

源氏物語を本格的に読み出してかれこれ一〇年近くなるが、様々な疑問点、考えさせられる事項に出会っている。そのような問題意識をまず挙げて見れば、次のようなものがある。

（一）恋愛小説なのか。瀬戸内訳の源氏物語の巻末の解説（源氏物語のしおり）によれば「源氏物語は日本が世界に誇る文化遺産として筆頭に挙げてもいい傑作長編の大恋愛小説である」と書いている。前半は、その通りで良しとしても後半の記述のように狭く規定してしまって良いものか。もっと幅広い内容を内包していると考えて読むべきではないか。

（二）主人公は誰なのか、何だのかという点である。当然のことながら、光源氏の一生を書いているので、光源氏だとも考えられるが、多くの女性達が登場し喜びと悲しみ、苦悩の人生が描かれているので女性達だとの見方もあろう。その際の主人公は紫の上であろうか、更に七五年の時の流れが書かれているので時間だという考え等もあるが、その辺りをどのように理解すべきか。あえて、一つにしぼらなくてもよいではないか。

（三）それに関連して光源氏とはどういう男なのか。魅力ある人間であるのか女性にほんとうにもてたのだろうか。又、女性達は光源氏をどのように見て交っていたのか。

（四）多くの人物の死を描いているが、光源氏の死が具体的に書かれていない（雲隠という巻でその死は暗示されているのだが）のは何故か。

（五）登場する多くの女性達は、概して苦悩した人生を送っているが何故なのか。それは当時の女性達にとっては不幸な人生であったのか、又、幸福とは何なのか。この不幸、幸福の問題は、それぞれの人の価値観によって違うのである。

（六）女性を様々に分類して、例えば上流と中流と言った階層、資質、美人・不美人、子供のあるなし考え方・生き方への相違等がこと細かに描かれて、人間造型がなされているが、出家した女性とそうでない女性が、結果として出てくるのは、何か基準があるのか、又それらを作者が書き分ける意味は何なのか。それを考える意味はあるのか。

（七）結局のところ、男と女との違いは何なのか。確かなる対等の愛は存在したのか。存在しないように思えるのであるがそのように見た場合はその原因は何故なのか。ワーグナーの諸作品の愛とどこが根本的に異なるのか。

（八）物語は、光源氏の栄華の頂点を描いた藤裏葉の巻（第三三巻・いわゆる第一部）で終らず、何故、第二部として若菜以降更には、第三部として光源氏の死以降の世界を描いたのか。源氏物語であれば、光源氏の死を書き終えた段階で終っても良かったのではないか。

（九）これに関連して、第三部の大半はいわゆる宇治十帖として書かれているが、それは如何なる意味を持っているのか。

（一〇）作者はこの物語で何を言いたかったのか。

（十一）この物語の魅力はどこにあるのか。何故書かれてから千年も経って今も読まれ続けているのか。

（十二）我々は、何故この物語を読むのか、これから何を学ぶべきなのか。

以上、細かい事項は別としてもこのような疑問点・問題意識を持っているものである。

これらを解き、知る為にに重要な事は、

①くりかえし、くりかえし読むこと

②その際には考えながら、問題意識を持って読むこと

③好きなところから読むこと（途中であきて放棄してしまわない為）

④なるべく原文に目を通す（そして声を出して読む）

⑤関連書を同時に読む

⑥そして全体の流れ、大枠を整理しつつ、細部に入っていくこと（最初からあまり細部にはとらわれないこと）

特に人脈、人間関係の整理をしっかり把握しておくこと。

勉強の為、街で行われているカルチャーセンターや講演会に出ていくことが多いが、いきなりある個所の原文をとり出し、解釈していくやり方はなんとしても納得出来ない。これでは、全体がつかめないと常々思っている。我には文法を読むのではなく人生を読むべきである。

前記の問題意識を持ちつつ、つけ加えれば、物語の主題の大きなテーマに、不義密通がある。

青年時代の光源氏と藤壺の関係、晩年に入ると柏木と女三の宮の密事であるが、それらのもたらす物語への影響等をどのように考え整理すべきかはなかなか難しい問題であるが物語を大きく動かしており、読むカギになるように思われる。

どうして、何故、現在の道徳規準から逸脱しているとと見えるものを主要テーマにした物語が名作と呼ばれているのか。

三、物語を読む際の視点

源氏物語が作られてから千年、様々な人達によって様々な視点に立って、様々な解釈がなされてきている。

本稿を書くに当たり筆者が視点とする主な点には次のような事がある。

第一に、重ね合せということである。一つの事柄にも様々な意味、多重性がある。表と裏、本音と建前もあり、それらをよく考えながら読むことが重要である。

例えば、一～二例を挙げてみれば、第一巻桐壺の巻における帝と更衣の純愛の背後にある政治的な、経済的な、社会的な諸事情等であって、そのからみ具合である。

又、中年期に玉鬘十帖（玉鬘～真木柱）があるがそこには

①光源氏の栄華（六条院の造営と支配）

②中年光源氏と若い女性（玉鬘）との関係、推移

③玉鬘の生き方（男性からの恋への対応、結婚問題）

この問題は、現在でも管理社会（源氏物語で言えば、光源氏の支配する六条院世界）に生きる多くの真面目な女性達に大きな楽しみと教えを示唆するであろう。源氏物語こそ、若い女性がもっともっと読むべき書なのであ

る。

④背景として春夏秋冬の自然の移ろい

⑤和歌文学としての魅力等々が重層的となっている。

第二は、経済的視点で見ることの重要性である。源氏物語は、実にリアリティに富んだ小説であり、従来の竹取物語等と大きく違う一つの背景に経済問題を挙げなければならない。経済的なものが、物語の根底に流れ意識されていることである。

いつの時代にも人間生存の基盤として経済がある。又、政治、社会の存立の基礎構造には経済がある。摂関政治の権力争いの中にも、男と女の恋愛の中にも根っこには経済があったであろう。後々でのべるが、女三の宮は、さっさと出家し、紫の上が結局出家できなかった裏にはつきつめてみればこの経済の問題（生活）もあったであろう。当初登場する女性達の中には、桐壺更衣や空蝉、夕顔のような貧乏な女性が多かった。生きる際、経済は全く重要な問題である。勿論、経済だけあれば良いという訳でなく精神（人間の心）の問題も重要であるのだが。

更に昔、学生時代に学んだ経済学的方法論の活用である。源氏物語は人生と人間の分析をしていると考えてよいが、マルクスの資本論は、その存立の基盤である経済を分析する有効な手段（道具）である。資本主義経済も歴史を経ながら変化している訳で、初期の重商主義、中期の自由主義、後期の帝国主義として分析されているが、人間も青年時代、中年時代、晩年時代がある訳で、光源氏の人生もまた紫の上の人生もそのように分析して見ていく必要があるし、そのことは大きな意味がある。ベートーヴェンの音楽もこのように分けて聴いていくとよく理解できる。中年時代、いわゆる傑作の森と言われている優れた交響曲や協奏曲が晩年時代は、弦楽四重奏（十二音―十六音）が主になっていく。

古典を読む際に、経済学的方法論の一つ（原理論・段階論・現状分析）の考えを持ってすれば、古典は原理論に相当するもので、その後の段階（歴史）を経て現代がある訳である。このことは、物語を理解する際極めて重要な視点であると筆者には考えられる。ストレートに古典を現在に適用することは無理だと思われる。

第三は、源氏物語以外の分野との比較である。異なる分野の「ものさし」で源氏物語を見ていくことである。これらは、いずれも人生と人間を考察しているという点では同じであろう。以外の物とは、音楽と他の文学である。音楽の中にもクラッシック音楽や演歌があるが、前者では、ワーグナーの諸作品なかんずく「トルスタンとイゾルデ」や「ニューベルングの指環」と比べて見ると面白いと思って、最近では、両者を比較しながら楽しみ考えている。

例えば権力（政治、経済）と人間（愛）の問題等共通であるが愛の形態においてワーグナーの音楽には愛の陶酔、讃歌、二重奏等多く出てくるが源氏物語においてそのようなことがあるのか、見い出されるか。源氏物語にほんとうの愛というものがあるのか。平安時代の女性達（特に源氏物語に登場する）は愛（この際愛ということの意味の設定が重要である）に陶酔していたであろうかとも考えてみる。

このような比較により時代の差、西洋と東洋、男と女等の違いがわかるのではないか。仲々面白い重要な事が発見出来るのではないか。何故、源氏物語の女性達は、一部を除き多くの場合愛に陶酔できなかったのか。不完全燃焼とも言える愛なのは何故なのか。

又、演歌と源氏物語とも同じような事がいっぱいある。千年前も今も人間の悩みや喜び等は同じかもしれない。今後記述していく中で両者にいくつかの似たような場面があることも見てみたい。

そして、文学でも違う作品、それは何でも良いが、例えば、平家物語、現代では井上靖、又外国の優れた文学（戦争と平和等）と比べながら読むと面白い。このような問題意識を持つといやおうなしにこれらの作品に接しなければならず、そこに大きな意義がある。又、これら文学作品をくらべるのは、歴史を学ぶことにもなる。源氏物語と平家物語は、平安と鎌倉の時代の違いが当然ではあるが見えて面白い。

第四は、当り前の事ながら、自分の人生や現在の時代との比較である。過日、最近源氏物語を訳された著名な作家の講演を聞きにいったが、仲々面白く参考になった。会場でその本を買った人々に訳者のサイン入りの色紙が贈られた。

それには、「源氏物語を読む、人生を読む」と記されていた。全くその通りだとかねがね思っていたので、大変嬉しくなって帰ってきて書斎にかかげている。

記した通り、権力対人間の問題は、源氏物語の第一巻桐壺の巻でワーグナーの作品（主に大作であるニーベルングの指環）に先立つこと八〇〇年も前に問題提起をしているのであって、その点について最近大変な興味と感動を持っている。第二回目で詳しく記してみたいと思っている。

そういう点で、源氏物語の主人公光源氏が青年時代より中年時代に到り、政治家（権力者）として栄華栄達をとげていく（官位が段々と上っていく、いわゆる出世していく）わけであるが、人間（精神構造）とどういう係りを持っていくのか又、若い頃持った愛というものが心の中でどのように変化していったのか、又、女性達の目にはそれがどのように写っていったのか、それが中年、晩年の恋にどのような影を落していったのか、その辺りをじっくり読んで考えて見たいと思っている。そして、同じく主人公と見なしても良い多くの女性達の人生の歩みをも同じようにじっくり迫っていくことは大きな楽し

みである。

それらは、次回以降この問題意識を持って読み、記していきたい大きなテーマとなるであろう。

四、物語を構成する巻々と分類

源氏物語は、五四巻（帖）から成っている。四二番目に該当する雲隠の巻は、巻名のみ存在し内容（文章）のないものであるが、それを入れると五五巻である。

それらは、次の通りである。（巻は省略）

桐壺、帚木、空蝉、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石、澪標、蓬生、関屋、絵合、松風、薄雲、朝顔、乙女、玉鬘、初音、胡蝶、蛍、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱、梅ヶ枝、藤裏葉、若菜上、若菜下、柏木、横笛、鈴虫、夕霧、御法、幻、（雲隠）匂宮、紅梅、竹河、橋姫、椎本、総角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、蜻蛉、手習、夢の浮橋、以上である。

それぞれの巻々が独立しつつ、相互に関連を持っている。植物の名前に由来する巻々、美しい巻名を持ったのが多く存在しているが、これらに分けられていることは、長編小説を非常に読み易いものにしている。トルストイの戦争と平和等はそれがないためなか〳〵読破するのが容易ではない。

これに関し、古来より様々な分類がなされてきているが、まず、それを整理してみれば、次のようなものがある。

（一）正編、続編

光源氏の生涯を描いたのが桐壺の巻より幻の巻までの四一巻であり、正編と呼ばれ期間はおよそ五四年である。匂宮より夢の浮橋までの一三巻は、続編と呼ばれ光源氏亡き後の世界でありおよそ二〇年余である。

（二）第一～第三部

次に、古来から三部立てで考えられてきており現在も主流を占めている。

①第一部。桐壺の巻より藤の裏葉までの三三巻であり光源氏の栄華栄耀を描いた約四〇年間

②第二部。若菜上巻より幻の巻までの八巻で主に光源氏の人生の危機、衰退、苦悩等が描かれている約一四年間。幻の巻が終わって次の匂宮の巻まで八年間の空白がある。

③第三部。匂宮の巻より最後の夢の浮橋までの一三巻は光源氏亡き後の世界が描かれており、およそ八年位ということになろう。

（三）細部

源氏物語は、このように五四帖という長い巻々によって構成されているので、この（一）、（二）の他に次のような細かい分類もなされている。

①帚木三帖。第二巻の帚木の巻より空蝉の巻、夕顔の巻の三帖で、雨夜の品定めと中の品の女の物語

②玉鬘十帖。玉鬘の巻より真木柱の巻までの一〇帖、前記のように重ね合せの内容となっており実に魅力的な巻々である。

③匂宮三帖。匂宮の巻、紅梅の巻、竹河の巻であるが、光源氏亡き後のそれぞれの家族（夕霧一家、頭中将一家、髭黒一家）の盛衰を描いたもの。

④宇治十帖。橋姫の巻より夢の浮橋までの一〇巻で京都を離れ宇治が主な舞台になっており、若者達の恋愛絵巻である。

面白いことに、これらの名称を呼ぶ時、巻と言わないで古来から帖と呼ばれていることである。

（四）二つの系列（桐壺系と帚木系）

更に源氏物語を読んでいくと第一巻の桐壺の巻と第二巻の帚木の巻とが文章や考え方等で直接つながらないため、前記（二）の①のいわゆる第一部の世界を二つの系統、即ち桐壺系（紫の上系）、と帚木系（玉鬘系）に分けて考えられることが多い。そうした方がより物語を読み易くするというのである。桐壺系は一七巻、帚木系は一六巻であり、後者を列挙すれば、帚木、空蝉、夕顔、末摘花、蓬生、関屋、五鬘、初音、胡蝶、蛍、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱であり、中の品の女達の物語と光源氏の栄華の象徴である六条院世界が見事な自然描写（春夏秋冬）の美しさと共に語られている。

更に言えば、桐壺系が本流であって上流階級を中心とした政治的問題、王権の物語が主であって、帚木系はいわば支流（傍流）とでも言うべきもので、中流女性の生き方、苦悩、経済的問題等が描かれており、これがからみあって物語を構成しており、物語を幅広く奥の深いものにしている。社会的条件（身分差、男女差、重婚制度）や歴史的問題は共通して両系統の底辺に流れているといえよう。

（五）青・中・晩年期、亡き後

私が好んで分類し、読んでいるのは光源氏の生涯を次のような基準で考えることである。これは、非常に物語を読み易くし、人間と人生とを理解する上で有効のように思える。

①少、青年期。桐壺の巻より明石の巻までの一三巻であり、これらは輝しくかつ悲しい青年時代の恋愛遍歴と須磨流謫の人生が描かれている。

②中年期。澪標の巻より藤の裏葉の巻までの二〇巻政界に復帰し権力者として最高位までのぼりつめる政治家光源氏の人生

③晩年期。若菜上の巻より幻の巻までの八巻で中年期と対照的な苦悩に満ちた人生

④亡き後。匂宮の巻より夢の浮橋までの一三巻で光源氏亡き後の次世代の子供達による恋愛物語。

勿論、人間は肉体と精神とから成り立っているのでこれを基準にすると青年期は肉体（肉欲）＞精神、中年期は肉体＝精神、晩年期は肉体＜精神ということになり、その人の人生の生き方、恋愛等への対処に様々な違いが出てくるように思われる。これは光源氏等の男にのみならず、物語に登場する多くの女性にも当てはまることのように思え、源氏物語が優れて人間解剖書であるといわれる由縁であろう。

又、源氏物語は大変長い書であるので、最初の桐壺の巻より読んでいって須磨、明石の巻まで行くとあきてしまって物語を読んだと思う人が昔から多くいるらしく、そのことを昔から須磨帰り等と言っている。

物語の深いところは、晩年期の描写にあって自分の人生と重ね合せながら読むと益々興味がわくところである。光源氏や紫の上の人生回顧（若菜の下巻、夕霧の巻）には興味をそそられる。そしてそれらの意味を十分考えないで読むと源氏読みの源氏知らずと言うことになってしまう。

世界文学多しと言えどもこの晩年（老年）を語ったものはそう多くなく源氏物語はその最も優れたものであること（語り部、村山リュウ氏の講演より）も指摘されており、文章は難しくなり問題も複雑になるけれども、是非最後まで全体を通して読みたいものである。

（七）宇治十帖について一言つけ加えておけば、全巻五四帖のうち一〇巻を占めるのであるが、文章から言ったら全体のおよそ1／3位になるであろう長編である。前にも記した通りなぜ光源氏が死んだ後の世界をも源氏物語として描いたのかは興味あることであるが、青年の男女の恋愛描写、心理描写にすぐれている宇治十帖をじっくり読むことで回答が得られよう。

主な登場人物は、男として薫、匂宮、女としては大君、中君、浮舟の三姉妹といった計五人が中心人物であり、それらが折りなす恋愛小説であって、それは三角関係という型をとる。京都という政治の中心から離れた宇治へ主な舞台を持っていったことや更に身分等をも考えないで純粋の恋の世界を描こうとした点で、前記の経済学的方法論で見てみると不純物をとり除き純粋な人間の営みとして見たかったのであろうが、（井上靖の小説にはこの恋愛純粋培養的要素が多く見い出され私は、この宇治十帖との共通点を見る思いで読んでいる）最後はどのようになったのであろうか。人生と人間の諸相を見る思いである。大君は、結婚拒否の理想的な生き方、中君は結婚し現実的な生き方、浮舟は二人の男性に同時に愛され（薫・精神的愛、匂宮・肉欲的愛）苦悩し最後は出家ということで人間の救済が描かれている。

又、源氏物語は、これらの順序通り書かれたのではな

く、桐壺系が書かれ後に帚木系が追加されたとか（桐壺系に出るくる人物は、光源氏を除いて帚木系に出てこないことも指摘されている）、桐壺系でも最初は若菜の巻から書き始められたと、いや須磨の巻からだとかの説が古来からなされている。

作者についても、紫式部がすべてを書いたのではなく、若菜上以降は娘の大式三位が書いたとか、宇治十帖も別人によって書かれたとか、あるいは紫式部が編集長となり工房のようなものを作って分担執筆したものであるとかの諸説がある。

物語を読む際ここではそれらは度外視して一貫した物語として読んでいくことが重要であるように思われる。

五、物語の流れ。それを支えるベクトル等

（一）対照

物事が対比して述べられている。

既に前にも記した、人間と人生を構成しているのは生と死、男と女、肉体と精神から成っているが、喜びと悲しみ、明るさと暗さ、動と静、論理と情趣等々対照的（対比）なものは、挙げれば切りがない。これらの対照は、構成する二つの系統（桐壺系、帚木系）のみならず多くの巻に（例えば空蝉と夕顔の巻、葵と賢木の巻、須磨と明石の巻等に数多く）表われているし、登場人物も例えば光源氏と頭中将、夕霧と柏木、紫の上と明石の君を始めとする多くの女性達にその性格、資質、生き様等が対比されて描写されている。これは、いわば一対一であるが、次の一対二という関係を見ることは源氏物語を読み解く大きくカギの一つである。

（二）一対二

主に人間関係において表われている。光源氏（男一）に対し紫の上、明石の君二という関係をはじめ多くの場合にこの一対二という関係がある。（もっとも光源氏の場合は一対二というより後者は三であったり五であったりするのであるが。）

又、物語には女一に対して男二という関係も数多く見受けられる。

例を挙げてみれば、藤壺、六条御息所、朧月夜、空蝉、女三の宮、浮舟等がそうであり、面白く興味あることにこれらの女性は、すべて出家をしている。そしてこの一対二というのは、女側からみて三角関係を意味している。一対一が均衡がとれ安定的であるのに対し、一対二は不均衡で不安定である。しかし、このことが物語を動かしていく大きなベクトル（力）になっていることは興味ある事実である。物語の面白さはこの不均衡、不調和の中に存する。

（三）上向と下向

この場合、盛衰ということになるが、例えば第一部の

世界は大きく全体としてみてみれば盛という上向過程であり、第二部は、衰（すい）といえるであろう。勿論、このことは対照という点からも読める。光源氏の生涯にとってみても第一部の前半（青年期）までででも葵の巻を境に盛（輝かしい恋愛）から衰に（妻との死別、愛人との別れ、須磨流謫等）運勢が傾いている。又、中年以降の朝日の登るような勢いで出世し、上向し頂点に達する藤裏葉の巻以降（すなわち若菜以降）人生は全く停滞し、下向をたどっているのである。

このことは光源氏のみならず多くの登場する人々の人生に対して言えることであるが、勿論、下向から上向に向う人々もいる。例えば、どちらかと言えば、明石の君や玉鬘といった中流（中の品の女）に多いように思え、逆の方向をとるのを上流の女達と見るのは、あまりにも単純すぎるであろうか。

（四）外面から内面へ

源氏物語を全体として読んでいてこの外面（物資・政治的、経済的、社会的条件）から巻を追うごとに内面化（精神、心）していることが感じられる。

特に、若菜上以降は、人間の心の問題、光源氏、紫の上、女三の宮等の苦悩をするどく描いている。第一部の玉鬘十帖が六条院の栄華を外側から書いているのに対し、第二部の若菜上以降は、それを内側（内実）としていている（鈴木一雄氏）。宇治十帖になると出来るだけ外的要因を少くして内的な描写となっている（心理描写が一段とさえてくる）ように感じられる。

音楽ではベートーヴェンはこれに当たりワーグナーは逆に内から外へ（タンホイザやトリスタンとイゾルデは内の問題、指輪は外の問題）向っているといえよう。

（五）拡大化

物語が進むにつれて取り扱う問題は拡大、重層化し、登場人物も次世代、三世代へと幅を広げている。中年期には、集中的に多くの評価（教育論、物語論等）が登場する。支流が多く集まり本流へそそぎ最後は海に流れるのと同じようである。

（六）明から暗へ

概して言えば、若菜上を境に物語は明から暗への大きな流れがある。前半はみやびの世界、後半はわび、さびの世界などとも言われている。

（七）継続性、意外性、連続性

例えば、夕顔が死んでも末摘花と夕顔の娘玉鬘に話しは継続されていく。又六条御息所は秋好中宮に……玉鬘が多くの求婚者の誰と結婚すると気をもんでいるうちに意外や意外、最もきらいだった髭黒の大将と結婚（真木柱の巻）したこと等は意外性の最もなもので問題を面白いものにしている。又、恋愛や不義密通等もくりかえし出されているが（連続性）、結果は異なるので注意して読むことが大事である。

（八）パラドックス

大きな流れというより基本的な事項であるが、人生のパラドックス（逆説・皮肉・不条理といっていいかもしれない）が数多く記述されている。

例えば①帝が更衣を愛したがゆえに死に追いやられた（桐壺の巻）

②かわいい娘（三の宮）を幸せにしたいと思ってやった（父朱雀院）ことが娘の不幸になった（出家してしまった、柏木の巻）

③栄華を極めたが故に衰退が始まり苦悩が強まった光源氏の人生

④不幸であったが故（娘を養女として奪われる）に幸福になった（国母、明石一族の再興）明石の上、反対は紫の上か。

⑤光源氏の人生も考えてみればこれが見い出される。

まだまだ論点や問題点や疑問点が数多くあるがそれらを見つけながら読むことは大変勉強になるし楽しいことでもある。以降、気がついたら触れていきたい。

源氏物語は、大河にしばしばたとへられる。古来からの源氏物語注釈書には、例えば、「河海抄」（四辻善成著。室町時代）や「細流抄」（三条西実隆著　室町時代）、「岷江入楚」（中院通勝　細川幽斉共著）等は、河の流れにたとへられた題名がつけられている。

その他の有名な注釈書としては「奥入」（藤原定家著　鎌倉時代）、「花鳥余情」（一条兼良著　室町時代）「湖月抄」（北村季吟著　江戸時代）「玉の小櫛」（本居宣長　江戸時代）等がある。多くの時代の巨匠たちが源氏物語にいどんでいる。

これらの書物は一般の人は湖月抄を除きなかなか入手しにくく、入手できたとしてもとても難解であろう。そういう意味で、島内景二著「源氏物語ものがたり」（新潮社）の解説は、大変参考にさせていただいている。又、現在、本居宣長の「紫文要領」（岩波文庫）を読んでいる。更に小林秀雄氏の著作「本居宣長」や講演等のものも参考にしているが、氏特有の難かしさを感じている。

六、源氏物語の魅力

一〇年近く本格的に源氏物語を読んだと自分では思っているが、すじは別としてもそう簡単にその本質、真意等はわかるものではない。最近益々内容が難かしいものだと感じているが、現時点で私が源氏物語の魅力について整理してみれば次のような点が挙げられる。

第一は、物語の内容の多様さ、深さである。恋愛小説だと通俗的に言われているが、人生と人間のすべてが語られていることである。

人生の栄枯盛衰、変遷が語られ、すべての人間関係

(男と女、男と男、女と女)が語られている。男と女の関係の中には、恋愛は勿論のことであるが夫婦、親子(父と娘、母と娘)、友人、兄姉・妹等)もあり最近では随所に幾組もの夫婦関係が出てくるか面白い。又、父と娘の関係も物語には様々あり、「指輪」の父ヴォータンと娘ブリュニヒルデの関係とも良く似ていて興味がわく。違う点は、源氏物語の場合、娘の幸というより一門の繁栄のため、娘を入内させたいという父親の野心である(結果として、そのことにより娘も幸せになるという側面も否定できない)。

源氏物語は、人間の解剖書、人生の百貨店であると言われるとなるほどだと思う。

源氏物語は、優れた歴史の書でもある。優れた小説は時代を描き分析し、評価している。又新しい時代を予測している。現在起きている様々な問題も千年前に提起され考えられている。千年前に熱望していたことが、ようやく今日実りつつあるものもあり、まだ実現していないものもある。それらは何なのか。

第二は、物語の面白さである。一見、面白く小説(物語)であっても、その裏には深い哲学、思想、考え方があるようであって、そこを理解するのがなかなか難かしい。よくわからず難かしいことがあるらしいからそれは何だろうかと余計に引き込まれる。又物語は、情趣的ではあるが、極めて論理的である。

第三に、物語の中に、人生や人間への教示的、道徳的、人間の生き方、価値観等が多く含まれており、大河小説、教養小説としての意味を持っていることである。

第四は、前記と当然のことながらからむが、人間造型のすばらしさである。

多くの男と女が登場するがどの方も個性的である。①それぞれ違う個性を持っていること②男と女とは違うこと③それぞれの人間は多面的、様々の面、複雑であること④それらの人達が係り合いながら生きていること等が指摘できる。

この人間造型は、作者自身が物語の中で描いているのだが、対照的に対比しながら記述されていることも多い。

人間の心なかんずく女性の心を描いて優れている。又、光源氏や子供の夕霧の男の目も通しても描かれているが、そのことが人間(特に女性)を深く分析することとなっている。源氏の女性評価(朝顔の巻や若菜下の巻)も面白い。女性は、しばしば花にたとえられる(紫の上・桜、明石の上・梅、花散里・橘、その他)。総じて、男と女の心理描写は素晴らしいと思う。なお、平家物語においては、女性が十分描かれていなく、併せ経済的問題の意識も乏しいといわれている。

第五は、自然描写の素晴らしさである。この物語を読む楽しみの大きなものの一つに自然描写がある。春夏秋

冬の日本の季節の移ろいは勿論のこと、夏といっても初夏と盛夏と晩夏があり、晩夏は初秋でもある。

巻々の物語の背景には、これら自然があり自然と人間とが一体的に描かれているいわゆる景情一致である。総じて言えば、青年期の巻には、春や夏、中年期(特に玉鬘十帖)は春夏秋冬と全盤的、晩年期には、秋特に晩秋(夕霧の巻)、宇治十帖は、冬が多いように思われる。勿論、それぞれの欄に四季があり、出会いは春、別れは秋というようになっているが、作者は冬が一番好きではなかったか。朝顔の巻で冬の月と雪をめでている他、藤壺の出家(賢木の巻)、明石の君の子別れ(薄雲の巻)女三の宮の興入(若菜上巻)大君の死(総角の巻)匂宮と浮舟の恋・密会(浮舟の巻)等重要場面の借景としている。子別れは、何度読んでも涙なくしては前に進めないもので母親の心の荒涼さ淋しさやるせなさを冬に託している。又、出家は、黒灰色の現世から純白な世界への船出を祝っているようにも受けとられる。

第六に評論が多く出てくる。例えば、帚木の巻では女性論(男性にとって理想の女性)、薄雲の巻での春秋優劣論、その他小女、若菜下巻にも出てくる)小女の巻での教育論、造園論)、玉鬘の巻では衣装論　和歌論、女性教育論)、蛍の巻では物語論、梅ヶ枝の巻では書道論、若菜下巻では音楽論(女楽にちなんで)と言った具合である。

特に、物語論には、小説とは何か、書く動機等を若い女性の玉鬘を相手に光源氏が語っている。世にあることを書いたのが小説(実像)で、そこには作者によるフィクション・考え(虚像)も混っているとされている(ように私は理解している)。歴史書とは異なり人生の真実を書いたものが物語であって、歴史書は時の権力者によって書かれた「かたそば」(一部分)とまで言い切っている。

第七、として和歌が多く出てくる。

源氏物語は、和歌文学であって合計七九五首の歌が出てくる。昔は、「源氏見ざる歌読みは遺恨の事なり」(藤原俊成)と言われ、物語の基本には和歌があって、主に古今集等からの引用が多い。万葉集からの引用がほとんどないのは何故であろうか。昔の女性は、教養の一つとして和歌が読めたしそのことが恋の手段でもあった。賢女である葵の上は、何故一首も歌を読んでないのか。

既にふれたように玉鬘十帖は、古今集の春夏秋冬や別れの部立ての歌を散文化したと言われている美しい文章で、読む人を引きつける。和歌には男女が読み合う贈答歌が多いが宇治十帖では薫や浮舟には優れた独詠歌が多い。

なにげなく自然(情景)を読んでいるようで実は心を読んでいるのである。紫の上にはそのような歌が多く「永とじ石間の水は……影ぞ流れる」(朝顔の巻)は掛言

葉をちりばめ、心を読んだ独詠歌として好きな歌の一つである。とにかく源氏物語における和歌の重要性は極めて大きい。

第八は、文章の美しさ、深さである。

古来から著名人により源氏物語の文章は悪文であるなどとも言われているが、私には原文の難かしくはあるが、大変素晴らしい文章であって好んで原文で読んでいる。いくら名訳でも及ばないであろう。最近買った林望氏の「謹訳源氏物語」で原文と訳文を比べながら読むのも楽しみにしており、本稿を書く過程で参考にしていこうと思っている。藤壺との密事において「あさましかりし」のわずか一字の過去の助動詞により光源氏との関係が、今回、始めてではないことを示している。声を出して読むとリズミ感があって流れるようで内容の深さとともに味わいがあり、昔の日本語はこんなに美しく味深いものであったのかと再認識させられている。又和文と漢文が見事に融合された文章も多い。特に須磨の巻は、それが指摘されている。原本のみをカットして巻毎につくったテープがあり、これを聴いていると音楽を聞いているような錯覚に落ち入る。

そして、文章や和歌を諳んずるのは、ぼけ防止にも有効ではないかと思い実践している。私の好きな文章は、数多くあるが、あえて二―三挙げれば、

①賢木の巻。光源氏と六条御息所の別れ、「はるけき野辺を分け入り…」ここの別れの和歌も素晴らしい。

②須磨の巻。光源氏の一人住まい「須磨にはいとど心づくしの秋風に…」

③初音の巻。元条院の新春「年立ちかえる朝の空の気色…」等である。

若菜下巻の女楽の場面の描写も素晴らしく繰り返し読む部分である。又、文章は長、中、短のが組み合さっており源氏物語は長文でダラダラしたものであるとの事は当っていない。

主語が省かれていることが多く文章をしめているので考えながら読まざるを得ない。登場人物も官位で登場することが多くその時々の置かれた状況を適確に表わしているし、恋愛場面等は男、女、というように直接的に書かれている。散語に十分注意して読むことが大事である。

そして又、文章のいたるところに草氏地として作者のコメント、考え方が示されていることも面白い。

七、若干の補足

以上六までで本原稿の第一回目は、終るつもりでいたが、読み返してみて、概観としてはもう少し補足しておいた方が全体がよりよく理解できるし、第二回以降の記述も楽になると考え思いつくままにそのいくつかを記しておこう。

（一）物語りは、特に第一部においては、三つの予言に沿って進んでいくということである。

第一の予言（桐壺の巻）　光源氏は天下の政治の補佐役となる。結果的に冷泉帝を助け最終的には準大上天皇になる。（冷泉帝は、人には言えない藤壺との間に出来た光源氏の子供である）

第二の予言（若紫の巻）　帝王の父となること、即ち紅葉賀で藤壺との密事（若紫の巻）の結果として生れた前記の冷泉帝であって光源氏は帝王の父となったこと。

第三の予言（澪標の巻）　御子が三人、それぞれ出世する。即ち帝王（冷泉帝）、后（明石姫君）、それに太政大臣（夕霧）になった。

以上三つの予言で言われたことは物語の世界で実現されていくのである。

（二）光源氏という人間について、一言記しておけば、桐壺の帝の第二王子（母は桐壺の更衣）であって母親が劣り腹であるため臣下に下った。若い時から美貌で、大政治家の道を歩み、教養人、趣味人、文化人であってかつ色好み（女性好き）でもあり、多くの恋愛をする等全き人間である。その一方で若い時より出家をも願うことがある苦悩する面も有している。いわゆるすき人であり友人の頭中将のあだ人、息子の夕霧のまめ人と対比されている。

ここで是非特記しておかなければならない事は、政治家光源氏の一面である。（今で言えば総理大臣級の人）出世の為友情（頭中将）をもかなぐり捨てたり、明石の君から娘を紫の上の養女にするむごい事等を平気でやってのける、又、平気で妻（紫の上）にうそを言う等々非人間的な面が良く描かれているので見落としてはいけない。人間の中にある二面性（政治家光源氏と男・人間としての側面）を良く考えながら読むことは重要な事のように思える。

（三）青年期の終りの須磨流謫は、光源氏の生涯を決定的に変えるが、その直接的な原因は、右大臣の娘朧月夜との恋（花宴の巻）が契機であり、左大臣側である光源氏は、自ら須磨に身を引いたのである。この当時、一回都を離れると再び復帰することは困難であったが、見事に明石を経て復権（澪標の巻）し政治家の道を邁進するのである。

この辺りはやはり小説であって、須磨で源氏の一生が終ってしまったら物語にならないのである。多くの史実をふまえながらも作者の創意（虚構）が働いている。

（四）これに関連してであるが須磨行きの真の背景にあるのは、時の政治情勢であって、左大臣と右大臣の勢力争い、権力闘争がある。第一部の世界において物語を動かす大きな要因として政治情勢を忘れてはならない。女は政治について語ることはしない（出来ない）という当時の状況の中で大胆かつ細心に政治を随所に語っている

ことは注意しなければならず、これまでも既に記したように源氏物語は政治小説との視点でみていくことは極めて重要である。

現実の歴史では、奈良時代以降、中宮は、藤原氏が独占してきたが、物語では三代（藤壺、秋好、明石の姫君）に渡り光源氏側（皇室）から中宮が出ている。

中年期以降なかんずく絵合わせの巻を中心とした壮絶な中宮争いの描写等は生々しく摂関政治の現実を伝えてくれている。息子夕霧の結婚問題にも影響を与えている。

時の権力者で源氏物語の作を支えた藤原道長はこの辺りをどのように考えていたのだろうか。この時期、文化が政治を越えていたのか、政治と文学とは別であって別段権力者も気にもかけなかったか等を後日考えてみたい。

（五）光源氏について言えば、晩年はどうしてあのように淋しく、孤独に描かれているのかと思ってしまう。権力を握り、経済的に繁栄し、かつ好きなことをやってのけた（女性遍歴を含め）男の生涯の最後はもっと心の落ちついた満足感に満ちたものであるはずである。音楽を例にとれば、リヒャルト・シュトラウスの「英雄の生活」（交響詩）において、英雄の最後は満ち足りたものとして描かれている。光源氏は、英雄だったであろうか。指輪のジークフリートとどこが違うのか。作者は女性であり女性の眼には光源氏の様々の生き方、時に権力者としての生き方はどのように写ったのであろうか。それと光源氏の死の描写がないことと何か関係があるのだろうか。

（六）源氏物語には実に多くの死が語られている。桐壺更衣、夕顔、葵の上、六条御息所、藤壺、柏木、紫の上、大君等々である。死の際の表現も筆をつくし書かれており、藤壺はともしびが消える、紫の上は露が消える、柏木はあわが消える、大君はものが枯れる様にとなって表現されている。

くりかえしになるが一番の主人公光源氏の死が具体的に描かれていないのは何故か。これまでも考え今後も検討してゆきたい大きなテーマである。様々の要因が重なり合って考えられているが、現時点での私の考えは、筆者は源氏の死を書きたくない、書くに値いしない考え、あえて巻名のみにとどめたのではないか。

ワーグナー音楽の特長は、愛と死が結びついていることである。

「トリスタンとイゾルデ」「指輪」もそうであるが、愛する男女が、最後に同時に合一して死を迎える。特に女性が積極的に男の死にとびこんでゆく。これに対し、源氏物語においては、愛と死が切り離されている。

男・女がそれぞれ単独に別個に死を迎えるのである。何故この違いが出てくるのか。

渡辺淳一の「失楽園」は、愛する男女が最後に結ばれて死ぬ、愛の完結であり、ワーグナーの音楽の日本版であると言ったら筆者にお叱りを受けるであろうか。

（七）作者は中流の女性であって、そこから物を見ている。当然の事であるが、青年期の巻に（特に葵の巻、賢木の巻）を読んでいると上流階級の女性、葵の上とか六条御息所を悲しいまで痛めつけているように感じられる。

それに対し、明石の君、玉鬘等中流女性には好意的でさえあると思われる。当時物語の読者層の多くは、中流階層の女房で、彼女達もこういう眼で上流女性を見ていたのかと想像するが、偏向過ぎた見方であろうか。また、男性に対する女性の見方も誠に厳しい。

（八）最後に「ゆかり」について触れておきたい。女性の人間関係を示すのに「ゆかり」の存在が挙げられよう。紫のゆかりとは、藤壺―紫の上―女三の宮である。藤壺は光源氏の母桐壺更衣とうり二つの女性である。紫の上は、藤壺に限りなく似た人である。これにより物語（特に桐壺系）は進行していく。

これに対し露のゆかりとして夕顔―玉鬘、（あるいは六条御息所―秋好中宮）というのがある。物語は、これらのゆかりの女性達によって引き継がれてゆく。

八、次回以降の記述について

（一）源氏物語の本質は「もののあわれ」であると言われている。「もののあわれ」とは何なのか。過日の講演会で著名な講師に一言で言えば何ですかと問うたら、直ちに「それは、人生の喜怒哀楽、ヒューマニティ」だとの答えが返ってきた。すべてのもの、生も権力も名誉も愛も結局は滅びてしまうのが我々の人生である。滅びゆく美しさへの賛美でもあろうか。

我々の日常が機械文明に影響され、管理社会に縛られ無味乾燥になっている現在、このような古典に接し美意識を学ぶことは豊かに生きていく上で非常に大事なことであり、有益である。

小説、物語は、我々の日常では経験できないことを経験させてくれ人生の幅を拡げ、豊かに奥深いものに感じさせてくれる。日常につかれ、心がまひしているので源氏物語のいわゆる「もののあわれ」を思って生きることは、人生に対する感度をよくする為にも非常に大事なことであると思う。

こんな考えに立って一〇年近くかなり真剣に原文に忠実により深く考えようとしてきたが、いざ書くとなると全く筆が鈍り進まない。十分に物語を理解していない為である。

（二）しかし、読む度に新しい発見があるのも事実である。物語は、表面的にはみやびできような豊かな王朝の

世界を見せてくれるが、一歩、内面に入ると人間の苦悩、打算、愛欲、競争心、しっと等人間のみにくい隠れた部分を詳細に描き出しており、その対照（コントラスト）が実に魅力的である。

（三）今後の進め方として今考えているのは、

① 巻名毎に整理していく。主要話題の概要を書き問題提起をし、整理していく。大枠として、
幼年期・青年期・中年期・晩年期・亡き後の世界と順次追っていきたい。

② 項目別整理
例えば、死、出家、政治的条件、経済、夫婦、父と娘、自然（月、雨、植物等）、和歌、評論等々を整理

③ 人物整理
各巻にばらばら出てくるものをある人に焦点を合せ整理する。例えば藤壺物語、紫の上物語、明石の上物語。この際人物を対比しつつ書いていくのも面白かろう。

（四）源氏物語に関する書物はこれまで山積でているが、なるべく原文を読みつつ自分の頭で整理できたらよいと考えている。新しい考えとかめずらしい考えとかは期待しても出来ないであろうから色々の本を参考にして読みながらつれづれに色々と書いてみたい。

前に記したようなことをやるとすれば、数年はかかるであろう。その間、体力気力が持つか、又生きていられるか等あるが、体力、気力の維持に努めつつ出来るところまでということで、気軽にまあ一歩づつ進めてみよう。

目耕録（その十三）

――井上ひさし著、山下惣一編『井上ひさしと考える　日本の農業』（二〇一三年、家の光協会）を読む――

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（『世説新語』）。

山本鎭雄

三島由紀夫著『奔馬』の舞台

大月市梁川町綱の上は、桂川の右岸に山々が連なり、左岸には二段ないし三段の河岸段丘がある。二段の河岸段丘には、いずれも平坦部に家々が密集し、その近くに決して広いとは言えない耕地がある。上段と下段の集落は崖に沿って急峻な坂道で繋がっている。私が宿泊する家屋と耕作する畑は上段にあるが、たまたま用事があって、急峻な坂道を下って下段の田畑に出かけた。この綱本という下段一帯は三島由紀夫が自ら取材し、『豊饒の海』第二巻『奔馬』（新潮文庫、一九七五年）二十二章以下で描写されている。

中央線で二時間近い四方津（しおつ）の駅から、さらに一里ほど桂川ぞいに歩いてゆくのだそうである（引

山梨の深い渓流の桂川沿いの農山村の妻の畑で健康と趣味、そして収穫という実益のために週一回（一泊二日）の予定で農作業をして近く七年目が終る。ＪＲ中央線沿線の自宅の最寄り駅から高尾駅で乗り換え、電車で三十分ほど乗って、最初の無人駅の梁川駅で降り、しばらく歩いて妻の実家に着く。電車で通うのは不便極まりないが、往きは新聞や雑誌を読み、帰りはしばし居眠りが出来るからである。乗り換えの高尾駅で眠り込み、乗客や駅員に肩を叩かれて起こされたり、往きも帰りも最寄り駅を乗り過ごすことがある。睡眠時無呼吸症のため、それもやむを得ないと諦念している。

用者注、その当時、梁川駅は開設されていなかった)。

真杉海堂(引用者注、国文学者・平田篤胤の信奉者)は甲斐國北都留郡梁川の、丁度桂川が直角をなして瀬走る本沢というところに、川へせり出したひろい露台のような、二町五反の田畑を持っている。田畑を前に控えて、数十人の泊れる道場があり、神社がある。西側の畔に小屋があり、そこから段を下りて祓所へ行けるようになっている。田畑は塾生が耕した。

三島由紀夫は小説では「本沢」とされているが、実際の地名は「綱本」である。小説の舞台は約三十戸の集落と三町の田畑の綱本と、深い渓流の桂川を古い吊橋で往来できる対岸の立野である。晩秋、落葉樹は紅葉(黄葉)し、櫟林や桑畑、「官能的なほど黒い幹から赤い実一つをかざした柿」などの風景を背景にして、登場人物の白衣に白袴姿と玉串を携えた所作などが詩情的かつ幻想的に描写され、ストーリーが展開している。

戦後の食料難の時代、平坦な三町歩の綱本は整然と三十六枚の水田に耕地整理され、桂川の水をポンプで揚水し、水田の農業用水に利用した。今、見晴しの良い上段から綱本の田畑を眺めると、農家二戸が水田六枚の稲作が終了しているらしく、黒い土の田圃の傍に長い一列の稲架と短い四列の稲架があった。田圃の他は、畑か、草木の生えた耕作放棄地となっていた。農作業をしたことがある村人の話しでは、綱本の東側一帯は桂川の渓谷の崖崩れを予防するために、真竹の竹藪が植栽され、今や密生している。それに隣接する西側の田畑には真竹の地下茎がはびこり、春になると、大量に若芽のタケノコが生えるという。そのため、その畑の大部分は耕作不能となり、耕作放棄地となっていた。

田園まさに蕪れなんとす

下段の古くからの耕作放棄地を数人の村人が自然に生えた木を切り、伸びたきった雑草を刈ったところ、イノシシの寝床があったのには驚いたという。イノシシは、背中についた寄生虫を取り除くため、水田に入り込み寝転がって背中を土壌にこすり付け、田圃を荒らす。夜間には害獣の野ねずみは当然として、狸、ハクビシン、貂などが出没し、農作物に被害を与える。最近は数頭の鹿が田畑の柵外に出没するのを見かけるようになったという。

上段から坂道を下りて綱本の集落に行くと、大小の家々が密集し、集落を形成している。ドアや窓ガラスが破れた空き家、屋根も朽ちた木造のあばら家、建築用の朽ちた材木や鯖びた鋼材と鋼板が放置された二階建てのコンクリート製の資材置き場などがとくに目立った。かつて広い敷地の農家一軒が炎上したことがある。その日の夕方は無風で、消防署への通告も早く、しかも近くに住む元消防署員が大木に登り、火の粉の消火を指示し、近隣への延焼は免れた。もし、密集した一軒の廃屋に火がつき、強風に煽られたら、この一帯は延焼するに違いない。

この集落では幼児の姿はまったく見かけず、見かけたのは、談笑する高齢者、黙々と農作業をする高齢者だけだった。その高齢者はおそらく自作地を耕作しているのであろう。借地の場合、耕作者がさらに高齢化し、貸し主に耕地を返せば、いずれ耕作放棄地になるだろう。なぜなら、すでに貸し主が耕作不能のために、耕地を貸したのだから、貸し主が再び耕作することはない。そうなれば、耕作放棄地に雑草が茂り、そのうち低木が生え、将来は原野に戻るだろう。

私にはこの都市通勤圏の山狭村の梁川を、陶淵明のように、「帰りなんいざ」、「なんぞ帰らざる』という「回帰」の恩念はさらさらない(陶淵明、「帰去来の辞」)。死亡率よりも出生率が少ない「自然減」、閑散とした農山村の集落に直面して、「田園まさに蕪れなんとす」という過酷な現実を実感した。ただ、私は健康のために体力を消耗させ、趣味として工夫を凝らす野良仕事をしながら、老いて四季折々の自然の景観と気象の変化に接することが出来る己が現在を心から享受しているだけである。

今、耕作している高齢者は子供頃から農家の跡継ぎとして農作業の手伝いをして、そのイロハを身につけたであろう。また、田植えや稲刈りなど農繁期には学校は休日となって、農作業をする親の手伝いをしたであろう。サラリーマンになっても土・日の休日か、非番の日には農作業をした。退職後、年金で生活を支え、自給用の食料のために農作業に勤しんでいる。なかには、農産物を軽トラで農協経営の直売所に出荷し、収入を生活費の補助か、肥料代やガソリン代にしている。私の自宅の近くのスーパーマーケットの白菜の売値よりも、村人はその半値で、近くの直売所に出荷していると聞いて驚いた。

今、農家で両親と同居しても、その子供はピアノやお習字などのお稽古事、学習塾や進学塾に通うのに多忙で、農作業を手伝う時間的余裕がなく、そうした生活習慣もない。その後、サラリーマンとなったら、長距離通勤と勤務多忙のため、田畑を耕地する時間的かつ肉体的・精神的な余裕はない。農家の跡継ぎは年に数回、農用トラクターで雑草を除去しても、土作りをして種を蒔いたり、苗を植えたりすることもない。除草を終えると、農用トラクターを走行用に切り替え、さっさと家に帰って行く。少額の転作奨励金の交付を受けているようだが、トラクターのガソリン代にもならないだろう。将来、この山狭村はどのように変貌するのであろうか、大いに不安と憂慮が募る。

里芋と薩摩芋

昨秋、畑の土にうめた里芋を今春になって掘り返した。レーキでかまぼこ状に高畝を作り、高畝の真ん中を鍬で溝を作り、その溝の株間に掘った種芋を植え、株間の中間に有機肥料と化成肥料を蒔いて埋め戻した。その上を雑草予防に黒マルチフィルムで覆った。種芋は発芽して生長し、マルチフィルムがテントを張るような状態になったので、その中心部を鋏で切って若芽を地表に出させた。

幼い里芋の生長の様子を見て、余計な茎を引き抜き、茎一本だけ残した。妻が畝間一面に古いござを敷いた。そのため、猛暑の面倒な除草が不要になっただけではなく、水分の蒸発を防いだ。空梅雨と日照りの真夏のため、近くの畑の里芋の葉身の一部が枯れたが、我が里芋は大きめの青々とした葉身と長柄の太い葉柄に生長した。村人から「おたくの里芋は威勢がいいね」と言われた。

晩秋、里芋の葉が枯れ出す前に、葉柄を包丁で切り離し、マルチフィルムを剥いでシャベルで掘り返した。株には親芋に子芋、孫芋がついていた。土が付着した塊状の里芋を割った。小椅子に座り、小さい子芋と孫芋を取り除き、食用の子芋についたひげ状の小さな根と皮を鋏と手で切り取った。この作業は意外に手間がかかった。親芋はそのまま翌春の種芋に使う。

この里芋は土垂れと言い、もっぱら子芋を煮物や汁物として食べ、親芋は土中に埋け、翌春に掘り出して種芋に使う。葉柄が赤みを帯び、芽が赤いセルベス（赤芽芋）は親芋だけが大きくなったが、子芋と孫芋は大きくならず、とても食用には向かない。すべての里芋を掘り出した後、年内の食用の里芋は乾かして畑の小屋で保管した。それ以外の里芋は翌春の種芋として、深く掘った穴に逆さまにして埋け、上部を厚めのビニールで覆った。

総じて、今年の里芋は作り過ぎて、しかも豊作だった。畑小屋には収納出来ず、近くの郵便局から友人・親類にゆうパックで郵送し、さらに自宅に持ち帰り、近所迷惑を承知して奥さん方に上げた。ある奥さんには、俳句の同人誌を主宰する夫に伝言してもらい、以下のように、里芋のお返しに一句を頂いた。

たまはりし里芋やはらかき夕餉　　久一

毎年五月、通信販売で薩摩芋（ベニアズマ）の苗（刺し穂という）が届く。里芋と同じく、かまぼこ状に高畝を作り、マルチフィルムを覆った高畝の中央に刺し穂を船底のような形にして植えた。今年は刺し穂三十本を買って植え、その上に不織布をベタ掛け（「地べたに掛ける」という意味）にした。生長した下の二本目の蔓を鋏で切り離し、もう一つの高畝に植えてみた。中南米原産の薩摩芋は猛暑に適しているのか、順調以上に葉と蔓が生長したのか、試しに堀ってみた。ところが、小さな芋が大勢を

占め、たまに大きな芋が掘れ、サイズは大・中・小と不揃いだった。

薩摩芋は寒さに弱く、霜が降りる以前に収穫を終える。ところが、季節外の台風の襲来で畑仕事はできなかった。本格的に掘ったのは、十月下旬と十一月上旬だったが、ちびた芋が多く、たまにスーパーの店頭に陳列されているような立派な芋を収穫することが出来た。葉と蔓ばかりが茂り、地中の芋が太らない「蔓ぼけ」のようだった。窒素肥料の油粕を蒔くと、「蔓ぼけ」になる。この春、畝作りをした時、油粕を蒔いた記憶はない。前作の肥料が大量に残っていたことがその原因だろうか。いずれにせよ、今年もまた薩摩芋の栽培に失敗した。収穫した芋をアルミホイールに包んでたき火に放りこみ、孫と一緒に焼き芋を食べることを楽しみしていたが、今年の晩秋もまた実現しなかった。

白菜、小松菜、ほうれん草

昵懇（じっこん）の村人から余った白菜の苗二十五本を貰った。早速、高畝を作り、有機肥料を蒔いて黒い穴あきマルチフィルムで覆って適当に株間を計って苗を植えた。さらに防虫のためにダンポールというガラス繊維強化プラスチックの棒を高畝の上に半円形に骨組みして、その上に長繊維不織布で覆ってトンネルにして栽培しようとした。ところが、不織布の横幅が短くて覆い切れなかった。そこで、ダンポールを外して不織布を高畝に緩みを持たせてベタ掛けにした。

その後、苗を分けてもらった村人がわざわざ畑に来て、マルチの小さな穴が白菜の生長の妨げとなり、しかも植えた白菜の株と株の間が狭すぎるという注意を受けた。私は収穫前の結球した白菜をイメージして苗を植えた。苗は葉菜を大きく広げて生長した後、中心部の葉菜と広がった葉菜を巻き込んで結球する。葉菜が大きく広がるのに、妨げになるような苗の植え方は良くないということだった。もう一人の村人は畑の柵越しに苗の株間の距離を実演して見せてくれた。股を開き、左右の長靴を直線にした長さが白菜の株間だった。そこで、結球以前の白菜を間引きし、湯掻いて食べることにした。医食同源と考え、利尿作用や整腸作用を期待して食べたが、白菜特有の甘味と食感に欠けていた。

白菜、キャベツ、小松菜、水菜、チンゲンサイ、そしてほうれん草などの葉菜類は、およそ一年じゅう店頭に陳列されているが、露地栽培では「春蒔きで春夏取り」よりも、「秋蒔きで秋冬取り」の葉菜類がはるかに美味い。畑ではアブラナ科の小松菜は葉を虫害されてボロボロになって、茎だけが残った。その点、ほうれん草は虫害されなかった。しかも冬の寒さでますます甘味が増すので大変有難い野菜だが、買った種が消毒済みで緑色にコーティングされていた。それを蒔いたので、毒性があ

るのか、ないのか心配になった。アカザ科のほうれん草は虫害を受けずに生長し、美味しく食べた。その後、小松菜はめきめき生長し、収獲の時期を逸し、茎と葉は硬くてとても食べられない状態になってしまった。

総じて、収穫した白菜は十分に結球しなかった。今年の白菜は茎に甘味が足りない。それは肥料が不足したためか、苗を密植したためか分からない。例年、成熟した白菜を収穫して食べるか、結球した白菜を新聞紙に包んで畑に放置し、越冬させて初春に枯れた部分を取り除いて食べる。ところが、この年末、村人は結球した白菜を収穫し、そのまま食べるか、漬物にしているようだ。今後、気候変動のラニーニャ現象（反エルニーニョ現象）によって、厳冬の到来が予想される。そのためか、村人は例年とは異なり、保存用の白菜を早めに収穫して小屋に古い毛布を被せて収納している。私もそのアドバイスに従い、収穫した白菜の半分を同じようにした。半分の畑の白菜は新聞紙に包み、様子を見ることにした。

ふかいことをたのしむ

『目耕録』に掲載しようと、ときに農業経済学関係の学術書をひも解いたことがある。だが、農学者の守田志郎を除き、最後まで読み通すことは出来なかった。私に辛抱が足りない、基礎的な素養に欠けていると言われれば、それまでだが、「やさしい」ことを「やさしく」説くのではない。要するに、学者仲間にだけに通じる学術用語と特有の行政用語が羅列され、しかも収集された統計的データが駆使されたり、「猫の目」農政をそのまま解説した農業経済学も見かけた。だから、私が読むには「むずかしく」書かれていた。

著名な作家・劇作家の井上ひさし（一九三四―二〇一〇年）は「創作の原点」として「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」書くことを信条としている。そのように書かれていたら、私は農業経済学関係の学術書を読み通すことが出来ただろう。井上ひさしの『井上ひさしコメの講座』（岩波ブックレット、一九八九年）、『続・井上ひさしのコメの講座』（岩波ブックレット、一九九一年）、さらに『コメの話』（新潮文庫、一九九二年）、『どうしてもコメの話』（新潮文庫、一九九三年）は「おもしろく」読むことが出来た。

超多忙で筆の遅い作家・劇作家の井上が発表した作品は一作ごとに注目され、小説では直木賞や読売文学賞などの文学賞を受賞し、また戯曲が上演されると、岸田國士戯曲賞、紀伊国屋演劇賞個人賞などを受賞した。とくに、ベストセラーとなった井上の長編小説『吉里吉里人』（新潮社、一九八一年）は、東北地方の一寒村を舞台に日本政府の農業政策にたいする不満から分離独立して新政府を樹立することを主軸にして展開された。このままでは日本の農村は壊滅すると予見し、「現代版の農民一揆」

の物語として執筆された。一九八六年頃から、井上はその「後遺症」としてコメを中心に農業問題について精力的に発言し、執筆するようになった。

井上の郷里は山形県置賜盆地の水田単作地帯の小松町（現・川西町）で、晩年になって蔵書七万冊を寄贈し、川西町当局の厚遇を得て図書館「遅筆堂」を開館した（その後、寄贈した書籍は二〇万冊に達した）。それを契機に地元の青年たちの熱心な支援を受け、当地でこまつ座主催「きらめく星座―昭和オデオン堂物語」（「昭和庶民伝」三部作の第一作）を公演し、大盛況だったと言う（一九九五年十月）。さらに、こまつ座主催の生活者大学校「農業講座」を開催した（一九八八年八月、第一回講演「井上ひさしのコメ講座」）。以後、大学校は毎年一回、「宮沢賢治農民ユートピア講座」、「地球と農業」、「続・農業講座」などをテーマにして開催した。毎年、三日間の連続講座では、生活者の視点で自己の暮らしを見直すことを重点におき、コメを中心に直面する農業問題などをテーマに取り上げられた。

焦点は主食のコメ

一九六一年六月、農業基本法が成立・公布された。井上はそれを読み、「コメはもう厄介者扱いにされているな」と直感した。その前年に改定された安保条約の第二条「経済協力条項」は、アメリカの軍事協力の代償として、日本に経済協力を義務づけ、農産物などの市場開放を求めた。その条項により農業大国のアメリカの要求で大豆、生鮮野菜など農産物の輸入自由化を促進されただけではなく、その後の日本の農業・食糧政策に決定的な影響を与えたのである。

農業基本法は日本経済の著しい発展に伴い、商・工業と農業の不均衡、生産性と生活水準の格差、農村からの労働力の移動を促進した。岸信介首相の退陣の後、池田勇人が内閣を組閣して「所得倍増計画」を提唱し、本格的に高度成長政策が軌道に乗った。それを実現するには、日本は国際的に貿易を自由化し、工業製品の輸出と農産物の輸入の促進、国内的には農村から工場生産に必要な低賃金の労働力を調達し、農業生産の「選択的拡大」（他方では、「選択的縮小」を意味する）、農業労働の生産性の向上と自立経営農家の育成を目標にした。

その結果、小規模な家族的複合農業が衰退し、堆肥などの自給的肥料から化学肥料へと転換し、農薬の大量散布、大型農業機械の導入、経営規模の拡大、重点的に特化した単一作物の農業生産、さらに工業型大規模畜産農業と輸入穀物飼料への依存など、いわゆる「農業近代化」によって農畜産業は激変し、林業も衰退し、後継者難と人口減少によって農山村は大きく変容し、遊休耕地と耕作放棄地が増加し、とくに都市遠隔農山村では廃村八丁に至る過疎地帯が現出した。

すでに「目耕録（その七）」（『まんじ』一二四号、二〇一二年五月）で九州北部の玄界灘（佐賀県）の農民作家の山下惣一著『農から見た日本』（二〇〇四年）を取り上げたが、山下は一九六九年以降の減反政策（稲作転換政策の実施）に続き、「農業叩き」（八三年の第二次臨時行政調査会最終答申や国際協調のための経済構造調整研究会報告書、いわゆる前川レポートによる農産物の高価格への非難について批判した。のちに、山下は山形県川西町で生活者大学校「農業講座」の初回講座の講師に招聘されたのを契機に教頭に就任し、井上とともに農業問題を中心に連続講座の常任講師となった。

農業評論のスタート

一九八六（昭和六一）年、前川レポートに続き、ウルグアイ・ラウンドと呼ばれるガット（GATT、関税および貿易に関する一般協定）の多角的貿易交渉が開始された。それを契機に、井上はコメを中心に農業問題について本格的に発言するようになった。その翌々年の八八年、山形県川西町で遅筆堂文庫の第一回生活者大学校「農業講座」で開講講演したのを皮切りに（のちに、加筆・再構成され、『井上ひさしのコメ講座』岩波ブックレットとして出版）、農業問題について本格的かつ精力的に講演し、雑誌・新聞に寄稿した。そのため、一九九八年、岩手大学と岩手県農協労働組合が制定した第九回農民文化賞を受賞した。井上はそれを記念して「ボローニャに学ぶ自治の讃歌」を講演した。

農業について、井上が強調したのは（一）水田稲作が日本の地形や気象に非常に合致し、（二）このような地域資源を有効に活用することが今後の日本の、さらに世界の課題であり、（三）そのためにも、水田や田園で生きる人々に所得を保障されるべきだという三点である（『どうしてもコメの話』、まえがき）。世界の食糧生産は定期的に豊作と凶作を繰り返し、日本人の主食のコメの国際的市場価格は、小麦と異なり、上下の変動が激しい。井上は、米価が暴騰した時に、「たとえ日本だけは、お金の力にまかせて高いコメを買えたとしても、そのことでコメの国際価格が上がったら、他の第三世界の輸入国などは、いったいどうなってしまうのか」と懸念している。

井上は、コメは栄養価が高いだけではなく、アンパン一個が百二十円の時、三・八人の家族の一日のコメ代が二百四円で、主食のコメは本当に安いと指摘した（一九八六年の総理府資料）。さらにアジア・モンスーン地帯の日本の水田は稲作が連作可能だけではなく、食糧問題の他に水を貯める「ダム効果」や地下水の涵養、国土や生態系の環境保全など「目に見えない効果」がある。コメを栽培する水田は日本の食糧安全保障や環境保全の問題として重要であって、「効率性」や「市場性」の観点から評価されるべきではない。むしろ、より積極的に水田や

田園を耕作する農民に所得保障すべきだというのである。

井上は、農業大国・アメリカの農産物の輸出戦略、とくに一九七三年の食糧危機の時、アメリカは「ニクソン戦略」のもとで、第一段階として大豆、小麦、トウモロコシなどを低価格や援助物資として食糧不足の国々に輸出する。第二段階として二国間交渉で農産物輸入の「自由貿易」を強要して相手国に関税を撤廃させ、輸入に一方的に依存させる。さらに第三段階として相手国に大量輸入と作付け制限などをさせて、輸入した農産物の価格を一方的に引き上げる、と指摘している。それ以後、アメリカの食糧戦略は世界的に拡大した。井上は、日本は小麦や大豆、トウモロコシがアメリカの食糧戦略に「すっかりやられ」（注、ちなみに、二〇〇七年の日本の穀物自給率は二八％）、コメは第一段階から第二段階への移行期である、と指摘している（一九八八年八月）。その後、ウルグアイ・ラウンドの多国間農業交渉で、日本はコメの関税化を免れた代わりに、コメ市場の部分開放、つまりミニマムアクセスによるコメの輸入が義務づけられた（一九九三年一二月）。

コメは何のための自由化か（対談）

二〇一〇（平成二二）年四月、井上は永眠した（享年七五歳）。その三年後、生活者大学校の教頭・山下惣一は井上の農業や食料問題についてのエッセー・講演録・対談を編集して『井上ひさしと考える　日本の農業』（家の光協会）を出版した。私は本書でとくに注目したいのは第二章に収録された「対談　いま問い直す　何のための自由化か」である（一九九〇年）。井上は在日アメリカ公使・農務担当（当時）のジェームズ・パーカーと白熱した対談を行っている。私は、なぜ、井上が執拗にアメリカのコメの貿易自由化の要求に反対しているのか、無知な私はなかなか理解できなかった。だが、堤未果のルポルタージュ『㈱貧困大国アメリカ』（岩波新書、二〇〇三年）の第一章「株式会社奴隷農場」、第二章「巨大な食品ピラミッド」、第三章「GM種子で世界を支配する」を読み、アメリカにおける食と農業の実態を理解した。

それは、例えば、アメリカのジャンクフードや糖分の高い炭酸飲料、栄養のない加工食品、塩と油で揚げたスナック菓子を始め、ぎゅう詰めの鶏舎で産卵させられる鶏卵、劣悪で成長促進剤を注射する養鶏工場の鶏の肉、同様にコンクリートで囲まれた家畜工場で飼育された牛と豚の肉、しかも遺伝子組み換え（GM）種子とそれとセットで売られる除草剤の散布で栽培されたトウモロコシや大豆などの食と農業の世界、最大手のスーパーマーケット・ウオルマートなどの四社の食品販売会社に従属する全米四大食品生産業者（タイソン、クラフトフーズ、ゼネラルフーズ、ディーンフーズ）や食品加工業界（ペ

ブシコ、ネスレなど）の上位三社とアグリビジネス（農畜産複合体）を含む巨大多国籍企業、それを促進させる連邦政府の独占禁止法の規制緩和と異なる企業の提携・合併・買収という垂直統合で稼ぎ、巨大資金を融資する金融業界が食と農業を支配した。

その上、食糧を「最強の外交武器」として石油に次いで新たな農業戦略とするアメリカ連邦政府は、利害関係者が政府と業界大手の幹部や農業系ロビイストの間を往復する「回転ドア」人事によって国内のみならず、世界を支配する。そのことで、モンサント社を始めMG種子や農薬を製造する多国籍企業、抗生物質を製造する多国籍企業の役職者が連邦政府の高官として危険性の研究を阻止し、製造禁止を妨害する。しかも福島の原発で明らかにされたように、アメリカでは政府や業界は科学者やメディア、広告業界を推進派として抱き込み、農産物の「安全性神話」を合唱させ、世論を巧みに誘導する。伝統的な家族的農家を廃業に追い込み、ワーキングプアーや移民労働者を低賃金で就労させる大規模農業が安価な農産物を生産し、国内で消費するだけではなく、多国籍企業によって国外に輸出しているのである。

ガット・ウルグアイラウンドで日本政府はコメを除き、農産物の自由化を認め、農産物四〇%の輸入大国になった。パーカーとの対談で、井上はアメリカが補助金付きで生産した農産物を安く輸出し、しかも二国間交渉では相手国にブラフ（脅し）をかけ、多国間交渉では関税障壁と補助金交付の撤廃、輸出入の貿易自由化と市場開放という、二元的外交姿勢を批判した。さらに、自動車などの工業と工業製品と、自国民の食糧を安全に保障し、異なる国土と地域特性（地形）の環境を維持・保全する農業と農産物（とくに、日本では稲作は主に小規模複合農業によって成立する）を切り離すべきだと主張した。「平成の開国」と称したTPP（環太平洋連携協定）が成立したら、日本農業はさらに衰退し、食料自給率もさらに低下するに違いない。しかも全国的に「田園まさに蕪れなんとす」、国土と生態系は惨状を呈するであろう。

終わりに

私は山梨県大月市梁川町の桂川の河岸丘陵の上段にある畑に通い、野菜作りに励んで、近く七年目が終る。この一帯を「原」と言い、山狭村のなかで平らで広い土地だからそのように名づけられたのであろう。そこでは高齢の年金生活者がのんびりと自給用に野菜作りをしている。古くからの農家には役牛が飼われたらしい朽ちた小屋があるが、すでに牛は飼われていない。また平飼いの鶏さえも見かけない。その代り、農家の庭に乗用車と軽貨物車の二台の自動車を必ず見かける。農村もすでに大きく変わり、しかも都市的生活様式と全く変わりがない。

村人の間ではしばしば肥料と農薬の使用が話題になる。里山から枯葉や落葉を取り、畑で米ぬかなどを混ぜて、発酵・腐食させた堆肥を作って、畑に蒔いて肥料とするが、その作業は手間がかかり、あまり見かけない。むしろ、農協から購入した有機肥料を畑に蒔き、耕耘機で畑を耕すのを良く見かける。GM種子の是非について話題になることはめったにない。なぜなら、出来が良く美味い野菜の種を採り、時期がくれば、その種を畑に蒔くことにしているからである。

ただ、採種するには時間と技術が必要なため、私は採種して種を蒔いたり、その種から苗を育てて畑に植えたことはない。冬と夏、野菜の種と苗の多くを種苗専門会社の通信販売で購入してきた。そのため、それが畑に最適な種か苗か、どうか分からない。畑を熟知している村人は自ら苦労して苗を育て、適期に収穫した最も美味い野菜を食味していると思うと、誠に羨ましい。都市生活者には便利なことだが、スーパーマーケットなどで季節はずれの野菜を買うことが出来る。それが野菜の本当の味かどうか、知らないで過ごしているのは誠に残念だ。

GM種子の播植、除草剤の散布、ポスト・ハーベストの残留農薬の使用などの輸入農産物、過密で非衛生で成長剤や抗生物質が多用された多頭飼育、しかも乱雑に効率的に食肉処理された輸入畜産物、便利で安価だが、安全性の未確認で栄養的に問題のある加工食品などを常食すれば、将来的に健康面でどうなるのか不安になる。日本が輸入農産物に大きく依存している現状に鑑み、井上は「アメリカと手を組んでなにかやるときも、あそこから食糧を売ってもらっているからということでは、ほんとうの自由は生まれてこない」と警告している（一九九一年）。

ウルグアイ・ラウンドの多角的貿易交渉で、とくに農業交渉では農産物の関税化を含む保護削減が合意された。すでに触れたように、日本はコメの関税化を例外として認められ、その代償としてミニマムアクセスによってコメを輸入することになった。その結果、一九九五年の約三八万トンから二〇〇〇年には約七七万トンと輸入米が増加し、日本国内のコメ価格の低迷に直結した。『井上ひさしと考える　日本の農業』で「コメの自由化」に徹底的に反対した。そのことは、現在交渉中の「例外なき関税撤廃」のTPP（環太平洋経済連携協定）の合意による農産物の動向を予見していたかのように見える。

シルバー諸君の力（農業分野編③）
オリーブな夢

古屋富雄

一段落した60才を契機に、本格的なオリーブの栽培に着手した兼業農家の加藤準一氏（65歳）を紹介します。

また、「オリーブな夢」と言う表記につきましては、オリーブに抱く様々な想いが形容された夢とでも理解していただき、その夢が多いに広がる事を念じ、標題として掲げました。

加藤氏は、大学を卒業してＩＴ関連の企業に勤めていましたが、27歳の時に脱サラをして、妻そして弟の３人でイタリア料理店を小田原市に開業しています。

20年後には、その店の経営は弟に任せて、妻と２人で出来る、冠婚葬祭を中心にした「和風仕出し店」を南足柄市の自宅に開業し、現在に至っています。

オリーブの栽培については、以前一度チャレンジしましたが、あまり世話をしなかったため枯れてしまったとオリーブと聞くと、その栽培地から地中海沿岸の南フランスやイタリアなどが、そして、日本では瀬戸内海の小豆島を思い浮かべる人が多いようです。

近年の美容・健康志向の高まりとともに、オリーブオイルの購入者は20代・30代の女性を中心にした若い世代がその客層になっているとの事です。

さらに、食生活の多様化や家族の健康を考えて、一般家庭でもオリーブオイルを使ったパスタや肉料理などが食卓を彩り、広く愛用されるようになってきています。このようにオリーブは日本人の一人ひとりの心や生活に息づき、何かしら西洋を感じさせる身近な植物そして、食材になりつつあるようです。

今回は、オリーブの持つ豊かなイマジネーションと、多様な食材としての可能性に夢を馳せ、仕事や子育てが

の事でした。

オリーブから採れるオイルや果実は、イタリア料理には欠かせないものであることは言うまでもありません。

また、日本料理にもマッチし、チャレンジした料理も好評であったことなどから、お客さんには、自分で栽培し、収穫したオリーブを使った、料理を食べてもらうべきと、所有する全ての畑12ａに、１２０本のオリーブを植栽したのです。

この１２０本のオリーブには、約40年間の料理人人生の集大成が託されているようです。

そして、**60歳になつた余裕が、後押しをしているかのようにも思えます。**

オリーブの起源と伝播

オリーブの起源は、小アジア（アジア大陸最西部で西アジアの一部をなす地域）とされ、紀元前13世紀頃に、シリアからトルコを経てギリシャそして、イタリアやフランス、スペインなどの地中海沿岸に広がったとされています。

その後、15世紀末のアメリカ大陸の発見に伴い、南アメリカの諸国まで伝わりました。今日では、南アフリカ、オーストラリア、中国、そして日本など多くの国々で栽培されるようになりました。

日本におけるオリーブの歴史

安土桃山時代（１５７４～９８）、フランシスコ派のポルトガル人宣教師によって日本にオリーブオイルが持ち込まれたとされています。

栽培としては、文久２年（１８６２）、徳川将軍の医師・林洞海がフランスから苗木を輸入し、横須賀に薬用目的で植栽したが、結実することはなかった。

明治７年（１８７４）、赤十字社を興した佐野常民がイタリアから苗木を持ち帰り、東京と和歌山に植栽し、和歌山でオリーブが結実したが、台風や病虫害などで木は枯れてしまった。

明治12年（１８７９）、パリ万博日本事務局副総裁の松方正義や事務官長の前田正名がフランスから２０００本の苗木を輸入し、歓農局三田育種場及び神戸温帯植物試験場（神戸オリーブ園）に植栽した。

明治15年（１８８２）、神戸オリーブ園で結実し、日本初のオリーブオイルが搾油されました。

日露戦争で獲得した広大な領域の漁場から水揚げされるイワシ等を保存・輸出しようと、オイル漬けの缶詰を製造するためのオイルを生産するため、明治41年（１９０８）、当時の農商務省が三重県、鹿児島県、香川県（小豆島）の３県を指定して、アメリカから輸入した苗木を使い、試験栽培を実施しました。

そのうち、小豆島に植栽したものだけが、順調に生育

し、結実して、大正の初めには搾油が出来るほどの実をつけるまでになりました。
そして、小豆島は、オリーブの産地として知れ渡るようになりました。

それでは、加藤氏の人生の集大成であります「オリーブな夢」を紹介しましょう。
この40年間は、料理人そして、経営者として、常にオリーブを意識した人生だったとのことです。オリーブに魅せられ、イタリア料理を研究し、お客さんに喜ばれる味付け、創作料理さらには、オリーブオイルのソムリエの資格まで取得し、その味付け、創作料理は、日本料理へと幅を広げています。

プレ収穫祭(ラ・フェスタ・デラ・テラの前収穫祭)

2013年10月中旬、加藤氏から植え付けをして4年目のオリーブ畑で、店のお客さんを対象にしたプレ収穫祭を開催しますと言う連絡をいただき、現地に出向きました。10名程度の人が集い、初めての収穫を多いに楽しんでいました。
私も、初めて見るオリーブの実に、「ああ、南足柄でもオリーブが実るのだと」幾ばくかの驚きと感激を体験しました。
収穫量は、初年度のため5kgほどでしたが、参加した全員が初めての体験だったため、中には、収穫した実を口にする人もいて、「ああ、渋い」とか「苦い」とか、声を上げていました。それにつられて口に頬張ってみたところ、同様な味を経験した次第です。
収穫後は、食事会へと場所を変え、経営している小田原の店でイタリア料理が用意され、更にオリーブ談議に花を咲かせる仲間づくりへと場が変わっていきます。
お客さんに料理を楽しんでいただくだけの経営ではなく、収穫体験をセットにした新たなメニューとしてオリーブは有効な作物であり、今後に期待の持てるプレ収穫祭でした。
なお、収穫したオリーブからは、エキストラバージンオイル(一番搾り)を搾油して、味見をしてみるとの事でした。
先般、テレビの小豆島の旅番組でタレントが、このエキストラバージンオイルを「卵かけご飯」に小さじ一杯を加えて食べたところ、その美味しさに驚嘆の声を上げていました。おそらく、このオイルを加えることにより卵の甘みが引き出され、結果的に美味しく感じさせるのだと思いますが、いずれにせよ、この私も所望したいと考えています。

6次産業化(オーナークラブの立ち上げ)

6次産業化とは、農林水産業などの第一次産業が食品

加工(第二次産業)や流通販売(第三次産業)にも事業展開している経営形態を表す、農業経済学者、今村良臣氏が提唱した造語であります。そして、第一次産業と第二次産業、第三次産業の数字を足し算すると「6」になるため、また、掛け算しても「6」になるため、そうした経営の多角化を総称として6次産業化としています。
例として挙げれば、農業とレストラン、観光農園などを組み合わせた経営体が、分かりやすい事例ではないでしょうか。
加藤氏の場合は、6次産業化の逆のパターンであり、料理店の経営の幅を広め、お客さんに料理以外の満足度をオリーブの収穫体験へと結びつた経営の多角化を6次産業として捉えているようです。

私の著書に「兼農サラリーマンの力」がありますが、この内容のメインは、農家や農業関係者だけでは、日本の農業の未来は期待できないとしています。
そして、サラリーマンや主婦などが農業に参入して、今まで気づくことのなかった新たな発見を異業種的な立場の人々から提起される事で初めて、農業のあるべき姿が見出されると考えています。
40年間の料理人そして、経営者としてのキャリアがオリーブの収穫体験を通した確実なスキームとして、経営の多角化に結び付く事でしょう。

このため、加藤氏は、オリーブの木のオーナークラブの立ち上げを計画しています。オーナーになる人は、料理店のお客さんを前提とし、かつ、収穫や搾油に参加できる人を対象に進めたいと考えています。

大地の収穫祭(ラ・フェスタ・デラ・テラ)の開催

プレ収穫祭でのオリーブの収穫体験と食事をセットにした試みに、確かな手ごたえを感じ、次のステージの目標は、大地の収穫祭(ラ・フェスタ・デラ・テラ)の開催です。
当初は、オーナークラブの会員を中心にした収穫祭の開催になりますが、地元・地域に支えられての取り組みと位置づけ、親しみのある収穫祭をモットーにしています。
畑と言う、野外でのオリーブの収穫そして、食事は、都会で暮らす人も地元・地域の人も皆、晴れやかな気分になるでしょう。
そして、このような体験が、小豆島ではなく、南足柄でも出来ることを、参加した人々の口コミやネットなどの情報媒体により、広く発信する術も心得た、大地の収穫祭(ラ・フェスタ・デラ・テラ)です。

海外旅行(南フランス、イタリアなどへの旅)

オーナーとは、地中海沿岸諸国への旅行を計画しています。また、国内においては、小豆島を訪れる旅を計画

しています。

オリーブの収穫は、自然が相手であり、必ずしも毎年、順調に収穫できるとは限りません。仮に、台風や猛暑などの自然災害により、その収穫が叶わなかった時でも、オーナーとの良好な関係を持続するため、オリーブの起源を旅する名目で、南フランスやイタリア、スペインなどの地中海沿岸諸国の旅が用意されています。

このように加藤氏が試みる6次産業化の逆パターンの発想は、海外旅行までセットにした経営の多角化を生み出すだけでなく、近未来の日本の農業の最も必要なエッセンスを捉えた、理に適ったものと考えます。

ブランド戦略(東箱根オリーブ)

南足柄市でのオリーブの栽培の成功を頭に描き、その販売戦略をどのように立てるかを考えた時、「鎌倉野菜」が浮かんできました。このことは、加藤氏と私が共通して考えていた、地名を活かしたブランドによる販売戦略です。

「鎌食野菜」とは、鎌倉で生産・販売されている野菜の総称であり、他の地域とは区別された、いわゆるブランド野菜であります。

しかし、鎌倉と言う、ネームバリューの効果により、テレビや新聞、ネットなどの情報媒体が盛んに取り上げ、その結果、「鎌倉野菜」は、全国的にその名が知れ渡り、今や誰でもが知る存在になっています。

当然のことのように、鎌倉に訪れた観光客は、土産として買い求め、生産が追い付かないほどの人気を呈しています。

南足柄市は、明神ヶ岳や金時山等の箱根外輪山を隔てた箱根町の東側に位置しています。そして、そこで収穫されたオリーブやオイルを「東箱根オリーブ」として売り出し、ブランドとしての一歩を踏み出したいと語られていました。

今年より来年、来年より再来年をモットーに加藤氏の「オリーブな夢」は、ますます膨らむばかりです。

シルバー諸君(世代)には、何かしら余裕というものがあります。この余裕を利用他の心を持って社会に役立てる「オリーブな夢」

期待しています加藤準一さん。

漢詩

潮騒錄(七十五)

鯨游海

賀甲午春

平成二六年正月

肥後信濃長壽園
素因未定尚喧喧
兩鄉衆好稱櫻膾
馬肉正之馬力源

押韻・園喧源

〈甲午の春を賀す〉

肥後と信濃は　長寿の園
素因いまだ定らず　なお喧々たり
両郷の衆は好む　桜と称する膾を
馬肉正にこれ　馬力の源なるべし

〔注　解〕

肥後＝熊本県。信濃＝長野県。長寿の全国首位は長野、二位は熊本。素因＝その根本原因。病気になる素質(医)。喧喧＝喧々囂々と熟して「多くの人がかまびすしく自説を言いつのるさま」。これに対し「整然と正論を論じ合うさま」を侃侃諤諤という。

膾＝なます。生肉。細かく切った肉。刺身。

馬肉のことを俗語で「さくら」という。

〔口語訳〕

肥後と信濃、即ち熊本と長野の両県は、日本中で一、二位の長寿県だそうだ。

根本原因をいろ〳〵と調べてみたが、これといったキメ手となるものは未だ不明で、なお延々とかまびすしく議論が続いており、各人各説夫々が自説を曲げない。

所で私は秘かに思うのだが、両県の人は桜と俗称する馬の刺し身を好んで食べる。これがまた格別に美味い。

そうだ！両県民の長寿、馬力の根源はこの馬肉なのだ。

☆美味き馬肉さくらと呼ばふ友をかし
若かりし日の信濃路の春

次韻酬海江田萬里先生作詩

平成二五年三月

墨守綸言逐鹿鳴
刀撓矢盡夢難成
天時地利不如和
捲土重來完汝生

押韻・鳴 成 生

〈次韻して海江田万里先生の作れる詩に酬ゆ〉

綸言を墨守し　鹿を逐って鳴くも
刀撓れ矢尽きて　夢成り難し
天の時地の利は　和に如かず
捲土重来して　汝が生を完うせよ

〔注　解〕

綸言＝天子の詔。ここでは野田総理大臣の解散発言。禮記「綸言汗の如し」天子の発言は取り消しが出来ない。墨守＝固く自説を守って改めないこと。戦國策「碁年不解　是墨翟之守也」総理の解散発言を馬鹿正直に守る。逐鹿＝魏徴・述懐「中原還逐鹿　投筆事戎軒…」政権を争うこと。二四年末の総選挙をいう。鳴く＝鳴き操ぐ。天時地利不如和＝孟子「天時不如地利　地利不如人和」捲土重來＝杜牧・題烏江亭「敗者が再挑戦してくる事」

☆宰相の片言隻句は汗のごと
　ひとたび出でて永久に戻らじ

警視総監賞

平成二五年六月

澁谷界隈歡喜歌
如狂群衆怒濤渦
連呼汝十二番也
一介童顔制萬波

押韻・歌 渦 波

〈警視総監賞〉

渋谷界隈　歓喜の歌
狂える如き群衆　怒涛の渦
連呼す「汝は十二番なり」と
一介の童顔　万波を制したり

〔注　解〕

平成二五年六月四日の夜埼玉スタジアムで行われたサッカー国際試合日本対豪州戦。一対一で引き分けた結果、日本代表チームは南米ブラジル世界選手権最終予選を通過し本大会に出場出来ることが確定した。

その瞬間全国到る所で歓喜の輪が広がった。

渋谷駅北西の忠犬八公の銅像がある広場から北側街路沿いの交差点周辺は、祝賀の群衆が乱舞する空前の混迷の地となった。乱舞の輪は深夜迄続いた。

警視庁機動隊は交通整理と群衆の暴発を抑止せんと万全の体制で臨んだ結果、一人の逮捕者も出さず平穏無事に終息することが出来たが、その裏には一人の若い警察官の巧みな説諭と誘導があり、相棒の女性警察官と共に警視総監賞が贈られた。この粋な図らいに日本中が拍手喝采して応えたのであった。警官は童顔の二四歳。

十二番也＝サッカーは十一人で戦う。この警官は「貴方は十二番目の選手です。だから規則を守って模範となりましょう」と群衆に呼びかけ自覚を巧みに促がした。

一介の＝介とは種々の意味がある。「つまらない」「しがない」「たった独りの」等。ここでは「しがない」。

☆あなたこそ十二番目の選手です
　連呼のリズム勝関に似て

四字熟語其二

平成二五年二月

人未聞其平素聲
而知嗚咽怨嗟情
何鳴借問古書答
鬼哭啾啾韻若笙

押韻・聲 情 笙

〈四字熟語その二〉

人未だ聞かず　其の平素の声を
而も知る　嗚咽と怨嗟の情
「何と鳴くや」と借問すれば　古書は答ふ
「鬼哭啾啾　韻は笙の若し」と

〔注　解〕

嗚咽＝むせび泣き。しのび泣き。
怨嗟＝怨み嗟く。
借問＝尋ねる。ちょっと伺う。
韻＝ひびき。語の音韻。語感。
笙＝しょうの笛。吹奏樂器。詩経・鹿鳴「鼓瑟吹笙」

〔口語訳〕

凡そ人間は、未だ彼の平素の声を聞いたことがない。しかるに私たちは、そのむせび泣く声や嗟きの情を承知している。

「その泣き声とは一体どんな風であろうか」と問うたなら、古書が次のように答えてくれた。

「鬼は啾々と泣く。その韻は笙のようだ」と。

☆君知るや四字熟語の面白さ
　赤鬼青鬼共に啾々と泣く

《漢詩の流れ63》清その十二・黄遵憲

黄遵憲（一八四八―一九〇五）、字は公度、広東省応州（梅県）の人。光緒二年（一八七六）の挙人に合格、駐日公使館参事官に任ぜられ、明治十年東京に勤務した。四年余滞日の後、米国、英国等を経て帰国、康有為、梁啓超らと親交、政治改革を試みたが職を免ぜられ帰郷し、著述に専念した。

清末の「詩界革命」の先駆者といわれ、旧来の韻文形式に海外の思想、文化、事物を盛りこみ、方言、俗語、及び新名詞（新造語）を多用し、詩の散文化に努めた。

山歌其一

一家女兒做新娘　一家の女児　新娘と做れば、
十家女兒看鏡光　十家の女児　鏡光を看る。
街頭銅鼓聲聲打　街頭の銅鼓　声々に打ち、
打着中心只説郎　打着して中心　只だ郎を説く
（一軒の娘が花嫁になると、十軒の娘たちが皆鏡をのぞきこむ。街頭をじゃん〳〵銅鼓を打ち鳴らして行きながら、心の中で思うことは唯だあの人のことばかり）

山歌其二

做月要做十五月　月に做らば十五の月に做らんと要す、
做春要做四時春　春に做らば四時の春に做らんと要す。
做雨要做連綿雨　雨に做らば連綿の雨に做らんと要す、
做人莫做無情人　人に做らば無情の人に做る莫れ。
（月になるなら十五夜の月になりたい。春になるなら一年中続く春になりたい。雨になるならいつ迄も続く雨になりたい。でも人になるなら決して心なしの人になっては駄目）

以上の二首は「子夜呉歌（民謡体の詩）」に做った体。

新聞紙

一紙新聞出帝城　一紙の新聞　帝城に出で、
傳來令甲更文明　令甲を伝え来たって更に文明。
曝簷父老私相語　簷に曝せる父老私に相語り、
未敢雌黄信口評　未だ敢えて雌黄口に信せて評せず。

令甲＝政令。雌黄＝抹消すること。黄色の顔料で誤りの箇所を塗り消した。

（一枚の新聞が帝都に出ると、それは国家の政令を伝達し、更に文明開化に関する記事が載せてある。老人たちは軒先に日向ぼっこをしながら何やら囁き合っているが、決して新聞記事をけなしたり、口から出まかせに批判したりはしない）

この詩は日本で作られたもので、明治政府や日本人への諷刺が含まれている。

『自虐カレンダー』

漆原直子

先日、私も少なからず関与している〝旧日光街道・越ヶ谷宿〟の再生、まちづくりに関するワークショップが商店会の主宰で開催された。講師は鳥取県の米子市（人口15万人）でNPO法人『夢蔵プロジェクト』を立ち上げた方である。お話の趣旨は、いかに行政の力を借りずに、いかに市民の力でまちづくりをしてきたかということであった。しかし、話をよく聞くと、県や国からの補助金は上手に使っていた。この『夢蔵プロジェクト』というのは、〝古民家や蔵などの歴史的建造物を活用した、住民主体の小さなまちづくり活動への発展と展開〟を目指していて、〝越ヶ谷宿〟がこれから展開しようとしている〝まちづくり〟に近いものである。

お話の中で面白いと思ったことが多々あったので、自分の記憶に留めておくためにもこの場をお借りしてご紹介したいと思う。

まず、米子市のある鳥取県には、3つの「悲しみ」があるという。それは、次のようである。

- 人口が一番少ない県。現在約58万人
- 県民総生産量、全国最下位。
- 冬は豪雪地帯、夏は熱中症発生率が全国1位。

また、さらに、

- 知名度が低い。どこにあるか知らない人が多い。
- 鳥取県には、コンビニのセブンイレブンとディスカウントストアのドン・キホーテ、全国規模のチェーン店のスターバックスコーヒー店が無い。

ということで、どうすればこういう状況から抜け出せるかと皆で考えた挙句が、県知事自ら

「スタバは無いが、スナバはある」

＊スタバ＝スターバックスコーヒー店
＊スナバ＝鳥取砂丘

●10月神様の招致には、毎年成功しています。
●11月太平洋側は、すべて都会だと思っている。
等々

これらの言葉は、自県を〝責めさいなむ〟まではしていないので、〝自虐的〟とした方がよいかもしれないが、行政がこのように末期症状的な心境に陥ると、これから先はどうなるのかと、他人事ながら心配になる。でも当事者が自らこうしたことが言えるということは、問題状況を冷静に客観的に真正面からきちんととらえているということの証であると思う。むしろ余裕さえ感じさせ、第3者的には、この開き直り様が、逆に勇気を与えてくれる。どん底から這い上がろうとする快感すら覚える。だから、密かな人気を博しているのではないか？「自虐」は、決してネガティブではなく、むしろポジティブなものであり、そのように自らを捕えることができる人は、私は信頼できる人であると思う。

〝山陰〟と言われる〝鳥取〟も〝島根〟も日本列島の古代においては、日本海沿岸の大陸との交流の中心地の1つであり、考古学がそのことを証明している。つい最近まで、日本海側は「裏日本」で、太平洋側は「表日本」と言われていた。今では差別的であるとして使われなくなったが、西日本の日本海側は〝山陰〟で、瀬戸内海側は〝山陽〟であるという言葉は今も生きている。その言葉により、陽の当らない所と当たる所というイメージをもってしまうが、陽はどちら側にも当たるものである。

ということで、この〝逆境を逆手に取る〟方式、または、〝転んでもただでは起きない〟方式の島根県の来年の『自虐カレンダー』が今から楽しみである。

と発言され、それが〝自虐ネタ〟として話題を呼んでいるそうである。

そして、鳥取県に隣接する島根県が似たような境遇にあり(島根県の人口は現在約70万人で、鳥取県の次に少ない)、そのため観光PRの時等、両県が連携プレーをしているという。例えば、両県の位置を知らない人が多いので、「島根県はどこ？」と聞かれたら、「鳥取県の隣。」逆に「鳥取県はどこ？」と聞かれたら、「島根県の隣。」と答えるようにしているとのこと…。私にとっては、両県とも考古学的、歴史的に非常に興味深い所で、未踏の地であるため、いつかは行こうと計画だけは立てている。よって、この県の位置関係位はわかっている。が、一般的にはよく知られていないらしい。

こうした中で、島根県ではここ2～3年前より、『自虐カレンダー』を作って売り出したのだが、これが人気で、売り切れになることもあるという。「自虐」という言葉の意味を改めて調べてみると、『広辞苑』では〝自分で自分を責めさいなむこと〟とある。このカレンダーには、どんな〝自虐〟が書かれているのだろうか？と思い、つい私も、買ってしまった・・・。

今年のカレンダーに書かれている『自虐ネタ』は、
●4月　クラス写真じゃありません。全校生徒です。
●5月「人気」を「ひとけ」と読んでしまう。

【参考文献】
●「島根県×鷹の爪　スーパーデラックス自虐カレンダー2014（卓上用）」

社　告(内規)

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二一

加入者名　ま　ん　じ

殉教（二）

鍋屋次郎

放浪・・・小豆島へ・・・

博多筥崎宮近くの高山右近の陣所は、寺の境内も掃き清められて、いつでも寺に返す準備はできている。

夕暮れになり人通りもなくなった頃、右近は重臣の向坂兵衛と小姓二名を連れたのみで博多湾に向かった。昨日小姓頭の向坂兵衛が依頼した漁師が、既に小舟を用意して待っており、主従四人はその船に乗り込んだ。

ここに右近の放浪の第一歩が始まった。

博多湾に浮かぶ能古島は、漁師が三軒住んでいるだけの無人島に近い島であったが、バテレンたちが博多地域宣教の足場として、いつの間にか小さな会堂を建て事務所として使っている。少人数であれば泊まることもできる。

小屋のような小さな会堂の中で夕食を済ませて外に出て空を見上げると満天の星空に、三日月が山の端にかかっていた。

右近はキリシタンを棄教しないことから、城も何もかも剥奪される日がいつかは来るであろうことを、大分以前から覚悟していた。

過去に秀吉や諸大名の中で、仏教のしきたりに従わないことから、自分がキリシタンであることを表明せざるを得ないこととなる場があり、そのときに死を覚悟したことを思い出した。それはだいぶ前になるが、秀吉が織田信長の葬儀を行ったとき、右近は何故か秀吉のすぐ近くにいた。秀吉が焼香を行った後、居並ぶ諸大名が座っている席順に焼香台のところに来て焼香をして、正面に立つ信長の大きな位牌を拝んだ。右近はキリシタンであり位牌を拝む偶像崇拝はできない。座ったまま焼香には行かなかった。そのとき、誰かが右近が焼香をしないことを問題にした場合は、はっきりと「キリシタンだからできない」と言う覚悟を決めていた。しかし、右近が焼香に行かなかったことを誰も気付かなかったのか、知っていても右近はキリシタンだから、ということで問題にしなかったのか、どちらにしてもそのまま時が流れて行る。

他の家臣は右近を見送った後、明石に戻るため揃って東に向かって行った。

右近は小西行長と打ち合わせ、人目につかないように、日が暮れてから漁師の船に乗って能古島へ渡り、会堂で一泊することにしていた。そして翌日の夜、能古島の右近たちを小西行長の家臣が軍船で迎えに行き、夜の航海は海賊除けのために船上で篝火をたき、小西家の旗を掲げて走ることとしていた。

一方、明石では右近からの連絡で、父飛騨守と妻子は女中二人を連れて姫路から小西行長管理の淡路島に行き、代官の結城佐兵治を訪ねる準備をしていた。右近とは淡路島から小豆島に渡る船着場で会うことにしてい

った。あとで考えれば、そこにはデウスの加護があったとしか考えられなかった。

今回も小西行長や蒲生氏郷などから「うわべだけでもキリシタン棄教の関白の指示に従うことはできないのか」と声を掛けられたが、右近のキリシタン信仰は曖昧なものではなく、信仰的に妥協の余地のない自分を貫いていた。

右近は秀吉からの追放命令以後、陣所の引き払い、明石城と明石にいる神父と家族への通知、家臣達への説明などで自分の今後について考えることは、時間的にも心の内にも、余裕はなかった。

今ここに初めて、夜空を眺めながらバテレン追放命令以後のことを考えると、最も心配になることは、お互いにキリシタンとして生きる決心をして、共に信仰生活をしてきた家臣や領民のことであった。

今回の関白によるキリシタン禁制の主目的が、我が国が古くから神仏崇拝の国であり、キリシタンはそれらを阻害し破壊していることから、我が国古来の神仏信仰を保護するために、バテレンの国外追放とキリスト信仰拠点の破壊、および最も影響力のあるキリシタンとして右近自身に棄教を求めたものである。右近と共にキリシタ

ン信仰を続けてきた家臣・領民には既に右近という力ある信仰的支援者はなく、今は全く無力の状態にある。このような人々に対して、秀吉の意向を受けた神仏勢力から反撃的な迫害が予想される。これが右近の最も大きな悩みであった。

翌日の昼ごろ、秀吉の陣屋では

「右近はいつ、どこへ行ったのか」

と大騒ぎになっていて、小西行長も蒲生氏郷も秀吉の使いから聞かれたが、初めて聞いたという驚きの様子で「知らぬ・存ぜず」一点張りで通していた。

博多湾近くの住民からの聞き込みでも、昨夜、右近たちを見かけたという者はいなかった。

その夜、右近主従四人を乗せて夜陰に乗じて能古島を出た小西行長の軍船は、沖に出てから篝火を灯し、小西家の旗を立てて、追い風に恵まれて順調な航海を始めていた。

やがて船が播州赤穂に差し掛かるころ右近は船上に座り込み、前方やや左の明石の方角を無言でいつまでも見つめていた。

右近の胸中は、明石では今キリシタン領民は、キリシタン家臣はどうしているだろうか。狼の群れの中に放り出された形になって、守るものは誰もいない状態で、無頼の者どもに家財などを略奪されていないだろうか。

自分と家族だけが小西領に入ることを、明石にいるキリシタン領民や家臣たちが知ったらどのように思うだろうか。自分たちを捨てて、右近一家だけ安穏な生活を求めて逃げたと恨むのではなかろうか。それがキリシタンが、キリシタン領主がやることなのか。裏切られた、と思っていないだろうか。

自分がこの様な道を選んだことは、正しかったのだろうか。今からでも明石に行き、また高槻に行き、孤立している領民や家臣たちと、死を前提として命がけで信仰を守って行く道を選ぶべきだったのではなかろうか。

それと、昨日別れて明石に向かった家臣達のことも心配だった。男だけの三十五人の集団だから無事明石には着くと思うが、問題はその後のことである。それぞれが家族と巡り合えるだろうか。親や親戚が農業や漁業をやっていればそこの手伝いで当面は過ごせるが、問題は武士専業の家臣達である。国替えであれば新しい国に連れて行くことができるが、今回はそれが出来ない。小西行長や蒲生氏郷には「頼って行った場合はよろしく頼む」とは言ってあるが、果たして彼らが頼って行ってくれるだろうか。キリシタンになった家臣たちは、信仰を守り通してゆけるだろうか。

そのようなことを考えているとき、小姓が食事の用意

ができていると呼びに来たが、右近の耳には届かなかった。

やがて何度目かの小姓の声に気付いた右近は、船室に入って行った。従者三人は食事に手を付けることなく待っていた。

眠るために布団に入ろうとしたとき、船の乗務員の頭である小西家家臣村井安之助が右近の所にやってきて

「これから淡路島の港に向かいますが、風向きの変化で船の進み具合が遅くなります。淡路島の目的港到着は明日夕刻になると思います」

と言ってきた。右近は

「すべてお任せしますので宜しく」

と答え、昨夜と同じように布団に入った。

布団の中でも高槻の、また明石のキリシタン領民の顔が次々と瞼に浮かんでくる。一緒にクリスマスを祝ったときの喜びの姿、高槻では葬儀も出すことのできない貧しい領民の棺を他の領民と共に担ぎ、領主も領民も、皆デウスの同じ子どもであることを行動で示した日の、領民たちの驚きと喜びの笑顔。神父たちの満足そうな笑顔が昨日のことのように浮かんできた。

右近が自身の安全のためにそれらを全て捨て去った、と思われていないだろうか。今までの右近は何だったのかと思われていないだろうか。思われているとすれば、これに勝る罪はない。この罪の償いのためにはどのようにデウスに祈り、謝罪したらよいのであろうか。早く神父に会って罪を告白して許しを得たいと思っていた。

横になっていただけで、朝までほとんど眠っていない右近は、高槻や明石のキリシタン領民、明石での家臣たちに、「右近が逃げた」との思いを払拭するためには、右近のこれからのキリシタンとしての生き様で証明するしかなく、そのためにはどのように生きて行くことが要求されるのだろうか、を考えていた。

夕刻近く、淡路島五色浜の少し南の河口に船が停泊すると、陸地から父ダリオ、妻ジュスタ、長男ジョアン、娘ルチヤと供の者二名を乗せた小舟が近づいてきた。右近と小西家の家臣村井安之助は船べりに出て、一人ひとりの手を持って軍船に引き上げた。小姓頭はここで船を下り明石に戻った。

右近は父ダリオに挨拶した後、妻と子どもたちを見て

「疲れたであろう。話は小豆島についてからゆっくりとしよう。これから小豆島の小海という場所の近くに行く。着くのは暗くなってからのことになりそうだ。あと少し頑張ってくれ」

とだけ言って、父ダリオの側に行き明石城下の状況を

聞くと、やはり心配していた通り混乱は始まっていた。これは戦国の習いとはいえ、今回は戦に負けての城下の混乱ではなく、右近の信仰ゆえのものであるだけに右近の胸は痛んだ。

夏の海に夕日の光が落ちて、海はキラキラと輝いている。その前方に大きな島が見え、船上にいる右近とダリオに

「あれが小豆島です」

と村井が説明してくれた。（小豆島へのキリスト教宣教は、小西行長が管理するようになってから、小西行長の依頼により一年前の、天正十四年（一五八六）七月二十三日、大阪にいたセスペデス神父が修道士ジョアン森を伴って宣教に着手した。それまでは小豆島にはキリシタンは一人もいなかったが、宣教一ヶ月で千四百人が洗礼を受け、現在に至っている）

船が付いた小海は小さな港ではあるが小屋がいくつかあり、それらは小豆島産の塩を積み出すため一時保管する小屋だという。

浜には右近たちを出迎える数名の男がおり、そのうちの一人が上陸した右近に進み寄って

「小豆島を殿の命により管理している森田作右衛門と申します。行き届きませんがこれからお世話をさせていただきます」

と挨拶をした。森田は続けて

「オルガンチーノ神父が一人の日本人イルマン（修道士）の方とご一緒にこの島に来ていますので、先ずはそこにご案内させていただきます。今晩お休みいただく家もその近くに用意してあります」

右近はオルガンチーノ神父がいると聞いて、早く会いたくて

「このまま、今すぐにでもお目にかかりに行けるのか」

「はい。距離は一里くらい歩きますが、ご案内させていただきます。お父上と奥方様、お子様方は、私の供の者が付いてゆっくりとご案内させていただきます」

右近と森田は山に向かって速足で歩きだしたが、道は細く歩き難い。

左手の山の傾斜を通り越して左に入った所に二～三軒の家があり、一番右手の家にオルガンチーノ神父とイルマン森が、人の来る気配を察して入口に立っていた。

右近はその姿を見ると立ったまま

「この島で神父にお目にかかることができるとは思ってもいませんでした。神父も息災で何よりです」

と挨拶すると、神父とイルマン森は右近を奥の部屋に案内した。森田は後から来る右近の家族たちを迎えに、

来た道を戻って行った。

やがて父ダリオと妻ジュスタ、息子ジョアンと娘ルチアが到着して神父とイルマンに挨拶したとき

「隣の家に夕食が用意してございます」

と知らせる森田の声に、右近は

「ご心配忝い。勝手を言うようだが、妻と子どもたちは隣の家で頂くとし、父と身どもはこちらの家で神父と話しをしながら頂きたいので、そのようにして欲しい」

と依頼した。

神父、父ダリオ、右近の三人は神父の短い祈りの後、国外追放の命令を受けた後のバテレンたちの動向について神父から

「都にいた多くのバテレンは、九州にいた人たちと共に平戸に集結している。二十日以内の国外退去の命令は、季節風が吹いて、船がマカオに帰ることができる日まで平戸に居ても良いこととなったこと。都や堺にいた一部バテレンは堺郊外に潜伏しているらしいこと。更に都にあった教会その他宣教施設は全て取り壊されたこと」

などを聞き、続けて小西行長の動向について

「アゴスチーノ（小西行長）は右近殿が追放になられた後、一時は我が身の保身から大勢のバテレン保護に消極的になったことがあり、神父が言い聞かせて今は積極姿勢に変わってきたこと。潜伏バテレンの何人かはこの島のどこかにいること。自分は海上交通と連絡が取りやすいここで、都や堺の情報を収集して平戸にも連絡し、宣教の今後を考えたいこと」

などを、自分の思いを含めて詳しく説明してくれた。

三人は、秀吉のキリシタン禁制と、それを受けてのこれからのキリシタン宣教のあり方について各人の思いを深更まで話し合っていた。

翌日朝食後、右近一家は森田作右衛門の案内で、用意された住まいに向かった。オルガンチーノ神父の家から更に数キロ山奥に入ったところに二軒の家があった。井戸はある。沢まで水を汲みに行く必要はない。いつの頃からここにあって、誰が利用していたのかは分からない。ここからは山しか見えない。土地の人の姿も家も全く見当たらない。

台所には当面の食材、竈の焚き付け、鍋釜を始め台所用品が並んでおり、風呂には新しい水が張られ、奥座敷には布団が積まれている。

森田作右衛門は、右近夫妻に、部下がご不自由はないか毎日聞きに来るので、食材や生活に必要なものは何なりと申しつけて欲しい、と挨拶して帰って行った。

右近が連れてきている二人の小姓と、妻ジュスタが明石から連れてきている二人の女中が家の中を生活ができるように片付けていた。

右近は父ダリオと裏庭に出て

「父上、これでは我が一家は幽閉にあっていると同じです。御用伺いと称して毎日様子を見に来る。私は小豆島に洗礼を受けたキリシタンが千四百人いると聞いていたので、バテレンもそこに常駐していて、私どもも日々祈りと奉仕の生活をすることができればと願ってきました。そのような生活を送ることが、離れたキリシタン家臣・領民に対する私の信仰の証しと考えています。これでは明石や高槻の家臣や領民を狼の群れの中に抛り込んで、私たちだけが保護された安穏な生活を送っている、と非難されても一言もありません。私の思いと願いを書いた小西行長宛の手紙を、あの森田作右衛門に持たせようと思います。いかがでしょうか」

「右近、そう急ぐな。先ずはオルガンチーノ神父のお考えも聞き、この小豆島で洗礼を受けた人々の信仰生活がどのようになっているのか、教会はどこにあるのか、常駐バテレンは何人で、どのような活動をしているか、実態を見ることが先決だ」

「どうも小西行長が、信じられなくなってきました」

「まだ決めつけるのは早い」

妻ジュスタが、夕食の用意ができたと伝えに来た。

はじめての一家揃っての夕食。右近が食前の祈りを捧げた後全員に

「一家揃ってここで過ごすことになった。いろいろと不自由や不満はあると思うが、ここに長くいるつもりはない。どこの地でも良いから、キリシタン間の交わりがあって、教会があって、神父様に告解ができる生活を求め続けて行くつもりだ。ここでは、毎朝全員が揃ってお祈りをして、自分が信仰生活のあり方の一端を話して、それから揃って朝食をとろう。朝の祈りには小姓も女中も皆集まるように」

と話して夕食が始まった。

翌朝、右近は朝食後オルガンチーノ神父を訪ねた。神父は平戸にいるコエリョ神父に手紙を書いていたが、中断して右近と向き合った。右近は

「神父にお尋ねしますが、この小豆島で洗礼を受けたキリシタンの信仰生活や教会の動きはどうなっているのでしょうか」

「アゴスチーノとイルマン森に聞いてみたが、セスペデス神父がジョアンという日本人修道士と共に来た当時は、城の近くに大きな家を借りて、そこを教会としていた。また、洗礼を受けた信徒たちは、大きな十字架塔も建設していた。今でも集会は行われている。ただ、不思議なことは、アゴスチーノが、私をその集会に出席させない。それは秀吉に対しての恐れからだろうと思うが。おそらくジュスト殿が行っても、森田作右衛門が教会に入れないでしょう。聞くところによると森田作右衛門がアゴスチーノの命で教会での集会頻度を少なく抑え始めた、とも言われている。本当のところは分からないが」

「それはどうしてですか」

「都でも堺でも取り壊された教会をここでは壊さないで、追放されたバテレンを自領に匿った上、そのバテレンの指導で、教会で宗教活動が行われている、ということが秀吉の耳に入ることが恐ろしいのでは」

その他多くの事柄を話し合って、右近は夕方家に戻った。

翌日、毎日来る使いの者に、森田作右衛門に会いたい、と言付けたところ、それから二日目の朝、森田がやってきた。

右近は

「聞くところによると、城の近くのもと竹藪のあった所に建てた教会では、教会暦に従って信徒が集まってミサを行い、聖体拝領も、告解も行われているという。身どもも一人のキリシタンである。一信徒として是非出席させていただきたい」

と言ったところ、体を固くし、困り果てた様子で

「はい。お気持ちは良くわかりますが、殿からのご命令で、右近様はじめお匿いしている方々は出席させないように、と命ぜられていますので、私一存ではご案内いたしかねます」

「そうか。貴殿も洗礼を受けたキリシタンであったな。その命令を守ることは苦しいであろう。貴殿から小西行長殿に、この右近は関白様からキリシタンであることを捨てろ、と命ぜられたが、死を覚悟でお断りして、今こうして生きている。城も領地も投げ捨てた結果、追放されたことにより、キリシタン信仰を続けることが許されたと理解している。だから、この右近が教会に行っても、関白様は何ら咎めることはないであろう、と小西行長殿に伝えてくれないか」

「はい、お伝えはします。ただしその結果については請負兼ねますがよろしいでしょうか」

「その結果までは貴殿に責任はない。兎に角伝えて貰って、できればできるだけ早い時期にお目にかかりたい、とも言ってほしい。毎日、この様に匿って貰っているのだからお礼の一言も申し上げたい」

それから十日ほど経った日、森田が右近の所にやってきた。

「小豆島に対する関白様の目が厳しい。お気に召さないかもしれないが、不自由はさせないから当面静かにしていてほしい」

との小西行長の意向を伝えた。

右近はこれ以上森田作右衛門経由で小西行長とやりあってもことは進まないと考え

「小西殿にはお忙しいと思うが、一度お目にかかってお礼も申し上げたいので、是非小豆島に御越しいただきたい、と伝えて欲しい」

と重ねての伝言を依頼した。

その夜、右近は妻と久しぶりに二人だけの会話をした。そしてここ小豆島での生活のあり方が自分の本意ではないので、いつの日かここを去ることになろうと本心を話した。妻は

「貴方様が九州平定の従軍で明石を出てから約一年、いつお命を落とされるかと不安な日々を過ごしておりましたが、思いもかけない追放ということで、ここにこうしてお目にかかることができましたことは、喜んでいいのか、悲しむべきなのか分かりませんが、夫婦が、親子が、一家揃って生活できることは、女として、妻として嬉しく存じます。貴方のお考えで、いつどこに行くことになっても喜んでついて参ります」

と返事をした。

右近は妻を引き寄せ豊かな乳房をやさしく愛撫した。片方の手で腰を強く引き寄せると、やがて妻の息遣いの乱れがかすかに聞こえ始め、妻の両腕が右近を抱きしめた。

暫くして右近は

「この家の奥の空き地に、簡単な茶室を作らせようと思う。自分にはやはり茶と侘びの世界と、信仰的瞑想のときと場所が必要だ」

「はい、茶道具は全てではありませんが、貴方のお好みの一式は持ってきています」

「茶室は落ち着く。一人で茶をたて、静かな瞑想の中で自分の心の奥を感じ取ることが、今の自分には大切なことだ。建てるのに必要な資金はこちらで出せばよい。森田に頼んでみよう」

いつの間にか寝息になっている右近を見て、ジュスタは静かに自分の布団に戻って行った。

次の日の朝、朝食後右近はジュスタ、ジョアン、ルチヤの三人を連れて近くの山に登った。山には常緑樹が多く、子どもたちにとって一家四人で野山を散策することは初めてで、嬉々としている。右近は、妻ジュスタの満足そうな笑顔を始めて見たような感じがした。

右近が希望した茶室は、頼んでから半月もかからないで完成した。どこかの家を解体して持って来たらしい。森田は茶室の内外装について右近の意向を確認しようとあれこれ意見を言ってきたが、右近は

「外装も使い古しの板壁でよい。内装も使い古し板を使った板壁と質素な床の間を付けるだけでよい。あとは身どもが考えるから」

と言って森田を帰した。

その後、子どもたちと山を散歩するときに、長さ一尺程度の竹と、枯枝の二股になっている所を三つ切って持ち帰った。二股の枯枝を三つ組み合わせ、その中央に竹を差すようにやや斜めに入れると、一輪挿しの置物ができた。それを床の間に置き、山から摘んできた名もない花一輪を差し、畳は古い畳に縁だけ新しい黒っぽい茶色の縁を付けさせ、右近にとって落ち着いて茶を楽しみ、一人で瞑想するまたとない茶室が仕上がった。

今は朝夕、右近が入りたいときに入って静かに瞑想している。

右近は九州平定に従軍してから、教会で行われるミサもなければ、告解もしていない。信徒として当然なすべき行事であることから、オルガンチーノ神父の住まいで、教会暦に従ってミサに行き、告解を行ってもらうことと

し、父ダリオも含めて一家全員と小姓、女中もともに神父の住まいに行った。本来は洗礼を受けた住民も誘いたかったが、近辺には人が住んでいる家はないので右近一家のみで行った。一家だけのミサであるが、右近は心が晴れやかになった満足感を覚えていた。

右近たちが小豆島に来て既に半年が過ぎて、年は一五八八年に代わっていたがその間、小西行長は一度も小豆島に来ていなかった。

ある日、右近は父ダリオに対し

『小西行長が我々家族一同をここに匿ってくれていることには感謝するが、我々は自由に教会に通い、ミサや聖体拝領に預り、告解もして、教会に通ってくるキリシタン間の豊かな楽しい交わりも得て、キリシタンとして行うことを通常通り行いたい。秀吉は私に「秀吉に仕えるならば棄教せよ」と命ぜられたが、既に領地も城もすべて返し秀吉に仕えることをやめたので、棄教する必要はなくなった。そこで我々にキリシタンの道を自由に全うさせる条件で自分を召し抱えてくれる大名はいないだろうか、と考えました。小西行長は現に我々を匿っていることだけでも秀吉を恐れています。私の望みが叶えられるとすれば、秀吉が一日も二日も置く大名で、秀吉との関係が極めて親密な大名ということになります。そう

すると加賀の前田利家しかいません。そこで、前田利家に対して私の近況を知らせ、相談にのっていただきたい、と手紙を持たせた使いを出そうかと思います』

と話した結果、父ダリオも

「それしかないであろう」

と了承した。

そこで右近は前田利家宛てに近況を伝える中で、ご相談申し上げたいこと、ご教示賜りたいことがあるので大阪までお伺いしたい。ついてはご都合の良い時期を教えていただきたい、という手紙を、前田家の大阪屋敷まで小姓篠田伊織に持たせた。

前田家の大阪屋敷では、右近の使いと聞いて直ちに利家に伝え、その場で篠田伊織を利家のいる所に通した。

篠田伊織が右近の手紙を恭しく利家に差し出すと、それに目を通した利家は

「高山右近殿が元気で過ごされていることは喜ばしい。この手紙ではとかく退屈しているように見えるが、そうでもないのか。キリシタンとしての信仰はどうしているのか」

「はっ。一刻位歩いたところに、オルガンチーノ神父がいらっしゃいますので、よくそこに出入りしてご指導を戴いています」

「そうか。関白様は高山殿に、自分に仕えるのであればキリシタン信仰をやめろ、と言ったのであるから、関白様に仕えないのであれば、それは考え次第、ということになるな」

「ところで身どもはこれから加賀の国元に戻るので、五月下旬になれば大阪に戻っている。高山殿にその頃大阪に来るように伝えて下され」

その後、利家からは右近の日頃の生活状態などの質問があった後、前田屋敷を辞去した。

これを小姓篠田伊織から聞いた右近は、小豆島へ来てから始めて喜ぶ顔を見せた。

それから四ヶ月経過して、右近が前田利家を訪問する準備をしていた五月二十日に、森田から

「右近様、昨年九州平定で功があって肥後一国を賜った佐々成正殿が去る十四日に関白様の命により切腹、お家断絶。肥後一国を我殿と加藤清正殿が南北半分ずつ領有することとなり、我殿は肥後南の宇土十五万石に転封になりました。つきましては右近様ご一家も私たちと共に宇土へ御移りになられますようにと、我殿からの伝言でございます。出立は三日後になります。小西家の軍船で我々とご一緒にお出かけくださいますように。勿論お荷物も全て同じ船で運ばせていただきます」

「そうか。小西殿にとっては大変なご出世。めでたいことでありよしなにお伝えいただきたい。宇土行きのことはあい分った。よろしく頼む。ところでオルガンチーノ神父はいかがいたすのか」

「はい、途中まで我が船にお乗りになり、平戸に近いところで降りて、平戸にいるバテレン様たちの所に行かれると仰っていました」

右近はいよいよ決断を下すときとの思いから、篠田伊織を再び大阪に向かわせた。今回は帰る場所が宇土になるので馬を調達して伊織を行かせた。

前田利家の世話になるかならないかは、前田利家の考えを直接自分自身で聞いてから、との思いで宇土に着いたら一人で大阪へ行くことを考えていた。

続く

千家尊福伝（二）

フランス革命勃発を恐れた神道家

村上邦治

もっとも、尊福は、建白の懇請よりも、さらに深刻な事態の進展を、深く憂慮していたのである。

一　建白書の要旨

祭政一致や神道国教主義を掲げた維新政府は、当初、神道家や国学者が熱望した神祇官を、太政官と独立させて、復興させた。

しかし、新政府は、海外からの信教自由圧力や、国内の開化促進派、仏教勢力の抵抗等により、次第に、当初の姿勢を後退させた。明治四年には、太政官管下に改編され、一〇月には、教部省に移された。

こうした神道弱体化に、危機感を募らせた神道家や国学者達は、こぞって、神祇官の復興を叫び、建白書を政府に提出した。伊勢神宮宮司田中頼庸や権大教正稲葉正邦（旧山城淀藩主）等である。

尊福の建白書は、伊勢神宮少宮司浦田長民及び出雲大社少宮司勝部静男との連名である。

尊福は、以下建白した。

我国の版図は、諸外国に比較して狭小であり、列強大国と対峙し、真に独立するには、日本国民の「民心」しかない。

しかし維新以降、政府の施策は、やつぎばやにだされ、国民は、理解できず、疑問に思っていることが多い。

例えば、「血税の誤解」である。明治五年徴兵令制定の詔の中に、兵役をさして、「人之を称して血税という」との一句を、「生血をとられる」とする流言がひろまり、徴兵反対運動がおきている。人民を納得させられず、政府と民衆は隔絶しており、「民心」は背離している。

都会では子供でさえ、文明開化を口にするときに、神祇官復興を請うのは、固陋迂遠と非難されようが、真に文明開化をなしとげる為には、「民心」を教え導き、疑惑を解き、政府の真意を、さとらせることが急務である。

国民に、権利を与え、義務を課し、国と人民が君臣上下一体となって、死生不遷の心志をおこさせるのは、国教すなわち神道を拡充するほかないのである。神祇官復興はまさにそのためである。

はじめに

尊福は、明治七年五月、「神祇官を復する議につき建白」を、教部省に提出した。

その中で、一七八九年フランス革命と同様な、民衆による暴動が、我国においてもおきかねない、との危惧を訴えた。維新政府にたいし、ロシアピョートル大帝を見習い、政教一致政策をとり、国家増勢をはかれ、と主張した。

そのためには、神道を国教とさだめ、国民を教化して、ひろく行き渡らせることであり、神祇官の復興が、不可欠であるとしたのである。

この建白書には、諸外国の革命や宗教政策について言及しており、神道家の歴史感がわかり、興味深い。

文明開化策に賛同するが、学術、工芸、軍事装備がいくら進歩しても、形だけであり、「民心」を団結させ、国教を輝かせることが、最も大切である。

尊福は、国民の精神である「民心」の高揚団結を、幾度も説いたのである。

二　理想としたピョートル大帝

当時、尊福を始め多くの神道家や国学者は、一八世紀初めのロシアピョートル大帝を、たかく評価していた。

大帝は、約三〇年間その地位にあり、隣国との戦争により、領土拡大に邁進した。

当時強国であったスウェーデンとは、二〇年にわたる大北方戦争に勝利し、バルト海を征した。南では、オスマン帝国の領土を奪い、黒海まで拡げた。

これらを可能にしたのは、軍事力の増強であった。とくに、海軍を創設したことが大きい。また、新たに徴兵制度をつくり、農民を兵士として徴発した。

ロシア経済の拡大にも、熱心であった。先進国であったヨーロッパのオランダ、イギリスを、自ら訪問し、西欧化、近代化とよばれる産業改革を推し進めた。製鉄工場、織物工場を官営でつくり、軍備の拡充にあてた。軌道にのれば、民営化して産業の裾野拡大につとめた。

当時、オランダやイギリスは、重商主義政策をとり、殖産興業による製品を、海外に輸出し国富をふやした。大帝は、先進国を見習い、道路網の整備や運河の建設を行い、物流の整備をすすめた。外国からの商品流入には、高額な輸入関税を設定して、国内の産業保護をはかった。

大帝が、広大なロシアをまとめ、欧州諸国と肩を並べる強国にできた最大の要諦は、教会改革にあり

「ロシア国は、政教を一にする」

ことにあった、と神道家たちはみなした。

ロシア正教会は、ギリシャから独立後、教会組織を拡充し、膨大な富をたくわえた。修道院所領には、裁判と租税について、大幅な特権が与えられていた。さらに、遺贈や購入により、所領を拡大し続け、世俗権力の介入できない「国家の中の国家」として、君臨していたのである。

大帝は、教会改革を実施し、正教会組織を、国家行政組織の一機関として、組み入れた。「国家の中の国家」ではなく、統治機構に組み込み、政教一致を実現させたのである。

さらに、領土拡大のために、敵地に聖職者を派遣して、長期間にわたり流布させ、正教会を普及させていった。函館の領事館付司祭ニコライが、日本でも、現に活動しており、信者の拡大運動をおこなっている、と指摘した。尊福が名指しした司祭ニコライは、幕末から函館でロシア正教会の伝道を開始しており、現在、函館重要伝統的建造群保存地区に、観光のシンボルとなっている、ハリストス正教会復活聖堂が残っている。

さらに、ニコライは、日本全土に拡大するため、明治五年、東京神田に東京復活大聖堂（ニコライ聖堂）を建て、本格的な布教に乗り出した。建白書はまさに、この時期に出されたものである。

神道家達は、大帝の政教一致政策こそが、多くの偉業達成に、重要な役割を果たしたものと、評価したのである。

しかし現在では、大帝の改革は、聖職者に対して、厳しい処置をしたことも、明らかにされている。修道士の生活を批判し、彼らは太りすぎており、信仰、祈り、そして断食が、天国の門に必要であり、パンと水のみで、キャビアや良きワインは与えない、とした。当時、総主教の食卓には、十四皿が並べられていたのである。

一番大きな改革は、教会を通じて、民衆の意識にまで、介入したことであろう。日曜日の教会では、司祭から政府の勅令が伝えられた。

大帝の晩年には、罪をキリストに告白してゆるしを乞う「告解」までも介入した。もし盗み、裏切り、反乱、君主の名誉をそこなうものがあれば、司祭は、すみやかに役所への報告を、義務づけられたのである。「告解」の秘密は、権力の前では無視されたのである。

ロシア正教会は、こうした権力に屈服したため、多くの敬虔な信者を失うことになっていった。

当時の神道家達には、こうした政教一致政策の、負の側面については、熟知していなかったものと思われる。

三　暴動勃発への警告

建白書の中で、尊福は、フランス革命について、言及している。すなわち、

「我が国は、諸外国からは、東洋のフランスとなす、とみられている。」

「フランス革命は、人民に権利自由を制限なく与え、信念はなく、贅沢になれていたからおきたのである。」

「指導者階級は、党派分裂し、政治は混乱に陥った。」

このように、フランス革命を、パリ市民の自然発生的で、偶発的に勃発したものと、とらえていた。そして、暴動は一気に全国に波及し、混乱に陥った。議会は、保守的右翼と革新的左翼に分かれ、最右翼には宮廷派も存在していた。多くの党派は、併合と分裂が繰り返され、政治は混迷を続けたのである。

日本でも、一面は、フランスと同様な情勢下にあった。明治四年、四民平等を掲げ、戸籍法を施行し、実現に踏み出した。しかし、士族は禄の廃止を不満として、六年二月佐賀の乱がおき、鹿児島、萩等各地で新政府に反乱の動きが見られ始めた。

農民一揆は、政府の施策（徴兵制、地租改正）に反対するもので、全国的に発生した。

政治では、明治六年、民選議院設立建白書提出により、以後多くの政社が結成され、乱立する。

尊福ら神道家からは、我が国は、フランスパリ騒動勃発と、同じ情勢下にあると思えた。

フランス革命の混乱が収まるのは、パリの群集が蜂起してから、ナポレオンが出現するまで、ほぼ一〇年間を要した。その間、イギリス、オランダ、オーストリア等の隣国と戦争状態にあった。国内は政治の混乱が続き、反革命蜂起、農民騒乱、地方分権派や王制派による反乱等により、内外とも困難な状態が続き、国力は疲弊した。

こうした民衆による偶発的暴動の発生を、神道家たちは、危惧した。彼らは、革命以後の長く続いた混乱をみて、政府に警告したのである。

この民衆による革命は、その後の世界史上に大きな影響を及ぼした。人民が自由と平等を勝ち取った「人権宣言」の採択、立憲議会や国民公会の設立、などについては、当時、まだ彼らには理解されていなかった。

四　尊福の苦悩

提出した建白書以上に、尊福の危惧は、大きいものであった。すなわち、我が国は、維新後わずか五年しか経ておらず、士族の反乱や農民一揆が各地でおきている。一方、政府の軍備は、明治二年兵部省、六年陸、海軍両省を設置したものの、徴兵令発令は、次年の六年であった。暴動に対処するには、きわめて弱体の状況にあった。

これら当時の日本を、神道家達は、フランス革命前と相似しており、これから長く混乱が続くと考えた。

尊福の苦悩は、それだけではなかった。

「皇統守護神」

を、出雲国造の最大使命、と考えていた尊福には、パリ市民の暴動勃発により、「王制廃止」に至ったことは、決して頭から離れなかった。

「皇室がお倒れになるならば、その前に千家の家は亡びる」

と、覚悟をしていた尊福の苦悩は、まさに「王制廃止」にあった、に違いない。

文明開化を急ぎ、人民に権利を与えるだけでは、自由の要求が高まり、暴動が起きかねない。フランスでは、結局革命の三年後、「王政廃止」となり、ルイ一六世と王妃は、民衆の前で、無残な最期をとげるに至った。

尊福にとって、なんとしても、日本で、同じ悪夢を繰り返してはならない、と強く意識したための建白であった。

おわりに

神祇官復興の運動は、神道家、国学者達が団結し、政府に多くの建白書をだした。

しかし、諸外国に追いつこうと躍起になっていた明治政府の方針を、もはや変えることはできなかった。倒幕に示した、彼らの役割は、文明開化が進展したこのときには、民衆を巻き込む大きなうねりにつながらなかった。

ともかく、神祇官復興運動は、神道家達を一つにした。しかしこの数年後、神道家、国学者達を二分する祭神論争がおきる。本建白書に連署した伊勢神宮少宮司浦田長民は、尊福の最大の敵対者になるのである。

神祇官復興運動は、神道家達が一体となった最後の出来事であった。

（つづく）

（参考文献は最後に記載します）

（司馬雑感　三十四）

「花神」と「世に棲む日日」の世界

―長州路を歩く―

山田嘉久

一　「花神」の世界

司馬遼太郎の長篇小説「花神」は昭和四十四年十月から一年余にわたって朝日新聞夕刊に連載された。主人公は近代兵制の創始者大村益次郎（一八二五―六九）である。

その後、昭和五十二年にはＮＨＫ大河ドラマで取り上げられ人気を博した。（主演、中村梅之助）。

〈中国では花咲爺のことを花神という。蔵六は花神のしごとを背負った〉

因みに益次郎は維新までは村田蔵六と称した。

1　鋳銭司村

村田蔵六は文政八年（一八二五）、周防国吉敷郡鋳銭司（すぜんじ）村（現山口市鋳銭司）に生まれた。家は祖父の代から医業のかたわら農業をやっている百姓家で、蔵六も村医者として一生を終えるはずだった。それが維新前後の激動の世が、蔵六を否応なしに翻弄してゆく。

観光地でもない蔵六の生れ故郷鋳銭司村を訪れることは今回のツアーの第一の目的だった。

乗ったバスは「防長バス」。長州藩毛利家の版図は、いまの山口県ひとつであるが、旧国名でいえば長門国と周防国であり、旧幕の頃は長州藩のことを「防長二州」といったと司馬は「街道をゆく」（長州路）で書いている。

蔵六の墓所も鋳銭司村にあった。生憎の雨天、どうもこのツアーは墓所詣にはよく雨に遭う。前年の姫路郊外の竹中半平衛のときもそうだった。

碑陰に有栖川宮、三条実美、伊藤博文、井上薫など蔵六と生前縁故の人の名が並んでいたが、彼を世に出した最大の功労者桂小五郎（木戸考允）の名がないのは、桂の死後に建てられたものだからだろう。

蔵六の墓と並んで妻琴子の墓もあったが、二人の仲は

あまりしっくりいかなかったと司馬は書いている。そのためか継子がいない。蔵六の墓は此処のほか、京都の霊山にも「大村君之神霊」と刻した墓があるという。

近くの大村神社にも詣でたが、神殿は彼の死後ほどなく明治四年に建立されたが、社殿の新築は太平洋戦争後であった。

立派な「鋳銭司郷土館」もある。こちらは多分、大河ドラマ以降に建てられたものだろう。まず彼の特徴のある肖像画が目を引く。眉は異常にふとく目がぎょろりとした顔立ちで、世間では「火吹達磨」と呼ばれた。

司馬は〈一種顔に力のこもったぶおとこ〉と遠慮なしに書いている。そんな一見、恋には無縁な男をシーボルトの娘いねとの恋にまで発展させる。これは司馬と親交のあった藤野恒三郎博士（微生学）のヒントだと「花神」の冒頭に同博士を登場させている。

（しかし、「ふおん、しいぼるとの娘」を書いた作家吉村昭は両者の関係を否定している。）

蔵六は二十才を過ぎて緒方洪庵の適塾に入り、塾頭まで勤めたが、国もとの父に請われて故郷の百姓医を継いだ。この頃、妻帯する。その妻お琴に蔵六は生まれ育った鋳銭司村について語っている。

〈「防長の山河は優しいのです」蔵六はいう。その優美のなかでも第一等の地は「この鋳銭司村です」（略）蔵六のナショナリズムの思想としての根底は、どうやらそんな単純なところにあるのかもしれない〉

なお、その後、司馬が同じ長州を舞台に書いた「十一番目の志士」の主人公天童晋介（創作上の人物）も鋳銭司村生まれと設定されている。それだけ司馬自身にとっても、この村は思い出の深い場所なのであろう。

〈同作品は大河ドラマ「花神」の脚本の一部に使われた。〉

ところで「鋳銭司村」という一風変わった村名は、なにか銭（貨幣）と関係があるのか推察していたが、この郷土館を見学して、そのことがはっきりした。

鋳銭司とは上代の官庁の名で、銭貨を鋳造する役所のことだという。その役所名が地名となって現在に残っているのが山口のこの地だ。我が国最初の貨幣は「和同開珎」として有名だが、その鋳造は最初近江の国で行われた。その後、銅鉱の産出地の近くでも鋳造されたらしく、特に周防鋳銭司は長期間にわたり日本唯一の鋳銭場として栄えた。

郷土館内の展示室で貨幣の歴史も知ることができた。

2　蔵六の生涯

同じ郷土館で蔵六の生涯も知ることができたが、無味乾燥な関係年譜によるよりも、ここでは「花神」によって、彼の生涯を追ってみよう。

故郷にくすぶっていた蔵六を最初に目をつけたのが伊予宇和島藩で、上士待遇による嘱託として雇い入れた。

しかし医業とは関係なく「蒸気で動く軍艦と西洋式砲台を作れ」であった。このあたりの経緯は司馬は短編「伊達の黒船」で見事に描きだしている。

この時期、シーボルトの娘イネが同居し、毎日、蔵六の講義を受けている。

以下、司馬が〈かれの価値をめぐって世の中がうごきだす〉と表現するように、作品は「技術者」としての蔵六を描いてゆく。（司馬は思想家、為政者のほか技術者（テクノクラート）にも異常な関心を示している。緒方洪庵、関寛斎など）

まず蔵六は江戸に蘭学塾鳩居堂を開く。同時に新設の蕃書調所と講武所の教授、加賀藩から依頼された洋式兵書の翻訳、自藩の入用兵書翻訳を精力的にこなしていく。その後、

〈自分の運命をきめるカードを選ぶ。生涯に一度きり自分を売り込んだ〉。

桂小五郎との接触を経て、薄禄を承知で故郷長州に移籍するのである。藩からの命令は「手当防御事務用係、国元で軍務を担当せよ」だった。その間、長州は英、仏、米、蘭四か国連合艦隊を相手に敗北し、京では会津薩摩を撃つとして壊乱敗走する。

そのため更に「用書役、軍事専務」いわば国防長官といえる重職に任命されるが、この頃、改名して大村益次郎が誕生する。

以下、司馬の視点は歴史のなかで彼が担ったものは何かに注がれる。

幕長戦争が始まるが、この時、幕府側の勝海舟は「長州に村田蔵六がいては、幕軍は勝てない」と云ったといわれるが、蔵六は門閥重視の藩体制を力で切り崩した。そして戦術と戦略を明確化して合理的な洋式兵制を敷いて〈勝つべくして勝った〉。

維新後、新政府から軍政最高職（事務局判事）が与えられ、西郷にかわり江戸での混迷を軍事力で収拾する。戊辰戦争での指揮ぶりは〈日本的風土のなかでは存在しがたいほどに強烈〉であった。蔵六は軍事独裁権をもって、革命の仕上げ人として機能している。

その最終仕上げが、桂の心配をよそに西下した西郷を仮想した戦争準備である。

〈西郷というこのおとこ、むほん人にちがいない〉

とみた蔵六は京阪の地に、のちに西南戦争の軍事拠点となる施設を整備するのである。桂の心配は的中する。宇治の火薬庫や大阪の予定地を見分中に京都で襲われる。実行犯は時代に乗り遅れたエセ志士集団だった。蔵六は深手を負い、それがもとで世を去る。四十五歳だった。

遺言の一つは「四斤砲をたくさんつくっておけ」だった。

〈げんに八年後の西南戦争ではこの砲が九州の山野で咆

哮した。西郷の死は蔵六の死よりも遅かったが、しかしながら相討ちだったかもしれない〉

そして蔵六に続いて、司馬の西郷についての思いは西南戦争を壮大に描いた「翔ぶが如く」（昭和四十七年―五十一年）に展開されてゆく。

二　「世に棲む日日」の世界

司馬は前記「花神」を執筆する半年前、「週刊朝日」に長篇「世に棲む日日」を書き出した。主人公は前半が幕末の思想家吉田松陰（一八三〇―五九）、後半が松陰の教えを受けた高杉晋作（一八三九―六七）である。

昭和四十七年には本作品を中心とした作家活動に対して吉川英治文学賞を受賞している。また、前記昭和五十二年NHK大河ドラマ「花神」の前半の原作は主に本作品から取っている。

1　吉田松陰と萩

〈長州の人間のことを書きたいと思う〉と「世に棲む日日」を書き出した司馬はまず松陰の墓所（誕生地）を訪れている。我々もそれにならって同じコースを辿った。

萩の団子岩と呼ばれる風光明媚な高台に彼の墓所があり、その周りに彼の一族郎党と松下村塾の弟子たちの墓がずらり並んでいるのは壮感でさえあった。

杉　百合之助　（松陰の実父、妻の滝との合葬墓。萩藩士実禄二十六石、松陰は次男）
吉田大助　（吉田家七代　松陰の養父）
吉田小太郎　（吉田家九代　松陰の甥　前原一誠の乱で戦死　十九才）
杉　民治　（杉家六代　松陰の実兄　）
杉　道助　（杉家八代　大阪商工会議所会頭　昭和三十九年没　八十一歳）
玉木文之進　（松陰の叔父　松下村塾を開く、松陰が継承）
高杉晋作　（松陰門下、奇兵隊を創設、慶応三年没二十九歳）
久坂玄瑞　（〃　松陰の妹と結婚、蛤御門の変で自決二十五歳）
久坂玄機　（玄瑞の兄　藩医、安政元年没三十五才）
吉田稔麿　（松陰門下　元治元年京都池田屋で重傷、自刃二十四歳）

なお、このツアーから帰ってからすぐに、東京世田谷の松陰神社を訪れた。

安政六年（一八五九）、「安政の大獄」に連座して江戸伝馬町の獄中で刑死した松陰は一旦は千住小塚原に埋葬されたが、その四年後の文久三年（一八六三）、高杉晋

作らによって、この毛利家別邸に移葬された。

したがって松陰の遺骨はこの地に埋葬されており、萩の墓所は彼の遺髪であるとは宮司の説明だった。境内には復元の松下村塾もあった。

「団子岩」をだらだら降りてゆくと玉木文之進旧宅にぶつかった。

此処が「松下村塾発祥地」である。

近くに「吉田稔麿生誕地」標識板もあった。松本村からの最初の松下村塾入塾者であり、「松下村塾四天王」の一人と称された。京都池田屋で新撰組に襲われ闘死（自刃とも）したが、司馬は「街道をゆく」（長州路）のなかで

〈幕末の長州の若者のなかで、吉田稔麿というのが好きである〉と書き、独立の章（吉田稔麿の家）を設けている。因みに四天王とは稔麿のほか、高杉晋作、久坂玄瑞、入江九一を指す。いずれも明治維新を見ずに死んだ。

隣は伊藤博文旧宅。博文の生れは現在の山口県光市であるが、九才のとき萩に移り両親と共にこの家に住んだ。そして隣家の吉田稔麿に誘われて、その紹介で松下村塾に入った。

旧宅の隣に別邸もあったが、此方は博文が明治四十年（一九〇七）に東京府大井村に建てたものを移築したものという。旧宅が国重文、別邸が県重文となっている。

博文が文久三年（一八六三）、共に英国に留学した四名の若き萩藩士（井上薫、山尾庸三、遠藤謹助、井上勝―所謂「長州ファイブ」）の資料も離れ屋敷にあった。

なお、博文については司馬作品では多くは二流の人物と描かれているが、「坂の上の雲」では逆に評価が高い。〈伊藤という人物がいかに愛国的ファナティシズムにまどわされず〉と書かれている。このあたりに司馬作品を理解する難しさがある。

かって一度来たことのある「松陰神社」周辺には、松下村塾、松陰幽囚ノ旧宅、吉田松陰歴史館、至誠館など松陰ゆかりの史跡が集められている。

至誠館では有名な「留魂録」を見ることもできた。松陰が処刑される直前に書きあげた、塾生や兵学門下生への遺書である。巻頭にある和歌「身はたとい武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」は戦前、軍国少年だった私などは何度、口ずさんだことだろう。

2「東北遊日記」―旅する松陰

司馬遼太郎は吉田松陰が好きだったせいか、「街道をゆく」では到るところに松陰が登場する。全巻四十三冊のうち実に九冊を数える。一「長州路」から始まって、十一「肥前の諸街道」二十一「芸備のみち」二十六「仙台、石巻」四十一「北のまほろば」それに海外編（二「韓のくに紀行」二十五「閩（びん）のみち」三十一「愛蘭土紀

行」四十「台湾紀行」にまで松陰は顔を出す。海外歴の全くない松陰にも拘わらずだ。

特に旅行好きだった松陰が書いたという「東北遊日記」については、司馬は随所で触れている。「世に棲む日日」にも〈もし平穏な社会に生まれていれば旅行随筆家にでもなったかもしれない人物である〉とまで書いている。

嘉永四年（一八五一）暮（ペリー来航の前年）、江戸を出発した松陰は翌年四月までにかけ東北を一周するのである。江戸からまず筑波山、偕楽園、年が明けて鹿島神宮、息栖から松岸に一度引き返す。それから白河城、会津若松城に着いたのは一月末だった。

更に弥彦神社（新潟県）、出雲崎を経て佐渡に渡っている。二月には再び日本海を北上して象潟（秋田県）、本庄、弘前城に到達する。本州最北端竜飛岬でUターンして盛岡城から中尊寺、塩釜神社、芭蕉の辻を経て青葉城へ。最後は日光東照宮、中善寺、足利学校まで足を延ばして江戸に帰った。

この間、松陰は一日平均十里（四十キロ）を歩いている。二十二歳の若さとはいえ、かなりの健脚である。

この旅行中、同道の宮部鼎蔵はお互いに肝胆相照らす友人だった。宮部は肥後藩士、のちに京都池田屋で新撰組に襲われ、自刃するが、松陰は宮部との旅行の約束を守るため、脱藩までしている。藩の許可（過書）が正式に下りるまでに旅行に出発してしまったからである。

「他藩の人と盟約してそれに背くのは長州武士の信義を失することになる」というのが彼の言い分だった。そのため帰国後、処罰を受けるはめに会う。

司馬は「街道をゆく（北のまほろば）」では津軽を訪れた松陰が滞在したという伊東梅軒旧宅を詳述している。また竜飛岬に立つ松陰の詩碑まで足を延ばしている。

尤も松陰は東北旅行の前年（嘉永三年）にも九州の平戸に渡っている。こちらの方は単なる旅行ではなく、山鹿万介に山鹿流兵法を学ぶためであった。この時に肥後熊本で前記宮部を知るわけである。

翌（一八五一）、平戸藩主の参勤交代により、松陰も江戸に出て佐久間象山に学んだ。

3　萩城周辺の歴史散歩

萩の町はいたるところで「幕末」を知ることができるが、地形上、市内の東郊を流れる松本川を挟んで東部の松陰神社周辺と西部の萩城下町周辺に分かれる。我々は午後は萩城付近を歩いた。

まず萩城跡に向かう。慶長九年（一六〇四）に広島から移ってきた毛利輝元が指月山麓に築城したものだが、以来幕末に藩府を山口の移すまでの二六〇年間、毛利家の居城だった。明治七年（一八七四）に解体されてしまったので、現在は石垣と堀の一部が昔の姿を留めているだけである。

旧本丸跡は指月公園として整備されていた。桜の名所だと云う。またこのあたり夏ミカンの木が多い。江戸時代、下級武士の救済のために夏ミカンが植栽されていたとはガイドの説明だった。

周辺の城下町は国指定史跡。江戸時代の地図が現在でもそのまま使えるほど街筋がそのまま残っているという。象徴的なのが「鍵曲」で、敵に行き止まりと錯覚させるよう、直角に曲げた特徴の路地だ。

木戸孝允旧宅は天保四年（一八三三）、萩藩医（二〇石）の長男として此処で生まれた木戸孝允（当時は桂小五郎）が江戸に出る前の二〇年間、過ごした家である。彼はこの間、藩校明倫館で吉田松陰に学んだ。

また近くに青木周弼旧宅。青木は藩主毛利敬親の侍医で蘭学者。村田蔵六が萩藩に仕えた時には親代わりとなって世話をしたという。

「世に棲む日日」の後半の主人公高杉晋作も此処、菊屋横丁で生まれた。

晋作は家禄二百石の大組士高杉小忠太の長男として天保一〇年（一八三九）の生まれ。現在、住居の南側半分が公開されている。晋作は此処から近くの松下村塾に通ったのであろう。

斜め向かいの晋作広場には彼の立志像も建っていた。

「野山獄跡」はバスでの車窓見学。松陰は二度も投獄され、弟子の晋作も入れられた。松陰は囚人たちに孟子の講義をするとともに同囚からも自ら唄や書を学び、獄吏でさえも廊下で松陰の講義に耳を傾けたという話は有名である。

菊屋通りにある菊屋家は萩藩御用商人で、代々大年寄格に任命されていた。

現在、主屋ほか五棟が国の重文指定を受けている。見学の折に渡された案内パンフレットに司馬の一文が載っていたが、その文章を読んで、あることを思い出した。

一年ほど前、親友のA氏が菊屋を見学した際、やはりこの文章を読んで、帰宅後、この出典を私に問い合わせてきた。「菊屋の造形世界こそ日本人のかけがえのない遺産」との内容の文章だったが、私も色々調べたが解らない旨、正直に答えた。ただ、「街道をゆく」の前駆的作品である「歴史を紀行する」（昭和四十四年刊）の中の（維新の起爆剤、長州の遺恨）には司馬が「菊屋」十三代目菊屋嘉十郎氏（当時、萩市長）と会食したことが書かれていることを申し添えた。A氏はその後、菊屋に直接聞いてみたらしい。すると先方から丁重な回答があり、「かけがいのない遺産」と題した司馬のオリジナルな随筆の一節とわかった。

多くの武士たちが軒を構えた「平安古地区」は「重要伝統的構造物群保存地区」に指定されている。

夕刻には萩博物館を見学した。此処にも松陰、晋作関係の資料が多く展示されていたが、聊か疲れた。

四　高杉晋作と下関

二日目の夕食は下関の春帆楼で摂った。

明治二八年、日清戦争の講和会議が開かれた場所である。それを記念して隣地に「日清講和記念館」がある。

館内には会議で使用された調度品などが展示され、会議の部屋も再現されていた。この会場で日本全権の伊藤博文、陸奥宗光と清国全権の李鴻章が会談を重ねたわけである。

その三回目の会談を終えて、宿舎に帰る李鴻章は狙撃された。以後、彼は大通りを避け山沿いの小径を往復したという。その小径が「李鴻章道」として残っている。

翌日の朝、一人で駅近くの「白石正一郎旧宅跡」を探した。

白石は荷受問屋で富を築いた豪商。晋作を始めとする維新の志士たちを物心両面から支援した。また明治天皇の叔父中山忠光、三条実美ら七卿も白石家に滞在している。西郷隆盛が勤王僧月照とともに身を隠したのも白石宅である。文久三年（一八六三）、奇兵隊は白石家で結成された。白石家の浜門が海に通じており、志士たちは此処から出入りしたといわれる。

「世に棲む日日」では晋作が奇兵隊を〈半官半民ともいうべき、財政上独立した軍団〉〈新興ブルジョワジーの軍隊〉にするため〈一手で金を出させる〉富商として白石が登場する。一方、突然訪れる晋作を人目見た白石は〈この人物は容易ならぬ〉と感じる。いかにも小説的出会いだが、白石は直ちに奇兵隊に入隊して、結成一カ月後には士分にとりたてられている。

しかし維新後、彼はほとんど家産を使い果たし、明治に入ると赤間宮の初代宮司として生涯を終えた。しかし怨みごとは一切云わなかった。このことを司馬は下関在住の歴史家古川薫の文章を引用しながら、白石の清潔さぶりを強調している。

〈赤間宮には、かれの碑もない。世間というのは、そういうものである〉（長州路）とも書いている。

（注　その後、昭和五十五年、境内に没後百年を記念して墓碑がたてられた。）

その赤間宮はバス車窓見学だけで済ましたのは残念だったが、いうまでもなくこの神社は壇ノ浦で平氏とともに沈んだ幼帝安徳天皇を祭神としている。明治以前は寺で阿弥陀寺と呼ばれた。

壇ノ浦のある馬関海峡について、司馬は〈私は日本の景色のなかで馬関（下関）の急潮をもっとも好む〉（長州路）と書き、再三訪ねている。そして「世に棲む日日」や「歴史を紀行する」、「街道をゆく」（長州路）を取材した。

馬関海峡（壇ノ浦）は日本歴史を二度回転させた海でもある。この海峡で義経が平家の船隊を全滅したのは前

述の通りであり、幕末には長州藩が四ケ国艦隊と戦い、また幕長海戦（長州征伐）の時には高杉の艦隊が坂本竜馬と協力して幕府艦隊を牽制した。

現在、その壇ノ浦には四ケ国戦争に使用された長州砲（八十斤加農砲）模型四基が陳列されていた。球形の弾丸を発射する青銅製の大砲だったが、連合艦隊の新しい大砲に抗するべくもなく大敗した。長州藩をして一挙に開国、倒幕に向かわせた転機となった戦争でもある。

その後の幕長戦争において、高杉晋作は病（肺結核）をおして小倉口の戦いを指揮したが、下関で慶応三年（一八六七）、二十七歳の短い生涯を閉じた。

「おもしろきこともなき世をおもしろく　すみなすものは心なりけり」

という歌が残っている。晋作が上の句を、枕頭にいた勤王歌人の野村望東尼が下の句をつけたことになっている。

「英雄」にふさわしい劇的かつ感動的な最期だが、この句が望東との合作句であることは確からしいが、果たして臨終の場で詠まれたかどうかは疑わしい。

墓は陣営近くの吉田清水山に埋葬された。

晋作の菩提を弔うために、奇兵隊軍監だった山縣狂介（有朋）の別宅を譲られた晋作の愛人おうの（後に谷梅処、晋作は一時、谷梅之助という変名を用いていたことがある）が庵の建立を希望すると、伊藤博文や井上薫らの支援を得て創立されたのが「東行庵」である。

晋作の墓（東行墓）の近くに梅処尼の墓もある。晋作には萩城下一の美人といわれた妻雅がいたが、たまにしか合わず、下関の芸者おうのと逃避行を続けた蕩児でもあった。

晋作の顕彰碑には、有名な「動けば雷電の如く」で始まる伊藤博文の撰文が刻まれていた。また東行庵境内にある東行記念館も見学したが、晋作百年記念事業として建造されたものらしい。

なお、「東行」とは晋作の号。文久三年、「西に行く人を慕いて東行く　わが心をば神や知るらん」と詠んで晋作は剃髪し僧形となった。「西へ行く人」とは西行をさす。

この境内にも司馬遼太郎の文学碑がある。

「長州は、奇兵隊の国である。

司馬遼太郎

「街道をゆく」より」とあった。

バスで長府市に向かう。まず功山寺。

鎌倉時代の創建で、仏殿は我が国最古の禅寺様式を残しており、国宝に指定されているというので真っ先に見学。この寺の年譜を見ていると、そっくりそのまま長州の歴史と重なる。毛利元就に追われた大内義長が自刃したのもこの寺であり、初代秀元をはじめ九人の藩主たちの墓があった。

高杉晋作が伊藤博文らを率いて挙兵した処でもある。

当時、京都から落ちのびてきた倒幕派の公卿七人のうち三条実美はじめ五名がこの寺に潜んでいた。現在、「五卿の間」として保存されている。晋作は此処で、私兵ではない証とするため、五卿に挨拶したのち挙兵したのだった。やがて奇兵隊のほか諸隊も立ち上がり武士団の俗論軍を圧倒、倒幕の藩論を確定させた。もし功山寺挙兵が失敗していたら、明治維新は何年か遅れていただろうと云われるほどの重要な場面である。

ところで晋作が奇兵隊を構想したのは、前年の文久二年に上海に渡った経験が大きく作用していたといわれる。彼がそこで見た清朝の国家防衛の惨状と、アジアを次々と植民地化していった英国軍の力をまざまざと痛感した結果だった。

巧山寺門前には「高杉晋作回天義挙之所」と刻まれた石碑が建立されていたが、成程その碑陰の撰文には「回天」「義挙」の文字がやたらに多かった。

また境内には鎧を身につけ、馬に跨った晋作の立派な像もあった。その像を見ながら、幕末、「世はさかさまになりにけり乗った人より馬が丸顔」という俚謡が流行ったことを思い出した。たしかに彼の肖像画をみると馬づらである。

功山寺を辞した我々は近くにある長府毛利邸も見学した。

長府毛利家十四代当主の毛利元敏が明治三十一年、東京から帰任して建てた邸宅である。

なお、幕末時の長州藩第十三代藩主毛利敬親は長府毛利家ではなく、安芸毛利家の出である。敬親は家臣の意見に対して異議を唱えることが無く、常に「うん、そうせい」と返答していたため「そうせい候」と呼ばれたと司馬は書いているが、彼が吉田松陰や高杉晋作など革新派の有能な家臣を好んで登用し、活躍させたことによって、はじめて出来た態度であったであろう。

近くの乃木神社にも寄った。全国に五つあるという乃木神社の一つ。境内には夫婦の銅像や乃木将軍が育った家が復元されていた。乃木の生まれは江戸だが、十歳のとき長府藩士だった父とともに長府に帰り、十六歳で萩に従学するまで此処で過ごした。

5「西の京」山口の歴史散歩

室町時代、守護大名大内氏が京を模して築いたという山口には、華やかな大内文化の面影を色濃く残していると云われるが、その代表が瑠璃光寺五重塔（国宝）であろう。

「街道をゆく」（長州路）でも、先を急ぐ司馬は山口市内は歩いてはいないが、瑠璃光寺だけは見ておこうと一人で出かけている。

瑠璃光寺は足利幕府と戦い泉州堺に倒れた（応永の乱）大内義弘の菩提を弔うため一四四二年に建てられたという。夕闇に佇む塔の優美な姿を眺めていると、なにか京都や奈良にいるような錯覚を禁じえなかった。

その五重塔の傍らに「司馬遼太郎文学碑」が建てられていた。

「（長州は、いい搭をもっている）と、惚れぼれするおもいであった。長州人の優しさというものは、山口に八街九陌をつくった大内弘世や、ザビエルを保護した義隆などの大内文化を知らねば分からない気もする。

司馬遼太郎

「街道をゆく」第一巻　長州路より」

帰宅してから念のため、「大内家系図」を調べると、南北朝のころ、山口に本拠地を移した大内弘世（十七世）は前記義弘の父親にあたり、この時代に大内氏の勢力を周防と長門の二カ国に拡大した。京から公家の娘を夫人に迎え、山口の都市設計を改めて京都風にし、言葉までも模したというから徹底的な「西の京」である。

義弘（十八世）の死後、大内家の勢力は一時的に衰退したが、戦国時代の二十五世義興は西国七カ国を併せ持つ大守となり、その子義隆に至って絶頂期を迎えている。

司馬の文学碑は彼の死後の二〇〇〇年に建てられたが、その年の八月七日（司馬の誕生日）に除幕式が行われたとは、その晩の交流会で挨拶した「大内文化のまちづくり協議会」会長の福田さんの話だった。

その文学碑にも記されているザビエルと山口とは縁が深い。

天文十八年、鹿児島に着いたザビエルは翌年、布教許可を得るため京に向かうが、その途時、西国一の実力大名の大内義隆を訪ねて約一カ月滞山。更に退京後、再び山口に来て日本で最初の布教の許可を得ている。

滞在五ケ月後、陶氏の反乱により大内氏滅亡の直前に豊後の大友氏の招きで離山、危うく難を逃れた。

その縁で市内には「ザビエル記念聖堂」がある。我々は車窓見学で済ましたが、私は十数年前、ザビエルの生家ザビエル城（スペイン）を訪れた際、近くの「ホテル、ヤマグチ」で昼食を摂ったことを思い出した。司馬もこのホテルに泊まったことを「街道をゆく（南蛮のみち二）」で書いている。

なお、現在スペイン、パンプローナ市と山口市はザビエルの取り持つ縁で姉妹都市となっている。

近くにある「菜香亭」は幕末の文久三年、藩庁が萩から山口に移された際、一緒に山口に移り住んだ萩藩の膳部職が開業した料亭。現在、料亭は廃止して、市民文化活動の場となっているが、かっての料亭は政治の場としての顔を持っていたと云う。

そのためか大広間には有名政治家の扁額、掛軸が所せましと飾られていた。山口県は日本一の首相輩出県として有名だが、その歴代の首相（伊藤博文、山縣有朋、桂

太郎、寺内正毅、田中義一、岸信介、佐藤栄作、安倍普三）を始め木戸孝允、井上薫、三浦梧郎、山田顕義、重宗雄三と枚挙に暇がない。

現首相の扁額は「寂然不動」とあった。自身で直接届けられたとのことだった。

その他、田中角栄、竹下登といった山口に関係のない政治家のものもあったが、かって此処は「佐藤派の根城」と聞けば頷ける。

市中心部にある「旧山口藩庁門」は元治元年（一八六四）時の藩主毛利敬親が藩政の本拠地を萩から山口へ移すため建設した山口政事堂の表門として建造されたものといわれる。建造当時は、多分、高杉晋作、桂小五郎、伊藤博文等の藩士が足早にこの門を往来したことだろう。

湯田温泉にある松田屋ホテルは司馬が訪山の都度、宿泊した老舗旅館だが、その近くに井上公園がある。その名の通り、明治の元勲井上薫の生誕地で園内には彼の銅像や七卿の碑、中原中也の詩碑、種田山頭火の句碑などがあったが、その一隅に所郁太郎の顕彰碑を見つけた。

元治元年、井上薫の遭難に駈けつけ、数か所の刀傷を五〇数針縫い合わせる大手術をして、瀕死の井上を奇跡的に救った人物。日本歴史上、一度だけ登場する。

司馬の短編「美濃浪人」は彼を主人公にしている。所のお陰で井上は奇跡的に一命をとりとめられたが、当の本人はそれから間もなく、にわかに病死した。墓は山口市内にあるという。

〈所郁太郎の名は忘れられた。元来が美濃浪人であり、藩外人の集団に入っていたために、維新後の長州人たちも、思いだすことがなかった。ただ、井上聞多だけは覚えている。〉

一方、井上の遭難を描いた短篇「死んでも死なぬ」でも所は登場するが、井上はこの現場で死ぬべきであったかもしれないと司馬が書いているのは面白い。井上は維新政府では伊藤の下で顕職を歴任したが、〈貪官汚吏の巨魁〉としての悪名を残したからというのである。

一方で「世に棲む日日」では井上を〈利かん気で可愛げのある、とびきりの物知り。優れた現実家〉とも評している。

性と化粧（九）

鈴木守

第九節　性に関わる身嗜みの化粧

『性と化粧』の資料探しも大詰めに近着いてきた。振り帰ると、何か忘れ物が残っているような感じである。資料メモをみると、『今昔吉原大鑑一八三四』に「遊女たちは鮫肌の客と歯を磨かぬ客を敬遠」と残っていた。この一文を裏返せば「廓へ足を運ぶ遊冶郎にとって歯磨きは、性行為を果たすために必要な化粧であり、鮫肌の手入れも性に関わる化粧行為であると云えそうである。遊冶郎だけではない。世の中の全ての大人が、肌を契った異性に対して、配慮すべき身嗜みの化粧と心得るべきである。

一．鮫肌用の化粧

女郎衆が鮫肌の客を敬遠したのは、一晩中、ザラザラした肌の相手と同衾するのは苦痛だったに違いない。男だって肌が荒れている女を抱くよりも、肌滑らかな女を好む。だったら、鮫肌野郎が傍惚れした女郎を訪なう時は、肌の手入れをするのが身嗜みである。

何も鮫肌野郎だけではない。ひび、あかぎれなどの進行性指掌角皮症、主婦湿疹、口角炎・口唇炎など手荒れ、肌荒れの人は数多くいる。今昔吉原大鑑の教えは、これらの人たちにも該当し、その気になって、唇を寄せると、口唇炎では折角の気分も萎えてくる。

1）鮫肌とは

皮膚表面がザラザラした魚鱗状紋理を示す鮫肌は、学名では尋常性魚鱗癬である。この疾患は遺伝性の角化症で、魚鱗様紋理を惹起する形質はY染色体に存在する遺

伝子に基づくため、伴性遺伝によって男性に現われ易く、女性の患者は少ない。

この治療には、保湿性の角質溶解剤・尿素やサリチル酸を外用するが、難治性の皮膚疾患の一つに挙げられている。

2) 江戸時代の鮫肌用洗い粉

江戸時代にも鮫肌手当ての処方があった。貞享四年の『女用釧蒙図彙一六八七』に玉肌散、文化一〇年佐山半七丸著の『都風俗化粧伝一八一三』に艶面天上粉が著され、両書の洗い粉はともに、緑豆、滑石、白檀など七種の素材から成り、「皮表に艶を出し、肌を濃やかに柔らかくし、鮫肌にも効き目がある」と謳っていた。

3) 自薦の鮫肌手当て

江戸時代の玉肌散や艶面天上粉はさておいて、遺伝性疾患である鮫肌を完治させることは無理であり、魚鱗状態を緩和させる手立てを考えてみよう。

先ず、魚鱗状の面を研磨剤で擦り、皮表を角質溶解剤で溶かしたうえで、クリーム或いは乳液を塗布し皮膚の乾燥を防ぐ。次いで、天瓜粉を散布する。これらの処置によって魚鱗状態が緩和されるに違いない。研磨剤には歯磨に使う炭酸カルシウム、角質解溶剤には古代エジプト人も使用したイチジクなどが候補になる、最近のクリーム、乳液は保湿性に優れているので、手元にある製品で十分であるが、治療に使うサリチル酸や尿素配合の保湿製品を探すとよい。

二、歯磨き

〝はみがき〟には、歯を磨く行為と歯を磨く剤があるので、前者を〝歯磨き〟、後者を〝歯磨〟で表す。

前出、今昔吉原大鑑を待つまでもなく、江戸初期・徳川秀忠が将軍になった当時、秦宗巴が『犬枕一六〇六』に、汚い物として〝枇杷色の歯〟を挙げていた。

われわれは黄ばんだ歯でさえ、汚い歯と認識している。宗巴は黄色を通り越して枇杷色の歯である。口臭が数里先きまで臭ってきそうな感じである。こんな客と一夜、衾を共にしなければならない女郎殿に「ご愁傷様」と云いたくなる。遊冶郎が吉原へ出かける時、身嗜みに配慮しなければ、大門前で塩を撒かれても文句は云えまい。

1) 江戸時代の歯磨き風習

前出、女用釧蒙図彙には「早朝の女の身嗜みの一つとして、鶏鳴と共に起き、最初に口を漱ぐ」としていたが、都風俗化粧伝は「朝起きて歯をよく磨き、楊枝もて歯の間の滓と舌苔を取り去るべし」と記していた。一方、鉄漿付けした女性は、歯磨きで鉄漿が剥げるため、歯磨きをしなかったという。しかし、花魁は歯を染めなかったので、歯磨きを必要とした。

斯様に、時代的変遷や歯染めの有無によって歯磨き風習に異同がみられた。なお、お歯黒女性は三日に一回程度歯を染め、食後にはお茶か白湯で口漱ぎするのが風習で、その際、歯間の滓や舌苔を総楊枝で除いたため、お歯黒女は歯磨きをしなくても虫歯は少なかったようである。

歯間の滓と舌苔は口臭の原因となるので、これを除くことが慣習化していた。口臭については、本誌一二六号の『臭いと消臭剤』の項で述べたように、「情事中の女の口臭は一種独特のもので、これを防ぐ手段に〝金盞丸〟という丸薬を口中に含むと口臭は消える」と京・島原の丸剤について既に触れた。

男性の歯磨きについてである。裏長屋の宿六が朝一番に歯を磨いていると、納豆売りの声が聞こえて来た。「おーい、納豆屋」と叫ぶ。その様子を川柳子は「歯磨を吐き出しながら納豆よ」と詠んでいた。だから、江戸時代の庶民階級の人たちは、朝一番に歯を磨いていた。

『催情紀一六五七』に明暦年代の歯磨きについて「楊枝をくわえ、雪隠へ磨砂を持ち行き、ゆるゆる磨き、其後煙草をのめば、腹中よく通ずるもの也」と記されている。斯様に江戸初期、振袖火事の頃は、楊枝と砂で歯を磨いていた。だが、当時、楊枝や砂を使って歯を磨くのは、富裕階級の人々であり、庶民たちは食後に、湯か茶で漱いし食べ滓を吐き出すのが普通であった。

2) 歯磨と楊枝

明暦年代以前に、既に歯磨は作られていた。『道聴塗説一八二九』によると、歯磨事始めは、「寛永廿年、丁子屋喜左衛門、朝鮮人の伝を受て、これを製したことによる」とある。この証拠に基づけば、歯磨製造は上方で始まり、江戸へ波及したことになる。

催情記などにて知られるように、江戸時代の歯磨きは砂、或いは塩を歯磨として、楊枝で磨いていたが、歯磨粉の原料と製法についての文献は極めて乏しい。乏しいながらも具体例を拾うと、〝房州砂〟があり、これは砂を水飛（浮遊する微粒子を掬い取る方法）して得た細粉に竜脳、丁子を加えた歯磨粉としていた。塩を利用した例に〝松葉塩〟がある。これは松の実と塩を混ぜて黒焼きにした歯磨粉である。ほかに、消し炭も使われた。

歯磨具は楊枝であり、白楊の枝を削って作った。女用は柔軟な枝垂れ枝を用い、男性用は比較的堅い枝で作った。女性たちはお歯黒の剥げ落ちるのを避けるため、先を房のようにした総楊枝で歯を磨き、舌苔を落とした。

三、前報補遺—瘢痕化粧—

前報の成人表示の化粧の項で、瘢痕化粧のことを取り挙げなかった。というのは、瘢痕化粧と性戯との関係について、本誌一二一号で既に述べていたため、瘢痕が成人表示の化粧としても利用されていることを失念してしまった。

ベニンのフォン族の瘢痕は性戯に関係深いが、この地方では、少女が初潮を迎えると、その直後に最初の切り込みが行われ、ナイジェリアのティブ族女性の臍の上の瘢痕は思春期に行われ、女の割礼とも呼ばれる。

トーゴ北部のタンベルマ族では、傷痕施術は幼少期から思春期を経て成女式を迎えるまでの間に5回に別けて行われる。成女式の初日、少女たちは丸裸で祭場まで局部を隠すようにして歩き、裸体を暴すことによって瘢痕施術が完了したことを示す。この瘢痕は子供を生める体になった刻印なのである。

なお、第一節から本節まで、引用書物を本文中に紹介してきたが、そのほかにも数多くの資料を参照したので、それらの参考文献を一括して、以下に示す。

参考文献

倉野憲司校注、古事記、岩波書店、一九六三
パンセ、デランドル共著、青山典子訳、美容の歴史、白水社、一九七〇
久下司、ものと人間の文化史・化粧、法政大学出版、一九七〇
伊崎正勝、臨床皮膚科学、南山堂、一九七二
春山行夫、化粧、世界大百科事典七巻、平凡社、一九七二
芹沢長介、石器時代、同事典七巻、一九七二
中村真一郎、日本古典にみる性と愛、新潮選書、一九七五
村沢博人・津田紀代編、化粧史文献資料年表、ポーラ文化研究所、一九七九
樋口清之、化粧、化粧文化一号、一九七九
深作光貞、化粧とは、日本香粧品科学会誌五号、一九八二
樋口清之、化粧の文化史、国際商業出版、一九八二
池田次郎、日本人の起源、講談社現代新書、一九八二
高橋雅夫校注、佐山半七丸著、都風俗化粧伝、平凡社、一九八二
簇野倫監修、標準皮膚科学、医学書院、一九八三
今西錦司・他、人類の誕生、河出書房新社、一九八九
J・コードウエル著、早川律子訳監修、化粧の心理学、週刊粧業、一九八八
鈴木守、化粧品技術者のみた化粧品のルーツ、日本化粧品技術者会雑誌二二号、一九八八
鈴木守、化粧品進化論、化粧文化一八号、一九八八

河合雅雄、サルからヒトへの物語、小学館、一九九二
阿部年晴ほか、世界の神話伝説、自由国民社、一九九二
村沢博人、顔の文化史、東書選書、一九九二
F・ファッキーニ、片山一道訳、人類の起源、同朋舎出版、一九九三
鈴木守、コスメトロジー入門、幸書房、一九九三
鈴木守、コスメトロジーの実践、幸書房、一九九四
諏訪元、新書アフリカ史、講談社現代新書、一九九七
馬場悠男監修、人類の起源、集英社、一九九九
河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九
葉山杉夫、ヒトの誕生、PHP新書、一九九九
貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社学術文庫、二〇〇〇
中村明蔵、隼人の古代史、平凡社、二〇〇一
渡辺信一郎、江戸の化粧―川柳で知る女の文化―、平凡社新書、二〇〇二
坂本太郎ら校注、日本書記（一）、岩波文庫、二〇〇三

［完］

村雨

横山正義

一、魚釣り

昭和二十二年のことです。私は小学校四年生でした。叔父に連れられて、菊川に魚釣りに出かけました。

叔父は県庁に勤務していました。「平和で何でも自由な発言ができる民主主義の時代が来る」これからの未来に希望を語っていました。

川土手を海の方まで歩いて、魚のえさ場になっているような、「よどみ」のある場所を探しながら約十キロ釣りを続けました。

東に牧の原の上に富士山が見え、空は夏の「うねり」雲がとれ、秋の空です。菊川は南アルプスに連なる、粟が岳の麓を水源としています。西は小笠山です。牧の原、粟が岳、小笠山からの水を集めて、遠州灘に注ぎます。

駿遠線（藤枝から袋井まで駿河湾、遠州灘沿いを走る蒸気機関車）の線路を越えると、海が見えました。しかし川口は「なぎ」で「浮」が良く見えません。ひき返し釣り場を探しながら帰途につきました。

はぜが十匹ほど釣れ、感触は新鮮でした。

夕空になり、西の空が黄ばんできました。すると突然、暗雲が立ち込め、村雨です。しかし濡れても体を冷やしてくれるので、こころよさのする雨でした。

村内に入ってくると、雨が止み、次第にあたりが暗くなって、霧がたちこめてきました。川の土手は改修のあとで、ごつごつして賽の河原のような、すすきの道を無言で叔父は家路に足を速め、私は跡を追い、二人で歩いていると、小高い丘の上にわずかに赤黒い玉のような物体が「スート」上の方に上がり、山尾根にそって北方に移動していくのが見えました。

そして夜霧の中に消えていきました。

叔父は「はっ、はっ、はっ、熊谷燦治（さんじ）の人魂だ」というのです。熊谷燦治は明治のはじめごろ、魔がさしたというか、「ばくち」のトラブルに巻き込まれ殺されたので怨念が残り、怨霊が火の玉となって表れ、村人に災いをするというのです。さまざまな伝承がありますが、書いてみます。

熊谷燦治は信州伊那谷飯田の人で、年末になると一年間丹精こめた農作物の加工品、干ししいたけとか、干し柿とか、漬物などを梱背負子（こりしょいこ）に入れ、内田高田の市場まで、「塩の道」を来るのが年中行事でした。

そして海の産物、塩、塩魚、昆布などを購入して帰路につくのでした。しかし換金したところで、「ばくち」に誘われ、堅実な人なので、大勝し、恨みを受け殺されたというのです。

ほかに、「流れの渡世人で悪い奴であった」とも噂されました。

熊谷家は熊谷直実の次男実景から五代目の直鎮が三河国八名郡勝山（愛知県豊川三上町）赴いて土着し、豊川、天竜川沿いに発展し、勤勉なので、現在でも一族は学者、医者、政治家として活躍し、住民の人望があり誇り高い一族と云われています。

叔父は勤務の傍ら、理想を追い、村で野球チームを作り、劇団を作り、活躍しましたが、病魔に襲われ程なく、この世を去ってしまいました。

二、叔父のこと

少し話はさかのぼるが、昭和十六年一番茶が終り、祖父は茶畑で堆肥を置き、鍬で堆肥を茶畑の間に鋤き込んでいました。私は四歳、祖父の周囲で飛び回っているだけでした。すると叔父が軍服で戦闘帽に脚絆で、突然茶畑に現れました。私は遊んでくれると思い、うれしくてはしやぎまわりました。

叔父は旧制中学を卒業と同時に徴用に応じ、神奈川県横須賀基地で、第一海軍飛行隊設計図工兵（横二補機）として働き二年の歳月が過ぎていました。

叔父は「身体検査で右の肺に薄い影があり、上官より『田舎に帰り、綺麗な空気を吸って、静岡県庁土木部道路課という所に勤務しろ、良くなるから、また、戻って来いよ』といわれ、上官や友達から見送られた、これから県庁で働く」と祖父に告げました。祖父は涙を一杯浮かべて鍬を止めることも、立つこともしませんでした。涙があふれ出るからです。

祖父は前年昭和十五年の九月に祖母を失い、あけて三月に伯父、東京に遊学し、就職したが病死し、私の父も

高等教育を受けていたが病床にあり、それから二ヶ月後にこの世をさりました。

叔父は兄弟の中で一番優秀であったが、経済的に進学できませんでした。

祖父は婿養子でした。近くに義兄が二人いて、なにかも命令に従わざるを得ない立場にあり、「日の目」を見る場所はありませんでした。田畑は全部抵当に入っていて、子供の教育に掛けたのでした。どこかで「日の目」をみるという淡い希望があったのですが、ことごとく潰れたのでした。

叔父は昭和十六年より勤務をはじめたのですが、県庁の定期健診に再検査も注意されることも無く、十九年には完治したといわれました。

同年代の青年が出征していくのに後ろめたさもあり、念願していたのですが、再徴用の話はありませんでした。この間、富士山に三回登山し、野球、水泳、卓球、スキーなど運動し、健康に注意していたのでした。

叔父は昭和十八年より二十三年まで、日記を記していました。

三、叔父の日記

昭和十八年元旦

大東亜戦争第二年の昭和十八年春を迎える。

広大なる戦線に戦果いよいよ上がり国威八紘に光があたる。賀すべきかなこの新年謹んで皇恩国恩を拝謝し奉り、護国の英霊に感謝を捧げ、前線銃後相率いてさらに奮闘を誓わん。

私は第一に勤務を欠かさぬことを誓う。運動を今年のモットーとしたい。登山、野球等できることはなんでも進んでやること。文学方面にも足をふみいれたい。文章もできるだけ書きたい。最後に家庭においては父を助け家事を一切行いたい。伯母さんも可愛がること。村の常会にも今年は出てみたい。

昭和十九年元旦

大東亜戦第三年のめでたい正月を迎えて、我々はますます勝ち抜く決意を新たにしたのである。「今年こそ」誰もが叫んだ言葉である。自分の今年こそとは一、健康報国、一、増産報国、一、行政報国、また明るい生活、規則正しい生活、面白い生活、等によって家庭にも臨み、役所にも臨み、日々を愉快に面白く過ごすことに努力すること。趣味として登山、野球、スキー、水泳、卓球、釣り、音楽等を完全に身に付けること。日曜日、祭日等も増産に精を出し、時間をみて趣味を身に付けるよう努力すること。読書等出来うる限り教養方面に伸ばして、小説等無駄物は少なく読むよう心がける。農大の講義録はよく勉強して指導者としての頭を作ること。法律方面

は早稲田に入学することにする。なんと言っても忙しい年だ。

昭和二十年元旦

重大決戦に突入した二十年。とび起きてしまった。新しい希望がもくもくと湧き出てくる。いつも今年こそあれもこれもと思うが、過去には実行ができなかったことを残念に思う。しかし何でも今年こそ男としての生きる道を踏むことだ。仕事に忠実であること。皇恩国土親恩家庭を忘れることなく決戦の一戦士として立派に職務を完遂することである。試練は自分を待っている。「なんとこれしき」と頑張りぬくことが必要だ。新年を迎えて戦争に勝ち抜くことは、各人の試練に勝ち抜くことであって如何なる事態が現れてもがんばって、最後の勝利を得ることが必要だ。

昭和二十一年元旦

多事多難だった昭和二十年を送って、今日から新しい二十一年が来たのだ。希望、もくもくと沸き上がって来る喜び、二十六歳の春を迎えて感無量である。社会的に家庭的に今年こそ頑張り抜いて見る覚悟だ。すべて清算し、新しい白紙に新しい建設を一字々並べていこう。心強い有意義な一年で通り抜けたいと考える。仕事も充実して、「びしっ」と頑張りぬいて民衆のために報いるべく努力しよう。人間の再建である。人間としてもっている長所を伸ばして、立派に進んでいくことに努力することだ。他人の口を気にするようでは本来の自分の姿に帰ったのではない。

昭和二十二年元旦

昭和二十二年を迎えて、希望と情熱とに燃えつくしたいと願っている。実行の年として何でも突っ込んで生きたい。そして最後まで頑張りぬきたい。それには健康だ。そして実行だ。好かれることだ。真実な行動だ。確たる計画だ。正しい批判だ。信用だ。仕事に社交に家庭に全て自己の愛と情を持って進むことだ。父に孝、仕事に忠、友に愛。計画に熱と情を、指導しつつ指導され、ともに楽しく行動をすることだ。職場の美しい団結、社会の正しい行為、村における青年の指導あくまで意気と熱をもって、反対のあるのはあたりまえだ。そんなものに負けていることはできない。何でも若さをもって行動に移すことが必至だ。俺の実行の年だ。俺の頭がいかに人々を動かすか。俺はあらん限りの熱と意気と頭をもっていく。(小学校四年生の私が叔父と一緒に釣りに行ったのはこの年の秋です)

昭和二十三年元旦

昭和二十三年二十八歳の年を迎え、ますます盛んにあ

らゆる面において活躍しなければならない。二十八年間、今日のこの日に大きな希望を持って望んだ。しかしそれはただの理想であって現実ではなかった。今年こそという気持ちは実に良いがそれが実行できないのは実に淋しいことである。意思の弱いのか又意気地がないのか兎に角、今までの自分は駄目だった。しかし今年こそきっと決行するぞ、今ここで書き上げる今年の指針を。

一、健康であること。
二、職務に忠実であること。
三、親に孝養すること。
四、村の文化向上に努めること。
五、教養を高め以って人の範にたること。

以上の五大目標に向かって今年こそ邁進しよう。将来の自分のために公共のためになってこそ自分の生きがいがあるのだ。今年一年をみっちりと勉強に実行に。

昭和二十三年十一月九日

遠いところに一人ぼっちで居たい。気苦労も何もいらない。現在のままでは俺は救われない。自滅する、死ねばそれで終りだ。死ぬことが一番に早く楽な事かも知れない。考えて頭が変になり、気が違うかもしれない。忘れようみんな。

新しく生まれ変わることに努めようとすれど忘れ難きかずかず……。

俺にはこんな大病は初めてのことだ。ひと月になるが起き上がれない、疲れてしまう。

病気とは実に辛いものだ。仕事をしているほうがはるかに楽しい。何日になったら起きられるだろう。早く自分の思うようなことがしたい。絵を書いたり、旅行したりしたい。でも肺病は一生治らぬかもしれない。とにかく起きたい。

昭和二十三年十一月十一日

字が書けることはうれしいことだ。己の苦楽を存分に表現できるから。今日のような美しい小春日和の空に、俺の脳の中も「スーウ」としてくれたら、しかしそうでないのが、悲しい。

我が儘も病気によってたまらなく度をこしてくる。家に居たくない。遠い所で一人ぼっちで居たい。病気になれば愛情の無い、ひとりぼっちで形式ばかりの人情になり悲しい。肺病なんてなぜあるのだろう。人は誰も恐れている。この病気になれば一生を人から後ろ指される。まったく馬鹿な病気にとりつかれたものさ……。

死ねば一番楽さ。なにもかも終りだ。早く死んだほうが良いかもしれない、快くなるかもしれない。生きたいと思うことがスケベー根性というやつだ。

この日記を最後として、叔父は翌年昭和二十四年三月

この世をさりました。二十九歳、旧制中学卒業後十年の命でした。

叔父が活躍したのは僅かな期間でしたが、私には沢山の記憶を残してくれました。

叔父が勤務のかたわら、村芝居の演出をし、音楽のグループをつくり、発表会を開催、娯楽のとぼしい農村の戦後に多くの人が見にきてくれたこと。

キャッチボールしかしなかった野球の遊びに、小さな村ながらチームを作り、大きな村と試合し、何時も負けコケだったこと。

私の印象にあるのは大きな村の強豪チームとの試合で、叔父がホームランを打った時です。大きな小学校のグランドで青い空に、放物線を描いたボールが舞い上がり、場外の田に飛んだ時です。この時は勝ちました。

今は、役者であった青年も、野球の選手だった青年もこの世にいる人は少なくなりました。

叔父は勤務も一生懸命やり、将来を考え、内務省への出向希望を提出していました。すでに主事に昇進していたので、終戦後、軍属であったころの仲間を県庁に招き、一緒に勤務していました。

彼岸花が咲き誇っていた、あの時の村雨、「人魂」は叔父の魂であったように、偲ばれるのです。

彼岸花は秋の川岸に、赤く燃えるように咲きます。曼珠沙華（まんじゅしゃげ）とも云い、梵語で天界の赤い花の意味だといいます。

（昔、球根は有毒だが、あく抜きをすれば、炭水化物として米不作のとき、非常食であったという）

四、A氏のこと

昭和五十六年祖父が九十三歳でこの世を去りました。その通夜にA氏がお悔やみに来て送って下さいました。祖父の枕もとでよもやま話の中、こんな話をされました。

A氏は叔父の小学校の同級生でした。A氏は小学校に入学すると、先生の言うことが、真実とは思えないと思うようになったというのです。昭和の始めの話です。それ以来、学校のテストは全て、名前だけ書くようにしたという。叔父は「A氏は勉強ができない」と言っていました。A氏は徴兵され、チヤイナインドの激戦最前線に派兵されました。そこで上官の「突撃」を繰り返すのには、信用置けなかったと回顧されました。銃弾の行き交う中、潜り抜けてA氏は生還されました。

A氏の風貌は歴戦の「つわもの」という印象ではなく、穏やかな紳士です。

昭和のはじめ、祖父は四十過ぎてから農業の傍ら、村

内の卵の集荷を始め、その事業が金融、郵政、味噌醤油の製造、米の集荷、米の精米、製材、農具の販売など農業会という組織が、村の有力者のご支援で成立していたのでした。そこにA氏が復員し、入会してきたのでした。

農業会には村の才媛の職場になっていたので、A氏は才媛のひとりと結婚することになり、祖父が仲人を勤めさせて頂きました。

A氏のご子息は地元の高校を一番で入学し、一流大学に合格、卒後、社会の一線でご活躍されています。A氏は現在、九十歳過ぎても、ご健在で車を乗る姿をおみかけします。

農業会という組織も戦後まもなく、農協という組織になり、祖父は退きました。

そして祖父は叔父が旧制中卒業後十年働き、それが戦後の超インフレ時代であったので、退職金が戦前とは桁が違うほど貰い、子供を失うと引き換えに、借金から逃れることが出来ました。

五、まとめ

孔子は老子に面会して問うたという。

道と徳について、教えを願い、自分の思うところをのべたところ。

老子いわく。

「良い商人は品物を沢山持っていてもそれは店の奥にしまい、表で何も持っていないようなふりをするものです。徳の高い人も同じでしょう。どれだけ徳を積んでいても、それを隠して愚者のようなふりをするのが真の賢者なのです。しかしあなたは、知識をこれ見よがしに鼻先にぶら下げて、野心が顔に表れ過ぎているようですね」

孔子の感想

「老子という人はあたかも天に昇る竜のような人て私ごときの人間で計り知ることが出来ない……」

老子は孔子に対する批判は「かくあるべしと言う言葉に捉われる」ということです。

叔父は捉われて、現在の医学の技術であれば、簡単に治療できたのでしょうが、当時、過剰労働となり生命を失いました。

A氏は老子の説・無為自然に生き、生命を保ったのでしょう。

生物学者ダーウインは端的に表現します。

「環境に適応した生物のみが生命を保つことができる」

A氏は危ないものは、危ないと素直に感じたと言う事でしょう。

密室銀行（十四）

「透明な時間」改題

匠　克仁

「宅見　勝弘」改名

【前号までのあらすじ】

東西銀行赤坂支店の金庫室の密室で支店長が殺された。

密室会議で経営方針が決まるということで、一部のマスコミから東西銀行は密室銀行とからかって呼ばれた。

（連載の途中であるが、129号で書いた理由で改題をする。同時に改名もする。改名の理由は、「鉄のペリカン」が会社のプリンターから出たので、同じミスしても本名がばれないようするため、ということでは、じぇじぇじぇじぇったいにない！そのような小説みたいなことは現実に起きる訳がない！ぼくは、そんな　ヌケなことを　ったくしない。ぼくは生れてから今　でたったの一度たりとも嘘をついったーことはない。このことが嘘でないことは命をかけてもよい。だいたい嘘つきは小説家の始まりである。実は、ぼくが改名したのは、個人的な問題でなく、日本国憲法や人類平和に関係する理由のためである。）

密室会議のメンバーは、東城出身の頭取・副頭取と、西都出身の会長・副頭取の四名である。

水と油にも等しい東城銀行と西都銀行の関係であるが、四名には鉄の結束があると言われている。

それは『MOF担（モフタン）』の関係である。MOF担とはMOF（Ministry of Finance）つまり大蔵省（現財務省）を担当する銀行員を指す。

銀行員の中でもエリート中のエリートと言われる存在である。

東城銀行も西都銀行も歴代の頭取はMOF担の経験者である。逆に、MOF担は将来の頭取候補であると言われてきた。

現在は大蔵省が財務省となり、省庁再編により金融行

政が財務省から金融庁の管轄になった。

ＭＯＦ担も無くなったのであるが、金融庁（Financial Services Agency）を担当するＦＳＡ担というのが代わりにできている。『もふたん』だとまだ言いやすいが、『ふさたん』とは呼びにくい。

現在でも東西銀行は、ＦＳＡ担が将来の頭取候補と呼ばれている。

九十年代の同時期に会長と頭取がＭＯＦ担で、副頭取がそのサブ担当で次のＭＯＦ担であった。

一九九八年に都市銀行のＭＯＦ担が大蔵省接待汚職事件で逮捕された。接待で使ったのは、ノーパンしゃぶしゃぶである。

東城と西都のＭＯＦ担であった会長・頭取たち四名もノーパンしゃぶしゃぶを接待に使っていたという。出身銀行よりも、ノーパンしゃぶしゃぶの絆の方が強かったのである。

銀行員が大蔵官僚の接待をノーパンしゃぶしゃぶでした理由は、性風俗的な接待を飲食費の領収書で落とすためである。

斉藤会長は、『ドＳ』と言われている。

会長がドＳというのは、頭にドがつくほど根っからの西都銀行マンという意味である。

もっとも西都行員は肉食系といわれるくらいで、サディスティックな雰囲気の人間が多いのである。

東西銀行は旧行意識が抜け切れておらず、旧東城をＴ、旧西都をＳと呼んでいる。

システムの統合が進んでいないこともあり、支店の看板や入口には大きくＳかＴのマークが付けられている。ＡＴＭ一台ごとにもＳ、Ｔと書いている。

店舗一覧の店舗名だけでなく、行員名簿にも人名の一人一人の前にＳ、Ｔと書いている。

東城銀行出身の真東頭取はドＳの会長と対比され、本当に『ドＭ』のようで、二人でＳＭコンビとなっている。

真東頭取は映画俳優のようで外見だけでなったと言われる。草食系の優男で、なんとなくマゾっぽい雰囲気がある。

もともと東城銀行には頭取の要件の一つとして、風貌が挙げられていた。歴代の頭取は全て平安貴族のような「まろは…」と言いそうな顔つきなのである。

頭取は東城銀行の顔であり、広告塔であるから、容姿端麗でなければならないという理屈である。頭取の候補にはもっと優秀な人物が多くいたのであるが、顔が醜いと最終レースで落とされた。

三井住友銀行なら、住友がＳで、さくらは三井のＭとなるので、とてもわかりやすい。

密室銀行とからかわれた東西銀行であるが、とくに密室会議で決定されたのは、人事と支店政策である。

人事部を統合する際に当然に人事部長を一人にするのだが、どちらの人事部長を外すかでもめた。

第一人事部と第二人事部と旧行で縦割りすることは、第一勧銀の失敗例を見ているだけに絶対に避けるべきと判断された。

そこで縦割りでなく、管理職クラスを別に考課する横割りの人事体制をして、無理矢理に人事部長の行く先のポストと組織を作った。

それが部長部であり、東城の人事部長が部長部長になったのである。

支店の廃店はほとんどトップダウンで決定した。その中で会長・頭取の初めて支店長をした支店はつぶさないという暗黙のルールがあった。

会長が初支店長をしたのは、『西東京市南町北支店』である。赤字店舗であり、隣に大きな田無支店があるにも関わらず、つぶれないで残っている。

この支店はもともと西都銀行の田無支店であったが、田無支店が東城にもあったので、住所から名前を変更した。

たまたま旧西都の田無支店は、旧東城の田無支店の東隣なので、東田無支店か田無東支店になる予定だったが、東を付けるのに西都サイドが反対して、住所から名前をつけたのである。

なお、店舗外ＡＴＭがあって、正式名称は『東西銀行西東京市南町北支店西東京市南町南出張所』である。

東と西に執着があるせいか変更する支店名に東城は東を西都は西をつけたがった。

西葛西（にしかさい）支店も合併当時は二つあったが、西都銀行の西葛西支店は西葛西西口西支店となった。なお西葛西西口西支店は東東京東ブロックになる。

東西銀行は支店や営業単位（ブロック）の名称に東西だけでなく、南北もつける傾向にある。山形の営業地域を東北の南西ということで、東北南西ブロックと呼んでいる。岩手ブロックでなく東北東北ブロックである。

北北見支店は北北海道北ブロックである。

合併による支店名変更では似た名前の支店ができて振込など現場を混乱させている。

例えば、東大阪市と大阪駅の東にある支店名はよく間違える、東大阪支店と大阪東支店と大阪東口支店と東大阪東支店と東東大阪支店がある。

銀行業界以外でも再編が進んでおり、損害保険業界では日本最大規模のＮＪグループが発足した。Ｎは日本で、Ｊはジャパンである。

グループの中でもさらに再編が進んで、日本海上保険とジャパン火災保険とが合併して、日本ジャパン損害保険が誕生する。

プロレス業界でも合併して、新日本全日本大日本プロレスが誕生した。

（いか～～～～～～～～～～ん。六ヶ月もかけて三頁しか書けなかった）

液体のてんとうむし

匠　克仁

ぼくには二つだけ悩みがある。一つは、お尻の穴からという、まんじの1行分くらいの長さのねじれた毛が生えていて、その毛を抜こうかどうか悩んでいる。

二つ目は、地球上の七十億人の人類の内、十億人が飢えや病気に苦しんでいるというが、この十億人をどうしたら救うことができるか、と悩んでいる。

第一の悩みは深刻である。場所が場所なだけに不用意に抜いて、傷口からばい菌が入ると大変なことになる。

第二の悩みも同じように深刻である。ぼくが何らかの行動をおこすことで確実に世界の人の命が救われる。原価一円のワクチンで救える多くの命が、地球上に存在している。

今まさに飢えに苦しんでいる人というのは、運命のサイコロが違えば、まさしく自分自身がなっていた存在である。アフリカの餓死寸前の子どもの姿を見て、自分がその子として生まれた可能性があったと感じる。

ぼくは、たまたま恵まれた一個人として生きているのに、その恩恵に対して何十億分の一のお返しを地球や社会に対して返していない、その状態自体に悩んでいる。

自分の書いたものが売れて、印税自動寄付システムでどこか地球の裏側で命が救われたらと夢想したりする。

他にも悩みは何十数百個かあるが、この二つの悩みの間のグラデーションというかヴァリエーションにすぎない。

さて、今回は芸術的なオープニングとなったが、内容は哲学的なものである。

今回の主題は、『実存主義的懊悩（おうのう）及理想主義的懊悩於混沌（カオス）理論的多変量解析・重回帰分析的叙述』である。

たまに晦渋（かいじゅう）な文章を書きたくなる。晦渋というのは、「難しいということを難しく書くこと」である。ぼくの人格の中の哲学者がしゃしゃり出てくるのである。

韜晦（とうかい）な文章も書きたくなる。韜晦というのは「自分の本音を知らせず表現すること」である。

晦渋といえば、たまに怪獣のような文章を書くが、ぼくの心の中の幼稚なイタズラっ子が出てくるのである。オープニングは怪獣のような文章というよりミミズのような文章になった。

むずかしい文章を書くと、読者に放置プレイされる。ぼくは放置プレイされるのが、ムチやロウソクより嫌いである。

ちょっともっとずっとほっとするように書く。

ちなみに、ぼくは、『はひふへほ』で文章を書いている。

ぼくは、はっとさせて、ひ～～～といわせて、ふっとさせて、へ～～～とおもわせて、ほっとさせるように、また、はははひひひふふふへへへほほほと笑わせるように考えて、文章を書いたり、推敲する。

はを強くして、ひを小さくして、ふを混ぜて、へを抑えて、ほを上げて……等と考えながら、書き直す。はひふへほ推敲法はおすすめである。

今回も推敲して、オープニングで、はっとさせたのである。この後、ひ～～がきて、ちゃんと、ほっで終わる。

『金銀妖眼』は、へを多く使ったが、今回は、ひを多くブレンドしている。

というわけで、ぼくの文章を読んでお分かりのように、ぼくは悩みの多い人間である。ぼくの文章からは、毛、いや悩みが飛び出てくるように感じると思う。

悩みもたくさんありすぎるので、過去の三つの悩みを述べてみる。

一

ぼくは小学一年生のときから悩みがあった。小一には小一なみの悩みがあるものである。おそらく皆さんも小学校に入ったときに悩んだであろう。

ぼくの小学生になったときの悩みというのは、

「どうしたら人生をやり直せるか」

である。

ぼくの人生は終わったと悩んでいた。このままでは生きていたとしても、まともな人生を送れないと真剣に悩んでいた。生きていても仕方がないのでないかと悩んでいた。

幼稚園はクリスチャン系で、園児は祝福されていた。小学生になったら、あなたたちは差別されているという扱いを受けたのである。

ぼくは、生まれてすぐに公営住宅に引っ越した。いわゆる『被差別■■』という地域である。（言葉に心理的な

抵抗があるので、伏字にする）

小学生から人権教育というか被差別■■の問題を教わった。

被差別■■で教える先生は教育熱心な先生が多かったかもしれない。しかし、被差別■■の問題を持ち出されるたびに、ぼくは子ども心に傷ついた。

人権教育は高学年になってからと言われるかもしれない。全校朝礼でも■■差別の話が出るので、一年生でも分かる子は分かる。

校門の前に■■差別反対などの看板があれば、一年生でもその意味を深刻に考える。

だいたい、校内放送で■■差別反対の歌が流れているので、今でも脳内でリフレインされる。

小一の感受性は個人個人によって異なるだろう。小一で■■差別の話を聞いても影響を受けない人の方が多いかもしれない。

しかし、ぼくは確実に強い影響を受けている。

ぼくは冤罪（えんざい）という言葉を小学一年生で知っていた。

子ども心にも、なぜ差別する側でなく、差別される側にこんな教育をするんだろうと疑問に思っていた。

小学生のぼくが自分の住むところを選べるわけがないのに、なんとも不条理を感じていた。

悩みといよりも恐怖であるが、住所や出身小学校で、将来は殺人犯人にでっちあげられるかもしれない、と怖れていたのである。

これは小一には重すぎる恐怖である。

密室の中で目が覚めたら、隣に死体が転がっていて、犯人にされるという想像をしたりした。

密室殺人事件のアイデアは、舞台は銀行でないが小一頃の悩みから生まれたものである。

被差別■■の出身者が銀行のようなオカタイ会社に就職ができないと聞いた。

ぼくも最近は■■差別の問題は解消されてきていると思っていた。しかし、現実には根強く残っている。

橋下徹大阪市長が、週刊朝日で被差別■■出身として書かれた。人権擁護を主張する朝日新聞グループが、未だにそんなことをしている。

ぼくは彼と共通点はあまりない。あえていえば、大阪の公立高校から早稲田大学に進学し、同時期に同じキャンパスに居たくらいである。ぼくのゼミ生が彼と同期に司法試験に合格したと思う。

彼は、ぼくとは比べ物にならない有名な人だから、出身のことを書かれたかもしれない。しかし、同じ論理を使えば、ぼくが有名な文学賞でも取ったら被差別■■出身と書かれることになる。

先日も昔の先輩と会ったとき、ある殺人犯人のことを被差別■■出身と大発見のように話す人がいた。

つい最近でも、三十才位の人が、「あそこは、ヨツなんだ。ヨツってわかるか」とぼくに言って、親指を折り曲げてひらひらさせたことがある。あそこというのは、ぼくの住む地域である。

ヨツというのは、被差別■■に住んでいる人を指す差別用語である。被差別■■の人間は指が五本でなく四本しかないという偏見に満ちた表現である。三十才くらいの人が未だ、差別表現をするということである。

日本では未だ基本的人権が守られておらず、人類の平等性が無視されていると実感している。今回から本名を使わなくなった真の理由である。

ぼくは本来、匿名性に関しては否定的な考えである。自分に主義主張があるのであれば、自らのプライバシーを公開してからするべきと今まで考えていた。

永年その信念を持っていたが、他人の心は変えられないと悟った。その理想主義的観念を改めることにした。

ぼくはこれから本名を使わず、ペンネームでしか書かない。

まんじ131号から読み始めた読者は、ぼくの本名を知ることはない。

実は、ペンネームを使って書くことが快感になっている。本名を知られないということが、こんなにも爽快なものかと非常に愉快に感じている。

はっ。はっ。はっ。はっ。はっ。はっ。はっ。

例えると、完璧な密室殺人をした犯人のような心境である。あるいは、完璧な密室トリックを考案した推理作家の気持ちである。

なんか笑いがとまらないのである。

ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。

ぼくは昔からテストで百点をとったときとか、自画自賛で満足する仕事をしたときに、こんなバルタン星人〈注〉のような笑い方をする。

〈注〉バルタン星人とはウルトラマンに登場する悪役で、両腕がハサミというか直腸鏡でできたザリガニのような宇宙の怪獣である。時代劇の悪徳代官が「越前屋、お主も悪よのう」と言った後の笑い声にエレクトロニックなエコーをかけたように笑うのが、特徴である）

バルタン星人はさておき、本論に戻そう。

小学二年生になったぼくは、一年前のぼくに回答した。

「住めば都」

今から考えてもそう思う。今もそこに住んでいるから、偽りのない本心である。

小一レベルの悩みは、小二で解決したのである。

二

はひふへほ推敲法を紹介したが、この二章は、はひふへほが全く一つもない。

ぼくが文章を書く別の目的はデトックスである。デトックスとは体の中から毒素を吐き出すことである。

つまり、この章は、脳から発生した排泄物である。
カラオケで下手な歌を絶唱してストレスを解消する感じで、この文章を書いている。
自分でもつまらないと思いながら、書かずにいられないのである。
さて、二番目の悩みは、大学受験である。
既に三十年近くも経っているのに、今でも受験の悪夢にうなされる。
ぼくが現役で受験した大学は東京大学だけで、落ちたら高卒で働くという約束だった。
人生の岐路で、東大卒か高卒かというのは、ものすごいプレッシャーである。
二次試験の二日間は一睡もできない状態であった。結局はパニック状態で試験を受けて、落ちてしまった。
とりあえず働かなければいけないので、不合格の翌日朝から新聞配達を始めた。
結局は、梅雨の時期までしか続かなかったが、ずいぶんとみじめな思いをした。
今でも思い出すのが、暴風雨の中、交差点の水たまりに自転車で転倒したことである。水たまりにへたりこんだまま、新聞紙が激しい雨でヘドロになっていくのを暫く呆然と眺めていた。
同級生が京都大学や大阪大学でキャンパスライフを謳歌しているのに、自分はなんてみじめなのだろうと世の中を恨んだ。
新聞配達をしたとはいえ、東大を諦めきれず、結局は浪人生活をしたのである。特待生としてただで地元の予備校の京大・阪大コースに通った。
京大と阪大は受験する気がなかったが、大阪にはただの東大受験用の予備校がなかったのである。
翌年も東大を受験したが、また落ちてしまった。二回目も駄目だったので、両親との約束で本当ならこのまま高卒で社会に出たはずなのである。
しかし、思いもかけない展開で、ぼくは早稲田大学法学部に進学することになった。
もともと貧乏なので、私立大学に行くつもりも余裕も無かった。しかし、うぬぼれの強いぼくは、頭が悪くて大学に行けなかったと人から思われたくなかった。
合格しても絶対に入学しない条件で私立大学を一校だけ受験させてもらったのである。いわゆる記念受験というものである。
たまたま偏差値ランキング表の一番上であったから、早稲田だけ受験した。もし、そのランキング表の一番上が慶應であったら。慶應だけを受けた。
早稲田の入学金を納めない約束なので、ぼくが早稲田に進学することは最初から不可能であった。
ところが、東大の発表前に、母が内緒で早稲田の入学金を振り込んだのである。ぼくは、もったいないと母に

怒った。
結果的には、東大に落ちてしまい、せっかく入学金を支払ったのだからと早稲田に進学することになった。
早稲田には感謝している。体育会に入って、卒業後もずっと早稲田との縁は続いており、誇りに思っている。一番の恩師は早稲田の先輩であり、早稲田の関係で就職もした。
それでも学歴コンプレックスのせいか、社会人になって慶應義塾大学の通信課程に合計七年間在籍していた。経済学部に三年半と文学部に三年半いたのである。
唯一の通学である夏季スクールの単位は取ったが、レポートは出さずじまいであった。ほとんど単位を取得していないのに、七年間もいた。
レポートを出して試験を受けて単位を取れば、大学卒業資格は得られる。
勉強は嫌いでなかったが、仮に卒業しても最終学歴が早稲田から慶應にかわるだけである。
さすがに八年目には在学するのをあきらめた。
なぜ東大とか学歴にこだわったか未だに考える。
ぼくの両親は中卒である。父は本人によれば、実質的に小卒という。中学生から農作業で働いてきちんと中学も通えなかった。
父はトラック運転手で、母はＪＲの掃除の仕事をしていた。息子のぼくから見て、二人とも勤勉に働く「清く貧しく美しく」という清貧の人である。
こんなに勤勉に働く両親に対して心から深く尊敬している。しかし、なぜ朝早くから晩遅くまで働いてお金が無いのか、と悩んでいた。
学歴が無いから不当に社会的な評価が低いと思い込んでいた。
勉強しろと両親に言われたことがない。生まれてから高校卒業まで塾など一度も行ったことがなかった。
浪人して予備校に通ったが、一円もお金を支払っていない。予備校には感謝しているが、京大・阪大を受験しないで、東大に落ちたので悪いことしたなあと感じている。
中学校は校内暴力でまともな授業を受けられなかった。授業中に不良は後ろで煙草を吸っている。先生に注意されると、生徒が逆ギレする。先生に向かって鉄パイプでできた椅子を投げつけるのである。自分の頭上で鉄パイプの椅子が飛ぶのである。
授業がこんな感じで、かつ塾に行く金がなかったので、ぼくの中学時代の勉強は、ほとんど独学である。まともに授業にならないので、教科書を予習していた。
変な癖がついたようで、高校でも授業中はその科目を予習していた。
ぼくが教わり下手なのは、そのような学習体験かもしれない。

大学受験に失敗したことが良かったと思えたのも、受験から三十年近くたってからである。

もし、東大に進学していたら、今頃は人生に絶望して自殺していたかもしれない。

早めに挫折するのが、人生の秘訣だと思う。今から考えると、東大に落ちたのは人生の最大の祝福だった。

（はひふへほが全く無いと、つまらない文章だな～～）

三

ぼくは就職して、二十数年の間に転職・転勤で二十くらい職場を転々としている。

十社ほど勤めたが、最初に就職したのが、銀行である。十三年六ヶ月で辞めたが、その間に銀行の合併が二度あり、その間、職場は八ヶ所ほど替わっている。

いま書いている銀行小説は、現場が赤坂支店である。ぼくが働いた支店は他に、新宿支店・上野支店・京都支店があるが、その中から選んだ。

銀行を辞めてから、生保・損保その他に全く異なる業種の職場でも働いた。

ぼくはどの職場に行っても圧倒的な少数意見の持ち主であり、孤立するようになって悩んでいた。

今から思うと、ぼくは「長いものに巻かれる」能力が全く欠けていた。組織の論理と自分の意見が食い違うのである。

どれくらい職場で浮いているかというと、同窓会に一人だけ宇宙人がいるくらい、まんじに、ぼくのエッセイがあるくらいである。こんな浮いたエッセイ書いて追放されないかビクビクしている。

当時は四度目の正社員であったが、色々と悩んでいた。

（生きてるのって、なーんか七面倒くさいなあ～～）

生きること、働くことがつらいなと感じていた。

夜になると、無性に涙があふれて、とまらなくなった。おそらく一回のおしっこの量くらいでてきたと思う。眼から、おしっこをするようなものである。

当時の話は省略するが、精神的に落ち着いておらず、自暴自棄になっていた。

ある日、突然、ほとんど無意識のまま、開いたハサミを左ひじから手首にかけて、ざっくりと皮膚をけずるような感じで傷つけた。

二十センチのひっかき傷ができ、三センチほどの間隔で玉のように血が出てきて、半球の状態になった。まるで何匹かのてんとうむしが左腕に止まっているようであった。

その内、てんとうむしが溶けて、傷口に沿って一本の筋になった。

今度は、ハサミを左手に持ちかえて、右ひじから手首にかけて傷つけた。

利き手でないため、うまくいかなかった。今度はてんとうむしが出てきたと思う間もなく、すぐに一本の線につながった。

少し力みすぎたらしい。ぼくは意外とおもいきりがよい、というか気前がよいのである。

出血大サービスである。

ぼくは、てんとうむしを探してざっくざっくと自分の腕や胸をハサミで切り刻んだ。

ふと我に返ったときには、両手首から力こぶ、肩、大胸筋などにかけて、後で数えると、四十二ヶ所のひっかき傷ができていた。

そこから無数の液体のてんとうむしが現れて、溶けてつながっていた。

指先から、てんとうむしがポトポトと下に向かって飛んでいった。

てんとうむしが、ぼくの足の甲にぶつかると、小さな赤い花びらが咲いた。

そのうち、ぼくの両足は赤いお花畑になった。

なんともメルヘンチックだなあ♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

このようにして人間はこわれていくのだなあ、とぼくは思った。

手に握っていたのがハサミでよかった。これが出刃包丁やチェーンソーや直腸鏡であったなら、大惨事になっていたところである。

当時をふりかえって、とても後悔することがある。

あのときの記念写真を撮っておけばよかったなあ～～。

精神病院に行くのは、さすがに抵抗があった。しかし、自分が正常でないことは芸術的にも明白である。

きちんとスーツの上下と白のワイシャツとネクタイを締めて精神病院に行った。自分が患者と思われないためである。

もちろん白のシャツは血がこびりつくので、使い捨てすることになった。

白以外のカラーシャツを持っていたら、何食わぬ顔をして出勤していたかもしれない。

白シャツでは、てんとうむしが滲み出すのである。職場で、てんとうむしの死骸が見つかると、好ましくない。

精神病院で、ぼくは上半身裸になって、先生に見せた。

「なんで、こんなことになったのでしょうね。はははは」

ぼくは、間の抜けた質問をしたが、先生は分かりやすい例で答えてくれた。

「リストカット症候群といって、女子高生とか若い女の子が自分で手首をカッターで切るのと同じようなものですよ。はははははは」

そーか。ぼくは乙女チックなのである♡♡♡♡♡♡♡

こうして、ぼくは、てんとうむし男になったのである。

本当は、てんとうむしであったのは一瞬で、あっという間に傷跡はミミズになった。

無数のてんとうむしが張りついているというよりも、

ん～～もったいない。

ミミズがへばりついているようだった。
しかし、この傷は誰がなんといおうが、ミミズでなく、てんとうむしである。
だって、ミミズ男よりも、てんとうむし男の方がかわいいんだもん♡♡♡

鉱石が供給されていたと判断するに至った。

しかし問題提起として、最終楚国蟻鼻銭の項目において、ZY-381とZY-385の2点で、全く異なる分析結果の指数が一致する事を述べている。この事は、本分析結果が最終結論ではなく、現時点における管見した資料に基づく最善のものであり、今後新たな鉱石の鉛同位体比指数が発表された場合には、それらを包含して絶えず繰り返し更新して行くべきものであることを明言している事を述べて、本項を閉じる。

まえがき

貨幣は商品交換の媒介物として、価値尺度、流通手段、価値貯蔵手段の三つの機能を持つものとして登場する。

貨幣は、それ自身が交易と同じ価値を持つもので、黒曜石、貝殻、獣皮、宝石、布、農産物等であったが、次第に金属である金・銀・銅などが主流を占めるようになり、今日に至っている。

中国では春秋・戦国の時代から青銅通貨の使用がはじまり、やがて朝鮮半島・日本列島でも、それが流通するようになる。

銅貨は古い銅貨を鋳つぶして改鋳したり、模鋳されたりする場合があるので、唐時代の通貨であるからといって、必ずしも唐の鋳銭司で、唐時代に鋳造されたものという事にはならない。

しかし今回鉛同位体比分析した試料は、試料番号Cで始まる布貨は、日本銀行標本貨幣室及び日銀顧問・郡司勇夫氏のご好意により提供されたものであり、試料番号ZYで始まる試料は、何れも中国大陸の出土地点が明確で、模鋳、改鋳等の可能性が極めて低いものである。

東周（前770～前249年）貨幣は、中国で最古の金属貨幣である。最初に出現したのは春秋（前770年～前403年）晩期で、戦国時代（前403年～前221年）に入ってから発展的段階を辿った。

春秋時代以前、交易品として主に用いられたのは貝殻、麻布、工具とか銅塊など実物で、等価交換的なものであった。

春秋晩期、社会の生産力が高まるに連れ、実物貨幣は次第に一定の形と重さを持つ、金属の鋳造貨幣に変った。東周の鋳造貨幣には布幣・刀幣・圓銭と金銀製のものがある。

東周各国で流通した銭貨の持っている特色は、金属鋳造貨幣の登場が、社会経済の重要な発展と歴史的進歩を表していることである。

布幣（布貨）とは、銅製で鋤形貨幣のことをいう。またの名は刀布或いは銭布である。

戦国時代以前、麻布を交易媒介物として用いていた人々は、新たに出現した銅貨を布と言うようになった。

布幣は空首布と平首布に分かれる。

先ず空首布であるが、鋤形状の工具を小さくしたもので、まだ鋤の袋穂（銎）が残っているもので、「空首」はこの事を指し布幣のうち最古のものである。

次が平首布で、これは空首布が変化し、鋤状の柄に袋穂が復元されず、鋤状の銅片になっているものである。

この種類の貨幣は鋳造しやすく持ち運びと使用が便利な為、戦国時代を通じて流通した。

魏・趙・韓の三晋の他、周とか燕などでも発行されている。

その形式は方足布、尖足布、圓足布の三つに大別される。

方足布は、丸肩と方肩の橋足幣、方足小布、楚布の三つに分かれ、尖足布は大小二つの種類に、圓足布は首、肩、足の部分が皆丸くなっているものであるが、孔を持つものと、持たないものに区別される。

鉛同位体比分析による鉱石使用鉱山検証

布貨

C—34空首布（尖肩尖足）推定鋳造地—河南・河北

17.474（206/204）・15.513（207/204）・37.817（208/204）・0.8878（207/206）・2.1642（208/206）、

以下（206/204）・（207/204）・（208/204）・（207/206）・（208/206）を省略。

217江蘇省棲霞山を90％、18遼寧省丹東県青城子を10％混合したものが、17.476・15.531・37.819・0.8888・2.1641と相違指数33で完全に一致する。

C—35空首布（方肩彎足）文字—井、推定鋳造地—河北省南部の邯鄲

17.503・15.525・37.845・0.8870・2.1622

これは217江蘇省棲霞山を84％、18遼寧省丹東県青城子を16％混合した17.498・15.534・37.817・0.8878・2.1614が相違指数58で完全に一致する。

C—36空首布（方肩彎足）文字—成、推定鋳造地—成は魯の地名、山東省・寧陽付近

17.480・15.517・37.830・0.8877・2.1642

これは217江蘇省棲霞山を90％、18遼寧省丹東県青城子を10％混合した17.476・15.531・37.819・0.8888・2.1641と217江蘇省棲霞山89％、18遼寧省丹東県青城子を11％混合した17.480・15.532・37.818・0.8886・2.1637が、共に相違指数41で完全に一致する。

C—37空首布（方肩彎足）文字—宋、推定鋳造地—宋、河南省・帰徳府

17.316・15.493・37.669・0.8947・2.1754
これは217江蘇省棲霞山を72%、212山東省香寄を28%混合した17.317・15.492・37.714・0.8947・2.1780が相違指数73で完全に一致する。

C—38空首布（方肩彎足）文字—阜、推定鋳造地—阜は斉（山東省）の地名であり、斉と考えられる。
17.546・15.535・37.905・0.8854・2.1603
これは403朝鮮半島平安南道三徳を97%と、v002安徽省横山柚を3%混合したもの73%に、pb—11甘粛省祁連山小鉄山鉛亜鉛鉱を27%加えたものが17.561・15.536・37.925・0.8847・2.1597と相違指数49で完全に一致する。

C—39空首布（方肩彎足）文字—松、推定鋳造地—松は燕（河北省・東北地方南部・朝鮮北部）の地名であり、燕と考えられる。
17.432・15.511・37.808・0.8898・2.1689
これは217江蘇省棲霞山の17.440・15.527・37.822・0.8903・2.1687が相違指数45で完全に一致する。

C—40空首布（方肩彎足）文字—東周、推定鋳造地—東周は洛陽の東方にあった。従って同地となる。
17.644・15.539・38.527・0.8807・2.1836
これは216安徽省銅官山を93%、v002安徽省横山柚を7%混合した、17.647・15.523・38.518・0.8797・2.1828が相違指数46で完全に一致する。

C—41空首布（垂肩彎足）文字—武、推定鋳造地—武は河南省・獲嘉県・修武のこと。従って同地となる。
17.522・15.489・38.272・0.8840・2.1842
これは207陝西省永豊を55%、217江蘇省棲霞山を45%混合した17.491・15.508・38.270・0.8866・2.1879が相違指数115で一致する。

C—42尖足布、文字—茲氏、推定鋳造地—茲氏は春秋時代の晋の地名。現在の山西省・汾州府・汾陽県。従って同地が鋳造地と考えられる。
17.732・15.578・38.466・0.8785・2.1693
これは208陝西省永豊を51%、201遼寧省青城子を49%混合した17.706・15.555・38.403・0.8785・2.1691が相違指数114で一致する。

C—43尖足布、文字—豕韋、推定鋳造地—豕韋は戦国時代まで存在した地名。直隷省大名府滑県、北京付近。
18.554・15.665・39.819・0.8443・2.1461
これは銅—6安徽省貴池小河呂を57%、408朝鮮半島京畿道ソウル付近43%混合したもの96%に、v001安徽省黄山嶺を4%加えた18.537・15.733・39.814・0.8501・

2.1507が相違指数194で一致する。

C—44円孔銭、推定鋳造地—戦国時代後期の西周。
17.616・15.507・38.384・0.8803・2.1789
これは209陝西省丹鳳の17.622・15.513・38.432・0.8803・2.1809が相違指数80で完全に一致する。

C—45橋形幣
17.946・15.624・38.329・0.8706・2.1358
これは201遼寧省青城子75%、214山東省福山黄銅鉱を25%混合したもの85%に、G—13c吉林省集安寒武紀灰岩中鉛亜鉛鉱15%加えた17.928・15.594・38.292・0.8700・2.1360が相違指数93で完全に一致する。

戦国古貨幣

燕国・匽字刀

出土地は何れも河北省・易県・燕下都遺跡。
燕国—戦国七雄の一。始祖は周武王の弟、召公奭。今の河北・東北南部・朝鮮北部を領し、薊（北京）に都し、43世で秦の始皇帝に滅ぼされた（〜前222）。

測定番号 ZY—396
21.257・16.100・42.153・0.7574・1.9830
鉛同位体比の五つの指数は、204で206、207、208を除した数と、206で207、208を除した数で構成されている。
しかし参考文献『古代東アジア青銅の流通』258頁では、204で206、207を除した数と、206で207、208を除した四つの数字しか掲載されていない。
そこで204/208を算出し挿入した。計算式は21.257×1.9830＝42.153である。

●しかしここで問題にすべき事は記載されている21.257・26.101・0.7574・1.9830と言う四つの数字が成立し得ないと言う事である。
何故ならば207/204・26.101を206/204・21.257で割ったら207/206・0.7574にならないからである。
すなわち206/204・21.257×207/206・0.7574＝207/204・16.100が正しく、207/204・26.101は誤りだということになる。
若し207/204・26.101に固執すると、206/204・26.101÷207/204・21.257＝207/206・1.2279という特異な数字になってしまうのである。
従って26.101は16.100に訂正すべきである。

これは1—105雲南会沢永善金砂歴Zを88%、バイカル湖周辺taborine鉱床を12%混合したものが21.260・

16.134・41.739・0.7590・19.635となり、管見した資料からは最近似値となるが、相違指数は662であり、現在のところ不明という結論を出さざるを得ない。

測定番号ZY—397
21.006・16.051・42.546・0.7641・2.0254
204＼208の42.546の数値を上回る指数が管見するところ皆無であり、これも不明である。

測定番号ZY—398
17.386・15.439・37.782・0.8880・2.1731
これは217江蘇省棲霞山を88%、212山東省香寄を12%混合した17.387・15.512・37.776・0.8922・2.1727が相違指数126で一致する。

測定番号ZY—399
16.927・15.358・37.234・0.9073・2.1997
これは212山東省香寄84%、202遼寧省錦西16%で混合した16.925・15.384・37.320・0.9091・2.2051と212山東省香寄を83%、202遼寧省錦西を17%混合した16.920・15.383・37.313・0.9092・2.2053が共に相違指数186で一致する。

測定番号ZY—400
18.311・15.619・39.218・0.8530・2.1418
これは429朝鮮半島忠清北道・月丘95%、409朝鮮半島京畿道・三宝5%混合したもの85%に、柿—4湖南郴県東坡柿竹園15%加えた18.311・15.663・39.224・0.8554・2.1421が相違指数77で完全に一致する。

測定番号ZY—401
16.704・15.313・36.796・0.9167・2.2028

● 207/206が0.9168となっていたが、15.313を16.704で除した数字の下一桁を四捨五入すると0.9167となるので訂正した。
これは方—1浙江諸暨銅岩山鉛亜鉛鉱52%、204遼寧省柴河48%混合したもの98%に203遼寧省不明を2%加え、更にそれを94%と、そこに205遼寧省柴河6%混合したものが16.727・15.295・36.772・0.9197・2.2036と相違指数103で一致する。

測定番号ZY—402
16.413・15.278・36.660・0.9308・2.2336
これは202遼寧省錦西を92%、204遼寧省柴河を8%混合したもの91%に、404朝鮮半島黄海道甕津を9%加えたものが16.457・15.318・36.659・0.9311・2.2277と相違指数147で一致する。

測定番号ZY—403
17.057・15.404・37.285・0.9031・2.1859
これは202遼寧省錦西を59%、201遼寧省青城子を41%混合した17.060・15.417・37.296・0.9046・2.1877が相違指数60で完全に一致する。

測定番号ZY—404
16.606・15.303・37.061・0.9215・2.2318
これは202遼寧省錦西を86%、402朝鮮半島平安南道大倉を14%混合した16.610・15.334・37.053・0.9233・2.2304が相違指数75で完全に一致する。

測定番号ZY—405
17.057・15.381・37.350・0.9017・2.1897

● 15.381を17.057で割った数字の下一桁を四捨五入すれば0.9017となる。よって0.9020を訂正した。
これはpb—25遼寧鳳城青城子鉛亜鉛鉱51%、202遼寧省錦西49%混合したものが17.056・15.404・37.403・0.9038・2.1938となり、相違指数139で一致する。

斉国刀幣と圜銭。出土地は山東省・日照市と臨淄(りんし)斉城。
斉国—周の武王が呂尚（太公望）を封じた国。今の山東省。29世で田氏に滅ぼされた。都は営丘（臨淄）。姜斉。（前1122～前379）。

測定番号ZY—386（出土地—山東省・日照市、刀幣）
18.244・15.611・38.730・0.8557・2.1229
これは214山東省福山黄銅鉱を52%、v002安徽横山柚を24%、215河南省桐柏含銅黄鉄鉱を24%混合した18.262・15.656・38.730・0.8574・2.1207が相違指数102で一致する。

測定番号ZY—387（出土地—山東省・臨淄斉城、刀幣）
17.628・15.486・38.013・0.8785・2.1564
これは217江蘇省棲霞山70%、方—1浙江諸暨銅岩山鉛亜鉛鉱30%混合した17.611・15.468・38.073・0.8786・2.1621が相違指数153で一致する。

測定番号ZY—388（出土地—山東省・日照市、刀幣）
18.046・15.589・38.559・0.8638・2.1367

● 206／207が0.8639と表示されていたが、15.589を18.046で除した数字の下一桁を四捨五入すると0.8638となったため、訂正した。
これは214山東省福山黄銅鉱68%、208陝西省永豊32%混合した18.057・15.563・38.576・0.8621・2.1371

が相違指数75で完全に一致する。

測定番号 ZY—389（出土地—山東省・臨淄斉城、刀幣）
17.616・15.478・37.973・0.8786・2.1556
これは213山東省香寄銅鉱石を64%、v003安徽雪水富36%混合した17.630・15.454・38.003・0.8769・2.1562が、相違指数91で完全に一致する。

測定番号 ZY—390（出土地—山東省・日照市、刀幣）
16.946・15.345・37.234・0.9055・2.1972

● 15.345を16.946で割った数字は0.9055である。よって0.6055は完全なニスプリとして訂正した。
これは202遼寧省錦西を67%、201遼寧省青城子を33%混合した16.955・15.393・37.181・0.9087・2.1943が相違指数171で一致する。

測定番号 ZY—391（出土地—山東省・日照市、刀幣）
16.879・15.348・37.190・0.9093・2.2033
これは212山東省香寄74%、202遼寧省錦西を26%混合した16.877・15.373・37.247・0.9110・2.2071が相違指数139で一致する。

測定番号 ZY—392（出土地—山東省・日照市、圜銭）
16.920・15.368・37.219・0.9083・2.1997

● 204／207が15.367となっていたが、16.920×0.9083＝15.368であり、訂正した。
若し15.367を生かすとすれば、15.367÷16.920＝0.9082となり
16.920・15.367・37.219・0.9082・2.1997となる。
これは前者が202遼寧省錦西を69%、201遼寧省青城子を31%混合した16.929・15.387・37.152・0.9098・2.1960と相違指数147で、後者が相違指数149でそれぞれ一致する。

魏国橋足布幣。出土地は何れも山東省・済寧市。
魏国—戦国七雄の一、晋の六卿の一、魏斯（文侯）が、韓・趙と共に晋を分割し、安邑に都した。後大梁に遷都。山西の南部から陝西の東部及び河南の北部を占めたが、後、秦に滅ぼされた。前403～前225。

測定番号 ZY—373
17.320・15.465・38.000・0.8929・2.1940
これは209陝西省丹鳳を52%、212山東省香寄を48%混合した17.324・15.460・37.954・0.8926・2.1910が相違指数88で完全に一致する。

16.658・15.308・36.896・0.9190・2.2149
これは202遼寧省錦西72%、212山東省香寄28%を混合した16.656・15.323・36.912・0.9201・2.2163が相違指数58で完全に一致する。

測定番号 ZY—393（出土地—山東省・日照市、圜銭）
16.754・15.327・37.046・0.9148・2.2112

● 15.327を16.754で割った数字は下一桁を四捨五入すると0.9148である。よって0.9149を訂正した。
これは202遼寧省錦西を82%、201遼寧省青城子を18%混合した16.712・15.332・37.058・0.9178・2.2177が相違指数154で一致する。

測定番号 ZY—394（）出土地—山東省・日照市、圜銭）
16.841・15.362・37.175・0.9122・2.2074

● 204／207が16.361と表示されていたが、16.841×0.9122は15.362である。よってニスプリと判断した。
これは202遼寧省錦西75%、201遼寧省青城子25%混合したもの83%に、404朝鮮半島黄海道瓮津を17%加えたものが16.842・15.413・37.159・0.9157・2.2073と相違指数104で一致する。

測定番号 ZY—414
17.411・15.505・38.134・0.8905・2.1902
これは213山東省香寄銅鉱石93%、212山東省香寄7%混合したものが17.413・15.531・38.133・0.8920・2.1899で、相違指数47と完全に一致する。

測定番号 ZY—415
18.002・15.508・38.171・0.8615・2.1204
これは210甘粛省　家山76%、201遼寧省青城子24%を77%と、v001安徽黄山嶺を23%混合した18.012・15.573・38.155・0.8646・2.1184が相違指数142で一致する。

測定番号 ZY—416
17.592・15.488・38.146・0.8804・2.1684
これは217江蘇省棲霞山を57%、7号遼寧鳳城青城子鉛亜鉛鉱43%を混合した17.621・15.537・38.148・0.8819・2.1650と、前者を58%、後者を42%混合した17.616・15.537・38.140・0.8821・2.1651が共に相違指数129で一致する。。

測定番号 ZY—417
18.006・15.547・38.358・0.8634・2.1303

これは孟―1安徽青陽五昌廟を59%、207陝西省永豊を41%混合した18.003・15.579・38.332・0.8657・2.1305が相違指数86で完全に一致する。

測定番号 ZY―418
17.934・15.521・38.226・0.8655・2.1315

●206で207を除したものが0.8654となっていたが、この指数はすべて下一桁四捨五入で統一されており、従って15.521を17.934で除した指数は0.8654ではなく、0.8655となる。
これは215河南省桐柏含銅黄鉄鉱の17.934・15.534・38.160・0.8662・2.1278が相違指数123で一致する。

測定番号 ZY―419
17.745・15.556・38.400・0.8766・2.1640
これは201遼寧省青城子を57%、208陝西省永豊を43%混合した17.727・15.562・38.362・0.8779・2.1642が相違指数77で完全に一致する。

測定番号 ZY―420
17.507・15.492・38.365・0.8849・2.1914
これは207陝西省永豊が67%、217江蘇省棲霞山33%を混合した17.502・15.504・38.367・0.8858・2.1921が相違指数35で完全に一致する。

測定番号 ZY―421
17.745・15.537・38.338・0.8756・2.1605
これは201遼寧省青城子を63%、208陝西省永豊を37%混合した17.742・15.567・38.331・0.8774・2.1606が相違指数59で完全に一致する。

測定番号 ZY―422
17.458・15.455・38.022・0.8853・2.1779
これは213山東省香寄銅鉱石を55%、217江蘇省棲霞山45%混合したもの85%に、pb―25遼寧鳳城青城子鉛亜鉛鉱15%加えた17.461・15.531・38.029・0.8894・2.1779が相違指数127で一致する。

測定番号 ZY―423
17.617・15.502・38.262・0.8799・2.1719

●これも15.502を17.617で除して、下一桁を四捨五入すれば0.8800ではなく0.8799となるので、訂正した。
これは216安徽省銅官山鉄鉱石76%、215河南省桐柏含銅黄鉄鉱24%混合したもの78%に、403朝鮮半島平安南道三徳22%加えた17.631・1.527・38.262・0.8808・2.1702が相違指数65で完全に一致する。

測定番号 ZY―424
17.562・15.484・38.384・0.8817・2.1856

●これも15.484を17.562で除した数字の下一桁を四捨五入するも0.8816ではなく0.8817となるので訂正した。
これは216安徽省銅官山鉄鉱石の17.579・15.492・38.428・0.8813・2.1860が相違指数77で完全に一致する。

楚国蟻鼻銭

出土地点は、安徽省、繁昌・阜陽・肥西と湖北省に分かれる。
楚国・・春秋戦国時代の国。戦国七雄の一・長江中流域を領有。周の武帝の時、「帝顓頊」の子孫の熊繹が封ぜられたと称する。春秋のはじめ王号を僭称、郢に都して強大を誇ったが、秦のために滅ぼされた。中原諸国とは風俗言語も異なり、漢族からは蛮夷の国とみなされた(→前223)。

測定番号 ZY―376、出土地―安徽省・繁昌
17.828・15.553・38.475・0.8724・2.1581
これは209陝西省丹鳳を69%、214山東省福山黄銅鉱を31%混合した17.826・15.536・38.465・0.8717・2.1584が相違指数39で完全に一致する。

測定番号 ZY―377、出土地―安徽省・繁昌
18.236・15.644・38.644・0.8579・2.1191
これはpb―01広東貴東多金属鉱76%、65009雲南姚安老街子24%を混合した18.236・15.594・38.653・0.8551・2.1196が相違指数92で完全に一致する。

測定番号 ZY―378、出土地―安徽省・阜陽
18.017・15.593・38.427・0.8655・2.1328
これは215河南省桐柏含銅黄鉄鉱83%、v002安徽横山柚17%混合した18.039・15.601・38.424・0.8649・2.1300が相違指数67で完全に一致する。

測定番号 ZY―379、出土地―湖北省
18.292・15.641・38.849・0.8551・2.1238
これは429朝鮮半島忠清北道月岳53%、214山東省福山黄銅鉱47%混合した18.296・15.639・38.853・0.8548・2.1235が相違指数16で完全に一致する。

測定番号 ZY―380、出土地―安徽省・肥西
17.702・15.514・38.243・0.8764・2.1604
これは216安徽省銅官山鉄鉱石を56%、215河南省桐柏含銅黄鉄鉱44%混合した17.735・15.510・38.310・0.8747・2.1604が相違指数121で一致する。

測定番号ZY—381、出土地—安徽省・肥西

17.769・15.537・38.397・0.8744・2.1609

これは201遼寧省青城子62%、208陝西省永豊38%混合したものが17.739・15.566・38.336・0.8775・2.1612と、相違指数154と一致する。

また216安徽省銅官山鉄鉱石57%、215河南省桐柏含銅黄鉄鉱43%混合した17.732・15.510・38.312・0.8748・2.1610も同じく相違指数154で一致し、双方共に可能性がある。

測定番号ZY—382、出土地—安徽省・肥西

17.610・15.534・38.374・0.8821・2.1791

これは208陝西省永豊68%、201遼寧省青城子32%混合したもの76%に、213山東省香寄銅鉱石24%を加えた17.610・15.541・38.417・0.8825・2.1816が、相違指数79で完全に一致する。

測定番号ZY—383、出土地—安徽省・肥西

17.508・15.518・38.278・0.8863・2.1863

これは213山東省香寄銅鉱石60%、216安徽省銅官山鉄鉱石40%を混合した17.498・15.521・38.282・0.8871・2.1878が相違指数40で完全に一致する。

測定番号ZY—384、出土地—安徽省・肥西

18.129・15.638・38.685・0.8626・2.1339

これはv001—安徽黄山嶺64%、DH001—安徽滴水崖36%混合したもの90%に、208陝西省永豊を10%加えた18.127・15.569・38.690・0.8590・2.1344が相違指数117で一致する。

測定番号ZY—385、出土地—安徽省・肥西

18.061・15.681・38.900・0.8682・2.1538

これは429朝鮮半島忠清北道月岳66%、216安徽省銅官山鉄鉱石を34%混合した18.061・15.620・38.891・0.8651・2.1537が相違指数102で一致し、また216安徽省銅官山鉄鉱石65%、228湖南省宝山を35%混合したもの78%に、DH001—安徽滴水崖を22%加えた18.049・15.636・38.907・0.8667・2.1565も相違指数106で一致する。

双方共に可能性がある。

表1、鉱石使用37鉱山・鉛同位体比指数一覧

NO	鉱山名	206/204	207/204	208/204	207/206	208/206
217	江蘇省・棲霞山	17.440	15.527	37.822	0.8903	2.1687
18	遼寧省・丹東県青城子	17.800	15.571	37.789	0.8748	2.1230
212	山東省・香寄	17.002	15.402	37.437	0.9059	2.2019
403	朝鮮半島・平安南道三徳	17.516	15.617	37.899	0.8916	2.1637
V002	安徽・横山柚	18.550	15.931	39.710	0.8588	2.1407
Pb—11	甘粛・祁連山小鉄山鉛亜鉛鉱	17.600	15.291	37.851	0.8688	2.1506
216	安徽省・銅官山鉄鉱石	17.579	15.492	38.428	0.8813	2.1860
207	陝西省・永豊	17.533	15.492	38.636	0.8836	2.2036
208	陝西省・永豊	17.582	15.514	38.654	0.8824	2.1985
201	遼寧省・青城子	17.836	15.598	38.141	0.8745	2.1384
銅—6	安徽・貴池小河呂	19.250	15.850	40.240	0.8234	2.0904
408	朝鮮半島・京畿道ソウル付近	17.639	15.611	39.423	0.8850	2.2350
V001	安徽・黄山嶺	18.050	15.409	38.010	0.8537	2.1058
209	陝西省・丹鳳	17.622	15.513	38.432	0.8803	2.1809
214	山東省・福山黄銅鉱	18.281	15.586	38.540	0.8526	2.1082
G—13c	吉林・集安寒武紀灰岩中鉛亜鉛鉱	17.820	15.591	38.580	0.8749	2.1650
202	遼寧省・錦西	16.521	15.292	36.708	0.9256	2.2219
429	朝鮮半島・忠清北道月岳	18.310	15.686	39.130	0.8567	2.1371
409	朝鮮半島・京畿道三宝	17.779	15.658	39.681	0.8807	2.2319
柿—4	湖南・郴県東坡柿竹園	18.470	15.541	39.600	0.8414	2.1440
方—1	浙江・諸暨銅岩山鉛亜鉛鉱	18.010	15.330	38.660	0.8512	2.1466
203	遼寧省・不明	16.455	15.267	36.601	0.9278	2.2243
205	遼寧省・柴河	17.094	15.462	35.444	0.9045	2.0735
204	遼寧省・柴河	15.300	15.234	34.915	0.9957	2.2820
404	朝鮮半島・黄海道金津	16.804	15.629	37.612	0.9301	2.2383
402	朝鮮半島・平安南道大倉	17.158	15.595	39.170	0.9089	2.2829
Pb—25	遼寧・鳳城青城子鉛亜鉛鉱	17.570	15.511	38.071	0.8828	2.1668
215	河南省・桐柏含銅黄鉄鉱	17.934	15.534	38.160	0.8662	2,1278
213	山東省・香寄銅鉱石	17.444	15.541	38.185	0.8909	2.1890
V003	安徽・雪水富	17.960	15.300	37.680	0.8519	2.0980
210	甘粛省・鄧家山	18.053	15.630	38.216	0.8658	2.1169

	布	県修武		
C42	尖足布	山西省汾州府汾陽県	208 陝西永豊 51%＋201 遼寧青城子 49%	114
C43	尖足布	北京附近	（銅—6 安徽貴池小河呂 57%＋408 朝鮮半島ソウル付近 43%）96%＋v001 安徽黄山嶺 4%	194
C44	円孔銭	西周	209 陝西丹鳳 100%	80
C45	橋形幣	不明	（201 遼寧青城子 75%＋214 山東福山 25%）85%＋G－13C 吉林集安 15%	93

布貨 12 点中、空首布は 8 点であるが、C34～C36 の 3 点は、何れも江蘇省棲霞山の鉱石を 84～90%、遼寧省青城子の鉱石を 10～16%の割合で混合したものを使用し、同一系統工人の作と思われる。

また C39 は燕で鋳造したものと考えられるが、217 江蘇省棲霞山の鉱石のみを使用しており、相違指数も 45 と完全に一致している。

其の一方、河南省で鋳造したと考えられる C37 は、江蘇省と山東省の鉱石を使用し、斉で鋳造したと思われる C38 は朝鮮半島平安南道の鉱石を主として使用し、これに安徽省と甘粛省の鉱石を混合している。

また東周鋳造の C40 空首布は、安徽省出土の 2 種類の鉱石が混合されたものであり、河南省鋳造の C41 空首布は、陝西省永豊 55%と、江蘇省棲霞山の鉱石を 45%混合したものを使用している。

C42 以降の尖足布、円孔銭、橋形幣の計 4 点は、陝西・遼寧両省の鉱石を混合したもの、安徽省と朝鮮半島ソウル付近の鉱石を混合したものに加え、西周で鋳造したと考えられる C44 円孔銭は 209 陝西省丹鳳鉱山の鉱石のみが使用され、相違指数も 80 と完全に一致している。最後の C45 橋形幣は遼寧・山東両省の鉱石に加え、吉林省の鉱石を使用したものである。

表 3、燕下都遺跡出土［戦国古貨幣］の鉱石供給鉱山一覧

番号	鉱石供給鉱山	相違指数
ZY—398	217 江蘇棲霞山 88%＋212 山東香寄 12%	126
ZY—399	212 山東香寄 84・83%＋202 遼寧錦西 16・17%	186
ZY—400	（429 朝鮮半島忠清北道 95%＋409 朝鮮半島京畿道 5%）85%＋柿—4 湖南郴県 15%	77

7 号	遼寧・鳳城青城子鉛亜鉛鉱	17.860	15.551	38.579	0.8707	2.1601
孟—1	安徽・青陽五昌廟	18.330	15.639	38.121	0.8532	2.0797
Pb—01	広東・貴東多金属鉱	18.270	15.621	38.679	0.8550	2.1171
65009	雲南・姚安老街子	18.130	15.510	38.570	0.8555	2.1274
DH001	安徽・滴水崖	18.430	15.870	39.910	0.8611	2.1655
228	湖南省・宝山	18.614	15.714	38.987	0.8442	2.0945

参考文献
山崎一雄『古文化財の科学』323 頁表 1 「方鉛鉱の鉛同位体比」、1987 年。
陳毓蔚他「我国顕生代金属鉱床鉛同位素組成特徴及其成因探討」『地球化学』1980 年 9 月。
引用文献
馬淵久夫他「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73—2 日本考古学会、1987 年。

37 鉱山の省別分布は、遼寧 8、安徽 7、朝鮮半島 6、山東 3、陝西 3、甘粛 2、湖南 2 の他、吉林・江蘇・浙江・河南・広東・雲南の各省が一つずつで、北から遼寧・吉林・朝鮮半島の 15、山東・陝西・甘粛・江蘇の 9、安徽・湖南・河南・浙江の 11 に、最南端の広東・雲南 2 と、全国各地に分布している。

表 2、[布貨]使用鉱石一覧

番号	種類	推定鋳造地	使用鉱石	相違指数
C34	空首布	河南・河北	217 江蘇棲霞山 90%＋18 遼寧青城子 10%	33
C35	空首布	河北省南部の邯鄲	217 江蘇棲霞山 84%＋18 遼寧青城子 16%	58
C36	空首布	山東省寧陽付近	217 江蘇棲霞山 90・89%＋18 遼寧青城子 10・11%	41
C37	空首布	河南省帰徳府	217 江蘇棲霞山 72%＋212 山東香寄 28%	73
C38	空首布	斉	（403 朝鮮半島平安南道三徳 97%＋v002 安徽横山柚 3%）73%＋pb-11 甘粛祁連山 27%	49
C39	空首布	燕	217 江蘇棲霞山 100%	45
C40	空首布	東周	216 安徽銅官山 93%＋v002 安徽横山柚 7%	46
C41	空首	河南省獲嘉	207 陝西永豊 55%＋217 江蘇棲霞山 45%	115

ZY-393	圜銭	山東・日照市	202 遼寧・錦西 82%＋201 遼寧・青城子 18%	154
ZY-394	圜銭	山東・日照市	（202 遼寧・錦西 75%＋201 遼寧・青城子 25%）83%＋404 朝鮮半島黄海道 17%	104
ZY-395	圜銭	山東・日照市	202 遼寧・錦西 69%＋201 遼寧・青城子 31%	147・149

刀幣 6 点、圜銭 4 点で、出土地は刀幣の中に山東省・臨淄斉城が 2 点あるが、他の 8 点は何れも山東省・日照市の出土である。

臨淄斉城出土刀幣の鉱石供給鉱山は、江蘇・浙江と山東・安徽の 4 省に分かれる。

一方、日照市出土の刀幣 4 点は、山東省の鉱石が 3 点、遼寧省の鉱石が 3 点の他、安徽・河南・陝西の各省に分かれる。

これに対し圜銭の方は、何れも 202 遼寧省・錦西鉱山の鉱石を主体として使用し、山東省・香寄鉱山、遼寧省・青城子鉱山、朝鮮半島・黄海道所在鉱山の鉱石が加わっている。

表 5、魏国・橋足布幣（出土地、山東省・済寧市）

番号	使用鉱石供給鉱山	相違指数
ZY-373	209 陝西・丹鳳 52%＋212 山東・香寄 48%	88
ZY-414	213 山東・香寄 93%＋212 山東・香寄 7%	47
ZY-415	（210 甘粛・鄧家山 76%＋201 遼寧・青城子 24%）77%＋v001 安徽・黄山嶺 23%	142
ZY-416	217 江蘇・棲霞山 57・58%＋7 号遼寧・青城子 43・42%	129
ZY-417	孟－1 安徽・青陽 59%＋207 陝西・永豊 41%	86
ZY-418	215 河南・桐柏 100%	123
ZY-419	201 遼寧・青城子 57%＋208 陝西・永豊 43%	77
ZY-420	207 陝西・永豊 67%＋217 江蘇・棲霞山 33%	35
ZY-421	201 遼寧・青城子 63%＋208 陝西・永豊 37%	59
ZY-422	（213 山東・香寄 55%＋217 江蘇・棲霞山 45%）85%＋pb-25 遼寧・青城子 15%	127
ZY-423	（216 安徽・銅官山 76%＋215 河南・桐柏 24%）78%＋403 朝鮮半島・平安南道 22%	65
ZY-424	216 安徽・銅官山 100%	77

山東省済寧市で出土した魏国橋足布幣 12 点は、陝西省 5、遼寧省 5、安徽省 4、山東省

ZY—401	{（方—1 浙江諸暨 52%＋204 遼寧柴河 48%）98%＋203 遼寧不明 2%}94%＋205 遼寧柴河 6%	103
ZY—402	（202 遼寧錦西 92%＋204 遼寧柴河 8%）91%＋404 朝鮮半島黄海道 9%	147
ZY—403	202 遼寧錦西 59%＋201 遼寧青城子 41%	60
ZY—404	202 遼寧錦西 86%＋402 朝鮮半島平安南道 14%	75
ZY—405	Pb-25 遼寧青城子 51%＋202 遼寧錦西 49%	139

燕下都遺跡から出土した戦国古貨幣 10 点のうち ZY—396 と ZY—397 の 2 点は、現時点において、指数に該当する鉱石がなく、判定が出来なかったが残り 8 点は鉱石供給鉱山の判定が可能であった。

結論としては、明確に出土地周辺の鉱山、すなわち燕の勢力下にあった鉱山からの供給と判断される。

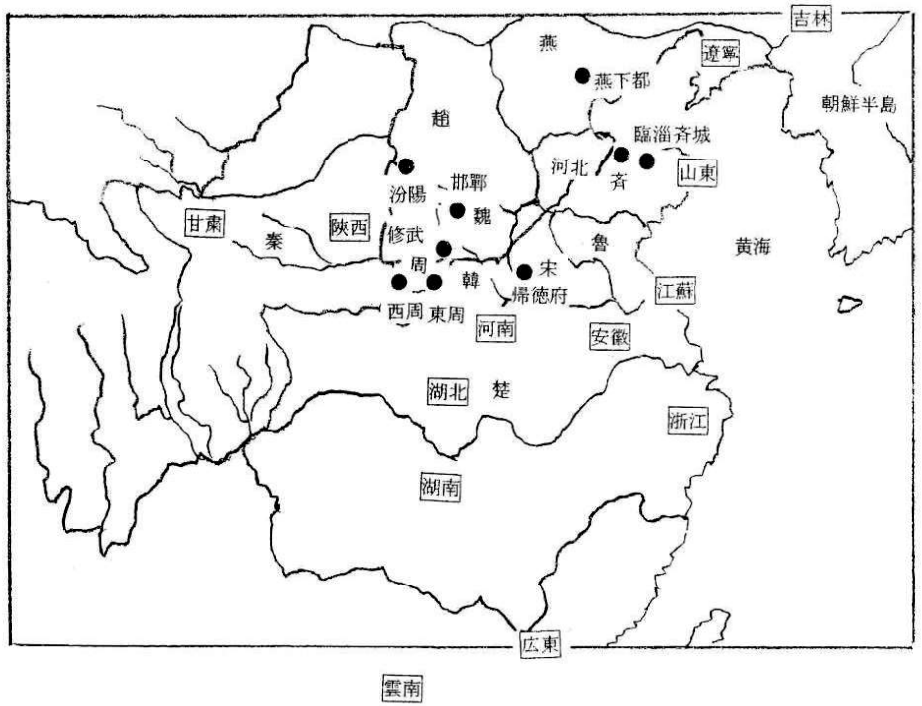
それは遼寧省と朝鮮半島各地からの鉱石供給が大半を占め、その他は江蘇・山東・浙江・湖南の各省であった。

表 4、斉国刀幣と圜銭の鉱石供給鉱山一覧

番号	種類	出土地	鉱石供給鉱山	相違指数
ZY-386	刀幣	山東・日照市	214 山東・福山 52%＋v002 安徽・横山柚 24%＋河南・桐柏 24%	102
ZY-387	刀幣	山東・臨淄斉城	217 江蘇・棲霞山 70%＋方—1 浙江・諸暨 30%	153
ZY-388	刀幣	山東・日照市	214 山東・福山 68%＋208 陝西・永豊 32%	75
ZY-389	刀幣	山東・臨淄斉城	213 山東・香寄 64%＋v003 安徽・雪水富 36%	91
ZY-390	刀幣	山東・日照市	202 遼寧・錦西 67%＋201 遼寧・青城子 33%	171
ZY-391	刀幣	山東・日照市	212 山東・香寄 74%＋202 遼寧・錦西 26%	139
ZY-392	圜銭	山東・日照市	202 遼寧・錦西 72%＋212 山東・香寄 28%	58

尚ここでは、ZY-381 と ZY-385 の 2 点につき、ZY-381 は全く異なる鉱石の混合による相違指数が一致し、ZY-385 の方は 216 安徽・銅官山の鉱石使用では一致するが、一方は朝鮮半島、片方は湖南省と安徽省・滴水崖の鉱石と混合したものとの相違指数が、ほぼ同一となったので、双方共可能性があり、掲載している。

図 1、春秋・戦国時代の貨幣鋳造及び鉱石供給鉱山と関係する省・国・都市



4・江蘇省 3、甘粛・河南・朝鮮半島各 1 の鉱山の鉱石が使用されていた。

なかでも ZY-418 と ZY-424 の 2 点は、それぞれ 215 河南省・桐柏鉱山と、216 安徽省・銅官山鉱山の鉱石のみを使用していた事が注目される。

表 6、楚国蟻鼻銭、鉱石供給鉱山一覧

番号	出土地	鉱石供給鉱山	相違指数
ZY-376	安徽省・繁昌	209 陝西・丹鳳 69%＋214 山東・福山 31%	39
ZY-377	安徽省・繁昌	Pb-01 広東・貴東多 76%＋65009 雲南・姚安 24%	92
ZY-378	安徽省・阜陽	215 河南・桐柏 83%＋v002 安徽・横山柚 17%	67
ZY-379	湖北省	429 朝鮮半島・忠清北道 53%＋214 山東・福山 47%	16
ZY-380	安徽省・肥西	216 安徽・銅官山 56%＋215 河南・桐柏 44%	121
ZY-381	安徽省・肥西	201 遼寧・青城子 62%＋208 陝西・永豊 38% 216 安徽・銅官山 57%＋215 河南・桐柏 43%	154
ZY-382	安徽省・肥西	（208 陝西・永豊 68%＋201 遼寧・青城子 32%）76%＋213 山東・香寄 24%	79
ZY-383	安徽省・肥西	213 山東・香寄 60%＋216 安徽・銅官山 40%	40
ZY-384	安徽省・肥西	（V001 安徽・黄山嶺 64%＋DH001 安徽・滴水崖 36%）90%＋208 陝西・永豊 10%	117
ZY-385	安徽省・肥西	429 朝鮮半島・忠清北道 66%＋216 安徽・銅官山 34% （216 安徽・銅官山 65%＋228 湖南・宝山 35%）78%＋DH001 安徽・滴水崖 22%	102 106

楚国蟻鼻銭 10 点は、出土地により安徽省・繁昌出土の 2 点、阜陽出土の 1 点、湖北省出土の 1 点と、安徽省・肥西出土の 6 点に分けることができる。

先ず安徽省・繁昌出土の 2 点は、陝西・山東両省の鉱石を使用したもの 1 点と、広東・雲南両省の鉱石を使用した 1 点である。

次に安徽省・阜陽出土の 1 点は、河南省と安徽省の鉱石が使用され、湖北省出土の 1 点は、朝鮮半島・忠清北道と山東省の鉱石が使用されている。

最後に安徽省・肥西出土の 6 点は、安徽省産の鉱石の他、陝西・河南・遼寧・山東産の鉱石の他、湖南と朝鮮半島産の鉱石が使用されていた。

まとめ

春秋・戦国時代の中国大陸・青銅製品の動向

貨幣

中国は貨幣を用いた世界最古の国の一つである。

今から三千年以上も昔の殷や周の時代には、歯貝（宝貝）も通貨として使用されていた。

春秋・戦国時代を経て、秦の始皇帝の全国統一により、通貨は方孔銭（真ん中に四角い穴があいた丸いお金）に統一され、以後、清朝末期まで、この形が続くことになる。

貝幣・・・最初は本物の貝を用いたが、後に骨や石・陶器・銅などで形を似せて代用した。

刀幣・・・春秋戦国時代に斉・燕・趙などの国で用いられた。斉刀、即墨刀、安陽刀などがある。

布幣・・・布buと古代音で同じだった農具の鎛bo（鋤の一種）の形に似せた銅銭、戦国時代に趙・魏・韓を中心に用いられた。

蟻鼻銭・・・戦国時代に楚の国で用いられた。鬼面銭と俗称された。

鏡

四千年以上昔、斉家文化の時代、甘粛省で銅鏡2面が検出されたが、春秋戦国時代に入ると、本格的流行期に入り中国古代鏡の基本的形式が完成する。

彝器（いき）・・宗廟に具えておき、祖先などを祀る祭祀や儀礼に用いる祭祀用器。用途によって食器・酒器・水器・楽器に分類される。

春秋前期は、器種・文様に関しては西周後期の様式がそのまま引き継がれるが、銘文は冊命金文が姿を消し、諸侯の名あるいは国名を記した銘文が多く見られ、王室の権威が衰退し、代わりに諸侯の力が大きくなった事を示している。

春秋中期以降は青銅彝器が大きく変化し、器形・文様ともに国による違いが明確になり、国毎の独自性が強調されるようになる。しかし鼎と鐘は逆に増加する傾向にある。これは従来の伝統の上に、国毎の独自性を確保しようとした事の表れと見ることもできる。

戦国後期になると、従来の伝統的青銅彝器は姿を消し、一部に華麗な象嵌装飾を施したものが見られる他は、文様装飾の少ない単純な器が多くなる。

其の後、秦の中国統一をもって、旧来の祭祀・儀礼は完全に否定され、それと共に青銅器も彝器としての役割を完全に終了する。

結論

この青銅彝器の動きと同様に、鉛同位体比による該期の銅貨原材料供給鉱山の動向は、国毎に特色があり、そこには周辺地域からの調達を中心とする様子が浮かび上がってくるのである。

参考・引用文献

何林『故宮蔵鏡』紫禁城出版社、2008年。

金正輝他「戦国古貨幣の鉛同位体比値の研究」『古代東アジア青銅の流通』鶴山堂出版部、2001年。

呉栄曽「東周貨幣」『中国大百科全書・考古学』1986年。

陳毓蔚他「我国顕生代金属鉱床鉛同位素組成特徴及其成因探討」『地球化学』1980年9月。

樋口信也『中日辞典』小学館、1995年。

廣川守『泉屋博古・中国古銅器編』泉屋博古館、2007年。

馬淵久夫他「古代東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学と自然科学』15奈良教育大学、1983年。

馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉛鉱石の鉛同位体比」『考古学雑誌』73―2日本考古学会、1987年。

山崎一雄『古文化財の科学』323頁表1「方鉛鉱の鉛同位体比」1987年。

口紅（その十三）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉

【趙家の人々】
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親

【江家の人々】
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）

嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）
寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）
呉文彗（寧岸と結婚）
寧遠（寧岸と呉文彗の息子）
張喜（趙耀根の会社の同僚）
李主任（趙耀根の会社の上司）
張書記（趙耀根の会社の上司）
羅桂香（江暁歌の会社の同僚）
黎美娟（江暁鴎の恋人）
宗漢（江暁歌が作った会社の専務）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）
藍雲（宗漢の恋人、ラジオ局のディスクジョッキー）

第二十三章　突入

（一）

以前は、嘉児の送り迎えを耀珍や耀虎にやってもらっていたが、趙耀根自身が江暁歌のところに嘉児を迎えに行って、家に連れて帰ることを始めた。

彼は、車を大通りの真向かいに停めた。そこは、彼がかつて自転車をとめて、江暁歌の仕事が終わるのを待っていた場所だ。彼は、嘉児が母親の会社から出てくるのを待っていた。

彼は、ハンドルに俯せて、暫く暁歌の会社をじっと眺めていた。すると、思いがけず、よく見知っている人影が大通りの方から歩いてくるのが目にとまった。一時ポカンとしていたが、やっと、寧岸であることがわかった。彼は、寧岸が曾て生死を共にした兄弟であることを忘れかけていた。趙耀根は、服もボロボロで姿形も老けてしまった寧岸を目の当たりにした。寧岸は、足をふらふらさせながら暁歌の会社の正門を入っていった。

暫くすると、嘉児が入り口に現れた。趙耀根がクラクションを鳴らすと、嘉児は彼に向かって手を高く上げて駆け込んで来て、するりと車の中に滑り込んだ。

趙耀根は、アクセルを踏んで車を走らせた。彼は、物も言わずに、暫く車を運転した。

嘉児が、
「これ、私が作ったのよ」
と布を使って作った絵を彼の前に出した。
趙耀根が見ると、それは、野原で二人の大人と一人の子供が手をつないで、遊び戯れている絵だった。彼らの頭上には、でっかい太陽が貼ってあった。
趙耀根は、
「素晴らしい絵じゃないか」
と大いに感心して娘をチラッと見た。
嘉児は、
「お母さんのところに、綺麗な布きれがたくさんあるのよ」
と言った。趙耀根は、
「そうかい。それなら、お前は、たくさん綺麗な布を貼ることができるね。そうだろう。そう言えば、たった今、寧岸叔父さんがお母さんを訪ねて行っただろう」
と訊いた。
「そうよ、寧岸叔父さんよ」
「寧岸叔父さんとお母さんは何を話していたんだい？」
「寧岸叔父さんは、お母さんにお金を借りに来たのよ」
「本当かい？お前は、はっきり聞いたのかい？」
「お母さんは、何も私に隠したりしないわ。寧岸叔父さんは、今回が初めてじゃないわ。叔父さんは、今、麻雀賭博に凝っているのよ。そのせいで文彗叔母さんと

寧遠は、食べるご飯もないのよ。お母さんは仕方なく、叔父さんにお金をあげたのよ。今日、羅桂香叔母さんが、寧岸叔父さんにまた警告したわ」

趙耀根は、眉をしかめた。彼は、寧岸がここまで落ちぶれるとは、思ってもみなかった。

（二）

寧遠は眠っていた。呉文彗は、子供の傍らに座って本を読んでいた。寧岸は、足で戸を蹴飛ばして、冴えない顔つきで入って来た。この頃の寧岸は、メガネをコンタクトに換えて、髭を蓄え、ジーンズを穿いて、粗野な出で立ちだった。

呉文彗は、本を片付けると、恐る恐る寧岸を見て、彼がいつ怒り出すかと冷や冷やしていた。

寧岸は、テーブルに腰掛けると、激しい口調で怒鳴った。

「酒だ」

呉文彗は、頭を横に振って手振りで答えた。

「こんなに遅いのに、まだ飲みたいのですか？」

「やたらと手話なんかして何だ。酒をもって来い」

寧遠は、寧岸の怒鳴り声で目が覚めてしまい、突然起きあがってふとんの上に座ったが、また目を閉じた。呉文彗は、急いで寧遠を寝かしつけると、酒とつまみを持って来た。そして寧岸に酒を注ぐと、隅の方で黙って彼を見ていた。

寧岸は、俯いてやけ酒を飲んだ。一気に飲み干すと、程なく顔が真っ赤になった。彼は突然頭をもたげ、眼光を鋭く研ぎ澄ませ、呉文彗に命令口調で言った。

「こっちへ来い」

呉文彗は、仕方なく彼の側に行った。

「来いよ。一杯付き合えよ」

呉文彗は、恐る恐る酒をちょっぴり飲むと、コップを寧岸に返した。

寧岸は妻を見て、

「君は、口を開けることができても、飯を食うだけで、何故話ができないんだ。僕が外でいやな目に遭って帰ってきても、慰めさえないのか。クソ腹が立つ！僕が曾て一番いやだったことは、一日中、耳元でガアガア怒鳴るうるさい女がいたことさ。僕は、女はやはり話をしないのが良いと思っていた。でも、どうやら間違っていたようだ。君は口がきけない。僕も君に付き合って唖になるんだ。僕の母親は、無駄に僕に話ができる口を与えてくれたのか、そんなはずはない」

と悔やんだ。

呉文彗は、やりきれなくなり、涙が目の中に溜まって流れ落ちなかった。

「今の社会は暗黒だ。僕の旧友達は、残忍悪辣な仕打

ちをして僕を陥れたんだ。僕はこの上誰を信じればいいんだ。君はどう思うんだ。二万元も投資したんだ。君は、僕が暁歌にお金を借りるのがいやなんだろう。僕は、暁歌に金を貸してくれなんて言ってないよ。どのみち、この面じゃ捨て身になることもなくなったよ。彼方此方から金をかき集めて、友人と一緒にパソコンを作ったんだ。結局のところ、彼は僕を利用したんだ。パソコンは、約半月で作ったよ。でも、あいつらのせいで全部パーになったのさ。すっかり吸い取られて、一銭のお金も残らなかったよ。僕のあの二万元は梨のつぶてさ」

「どうして、また損しなくちゃいけないの」

寧岸は、

「またスッカラカンになったんだ。僕達は、ここのところ、前後して数万元無駄にしたんだ。この金は、趙耀根の奴には、大した金じゃないんだろう。でも、僕のような貧乏教師には、何生涯分の稼ぎなんだ。僕のような歴とした文化人が、どうして趙耀根のような労働改造犯に負けるのか？僕はわからないんだ。この俗世間の中で、教養もなく資質もない奴がどのくらいいるのか考えてもご覧よ。自分の名前すら書けない奴もいるんだ。でも、大金を稼ぐ奴もいる。この世の中はどうなっているんだ。僕は、こんな世の中認めないぞ。納得なんかできるものか」

と苦笑して言った。呉文彗は、

「他人のお金を借りてどうするって言うのよ」

と身振り手振りで言った。寧岸は、

「君は、お金、お金って、お金のことばかり言う。周りの人間は、僕に強要するし、君も僕に強要する。君は疫病神だ。だから、僕は、商売がうまくいかないんだ」

と言った。

呉文彗は感情が高ぶり、涙がポタポタと頬を伝って流れ落ちた。

寧岸は、コップを押しやって、寧遠の側に倒れ込むと、酔い潰れて寝入ってしまった。

呉文彗は、ベッドに横たわっている父親と子供を見て、涙が止めどもなく流れてきた。

明け方、寧岸は目を覚まして、ベッドから起き上がると、部屋の中がシーンとしているのに気がついた。寧遠と呉文彗の姿はなかった。テーブルの上に残っていた酒とつまみは、すっかり片付けられていた。彼はあっけにとられ辺りを見渡した。彼は、こんなにひっそりとした状況に慣れていなかったのだ。このとき、呉文彗が厨房から出てきた。

「文彗、昨日の夕方、僕は何を言っていたのかなあ？」

呉文彗は首を横に振った。

「もし、僕が何か耳障りなことを言ったのなら、真に受けないでくれ。酒に任せて口にしただけだ。君は、僕が君を愛していることをわかっているよね。僕には、君

しかいないんだ」
呉文彗は、溢れる涙を懸命に堪えて、台所に駆け込んだ。
呉文彗は、中華まんや粥や漬け物をお盆にのせて運んできた。しかし、既に寧岸の姿はなかった。呉文彗は、急いでお盆をテーブルにおいて玄関に出て、辺りを見渡した。

（二）

江暁暢は、何時までもあぐらをかいてばかりいることをやめて、公園で気功班とダンス班を経営し、授業料を取って金を稼いでいた。彼女は、彼方此方で熱弁を振るって自分の知っている人をかき集め、二つのクラスを開講した。彼女は、母親と趙耀根の母親のご機嫌を取って気功班に入れ、趙耀珍と趙耀虎の奥さんをダンス班に誘い入れた。
彼女は更に、昔のわだかまりを捨てて、趙耀珍をクラスの責任者にして、時には彼女にダンス班を任せていた。
ダンスを一回踊るととても疲れる。彼女達は車座になって休んでいた。ふと見ると寧岸が一人、公園の小径を行ったり来たりしていた。彼は、江暁暢達の世間話にも気にとめていないようだった。
江暁暢は、傍らにいる趙耀珍に体をごつんとぶつけて、寧岸を見るように合図した。趙耀珍は、寧岸を見ると、知らず知らず、昔彼に声を掛けた頃のことを思い出したが、江暁暢は、
「彼の邪魔をしない方がいいわよ」
と彼女をぐいっとつかまえて言った。
趙耀珍は、
「彼は、何か思い詰めているんじゃないかしら」
と言った。江暁暢は、
「あの人は、知識分子だから、深く考え込んでいるのよ。彼が、思い詰めているのを心配しているのなら、助けに行ってあげた方が良いわ。それも、彼が川に飛び込んでからね。さもないと、彼の自尊心を傷つけるわよ」
と言った。趙耀珍は、
「彼は、どうして、あんな身なりをしているのかしら。土着の匪賊のようだわ。彼は、きっと何かあったのよ。あなた、どう思う？」
と江暁暢に心配そうに尋ねた。江暁暢は、
「夫婦ゲンカしたんじゃないかしら？商売で元手をなくしちゃったんだわ。バカにされたのよ。どれも可能性があるわ。要するに、きっと思い通りにいかないことがあったのよ。姉さんの話だと、彼は、商売をして損をしているのよ。ずっと不運に見舞われて、酒を飲み、タバコを吸い、麻雀をして、子供の粉ミルクさえも買えないぐらい貧乏になってしまったのよ」

と言った。
「こんなに惨めになってしまうなんて」
趙耀珍は、心が塞いだ。
江暁暢は、
「そうよ。惨めすぎるわ。昔は、彼のことで、私に焼き餅焼いてたんでしょう」
と言った。趙耀珍は、
「いい加減なこと言わないでよ。あなた、恥をかきたくないのね」
と恥ずかしそうに答えた。江暁暢は、
「幸いなことに、私達は、彼と結婚しなかったから、泥沼の生活に入り込まなくて済んだわね」
と言った。
彼女達は笑った。
趙耀珍は、
「あの頃、彼は兄嫁に気があったのよ。でも、彼も少し身の程をわきまえたのね。私の兄と兄嫁を巡って、恋の鞘当てもなかったのよ。私の兄は、今もひどく苦しんでいるわ。兄嫁は、彼を根っから相手にしなかったわ」
と言った。江暁暢は、
「あなたの兄さんは、復縁したいに決まっているでしょう」
と訊ねた。趙耀珍は、
「私はその気があると見ているわ。言い出せないでいるのよ。人は、お金があれば、凄く地位があると思っているのよ。私が折角言ってやっているのに、口を開こうとしないのよ。でも兄は、始めっから唐燕影と結婚したくないのよ」
と言った。趙耀珍は、
「しまった。うっかり口を滑らせてしまったわ。お願いだから、絶対に兄嫁に言わないでね。嘉児にもね。私のこの口をつねってやるわ」
と続けて言った。江暁暢は、
「安心してよ。私は、あなたのお兄さんが同棲している女がいることをとっくに知っているわ。でも、別にどうってことないわ。今じゃ、同棲している人はいくらでもいるじゃない」
と言った。趙耀珍は、
「それは、そうだけど。兄嫁や嘉児に知らせることはよくないわ」
と言った。江暁暢は、
「私の姉とあなたの兄さんは、少しも関係ないわ。姉は、何て言うか、こういうつまらないどうでもいいことに関わりたくないのよ。あなた達の家は、昔、私の姉に無理矢理男の子を生ませようとしたじゃない。今では、堂々と結婚して、もう一人子供を産むことができるわ」
と言った。趙耀珍は、
「私のお母さんも考えていたわ。でも、奇妙よ。

唐燕影と私の兄は、ここ数年同棲しているのに、妊娠したことがないのよ。彼女が病気なのか、それとも、子供を産みたくないのか、誰もわかりゃしないわ。今時の綺麗な女の子は、子供を産もうとしないのよ。スタイルを気にし、自由や楽しみに興じたいのよ」

と言った。江暁暢は、

「どうやら、あなた達の家は、少しばかり天罰に見舞われたようね」

と気功に打ち込んでいる趙家の母親を見ながら言った。趙耀珍は、

「この話を私のお母さんは、聞きたくないわ。これはお母さんの心の病よ。暁暢、私のお母さんが、あなたのお姉さんをなだめるのを助けてよ。お母さんが、もし思い直して、態度を改めたなら、もう一度私のお姉さんになってもらうわ。そうしたら、お母さんはきっとぐっすり眠れるし、目覚めもいいわ」

と少し決まり悪そうに言った。

江暁暢は、

「あなたのために、姉に説得してみるけれども、効果の程は保証できないわよ。私の姉は思慮深いわ。その上、今彼女の周りには、忠誠心厚くて上品な若い男もいるわ。それに、姉さんは何も不足していないの。何故過ぎたことに恋々としなくちゃいけないのよ」

と言った。趙耀珍は、

「あなた、宗漢のことを言っているんでしょう。私も、兄嫁に少し気があると思っているのよ」

と言った。江暁暢は、

「バカなこと言わないで。宗漢の彼女は、藍雲と言うのよ。ラジオ局のキャスターで、とっても美人なのよ」

と言った。趙耀珍は、

「でも、兄嫁の魅力を無視できないわ」

と言った。江暁暢が

「まあ、寧岸だわ。本当に川に飛び込んだんじゃないの？」

と叫んだ。

「早く早く、向こうへ行ってみましょうよ」

(四)

趙耀虎は、横断歩道をふらふら歩いている寧岸を見かけた。寧岸の風貌は、彼を驚かせた。彼は近寄って行き、声を掛けた。

趙耀虎は、

「寧岸兄貴」

と声を掛けた。寧岸は、

「耀虎じゃないか。立派になったなあ」

とびっくりして言った。趙耀虎は、

「寧岸兄貴、兄貴は、どうしてこんな姿になっちまったんだい」

と尋ねた。寧岸は、

「僕が、どんな格好になったかって？僕は、表街道を歩けなくなったのさ。僕は、今じゃ強盗だよ。僕は、君と話が合わないから、自分の車に戻ってくれよ」

と言った。趙耀虎は、

「僕のお袋は、まだずっと、寧岸兄貴のことを心配しているんだ。本当だよ」

と言った。寧岸は、

「僕は、君のお母さんとも話が合わなくなったんだ。家に帰ったら、お母さんに、何時までも達者で暮らすように伝えてくれ」

と言った。

趙耀虎は、

「兄さん、彼の風貌を想像してみてくれよ。コンタクトレンズをつけて、山羊鬚を蓄え、髭には、昨日の重湯がこびりついて、薄汚く、全身に汚れたジージャンをまとい、独り言を言いながら歩いていた。まるで、精神病患者のようだったよ。兄さん、寧岸兄貴は、僕達一家になじみが深いんだ。兄さんだって、このまま寧岸兄貴を放っておけないだろう」

と趙耀根に言った。

「僕は、勿論、彼の面倒を見なくちゃいけないと思っているんだ。問題は、寧岸をどうやって面倒見るかだ。彼には自尊心がある。面倒を見てやって、彼の自尊心を傷つけるわけにはいかない。それよりも、彼を放っておいた方がいいんだ」

(五)

寧岸は、体の奥底から沸き上がってくる貪欲さを押さえることができなくて、大きな口で目の前にある食べ物を飲み込み、髭は、重湯で濡れていた。こんなに美味しい料理と酒は、自分の金を使って食べたり飲んだりするには惜しかった。江暁歌は、少ししか食べなかった。彼女は、寧岸のことを不憫に思い、たまに箸を動かしながら、彼を見ていた。

寧岸は、ガツガツと猛烈にかき込み、ひとしきり飲んだ後で、一、二度大きなげっぷをした。そしてちょっと箸を休めると、味を吟味しながら、やっと話し始めた。

「暁歌、君の考えはよくわかっているんだ。でも、君は、絶対に呉文彗の影響を受けている。見たところ、問題を深刻にしすぎたんだ。呉文彗は、所詮、一般市民の家に生まれた美しい娘なんだ。彼女に何がわかるって言うんだ。何もわかりゃしないのさ。男が麻雀や酒を飲んだりするのを何で怖がるんだ。今日の社会の風潮を、君はよくわかっているじゃないか。麻雀をしたり、酒を飲

んだりすることは、大丈夫さ。君が心配する必要はないんだ」

寧岸が街頭の担ぎ屋の手先になったことを、江暁歌は深く悲しんだ。

「寧岸、あなたは、文章を書くことが好きではなかったかしら？今は、どうして書かなくなってしまったの？」

寧岸は、

「何を書けって言うんだ。いったい、どうやって書けって言うんだ。今の作家は、どのくらいの価値があるって言うんだ。中国は堕落し、文化は落ちぶれてしまったのに、本を読む人などいないよ。みんな、一途に金を稼いでいるんだ。出版でさえそうじゃないか。みんな口を開けば金だ。図書の出版許可番号を取得するのにいくらかかるか知っているのか？自費出版しなくちゃいけないんだ。どれだけの老知識人の本が、出版する方法を失っているだろうか。トイレットペーパーとして使われるのが関の山さ」

と言った。江暁歌は、

「私は、全ての出版社がこうだとは信じていないわ。中国には、たくさんの出版社があるわ。私は、よく本屋をぶらつき、たくさんの本を買うけど、現代作家の書いた小説もあるわ」

と言った。寧岸は、

「そうだよ。確かに、作家の本を出版する会社もあり、作家にお金を払っている。でも、それは、よく売れている作家さ。僕のように無名の輩は、良い本を書いても所詮無駄なんだ。それに僕は美人でもないし、売春なんてどうしてできるものか、できっこないんだ。今日の社会は、畜生め、極楽浄土なんてあるものか。どこもかしこも、資本を蓄積したブルジョアジーの血生臭いにおいで溢れているのさ」

と言った。

寧岸は、一本の白酒をすっかり飲み干して酔ってしまい、くすくす笑って腰が落ち着かず、うまく座ることができなかった。

彼は、

「暁歌、君はやはり素晴らしいよ。君には良心がある。僕達は友達だろう？長年の親友さ。そうだよね？君は、僕をほったらかしにしないでくれ」

と江暁歌を横目で見て言った。江暁歌は、

「そうよ、そうよ。寧岸、もっと飲んで」

と言った。寧岸は、

「僕は、まだたくさん飲んでいないよ。幼なじみの君と飲めば、いくらでも飲めるんだ。君は、僕を信じてくれるかい」

と言った。

寧岸は、江暁歌の手をしっかり掴んで、酒に乗じてブツブツとしゃべり、涙と鼻水が入り交じって流れた。

江暁歌は、何度も寧岸の手をはねのけて、首を横に振ってため息をついた。

(十六)

江暁歌は、寧岸の恩讐を宗漢に話した。江暁歌には、彼女をサポートする男が必要だったが、宗漢は、用心深く慎重に事を処し、鷹揚として、こせこせしない男であった。

江暁歌は、

「宗漢、考えてみてください。寧岸の近頃の様子、私は放っておくことができないわ。私が、彼らに金銭的な援助をすることは当然なの。もし、あの当時、彼ら夫婦の私心のない援助がなかったら、私は、今頃お釈迦になっていたわ。問題は、寧岸が既に正常な精神状態を失ってしまっていて、悪習に染まってしまったことだわ。お金を彼にあげればあげるほど、彼を害してしまうの。だから、彼を激励して、やる気を起こさせるのよ。あなたは、この考えを実行に移しても良いと思うかしら」

と言った。宗漢は、

「やってみましょう。でも、あなたは覚悟が必要です。一人の人間がここまで落ちたら、自力で泥沼から抜け出すのは難しい。あなたは、既にあらゆる援助と善意の限りを尽くしていると思います」

と言った。江暁歌は、

「どうして、今まであらゆる援助と善意の限りを尽くす事があったでしょうか、なかったわ。寧岸のような友人に対して、私は生死を共にしなければならないと思っています。でなければ、一人の人間として生きている意味などありません」

ときっぱり答えた。

宗漢は、話を聞いていくうちに、知らず知らず畏敬の念に打たれ、江暁歌に対して、今まで以上に尊敬の気持ちが湧き上がるのを感じた。

「今回の件は、あなたが表に立つのはよくありません。他の人に知られてはいけません。私が単独でやりましょう」

「私も同感です。私は、あなたにお願いするよりほかないのです」

「遠慮しないでください。わかっていますから」

(七)

寧岸は、机に向かってものを書き始めていた。呉文彗は、彼の姿を見ていて嬉しくなり、足音をそっと忍ばせてせわしなく立ち働いていた。

寧岸は、

「わかったよ。あっちに行っていてくれないか。僕の

構想をこれ以上邪魔しないでくれ。インスピレーションが沸きそうなんだから」

と手を左右に振って言った。

呉文彗は、急いで出て行った。

寧岸は、精神を集中して考え、筆を振るってさらさらと書いたが、突然長いため息をつくと、原稿を引きちぎった。彼は、

「僕は、意欲がなくなった。僕は、生きていけなくなったんだ。自分が何を書いたらいいのかわからなくなった。もう、一巻の終わりだ」

と妻に向かって大声で叫んだ。彼は、

「僕には、刺激が必要なんだ。僕は、文才が衰えたなんて信じないぞ。文彗、君は、良き妻にならなければならない。わかったか！作家の良き妻になるのは、そう簡単ではないんだ。大変なんだ。君は、犠牲的な精神を持たなければならない。僕に、少し金をくれ。僕は、友達に会って話をする。インスピレーションと刺激を見つけるんだ」

と言って、狂気じみて自分の髪の毛を引きちぎった。

呉文彗は、仕方なく、聞き分けよく、ポケットからお金を取り出して寧岸に渡した。そして彼を見ると、気を揉みながら玄関から出て行った。

（八）

この頃、趙耀根は一本の電話を受けていた。彼は話を聞き終わると、受話器を放って直ぐに執務室を飛び出した。

趙耀虎と張喜が、外で彼の命令を待っていた。

趙耀虎は、

「趙社長、あなたは自分で行くべきではありません。私が数人のガードマンを連れて行けば事足ります」

と言った。趙耀根は、

「だめだ。僕が行かなければならない。僕は、彼自身が何をしているのか、彼にしっかりわからせなければならないんだ」

と言うと、振り返りもせず出て行き、趙家と江家の二家族の大将が、ぴったりと脇を固めた。数名のガードマンもその中に入り乱れて武装し、電気棍棒を持っていた。

趙耀虎は、

「お前達は、会社の制服を脱ぎ捨てろ」

と大声で命令した。

みんな、ワゴン車に押し合いへし合い乗り込み、大声を上げて街へ繰り出した。

ワゴン車は、裏通りに入って行った。路の両側は屋台で埋め尽くされ、通りは人で沸き返り、雑多な輩が群がっていた。ワゴン車は人垣を通り抜け、緩やかに路地の入り口まで走ると停車した。

路地の入り口で待っていた男が、車の前まで近寄ってきて、車の窓ガラスを叩いた。車の窓ガラスが即座に揺れ動いて下がり、趙耀根の顔が現れた。

男は、

「彼は、中にいる」

と言って、路地の入り口を指した。

「わかった。みんな覚えておけ。ギリギリまで武器を使うな」

みんな、一列になって車から降りた。趙耀根は、最後に車から降りると、辺りをちらりと見渡した。

趙耀虎は、サングラスをかけて、胸を露わにしていた。彼は黒いスーツを着たガードマンの一軍を引き連れ、威勢を鼓舞して、この路地の中に突進して行った。道行く人は、次々と両脇に避けた。彼は、路地の奥まった粗末な部屋に真っ直ぐに突入した。

粗末な部屋の中は、煙がもうもうと立ち込めていた。一群れの物売りの輩が、一カ所に群がり、カルタをやったり、博打を打ったりしていた。またあるものは、傍らに寝そべって、大麻を吸っていた。

趙耀虎の突然の突入は、大騒動を巻き起こした。威圧感のある彼と彼の手下に向かって、声を荒げる輩は、一人もいなかった。彼らは、関係のない奴らを蹴散らし、とうとう、奥の方で大麻を吸っている寧岸を発見した。彼らは有無を言わせず、寧岸の襟を掴み上げて、外に引っ張り出した。

寧岸は、

「お前ら、何をするんだ」

と大声で叫んだ。

しかし、彼に答えるものはいなかった。

寧岸は、力一杯必死にもがいた。しかし、趙耀根が突然彼の前に現れたので、寧岸はいっぺんに目が醒めた。

「趙耀根かい？君は、どうしてここに来たんだ？」

趙耀根は、

「見てみろよ。お前がどんな格好をしているのか、よく見ろよ。ここが何処か知っているのか」

と言って、寧岸にビンタを食らわした。

ガードマン達が、寧岸の腕を逆ひねりしていたので、彼にはもがく術もなかった。彼は、押したり小突いたりされながら、両側から脇の下に手を入れて抱えられ、この粗末な部屋を出て行った。

彼は、

「趙耀根の畜生め」

と大声で罵った。

趙耀根は事務所に戻ってくると、オーバーを脱いでソファにもたれかかり、心地よい気分になった。

寧岸はばつの悪そうに立っていて、どうすればよいのかわからなかった。

このとき、事務員の女性が、そっとコーヒーを運んで来た。そして、そっと出て行った。趙耀根は、慣れた手つきでコーヒーを入れ、ミルクを加減して入れると、かき混ぜて、さらさらとコーヒーをすすり満足げに舌を鳴らした。

「飲めよ、コーヒータイムだ」

寧岸は、図々しくサーバーを手に持って、コーヒーを入れたが、ぶるぶると震えて、コーヒーをこぼしてしまった。

趙耀根は、

「お前は、僕のことで恥ずかしいと言ったが、そんな話は初耳だ。僕が、何時、お前に恥ずかしい思いをさせたんだい」

と言った。

寧岸は、趙耀根のもの凄い圧力と容赦しない弁舌に耐えられなくなり、怒りが爆発した。

「わかったよ、それなら、僕は思い切って話してやるよ。趙耀根って奴は、何が大したことあるものか。無学の労働者の出じゃないか。何日も投獄されて、ごろつき風を吹かせて、こうして社長をしているんだ。僕は、失敗して貧乏になった。それは、僕が品行方正で、あらゆる悪事に居直ることができなかったからだ。君は怪しげな金を持って、彼方此方に寄付して、政治協商委員の帽子とすげ替えてかぶっているんだ。君が稼いだ金は、き

趙耀根は、

「座れよ」

と無頓着に言った。

寧岸は、仕方なく腰掛けた。彼は落ちぶれた格好で趙耀根を見ていたが、眼光は、敵意を抱いていた。

趙耀根は、

「僕は、もっと早く君と話をしたかったんだ」

と言った。寧岸は、

「何を話せって言うんだ。何も話すことなどないよ。君は大経営者で、政治協商会議委員だ。僕達小市民と話すことなんかあるのか？」

と強情で不遜な態度で言った。趙耀根は、

「寧岸、どんな面でいるのか、鏡で自分の姿を見て見ろよ。お前が、どんな格好をしているのか見てみろ。身体中が臭いぞ。お前は、いたずらに知識分子になったのか。こともあろうに、社会のげすどもに混じって、堕落してしまい、博打を打ったり、大麻を吸ったり、最低限度の人格さえも捨ててしまったんだ。僕は、君のことを恥ずかしいよ」

と言った。寧岸は、

「僕のことは、君と関係ないだろう。君は今、不釣り合いな身なりをして、格好つけちゃいけないよ。僕も、君のことで恥ずかしく思っているんだ」

と言った。

れいなのか。君は、心を入れ替えて、真人間になったのか。君は、七変化の術があるが、本性を隠しおおせるのかい？」

趙耀根は、ゆっくりコーヒーをすすって、黙って顔色一つ変えずに、ほしいままに当たり散らす寧岸を見ていた。

寧岸が長年抑えて来た話は、峡谷に湧き出た川の水のように波渦巻き、猛烈なスピードで流れていった。

「そうさ、僕は、古い不潔な服を着ているけれど、気高い心を持っているんだ。君はどうなんだ。華やかなものをまとっても、君の度量の狭さと品行の悪さは隠せないぞ。君は、ずっと、僕のことが気になっていて、僕と江暁歌が男女の関係になっていると思っているだろう。でも、僕は、僕の子供の命を賭けて誓うよ。僕は、江暁歌のことを大切に思い、いたわり、尊重しているんだ。僕は、これまで、彼女とよこしまな関係になったことはないよ。僕は曾て、江暁歌を愛していた。僕は、僕はそう思っているんだ。彼女のような才女が好きなんだ。しかし、彼女は、僕のことを愛してくれなかったので、彼女への愛を、心の奥深くにしまい込んだんだ。僕は、これまで、彼女に、自分の気持ちを表現したり、強要したりしなかったし、君が投獄されている時や遠く深圳に出かけている時、彼女に乗ずる隙があったが、僕は、彼女とのけがれのない純粋な友情を保ち続けたんだ。その後、

僕は、妻を娶った。僕の妻、呉文彗は、世界一美しく善良で優しい女性だ。僕は彼女に満足している。しかし、そうであっても、僕は、私心のない気持ちで、江暁歌を助けたんだ」

趙耀根は、寧岸の正直で素直を気持ちを聞いて驚き、唖然とし、コーヒーを手に持っていることすら忘れていた。

寧岸は、

「趙耀根、君は、何の資格があって僕に恥をかかせるんだ。一人の男として、僕がしていることは、絶対に君より勝っている。あの頃を思い起こすと、君は投獄されていて、江暁歌は、どれだけ苦しい目にあったか、誰が彼女を支援したか、それは、僕だよ。君のお母さんは、ただ彼女に難癖をつけて困らせるだけだったんだ。君は、遠く深圳に出かけ、暁歌親子がどんな目にあったのか知っているのか。君が深圳に出かけてしまうと、君のお母さんは、暁歌親子を着の身着のまま家から追い出してしまい、暁歌は、嘉児を連れて彼女の工場の独身寮に移り住むしかなかったんだ。彼女は、勤務する傍ら、放送大学に通わなければならず、その上、娘の世話もしなければならず、廊下で、ストーブをたいて、牛乳を沸かし、ご飯を炊き、自分で米を買い、石炭を買って、その上、お金を出して、君のお母さんのために、弟や妹の生活の面倒を見なければならなくなったんだ。彼女は、あの頃、

どうして暮らしていたかって？彼女は、これまで、肉料理を食べたことなんてなかったんだ。晩ご飯は、街で、焼餅を買って来て、白湯を一口飲んだだけの粗末なものだったよ。一千元送って、君達を救うために、暁歌は、ありとあらゆる方法を講じたんだ」

と奮い立って言った。

寧岸は既に、涙で声が詰まっていた。

「僕と文彗は、自分の持っている全ての金を持ち出して、君に送ったんだ。君のその可哀相な自尊心の面倒を見るために、僕達は、友達からお金を借りたとだけ言ったんだ。暁歌は、一日も早く僕達にお金を返すために、そして、一日も早く僕と文彗を結婚させるために、彼女は、売血したんだ。僕と文彗は、一度だけ、暁歌の売血現場に出くわしたことがあるが、文彗は、このために随分と悲しんだんだ・・・・・・」

趙耀根は、心を揺さぶられて、

「寧岸・・・・」

と粛然と立ち上がって言った。寧岸は、

「暁歌は、痩せてしまって、人としての体裁をなしていなかったんだ。極度の栄養失調で、ショックを起こして卒倒したんだ。このとき、彼女を助けたのは誰か、この僕だよ。僕と呉文彗さ。僕達は、最大限の努力をして彼女を救ったんだ」

と目に涙を浮かべて言った。

趙耀根は、恥ずかしくて俯いた。

「その後、君は、お金を手に入れて、故郷に錦を飾ったが、次第に恩義を忘れてしまった。君が僕を疎遠にすることは、最初からわかっていたことだった。誰が僕を貧乏教師に貶めたんだ。僕は、君に恨みを持っていないさ。でも、君は、江暁歌に人としての責任を果たさなかった。彼女が夢を持っている女性であることを君はわかっているはずだ。でも、君は、怪しげな金に頼ってしまい、根っから彼女を顧みなかったじゃないか。安易に彼女と離婚し、彼女を社会の最下層に突き落とし、最も原始的な手段で、生計の路を立てさせ、最も苦しい生活をさせ、路頭に迷わせ、飲まず食わずの生活をさせたんだ。これら全ては、君の目の前で起こっていたんだ。君は、それをわかっていたのか。いったいどうなんだ？僕達夫婦は、彼女を応援してきた。呉文彗が身籠もった時でさえ、排骨湯を食べさせることも我慢させ、暁歌のために、バスを三回も乗り継いで、スープを送り届けたんだ。あの頃、君は、いったい何処にいたんだ。君は、愛車のベンツを乗り回して、酒色におぼれていたじゃないか」

寧岸は、コーヒーをがぶ飲みした。

趙耀根は、恥じる気持ちと悔やむ気持ちが同時に襲って来て、寧岸をまともに見る勇気がなかった。寧岸は続けた。

「神様有り難う。神様は見ている。暁歌は、苦労をし尽くして、幸せな生活を掴むことができました。そして、ついに、今日の結果をもたらしました。彼女は、君とは違うよ。彼女は、昔の友達のことを忘れていなかった。これまで、僕を無視したことはなかった。だから、僕は、君のことを恥ずかしく思っているんだ」

趙耀根は、

「君は、どうして、僕に早く知らせてくれなかったんだ。どうして、もっと早く、僕を追及しなかったんだ。寧岸、僕は、今日、君を連れ戻しに来たんだ。君を助けたかったんだ。君は、もう二度と、社会のクズたちと一緒になってはいけない。心を入れ替えて、再出発しよう。僕の所へ来て働かないか？」

と頭をもたげて言った。

「耀根、君が、自分の非を認めて、この僕を助けてくれたのは嬉しいよ。僕は、ホッとしたよ。君という友と付き合ってきたことが無駄ではなかったことがわかったよ。でも、もし僕が、君に頼って生活したなら、僕達が昔君にした援助に汚点がついてしまう。暁歌も、僕を君の会社で働かせるだろうし、僕だけじゃなくて、呉文彗も働かせるに違いない。でも、僕達夫婦は、断固として行かない。僕達は、君の恩恵に預りたくないんだ。それに、僕達は、昔からの友達を助けたことを誇りに思っているんだ。僕達は、たとえ貧乏しても、真人間としての誇りを失うべきでないんだ」

「寧岸、親友は家族だ。一心同体なんだ」

「慰めはやめてくれ。僕は、死んでも他人の厄介になりたくないんだ。君は、僕という友達を認めてくれて、一緒に飯を食べ酒を飲んだ。それで充分だ。他のことで、僕を構わないでくれ」

「君が、大麻を吸っているのを放っておくわけにはいかないんだ。ドラックには、絶対に手を染めてはいけない。僕には、数百万元の財産を持っている友達がいるが、大麻を吸って家財を傾けてしまい、一家離散のはめになってしまったんだ」

「大麻の何が怖いって言うんだ。怖いことがあるものか。たかが白い粉じゃないか。それに、僕は体験しただけなんだ。僕は今、作品を書いているんだ。ドラックにやみつきになった人間がいても、僕は、ドラックに夢中にならないよ。僕は、並はずれた意志の持ち主なんだ」

寧岸は、驕り高ぶった様子でドアを開け、意気揚々と立ち去った。趙耀根は、暫く自責の念に沈んでいた。夜のとばりが降りると、窓の外にあかりが灯った。

第二十四章　出版記念パーティ

（一）

寧岸は一人、椅子に腰掛け酒を飲んでいた。呉文彗は部屋に入ると、彼に一通の手紙を渡した。

寧岸が、封筒に気だるそうに目をやると、『黄鶴出版社』と言う文字が目に留まった。慌てて封を切り、数行読むと、思わず太ももを叩いて豪快に笑った。彼は喜びを隠しきれずに叫んだ。

「文彗、早く来てみろよ。出版社からの原稿依頼の手紙だ。神様が助けてくださったんだ。俺にも、遂に運が回って来たぞ」

呉文彗は、

「手紙には、何と書いてあったの？」

と手振り身振りで話しかけた。

寧岸は、手紙を呉文彗の方に放り投げて、

「見てご覧よ」

と言った。そして、

「この世の中は、広いんだ。僕を見ていてくれた人がいたんだ。文彗、君も甲斐性なしの旦那に嫁いだが、これからは一日中浮かぬ顔をする必要がなくなったんだ」

と感無量になって叫んだ。

呉文彗は、急いで手紙に目を通すと、喜びで顔がほころんだ。

（二）

寧岸は、原稿依頼の手紙を江暁歌に手渡すと、彼女の真向かいに座って、悠々とコーヒーをすすった。

江暁歌は、つぶさに手紙を読み終えると、ニコニコ笑いながら、

「寧岸、おめでとう。栄冠は、それを待つ人に最後に輝くのね」

と手紙から目を離して言った。寧岸は、

「僕は、君のその言葉をずっと待っていたんだ。俗っぽい言い方だけど、君の言ったことは正しいよ。基本的には、真理に近づいているんだ」

と笑いながら言った。彼は続けて、

「今日の市場経済の中にあって、全てのものが商品化され、一番神聖なものでさえも、例外は認められないんだ。でも、そんな中にあって、出版社の編集者の中に例外があるとは思ってもみなかったよ。それに、僕が二年前に書いた文章を憶えていてくれたなんてね。僕のために文集にまとめて出版したいと手紙を寄こしたんだ。原稿料が支払われることになっているんだ。それも、千字三十元で、国の原稿料の基準より高いんだ。これは、僕の作品をどんなに高く評価しているかを物語っているんだ。本当に有り難いよ。こうして考えてみると、本の持つ威力は凄いと思う。それは、物質を越え、世俗を超えて、これまで会ったことのない見知らぬ人に心の感動と共感を与えることができるんだ」

と自画自賛した。江暁歌は、

「二年余りになるのね。この歳月も、あなたの文章が、永久に変わることのない魅力を持っていることを証明しているのよ」

と言った。寧岸は、

「そうさ、僕は、商売では失敗者だけど、これまで自分の文才を疑ったことはないんだ。たとえ商売をするにしても、今日の人々の商業行為には、規範意識がなかったんだ。富を築いた奴らは、ゲームのルールを全く守ろうとしなかったから、僕は度々騙されたんだ。もし、みんなが法を遵守したならば、公正な競争が行われて、本当に自分の才能に頼って生活することができるんだ。僕だって、傑出した経営者になることができたんだ」

と言った。江暁歌は、

「勿論よ。あなたは、ずっと前から、文才があると認めていたじゃない」

と共感して答えた。寧岸は、

「僕には、少しの達成感が必要なだけだったんだ。この達成感がカンフル剤となって、自信を取り戻し、僕の持っている潜在能力を呼び起こし、それを最大限発揮させるんだ」

と言った。江暁歌は、

「出版社に出かけて行って、編集者と打ち合わせをしなくちゃね。すてきな本を出版してね。私は、あなたは学問をして、文章を書くのに、本当にピッタリの性格だと、ずっと思っていたのよ。学校に戻って、もう一度教壇に立つのよ。教えながら、頑張って、二冊目、三冊目と本を出版するのよ。この世の中に、精神的な財産を残すためにも、素晴らしい活動だわ」

と言った。寧岸は、

「そうさ。僕は腰を据えて、一生懸命勉強しなくちゃいけないんだ」

呉文彗は、幸せそうに微笑んで、ずっと夫を見ていた。ただ宗漢だけは、傍らで、黙って彼らの話を聞いていた。喫茶店の中は、灯りが揺らめいて、雰囲気は温かく、寧岸の今の心境にピッタリ合っていた。

宗漢は、

「私に一つ提案があります。寧先生の本が出版するのを機に、私達の会社がスポンサーになって、出版記念パーティを行います。新聞記者と署名人を招いて、セミナーをしましょう。そして、ともかくみんなでお祝いをしようではありませんか。寧先生の著作活動のために宣伝をするのです。知名度を高め、発行部数を拡大し、今後の発展のために、新たな道筋を作りましょう」

と言った。江暁歌は、

「素晴らしいわ。グッドアイディアよ」

と言って、宗漢の提案を褒めちぎった。

寧岸は、興奮のあまり、

「宗漢、君は暁歌の懐刀、諸葛亮孔明だ」
と顔中を輝かせた。

（二）

寧岸は、随分と長い間蓄えていた髭を、カミソリで次々と剃り落とした。
呉文彗は、寧岸のために、ネクタイを結び、洋服を着させた。正装をした堂々たる風采の寧岸が、妻の前に立った。彼は装いも見違えるように立派だった。髪の毛は、ムースで後ろにならされ、気持ちもさわやかで、英姿が輝いているように見えた。かつて多くの女の子の憧れの的だった寧岸が、再び帰って来たようだった。寧岸の机には、まだ、インクの香り残る〈窃窃私語集（ささやき詩集）〉が置かれていた。これが、彼の出版する新刊本だ。
〈窃窃私語集〉の出版記念パーティが、予定通り挙行された。式場には、ホテルの宴会場が当てられた。
宗漢は、采配を振るって、一切を切り盛りした。会場の飾り付けが終わると、宴会場は、小さなパーティ会場に様変わりし、ステージには、『〈窃窃私語集〉出版記念パーティ並びにプレスブリーフィング』の横断幕が掲げられた。
既に、来賓が続々と到着していた。寧岸の学校の上司や同僚、出版関係者、評論家、著名な作家、ジャーナリストもいる。各界の名士が一同に集まり、会場一杯に笑い声や話し声が響き、賑やかなムードに包まれた。
躍動感溢れる筆跡で、非常に名高い著名人のサインが記帳されているを見て、江暁歌は、微笑みながら宗漢に言った。
「著名人は、そうそうたるメンバーね。あなたの努力に敬服するわ」
宗漢は、
「私は、何もしていませんよ。地獄の沙汰も金次第ですよ」
と謙遜して答えた。
突然小さなざわめきが起こり、寧岸が、文彗を伴って会場に入って来た。
寧岸は正装し、呉文彗も華やかな装いだった。この一組の玉のように美しいカップルを見て、人々は、
「あっ」
と感嘆の声を上げた。
江暁暢は、目を一層大きく見開いて、顔中の筋肉が神経質に震えていた。目映い光を四方に放ち、まるで花のように美しい呉文彗を見て、江暁暢は、心の中に強烈な嫉妬を引き起こした。
人々は、次々と寧岸と挨拶を交わし、握手をして、お祝いのメッセージを伝えた。寧岸は、忙しそうに立ち回

っている江暁歌を見つけると、小走りで駆け寄り、しっかりと彼女の手を握った。
「暁歌、かくも盛大な出版記念パーティを開催してくれて、僕は、どうやって君に感謝したら良いんだろうか。どのくらいお金がかかったんだろう」
と尋ねた。江暁歌は、
「それには及ばないわ。私はただ、あなたの二冊目、三冊目の本が、早く出版できることを願っているだけよ」
と言った。寧岸も、
「頑張るよ」
と答えた。
江暁歌は、呉文彗の腕を引っ張ると、
「あなたって、ほんとうに綺麗ね」
と心にもないことを言った。
呉文彗は、心から褒めてくれたと思い、笑顔で感謝の気持ちを現した。
江暁歌は、
「寧岸先生は、今日もステキだわ。ご覧なさいよ。この会場にいる男達は、彼のような風格があるかしら」
と呉文彗に向かって言った。
呉文彗は、江暁歌と話をしている寧岸をちらりと見ると、思わず幸せそうな様子が、言葉や表情に溢れた。
江暁暢は、益々妬んで、わざとなぞめいたことを呉文彗に尋ねた。
「今日のパーティで、一番喜んでいるのは誰だと思う？」
江暁暢のなぞめいた仕草は、呉文彗の好奇心をかき立てたが、彼女は首を横に振って、
「知らない」
と答えた。
しかし、反面、知りたい気持ちも見え隠れした。
江暁暢は、
「教えてあげましょうか？一番喜んでいるのは、他でもないわ、私の姉、そう、江暁歌よ」
と言った。呉文彗は、
「なぜなの」
と身振り手振りで尋ねた。江暁暢は、
「この本はね、もとはと言えば、私の姉がお金を出して、寧先生のために出版したものなのよ」
と言った。
呉文彗は、驚いた表情を見せた。
「何？あんた、まだ知らなかったの？」
呉文彗は、首を横に振って、自分は全く知らないという表情をした。
「じゃ、教えてあげるわ。出版社は、初めて出版をする人のために、本を出版してあげようなんていう考えは毛頭ないわ。彼らも、寧先生が本を執筆していることなんて知らないわよ。全て、私の姉が仕組んだことだわ。

寧先生の本を出版するために、姉は、出版社にお金を出したのよ」
呉文彗は、
「もしそうなら、なぜ出版社は原稿料を払わなきゃいけないのかしら？」
と身振り手振りで訊ねた。
「簡単な事よ。原稿料も、私の姉が出しているのよ」
呉文彗は、もう一度くるりと向きを変えて、心中複雑な気持ちで、江暁歌を見ていた。
江暁暢は、
「本当のことを教えてあげるわ。寧先生が独身の時、寧先生を追いかける女の子は、沢山いたわ。私の姉もその中の一人よ。あなたは、用心した方が良いわ。寧先生を私の姉に盗られちゃダメよ。私は、あなたのためによかれと思って忠告してあげたんだから」
とわざとらしく言った。
呉文彗の江暁暢を見る美しい瞳から、鋭い光が放たれていた。
趙耀根が宴会場に現れた。彼の到着は、直ぐに、衆目の注意を引いた。趙耀根のさらりと普段着を着こなした姿は、センスが良かった。彼は、グレーの綿パンを穿いて、足には丸みを帯びたズック靴を履き、髪の毛はオールバックにしていた。会場を埋め尽くした美男美女の華やいだ服装と不釣り合いの彼の色調は、一種独特の雰囲気を醸しだし、衆目の注意を引いた。彼は、傍若無人に寧岸の前に歩いていき、大きな手を差し伸べて言った。
「寧岸、嬉しいよ。心から祝福させてもらうよ」
寧岸は、以前の仲違いをとっくに忘れて、趙耀根と握手を交わし、
「ありがとう」
と言った。
趙耀根は、それから呉文彗を思わず抱きしめ、会場にいる人をびっくりさせた。会場から心からの喝采が湧き起こった。
すぐに、数人の若い男女の記者が駆け寄って来て尋ねた。
「あなたは、趙社長ですね」
「そうだよ」
「取材させてくれませんか？」
「構わないよ」
彼は、椅子を引いて腰掛けた後、円卓に並べてある椅子を指して言った。
「君たちも座りなさい」
多くの記者は、趙耀根を取り囲んで座った。二人の女性記者の瞳には、崇拝する光が窺えた。
記者達に囲まれた趙耀根を見て、江暁鴎は、
「耀根兄貴は、どこに行ってもスターになれるんだから」

と感嘆した。
「君は、やはり彼を尊敬しているんだね」
と宗漢が話しかけた。江暁鴎は、
「そうさ。僕は、ずっと耀根兄貴を尊敬しているんだ。それに、僕はこうも考えているんだ。耀根兄貴が、もう一度僕の姉さんの旦那さんになってくれないかって」
と言った。宗漢は、
「君は、君の崇拝が盲目的だと思わないのか？」
と言った。江暁鴎は、
「そんなことないよ。あなたは、聞いたことがないのですか？東の空に太陽が昇り、永葆春に趙耀根が現れる。永葆春会社もひっくるめて、僕は、耀根兄貴を崇拝しているんだ」
と言った。
「こりゃ、尋常じゃないね」
「耀根兄貴には、金を見定める商人の目があるだけじゃない。政治への抱負と強烈な使命感を持っているんだ。兄貴は、我が国の現行の政治体制と経済体制を見直したことがあり、前から、政治においても多くの貢献をすることを望んでいるんだ。彼の見識と気迫は、一般庶民の比じゃないよ」
宗漢は、これ以上何も言わなかった。そして、趙耀根を見ながら、彼がどんな人間かを研究していた。
パーティが始まると、宗漢が司会者を務めた。出版社の代表が、ステージに上がり挨拶をした。続いて、評論家が、寧岸の新刊本について、書評をおこなったが、どれも美辞麗句を並べ立てたものだった。
寧岸は、興奮して顔が紅潮し、カメラのレンズに向かうと、ぎこちなく笑った。来賓達は、お酒を飲みながら歓談し、パーティ会場は、賑やかな雰囲気に包まれた。

(四)

江暁歌は、一人片隅に座り、自分で手配したこのパーティを眺めながらゆっくりお茶をすすっていた。そこへ趙耀根が、記者を振り切って、近づいて来て声を掛けた。
「暁歌、今日は」
江暁歌は、礼儀正しく趙耀根に頭を下げた。
趙耀根は、
「寧岸は、今日とても喜んでいる。彼が本当に奮起すれば、今日から真っ当な路を歩くことができる。君の苦労も無駄にならないよ」
と言った。
「いったい何のことかしら」
「僕は、君のやり方を褒めているんだよ。僕も、どうやって寧岸を助けたら良いか、考えていたんだ。でも、

君に先を越されたよ。もし、僕達が同じ土俵で商売をしていたら、おそらく君に潰されていただろうよ」

江暁歌は、冷ややかに笑って答えた。

「ごめんなさい。私は、あなたが何を言っているのかわからないわ」

「そうかい。君は、しらばっくれているんだ。ここはうるさすぎるし、空気も悪い。外へ出よう」

江暁歌は、軽く首を横に振って拒否した。

趙耀根は、

「寧岸は、これまで、僕が聞いたことのない話をたくさんしてくれたんだ。僕に、釈明する機会を与えてくれないか」

と言った。江暁歌は、

「昔のことは、忘れましょうよ。ごめんなさい。失礼するわ」

と言うと、立ち上がって、歓談している人の中に入って行った。

寧岸は、みんなにサイン入りの本をプレゼントしていた。

この日、パーティ会場の中で、歓喜の渦に包まれていたのは、寧岸、唯一人だった。

（つづく）

編集後記

人間が他の生物と一番違っている点は何であろうか。

それは世代間の情報伝達が「遺伝」だけでなく、人間の脳だけが可能とした人工情報すなわち「記録と教育」という強力な情報伝達ラインを別に作ってしまったことにある。

これは近代科学文明を産んだが、反面生命進化が、その負の資産である地球環境を変え、遺伝情報の書き換えすらできるという事に追いつかず、正に破滅への道をも創り出してしまったのである。

これを破局から救うのは教育によるしかないと愚考するが、ここで問題にしたいのは、専門家ほど「自信の強さに比例する深さの落とし穴」があるということである。

思いつく事例は数々あるが昔話を二つほど紹介する。日露戦争から第一次世界大戦にかけ飛行機と戦車が登場するがフランスの将軍は、飛行機につき「飛んで遊ぶのは体にいいかも知れないが、軍事的価値はゼロだ」と一笑にふし、英国陸相は、塹壕突破マシンの戦車が提案された時「空想の世界から厳然たる現実に降り立たねばならない」と酷評、実際最初の戦車が彼の面前で威力を示しても「手際のいい玩具だ。戦争はこんな機械で勝てるものではない」と切り捨てた、のである。

ではどんな哲学で生き抜けばよいのであろうか。

自分の可能性に限界をひかない—身の程知らずにほかならない。行動に移す—無謀・無鉄砲に通ずる。めげない—能天気。優先順位をつけ集中力を養う—有限の時間のなかで欲張って生きるには不可欠。

こんな複眼的考察で、自分の行動を絶えず、やや離れた立場から反省できたらと考える今日此の頃である。

（T・N）

まんじ第131号

平成26年2月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　中　山　喬　央（なかやま　たかひろ）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045(544)5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢はなお　高きを目指して天駆ける」

田寺怜葦　画

まんじ

No.132

2014.5.1

まんじ第百三十二号　目次

男勝り―長崎の大浦お慶―……太田精一……4
箱根市構想……古屋富雄……14
「カード」と「チョンセ」の大乱……新井宏……21
「たくあん」の先……横山正義……30
無理を通して敷地に道路を取り込む……山本鎭雄……51
常陸坊海存（海尊）……漆原直子……65
短歌　四十首……曽根竣作……70
短歌　行雲流水（四十一）……石黒修身……76
石川理紀之助の一生（その二）……三戸岡道夫……80
関東管領始末記⑬　扇谷家牢　太田資長（道灌）……千坂精一……92
古い物・遠い夢……忠内正之……104
つれづれの源氏物語　第二回　少年時代……小田紘一郎……112
漢詩　潮騒録（七十六）《漢詩の流れ64》……鯨游海……127
人類の仲間（五）……鈴木守……130
殉教（三）……鍋屋次郎……137
千家尊福伝（三）……村上邦治……149
真忠組始末記……山田嘉久……156
密室銀行（十五）……匠克仁……162
カミングアウト……匠克仁……168
口紅（その十四）……池莉原作　山本勉訳……176
編集後記……編集子……198
表紙　絵……田寺怜葦……

男勝り
―長崎の大浦お慶―

太田精一

(一) 茶の輸出

雨が激しくなった。対岸の稲佐山が、強風にあおられ悲鳴を上げている。湾内の異国船が木の葉のように揺れている。

台風の接近する長崎は、すでに暴雨風圏に入っていた。大浦お慶は、湾岸に駆け降りた。埠頭に係留されているエゲレス船が心配であったからだ。

お慶は、全財産を賭けて嬉野、彼杵、豊後、日向と九州一円の茶一万斤（約六トン）を買い集め、エゲレス船に積み込んだばかりであった。

もし、その船が転覆でもして茶葉の輸出ができなくなれば、これまでの努力が水泡に帰し、全財産を失いかねない。

お慶は、エゲレス商人オルトに面会を求めた。

「オルトさんエゲレスの船は、この嵐でも大丈夫でしょうか。私は、これまでオランダとしか取引してこなかったので心配です」

「エゲレス商船は、今や世界一です。オランダ船よりずっと頑丈ですから、このくらいの嵐では、びくともしません」

オルトは胸を叩いて、お慶を安心させた。

お慶が、外国との貿易を思い立ったのは、オランダ通詞品川藤十郎がオランダ人テキストルにお慶を紹介した嘉永六年（一八五三）頃からである。その年にはペリーが浦賀にプッチャーチンが長崎に来航している。

テキストルは、出島在住のオランダ人である。彼は、来日する前から、東洋との交易が進むにつれ、欧米人に喫茶の習慣が広がるものと確信していた。当時の茶の多くは、緑茶である。日本茶も将来欧米に普及すると察知したテキストルは、お慶に茶のサンプルを出荷するよう勧めた。

お慶もテキストルとの商談を進めるうちに、茶は将来有望な輸出品になるに違いないと思えてきた。

そこで、とりあえずサンプルとして、嬉野の茶を欧米及びアラブ諸国に送ってみた。茶は、欧米はもとよりアラブ諸国でも高い評価を受け、出島のオランダ商人も注目し始めた。

安政三年（一八五六）日英和親条約が締結されるとすぐにエゲレス船が、長崎に寄港するようになった。その船で来日したエゲレス商人オルトは、日本茶に目をつけ、お慶に、輸出用茶十二万斤（七二トン）の注文をした。

お慶は、小躍りして喜んだ。

異国との交易の夢がようやく叶いつつある。積荷は今や長崎を出港しようとしているのだ。

その矢先の台風の襲来である。

お慶は、天を仰いで慨嘆した。ひたすら台風が、長崎を避けて通りぬけることを願った。

お慶の祈りが天に通じたのか、台風は長崎を掠めて国東半島から瀬戸内海へと抜けて行った。

安政六年（一八五九）の秋、お慶の集荷した日本茶が大量に、長崎から海外に向かって出荷されたのである。

長崎は、安政元年（一八五四）の開国により大きく変わった。日本唯一の海外窓口であった長崎は、その特権的な地位を失い、これまで限定されていたオランダ人、中国人の他、エゲレス、メリケン、フランス、オロシァからアラビア人にいたるまで多くの外国人が押し寄せた。そのため、出島だけの居留地では手狭となり、幕府は、大浦の海岸一帯にも居留地を広げたのである。

それにともない、外国人が街に溢れ市民との交流もより深まった。

そうした時代の変化を敏感に感じ取ったお慶は、これから海外との交易が飛躍的に伸びるものと予想していた。その手始めがお茶の輸出であったのだ。

お慶は、対外貿易を始めるにあたって、商習慣、取引方法、風俗、生活習慣、飲食物、ものの考え方などを始め、片言の外国語にいたるまで学び、当時の女性にしては、めずらしく世界情勢にも通じていた。

そうしたことが、新知識に渇望し、日本の将来を憂慮する若者たちの共感を呼び、お慶はこうした若者たちの憧れの的であった。

(二) 離別

大浦お慶は、文政十一年（一八二八）六月、長崎市高平町で生まれた。父は、大浦太右衛門、油問屋である。大浦家は、代々太右衛門を名乗っていた。お慶の父が、何代目の太右衛門であったかは定かではない。

父は、お慶が十二歳の時他界した。一人娘のお慶は、婿養子を迎えることを運命づけられていた。

ところが、大浦家に不幸が襲った。

天保四年（一八三三）十二月の長崎の大火である。

火は、西風に煽られ、瞬く間に燃え広がり、中心街を焼き尽し、家屋五六二戸、土蔵五棟が焼失した。お慶の家も火炎に巻き込まれ、焼失してしまったのである。

お慶は、数代続いた油屋を再建しなければならない。

弘化元年（一八四四）十七歳になったお慶に縁談が持ち上がった。親戚一同の話し合いにより婿養子を迎え、油屋を再建しようということになったのである。

お慶は、結婚には乗り気でなかった。勝気な彼女にとっては、婿に頼るよりは、自分の才覚で大浦家の再建を図ろうとしたのである。ところが、親戚一同総意の縁組であることから、十七歳のお慶にはその圧力を撥ね返すことができなかった。お慶はしぶしぶ婿を取ることを承知した。

婿は、肥後の川尻から長崎に蘭学修行に来ていた幸次郎という青年である。

お慶は、祝言の日の夜、大浦家の再興にかける幸次郎への期待を熱く語った。

「幸次郎様、末永くこのお慶をお愛しみください。よろしくお願いします。今の大浦家は、火事で何もかも失い、商いも思わしくありませんが、私は、あなた様をお迎えし、今まで以上にこの店を大きくして行きたいと思っています。どうぞこの望みを叶えてください」

お慶の言葉を聞いて、幸次郎の甘い新婚への期待が消え、自分が単に大浦家再興のための道具にされるのではないかとの怖れを感じた。お慶を愛おしく思う気持ちより、重大な責任を押し付けられる重苦しさに耐え難くなった。

それにともない幸次郎の体も変調をきたし、男性の機能が萎え、二人は結ばれることはなかったのである。

「お慶さん。あなたは私に何を望んでいるのか、良く分からない。確かにこの私は、この家の婿養子となった。だが、私は蘭学を学びたいと思って長崎に来たので、商人になるためではない。そうはいってもこの家の婿になった以上、商人にならなければならないだろう。ただ、これまで商人の修業をしたこともないし、これからも長崎きっての大商人になる自信もない。私は、書籍を読み学問をし、風月を愛で、音曲を楽しむ方が好きだ。これからも商売の合間にそのような時間を持ちたいと思っている」

幸次郎は、全部が全部お慶の期待に応えることはできないと語った。

お慶は、結婚初夜の男と女の結びつきについて聞いてはいたが、どうして良いか分からず、煮え切らない幸次郎の態度に将来への不安を感じた。

気の強いお慶は、幸次郎の言葉に失望した。また覇気に欠けるその態度に嫌気がさした。そう思うとひと時も一緒にいるのが苦痛となった。

「あなたの気持ちは、分かりました。私の思い描いていた夫とは、ずいぶん違います。この先ずっと考えの違うあなたと暮らすことは、お互いに不幸だと思いますのでまだ結ばれないうちにお別れするのが良いと思います。どうぞ祝言はなかったこととして明日この家から出て行ってください」

お慶は、思い切って幸次郎に離別を告げた。

当時の長崎では稼ぎの少ない夫を追い出すということは、よくあることであった。

長崎は、貿易による収入が多く、一般の町民には、幕府から竈銀などといって各戸割り当ての地下銀が支給されていた。このように一定の収入が、お上から保障されていたため、一家の収入に対する夫の比重が軽く、家庭内における夫の発言権は相対的に低かった。そうしたことから、他国の町に比べ、妻の発言力が、強かったのである。

幸次郎も自分とあまりにも違う考えを持ち、可愛げのない態度のお慶に嫌気がさし、出て行く決心を固めた。

(二) 龍馬への想い

幸次郎を追い出したお慶は、家業の油問屋を立て直すために無我夢中で働いた。その甲斐あって家業は隆盛となり、焼失以前の状態に戻った。

だが、お慶の事業意欲はそれだけに留まらなかった。新規取扱商品を探していたのだ。そんな時、オランダ通詞の品川藤十郎と知り合い、藤十郎の紹介によりオランダ商人テキストルの知遇を得た。

お慶は、テキストルから海外情報を入手し、まだ見ぬ諸外国との交易に期待した。そこで彼の勧めに従い、茶の輸出を始めるということになり、それが今回のエゲレス商人オルトからの大量の注文に繋がったのである。

茶の輸出に成功したお慶は、一躍長崎きっての貿易商としての地位を得て、順調に取引を拡大して行った。

ところが、そのころから幕府の支配力が急速に衰え、京都には、勤皇の志士と称する脱藩浪人が集まり、不穏な空気が漂い、日本全体が騒然とし始めた。

長崎も例外ではなかった。

志士と称する諸藩の藩士や脱藩浪士が増え、長崎奉行所の取締りが厳しくなった。だが奉行所の役人の数が足りないため、十分な取り締まりができない。

もともと長崎は、日本唯一の開港の地であり、自由な雰囲気のもとで発達した町であった。町民に自治権を与え、警察力も極力抑えてきたのである。

外国人に対する偏見も少なく、国内各地から流入するよそ者に対しても寛容であった。そのため、来崎する諸藩の藩士や脱藩浪士には、居心地が良かった。

お慶は、茶商人としての地位を高めることによって、長崎の有力貿易商小曽根乾堂の知己を得た。彼は、下関の白石正一郎と並ぶ志士たちの資金援助者として知られ、お慶と同じ年であった。

乾堂は、勝海舟が長崎伝習所にいた頃から親交があり、海舟の斡旋で越前松平春嶽の福井藩の御用商人となっている。

お慶は、乾堂に紹介され、勝と知り合った。その勝と共に来崎した坂本龍馬とは、その後設立された亀山社中を通じて深い関わり合いを持つことになるのである。

坂本龍馬は、慶応元年（一八六五）海運会社亀山社中を設立し、対外交易に乗り出した。同社は、土佐、紀州、越後などの脱藩藩士や郷士などで構成され、社員は金銭面はもとより長崎の風俗習慣に馴染むまで、ずいぶんお慶に世話になった。

社中の連中は、お慶に気に入られるようとし、身の回りの雑用を引き受け、中にはお慶の入浴中に、彼女の背中を流す社員もいたという。

お慶は、三十八歳の女盛りの「あねしゃま」で、若い社中の男たちの視線を浴びることに誇らしさと悦びを感じているようであった。

お慶は、幸次郎と離婚してから商売に夢中になり、男性関係は噂ほどではなかった。取引相手がほとんど男であったため、一部屋に二人で閉じこもって商談することも少なくない。そのため、あらぬ噂を立てられ、男好きの女傑として世間から見られていた。

とはいえ、彼女は男嫌いであったわけではない。英国商人オルトとは、茶の取引を通じて親しくなり、時折逢瀬を楽しむ仲になったが、お互いが独立した商人として認め合ったうえのことで、深みにはまり自分を見失うことはなかった。

お慶は、亀山社中の男たちに囲まれた生活を送っていたが、男女の関係になった男は一人もいなかった。

だが、坂本竜馬だけは違っていた。

「昨晩、湯上りの体を拭いているお慶さんの背中を見てしまった。肌には、玉のような滴が浮いて、振いつきたくなるような美しさだった」

「それは目の保養をしたな。私もその姿を一度拝みたいものだ。だが、坂本さんと割りない仲だというじゃないか。うっかり手を出したら大変だ」

紀州出身の伊達小次郎（陸奥宗光）と土佐出身の近藤長次郎との間にそんな会話が交わされたと伝えられている。

竜馬が、亀山社中を設立するために、小曽根乾堂と共に資金提供を依頼に来た時から、お慶は龍馬の爽やかな弁舌に魅了されてしまったのである。

「日本は、今までのように殻に閉じこもっていてはいけない。欧米諸国に伍して強大で尊敬される国になるためには、まず貿易を盛んにし、国を豊かにしなければならない。それには、物を運ぶ大型の船と取引する機関が必要で、その役割を担うのが亀山社中だ」

竜馬の口から迸り出る言葉は、対外貿易に携わり、その必要性を感じていたお慶の共感を呼び、日本の未来を語る龍馬の情熱に心を動かされた。

慶応元年八月、蒸し暑い夏の夜、お慶は、亀山社中の将来についての意見を聞くため、龍馬を自宅に招いた。

お慶は、龍馬の男らしさと純真さに魅せられ、体の奥から沸き上る熱い想いを抑えることができない。酒を酌み交わすうちに手が触れあった。

三十一歳の龍馬は、男盛りである。お慶の体から発散する女の香りが、龍馬の理性を奪った。

龍馬は、思わずお慶の体を引き寄せ、豊満な胸に手を当てた。お慶は、龍馬のなすがままに任せ、その腕の中に体を預けていた。

国事に東奔西走する龍馬は、長崎奉行からも要注意人物として警戒されている。いつ長崎を離れ、京や江戸に行くか分からない。

お慶は、龍馬がお龍さんという妻を長崎に連れてきていることも知っていた。それでもお慶は、長崎にいる間は、龍馬を援け、龍馬との恋に命を懸けようと心に誓うのであった。

(四) 長崎の志士たち

龍馬が亀山社中を設立した慶応元年（一八六五）に、幕府は、長州再征令を出したが、諸藩の動きは鈍く、幕府権力の衰えを感じさせる結果となった。世の中が騒然とし、倒幕運動も次第に広がりつつある。開港地には外国人が来訪し、欧米風の文化が持ち込まれ、異国情緒を漂わせている。

長崎の町にも大きな変化が起こっていた。

フランス人宣教師ヒューレが来崎し、南山手の居留地に接する大浦に天主堂を建てる許可を幕府から得て、文久三年（一八六三）建築に着手した。この天主堂は、彼の後を継いだプチジャンが慶応元年（一八六五）に完成させている。

天主堂が完成すると、近郷近在からキリシタンだとする人々がやってきた。彼らは、迫害に耐えながら信仰を守り続けたことを告白、世界に大きな反響を呼んだ。

また、同年エゲレスから来日したグラバーが、貿易商会を設立して、大量に武器、弾薬を日本に売り込み、大金持ちとなり、豪邸を建てた。このグラバー邸は、今で

も長崎の観光名所の一つとして残っている。

グラバーは、薩長の藩士や志士たちの後ろ盾となった。桂小五郎（木戸孝允）もこのグラバー邸に匿われたことがあり、いわば志士たちの秘密集会所でもあった。また、グラバーは、伊藤俊輔（伊藤博文）、井上聞多（井上馨）らのヨーロッパ留学も援助している。

さらに、亀山社中から海援隊と名を変えた坂本龍馬の事業にもグラバーは、資金援助した。

こうして国内外の貿易船が入り乱れ、慶応元年から三年にかけての長崎は、幕府の衰退とは裏腹に、活況を呈していた。

海援隊が、大活躍できたのは、龍馬を始め多くの有為な人材が集まったからであることはいうまでもない。

だが、人材は、海援隊の隊員だけではなかった。

慶応元年から三年にかけて、広く海外の知識を求めて集まった各藩の有能な若者が、藩の浮沈をかけて海援隊の事業を活用し、その手法を学んだからである。

こうした若者たちの知識や行動が、明治新政府の樹立に貢献し、後に政府高官として要職に就き、日本を欧米に比肩するほどの国に導く役割を果たしたのである

たとえば、長州藩の高杉晋作、伊藤俊輔、桂小五郎、井上聞多、土佐藩の後藤象二郎、佐賀藩の大隈八太郎（大隈重信）、鹿児島藩の松方助左衛門（松方正義）五大才助（五代友厚）などである。

この中で、龍馬を除いて特にお慶が目にかけていたのは、佐賀の大隈と薩摩の松方であった。

大隈は、来崎した頃、金が無く、お慶から金をせびっては、糊口をしのいだといわれている。後に彼は、長崎裁判所勤務を経て、中央の政界に躍り出た。その後明治十五年には、後の早稲田大学の前身である東京専門学校を設立している。大隈はその後、二度総理大臣になった。

松方は、東京に出てから出世して、明治十四年大蔵卿となり、日清戦争を挟んで二度総理大臣になっている。

陸奥も海援隊当時から、お慶には可愛がられた。陸奥は、お慶より十六歳も年下である。恐らくお慶は、自分の子供のように思っていたに違いない。海援隊が、お慶から借金を頼むときなどは、龍馬は陸奥を差し向け成功している。

こうした若者たちも、明治新政府が設立されると長崎から東京に移って行った。

坂本龍馬は、明治維新を見ることなく凶刃に倒れた。

お慶は、龍馬の訃報を聞いて、しばらく立ち上がることもできなかった。深い悲しみが、胸の奥から溢れ出て、嗚咽にむせび、一日中一人部屋に閉じこもって香煙を浴びていた。

海援隊は、解散し貿易の拠点も長崎から次第に横浜、

神戸に移って行った。

世界の茶市場は、緑茶より紅茶が好まれるようになり、お慶の輸出取扱量は激減した。

お慶は、四十路半ばに差し掛かり、女としての盛りが過ぎて行く寂しさを感じていた。心に空虚な風穴が空いたようで、これまでのような事業意欲も湧かず、ぼんやりと過ごす日が多くなった。

そんな時、元熊本藩士遠山一也がお慶の前に現れた。お慶は、久しく忘れかけていた異性へのときめきを彼に感じた。だが、その思いは、女としての感情よりも一人身の侘しさを埋める母性の発露であったのかもしれない。

(五) おなごの浅知恵

遠山一也は、明治三年六月、熊本から長崎にやって来た。武家に生まれたが、明治新政府の成立により、武士の時代は終わったと感じた彼は、対外貿易が盛んになるのを見越して貿易商を志した。

だが、資金はない。そこで委託取引に目を付けた。

スエーデンの商人ウエストファールから反物の供給を受け、熊本でその反物を売りさばき、代金は売上金から支払うことにした。ただし、反物の仕入れ価格と支払期日を限定した点が、単なる委託販売とは異なっていた。

明治三年の年末に反物相場が下落した。売値が仕入れ値よりも安くなってしまったため、一也は反物を質に入れ、値上がりを待った。だが、相場は下がる一方で利息が増え、ウエストファーレルからは、期限通りの支払いを迫られた。

困った一也は、お慶の口利きで長崎県の職員をしている元オランダ通詞の品川藤十郎から金を借り、穴埋めをした。が、損害額の一部にしかならなかった。

一也は、借金を返済するために、別の取引を思いついた。

リンガー商会への煙草の売り込みを図ったのである。この取引をするに当り、一也は、お慶に保証人になってくれるよう頼んだ。

お慶は他ならぬ一也の頼みであったので聞いてやりたかった。だが、茶の輸出も停滞し、リンガー商会との取引もなかったので断った。

切羽詰まった一也は、必死でお慶に保証人になってくれるよう再度懇願した。

「お慶さんお願いだ。このままでは倒産をしかねない。そうなれば長崎にはいられなくなる。私は、立派な商人になってここに残り、お慶さんと一緒に暮らしたい。リンガー商会が駄目なら、お慶さんと長年取引のあるオルトさんに煙草を売るようにしてもよい。もし私が金を払えないようになったら、熊本県が、代って支払うという条項を入れた契約書を作成してきた。ほらこの通りだ」

一也はその契約書を指し示し、必死になってお慶を口説いた。

お慶は、熊本県が代って支払うということに疑問を持ったが、一也が熊本藩士であったことを思い、あるいはそんなこともあろうかと考えたあげく、彼の熱意と情にほだされて、保証人になった。

オルトは、お慶の保証であればと信用して、煙草の売買契約にサインし、手付金として契約の半額を支払った。

手付金は三千両である。この金を受け取った一也は、滞っていた反物の代金と品川藤十郎への借金を支払った。一也は、残金で質屋に入っている反物を受けだし、それを売り払い、煙草の仕入れ資金に充てるつもりであったが、質草の反物はすでに流れてしまっていた。

仕入れ資金として受け取った手付金は、こうした借金の返済に充てられ、手元には、質屋からの反物の受け出し金とわずかな流動資金しか残っていない。一也は、半ばやけくそになって、そのわずかな仕入れ資金にも手を付け、遊興費に使った。

一也は、長崎を追われるように故郷の熊本に帰ってしまった。それ以来何の音沙汰も無い。

お慶は、一也と会うために熊本に出掛けた。だが、彼は煙草の買い付けにより多忙であることを口実に、お慶と会おうとしない。思い余ったお慶は、債務不履行の場合熊本県が面倒を見るという条項を頼りに熊本県と掛け合った。

ところが、熊本県では、そんな約束はないと突っぱねその条項を契約から外すよう主張した。

「私的契約の損害に、県が保証をするなどというはずはない」

お慶は、疑惑を深めつつも熊本に一カ月滞在し、煙草をオルトに納入するよう一也に迫った。お慶は、一也に騙されたとは、思いたくなかった。

だが、彼は、「無い袖は振れぬ」の一点張りでどうすることもできない。

一也が、オルトとの契約を履行しなかったために、保証人としての責任がお慶に振りかかってきた。

オルトからの最後通告がきた。納期遅れ故、最早煙草はいらないというのである。

契約後一年半経った明治五年一月、とうとうオルトは、一也とお慶を相手取って、手付金返済の訴訟を起こしたのである。

だが、一也には、全額返済能力は無い。土地、家屋の売却代金、売掛金、家禄五年分、合せて三八〇両しか払えなかった。それに質草受け出し金千両余りを加えても手付金の半分にしかならない。一也は詐欺罪で、懲役十年の刑を裁判所から言い渡された。

結局手付金の三千両の内、一也が返済できたのは千五

百両で残りの千五百両は、保証人であるお慶が被ることになったのである。

お慶は、そのうちの二百五十両を即金で払い、残りの千二百五十両は、二十カ月払いとすることでオルトと和解した。

かつてのお慶であれば、それくらいの金は、すぐにでも都合をつけることができたが、今はそれができない。土地、家屋を抵当に入れ、家財道具や着物を売り二十カ月の分割で、何とか完済した。

「おなごの浅知恵、一時の粗忽にして嘆かわしい次第に奉り存じ候」

お慶は口上書にそう述べている。

遠山一也は、これまで接触した骨太な男たちと違っていた。貿易商になりたいという志は良かったが、地味な商人としての修業をしないまま「一攫千金」を狙ったことが裏目に出た。武士にしては、口が上手で線が細く、母性をくすぐる頼りなさと優しさを持ち併せていた。

お慶は、商人としての冷静さを失い、情に溺れてしまったことを恥じた。

だが、これまで生きた自分の人生に悔いはなかった。

亀山社中の若者に囲まれ「あねしゃま」と慕われた日々は、まさにお慶にとって黄金の日々であった。ことに坂本龍馬と過ごしたわずかな時間は、商人として女として最も輝いていたとお慶は思った。

明治十七年四月十三日、お慶は五十五歳で、波乱の生涯を閉じた。戒名は、是則院心慶妙精日法大姉。

他界する直前の四月五日、当時の農商務卿西郷従道は、松方正義と図って、お慶に褒賞状を与えた。

お慶に世話になった幕末の志士たちの多くは、すでにこの世を去っている。

西南戦争を経て、明治新政府もやっと落ち着き、日本は、鹿鳴館時代の真只中にあった。

(完)

箱根市構想（東箱根市そして箱根市へ）

古屋富雄

「花を見て怒る人は誰もいない」この言葉を原点にした地域の活性化施策として、四季折々の花による地域おこし「あしがら花紀行」や、花と農業のコラボレーション「フラワーユートピア構想」を立案し、そして実践してきました。

春は春めき（桜）、夏はハナアオイ、秋は酔芙蓉、冬はロウバイなど、四季折々に咲く花のエリアに多くの人々が訪れています。

現在、南足柄市を中心にした花による地域おこし団体「あしがら花紀行ネットワーク」（栗田実会長、20団体、会員約1000名）が開催する花まつりには、年間約10万人以上が訪れているとのことです。

このように、花による集客力は、確実な成果として実証され、花が観光資源になることを多くの人が実感できる状況が生まれています。

花を見た人は、花の美しさに「ワアーきれい」「すばらしい」「来て良かった」など、声を上げ、とても満足されているようです。

昔より「花より団子」という諺があります。

花の美しさや、花の味わいを楽しむより、お腹を満たしてくれる食べ物（団子）に人は魅かれる、人は実益を優先するという比喩として使われています。

まさに、この諺に漏れず、花紀行の花まつりのお客さんも、花見は、程々にして、好みの食べ物や土産を求め、まつり会場内を歩き始めます。

しかし、この団子に相当するお客さんが満足していただくことのできる、地域ならではの食べ物や土産などの「地域ブランド」が不足しているのが現状であり、解決すべき課題であると考えます。

「地域ブランド」づくりは、グローバルな視点から捉えるべきと考えています。

飛行機で海外に出た時、東京、成田、箱根、京都は、ほとんどの国の人が知っている、日本を代表する地名です。次代を担う若い世代が、世界を舞台に活躍するためにも、世界に通用する地名力を活かした「地域ブランド」づくりに、気づくことです。

南足柄市と足柄上郡（開成町、大井町、松田町、山北町）の名称を『箱根』という世界的なネームバリューを持つ、名称に変更する提案です。

南足柄市と箱根町は、明神ヶ岳（標高一、一六九m）を隔て、この山の東側に南足柄市、西側に箱根町が位置しています。

まずは、南足柄と箱根の歴史的背景を理解するため、その今昔を紹介することにします。

○南足柄と箱根の今昔

現在の箱根町仙石原地区は、明治22年の3月まで南足柄市や開成町、大井町などの足柄上郡に属しており（明治22年4月1日―町村制の施行により、仙石原村が設立され、所属郡が足柄上郡から足柄下郡に変更された）箱根町とは同じ生活圏、経済圏であった資料が残されています。

その一つに、昭和39年1月15日に発行された『史談あしがら』に掲載された実方正作氏の「足柄上郡仙石原」を、ほぼ原文に近い内容で紹介します。

「足柄上郡仙石原」　実方正作

明治維新の廃藩置県で足柄県に属した当南足柄町地方は、明治の初期上郡行政の中心は、雨坪か関本辺にあったそうだ。東海道線の汽車が松田山北を経て開通するに及び（今は御殿場線）今迄、上郡であった仙石原は下郡に属し上郡の中心は松田に移ったとのことである。

弘西寺、雨坪、福泉等から仙石原に通じる道は明神岳の中腹で関本猿山方面より通ずる道と合して矢倉沢、地蔵堂を右に見て、岳の低い所を仙石原へと抜けた。

明治三十年代迄は、大久保入会地には地元弘西寺、福泉、雨坪、刈野を初め下怒田、まま下、竹松、千津島、円通寺、中ノ名、延沢、吉田島等の者が、夏になるとカイ場の草刈りに小川口橋を渡り弘西寺一の沢、倉見にかけて毎日、馬を牽いて往復した。二、三十頭の馬が昼頃干し草を負って帰りの行列をするのは珍しくなかった。それで、カイ場は、年二、三回も刈られるので雑木等はなくあたかもゴルフ場のように綺麗に刈られていた。

当時は、田を作るに化学肥料が無かったので野草を馬の飼料として、そのキュウ肥が主たるものであったから農家は皆、馬を飼って居り、長屋門のある様な大きな家

では二頭も飼って居た。又、その馬が運搬等の為（今の自動車の様に）欠くことの出来ぬものであった。

従って、馬の通る道は所謂幹線道路で入会の者達が修理に当たったから仙石原への交通もさして難事ではなかった。或る人は仙石に用事で行った処、急に天気が悪くなり雨が降り出したので家に用意したサツマイモの苗床の蓋をすることを忘れたのに気づき「アラ、苗床の覆いをし損ねた、寒さで傷めては大変だ、詳しい話は何れまた」といって飛んで帰ったという、いかに交通が難しかったか、又、サツマイモが大事にされたか覗い知れる。

又当時過燐酸石灰が初めて肥料として売り出されるまでは、大湧谷から硫黄を採って馬や人の背で運び、キュウ肥や木の葉、青草等の緑肥と合わせ肥料として用いたので仙石への往来は多かった。

尚、農家の老人は、春先四月頃は、仙石原の湯宿に山越で一週間から二週間位米や味噌、野菜等を持参して湯治に出かけた。

以上、当時、箱根と足柄が一体であった様子が、人々の生活を通して垣間見ることが出来ます。

また、別の資料によると足柄と箱根の生活圏や経済圏、そして、芸術文化まで共有した歴史があることが分かりました。

享保13年（1728年）、徳川吉宗や大岡越前が活躍した時代に『公時』と書かれた古文書に小田原藩、炭屋七衛兵が仙石原や宮城野で鉱山（銅の採掘）を開き、一時的な繁栄がなされたとしています。そして、この鉱山の人工（働き手）として、足柄地域の多くの人が明神ヶ岳を越えていったとの事です。

時に、飢饉が発生し、僅かな農地しか持たない箱根の人々は、豊かな足柄地域に身を寄せるため、逆方向から明神ヶ岳を越えてきたとの事です。

しかし、足柄に身を寄せた箱根の人々の多くは、この地に居付くことはなく、再び、明神ヶ岳を越えて箱根へ戻っていった。箱根はそれほどまでに離れがたい土地であり、また、足柄と行き来が出来る距離であったと言えます。このような背景が、現在も、親戚、縁戚になった家が多く残っているゆえんと考えます。

芸術文化面では、平成2年3月30日に発行された『せせらぎ　宮城野の今昔』などに掲載された一文を紹介します。

宮城野村は、明治22年4月1日―町村制の施行により、宮城野村もって足柄下郡宮城野村が成立された。明神ヶ岳頂上に小さなホコラがあるけれども、その所は足柄上郡狩野村に所属しており、その隣接する所が宮城野村であり、古くより人々の往来があったとされます。

そして、このような関係があり、『箱根宮城野ばやし

の誕生秘話』にも、足柄上郡狩野村が深く関わることとなります。

大正4年は、明治から大正に改元された即位式の御大典が行われた年であり、宮城野村においても有志の人々がら奉祝の話が持ち上がった。そして、新たな屋台を制作するのを機会に、南足柄の人々によって、おはやしの指導を受けることになる。

そして、大正の中頃、狩野村飯沢地区から宮城野に転住した高木又吉氏の力を借り、おはやしの指導者を募り、同氏の知人3名がその任務を引き受け、指導にあたり『箱根宮城野ばやし』が誕生したと記されています。

江戸時代、明治、大正、昭和20年代までは、現在のような車社会でなく、人や馬が通ることの出来る、二本足程度の幅員があれば、通行可能な道として多くの人が利用していたと考えられます。

南足柄から箱根へ通じる明神ヶ岳を越えていく名前のある道は、「道了道」や「久野道」がありますが、車社会以前の時代では、南足柄の三竹、矢佐芝、狩野、道了尊、刈野、地蔵堂など明神ヶ岳に接する地域には、箱根に通じる二本足で行き来が出来る生活道が、それぞれに存在したと想像されます。

以上、足柄と箱根の今昔を紹介しましたが、ここからは、未来に向けての構想を提案します。

○地域ブランドづくり「東箱根オリーブ」

地名力を活かした個人的な動きの一つに、南足柄市でオリーブの栽培に着手し、そのブランド戦略を模索している加藤準一氏（南足柄市岩原在住）との出会いがあります。

加藤氏は、オリーブの販売戦略をどのように立てるかを考えた時、「鎌倉野菜」が浮かんできたとの事でした。

このことは、加藤氏と私が共通して考えていた、地名を活かしたブランドによる販売戦略です。

「鎌倉野菜」とは、鎌倉で生産・販売されている野菜の総称であり、他の地域とは区別されたいわゆるブランド野菜であります。

しかし、鎌倉と言うネームバリューの効果により、テレビや新聞、ネットなどの情報媒体が盛んに取り上げ、その結果、「鎌倉野菜」は、全国的にその名が知れ渡り、今や誰でもが知る存在になっています。

当然のことのように、鎌倉に訪れた観光客は、土産として買い求め、生産が追い付かないほどの人気を呈しています。

南足柄市は、明神ヶ岳や金時山等の箱根外輪山を隔てた箱根町の東側に位置しています。そして、そこで収穫されたオリーブやオイルを「東箱根オリーブ」として売り出し、ブランドとしての一歩を踏み出したいと語られていました。

○地域ブランドづくり「足柄山と金太郎」

「箱根市構想」の実現のためには、足柄という名称に強い思い入れがあるとされる、郷土史家、金太郎の研究の第一人者である内田清氏（南足柄市弘西寺在住）に、加藤準一氏の地名を活かした「地域ブランド」への理解をいただくことを、最難関ハードルと位置づけました。

当初、私の心の中には、「足柄山があり、金太郎伝説がある」地名を活かすには「足柄山があってこそ、金太郎がある」と一刀両断に、私の提案は拒否されるものと考えていました。

意に反して、内田氏から出た言葉は、「箱根の中に足柄山があり、金太郎が存在する」、グローバルに捉えた見方をしてこそ、足柄山も金太郎も世に出ることが出来る。元来、足柄も箱根も同じ生活、経済、文化圏であったことは間違いない。世界に通用する『箱根』という地名力を活かした提案に賛同すると理解を示されました。

なお、先に記載しました「足柄と箱根の今昔」などについては、内田氏から提供された資料とご本人の歴史分析に基づき書き、記しています。

○東箱根そして箱根市へ

グローバル化が進む現在、海外に通用する『箱根』という地名力を活かした地域活性化施策こそ、今を生きる者がなすべき、最も重要な優先施策と考えます。そして、次世代が故郷で暮らしつつ、海外にも活躍の場を求めることの出来る環境を創るために、真剣に考えなくてはならない地域づくりなのです。

２０１４年、南足柄市の矢倉沢地区と箱根町の仙石原地区に通じる林道が、一般道路の県道（仮称：南箱道路）として、２０２０年の完成を目途に事業が着手されています。この林道の一般道路化により、南足柄市を初めとした足柄上郡と箱根町とは、僅か30分で往来することが出来ることになります。

箱根町には、年間２０００万人の観光客が訪れています。しかし、この観光客をもてなす野菜やフルーツを栽培する農地は、箱根町にはありません。

足柄地域には、これらの野菜やフルーツを栽培する農地は、十分にあります。そして、それらに『箱根』という付加価値を付けたネイミングが「地域ブランド」になると考えます。

その第一段階として、加藤準一氏の提案している「東箱根オリーブ」と同様に、「東箱根野菜」「東箱根フルーツ」として売り出すのです。

農家には、野菜やフルーツの栽培や味についても、その名前にふさわしい農産物の生産を付託します。そして、２０００万人の観光客をもてなす食材を、南箱道路を利用して供給するのです。

このように、ブランドづくりと道路などのインフラ整備を進めることで、足柄地域に共通な生活圏、経済圏が創出され、さらに醸成することにより、南足柄市、開成町、大井町、松田町、山北町が一つの自治体になる環境が整うことになります。

そして、市町合併の必要性を説き、『東箱根市』という名称を提示して、地域住民の合意を得ることにします。

第二段階として、箱根町が世界の観光都市、いわゆる、シティに名称変更して、『箱根市』にしたいという機運と、そして、南足柄市などの『東箱根市』が『箱根市』へ名称変更する機運が互いに高まった時に、再度、市町合併をして、世界の『箱根市』にするという二段構えの構想です。

○第一段階の東箱根市にすると

- ＴＶ番組などで、開成町の瀬戸屋敷やアジサイまつり、南足柄市の夕日の滝や酔芙蓉農道などが「東箱根」という括りで紹介され、観光客の増加が期待できる。
- 東名高速道路・大井・松田インターの名称を例えば「東箱根大井・松田インター」にすれば、２０２０年に開通予定している、南箱道路へ、ドライバーを誘導する刷り込みができる。
- 同じく、小田急線・開成駅や新松田駅の前に東箱根を付ければ、足柄全体が箱根として認識される
- 土地の価格が上がり、定住人口の増加が期待できる。
- 国内、国外を問わず、出身地や居住地を「箱根です。」と言える。

○第二段階の箱根市にすると

- 足柄地域は、第一段階より、更に増した付加価値が上がる。
- 観光客や交流・定住人口の更なる増加が期待できる。
- 山、温泉、湖のみならず、平野（農地）、川そして、相模湾（海）まで取り入れたリゾート（観光圏）が、首都80㎞圏内に誕生し、『世界の箱根』の魅力が更にアップする。
- 水田や畑などの農地を活かした、例えば「農業体験型箱根」というような新しいスタイルの旅が提供できる。
- 加えて、農村などに宿泊する「グリーンツーリズム」などの旅のメニューが広がり、旅の選択肢が増える。
- 農ある暮らしを求める都市住民に、農地と空き家やアパートメントをセットにした「クラインガルテン」が提供できる。等など

○最終章

グローバル化が進む現在、海外に通用する『箱根』という地名力を活かしたブランドづくりは、未来志向に立った地域づくりであり、今、この地に生きる者がなすべ

き、最も重要な地域の活性化施策と考えます。

そして、次世代が故郷で暮らしつつ、海外でも活躍の場を求めることの出来る環境を創るためにも『箱根市構想』は、慎重に、しかし、着実に形あるものとして実現したい。

「カード」と「チョンセ」の大乱

新井宏

平成十四年の『まんじ』八十六号に、「重債務貧困」という小論を書いた。性分なので、多岐にわたる話題を取り上げたが、その中に韓国の「カード問題」や「チョンセ問題」もある。

なぜ、今頃になって、そんな古い話を持出すのか。

もちろん、それは絶好調とも見られている韓国経済が「カード情報流出事件」と「個人負債千兆ウォン突破」によって揺さぶられているからである。

まず、『まんじ』の「カード問題」関連部分を抜き書き紹介しておこう。

……韓国は日本以上にカード社会である。第一、政府や自治体がカードで買い物をするように指導し要請している。もちろん真の狙いは商店等の所得把握すなわち脱税防止である。そのためスーパーなど極めて小額の買い物でもカード支払いが普通である。カードでの買上げ比率の低い商店は徹底した税務調査を受ける結果となるので、わずらわしい手続きを厭わない。それに支払い側にもカードで支払った分は年末調整でその三十パーセント分が所得控除されるメリットがある。

だからクレジットカードの各社はカード乱発に大あらわで、競争上かならず現金融資の機能をつけている。その結果カード各社の融資残高の内、本来の代金決済分は四十パーセントに過ぎず、残りの六十パーセント、すなわち三兆円の巨額が現金サービスあるいはカードローンの融資残となってしまっている。その中には学生も多く、返済のため金利の高い「私金融」に走るケースが後をたたない。卒業してうまく就職できれば良いが、いま大学生は深刻な就職難に喘いでいる。借り入れが小額でも金利が百パーセントを越しているからいずれ大変なことになる。親が代って返済するにしても韓国の家庭の蓄積は日本ほど手厚くない。ブラック・リスト入りが三百五十万人にも達すると聞くと

その深刻さは日本の比ではないであろう……。

その結果は翌年(平成十五年)の「カード大乱」である。

(以下、ウォン表示が出てくるが、十兆ウォン＝一兆円の換算で見てほしい。)

きっかけは、二〇〇三年(平成十五年)三月の「SKグローバル」の粉飾事件の発覚であった。決済額が年二十兆ウォンに過ぎないカード会社が、五兆ウォンの債務超過に陥り、その粉飾にSK財閥のオーナーまで関与していたとして告発されたのである。

当然、その他のカード会社も一気に信用不安に陥ってしまった。問題の大きさから、韓国政府は、とにかく資金の流動性を確保するため、カード債の満期延長、政府買上など、かなり思い切った対策をとり、一時的には、債券市場が安定に向かった。

しかし、そんな生やさしい問題ではなかった。

ついに、カード延滞率が十六%にまで上昇し、最大手のLGカードも行き詰まってしまう。もはや三百七十七万人に達した債務不履行者をそのままにして、解決することなどありえない。結局、「徳政令」により債務不履行者を救済し、それによってカード社ばかりでなく、親会社や銀行まで救済した。韓国におけるモラルハザードのはじまりであり、まさに「カード大乱」であった。

主因は、言うまでもなくカードに付けた現金サービスである。韓国の事情に疎い私でさえ、異常に気づいたのであるから、関係者が気づかなかったはずがない。キャッシング取引実績が年三百六十兆ウォンとなり国民総生産の半額と言う巨額になっていた。まさに狂乱状態であった。

さて、その後の展開である。さすがに現金サービスは大幅に規制され、年三百六十兆ウォンほどあった取引が今では八十兆ウォンほどに低下している。ところが、本来のクレジット決済は、その後もウナギ登りで、年二百兆ウォンであったのが、既に五百兆ウォンを越えてしまっている。これは民間消費支出の七十%に相当する。ちなみに日本では十六%である。

そのため、韓国政府は最近になって、クレジット機能の付かないチェックカード(預金口座引落)を推奨している。チェックカード決済の場合は、年末調整で三十%の所得控除を認めるが、クレジットカード決済の場合は二十%しか控除しないとしたのである。これにより、クレジット決済が減少したとはいえ、それでも年五百四十兆ウォンの高水準である。

このことは、ただでさえ所持枚数が多かった韓国のカードを一気に倍増させてしまった。クレジットカードが一億二千万枚、チェックカードが一億枚で、合わせると

人口あたり五枚である。

そこに、今回のカード個人情報漏洩事件が発覚した。

なにしろ一億四百万人分のクレジットカードの住民登録番号、収入、婚姻関係、パスポート番号や銀行口座番号、信用等級まで外部に流れたというのだから桁違いである。これまでにも住民登録番号、電話番号、住所といった個人情報が漏洩したことはあったが、今回は、暗証番号さえも漏れたのではないかと疑いたくなるほど、けたたましい内容である。

問題を起こしたカード三社が一月二十日に謝罪会見した時の内容によると、KB国民カードが五千三百万人分、ロッテカードが二千六百万人分、NH農協カードが二千五百万人分で、重複している分を除いても、その数は約二千四百万人分に上る。クレジットカードを使っている個人情報のほとんどが盗まれたと言えるのである。

しかも、この事件は、ハッキングではなく、クレジットカード会社の内部から漏れた。犯人は三社が使用する不正使用検知システムの構築を担当したセキュリティ会社の社員で、二〇一二年十月から昨年の十二月まで一年以上にわたって顧客の個人情報をUSBメモリーにコピーし、ブローカーを通して転売していた。長さ数センチにも満たないUSBメモリーでも一億件の情報が簡単に納まる。恐ろしい時代である。

政府責任者の申金融委員長は「流出情報は全て回収され、不正使用の可能性はなく、カードを取り替える必要もない」と沈静に努めていたが、情報が流出されてから一年も過ぎているのに、市場に広まっていないなど誰も信じない。事実「情報が出回っている」という噂が、公然と流されていた。振り返って見れば、昨年来、銀行振込に絡んだ億ウォン単位の詐欺事件が数件続いたが、これらの情報が使われた可能性もあろう。

今回の被害は、二千四百万人のみではなく、事実上、全国民に及ぶ。例えば、既に十年も前に解約した者の情報や、朴槿恵大統領の個人情報や、潘基文国連事務総長の年所得情報なども漏洩したという。

インターネットでクレジットカードを使うことがあるが、通常、入力を求められるのはカード番号とその有効期間であり、暗証番号を求められることなど、めったにない。だから、こんどの情報流出で日常決済はすべて丸裸になったのも同然である。

当然のことながら、カード抹消、取引解約がすべてのカード社に殺到している。ニュース報道直後に、百万人の規模に達したことから、いずれは国民全員がカード再発行を求めるに違いない。事実、今年の二月から、磁気式のカードの使用が禁止され、ICチップ式のカードの

みしか使えなくなった。

政府はカード三社に対し、二月十七日から三ヶ月間の営業停止処分を出した。もちろん前例のない規模であり、経営面での打撃が予想されているが、それよりも、カード社の販促を担っていた外注テレマーケッティング要員一万余名の収入が絶たれてしまう問題が生じた。

そればかりではない。政府は一時的とは言え、事件発覚後から、情報漏洩被害を最小化するため、すべてのカード会社、保険会社、証券会社等々のテレマーケッティングを一斉に禁止してしまったのである。これによって職を失った者が六万人にのぼった。

もちろんこの処置は一時的なもので、保険会社等には二月十四日から、その他のカード社についても二月十七日から電話営業の再開を許可したが、もはや旧には復さない。もし「不正情報」を利用したら厳罰に処すると政府が通達したため、経営陣がびびってしまったのである。調べてみると、各社独自に持つ「個人情報」など二十パーセントにも満たない。

テレマーケッティングを担う多くの者が、外注の女性低所得層であることから、早速その生計維持が社会問題になっている。

そのような政府の対応の中で、既に犯罪行為も発覚している。例えば、カード自動引落の手続きは、本人でなくとも、名前と住民登録番号、口座さえ分かれば可能なので、組織犯が、多人数を対象にして、少額ずつ目立たない形で、「抜き取る」ことも起きている。

経済は実態のみで動くとは限らない。このように、カード情報漏洩事件が、信用経済の根幹を揺るがすことで、少しでもカード使用に躊躇する面がでれば、カード決済で信用を膨張させてきた個人消費に水をかけることになり、内需拡大に躍起になっている韓国経済にとっては、重い負担になる。もし連鎖的に被害が発生すれば、また「徳政令」の出番となるかも知れない。

「徳政令」といえば、朴槿恵大統領の選挙公約に、債務不履行者を救済する「国民幸福資金」があった。消費者金融の高利子に苦しむ者や、連帯保証人のため負債を肩代わりせざるを得なくなった者を助けるための「徳政令」で、政府が個人の債務返済額を最大半額に減額するとともに、低利で融資し最長十年かけて返済できるようにするという。一言で言えば「国が個人の借金を返済してくれる制度」である。

その公約に基づき、同基金に申請した人は二〇一三年十月末までに二十四万人である。

ところで、この国民幸福資金の登場まで、韓国には

「自己破産」のような制度はなかったのであろうか。

もちろん、そんなことはない。何しろ借金大国であるから、政府は家計債務者を支援する目的で、約四十種類もの金融支援策を実施してきた。代表的な「個人ワークアウト」、「個人回生」、「個人破産」の現状を見てみよう。

「個人ワークアウト」とは、延滞者の利子を全額減免し、元金も八年以内に分割返済を認める「私的な性格」の制度で、毎年十万人程度が申請している。

それに対して「個人回生」は、「公的な性格」を持ち、今後一定の収入が得られる人に対し、法廷で債権者との利害調整を図り、債務を減免する制度で、毎年十万人程度が救済を受けている。

もちろん、日本の「自己破産」に相当する「個人破産」もあり、年間六万件の申請があり、「個人回生」と併せると十六万件になる。ちなみに三倍の人口を有する日本の「自己破産」は九万件である。

これらに、大統領選の公約「国民幸福資金」の申請者を加えると四十万件である。韓国の家計債務問題の深刻さが分かるであろう。

しかも、朴槿恵の当初の公約は「百二十万人の債務不履行者に十二兆ウォンを支援し以降毎年六万人の信用回復をはかる」という大風呂敷であった。文字通り読めば、債務不履行者百二十万人に一人当たり百万円を支援するというのであるから、人数にも金額にもびっくりする。だからこの公約が大統領選の結果を左右したとの主張も頷ける。

しかし財政的には実行不可能な内容であったため、結局十分の一ほどに大幅縮小された。それでも朴槿恵のもうひとつの核心公約「高齢者基礎年金制度」が完全不履行となり、国民に謝罪する羽目に陥ったことよりもマシであった。

朴槿恵大統領は、公約などの「内政問題」に行き詰まると、歴代政権と同じく、国民の目を外に向けさせるために「日本たたき」を始めた。

さて、このような家計債務問題には、借金してでも見栄を張る国民性と、あまりにも急速に変化した社会があると思う。

いま、若年層はほぼ全員大学に行くが、大学を卒業しても就職できるのは半数強で、まともに働ける場所が極めて少ない。中年層も、運良く大企業に勤めていても、実質四十歳から五十歳が「名誉定年」となっていて、望まぬ形で自営業を始め、その八十%が失敗し、負債を抱え貧困層に陥いる。老年層はもともと高等教育や就業の機会なく、蓄えも乏しく、年金制度の恩恵も受けがたい。

しかし、やはり最大の問題は、長く続いた不動産バブルの中で、誰もが借金、値上がり期待で分不相応なアパ

ートを持ったことである　それが、ここ数年、政府のいろいろな対策にもかかわらず、分譲アパートが売れ残り値下がり傾向が続いている。

通常、分譲アパートの購入ローンは、はじめの数年間、金利のみを支払えば良い条件である。元本の返済が始まる頃には、アパートも値上がりしていて、ローンの借り換えも可能だし、返済に窮したら転売すれば良かった。しかし今や状況が様変わりである。

さて、ここで十二年前『まんじ』に書いた「チョンセ問題」の関連部分を再び抜き書き紹介しておこう。

……それに加えて韓国は不動産投機ブームである。それは庶民が過度なローンを組んでいることを意味している。家計における借金が急速に増大している。このままインフレにつなげて、走りきってしまえば良いが、日本のようにバブルがはじけ資産デフレに苦しむようになると、これも日本以上に問題である。それにうまく資産インフレに乗って逃げきったとしても、そこにはまた通貨危機の二の舞が待っているかも知れない。

いまは韓国でも設備投資は不振で行き場所を失った約三十兆円の短期資金が市場を彷徨しているので低金利に向いつつあり、一般家計貸出し金利は数年前の十二パーセントから七パーセントに低下している。そのため韓国特有の不動産賃貸方式である伝貰（チョンセ）が成立たなくなり、アパート購入が活発化している伝貰（チョンセ）というのは、売買価格の七十パーセント位の保証金を預けると家賃を払う必要がなくなる制度で、保証金は期間満了時に全額払い戻される。その間、貸主は保証金の運用で家賃分を稼ぐ仕組みである。韓国では家賃がタダだというのはこのことを意味しているのである。日本人から見ると保証金だけで家賃なしで暮せるので、とても結構な制度であるが、いずれ消え去るであろう……。

実は、この消え去るべき「チョンセ」が、意外にも、その後の不動産バブルを支えたのである。と言うのは、韓国では金持ちでもないのに、値上がり期待や、子供たちのために、数軒のアパートを持っている庶民的な家主が多いが、どうしてそんな「手品」が可能になったかといえば、そこに「チョンセ」があった。

繰り返すが、チョンセとは、売買価格の七十パーセント程の保証金を預けると、家賃を払う必要がなく住めて、保証金は期間満了時（通常二年）に全額払い戻される制度である。日本の感覚から言えば二年間タダで住めるということである。

ここで、一般庶民が数軒もアパートを持てる「手品」の仕組みを説明しておこう。計算しやすく、アパート価格を一億ウォンとする。

まず、一軒目の自分用のアパートについては、それを担保にして、売買価格の七十％ほどを銀行が融資してくれるので、自己資金が三千万ウォンあれば入手できる。

しかし二軒目となると資金負担が大変である。

ところが、もし二軒をまとめて二億ウォンで買ってしまい、一軒をチョンセで貸し出せばどうなるだろうか。

二軒のアパートを担保に銀行から一億四千万ウォンの融資を受け、一軒をチョンセとすれば、更に保証金を七千万ウォンほど受け取れる。合わせて二億千万ウォンの資金が準備できるので、自己資金は全く必要なくなる。そんな馬鹿なという「手品」が成り立つのである。

かくして資金面だけなら、アパートの保有をどんどん増やせる。これが「チョンセ」によるバブルなのである。

そうは言っても、ローンの利子、アパート償却費、修理費、保有税はすべて家主の負担である。タダで貸していたのでは商売になるはずがない。

ところが、日本ならアパートも中古になれば価格が下がるが、韓国では不動産バブルに乗っかって、むしろ値上がりしたのである　ちなみに私が十数年前に住んでいたアパートの売買価格は当時七百万円ほどであったが、今では千五百万円ほどになっている　日本における不動産バブルは「土地」であったが、韓国ではこれが「アパート」だと考えると分かりやすい。

かくして、金持ちでもない家主が、家業などの収入の大部分を金利支払い等に当て、不足すれば、値上がりしたアパートを担保にしてローンを組み直して稼いでいたのである。

しかし、考えてみればチョンセは、保証金に見合う金利分だけが家賃である。だから超高金利の時代には良かったが、低金利になれば成り立つはずがない。

それが生き延びていたのは、逆説的であるが、低金利になって金融がゆるみ、誰もが不動産バブルに走ることができたからである。

しかし、その結果、チョンセが過剰になり、低金利の状況にありながら、保証金比率が七十パーセントから五十パーセントに下がる不思議な現象さえ生じた。

ところが、ここ数年、そのバブルがはじけてアパート価格が値下がり始めた。

一般庶民の家主がいきなり「ハウスプア」に転落し始めたのである。

不景気で家業もままならず、手持ち資金が底を尽いている。ローンを組み直しで資金手当をしたいが、肝心のアパート価格が低迷していて、逆に元金の早期返済をせまられている　アパートを売却しても、チョンセ保証金

このような現実に至った原因についての私の「解説」など専門家から見れば皮相的なものに違いない。

しかし、韓国の家計経済統計を日本と比較してみれば、誰にでもわかる。

資産統計は、将来の費用に充てる年金などの評価でかなり異なるが、できるだけ等質な家計実態調査結果を基にして、思い切って単純化して示すと次のようになる。金額は世帯当たりの円価に換算してある。

	日本	韓国
総資産	三一〇〇万円	二五〇〇万円
土地・建物	二〇〇〇万円	二三〇〇万円
金融純資産	一一〇〇万円	二〇〇万円
金融資産	一六〇〇万円	七五〇万円
金融負債	五〇〇万円	五五〇万円

特徴的なことは、日本では家計資産の三十%が純金融資産なのに、韓国ではわずか十%で、あとの九十%が不動産だということである。如何に家計が不動産にシフトしていたかが一目瞭然である。所得の六十パーセント以上をローンの返済に当てている世帯が五十七万あるというからその異常さがわかるであろう

だから、韓国では、どんな対策を採っても、不動産景気を回復させるのは困難なのである。しかも、金融有事

とローンの返済費用には不足する。そうすると、チョンセ保証金を引き上げるしか方法がない。

かくして、不動産不況のなかで、チョンセ物件がほとんど消えて、チョンセ保証金のみが高騰する不思議な現象が生じた。これらを「チョンセ大乱」と言う。

「大乱」というのは、韓国では住宅普及率が百二十%に達しているのに、自宅保有率が五十%で、チョンセ方式が何と言っても主流だからである。だから、チョンセ保証金の総額が三百兆ウォンとか五百兆ウォンと言われるほど巨額なのである。

入居者から見ればチョンセ保証金の高騰は借入金の増額を意味し家計を直撃する。だからといって月家賃にすれば、家賃負担が一気に増大してこれも家計を直撃する。

そこで、最近になって、チョンセ物件をあきらめ、中小型の売れ残った分譲アパートを購入する動きが始まり、不動産不況に明るい展望が開かれつつあるという。しかし、その分、チョンセで使っていたアパートが空くのであるから、一時的に景気が回復しても、アパート建設不況が続くことになると思うが、どうなるであろうか。

たまたま、十二年前に『まんじ』に書いたカードやチョンセの問題が、今の韓国経済に直結していて、好調な経済をゆるがす可能性があることを紹介した。もちろん、

の際に、日本とは異なり、家計部門から資金を供給することも困難なのである。

ついでに、国際通貨基金ＩＭＦのストレステストについても触れておきたい。これはＩＭＦが五年に一度、金融機関の財務健全性を調べる定例テストであるが、昨年十一月に発表される予定が、遅れに遅れ、三月以降になるというのである。

どうやら、ＩＭＦの算定指針によると、韓国政府系の抱える債務が、公表されている四百五十兆ウォンの三倍、千五百兆ウォンになり、韓国財政の不健全性が指摘される可能性もあるらしい。

特に、国の出資している公企業等の債務が野放しになっていて五百兆ウォンに達している。そのため政府は「債務圧縮のできなかった責任者はすべて交代させる」とヒステリックなほど圧力をかけている。しかし、公企業側は政府の債務が押しつけられた結果だと抵抗している。

いずれにせよ、どのような報告になっても、財政の自由度が制限され、景気にブレーキをかける展開になるのは避けられないだろう。

そういえば、このところ韓国では、サムスン、現代自動車などによって、国際収支が絶好調で、好況が続いていると見られながら、国内的には、中堅財閥である東洋

グループ、ＳＴＸグループ、熊津グループが資金繰りに行き詰まり倒産している。

リーマンショック以降、韓国では大手銀行さえ外資系の強い影響下にあるが、その大手銀行が、不動産バブル崩壊による「貯蓄銀行等」の破綻で軒並み厳しい決算となっている。

そのためであろうか、英金融大手ＨＳＢＣが小口金融から撤退するほか、シティバンクも二十店舗以上を閉鎖、ゴールドマン・サックスも撤退、ヨーロッパ系の保険企業も、韓国事業の撤退を急いでいる。

更には、証券市場でも外国勢が資金を引き揚げ始めている。あたかも一斉に逃げ出しているかの様相である。

その最中に、米国の金融緩和縮小作戦が「おそるおそる」はじまった。毎月八百五十億ドル供給していた量的緩和を六百五十億ドルに減少しただけで、新興国は震え上がっている。自信満々であった韓国も内心はあわてているのではなかろうか。

その結果は、この雑文が掲載される三ヶ月後に、かなり明瞭になっているかも知れない。

（二月二十二日記）

たくあんの先

横山正義

まえがき

中桐女史「ある日、お弟子さんが用意した食事を頂いている時、「たくあん」を一切れ摘もうとしたら、ちゃんと切れなくて、ズルズル全部繋がっていたそうです。その途端に金次郎はお弟子さんに向かって、『切るならきる、切らないなら切らないでハッキリしろ』って物凄く怒鳴ったそうです。」

「致知」詰二〇一三、九号一四頁。心の持ち方『二宮尊徳の残した教え』作家三戸岡道夫先生、二宮金次郎七代目子孫リレイト代表中桐真理子女子対談参照

これはなにを言わんとしているのか倉意工夫がないと言っているのです。沢庵を切るなら、たべやすさ、他の料理とのバランス、塩味からの厚さ加減、季節折々の枚数、外観の工夫、塩加減健康の配慮などさまざまな工夫ができます。

江戸時代、日本全国の米の総収穫量は三千万石で、人口三千万人でした。それが明治三十年代にはいると四千四百万石、人口四千四百万人になりました。これは創意工夫によるものです。

相撲の安居院庄七先生は米相場に手を出すなど、米商売をしていました。農村各地を歩くうちに、農業技術を学び、教祖二宮尊徳の弟子ではありませんでしたが、間接に教えに共鳴し、「報徳の教えと農業技術の普及」に努め、多くの人の支持を集めたのでした。

難村救済、家政改革など創意工夫があったのです。米の増産には報徳社の寄与と伴に、人々の向上心があったのでしょう。ここで重要なのは「報徳の教え」を学んで、

実行しても、それは言葉に捉われるだけでは、失敗するでしょう。教祖二宮尊徳はその先、自分自身の環境、立場で創意工夫するしかなく、財政再建ともなれば、修羅場で、魔法も手品もありません。創意工夫の中に、先が見えるという指摘をしているのです。

教祖二宮尊徳の父、利右衛門は学問が大好きで、優秀な人であったのでしょう。しかし、あまり善人であったので、「金を貸したり、物をほどこしたり」財産を減らしました。最後は酒に溺れ身を持ち崩していきました。それを見て育った教祖二宮尊徳（一七八六～一八五六、七十歳没）は善人だけでは先は破滅だ、善を人に施すにも、環境にあった創意工夫が大切だと身を持って体験したのでしょう。父親は反面教師ではなかったのではないでしょうか。

教祖二宮尊徳は家族を家に置き離れ、財産を捨て、生涯を仕法（財政再建）に尽くしたのでした。

教祖二宮尊徳の報徳とはどんなものであったのか

日常生活の三原則

一、入るを量って、出を制す。
二、小を積んで大となす。
三、勤労を尊び驕奢を排す。

具体的方法として

一、分度―実の年間収入を正確にはじき出して、支出をそれ以内に留めるように工夫すること。
二、推譲―収入の半分で暮らしをたて、残りの半分を社会のために奉仕する。

『沢庵をきるのにさえ気が行き届かない人に、自分の取り巻く環境の閉塞状態を打破するために、教祖二宮尊徳の弟子になっているのに、仕法（財産再建）などできるわけないその先を見よ』これが教祖二宮尊徳の怒りではないでしょうか。

老子の言う、『無』は創意工夫のなかに有り、無我夢中の向上心の中にあるのではなかろうか。

静岡県の報徳思想を活用し創意工夫の例を挙げてみます。

『静岡県徳行録』昭和十六年静岡県発行を参照としました。

『人づくり風土記』静岡　農村漁村文化教会　参照
『人づくり風土記』京都　同じ　参照
『人づくり風土記』千葉　同じ　参照
『静岡県の歴史』　山川出版社　著者　若林淳之

静岡県内で、次の方々が二宮尊徳から直接、間接「報

徳」を学び刺激を受け、啓発され自分に与えられた、厳しい環境の中の創意工夫の記録です。

静岡県に最初に報徳仕法が入ってきたのは江川太郎左衛門英竜韮山代官が天保六年（一八三五）、近くに住む多田弥次右衛門氏に幕府の金銀引き換え御用を努めさせたところ、莫大な負債で傾きかけ、英竜は二宮尊徳に書簡を送り、報徳仕法の指導を求めたのがはじまりです。

多田弥次右衛門氏の成果があがり、韮山村野家政は回復しました。

各氏の生存年月日

教祖 石田梅岩　天和五年～延享元年
（一六八五～一七四四）五十九歳

教祖 大蔵永常　明治五年～
（一六八八～？）

① 小林平兵衛　安永八年～嘉永二年
（一七七九～一八四九）七十歳

教祖 二宮尊徳　天明六年～安政三年
（一七八六～一八五六）七十歳

教祖 大原幽学　寛政九年～安政五年
（一七九七～一八五八）六十二歳

② 高田宣和　文政四年～明治十九年
（一八二一～一八八六）六十五歳

③ 片平信明　天保元年～明治三十一年
（一八三〇～一八九八）六十一歳

④ 杉山帰一　天保八年～明治三十九年
（一八三七～一九〇六）六十九歳

⑤ 岡田良一郎　天保十年～大正四年
（一八三九～一九一五）六十六歳

⑥ 牧田勇三　天保十三年～明治三十五年
（一八四二～一九〇〇）五十八歳

⑦ 金井利太郎　孝明五年～大正元年
（一八四八～一九一二）六十四歳

⑧ 鈴木藤三郎　寛永二年～大正二年
（一八五五～一九一三）五十八歳

⑨ 山本勘三郎　万延元年～大正十三年
（一八六〇～一九二四）六十五歳

⑩ 橋本孫一郎　文久二年～昭和十二年
（一八六二～一九三七）七十五歳

⑪ 柏森　実　元治元年～大正十二年
（一八六四～一九二三）五十八歳

⑫ 田村武治　元治元年～昭和十二年
（一八六四～一九三七）七十三歳

⑬ 豊田佐吉　慶応三年～昭和五年
（一八六七～一九三〇）六十三歳

⑭ 中村陸平　明治七年～昭和十一年
（一八七四～一九三六）六十二歳

①天保の大飢饉を克服　小林平兵衛氏

『略歴』

氏は今の御殿場市グミ沢の名主家江藤孫市の子として生をうけました。安永八年（一七七九～一八四九）七十歳。兄が江藤家を継いだので、氏は小林家に文化五年（一八〇八）に婿養子となり文化十年（一八一三）には家督を継ぎました。しかし氏は若い頃、身を持ち崩し、他家で教えを受けたと云います。

文政六年（一八二三）氏が四十五歳のとき、村の代表者より氏に組頭の役を依頼されたのでした。名主、庄屋を補佐する村三役です。

氏は若い頃の経験から、指導者とはあるべき姿に戸惑いました。

仕事で江戸に旅したとき、京都の教祖石田梅岩によって提唱された、心学道話を聞き学びました。興味を抱き氏は後にも、数回、江戸に出る時、心学を学んだのでした。

教祖石田梅岩の心学道話とはどんなものであったのか

教祖石田梅岩（一六八五～一七四四）石門心学の祖。京都丹波の農家の次男、十一歳で京都に奉公するも商家が左前となり、挫折、帰宅し、帰農するも、再び、他の商家に再奉公する。

教祖石田梅岩は呉服商に奉公し、誠実に勤めると同時に独学にて、『四書五経』（四書とは大学、中庸、論語、孟子）（五経とは易経、書経、詩経、礼記、春秋）『孝教』『小学』『近思録』『老子』『荘子』『徒然草』『日本書紀』などを学びました。

それは「性を知る」ということでした。天然自然と通じる人間の本性を知るということでした。

それは自分が、皆に尊敬される人間になりたいという強い欲望でした。

しかし、士農工商と一番低い身分の商人であり、しかも番頭の身、不満の捌け口として、大変、意地が悪く、理屈屋で、これは四十歳の頃は穏やかになったが、五十歳頃まで続いたといいます。

教祖石田梅岩四十歳のとき、母の看病のため、故郷に帰り、仕事を離れ、田舎で過ごす中、周りの風景が変わり、固執からときはなされたのでした。

性を知れば、神のように皆に尊敬される人間になれると思い描きました。

教祖石田梅岩四十歳の頃、隠者、小栗了雲に梅岩は「性はこれ天地万物の親」と悟ったとこれを示しました。

了雲は「おまえには、性は天地万物の親とみる目が

残っておる。性とは目なしじゃ」といいました。

孔子の教えを学べば孔子と同じ目でみてしまい、仏教を学べば仏陀の目で見てしまう。得た知識の見方が出てしまうことを言っているのです。自分の環境にあわせ、自由闊達に自らの考えになっていないと言っているのです。

これは孔子が老子に面会した時、問うた道と徳についての答えと同じです。「良い商人は品物をたくさん持っていてもそれは店の奥にしまい、おもてでは何も持っていないような振りをするものです。徳の高い人も同じでしょう。どれだけ徳を積んでいても、それを隠して愚者の振りするのが真の賢者なのです。しかしあなたは、知識をこれ見よがしに鼻先にぶら下げ、野心が顔に表れすぎているようですね」と重なるのです。

人は電車に乗ったときのように次々と風景が変わるのですが、人に尊敬されようという欲望に教祖石田梅岩はコリかたまって環境に適応しなくなっていると、了雲の指摘です。

自分の心は人に尊敬されたいという、強い欲望でした。実現のため自分の自宅を教場として心学の講義をはじめました。享保十四年（一七二九）四十五歳「何月何日開講、入場いり申さず候。無縁にてもお望みの方々は、遠慮なくお通り、お聞きなさるべき候」というものでした。

最初、聴衆は親しい人、一人と言う時もありました。講義の内容は若いとき、学んだ書物からの、心の修養、正しい生き方の追及でした。五年もすると、聴衆の数は増大し、優れた門人も輩出しました。

教祖石田梅岩の生活は慎ましいものであったといいます。生涯独身で自炊生活でした。水一滴でも無駄にしない、生き方に人々を感化していきました。

おりしも当時、京都では、元禄年間、戦国時代末期、徳川氏の派遣確立に貢献した特権商人は大名貸しを行って繁栄を極めていましたが、幕府・諸藩の財政窮乏によって踏み倒しが興り、豪商が倒産していきました。

それに変わったのが一般大衆の生活向上に伴って、需要の増した消費物資を取り扱う商人でした。本商人と呼ばれる人たちです。代表的なのが三井本家です。

御用商人の没落を教訓として、質素倹約と顧客の信頼を得る、誠実な態度で、本商人は繁栄を築きました。

このような生き方を武家や学者は社会的役割を認めようとはせず、商人を軽蔑と抑圧の態度をとりました。士農工商です。

「商人は欲が深く、利益をむさぼるだけで、無欲を説くなど教祖石田梅岩はとんだくわせものだ」教祖石田梅岩は批判されました。

教祖石田梅岩いわく。

「商人のなかで、道を知らぬものが、むさぼることで家を滅ぼしてしまうのだ。商人としての道を知れば、欲心を離れ、仁心を持って努めれば道にかなって繁盛することができる。それが私の学問の効用なのだ。」

『都鄙問答十五段』教祖石田梅岩は若い頃、皆に尊敬される人物になりたいと願い、晩年に夢は実現していったのでした。

石門心学とは神道や儒教、仏教の趣旨を重用し、正直・倹約・勤勉・堪忍などを説きました。これは当時、天明の飢饉以来農村は不況にあえぎ民心の荒ぶる中、農村指導者にとっても、共鳴する教えであったのでしょう。

平兵衛氏は村々の指導者と「老子」「荘子」「孟子」「論語」などの筆写や講師を招き、講演会を開催しました。文政十年平兵衛氏四十八歳、掛川から掛川止敬社の菊池良貞先生を招いて、石門心学の道話の講演会を開きました。文政十二年には同じく掛川止敬舎近藤平格先生を招き、心学道話の会を開催いたしました。

天保六、七年には近藤平格先生に随行して各地に遊説しました。

この間平兵衛氏が感銘を受けたことは『人は自己の了見を捨てて無心となること、他人を信じていく』ことでした

『創意工夫』

修養を積んだ、平兵衛氏に直面したのは天保の大飢饉でした。小田原藩の郡奉行が調査したところによると、生活困窮者は御殿場御厨地方で三千百十九人、死者二十三人という惨事でした。

天保八年（一八三七）、平兵衛氏五十九歳のとき、小田原藩藩士二宮金次郎が部下鵜沢作右衛門と伴に、駿東郡の村々を巡回してまいりました。窮乏の状態によって、無難・中難・極難の三段階に分け極難には米一日二合と銭一文、中難には米一日一合と銭二文を貸し与えました。

平兵衛氏の生き方追及の遍歴は、教祖二宮金次郎の報徳仕法理解に容易なものとしました。報徳金として五両を教祖二宮金次郎に提供しました。そして小田原藩主から救済金として、一両三分二朱を頂きました。平兵衛氏は発起人となり、「報徳窮民撫育」の拠金を呼びかけ、金百二両一分、銭一六二文が集金できました。

これは極難渋人五百十三軒千二百十二人に分配しました。

この年、平兵衛氏は所有地の一分を質にいれ、教祖二宮金次郎より五十両を借用し、極難者に無利息で五年から七年賦の貸付を行っています。

天保十年（一八三九）には平兵衛氏は野州桜町陣屋に教祖二宮金次郎を訪ね、仕法の模範村、青木村（茨城県真壁郡大和村）を案内してもらっています。

天保十二年（一八四一）、財産を処分し、教祖二宮金次郎の報徳の指導を受けました。

天保十四年田畑を処分し、金五十五両をファンドとして、「知足備金」を創設しました。平兵衛氏が嘉永二年（一八四九）に亡くなった後も、その遺志は継がれ十代目、秀三郎、十一代目慶一郎によって明治四十四年「小林知足財団」が設立されました。積み金は四万三千九百十二円九十八銭七厘であったといいます。

②維新後人心の定まらぬとき、教養で啓蒙する　高田宣和氏

『略歴』

氏は文政四年（一八二一）七月二十二日静岡県駿東郡沼津町に生まれ、天保十三年二十二歳にし、静岡県庵原郡高部村柏尾、高田家の養子となり、明治十九年（一八八六）九月一六日病没、行年六十六歳でした。

氏は国学者鬼島広影に師事し、絵画は向一鶚、書は関雪江の指導を受け、農事は加藤木賞三、津田仙等と往来して研究し、「大原幽学の聖（性）理学は遠藤亮規に習いました」、雪航老師等について学び、報徳については福住正兄と兄弟のごとき交誼を結び、諸事精通体得しました。

明治初年静岡藩地租御用係を拝命し、地方行政の付託に答え、駿東郡東澤田村の所有山林を上納する。常に奇特の筋を以って藩庁より褒章を受けること二回。廃藩置県後第四小区戸長拝命、幾許もなく之を辞しました。

明治六年教導職試補、教会社長、中教院議事、明治八年種芸世話方、穂積神社神官権中講義、九年静岡県地誌編纂御用係、明治十一年報徳教会副総監、駿河東報徳社社長、明治十三年静岡県神道事務局副長、中講義、明治十七年皇典講研究所理事、明治十八年権少教正を拝命し、終生を敬神尊皇、報徳勧業、教育に捧げて、徳化駿遠豆山五相三州に亘る。著書には「種芸月令」「寅楽舎歌集」を始め、益世の冊子数種を刊行しました。

『創意工夫』

維新後、人心の定まらぬ中、氏は敬神、報徳、勧業の知識で国民を教導すべく、西は静岡より東は小田原に至るまで、説教講席、八百席と足跡を残しました。

庵原郡の報徳は教祖二宮尊徳の直弟子によって創立されましたが、氏の協力によることが多大でした。明治十一年駿河東報徳社を設立し、社長に就任いたしました。

「ある青年が養子に行ったが、養子先の家が傾き、生活困窮の状態となり、帰家してしまい、養子先の嫁が迎えに頻繁にいくこととなりました。仲人も見捨ててしまいました」

それを聞き及んだ氏は婿養子を訪ね、報徳の説教を何回となく行ったところ、養子某は固く更正を誓い、以後はまったく、養父母に孝養をつくし、田畑は精魂こめて耕し、篤農勤勉の道に邁進し、村随一の財産家になったといいます。

教祖大原幽学の聖（性）理学とはどんな学問であったのか

教祖大原幽学の誕生の地は不明です。寛政九年（一七九七）生まれ、十八歳のとき、漂泊の旅に出ます。漂泊は二十八年に及びます。近畿中心だったようで、和歌・俳諧の宗匠、占いで生計をたてていたらしいのです。この間自らの人生の目的は『世に道を施す』であることを定めました。

近畿を離れ、信濃上田・小諸（長野県）、江戸（東京）、鎌倉、浦賀（神奈川県）鋸山（千葉県）など漂泊します。

関東地方の田舎ではこの頃（十八世紀なかごろ）、経済の発展の影響で貧富の差が拡大し、土地を失い、没落したり、離散家族が戸数の半分ほどみられるようになりました。

この頃、東房総は博徒がはびこり笹川の繁蔵、飯岡の助五郎など天保水滸伝といわれ、闘争を繰り返していました。このとき、教祖大原幽学は『家の永続』を掲げ、風俗の矯正とともに、農家の仕法を図りました。風俗の矯正がその後、反感を買い、教祖大原幽学自身の割腹自殺に繋がるのです。

教祖大原幽学の教養は中国の古典・易経にあり、大学、中庸、孝経など家の永続を標榜する教えにありましたので、女子・子供を大切にすることを説きました。

教祖大原幽学は自分の不勉強を言い、自分のできないこと、できないと思ったことは、教えることはありませんでした。しかし高弟に対しては「ちゃわん」をたたきつけたり、殴りつけたり激しい手段をとりました。

聖学の門人を道友といいました。天保十年（一八三九）には五百人といわれています。

教祖大原幽学は先祖株組合・物資の協同購入・家普請・農家の移転・耕地整理・開拓村の設立・労働奉仕などを行いました。

漂泊のとき、得た知識をもって、具体的で農作業の年間作業計画など事細かに指導し、水田耕作の指導には力を入れました。

組合の運営は組合員外一定の田畑を出し合い、耕作して得た収益を積み立て、救済にあてる。

一、組合員は一軒につき、金五両に相当する田地を別に除いておき、その耕作によって得た収益を

私用することなく、組合としてまとめて永く積み立てること。

二、用地・積み立て金の使途は世話人と組合員の相談で決めること。

三、積立金は一軒分が百両以上になるまではつぶれる組合員が出てもわたさない。

四、一軒分の積み立て金が百両以上になった時、組合員の相談でその半分を救済にあて、残り半分は子孫のため積み立てておくこと。

五、上記四箇条に背いた者は義絶するが、一銭も渡さない、受け取らないこと。

六、ばか者が出てつぶれたときは、そのとき渡さず、しかるべき人物が出て家再興のとき渡すこと。

門人が増えると、教場が狭くなり、門人たちが教祖大原幽学居宅の近くに労働奉仕によって近くに三十五坪の改心楼という教場を設立しました。社会が浄化されるこの様子を見ていた「目明し」「岡っ引き」「ばくち打ち」など快く思いませんでした。嘉永四年（一八五一）に関東取締役出役の手先によって改心楼襲撃事件が起こります。これから取り調べを幽学は受けるようになり、江戸で足掛け七年も取り調べを受け、長期になり経済的に負担が大きく、苦しみました。

①人別に加わらなかったこと。②身分不相応な工事をおこなったこと。③不学にもかかわらず神儒仏三道について自分勝手の考えで講談したこと。④権限なくして領主権にかかわる耕地を処理したこと等、の罪状により押し込み百日の刑がいいわたされました。先祖株組合は解散、改心楼は取り壊されました。

服役後、農民の教師、浪人大原幽学は書置きを残し、村墓地で割腹自殺をします。妻子はありませんでした。

この留守の七年間に元の不孝に多くの門人が戻っているのを見て、「『自分には人を指導する力がない』自殺する。門人達よ、身を正し、不孝・不義に陥らないよう」書置きの内容です。

安政五年（一八五八）数え年六十二歳でした。

教祖大原幽学死後、遠藤亮規が後継者となり、高田宣和氏は遠藤の門下として、指導を受けたのでした。

③地域社会更正に勤める　片平信明氏

『略歴』

氏は天保元年（一八三〇）三月十五日静岡県庵原村杉山に生まれ、嘉永六年二十四歳にして家督を相続しました。明治二年夜学を起こし年四十歳でした。明治九年に杉山報徳社を創設し明治十六年家督を譲りました。明治二十四年駿河東報徳社副社長となる。明治二十六年県知事より表彰せられる。明治二十七年同報徳社社長となる。後年従五位に叙勲する。明治三十一年（一八九八）六十九歳往生しました。

『創意工夫』

杉山は山間の一部落で、明治初年ころ、村民は「あぶらぎり」で生計を立てていましたが、油の値段が下がるとともに、生計が苦しくなりました。

氏は心を痛め、茶、みかんが今後有利と考え、村民に勧めました。

しかし明治八年、貿易の不振が起こり、茶が下落し、茶園が荒廃してくると、人心が荒れて、氏は罵倒されるようになり、氏は心痛のあまり健康を害してしまいました。そこで知ったのが、福住正兄著「富国捷径」を入手し、これを読み感動し、これで辛抱強くなる以外ないと考えに至り、明治九年の末、杉山報徳社を設立しました。

「武士の戦場に死するを名誉の戦死という、農夫は農業の闘士なれば、農場に於いて死せらずべからず」

という言葉を残しました。氏は生涯、粗衣粗食に徹し、言葉通り、畑で往生したという。

＊毒荏樹（どくええじゅ）、あぶらぎり、どくえあぶらぎり（駿河庵原村方言）

④医と報徳で人々を啓蒙する　二代杉山帰一氏

『略歴』

氏は天保八年（一八三七）富士郡吉原町に生まれました。安政二年月より四年八月まで、東京・坪井信友にしたがい、九月より安政六年九月まで東京手塚良仙にしたがい、洋法医学を修業する。安政六年十月より文久元年まで三年間父にしたがい医の実地修業をする。明治八年八月試験の上種痘免状を受け、明治九年十二月洋法内外科開業免許を受ける。明治十年三月試験の疱瘡検査医を明治十年十二年公立保全病院当直医、申しつけられました。明治十四年十一月より自宅において開業しました。明治三十九年（一九〇六）七月三十日没しました。六十九歳

『創意工夫』

父の報徳精神を引き継ぎこれの普及に努めました。遠州報徳教卸荒木由蔵等を招き啓蒙につとめました。

「郷土町村民の精神修養と実生活指導に努め、その結果近隣の風習は改善され、生計困難なものも家運が興隆する」

など、その業績は見るべきものがありました。

⑤報徳の普及に努力　岡田良一郎氏

『略歴』

氏は天保十年（一八三九）十月二十一日、静岡県小笠郡倉真村に生まれました。十六歳にして教祖二宮尊徳のもとで報徳の教えを受け、帰郷して農事に精励しました。万延元年より十二年間、倉真村の庄屋となり、治村に尽くしました。明治七年浜松県権少属に任ぜられ、九年には県会議員に挙げられ、次いで県会議長となりました。城東郡長となり、後掛川中学校長を兼務し、明治十七年一月一日遠江報徳社長となりました。明治二十三年から二十九年には衆議院議員となり、地租納税改正法案を提出して功績がありました。明治二十四年十一月藍綬褒賞を賜り、明治三十五年勲六等に叙せられ、瑞宝章を授与する。後、私財を捨て、力を公益に尽くし、国家の政教を補いました。明治四十一年遠江報徳社の社名を大日本報徳社と改めました。同年病気のため社長を辞職しました。大正四年（一九一五）一一月一日ついに没しました。享年七十七歳。特に従五位が授与されました。

『創意工夫』

「一家を興し、一郷を興し、一国を興すには、道徳のみでは困難である」

経済と道徳と総合してこそ可能であるという信念を岡田良一郎氏の父岡田佐平治氏は抱きました。幕末、桜町の開拓をしていた教祖二宮尊徳に岡田左平次氏は尊敬の念をもっていました。折りしも、相模の安居院庄七先生が浜名郡長上村下石田住・神谷与平氏に、報徳の教義をさずけ、下石田報徳社を神谷与平氏が設立し、成果をあげていることを、佐平治氏は聞きおよびました。左平次氏は決意して、安居院庄七先生を自宅に招き、その教義を聞き感激し、寛永元年自宅のある倉真村に牛岡組報徳社を設立しました。

なお共鳴した佐平治氏は同士と伴に、尊徳の教えを受けに、日光に行きました。そして布教に努めました。

引き継ぐことの重要性を感じ、子息、良一郎氏を教祖尊徳の下に送り、教育を受けさせました。良一郎氏は三年間教祖尊徳の薫陶を受け、さらに教祖尊徳の子・尊行先生の教育を受け、教祖尊徳の高弟・富田高慶先生、福住正兄先生等に厳しく鍛えられて、六年後に帰宅しました。

全国各地に報徳社が設立されていくと、分派が現れ、教義もまちまちになっていきました。氏はどうしても教義を統一する必要を痛感し、明治十八年（一八八五）大日本報徳社規則草案を政府当事者に提出しました。当事者西郷従道先生はこれを推奨して、全国に公示しました。さらに氏は布教の教師を養成し体制を整え、掛川町に中遠報徳本社公会堂を建設しました。

機関雑誌を発行し、「活法経済論」、「報徳富国論」、「報

徳斎家談」、「二宮翁夜話」、「報徳記」などを発刊し普及に努めました。明治四十四年（一九一一）十月、社名を大日本報徳社と改め、みずから社長となりました。そのほかに村有林の植林事業を成功に導き、駿北学舎を経営し、子弟の教育にも尽力をつくしました。

⑥村治に報徳の活用で尽くす　牧田勇三氏

『略歴』

氏は天保十三年（一八四二）三月静岡県庵原村尾羽に生まれました。年わずか十七歳にして家督を継ぎました。明治九年（一八七六）村報徳社を創設しまし、明治二十四年駿河東報徳社長となりました。明治三十三年（一九〇〇）九月五十九歳にして逝去しました。

『創意工夫』

氏の出生地は戸数五十にもならない貧村でした。明治初年（一八六八）農家の生計は貧困の中にありながら、誰も働く気力を持っていないので、どうしたら良いか思案していました。近所の杉山村に片平信明氏の報徳社が設立されました。それに啓発され、報徳指導者・柴田順策先生を訪ね、この道の様子を聞きました。決意を固め報徳の教えを広めました。最初は誰も関心を示しませんでしたが、不動の信念と、熱意で布教に努め、その結果村民にも次第に理解されるようになりました。

当時農家の家屋は極めて、貧弱でした。災害に備えて、瓦屋根にすること、資金援助をして結果、すべての家が瓦屋根となりました。

⑦維新後の凶作に報徳で村を救う　金井利太郎氏

『略歴』

氏は寛永元年（一八四八）一静岡県月磐田郡三川村山田に生まれ、明治四十五年（一九一二）一月歿しました。明治五年（一八七二）より明治八年まで第十五小区長を務め、大いに村政に力をつくし、明治二十年（一八八七）多角農業経営法を企画し、馬耕を奨励して水田を乾田に改め、基金を寄付して馬の飼育を奨励し、明治二十二年（一八八九）には養蚕を明治二十四年（一八九一）には養鶏を奨励し、村民啓蒙のため、技師により実地指導を当たらしました。明治二十七年（一八九四）には柑橘栽培を唱導し、苗を仕立ててこれを無代にて配布し、その他製糸業、陸稲栽培奨励等農業方面の指導をしました。

『創意工夫』

金井家は平家の末裔で、徳川幕府時代には旗本・皆川家の代官を勤めていました。利太郎氏は幼時、江戸に出、

皆川家の小姓を勤め、古賀精理に漢学、青木某に蘭学、伊庭軍平に剣道を習っていました。維新前、皆川家が大阪城の守備を命じられや、氏は兵を率いて城を守りました。大政奉還とともに郷里磐郡三川村に帰り、山林、農業の経営を初めました。

氏宅近くを流れる敷地川は、降雨に際しては濁流となり、堤防は決壊し、氾濫し、大きな作物に被害を与えました。

維新後、凶作が続き、米価高騰し、村民は食料に窮し、貢租を滞納する者が続出し、分散整理の窮地に立つ者が、全村七十戸中の五十四戸なり、生産力激減しました。

この状態では将来再起不能になるであろうと、氏は危機感を抱きました。状態を打開するには「報徳の道」以外ないのではないかと思いにいたりました。村民に計り小田原の福山瀧助先生を招いて、借財返済、難村復奮の報徳仕法の指導を受け、実行を初めました。

しかし、明治十年地租改正と凶作とにより、村民は再び困窮し、借財は残り、氏は報徳仕法および奨励法等さらに研究し、十四年を要し、至誠、勤労、分度、推譲などを勧め、更生いたしました。

明治十七年ごろ、氏は福山瀧助先生に随って、磐田、周知、浜名、引佐の四郡内の報徳遠譲社を巡回して、報徳を啓蒙しました。その間一切自費自弁で教えを実践しました。

粗食に甘んじ、粗衣をまとい、脚絆、草履、菅笠をかぶり、矢立を腰に、書物を風呂敷に包み、それを背負った姿は、代官をつとめた人とは見えませんでした。

氏は物資愛護の念強く、用紙は書き古した古紙を使い、使い古して黒い紙はその上から朱で書き使用しました。いよいよ不要になれば、引き裂いて、紙の火付けに使用しました。一枚の紙も工夫を重ね、最後まで無駄にはしませんでした。また各社を巡回指導するや、懇切周知を極め、一社の仕法に十数日を費やし、一戸の家政に数日を費やすこともありました。

晩年は野州の今市に出張し、二宮文庫の蔵書をひも解き、遠譲社の仕法改善のことを研究し、改善をはかり、経世斉民の術を説いた著書数種を自費刊行し、各社に配布する等、報徳を信奉したのでした。公共事業に生涯を捧げ、同村は繁栄し、山林は鬱蒼として、緑に囲まれています。村民は業に精励し、風俗純朴なのは氏の至誠によるところが多きい、といいます。

⑧迷走の末純粋氷砂糖の精製に成功　鈴木藤三郎氏

『略歴』

氏は安政二年（一八五五～一九一三）十一月十八日、静岡県周知郡森町に生まれました。本姓大田、初め才助といいました。後に鈴木家を継ぐに当り、藤三郎と改め

ました。鈴木家は代々菓子商を営んでいました。明治二十一年上京して氷糖工場を設立し業運次第に隆昌する。明治二十九年、日本精製糖会社を興し社長となる。明治三十九年大阪製糖会社と合併して大日本精糖会社と改称する。後、欧米に漫遊し、機械業を研究し、鈴木式汽罐、乾燥機等を発明し、さらに醤油醸造法を工夫し、日本醤油会社を設立したが、成績思わしくなくついに失敗しました

のちに、北海道釧路に水産工場を、東京に澱粉製造所を設け、また佐野に農園を求めて、盛んに事業を起こしました　氏はこの多忙のなかにあって衆議院議員として、政界にも活躍しました。

大正二年（一九一三）九月四日没す。時に五十九歳。特許数二十四種、藍綬褒章を下賜さる。

『創意工夫』

「早く、金持ちになって、貧乏で学校に行けなかった俺を、さげすんだ者を見返してやりたい」

これが鈴木藤三郎氏の念願でした。

しかし、報徳の教えを知って、その非を知り、志を改め、生業のため精魂を打ち込みました。

明治十年（一八七七）一月元日、氏が「報徳の教え」を知り、金以外の生き方を知った日でした　時に年二十三歳。今までの茶商を捨て、家業の菓子商を営むようになりました。当時、砂糖が黒褐色の色をして、綺麗な菓子はできませんでした。氏は「これを白色にすれば、さらに綺麗な菓子が出来るのではないか」と思うように成りました。「よし研究すれば、俺にもできる」と確信しました。しかし研究しても、なかなか思うようにできませんでした。数万の資金も消えてしまいました。

明治十五年（一八八二）十月教祖二宮尊徳の二十七回忌法会が野洲今市で開催されたとき、氏も報徳社員と伴に、出席しました。一夜、宇都宮某旅館に投宿しました。すると隣の部屋から化学に関する話がもれ伝わってきました。砂糖をきれいにするには化学の知識が必要だと、気づきました。どうしても「自分も化学の知識を得よう」と思い至りました。郷里出身の工部大学教授の石川吉次郎先生の帰郷の際、指導を仰ぎ、力を得て、釜に黒褐色の砂糖を熱湯で溶かして、仕事で東京に出かけ、妻に良く見るようにたのみました。五月二十七日東京より帰宅し、妻に溶かした氷砂糖はどうなったか、尋ねました。妻は「忘れてしまつた」と答えました。

氏は腹が立ち、情けなくなりました。しかし釜のふたを開けると、冷えた糖液の中に真っ白の砂糖の結晶ができていることが解かった瞬間です。

再結晶すれば綺麗な氷砂糖ができることが解かった瞬間です。

氏は直ちに企業化に取り組もうとしたが、資金がありません。各地の有力者掛川・岡田良一郎氏、東京・渋沢栄一氏等に懇願してみたが、誰も資金提供者はいませんでした。近所に住んでいる、周智郡森町の福川泉吾氏を訪ね、事情を説明しました。福川泉吾氏は米穀、太物、古着問屋など手広く事業を手がけていました。当時明治の初め、遠州森町は全国的な、古着の問屋が何軒もあり、活況を呈していたのです。前二者の大経営者に比し、商いは小さいが踏んだ修羅場は豊富で、眼力も度胸も据わっていました。また氏は外国とも取引し、巨万の富を築いていたのです。

鈴木藤三郎氏は福川氏に詳しく事情を説明し、懇願したところ、「薄利多売の精神にもとづいて懸命に努力されたら必ず成功します。

あなたは利益を最も低く見て予算を立てたのが、私は共鳴するところで納得しました。私が資金をご用立てしましょう。」力強い返事でした。

まもなく、福川氏の援助で森町に製糖工場が設立され、順次拡張され、東京小名木河畔に移され、大日本精糖株式会社として日本トップ企業となりました。

『大日本製糖㈱は人材を育て、後の静岡県知事石川嘉延知事の父は大日本製糖㈱勤務でした。』

⑨稲の適種の選択、副業作物の研究　山本勘三郎氏

氏は万延元年（一八六〇）年十一月二十日静岡家磐田郡今井村徳光に生まれました。明治十四年（一八八一）、家を継ぎ鋭意農事の改良、報徳精神の普及に尽くしました。明治十五年（一八八二）二月、同志と徳光報徳社を創設し社長になりました。二十五年（一八九二）各村青年農会を設立明治二十八年（一八九五）今井村農会長、村会議院、中遠農会農事監督、中遠米穀改良組合役員、中遠米穀検査係長を歴任、明治三十三年（一九〇〇）中遠青年農会を組織し、会長となりました。農家子弟の風紀をただし、農事思想の啓蒙に努め、明治三十七年（一九〇四）今井村耕地整理組合を結成、委員長として完成しました。明治三十八年（一九〇五）七月、遠江生姜、胡瓜、落花生、唐辛子同業組合副組合長となり、農商務省ならびに静岡県より依頼され渡米、米麦生産の状況、香辛料商況調査にあたりました。四十一年（一九〇八）農事指導の目的をもって大阪住友家別子鉱業所地所に招聘されました。大正十三年（一九二四）病で没す。年六十五歳。

『創意工夫』

村民の生活は年々、米の豊作、凶作で変わりました。「安定するためには、適した米の品種を選択することが大切」だと氏は考えました。百五十種以上の種もみを自

ら試験田で栽培し、研究しました。

選ばれ、推奨種としたものが、福徳、三保、白笹、今井、奥野一本等です。

富士へ登るも西洋へ行くもみんなお米のその力
迷はしゃんすな安いといえど命保つは米じゃもの

一々農事のお話や長し真の米つくり　荒々と
論をするよりやお試しなさい論じゃ分からぬ農の道

村人に解り安くするため、いろはカルタにしたり、数え歌にしたり、相撲番付けにし、氏が口ずさんで唱えた歌です。

副業として、中遠菜種栽培標準、甘藷栽培並びに澱粉製造法、中遠生姜栽培問答、中遠胡瓜栽培問答、中遠麦作案内を印刷し、村民に配布いたしました。

⑩地方道徳の衰退を嘆き報徳を取り入れ教育に尽くす
橋本孫一郎氏

『略歴』

氏は静岡県小笠郡棚草村に、文久二年（一八六二）八月二十八日生まれました。明治三十一年村会議員に当選しました。

明治三十二年（一八九九）以降学務委員たること四十年。大正八年（一九一九）静岡県教育会より表彰を受けました。大正十年（一九二一）静岡県知事より表彰を受けました。大正十四年（一九二五）岡田文部大臣来舎視察し訓示を受ける。昭和三年（一九二八）御大典につき、地方饗餞を賜る。同年賞勲局より銀杯一個を賜る。昭和五年（一九三〇）昭和陛下より御巡幸に際し静岡県庁内に拝見を賜る。その他官庁公私団体よりの褒章感謝状多数なり。昭和十二年（一九三七）一月二十二日没す。村葬が行われました。七十五歳

『創意工夫』

「地方道徳の衰退を憂い」橋本孫一郎氏は恩師野賀岐山の経営していた高陽学舎の精神を継承し、明治二十四年（一八九一）一月、「双松学舎」を静岡県小笠郡棚草村の自宅に創建しました。

これは祖先以来、宅前に残された二大双松にちなんだものです。

＊生徒の生活信条

一、学業に勉励して、安逸遊情に流れず、教場にあつてはその学科に専心し、自修の時においても、他人と雑語せず、虚心平気に、その学術を講究すべし。

二、礼儀を重んじ、言語を慎み、父母師長を敬い、幼年子弟を憐れみ、行歩坐臥に沈着を主として、軽率

に流れず、通学の途中は特に粗暴を戒べし。
三、誠心を本とし、信義を守り、親密和睦を主として、誹謗猜忌を戒め、他人の勉強を妨害すべからず。
四、忍耐を持重し、気力高尚にし、難事に屈せず、労働を嫌わず、百事鄭重を主として、秩序を乱さず、緻密の思想を養うべし。
五、独立自活の志操を固持し、他人に依頼せず、師長の督促を持たず、自奮勤勉の念慮を失うべからず。
六、節倹を守り、質素を旨とし、浮華を遠ざけ、浪費を省き、分度を守り、善根を植え、無益の書器食器等を購求すべからず。
七、師友相親しみ、同窓相助け、協同一和忠告善導、名郷党に顕し、徳を後昆に伝うべし。
右七規を領掌して、政治を侮らず、淫猥戯漫女色を議論せず、学生の本分を守り、父兄の意志に副合せんことを留意すべきものなり。

＊双松学舎
静岡県旧南山村高橋に、豪農野賀家あり。幕末より明治に渡り、野賀太郎一氏当主となる。号を岐山と称し、赤土の袴田扇田翁に学び、和漢の学に詳しく、狩野派の日本画を描きて東京絵画展に入選し、書道に巧みでもあった。豪快磊落にて人々より親しむとともに、尊敬されていました。自宅に塾を造り子弟に勉強を教えました。

＊教学精神
賀茂真淵（浜松）―栗田土満（平尾）―好運寺恵山（平川）―祷田扇田（赤土）―野賀岐山（高橋）―橋本鶴堂（橋本孫一郎）

＊学年組織
基本として予科一年本科二年

氏は名主、戸長や小学校長などを勤めました。明治十九年（一八八六）県知事の認可を得て、私立高陽舎を設立しました。学んだ人は千二百人に及ぶといいます。
その子郡平氏は号を暦堂といい、篤実精勤好学で、「高経」、「小学」などを出版し、「四書」の註解などもしました。静岡師範学校開校時に入学し、卒業後小学校教員を務め、父ともに高陽舎の運営に携わりました。
橋本孫一郎は子供の頃より祖父重三郎翁の家塾に学び、十歳の頃、高陽舎に学びました。優れた氏は塾の助教となり、県の教員検定試験に合格して、十八歳より小学校の教員となり、師岐山先生が病死され、暦堂、翁が病弱であったことから、高陽舎を継承することを依頼されました。
橋本孫一郎氏は当時、三十歳で新野小学校校長でしたが、辞退して、双松学舎の開校届が明治二十四年（一八九一）一月で、十月に県知事の許可を受けました。

＊教科科目
修身漢文（孝経、小学、日本外史、十八史略大学、論語、孟子、千字文等）国文、作文、習字、珠算、地理、歴史、理科、農業、数学、英語、報徳（報徳記、二宮翁夜話報徳外記）中等教育教科書全て。

＊入門生
明治二十四年（一八九一）～昭和三十五年（一九六〇）。述べ六千人。特に大正時代は隆盛を極めて社会から評価され、入学百五十人、総数三百人でありました。

⑪村治に尽くす　柏森実氏

『略歴』
氏は元治元年（一八六四）十月十日静岡県沼津市出口町和田伝太郎の実弟として生まれ、明治十五年五月、富士郡伝法村柏森貞介の養子となり、大正十三年（一九二四）、三月三十日六十一歳にて没しました。
社会公共事業に尽瘁して地方の開発に当る。村内耕地整理、富士山麓に教育基本財産植林、潤井川堤防構築等、その業績すこぶる大なり。
この間、小学校教育に、青年団長として青年団指導に、村長、郡会議長の要職にありました。日露の役には従軍しました。

『創意工夫』
氏が伝法村村長についたのは明治三十六年（一九〇三）八月、日露を戦争一年前でした。氏は村政を視察して、「民力の涵養、村治の拡張、教育の振興」を推し進めようと決心しました。それには報徳の精神をもってするのが良いと判断しました。
掛川町岡田良平氏の主催した掛川町報徳社より教師を迎え、住宅を提供し、師事を仰ぎました。
村民の要望に応じて、産業組合設け、村内五町にわたる耕地整理を完成し、福利厚生を住民のため充実させました。「縁の下の力持ち」を任じ、積徳に尽くしました。富士南麓百余町歩にわたる地帯を植林いたしました。

⑫報徳の教えに啓蒙され二十三年の間講演報告　田村武治氏

『略歴』
氏は元治元年、（一八六四）二月五日、江戸追手町の本田藩上屋敷に生まれ、九歳にして父を失い姫路藩士田村係右衛門に懇望せられその養子となりました。明治十七年（一八八四）海軍に志願せしも病身のためならず、最初上海に次いでアメリカに渡航し、明治二十一年帰国

『略歴』

氏は明治二十四年（一八九一）五月十四日、始めて織機の特許を受けました。この発明は郷里にて完成せられるものにして、氏の二十五歳の時です。以後昭和五年（一九三〇）四月二十八日まで特許並びに登録を受けたる物百二十種に及び、さらに諸外国の特許受けたるもの十三種です。明治四十三年（一九一〇）五月八日、世界視察の途にのぼり、米、英、仏、白、独、露、満鮮等を経て同四十四年（一九一一）一月一日帰朝、ますます発明に熱中しました。明治四十五年（一九一二）五月藍綬褒賞を授与しました。大正二年（一九一三）十一月、尾三の野に行われた陸軍特別大演習のみぎり、大元帥陛下の御駐輦所名古屋離宮にお召出の光栄に浴せり大正十三年（一九二四）二月、藍綬褒章飾版授与せられる。昭和二年（一九二七）十一月の大演習には、単独拝見を賜り、かつ特別の思し召しを以って勲三等に叙せられ瑞宝章を授与せられる。昭和五年（一九三〇）十月、危篤の報天聴に達するや従五位に叙するとの特別のご沙汰を賜りました。

『創意工夫』

豊田佐吉氏は慶応三年（一八六七）二月十四日、浜名湖畔の静岡県鷲津町山口の山間部で誕生しました。氏の父、伊吉は農業経営のかたわら大工を職業としていました。氏は小学校卒業後、父に従って農業および大工を見習い、十八歳にして一人前の大工となりました。友達と夜間、観音堂で辞書を片手に、「時事公論」など勉強しました。

氏が郷里で、毎日見慣れている日本在来の織機は『不備で外国製のものもなお十分でない』と思いました。氏が一生、織機の創意工夫に携わることになるのです。氏の発明人生を通じて念としたところは、報徳の教訓でありました。

報徳訓

父母の根源は天地の命令にあり、身体の根源は父母の生育にあり、子孫の相続は夫婦の丹精にあり。

父母の富貴は祖先の勤功にあり、わが身の富貴は父母の積善にあり、子孫の富貴は自己の勤労にあり。

身命の長養は衣食住の三つにあり、衣食住の三つは田畑山林にあり、田畑山林は人民の勤耕にあり。

今年の衣食は昨年の産業にあり、来年の衣食は今年艱難にあり、年々歳々報徳を忘るべからず。

⑬世界的自動織機の発明者　豊田佐吉氏

し、築地メソジスト協会の牧師となり伝道に従事する。明治二十七年（一八九四）正月、京都商業会議所書記長に就任。日清戦争後中国視察をなし、帰国後、京都鉄道副支配人となりました。

次いで煙草業経営の村井兄弟の商会に迎えられ神戸支店長となり、手腕を発揮する。明治三十八年（一九〇五）静岡県清水市不二見に来往、晩年病を得て、昭和十二年（一九三七）九月二十三日、秋季皇霊祭の夕、七十三歳にて、逝去しました。

『創意工夫』

富士見は風光明媚でここに田村武治は草庵を結びます。明治十年（一八七七）ごろ貧乏な農村で、村の識人は、「年貢米に追われるのみで、堕落して博打の悪習に染まる者を改心させるよう」勤倹力行して改善を図りました。

これに田村武治は共感し、自宅を事務所として提供し、報徳の道を人々に説きました。

第一次世界大戦後、好況になりましたが、その反動の来るのを予測し報徳の教えによって奢侈戒め、貯蓄を奨励しました。後日不況がきても、産を失う者はありませんでした。以前失った不動産を買い戻す者もありました。

（報徳教祖二宮尊徳翁撰文、九字ずつ十二行百八字四節に分かる）

発明はいかなる困難に直面しようとも、自力聖道でなくてはならぬ。荒地は荒地の力により、借金は借金の力によって復興しなければならぬ。一念岩をも徹す。近親に狂人と笑われ、奇人とさげすまれました。二十四歳のとき、トヨタ式木製動力機が発明の最初でした。世界に誇る自動織機が完成したのは三十六年後、豊田佐吉六十歳のときでした。「金は発明の粕だ」氏の言葉です。

昭和五年（一九三〇）亡くなる。六十四歳

⑭浜松の発展に尽くす　中村陸平氏

『略歴』

氏は明治七年（一八七四）八月九日静岡県浜松市天神町（当時敷知郡天神町）に生まれ、昭和十一年（一九三六）六月二十一日歿しました。

明治二十六年（一八九三）静岡県尋常中学校を卒業する。当時さらに進んで東京に出で、学ばんと欲せしも、父の逝去のため、断念する。先ず家業を修め、力の限り地方公共の為に尽くそうと思いました。明治三十七年（一九〇四）より天神町報徳社長となり、続いて大日本

報徳社幹事、同理事、同副社長に歴任して一生の間報徳の道を行いました。明治三十二年（一八九九）浜名郡会議員に挙げられ、大正四年（一九一五）より十年（一九二〇）まで、天神町村長となり、市村合併と同時に退職しました。大正十一年（一九二二）九月より昭和三年（一九二八）十一月まで市会議員として活躍しました。御大礼直前浜松市長に就任、昭和七年満期退任。氏は数理経済の才に秀で、公平無私の才幹を認められ、各種団体の財政に、実業界に貢献することが多かった。

『創意工夫』

祖父五郎七は、天神町報徳社を起こしました。氏も報徳の教えを遵守し、生涯を公益事業に尽くしました。

教祖大蔵永常浜松藩、田中藩の生産向上に寄与

教祖大蔵永常は老中水野忠邦元浜松藩主に、要請されて浜松藩農政に参画しました。田中藩（静岡県藤枝市）の藩政改革、領内の生産向上にも寄与しました。

教祖大蔵永常は二十九歳のとき、発起し豊後（大分県）出発し諸国を旅行、学んだことを本に表し、農業技術の普及に貢献しました。

あとがき

教祖二宮尊徳は「たくあん」を切っても気が回らず、人頼み、誰かがやるであろうという「遊び」の態度しかとることのできない弟子を「叱る」ことによって改めさせ、将来、弟子の環境に応じた財政再建が臨機応変にできるように、心がけ、姿、顔を育てたのでしょう。食事中他の弟子もいるところで叱ることによって、他の弟子にも教えているのです。

これは教祖二宮尊徳が自分自身、財政再建を依頼され、守旧派の人達に迫害され、心が折れた経験から、「あまえ」や「遊び」では出来ないという確信に基づくもので、信念ではなかったのでしょうか。

静岡県でも「報徳の教え」に刺激を受け、教祖二宮尊徳から直接、間接は問わず学び、困難にめげず創意工夫で、閉塞情況を打破した人たちがありました。

教祖二宮尊徳の報徳が「心の癒し」にとどまらず、経済の実務であるところに特異性があり、天保大改革の浜松藩士、老中水野忠邦に請われて幕臣となり、天保の大飢饉を乗り越えました。

石田梅岩の心の葛藤、二宮尊徳の行動力、大原幽学の物心の庶民への相互援助など、現代教えられるのであります。

無理を通して敷地に道路を取り込む

山本鎭雄

父と四男の松井和雄の目算

東京都中野区新井に生まれ、杉並区荻窪で育った松井和雄は、二十歳前後は仙台で過ごし、初職を得て十年余り広島で過ごした。和雄が高校三年次、三男の兄の皓也（てるや）は大学を卒業後、母は泣いて引き留めたが、自由な天地を夢見てブラジルに移住した。サンパウロの東洋街に落ち着き、ブラジルの奥地に出かけて宝石の原石を仕入れ、宝石商に卸したり、自ら研磨して常連の顧客や観光客に売って暮らした。カトリック教の洗礼を受け、何度も結婚話があったようだが、暢気に一人暮らしを続けた。

父はブラジルの皓也に帰国するように催促したが、皓也から「帰国しても、日本ですることがない」と言う手紙が返ってきた　そこで老いた父は、皓也が帰国して稼ぎがなくても生活出来るように、居抜きのアパートを購入しようと準備した。皓也がアパートの一室に住み、当分は家賃収入の一部を生活費に当て、住宅ローンを返済する。家賃収入を住宅ローンの返済に充てることは、父が土地を買う時のいつもの目論見だった。

ところが、皓也は帰国する気はまったくなく、七年間も音信不通が続いた。横浜港からスペイン号で渡伯して二十年後、連絡はサンパウロに住む日系知人からの皓也の交通事故死という訃報だった（享年、四四歳）。早速、長男の政一は渡伯して弟の遺体を見分したが、あまりにも無惨で判明出来ず、所持していた労働手帳でやっと本人と確認した。土葬が慣習のブラジルで遺体の登録など面倒な手続きをして荼毘に付した。

地元の邦語紙『パウリスタ新聞』に訃報記事が掲載されたため、火葬場には宝石商や研磨所の仲間、馴染みの

寿司屋や古本屋の主人、早稲田大学の先輩・後輩、二〇年前に同船した旧友など、多数の人々が別れを惜しんでくれた。政一は遺骨と遺品を持ち帰った。早速、父は菩提寺の大盛寺の別院の共同墓地（三鷹市）の一角に墓地を購入し、墓石を造らせ、納骨した。皓也の死は父母、兄弟、親族にとって実に残念無念だった。

その後、父は広島に住む四男の和雄を上京させて、近くに住ませようと考え、頼りに帰京を催促するようになった。そこで、和雄は妻と相談し、恩師のお宅を訪ね、転職を依頼した。その後、恩師は高弟に事情を話し、高弟の尽力で一年近くかけて東京に転職口が見つかった。その際、恩師の推薦状が人事審査で決定打になったと、転職後に審査に当たった責任者からうかがったことがある。ところが、誰もが経験するように、上京しても、地価の高い東京近郊で住み家を確保することが大問題だった。土地と住宅の購入は人生で最大の買い物だろう。

上京当初、和雄は東京の三鷹市のアパートで単身生活を送り、妻は子供とともに実家の山梨に住んだ。やがて、東小金井に土地と古い居抜きのアパートを購入し、不動産の売買登記を済ませた。一階と二階の一部を壊し、そこに階段を造り、家族で貸室用の二室に住んだ。給料から借金を天引きし、家賃収入を住宅ローンの返済に充てた。和雄は父がいつも不動産を購入する時の常套手段を踏襲した。もっとも父から相続した土地の売却代金が土地の購入、自宅の新築の資金になった。

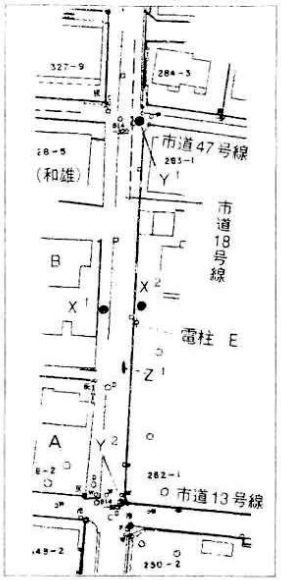
一本の電柱が立つ奇妙な位置

昭和五五年七月、入居した当時は自宅に隣接する道路に砂利が敷かれ、雨が上がると、道路は泥濘り、くぼんだ個所に雨水が溜まっていた。車が通ると、泥水がぴしゃ、ぴしゃと飛び散るような状態だった。車道と歩道の境には簡易なガードレールが設けられ、私の敷地の東側が歩道になっていた。ガードレールは和雄の南隣りの敷地に隣接する道路中央付近が東側に少し湾曲して設けられ、その部分だけが狭い車道になっていた。

それに対向する道路の反対側、つまり東側のコンクリートの塀に囲まれた敷地内に東京電力の一本のコンクリート製の電柱が立っていた。その一本の電柱を除き、電線で繋がっている南北十数本の電柱、付近の東西の電柱もすべて道路（小金井市の市道）に立っていた。電線は下方に少し余裕を持たせて弛んでいるが、直線あるいは最短距離で二本の電柱で繋がっていた。付近には高く聳える送電線の鉄塔が見えたが、鉄塔は一直線の位置に設置されていない。鉄塔と同じく、何も電柱が一直線の位置に立てる必要は全くないはずだ。要するに、一本の電柱だけを敷地内に立てる必要はない。

和雄はその一本の電柱の光景を実に奇妙に思った。それは、ただ漠然と疑問に思っただけで、「何故そうなのか」という因果関連を深く詮索もしなかった。その三十余年後（平成二四年夏以降）、その市道と両側の敷地の地権者（和雄もその一人）、小金井市役所の道路管理課、小金井市市議会（付託先、建設環境委員会）も当事者となり、市道一八号線（全長九九七・八mのうちわずか約六〇mの道路の境界線をめぐって再び争いが起こり、すでに三年近く経過した。以下、南北の道路境界線をめぐり両側の地権者のうち、東側の広い敷地の地権者はE家（故祖父、その娘〔母〕、その子〔孫〕）、西側三家の地権者は南から北へA、B（共有者、二名）、松井和雄である。

参考図（平成25年10月）（小金井市道路管理課）



(1) 民石標（X、X'）は小金井市が作成した参考図では無視された。
(2) 民石標（Y、Y'）は小金井市の指示で新たに市石標を地表に埋設した。
(3) 電柱移転位置を掘削したところ、ガス本管が埋設されていた（Z）

複雑な公共用地

和雄が居住して八年後、小金井市長から「市道路線の区域変更に関する告示」（昭和六三年一二月）と題する通知書が郵送されてきた。小金井市内の市道の区域が変更された五路線のうち、和雄の敷地に隣接する道路（この当時は旧市道第一八号線）は、道路の延長（長さ）はまったく変わらず、それぞれ幅員は公図をもとに「二間から一・五間～四間」に変更したという曖昧な告示で、しかも粗雑に描かれた道路見取図が添付されていた。

その三年後の平成三年五月、小金井市長から「市道」ではなく、今度は「公共用地境界確定のための立会いについて（お願い）」と題する通知書が郵送されてきた。和雄が所有する「土地と土地に隣接する道路（市道一八号線）・水路との境界を調査のうえ、確定するため協議したい」。さらに境界の立会・協議が成立し、測量して土地境界図を作成し、署名・押印を依頼し、手続きを完了したあと、公共用地の境界を確定したという趣旨の通知書だった。

昭和五五年七月、和雄はすでに所轄の東京法務局支部（いわゆる登記所）に売買の不動産登記を終え、登記済証を所持し、隣接する道路の境界線も確定しているはずなのに、なぜ、小金井市役所は改めて「公共用地」の境界線を確定する必要があるのか、大いに疑問が残った。しかも、和雄の敷地に隣接する歩道はもと「水路」（土

揚部分を含む）であった。たしかに登記所の「閉鎖公図」では「水路」（川巾四尺、土揚左右四尺、図面ではこの部分は水色で彩色されていたが、すでに灰白に変色していた）と表記され、その「水路」に沿って「道路（市道＝農道）」（道巾九尺、赤く彩色され、赤道と称されている）が表示されている。結局、公共用地の境界線確定は両側の地権者の合意が得られず、不調に終わった。小金井市の道路管理の担当課が「不調」を確認したのが、何と三年後の平成六年二月である。

「水路」の由来―梶野新田分水―

小金井市梶野町（現在）は、江戸時代の享保年間（八代将軍・徳川吉宗の時代）に武蔵野新田開発の一つとして、下小金井村の名主の梶野藤右衛門が請け負い、梶野新田として開墾された。水の少ない武蔵野新田と同じく、梶野新田の最大の問題は生活に直結する呑水（飲料水）の確保と、大雨や長雨が降り、低地の出水の管理・貯水・処理（当時は「悪水」と言った）だった。武蔵野一帯は、呑水のために深井戸を掘るにはおびただしい労力が必要で、しかも当時は土を深く掘る技術と水脈を的確に発見する能力に欠けていた。

さらに黒い表土の下には火山灰の赤土が一〇mほど堆積し、この立川ローム層はその部分に水が常時流れると、浸食作用を受け易い。水は上から下に流れ、水の流れが川や水路となる。例え、真っ直ぐに掘削された水路でも、長年の流水によって「く」の字に曲がることはあり得ないことではない。公図では「水路」と「道路」は真っ直ぐに記載されているが、現にこの市道一八号線から南にある寺院の墓地の北東の角地を基点にそれに隣接する西側の道路境界線は「く」の字に大きく湾曲している。

享保年代以降、武蔵野台地は掘った井戸から必ず良好な呑水が得られるという確実性はなかった。この一帯で盛んに井戸が掘られるようになったのは大正年代のことである。水道が敷設される少なくとも戦前頃まで、梶野新田の場合、敷地内に井戸があったのは、数軒にわずか一か所に過ぎなかった。雨が降ると、分水（水路）の水は濁り、呑水には適さなかった。そこで、井戸のある農家から貰い水をした。しかも井戸から汲みあげた風呂水を沸かし、隣近所の数軒は順番に風呂に使いに来たと言う。

梶野新田の名主・組頭・百姓代は水量の豊かな玉川上水（当時は「御上水」と称し、明治維新までは玉川御上水と称した）に注目した。彼らは惣百姓とともに玉川上水からの「分水」を願って口上書を提出した。江戸期の『上水記』によれば、玉川上水からの分水は野火止用水、砂川用水、小川分水などの取り入れ口は三十三個所、その一つが梶野新田分水である（享保一七〔一七三二〕年通水、長さ二里、取水口・八尺四方。その後、調布の深

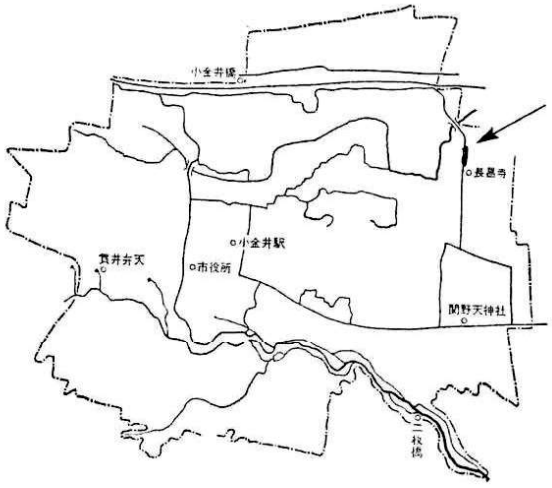
大寺まで通水し、深大寺分水と称している）。この深大寺分水は下流の低地では水田の灌漑用水として利用され、野川に流れ、さらに多摩川に放流された。

梶野新田の分水沿いに定住する「出百姓」は粗末な人家をつくって定住し、新田開発が進み、初期は大麦、小麦、粟、稗、蕎麦、ごま、江戸紫（染料）が栽培されたが、水田の灌観用水を欠くため、稲作は出来ず、「畑場の新田」だった。のちに、もろこし、里芋、陸稲も栽培するようになった。ただ、猪や鹿が来て、作物を荒らした。夜行性の猪は竹藪に隠れ、好物の筍（たけのこ）を掘り、食餌した。名主だけが許可を得て鉄砲を所持していた。

梶野新田分水では、村人は土揚や農道から流れる雨水の流入を防ぐために雨天の見廻り、分水の堰塞禁止、洗い物や畑への水の引き込み禁止、ねずみの穴を塞ぐことなどが厳命された。とくに大雨や長雨が降ると、梶野新田の低地の谷間（久保、窪地）には、いわゆる「悪水」が流れ込み、滞留して、農作物をダメにした。梶野新田から深大寺新田までの村人には分水の清浄な呑水を確保することは最大の課題だった。

「水路」が道路になる

古老の話しでは、分水の下流の村人たちは管理組合ごとに話し合い、上流に来た。早春、下流の村人は分担して一斉に水路の堀浚い、土揚（盛土）の清掃、修繕などをした。上流の村人はその労をねぎらい、握り飯とお茶、沢庵などで接待した。戦後初期、水路には清浄な水が流れ、夏は溜まり場で水遊び、冬は魚釣りをしたと、古老は子供の頃を懐かしく回想している。同じ子供の頃、和雄は「ミミズにおしっこをかけると、おちんちんが腫れる」と言われた。この水路近辺の子供は「水路におしっこすると、おちんちんが腫れる」と口やかましく注意さこの個所（梶野新田分水、のちに深大寺分水）



小金井用水路図
『小金井市誌Ⅱ　歴史編』

れたという。江戸の享保年間から一二〇年以上も水路に流れる水を清浄に保つ伝統が継承されて来たのである。

ところが、昭和三十年代になり、水路（四尺）に家庭排水が流入し、悪臭を放つドブ川となった。そこで、一方では下水溝を設置して雨水を流し、また下水管を設置して家庭や工場の廃水を流した。他方では深大寺分水の取り入れ口は閉鎖され、水路にヒューム管を埋めて暗渠排水し、さらに土を埋めて砂利を敷き、その西側の土揚（四尺）を整地して歩道にした。その後、市道（農道、一間三尺）と水路の東側の土揚は歩・車道として整地された。車道と歩道の間に簡易なガードレールで仕切られた。

小金井市道一八号線はアスファルトで舗装されたため、もはや江戸期に近辺の農民に貴重な呑水を供給した梶野新田分水がここに存在した過去を知る人はごく少数になった。和雄が梶野新田とその分水の歴史について関心を持ったのは、今から三年前に市道一八号線の一部でそれに隣接する東側の広い敷地の地権者Eの母子と、西側のA、B、和雄の三家の敷地と道路の境界線をめぐって、両側の地権者の紛議に加え、小金井市当局や東京電力支社と紛議が生じたからである。

道路境界線をめぐるトラブル

今から三年前の平成二四年八月、道路東側の地権者Eの子（孫）と、地権者A、B、和雄との話し合いで始まり、Eの母子が依頼した弁護士Sと、AとBの間での通知書と質問書の往復があり、さらに小金井市の道路管理課（市道の境界線の確定）や東京電力（Eの敷地内の電柱の市道への移設）も加わり、市道境界線をめぐり紛議が錯綜した。そこで、和雄はその前後に収集された文書、公図・登記簿、情報公開された文書、弁護士Sとの往復文書などを丁寧に読み込んだ。和雄が理解できたことは、この地に転入するほぼ一〇年前に、長さわずか約六〇mの市道境界線の確定の問題があって、未確定のまま放置されていたことだった。以下では、昭和四〇年代に生じた出来事の経過とトラブルについて記したい。

昭和四三年一月、旧市道一八号線（農道）が簡易舗装された。同年五月、Eの祖父は敷地の南側と北側の東西の二本の市道について、その反対側の敷地の地権者の立会いで境界線を確定し、旧市道東側の二個所に境界石をコンクリート舗装の地下二〇cmに埋めた（なぜ、境界石を不自然な地下に埋めたか判らない。その境界石に対応する市道西側の境界線上に御影石の比較的大きな境界石は地上に露出し、その存在が明示されている）。ところが、南北の公共用地（旧市道一八号線と水路を埋めた道路、水路には両側の土揚を含む）、その境界線は未確定のままである。それが公共用地に隣接する両側の地権者の紛議の直接の原因となった。

昭和四四年三月、すでに触れたように、西側の水路に

ヒューム管を埋設し、土を埋めたが、軟弱な地盤のため、歩道になった。同時に、その西側の旧市道一八号線と水路の土揚（盛土）が整地されて歩・車道になった。同年四月、東京ガスはE家の敷地の生垣から一m離れて旧市道一八号線の地下に家庭用のガス本管を埋設した（電柱や電線の設置と同じく、道路法第三二条により、市道へのガス本管の埋設は市当局の許可を必要とする）。

平成二五年七月、Eの母子から電柱移設を申請された東京電力支社は、小金井市当局から敷地内にある電柱を市道移設の許可を得た。市道西側の地権者三家は、交通上の安全を理由に市道への電柱移設に反対した。平成二六年二月、東電支社が市道上に電柱移設を強行し、近くの移設予定個所を掘削したところ、ガス本管がブロック塀の外側三〇cmにあることが判明し、電柱移設を中断した（掘削中、誤って動力掘削機でガス本管に穴を開け、ガスが漏れて大爆発したと思うと、危険極まりない電柱移設のための掘削工事だった）。

もし東電支社が直ちに移設工事を強行し、移設個所にガス本管が埋設されていたことが直ちに判明し、その時点で移設工事は断念したであろう。ただ一本の電柱を移設するのに、わざわざ多くの人手と一〇月近くの時間を掛ける必要は全くなかった。今後、地権者Eの母子は敷地内の電柱の移設を断念するのか、あるいは中断した東電支社は市当局や東京ガスと協議して電柱移設のために何らかの対策を講じるのか、それは判らない。いずれにせよ、市道の管理者が道路法に従い、電柱と電線、ガス本管の設置を許可した行政行為が適正であれば、このような事態が生じるはずはなかった。と言うよりも、Eの祖父が市道を越境して敷地を拡げたことがその原因であると考える方が適正であろう。

以下に述べるように、和雄は公共用地（水路と農道）の西側境界線が東側に約六〇cm「く」の字に曲がっていると判断している。E家は水路が人為的に直線で掘られた、閉鎖公図では分水と農道は直線であると主張した（小金井市当局も支持した）。公共用地が道路に整地された機会に、Eの祖父が旧市道（農道）を越えて敷地を拡げ、「く」の字に曲がっていた公共用地を真っ直ぐな道路にしてしまったのである。

昭和四四年五月、Eの祖父は敷地の生垣の外側（旧市道一八号線内）に丸太棒の「杭」を打って敷地を拡げ、旧市道に立てられた電柱も「杭」の内側に取り込んだ。のちに電柱の敷地外の市道の移設工事で判明したことだが、それ以前にガス本管は敷地から一m離れた市道の地下に埋設されるのが通常である。実際は拡げられた敷地のブロック塀から三〇cm離れた市道の地下に埋設されていた。それは、Eの敷地の境界を示す生垣から七〇cm離れて道路上にブロック塀が建築されたことになる。

農業委員会の審査と道路管理課の起案書

E家の広い敷地の北側の土地は登記簿では畑地だった。昭和四五年一月、Eの祖父は小金井市農業委員会に農地の転用許可を申請した。農業委員会の審査で地元選出の農業委員は宅地化にともない北側の市道（旧農道、一間）の中心線から二mセットバックすること、Eの祖父からそれに協力すると聞いています、と発言している（実際にそれが実施されたのは、はるか後年である）。さらに農地転用の審査とは無関係に、Eの祖父が敷地外の市道一八号線の道路上に立てた「杭」が問題視され、市議会選出の農業委員（Ok）は「公図上、法律上、Eさんのものという立証が有りますか。従来の姿にもどす意志はありませんか」と質問している。また別の市議会選出の農業委員（Oh）も「水路は暗渠にした時、境界は明確になっているのではありませんか。既に舗装されていますが、杭を取り道路として使用できるよう協力頂けませんか」と発電している。

再開後の委員会審査では委員（Oh）は「道路、河川敷の設定に相異があるようです。市管理課の責任において明確にするよう要望します」と発言し、さらに農業委員（Ok）は「通行に支障があるので、杭を取り除いてから市と交渉して頂きたい」と発言した。申請人のEの祖父は「承知しました」と返答し、委員会議長は「お願いします」と述べ、農地転用の申請は条件付きで「承認」された（昭和四五年第一回小金井市農業委員会議事録）。

ところが、農業委員の道路をセットバックするという進言、「杭」を撤去するという約束など、Eの叔父はそれらを無視しただけではなく、しかも「杭」を立てた位置にブロック塀の建築を開始した。以下に述べるように、小金井市の道路管理課はただ「抗議」しただけで、何ら有効な対策も立てることなく、まったく市道の管理責任を放置した。

昭和四五年二月、小金井市市長は「道路改修工事に伴う境界確認」を出願目的にして、東京都知事美濃部亮吉宛に「公共用地境界査定願」を申請した。同年三月、小金井市道路管理課は「梶野町二丁目二八二番一先のブロック塀の建設について（市道一八号線）」を起案・報告した。同起案書によれば、すでに触れたように、Eの祖父が市道一八号線上に丸太棒の「杭」を塀状に打ち込み、そのことが農業委員会で二、三の委員から疑義が提議された。そこで、小金井市の管理課の責任で道路の境界を明確にし、打ち込んだ「杭」が不法占用であれば、撤去することが確認された。

前後するが、昭和四四年一二月末、道路上の丸太棒の「杭」を除き、その代わりにブロック塀の建設を開始した。四五年三月、道路管理課はその前日にブロック塀の完成を推定し、Eの祖父に農業委員会における言動に反していると「抗議」した。その後、小金井市は東京都に

「公共用地境界査定願」を提出し、同年四月に東京都財務局用地部の道路管理の担当職員の査定が実施された。査定では市道一八号線の両側の土地の地権者が立会い、閉鎖公図にもとづいて作成された測量図をもとに協議した（起案書「梶野町二丁目境界立会いの結果について（市道一八号線）」、昭和四五年六月、起案・決裁）。

同起案書によれば、立会人の地権者AとB、和雄の前地権者はこの道路は「昔から曲がっていた。それを、Eさんが塀を造る前、勝手に木杭をしてしまい、電柱も敷地内に入れてしまった」と言って、Bが東京都財務局用地部の担当職員に杭が生垣の外に写っているスナップ写真を見せると、同職員は「公図とは多少ちがっても良いが、公図の幅員（三・五間＝六・三八m）が取れれば良い。……両者で話し合ってほしい」と言って、査定を終了した（Bの当日の『日記』に、立会った近隣住民は「道路、水路はもともと直線ではなく、暗渠工事後、E（の祖父）が杭を打ち、塀を立ててしまった」と記録している）。

決着を放棄

その後、昭和四五年五月、Bは市役所の担当課を訪れ、「話し合いの仲介にたってほしい」と要望したが、担当課は「東京都で行った査定を、査定の結果とは違った方向での話しあいの仲介に立つという事はおかしい」（昭和四五年六月の起案書では、東京都の担当者がどのように査定したのか、明らかではない）との理由で、Bの申し入れを拒否した。

起案者（管理係）は最後に「立会い申請を東京都より取り下げたい」と査定の不調と申請の取り下げを起案・報告したが、決裁者の課長は起案書にコメントして、「現段階では査定の取り下げは適当でない」と記している。その後、市道のこの部分は舗装され、車道と歩道の間にガードレールが設けられたが、道路の両側の地権者の話し合いは長らく行われないまま推移し、公共用地（水路と旧市道）の境界線は確定の不調となり、未確定のまま長らく放置された。

今、和雄が思うに、その当時「私たちは近所であるし、E（の祖父）さんと問題を起こしたくないので、話しあいたくない」というBの思いは理解出来ないではないが、そのため、小金井市の道路担当課にEとの仲介を要請するのは必ずしも妥当ではない。むしろ、法治国家―依然として中央集権国家で、無責任主義のシステムに過ぎないが―の成員として弁護士と相談し、（少なくとも）公共用地の境界線について、裁判所に非訴事件として境界確定の訴訟を提起し、司法の判断を仰ぐべきだったと考えている（四〇余年後、当時の道路の事情を知る市会議員、存命の二人を除いて双方の直接の当事者、さらに近隣住民は逝去し、すでに生き証人は生存していない）。

小金井市の道路管理課は、西側二家の地権者がEの祖父による公共用地を敷地に取り込むという既成事実を黙認し、四〇余年後の平成二五年四月、「道路管理」を目的にして、「道路区域の境界線の確認のための立会い」を行い、境界線図（参考図）を作成し、道路東側の境界線だけを確定した（おそらくEの母子が依頼した土地家屋測量士は道路担当課の指示に忠実に従い、測量したと推測される。測量図は道路境界線を直線にするために、東西境界線上の二個所の民石標が無視されている）。

国土交通省の国土調査

都市で生まれ、都市で暮らしてきた和雄は定年退職し、健康と趣味、そして実益のために妻の実家の農山村の畑で、週一回（一泊二日）の野菜作りを始めて七年目が終った。最初は畑に野菜作りのテキストを持ち込み、小椅子に座ってテキストを読み、肥料を蒔き、耕耘機で耕し、種を蒔き、苗を植え、草取り、土寄せなどをして収穫した。ところが、その当初、村の古老から「あれじゃ、畑をダメにする」と盛んに陰口を叩かれたが、植物、とくに野菜の微妙な生長、四囲の山々の四季折々の変化や桂川の渓流のせせらぎ、気候の特徴や天候の変化、さらに地質の性質や微妙な土壌の差異などの自然現象の体感は和雄にとって最高の「収穫」だった。

その一方、次第に村人と親しくなり、村人からその地に合った耕作の方法や時期を教えてもらい、その上、農地や宅地の境界をめぐる紛議や苦情も耳にするようになった。境界のトラブル・メーカーは決まっていて、集落ごとに必ず一人や二人いるようだった。それはその個人の「人柄」というよりも、極論すれば、先祖伝来の家風や気風、つまり好ましくない「家柄」のように思えた。そのため、直接の親族でない限り、村人はその一家と適当に立ち話をすることがあっても、出来れば深い係り合いを避けているように見えた。

ただ、この地域一帯の地権者全員がそれぞれの地域で立会い、国土交通省の国土調査が実施され、農道の境界に境界標を埋め、一筆ごとに地積（土地の面積）を調査し、地積図を作成した。今後は村人の間で土地と境界をめぐる深刻なトラブルは生じないであろう。国土調査の八年後、地方法務局支部が登記事務を完了し、そのため市町村の固定資産税〔土地と家屋〕の課税対象が確定した。

村人の間では、国土調査は「平成の太閤検地」だと囁かれていた。言うまでもなく、地権者と彼が所有する土地（家屋とともに）とその広さなどを測量して明らかにした目的の一つは、市町村が合理的に固定資産税を課税する法律的・行政的行為である。例えば庭が雑種地として農地並の課税の対象とされていたが、宅地として課税されるようになり、課税額が上がった、という話しを聞いたことがある。

土地と境界のトラブル・メーカー

和雄は敷地や農地の境界をめぐるトラブルを知見し、農村・農地に特有の他人事と達観していた。ところが、小金井市の道路管理課が和雄の敷地に隣接する市道一八号線（の一部）の境界線を確定した（平成二五年五月二九日）。すでに触れたように、和雄は土地の購入時、不動産登記を済ませ、その後、建築確認を済ませて自宅を新築し、ブロック塀も立てた。それにもかかわらず、小金井市はこれが道路区域の境界線だと通知し、郵送された図面（参考図）を見ると、なんと和雄の敷地上の東側ブロック塀が隣接する市道西側の境界線上にかかっているではないか。当分の間、ブロック塀の存在は認めるが、相続や売買で地権者が変更する時、それを撤去して境界線の外に建築し、測量図を作成するようにと、道路管理の課長から言われた。

和雄には市道東側に隣接するE家は、旧住民からは何かと世間の評判が悪く、地域社会から孤立していると思われていた。すでに触れたように、和雄が市道西側の敷地に住んで奇異に思ったことは、周囲の電柱がすべて市道に立てられているのに、ただ一本の電柱が市道東側の敷地に立っていることである。和雄は過去の事情を知らず、「何故そうなのか」と、その因果関連を詮索することもなかったし、取りたてて隣り近所に聞いてもみなかった。

平成二四年夏、Eの三代目の孫が市道西側に住むAに、Eの二代目の母の土地と自ら相続した土地の境界線上、さらに東側の塀から敷地の内側に五〇～六〇mの境界石があったことを知らせた（平成七年、住宅建設会社がEの土地を工事中に地中に埋もれた御影石の境界石を発見し、写真に撮り、その写真とその位置を地権者のEの母子に知らせた）。Eの孫は住宅建設会社が測量した図面に、敷地内にある境界石の写真の貼り付けたコピーをAに渡した。Aは隣のB、その隣りの和雄にコピーして渡した。その後、Eの孫と三家（A、B、和雄）が話し合ったが、一回で不調に終った。すでに、この境界石はEの母によって除去されたようだが、証拠物として境界石の写真は残されている。

そこで、和雄はその図面と写真を見て、あの一本の電柱の謎がやっと判明した。要するに、Eの祖父は水路が埋められ、旧市道とともに実質的に道路となった機会に、道路上に杭を打ち、ブロック塀を建造して敷地を拡げた。そのため、電柱を敷地の中に取り込んでしまったのである。和雄が農山村で土地と境界のトラブル・メーカーを知見したように、現に和雄の敷地の市道反対側の地権者もまた同種のトラブル・メーカーなのかとただ呆れて笑止してしまった。

しかも、Eの祖父は小金井市の職員（運転手）を退職

した後、市道に公然とブロック塀を造ったことが判り、和雄は驚きを越して、ただ唖然とした。さらに、境界をめぐるトラブル・メーカーは個人の「人柄」ではなく、次世代と次々世代に継承された「家柄」なのだと変に納得した。それは損得の問題を超越して、公序良俗の問題だと思うようになった。

トラブルの再浮上とその経過

今から三年前の平成二三年夏に遡ると、Eの孫は敷地内の目障りな一本の電柱を市道に移設するように東京電力支社に申し出た（すでに、弁護士Sを選任していた）。東電支社の担当者は道路法第三二条（道路占有の許可）に従い、小金井市の道路管理課に電柱と電線の使用の許可を申請したところ、道路境界線が確定していないことを理由に申請は保留とした。そこで、Eの母子は、実務取扱者として土地家屋測量士Szに測量を依頼し道路管理者の小金井市に「道路区域の境界線標示願」を提出した。彼は公図・図面などを収集し、実測図を作成した（その際、おそらく小金井市の道路管理課は地図などの収集や実測図の作成に助言や資料を提供して積極的に協力したであろう）。

小金井市は、市道一八号線のうち約六〇mの道路を立会い、境界線を示した後の平成二五年五月、地権者に「道路区域の境界線図（参考図）について」を渡した。

とくに道路東側に隣接する地権者Eの母子はすでに境界線を確認しているので、東側の境界線は確定する予定である。西側に隣接する地権者も境界線を確認される場合は、道路担当係まで連絡してほしいと通知書（趣旨）が添えてあった（現在、情報の公開によって同係の起案書は入手していない）。

境界線図（参考図）を見た和雄は、すでに触れたように、建築指導所に提出した建築確認書で認められた敷地のブロック塀上の東南側が境界線に掛っていた。そこでは、和雄はこの境界線を確認出来ないと判断し、道路担当係に西側二家と同じく何ら通知も連絡もしなかった。

しかも、小金井市が作成した（という）「参考図」は、市道を真っ直ぐに作図するため、道路境界上の二個所の「民石標」（X[1]、X[2]）は全く無視されていた。その結果、とくに一個所の道路西側の境界線中央部の民石標（古くは境界標）が無視されていたため、Bの現在の敷地が道路境界線から最大で五九cm出ていることになった。その民石標に対応する東側境界上のE家の民石標（すでに除去されているが、住宅建設会社が工事中に地下から民石標を発見して写真撮影した。Eの孫はそれをコピーして西側三家に提示した）も無視されていた。

そもそもこの民石標（X[2]）は道路東側から約六〇cmの敷地内に存在していた。その当初、問題の一本の電柱は道路上に設置され、またガス本管もE家敷地から離れて

一mの個所に埋設されていた。他にも、道路西側の南北の二個所に境界線の二〇cm以上の地下に埋まっていた境界石を掘り起こし、同じ個所の道路表面に市石標を埋めただけではなく、南北二個所の標石をもとに、道路東側を直線で図面化した。本来、東側に「く」の字に曲がっていた境界線を直線にして境界線図を作成した。

境界線の見直しを求めて陳情

すでに触れたように、道路西側の地権者三家はこの境界線図の標示を慎重に協議した結果、小金井市の道路担当係に確認の連絡をしなかった。その前後、Aは丹念にE家の不動産登記簿謄本、閉鎖登記簿謄本、閉鎖公図、さらに地積測量図などを東京法務局支部（いわゆる登記所）で収集し、証拠物として昭和四一年以降の一六枚のスナップ写真を整理し、さらに近辺の古老の証言、Eの孫からの私信などを整理した。

平成二四年一二月、西側三家は地方自治法第二四二条第一項（住民監査請求）の規定にもとづき、小金井市が市道という「財産の管理を怠る事実」（請求の要旨）が認められるとして、小金井市監査委員会に膨大な「小金井市職員措置請求書//監査請求書」を提出した（執筆者、主にA）。

ここでは同請求書の詳細な内容は省略するが、監査委員会は職員の公金の支出、税金の賦課・徴収を怠る事実など財務会計上の行為に違法性・不当性はなく、地方自治法の同規定に抵触しないとして却下された。監査委員会は、長文の同条第一項をあまりにも矮小化して解釈した上、市道を管理している小金井市長が、市道の境界線が未確定であり、市の財産として確定していないという理由で（すでに市長名で市道の当該個所の東側境界線は確認している）、道路管理に違法性・不当性はないとして却下したことにたいして、和雄はただ唖然とした。

その後の平成二五年一二月、西側三家は小金井市議会に「市道一八号線の道路区域境界線の一部（梶野町四丁目二一番一五から同四丁目二一番一七）について区域決定の見直しの陳情書」を提出した。市議会は建設環境委員会に付託した。二六年二月、建設環境委員会（委員、八名）の審査で、現場見分が提案され、実施することが確認された。同委員会の未定稿の会議録を読むと、小金井市の部局（H道路管理課長）はこれまでの道路の境界線に隣接する地権者に合意がえられず、確定出来なかった過去二回の経緯と、平成二五年六月に道路区域境界線の確認という行政行為によって合意が得られた東側のみ境界線として確認した、と発言した。M委員は部局の説明は何ら説明になっていない、と繰り返し発言した。さらに数名の委員から資料を請求する発言もあって、継続審査となったが、第二回の委員会は開催されたが、三家の境界線の見直しを求める陳情は継続審査となり、まだ

「採決か」「不採決か」、決着はついていない。

和雄はせめて建設環境委員会の審査で「陳情」が採決されれば、それで「良し」と考えている。さらに市議会本会議でも「陳情」が採決されれば、誠に本懐である。だが、「道路は政治力で決まる」という名言がある。それは高速道路やその民営化、一般道路への公共投資、国家的道路行政などのマクロ・レベルについて該当するだけではなく、市道の一部の境界線の確定という実にミクロ・レベルの道路問題についても市議会の市長与党派か、野党派か、あるいは市会議員が選挙にどのように影響するのかという「政治力」や政治的思惑によって決まるだろうと予測されるからである。

いずれにせよ、和雄は平成一八年一月に施行された「筆界特定制度」によって、個人的にでも申請し、敷地の筆界が特定されれば、それで「良し」と考えている。この境界線の問題で、これ以上、係わり合うことは「年寄りの冷や水」というものだ。

（擱筆、平成二六年三月末日）

常陸坊海存（海尊）

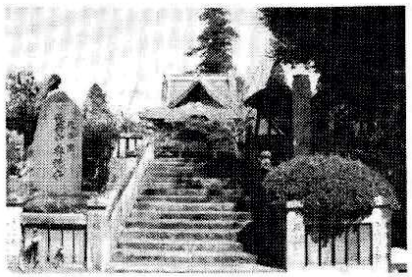
漆原直子

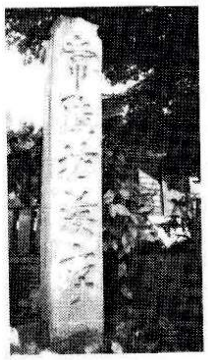
今年のえみし学会のゼミナールが、〝常陸国〟で行われることになった。その下見のための準備としてネットで情報を検索をしていた所、茨城県稲敷市阿波にある「あんば様総本宮・大杉神社」のホームページの中で、「常陸坊海存（海尊）」の名を見つけた。それによると、大杉神社の御祭神は倭大物主櫛甕玉大神（やまとのおおものぬしくしみかたまのおおかみ）である。さらに由緒書には以下のような説明があった。

神護景雲元年（７６７）当時都が置かれた大和国（現・奈良県）を旅立った勝道上人は、下野国二荒山（栃木県日光）をめざす途上にあり、大杉神社に着くとそこで病苦にあえぐ民衆を救うべく、巨杉に祈念すると三輪明神（奈良県三輪の大神神社）が飛び移り、病魔を退散せしめたところから、やがて大杉大明神と呼称されるところとなりました。この大杉神社を御守護申し上げるべく延暦二十四年（８０５）には別当寺として安穏寺が開基され、以降明治になるまで大杉神社は安穏寺の管理するところとなりました。文治年間にはその容貌が巨体、紫髭、碧眼、鼻高であった常陸坊海存（海尊）が大杉大明神の御神徳によって、数々の奇跡を示したことから、海存は大杉大明神の眷属で、天狗であるとの信仰へと発展いたしました。

ここで私が気になったのは、容貌が「紫髭、碧眼、鼻高」であったということである。これは、アジア系ではなく欧州系・コーカソイド系の特徴である。なぜ、そのような人が、常陸国の寺にいたのか・・・。特に「碧眼」という特徴については、瞳の虹彩のメラニン色素が少な

いために青く見えるのだが、遺伝的には劣性である。ある遺伝学者の研究では、紀元6千年～1万年前に黒海周辺で突然変異により派生していったという。現在は北欧に多く、中東や中央アジア、日本においても東北地方周辺の人にも若干見られるという。安隠寺に実際に訪れたので、以下にその周辺のことを探ってみたいと思う。





【上写真：安隠寺】
【右写真：常陸坊海存の石碑
寺正面右手に立つ】

海存は、生没年不詳だが、源義経の家来の一人で、武蔵坊弁慶の子分説もあるが、義経の最後の場所である奥州平泉の藤原泰衡の軍勢と戦った衣川の合戦では敵前逃亡したとされている「義経記」によると、常陸坊海尊は主人である義経が高舘合戦で非業の最期を遂げようとする時、「常陸坊を初めとして残り十一人の者ども今朝より近きあたりの山寺を拝みに出でけるが、そのまま帰へらずして失せにけり。言ふばかりなき事どもなり」と書かれている。その後は、山伏に勧められて人魚の朱い肉を食べたために、不老不死の身となって400年間、江戸時代初期まで生き続けたという説に繋がって行く。

元々は、滋賀県大津市の天台寺門宗の総本山園城寺、もしくは比叡山の僧であったとされ、文治年間の始めには、源義経の家臣となってから、常陸国の足尾山に籠り、杉室という地で修行したという話がある。その足尾山は、それ以来修験道の道場として知られるようになったそうである。しかし、青森県九戸市洋野町に海存のお墓とされる古い石碑が残されているそうである。

常陸坊海存は、文献としては、『平家物語』『源平盛衰記』『義経記』にその名が著されているが、『吾妻鏡』には著されていなかったりするので、架空の人物であるという説もある。江戸後期の紀行家・菅江真澄は『筆のまにまに』という随筆集で、「阿袁蘇神仙（アヲソノカミ）」という節で、海存について以下のように記している。

・・・或書に山に仙あるゆえに山北を仙北と書キ字音よめるよしを記し、またその仙といふは常陸坊海存也云々と見えたり。海存が父は尾張ノ国の故須知（コスチ）ノ五郎景吉といひし人也。

海存も尾張国に生れて童名を小治郎麿と云ひし。此小次郎丸のちは出家して、ほふし名を心了坊と付たり。其ころ源九郎判官義経公、七八歳ばかりにていまだ牛若麿とまをして山科の権ノ守兼房が家におはしけるに、心了坊は一条わたりに在ればをりをり訪らひまいらせて牛若丸に平家退治の事を進め奉りて此君のをとなしくなりおはすを手を折てまちにまちに、おのれも常陸坊と名あらためぬ。此常陸坊仙術を得てこの仙北ノ郡奥山駒が嶽に今も住り。柚樵夫（ソマヤマカツ）等はをりとして見し事ありといふ、あやしきことからさる事ありやなしや。そはしらねど仙台の青麻権理（現）と斉ひまつるは常陸坊海存なりと世にもはらいへれど、其みやつかさはゆめさる神にてはおはしまさず、祭る　は三光也といへり。そは神秘たる事にて実は仙人権現とて海存の生霊を斉るといへる人あり。

これによると、常陸坊海存は仙台の青麻神社（八五一年開基）に祀られているとのことで、青麻神社のホームページを見ると、由緒書きには、

天和二年（西暦1682年）源義経家臣なりし常陸坊海尊（清悦仙人とも称する）下野国（栃木県）出流山大日窟よりこの地に至り霊験を顕し給いしにより併祀する古来より中風病退除（常陸坊海尊の霊験による）・海上安全（穂積一族が水運に携わっていたことに因む）等の特殊信仰があり、「三度詣でれば生涯中風の難よりのがれる」と伝えられ、各地青麻神社の総本社である。

とある。また、江戸時代初期に残夢という禅僧が源平合戦を語っていたのを人々が海尊だと信じていた、と江戸初期の儒学者の林羅山が、『本朝神社考』に書いているそうである。近代においては、民俗学者の柳田国男が、その著書『東北文学の研究』でも、海尊について触れている。私は、武蔵坊弁慶は知ってはいたが、常陸坊海尊については、全くの無知であった。たまたま偶然にこれだけの伝承が残されていることを知った。実在性も含めて非常に謎めいた伝承をもつ人物であるが、その容貌の特徴についての情報源がどこから由来したものであるかは、大杉神社のホームページ以上のことは調べられなかったので、今後また調べてみたいと思う。

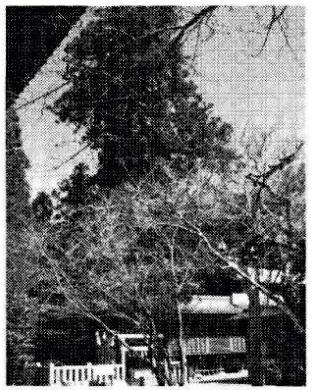
私が想像するには、大陸から渡って来た、又は流れ着いて来た西方異民族の胡人か、その子孫ではないかと思う。例えば、ソグド人（中央アジアのイラン系農耕民）はユーラシア大陸の活発な交易を担い奴隷としても売買の対象になっていたが、広範囲なソグドネットワークを持っていたという。日本には、西方からシルクロード等を経てもたらされた文物があり、そのことは、物だけでは

なく人も渡来した可能性は多分にあると思う。余談ではあるが、時代が遡る、8世紀の唐の時代に「安史の乱」を起した「安禄山」は、ソグド人であった。

最後に、大杉神社について触れておきたい。この神社は東日本における分布が多い「あんば大杉神社」の総本山である。江戸時代には大変流行した。『常陸国風土記』によると、「安婆嶋（あばのしま）」と言われ、崇神朝の時に建借間命が「板来（いたく）」（現在の潮来）方面を攻める際に、この島に宿して東の方の浦を眺めたとされる。大杉神社のホームページの由緒書には次のようにある。

この一帯はかつて菟上之国（うなかみのくに）という霞ヶ浦東岸域と東総域を治めていた小国の一部であったと伝えられております。菟上国は海上国とも表記されるように常総内湾の交易、産物を中心として成立した小国であったようですが、こうした影響からか常総内湾においてランドマークの役割をはたす、大杉神社の巨大な杉は「あんばさま」と呼ばれ、常総内湾の人々の信仰の対象であり、人々の交通標識の役割を十二分に発揮していたと考えられます。後に内湾の西にあった茨城国に支配されるまでは菟上国のもっとも重要な神社であり、菟上国造の祀る神社のひとつでありました。その後北方の仲国から南下してきた一族が鹿嶋、香取の両神社を築き、東岸域を支配するとその交易権や、支配権は移譲されたものの、一般民衆の間では依然として海河守護の神様としての信仰は温存されつづけられました。

「あんば」の語源については、地名が「阿波（あば）」なので、徳島県の「阿波（あわ）」と関連付ける見方もあるが、アイヌ語の「婆」を意味する語と見る人もいる。御祭神は、先述の「倭大物主櫛甕玉大神」で、これは大神神社の「大物主」のことで、『出雲国造神賀詞』において、「大物主」「倭大物主櫛甕玉大神」と表記しているそうである。現在もこの神社の境内には大きな杉の木がご神木として残されている。



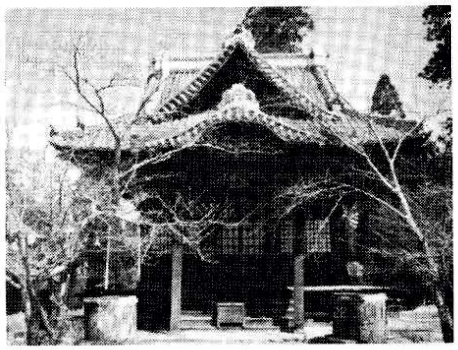
【上写真：三朗杉】

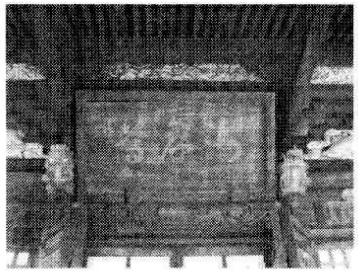
現在の大杉神社は、非常に世俗的な現世御利益主義的な体質のようで、社殿は建て替えられて朱や緑、青色などの極彩色に塗りたくられてケバケバしい。それにひきかえ、隣接する安隠寺は古色蒼然として、風雪に耐えた落ち着きのある本堂である。【次頁写真】このお堂が、建て替えられて派手にならないことを願う。また、大杉神社が御利益主義であると思う理由の1つに、「勝馬神社」が合祀されていることである。競馬や賭事の〝勝ち〟を祈願するのだが、由緒書きを見ると、その由来は奥が深い。その内容は以下のようである。

「勝馬神社」　御祭神　不詳

もと、馬櫪社（ばれきしゃ）と称し、貞観四年（八六二）　信太馬牧に祀られた馬体守護の古社。鎌倉時代ころ大杉神社境内に遷座された。四月八日は大杉神社の春の大祭で別名駒牽祭と呼ばれている。境内奥山に馬場（現駐車場）があり、競馬が開催された。旧来は馬場を見渡す地に石祠として鎮座。農耕馬の消滅とともに石祠の存在すら多くの人々から忘れ去られていた。平成十四年篤志家の手によって現在の地に遷座、社殿を建立。・・・

このあたりに、古代の官営の「馬牧」があったのである。霞ヶ浦周辺には数多くの古墳があるが、馬具が埋納されている古墳も少なくない。この信太郡にかつて「日高見国」があったと『常陸国風土記』には書かれている。「日高見国」とは、蝦夷の国とされる。大和朝廷による征夷に伴い、東北へ北上して行ったと思われる。この信太の地に、馬をもたらしたのは誰であったか、大変興味深いことで、また、追々調べたいと思う所である。





【安隠寺　海存堂】

【参考文献・サイト】

- 『アンバ大杉の祭り』　大島武彦　著　岩田書院
- 『安禄山「安史の乱」を起したソグド人』　森部豊　著　山川出版社
- 『常陸国風土記をゆく』　柴田弘武　著／横村克宏　写真　崙書房
- 『常陸国風土記と古代地名』　鈴木健　著　新読書社
- 大杉神社HP　http://www.oosugi-jinja.or.jp/page/history.html
- 「義経伝説」常陸坊海尊についての一考察　http://www.st.rim.or.jp/~success/kaison.html

短歌　四十首

曽根竣作

特攻隊異聞

ボロ市の端で見かけし飛行服　汚れしさまにマフラー白し

関大尉ほか五名なる敷島隊　ゆうぜんとして別盃を酌む

悠然はそも誇張なり中にはふるへつつ盃受くるあり

「何で俺が…」と関大尉は同僚(とも)に訊(き)く特攻とはこう言ふものか

三度目の出撃のとき空母一隻、他の戦果は推して知るべし

両腕をかかへられてぞ蒼白く操縦席に着きし隊員ぞ

やうやくに操縦席に着座して互(かた)みに帽振るすがたも見られず

「桜花」とふ特攻機あり、神雷部隊の生死を賭けしは七二名

無惨なり人命と鉄量の交換比「桜花」の生みの親たる○中尉は

ひつそりと〈三角兵舎〉影をおき百日紅(さるすべり)咲く誰のみ魂か

〈三角兵舎〉……特攻隊員の寝起した部屋

不屈の闘志

冬天の星冴え返りシリウスを頂点としておほいぬ座立つ

策ありと思へど特に何もなしふところ手して考へる奴

早道(ひでりみち)に朴歯の下駄を音高く颯々(さっさっ)とせり「予科」の明け暮れ

門もなく鐘も鳴らざる校庭に通ひし数年さはやかなりき

存(なが)へて今日ここにあるを薄倖(さち)として鰯の干物をひとつ購(あがな)ふ

遠くより凄まじく鷺の声きこゆ冬風しまく山眠るとき

明治より遠くなりゆく昭和かよ敗(いく)けし戦さの身にこたへつつ

いわし雲わが青春は戦後より始まりそして忽(たちま)ち終る

獄中に二十七年つながれしアパルトヘイトの熱なほ醒めず

誰よりもこぶしを高く掲(かか)げたる不屈の闘志マンデラ氏逝(ゆ)く

（名画のラストシーン四首）

ディートリッヒ砂に埋もれし素足のまま外人部隊を追ひてゆく影　（モロッコより）

霧流るる夜の空港友情の証しか連れ立つハンフリー・ボガード　（カサブランカより）

冬枯れの径帰りゆくアリダ・ヴァリ車に凭れしをとこを無視す　（第三の男より）

「ギャビー」叫べど汽笛に吹き消されぺペ・ル・モコ岸壁に白死す　（望郷より）

黒揚羽

廃屋となりて久しき豪邸の片すみに赤くまんじゅしゃげ咲く

元英語教師の住みしとふかどの屋敷に近頃からすしき鳴く

萩の花しろじろ咲きて戦(いくさ)終へいまあたらしき堂宇立ちたり

朝焼けのなかをエンジンひびかせて白魚とりの舟接岸す

ケータイの指示を受けつつ葱と苧たっぷり買ひぬ一人住ひの

揚羽一尾季節外れの庭をとぶたどきなき様よ秋の日暮れは

わが肩に止らむと見せ黒揚羽昨年見送りし女人を偲ばす

黄金のしじまを破り高鳴ける百舌のひとこゑ午睡より覚む

近道をきけばコブラが出ると言ふ雑木々生うる阿里山の径

霧流るる斜面いっぱい朝焼けて「モーナル・ダオ」再びは来ず

阿里山…台湾中部の名山　「モーナル・ダオ」…有名な霧社事件の首魁

灯火親しはるか遠出の友は見ずけふも一書を読み了りたり

夕潮の満ちゐる湾に高く低くとびとかもめがたがいに交叉す

白鳥の飛来する湖さむざむと冬到来を告げてけふあり

暮れ急ぐ四方にシグナル美しく見知らぬ街がわれに迫り来

今日生きて十二月八日未だ凛く向かふに揺るる冬のバラ見ゆ

雪吊りの美学力学そのままに発止とゆはふ幹太かりき

短歌

行雲流水（四十一）

石黒修身

近詠二十五首

北方志向

耳にする「北」とう言葉身につきし故郷偲ぶ情念を喚ぶ

北方を志向するかと揶揄されど郷愁の念衰えはせず

連日の雪の脅威に驚きぬ「天からの手紙」の詩情は遠く

中谷宇吉郎博士「雪は天からの―」

寒冷の帯広の地の「百姓譚」時田則雄の土着を愛す

啄木の旧き短歌読み流離しかの地の当時に思い馳せおり

祖国とは

グローバル世界と謂えど祖国とは民族自決を措いて無きもの

父祖伝う山河祖国は聖域ぞ他に侵されるものに非ず

守るべき祖国に目醒むウクライナ・ロシア侵攻理不尽なれば

クリミアの民の祖国は何処なのかロシア従属自決に非ず

「寺山」の詠みし祖国を透けて視る時空世界を異にすれども

寺山修司「マッチ擦る―」

時局

大乱に到らざれども世界中綻び多く弥縫及ばず

解決のつかぬ争乱多くして水夫なき地球は宇宙を漂う

たとうれば「ＴＰＰ」で決められぬこと多くして漂流と呼ぶか

「靖国」がかくも波紋を広げるは自国の虐か他国の奸か

中山喬央氏を悼む

予期せざる体調悪化か「中山さん」忽然と逝く雪積る朝

「玉稿を有難う」褒め上手寛容の編集長の笑顔忘れじ

自らの研鑽多忙を顧みず「まんじ」の編集献身を謝す

晩学と称し究めし考古学斯界の評価高かりしと聞く

杯を交せば談論静かにて気配り忘れぬ酒友懐かし

身辺

単身でパリへの赴任決めし息の憂いは妻子と吾ら老親

パリ赴任息は単身で機に乗りぬはらから残す気掛り背に

息を送る成田空港混然と世界各地を往還の人

鎌倉の小町通りで足留めて古き書肆にて「小沼丹集」購う

鎌倉の八幡宮にほど近く美術館あり「鏑木清方」愛づ

「明月院」梅は散れども紫陽花は芽吹き豊かに花季を俟ちおり

石川理紀之助の一生（その二）

三戸岡道夫

と健康を心配された。

ある吹雪の朝であった。理紀之助がこれから三時の板木を打ちに、村巡りの準備をしているところへ、妻が来て、

「こんな吹雪の朝は、止めた方がよいのではありませんか」

と気使うと、理紀之助は、

「いや、これが私の保養になるのだ」

と、一日も休むことがなかった。

山田経済会がスタートして一年半ぐらいたった頃に、石川家に重大な事件が起きた。

長男の民之助が家出をし、行方不明になってしまったのである。理紀之助はそれを探して方々をさまよい歩いたが、民之助は国後島で死んでいたのであった。理紀之助はその遺骨を抱いて、肩を落して帰ってきた。

するとその理紀之助の姿を見た村民は、

四、山田経済会の頃（つづき）

このようにして山田経済会がスタートして三年が経ち、明治二十一年になると、村の借金はぐんと減り、またそれぞれの家の財産状態も非常によくなっていた。そして当初七年で村全体の借金を完済するという計画も、五年で完済できる見通しとなった。

しかしふり返ってみると、山田経済会を始めてからの理紀之助は、寝る間もないほどの多忙な日々であった。自分の家の二町歩の耕作をするほかに、山田経済会の仕事をし、さらに各地の勧業談会、歌会、経済会などへ出席するなど、眼のまわるような忙しさであった。

そこで家の者から、

「そろそろお年ですから、そのような無理をしない方がいいのではありませんか」

「このような不幸に会われている親方様に、心配をかけては申し訳ない」

と、ますますよく働くようになった。そのため貯金もふえ、秋には格段によい収穫があがるようになった。

するとこの山田経済会のことが、秋田県内はもちろんのこと、中央にも聞こえ、明治二十一年に農商務大臣から、

「一度東京へ来て、その状況を話してほしい」

という依頼が来た。理紀之助が四十四歳のときであった。そのことを村民に話すと、

「名誉なことです。村のことは心配しないで、ご夫婦でゆっくり行かれますように」

と快よく送り出してくれた。すなわち村民は、長男を亡くした理紀之助夫妻の悲しみをいたわって、この機会に夫婦で、長男民之助の供養旅行もかねて、東京へ旅行に行かれよと、配慮してくれたのだった。そのおかげで理紀之助は、明治二十一年八月から十一月まで、長期間にわたる妻と二人での旅行が出来た。

その農商務省での説明のため、理紀之助はこれまでの記録を整理し、それを持って上京した。そしてこれを数日間にわたって発表した。

この時理紀之助は、その締めくくりの言葉として、有名な、

（寝ていて人を起すことなかれ）

という言葉を言っている。がその意味は、

（これは私の、私自身への戒めの言葉である。私は山田経済会の責任者として、この言葉に反しないようにやって来たし、今後もこの精神を忘れないつもりである。しかし山田経済会は私一人がこの精神でやってきたのではなくて、村の者みんながこの精神でやってきたから、成功したのである）

ということを言っているのであった。

理紀之助はたえず、

（一村一家、村民はみんな、同じ釜の飯を食べる家族なのである。だから、規則も罰則も作らないという私の考えを、村民はよくわかってくれている。その村民の心の暖かさに報いなければならない）

と、寝食を忘れて努力しているのだった。

すると、そんな時、

「山田経済会が成功したのは、石川家が山田の地主だからである」

とか、

「石川理紀之助は、貧乏人の心を知らない。貧乏人に節約をすすめ、カテ飯を食えといっても、無理な話である。貧乏人は、収穫した時だけでも、白い飯を腹いっぱい食べるのが、何よりの楽しみなのである」

というような批判が起ってきた。

理紀之助は考え込んだ。

（これは、私の施法に対する批判であると同時に、山田村民の努力を認めない者の言葉である。所有する田畑が少ない者ほど、借金が多く、その貧乏人たちがその返済に最後まで苦労したことは事実である。しかしこの者たちが、『なんとかして借金を返さなくてはならない』と、どんな朝でも家族そろって働いているのを、私は何度も見ている。老人にはカテ飯を食べさせないようにと、その家の一年間の食料を計算してやっても、『うちの年寄りは、働く者が苦労して働いているのに、自分が白いご飯を食べるわけにはいかない』と言って、食べないのである。それで昨年は米が予定より余ったので、それは借金を返済する方にまわすつもりです、と言う者もいるのである。田畑を五反以上持つ借金の少ない者より、貧乏人の方が多いのである。その貧乏人たちが、真剣に努力したからこそ、山田経済会は成功したのである。それを、地主の私が特別の援助をしてやったからだと考えられているのは、残念である。私はなんらかの形で、このような批判が正しくないことを、世の中に示す必要がある。いや、示さなくてはならない）

と、理紀之助はしきりに何かを考えはじめたのであった。

五、草木谷の貧農生活

明治二十二年（一八八九）、山田経済会の仕事を始めてから五年め、この年の秋で、借金が全部返済できるという見通しがついたのである。理紀之助は四十五歳になっていた。

この年の五月から、理紀之助は、親友の高杉保三の依頼によって、山本郡坂形村の指導に出かけた。

場合によっては、相当の長期間になるということも考えて、不在中の経済会の責任者として、石川九十郎、石川長之烝、金子辰五郎の三人を選んでもらい、一切のことを任せて出張した。

ところがその理紀之助が、一ヵ月ほどで帰ってきてしまったのである。

その理由は、

「この経済会という仕事は、村の者全部が、その気になってやらなければ、成功するものではない。高杉保三さんは私の昔からの親友で、人物、考え方など、すぐれた人で、山田経済会のやり方を取り入れて、村おこしに努力していた。しかし村民たちは本気になってやろうとはしないので、私もお手伝いしようがなく、帰ってきたのである」

ということであった。

しかし帰ってきたけれども、山田経済会のことは、石川九十郎、石川長之烝、金子辰五郎の三人に任せてあるので、そのままこの三人に任せておけばよい。

そこで理紀之助は、明治二十二年、稲の刈り入れも終った十月中旬に、一人で草木谷に入り、廃物利用の小屋を建て、そこで貧乏小作人の生活を始めたのである。理紀之助が四十五歳のときである。

さしあたり一週間分の食料として、米を三升五合、それに塩、鍋、釜、鍬、鎌、鉈、菰などを馬につけて、小屋に持ちこんだ。

そして営農資金という形で、草木谷の田圃のその年の小作米二十三俵（一俵は三斗一升入り）を地主から借りた。

そして稲こきをし、焚物を集めたりして、働きはじめた。その働き振りは次のようであった。

（私は草木谷では、十二時間働くことにし、残りの十二時間を、睡眠と食事、雑用の時間にあて、めざめると働き、空腹になると食い、眠くなると横になる、という工合の日々をすごした。もちろん、食は一割りのカテを入れたカテ飯である。副食物は畑の野菜。それに山菜、木の芽などを、塩で味つけしたものだけである。小屋の屋根は時々吹きとばされたが、その度に修理して…という工合に、徹底的な勤労、節約の生活をした）

という生活であった。

そしてまた谷から流れる冷水が稲にかからないように、灌漑に気をつかって、谷間の稲作りの条件をととのえた。さらに山裾の空地を開墾して畑を作り、日当りの悪い湿地には苗木を植え、稗、粟、じゃがいもを栽培した。

こうして約束の小作米を納めながら、三年間で借りた二十三俵を返済してしまった。そしてその時理紀之助の手許に残ったものは、

新墾畑　四反九畝
苗木　十二万本
雑穀　八十三俵余

であった。

理紀之助は、

「草木谷の生活は、私が山田経済会で村民に要求して、実行させたことを、自分でやったまでである。山田の村民は、このように努力したから、借金を返すことが出来たのだ」

と、改めて言い切っている。

六、歌道の振興をはかる

山田経済会の成功と並行して、理紀之助にはもう一つの志があった。それは若い頃から精進していた、

（正しい和歌を世に拡める）

いわば歌道の振興であった。彼は山田経済会を運営しながら、この歌道の志も達成しなければならないと、考

えていた。そして五十歳になるまでに、歌道への志を、自分で納得できる形に仕上げたいと思っていた。

理紀之助は、

「和歌は人情の至誠から発するものである」

と考えていたが、それを人に教える力が、まだ自分にはないことを知っていた。もっと励まなければならない。そのためには一流の歌人に頼み、その歌人から、自分をはじめ多くの人を指導してもらう必要があると思った。そこでそのような組織を作ろうと思い、東京以北諸県歌人詠草会を作り、その指導者として高崎正風に頼むことを計画した。

高崎正風は、理紀之助と同じ流派の歌人で、明治天皇の信任が厚く、当時、御歌所の所長をしていた。

その人格、識見などに、理紀之助は深く敬慕していたが、とくに、

（和歌は人情のまことを詠むものであるから、嘘を詠んではならない。実情を見、自分で感じたことを詠むようにしなければならない）

という正風の主張に、理紀之助は、

（まさにその通りである）

と心服し、指導者としては正風以外にないと決めていた。

理紀之助は、東京以北の諸県の歌人と連絡をとり、詠草会を結成する見通しがつくと、前から交遊のあった御歌所所員の伊藤祐命に、

「正しい和歌を拡めるために、私は有志と相談して、東京以北諸県歌人詠草会を作ったが、その指導者として、ぜひ高崎正風先生にお願いしたいと思っている。和歌の振興のために、高崎先生が御承諾くださるよう、あなたから是非お願いしていただきたい」

という手紙を出した。山田経済会がスタートして半年後の、明治十八年十二月、理紀之助が四十一歳の時である。

しかし伊藤祐命からは、高崎正風の現在の立場と、仕事が多忙であるから、そのようなことを無理にお願いすることは出来ない、という返事がきた。そこで理紀之助はさらに長文の手紙を書いた。その内容はほぼ次のようなものであった。

私は若い頃、「和歌読みの家産つぶし」というように言われて、和歌を学ぶことを禁止されたことがあった。しかし私は本当の歌人になって、正しい和歌を世にひろめ、あわせて和歌よみは家産つぶしではないことを、証明してみせうと決意した。

これまでの勉強によって、勧業、農家経済については、人にも教える自信がついたので、いま山田経済会という組織を作って、多忙な日々を送っている。

しかし和歌については、人に教えるような力がない

ので、いろいろ考えた末、前にお願いしたような企画（詠草会）を立てたのである。もし私に力があればお願いはしないのであるが、残念ながらその力がない。

それでお願いするのですが、もし御承諾いただけないようであれば、私は歌をあきらめるよりほかはありません…。

というような内容のものであり、切々と心情を訴える文章は、読む者の胸を強く打つものであった。

しかし結局は目的を達することは出来ず、伊藤祐命の指導、高崎正風校閲という形で、詠草会の歌会は発足した。

以上のように四十歳から五十歳にかけての理紀之助は、若い頃の志を一挙に果そうと、歌会に、勧業談会に、経済会にと、東奔西走し、全力投球で生きていたのが、その姿であった。

七、老農石川理紀之助

理紀之助は三十歳の後半の頃から、よく若老農と呼ばれていた。それは年は若いが、心の内容は老農のような人だという意味である。

それは先輩老農である、高橋正作や、岩沢太治兵などの功績を評価して、県の勧業御用掛に推挙したり、また歴観農話連を組織して、県内の農民たちの交流の輪を拡げたりしていたので、自然にこのように言われていたのであった。

その若老農の理紀之助が、県の役人をやめ、山田経済会を指導して借金を返済し、さらに草木谷へ単身入って、貧乏小作人の生活を始めると、これを冷笑する者もいたが、しかし次第に、

「石川理紀之助はただ口先の人ではない」

「あの人の農家経済の考え方を、私たちはしっかり学ばなくてはならない」

と、理紀之助を見直し始めるようになった。

理紀之助が県の役人時代も、

（あの人は農民の心がわかり、農民の味方になってくれる人）

と思われていたが、しかし理紀之助はたんにそれだけでなく、

（農家経済、農家の家産の持ち方を中心に、農民の生き方を教えてくれる老農である）

と、評価が高まってきていたのである。そして、

（この老農から、何かを学びとろう）

と、近村の有志の者たちが、草木谷を訪れ始めたのである。

いろいろな人たちが、様々な形で訪れはじめたが、二年、三年とたつ間に、その人たちが次第に定着してきた

伊藤与助（飯田川下虻川）、
伊藤甚一（井川町）、
伊藤永助（五城目町大川）、
佐藤市太郎（男鹿市角間崎）、
佐藤政治（脇本）、
などであった。

伊藤与助は、往復十キロメートルの悪路を、毎晩木谷まで通って勉強すれば、伊藤甚一は週に一度ぐらいは必ず来て、朝から晩まで理紀之助と一緒に働きながら、学んだ。

伊藤永助は往復十六キロメートルの道を泊まりがけで来て、一緒に働き、貧乏から抜け出す方法を学んでいった。

佐藤市太郎は父親にすすめられて来て、植林や苗木の育成のことを学んでいた。が、次第に理紀之助の人柄に魅せられて、和歌の勉強も真剣にやるようになった。

また理紀之助は月に一回くらい、歌会を開いた。その歌会へは、右に列記した人々の他に、さらに、
理紀之助の息子の老之助、
田仲源治（飯田川飯塚）、
伊藤福治（下虻川）、
大井周吉（昭和豊川）、
大沢亀治（豊川）、
沢畑小市（豊川）、
などという人々が集った。

集る人々は、理紀之助を「先生」と呼んでいたが、理紀之助は彼等を弟子だなどとは思っていない。全員、同志、歌友と考えていて、共に真剣に討論し、和歌を批評し合った。

また東京の中島歌子の指導を受けたりして、互いの歌をみがきあった。

こうして草木谷は次第に、志のある者や青年たちが、農村の将来や、農家経済、あるいは理想の農民像、あるいは和歌について語りあう、学習の場になっていった。そして理紀之助はいつの間にか、石川老農、石川先生と呼ばれて農民から慕われ、信頼されるようになっていった。

明治二十七年（一八九四）の十二月、理紀之助が五十歳のとき、彼は農話連の有志とともに、東京で開かれた第一回全国農事大会に出席した。そして幹事長の前田正名から、

（日本一の老農）

と紹介された。山田経済会、草木谷での体験と実績が、高く評価されたためである。

そして大日本農会長の委嘱によって、九州各県を巡回講演することになった。そのため理紀之助は、その後、各地各県からの要望によって、各地を巡回、講話をして

歩くという、忙しい状態になっていき、家にも落着いていられなくなるのであった。

八、適地適産調

理紀之助は「日本一の老農」などと称賛されるにつけ、（山田経済会を確かなものとして後に残しておかなくてはならない。それが私の最大の責務だ）

と思うようになった。

山田経済会については、農商務省で発表した時から、農商工公報をはじめ新聞などで、広く紹介されていたが、人々の受け止め方が、理紀之助には気になって仕方がないところがあった。

たとえば「地主だから…」という批判については、草木谷で貧農生活を実験することによって、これに応えてきた。

しかし最近はまた、「時代の変化、土地の事情などを考えないで、経済会で実施した施法だ」と、その結果だけに着目してかれこれ言う者が、目につくようになってきた。

そこで明治二十七年、理紀之助が五十歳のときに更めてまとめた山田経済会成績には、最初に「自序」の一項目を設けて、次のように述べている。

すべて法はその土地とその時によって考え出されなければ、いけないものである。

だから法は、その時代をはじめ、土地、気候、風俗、人情などによって、それぞれ異って当然である。

それなのに、もしこの山田経済会の施法だけに頼り、これだけを真似していることがあれば、利益どころか、かえって害となることがある。従って山田経済会のような仕事をしようとする者は、それぞれ実情をよく考え、実際に即した法を作り、その人その人によって成功するようにしなければならない。

と、くどいまでに注意し、

（私のこの山田経済会の成績を参考にして、あなた自身の法を作り出してほしい）

と結んでいるのである。

一読すると、読者へのメッセージとでもいうようなものであるが、山田経済会を中心にした自分の仕事の考え方を、正しい形で後世に残しておかなければならないという、理紀之助の願いがにじみ出ている。

その理紀之助が、適産調を行うことを決めたのは、明治二十八年（一八九五）に南秋田郡農会を設立した、五十一歳の時である。

彼は役人時代から農業の進歩をはかるには

そのために理紀之助は七百五十冊という莫大な調書を残しているが、その調書の裏に秘められている、理紀之助の心、願いを、読みとることが必要である。

まず、その調書の概略を見ると、それは次のようである。

（一）土壌調査書

土質、土壌を村の字ごとに、しかも地上と地下に分けて調査し、それを着色した地図に描いている。村の字ごとに描き表しているから、誰が見てもすぐわかる。すなわち耕作する者がわかるようにという配慮がありありとわかるのである。

（二）経済調査書

村の耕作反別、平年収穫、他払土地（他町村の者に耕地を売ってしまった土地。他町村地主の小作地）の面積、その他産業の収入。

戸数人口、必要食料の量（一日一人米五合、年一石八斗とみて）、他払土地に付帯する小作料、税金などの収支にかかわる調査。

耕地適産調であるから、あくまでも農業収入を基本とし、その収入によって村の経済の概略がわかるようにしている。

（三）風俗、生活慣行、特に労働慣行。

生活の程度などを、昔とくらべての調査。

（適地適産）

が重要であり、そのためには土地を調査しなければならないと考えていた。

そのため明治二十三年と明治二十四年（理紀之助が四十六歳と四十七歳のとき）に、二年間にわたって、秋内県内の土壌調査をしている。その中で、

（作物の適地適産ということが必要であるように、農家経済にも適地適産の考えが必要である。したがって、その村、その時によって、経済の施法は異るのであるから、村の実態をよく調査し、そこから、どのような村に、どのような時に、どのような経済施法が必要であるかを、考えなくてはならない。それでないと、農村は永久に貧乏から脱け出すことは出来ない）

と言っている。

理紀之助はこのような考えの上に立って、新しく生まれた郡農会で、適地適産調べの必要なことを訴えた。そして更に郡長にも話して賛同を得、次の年（明治二十九年）から明治三十三年までに、この仕事を仕上げることを約束した。

このように理紀之助の適地適産調をみてくると、それは山田経済会の施法、すなわち農家経済法の精神を確かなものとして、後世に残すために行ったものとも言えるのである。

（四）歴史調査

古木、口碑、社寺などを調べ、祖先の営み、先人の苦労などについての調査。

以上であるが、この総合的な調査書をみれば、その村が現在かかえている課題が、自然にわかる。

しかしこのくわしい調査書も、（一）を除いては、たえず変化するものである。時代によって、変っていくものである。したがって課題も、時代によって変わり、理紀之助の農家経済の施法も、常に変っていかなければならないのである。

このように考えると、農村の自立をめざしての適産調は、村の現状を的確に把握し、それに応じての施法を実行する人物を、育てることを重点とした仕事なのであった。

理紀之助は、南秋田郡の三十五ヶ町村の適産調に、四千五百人の人が必要だという計画書を、郡長に出している。そしてその半分は、調査する町村から出すことを前提として、調査に必要な予算を組んでいる。

そして、この事について、

（……この適産調をやれば、各村でこれまで気がつかなかった、いろいろな問題が出てくると思う。したがって、その問題に真剣に取組んでいって、はじめて村は自立できるのである。だから各部落では、それ相応の人物を選出して、調査に参加するように…）

と説明を加えている。

すなわち、村の調査にあたっては、必ず村から将来有望な人物を参加させ、調査書が狙っている調査に加わることを、計画しているのである。村を興していく者は、どこまでも村の住民でなければならないからである。

その村の土壌調査を中心とした調査には、毎年、田植前から盆すぎまで行い、一つの村に四日～六日ぐらい滞在した。その宿泊所兼事務所は、多くは寺や神社を借り、そこで自炊し、そのままごろ寝した。

その時間割を見ると、

午前二時　起床（理紀之助はそれより以前に起きている）

午前四時三十分まで　自由勉学

午前五時　朝食（調査参加者の当番制で、自炊）

午前五時三十分　外出準備（各自が調査する土地の確認と、絵図等の用意）

午前六時　出発（耕地の土壌調査。絵図面に書込みながら。晴雨にかかわらず）

午前十一時　帰所

午前十二時　昼食、休憩

午後一時から五時まで　勤務（午前中に調査したもの

の、整理、計算など）

午後六時　夕食

午後八時まで　自由勉学、質問研究（土壌について。村が持っている課題と、その対策などについて討議し、理紀之助の意見をきく）

午後九時　就寝

以上のようになっている。このような時間割で進めてきたことについて、

（……このようにして調査し、村の実態を確認するが、将来、これらの問題について、いろいろな施法を考え、実行していくことになると、この調査に参加した者が中心になって進めていかなくてはならない。経済に関する施法は、あくまでも人が考え、その人が先頭にたってやるべきものである。したがって必ずやり通すという逞しい心身を鍛え、他人の辛苦がわかる人間にならなくてはならない。そのような人物になるためには、莫蓙を身にまとい、食事は自炊し、朝二時に起き、夜九時に寝るまでの間に、たった一時間の休憩という時間割で、休みなく動きまわらせ、また寸暇を惜んで勉強させて、五年間をやり通したのである）

と理紀之助は言っている。

理紀之助は、明治三十三年七月二十日（五十六歳のとき）に結了式をあげ、南秋田郡全町村の調査を終了したと、郡長に報告している。

（経済は法にあらず、人にあり。時と場所によって、その施法は変わるべきものである）

ということを、はっきり後世に伝えておかなければならないという、理紀之助の意図していたものが、ここで一応完了したのである。

しかしその五年間の調査の経過をかえりみると、必ずしも理紀之助の満足すべき状態ではなかったように思われる。

それは最初に彼が計画したように、郡内の全町村の理解と協力が得られなかったことである。

それは調査の最終の年（明治二十三年）に、十九ヵ村が未調査のまま残っており、その中で、

「私の村は調査をしない」

と言ってきた村が、十ヵ村もあったのである。

この仕事の山場ともいうべき明治三十一年五月に、草木谷が火災にあい、調査事務所の小屋が焼けてしまったことが、大きな影響ではあった。しかし最終年の明治三十三年になって十九ヵ村、すなわち調査対象村の五十四パーセントも残ってしまったということは、理紀之助の意図するものが郡内全町村に受け入れられなかったのだと言ってよく、また調査不要を言ってきた村からは、調査協力者が出なかったということである。

これでは適産調の目的からいって、かりに調査をしたとしても、その村にとって価値ある調査にはならなかったわけである。

しかしこの調査は南秋田郡町村を対象として計画したものであるが、意外にも秋田県内全般に影響を及ぼし、南秋田郡以外の六郡十三ヶ町村が、進んで調査を実施し、他郡からの調査活動に参加する者が年々多くなっていった。そのため当初四千五百人の調査員の数は、実質的に一万人以上の人数になった。

すなわちこの莫大な県内農民が、理紀之助の適産調の何たるかを学び、村おこしについての考え方を、実践的に修得したということになるのである。

そして更に、この五年間、理紀之助に寄り添うようにして寸時もその側を離れずに協力した若者が数人いたことは、大きな成果だったといえよう。理紀之助は自分の志が若者たちにはっきり伝っていることを確認し、ひそかに喜んでいたと思われる。

（つづく）

関東管領始末記⑬

扇谷家宰　太田資長（道灌）

千坂精一

一

利根川を挟んで自称古河公方足利成氏と対峙する上杉管領方の一翼を担い河越・岩槻・江戸の三城を築いて防衛戦を固めた扇谷家は、じつは上杉氏嫡流家であった。

始祖上杉重房が鎌倉幕府六代将軍になる後嵯峨帝の皇子宗尊親王に供奉して鎌倉へ下向するとき、嫡男頼重は同行したが嫡孫重顕は伏見院の藏人だったので残った。

そのため、鎌倉に腰を据えた頼重の三男憲房の系が宅間・犬懸・山内の三家に分かれて管領家になったのだ。

重顕の嫡男朝定は建武四年（一三三七）足利尊氏の命により丹後（京都府）守護になったのだが、子に恵まれなかったので従弟藤成の二男顕定を養子にした。

その顕定がのちに関東へ下向して河越城主になったのだが顕定にも子がなく、養子に迎えた兄頼顕の子氏定が鎌倉入りして扇谷に居館を構えたことから扇谷家といわれるようになったのである。

ついでながら家宰の太田氏についても述べておこう。

太田氏の祖は、治承四年（一一八〇）以仁王を奉じて挙兵したが事前に発覚して平家の追討を受け宇治平等院で自害した源三位頼政であるから、清和源氏の系である。

四代の孫隆綱は頼政の曽孫と知った土御門帝から丹波國船井郡五箇荘（京都府南丹市日吉町）を与えられた。

隆綱の孫の資國が桑田郡太田郷（亀岡市稗田野町太田）に移ったとき、太田の地名をとって名告りにした。

そのころ資國は伏見院の藏人上杉重顕に仕えていたことから二代後の顕定が鎌倉へ下向するとき供奉した。

資長の父資清（道眞）は應永十八年（一四一一）の生まれで、十九歳のとき上洛して籤引将軍義教に仕え與野（さいたま市）と笹目（埼玉県戸田市）を拝領した、

家督を継ぐと五歳下の扇谷持朝の家宰をつとめた。

公方成氏と管領山内憲實が対立した〈永享の乱〉では、持朝・資清主従は同族山内方について協力した。

山内家の家宰が長尾景仲（昌賢）に替わったころ、扇谷家も持朝の子顕房が家督を継いで当主になった。

その顕房は成氏との戦いに敗れ多摩郡夜瀬（三鷹市）で自害してしまった。まだ二十一歳の若武者であった。

資清はこのとき四十五歳であったが、家督を嫡男資長に譲って出家すると河越屋敷を出て入西郡越生の自得軒に隠棲した。そこは長昌山龍隠寺の境内でいまは資清・資長父子の墓と伝えられる寶篋印塔の墓碑塔がある。

当主になった資長はこのとき二十四歳であった。

資長は、永享四年（一四三二）資清の嫡男として鎌倉扇谷の館（現在英勝寺になっている）で生まれた。

この年、伊勢新九郎長氏（早雲）も生まれている。

資長は九歳のとき学窓に預けられると、たちまち頭角を現して鎌倉五山で比類なき学童と称えられた。

十一歳で帰宅した資長が十五歳で元服したおりに、父資清がその並みはずれた才能を空恐ろしく感じて、

「たとえば障子は真っ直ぐに立っていてこそ役に立つが、曲っていれば倒れてしまって使いものにならない」

そう例をあげて諭した。

すると資長は、すかさず屏風のほうを指差して、

「しかしこれは真っ直ぐに立っていたのでは倒れてしまい、曲っていればこそはじめて役に立ちまする」

そう反論して父を唖然とさせた。

資清は息子に遣り込められて舌を巻いた。

しかし、このまま捨ておいては父親の沽券に関わる。

（わが子ながら生意気な。ひとつとっちめてやろう）

そう考えた資清は、資長の留守に書斉へ入ると、

『驕者不久』（驕れる者久しからず）

そう紙に書いて、資長の机の前の壁に貼っておいた。

それをみた資長が礼にきたので、資清は溜飲を下げたのだが、後日また書斉を覗いてみたところ先日貼った、

『驕者不久』が、

『不驕又不久』（驕らざればまた久しからず）

に訂正されていた。

資長はこのころからなにごとにも反論して強引に自己主張を押し通す可愛げのない少年になっていた。

この遣り取りをみると資長の才智はすでに父を超えているようにとれるが資清とても凡人ではない。まえにも紹介したとおり山内上杉の家宰長尾景仲とともに、

『東国不雙の案者』

すなわち東国に並ぶ者ない智恵者だと称されている。

また、当時のことを書いた『永享記』のなかでも、

『関東の諸将資清に靡き従うこと吹く風に草木の動くごとし』

そう絶讃しているほど文武に優れた部将だったのだ。

資長の英邁ゆえに他を見下す態度になってしまう性癖がこのさきしばしば禍の因になってゆくことになる。

そんな資長でも万能というわけにはいかなかった。

あるとき鷹狩りに行って俄か雨に遭い、近くの農家で雨具の蓑を借りようとしたところ、応待に出た若い女がなにも言わずに山吹の花一枝を折って差し出した。

資長は、

「儂は蓑を借りに寄ったので、花を求めたのではない」

そう大声で告げたのだが、女は反応を示さなかった。

資長はやむなく、濡れたまま馬を駆って帰邸した。

後日、生憎不在の父資清を訪ねてきた歌人を応対したとき、資長は腹立ち紛れにそのときの不満を漏らした。

すると歌人は『後拾遺和歌集』のなかに兼明親王の、

七重八重花は咲けども山吹の
　実のひとつだになきぞ悲しき

があり、

「女はそのなかの〝実の〟を〝蓑〟に擬えて貧しくて蓑もないことを山吹の花で暗示したのでござりましょう」

そうおしえてくれた。

資長は和歌の素養の欠如を恥じて以後歌道に励んだ。

そして、習い覚えた古人の和歌を実践に活用した。

このあたりが資長の非凡なところである。

いずれものちの話であるがここに纏めて紹介しよう。

あるとき、罪を犯した七人の家臣が誅罰を逃れんとしてある屋敷に立て籠もり、討たせまいと抵抗した。

資長は一計をめぐらして一人の遣い手を選び出すと、

「まず使者を出して口上を述べさせるから、そのあと一人で討ち入り成敗してまいれ」

そう命じた。

そして常日頃から蛮声を張り上げる者を選び出すと、

「よくきけ。七人のうち一人だけお赦しになる者がおる。その者を決して討ち取ってはならぬぞ。よいな」

そう屋敷内にも響きわたる大声で叫べと言い含めた。

口上のあと討手が屋敷に踏み込むと七人はそれぞれ赦されるのは自分ではないかとの念いが生じて切っ先が鈍ったため、なんなく討て果たすことができたという。

このとき資長は、古歌に、

世の中に独り止まるものならば
　もし我かはと身をや頼まん

つまり、もし世の中にただ独り残るとすればその幸運を掴む者はひょっとして自分なのではあるまいか、と詠んだのがあったことを思い出したのだ。

資長はその後の出陣にあたっても多く参考にしている。

もっとも有名なのが文明八年（一四七六）六月の長尾

景春の乱のとき、景春方についた矢野兵庫助の武蔵國小机城（横浜市港北区小机町）を攻めたときの話である。

小机城址は小机駅を出て八王子方面に向かうＪＲ横浜線が第三京浜道路を潜る隧道の右上の丘陵にある。

このとき小机城には武蔵國の豪族豊島泰經の援軍がいて大軍であることを知った太田軍の将兵たちは、

（衆寡敵せず）

で気後れしてしまって士気が沈滞していた。

資長は、

（兵士の多少にかかわらず勢いに乗せることが肝要だ）

そう考えて和歌を詠んだ。

小机はまず手習いのはじめにて
　いろはにほへと散り散りになる

小机を寺子屋の小机にかけて、小机なんてすぐ散り散りにしてやると唱和しながら進軍させて士気を鼓舞し、ついに大勝を博したというのだ。まさに、

『断じて行えば鬼神もこれを避く』

であった。

また、ある夜軍勢を返して利根川を渡ろうとしたが真っ暗闇で浅瀬を探り当てられず諸卒が渡り倦ねていた。

資長は、

底ひなき淵やは騒ぐ山川の
　浅き瀬にこそあだ波は立て

（深い淵は満々と水を湛えているから波立ち騒ぐことはないが、山川の浅い瀬にこそ波が立つものだ）

と詠んでいる古歌を思い出して、

「この川に深きところなし。波音の荒いところを渡れ」

そう下知して、無事に全軍を渡河させた。

つぎは主君上杉定正に従って下總國國府（市川市国府台）近くの城攻めのときの話であるが、山越えを避けて海端を行くことにして潮の干満を探らせたが判らず判断に迷ったとき、資長が海端を指示して無事に渡った。

合戦に勝利したあとで定正に、

「あのときなにゆえ遠干潟であることが判ったのじゃ」

そう問われた資長が、

遠くなり近くなるみの濱千鳥
　鳴く音に潮の満ち干をぞ知る

との古歌を披露して、

「闇夜ではありましたが、千鳥の鳴き声が遠くにきこえましたので、潮の干を知ったしだいでござりまする」

資長の説明を聴いた定正は、その蘊蓄に感じ入った。

もうひとつ紹介しよう。

武蔵松山城（埼玉県比企郡吉見町）攻めのときである。

夜襲の先陣を引き受けた資長が、小屋に入ると篝火でなく蚊遣りを焚く火で明かりをとり具足を身に着けた。

家臣が不審に思って篝火をすすめると、資長は、

うらやまし賤がやくてふ蚊遣りは
　棟よりたたぬけぶりなりけり

「この歌が煙の高く上らぬことをおしえてくれている」
そう論したという。
資長は、余暇をみては詠草にも耽った。
いずれも上洛して帝に拝謁したときのことである。
後花園上皇から武蔵野の広野についてのご下問に、
　露おかぬかたもありけり夕立の
　　空より廣き武蔵野の原
さらにその風景について問われると、
　わが庵は松原つづき海近く
　　富士の高嶺を軒端にぞ見る
と詠んだ。
再上洛のおりに後土御門帝から隅田川の都鳥についてご下問があったときには、
　年ふれどわがまだ知らぬ都鳥
　　すみだ河原に宿はあれども
と詠んだ。
幕府の管領細川勝元から、
「短慮功を成せず」
の意味を質されたときには、
　急がずばぬれざらましを旅人の
　　あとより晴るる野路の村雨
そう詠んで返した。
資長は、かねがね、
「歌は風流をもて遊ぶものではなく、常に人の道をこそ教えるものである」
そう深読みすることをすすめている。才人はなにごとにも深く探求するこころが凡人と異るところであろう。
父資清は文武にすぐれた部将で、宗祇、心敬らの連歌師を河越屋敷や越生の隠居所自得軒に招いて歌会を催しているから、資長のそれは明らかに遺伝であろう。

二

家督を継ぎ江戸城を築いて本拠にした資長は、扇谷家の家宰として順風満帆押しも押されもされぬ存在になっていったが、このころから山内管領家が下總古河に逐った前公方足利成氏との抗争が激化していった。
長禄三年（一四五九）管領山内房顕は武蔵と上野の国境五十子（本庄市）に砦を築いて前線基地にした。
そして、武蔵國太田荘（太田市）で成氏軍と戦ったが敗れ、翌日援軍の越後守護上杉房定軍も海老瀬（群馬県邑楽郡板倉町）や羽継原（館林市羽附町）で破れた。
成氏はいつ兵法を学んだのか、手強い武将であった。
そんななかで山内家宰長尾景仲が七十六歳で歿した。
太田資清と並び称された智恵者が世を去ったのだ。
あとを嗣いだ嫡男景信は成氏の動きを警戒してすぐさま主君房顕を奉じ五十子砦に出陣すると、陣屋を強化し周辺に多くの小屋を建てて関東の諸将を迎え入れた。

それを知った成氏は動かず、様子を窺っていた。
睨み合いに痺れを切らしたのは成氏のほうだった。
五十子を攻めて勝敗を決すべく利根川対岸の太田荘に出陣すると迂回して騎西城（加須市騎西）に入った。
資長は成氏の下野侵攻を赦さず果敢に攻撃して追い立てたので、成氏軍は堪らず菖蒲城（久喜市）に退いた。
寛正七年（一四六六）二月十二日、騎西城を出た成氏軍が五十子に向かいまた利根川を挟んで対峙したが、この日山内房顕が陣中で病歿したので家宰長尾景信は一旦軍を退いて鎌倉山内に帰ったので扇谷軍だけが残った。
年号が文正に改まった翌閏二月四日、資長率いる扇谷軍は騎西城攻撃に向かい南多賀谷（加須市）や北根原（鴻巣市）あたりで小競り合ったが決着はつかなかった。
前にも触れたが、管領を辞して剃髪し西方浄土を目指して長門國（山口県）まで行き龍門寺留雲軒に閑居していた山内憲實が、二男房顕が歿して二箇月後の三月六日に周防國（山口県東部）で歿した。五十七歳であった。
ついでながら憲實は文人としても優れていて、将軍家発祥の地足利にあった学問所を再興させている。
もともとこの地にあった小規模のものは小野篁かもしくは足利義兼の創建といわれているので検証してみた。
小野篁の場合は承和六年（八三九）に創建したといわれているが、その経歴を調べてみるとこの年は遣唐大使藤原常嗣の副使に任命されながらその直情径行が禍して病と称して乗船を拒んだので前年隠岐國（島根県隠岐郡隠岐の島町）に配流されており、召還されたのは七年であるから東国の足利荘に行けるはずがない。
だが実在していたことは間違いなく、漢詩人であり歌人でもあったそうで『百人一首』で知られているといわれて手持の札を操ってみたら〈参議篁〉の名があった。
その篁の詠んだ和歌は、
　わたの原八十島かけてこぎ出でぬと
　　ひとにはつげよあまのつりぶね
である。
ことほど左様に、小野篁の創建説についてはどうにも如何わしいが、足利義兼のほうには頷けるふしがある。
この地に住んだ源義家の四男義國が庶子義重に隣りの新田荘（太田市）を与えて新田氏を名告らせたので、手許においた嫡子義康が足利氏を名告った。
源頼朝の挙兵に馳せ参じて平家追討、奥羽藤原氏征討に活躍した義康の三男義兼が、平家方で渡瀬川北岸一帯を領して両崖山上に山城を築き麓に居館（足利市本城）を構えて威勢を張っていた藤原姓足利氏滅亡のあとを受けて、それまで渡瀬川南岸の梁田御厨一帯だった所領を拡大して足利荘全域を領有した。
義兼は鎌倉幕府有力御家人として名望高く、身の丈が九尺もあったという偉丈夫の猛将だったが、人格高邁、学問に親しみ、信心深く、絵画をよくしたという。

文治二年（一一八六）五月に出家して入道となり、法華坊鍐阿上人と号してから十年後の建久七年（一一九六）に屋敷を寺にすると入道名をとって鍐阿寺とした。

義兼はここを小規模な学問所にしたのかも知れない。

義兼は建久十年（一一九九）一月十三日に源頼朝が五十三歳で歿した年の三月八日に四十六歳で歿した。

現在の堂塔は嫡男義氏の建立である。

くだって應永二十六年（一四一九）八月に関東管領に就任した伊豆、上野守護の上杉憲實は、将軍家から足利荘の管理を委ねられたとき、かねてから儒学への憧憬を抱いていたのでこの将軍家の名告りの発祥地を学問の府にしようと考えて実行に移した。

憲實は、さっそく鍐阿寺にあった小さな学問所を足利荘政所の國府野（足利市伊勢町・伊勢南町）の広域地に再興してもっぱら漢学、儒学の学校であることを述べた学規三箇條をつくり、学則六箇條を定め、中国の宋時代（十世紀～十三世紀）の書『尚書正義（書經）』、『文選』、『五經註疎』などの書籍を寄贈、庠主に快元を招いて教学の府、貴重書の秘庫として充実させたので、諸国で相次ぎ争乱が起こり学問の道が衰頽してしまっていたおりからこの足利學校だけが唯一の学校になってしまったので遠く西国や北国からも多くの学徒が集い、世を挙げて乱世に見事復興させた上杉憲實の功績を褒め讃えた。

その後享徳四年（一四五五）ごろに足利荘は一時足利成氏の勢力下になったがほどなく山内房顯が挽回した。

文正元年（一四六六）十一月十五日、足利荘代官に任じられた長尾景人（景久）は、足利學校を上杉憲實の再興からおよそ二十年後の應仁元年（一四六七）に政所の国府野から現在地（昌平町）に移設した。

足利學校は新政府の意向で明治五年（一八七二）太陽暦が採用された年に廃校になって翌年東小學校が新設されたのだが、上杉憲實の再興以来四百年あまりつづき廃校のときの庠主は二十三代であった。

十六世紀にキリスト教宣教師が、

「板東の大学は諸大学中最も有名なり。多数の僧侶その教法を学ばんとて絶えずかしこに至る」

そうヨーロッパに通信したと伝えられているから、足利學校の名は世界にまで広まったのである。

山内上杉の家宰長尾氏は、白井（渋川市白井）、越後（上越市春日）、總社（前橋市総社町）、足利（足利市）に分かれて越後、上野両國の守護代をつとめた。

資長は、父資清から足利學校のことをきいていたので、かねがね文人として訪ねたいと心に掛けていたのだが、成氏方との抗争に明け暮れて機会が得られなかった。

二

幕府は山内房顯が三十二歳で病死したあとを嗣いだ十三歳の顯定を関東管領にした。

山内宗家は公方持氏と謀って犬懸家の氏憲（禅秀）を斃した憲基に子がなく、越後守護家を継いだ叔父房方の二男憲實を養子にしたのにはじまりその嫡男憲忠、二男房顯のあとさらに憲實の甥房定の二男顯定がつづいて、関東管領は山内宗家から越後守護家に移ってしまった。

翌年三月應仁と改元された五月に、将軍家や管領畠山、斯波両家の相続問題を切っ掛けにして細川勝元と山名宗全が対立し、幕府内を二分する大乱が起こった。

その年の九月六日に扇谷持朝が河越城で歿した。五十二歳であった。

持朝の嫡男顯房はすでに分倍河原で破れ夜瀬（三鷹市）で自害していたので、十六歳の孫政真が後を嗣いだ。

幕府は膝許で起こった争乱で足利成氏を攻伐する余裕がなく、両上杉氏もまたともに当主を喪い意気消沈していたので、関東の争乱はしばらく静寂を保った。

その平穏のなかで資長の父資清などは河越の屋敷に宗祇、心敬らを招いて優雅にも連歌会を催している。

二年休戦のあと動いたのは成氏のほうであった。

成氏は手強い五十子はさておき、伊豆の堀越公方足利政知を斃せば五十子も自然潰滅すると考えた。

そして小山、結城、千葉らの諸将に伊豆三島への出兵を命じ、岩槻、河越、江戸を避けて下總から相模を迂回して三島に至り菲山城（伊豆の国市）の政知を攻めたのだが、上杉氏憲の孫憲定の軍に防戦されて敗退した。

将軍義政の御内書で成氏方の小山、岩松らの諸将が寝返ってきたので上杉方は大挙して五十子を進発し、下總國古河城を総攻めして陥としたので成氏は結城氏廣に護られて下總の千葉孝胤を頼って落ちていった。

だが、安房の里見、上總の武田、下總の原らが成氏方についたことで勢いを得た成氏が古河城奪回を計り、これを結城氏廣らが支援したので奪回されてしまった。

元の木阿弥になった上杉軍は五十子の陣を固めた。

その陣中で成氏攻めの主力軍を率いていた中心人物山内上杉の家宰長尾景信が六十一歳で病歿した。

その半年後には扇谷政真が深傷を負って死亡した。

二十二歳の政真には嗣子がなかったので叔父の定正が継ぎ、扇谷家は定正と太田資長の体制になった。

だが山内家のほうはすんなりいかず悶着が起こった。

家宰の長尾景信が歿したあと、主君顯定は嫡男の景春ではなく景信の弟忠景を家宰にしたのである。

当然自分が家宰と思い込んでいた景春は唖然として、

「嫡男相続は武門の定め。家宰はわれが継ぐべきなり」

そう顯定に再三抗議したのだが、容れられなかった。

憤懣遣る方ない景春は、おなじ立場にあってすんなり継承した資長なら理解されると思って泣きついた

取り縋られた資長は同情して調停を引き受けると、

「景春の言い分もっとも」

を主張して顕定に進言したが容れられず、
「乱の因になる」
ことを憂えるとまで迫ったが、定正に、
「差し出がましい」
そう突っ張られて、退けられ、
「内政干渉である」
とまで決め付けられて取り付く術がなくなり景春に、
「時機到来を待つように」
宥めたが景春は納得せず、主君顕定に叛意を抱いた。
そして景春は、虎視眈々と機会を窺った。
文明八年（一四七二）六月、その好機が到来した。
遠江の国内騒動で国人たちがたびたび駿河に侵入するのを守護今川義忠が征伐しての帰路、成敗した横地四郎兵衛の残党に塩見坂で討たれて非業の死を遂げたことから家中を二分しての相続争いが起こった。堀越公方政知が調停に乗り出し執事上杉政憲を派遣するについて資長も同行を命じられたのでしばらく江戸を留守にした。
景春はすぐさま上野の白井を出て武蔵の鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）に拠ると、主君顕定に叛旗を翻した。
そして素早く資長不在の五十子を攻め立てたので、山内、扇谷軍は抗し切れず、顕定・定正は上野國那波荘の河内城（前橋市）と那波城（伊勢崎市）に撤退した。
いそぎ帰国した資長は直ちに軍容を整えて守護國相模で景春方に加担した溝呂木城（厚木市）と小磯城（中郡大磯町）を攻略すると、とって返してまず武蔵國の豪族豊島泰經の支城練馬城（練馬区豊島園内）、江古田城（中野区）、平塚城（北区）を陥としておいてから当主泰經磐踞の居城石神井城（練馬区）をじっくり攻め立てた。
豊島氏は板東平氏の流れ秩父氏の支族で、初め平塚城を本城にしていたのだが石神井川沿いを滝野川、板橋、練馬、石神井と勢力を伸ばしてきて江戸、岩槻、河越を結ぶ資長の勢力圏と接触するまでになってきていた。
その豊島泰經が景春に与して守護家に叛いたのだ。
（豊島を斃せば景春は大打撃を受けることになろう）
そう考えた資長は石神井城を完膚無きまで攻撃した。
石神井城は北側の石神井池（もとは西の三宝寺池とひとつであった）と南側を流れる石神井川とに挟まれた東西に細長い台地上の要害につくられた大きな平山城で、現在の氷川神社、巌島神社、眞言宗三寶寺、そして豊島氏代々の菩提寺で泰經とその一族の墓という三基の五輪塔がある曹洞宗道場寺はいずれも城跡にある。
ここに追い詰められて懸命に戦った泰經だったが資長の太田軍には抗し難く、ついに刀折れ矢尽きて敗北を認めた泰經は黄金づくりの鞍をつけた愛馬に乗って石神井池に入水したという。女照日姫も亦三つの家宝を抱いて泰經同様の乗馬姿で父のあとを追って池の西側に入水したのでここを別に三宝寺池というようになったという。
いまでもよく晴れた日には底に沈んだ黄金の鞍が陽に

映えて見えるという伝説があり、池の北側の高台には二人を弔ったという殿塚、姫塚が並んで築かれている。
資長は息衝く暇もなく取って返して上野へ向かい山内顕定と扇谷定正を五十子に迎え入れて景春と対陣した。
そして梅澤（本庄市児玉町金屋）にいる景春と本拠の鉢形城とのあいだに兵を入れて分断すると見せかけて誘き出し、さそいに乗って出てきた景春と用土原（深谷市岡部）で対戦して打ち破り鉢形城へ敗走させた。
資長に菌が立たぬ景春は古河の成氏に同盟を求めた。
成氏は物怪の幸いに完爾と笑い、勿体振って受け入れると、みずから上野に出陣して救援の体を装った。
景春は成氏軍に近い塩売原（前橋市）に進出して資長と対峙したが、睨み合いのままで終わってしまった。
この年十年つづいた〈應仁の乱〉が終結したので幕府の眼を気にした成氏は両上杉の顕定、定正と講和した。
資長は後楯がなくなった景春を攻めて本拠にしていた鉢形城から追い出し、そのあとに山内顕定が入った。
このあと資長は下総の千葉孝胤攻めに余力を注いだ。
いっぽう景春は、秩父に移ったあと資長の留守を狙って越生の父資清を急襲したが敗退してしまった。
下總から戻った資長は景春方の長井城（熊谷市妻沼）や日野城（秩父市荒川日野）を攻略してほぼ平定した。
資長の活躍は、
「向こうところ敵なし」
でこの景春との三十数度の合戦に敗れたことがなく、
「不敗の名将太田資長」
の評判が高まり、その名声は遠く京にまで鳴り響いた。
成氏と景春が下總古河に引き籠もり関東の抗争が一往終息すると、成氏は幕府との講和を計って景春を関東管領代理として京へ派遣し管領細川政元に斡旋を託した。
文明十四年（一四八二）十一月二十七日、前将軍足利義政は前公方足利成氏に伊豆國を堀越公方足利政知に譲ることを条件にして講和することを承諾したが、成氏の希む長尾景春を管領に据えることは認められなかった。
この講和を〈都鄙の合体〉といい関東は三十年ぶりに平和をとりもどして平穏無事になったので、資長は江戸城に万里集九を招いて歌会を催したりしてたのしんだ。

四

だが、山内顕定の心境は穏やかではなかった。太田資長の活躍で前公方成氏の反乱を鎮圧して下總古河へ追放したとはいえ主君に叛いて成氏に荷担した長尾景春は山内家の家宰の家格で扇谷家の資長と同格であった。
つまり関東管領家の顕定は、同族とはいえ禪秀の乱当時は山内家の家人にすぎなかった扇谷家が資長の活躍で山内家宰の長尾を抑えて宗家と肩を並べるところまで勢力を伸ばしてきたのが気懸かりで、もし立場を逆転され

ては宗家の沽券に係る由々しき問題であった。

顯定は扇谷定正に、

「資長は江戸城を固めてわが宗家を斃そうとしている」

そう吹き込んだ。

(資長が宗家を斃してくれればわが家は万々歳である)

定正は寧ろ資長に期待をかけて北叟笑んでいた。

だが資長の人望がますます高まってきて家中の期待が過熱してくると、主君定正に疑心暗鬼が生じてきた。

「資長が江戸、岩槻、河越の城を堅固に改修しているのは成氏と景春を利根川の向こうへ追い遣り古河に封じ込めておくためではなく、実は山内、扇谷両家を斃して関東をわがものにしようと企んでいるのではなかろうか」

そう耳打ちする山内顯定の忠告を信ずるようになった。

二人は謀議して江戸城の資長を相模國糟谷(伊勢原市上粕屋)の扇谷館に呼び出して暗殺しようと謀った。

糟谷の館跡は現在産業能率大学になっている。

受付の承諾を得て入った構内は広く、ようやく裏へまわったところの堀割跡につくられたテニスコートを見下ろす四阿を見つけて休息し、伊勢原駅で買った弁当を食べていたら見回りの警備員に咎められたことがあった。

文明十八年(一四八六)七月二十六日、資長は糟谷の館で討たれて非業の死を遂げた。五十五歳であった。

上野館林藩上岡谷繁實が安政元年(一八五四)から十五年かけて明治二年(一八六九)に脱稿したという『名将言行録』のなかの太田資長を述べた最後のところに、〈上杉定正、資長を殺す〉と小見出しがあって、

『初め定正、封地狭小なるを以て、常に顯定に属す。資長、政を執るに及びて、内、國政を修め、外、軍旅を總べ、民を撫し物を愛し、将士畏服し兵威日に強し。顯定、資長を忌み之を除かんと欲し、人をして間を爲さしむ。定正之を信じ、資長を糟谷に召して之を殺す。資長、死に臨み和歌を詠ず。其歌に曰く、「昨日まで、まくめうしわを、入れ置きし、へむなし袋、今破りけむ。」聞者之を哀む。是より扇谷の兵鋒大に衰へり』

和歌のほうは不意討ちに遭っているのにそんな余裕があったか疑わしいのでさて措いて、ここには槍で突かれた資長がいまわの際に「当方滅亡」と叫んで息絶えたという記述がないので、その話の出処がどこかを探したら『太田資武状』のなかに書かれていることがわかった。

『太田氏系譜』によると、資武は資長の甥資家の曽孫で、兄政景と越前國福井藩主結城秀康に仕えたという。

『太田資武状』が書かれたのは寛永十六年(一六三九)というから資長の死後百五十年あまり経っており、代々語り継がれてきたのをまとめて世に出したのであろう。

そこには、

『資長は風呂の小口へ出たところを定正の重臣曽我兵庫に斬り殺された。そのとき「當方滅亡」と叫んで死んだ』

そう書かれているという。

扇谷定正が三年後の延徳元年(一四八九)に家臣曽我祐重に宛てた書状のなかでも、資長誅罰の経緯を、

『……江戸、河越の両城はいかにも堅固だ。山内上杉の不儀が續けば果たしてべからずの時の由申し付けたところ承引がなく、その上謀乱を思い立ったので誅罰して鉢形城の顯定に注進しておいた』

そう淡々と記している。

また、突拍子もない噴飯物の話も遺っている。

山内顯定が扇谷定正に密書を送って、

『両家が相争うのは太田、長尾の二人がいるからだ。今後和睦の證明として両人の首を斬り互いに交換しようではないか』

そう誘った。定正はこれを真面に受けて資長を殺してしまったが、顯定のほうは景春を殺さなかったという。

資長暗殺にいたる過程については諸説あるが、同族でありながらかなり水をあけられていて従属せざるを得なかった山内家に追いつき追い越すことを焦った扇谷定正が、期待をかけて頼りにしてきた資長がその力量を発揮して名将と謳われ国人たちの人望を一身にあつめて評判が高まってくると主従逆転の恐れを抱くようになり、いつか寝首を掻かれるのではないかと被害妄想に陥っていったことが資長にとって不幸のはじまりであった。

そして、小心な定正が猜疑心を抱いたことでついに悲劇を起こし、土台を支えつづけてくれた掛け替えのない家宰をみずからの手で葬ってしまったのだ。

資長のずば抜けた才智が仇となり、致命傷になった。

下世話にいう、

「出る杭は打たれる」

は、有能者への羨望は嫉て憎悪に替わり、果ては妨害を受けて失脚する破目に陥ることを訓えてくれている。

(つづく)

古い物・遠い夢

忠内正之

かくてはならじと、改心して「まんじ」一二五号から一三一号に亘ってやっと曲りなりに、茶道の歴史について拙文を発表することができた。

三戸岡さんのご指示やご鞭撻に充分お応えできたかどうか全く自信は無いが今はホッと一息入れている。そしてお陰様で自分自身が良い勉強をさせてもらったと喜んでいる次第である。

さてこれからは茶道の個別のテーマについて、更に特課していきたいと考えているが、しばらくは充電期間として休息して、この間はまたぞろ以前に戻って茶道具のはなしを続けたいと思う。

茶道史を勉強したことで、茶道具を見る目が多少なりとも変って来たなと、認めてもらえれば望外の喜びである。

○「茶掛け」について

「茶掛け」大綱和尚の墨蹟　二幅

二年ほど前のことである。かねて同人誌「まんじ」に加入させて下さり、ご指導をお願いしている三戸岡さんからご示唆をいただいた。

「茶道具の個別的な話ばかりでなく、茶道のもっと一本筋の通った話、例えば茶道の歴史等について書いてみたらどうか」とのご意見であった。

また別の場面では、「利休・織部・遠州・石洲と徳川幕府の茶道師範が続いたが、石洲亡き跡の茶道の指導はいったい誰が勤めたのか」との質問もあったが不勉強の身とて、全く答えられず窮した。

骨董品やら茶道具弄りばかり執着して、伝統ある茶道の歴史や、故事来歴等にトント無関心であったことを深く反省させられたのであった。

「茶掛け」とは茶席に掛ける書画の掛物であり、茶道具の中で最も主要なものの一つとされる。

茶掛けには書跡と絵画の二種類がある。では次に、茶掛けを内容的に種別してみよう。

（一）　唐絵

唐絵とは鎌倉中期以降室町時代にかけて中国から渡ってきた絵画である。これには二通りの流れがある。

（イ）宋・元院体画（官業制）―徽宗・趙昌他

（ロ）中国水墨画―牧谿・玉澗・梁楷他

（二）　墨蹟

中国・日本の禅宗（臨済宗）の高僧の書を墨蹟という。書かれた内容は多種である。

印可状・字号・法語・偈頌（略して偈ともいう）・遺偈（禅僧の遺言にあたる）・進道語（弟子への指道書）・詩・額字・書簡等

（三）　懐紙

料紙（用紙）に定まった書式で詩・和歌を書いたもの。詠草懐紙ともいう。

（四）　古筆切

平安期の和歌集を中心とした古書類の断簡をいう。

高野切（古今集）・石山切（貫之集下・伊勢集）

烏丸切（後撰集）・寸松庵色紙（古今集十二集）・小倉色紙（百人一首）等

（五）　写経

奈良時代からの写経の断簡

絵因果経・大聖式・二月堂焼経等

（六）　歌仙絵

三十六歌仙の絵に和歌・歌人名など書す。

佐竹本・上畳本等

（七）　書状

「書は人なり」という。主に茶人の消息

（八）　日本水墨画

鎌倉・室町の五山の禅僧を中心とした絵

可翁・如拙・周文・雪舟・等伯・永徳・探幽・澤庵等

（九）　大和絵・復興大和絵

土佐派・琳派・田中納言・令泉為恭等

（十）　大徳寺禅僧一行物
禅語を縦・横一行に書したもの
一休宗純・春屋宗園・澤庵宗彭・江月宗玩・清巌宗渭等

（十一）　近世以降の絵賛物
寛永文化人（遠洲・江月・松花堂）・江戸時代末期の小堀家と狩野家の合作等

以上の様に茶掛けには多くの種類があるものの、美しく書かれていれば何でも茶掛けとして尊重されるのかというと、必ずしもそうではない。
茶掛けとしてふさわしい条件がおのずと定められているのである。その条件とは。

◎茶掛けの条件

第一は、いわゆる侘び・寂びの境地をよく表すものであること。侘び寂びとは閑寂の風趣をいう。
第二は、季節感が顕著に感じられるということ。茶道においては、侘び寂びを尊重すると共に季節感というものを極度に重んじる。このことは掛物に限らず、茶席に持ち込む道具類においてもまた重要視される。
第三は、禅の心に通じるものをもつこと。茶禅一味という。茶の奥義と禅の奥義は一致しているので茶道に禅が入り込むのである。
第四は、昔の大茶人が愛蔵していた証しがあり仔細が良いもの、伝来がはっきりしていることなどが喜ばれる。
以上四つの条件が考えられるが、すべての条件を満たすことは不可能にしても、第一・第二の二つはぜひ備えて欲しいところである。では次に本題である私が所有する大綱和尚の一行書を紹介したい。

◎　大綱和尚掛物　「歳寒然後……」

自己撮影の下手な出来であるが、掛物の写真をお示しするので、ご覧下さい。



大綱宗彦　一行書

（本文）
「歳寒然後知松柏之後凋」
前大徳八十二翁大綱書

（読み）
歳寒くして、然る後に松柏の凋むに後るるを知る

（意味）
寒い時候になって初めて、松や柏が他の草木の枯れしぼむ中に依然として緑の色のままで残っていることがわかる。
これは、事あって初めて平素積み重ねる修養の本領が現われることを述べたもので「盤根錯節に遇はずんば、何を以て利器を別かたんや」というのと同様である。忠臣烈士を讃えた美しい言葉といえよう。

（註）
歳寒くしてとは、寒い年の意味ではなく、一年の中の寒い時をいう。凋むに後るるは、他の物の凋むに後れるという直接の文字ではあるが、実は凋まずにおることを現わした言葉である。老子の「大器晩成」の晩成が、出来上ることがないことを意味するのと同様である。柏はこのてがしわ・ひのき・さわら等の古名

この掛物に書かれた禅語の出典は、論語である。（子罕第九の〔二八〕）
禅語には佛教の思想、東洋の精神、日本の心を見出す名句名言が無数に使われている。
大綱和尚は論語の中の言葉を選んで書いたものの様である。

大手町の銀行に勤めていた頃だから、三十年以上前のことになる。東京駅前の旧丸ビルの二階に日兄弟の経営する寂れた骨董店があった。優品は殆んど無かったが、数多いガラクタの中に時として掘出しものがあった。また店主たちの四方山話が面白かったのでよく立寄った。味気ない勤めの中でストレスを発散する秘かな愉しみでもあった。
この掛物はその店で見出した。一見まくり（巻紙状）状態とも思われる程バラバラで破損していた。延ばして見ると紙魚が喰っていて、所どころ穴さえあいている。
偉い坊さんの書だというし、たまたま聞きかじりの論語の言葉であったので買った。反古紙同様にしては高いと思ったが勢いでつい買ってしまった。
後に伝手を求めて、東京博物館出入りの修理師に依頼して補修をしてもらい、表装も桐箱も更新した。
流行東博で国宝や重文の書跡を修復している職人の技だけあって見違えるほどの出来上りで再生した。
その上で、今は故人となられたが知名な書評家である堀江知彦先生に箱書を戴いた。

一連の手続きで費用が数万円は掛かり、当時の懐工合では辛かった記憶がある。

その時以来、しばしば床の間に飾って楽しんでいたが、何時の間にかこの書の言葉の重みにひかれて戒められることが多くなった。

逆風と思われる厳しい立場に立って、心が折れそうになった時、疲れ切った時、この掛軸を眺めては元気をもらったことが幾度もあった。限りある余生であるが、これからも助けられる事が多いと思う。

またこの掛物は手頃で、妻の茶事にも時々出番があって喜ばれている。

◎ 大綱和尚について

大綱宗彦について、「淡交社」発行の「茶道大辞典」によるコメントを見てみよう。

大綱宗彦　安永元年―安政七年（一七七一―一八六〇）臨済宗大徳寺派の僧。京都の人。法を融合宗通（大徳寺第四〇九世）に嗣ぎ、文政三年（一八二〇）大徳寺の第四三五世住持となり、塔頭「黄梅院」に住した。裏千家の吸江斎宗左や裏千家の玄々斎宗室と親しく、茶道の嗜みも豊かであった。また武者小路千家の以心斎宗守（隠居して宗安）の参禅の師と推定され、宗安の描いた円相に大綱の賛した一軸が武者小路千家に伝存している。大綱の遺墨は茶人間で珍重されている。その墓は黄梅院の墓地にある。

江戸時代の後半ともなると、茶の湯の世界も大きな転換期を迎える。すでに元禄の頃には、茶道人口の増大や地域的な拡がりを見せていたのだが、その後も逐次増大の一途を辿り、文化・文政年間には、江戸時代における一つのピークを迎えていた。（尤も明治維新後は著しく衰退するのだが）

大綱はその化政期に活躍した禅僧の一人であり、茶の湯に親しみ、大心義統（一六五七―一七三〇）・無学宗衍（一七二一―一七九一）等に続いて大徳寺派の発展に貢献した。

大綱宗彦の住した大徳寺黄梅院は、天正十六年に小早川隆景によって開創された寺院で、院内には紹鷗好みと伝える茶室「昨夢軒」が設けられているから、茶の湯とも縁の深い塔頭だったといえる。

八十九歳という長命を保ち、生涯に二万余首の詠歌と三千数百に上る詩文を作った大綱宗彦であるがその出自についてはほとんど不明である。安永元年（一七七一）に生まれ、六歳で紫野黄梅院へ上り、文政三年（一八二〇）四十九歳の時に大徳寺四三五世、黄梅院十四世となり、安政七年（一八六〇）八十九歳で示寂した。とのみ大徳寺の記録にあるという。

このように和尚の出自がほとんど不明であるのに比して、成長後の事歴の詳細については、その日記が語っている。大綱和尚の日記は「友松集」七十冊と「空華室日記」七十七冊が知られるが、現在は「空華室日記」のみが黄梅院に残されている。「空華室日記」は文化十三年（一八一六）四十五歳の三月一日から、示寂する二日前の二月十四日に至る四十四年間の日記である。「友松集」は四十五歳以前の日記と考えられるから、その精神力と気力のすさまじさは感動に価するといえる。またその日記には多くの和歌・詩文が書き付けられていたという。

日記には、もちろん日常の行動が記されるわけであるが、注目されるのはやはり茶の湯の交流である。三千家をはじめとして、木下道生庵などの数寄者、岡崎本光寺などの寺院、さらに有栖川宮織仁親王ら宮家の会、楽旦入（楽家十代）、永楽保全（永楽家十一代）との交流も見られ、かなり多くの人々との細かい交渉があった様である。

元保十年の利休二百五十回忌法要には導師という重要な役目を果している。法要ののち、玄々斎によってひらかれた、内大臣近衛忠熙らと共に追悼茶会に招かれている。またしばらく後になるが、弘化二年十月二十六日、毛利公とともに有栖川宮邸の会に招かれている。毛利公は寺縁でもあるが、（小早川家断絶の後、黄梅院は毛利本家の保護下となった）この有栖川宮家との交流や、文化十四年の仁孝天皇即位に際して参内しているのは、大綱が京都の高貴の出であったという説を裏づけていると思われる。

このように三千家をはじめとして、武家・堂上に強いきずなをもっていた大綱ではあったが、永楽保全や楽旦入等との交流も見逃せない。保全は大綱の仲介で了全の養子となったと伝えられる。また楽旦入に、楽印の「楽」字を与えたといわれている。

更にいうと、大徳寺黄梅院十四世の大綱宗彦は、単なる宗教家のみに留まらず、江戸時代後・末期における京都の代表的文化人として幅広い活躍を果していたのである。

大綱宗彦和尚の遺墨はかなり数多く残っているという。茶を嗜む人々がきそって彼の墨蹟類を希望し珍重したからである。

大綱自詠の和歌懐紙はしばしば見かけるが、このような行書は殆んど見かけないというから貴重な存在であると思う。

改めてこの掛軸一行書を見てみる。

八十二翁とあるから没年七年前の嘉永六年（一八五三）の書である。亡くなる二日前までキチンと日記を付けていたというから、本書を揮毫した頃は気力充実していた

ことであろう。
細字であって折れそうな趣もあるが、決して折れない強靱な精神力を訴えている。眺める度に元気が授かるような気がする。
この後も大切にしていきたい。

◎大綱和尚の和歌懐紙　「歳暮急於水」

筆者は更にもう一本の大綱和尚の掛物を持っている。それは和尚自詠の和歌が書かれた懐紙である。題と本文は次の通りである。（ふりがなをする）

大綱宗彦の和歌懐紙



本文　　大綱
歳暮急於水
「歳なミはよどむ瀬もなく瀧川恵
ミ川より早く奈可連〳〵て」
我流に解釈すると
題は
（年の暮は水より早く来てしまう）　於の字はよりと読む。急は早いの意。
歌意は
（歳を寄ることは、水の流れの様に少しも休むことなく早くいってしまうものだなあ、歳の暮に来てつくづくその様に思う）との意であろう。歳なミとは歳とることを波にたとえたものである。

この懐紙に書かれた歌は、歳暮の感慨を詠んだもので解り易い。昔も今も生活感覚は変らないものだと痛感する。

大綱のサインには年齢が書かれていないが、八十歳前後の頃の作と推定される。嘉永から安政にかけての京都はぼつぼつ騒がしくなって来ており、また寺院の年末は何かと多事多忙であったと想像される。

青・壮年時には権勢欲、名誉欲など一杯の人生だったに違いない。しかし今は物情騒然とした京洛の巷を垣間見て、世俗を離れて静かに身を流れに任す枯淡の境地を

読んだものであろう。
この歌は所望されて書いたものと思われるが、歳末の茶事にもってこいの内容である。
茶の湯の小間席とか、本席の寄り付き（茶席の待合）に最適の飾りである。
筆者のところでは、年末になると、クリスマスのジングルベルの騒音を他所にこの掛軸を飾って、一碗の抹茶を喫しつつ越し方一年を省みて、また来る一年を想像して一刻を過すことを習いとしている。

この和歌懐紙一幅は、数年ののち、先に一行書を買ったのと同じ、旧丸ビルのH店で見付けた。既に大綱師について勉強していたので直ぐ飛びついた。
しかし今度は生な表装、二重箱と箱書きこそ無かったものの立派な出立ちで現われており業者も安くはしてくれなかった。しかるべき茶人に大切にされていたものであろう。
一期一会、その頃では「今でしょう」という流行語はなかったものの、思い切りよく買った。
一行書と和歌懐紙、二点セットが、筆者の手許に来てから、はや三十年以上経つことになる。歳なミの流れの早さに今更のごとく驚くばかりである。旧丸ビルもとっくに生れ替った。

終

参考文献
茶掛けの書　堀江知彦著　東京書籍
論語の講義　諸橋轍次著　大修館書店
茶道大辞典　淡交社
角川茶道大辞典　角川書店
茶人交友抄　筒井紘一著　淡交社
茶道人名辞典　桑田忠親編　東京堂出版
近世茶道史　谷端昭夫著　淡交社
茶の湯の世界講義録　安藤宗良編
その他

つれづれの源氏物語

第二回　少年時代
―桐壺の巻―

小田紘一郎

一、桐壺の巻の内容と意義

源氏物語には、色々な分類があることは、既に第一回目で見てきたが、最後に記した（四―（五））事に従い、少年時代、青年時代、中年時代、晩年時代、亡き後という考えで見ていきたいのである。第二回目は、当然のことながら第一回目の問題意識と概観をふまえての事となる。そこでこの源氏物語が全体として一目でわかる表をつくってみた。（別紙）┅┅の曲線グラフは、主人公光源氏の運勢を極めて単純に、―の直線は、若菜上を界にして、人間の外面的な事（㊙）から内面的な事（㊥）に物語が大きく転換していることを示している。

少年時代を取り扱っている第一巻桐壺の巻は、ＮＨＫ講座のテキスト（鈴木一雄編）によれば

①光源氏の誕生、
②桐壺の更衣の死、
③祖母の悲嘆
④長恨歌の嘆き、
⑤臣籍降下、
⑥光源氏の結婚となっている。

これまで何回も源氏物語を読んできたが、この巻は面白くない、退屈な巻で唯一帝と更衣の純愛の物語としてのみ私は読んできた。田辺聖子さんの新源氏物語（新潮社）もこの桐壺の巻をとばして帚木の巻から書き始めている。

今回問題意識を持ちつつ読み返してみると、どうして〳〵なかなか面白く興味がわいてきて、極めて重要な巻だと思うようになってきた。

今後展開する様々な要素が、枠組としてびっしりともりこまれているからである。桐壺糸の序としてのみならず源氏物語全体の総序としてもこの桐壺の巻は、重要である。

これを基本としつつ
①物語全体を貫ぬく人間と人生について　生と死、男と女、肉体と精神（肉体を肉欲、物資、権力、富、と精神を心、愛、人間の善と読みかえると良かろう）の様々の面が物語られている。
②光源氏の少年時代が年令毎記されている。
③様々の人間関係、人間造型が多く見られる。
④我々を取りまく諸条件（歴史的、政治的、経済的、社会的）が描かれていること、特に政治的条件として摂関政治の実態が描写されていること。
⑤これと関連するが、権力と愛（人間）の問題が取り扱われていること。
⑥後にこの物語の中心テーマの一つとなる光源氏と藤壺の恋の芽ばえが書かれていること等々が挙げられよう。

以下これらの事項についてもっとつっこんで考えてみたい。

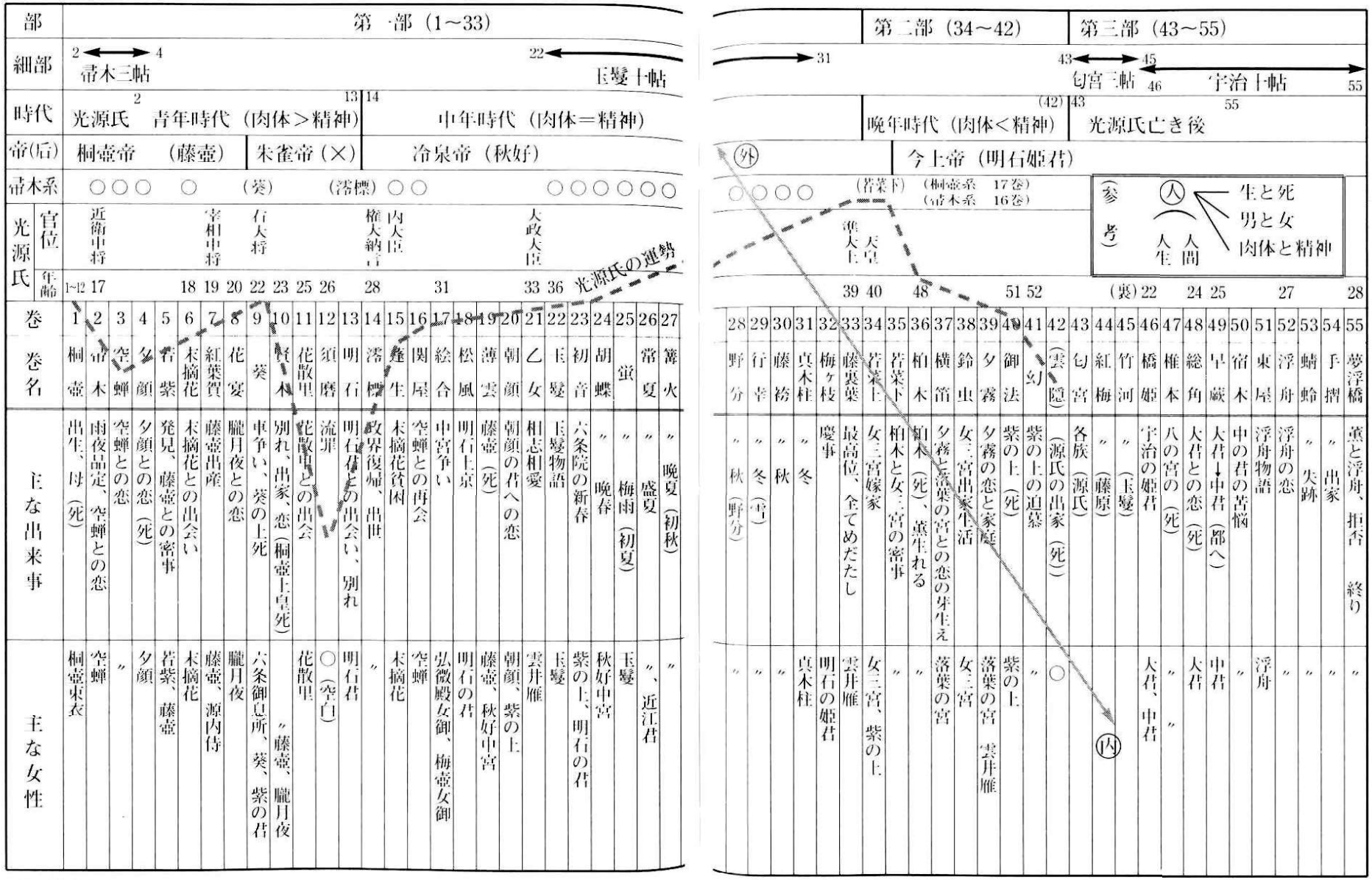
二、取りまく諸条件

（一）歴史的条件

源氏物語は史実が根底にある。冒頭の文「いずれの御時にか……」、いつの天皇の時代の事であろうかとぼかして書いている。どうしてなのか。四辻善成の「河海抄」は、この問題に正面からいどんで準拠説（今で言うとモデル）を打ちたて、物語の桐壺帝は醍醐天皇だとした。史実は60代・醍醐、61代・朱雀、62代・村上、63代・冷泉と天皇が続くのであるが、物語はそれに対応して桐壺、朱雀、冷泉、今上の天皇の御世七五年間を描いている。醍醐天皇の就任は八九八年であり源氏物語が完成したのが一〇〇六年頃（一条天皇）と言われているので、丁度一〇〇年位前の時代に焦点を合わせ源氏物語は書かれたというのが通説となっている。村上天皇の在位の九六〇年（天徳四年）に天徳内裏の歌合せが行われたことになっているが、物語では絵合の巻において歌合せを絵合せに置きかえ、史実とほぼ同じく描かれている。

その他賢木の巻の伊勢下向や多くの巻に出てくる様々の行事、男踏歌等は史実を参考にしたと言われている。この醍醐・村上の時代は、戦争もなく災害等もなく聖代で、政治的にも安定しており延喜・天暦の御代と言われている。文化的にも栄え、醍醐天皇の時に古今集が、村上天皇の時に後選集が、64代円融天皇の時には古今六帖が、65代花山天皇の時には拾遺集がつくられた。安定した政治が文化を育てるのか、文化が政治をリードするのか。

一目でわかる源氏物語


第一部（1〜33）
第二部（34〜42）
第三部（43〜55）
帚木三帖
玉鬘十帖
包宮三帖
宇治十帖
光源氏　青年時代（肉体＞精神）
中年時代（肉体＝精神）
晩年時代（肉体＜精神）
光源氏亡き後
桐壺帝　（藤壺）
朱雀帝（×）
冷泉帝（秋好）
今上帝（明石姫君）
帚木系
光源氏の運勢
（若菜下）
（桐壺系　17巻）
（帚木系　16巻）
（参考）
人生
人間
生と死
男と女
肉体と精神
巻名
主な出来事
主な女性
1 桐壺
2 帚木
3 空蟬
4 夕顔
5 若紫
6 末摘花
7 紅葉賀
8 花宴
9 葵
10 賢木
11 花散里
12 須磨
13 明石
14 澪標
15 蓬生
16 関屋
17 絵合
18 松風
19 薄雲
20 朝顔
21 乙女
22 玉鬘
23 初音
24 胡蝶
25 蛍
26 常夏
27 篝火
28 野分
29 行幸
30 藤袴
31 真木柱
32 梅ヶ枝
33 藤裏葉
34 若菜上
35 若菜下
36 柏木
37 横笛
38 鈴虫
39 夕霧
40 御法
41 幻
42 （雲隠）
43 匂宮
44 紅梅
45 竹河
46 橋姫
47 椎本
48 総角
49 早蕨
50 宿木
51 東屋
52 浮舟
53 蜻蛉
54 手習
55 夢浮橋
薫と浮舟、拒否　終り
〃 出家
〃 失跡
浮舟の恋
浮舟物語
中の君の苦悩
大君→中君（都へ）
大君との恋（死）
八の宮の（死）
宇治の姫君
大君、中君
〃 〃
〃 晩夏（初秋）
〃 盛夏
〃 梅雨（初夏）
〃 晩春
秋好中宮
玉鬘
〃、近江君
〃 冬
〃 冬（雪）
〃 秋
〃 秋（野分）
〃
〃
〃

又、この時代は、源氏物語の著者紫式部を始め枕草子を書いた清少納言他多くの女流文学者が輩先し、女流文学の最盛期であった。何故、女流文学が発展したか、その裏には農耕社会（女が支配）から官僚（貴族）社会（男が支配）に社会が変っていったこと、女のその欲求不満等が根底にありそれが文学に向ったと考えられるが、そうだろうか。

なお、権力者藤原道長は一〇一六年に摂政、翌年太政大臣、一〇二七年に没となっている。これらから源氏物語、紫式部との関係をどのように考えたらよいのか。

（二）政治的条件

源氏物語は様々の事が書かれているが、例えば恋愛やその他の人間関係が主体テーマで、政治的状況はその与件として考えるか、それらを同時平行的なテーマとして考えるかによって物語のとらえ方が違ってこようが、私は後者の見方をとる。政治の実態を描き出すことも主要テーマの一つなのである。この場合、政治実態とは、当時の政治形態であった摂関政治である。それとそれを構成する人間（人物造型）と人間関係である。摂関政治において権力者は天皇であり、現在の象徴としての地位と役割とは大きく異なる。これを支えるのが貴族であり、具体的には藤原氏がそれを担ってきた。いつからこの摂関政治がなされてきたかは、歴史上の興味ある事実であり、別途検討したいと考えているが、それを前提として物語を読んでいこう。

この摂関政治体制は、強い人間関係で結ばれていた。桐壺帝の第一后は、右大臣の第一姫（弘徽殿女御）であり、桐壺帝の実妹が左大臣の妻（後に大宮と言われる）である。当時、家に娘が生れることは、この上ない慶事であった。その娘が天皇家に嫁ぎ（入内）、子供をつくることは、父親にしてみれば天皇の外戚に当り、権力にたずさわれるからである。又主要貴族に嫁ぐことも一門の繁栄にとって重要な事であった。物語によれば、右大臣は六人の娘を持ち、左大臣は一人であった。

藤原氏の系統である左大臣と右大臣はそれぞれ勢力を持ち対抗・対立しつつ相合す場面もあった。右大臣は一番目の姫は前記のように天皇の后に、第四番目は左大臣の長男（後の頭中将）に、六番目は東宮（後の朱雀帝）に嫁つがすことにしていた。この六番目は後に光源氏との恋に落ち入り（花宴の巻）様々の問題を起し、物語を極めて面白いものにしていく個性的、魅力的、積極的な姫であった。

左大臣の一人姫（葵の上と呼ばれる）は、当初は、東宮（後の朱雀帝）よりも御気色あるも、左大臣側は「思しわづらふことあり」て光源氏を結婚相手に選んだのであった。左大臣側のこの選択は、右大臣側の東宮に入内させたら右大臣側の勢力に屈することとなることや光源氏の将来に政治的野望をかけたのかもしれない。

この摂関政治状況下において、様々の対立・抗争が見られた。

①天皇と貴族……政治の実質的権力をどちらが取るか

②貴族間……具体的には左大臣と右大臣

藤原氏が二派に分れての権力闘争

かつての自民党における派閥政治のようだ

③兄弟間……帝の第一皇子が東宮（後の朱雀帝）であり第二皇子が光源氏（臣下に降る）

④后間……皇位継承をめぐる争い

後宮での女御達の争い。

女御対更衣（桐壺）、愛をめぐる争い。

後宮は、女性達にとって厳しい競争社会、しっとやねたみ、更にいじめがはびこぼっていた。

当時の天皇の夫人には身分のランクがあって、皇后・中宮―女御―更衣―召人というようになっていた。

この巻の女主人公桐壺更衣は、父親の身分が三位であり二位の父親の娘である弘徽殿女御に身分差や経済力で負けていた。弘徽殿女御等にいじめぬかれ病気となり死ぬのである。このいじめの問題は、本巻の大きなテーマの一つとなっている。

源氏物語には、多くの死が語られており、関係者が全心全霊でその死を悲しんでいるが、（鈴木・雄氏）桐壺の更衣の死は、帝、母、女房達によってである。死を悲しむ帝の心をつづる「野分だちてにわかに肌寒き夕暮の程……」は名文であり、そらんずるのに適している。死の表現については第一回で見てきたが（八六ページの下段、）更衣の場合は「絶え果てたまひぬる」となっている。

帝が更衣を愛したが故に死に追いやったということは、人生のパラドックスを見る思いである。

桐壺帝は、若少で天皇となり長らく政治にたずさわる訳（醍醐天皇は、在位三三年）であるが、当初の頃はいわゆる力が足りず、権力基盤が弱く左右大臣がかなりの勢力を持って均衡していたようである。更衣との純愛は、自らの強い意志で行ったが（もっとも貴族間で宮廷の秩序を越えたこの行為に対し、上達部上人は「あいなく目を側め」たと記されている）皇子には、第一王子（後の朱雀帝）を世の掟に従って選拓せざるを得なかった。これらの記述を読むとかなり不安定な状態だったことが推察される。その後、紅葉の賀、花宴の両巻に到る頃には、行幸等に見られる通り、安定した政権を保ったと見られる。葵の巻で譲位（御世代り）が行なわれ、以降上皇としての位置にあり、賢木の巻で亡くなった。この死は、左右大臣の勢力争に大きな影響を与えた。実権は、左大臣より右大臣側に移り、光源氏の不遇の時代に入った。

両大臣の勢力争いであるが、当初は右大臣側、源氏の誕生・結婚により左大臣側そして桐壺帝の譲位（澪標の巻）により右大臣、更には朱雀帝の譲位（澪標の巻）により左大臣という風に優位な立場がかわっていくのであって、大変に政治プロセスとして面白いと感じており、又光源氏の生涯にどのような影響を与えたか、光源氏の青年時代をとり扱う時にじっくり迫っていきたいと考えている。

（三）経済的条件

第一回でかなり述べているが、これらの天皇・貴族は書かれていないが、富を多く所有していたと考えられる。光源氏の年収は、二億円だというのをどこかで読んだ記憶がある。その富の基は、農民による稲作収入であり、それが税として徴収されていることが源泉になっていたことを忘れてはならない。その田畑を荘園としてこれらの上級階層は持っていた。一方、更衣なども入内するとお付き人の衣装や食べ物等に相当の物入りで、父が亡くなって収入のとだえている母が相当苦しんだことが記されている。（桐壺の更衣の場合）経済問題は、貧しさ（女性と貧困）の問題であると同時に根っ子には格差問題がある。大臣クラスの家や姫は豊かだったと想像される。

この経済問題は、ここではこのくらいにしておいて、次回の帚木以降いわゆる帚木三帖、帚木・空蝉・夕顔の巻で具体的に見てみたい。

（四）社会的条件

これには二つある。一つは身分制度であり二つは結婚制度である。

まず前者であるが、いつの時代にも（現在でも）表向き、建前は別として厳然として身分差があるものである。后については、既にふれたが、今の官僚にあたる太政官制度においても階級があって、一位は太政大臣、二位は左右内大臣、正三位は大納言、従三位は中納言、四位は参議、大将、中将、従五位は少納言、従五位の上は大国の受領、下は上国の受領、従六位は中国の受領と言った具合いである。

官僚である貴族達はこの階級を昇りながら出世していくのである。現在の中央官庁においても見られ、某大学の法学部を出て上級職試験（昔は高文試験）にパスするとトントン拍子で出世していくのである。一つ付言すれば、そうは言うものの平安期が貴族の名門の出身であれば、あまねく出世いくのに対し、現在は、試験（大学、公務員）という平等な競争を通しているということである。ただ、一―二回の試験のみで人生の多くが決っていくことについては様々な問題・意見があり、改革が試みられているが、実現しているとは言い難い。

これらには職田等が与えられる。一例を挙げれば、

太政大臣　左右大臣　大納言　親王（一品）、三品

職田　四〇町　三〇町　二〇町　八〇町　五〇町

職封　二三五〇戸　一五〇〇戸　六〇〇戸（品封）六〇〇戸　三〇〇戸

賀人　三〇〇人　二〇〇人　一〇〇人

なお、上達部は公卿の事で三位以上と四位の参議、上人とは、殿上人とは四位・五位、六位の蔵人で昇殿を許された人の事である。

後者は、当時の結婚制度では、何人もの妻を持つことが出来た。権力者は優秀な跡継を得るためや勢力を拡張するため又人生の楽しみの為でもあろうか。

桐壺帝は、第一夫人格に前記のような弘徽殿女御との間に、第一王子が生れ後の朱雀帝となった。桐壺の更衣との間に第二王子の光源氏が生れた。

醍醐天皇には、一七人の后がいたと資料にある。又「ニーベルングの指環」で大神ヴォータンは、フリッカ（結婚の女神）、エルダ（知の女神、ブリュンヒルデの母）、人間の女（ジークムント、ジークリンデの双子兄妹の母）の三人の妻を持ったのであり、それぞれの妻が音楽のストーリーに大きな影響を与えている。（特にフリッカとの夫婦間の争い）

光源氏は、左大臣の一人娘葵の上と結婚するが政略結婚であり、お互いになじめず不幸な事となる。それは葵の巻を読んで記そう。

二、人間関係

源氏物語には、様々の人間関係が語られていることは、これまでも再三再四に渡り記している通りであるが、この桐壺の巻にもその原型が語られている。それらを見ながら以降出てくる関係にも触れておきたい。

（一）夫婦（子供）

①帝は弘徽殿の女御（子供第一王子）、麗景殿女御（子供なし）、桐壺更衣（第二王子、光源氏）更に更衣亡き後に召した藤壺の女御（紅葉の賀の巻で中宮になる。冷泉帝が第一〇番目の子供だとされているが、実は光源氏と藤壺の子）

②右大臣と妻（出は明らかでない）、左大臣と妻（桐壺帝の実妹）

前者は六人の娘（前記）、後者には一人の娘（葵の上）と何人かの男の子（長男が頭中将、最後は太政大臣）

③その頭の中将と四の君、これは左右大臣の融合とでもいえよう。

④故大納言と更衣の母、遺言（入内させるよう）が大事で、源氏物語において遺言の果す役割は大きい。後の桐壺の帝（賢木の巻）、六条御息所（澪標の巻）、柏木（柏木の巻）、八の宮（椎本の巻）等々がある。

⑤光源氏と葵の上、政略結婚（光源氏十二才、葵の上十六才）後に死とひきかえに夕霧が誕生（葵の巻）

今後の物語において様々な夫婦が出てきて源氏物語は

夫婦物語の様相を強く出すが、興味あるものをいくつか挙げれば、㋐光源氏と紫の上、明石の君　㋑夕霧と雲井雁　㋒柏木と落葉の宮　㋓源氏と女三の宮　㋔匂宮と中の君等がある。

（二）父と娘

この関係も実に多く出てくるが、桐壺の巻においては

①故大納言と桐壺更衣

②右大臣と六人の姫君　六番目朧月夜とのおかしな関係が賢木の巻に語られている。

③左大臣と一人娘葵の上（若くしてなくなる・二六才）

死をいたむ父（葵の巻）

今後の物語では、朱雀帝と女三の宮、および女二の宮（落葉の宮）、八の宮と宇治の三姉妹（大君、中君、浮舟）、光源氏は、初めは養父としての立場で玉鬘（夕顔の娘）、秋好中宮（六条御息所の娘）の面倒を見るが、恋心にかわっていく、（玉鬘十帖中心）明石入道と明石の君、空蝉、夕顔も入内させようとして父ががんばっていたが果せなかった。

又髭黒の大将と真木柱も忘れてはならない。（真木柱の巻）

物語の世界においては父娘の関係は実に多く出てくるが、「指環」（ワーグナーの楽劇）においてもヴォータンとブリュンヒルデの父娘が登場し興味ある事実を知ることが出来る。娘に抗議され父の考えがかわっていくし、愛情も出てくる。第二作「ワルキューレ」において詳しく語られていて魅力的なメロディは（特に父の告別の歌、娘のねむりの音楽等）印象的である。

娘を持つ一人の父親としても娘との関係は微妙であり不安であり楽しみでもある。我娘も四〇才にとどき三人の母親となった。近くに住んでおり孫をつれて毎日のように来て、飯をくって冷蔵庫のものを持ち帰る。

（三）母と娘

桐壺の巻においては、更衣、藤壺、葵の上の母親が語られている。後において登場する母娘は、夕顔と玉鬘、六条御息所と娘（梅壺女御、秋好中宮）、明石の尼君と明石の君、明石の君と姫君（後の明石中宮）、一条御息所と落葉の宮、中将の君と浮舟等が挙げられる。御息所は、皇子又は皇女を生んだ母親のことを言い、桐壺更衣も御息所の名で登場する場面もある。

（四）父と息子

本巻では桐壺帝と東宮、および光源氏、左大臣と頭中将、後には光源氏と夕霧、頭中将と柏木、光源氏と薫（実際は違い、柏木と女三の宮の密事で生れる）

（五）恋愛

本巻においては、帝と更衣の純愛が中心テーマであるが、藤壺に思慕を寄せる光源氏の少年の心が、葵の上がどうしても好きになれないのと対照的によく描かれている。「かかるところに思うような人を据えて住まばや」、

思うような人とは、勿論藤壺である。若くしての結婚願望である。

世にもおかしな危険な、かつ不道徳なこの恋の転回は、第五巻若紫の巻（密事、子供の誕生）を待たなければならない。

更衣との純愛は、政治的闘争に明け暮れた帝の心をいやす一つの行為だったであろうか。公的な行為と私的な行為の違いなのであろうか。極めて人間的な行為である。

恋愛は源氏物語の大きなテーマであり、以降様々なパターンとなって出てくる。整理するのに戸惑う位であるが、じっくり楽しく読んでいきたい。

（六）その他

人間関係として母と息子（藤壺と冷泉帝、女三の宮と薫、本巻では更衣と光源氏、明石中宮と匂宮等）、友情（光源氏と頭中将）兄弟（朱雀帝と光源氏）等があり又、使用人（唯光や女房）等との関係等にあらゆる人間関係が幅広く、深く語られており、源氏物語の大きな魅力となっている。

四、人間造型

（一）光源氏

①この桐壺の巻は、光源氏の少年時代を取り扱っている。生れてから十二才までである。年次別を物語りに沿って、まず整理すれば次の通りである。

一才　誕生（第二皇子）　三才　袴着、母死す
四才　第一皇子立太子　六才　祖母死
七才　読書始め　八才　観相、臣籍降下（源氏姓）
十一才　藤壺入内　十二才　元服、葵の上と結婚（左大臣家の婿に）

②少年時代の特徴

㋐美ぼう、玉のおのこ子、㋑天皇の第二皇子、父はすばらしい血統、母は更衣で劣り腹　㋒観相の結果臣下に下す、皇族を離れ一般人へ　㋓教養あり（書、音楽）　㋔藤壺への思慕（亡き母の身代りとして求める、理想の人）

巻の文章では源氏を「光君」、藤壺を「かがやく日の君」とたたえて最大級の讃美を示している。妻葵の上は「心にもつかず」、藤壺が「心ひとつにかかりて」存在した。恋のボヘミアン光源氏の原点である。

③モデルについて

村上リュウ氏の講演テープを聞くと光源氏のモデルはいなく、あくまで作者の創造上の人物だとしている。史実では桐壺帝のモデルが醍醐天皇だとの説もあり、天皇は近江の更衣（源周る）との間に源高明がいた。高明は須磨へ流謫をさせられており、物語での光源氏の生涯を思わせる。また、菅原道真もそれに当る他、青年時代の恋は、在原業平を参考にしたとか、晩年は藤原道長を頭において書いたのではないかとも言われている。

④源氏物語を読んでいる年輩の女性達と話しをすると「源氏物語は好き」だが、「光源氏は好きでない」という人によく出会う。一人の女性を愛し切れず、多くの女性達に心をくだく男に好感がもてないのであろうか、又、多くの女性を結果的に苦しめているからであろうか。

(二) 女性達

①桐壺の更衣

帝からみて更衣は「なつかしうろうたげなる」「様かたちめでたかりし」「心ばせのなだらかなめやすき」女であり、限りなく帝の愛を受けた。又、女房からみても「人柄あわれ」で、「情ありし御心」と慕われた。

更衣を表わす言葉として「はかない」という形容詞がぴったりで、本巻に五回登場する。

源氏物語に登場する女性達を一口で表わす語を注意して見てみると、更衣の「はかなし」、葵の上「うるわし」、夕顔「ろうたし」、紫の上「きよら」、藤壺は「限りなく心を尽しきこえる人」(光源氏より見て、若紫の巻)等があり、実に見事に適確に一言の形容詞で女性を表現しており、素晴らしいと感じる。

②弘徽殿の女御

身分は良く(右大臣の第一姫)いち早く入内して中宮の第一候補であったが、なか〳〵なれなく、不満がたまっていたらしい。帝にも何かと注文をつけたらしく、気が強くしっと心があり更衣をいじめぬいて死に追いやった張本人で、めずらしく源氏物語の悪役である。息子朱雀帝の後見人として政治的力量もあったことが想像される。内舘牧子著「十二単衣を着た悪魔」の主人公で、よく描かれている。女性達について藤壺は、「おいしいところどりの女」、六条御息所は「うっとうしい女」、夕顔は「男に気をもたす女」、この弘徽殿女御は「21世紀型のキャリアウーマン」としている。なか〳〵面白い見方であると思うが、藤壺は的確かどうか。私には、そう思われない。

③藤壺

原文には「御容貌有様あやしきまでぞおぼえる」「人の御際まさりて思ひなしめでたく」とあり美人で、桐壺更衣の生き写しで先帝の第四皇女であり、身分も最高に高い。従って人から後指をさされたりしっとされることもなく弘徽殿女御も一目置いたようだ。以降、物語の重要な中心人物となり、物語を動かしていく。

④女性達の対比　以下の三組の対比をつくると興味あることがよくわかる。

○弘徽殿女御・生、三位　第一皇子の母、父右大臣(一位)・生
○桐壺更衣　・死、四位(死後、二位)　第二皇子の母、父大納言(三位)・死

○藤壺　・光源氏より見ると理想の人、
○葵の上・　〃　　あきた人、つまらない人

○藤壺は桐壺更衣とうり二つ・身分高い(先帝の第四皇女)
○更衣　　・身分低い(故二位の大納言が父)

五、政治と人間

(一) 源氏物語は、強く政治小説としての意味を持っていることはこれまで繰り返し記している通りであって、桐壺の巻にもそれが色濃く出ている。政治という表題を権力、富という言葉に、人間というのを愛、善き人間というように広く考えて見ていった方がよいと思う。本巻の表面は、桐壺帝と更衣との純愛を描きながら、深層では政治(権力)対人間(愛)の問題を提起しているのではないか。人間と言っても良い(善)と悪いとの両面があり、愛の定義もなか〳〵難かしく男女の恋愛から夫婦愛、兄弟愛、更には人類愛等にも及ぶ。

権力も政治権力だけでなく経済権力(富)まであるし、良い権力(人間を幸せにする公的なもの)と悪い権力(自らの為にする私的なもの)があろう。

富と言っても巨万のものと年金の不足を補うささやかなものとがあり、それぞれの概念規定が難かしい。ここでは、一般論、原理論の世界で考えていこう。

(二) 桐壺帝の愛

この場合は女に対する愛(恋愛)であって、桐壺帝は二人の后を愛する。単純化して考えれば、弘徽殿女御とは権力で結びつく要因が大きく、更衣とは純粋な愛の姿を表面上は保つ。身分が低く、かつ富のない更衣は、純粋なかつ献身的な愛によってしか帝の寵愛を得ることは出来なかったであろう、しかしこの純粋とも言える愛が、(左大臣側)結果的、意図したかどうかは別としても弘徽殿側(右大臣側)に対して大きな牽制になったであろうし、両者の力関係をバランスのとれたもの、もしくは左大臣側に有利になったとも言えよう。又、更衣側からすれば、故父の遺言による一門の繁栄を願ったということも言え、両面を持っている。それぞれの子供の皇位継承問題にもつながっている。帝の愛は純粋でけがらわしい政治的策略等全くなかったであろうか。素直に文章や歌(「たずねゆくまぼろしもがは…」)を読むとそのようにとれるが……。

帝の愛は一対二(女御・更衣)という関係をもつ。更衣の死の身がわりに藤壺が登場する。更衣の死というのは愛が権力に負けたことを意味するし、世の中でも正義が悪に負ける側面はいつもあることである。帝の更衣への思いは、愛が権力を超えて価値が高いという帝の考えを示している。

更衣の亡くなる時の歌「限りとて別れる……生かまほしきは命なりけり」の独えい歌は、死に際しても生きることへの限りない意欲を示したものである。この歌は、子供の事よりも、夫のことよりも、何よりも自分自身が生きることに最大の価値を見い出したのであり、以降物語

の中心テーマであり、多く登場する女性達の心の原点をさし示しているように思える。

権力∧帝への愛∧子供への愛∧生、という図式が成りたっている。このことは、宇治十帖の最後において、浮舟が、投身自殺にもかかわらず、助け生きさせていることにも関連している。自殺者の多い近事考えるべき点である。源氏物語には、人生や人間の価値について色々考えさせられること・教示的なことがあるので、よく注意して見のがさないで読む事が極めて大事なことのように思われる。このようなことが、物語を読むということではないだろうか。表面上の文法や字句解釈だけでは面白くないし意味もない。

この権力と人間の問題は、ワーグナーの大作「ニーベルングの指環」においても主要テーマとして取り上げられているのであるが、源氏物語はそれに先立つこと八五〇年も前に提起しているのであり、実にすごいことである。ここで横道にそれるが、音楽と文学という観点にたち「指環」を概観しておこう。

(二) ニーベルングの指環

権力（富）は、人間（世の中）を駄目にするという思想が根本にあり、当初は神々の支配する世の中（権力）が最後は破滅し、人間の勝利（愛）が支配するというシナリオであり、その役割を女性のブリュンヒルデが担う。源氏物語の紫の上が一生涯の回顧をなげきに終っているように思う。

出世の為に健康を害した人、家庭を犠牲にした人、人間の感性を全く失った人、話しをしても面白くない人等に多く接してきた、他方では、出世して経験を積んで人間的に成長した官僚とも交友を持ち、今も親しくつきあいをさせていただいている。多くのわたりをし、富を築いた人もいる。人生の様々な諸相を見る思いである。井上靖の小説に出てくる人間（例えば氷壁の主人公）に憧れてよく山に行った。

学生時代好んで読んだ河合栄治郎氏も昔の農商務省の役人であり数年で官を辞したが、その原因は官僚機構は、人間を磨滅するという認識であった。今でも若くして志を高く持って公務員になった人がやめていくことも多くある。ヴォータンのように権力と青春の両方の堅持しつつ生きていくことが可能なのであろうか。官僚社会というのは、どういう世界であって、どのような価値感をもって生きていったらよいであろうか。しかし、もうすべては終わってしまった。

源氏物語に登場する人に（光源氏のみならず頭中将、夕霧、柏木、薫等といった貴族官僚）がどのように描き出されているか、又それを人生の終りにどのように回顧し総括したかという点で源氏物語を読むことに興味がわく。又、桐壺帝が政治権力と愛（更衣、藤壺）の両方を求めたのは、指環のヴォータンと同じ考えによるものであろうか。今でも政財界のトップにもこのような事例をたまに見るのである。

(五) その他

①自然描写、桐壺の死を帝が哀傷している背景に野分け（今で言う台風）を使っている。帝は傷心で台風が通りすぎていくすさまじさと淋しさではなかった。又、月の推移（夕月夜→月影→月入り方→月も入りぬ）によって時刻が移っていくという手法、植物は萩、又、風の音、虫の音。（歌に読まれている小萩は子供である光源氏の事か）

②和歌は九首、帝が四首、亡くなった更衣の母との贈答歌もすばらしい。源氏物語全体で七九五首あり平家物語の七〇前後と絶対的な違いを示している。

③「あわれ」を数えたら一一回、「をかし」はわずか三回。

源氏物語の本質は「もののあわれである」と言われている、この「あわれ」というのは、現代風の「気の毒」というような単純な意味ではない。深く人間の心を表わす言葉であり、今後注意して見ていきたい。「あわれ」と「をかし」はどこが同じでどこが違うのか、いずれ考えて見たい大事な事である。

④桐壺の巻の長さは四〇〇字詰め原稿用紙で三四枚

④中国等との関係

(夕霧の巻) のと対照的である。

音楽では、権力の象徴として黄金（それから作った指環）が絶対であり、それをめぐり天上の人（神々）、地上の人、地下の人達が争うのである。その指環を得られれば世界支配が可能となる。しかし、それを得る為には愛を断念しなければならない。

「ワルキューレ」で大神ヴォータンは嘆く。「青春の愛の歓楽が消えた時、権力を欲した。世界を獲得した、権力を得ても愛を欲した」（第二幕第二場）

いつの時代もこの二律背反の問題に悩まされる。公的な面と私的な面でもある。光源氏はどのように対処したか興味がわく。今後じっくり読んでいきたい点である。

(四) 私と公務員

大学を卒業し国家公務員等になって四〇年近く、様々の経験をしてきたが、いじめられたり、びびられたり、とばされたり（転勤）、しっとされたり、暗い官僚の世界で食をつないできた。いやという程、現在社会の身分制度、実力や正直と関係のない世界に身をおいて人間・人生模様の一面を見てきた。

わずかの少いポストを得るのか、自分の趣味や家庭に重きを置いて生きるかはサラリーマン管理社会に生きる者、すべての人にとっては直面せざるを得ない悩み深い問題である。

どうも自分は後者に重きを置いて役人人生を終えたよ

紫式部は幅広い教養を持っておりそれらが、随所に散りばめられている。「源氏物語ものがたり」（島内景二）によって採り出してみれば

○中国の歴史書「史記」
○日本の歴史書「日本書紀」
○漢詩文「長恨歌」「白氏文集」
○和歌「古今和歌集」
○教典「法華経」等がある。

このように中国の影響は大きく、現在政治的に何かとあるようであるが、貿易等の経済面のみならず文化面での交流が重要であるとの認識は、多くの日本国民のみならず中国国民も持っているものである。

次回は、青年時代その一として帚木三帖をとりあげることとしたい。

第一回（一三一号）正誤表

ページ	段	行	誤	正
70	上	左4	さぶらひ結いける	さぶらひ給いける
70	上	右10	定子	彰子
71	下	右9	楽園	楽劇
74	下	左5	ニューベルング	ニーベルング
79	上	右7	大弐三位	大弐三位
82	上	右6	ブリュニヒルデ	ブリュンヒルデ
84	下	右15	草氏地	草子地
86	上	左6	英雄の生活	英雄の生涯
88	上	左6	山積でているが	山程でているが
全体的			ニーベルングの指輪	ニーベルングの指環
（環となっているところもある）				

漢詩

潮騒錄（七十六）

鯨游海

世界文化遺産・富嶽

平成二五年六月

認知世界的遺産
月有叢雲花有風
君不想耶三歳後
靈峯處到芥塵充

押韻・風　充

〈世界文化遺産・富岳〉

世界的遺産に　認知さるるも
月に叢雲あり　花に風あり
君想はざるや　三歳の後
霊峰到る処　芥塵に充つるを

〔注　解〕

富士山が世界文化遺産に認定登録された際、日本中が歓喜に包まれた。以前自然遺産で落選し、今回は文化遺産として捲土重来、再度の申請であっただけに喜びも大きかった。しかしながら単純に喜んでばかりはいられない。「好事魔多し」である。先ずは登山者の急増による自然環境の破壊が心配される。

一方登山者を抑制するべく「入山料」が検討されている。

「月有叢雲花有風」＝月が出ればむら雲がさえぎり、花が咲けば風が吹き散らす。

井原西鶴・好色三代男「思ふこと叶はねばこそ浮世、月にむら雲花に風」

〔口語訳〕

霊峰富士山が遂に世界文化遺産に認知登録された。

然し、このことは「好事魔多し」で単純ではないのだ。

君はきっと想像したに違いない。三年も経ったら、

神聖な富士山中到る処ごみだらけで埋没している様を。

☆世のならひ月にむら雲花に風
　富岳のすそに塵なつもりそ

鎌倉不應世界遺産　　平成二五年六月

不應世界的遺産
痛恨告知無動顚
君不思邪塞翁馬
七堂客溢阻參禪

押韻・顚　禪

〈鎌倉は世界遺産に応しからず〉

「世界的遺産に応しからず」
痛恨の告知に　動顚することなかれ
君思はずや　塞翁が馬を
七堂に客溢れ　参禅を阻まれん

〔注　解〕

前作「世界文化遺産富嶽」の連作。こちらは落選した鎌倉を詠んだ。鎌倉は禅宗系（臨済宗、曹洞宗）の本拠地且つ鎌倉五山として東の学問芸術のメッカであった。

七堂＝寺の山門、仏殿、法堂、庫裏、僧堂等の建物群。

〔口語訳〕

「世界的遺産に相応しからず」と痛恨の告知があったが、動顚する必要はない。万一遺産に認定されでもしたら、即日寺中到る所客で溢れ参禅も阻まれることだろう。

☆鎌倉の南無大仏の念力や
　俗気の野望くだけ散るかも

東北楽天金鷲棒球隊爲日本一　　平成二五年霜月

鬼乎天狗神乎佛
三八連勝賀不知
隱忍九年終羽搏
千山萬里凱歌馳

押韻・知　馳

〈東北楽天金鷲棒球隊が日本一と為る〉

鬼か天狗か　神か仏か
三八連勝　賀くるを知らず
隠忍九年　つひに羽搏き
千山万里に　凱歌馳す

〔注　解〕

金鷲＝ゴールデンイーグルス。

棒球隊＝野球団の中国語標記。野球は和語でこのまま漢詩に用いた場合「和臭」の誇りを受ける恐れがある。

天狗＝超能力を持ち空も飛べる怪物。

神乎佛＝エース田中将大投手のことを野村元監督は「将君神の子不思議な子」と呼んだ。また往年の大投手稲尾のことをファンは「神様仏様稲尾様」と讃えた。

三八連勝＝3×8＝24連勝（15を三五、16を一八等）

☆鬼か蛇か神か仏か不思議な子
　凱歌とどろけロッキー越えて

東北楽天棒球隊初優勝　　平成二五年九月

勵被災民惻隱魂
一強五弱匪朱門
榮冠當否例年噪
今歲樂天無異論

押印・魂　門　論

〈東北楽天棒球隊初優勝す〉

被災民を励ます　惻隠の魂
「一強五弱」の　朱門には匪ざるなり
栄冠の当否　例年噪しけれど
今歳の楽天　異論なし

〔注　解〕

惻隠＝憐れむ心。孟子「無惻隠之心非人也」一強五弱＝セ・リーグの現状の揶揄。朱門＝金満家＝巨人を暗喩。

〔口語訳〕

寸暇を惜しみ被災民を励ました惻隠の情厚き東北魂。然も一強五弱といわれて久しいセ・リーグの金満球団巨人などとは全く異なるチームなのだ。

優勝球団に相応しいか否かと世間は毎年噪いでいるが、今年の東北楽天球団に限っては全くその心配は無い。

☆若き鷲陸奥の山野にはばたきて
　いま新しき時は来向かふ

《漢詩の流れ64》 中華民國1・魯迅①

本名は周樹人、字は豫才（一八八一～一九三六）。浙江省紹興の人で一九〇二年日本に留学、仙台医専（現東北大学）に入り医学を志すも、途中で中退して文学に転じた。以後、中国の進歩的作家として尊崇された。一九一八年「狂人日記」他著作多数。

悼柔石（柔石を悼む）

慣於長夜過春時　長夜に慣れて春時を過し
挈婦將雛鬢有絲　婦を携え雛を将いて鬢に糸あり
夢裏依稀慈母淚　夢裏に依稀（ほのか）なり慈母の涙
城東變幻大王旗　城東に変幻す大王（暴君の蔣介石）旗
忍看朋輩成新鬼　看るに忍びんや朋輩の新鬼と成るを
怒向刀叢覓小詩　怒って刀叢に向かって小詩を覓む
吟罷低眉無寫處　吟じ罷って眉を低れ写す処なし
月光如水照縞衣　月光は水の如く縞衣（黒衣＝僧衣）を照らす

この詩は一九三一年、蔣介石の国民政府に虐殺された左翼作家の柔石を哀悼した作。魯迅自身、この頃江南地方を転々と逃亡中であった。

阿片戦争を嚆矢とする欧日帝国主義の侵略に為す術なく、近代化に苦悩する巨竜。その近代中国の身体を作ったのが孫文、その魂を作ったのが魯迅といわれる。

青春を過ごした日本に憧がれつつ果たせず一九三六年没。

人類の仲間（五）

鈴木守

第七節　仲間たちの横顔（一）

人類の仲間について、〝ヒトとは何か〟を皮切りに、人類の発祥、猿人、原人、古代型サピエンス、並びに現代型サピエンスの消息を紹介し、前節において新石器時代まで到達し、現在、知られている仲間の数は23種類に及んでいることを知った。

何気なく、広辞林第五版（一九七三年）を繰っていると、〝猿人〟の項に「ピテカントロプス・エレクトゥス」と書かれているのに気付いた。ピテカントロプス・エレクトゥスと云えばジャワ原人のことではないか。それでは「原人とは何か」という疑問が湧いたので、頁をめくると「ジャワ人、ネアンデルタール人、クロマニヨン人などの化石人類」と解説してあった。これでは、原人イコール古人類である。些か驚いて資料を調べると、一九七三年の時点では化石人類23種類中、8種類しか知られておらず、最古の人類は猿人第一号のアウストラロピテクス・アフリカヌス（二九〇～二五〇万前）であった。

今昔の感を抱きながら、二〇世紀後半以降のことを思い起こすと、二〇世紀終末の九〇年を過ぎた頃から二一世紀初頭にかけて、化石人骨発掘のラッシュの時代であり（文末別表の発見年を参照されたい）、極端に云えば、昨日の新知見が今日は旧聞というような情勢であった。

と云うような背景が原因になって、今回の『人類の仲間』の中に、旧聞を得意顔で披瀝していないか限りなく心配になってきた。したがって、第六節までの文章を見直しながら、古人類についての所感、雑感を交えて、人類の仲間のプロフィルを取り纏めて拙文の締め括りとする。

一．猿人たちのプロフィル

参考までに、初期人類・猿人たちの種類別名称と生息年代、並びに発見地と発見年を別表として末尾に掲載しておく。

1．初期の猿人たち

現在知られている最古の人類は「サヘラントロプス・チャデンシス（チャド猿人）」であり、この名は〝サハラの南、チャドの人〟の意。この猿人は二〇〇二年にチャドのバハーエルガザルワジ（ワジは枯れ川のこと）に沿ったトロスメナラで発見された。

その前年、二〇〇一年にケニア・ビクトリア湖近くのツゲネンで六〇〇万年前頃の古人類の化石が出土した。チャド猿人とともに後述する「オロリン・ツゲネンシス」である。二〇世紀も末期、一九九四年には諏訪らによって、四四〇万年前頃の「アルディピテクス・ラミダス」が発掘され、発見者たちは愛称〝アルディ〟と名付けたラミダス猿人の全身像を復元した。アルディには上踏まずがなく、上肢は膝に届くほど長く、樹上生活に都合のよい体型だったが、骨盤の丈が短く直立二足歩行が可能な骨格を有していた。

二〇〇一年には、ラミダス猿人の亜種、五七七万～五五〇万年前の「アルディピテクス・ラミダス・カダバ」が出土。ラミダス、カダバ両猿人ともエチオピア産であり、その名の〝ラミド〟はルーツを意味し、〝カダバ〟は出土地の地名である。

二〇〇一年は古人類発見の当り年であった。ケニアで発掘された三五〇万年前の頭骨も〇一年の出土である。この頭骨の主は、下記のアウストラロピテクス属の人類とは異なり、口が突出せずに顔が平らであったため、アウストラロピテクスとは別種と判定され、「ケニアントロプス・プラティオプス（平らな顔のケニア人）」と命名された。発見者たちは、この猿人は後述のアウストラロピテクス・アナメンシスから派生し、ホモ・ルドルフェンシスに繋がると想定している。

2．華奢型猿人アウストラロピテクス

前出、顔が平らなケニア人に先んじて、四一七万年前には「アウストラロピテクス・アナメンシス」が登場した。アナメンシスは一九九五年にケニア、ツルカナ湖周辺のカナポイで出土。アナメンシスは直立二足歩行が実証されている最古の人類である。

三五〇万～二九〇万年前に至ると、東アフリカ各地に「アウストラロピテクス・アファレンシス」が登場した。この名は出土地・エチオピア、ハダール地方アファールの地名に由来。ここで見つかった〝愛称ルーシー〟の遺体は、ほぼ全身の骨が発掘され、当時、流行していたビー

トルズのヒット曲から愛称が誕生した。また、タンザニア、ラエトリには、アファール猿人親子三人の足跡が刻まれた化石が残っており、アファール猿人の直立二足歩行を示す直接的な物証である。なお、アファール猿人はアナメンス猿人の血統とする説もある。

一九二四年にレイモンド・ダートが南アフリカ・タウングで六、七歳と思われる子供の骨を発見した。この発見によって猿人が世に知られるようになった。ダートはこの子供の愛称を〝タウング・チャイルド〟とし、学名に〝アフリカに住むヒト様の猿〟、即ち「アウストラロピテクス・アフリカヌス」を与えた。その後、猿人全体をアウストラロピテクスと呼ぶようになり、現在ではアウストラロピテクスと云えば、華奢型猿人の属名を指している。アフリカヌスは三〇〇万～二五〇万年前に南アフリカに生息し、南アフリカ以外から出土していない地方出身者であるが、血統はイースト・サイドのアファレンシス系とされている。

諏訪らは、エチオピア、アディスアベバから約二五〇粁北東の地点で、二五〇万年前とされる頭部や腕、脚の骨を得て「アウストラロピテクス・ガルヒ」と命名した。ガルヒは道具を使い肉食をした最初の人類と云うことで、現地語で〝驚き〟を意味するガルヒの名が与えられた。ガルヒはアファレンシスの流れを汲むと考えられ、猿人とホモ属を繋ぐキーマンとしても注目されている。

二〇〇八年に南アフリカで、アフリカヌスの末裔と思われる華奢型猿人、一九〇万年前頃の「アウストラロピテクス・セディパ」が発見された。セディパは現地語の〝泉、水源〟の意味である。

3．頑丈型原人パラントロプス

二五〇万年前頃、気候が大きく変化して、乾燥化が進んだ。この新しい環境とともに、頑丈な身体で粗雑な固い食物に適した咀嚼器官を持つ種が華奢型猿人の中から現れてきた。頑丈型猿人パラントロプス属の登場である。頑丈型猿人で最初に発見されたのが、「パラントロプス・ロブストス」であり、その身体が頑丈であるため、頑丈を意味する〝ロブストス〟の名が与えられた。しかし、頑丈型猿人の属名には〝パラントロプス〟が採用されている。

二五〇万～一五〇万年前に現われた「パラントロプス・エチオピクス」が頑丈型猿人の最初であり、アファレンシスから分岐したとされている。

次いで、二二〇万年前頃にエチオピクスから分岐したと思われる頑丈型猿人が発見され、「ジンジャントロプス・ボイセイ」と命名された。ジンジャントロプスは〝ジンジ（東アフリカの地名）のヒト〟を意味し、〝ボイセイ〟は発掘調査の出資者の名に因んでいる。現在は「パラントロプス・ボイセイ」と記載する書が増えてきた。

なお、ボイセイの姿は一二〇万年前以降には見られなくなった。

他方、南アフリカでは二一〇万年前頃、前出のロブストスが現出し、一五〇万年前頃まで命脈を保っていた。この猿人はアファレンシスの系統と云われている。

以上、猿人たちの横顔を眺めてきたが、ホモ属人類を登場させる前に、チャド猿人誕生の物語を、緑のサハラをイメージしながら奇瑞気儘に喋ることにしたい。

二．グリーン・サハラ・ストーリー

チャド猿人誕生、言い換えれば人類発祥の物語である。

①　ダーウィンから始まった人類発祥譚：

チャールズ・ダーウィンは、ネアンデルタール人が発見された一八五六年直後、五九年に『種の起源』、引き続き七一年に『人間の由来』を出版した。彼は人間の由来で「人類の誕生の地は、人類近縁のゴリラやチンパンジーが生息するアフリカだろう」と予言した。しかし、ジャワ原人や北京原人が知られるようになった二〇世紀前半には、『人類アジア起源説』が登場し、二〇世紀後半になると、古人類の標本がアフリカで数多く発掘されたため、ダーウィンが云う『人類アフリカ起源説』が復活した。

さて、ヒトの前身はサルだった。彼らは食餌が豊富な熱帯雨林地帯の樹上で安穏な日々を過ごしていた。しかし、彼らの生活を脅かす事態がじわじわと押し寄せてきた。生活環境の乾燥である。環境の乾燥は疎林化を促し、やがて原野をサバンナ化した。それまで樹上で暮らしていた一部の大型類人猿は、食を求めて地上に下り立ち、やがて直立姿勢を保って二本の足で歩行するようになった。人類の誕生である。

とは云うものの、人類がいつどこで発祥したか知る人はいない。ネアンデルタール人やクロマニヨン人が知られるようになると、人類のルーツ探しが始まった。現在までに、アジア起源説、多地域同時進化説などを経て二〇世紀末には、イースト・サイド物語が語られるようになった。この物語は東アフリカの大地溝帯を舞台にし、この地で人類は呱々の声をあげたという壮大な仮説である。

②　イーストサイド物語の登場：

先に述べたように、人類はいつ頃、どこで直立二足歩行をするようになったか不明である。

第二次世界大戦（一九三九～一九四五）が終わって二〇世紀後半に入ると、古人類の化石発掘がラッシュとなり、取り分け暗黒大陸アフリカで発見が続き、二〇世紀末、イブ・コパンがアフリカ大地溝帯を舞台にした人類

発祥の壮大な仮説を提唱した。彼は人類発祥の動機として一千七百万年前に発生したアフリカ大陸とユーラシア大陸との大衝突から説き起こしていた。彼の仮説を辿ると、「大陸間の大衝突によって東アフリカの大地に地殻変動が生じ、土地が隆起あるいは陥没してツルカナ湖、ビクトリア湖、タンガニカ湖、マラウイ湖と続くアフリカ大地溝帯が形成された。地溝帯の西に連なる山々は大西洋の湿った空気を運ぶ偏西風を遮り、地溝帯東方は熱帯性乾燥地帯サバンナとなった。これまで、熱帯雨林の恩恵を浴していた大型類人猿は、食を求めて疎林化したオープン・ランドに降り、直立して二足歩行するようになった。人類の誕生である」ということであった。

折しも、イーストサイド物語が脚光を浴びていた二〇〇一年に、ビクトリア湖近く、ケニアのツゲネンで六〇〇万年前頃の古人類化石が発見された。人類のルーツは五、六百万年前と云われていた当時である。将に人類のルーツ発見と思ったとしても無理からぬことである。この化石人骨の主に〝ツゲネンの最初の人〟を意味する「オロリン・ツゲネンシス（オロリン猿人）」の名が与えられた。

③　チャド猿人の出現：

ところが、その翌年の二〇〇二年になると、チャド湖北方、バハーエルガザルワジに沿ったトロスメナラで、七〇〇万～六〇〇万年前の人骨が出土した。この古人類・チャド猿人が現在最古の人類となった。チャド猿人とは別に、チャド出身の猿人として三五〇万年前頃のバリエルガザリ猿人が知られている。

チャド猿人が人類のルーツか否か、並びにオロリン猿人やバリエルガザリ猿人との血の繋がりについて即断できないが、チャド猿人が生息していたという事実は、サハラの地に人類やゴリラあるいはチンパンジーの共通の祖となるエジプトピテクス、プロコンスル、ケニアピテクスなどの類人猿を育んだ緑の森林地帯・グリーン・サハラがあったことを示す証拠である。

④　グリーン・サハラの夢：

人類の祖となるプロンコスルなどが住んでいた漸新世から中新世（三千七百万～五百四十万年前）の時代には、サハラの地も緑の楽園だったに違いない。でなければ、チャド猿人が日の目を見ることはなかったはずである。

アフリカ大陸とアラビアは同じプレート上にあり、アフラビア大陸プレートを形成している。中新世前半の頃（二千万年前前後）は、アフラビア大陸は大西洋とインド洋を繋ぐテティス海を隔ててユーラシア大陸と向かい合っていた。したがって、当時の赤道は現在の赤道より北寄りに位置し、ニジェール川河口付近を通過していたのではなかろうか。即ち、サハラ砂漠に該当する地域は、

湿潤な偏西風の影響を受けて、現在のザイールの如く密林に覆われていたはずである。

ところが、大地の移動、プレートテクトニクスによりアフラビア大陸はユーラシア大陸に引き寄せられて行った。そのため、サハラの地は偏西風の通路外となり、降雨量が激減し、乾燥化が始まった。それに加えて、一七〇〇万年前には二つの大陸の激突があり、その結果、イーストサイドのように、サハラの地域にも地殻変動が生じたとしても不思議ではなかろう。

サハラ周辺の現在の地図を眺めると、サハラ砂漠中央部に三千メートル級の山岳を擁するティベスティ高原とアハガル高原があり、その南方、サヘルの中心にチャド湖が控え、ティベスティ高原の南麓からチャド湖に向けてバハーエルガザリワジが連なっている。

したがって、サハラの地にも、イーストサイド物語に語られているような、人類誕生のロマンが展開したのではなかろうか？。即ち「一千七百万年前の大陸激突の影響は、サハラにも及び大地が隆起して高原地帯を形成した。そして、テティス海の湿った空気を遮断し、高原の南の地域サヘルの乾燥化を促進させた。一千年前から七百万年前になると、チャド猿人の故地であるオアシス盆地トロスメナラに疎林化が進み、サバンナを形成した。そのオープン・ランドに類人猿が足を踏み入れ、彼らはやがて直立二足歩行を可能とし、七、六百万年前には最初の人類チャド猿人が誕生した。その後、華奢型猿人の時代、三五〇万年前頃になると、サヘルの緑の回廊・バハーエルガザリ川の川辺林にバリエルガザリ猿人が居を構えた。しかし、その後乾燥化が更に進み、砂漠化したサハラにおける古人類の消息を耳にしたことがない。したがって、「我々現代人がチャド猿人の後裔」かどうかは定かではない。

以上が『グリーン・サハラ・ストーリー』の大要であるが、イースト・サイドに、チャド猿人より古いオロリン猿人の先輩が生息した証拠が発見されれば、グリーン・サハラ・ストーリーは一場の夢と化し、単なる昔噺に駄してしまう宿命にある。

（次号に続く）

付表．人類の仲間たち（猿人類）

人類の種類名	生存年代（万年前）	発見地	発見年
初期猿人			
サヘラントロプス・チャデンシス	700～600	チャド	2002
オロリン・ツゲネンシス	600頃	ケニア	2001
アルディピテクス・ラミダス・カダバ	577～550	エチオピア	2001
アルディピテクス・ラミダス	440頃	エチオピア	1994
ケニアントロプス・プラティオプス	350～？	ケニア	2001
華奢型猿人・アウストラロピテクス			
アウストラロピテクス・アナメンシス	417～350	ケニア	1995
アウストラロピテクス・バリエルガザリ	350	チャド	1995
アウストラロピテクス・アファレンシス	350～290	東アフリカ	1974
アウストラロピテクス・アフリカヌス	300～250	南アフリカ	1924
アウストラロピテクス・ガルヒ	250頃	エチオピア	1999
アウストラロピテクス・セディバ	190頃	南アフリカ	2008
頑丈型猿人・パラントロプス			
パラントロプス・エチオピクス	250以前	エチオピア	1985
パラントロプス・ボイセイ	250～100	東アフリカ	1959
パラントロプス・ロブストス	200～100	南アフリカ	1938

殉教（三）

鍋屋次郎

・・心の充足を求めて・・加賀へ・・・

右近の使いで前田利家の大阪屋敷に行った篠田伊織が宇土に戻ってきたのは、七月七日の夕刻であった。

右近は屋敷の外に馬の嘶きを聞いて、「もしや」と思って門の外に出ると、馬の轡を持った埃まみれの伊織が立っていた。

「伊織、よく無事で戻ってきてくれた」

と声を掛けると

「殿、ただ今戻りました」

「馬を庭につないで、先ずは湯殿で汗を流して、それから話を聞くようにしよう」

の右近の声で、右近の妻ジュスタともう一人の小姓瀬川が

「篠田さん、お帰りなさい」

と言いながらやってきた。ジュスタは

「さあ、湯殿へ案内しましょう。瀬川さんは庭の適当なところに馬を繋いで」

とてきぱきと指示をした。

湯を使いさっぱりした伊織は、右近のいる部屋の入り口で、

「殿、改めて戻りました御挨拶を申し上げます」

と平伏した。

「伊織、もう良い。こちらに座れ」

と自分の向かい側の膳を指差した。

「ところで前田様はお達者でおられたか」

「はい。それはお元気でおられました。ただ、前田様のご都合に関係なく、大阪城の関白様からお呼び出しがかかり、閉口している、と笑いながら仰っていました」

「関白殿は前田様を身近に置きたいのだろう。何でも言い合える昔からのお友達だから」
右近は目の前の御馳走を伊織に奨め
「ところで前田様は何と言っておられたか」
「はい。肝心なご返事を申し上げるのが遅くなりました。高山殿には四～五日この屋敷に逗留されて、積るお話も伺い、最近の京・大坂もご案内しよう。時期は八月中過ぎがいいと仰っておられました」
「そうか。良い返事を持ってきてくれて満足じゃ。ところで帰りはどのような経路を通ってここまで幾日掛かったか」
「はい、大阪から馴染みの高槻を通って播州に出て、その後は海寄りの道を周防から筑前に入り、そこから南に下って宇土に来ました。お天気にも恵まれましたので、大阪を出てから八日で来ることができました」
「そうか。前田殿のところに出かける途中に堺にも寄りたいので余裕を見て七月の末前には出立しよう、伊織、供をせい」
「はい。お供させていただきます」

ここまで話したところへ父ダリヨと瀬川がやってきて、ダリヨは右近の隣の膳に、瀬川は伊織の横の膳に座った。

右近が大阪行きのことを話すと、ダリヨが
「それは早い方が良い。小西殿にも言っておかないといけないな」
「はい、帰ってくるわけですから、担当の森田に、堺から京・大阪を見てくる。小西殿に良しなに伝えてくれ、程度にしておきましょう。供は伊織を連れて行く。瀬川、留守を頼んだぞ」

七月二十七日に馬で宇土を出た右近と伊織は、八月五日には堺のキリシタン豪商日比屋了珪の屋敷に入った。突然の右近の訪問で了珪も驚き、早速千利休の屋敷に使いを出した。
その夜は日比屋了珪の茶室で、了珪の点前で利休と右近の三人だけの、いわば師と弟子だけの茶会となった。
右近の、茶席での流れるような作法を見ていた利休は
「高山殿、一年ぶりでお会いしましたが、また一回りお人柄が大きくなられたというか、世俗から脱した、ご自分の世界に凛としておられるご様子が窺えました。高山殿の茶席作法への姿勢を拝見していてそう思いました。安心したというのは大変失礼な言い方ですが、今日お目にかかることができて大変嬉しく思います」
の言葉に、右近は
「師からそのような身に余る過分な御言葉を戴くのは恐縮です。今はまだ自分の道を歩む出発点にいますので、

すべてはこれからです」
と答えた。

翌日、伊織が大阪の前田屋敷に行き、八月七日、昼前に右近がお伺いすることを伝えてきた。

その日、前田家では利家自ら右近を門前に迎え、奥庭に面した座敷に通した。庭から入る風は涼しく、蝉の鳴き声も聞こえる。
「高山殿、お久しぶり。お元気で安心した」
「いや、前田様は大大名となられ、天下の仕切りも大変なことでしょう。今回はこの様に押しかけてきてご迷惑をおかけします」
暫く雑談の後、利家は
「高山殿とは戦場でも、また関白の武将として平時も親しくしていたが、高山殿のことを知っているかと聞かれるとあまり知らないのだな。いろいろと聞かせてもらっていいかな」
との利家の言葉に
「前田様、何なりとお尋ねください。どのようなことでもありのままをお話いたします」
「あれは天正六年（一五七八）の秋のことだったと思うが、荒木村重が信長公に背いたとき、高山殿は荒木村重の武将で、高槻城主だった。信長公は明智光秀やバテレンのオルガンチーノなどを高槻城に行かせて、高山殿に開城を迫った。高山殿は妹さんと幼い御子息を荒木村重の有岡城に人質として出していて、信長公からは開城しないとバテレン・キリシタンを皆殺しにする、と強く開城を迫られた。開城すれば人質に出した妹さんとご子息の命はない。開城しなければバテレン・キリシタンが殺される。万事休すとはまさにあのときのこと。その時の高山殿の取った道は誰も気が付かなかった道だった。そこを説明してくれないか」
「はい、あの時は一家揃って死ぬしかない、とも思いました。家庭内では父はどこまでも荒木村重について行く、私が信長公につくのであればここで切腹して果てると言っていますし、妻は人質の妹と息子のことを心配しています。キリシタンの私としては、信長公に背いたら、キリシタンは皆殺しになる。ひたすらデウスに祈り続けました。そして頭に閃いたことは、まず自分がキリシタンとして出家する。身に寸鉄も帯びず、頭の髪を切って剃髪し、紙子（注①）だけを着た姿で信長公の所に行って、城は開城する、戦わない、だからバテレン、キリシタンを殺さないでくれ、とお願いすることを考えました。この戦いは、荒木村重が信長公との約束を破って毛利方についたのですから、信義は信長公にあります　人質に出している自分の家族よりも、自分の生き方として信義を

貫くことが大切と考え、結果としてバテレン・キリシタンの人たちの救済になると考えたわけです」

「あのとき、信長公の近くに身どもいたが、高山殿が取られた道は、誰もが思ってもいない、考えてもいなかった道であり高山殿の姿だった。信長公の前に歩いて行くざんばら髪で紙子一枚の高山殿の姿に目を見張り、高槻城を出るときによくぞ殺されないで出てこられたものと思った」

「はい。城外の様子を見に行くと言って数名の近習だけを連れて警備の薄い裏口から城外に出て、そこで髪を切り、刀を棄て、紙子に着替えて、近習達は城に戻して自分一人お伺いした次第です」

「結果としてバテレンも、キリシタンも、有岡城にいた高山家の人質も全て救われた。そして高山殿は高槻城を安堵された。道はあれしかなかった、と思ったとき、ざんばら髪と紙子一枚の姿の高山右近という人物は並みの人間ではない、と信長公もわれわれも皆そう思った」

「はい、その時に信長公から賜りましたご厚意は忘れることはできません」

(注①) 紙子とは紙子紙で作った衣服。一部の僧が着用していたが、右近は「みすぼらしさ・・無・・」の意思表示で着用したものと考える。

奥女中たちが並べた料理に箸をつけながら

「高山殿が関白様から追放になったのは、荒木村重事件から十年後になるか」

「はい、九年と少しです」

「明石に移るまでの六~七年の間、高槻でのキリシタンの活動は有名であったな」

「はい、恐れ入ります」

「ところで、高山殿がキリシタンになった動機は何だったのか。言葉を変えて言えば、どうしてキリシタンになったのか教えてくれないか」

右近の酒杯に酒を注ぎながら言った。この質問が出るのを待っていたかのように右近は座り直し

「父がキリシタンになった経緯からお話しましょう。ヴィレラ神父が永禄三年(一五六〇)に当時の将軍足利義輝公から公式のキリシタン布教許可を得て、京都で布教活動をしていました。ところが特に仏僧たちはキリシタン布教に反対運動を起こしたかったのですが、将軍許可済みの布教であることから手出しができない。そこで禅宗の僧侶たちが宗論を戦わせてバテレン達を敗北させて国外に追い出そうという計画が立てられ、当時松永弾正は自分の配下の結城山城守に、バテレンとの宗論を企画させました。結城山城守は博学識見で知られる清原枝賢が、父を加えて共にバテレンと宗論を戦わすことにしました。計画しているところに、堺から二名のキリシタン

が結城山城守の所に訴訟案件を持ち込んできました。結城山城守はキリシタンがどのような教えか問いただすと、キリシタンに入信してまだ日の浅い二名が理路整然と分かりやすく答えたのに驚き、またその答えの内容に感銘を受けたので、もっと深く聞きたいからバテレンを当地によこしてくれと、その旨を認めた手紙をその二名に持たせました」

「博学で有名な結城山城守と清原枝賢に高山殿の父上が加わって、説得する筈のお三人が、反対に説得されてしまったのか。そのキリシタンの二名はどんなことを話したのか」

父から聞いたことですが、と前置きして

「キリシタンの神　デウス　は万物の創造主であること。そしてデウスは人間を神に模ってお造りになられ、同時に多くの地上の動物をお造りになられましたが、人間のみに善悪が判断できる知識を与えて人間にこの地上の支配を任せられました。そしてデウスは、人間が生きて行く中で守るべき掟として十の掟を人間に与えた、と言ったそうです」

「その十の掟とはどんな掟か」

「はい、申しあげます。① あなたには、私をおいてほかに神があってはならない。② あなたはいかなる像も造ってはならない。③ あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。④ 安息日を心に留め、これを聖別せよ。⑤ あなたの父母を敬え。⑥ 殺してはならない。⑦ 姦淫してはならない。⑧ 盗んではならない。⑨ 隣人に関して偽証してはならない。⑩ 隣人の家を欲してはならないの十か条で、キリシタンでは十戒(注②)と言ってキリシタンはこの戒めを守って生活しています」

「一度聞いただけでは覚えきれないが、一つ一つはその通りだな。後でいいから紙に書いてくれ」

「畏まりました。書いて差し上げます」

(注②) この十戒は、日本聖書協会発行の新共同訳聖書から引用しました。

「そのほかに規則はないか」

「はい、十四箇条の慈悲の所作があります。まず自分がなさねばならないことの七箇条があります。① 飢えている人に食べさせること　② 渇いている人に飲ませること　③ 裸の人に着せること　④ 家のない人を泊めること　⑤ 病気の人を見舞うこと　⑥ 囚人の面倒を見ること　⑦ 死者を葬ること。次に心の中でしっかり持って実行する七箇条です。① 他人に良い忠告をすること　② 無知の人を教え導くこと　③ 叱らなければいけない人を叱ること　④ 悲しんでいる人を慰めること　⑤ 危害を加える人をゆるすこと　⑥ はずかしめを受けても耐えること　⑦ 生きている人と死んだ人のために神に祈ること　以上

の十四箇条を守ります。（注③）同時にキリシタンは皆これらを暗誦して日々の生活の中で実行します」
「これは誰が作ったのか」
「はい、キリシタンではこの世の始まる前から神がいて、先ほどの十戒も十四箇条の所作も神から出ていて、神が人間に与えられたものです。ですからキリシタンには日本のような神も仏もいないし、日本の神も仏も拝みません」

（注③）インターネット「慈悲の所作」から引用

利家は立ち上がって厠に行った。戻ってきて
「高山殿、キリシタンの神はデウスと言われているが、キリストは神ではないのか」
「はい、よくお尋ねくださいました。キリストは神と一体です。人間に神の存在を知らせるために、神によって処女の胎内に子どもが宿り、その子がイエスと呼ばれるキリストです。人としての生き方を人類に教えてくれました。先ほどの十戒もその一つです。神の教えを弘めたため、これに反対していた高官に十字架に付けられて殺されましたが、三日目に蘇られ、何度か弟子たちの前に現れて、十字架上で鑓に刺された傷口もお見せになって、そのまま天に昇られました。蘇られた後のキリストを見た証人は沢山います。神とキリストは一体で、姿も形も我々には見えない万物の創造者がデウスで、デウスが人間の姿になってこの世にあらわれた方をキリスト・イエスと呼んでいます」

利家は
「それをどのように理解していいのか分からないが、更に聞くが、キリシタンには極楽や地獄があるのか。人間死んだらどうなるのだ」
「はい、キリシタンの死後は墓に葬られますが、この地上の最後の日に墓の中から復活して、それからはずっと天国にいます。そこには悲しみも涙もありません。ただし、地上の生活の中で十戒のどれかに反したときは、バテレンを通してその罪を告白して、許して頂きます。そして死ぬ時までキリシタンとして神に祈り、罪を告白して許しを請えば、誰でも一生涯に犯してきた罪は全て許され、天国に入ります。金持ちも、貧乏人も、高貴な方も、下々も皆同じです。地獄はあると聞いています。今申し上げましたように、キリシタンとして死ぬまで信じ続ければ、誰でも天国に行けます。そうでない人は、罪を負ったまま地獄に行くことになります」

ここまで話し合ったとき、奥女中たちが夕餉の膳を運んできた。
「高山殿、供の篠田伊織も夕餉の膳に同席させよう」
と言って、次の間に控えている近習に呼びに行かせた。

膳が四人分出されているので、あと一人は誰なのか、と思っていると、前田家の嫡男前田利長が部屋に入って来た。右近と篠田伊織は座布団から降りて平伏した。
「高山殿、固いご挨拶は抜きにして、お気軽に話し合いましょう」
といって、利家の左側に座った。

利家は利長に
「昼からずっと、高山殿にキリシタンの教えが何たるかを聞かせて貰った。利長も聞くが良い。むかし、バテレンの話を南蛮寺で聞いたことはあるが、高山殿から聞く方が分かりやすい」
利長が右近に
「よろしくお聞かせください」
と会釈した。

夕餉の団欒では、利家と利長は、本能寺の変のとき右近は明智軍所属の一隊として中国路に向かっていたが、変を聞くと直ちに高槻に引き換えし、羽柴勢が来たとき、秀吉に息子を人質に差し出して秀吉軍に参加する意向を申し出た。秀吉は
「息子は高槻に戻せ。人質は要らない」
と答え、右近に先陣を申しつけ、右近が山崎の街道を塞ぎながら明智勢を蹴散らした軍功を称えていた。

夕食が終わったころ、利家は
「今日は愉快であった。旅の疲れもあろう、湯を使ってゆっくりと休むが良い。明日またいろいろとお考えを聞かせて貰おう」
と自室に戻って行った。
奥女中が右近と伊織をそれぞれの寝所に案内した。

翌朝、部屋に朝食が運ばれ、右近は伊織を自室に呼び、二人で朝食をとった。
やがて奥女中が
「昨日の大広間で殿様がお待ちです」
と呼びに来た。

右近一人が大広間に行くと、床の間を背にして、利家が座っている。挨拶をしてその前に座ると
「昨日はキリシタンの教えをきかせていただいたが、高山殿が何故キリシタンになったのか、という肝心なことを聞いてなかった。これから聞かせてくれないか」
「はい、昨日、結城山城守と清原枝賢それに父の三人が、バテレンを追放する理由を得るために、京都や堺にいるバテレンを招いて宗旨を聞こう、ということになったまではお話したと思います。その後、バテレンが結城山城

守の所に行き、詳しく話しました。私の父、高山飛騨守もその時までは反キリシタン派でバテレンの宗旨を論破しようと思って、バテレンの話を結城山城守たちと一緒に聞きましたが、論破するどころか反対にバテレンのキリシタン説明に感銘して結城山城守と父はその場で洗礼を受けました。バテレンをやっつけよう、とした人たちが反対にキリシタンになってしまったのですね。私が十二歳のときです。その時、父は松永弾正から沢城（現奈良県宇陀市榛原区沢）を預かっていまして、自分が洗礼を受けてから間もなくバテレンを城に招き、家族・家臣一同にキリシタンの教えを聞かせました。その結果、家族全員と多くの家臣が洗礼を受けました。私は良くわからなかったのですが、父の勧めもあり、その場で洗礼を受けてキリシタンになりました」

「その年齢で、キリシタンのことがお分かりであったか」

「分りませんでした。父の行うことを見て育ち、こうするものだ、ということを疑いもなくやっていました。二十一歳で高槻城主となったとき、父の後をどのようにやっていったらよいのか自分なりに考えました。丁度その頃（天正二年（一五七四）四月）イエズス会本部から日本の布教状況の視察に来られたバテレンの上司カプラル神父のご指導を戴きました。高槻城に暫くの間宿泊され、父共々直接のご指導に預りました。そのとき、十戒と慈悲の所作十四箇条を詳しく教えて頂き、それが人の世を素晴らしいものにするのに大切だということを確信しました。高槻では、貧しくて葬式も出せない人の葬式を、領民キリシタンと共にやってきました。そのようなことをやっているうちに、大名として領主としてのあり方の根本はデウスの教えにあり、と確信を持つことができました」

「なるほど、高山殿が高槻でおやりになったことはなかなかできることではない。ところで高山殿は千利休の一の高弟と聞いている。身どもも千利休から茶を教えて貰っているが、茶の湯の世界とキリシタンとは、高山殿の心の中でどのように結びついているのかお聞かせ願いたい」

『はい、千利休師の侘びの世界ですが、前田様ご承知の通り茶室そのものが何一つ贅を凝らしているものはなく、素朴そのものであって、花活けの容器と花を見ても、ただその辺から採ってきた竹筒に季節の野の花が一本活けられているだけです。掲げてある掛け軸または書を見ても、その時の茶席の目的に合わせた掛け軸または書をご自分の書斎から持ち出して掲げています。千利休師は、茶室では「心に飾りを持っていてはいけない。何も飾らないありのままの自分の心を見つめなさい。そこに自分の行くべき道がはっきりと見える」と教えられています。』

「それとキリシタンの心とはどのように繋がって行くのか」

「はい、昨日申し上げたキリシタンの十戒、慈悲の所作十四箇条にもありますように、キリシタンは自分の心には飾り物は一切付けることなく、常に自分の心が十戒や慈悲の所作の教えに抵抗なく素直に、また喜びを持って従えるキリシタン信仰を持っていなければなりません。狭い茶室においては、亭主も客も身に寸鉄も帯びず、亭主として茶を点てる、または、客として茶を戴く一連の所作の中でも、何の欲目も持たず自分の心を見つめる、そして自分の心の中に驕りとか、傲慢とか、そういったものがあればすべてをそこで捨て去って行く、そこにキリシタンのあり方との共通点を見出しています。侘びの世界では、茶室は質素で何の飾りもなく、自分の心も同様でなければいけないと思っています。ここに茶道があるのではないかと思っています。これは千利休師が身どもにこのように直接言われたことではありませんが、師の心は必ずやそのような思いであろうと確信いたしております」

「何かこの利家の心も洗われてくるような感じがする。難しい話はここにおいて、これから高山殿に茶を点てよう」

といって立ち上がり、右近を静かな坪庭に面した茶室に案内した。

坪庭には大きくはないが枝ぶりの良い松が中央に植えられ、庭の囲いに添って小ぶりの庭樹が数本間隔を置いて植えてあり、見るからに落ち着いた庭になっている。

茶室は坪庭を露地に見立てて、坪庭に面して躙口が作られている。

亭主の利家は無言で茶器・茶碗を清め、茶碗をお湯で温め、抹茶を入れ湯を注ぎ、茶筅でかき回した後作法通りに点てた茶を右近の前に差し出した。右近も作法通りに頂いた。

その後、茶碗、茶杓、棗、炉縁などを眺めたが、どれを見てもさすが名器揃いであった。

この茶室での短い時間ではあったが、利家の亭主としての点前作法を眺めながら、利家が右近を茶室に案内した意味を考えていた。昨日来、キリシタンとしての右近、茶人としての右近、武将としての右近など右近のことについてあれだけのいろいろの角度からの質問は、加賀前田家で右近を招くことを考えているからこそ質問が出されたと思った。

右近は、この二人きりの空間で利家から何か重要な話があるかと思っていたが、

「高山殿、さすが見事なご作法。亭主役の身どもも緊張した。茶室にお招きした甲斐があった。もう昼食になろう」

と言いながら茶室を出て行った。
座敷に戻ると昼食の支度ができていて、奥女中が利長を呼びに行った。

やってきて座についた利長が右近に
「高槻城下で賑やかなキリシタンのお祭りが行われたと、京でも大変な噂でした。どのようなお祭りをやられたのですか」
「あれは今から七年前の天正九年（一五八一）年三月のことでございます。キリシタン暦（こよみ）では「復活祭」といいましてその年の三月二十一日のことでございます。復活祭というのは、キリストが三日目に死人の中から蘇（よみがえ）った、つまり復活されたことを祝う日です。この日ははるばるローマからやってきた巡察師ヴァリニャーノ神父を中心に多くのバテレンが高槻にやってきて、セミナリヨ（注④）の生徒たちが白衣を付けてオルガンや他の南蛮渡来の楽器を奏で、何千人というキリシタン信徒が祝いに集まり、領内のみでなく畿内のキリシタンと、キリシタンでない領民も見物に集まって来たので、多分二万人くらいの人たちが集まったと思います。高槻領民キリシタン達は蜥蜴を灯した提灯を掲げ、それは賑やかで荘厳な復活祭でした」
「それは見ておきたかったな」
「はい、バテレンの神父たちも、異国の宣教でこのような賑やかで荘厳な復活祭が行われたことに驚いていました」

（注④）セミナリヨとはカトリック教理を学ぶいわば神学校であり、日本人信徒の子弟が入学していた。

ここで利家が
「高山殿、話は変わるが、天正十一年（一五八三）でしたか賤ヶ岳の戦いで、中川清秀殿と高山殿がそれぞれ二千程度の兵で大岩山と岩崎山を守備していたが、佐久間盛政の大群に囲まれて、中川清秀は戦死し、高山殿は多くの兵を損じながらも、残る兵士とともに後方にいた秀長様の陣に逃げ込まれた。あの時のお考えはどのようなお考えでしたか」
『はい、中川清秀のように自ら打って出て戦死することよりも、「戦はこれだけで終わるものではない。ひとまず退いて後日に功を立てる」との考えに基づき、無理な戦いを避けたものです』
「そこだよな。血気盛んも悪いとは言わないが、思いを後日に託す勇気を持つことが必要だ。利長、この生き方を良く覚えておきなさい。陣中だけでなく平時でもこの考えは大切だ」
「はい、父上」
「ところで高山殿は蒲生氏郷殿や細川忠興殿とは大変御

昵懇とお見受けするが」
「はい、お陰様で大変親しくさせて頂いています」
「皆さんは千利休のお弟子さんと聞いているが」
「はい、蒲生殿、細川殿も茶の道を極めておられます」

昼食が終わり、その日は利家・利長には来客があり、右近は篠田伊織と共に大阪市中の見物に出かけた。

夕食も篠田伊織と済ませた後、利家と利長から依頼されている十戒と慈悲の所作十四箇条を2枚づつ書きあげた。

翌朝、利家とともに朝食を済ませたあと、利家から
「高山殿、奥で二人だけで話しをしたいが」
と言われ、右近は「改まった話があるな」と感じて利家の後についていった。

そこは三十畳くらいある座敷で、利家は中央上座に座り、右近に正面に座るように促した。
右近が畏まって正座しているのを見て
「高山殿、加賀に客将として来ていただけないか。禄は些少であるが三万石を差し上げたい。職務は大所高所から領国運営についてのご意見を戴きたい」
と言い出した

続く

参考文献
完訳ルイス・フロイス日本史1・4　中公文庫
高山右近秘話　H・チースリク　聖母文庫
高山右近を追え　高橋敏夫　いのちのことば社フォレストブックス
茶の湯の心で聖書をよめば　同　右
高山右近　高橋敏夫
海老沢有道　吉川弘文館
高山右近　加賀乙彦　講談社
キリシタン大名高山右近　谷　真介　パウロ文庫
キリシタン千利休　山田無庵　河出書房新社
利休にたずねよ　山本兼一　文芸文庫
キリシタン史の新発見　岸野久・村井早苗　雄山閣
千利休「侘びの創造者」　平凡社別冊太陽
茶　同　右
茶　利休と今をつなぐ　千　宗屋　新潮社
武士道　新渡戸稲造　岩波文庫
茶の本　岡倉天心　講談社学術文庫
戦国武将と茶の湯　桑田忠親　宮帯出版社
日本史年表　歴史学研究会編　塙書房
日本キリシタン史　海老沢有道　岩波書店

高山右近　北国新聞社
聖書　共同訳旧新約聖書　日本聖書協会

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い

私達は広く同士の参加を歓迎致します。

「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。

同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。

☆維持会会員へのお誘い

本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。

季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。

＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。

郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二

加入者名　まんじ

千家尊福伝（三）

維新政府の神道政策に歯向った大教上

村上邦治

はじめに

明治四年五月、政府は全ての神社を、「国家の宗祀」とし、宗教活動を禁じた。これは、近代国家として、「政教分離」を掲げる一方、万世一系の皇室を、国家の基軸においたことから、生じたことであった。これにより、神話上の祖先である天照大御神を最高神とし、伊勢神宮を神社の頂点とする、新神社制度が確立した。

新制度により、出雲大社自体では、信徒を増加させるなどの宗教活動を、行うことはできなくなった。このままでは、大国主命を祀る大社の維持・拡大は難しく、ひいては、神道衰退を危惧した尊福は、官幣大社宮司、大教上西部管長という神道教化の要職にあるにもかかわらず、「出雲大社敬神講」を新たに組織して、宗教活動を再開する。明治六年には、これを発展させ、「出雲大社教会」の設立に、踏み切るのである。これが現在の「出雲大社教」（いずもおおやしろ教）の起こりである。

一　明治政府の宗教政策

維新当初、政府は、二つの宗教改革を断行した。

一つは、明治元年の「神仏分離」政策である。我国の古来千年以上続いた伝統的信仰は、神と仏を同時に信ずる、「神仏共存」であった。「記紀神話」の完成により、神道は形成されていったが、皇室自ら、仏教信仰は、伝来以降根強いものであった。奈良期聖武天皇は、「三宝の奴」と公言し、各地に国分寺の建立や東大寺大仏を造立させ、自らは出家した。天皇でさえ、神も仏も信仰し

そのため、神道の中で、祭祀儀礼と宗教性（冥界信仰、葬儀、国民教化等）を分離させ、万世一系の皇室と祭祀儀礼は非宗教であるとして、これを国家の直接管理としたのである。かくして、国家神道といわれる非宗教化した神道が誕生した。

新制度により、神社はすべて「国家の祭祀」とされ、神官は政府の任命とされた。出雲国造が祭祀する出雲大社宮司も、千家尊福一人となった。南北朝期から続いた北島家・千家家による二家宮司制は、ここに終結することになった。

二　大教宣布による教化運動

明治三年一月、諸外国のキリスト教布教攻勢に対抗すべく、「大教宣布の詔」を発布し、国民への神道教化運動が開始された。

当初、各藩から、数名の宣教掛が選任されたものの、神学の不備や、説教経験の乏しさから、成果はほとんどなかった。五年には、仏教諸派からの参加も認め、教務省を設置、一層積極的に働きかけることとなった。神仏双方から、多くの教導職が任命されたことにより、教化運動は、格段に強化された。特に、神社の神職は、全員が教導職を兼ねることになり、神道教化体制が、整備されたのである。

続けてきたのである。中世以降、神社では、「神仏習合」が、一般的となった。

維新政府は、天皇中心の王政復古を宣言し、祭政一致による統治体制を目指したため、神社の「神仏習合」は、看過できなかった。習合では、「本地垂迹説」にみられるように、仏教が神道より優越しており、これを排除したのである。しかし、討幕運動から維新樹立まで、神道思想の高揚は全国に波及した。しかも、永く僧侶に虐げられてきた宮司らの反感は根強く、全国的な廃仏毀釈運動に広がった。当初の分離意図と異なる展開に、政府は、これを鎮めるのに苦労した。

次は、近代国家を確立するため、「政教分離」政策である。欧州諸国からは、「信教の自由」を強く要求され、日本国内にキリスト教の自由な布教を、迫られたのである。

当時政府では、西欧諸国において、キリスト教が、人心帰一に大きな役割を、果たしていることがわかってきた。我国において、旧来の神道や仏教では、キリスト教に対抗できず、近代化を急ぎ、諸外国と伍していくに不可欠な国家の基軸は、万世一系の天皇しかないことが、共通認識になっていった。

しかし、国家の基軸を、天皇に求めることは、近代国家を標榜する、自らの政教分離政策に反してしまう。

宣教使による教化の具体的内容については、数度にわたり教示され、教化の向上が図られた。

明治三年の「宣教使心得書」では、第一に、教典を暗記して、講談することを指示した。主な経典としては、『古事記』『日本書紀』などの古典が主体であり、神道に関する教典が存在しないのが、最大の問題であった。

五年には、「教則三条」が定められた。

第一条　敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事
第二条　天理人道ヲ明ニスヘキ事
第三条　皇上ノ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事

これは「三条の教憲」ともいわれ、教化活動の綱領とされた。しかし、例えば、敬神とは具体的に何を指すのか、明確な説明はされなかった。

六年になると、現実の説教題目に使われた一一兼題、および一七兼題が定められた。

一一兼題　神徳皇恩・人魂不死・天神造化・顕幽分界・愛国・神祭・鎮魂・君臣・父子・夫婦・大祓

一七兼題　皇国国体・皇政一新・道不可変・制可随時・人異禽獣・不可不教・不可不学・外国交際・権利義務・役心役形・政体各種・文明開化・律法沿革・国法民法・富国強兵・租税賦役・産物制物

一一兼題は、平田復古神道の教説から作成されたものである。一七兼題は、近代国家の国民として必要な、文明開化の基礎知識に関するものであった。

このように、政府としては、教化内容の統一と具体化に努力したものの、元来、神道の誰もが認める教説は存在せず、教典の解釈も、宣教使個人により異なった。そのため実際の教化は、社会規範や一般道徳的な説教に、終らざるを得なかったのである。

神道自体の神学の未成熟さとともに、この時期、神道内部の激しい抗争、仏教諸派の反対運動が重なり、大きな成果が得られないまま、一五年には、休止状態に陥り、一七年、この教化制度は廃止に至った。

こうした政府の宗教政策や教化運動をみていた尊福は、本来の神道は、神社を中心とした地域信仰が基本であり、新しい国家神道体制に、納得できなかった。特に、江戸期以降、大国主命の神徳から、多くの信者や参拝者を有する出雲大社宮司としては、宗教活動の禁止に対

しては、我慢できなかったのである。

三　出雲大社の御師活動と講組織

御師とは、御祈祷師の略称といわれ、神社神徳の由来、信者の獲得、参拝者の世話、神札の販売、などが主な役目であった。

平安中期、京都の賀茂、石清水、日吉各社が、早くから活動していた。末期では、熊野三山の熊野御師が有名である。

鎌倉期は、伊勢神宮、富士、松尾、三島各社の活動が活発になった。

出雲大社の神官組織は、国造・上官・近習・中官などにわかれていたが、御師は、この中官があたっていた。

出雲大社は奈良期より、自活できるほどの社領を持ち、本殿造営については、戦国大名尼子経久や晴久の援助があり、御師活動に、頼ることは少なかった。

ところが、豊臣秀吉の朝鮮出兵時、陣夫の派遣要請を渋ったため、社領地の半分を没収されてしまう。これより、大社財政は、困窮化を招き、他社以上の御師活動が必要になった。しかも、出雲大社には、他社にはない、大きな問題を抱えていた。

一つは、その地理的な場所にあった。当時、大社参拝には、多くの困難が伴った。中国山地を超える山陽諸国からは、容易な旅ではなかった。海路を利用する参拝客は僅かで、「陸の孤島」の場所にあった。参拝客を引き寄せるのには、大国主命の神徳、大厦な本殿などを、触れ回ると共に、御師による熱心な勧誘が大切であった。

もう一つは、六〇年毎の遷宮費用調達という、経済問題であった。江戸期には、幕府からの出費はあったものの、全てをまかなうことはできず、御師活動の重要性は、一層強まった。

江戸期の遷宮は、三回施行された。

寛文七年（一六六七）　中世以来の仮殿式（高さ四丈）から本殿式（八丈）にて造営。
幕府銀子2千貫目下す

延享元年（一七四四）　現在の本殿造営。
幕府に三万両申し込むも、千両のみ下す

文化六年（一八〇九）　修復
幕府五百両下す

幕府の拠出金では、大幅に不足した為、諸藩や商人に、協賛金の依頼を行い、また、信徒からの幅広い支援金に、依存したのである。

因みに平成大遷宮（修復）の協賛金目標額は、八十億円である。

御師の活動により、各地に信仰が広まり、熱心な信徒の集まりである「講」が形成された。これら講は、出雲講や甲子講と呼ばれ、御師の下、毎年講を代表して、数名が参拝を行い、強固な信徒集団になっていった。そして、これら講組織は、遷宮時の重要な資金源になったのである。西日本に多くあったこれら講組織は、地元の氏子と並び、大社を支える主体であり、長年にわたり培った大きな財産であった。

四　出雲大社敬神講の結成

新神道政策により、大社自ら、宗教活動はできなくなった。このままでは、各地の熱心な信徒集団である講組織を維持することが、できなくなってしまう恐れがあった。さらに、政府の定めた宣教使の教化内容は、古来の神道とは、程遠いものであった。

こうした危惧から、明治六年一月、尊福は、新たな行動にでた。地元の氏子を中心とする「出雲大社敬神講」の結成である。

この敬神講を中核に据えて、各地の講へ連絡や案内、世話、指導を行わせ、出雲大社を支えてきた、講の維持と信徒の拡大を、行うことにしたのである。官幣大社である出雲大社が禁止された宗教活動を、氏子で結成された敬神講が行うことで、これまでと変わらない、大社信徒の維持拡大ができる体制をつくったのである。

五　出雲大社教会の開設

同年九月、「出雲大社敬神講」を改称して、「出雲大社教会」を開設した。

開設に伴い、「出雲大社教会仮条例」を定め、自ら管長に就任、教務省から、教会の認可を取り付けた。

明治七年には、教会規約、誓約、条例を定め、教会として整備をすすめた。また生徒局を設け、若手の人材育成にも着手した。

教会活動では、自ら各地の講に巡教し、信徒の拡大に奔走した。当初は、中四国が中心であったが、明治一一年には、神田神社内に、東京出張所を開き、関東にも拠点を設けた。

同時期は、神道事務局の祭神をめぐり、神道家・国学者を二分する大論争の最中であった。尊福は、その一方の旗頭であり、まさに超人的活動であった。

六　新教会の規約

信徒に掲げた教会の神徳大意は、次のようなものであった。

明確にしたところが、尊福出雲教学の特徴であった。

国学の宣長、復古神道の篤胤らの思想を統合し、新たに皇室守衛を加え、完成させた尊福の教説は、数年あとに巻き起こる祭神論争において、大半の神道関係者から、支持を受けることになる。

こうした神道思想を信ずる尊福からみると、政府の神社政策、神道非宗教化および教化運動は、あまりに浅薄で、稚拙なものに思えたことであろう。

七　尊福の決意

尊福が「出雲大社敬神講」を設立し、これを発展させ、「出雲大社教会」を発足させたのは、維新政府の宗教制度改革に対する危機感からであったが、自ら重大な決意をした上のことであった。

政府がすすめる教化運動の、教導職最高位にありながら、神道政策に、半ば反旗を翻すことになる尊福の行動は、官幣大社である出雲大社の宮司を捨てる覚悟をしたうえのことであった。それはまた、第八十代出雲国造を退くことでもあった。

出雲大社教会の管長として、本格的な活動に取り組むことは、この覚悟をなくしては、できないことであった。

しかし、大国主命の神徳および出雲大社の発展を、最大使命と考える尊福にとって、この覚悟は、少しも揺らぐことはなかったはずである。

このとき三〇歳前の若さながら、出雲大社宮司、出雲国造、西部管長の地位を、捨ててまで、新しく立ち上げた「出雲大社教会」の発展に、身を捧げる決意をしたのであった。

おわりに

明治初期、維新政府の宗教制度改革に対し、自らの信念を、行動で示した神道家は、尊福一人であった。そして尊福の決意は、明治一五年一月、「神官教導職分離令」により、現実のものとなる。

彼の敬神講設立の決意は、その後の出雲大社興隆に、大きく貢献した。現在出雲大社教は、百二十六万人の信徒を擁していることが、なによりの左証であろう。

文化庁編『宗教年鑑平成二四年版』による信者数ランキングは、全宗教の一五位、神道系では最大。一七位天理教、一八位PL教団。

ちなみに、全体一位神社本庁九千百一十五万人、二位創価学会、三位幸福の科学、四位浄土真宗本願寺派、五位浄土宗である。

（つづく）

（参考文献は最後に記載します）

「天之御中主大神は万生の元霊」
「高皇産霊大神、神皇産霊大神は造化の神業を掌り給う」
「天照大神は日界を主宰し、万物照臨の洪恩に洩る事無し」
「大国主大神は邪神を掃い乱暴を平らげ、大いに国土を経営して人民蕃育の道を開き、国土を皇孫に奉り後、幽事の大主宰となり出雲大社に鎮座し、皇基を守り、万民を愛護、生前死後大神の恩頼を蒙らざるは無し。幽政を分掌し氏子は愛育の恩徳を受けておる」

これが尊福の神道であり、大国主命に仕える出雲国造としての信念であった。「人の住む社会には、顕と幽があり、現界の支配者は代々の天皇である。幽冥界は大国主命が支配しており、日本全国の神社は、出雲大社が統轄して祭事をおこなうべきもの」とした。

顕と幽は、裏と表の関係にあり、大国主と天照は同列にあるべきとの主張を、明確に示したのである。

神道の基本に立ち戻り、天之御中主大神を最高神とし、その造化三神の下では、大国主と天照が、同列位にあることを論じることで、政府の天照最高神とする主張を打破しようとしたのである。一方、皇基（皇室）の守衛を、

真忠組始末記

山田嘉久

（一）

明治維新前夜、房総上総地方を舞台に「攘夷」を旗印にして、一陣の野分けのように吹き抜け、そして消えていった集団があった。

その名を「真忠組」という。

この時代、黒船来航（一八五三）により太平の夢が破れ、世情は騒然としていた。水戸の天狗党、上州の慷慨組、あるいは天朝組や赤報隊といった「憂国の士」を名乗った集団が各地に輩出していた時代である。

真忠組も楠音次郎、三浦帯刀の二名を首領として、上総国山武郡小関村（現九十九里町小関）の大村屋伊八の旅館に投宿、「真忠組義士旅館」の大看板を掲げたのは文久三年（一八六三）十一月十二日のことであった。

この日は恰も慷慨組や天朝組（渋沢栄一は首謀者の一人）などの攘夷決行の日となっていたことからも、真忠組の行動は赤木山、高崎、横浜、九十九里という江戸を囲む数か所での関東尊攘派による挙兵計画の一環だったことは明らかであった。

楠は菊水の紋を白羅紗で縫いこんだ割羽織を着込み、三浦は黒地に三つ引紋付の割羽織で、共に緞子の野袴を付け、大小を佩び、軍扇を手にしていた。同勢一同も小倉白地の揃いの羽織袴を付け、それぞれ大小を佩び、弓、槍、鉄砲を携えていた。

楠は九十九里の浪人、三浦は香取郡を徘徊していた浪人だったらしいが、実のところ、房総人なのか、他国の人間なのかよくわからない。一説には農民の出とも云われるが、この時代、あの有名な新撰組にしても隊長の近藤勇をはじめ隊員の多くが農民出身だったし、また長州の高杉晋作率いる奇兵隊も農民で組織されていた事を考えれば、この際、出自はあまり問題とならないだろう。

そのくらい、何百年も続いた「士農工商」の身分制度が崩れていった時代でもあった。

彼らは「われらは報国赤心の義士である。横浜へ討ち入り異人の毛唐どもを壊滅し、貧民を救う世直しをやる」とブチあげた。

それには武器も金もいる。「ついては二百両を借り受けたい」と、埴生郡立木村（現茂原市）の大庄屋高橋民之助に申し入れた。「返答によっては出陣の血祭りに」と脅されては出さざるを得ない。高橋家では二回に分けて二百両を差し出した。

立木の高橋家といえば当時、茂原きっての素封家で、当主は若い頃、江戸に出て東条一堂（茂原の生んだ著名な儒学者）に就いて漢学を学び、千葉周作からは剣を学んだ。帰郷してからは父の後を嗣いで鶴牧藩領五十六ヶ村の名主をたばねる大庄屋であった。

（同家に保管されている「高橋家文書」は有名、特に「御用留」（文久四年）は幕末の農民の状態を知るうえで貴重とされる。）

ついで茂原村月番名主太七方に現れ、「金三百両借用したい」。

相手は弓、槍、鉄砲を手にした集団である。茂原村組合では大あわてで協議し、百五十両にネギって大農家四十一名で負担した。その際の「茂原村組合割合出金表」が市立茂原図書館に現存している　負担者はいずれも茂原村およびその近郊の名主、組頭らである。

これを受け取った真忠組では「夷賊散帆の後には無利息にて相違なく返済する」と楠、三浦連名の借用証を渡した。

また埴生郡上永吉村千葉弥次馬方へ押しかけ、軍用金二百両、米百俵の拠出を命じた。家内一同恐怖し後日、持参するという請け書を差し出した。千葉家もこの地方の名家で、房総最初の眼科医を業として当主は代々、弥次馬を名乗る。

明治に入ってからは地方教育にも熱心で、私立大成館（後の県立長生高校）の初代館長、また大正八年には私立静和女学校（後の県立茂原高校）の初代校長ともなっている。

連日のように真忠組の資産家に対する強談判は続く。長柄郡では牛込村（現白子町）の網元長五郎も押し込まれたが、差し出す前に真忠組が壊滅してしまい事なきをえた。

また小草畑村（市原郡）では真忠組の風聞におびえ、踏み込まれないのに、百五十両を差し出す始末だった。当時の農民が帯刀したものをいかに怖れていたかを窺い知ることができる。

また一方で報国赤心の義士の呼びかけを行ったので、日増しに浪人の数は増え、最盛期には百九十六人にも達した（人数には異説あり）。そのため宿舎も九十九里の大野屋のほか、茂原妙光寺（藻原寺）や八日市場福善寺に分宿する迄になった。

日蓮宗本山である藻原寺はその昔、宗祖日蓮が鎌倉幕府の迫害を受けて馬上から船に移された時、その馬を日蓮宗徒の藻原城主斉藤遠江守兼綱が貰い受け、兼綱はその馬を日蓮と思って、菩提寺の裏山に放し飼いしたという縁起を持つ名刹。従って甲州の身延山に対して東身延とも云われその寺僧も三百名に及び、僧堂、堂宇の数も十数棟に及ぶ広大であったため、多数の隊員の屯所としては最適だった。

（丁度、京都の新撰組が旧屯所の壬生（前川邸と八木邸）が手狭となったため西本願寺に移したのと似ている。）

（二）

ところで真忠組はなぜ上総九十九里で旗揚げしたのだろうか。隊長の一人楠音次郎が小関村に近い井之内村で二年間寺子屋の師匠をしていたことが最大の理由だろうが、そればかりではない。

この一帯は文政八年（一八二五）に異国船が栗生村浦へ近づいて以来、弘化三年（一八四六）までに七回も片貝沖や作山沖などに現れている。特に同年六月の場合には、佐倉藩に動員がかかり、八百人の藩兵が四日間も井之内村に駐屯するという騒ぎにもなった。

平素から「納屋住居のもの共は異国船見請け次第、納屋百姓取締役の指図を受け」と近隣住民は海防問題に関心の深い地域だった。

この時、江戸で医師の用人をしていた楠は、わざわざ江戸から此処に転居してくるのである。楠らがこの地域に目をつけてオルグに入り、住民の海防問題への関心を攘夷へ導こうとしたとも考えられる。

真忠組の不思議さは強盗まがいの押し込みで集めた軍資金や兵糧を、村々の窮民に分け与えたことである。窮民に金品を分与するということは、この時代の他の攘夷派集団には全く見られなかった。また、全隊員に「姓」を付けさせて、武士、町民、農民、漁民の一切差別を認めなかった。

この事から最近、「真忠組には革命性と人民性があった」との評価もある。

もう一人の隊長三浦帯刀は幕末の著名な農政学者佐藤信淵の信奉者だったとする研究者もいるが、しかしどの程度、本気で世直しを考えていたかはわからない。

攘夷を唱えているが、倒幕までは考えていない。この辺にこの集団の幼稚性も窺える。

真忠組では楠、三浦連名で村々に触書を出している。

元来、触書とは幕府が下々にだす命令、伝達事項であるが、真忠組ではこれを真似た訳である。しかもその伝達方法まで真似て、寄場村で写しをとり次の寄場へ送ることを指示した。この触書は遠く上州路（群馬県）まで回達されたといわれる。当然、地元の長柄、埴生両郡村々には漏れなく回覧された。

さて、肝心の触書の内容だが、「われら（真忠組）は公朝の浪人である」という。

公朝、つまり「公儀幕府」の意である。今の幕政がおそまつだから、幕府の手助けをしてやるというわけだ。ついては下民を苦しめる悪賊がいたら「至急、我等が屯所に知らせよ」と。

「そのようなものがいたら、我等がよくよく真偽を糾し、江戸、水戸両組頭分に問い合わせ処分し、宿々在々の雛儀を救おう」。

事実、村人からの訴えは幕府の代官所よりも、真忠組の屯所に持ち込まれるケースが多かったという。

真忠組の裁きは殆どが公開裁判で行われた。例えば東光寺（真忠組の屯所となった藻原寺の塔頭の一つ）で行われた裁判では、それに先立っては次のような高札が茂原近辺に貼りだされた。

「箕輪の油屋圭助と百姓伍作との貸金いさかいの件
十二月二十七日巳之刻　東光寺支配所に於いて公開裁判に付す
東光寺支配所頭」

当時の庶民にとって、公開裁判など見たこともない。そのため暮の忙しいときにも拘わらず、広い東光寺の境内には大勢の老若男女が集まったという。そして日頃、悪名高い高利貸油屋圭助に入牢の判決が下ると、群衆は喝采を叫んだ。「真忠組さま、有難うございますだー」の声が方々から湧き起った。

真忠組の見事な群衆心理作戦だ。しかし時の幕府にとってこれほど屈辱的なことはない。

（三）

真忠組決起の情報をいち早く、江戸表へ連絡したのは、直轄の東金御殿詰、板倉家代官の富田善平である。東金御殿とは、幕府の始祖徳川家康が東金一帯を狩猟場としていたための宿泊御殿。家康は「大坂の役」で豊臣家を滅ぼした後の慶長十九年（一六一四）、側近の佐倉藩主土井利勝に命じて船橋―東金間（約三十七キロ）をほぼ一直線に結ぶ街道（東金御成街道）を作らせた。

昼は白旗、夜は提灯を掲げて昼夜兼行で工事が行われたので、別名「提灯街道」、「一夜街道」とも呼ばれている。

家康亡き後、秀忠や家光もこの街道を使って狩猟に出かけたが、彼ら将軍の休息、宿泊するために造られた御殿が船橋御殿（現船橋東照宮）、御茶屋御殿（千葉市若葉区御殿町）とこの東金御殿（現県立東金高校）である。

東金御殿は幕末には奥州福島三万石板倉家の預かるところとなっていた。福島藩はこの周辺に三千石近くの領分を持っていたので、少数ながら家臣を常駐させていた。

「東金近村へ浮浪の者寄集まり、種々の悪行を行い、おだやかならず」

報告を受けた江戸詰めの重役は驚いて、直ちに幕閣に報

告。その指示により福島藩五十余名の家臣を急遽、東金に下向させた。その後、「いまだ立ち去らず、ことのほか心配」の報告を受けた幕閣だが、それ以上の対策は打ち出さなかった。

一方、当時の関東一帯（関八州）の治安維持は関東取締出役の担当である。関東一帯特に房総地区は天領、旗本領、大名領、寺社領が入り乱れ、警察力が手薄となっていたので、特別に関東取締出役（房総地区で二十一名）という専門職を置いて、関八州御料（幕府領）、私領（大名、旗本、寺社領）の区別なく踏み込む権限を与えていた。ただし御三家の一つである水戸家領は管轄外とされた。（なお江戸市中は北と南の奉行所が月番制で交互に担当していたのは周知の通り。）

遅ればせながら腰を上げた幕府では事の重大性に鑑み、特に各藩から五百名を徴収したので馬匹十頭、大筒一門、鉄砲組百名の大所帯となった。

当初の計画では房州野島崎を回って九十九里片貝に上陸する方針をとったが、九十九里浜は波が荒くて恰好な港が無い。そこで千葉郡寒川港（佐倉領）から陸路東金へ出る作戦を取った。

寒川港は遠浅だが、江戸から下総への荷揚げや船積みは此処が唯一の港として利用されていた。港のすぐ近くには二十余件の遊女屋もあって、船橋、木更津とともに江戸便航には重要な港であった。

ともかく真忠組討伐の主力は東金御殿護衛の福島藩兵と関東取締出役の二本立てとなる。指揮は板倉家大将馬淵清助と関東取締出役馬場俊蔵（八州御目付役）である。

それに加えて、事件に関係している一宮藩（一万三千石）と多古藩（一万二千石）からも出兵し、更に万一を考えて佐倉藩（十万石）にも出兵を命じた。

佐倉藩は房総地区の諸藩の殆どが譜代の弱小藩の中にあっては、目立った雄藩であったが、幕府の命令にもかかわらず、すぐには動かなかった。

「真忠組は水戸の天狗党と深い連帯関係にあるのではあるまいか」

この年、水戸藩藤田東湖の四男小四郎は烈公徳川斉昭の尊攘の志を実現しようと筑波山に兵を挙げた。天狗党の乱である。

幕府はその追討を命じたが、肝心の水戸藩内では天狗党の支持派と反対派が対立していた。その後、小四郎は武田耕雲斉らと共に上京し、在京の禁裏守衛総督一橋慶喜（後の十五代将軍）に直訴までしている。

佐倉藩はそれを恐れた。もし真忠組が天狗党と連帯していたら、出兵する事によって、徳川御三家の一つ水戸藩の派閥争いに巻き込まれることになる。

しかし「これ以上、堀田殿（佐倉藩）の援兵を待つわけにはゆかない」。ごうを煮やした先発隊は佐倉藩の援軍を待たずに、楠音次郎らが陣取る大村屋旅館を奇襲し

た。

「まず浪人どものド肝をぬくべし」

討伐隊はまず大筒を表門から撃ち込んだ。真忠組も鉄砲隊で応戦したが、何よりも不利だったのが軍勢が三カ所（片貝、八日市場、茂原）に分散されていることだった。劣勢に立たされた真忠組は混乱した。

楠以下八名が討ち死、主だった者は捕縛され、他は裏手の作田川を渡って遁走した。

四散した浪士たちは関東取締出役の手で逐次逮捕された。

一方、ようやく出陣した佐倉藩は三浦が指揮する茂原藻原寺に向かうが、三浦以下は本隊援護のため片貝へ出発した後だった。

しかし三浦らは途中、剃金村（現白子町）で一宮城主加納遠江守の軍兵を主力とした討伐軍二百人と遭遇する。肩に重傷を負った首将三浦はいち早く片貝本陣が敗北してしまったことを察知して、「私心の謀叛ではない」と腰の大小を投げ出して簡単に降伏してしまった。

（このあたり、下総流山で簡単に白首した新撰組隊長近藤勇と似ている。）

降伏した三浦帯刀以下主だった者十二名は田間村（現東金市田間）の御仕置場で斬首獄門に付された。処刑された後、首と死骸は小関村新開と作田川の大橋の近くに三日間晒されたという。

その他の者は佐倉へ護送され、更に真忠組に協力した者も処罰された。その協力の程度に応じて遠島、押込、手鎖、たたき、過料、叱り、役義取上げなどに処された。

「真忠組討伐始末記」によれば幕府軍戦死者十八名、重傷者二十余名に対して真忠組の戦死者五十二名、負傷者百数十名、だった。

ともあれ、二百年余も銃火剣劇の響きを聞くことの無かったこの地方では、まさに驚天動地の大騒動だった。

大村屋襲撃や斬首獄門を見物に出かけた民衆も多く、討伐のかわら版まで出回った。

明治の「御一新」は、すぐそこまで来ていた。

（現在、九十九里町作田川河口付近の道路沿いに「真忠組志士墓誌」が人目を憚るように、ひっそり建っている。）

密室銀行（十五）

匠　克仁

前回はどこまで書いたっけ？なんかプロレスの話で終わった気がする。そうだ、損保業界の合併の話を書いたのだ。損保系生保（ひらがな生保）の合併の話も書こうとしていて、締切がきた。

ゆうゆう生命は、みらい生命と合併し、きらめき生命になって、しあわせ生命とエビス生命と合併してできた、あいおい生命と合併して、三井住友海上あいおい生命になった。

というのはウソみたいなホントの話であるが、小説ではもう、ひねり欲しい。

ゆうゆう生命は、かんぽ生命と合併して、ゆうゆう窓口で扱うようになった…というのも面白くない。

ゆうゆう生命は、とんとん生命と合併して、パンダ生命となった…というのは、もっとくだらないなあ。

ゆうゆう生命は、あけぼの生命・むらさき生命・やまぎわ生命・はるは生命などと合併して、『はるはあけぼのゆうゆうしろくなりゆくやまぎわすこしあかりてむらさきだちたるくものほそくたなびきたる生命保険株式会社』が誕生したのである。

【前号までのあらすじ】

東西銀行赤坂支店の金庫室の密室で支店長が殺された。密室の死体と一緒に行員の竹森も閉じ込められていた。

（連載開始が、平成二十二年五月号（116号）だから、四年が経過した。

小説ではまだ二週間も経っていない。二週間は約二十五分の一年だから、小説上の時間の流れは現実の百倍かかっている。

この後、主人公が逮捕されて、最高裁で無罪判決を勝ちとるまで十年かかるとすると、単純計算で書き終えるのに、千年かかる。しかも、最近は十倍くらいスローダウンしているから、一万年かかるかもしれないなあ。

あまりいじると、SMの人…じゃなかったMSの人、三井住友さんに怒られちゃうなあ。

モフタンとバルタンの話を書いたことは覚えているのだが、東西銀行の頭取はモフタン星人だったと書いたのだっけ？

書き始めて四年も経つと、犯人が誰だか忘れてしまった。

いったい誰が犯人なんだろう？　ぼくは誰を犯人にして書き始めたのだろうか？

ついでに、密室トリックもすっかり忘れてしまった。書き始めは日本のミステリー業界に衝撃を与えるトリックを思いついたのだが、書いている内にすっかり忘却の彼方である。

たしか主人公が密室に閉じ込められて、隣に死体があって、外から鍵がかかっている。もちろん密室の外側からトリックの工作がされているので、主人公が密室殺人トリックを使ったわけでないのだが、当然ながら犯人のように疑われる。

どういう密室だっけ？

たしか銀行の金庫室で格子扉と耐火扉が閉まっていて、支店も閉まっていて、しかも、その三つの鍵は死体の手に固く握られていて、金庫室を映している防犯ビデオも盗まれていて、犯行時間から発見時間まで犯行する時間がほとんどなくて、犯行現場は偶然で事前に犯人が知り得なくて、凶器が金庫室内にある踏み台で偶然使用されたもので…。

つまり、密室トリックを解き明かすのは…

1　金庫室の格子扉のシリンダー錠のトリック
2　金庫室の耐火扉のダイアル錠のトリック
3　金庫室の耐火扉のシリンダー錠のトリック
4　支店の通用口の数字錠のトリック
5　支店の通用口のシリンダー錠のトリック
6　死後硬直した死体の手に鍵を握らせるトリック
（死後硬直した死体の手自体が密室になぞらえている）
7　時間的な密室のトリック
（そもそも時間的に犯行が不可能）

この密室トリックについて糸をほぐすように解決しないといけない。

さらに謎は、重い凶器と防犯カメラの映像とメモの指紋、動機についても解明する必要がある。

不正融資の資金の流れと政治資金規正法もからましている。正直いって、作者本人がこんがらがっているのである。

他人事ながら、これを解くのは大変だなあ。よくもこんな無謀な小説を書き始めたなあ。

そもそも忘れたんだろうか？もともと見切り発車で書いている内にトリックが思いつきそうだと思いながら書き始めたかもしれない。四年も前のことだから忘れたな。最近は忘れたことも忘れることが多くあるなあ～～～。忘れられた小説は、存在するのだろうか。

量子力学の世界では、光は粒子か波かという問題があったが、解決している。光が粒子か波かは、人間が観測しない限り確定し

ない。ハイゼンベルクの不確定性原理である。

人間の存在つまり観測するということは日から光が出るので、観測対象の光が影響をうえられて、粒子か波かは決まらない。光でも人間という存在が観測しない限りは確定しない。

宇宙物理学の分野では惑星形成宇宙論から人間原理宇宙論へと転換している。

人間原理宇宙論というのは、かなり乱暴に極論すれば、人間が存在するから宇宙は存在する、観測者である人間が存在しなければ宇宙は存在しない、という理論である。

人間原理宇宙論は不確定性原理に基づく宇宙論である。

『密室銀行』なる小説という小宇宙では、ぼくという観測者の存在が失われつつある。

ぼくが書くことを止めてしまえば、不確定性原理と人間原理宇宙論により、『密室銀行』なる小説は最初から存在しなかったことになる。

デカルト的な演繹的帰結でも「われ思うゆえにわれあり」と同じ理論で「これ思わないゆえにこれなし」なのである。

ちょっと苦しい言い訳だなあ。

そうだ。書いている内に、良い解決策を思いついた。

この後、バルタン星人を登場させることにしよう。バルタン星人は時空を超えることができるのである。金庫室なんて楽に通過できる。実は、バルタン星人は人間に化けることができるのである。これで、犯人も密室トリックもできあがった。

ここまで書いて、ぼくの人格の中から悪徳代官が現れた。

「メチャクチャな小説で読者をかどわかしおって。たくみ屋、お主も悪よのう。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。」

あれ。なんか日本語が変だ。「かどわかす」でなく、正しくは「たぶらかす」である。どちらも悪徳代官が使いそうな古い言葉なので、ぼくの脳の中でバルタン星語の日本語翻訳を間違えた。

やはり、日本語は正しく使わないといかーん。いまどきの若ものは正しい日本語を使っとらん。けしからーん。

「かどわかす」は「誘拐」の字を使って「拐かす」である。女子（おなご）をだまして部屋に連れ込んで、和服の帯をひっぱって、スケートの三回転半のように人間コマにして、あれ～～～～～～と服を脱がすことである。

「たぶらかす」は漢字で「誑かす」で、だますことである。字面の通り言葉で狂わすである。アラビアのだます呪文のアブラタカブラみたいである。ちなみに「女たらし」も漢字で書くと「女誑し」である。「誑」は、ぼくの好きな漢字である。

読者を誑（たぶら）かす読者誑（たら）しになるのが、ぼくの夢である。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。ふおっ。

最近は本文を書くよりも、前号までのあらすじの注釈を書いている時間の方が長いなあ。

それでも前回は三ページで終わったが、今回はもう三ページも書いた。やたらと、ふおっが多い気がするが、気にしない）

十二

八月最終土曜日の殺人事件から二週間目の金曜日である。二週間たらずしか経っていないのに、竹森にとっては四年も経過しているように長く感じた。

竹森は以前から仕事のストレスで胃が痛くなっていたが、事件のストレスで直腸が痛くなった。

入院中に医者にそのことを伝えると、いきなり直腸鏡をつっこまれて、ひ～ひ～言った。

九月第二週の金曜日午後三時前に、二人の刑事が窓口に現れた。竹森に対する殺人事件の取り調べをしたいということであった。

竹森は仕事がたまっているので、終わってからと言った。しかし、支店長が応諾したので、断ることができなかった。

銀行内で訊問されるよりも、竹森としては警察署内で受ける方が数百倍も精神的に楽である。

警察の訊問を受けていることは、銀行本部に報告されるであろう。

竹森は自暴自棄な気持ちになりながら、刑事の待つ小会議室に入った。小会議室となっているが、映画に出てくる取調室のようである。

刑事の訊問を受けるのは、今回が三回目である。

病室に刑事が来たのは事件の翌日で、その時は沢木雅子が追い返した。

支店長の葬式後に、退院した竹森を独身寮に刑事が訪ねてきた。その時は被害にあった状況を訊いてきた。

持井建設の資金の流れのメモの話があり、メモから竹森の指紋の見つかったと聞いた。

今度は容疑者扱いだと竹森は覚悟した。二人の刑事も前回よりは厳しい表情である。

（殺人事件の容疑者になったら、たとえ後になって潔白が証明されても、この銀行で生きていくのは難しいな）

この殺人事件に巻き込まれたことで、竹森は銀行員人生をあきらめた。

西都銀行は「向う傷を問わない」という経営方針であった。積極的な仕事で失敗しても、それを上回る仕事をすれば良しとされた。というよりも、すねに傷を持つものが多いくらいであった。

東城銀行は「火のないところに煙はたたない」という理屈で噂をたてられただけでも本人の責任という風潮があった。東城銀行では、事故や不祥事などの際に「疑わしきは罰する」という処分が伝統的にまかり通っていた。

例えば、顧客との情実融資などの内部告発が有ったとする。事実関係を確認する前に、先ず事務部またはシステム部転勤として表面的には人事異動という方法を使うのである。

本人の弁明の機会が与えられず、事実上の欠席裁判である

疑われること自体が悪い、という理屈であるが、冤罪が発生する土壌でもあった。

人は大量に余って掃いて捨てるほどいるのであるから、少しでも疑いの有る人物は子会社などへ転籍させていた。合併して、もと東城だけでなく「銀行員は腐るほどいる」と言われている。腐り物は早く処分するに限るぐらいの感覚である。

竹森の同期で、ヤクザの親分と似た名前の行員がいた。本人は冗談で「実はおじさんなんです」と言ったら、翌月にシステム部に転勤になった。

その翌月には、システム部は部員ごとNTTの子会社に売却されたので、銀行員ですらなくなり、半官半民の会社員になった。

もちろん全くの赤の他人であったが、一度、社外に放出した行員を呼び戻すほど、銀行は情け深くない。

前回と同様に年配の及川刑事から事件に巻き込まれるまでの経緯を訪ねられた。記憶を失うまでの事実を、竹森は答えた。

「ところで、あなたは左利きですね」

突然、話を変えて、和加刑事が質問した。

「そうですが。それが何か」

格子扉の隙間から左手首を入れて、鍵を格子扉の鍵穴に差し込んだことを竹森は思い出した。

鍵穴は内側から右にあったので、右利きであれば苦戦したろう。

「死体の後頭部の傷ですが、左半分の方が大きかったのですよ」

和加刑事の言葉は謎かけのようだが、竹森は理解した。

(重いものを持ち上げるとしたら、左肩に持ち上げると考えているのだろう)

相手の背後から襲うのであれば、犯人はそのようにしたと竹森は推測した。

混乱している状況なのに、さらに左利きの話を持ち出されると、余計に事件の収拾が着かなくなる。これが小説だったら作者は困るだろうと竹森は思った。

「例えば、あなたは杭を打つときでも左にふりかぶるのでないですか」

杭打ちの例えに竹森は少し苦笑したが、そうですがとあいまいにうなずいた。及川刑事が質問を引きついた。

「金庫室の中で、あなたと支店長との間に何があったか分かりませんか」

最初から金庫室の鍵が開いていれば、支店長は竹森に持井建設の稟議書を持ってこいと命令するだけで、一緒に金庫室に行くこともなかった。

そもそも稟議書を金庫室に入れたのは、金曜日の帰り間際に稟議書キャビネットが閉まっていたので、仕方なくしたことである。

もし稟議書キャビネットに片づけていれば、竹森が金庫室に行くことは無かった。二人そろって金庫室にいたのは全くの偶然である。

「特に何も無かったと思います。ただ書類を取りに行っただけです。記憶を失くしましたので…」

「どこまで覚えていますか」

及川刑事は続けて質問した。

「支店長と一緒に地下の金庫室に降りる階段の途中までです」

階段で、支店長は壁に向かって相撲の張り手をするように腹立たしげに叩きつけたのである。そこまでの記憶は残っていた。

その話は雅子にもしていた。雅子はなぜか不思議そうな顔をしたが、納得したような様子に変わった。

「実は金庫室の隣の倉庫の金属バットの一本からルミノール反応、被害者の血液の反応が出ました。ただし、微量なものです」

和加刑事が説明し、さらに続けた。

「もう一つ金庫室の中のL字型アングルからもルミノール反応が出ています」

「エル…なんですか。それは」

竹森が質問すると、和加刑事は会議室内の鉄製の棚を指さした。金庫内の棚と同じものが備え付けられている。

L字型アングルとは、断面がL字型で穴の多いスチール製部品である。L字の部分は両方三センチほどである

が、長さは様々なサイズがある。

高さ二メートルのL字型アングルの支柱が四本在り、短めのL字型アングル四本を水平方向に金具で固定し、その上に棚板を載せる仕組みである。金庫室も会議室も四段分の棚板が在った。

書類を段ボールに詰めて保管するため、東西銀行の支店にはL字型アングルでできた棚が多い。

「そういえば、スチール棚の部品が金庫室に在りました」

竹森はL字型アングルという名前を知らなかったので、そのように答えた。

(スチール部品は金庫室の奥の方に置いていた。自分達に気付かれずに犯人が行けないのでないか)

部品が金庫室に在ったのを思い出した。一メートルとぐらいの部品がスチール棚の横に置かれていた。

「いえ。その部品ではありません。組み立てたスチール棚の四段ある棚の一番上の棚底です。そこのL字型アングルからあなたの血痕が検出されました。あなたが立っていると、ちょうど頭の位置になります」

和加刑事の言葉がどのような意味を持つか判断が付かなかったが、竹森は自分にとって不利になる気がした。

「状況から判断すると、犯人は、正面に向かい合った状態から、あなたの後頭部を棚に打ち付けたことになる。ということは、あなたは真正面から犯人を見ていたのですよ。犯人はバックから突然あなたを襲ったのでない」

カミングアウト

匠　克仁

ぼくには告白することがある。

ぼくは男性よりも女性の方が好きだあああ！

ん？あたりまえ？男と女と書き間違えたと思った？いやいや。正真正銘の女好きである。

正確に言うと、ぼくは99対1くらいの割合で男性より女性が好きである。いや、8対2くらいかなあ。いやいや6対5くらいの割合で、絶対に女性の方が好きなのである。

……という冗談を書いているから、よく誤解される。

単純に女性が好きなのである。

ぼくのことを女性嫌いと思う人がいるので、その誤解を正していこうと思う。

でも、告白して、三十年くらいの喉元にひっかかっていた魚の小骨が取れたような、すがすがしい感覚である。

はあ～～。すっきりした。

話は変わるが。

まったく、いまどきの若ものは日本語がなっとらん！！一日本人として全く嘆かわしい。

外来語なんて特にひどいものである。外来語を間違うというのは原語と日本語の両方に対する冒とくである。日本人としてだけでなく、地球人としてなっとらん！！！

例えば、表題の『カミングアウト』という言葉であるが、日本においては正しく使用されていない。

英和辞典を引くと、次のように定義している。

【coming - out】

ホモであることを公式に認めること

『研究社 新英和中辞典』

この辞典には2つの意味が載っていて、もう一つは『社交界へのデビュー』である。それ以外に意味は載っていない。

ぼくは英和にかぎらず、かなり辞書を引く方だが、なかなかストレートな表現に圧倒されることがある。

前に『悲劇』を国語辞書で引いて、のけぞったことがある。

英語での意味を調べると、『Come outの名詞形』の他に一つの意味しか書いていない。

a figure of speech for lesbian, gay, bisexual, and transgender (LGBT) people's self-disclosure of their sexual orientation and/or gender identity

つまり、レズ・ゲイ・両性愛・性同一性障害の告白である。当然ながら、ぼくはどれも該当していない。

カミングアウトの本来の意味を知っている人が、この題名を読むと誤解するだろう。やっぱり、この作者はそういう趣味嗜好の人物なのだと。

『液体のてんとうむし』は、乙女チックでメルヘンチックな文章であり、『鉄のペリカン』はお尻の穴につっこまれて、ひ～ひ～言っており、『金銀妖眼』は性の問題を書いているので、勘違いされるかもしれない。

しかし、こういう問題はきちんとしておかないといけないと思い直した。

後に書くが、誤解されてきたのは、それで問題が生じたからである。

カミングアウトの言葉がなぜ、本来の意味から外れたのだろうと考えてみた。

今では男性が女性に好きということまでカミングアウトなど使っている。

「彼女にカミングアウト」というのを単に好きと言ったくらいで使っている。

この言葉を正しく表現すれば、「彼女に対して、あなたは恋愛の対象ではなく、ぼくの恋愛の対象は、あなたのような女性でなく男性であることを彼女に伝えた」ということである。

調べる内に、この言葉には色々な変遷というか、悲劇がまとわりついていると感じた。

カミングアウトという言葉が広まったのは、薬害エイズだと思う。血友病の方が薬害でエイズ感染したことを公表したのに使われた。

もちろん同性愛者がエイズに感染したことも、血友病患者がエイズに感染したことも、同じくらい不幸な事実である。

その事実を公表することをカミングアウトと表現することに、ぼく個人としては違和感を抱くのである。

同性愛者に対する偏見はないつもりであるが、同じエイズ患者であれば、同性愛者と血友病患者とは自己責任の重みが明らかに違うと感じる。

薬害エイズの影響か、カミングアウトというのは、病気を告白することに使われるようになったと思う。

病気の中でも、なかなか人に知られたくない病気、特に精神的な病、うつ病をわずらったことを告白するときに使われている気がする。

病気の告白と他に、原語の本来の意味でない使われ方をしているのが、自分の出身に関する告白である。

被差別部落の出身の人がそのことを公表するときに使用されている。

ぼく個人としては、その使い方は問題があると思う。なぜなら、英語圏の言語に『被差別部落』などという非人間的な概念が存在しないからである。

実際に、日本語化したカミングアウトの意味を調べてみると、被差別出身の告白する例が載っている。

直腸鏡をつっこまれて、ひ〜ひ〜言った経験をカミングアウトする。

自らの体を切り刻んで、ひ〜ひ〜言った経験をカミングアウトする。

などなどというのも正しい用法ではないと思う。

ということは、ぼくは生まれてから一度もカミングアウトしたことがないことになる。

おそらく、世の中の人間は、ぼくの人となりをみて、あるいは、まんじの文章を読んで、女性に興味の無い、よほど真面目な堅物と思っているに違いない。

けっしてけっしてけっして、そんなことはない。

ぼくは、女性が好き、というレベルでなく相当のド助平である。常に頭の中でエロチックな妄想がハリケーンのように渦巻いている。

街を歩いていても、ぼくの下半身センサーがピピピとグィグィグィと反応する。

ときどき股間がロケットのように推進して、ぼくを引っ張っていくので、ついていくのがやっとである。

ぼくがリンボーダンスのようにのけぞって歩くことがあるが、そういう状態である。

実はこの文章も脳が書いているのでなく、股間がかいているのである。

ぼくの股間から、ピノキオの鼻のように、孫悟空の如意棒のように肉棒が飛び出して、一本指打法でもない、一本立打法でキーボードを打っているのである。

ぼくのパソコンがラップトップでまさに膝の上に乗せて打つのだから、ちょうど良い位置関係である。

その股間の物体は、ふだんはナマコのように軟体動物なのであるが、ときどき甲殻類になる。特に朝方は伊勢海老のようにパッキンパッキンである。

この物をぼくは『煩悩くん』と呼んで、息子のように可愛がって、よくなでなでしている。

その煩悩くんは鎌首というか亀首をもたげて器用にジッパーを内側から引き下ろして、にょいっと飛び出してくるのである。

(ところで、『もたげる』という日本語を今どきの若ものは知っているのだろうか。『台頭する』を難しい漢字で書くと『擡頭する』だが、その字で『擡げる』である。)

煩悩くんが勝手にキーボードを打ち出すのである。ぼくが変な文章をかいているときは、煩悩くんのせいである。

普段は、この煩悩くんと両手の指の合計十一本を駆使して、原稿を打っているのである。

十一本打法は便利なのだが、電車の中で打っていると、猥褻物チン列罪になってしまうのが、玉に傷である。

これくらい正真正銘の筋金入り裏筋金玉入りのドスケベなのである。

ん〜〜。さすがにこれ以上かくと、まんじの出入り禁止になってしまう。

そもそも、ぼくは常にリアリティを追求したエッセイを書いている。

ちなみに『鉄のペリカン』は断じて小説でなくエッセイである。というかルポルタージュというかドキュメンタリーであるし、他のもそうである。

ぼくの過去のエッセイは全て皆さんが読んで「あるある。自分も似たような経験をした」と思わせるようにしている。そんな同感を持っていただけるような、現実感のある文章である。

こんなことを書いていると、他のエッセイまで作り話と誤解される。

今回だけは一割ほど誇張をして書いてしまったことをカミングアウトする。

ぼくは書き間違いが異常に多いのである。校正で見つかっていつもヒヤヒヤする。

実をいうと、冒頭二行目の文章で、最初は男と女を書き間違えたのである。レディーファーストを考えて「女性の方が男性よりも…」と最初に書いたが、英語のrather thanと反対に日本語文法上は「よりも」が先で「の方が」が後にさせるのが正しいと考えている内にこ

んがらがって、逆転していた。やばい。やばい。
男と女といった反対の意味を書き間違えるのは、意味性錯語という現象である。
意味性錯語の対語は語性錯誤といって、意味に関係なく語感で間違える現象である。
例えば、バブル崩壊とバルブ崩壊である。バブルが崩壊したらお金がなくなるが、バルブが崩壊したらお水がなくなる。

年頃の年齢になると、縁談とか勧められたり、結婚しないの？と言われたりして、うんざりすることがあると思う。
これには究極の断り方があるので、伝授しよう。
ぼく自身は図らずもこの作戦を使ってしまった。
銀行というところは、三十才前くらいになると、結婚していないと色々と言われる。
銀行のある人から、結婚しないのかとか、同じ支店の○○さんはどうだとか、仲人を頼みたいなら早くいえとか、やたらと結婚について言われたことがある。
ぼくは七面倒くさくなって、「女性に興味が無いんです」という、まーーーーったく心にもないことを言ってしまったのである。
相手はとまどったように「男の方が好きなのか」と問い返した。そんなわけないだろうと言いたかったが、ますます七面倒くさくなって「そうです」と答えた。
その次の瞬間、
ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン
と空気が瞬間冷凍された。相手はまるで彫刻のように固まって、口をポカンと開けている。
ぼくもさすがに気まずいなあと思ったが、次の言葉が見つからない。
「おれだけは狙うなよ」
言われなくても、狙わない。
当時は、他の人からも結婚しないのかとわずらわしく聞かれていた。ところが、この後、たったの一度も結婚の話を職場でされたことはない。
おそらく、この話がぼくの人事データに記録されたのであろう。
このような空気が瞬間冷凍する瞬間は、本件を含めて、ぼくの人生で二回半くらいしかない。
もう一件は、ぼくの本名にかかわる話である。
ぼくは本名を絶対に公表しないことに決めている。ぼくの本名は絶対に秘密のトップシークレットである。
ぼくの本名は、ある人物ヤクザとよく似ている。ぼくの本名から一文字を抜くと、同姓同名になる。
なんとなく親子や親戚にありそうな名前である。
ヤクザ界でナンバー2と言われた人なのだが、白昼ホテルのロビーで銃殺された上で、関係のない民間人が巻き添えで銃殺された。
もちろん名前は偶然の一致で、全くの赤の他人である。
銀行の同僚が冗談っぽく「あのヤクザの親分って、お前の親戚じゃないの」って聞いたのである。
ぼくもまったくの冗談で「実は、おじさんなんです」って言ったら、周りの空気が
ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン
と瞬間冷凍されたのである。
相手は持っていたボールペンを床に落とすと、カラカラと音を立てて転がった。
しかも、その場には二十名ほどいて、別の二か所でもボールペンがカラカラと音をたてて、転がっていった。
二十人くらいいた人間が一斉に息を呑む感じで、会話や動作を止めてしまったのである。
あまりに見事に空気が凍ったので、ぼくも「冗談です」と言い返すタイミングを失ったのである。
空気が瞬間冷凍するのを二回半と書いたが、あとの半回は、ぼく個人とは関係のない他愛もない話である。
会社のカラオケで新入女子社員が『私がオバさんになっても』という曲を歌いだしたときに、ある一空間の空気が見事に瞬間冷凍したのを目撃しただけである。
またまた話は変わるが、ぼくが新宿二丁目を歩いていたときの話である。

ぼくは大学が新宿区内で新宿区内に下宿して、最初の勤務先も新宿三丁目だったので、新宿二丁目というのは地理的に身近であった。
学生時代に新宿二町目を歩いていたら、美人に道を尋ねられた。宝塚の男役みたいな、背が高くて肩パッドを入れたようなスタイルの良い美人である
二十歳そこそこのぼくと比べると、年は十近く上かもしれないが、年齢不詳の美人である。どこかのホテルを探しているようであった。
ぼくはよく道を尋ねられる。自分で分からないと一緒に探すので、その時もそうした。ふと見ると、その美人に、のどぼとけがあるのに気付いた。それから……
……
オカマを掘られたのである。
突然、お尻の穴にズドンと衝撃が走った。ポッカリと穴が開いたままである。
後ろは穴が開いたままで傷だらけである。ここからガスが漏れでもしないかと心配である。
あれ。なんか書いている内に話が混ざっている。
学生時代に近所を散歩していると、ニューハーフに道をたずねられた話を書いていた。
途中で、最近、車を運転中に後ろから衝突された話に変わっている。
信号待ちしていたら、後続車に追突されたのである。

追突の衝撃はぼくのお尻に伝わった。
車のバックバンパーに穴が開いたというか、裂けてめくれていた。車のお尻は、中古車なのでもとからボロボロである。まさかガソリンは漏れないだろうが、心配だった。

ぼくの場合は、あまり女性にもてたためしがない。男性に好かれたということがある。男性に好かれたというか迫られたというか襲われそうになったことがある。
男性と二人で飲んで、ぐでんぐでんに酔っぱらって、終電が無くなって、どこか一緒に泊まって……
この全く同じパターンを三回経験している。それにしても経験から何も学ばないなあ。
一人は、ぼくに自分が同性愛者だとカミングアウトした。カミングアウトされても困るなあと何も反応しないでいたら、何もなく済んだので良かった。
一人は、ぼくにいきなりキスしてきて、気持ち悪くて、なんかトラウマになっている。
一人は、バックから突然ぼくを襲ったのである。酔いつぶれたぼくのパンツを脱がそうとしていた。ぼくは、ほ〜ほ〜のて〜で逃げ出して危うく難を逃れた。
ぎりぎりのところで、ぼくは操を守ったのである。もう少し飲んでいたら、ヤバかったなあ〜♪
これはセクハラなのかパワハラなのだろうか。

ぼくのお尻の穴は、ずっと操を守り続けているのである。唯一ぼくの操を奪った相手は、鉄のペリカンつまり直腸鏡だけである。
直腸鏡とは仮の姿で、あれは、地球侵略のためにやってきたバルタン星人だったのでないかと想像している。
ぼくのお尻の穴に入った直腸鏡は、バルタン星人のハサミで、実はバルタン星人本体が変身していたのである。
バルタン星人はハサミの先から光線を発射して、ウルトラマンと戦っている。うまく相手のお尻の穴に命中すると、相手はバルタン星人になるのである。
お尻の穴に突き刺した直腸鏡の先端からバルタン光線を発射するのである。そうして地球人を洗脳して、肉体をバルタン星人が乗っ取るのである。
やられた地球人は外見そのままであるが、実はバルタン星人に変身しているのである。そして、他にいる地球人姿のバルタン星人と一緒に地球制服をもくろんでいるのである。
ぼくはお尻の穴にバルタン光線を打たれたのである。
ぼくはカミングアウトする。実は、ぼくは地球人の姿をしているが、実はバルタン星人なのである。
バルタン星人となったぼくは銀行の金庫室だろうが、通り抜けることができるのである。
そして地球を征服するのである。
ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。

エロエロ…いや、いろいろ書いたが、ぼく個人としては愛するなら男性より女性である。
何が正しいかと何が好きかは別次元の問題である。
それから、ぼくは博愛主義者のつもりである。
出血大サービスするほど気前がよいので、お尻の穴の一個や十個くらいどーぞ自由に持ってけーくらいの感覚である。
こう見えても心が広くて、ケツの穴の大きい人間なのである。
ぼくのことを同性愛者と誤解する人がいたが、あえて否定しなかった。
否定することで、同性愛者を差別することになるのでないかと思ったのである。
同性愛者を嫌うという感情が、ぼくには全く無い。
これを書いているときに、ある新聞記事を読んだ。マレーシアの元副首相が同性愛で禁固五年の判決が出たという記事である。
そういう記事を読むと、同じ地球人いや銀河系人として悲しくなる。
前に同性愛者から好かれたらどうするの？と質問されたことがあった。
ぼくにとっては、同性愛の男性から好かれるのは、自分が好きでない女性から好かれることと同じである。
好きでもない女性から好かれたらどうするの？と聞かれるのと同じである。
そもそも性差というのは二分できるものでなく、割合なのである。染色体ＸＸが女性で、ＸＹが男性という考えは誤りである。
クラインフェルター症候群のように性染色体がＸＸＹの人間もいる。
愛した女性が、実はスワイヤー症候群の女性と知った場合に愛することをやめるのだろうか。
スワイヤー症候群は、性染色体はＸＹ型であるが、Ｙ染色体上の性別決定遺伝子（ＳＲＹ遺伝子）が無いので、正常な女性となる。
（ＳＲＹ遺伝子が誤ってＸ染色体にくっついたため、ＸＸ型でも男性になる場合もある。）
スワイヤー症候群と知って、相手の女性に対する愛情を失うということは、そもそも最初から相手を愛していなかったのだろう。
女性が妊娠できないと知って愛情を失う男性がいれば、その男性が愛情深いといえない。
愛の少ない異性愛者よりも愛の多い同性愛者の方が人間性は高いと思う。
愛の対象が異性であれ同性であれ、愛は崇高な行為である。
同時に愛は業の深い煩悩である。最後の文は、ぼくの煩悩くんが一本立打法で入力している。

口紅（その十四）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉
【趙家の人々】
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親
【江家の人々】
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）
嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）
寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）
呉文彗（寧岸と結婚）
寧遠（寧岸と呉文彗の息子）
張喜（趙耀根の会社の同僚）
李主任（趙耀根の会社の上司）
張書記（趙耀根の会社の上司）
羅桂香（江暁歌の会社の同僚）
黎美娟（江暁鴎の恋人）
宗漢（江暁歌が作った会社の専務）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）
藍雲（宗漢の恋人、ラジオ局のディスクジョッキー）

第二十五章　忍び寄る影

（一）

広々としたマンションの部屋は、趙耀根の母親にとっては居心地が悪く、路地裏の住み慣れた家に戻ってきた。

ここ数十年生活した我が家に帰ってくると、母親の精神状態も回復し始めたかのように見えた。ただ、ここの場所はもうすぐ建物が取り壊されるため立ち退かなければならず、その跡には高層ビルの建設が予定されていた。母親は、住んでいても何となく気持ちが落ち着かなかった。しかし、わが家が取り壊されるという、そんな噂を信じてはいなかった。彼女は、この場所に住み続けて、今日一日楽しく暮らせればそれで良かった。

趙耀根が深圳に出かけて仕事をしている間に、母親は住み慣れた家に引っ越していた。趙耀根が家族に会いに行くと、家はもぬけの殻になっていたので驚いた。しかし彼は、直ぐに何が起こっていたのかわかった。そして車を走らせ、昔の家にまっしぐらに向った。趙耀根が横町に入ると、玄関の石段に腰掛けて、母親が菜っ葉をむしっているのが目に入った。

「お母さん、お母さんがここに帰ってきたい気持ちはわかるよ」

「耀根、お前は、私のことを心配しないでおくれ。私はここで暮らした方が、のんびりできて気持ちも休まるよ。私とお前のお父さんは、ここで長年暮らしたんだ。お父さんは、ここで亡くなったんだよ。私もここで死にたいよ」

「お母さん、僕は、お母さんに、あのマンションに帰ってきてくれとは言わないよ。ここに住んで良いよ。後で僕がここに電話線を引くから」

「耀珍が、唐さんが身ごもった、と言っていたよ」

「そうだよ。僕は、彼女と結婚する気持ちなんてないのに身ごもったんだ」

「唐さんの言うことは、当てにならないよ。お前は、疑ってみる必要があるよ」

趙耀根は母親の言葉に頷いた。

母親は、

「何か心配事でもあるのかい」

と趙耀根に訊ねた。

趙耀根は、首を横に振った。

母親は、

「心配事がないのに、お前がお母さんの所に来て、こうして座っているはずがないじゃないか。お前は子どもの頃からこうなんだから。何か心配事があると、何も言わないでお母さんの側に座っているんだからね。煙草を吸いなよ。お母さんも付き合ってやるよ。お母さんは、よくわかっているんだ。お前の生活がうまくいかないの

は、お母さんにも責任があるよ」
と言った。
趙耀根は、煙草を吹かしながら聞かないような素振りをしていたが、本当はしっかり聞いていた。彼の心の中に、昔住んでいた家の匂いがだんだんと染みこんで来て、急に少年時代や青春時代の情景が目の前に蘇ってきたかのように感じた。昔の家は、長いこと住んでいなかったので破損がひどく、壁板に貼ってあった新聞紙は、黄ばんでいた。
趙耀根は、昔の家を修繕して手入れを施し、快適に生活できるようにすべきだと思った。そして、いっそのこと、この昔住んでいた中庭のある家を全部買い取って、きちんと改装し、自分は将来戻ってきて住めばいいと思った。このアイディアは我ながらなかなか良いと、彼は思った。数年したら、家を見学に来て、偉人趙耀根の家は、昔はこんなだったと語れるかもしれないと思った。

（二）

唐燕影は、疲れ切った足取りで家の玄関に辿り着くと、鍵を取り出して鍵穴に突き刺し、玄関を開けて彼女の小さなねぐらに入った。部屋の一筋の灯りが彼女をびっくりさせた。彼女は、本能的に一歩後ずさりして、目を凝らしてよく見ると、趙耀根がソファに腰掛けているのに気が付いた。彼女は直ぐに小鳥のように飛びついていったが、趙耀根は、冷たくあしらった。
「あなたは、深圳に行っていたんじゃないの。こんなに早く帰ってくるなんて」
「突然だって思っているのかい？」
「勿論よ。あなたはいつも、不意打ちをくらわすわ」
唐燕影は、
「あー、死にそうに疲れたわ」
と言って、突然コートを脱ぎ捨てた。
「妊娠した人間が疲れるまで遊べるわけがないだろう。僕は、レストランから、二品料理を頼んだんだ。まだ台所に置いてある。電子レンジで温めるかい？ちょっと、飲もう」
「いいわ。あなたがそんな風に言うから、おなかが空いちゃったわ」
趙耀根は、つまみをテーブルに並べて、
「こっちへ来いよ」
と唐燕影に言った。
唐燕影は、直ぐに起き上がって、テーブルに就いた。テーブルを見ると、どんぶりに入った油ぎった紅焼肉(28)と臭豆腐(29)を揚げたものと、小皿に唐辛子味噌があり、思わず眉をひそめた。

（注28は、肉と油と砂糖を加えて炒めた後で醤油等の調味料で煮込んだ料理）

（注29は豆腐を発酵させて作った臭みのある食用油でまるごとあげたり煮たりして食べる）

「毎日こんな料理を食べていて、よく飽きないわね。本当に革命の指導者に学びたいの」
「毛沢東は、紅焼肉を食べると脳の栄養補給になると言ったことがあるんだ」
「私達のような人種は、どっちみち頭なんか働かせる必要なんてないから、栄養を補給する必要なんかないわ」
「君が栄養を補給しなくても、僕は補給するのさ。僕の頭脳は、この二日間かなり負荷を掛けてきたからな。大至急ガソリンを補給しなくちゃならないのさ」
趙耀根は、臭豆腐をつまんでたっぷり唐辛子味噌をつけると、がぶりと口に放り込んだ。
「私は妊娠したんだから、この臭いを嗅ぐと吐き気がするわ」
趙耀根は、食べながら話を続けた。
「当時、毛沢東が、黄鶴楼(30)に登った時、天秤棒を担いで臭豆腐を売り歩いた老人を見てよだれが出てきて、我慢できずにどうしても臭豆腐が食べたくなったんだ。彼は、唐辛子味噌につけて、一つ、また一つと食べたんだが、側に居合わせた羅瑞卿(31)は、慌てて、これ以上彼に食べる事を許さなかったんだ。毛沢東は、食べるなと言われても、また食べ、食べさせてくれなければ、下山しないと言い張ったんだ」

（注30は、中国湖北省の武漢市にある楼閣で高さは約51.4メートルある。武漢随一の名勝地で、李白の代表的な漢詩「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」にてその名を知られている。）
（注31は、中華人民共和国の政治家・軍人で、毛沢東の忠実な取り巻きであったが、一九六五年、文化大革命で失脚した。文化大革命終了後に名誉回復するが、直後の一九七八年に死去。）
唐燕影は、
「それじゃ、あなたも、一つ、また一つと食べたらどうなの」
と皮肉混じりで言った。
趙耀根がかっかりしないように、唐燕影はビールを飲みながら、紅焼肉の中から高菜を箸でつまんで口の中に放り込み、よくかんで食べていたが、趙耀根の食べ方に吐き気がしたので、できるだけ、彼を見ないようにするしかなかった。
趙耀根は、突然頭を上げたかと思うと、
「君は、本当に妊娠しているのか？」
と、冷たい視線を唐燕影に向けた。
「何ですって？ウソだって言うの？」
「妊娠しているのに、バーのママなんてやっているのか？」
唐燕影は、
「バーのママなんかになってないわ。ママなんかじゃ

ないわ。私はただ、遊びに行くだけよ。友達の手伝いをしているだけなの。それに、お金がないわけじゃないし、何で、そんな仕事しなくちゃいけないのよ？」

と不機嫌そうに答えた。

「これだけは言っておくよ。君は友達を助けちゃダメだ。下品なことをするなよ。もし、もう一度やったら、君を素っ裸にして、放りだしてやるよ」

唐燕影は、おんおんと泣き出した。

（二）

趙耀根は、江暁鴎に電話を掛けて、長江岸に係留してある船に行って話をしようと誘った。

趙耀根は、今では貫祿も出てきて、地位もあった。どんなところに出て行っても、物怖じすることなく、落ち着き払った顔をしているので、趙耀根と交際のある人達は、二人は、表面上兄弟のように仲が良くて、気持ちが通じているように見えた。しかし、心の中では互いに腹を探り合っていて、始めっから真の友となるはずなどなかった。

彼は、益々自分が孤立している人間のように思えてきて気も塞ぎ、自分の気持ちを聞いてもらえる人もいなかった。趙耀根は、長江べりと係留船を懐かしんだ。友達と係留船に座って長江を眺めながら、互いに腹を割って話し合った日々を思い出した。

彼らは、係留船に腰を下ろして煙草を吹かし、一言も言葉を交わさなかった。長江べりの景色は昔と変わらず、長江の水だけが黄色く濁っているだけで、波間に飛び跳ねているイルカの黒い背は、既に見ることができなかった。長江の対岸には、大小様々の高層ビルが建っていた。

趙耀根は、煙草の吸い殻を長江に投げ入れて、

「暁鴎、一人で生きていて、何の意味があると思う？」

とため息をついて言った。

この言葉は、江暁鴎をびっくりさせた。

「どうしたんだい、耀根兄貴、押しも押されない趙社長として、今は事業が日増しに発展を遂げている時じゃないですか。こんな空虚な気持ちを持つべきじゃないですよ」

「何が日増しに発展しているって言うんだ。何を幸せと呼べば良いんだ」

江暁鴎は、

「耀根兄貴は病気かい？どうしてつまらないことを訊くんですか？ここにいると、あれこれと余分なことを考えてしまうじゃないかなあ？兄貴は、豪華なオフィスビルの支配人席に座っていれば、あれこれとくだらない事を考えなくなりますよ」

と言って笑った。

趙耀根は、江暁鴎の話をさして気に留めなかった。

趙耀根は、滔々と流れる長江を見渡しながら、

「僕達の創業の頃を覚えているかい？僕が投獄された頃のことを覚えているかい？あの頃、僕はなんて不幸なんだと思っていたんだ。僕は一生懸命仕事をした。狂気じみて働き、頭をフル回転させ、仕事に没頭して、苦難に満ちた日々を送ったんだ。生活は淡々としたものだったよ。今振り返ってみると、あの頃の方が幸せだったよ。今では幸せで、不幸なことなんてないとお前は思っているけど、実際はちっとも幸せじゃないんだ」

と真剣に話した。江暁鴎は、

「頑張って奮闘している過程こそが幸せな時で、その結果は、往々にして面白みがなくなってしまうと言うのを聞いたことがあるよ」

と返事をした。趙耀根は、

「そうだ。そうなんだ。僕は、身にしみてよくわかるよ。僕が今向かい合っているのは結果であり、誤魔化しやペテンに包囲されていて、金は権力の象徴と見なされ、普通の人間として扱われていないんだ」

と言った。江暁鴎は、

「つまり、高い地位は、危ういってわけさ」

と言った。趙耀根は、

「何だって、高い地位は危ういって？お前は、俺に皮肉を言っているのか？それとも、お世辞を言っているのか？いったいどっちなんだ？お前と暁歌は父親が同じでとても仲がいい。なぜ暁歌は、君のように僕を理解し、寛容な心を持ってくれないんだ。失ってしまったものが大切だとわかったんだ。このことはみんなが言っているけれど、しかし、自分が苦しい代価を支払って、ようやく彼女が大切だということがわかったんだ」

と言葉を荒げて言った。

江暁鴎は、

「耀根兄貴、兄貴のプライベートなことに、僕はこれまでずっと干渉してこなかったんだ。でも、兄貴に忠告したいと思っていたし、当初から、兄貴達の離婚には断固として反対だったんだ。兄貴達が後悔することがあると、言ったことがあったよ」

と真剣な口調で答えた。

「覚えているよ。はっきり覚えている。僕が後悔したのは事実だよ。でもなぜ、江暁歌は、僕にチャンスを与えてくれなかったんだ。僕はただ、暁歌と話をしたいだけだったんだ」

「兄貴と唐燕影のことを、姉さんはとっくに知っていたんだ。それに、姉さんは唐燕影が妊娠していることもわかっているんだ。姉さんは、兄貴の根本的な原因を許すことができないんだ」

趙耀根は、

「わかったよ」

と返事をした。趙耀根は、

「この売女め。本当は、彼奴は妊娠していないんだ。僕は病院に行って尿検査の結果を調べたんだ。結果は陰性だったよ。彼女は間違いなく、僕と暁歌が接触しているのに気がついていて、僕達の関係を引き裂きたいんだ」

と言って思い切り水面につばを吐いた。

江暁鴎は、

「彼女は、ヘビ女だ」

と言葉を吐き捨てた。趙耀根は、

「その通りさ。彼女は、僕を騙したんだ。僕は、男がもっとも犯しやすい過ちを犯してしまったんだ。でも、僕は必ず過ちを改めるよ」

と言った。江暁鴎は、

「もし本当なら、一番幸せな人間はこの僕だ」

と言った。

江暁鴎の言葉は、趙耀根を痛く感動させた。彼は、かつての義兄弟のために何かしてやりたいと思った。趙耀根は、江暁鴎の心は江暁歌と同様、高潔であることを知っていた。彼らは、これまで人の恩恵にあずかりたいと思ったことはなかったのだ。

趙耀根は、黙って彼らの幸せを祈った。

(四)

江暁鴎は、公文書が入っているかばんの中から札束を取り出して、テーブルの上に放り投げた。

「ここに一万元ある。僕は、お母さんのために、姉さん名義で保険を買ってもらいたいんだ。家でゴタゴタを起こしたくないし、お母さんがあれこれ言うのを聞きたくないからね」

「あなたは、ずっと、趙耀根から借りたお金を返し続けているんじゃないの。このお金は、いったいどこから借りてきたの」

「僕が広東の経営者から借りた金は、とっくに返済したんだ。これは新たに稼いだ金だよ」

「どうやって稼いだの」

「どうやって金を稼いだかって、そんなこと男に訊くべきじゃないよ」

江暁歌は、

「この話はとってもユーモラスだわ。でも、私は、あなたのお金がどこからきたのか、やっぱり知りたいわ」

と言って笑った。江暁鴎は、

「安心してくれ、姉さん。僕は、株式市場で二度と躓かないから。今僕は、自分の頭脳に頼って金を稼いでいるんだ。僕は、コンピュータ会社の友人のためにソフトを開発したんだ。頭脳が頼りなんだ。僕がどのくらい稼いだって、そんなに不思議がることはないよ」

と言った。江暁歌は、

「気をつけなさいよ。法を遵守すべきよ。法律を犯してはいけないわ。天に背き、道理にもとることをしてはいけないわ」

「わかったよ。わかったってば。僕が、そんなことするはずないじゃないか。せいぜい、金持ちをぎゃふんとさせて、貧しい人を救うだけさ・・・・・。冗談だよ。姉さん、姉さんに極秘の情報を教えてやるよ」

江暁歌は、

「極秘情報って何なの？」

と尋ねた。

「唐燕影の妊娠はウソだったんだ。彼女は、耀根兄貴を騙したんだ。耀根兄貴は、絶対にこんな人と結婚するはずがないさ」

江暁歌は、ポカンとして、

「そのことと私と、いったい何の関係があるって言うの？」

と無関心を装った。江暁鴎は、

「姉さん達は、真剣に話し合いをするときが来たんだ。姉さんは、これまでずっと、人に寛容だったじゃないか。この寛容さを耀根兄貴に見せて、兄貴と話をしてみたらどうなんだ。悪いことはないと思うな」

と、江暁歌に言い聞かせた。

「趙耀根が、あなたを私のところに寄こしたのね」

「そうとも言えるし、そうとも言えないよ。兄貴は、僕にはっきりとそう言わなかったが、僕達は、一度だけ話をしたんだ。兄貴は、腹を割って話をしてくれたんだ。姉さん達は、しばらくの間仲違いをしただけで、本当は、離婚なんてしていないんだ」

「暁鴎、あなたは、なぜ、こんなこと言うの？」

「そりゃそうさ。姉さん達は愛し合っているじゃないか。それに、とっても良い人達だからね。耀根兄貴のような男と生涯暮らすことは、女の幸せっていうもんだよ。姉さん、よく考えてみてよ。耀根兄貴は、聖人君子じゃないんだ。ただ、男が犯しやすい過ちを犯しただけだよ。彼が、完全に迷いから覚めればいいんだ」

「男の人って、いつもかばい合うのね」

江暁鴎は、

「まさか、かばい合っちゃいけないとでも言うのかい？」

と言って笑った。

(五)

趙耀根は、会社の正門をくぐった。彼の従業員は、彼を見ると粛然として立ち上がり、目礼した。彼は、従業員にかすかにうなずき、挨拶をしたが、その威風堂々とした姿は、すっかり高級幹部が板に付いていた。彼は、ドアノブを回して執務室の扉を開けると、あっけにとられた。そこには、足をデスクにあげている唐燕影が見え

たからだ。
「君は、どうしてここへ？」
「私は、何処にいたらいいのよ。あなたは、最近家に帰っていないわね。長いことあなたを見ていないわ」
「今処理しなければならない業務があるんだ。君は、海鮮料理専門店に行って、部屋を予約してくれ。夕方七時にそこで会おう。ちょうど僕も君に話したいことがあるんだ」
唐燕影は、
「話があるなら、今言ってよ。夕方会おうといってもどうせ夜になって、又電話を寄こして、用事があって行けないって言うに決まっているんじゃない。私は、ここで話をしたいのよ。私は、本当に用事があるのよ」
と言って、冷ややかに笑った。
「わかったよ。手短に話してくれ。商談を待っている数人の外国人がいるんだ」
唐燕影は、慎重に言葉を選んでいて、容易に口を開かなかった。
趙耀根は、面倒臭くさくなってきた。
「よし、君が言わないんなら、僕が言おう。僕は前から、君に話したいことがあったんだが、そのチャンスがずっとなかったんだ。はっきり言うよ」
唐燕影は、趙耀根がはっきりさせると言うのを聞いて興奮した。趙耀根が、遂に彼女の立場をはっきりさせ、妻にしてくれると思い、色目を使って趙耀根に媚びて、デスクから足を降ろした。
趙耀根は、
「僕達は、長いこと付き合ってきただろう」
と無表情のまま言った。
「もうすぐ八年になるわ」
「八年になるのか。そんなに長いこと付き合ってきたんだ。月日が立つのも早いもんだな。こうしよう。僕は、君に毎年少なくとも平均五万元払っていた。占めて四十万元だ。さらに、六千六百元上乗せするよ。六千六百元は吉兆の数字であり、記念の数字でもある。君と僕が付き合った八年間のハッピーエンド、友好のプレゼントとしたいんだ」
唐燕影はびっくりして、つけ睫毛をした目を大きく見開いて、
「どういうことなの？」
と言った。
「この際きちんと話をして、きっぱり別れよう。これからは友達だ。いいだろう」
唐燕影は、驚きのあまり唖然とした。彼女は、趙耀根と一緒になりたかったが、言い出せなかったのだ。耀根は先手を打って、きっぱり別れようと言って来た。二人のこの大きな違いは、彼女の脳みそを真っ白にさせた。彼女は、鮮やかな赤い口を大きく開けて、ぼんやりと趙

耀根を見るだけで、一言も言葉を発することができなかった。
趙耀根は、
「これは、君にとって、束縛から解放されることでもあるんだ。これからは、広々とした大海原を泳ぎ、大空を駆けめぐることができるんだ。思う存分自由な生活を楽しめるんだ」
と多少当てこすり気味に言った。
唐燕影は、涙を流した。つけ睫毛に、キラキラ光る涙の粒が光り、とても哀れに見えた。
唐燕影は、
「耀根、私を捨てないで」
と言った。
別れ話を切り出した途端、趙耀根は気持ちが軽くなったような気がした。
「会えば、いつか別れの時がくる。これは、物事が発展して行く必然の道理だ」
唐燕影は、
「耀根、ちゃんと私を見てよ。昔のように若くないし、美しくないのよ。私の若さも美貌も、みんなあなたにあげたわ。この八年間、私の心は、片時もあなたから離れなかったじゃない。精神的な支えにもなったわ。生活の面倒も見たわ。それに、あなたの仕事を助けたじゃない。すべて、あなたに捧げたわ。あなたは、私を捨てられないはずよ。お願いだから、私を捨てないで」
とむせび泣いた。
趙耀根は、少しも彼女の言葉に心を動かさなかった。彼は、顔を窓の外に向け、口元には軽蔑の笑みを浮かべた。
「耀根、お金なんかいらないわ。私とあなたは、今まで、お金のために暮らしてきたんじゃなかったわ。あなたが私を愛してくれればいいのよ。耀根、あなただって私を愛していると言ってくれたことがあるじゃない」
趙耀根は、
「わかったよ。もう、芝居を打つのはやめてくれないか。僕達がなぜ別れるのか、君が一番よくわかっているはずだ。君に何度も頼んだじゃないか。バーのママにならないようにって。でも君は、耳を貸さなかったじゃないか。君は、自分に逃げ道を作っていたんだ」
と冷ややかに言った。唐燕影は、
「みんなが、私をママって呼んでいるだけで、私は本当のママなんかじゃないわ。私の女の子達に演劇をさせているだけだわ。売春の仕事なんかさせていないわ」
と叫んだ。
「君の雇っている女の子が何をしようと、僕には関係ないよ。別れると言った以上、くだくだと言っても無駄だ。八年間、僕は君のために、少なくとも四十六万六千六百元支払った。僕も、君にあらゆる援助と善意の限り

を尽くしてきたつもりだ。この金は、ある人にとっては、幾生涯分かかって稼がなければならない金なんだ」

唐燕影は、とうとう最後の切り札を出した。

「あなたは、こうしてあなたの子供を身ごもった女を捨てるのね」

趙耀根は、

「僕は勿論、そんなことはできないよ。僕は、君に再三警告したことがある。しかし、君は利口に立ち回って、僕の目の前でいろいろな策を弄したじゃないか。君は、いったい何様だとおもっているんだ。僕を騙すにはまだ未熟すぎるぞ」

と言って笑った。

趙耀根は、病院の科学検査表を静かにデスクに置いた。

唐燕影は、科学検査表を見て、全てが終わったことを悟った。彼女の顔色は、益々不機嫌になり、憚ることなく趙耀根に当たり散らした。彼女は烈火の如く怒り、八年間生活や仕事を共にしてきた男に向かって、大声で叫んだ。

「趙耀根、あんたのような腹黒い奴は、ろくな死に方をしないわ。陰で私を陥れたのね。私を売り物として扱ったわね。それなら、売り物になってやるわよ。八年で四十数万元なの、少なすぎるわ。私の青春時代は、あなたにもて遊ばれてこんな無惨な姿になってしまったわ。一年間で、少なく見積もっても十万元はほしいわ。こうしましょうよ。一括で五十万元寄こしてよ。それに、家と会社の玄関に横付けされている車で、貸し借りなしって事にしましょうよ。そうしてくれれば、私はさっさと立ち去るわ。決して面倒も引き起こさないわ。どう?」

趙耀根は、すずましい視線で唐燕影を見ていた。その目は、これまで知らなかった他人を見ているようで、怒りの火花が彼の瞳の中で燃え上がった。

唐燕影も何も恐れることなく、趙耀根と対峙していた。

趙耀根は、

「やっぱりお前って女は恥知らずな奴だな。まだ僕を脅す勇気があるのか。君に言っておくが、一円たりとも多く出すつもりはない。ドアはそこだ。さっさと消え失せろ。金がほしけりゃ、財務課に行って六千六百元の小切手を切ってもらえよ。ほしくないなら勝手にしろ」

と言って冷ややかに笑った。

「趙耀根の糞野郎」

「口の利き方には気をつけろ。僕が、これまで、女に手を上げたことがないことは知っているだろう。でも、運搬工をしたことがある僕の友達は、そうはいかないだろうよ。彼らが一番嫌な奴は、口汚い女だ。もう一度言う。ドアは、そこにある。さっさと出て行け」

唐燕影は、全身がぶるぶると震えた。彼女は、怒りがこみ上げてきた。

趙耀根の目に凶悪な光が走った。

「失せろ」

唐燕影は、怖じ気づいた。趙耀根の横暴な振る舞いに、唐燕影は、憎しみの気持ちを飲み込むほかなかった。彼女は項垂れて、無言でオフィスを出て行った。

趙耀根は、唐燕影が突然立ち去ったので、呆然とした。暫くすると冷静さを取り戻し、彼は深くため息をついた。ちょっと、全身が軽くなったと感じた。

(二八)

江暁暢は、

「姉さん、唐燕影に気をつけてよ。この女は、善良な心の持ち主じゃないわ。善と悪が入り交じっているわ」

と言って忠告した。

「何のこと、彼女と私と何の関係があるって言うの?あなたは、どうして彼女と私をごちゃ混ぜにするの?」

江暁歌の続けざまの質問を前にして、江暁暢は、ありのままに答えるしかなかった。

「私は、マルチ販売をしていて、彼女を知ったわ。私は、彼女に電動あんま機を買わせたかったの。最近、趙耀根は、彼女を捨てたのよ。ただじゃ済まないって、彼女は言っていたわ。姉さんは、無頓着な様子を装っちゃダメよ。いいこと?趙耀根が、彼女を捨てた根本的な原因は、姉さんにあるのよ。だから、本当に気をつけてね趙耀根のことは、どうでもいいわ。彼は神出鬼没だし、どんなときでも数人の兄弟がガードしているわ。唐燕影は、彼に手を出すことができないのよ」

「大袈裟だわ。それに、大胆不敵すぎるわ。旧社会じゃあるまいし、そんなバカな?」

「未熟ね。ナイトクラブに出掛けて行って、数日紛れ込んで見てみなさいよ。何でもありよ。どんなことだって起こりうるわ。私は特にあなたに警告しておくわ。姉さんは、私の言った話を聞き流してはダメよ」

「あの唐燕影さんって、綺麗かしら」

「そらね。姉さんが、彼女のこと気にしていることはわかっているわ。あの人、美人だけど、下品じゃないかしら。化粧品で誤魔化しているだけだわ。姉さんが、タクシーの運転手をしている時、彼女を見たことがあるでしょう?」

「数年前だし、夜も遅くて暗かったし、腹も立っていたしね。それに、趙耀根にわかっちゃうんじゃないかとハラハラしていたから、彼女を見る勇気なんてなかったわ」

江暁暢は、

「あの当時は、彼女が一番綺麗だった時期かもしれないわ。でも、彼女は趙耀根に相応しくないわ。姉さんと趙耀根はやっぱり、生まれつきのカップルだと思うわ。長いこと離婚していても、結婚する相手を見つけられな

かったじゃない。互いに張り合っているだけなのよ」
と言った。江暁歌は、
「あなただって、経験豊かじゃない。なぜ結婚しないの？」
と言って笑った。
「何が結婚よ。独身貴族を謳歌した方が良いわ。そんなことより、姉さん、私が売っている電動あんま機を買ってよ」
「あなたは、私達が悪徳商人だと、いつも言うけれど、あなたこそ悪徳商人じゃない。私もあなたのいいカモになるんじゃないの？」
江暁暢は、
「あなたに秘密を教えてあげるわ。マルチ商法っていう商売は、お得意さんをいつも食い物にするのよ」
と笑いながら言った。
江暁暢の警告は、逆に江暁歌の好奇心を引き起こした。彼女は、むしろ、唐燕影に会ってみたくなった。これも、江暁歌の性格の中の弱点だったかもしれない。唐燕影という女は馬鹿にできない女だ。それに、ある程度距離を置くべきだ。しかし、至近距離で彼女を観察したいという気持ちを抑えることができなくなり、彼女がいったいどんな女なのか、会ってみたくなった。このために結果がどうなろうとも、江暁歌は構わなかった。

（七）

折しも、暁歌服飾会社のブルーシリーズが、初夏の季節にきらめきのデビューをする予定で、宗漢は、これを幕開けとして大ファッションショーを開催しようと考えていた。
最近、『魅影』という急成長しているファッションモデルグループが、業界内で好評を博していることを宗漢は聞いていたので、そのファッションモデルグループに、展示会でのファッションショーの仕事を引き受けてくれるように頼んだ。
『魅影』のことに及んだときに、江暁歌の心は、なぜか胸騒ぎがし、直ぐに唐燕影のことが頭の中をよぎった。
彼女は、
「『魅影』の経営者は女性ですか？」
と宗漢に尋ねた。
「そうです。若い女性だそうです。とても時代にマッチしていて注目を浴びています。時には、劇場やナイトクラブなどでファッションショーを開催し、大好評を得ているようです」
「彼女は、唐燕影ですね」
「彼女ですか？おー、そうでした、申し訳ございません。ファッションモデルグループはいくらでもあります。

他のファッションモデルグループに頼んでみます」
「いいえ、彼女のグループが一番である以上、彼女にお願いすべきだと思います」
「私は、不必要なゴタゴタを引き起こしたくありません」
「私は、この女性と会ってみたいのです。ある意味においても、彼女がいなければ、私の今もなかったのです」
宗漢は、江暁歌に忠告しても無駄だとわかっていたので、こう言うより他なかった。
「いいでしょう。全て私に任せてください。あなたは、何事においても、細心の注意を払わなくてはなりません。この女はバカにできませんからね」
江暁歌は、
「彼女に仕事をやらせて見せます。私は、彼女の気分を害しませんから。私は、ただ、この女と会ってみたいだけなんです」
と笑いながら答えた。
唐燕影は、ほの暗い奥のバーから江暁歌の方に近づいてきた。そうだ、この女だ。艶めかしい光が四方に放たれ、骨まで染み入る美しさがあり、曖昧な薄暗青白いトーンの中で体を左右に揺り動かし、全身派手に真珠で飾り立て、深海魚のようにキラキラと動いていた。江暁歌は静かに唐燕影を見ながら近づいて行った。艶めかしさを除いては、唐燕影と彼女はさほど違いはなかった。
江暁歌が作った服は、実は彼女達のような女が着るためにデザインされたもので、彼女は江暁歌の雇用労働者であり、顧客でもあった。
江暁歌は遂に、唐燕影と向かい合った。
唐燕影は、江暁歌に手を差し出した。江暁歌は、唐燕影の柔らかな骨のないような小さな手をしっかり握った。この手は、限りなく哀れみ慈しむ気持ちを人の心に芽生えさせるためだけにあったのだ。
江暁歌は、趙耀根のことが初めてわかった。彼は、確かに一人の男がよく犯しやすい過ちを犯してしまったのだ。同性である女は、この女の柔らかな骨のないような手の裏に、どのような殺意を抱いているか知っているからこそ、それ故一層警戒するが、世の男は通常、心を奪われて、殺され切り刻まれてしまうに違いなかった。
宗漢は、
「紹介させていただきます。こちらは、私どもの会社の江社長です」
と言って、江暁歌を唐燕影に紹介した。
唐燕影は、
「お名前は、かねてより、承っております」
と色っぽく甘えるような口調で答えた。
彼女は、特に江暁歌に目配せして、自分達が昔からの知り合いであることを強調した。

江暁歌は、
「どうぞ、おかけ下さい」
と落ち着き払って言った。
唐燕影は、スカートを手で押さえながら腰掛け、江暁歌に近づきながら、親しみを込めて言った。
「江暁歌社長、ご招待にあずかりまして、感謝申し上げます」
江暁歌の心の中は、重苦しくなってきた。趙耀根が、許すべからざる過ちを犯したことがわかり、たちの悪い女に立ち向かわなければならないことを悟った。この時から、彼女は、寝ても覚めても四六時中、唐燕影という女を警戒しなければならなくなった。
江暁歌、嘉児、趙耀根、そして江家と趙家の全ての人が、この女を用心しなければならなくなった。

第二十六章　鳳凰26

（一）

三十万元の札束を積み重ねたら、一山の高さになる。
江暁鴎は、大きな手提げカバンに札束を詰めるしかなかった。
札束を詰め終わり、手提げカバンを提げ、体の向きを変えてその場を立ち去ろうとした時、証券所の営業マンが彼を呼び止めた。
「申し訳ございません。李先生、身分証明書を受け取るのを忘れていますよ」
江暁鴎は、手を伸ばして身分証明書を受け取ったが、営業マンは、直ぐに彼の身分証明書を取り返した。
「おかしいですね。あなたの身分証明書の番号が、どうして一つ違うのですか？男性の場合には、最後の番号が奇数でなければならないのに、あなたの身分証明書番号は、偶数ですよ」
江暁鴎は、冷静に対処した。
「これは、おもしろいですね。私は性転換されてしまったようだが、案外わからないもんだね」
営業マンも、
「少々お待ち下さい。直ぐに戻って参りますから」
と言って笑った。
営業マンは、江暁鴎の身分証明書を持って、奥の事務室に入っていった。
江暁鴎は、考える暇もなく、直ぐに足早に立合所を離れ、慌てて証券会社の正門を出ると、住宅街の隙間なくびっしり立て込んでいるビル群の中に入っていった。
立合所には、たちまち警報が鳴り響き、ガードマン達は、シャッターを閉めた。
一台のパトカーが、二分も経たないうちに証券会社の

玄関に横付けされた。凄まじいサイレンは度肝を抜いた。
続けて、何台ものパトカーが次から次へと到着し、ガードマンはたった今閉めたシャッターを開けると、刑事と探偵を営業所に入れた。証券会社の責任者と営業マンは、リーダーの探偵長に状況を説明した。
探偵長は、
「君達は、どうして問題に気がついたんだね」
と訊ねた。
営業マンは、江暁鴎の身分証明書を探偵長に差し出した。
「この身分証明書をご覧下さい。身分証明書を携帯している人は、明らかに男性です。証明書の末尾の性別コードは偶数であり、女性を示さなければなりません。この身分証明書が偽造であることは明らかです」
探偵長は、しきりに頷いた。
「このため、私達は直ちに該当する一般個人投資家が株を購入する証券会社に連絡を取り、確認調査をしたところ、株を所有していた人は、身分証明書に記載されていた李順利ではなく、胡少軍でした。李順利は、既に手はずよく、二十万元を持って逃げました」
探偵長は、
「三十万元だけなのか？上海、杭州、重慶と続けて、株券が売り飛ばされる大事件が起きている。盗まれた出資金は、二百万元余りに達し、現在警察は、指名手配中だ」
と言った。
「私達は、指名手配礼状を受けたことがあったが、まさか彼ではあるまい？」
「少なくとも、犯罪行為の手口は全く同じだ。彼が、まだこの周辺にいることを願っている」
警官達は、立合所で、張りつめた面持ちで、一枚一枚の一般個人投資家の身分証明書を検査した。そして遂に、一般個人投資家の最後の一人を立合所から外に出して、パトカーに乗ってその場を立ち去ろうとしたまさにその時、突然、駐輪場に停めてあった一台の自転車が、探偵長の目に留まった。
駐輪場には、本来、沢山の自転車が駐車してあるが、一般個人投資家が帰って行くにつれて、自転車も駐輪場から消えていった。しかし、今もこんなにも大きな駐輪場に、たった一台ぽつんと残っている自転車があった。その自転車は、まさしく江暁鴎が逃げる時に乗り捨てた古い自転車で、かつて一世を風靡した女性用の鳳凰26だった。
探偵長は、直ぐに等級番号を通して、この自転車の持ち主を調べた。持ち主は、江暁歌と言い、大橋服飾工場の従業員だった。紆余曲折の調査を経て、探偵長は遂に、江家にたどり着き、江暁鴎の部屋のドアを開けた。すると、直ぐに壁のコーナーにある一台のパソコンと傍らに

あるフロッピーディスクが目に入った。探偵長の側にいる証券会社のパソコンオペレーターが、慣れた手つきでパソコンを立ち上げ、江暁鴎のフロッピーディスクをドライブに挿入した。パソコンを操作した後、ディスプレイに証券会社のデータが現れた。江暁鴎の考えた解読ソフトを使えば、証券会社の暗号システムはとうの昔に看破されていて、名ばかりの存在になっていることが判明した。オペレーターが、驚いて叫んだ。

「なんて凄いんだ。彼は、パソコンの天才ですよ。私達の暗号を解読していましたよ。ご覧下さい。彼は既に、一般個人投資家の住所、資金の額、証券の種類、口座番号、取引記録を自由に読むことができたんです。それに、証券取引についても自由に操作して、思いのままに金の出し入れや資金を融資することすらできたのです」

探偵長は、

「そうだったのか。証券会社は、彼の思うまま勝手に操作されていたんだ」

と思わずうなった。オペレーターは、

「株券の売買は、既にネットワーク化されていて、現地で買い入れた株券は、手続きが完備していさえすれば、どんな場所からでも投げ売りして、株券を現金にすることができるんです。彼は、今日、広州で犯行を犯し、明日は、パルピンに行って、現金に換えることかできるんです。彼は、本当に天才です」

と言った。探偵長は、

「どうやら、あたふたと逃げたので、これらのパソコン機材を持って行くのに間に合わなかったのだろう」

と言った。

沈鳳宜は、彼らの話に、わかったような、わからないような様子で訊ねた。

「息子が何かしでかしたのですか？」

探偵長は、

「あなたの息子は、素晴らしく頭が良いですが、その頭を正しい道に使いませんでした」

とため息をついた。

「彼は、法を犯したんですか？」

「法を犯しただけじゃないんです。私達の初期段階の判断によれば、彼は、一般個人投資家の二百万元余りに及ぶ金を盗んだんです。これは、重大な経済犯罪で、重大犯罪事件です」

沈鳳宜は、あっけにとられた。彼女は、きつく、江暁歌の腕をぎゅっと掴んで、自分が倒れ込まないように持ちこたえた。

警官が帰って行くと、沈鳳宜は、力が抜けて動けなくなり、ソファに倒れ込んで、涙をハラハラと流した。

一家は、慌てふためき、母親を囲んで慌ただしく動き回り、一生懸命母親を慰めた。母親は、涙を流したかと思うと、突然目を瞠って、江暁歌の腕をぐいと掴み、

「お前達姉弟は、普段仲が良い。どんなことが起ころうとも、あの子はいつもお前をかばった。お前に暁鴎を救ってほしいんだよ。私達江家にとって、暁鴎は、一人息子なんだ。お前のお父さんのためにも、必ず暁鴎を救い出す方法を考えて」

と頼んだ。黎美娟は、

「お姉さん、お願いです」

と言うと、どすんと江暁歌の前に跪いた。

江暁歌は、

「焦らないで。みんな、落ち着いてよく考えましょう」

と、慌てて黎美娟を助け起こした。

江暁歌は振り返ると、

「暁鴎が今回起こした事件は、どのくらい深刻かしら？」

と宗漢に訊ねた。

宗漢は、何も答えないで、ただ静かに首を横に振るだけだった。答えは、言わずとしれたことだった。

江暁歌は、気持ちが益々沈んでいくのを感じた。少し考えてから話を続けた。

「急いで会社の弁護士に連絡して、彼に矢面に立ってもらって、状況を把握してもらうわ」

宗漢は、

「私は、既に弁護士と話をしました。それに、趙社長にも知らせました。彼は、直ぐに駆けつけると言っていました」

と答えた。

「趙耀根が来れば大丈夫だわ。彼には、必ず暁鴎を救う方法があるはずだわ」

（二）

みんな黙って座って、趙耀根の到着を待っていた。

趙耀根は案の定、趙耀虎と張喜を連れて駆けつけてきた。沈鳳宜は、趙耀根が救いの神様であるかのように、ぐいと彼の手を引っ張って、

「耀根、よく来てくれたね。暁鴎は、お前のことを実の兄さんと思っているのよ」

と言った。

「焦らないでください。暁鴎のことは、私に任せてください。私は、全財産を擲ってでも、暁鴎の命を救いたいのです。彼の命を救うためなら、もう一度埠頭に戻って、荷物の担ぎ屋をやることさえ厭いません」

黎美娟は、

「問題は、暁鴎が今どこに隠れているかです」

と言った。

この一言で、沈鳳宜の目の色が変わった。

「美娟、暁鴎は、どこに身を隠しているのかしら？」

黎美娟は、必死に首を横に振って、

「わかりません。彼は家に戻らずに逃げたのです。私が知る由もありません」
と言った。
「宗漢は、知っているの？」
「知りません。今回は、彼一人の単独行動です。彼は、みんなにひと言も漏らさずに騙し通したんです」
趙耀根は、暫く考え込みながら、つぶやいた。
「今は二つの道しかない。彼は、もし隠れる自信があるのなら、遠くへ行ってしまえば良い。できるなら、南アメリカへ行った方が良い。しかし、二百万元ばかりの金じゃ、外国で暮らせるにしても数日だけだ。残るもう一つの方法は、出て来て自首し、できるだけ寛大に処分してもらうしかない」
江暁歌は、
「そうよ。一番良いのは、帰ってきて自首することだわ。そうすれば、私達も彼のために何かできるわ」
と言った。
趙耀根は江暁歌を見ながら、彼女が自分の意見に賛意を示してくれたことに頷き、感謝の気持ちを表した。江暁歌も、ニコリとするより他なかった。固い感情の氷が、ちょっとした会話の中で、次第に溶けていくような気がした。
趙耀根は、
「今重要なのは、暁鴎と連絡を取ることだ」
と言った。
（趙耀根は、江暁鴎のことで話をしたいことがある。後で電話をするので、清香茶坊で落ち合おうと江暁歌と約束した）
江暁歌は、一時ためらったが同意した。

（二）

彼は、遂に向かい合って座った。
趙耀根は、重い口調で話しかけた。
「事態は、既に悪くなっている。僕は、本当のことを言わなければならない。君は、心づもりをしてくれ」
「わかっているわ。話してください」
「僕は、友達に頼んで、内部に問い合わせてもらった。友達が言うには、コンピュータ犯罪は新種の知能犯で、莫大な損害をもたらす。暁鴎は、中国における初めてのケースで、ひどく証券市場の秩序を乱し、個人投資家はパニック状態に陥り、国家の改革開放政策をぶち壊したんだ。公安局から専門家が来て、暁鴎のパスワードを解読した。事件は、指導者トップをあっと言わせ、容赦なく厳罰に処し、死刑にしてしまえという書面による指示があった」
江暁歌は、一時ポカンとしたが、涙が声もなく流れてきた。

趙耀根は、
「暁歌」
と叫んだ。
趙耀根は、ハンカチを取り出し、江暁歌のために頬の涙をぬぐおうとした。しかし、江暁歌は、趙耀根の手をよけて言った。
「一縷の望みもないわ」
「今はただ全力を尽くすだけだ。もしお金で暁鴎の命を救うことができるなら、どれだけお金を費やしてもかまわない」
「暁鴎を死なせるなんてできないわ。彼に世間の役に立つ人になれるチャンスを与えたいの。あなたは、彼のことわかるでしょう？彼は、そんな悪い人じゃないわ。私達は、必ず彼を救う方法を考えなければならないわ」
趙耀根は江暁歌の耳元に近づいて、そっとささやいた。
「僕は、もう暁鴎と連絡を取ったよ」
「彼は何処にいるの？」
「実際、彼は、さほど遠くない所にいる。彼は、郊外にいるんだ。僕は、君に決めてほしいんだ。つまり、彼の逃走を助けるか、それとも彼に帰って来て自首することをすすめるかだ。もし逃げたければ、ブエノスアイレスに僕の友人がいる。かつてヒットラーの指揮下にあったナチスは、ブエノスアイレスに身を寄せているんだ」
「言ってください。彼はどうすべきか？」
「外国へ逃亡するなら、二百万元では良い暮らしができない。それに、逃げられなかったら、本当に破滅への道が待っているだけだ」
「彼に自首することを勧めましょう。私達は全力を尽くして、彼のためにあらゆる手段を講じて、良い結果が得られるように努力しなければならないわ」
「わかった。僕が手配する。彼と電話で話をしたいか？」
江暁歌は頷いた。
趙耀根は、電話を取り出して、電話番号を押した。そして、電話を江暁歌に渡した。
受話器の向こうから、
「姉さん」
と江暁鴎の声が聞こえると、江暁歌の目には涙がどっと溢れた。
「暁鴎」
彼女は、
「帰っておいで。私達はあなたを助けることができるわ」
と泣きじゃくった。
江暁鴎は、受話器の向こうで一時黙っていたが、
「わかった。帰るよ」
と決心して言った。

話が決まると、江暁歌はホッと一息ついて、初めてお茶を啜るように飲んだ。

趙耀根も、

「暁歌、唐燕影が君のところで展示会をやるそうじゃないか？」

と落ち着いて言った。

「今あなたは、私にそんなことを言ってどうするって言うの？私は暁鴎のことで頭がいっぱいなのよ」

「僕は、君に気づいてもらいたいんだ。この女がやって来ると、良くないことが起こる。彼女はヤクザと密接なつながりを持っている。君は、絶対に彼女から離れるべきだ。彼女は、君にとって決してためにならないと心配しているんだ」

「あなたは何の理由があって、彼女が私のためにならないって言うの？ごめんなさい。私はこのことであなたと議論したくないの。先に帰るわ」

趙耀根は手を伸ばして、江暁歌を引っ張った。江暁歌は激しく趙耀根の手を振り払い、慌ただしく出て行った。

(四)

江暁鴎に判決を言い渡すその日、多くの人が出向いた。江家の面々、趙家の三人の兄弟と、張喜、宗漢、藍雲、それに寧岸と文彗・・・・・・

江暁鴎が護送されて来た。彼は、手錠を掛けられ、二人の司法警官に両側から腕を抱えられていた。以前剃られた髪は半寸ほどに伸び、白く綺麗な顔は、紙のように蒼白だった。

彼は気が抜けて、ぼんやりと壇上から下に目をやったが、家族を見つけられたかどうか、わからなかった。

判決を言い渡している間、彼はずっと裁判長を見ているだけで、二度と振り返りはしなかった。

沈鳳宜は、ずっと江暁歌の腕をつかまえていたので、江暁歌の腕には痣ができていた。

趙耀根は、既に内部からの情報で、自首して全額返済し、法に照らしてできるだけ罪を軽くする条件を知り得ていたので、たぶん死刑の判決は下るまいと思っていた。しかし、みんなの緊張した雰囲気から、意外な展開になりはしないかと心配だった。

裁判長が、刑を軽減し、死刑執行猶予をはっきりと言い渡すと、みんなホッとため息をつき、江暁鴎の命がつながったことを喜んだ。

沈鳳宜もホッとした。しかし、すぐに死刑執行猶予が息子をダメにすることに気づいて悲しみがわき起こり、大声で泣いた。

黎美娟は絶望して頭を横に振り、江暁暢の胸に倒れ込んだ。

趙耀根は、手を伸ばして、こっそり江暁歌にVサインを送った。

ここにいる人達の中で、趙耀根と江暁歌だけが、今回のすべてのことに関与していた。江暁鴎のためにあらゆる手段を使い、味わったあらゆる辛酸も、彼ら二人だけが知っていた。

(つづく)

編集後記

永年、まんじ編集長としてご奉仕くださった中山喬央氏が、去る二月十六日、急性心不全で急逝されたことは、筆舌に尽くし得ない悲しみと驚きであり、心よりご冥福をお祈りする次第です。

彼の誠実なお人柄は、何事にも労を惜しむことなく、彼と接する全ての方々から信頼されていました。また、考古学に対する情熱は、彼に比肩する人を見ないほどの情熱を持っていたのではないかと思います。

その中山喬央氏の後にこの「まんじ誌」の編集職務を行うことになりましたが、全く引き継ぎも何もない状態で、手探りで行っていますので、行き届かないことが多いと思います。同人村上邦治氏の応援も頂きながら進めて行きますが、宜しくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

四月一日より消費税が上がりました。国家的には五兆円の増収になると言われていますが、これを全額福祉に使用すると現政権は言っています。本来、税金を国民から徴収する前に、徴収後の福祉はこうする、と言った誰でもわかる具体的な「完成絵図」を見せるべきではないでしょうか。そして国民がその絵図面で納得してから増税するのが本来のあるべき姿と思うのは私だけでしょうか。政治家への物足りなさを感じています。

（鍋屋）

まんじ第132号

平成26年5月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「夢はなお　高きを目指して天駆ける」
田寺怜葦（たでられい）画

まんじ

No.133

2014.8.1

まんじ第百三十三号　目次

均衡者外交　あるいはポーランドと韓国……新井　宏…4
離縁……太田精一…12
グリーン・エステート……古屋富雄…19
シアトルと茶道……松下英樹…22
桃花源……横山正義…25
短歌　三十首……曽根竣作…31
短歌　行雲流水（四十二）……石黒修身…35
石川理紀之助の一生（その三）……三戸岡道夫…40
関東管領始末記⑭　山内顕定と扇谷定正の対決……千坂精一…53
古い物・遠い夢……忠内正之…61
田方農業高校物語（一）……堀内永人…71
つれづれの源氏物語　第三回　青年時代その1　帚木三帖……小田紘一郎…78
漢詩　潮騒録（七十七）《漢詩の流れ65》……鯨游海…97
人類の仲間（六）……鈴木守…100
殉教（四）……鍋屋次郎…108
千家尊福伝（四）……村上邦治…118
「砂鉄のみち」を歩く……山田嘉久…125
日耕録（その十四）……山本鎭雄…136
密室銀行（十六）……匠克仁…147
地球征服……匠克仁…152
口紅（その十五）……池莉原作　山本勉訳…161
編集後記……編集子…189
表紙　絵……田寺怜葦…

均衡者外交　あるいはポーランドと韓国

新井　宏

政治とは、立場の異なる利害関係の妥協過程だと思っている。だから、政治に「理想」や「正義」を持ち出すと妥協の余地がなくなり、悲劇に向かうのが歴史である。

日本人ならたいてい知っている。韓国の李明博前大統領と中国の習近平国家主席が、安部内閣誕生の最大の貢献者であったことを。

李明博前大統領が任期末に、人気回復のために、竹島に上陸し天皇に謝罪を求めたことが無ければ、日本の右傾化はもっと緩やかだったろうし、野田前首相が石原前都知事の挑発に乗り尖閣諸島を国で買収して、折からの権力闘争中であった習近平に強硬姿勢も取らせなければ、安部政権は成立しなかっただろう。また、その後の朴槿恵大統領の「韓国の正義」による執拗な「言いつけ外交」が無ければ、安部内閣の高支持率も続かなかったはずである。

いまや日本は、中国や韓国ばかりでなく、米国からも「核武装」を懸念されるほど「右傾化」が進んでいるが、中国や韓国がそれを望んで強硬姿勢をとっていたとはとうてい思えない。全て、逆方向の効果を生んでいるのである。フランスの心理学者、エミール・クーエの言う「努力逆転の法則」である。

そんなことは政治家なら誰でも知っている。知っていても止められない。「心地よい歴史観」を国民の前に披露して、人気で指導者の位置を維持しているからである。

韓国で反日の英雄として称えられている安重根だってそうである。ハルピン駅で伊藤博文を暗殺したことによって、日本による併合を少しでも遅らせることができたのであろうか。事実は逆で、この事件を契機に一気に併合に進んだのである。第一、当時の日本では、伊藤博文が最も併合に慎重であった。

その安重根の顕彰碑をハルピンに建てるため、朴槿恵大統領は首脳会談で習近平主席に協力を求める。それに対して、習近平主席は、この程度のことで韓国に恩を売れるなら安いものだと軽率にも記念館の設置まで認めてしまった。もし新疆ウイグルやチベットの独立運動家達が、安重根を見習って、習近平主席の暗殺を図かったらどうするつもりなのであろうか。

本題に入る。

強大国に囲まれた中小国は、常に自らのオプションによらない危機に直面することが宿命で、それを見誤って独自の外交戦略を進めると大抵は悲劇につながる。その点では、海の都のベネチア共和国は、小国を自覚して、時には醜いほど現実主義者に徹し切り、常に状況に柔軟に対応し、海洋強国として地中海に千年もの間、覇を唱え続けることができた。

その逆の典型が、強国の狭間で、二度までも国が分割され領土を失って滅亡したことのあるポーランドである。そして、その後に、いまポーランドの轍を踏もうとしている韓国があるように思う。

ポーランドは十一世紀には、初期のポーランド王国を形成したが、十三世紀になると、残虐で知られる北方十字軍(ドイツ騎士団)とモンゴルの侵略により国土が荒廃し、モンゴルが去ってからは、空白地にドイツ系移民が大量にやってきた。それと共に、十字軍の迫害を逃れてユダヤ人も大勢やってきて、今の民族問題の複雑さを抱え、アウシュビッツの惨劇の当事者となってしまった。ちなみに、第二次世界大戦前にはユダヤ人の六割の三百万人近くがポーランドに住んでいた。

しかし、十四世紀末に成立したポーランド・リトアニア連合は、ドイツ騎士団に対して優勢となり、一四一〇年のヨーロッパ中世史上最大の会戦、タンネンベルクの戦いで圧勝し、騎士団をプロイセン公国として、ポーランドの配下に組み込むことに成功した。

その後、十六世紀にはポーランド・リトアニア連合から発展してポーランド・リトアニア共和国となり、ベラルーシ、ウクライナを含めて、ヨーロッパの最強国に成長する。一六八三年のオスマン帝国十六万人の軍勢による第二次ウィーン包囲では、ポーランド国王ヤン三世が救援に駆けつけ、オスマン軍を敗走させている。

ただし、ポーランド国王は世襲制でなく、貴族達によって選挙される仕組みであったために、お互いに牽制しあい、外国系の王家からの干渉を招くことが多かった。

これに便乗したのが、ロシアの女帝エカチェリーナ二世で、彼女が即位するやポーランドに対する影響力を行使して、親露派の貴族で元愛人のスタニスワフを国王につける。また、南下してはオスマン帝国との二度にわたる戦争に勝利して、ウクライナの一部やクリミアを併合し、バルカン半島進出の基礎を築く。

このロシアの進出に危機感を抱いたのが、ハプスブル

ク家やフランスである。ヨーロッパで緊張が高まった。

そこに登場したのが、プロイセン王国のフリードリヒ二世である。戦略家であった彼は、ロシアとハプスブルクの対立を利用して、中に割り込み、ロシア、ドイツ(プロイセン王国)、オーストリア(ハプスブルク家)の三強国によって、ポーランドを三分割し、最終的には一七九五年にポーランド王国を消滅させてしまう。

もともとプロイセンはポーランドの地名であり、プロイセン公国としてポーランドに属していた。それにもかかわらず、後のドイツ帝国を代表する国名となったのは、北ドイツのブランデンブルグ選帝侯がプロイセン公国も継承し、スペイン継承戦争でハプスブルク家に付いた功によって、神聖ローマ帝国の領域外のプロイセン王の称号を許されたからである。神聖ローマ帝国内では、王を名乗れるのは、ハプスブルク家のボヘミヤ王のみであった。

プロイセン王国は、ドイツ騎士団の後身でありドイツ人の国家であったから、それはドイツ人にとっては、何も不自然なことではなかった。かくして、プロイセン王国は、北ドイツのベルリンを中心とするブランデンブルグとポーランド内の東西プロイセンに加えて、ドイツ系移民の多い南方のシロンスク地域などポーランドの西側三分の一を併合した。まだら模様の領地とは言え、ドイツ最大勢力となつたわけである。

それまではドイツと言う国はなく、三百以上の領邦国家群を神聖ローマ帝国と称していたから、ポーランド西部を併合したことは、ドイツ統一の重要なプロセスであり、日本が韓国を併合したことに比べるとはるかに歴史的な必然性があった。

分割されたポーランドが復活するのは、百二十三年後の第一次世界大戦直後の一九一九年である。大戦中に、ロシア革命によってロマノフ王朝が斃れ、敗色濃いドイツ帝国(プロイセン)も崩壊し、ポーランドに権力の空白が生じたため、アメリカ大統領ウィルソンの提唱により独立を回復することになったのである。いわば、日本の敗戦により、朝鮮が独立を回復したのと状況は似ている。

しかし、事情が異なったのはポーランドでは、ロマノフ王朝の圧政に抗う独立運動によって、十万人以上の政治犯や難民がシベリアに抑留されていたことである。しかも、革命政府は無残にも彼らに帰国の手段を与えなかった。そうこうしている内に、後で述べるように独立ポーランドがロシア革命政府に戦争を仕掛ける。そのため、戦える者は、独立の師団を構成しロシア革命軍と戦うが、敗れてしまった。

悲惨だったのは残された女性や孤児達であった。国際的な支援もなく、次々とシベリアの凍土に斃れる悲劇の

中で、唯一の援助を差し伸べたのが日本である。それによって七百六十五名の孤児達が日本を経てポーランドに帰国できた。第二次世界大戦の時に、日本のシンドラー杉原千畝が日本政府の命に逆らって、六千名にビザを出して命を救ったのも、多くはポーランドから逃れてきたユダヤ人であった。そのためか、ポーランドはトルコと共に親日国家の代表である。反日国家の代表が韓国であることと比べると何と対象的なことであろうか。

さて、新ポーランドの領土の骨格は、パリ講和会議で決められた。最も激しく議論されたのは、ポーランドとドイツの国境策定問題であり、おおまかには、分割前の領地を基準として、東側をソ連(ロシア)に譲り、その代償として西側をドイツから得るというものであった。それは初期のポーランド王国の領域に近かった。

復活ポーランドとしては、西側については、ドイツ騎士団以来の良港ダンツィヒ(グダンスク)が国際連盟の監督下に置かれてしまったものの、ドイツ系住民の多い西南部の鉱工業地帯の上シロンクスの半分を得て大満足であったが、問題は東側の境界であった。折から革命ロシアは混乱期であり弱体化していた。

新生ポーランドは東側領土も回復するため、革命ロシアに対して戦端を開く。第一次世界大戦中の戦場となったポーランドには、ドイツ、ロシア、フランスに徴用された兵士が多く残っていた。

これを応援したのが仏や英で、戦況は一進一退であったが、一九二〇年末にはポーランドはベラルーシおよびウクライナの西部を得た。

この頃、ドイツは敗戦したとは言っても、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世を退位させたのはドイツ国民であり、巨額な賠償金に苦しみながらも、強国の意識を持ち続けていた。しかも新生ポーランドには百万人近いドイツ人が残り、経済や社会で重要な役割を演じていた。プロイセンは昔のようにドイツ領でなければならないという意識はドイツ国民に共通していた。

敗戦国ドイツは、一九二二年には早くも、伝統的な敵対国のロシア・ソビエットとラパロ条約を結んで、ベルサイユ体制に揺さぶりをかけ、その四年後の一九二六年には、国際連盟の常任理事国入りを果たしている。ドイツを無視してのヨーロッパはなかった。ドイツとソ連の接近は、挟み撃ちとされるポーランドを脅かす。

自ら独立を勝ち得た訳ではなかったので、ポーランドは独立のアイデンティティを必要としていた。ポーランド国民がドイツに対して抱く敵愾心は、韓国民の日本に対する反日感情よりも強かったかも知れない。

その中で、ナチスのドイツが急激に勢力を拡大し、ソ

ビエット連邦も旧ロシアにおとらずポーランドを狙ってくる。地政学的にポーランドは汎ゲルマンのドイツ勢力と共産主義ソビエット勢力の草刈り場であり、またもや、国の存立が脅かされはじめた。

韓国が、ロシアと日本に挟まれて、右往左往して、結局、日本に併合された状況と似ていた。状況が多少異なったのは、この頃、ポーランドの経済状況がかなり良くなっていたことである。今の韓国が、サムスン、現代自動車などで意気軒昂なのと似ていたかも知れない。

屈曲したポーランドの感情は、徹底的にドイツ嫌いである。さりとて、体制の異なるソビエット連邦はもっと恐ろしい。経済力も付いてきた。さあどうするか。

そこに生まれた政策が「均衡者外交」である。イギリスやフランスを巻き込んで、ソ連とドイツの間の「均衡者」として、その発言権を高めようとの構想であった。

しかし、ポーランドはドイツと組むこともソ連と組むことも、その選択肢になり得なかった。唯一の道は、独立を与えてくれた英、仏、そして米としっかり組むことでしか、ドイツやソ連に対抗できるはずがなかった。

それにも係わらずポーランドは、台頭するヒットラーへの防衛策として、まず一九三二年にソ連と不可侵条約を結んだ。この頃になると、ドイツとソ連はお互いの体制を憎悪し合い、十年前に結んだラパロ条約は有名無実化していた。

しかし、ポーランドのフランスに対する不信感もドイツに対する恐怖心に劣らぬものであった。ドイツを恐れるフランスではあったが、フランスも種々の思惑を秘めて、ドイツとポーランド間の問題を処理しようとしていた。そのためポーランドはドイツに係わる問題は自ら解決する方針を立てて、ドイツと一九三四年に不可侵条約を結ぶ。なんとかポーランドをフランスから引き離したいと思っていたヒットラーの思惑にはまった形であった。

そして、ドイツとの接近が「恐るべき幻想」であったことがまもなく判明する。

各国を天秤にかけながら、ドイツに近づくポーランドに対し英国は疑惑を抱く。

英国は、急膨張するナチスのドイツがオランダに向かうことを恐れ、東のソ連に向けさせようと画策していた。ドイツがポーランドと組めば、ヒットラーはオランダに向える。オランダがドイツの手に入れば、ロンドンは空爆圏に入る。

ポーランドをドイツに近づけたのは駐ポーランド大使の酒匂秀一であった。ソ連を最も警戒する日本としては、日露戦の時と同じく、ポーランドにドイツと同盟関係を結ばせることが国家の戦略であった。

もともとポーランドは「均衡者外交」などという天秤

外交ができるほどの強国ではなかった。あっちに付いたりこっちに付いたりすることは、極めて危険であった。ナチスのドイツに近づいても、ドイツは平然とダンツィヒ(グダンスク)の返還やその通路の治外法権を求めてくる。これを拒むとヒットラーは激怒する。

その一方で、英、仏は、ソ連にドイツの背後を脅かさせるため、餌としてポーランドに受け入れがたい要求をしてくる。ソ連と結んでいた不可侵条約などは簡単に破棄されるかも知れない。

政治の世界では何が起こるかわからない。歴史的にも思想的にも、最も憎み合っていたナチスのドイツとソ連が突如として不可侵条約をむすぶのである。一九七二年に、ニクソンが、日本や台湾の頭越しに中国と手を結んだことに似ているが、それを察知した田中角栄がアメリカの先手を取って、ニクソン訪中からわずか半年後に「日中共同声明」を発表する。これが政治である。

もちろん、ドイツとソ連の不可侵条約の裏には「ポーランド分割秘密協定」があった。この秘密協定があったからこそ、不可侵条約が締結されたのである。

かくして、一九三九年九月一日にドイツはポーランドへの侵攻を開始し、それに呼応して半月後には、東からソ連も攻め入り、一ヶ月余でポーランドを制圧し、再びポーランドは分割されてしまう。

これが第二次世界大戦のはじまりであった。最大の被害者ポーランドを第二次世界大戦の主因に挙げるのは心苦しいが、ここにもエミール・クーエの「努力逆転の法則」を見る。

なぜ、このようにポーランドの分割問題を取り上げるかと言えば、それは韓国が同じ歩みをつづけているように見えるからである。

日本で韓国併合が激しく議論されている最中の一九〇九年、韓国最大政党を自称する「一進会」は、大日本帝国と大韓帝国が対等な立場で大帝国を作るという提案を出してきた。国力に大差がある中での対等合併論を出してくるところが韓国らしいが、その中で「日本は莫大な費用と多数の人命を費やし韓国を独立させ、ロシアに飲み込まれるのを防いだのに、韓国はこれに感謝もせず、あちこちの国にすがり、外交権が奪われ、保護条約に至った」と述べている。結局「あちこちの国にすがる」行動が、外交権喪失や保護国化の原因と自認していたのである。

それにしても、時に清国に付き、時に日本に付き、日清戦争後は、ロシアと日本をふらふらと行き来する行為は、強国に挟まれた小国の運命と言えばそれまでであるが、独立国を呈していなかった。しかし、そんな昔のことを言っていても仕方がない。

実は、近年になっても韓国は同じパターンを繰り返している。

二〇〇五年三月に盧武鉉大統領の掲げた「北東アジア均衡者論」すなわち「韓国が中心になり周囲の強大国と等距離外交を展開する」という構想である。これは明らかに、強国の間にあって、韓国が政治を主導しようとする意図から出たもので、ポーランドの「均衡外交」と同質のものである。

この構想については、盧武鉉大統領の言動に支離滅裂なところがあったので、米国も日本もまともに取り合わず無視したが、外交慣例から言えば、米国との同盟破棄宣言にも等しい内容であった。韓国が世界を自ら泳ぐ行動をとる時、ろくな事はない。

面白いのは、その時の野党党首であった朴槿恵が、この構想を「日露戦争直前の大韓帝国の中立宣言に比喩し、中国、日本、ロシアはもちろん、北朝鮮までも韓国を均衡者としては認めない現実の中で、韓米同盟から脱することは外交的な孤立を招く」と批判していたことである。

さて、それでは最近の朴槿恵大統領の行動はどうであろうか。

日本たたきの余波もあるのであろうが、中国に急接近している。中国語を学んでいて、個人的にも親中国観があるのかも知れないが、韓国における中国貿易の比率が米国を越え、韓国が無原則に中国に傾斜することには、米国が深刻な憂慮を示している。明確な言葉は使っていないが、いわば朴槿恵の「均衡者外交」なのである。

朴槿恵大統領としては、慰安婦問題と南京事件、竹島と尖閣諸島、ふたつの分野で中国との共闘体制をつくり、日本に対する外交的な圧力をかけるつもりであろうが、はたしてそうなるであろうか。

事実、外交専門家からは、米中間の等距離外交などという話は、国際政治への理解が足りないことから出た発想で、盧武鉉政権の「北東アジアの均衡者論」と同じく、大学院生レベルの理想主義的思考だと酷評されている。

国際政治の面では「均衡者」という言葉は、大国が強力な軍事力を背景に、国際紛争を調整・仲裁して平和と安定を確保する役割を指す国際政治の用語なのだそうである。

現実の問題として、韓国が中国との経済関係をさらに発展させるのは当然として、中国は豹変する国である。経済面から言えば、韓国が中国の一歩先を行くとは言え、本質的には競合関係にある。中国が経済的に発展すれば、真っ先に競争相手となるのが韓国である。

韓国は、現在でさえ高度な技術を要する基礎資材・基礎部品の多くを日本に頼っている。韓国はそれを輸入して完成品として中国に輸出して稼いでいるので、対日貿易は大赤字が続いている。

産業構造上、中国がまもなく韓国と同じことができるのは目に見えているが、日本に追いつくには時間を要する。だから、中国が更に発展するためには、まず韓国を経由することなく、直接日本と組む方がメリットが多い。

中国は豹変する。

既に韓国には痛い経験があった。韓国の低賃金産業は、技術革新に向かう代わりに、中国の低賃金を求めて中国に進出し成功を収めた。しかし、中国でも賃金の高騰が続いたため、経営が厳しくなり、更には中国政府からも見捨てられ、夜逃げ同然に引き上げざるを得なくなった。だから、韓国では中国嫌いが非常に多いのである。ギヤが入れ替われば日本嫌いよりも中国嫌いが多くなる国なのである。

その上に、韓国は軍事面で重大な課題を抱えている。米国が推進するミサイル防御体制への参加である。しかし、ミサイル防御計画は、北朝鮮の核ミサイルに対しては、距離的に近すぎて、効果に疑問がある上に、中国やロシアは猛反発するのは目に見えている。

第二、ソウルは北朝鮮国境から五十キロの大砲射程圏内にあり、ミサイル防衛体制ではどうにもならない。だから、韓国は当然、米国と日本が進めるミサイル防衛体制には参加したくないのである。そのため『戦略的に曖昧』を続けているが、これが米国を苛立たせている。

その中で、経済的、政治的に韓国が中国に近づき過ぎることが如何に危険か韓国は判っていない。

米国と日本にアセアンを加えた経済圏と中国の経済圏が対立に向かう日は遠くないだろう。しかも、インドの総選挙ではモディ率いる野党が圧勝し、日本からの投資を熱望する展開にあり、日本が中国を止めてインドに向かうのは目に見えている。その時、韓国が中国側に付くしかなければ、それが幸せとは思えないのである。

やはり、エミール・クーエの言う「努力逆転の法則」となる運命なのかも知れない。

最近の日本と中国の関係を第二次世界大戦の前の仏と独の対立に比喩する論評がある。もちろん、中国がナチスのドイツであり、日本がフランスである。米国は英国の役割であろう。ロシアは相変わらずロシアである。そうなれば、韓国はポーランドである。

第二次世界大戦などと物騒なことは言わないが、政治・経済面での世界大戦の火種に韓国がなるかも知れないと危惧している。

そして今、韓国はセウオル号沈没事件で、朴槿恵大統領ばかりでなく、韓国そのものが方向感覚を失って漂流中である。もともと均衡者外交などという高度な戦略を採れる国ではないのである。

離縁

太田精一

深川佐賀町の裏長屋に住む清次郎は、夜明け前に起き、青物市場で野菜を仕入れ、日本橋に出て、この界隈の町筋を売り歩くことを日課としていた。

やっと気を取り直した清次郎は、残った大根や瓜を橋下の船頭たちにタダで配り、身軽になって家に帰り着いた。

家には、女房のお夏が昼餉の支度をして亭主の帰りを待っていた。

「お夏、今帰った。今日も売れ行きはさっぱりだ。ほとんど残っちまって、持って帰るのもいまいましいので、日頃世話になっている日本橋の船頭にくれてやった。こう熱くちゃかなわねえ。飯は、後にして、ちょっと横になる」

清次郎は倒れ込むように床の上に横たわり、眠り込んでしまった。

棒手振りの男が、日本橋の欄干にもたれ、喘ぎながら汗を拭っている。薄靄のかかった土用の蒸し暑い日であった。

棒手振りとは、天秤棒を担いで魚、野菜、日用品などを売り歩く行商人のことである。

男の名は、清次郎と言い、野菜の行商を生業としていた。

売れ残りの野菜の入った籠と天秤棒が、清次郎の脇に放置され、籠には萎びかけた大根と瓜が生気を失った老婆のようにぐったりと横たわっている。

陽も高くなり、暑さが増してきた。清次郎は、喉が乾き、めまいがして倒れそうになった。欄干に身体を預け、そのまま、座り込んでしまい、小半時が過ぎていた。

今日も商いは、上手く行かなかった。大根や瓜の多くが売れ残ってしまったのである。

清次郎の住む裏長屋の台所の横には、水桶、柄杓、笊、お椀、お膳が並べておいてある。

「あんた、折角ご飯を炊いたからお食べよ。寝ちまったら私もお預けになってしまうじゃないか」

お夏は、いびきをかいて寝てしまった清次郎の顔を見て言った。

清次郎は、しばらく熟睡した後、眠りが浅くなり夢を見た。

「清次郎よ、お前は今の仕事を続けて満足か。お前には知恵があり、一介の棒手振りで終わる男ではない。上方に渡り、京、大坂で商いの修業を積めばきっと大商人になることができる。その後に、江戸に戻って来ればよい」

一人の僧侶が夢の中に現れ、そう言い残して消えた。

日が覚めるとお夏が、清次郎の顔を心配そうに覗き込んでいる。

「どうしたの、お前さん。京だとか大店の主だとか、何か訳のわからないことを言っていたのでこの暑さで頭がおかしくなったのではないかと思った」

夢から覚めてしばらくするうちに清次郎は、先ほど見た夢は、仏のお告げであるかもしれないと思った。

(そうだ俺は、いつまでも棒手振りをしていてはいけない。俺には、俺にふさわしいもっと大きな仕事があるはずだ。俺は、商人として大店を持つ才覚も器量も持ち合わせている。俺の望みをかなえるには、上方で修業を積み、一人前の大商人になることだ。その看板を背負って、また江戸に戻って来ることにしよう)

そう決心した清次郎は、お夏に、大商人になるため上方に行き、修業をしたいと語った。

「お夏、俺は上方へ出て商いの修業をし、立派な商人になって、またこの江戸に戻って来る。それには、お前を一緒に連れて行くわけにはいかない。だから本当にすまないと思うが、それまでこの江戸で待っていてほしい」

「お前さん。何を藪から棒に言い出すの。私はお前さんと一緒になってから二年経つけど本当に幸せだよ。確かにいつもお金には困っていて、その日暮らしだけど、何とかやりくりして生きて行ける。私は、お前さんと一緒にいるだけで幸せだと思っている。そりゃお金も、ないよりあった方がいいに決まっている。けどお金より大切なものがここにはあると感じているのさ」

風が止まって、部屋の中は熱気でうだるような暑さであった。

「お前は、そうかもしれない。だが、俺は男だ。俺には、世間に認められ、出世したいという野心がある。その野心を満たすことができるのは今をおいて他にない。俺は、すでに二十一になる。丁稚から修業をするには遅すぎる。だが、それでもやってみたいのだ」

「私は、お前さんより一つ下の二十歳だよ。待てと言う

が、一体いつまで待ったらいいんだい。今から上方で商人の修業をするたって、早くても五年はかかるだろう。その間に私は、年増女になってしまう。だいいち、これからどうやって私は生きて行ったらいいんだい。どこかのお店で、小女にでもなれと言うのかえ。私は、上総の生まれで、江戸には知り合いも少ないし、頼る当もありはしない」

お夏は、上総船橋の生まれで、遠縁を頼って江戸に来て両国の小料理屋の女中として働いているときに清次郎と知り合い、世帯を持った。

「勝手を言って申し訳ない。この通り謝る。だが、俺はどうしても、もう一度この夢に自分の人生を賭けてみたいのだ。お前が待てないというならば、それも仕方がない。何しろ無理な願いだからな。今すぐ離縁状を書いてやるから実家に帰るなり、どこかに働きに出るなりお前の自由にしたらいい」

「お前さんがそこまでいうのであれば、私も覚悟を決めます。いつ帰って来るか分からない亭主を待って、この先暮らすより、いっそ別れて私なりに身の振り方を考えてみます。何年か後、お前さんが江戸に戻った時に、まだ私が一人でいるようだったら訪ねて来ておくれ」

お夏は、いつ戻るか分からない亭主を待つほどの決心はつかなかった。だからと言って清次郎の固い決意を変えることはできないと考え、別れる覚悟をした。

すでに日も暮れかけている。薄暮が辺りを覆い始めた。二人は、行燈に灯もつけず、暗い部屋の中で、交わす言葉も尽き、ただ黙って向き合っていた。

清次郎は、寛政十年（一七九八）六月吉日、大坂に向けて江戸を発った。大商人になるにはやはり大阪での修業が最適であると思い定めてのことであった。

貯えもわずかしかない清次郎は、路銀にも事欠き、時には野宿をしたりして、やっと大坂に辿り着いた。だが、働き口の当てがある訳ではなかった。

青果物を取り扱う商人として働き口を見付けようにも、二十歳を過ぎた清次郎を雇ってくれる店はなかった。とにかく働き口を見付けなければならない。

焦って歩き回るうちに、清次郎は急に腹痛を起こした。道頓堀近くの道修町の「もぐさ屋」という薬種問屋の前に差しかかった時である。

店の前で苦しんでいると、その店の主人久兵衛が、出て来て、使用人に介抱するように命じ、薬を与え、店の中で休むよう取り計らってくれた。

「どうなさった。あんた大坂の人とは違いまっしゃろ。どこから来なさった。えらい難儀でしたな。いま薬を飲んださかいじきに良くなります。恐らく癇の一種でっしゃろ」

「まことに有難うございました。一時はどうなるかと思いました。大坂には身寄りもありませんので、このままくたばってしまったら、無縁仏となってどこかの寺に引き取られるのかなと思っていました。私は、江戸の生まれで、棒手振りの青物屋をやっておりましたが、このままではいけないと思いまして、商いの道を一から覚えようと大坂にやってまいりました。何と言っても大坂は、商人の町、ここで修業すればきっと良い商人になれると思ってやって来た次第です。ところが、身寄りもなく、丁稚奉公するには、年を取りすぎていますので、どこも使ってくれず、往生していたところです。もしお差支えないようでしたら、こちら様で使ってもらえないでしょうか。どんな仕事でもやりますのでお願いします」

腹の底から絞り出すような声で懇願する清次郎の姿を見て、久兵衛の心が動いた。店の前で倒れていたのも何かの縁であろう思い、とりあえずは、丁稚並みの扱いとして店に置くことにしたのである。

「よろしゅうおます。まあ家で働いてみなはれ。うちとこもそれほど儲かっていませんさかい給金は、ほんのお小遣い程度でっせ。あんさんのような二十歳を過ぎた方には少のうおますが、他の奉公人の日もあるさかいそうさせてもらいます。それでもよかったら今日からでも働いておくれやす」

「もぐさ屋」は、伊吹山で採れるもぐさから造られたお灸を仕入れて、全国の薬種店に販売する卸問屋で、使用人も番頭、手代、丁稚を含め、十五人ほどいた。

清次郎は、番頭に次ぐ年長者でありながら、新参者として扱われ、雑用に追い立てられる毎日であった。もぐさとか灸に関する商品知識はなく、いちいち先輩の手代や番頭に教えを請わなければならない。また、大坂弁にもすぐは馴染めず、先輩風を吹かす若い奉公人からも馬鹿にされ、肩身の狭い思いをしながらじっと耐えた。

七年が過ぎた。

清次郎はやっと手代になった。まだ蓄財をするゆとりはなかったが、主人の久兵衛に気に入られ、何とか暖簾分けしてもらえるかもしれないと期待が持てるまでになった。

ところがその五年後の文化七年（一八一〇）「もぐさ屋」に不幸が襲った。主人の久兵衛が、突然脳溢血で倒れ、そのまま帰らぬ人となったのである。

久兵衛には、子供がいなかったため、跡取りがなく、とりあえず番頭の伝三郎が店を引き継ぐことになった。

だが、伝三郎は、清次郎を嫌っていた。江戸からの流れ者である上に、長年勤めた自分より人望を集め、おかみさんにも気に入られ頼りにされていることから、やがては自分にとって代わり店を取り仕切ることになるのではないかと怖れたのである。

伝三郎は、清次郎の仕入れた商品の品質や価格に難癖をつけて、仕入れ先との関係に水を差すように仕向けた

り、売掛金の回収を急がせたりして清次郎の信用を傷付け、手代としての立場をないがしろにし、店に居づらくさせた。

その上、久兵衛の他界後、売上が減少し、店も縮小した。そのため、奉公人も減らさざるを得ない状態に落ち入っていたのである。

清次郎は、久兵衛亡き後も一年間、じっと耐えて勤めてきたが、期待していた暖簾分けも望めなくなり、伝三郎にも冷遇され、最早「もぐさ屋」での居場所もなくなったので、店を辞め江戸に帰ることにした。

江戸を出てから十三年が経っていた。

帰るとなると無性に女房のお夏のことが恋しくなった。

（あの深川佐賀町の裏長屋は、今でもあるかな。お夏は、俺を待ってあそこで暮らしているだろうか。大商人になる夢を持って大坂に来たが、その夢は結局叶わなかった。今更おめおめと捨てた女房のところに戻る訳にもいかないが、達者で暮らしているか、顔を一目見るだけでいい）

そう思うと矢も盾もたまらず、文化八年（一八一一）六月、大坂を後にした。

江戸に舞い戻った清次郎は、すぐに深川佐賀町の裏長屋を訪ねてみた。二年前の大火により、清次郎の住んでいた長屋は、跡形もない。その場所に再び新しい長屋が建てられ、見知らぬ人々が住んでいた。

清次郎を知る者は一人もいない。彼は、まるで浦島太郎のような錯覚を覚えた。ただ茫然と佇み、お夏の姿を探し求め、さ迷った。長屋の人たちにも尋ねてみたが、手掛かりになるような噂を聞くことはなかった。

「この辺にお夏という瓜実顔で目もとの涼しい、若後家風の女は、住んでいませんでしたか」

「知らねえな。おいらも最近この長屋に引っ越してきたばかりで、昔どんな人が住んでいたか知らない。知っている人は誰もいやあしないんじゃないか。あるいは大家なら分かるかもしれないよ」

大家も代っていて、清次郎も知らない人であったが、念のためお夏の行方を尋ねてみた。

お夏という存在さえ知らないという虚しい返事が清次郎の心を痛めた。

清次郎は、お夏の消息を知るには、町の中を歩き廻り、聞き出すのが最も手っ取り早いと考え、再び棒手振りに戻り、野菜を本所、深川、日本橋辺りまで売り歩くことにした。

一カ月ほどしたある日、清次郎は、お夏に似た一人の垢抜けた年増女を日本橋駿河町の通りで見付けた。大店のお内儀らしい女で、身なりも良く小女を連れている。年恰好は、三二、三で瓜実顔、きっちり結い上げた髪に

鼈甲の簪を挿し、絹物を身に纏っていた。

（お夏だ、お夏に違いない）

長次郎は、一瞬息を呑んだ。お夏の暮らしぶりを見届けたいという衝動に駆られ、後を追った。

お夏は、日本橋尾張屋の紙問屋「尾張屋」のお内儀に収まっていたのである。

清次郎には尾張屋の暖簾をくぐって入る勇気はなかった。店の門口をただうろうろするばかりである。

翌日、清次郎は、仕事を休んでお夏が「尾張屋」から出てくるのを待った。風のない暑い日である。土用の陽射しが地上を容赦なく照らしている。清次郎は、流れる汗を拭いながらひたすら待った。

昼の八つ時、お夏が下女を連れて尾張屋から出てきた。三味線の稽古に行く途中らしい。

お夏が、裏通りに差し掛かった時、清次郎は声をかけた。

「お夏、お夏じゃないか。久しぶりだな。俺、俺だよ。清次郎だ」

清次郎は、お夏に近づき、その顔を突き出した。

お夏は、驚いて、目をしばたたせながら清次郎の顔を見た。その瞬間、信じられないような顔つきをして息を呑んだ。

「あなたは、本当に清次郎さんかえ。まるで夢を見ているようだよ」

お夏は、清次郎が江戸に帰る日を五年間待った。離縁になったものの、清次郎は心の中の亭主であり続けていたのである。近所の針仕事を手伝ったり、料理屋の女中をしたりして何とか生活をしていたが、長屋の大家が見るに見かねて日本橋の紙問屋「尾張屋の」の住み込み女中の奉公口を世話してくれた。そこで働くうちに、お内儀が胸の病で旅立ったため、主人弥兵衛の身の回りの世話をすることになったのである。

一年程経ったある夏の夜、お夏が、弥兵衛の寝所の支度をして、蚊帳を吊っていると、外から帰って来た弥兵衛が、いきなりお夏を抱きかかえ、夜具の上に押し倒した。お夏は清次郎を思い浮かべ抵抗したが、男の力には抗しきれず、弥兵衛のなすがままになってしまった。

お夏は、弥兵衛を振り切って逃げることができなかった自分を責めた。半面、帰るか帰らないか分からない元亭主を待つ気持ちが萎えて来て、弥兵衛の腕の中で感じる男の激しさを受け止めようとする気持ちにもなっていたのである。

弥兵衛もお夏の女らしい仕草と、そこはかとなく漂う色気に魅かれていた。だが、それだけではなかった。お夏の働きぶりとその才覚は、大店のお内儀にふさわしいと弥兵衛は、常日頃から思っていたのである。

弥兵衛は、お夏を後添えに据え、すでに七年になる。

その間、男一人、女一人の二人の子に恵まれ、清次郎のことは、ほとんど忘れかけていた。

そんな時の再会である。お夏にとっては、まさに青天の霹靂であった。

「確かにお前さんは、清次郎さんだ。大坂から二度ほど便りをくれただけで、どうしたのかと心配していた。お前さんの帰りを五年以上もあの長屋で待ち続けていたけれど、尾張屋に奉公するうちに、旦那が是非にというものだから、後添えに入りました。今は、紙問屋のお内儀に収まって、子供も二人でき、幸せに暮らしています。お前さんのことは忘れたことはなかったが、時が、昔の想い出を遠くに運び去ってしまいました」

お夏は、心境を語った。

「お前が幸せに暮らしていればそれでいい。大坂で一旗揚げようと思ったが、うまく行かなかった。可愛いい女房を捨てた報いかもしれない。今更お前とよりを戻すつもりはない。俺は、もう二度とお前の前に顔を見せないつもりだ。これからも達者で暮らしてくれ」

そう言い残して清次郎は、お夏の前から姿を消した。自分の捨てた女房があんなにも良い女になっていようとは思いもしなかった。

それに引き替え自分の現在の境遇は、どうであろうか。清次郎は、女房を離縁してまで我欲を押し通そうとした自分を悔いた。幸せは、結局のところその置かれた境遇の中で、不満の種を取り除き、楽しさを見出すことにあるのだと気付いた。

お夏はそれができる女であった。それなのに彼女を見限ったのだ。

清次郎は、千住大橋北岸の河原町のヤッチャバに向かった。そこには野菜市場がある。

千住の旅籠屋に宿を取り明日は野菜市場で蓮根や芋などを仕入れ、天秤棒を担いで浅草まで売りに行こうと思い立った。

日も暮れ、隅田川の川面には涼風が立ち、残照が、わずかに光をとどめている。

千住の旅籠では飯盛り女が盛んに客を引いている。

清次郎は、その女に手を取られ、旅籠の敷居を跨いだ。

完

グリーン・エステート

～滞在型アパートメントによる「クラインガルテン」の提案～

古屋富雄

英語で「estate」は、土地や資産、財産権、社会身分などのことです。不動産のことをアメリカでは一般に「real estate」と言います。

農と不動産をセットにした農業・農村ビジネスを「グリーン・エステート」と称し、農業と不動産の大いなる可能性にチャレンジします。

従来、農業と不動産業をセットにした農業経営手法にクラインガルテンがあります。クラインガルテンとは、農園付き別荘または、簡易宿泊施設のある滞在型市民農園のことで、その起源は19世紀初頭のドイツとされています。

我が国でもクラインガルテンを新たな農業経営手法として取り入れる市町村が現れています。今回の提案は、このクラインガルテンの経営手法の幅を広げることで「農ある暮らし」を楽しむ人を農村などの地域に呼び入れ、ビジネスとして成り立たせる取り組みです。

政府は、現在、経済が好転しつつあるとしていますが、まだまだ日々の暮らしに反映されていないのが現状です。

企業は、自社の経営改善のため社員のリストラを敢行し、その結果、社員の数は激減し、それを派遣社員やアルバイトなどで補っています。そして、人口は増えることはなく、今まで満室であったアパートメントも空き室が目立つようになりました。

都市部の農家では、市街化区域の農地と調整区域の農地の双方を所有している農家が一般的であります。

市街化区域の農地については、生産緑地や相続税の納税猶予されている農地を除くほとんどが、宅地や雑種地

に転用されています。従って、農家は、農地の活用として、調整区域の農地は、田や畑を確保して農業を行い、市街化区域では、アパートメントや駐車場等の不動産業としての資産管理を行うなど、農業と不動産による収入で生計を立てています。

調整区域での農業も高齢化や担い手不足などの要因により、遊休化しつつある農地が目立つようになりました。しかし、皮肉なことに、農家以外の市民は、自分の食べる物は、自分で作りたいという「自給自足」ができる「農ある暮らし」を求めるニーズが高まっています。

市民農園では、狭すぎる、しかし、それ以上の農地は、農家以外には、借り受けることができないと頭から決め込んでいます。南足柄市の新たな農業参入システム（※南足柄市新規就農基準と※市民農業者制度）を活用すれば、誰でもが農業に参入できることをアピールする必要があると考えます。

農地の貸し借りについては、農業経営基盤強化促進法による契約のため、市町村が契約当事者となり、農地を借り受ける者（市民）への権利移動は発生しません。そのため、農地を貸し出すもの（農家）は、安心して農地を貸すことができます。

南足柄市農業委員会事務局には、毎年１００件ほどの新規就農の相談がありますが、問題となることは、農業参入できる仕組みはあるが、その拠点となる家やアパートメントがないことです。

そこで、新規に農業を目指す者の拠点として、例えば、週末に農業ができる環境を創りだすことです。従来のアパートメント経営を払拭し、居住型から滞在型に変更し、農と不動産をセットにした農業・農村ビジネス「グリーン・エステート」に、農業の将来を見出すべきと考えます。

アパートメント等の賃貸料については、滞在型では、従来の居住型に比べ家賃を下げなければなりませんが、空き室があるより、はるかに効率的であり、所有している調整区域の農地も農地のまま活用することができます。

南足柄市の農業参入システムを活用した「グリーン・エステート」を全国どこでもできるよう、現在、衆議院議員・松田学氏とともに、その法制化に向けて行動を起こしています。

「グリーン・エステート」の農業経営手法が広がることにより、市民の農業への参入が促進され、その結果、農業への理解者が全国的規模に広がるものと考えます。更に、都市住民との交流をコラボした「グリーンツーリズム」（都市住民の農村での余暇活動）を作り上げ、日本ならではの農業・農村ビジネスへと発展させたい。

※南足柄市新規就農基準
耕作面積１０００㎡以上で農家を目指す就農希望者を対象にした農業参入システム（平成20年10月１日、南足柄市施行）

※市民農業者制度
耕作面積１０００㎡未満３００㎡で市民農園より規模の広い農業を目指す就農希望者を対象にした農業参入システム（平成21年９月１日、南足柄市施行）

シアトルと茶道

松下英樹

平成十五年（二〇〇三年）九月、私は思い切ってビジネス英語を学ぶため、勤めていた会社を一年間休職。留学斡旋業者の仲介にて、アメリカシアトルにあるワシントン大学にてインターンシップをしながら生の英語を学ぶというプログラムに参加しました。

渡米前、もともと好きだった海外旅行を通じ、自国の文化を誇りに思う世界の人々に興味を惹かれると同時に、日本の文化を真っ向から見据えたことがない自分に気づきました。それがきっかけとなり、都内で裏千家茶道を習い始め、休職までの一年間稽古に通いました。

日本文化が少しずつおぼろげながら見えかけていた頃、渡米のため、残念ながら茶道の稽古通いは同年八月で一旦お休み。アメリカでの生活、ビジネス英語に百パーセント専念するつもりでした。

ただ、本当に偶然だったのですが、ワシントン大学での日本人参加者向け入学オリエンテーションの際、一人のアメリカ人女性英語講師が、裏千家シアトル出張所（現・東西茶の湯センター）にて、社中の一人として茶道の稽古通いをしていると自己紹介。まさかこのシアトルの地で、茶道、しかも自分と同じ流派のアメリカ人女性を見つけるとは奇跡的。

迷わず、この女性に出張所見学を申し出て、シアトルにて一年間茶道を学ぶきっかけとなりました。ただ、アメリカ習慣にどっぷり浸かるという当初の目論みが少々狂ってしまいましたが・・・。

シアトルはアメリカ西海岸、カナダとの国境近くに位置し、アメリカ西海岸有数の世界都市です。

世界の航空・宇宙産業の中核をなすボーイングをはじめ、マイクロソフト、アマゾン、スターバックスなど、世界に名を知られる大企業誕生の地。

また、気候面では、夏は涼しく冬も緯度が高い割に寒くはないのですが、秋から春にかけては雨、特に霧雨が多く、一週間連続で降り続く事もしばしば。アメリカ人の間では雨が多い街として有名です。その反面、夏は雨がほとんど降らず、北海道の夏を思わせる爽やかさに。水と緑溢れる「エメラルドシティ」の愛称で知られ、全米の「住みたい都市ランキング」のベストスリーの常連ともなっています。

自然豊かな点において日本の環境と類似し、自然や季節感を重んじる茶道には相応しい街であると感じています。

出張所には、稽古を指導する先生がお二人。

お一人は出張所所長を務める流暢な日本語を話すアメリカ人女性、パニー・宗心・ミッチェル先生。もうお一人はミッチェル先生の助手を務め、ほとんど日本語が話せないアメリカ人男性、ティモシー・宗和・オルソン先生。お二人とも茶道をこよなく愛する生粋のアメリカ人。

ここでは、出張所所長を務めていたミッチェル先生の茶道人生を紹介したいと思います。

ミッチェル先生の茶道との出会いは、学生時代にまで遡ります。当時、ワシントン大学でアートヒストリーを専攻していた先生を、一気にお茶の世界に引き込んだのは、授業の一環として訪れた京都の裏千家本家でした。

生まれて初めて茶が点てられる様子を見た瞬間、

「これを習得してみたい」

と強い感銘を受けたミッチェル先生。一九七四年（昭和四十九年）から七年間にわたり、京都にある裏千家の宗家に通い、お茶の稽古に励みます。ミッチェル先生によると、家元をはじめ、本家と家族のような付き合いができたことはこの上ない幸運。毎日の稽古に励む生活も楽しいものだったと。

しかし、京都で充実した茶道人生を送っていた先生は、アメリカに帰国後、突然壁にぶつかりました。今でこそ、多様な文化が受け入れられるシアトルですが、一九八〇年代前半当時は、茶道を続けようとする先生に対する周囲の反応は、「変なアメリカ人」という冷たいものだったそうです。さらに、茶道を支える環境など無に等しく、先生自ら、茶室から和菓子作りに携わり、すべてが手探り状態だったと言います。

「世界中どこにいても茶道の素晴らしさは不変です。自分の家を見つけた、というほっとした気持ちになれるのです」

と語られていたことは今も印象に残ります。

自宅で茶道を教える傍ら、オルソン先生とともに茶道の普及のため様々な活動を行っています。ワシントン大

学ではアートヒストリーの授業の一環として、学生に茶道の手ほどきをしているほか、シアトル美術館で毎月二回の茶道デモンストレーション。季節の節目には一般公開の茶会、お茶の世界を探求したい人のためのワークショップなどなど、精力的に多彩な活動を手掛けるミッチェル先生とオルソン先生。

そんな茶道に生涯を捧げる二人のアメリカ人先生に、心の底から感銘を受けたのは自然な流れだったかもしれません。

平成十六年（二〇〇四年）十月、私はインターンシップの傍ら出張所に入り浸りだった茶道生活に後ろ髪ひかれつつ帰国。

帰国後直ぐ同じ会社に復職するとともに、休職前にご指導頂いていた同じ先生の下、茶道の稽古通いを再開。以前にも増して、茶道、日本文化の素晴らしさを実感した私は、サラリーマンとして残業の日々を送りつつも、「市井の茶人」

を目指すべく、更に稽古に励むようになり、現在に至っております。

桃花源

横山正義

今年も梅が散り、桜が散ると桃の花が咲き出します

まえがき

私が本棚を整理していると、叔父の日記が出てきました。

私はじ十五年前、昭和十三年の日記を読んでみました。今読んでも、まだ新鮮さがあると思い書いてみました。

我が家にもささやかですが、こんなに希望に満ちた時があったのかと、私は中国の古事「陶淵明の『桃花源』」を思い出しました。

「漁夫が川を上り、桃花源に行き着いたが、のちに桃花源を探すと二度と、桃花源は無かったというのです」。

叔父が旧制中学五年（昭和十三年）の夏休みに、現在の静岡県菊川市内田（旧内田村）から伊豆に旅行した時の日記です。

巷間、旅は伊豆に始まり、伊豆に終わるといいます。伊豆のたびは修善寺橋を渡るところからはじまります。

修善寺橋での狩野川は流れが早く、流声が東西の山に木霊（こだま）して大きい。橋をわたると、現世（うつしよ）の煩悩から離れ、祓い清められます。

叔父の日記より

夏休みも、半ばが過ぎた。昭和十三年八月十五日、朝から紺碧の空、最近、雨が多かったので得がたい日だ。一枚のはがきが届いた。手にとって見ると、東京の兄からのたよりだった。

「十日ほど夏休みをとり、今、伊豆の弟のところにいる、三日ほど前に来た、これから伊豆の温泉地めぐりを

しようと思う。お前も用事がないなら、来ないか」と書きこまれていた。

僕は中学最後の夏休みだが半ばを過ぎると、休みをもてあまし気味になっていた。

「願ってもない」、心躍った。

父と母に兄からのたよりを話したら、父は「さびしいが最後の夏休み、思い出になるだろう、行って来い」、と快諾してくれた。

「はじめての一人旅、気を付けて行けよ」、と父と母は手を振って、自転車に乗る僕を見送ってくれた。

僕は東海道線堀之内の駅までの一里を自転車、そして乗り換えて、上り汽車に乗り、車上の人となった。

大井川の鉄橋を越え、島田の駅を越すと、入道雲が立ち込め、「ざっ」と雨が降り始め、夕立だ。車窓から子供たちがあわてて家路をかけ急ぐ様子が見え、農家の人たちは田に水を引く作業を、あわただしくする姿が見えた。

ぽんやり外を見ていると雨の景色となり、うとうとしはじめると、「がたん」という衝撃で目を開けると、沼津で機関車の取替えのため、連結器を繋ぐ音であった。

堀之内駅から長いトンネル二つ（金谷前、用宗前）、大きな川、橋三つ（大井川、安部川、富士川）を抜け、そしていくつかの駅を通りすぎ、三島駅に着いた。

駿豆線（三島～修善寺）に乗り換えだ。「発車します」とアナウンスがあった。レールと車両との軋む音がして電車は動きだした。

音に驚いた夕涼みの人たちが、僕の乗った電車の方を見ているのが見えた。やがて田んぼの中を電車が走ると、農家の人は田仕事を終え、家路に着くのが見え、稲穂が小波を打っている、肥沃そうな田方平野だ。

西には茶碗を伏せたような峻嶺な伊豆の山々と、東に天城山に連なる山々の間を縫って、南の空に雁のひと群れが飛んで行った。静岡県内の河川は北から南に流れるが、狩野川は南から北に流れるので、東西が迷った。

車内は温泉に来たような洒落た洋装の人たちが大勢、東京かどこか、都会に暮らしているような人達で、車内の温泉旅館の広告を食い入るように見ていた。この人たちは不慣れな用で、伊豆の温泉に「初めてきた人達だ」と思った。

長岡温泉駅を抜けると、大きな工場が見え、「洒は源氏」と大きな広告が目にはいった。東海道本線でもどこかこんな広告があったのを思い出し、なにか懐かしく、工場はここにあるのかと思った。

山あいが狭くなり、清水の流れる狩野川の畔を、「がああ」と静寂とは不似合の音を発しながら電車は進んだ。

修善寺の駅に着いた。伊豆の兄の家まで「近い」と聞いていたので、歩いて行く事にした。修善寺橋をわたり

狩野川沿いの下田街道を歩いて、二十分、街道を脇にそれた小路の石畳を少し上ると、伊豆の兄の家に着いた。

東京の兄が待っていて「お前、ほんとうに来たのか、よく来たな」、と僕の両肩を、九歳年上の兄のがっしりした大きな手で、鷲づかみにし、僕の顔を穴のあくほど両目で見つめた。僕は日頭が熱くなり、兄の血が伝わってくるようであった。伊豆の兄、姉も喜んで迎えてくれた。

八月十六日

うとうとと一晩寝て、翌朝七時半起床した。

甥の赤子を抱いて、眼下の清流狩野川を眺め、畔を散歩した。帰宅すると、すでに兄二人が起きていた。

「今日はどこに行こうか」。

「修善寺温泉に行こう」。

兄二人と僕、三人で修善寺温泉に歩いて行った。

温泉場に着くと、人混みがして、華やいだ雰囲気だった。

なにか尋ねると、「催し物がある」ということで、修善寺の盆行事らしい。僕が兄二人の後に付いて行くと、綺麗な旅館の前で立ち止まった。

見ると菊屋という旅館で、電車の中で見た広告を思い出した。

「外湯に入ろう」。

中に入ると歴史ある旅館だと知った。かすりの着物に赤いタスキがけの若いおねえさんに、館内の小さな家に歯切れのいい声で案内をされた。

次は、着物は同じだが年増のおねえさんが、お茶を持ってきてくれた。

お茶をすすると、まわりの景色が目に入ってきた。まず建物が川の上に建てられているのに気がついた。川は急流で、支流が水しぶきを上げて合流している、その上にあるのだ。

空を仰ぎ見れば、青い夏空に真綿のような雲が流れて行き、山は黒い緑、桂川の清流は底の石が青く見え、水辺には鮎釣りの人影が揺らいだのだ。

生まれて、はじめて温泉に浸かった。

帰りは近道の山道を、とぼとぼと歩いた。

すでに夕方となり、農作業を終えた農家の人たちと、途中で会った。

軽装で、観光客のようでないので、山道を歩く僕らを不思議そうに見ていた。「ひぐらし」の声が山々にこだまし、狩野川からの風が、湯上りの体を冷やしてくれた。

八月十七日

次の日、東京の兄と二人で相談し、吉奈温泉に行くことにした。

修善寺駅からバスに乗り、南に狩野川ぞい天城山をめ

ざし、三十分ほど、吉奈温泉入り口で下車。狩野川支流、吉奈川に沿って下田街道を離れ数十分歩くと、吉奈温泉に着いた。急流で川というより沢だ。下田街道を離れると、民家がなく、人里はなれ、駆け上れば登れそうな山に囲まれた、閑静な里山だ。

大きな二つの旅館には、白衣の軍人が大勢、温泉に入っているのが見え、傷痍軍人が慰安している、元気のいい話し声が洩れ聞こえてきた。

一般人は入れないようなので、他に行くことにした。

吉奈川にかかる橋の上でバスを待った。橋の下を見ると、魚影がみえる、鮎の鱗が水に反射して光る。

ブーとバスが着いた。「お待たせしました」とバスガールの声。

バスに乗り、走りだした。僕は「嵯峨沢まで二人」と切符を購入した。

バスは山の中へ山の中へと入って行く、行く手には天城山がそびえ、見えた。バスは坂を登っているのだ。坂の途中まで来ると、「嵯峨沢です」とバスガールの声がした。

木炭バスはドスンとエンジントラブルのような、音をたてて止まった。

下車すると、兄は「変な所だぞ」と言った。下は狩野川が流れている。坂の真下を見ると、緑濃い山中に白い洋館の建物が見え、「旅館だ」。

坂を下って旅館、嵯峨沢館に泊まることにした。

川の真ん中にある露天風呂に入って北斗七星を見上げた。

そのとき、「この星を父母も郷里で見ているかな」、と思うと急に淋しくなった。家を出てから五日だが、ホームシックにかかってしまった。

来年は中学を卒業、老いた父母の働く姿をみると負担を掛けるのも忍びない、日中戦争が始まっている、すでに義兄は戦死している、国のため微用を希望している。百人前後の卒業生の中、二人とのことだが、なんだか来年が思いやられる。

兄の話。「中学卒業後、将来電気技術は有望だと考え、東京で電気の学校に行き、技術を身に付けた。日本放送協会というところに就職したが、給料は月給五十円、年収六百八十円だが、修善寺の弟（教員）よりは良い、東京での生活は大変だが、現在はラジオの聴者を拡大のため契約者を増やしているところだ。しかし将来、テレビの普及も視野に入ってきている。」

八月十八日

朝一番のバスで湯ヶ島に向かった。宿のおねえさんがバス乗車場まで来て、送ってくれた。二十分ほどで湯ヶ島温泉につき、湯ヶ島は大きな温泉町であった。バスを降り、西平橋から下を見ると山は緑、渓谷の川の流れは

清冽だ。

僕は故郷の菊川や貯水池での、魚釣りを思い出した。兄も同じようだった。どちらから言うともなく、「今日は鮎釣りをしよう」。

溶岩の道を狩野川の支流、猫越川に降りて行き、鑑札を借りて鮎釣りに出かけた。はじめは釣れなかったが、「こつ」が分かってくると五匹二人で釣って、宿に持ち帰ると、宿の主人はびっくりして、「短い間に、五匹も釣ったか」と驚いて、言った。「このごろ、プロのつり師でも一日十匹ぐらいしか釣れない」

一夜、湯ヶ島館で宿をとった。

八月十九日

翌朝は九時起床、天気は快晴。夏の強い日に照らされた白い雲は東の天城山に連なる山並みに消えていく、湯ヶ島では山並みで朝焼けは無い。湯ヶ島の晴れた日、雲は白い、真っ白いのだ。十時のバスで修善寺の兄の家に戻った。

八月二十日

兄ふたり、姉と僕とで、駿豆線上りで修善寺より北、駅で二つ三つ先の大仁まで行き、帝産閣に行った。

大仁の駅を降り、細い路地、踏み切りを渡り、狩野川土手に出た。土手に植えられた桜並木のみどりの日傘、葉が暑さをしのいでくれる。

川の水は透明、山は深いみどり、人生で初めて体感した。

狩野川に架かる橋を渡ると、帝産閣が目の前だ。

この帝産閣は帝国産金の鉱山より出る温泉を利用しているとのことであった。西洋立ての立派な建物で、前には温泉の噴水があり、噴水には虹が架かっていた。

「綺麗だ」、思わず手を差し出したら熱湯であったので驚いて手を引いた。入浴料金は「高そうだ」と思ったら、大人二十銭、小人十銭であまり高くなく、僕は学生服だったので十銭でした。二階の掃除の行き届いた清潔感ある休憩室に通された。一階の温泉に入ると、湯煙の向こうに狩野川が見えた。入浴していると、会話の内容から、横浜の人達だという人たちが大勢入浴してきた。

修善寺の兄の家に帰ると、父からたよりがきていた。

「おまえがいないとさみしいから、早く帰ってこい」、と記されていた。

八月二十一日

東京の兄と二人、修善寺の兄姉に見送られて、修善寺の駅をあとに帰路についた。韮山まで来ると前方に雄大な青々とした富士山が、車窓から目の前に見えた。

ここから見る富士は、山腹の宝永年間噴火口跡が痛々しい。

まだ夏の雲、うねりがある。（うねりは灰色の雲のこと）

いつの日か、「伊豆の山河を写生に来たい」。
「さよなら」。
七日間、自宅から百キロほどの汽車の旅が、三島駅で東京の兄と別れると、なにか遠くに離れていくような気がした。
学生生活最後の中学五年、悔いの無いようがんばろう。

あとがき

これは叔父の日記です。この旅行が昭和十三年、ここに登場する叔父を送った母は私（筆者）の祖母で昭和十四年、東京の兄は私の伯父で昭和十五年、修善寺の兄は私の父で昭和十六年、続けてこの世をあとにします。
叔父は昭和十四年から、徴用で神奈川県横須賀に二年間過ごしますが、他に旅行は修善寺以外に行つた記録が日記にありません。
修善寺には度々、訪れたことが日記に記されていました。
叔父は十年後、昭和二十三年十一月、病床にあり、寝返りを打つのが精一杯の体力で、最後の日記、絶筆を記しました。
『旅行に行きたい』『絵が描きたい』
二度と修善寺の旅宴はありませんでした。

私（筆者）のこの時の記憶は生後十か月で叔父に熱い風呂に入れられ、おお泣きし、これ以降、風呂は大嫌いになった記憶がよみがえりました。
私にとつて、生きているという、自覚をしたときでした。
隣の部屋で大勢の人の気配を感じ、あの時かと思いだしました。

「桃花源とは陶淵明の『桃花源記』による話です。東晋の大元年間、武稜（湖南省）の漁師が船で谷川を上流にさかのぼったとき、桃の花が咲き乱れる山に行き着きました。あまり綺麗なので漁師が船を降り、山を登ると途中に洞穴がありました。視いて見ると、突き抜けていて、向こうに、集落があり、人々が笑顔で嬉々として農作業を、働いているのが見えました。洞穴を抜けて、集落に入り、訪ねると『秦の時代からここに住んでいる』と農民は答えました。『秦の時代は遠い昔に滅んだ』と話すと農民は驚きました。漁師は家にもどり、役人にこのことを話しました。しかし役人が捜索隊を出し、捜索したがそのような桃花山も集落も見つからなかったという」
『図説』中国の神々」学研参照

叔父には伊豆のたびは桃花源の旅であったのでしょう。

短歌　三十首

曽根竣作

軽く一服

ユトリロの街角に立つ美少女あり方位狂ふを気にもせざりて
長編のなかばに至りそとは雨やをら夜長の眼鏡拭きをり
赤紙のやって来し道すんなりと右に左にまんじゅしゃげ咲く
No2は消えねばならぬさだめかや張成沢（チャンソンテク）氏政変の果て
冬樹々（ふゆぎぎ）の凍裂きびし隣国のまたとなき変（へん）かただちに処刑

誰が統ぶるやこのこがらしの冬の惨けふも一尺の積雪のあり

馬関の河豚共にたしなみ別れたる柯君すでにし鬼籍に入るとふ

梨の皮長く剥きをり無言ふかく六十余年の記念を祝ふ

冬の湖蒼くしづもり半月を落としてみたき衝動にあり

駅頭で軽く一服　さまよへる昭和ははるか遠くなりたり

後の月

夏ちかく流人のさまに沖見れば浜木綿咲けり廃船の傍へ

秒針の音みちて行く深夜なり襟にふたたび毛布かぶせつ

煙草の火じょじょに近づく満月の明るさに立つ影をさらして

夜半近く時計の針の冴ゆるなり葦芽のごとく歌兆すかも

正論をながく聞かされ、ぢんぢんと冷ゆる足下の灯に帰るべき

しづけさや高野に照れる後の月を女人とともにふり仰ぐかな

赫々と大き夕日の沈みつつ天動説を信じたくなる

石首魚のまなこぎらりと見つめつつ宝石をなす俎板のうへ

さっきより窓を動かぬ夏雲の少年期あり挙手の礼する

その上のグエン・カオ・キとふチョビ髭の戦闘機乗り今も生くるや

白木蓮

君たちも一応齢を取るんだと銀杏散る径冬枯れんとす

おはじきを口中に噛む心地して海鼠いっぴを持て余しをり

挙手の礼終へて仰げばやうやくに雲はしづかに形を変へつ

陽炎(かげろふ)をまとひし姿しづかなりそのまま軽くさよならをする

人間の裏ばかり見ゆれそばを喰ふ男数人ひたすらにして

公園に来たりてさがす春の息吹(いぶき)はくもくれんは多(さは)は咲きつぐ

白木蓮(はくもくれん)の一辺片寄り咲き充てり　ひらりと鴎が一羽とぶなり

殿(しんがり)の兵隊のごと佇ちませり赤きポストはかげ曳きながら

機銃掃射カラシニコフが交りたり少年兵が隊列つくりて

すでにしてキャリアもポストも失つて晩年競ひて何を掴(つか)むか

短歌

行雲流水(四十二)

石黒修身

近詠二十五首

花の季節

チューリップ随所に咲ける季節(とき)となり「キューケンホフ」の盛りを憶う

卯月末訪(と)いし大船フラワー園百花一斉咲きはじめており

山笑う季節となれば老いの身も春を装い旅に出でんか

六月の初旬となれば札幌は新緑盛り初夏の花咲く

札幌の大通公園逍遥す朝ひんやりとリラの花冷え

世相・時局

「金次郎」薪背負いて本を読む「歩きスマホ」と同視は可笑し

春今宵なじみの店で寿司摘む「次郎」のそれとは比較はせぬが

韓国の客船遭難悲惨なりメディア報ずる映像見るに

遭難時「キャプテンラスト」は死語ならず世界・時空を超えてでもなお

晩節に云う言葉を虞れ老いの身に夜の巷を遠ざかりたり

守るべき晩節ありや平凡な来し方なぞる吾のひと世は

故郷はいま

異常なる高温気象で北海道随所で日中三十度を越せり

日中は高温なれど朝夕は大気爽やかひと息をつく

「日ハム」の拠点となって札幌の人は熱狂応援するという

ライラック盛りを過ぎし札幌は「ヨサコイソーラン」賑わいを待つ

観光の目玉となりしこの祭りその喧噪を忌む人もあり

海の辺の宿から望む残照は寂れゆく街小樽を射せり

その盛り三十万の人口は今半減しレトロが残る

年ごとに訪うてはいても吾の知る故郷は旧く語るに難し

渡辺淳一氏逝く

同郷で年代同じ渡辺氏知る人幾人(いくたり)吾が知友なり

初期の作「阿寒に果つ」のヒロインのモデルを知る女性（ひと）の話を聞けり

流行りたる小説舞台の幾つかは吾が故郷の知られたる地

「リラ冷えの街」の語感に親しめり吾六月に札幌訪えば

メディア言う氏の身辺に虚実あり知るその一生か

彼をして「いま谷崎」と称するはそんなものかと妙に納得

詞書に代えて

故渡辺淳一氏とは同郷同年であり時代を共に生きた人の死はやはり寂しい。

氏は筆者と同じ大学に同期入学したが教養学部理類2年を終え札幌医大に転出した。

筆者は面識がないが、氏と関りのあった人々に幾人かの知友があり氏の話題を聞く機会があった。学生時代、そして作家になってからの関った人もある。氏の人生、作品の一部しか知らない筆者が氏の短歌に詠むのは卿かためらいもあったが、既成の作家や評論家とは別に、市井のコンテンポラリーの一人としての追悼と理解したい。合掌

以上

石川理紀之助の一生（その三）

三戸岡道夫

（私はただ農民のため、村のためを考えて、やっているだけである。そのために、農民に対しては相当きびしいことや、難儀なことを要求してきた。しかし私は、相手がよくなることを考えてやったのであり、私の利益を考えてのことではなかった。それなのに、もし表彰されるというようなことになると、『石川理紀之助は表彰してほしいから、あのようなことをしたのだ』と思われてしまう。もしそのように思われてしまうと、以後、私の言うことは相手に通じなくなってしまう。私は一生、世のため、人のために働くつもりであるから、どうか表彰だけはしないでほしい）

という気持なのであった。

しかし適産調の終った次の年、すなわち明治三十四年の秋（理紀之助が五十七歳のとき）、理紀之助は緑綬褒章を授与された。

これについても理紀之助は辞退したのであるが、しかし中島歌子や高崎正風たちの強いすすめによって、押し切られての拝受であった。

理紀之助の人物やその業績をよく知っている中島歌子と高崎正風は、はやくから理紀之助の褒章授与のことをすすめていたのだが、いつも彼の堅い辞退によって進まなかった。しかし今回は念願の適産調が完成したのであり、まさに『功成り遂げた』わけである。そこで強引に関係機関に取りはからって事を進めてしまったので、理紀之助としても承知せざるを得なかったのである。

理紀之助は、部落の者、適産調の同志たちと一緒に、おごそかな拝受式を自宅で行った。そして記念に、桂の苗木を数百本、部落へ寄付して、草木谷へ植えた。

こうして明治三十四年の年は暮れて、明治三十五年の正月となった。理紀之助は五十八歳である。

思いがけない吉報が、とび込んできた。

それは理紀之助の息子の老之助が作った和歌が、新年の歌会へ出したところ、選ばれたのであった。昨年の春には、理紀之助社中の伊藤秀子の和歌が選ばれているが、それにつづいての喜しい知らせであった。

（一生に一度は、このような栄誉にあずかりたいものだ）

と理紀之助自身が望んでいたものが、自分の息子の上に生れてきて、彼はおどり上って喜んだ。息子の老之助は十九歳のときから家業をつぎ、山田経済会第二世会を作って、いよいよ充実した農家経済の指導をしながら、草庵歌会（草木谷の庵に集ってやる歌会）の一人として歌作にはげんでいたが、その労がむくわれたのである。

うれしくも年の始めに梅さきぬ
　かめにやささん　かざしにやせん

という光栄の和歌を、理紀之助は幼い孫たちに暗誦させ、正月の歌会には、歌友に餅をふるまって祝った。

九　労をねぎらうように

理紀之助は、他人の善行を賞揚し、先人の功績を顕彰することに、非常な関心を持っていた。

そのため適産調のときも、村の調査が終了した結了式では、必ずその村の先人の功績をたたえ、善行者の行状を賞し、自筆の表彰状や感謝状を与えた。その村が今日このように存続しているのは、こうした人々の恩恵によるものであることを自覚することが、村を維持発展させるために重要であると考えていたからである。

しかし逆に、理紀之助は自分が他から表彰されることは、極力避けていた。もしそのようなことが事前にわかると、

「どうかそのような表彰はしないでほしい」

と、丁寧に辞退した。理紀助の心中は、

十　未知の土地で

そのような祝事と並行して理紀之助は、昨年の暮れ（明治三十四年十二月）に、尊敬する前田正名から来た手紙を、何回も取り出して、読み返していた。

（私は数年前から、霧島山の麓の台地に用水路を作り、開田事業を行っている。それがやっと完成し、いよいよ五百町歩の開田をし、新しい農村を作ろうとしている。そこで、あなたたち同志に数人来てもらい、あなた達の考える理想の村づくりをしてもらいたいと思っている。どうか、この私の願いに、是非協力願います）

ここまで読んでくると、理紀之助の血は湧きたってきた。あの前田正名から、理紀之助のこれまでの業績が認められ、このように依頼されているのである。これほど喜しいことはない。

しかし、問題がないことはない。理紀之助はもう一度、文面を読み返した。

（私は現在、これまでの開発で、資金を使いはたし、資金はもうまったく無い。したがってあなた達に来てもらっても、日当や報酬はおろか、往復の旅費さえもお払いすることはできない状態である。すなわち自弁でお願いしたいのである。そして、できたら一年ぐらい、現地に滞在して指導していただきたい）

という窮状に立っての依頼なのであった。理紀之助は、

（このような条件で、私と一緒に九州まで行ってくれる同志がいるであろうか？）

と、同志の顔を一人一人思い浮かべながら考えてみた。

同志は草木谷以来、辛酸を共になめて行動してきた人々である。理紀之助は彼等の気性も、家庭事情もよく知っていた。

たとえば経済的な面からいえば、理紀之助の家は十余町歩の田畑を持つ地主であるが、他の人々は一町歩から二町歩の自作農である。それが理紀之助の教えにしたがって、勤勉と節約にはげむことによって、村の中堅農家の地位を保っているのである。そのような者に、

（旅費その他で、百五拾円もの金を出してくれ、その上、無報酬で働いてくれ）

などということを持ち出して、果してどう反応するであろうか。常識的に考えてみて、出来ない相談である。

しかしもう一つ別の面から考えてみれば、これまで彼等は世間の誹謗も批判も問題にせず、しかも自分の金まで出して、適産調の事業をやり通してきた同志である。この前田正名の手紙を見せたら、どんな反応をするか、わかりはしないと思った。

そこで正月早々だというのに、同志たちに集ってもらって、手紙の内容を話した。

「わたし個人としては行かなければならないと思っている。しかしいま読んだような手紙の内容であるから、皆さんに強要することは出来ない」

と理紀之助は自分の考えを言った。同志一同は異常な感動にふるえながらも、事があまり重大なので即答することは出来ず、

「返事は家に帰ってから…」

ということで解散した。

その頃の反収は、一・五石である。一石が六円として、一反歩で九円。一町歩作って九十円という時に、百五十円という金は大金である。

各人は家に帰ってから、家族と相談し、さらに親族が集って金の工面から、不在の間のことなどを話しあった。そして非常な無理をしながらも同志たちは、

「先生に同行して九州に行く」

と申し込んできたのである。

森川源三郎（秋田市新屋）、

佐藤政治（男鹿市脇本）、
伊藤甚一（井川町）、
伊藤与助（潟上市飯田川）、
田仲源治（飯田川）、
伊藤永助（五城目町大川）、
佐藤市太郎（男鹿市角間崎）、

などの人々であった。

理紀之助は一人一人の返事をもらいながら、

（この志は無駄に出来ないぞ）

と、自分も準備をすすめていった。

まず、理紀之助の老体を気づかって心配する家族に対して（この時の理紀之助は五十八歳）、

「私はいつ死んでもいい年令になっているから、どこで死んでも、きれいな白骨になって帰ってくる覚悟だ」

と決意を話して納得してもらい、形身として秘蔵の古銭を分け与えた。事実、彼はいつ、どこで死んでも、心残りはないと思っていた。

「命をかけて、ぜひ…」

という気構えでやった適産調が、昨年に終了していた。しかし未知の国九州でこれから数ヵ月も仕事をして、無事で帰ってくる自信はなかった。草木谷の火災の後で起ったリューマチが、ときどき痛み出してくるのである。

「一年は長いから、四月から十月までの、六ヵ月間の滞在とする。私を入れて八人で行く。農家経済の指導者としては、優秀な人材揃いである」

という返事を出して、理紀之助たちは明治三十五年四月の始めに、九州にむかって出発した。

出羽丘陵の嶺の雪は白く輝き、湖を渡ってくる北西の風は、まだ冷たかった。

一行は途中、吉野山で南朝の史蹟を見物し、京都に立寄り、鹿児島まで汽車で行った。

そこで一泊し、翌日、馬車に乗って北上した。

宮崎県北諸県郡中霧島村谷頭（たにがしら）部落の事務所に着いたのは、明治三十五年四月二十日、午後五時であった。

わらじを脱いで板の間に上ると、脚絆も解かないで、すぐ明日からの行動計画と、自分たちの日課表を決めて、それを壁に貼りつけた。それは左のようにきびしいものだった。

午前二時　起床　各自勉学　午前四時まで
午前五時　朝食
午前六時から十二時　勤務
正午十二時　昼食　食後一時間休憩
午後一時から四時　勤務
午後五時　夕食
午後八時　就寝

農家経済指導とは、勤勉と節約を中心にした生活指導である。生活指導であるとすれば、この部落に来た以上、

一日も休むことは出来ない。すぐ、仕事に取りかかるのが当然である。秋田県からはるばるやってきた指導者たちは、非常な決意をもって、この村に乗り込んできたのである。

この谷頭という部落は、桜島が噴火した時、人々が難を逃れて住みついた地域であった。

したがって付近一帯は、霧島山の火山灰で出来た台地なので、樹木も十分に育たず、竹林が茂り、畑からは芋だけしかとれないという、貧しいところだった。

それは水が無いからであった。水さえあれば、谷頭だけでなく付近の部落も開田出来、稲を植えて、生活を一変させることが出来るのである。

前田正名はそこに眼をつけて、莫大な投資をして用水路を作り、やっと水を谷頭まで持ってくることが出来、いよいよ開田し、稲作農業が出来るというところまで来たのである。この機会に理紀之助の指導によって、村風を一新したいというのが、今回の計画なのであった。

「前田様の期待に応える成果があがるか、どうか、わからないが、とにかく真剣にやってみよう」

と、理紀之助たちはその翌朝から、前記のスケジュールによって行動をはじめた。

しかし午前三時の板木を打っても、村人たちは誰も起きてこなかった。午前七時頃になってから、悠々と畑に出ていくのである。

村人たちを集めて農家経済の話をしても、言葉が通じない。また村人たちの言うことが、理紀之助たちには判らない。そこで筆談しようとしても、文盲が多いので、それも自由に出来なかった。

自分たちの生活が極貧で、他の部落の者からさげすまされていても、彼等はそれは仕方がないとあきらめていて、格別気にもしていないのだった。

（一生県命に働いて……）

という気もなく、したがって副業などというものも、やっていない。ましてや貯金をするということなど、どういう事なのか、わからないという状態なのであった。

そのような村人たちの姿を見ると、理紀之助は、

「ここでは山田経済会のやり方は、通用しない」

と思うようになった。

しかし一緒に来た同志たちは、その貧困のすさまじさに驚き、自分たち秋田とくらべて劣る生活程度を、なんとかして向上させようと、意気込んでいた。しかし理紀之助は、

（急速な変化をのぞむと、かえって失敗するおそれがある）

と考えた。そこで理紀之助は同志たちに対して、次のように指示を変えた。

私たちはこの地域の人々に、私たちの信じる農家経済のことを教え、実行させるためにはるばる来たのである。しかし実際に来てみると、ご覧の通りの状態である。風土がちがい、生活習慣があまりに違う。だから私たちの教えも、なかなか理解できないのである。

そこでこれからの指導は、次のように変更することとする。

①私たちは、指導をするために来たのだという考えを捨てて、私たちもこの部落の一員になりきって、行動するようにすること。

②この部落の欠点や、ここの村人たちが他よりも劣っていることを、決して口にしないこと。欠点を直そうと思ったら、私たちの生活や行動で、気づかせるようにすること。

③農業のことを聞かれても、自分の知識や体験だけで、断定的な話をしないこと。

右のような指示を理紀之助は同行者に納得してもらうために、言葉をえらび慎重に説明した。

その様子を同行者の伊藤与助は、事務所日記の中で、次のように書いている。

（翁は、私ども一同に、指導に来たのだという心を捨てること、私達は、私たちの信じている生活を貫き通していくことに専念し、口先だけで教えようとしてはいけないー、と静かに注意した。後で見ると、翁の机の上に、くちなしの花が一輪さしてあったのが、印象的であった）

自分たちもこの村の一員として生きていくということになると、自分たちはこの村では「よそ者」である。よそ者であるから、朝会ったらよそ者の方から「おはよう」と声をかけ、「よろしく」と心をこめて挨拶をするのが当然である。この当然のことを実行すると、村人たちも自然に明るくなってきた。また、

（隣の村から藁を買ってきて、朝わらじを作り、それを庄内の店に売ったら、差し引き十銭の利益が出た。森川さんは竹で籠を作って、十五銭もうけた）

などという朝仕事でもうけた話などを、時々話してやったりした。すると朝仕事をする者が、一人、二人と出てくるのだった。また、

（子供が賢くなるのを喜ばない親はいない）

と、事務所の中に夜学を開くと、

（事務所の人たちは、わからない所をていねいに教えてくれる。どんなことでも聞いてみよう）

と、夜学に来る子供たちが口こみで拡っていった。そしてどんどん生徒がふえていった。

こうして二週間ぐらいたつと、村の中が明るく、生き生きとしてきた。

早起きする者がぐんぐん増え、どの部落より多く貯金するようになった。夜学は生徒の熱気があふれ、外を歩

く者が足を止めて、中を見入るようになった。
このような変り方には、理紀之助自身が驚いた。そして指導ということについて、更めて次のように考えるのだった。

もともと自分たちの考えが、すべて正しいというのではない。だから私（理紀之助）はここに来てから、部落の一員として生活し、行動し、自然に導いていこうとしたのである。すると村民たちは私たちを信用し、私たちの行動を真似しようとしている。こういう状態を見ると、私たちも、欠点の多い私たち自身のことが省みられてならないのである。

私たち同行の人達は、長年私と行動を共にし、農村指導者としては優秀な人材である。しかし人間であるから、欠点もあれば、長所もある。今回この地へ一緒に来て、そのことがはっきりわかった。

それ故に、その欠点が村人たちに真似されては困ると、私は心配になり、細かいことにまで口やかましく、注意しているのである。しかし人間は安易になりやすいものであるから、同行者の中に、かえって部落の悪いところを真似してしまっている者もいるようである。

とにかく指導というものは、むずかしいものである。

以上のような理紀之助の慎しみと、謙虚さが、また部落民の敬慕の念を高めていくのであった。とくに夜学の生徒たちは、父母につきまとうように、理紀之助たちから離れようとしなかった。

こうして約束の六ヵ月はあっという間にすぎた。

焼けつくような酷暑の夏がすぎ、秋風が吹きはじめる頃になると、そろそろ谷頭を去る日がやってきた。

その日が来ると、理紀之助たちはまだ夜の明けない午前二時に谷頭を出発した。

夜学生が百八名と、近辺の部落の老若男女が別れを惜んで、どこまでも後をしたって、付いてきた。

台地からたいまつをかかげて、だらだら坂を約二キロメートルも下ったので、

「もうこの辺で帰ってください」

と言っても、帰らなかった。別れを惜しむ村人たちの純情に、理紀之助たちも涙を流さずにはいられなかった。

ありがたきことを語れるつらさには
死にわかれより悲しかりけり

十一　その晩年

九州へ行く時、青森から東能代まで伸びていた奥羽本線は、理紀之助たちが帰った明治三十五年十一月には、

秋田まで開通していた。

途中、福島に寄り、三代村の適産調をし、それから東北本線で青森をまわって、大久保駅に降りて家に帰ったとき、息子の老之助をはじめ、老婆や孫たちが理紀之助にまとわりついて、

「よかった」

「よかった」

と、家中ではしゃいだ。理紀之助自身も、このように無事で帰ってこられるとは思っていなかったので、

ことなくて帰えりし足のふみどころ
しらぬばかりのけふのたのしさ

と喜んだ。

しかしこの喜びも、つかの間の喜びで、その次の年、明治三十六年九月に、息子の老之助が発熱し、急病で死んでしまったのである。まだ三十四歳という若さの働きざかりであり、将来を期待された後継者であったので、五十九歳の理紀之助は天を仰いで悲んだ。

しかし理紀之助は、十歳を頭にした四人の幼い孫を育て、そして石川家の家産をしっかりと守っていかなければならないという使命が、自分に負わされていることを更めて思うと、

（石川家の行く末はわからないが、しかし私は命のかぎり、一生懸命やっていく）

と、決意を新たにするのだった。

明治三十七、八年の日露戦争のあわただしい日々の中で、理紀之助は還暦（六十歳）を迎え、それから二、三年たつと、一番上の孫の太郎が十六歳になった。もう一人前である。

「やれ、やれ、やっと肩の荷も下りたわい。これからは歌会を中心に、歌道にはげみ、少しでも正しい和歌をひろめていこう」

と思っていたところへ、また思いがけないことが起きたのである。

県知事の森正隆が、理紀之助に県産米検査部長になってほしいということで、知事自らわざわざ山田村までやって来たのである。

理紀之助は、

「知事さんの御厚意はありがたいが、私はもう六十六歳の老人です。ご辞退いたします」

と言ったが、知事は、

「それはわかっている。わかっていてお願いに来たのだから、曲げて承知してほしい」

と、動かないのだった。

理紀之助は知事の熱心な願いに負けて、ふたたび県の役人になることを承諾した。しかし六十六歳の老吏が誕生したのであるから、次の二点を条件としてもらった。

その一は、六十六歳という老人であるから、他の職員と同じような執務は出来ない。したがって給料は不要である。しかし出張や巡回などがあれば、その旅費は出してもらう。

その二は、私は農家の老爺であるから、洋服などは着ない。したがって県庁へ行くときも、今着ている農民の服装で行くから、了承してほしい。

こうした条件で承諾したのであったが、県産米検査部長という名目であるが、実際は知事の相談役のような立場であったのである。

こうして理紀之助はふたたび県の役人となり、木綿の着物、モンペ、冬になると毛布を防寒用として着て、藁ぐつをはいて出掛けた。そして県内の各地をまわって農家経済の話をして歩いたが、次第に忙しくなり、山田の家に帰ってくる日が少くなっていった。

産米検査員の資質を向上するためには、農民の苦労を体験させることが必要であるので、大久保村元木に実習場を作って、小さな建物を建てた。そしてそこに若い検査員を集めて同宿し、午前一時から起きて、その指導に当った。

また、農民に強制する三県令を批判して、厳冬の間、全県をまわって乾田適地調査をしている間に、二年の歳月が流れていった。

すると明治四十五年三月の末、森知事が新潟県へ転任になったので、それをチャンスに理紀之助はすぐ辞職届を出し、

（やっと私の仕事は終った）

と、山田へ帰った。理紀之助は六十八歳になっていた。

しかし家に帰って、ほっとしたのも束の間であった。

またしても新しい県知事に頼まれて、今度は、仙北郡強首村九升田部落の救済指導を頼まれたのである。

九升田部落はものすごい貧乏で、人々の心は荒れはてていた。したがって怠け放題で、喧嘩、盗伐、賭博、暴行、殺傷などが行われて、目も当てられなかった。田の手入れなどは、ほとんどしないで、収穫期になれば、小作米納入のことで不在地主と激しい争いをするといった工合で、まさに手に負えない部落であった。

これまで県としても様々な救済の措置をとってきたが、すべて失敗していた。そこで農家経済の指導者として農民に慕われている理紀之助が指導したら、なんとかなるのではないかという、期待をもっての依頼であった。

そこで理紀之助は九升田へ行き、すさみ切っている部落の現状を見ると、六十八歳という自分の年令を考えながらも、

「これは放ってはおけない。私の余命のすべてを捧げても、この農民を救わねばならない」

と決意した。

そこですぐ、九州へ一緒に行った同志と相談して、

「私はすでにこのような老人であるから、余命はもういくらもない。そこで、差し当り三年計画で指導するから、よろしく御協力のほどお願いいたします」

そう依頼して、この仕事を正式に引受けた。

するとこの話はすぐ拡り、人々は、

「そんな九升田へ行って、あの老人は何をやろうというのか。腰骨を折られて帰ってくるのが関の山だ」

とか、

「そんなところへ行って、勤勉、節約などを説いても、ぜったい受け付けるものか」

と冷やかに噂するのであった。しかし理紀之助は、

（真心をもって当れば、通じないことはない）

と決心し、次のような救済の方策を立てた。

一、ほとんどが小作人である部落民に、勤勉、節約の生活をさせることによって、働けば立派な農民としての生活が出来るのだという自信を与えること。

二、しかし現在の九升田の部落民は、莫大な借金を抱えているので、いくら働いても、この借金を支払う余力は持っていない。そこで債権者からは当分の間、借金返済の催促はしないという、協力をしてもらうこと。

三、納入小作米は、小作契約によって決められているが、現状からみて、契約書に書いてあるような米の量は穫れていない。したがってこれからは毎年、作況調査を行い、その年の米の収穫高によって、小作米を決めて、納入するようにする。

理紀之助は右のような方針を立て、その中でも特に一番の項目に重点を置いて指導することにした。

九升田の村民も、まじめに働けばどうにかなるのである、生活を引締めていけば安心して暮していけるようになるのである—ということをよく教えこむことを主眼にし、二番目と三番目については、農民の方だけで出来る問題ではないので、郡長の方に協力を要請した。

理紀之助は部落内のあばら屋の半分を借りて事務所とした。そしてそこで寝起きして、早起きと、藁仕事を徹底的に実行させた。

理紀之助は午後十一時から起きていろいろと施策を考え、午前三時に板木を打って、農家を一軒一軒づつ巡視した。そしてその様子を、事務所前の掲示板に掲示した。

それには、

○誰々は寝ていた、

○誰々は起きてはいたが、仕事に取りかかってはいなかった、

○誰々は起きて、まじめに働いていた

などと、その時の現状を、誰にでもわかるように色別

に分けて、掲示した。

考え方によれば、これはプライバシーの侵害、自尊心を傷つけるようなやり方であるが、理紀之助はあえて行ったのである。どのように言われようと、とにかく九升田の村民を一人前の農民にしなければならない。そのためにはまず早起きして、働く習慣をつけなくてはならないと、理紀之助に必死に取組んだのである。

そしてこの理紀之助の気迫の入った指導に、九升田の村民たちは次第に従い、そして急速に変っていった。これまでの行政の施策や、警察権力でも動かなかった九升田の農民が、午前三時の理紀之助の板木のひびきには、起きて働き出したのである。

起よとて暁につくかねよりも
早くわら打つ九升田の里

この九升田の村の変りようは、たちまち評判になった。多くの者が視察に来た。志ある青年は見習いを志望して、事務所に泊りこみ、決められた日課によって早起きし、理紀之助の暁巡りを手伝った。また炊事や掃除もしてくれた。

知事も郡長も、地主たちも、あまりに見事な変貌に驚いた。しかし一番驚いたのは、

（これが、あなた達の一ヵ月の働きである）

と、朝仕事の藁細工を一ヵ所に積み上げてみせた時、それを見た農民たちであった。

さて、課題の二番目と三番目は、主として金を貸している地主との交渉の問題である。

これまでの行政の指導が成功しなかったのは、この二番目と三番目の問題を、解決しなかったからである。

その頃は財力をバックにした地主の権力は非常に強かったので、地主に対して正面から事の是非を論ずる役人は少なかった。問題が起こると地主側に取り入ったり、また地主側に加担した形で解決したりして、役人はわが身の安全を守ることを第一としてきたので、基本的な問題が少しも解決しないのだった。そのような役人の態度を知っている農民たちは、ますます行政の指導などから離れて白暴自棄になり、手のつけられない状態になってしまったのである。

理紀之助は九升田の指導を引受けるにあたって、郡長に、

「九升田の救済指導をやっていく過程で、地主側と交渉しなければならないことが、多く出てくると思う。私の考えを信用して、積極的に協力してほしい」

と要望し、

「まず農民に、よく働けば生活できるということを確認させることが必要であるから、借金の取り立ては数年間は差し控えることを、地主に説得してもらいたい。もちろん私の方からもお願いするけれども、行政の方からも是非お願いしたい」

とよく頼み、郡長の了解を取り付けていた。

二十数年前に、理紀之助が指導した山田村の農民は、借金を返すためによく働き、節約して、見事に成功した。しかし今の九升田の農民には、よく働くことと節約だけでの村の復興は、望むことが出来ない。農村の体力が弱まっており、また農民自身も変ってしまっているからである。理紀之助が草木谷で貧困生活の実験をし、また農村の経済自立のための方策を求めて適産調をやっている間に、ここ九升田の部落は、理紀之助が目ざしていた方向とは逆の方向に、地すべりしてしまったのである。

それにはいろいろな条件が重って、そうなってしまったのであろうが、貧苦にあえぐ農民が不憫でならなかった。

やがて稲が色づきはじめてきた。しかし全般的に見て、作況はよくないようであった。

理紀之助は一枚一枚の田の作況調査を入念に行った。そして正確な数字を出して地主と交渉し、実際の収穫高に応じて小作米を納入するようにした。

これは江戸時代の二宮金次郎が多くの農村を復興したとき、農民に勤労と節約をさせたが、同時に藩主にも年貢を引下げさせ、節約させたのと同様である。江戸時代の年貢は、何万石、何十万石と、形式上決っている藩の石高によって計算されていたので、農民はいつも過大な年貢に苦しめられていた。そこで二宮金次郎は実際の米の穫れ高をよく調査し、実際の米の収穫高によって年貢を納めるように（そのために年貢は下がる）藩主を説得し、それを実現させたのであった。

こうした結果、大正二年の九升田の正月は、これまでになく平穏で、心安らかな正月であった。

小作米は全部納めてしまったし、借金取りは来ない。一生懸命に作った藁細工の売上金は、わずかではあるが貯金してある。

農民たちはいよいよ仕事に励むようになった。

春になると馬鈴薯の種を植えさせ、またカテ飯を食べることを教えた。そのため端境期になっても、少しもあわてなくて済むようになった。

九升田は一年で、すっかり変ってしまったのである。

九升田がこのように変ったのを見ると、角間川町木内、布帆（めのほ）部落の地主たちも、

「私たちの部落の指導もお願い出来ないでしょうか」

と願いに来た。

理紀之助が行ってみると、これもまたひどい状態であった。郡長や町長たちも、

「あまり貧乏がひどいので、村から逃げていく者もある状態である。このままでは村が亡びてしまう」

と嘆いた。そして小作人たちも、

「一生懸命に働けばなんとかしてくれるというので、一生懸命にやっても、役人たちは何もしてくれない。一体どうすればいいのだ」

と、涙を出して訴えた。

時は大正三年（一九一四）十月である。理紀之助は七十歳になっていた。昨年あたりから腰痛がひどくなって、理紀之助の老衰ぶりが日に見えるようになってきていた。その上、この年（大正三年）八月に、老妻を亡くし、精神的ショックも大きかった。

（木内の方の指導はとても無理だ）

ということは、誰の眼からみてもはっきりしていた。

しかし理紀之助は九升田の方は、同志の伊藤甚一と佐藤市太郎に任せて、自分は木内の指導へ向ったのである。付添人として、十八歳になる孫の次郎を連れていった。

すぐ冬が来た。

木内でも午前三時になると板木を打ち、早起きの指導からはじめた。集ってきた見習いの青年たちは、腰までの雪を踏みわけて、一軒一軒をまわった。

頻繁に夜会を開いていろいろ農事について教え、雪の田んぼに肥料を運ばせた。

春になった。

木内、布晒の農民は、

（石川翁が付いていてくれる）

という安心感と期待感で、雪解けを待ちかねたように、働き出した。

理紀之助は地主たちに、小作人が耕作しやすいような条件を要求した。また、農民の借金の状態を調査し、その支払猶予も交渉した。

このように理紀之助は働いたが、すでに彼はそのエネルギーをすべて使い果たしていたのだった。

大正四年（一九一五）八月五日に、九升田部落の救済指導の結了式が終った頃から、理紀之助の身体は急に衰弱し、家に帰って、まもなく不帰の客となった。

大正四年九月八日、理紀之助が七十一歳の時であった。

歌袋一つたづさえいでたたん
玉も黄金も身にもたずして

理紀之助は若い頃から志していた和歌を、あの世に行っても勉強しようとしていたのであろうか。（終）

関東管領始末記⑭

山内顕定と扇谷定正の対決

千坂精一

太田資長（道灌）の嫡男資康は父を騙し討ちした主君扇谷定正を赦せず仇討ちを考えたが、やれば主殺しになってしまうし、さりとて他に名案もなく思案に暮れた。

まもなく定正は、父を殺害した下手人の曽我兵庫を河越城代に、その嫡男祐重を江戸城代に据えた。恩賞のつもりなのであろうが、そのことをきいたとき資康はもはや太田一族は扇谷家に居場所のないことを覚った。

（かくなるうえは已む無し。山内家を頼ろう）

資康はそう決意を固めた。それは山内顕定の家人になっていれば先々もし扇谷家との抗争が起こったときには主命に隠れて敵討ちできるから物怪の幸いであった。

資康が山内家の家宰長尾忠景に内通してその手引で一族を纏めて寝返りに成功すると、主君定正の暴挙に不信の念を抱く太田派の家臣たちも資康につづいて山内家へ奔ったので、扇谷家の家臣団は動揺してしまった。

家宰太田資長を抹殺したことで一部の家臣たちに見限られてしまった定正は、弱体化を思い知らされた。

いっぽう山内家に転がり込んだ資康らは白眼視されていたが、しだいに溶け込んで融和しやがて胸襟を開いてくれるようになったころ、驚嘆する話を耳にした。

太田資長が主君定正に謀殺されたのは、擡頭著しい扇谷家の勢力を削ぐために山内顕定が根も葉もない資長の謀叛を捏ち上げて定正を唆したからだというのだ。

つまり、定正は顕定の術中に嵌まったということだ。

はじめは一顧だにしなかった資康たちも、諸事情を勘案してゆくにつれてその噂話が真実味を帯びていった。

（然もありなん）

そう信ずるようになった資康たちはひそかに山内家を脱出してふたたび扇谷家にもどると、定正に告げた。

日が経つにつれて資長の成敗を悔いるようになっていた定正は資康たちの帰参を許すと、策を弄して頼り甲斐ある股肱の臣を喪わせた顕定を憎み怒り心頭に発した。

資長亡き扇谷家は山内顕定に屈しふたたび家人に成り下がることを憂えた定正は、思案のすえ形振り構わずこれまで敵対してきた足利成氏、長尾景春と手を結んだ。

成氏、景春にすれば管領の山内上杉だけが敵であって扇谷上杉には怨みがないからどうでもよかったが、それにしても管領陣営から離叛したのはさいわいであった。

定正が自分を裏切って成氏・景春側に奔ったことを知った顕定は機先を制して扇谷家の本拠地糟谷を乗っ取ろうと計り、一千余の軍勢を率いて鉢形城を出陣した。

ちょうど定正も河越城から糟谷へ戻るところだった。

両軍は長享二年（一四八八）二月五日相模國實蒔原（伊勢原市西富岡から日向薬師を左奥に見て厚木市七澤にかけての付近）で遭遇戦となったが、地の利を得ている扇谷軍が僅か二百余騎で一千余騎の山内軍を破った。

二

それから四箇月後の六月八日、こんどは扇谷定正が養子にした兄朝昌の嫡男朝良を伴い七百騎を率いて鉢形城攻めに向かってきたので、山内顕定も養子にした再従弟の憲房を伴い二千余騎をもって出陣し、両軍は中程の須賀谷原（埼玉県比企郡嵐山町菅谷）で出会い対陣した。

（衆寡敵せず）

で、はじめは山内軍が断然優勢で扇谷軍を押し捲っていたが、長尾景春軍が到着して参戦すると形勢はたちまち逆転してこんどは扇谷軍が山内軍を押し捲った。

山内軍はまたも敗北を喫して鉢形城に逃げ帰った。

槻川と合流した都幾川の流域に広がるこの須賀谷原周辺には数多くの史蹟が点在していて取材に事欠かない。

年代順に列記してみると、

大蔵館跡は源頼朝の父義朝の弟義賢の居館だった。その義賢の二男が木曽義仲で産湯として使用された湧水〈産湯井〉がある。この地にある五輪塔が義賢の墓といわれ、近くの班溪寺には義仲夫人山吹姫の墓がある。

槻川と都幾川の合流点の段丘上にある菅谷館跡は畠山重忠の居館だった。頼朝の死後権力闘争に巻き込まれ北條勝時の謀略によって武藏國二俣川（横浜市旭区）へ誘き出されて敗死するまで二十年ここを拠点にしていた。

鳩山町との境にある笛吹峠は宗良親王を奉じた新田義興・義宗兄弟が関東最後の防衛線にしたところである。

近くの物見山丘陵の尾根にある岩殿山正法寺（岩殿観音）の境内には足利尊氏の末子基氏の墨跡がある。

平澤の白山神社は太田資康が陣中見舞いにきた万里集九と歌会を催したところという。そういえば畠山重忠の菅谷館跡も山内軍に加わった資康が砦にしたともいう。

史蹟めぐりを終えて都幾川へ戻り、芝生の土手に寝転んで柔らかい陽射しを浴びていると疲労が癒やされる。

三

連敗を喫した顕定は、関東管領としてもまた上杉宗家の棟梁としても面目丸潰れで、このままでは与党国人たちの手前も引っ込みがつかず、威信回復を焦った。

そして半年後の十一月十五日、扇谷軍動くの報を受けた顕定は三度目の対決で結着をつけるべく越後守護家の弟房能に援軍を求め三千余騎を率いて鉢形城を出陣した。

河越城の定正のほうから出てきたので顕定は受け身に立って出陣がおくれたため、前回の須賀谷原より手前の高見原（比企郡小川町）まで進んだところで遭遇した。

扇谷軍は足利政氏と長尾景春の援軍を得た二千余騎。合わせて五千の大軍が雌雄を決すべく激突したのだが、数に優る山内軍のほうが敗れてしまい鉢形城へ退いた。

三度敗北を喫した山内顕定は半年後の翌年夏にまた須賀谷原まで出陣して扇谷定正と戦ったのだが、顕定の希いも虚しく足利政氏に支援された定正にまたもや敗れてしまい、山内軍はどうしても扇谷軍に勝てなかった

この両家の対立抗争で長尾景春の動きが気になった。

景春は長尾家の嫡男であるから、世襲の時代父のあとの家宰職は当然自分であるはずなのに、父の死後主君顕定は叔父忠景を登用したので再三異議を申し立てたのだが撥ねつけられてしまったことから謀叛したのである。

ならば怨み骨髄に徹しているはずで、鉢形城に近い須賀谷原、高見原で三度も勝利しておきながらなぜ一気呵成に鉢形城を攻め陥とそうとしなかったのであろうか。

それは、景春自身が難攻不落に築いた城なので、容易には陥とせないことをよく知っていたからなのだ。

そこで、どんな場所にあるのか現地調査してみた。

池袋駅から東武東上線の特急に乗って終点の小川町駅まで行き、そこで乗り換えて寄居駅で下車する。

寄居駅にはほかにJR八高線、秩父鉄道も乗り入れていて、まさに埼玉県北部の交通の要衝の感がある。

駅前の大通りを真っ直ぐ南下して、荒川に架かる正喜橋を渡ると右手断崖の上が目指す鉢形城跡である。

地形は南と西を山で囲まれ、背後は荒川の絶壁、東は深澤川の峡谷を堀とした天然の要害に囲まれた平山城で、総面積約十五ヘクタール（約十五万平方メートル）というから大きな城である。

また、ここは秩父口と上州口とを固める要衝の地でもあったから、鉢形城の役目はまさに重大であったのだ。

両上杉家の対決は四度の合戦で足利成氏・政氏と長尾

景春の支援を得た扇谷定正がいずれも山内顕定に勝利したのだが決定的とまではいたらず、定正は攻め倦ねてしまい、顕定のほうはすっかり戦意を喪失してしまった。

この年幕府でも政変が起こり、近江守護六角高頼を征伐中の将軍義尚が三月二十六日に鈎の里（滋賀県栗東市）の陣中で急死した。まだ二十五歳の青年であった。

このときはまだ前将軍義政が健在だったので、義尚に子がなくても父義政の政務復活で支障はおきなかった。

ところが翌年正月七日にその義政が五十六歳で歿したことから、後継者問題がややこしくなってしまった。

義政と正室日野富子とのあいだには子がなかったので、義政は早手回しに弟の浄土寺門跡義尋を還俗させて義視と名告らせ養子にしたのだが、その後富子が懐妊して嫡男義尚を産んだことから義視の立場が怪しくなった。

富子は当然義尚を後継者に推して山名宗全を後ろ盾にし、義視は義政の誓約違反を怒って細川勝元を頼ったことからこの継嗣争いが〈應仁の乱〉の遠因になった。

幕府の宿老たちは義尚に子がないから義政が養子にしていた義視を後継者にすることに異存はなかったが、もはや五十二歳と晩年に近いので義視の子の義材（義稙）を征夷大将軍にして義視を准三后にすることにした。

その義視は翌年正月七日兄義政の一周忌に病歿し、つづいて四月三日に弟の堀越公方政知もまた病歿した。

この政知の死を契機にして公方家に騒動が起こった。

堀越公方政知は前々将軍義政の弟であることはすでに述べたが、政知の室は嫡男茶々丸を遺してすでに身罷り、継室滿子とのあいだに清晃、潤という二人の男子がいた。茶々丸にとっては継母と異母弟たちである。

こういう家族関係は複雑で政知の心は病身だった正室より継室になった藤原北家武者小路資宗の女滿子に傾いていたから、子らの処遇もまた滿子の思いに添っていた。

清晃は八歳のとき伯父義政のすすめで父とおなじ京北山の天龍寺香厳院に入室させられ喝食になったが、これは滿子が義政に阿ねその後ろ盾を得て次期将軍の座を狙う思惑があってのことであった。

臨済宗天龍寺は初代将軍尊氏が後醍醐帝の冥福を祈って夢窓國師を開山として創建した由緒ある寺である。

また幼い潤童子には父のあとの堀越公方を希んだ。

つまり滿子は、貪欲にも将軍と公方の生母として君臨しようとする独り占めを狙っていたのである。

こうした滿子の野望があらわになってくると、茶々丸は疎外されたことで僻み心を抱くようになっていった。

自暴自棄になった茶々丸は、憂さを晴らすために酒に溺れ、泥酔して乱暴するので、手を焼いた滿子は身の危険を感じて政知に訴え茶々丸を座敷牢に閉じ込めた。

だから茶々丸は、その後父政知が脳出血で倒れて半身不随になってしまったことをまったく知らなかった。

八代将軍だった兄義政の一周忌の当日に兄義視に先立たれてすっかり気弱になってしまった政知は、それから三箇月後の四月三日に不遇だった義視のあとを追うようにして世を去っていった。享年五十七歳であった。

髪を下ろして圓滿院となった滿子は、亡夫政知の七七日忌法要をすませるとさっそく幕府の管領細川政元の養子になった九條澄之の生母である妹を頼って昨年十代将軍になったばかりの義視の子義稙のあとの将軍に清晃を、公方には潤を就かせるよう執拗に運動をはじめた。

酒乱が昂じて狂人同様の振る舞いが多く手に負えぬ乱暴者の烙印を押されて座敷牢に閉じ込められ世間と隔絶させられている茶々丸にも同情して気脈を通じてくる少数の家臣たちがいて、それらの注進で継母の動きは逐一耳に入っていたので地団駄踏んで口惜しがっていた。

父政知が歿して三箇月後の七月一日、家臣の手引きで座敷牢を破った茶々丸はすぐさま継母圓滿院と異母弟潤童子を斬殺して怨みを晴らすと公方御所を占拠した。

このとき、この騒動を逸早く知ったのは修善寺にきていた隣国駿河の興國寺城主早雲庵宗瑞であった。

興國寺城は愛鷹山麓（沼津市根古屋）にあり伊豆に近いこともあって早雲はときどき湯治にきていた。

政知が急病で倒れたとき駿河守護今川氏親が元服の烏帽子親だった政知の病床を見舞ったが、そのとき勝手知った早雲が韮山北條の公方御所まで案内していった。

早雲は直ちに公方家の騒動を駿府の氏親に報らせて茶々丸制圧の許しを得ると、興國寺城から軍勢を率いて伊豆の韮山へ雪崩込み、御所を夜襲して火をかけた。

不意を衝かれた茶々丸は防ぐ術を知らず、僅かな供に護られて辛うじて御所から脱出はしたものの逃げ場をうしない、源頼朝の奥州藤原氏征服を祈願して舅の北條時政が建立したという近くの願成就院に入って自害した。

この早雲の公方家討伐が世にいう下剋上の第一号であり、東国における戦国乱世の幕明けにもなった。

四

堀越公方が八代将軍義政の弟政知一代で滅亡してしまってから二年後に、こんどは幕府内で政変が起こった。

延徳三年（一四九一）八月、十代将軍義稙は前将軍義尚の遺志を継いで六角高頼を攻めて近江國南の甲賀（甲賀市）へ追い遣ったものの捕捉できず、鎮定に失敗して京極高清とそれぞれ半國守護にすることで結着をつけた。

将軍義稙は後ろ盾の父義視を喪ったあとその存在感を示そうと焦って、近江國の処理を曖昧にしたままこんどは河内國の畠山もともに同族同士の勢力争いであった。

その留守に細川政元が大和の国人たちと結託して堀越

公方政知の遺子清晃を立てると、将軍義稙方の政敵畠山政長の屋敷をはじめ諸寺院に火を放って叛旗を翻した。

政元は素早く畠山の陣所正覚寺を包囲して前守護畠山政長を自害させたが、嫡男尚順は逃がしてしまった。

将軍義稙は守護家に叛かれては詮方なく、足利家伝来の鎧と太刀を携え就任僅か三年で政元の軍門に降った。

政元は清晃を還俗させると義稙を大龍寺に幽閉した。

ところが義稙は畠山の家臣らの手引きで京を脱出すると越中國へ逃れて畠山政長の部将神保長誠を頼り、そこへ能登守護畠山義統、加賀守護富樫政親、若狭守護武田元信、越前守護朝倉貞景らが逐次集まって挙兵した。

義稙は越前一乗谷（福井市）の朝倉館に移り、翌年敦賀経由で近江比叡山麓の坂本（大津市）に布陣した。

細川政元は義稙の挙兵に応じた延暦寺を攻めて根本中堂、大講堂を焼き払うと、細川政春、守護六角高頼らに坂本を攻めさせて義稙を河内（大阪府）に敗走させた。

安住の地をなくした義稙は〈流浪将軍〉といわれた。

細川政元は九代将軍義尚逝去のあと大御所義政の後ろ盾を得て堀越公方政知の遺子清晃を十代将軍にと画策したが、義視の子義稙の母が日野富子の妹なのでいったんは富子に潰された。だが、義稙が将軍になったあと義視が親政しようとして富子とのあいだに齟齬をきたした。

富子は一転して清晃支持にまわり、義政逝去で孤立した政元に同調した。義視も政元に接近しようとしたが果たせぬまま兄義政の一周忌に病歿してしまった。

その後義稙は追放され清晃（義澄）が将軍になったから、茶々丸に斬殺された圓満院の野望は叶えられた。

この細川政元の非合法手段は勢力を誇った畠山政長打倒を謀ったもので、守護同士の主導権争いであった。

この政変で管領が将軍をいとも簡単に廃立したことは、つまり将軍と管領の地位が逆転したことの現れであって、これが幕府膝元での戦国のはじまりになった。

幕府の管領は足利将軍家の一門畠山、斯波、細川三家の交替制であったが、應仁二年（一四六八）を最後に斯波家が消えて畠山、細川家だけになり、義澄を傀儡将軍にした細川政元が管領を十二年も独占することになる。

五

だいぶ横道に逸れてしまった。話を関東に戻そう。

上杉一族の内訌山内顕定と扇谷定正の抗争はこれまで四度あったがいずれも定正が勝利していたので、顕定は管領家の面目を喪い地団駄踏んで口惜しがっていた。

扇谷勢は定正が前公方足利成氏の嫡男政氏、それに長尾景春とも提携したので強力な軍団になっていたのだ。

顕定が最後に定正に敗れてからもう五年経っていた。

そのあいだに古河の成氏の老齢化とともに嫡男政氏の威勢も衰退し、長尾景春も兄窘まりになってきていた。

逆に顕定は定正打倒を発条に戦力増強につとめた。

自信を恢復した顕定は定正が河越城から出陣する気配のないことを察知すると、誘き出しと戦力試しに扇谷方の武蔵、相模領へ攻め込み遠く相模國の玉縄城（鎌倉市城廻）を陥としたが、どうしたことか小田原城（小田原市城山）の大森勢は打って出てくる気配がなかった。

このとき城主の扇谷家重臣大森氏頼は重病の床にあって動けず、ほどなくして身罷り藤頼があとを嗣いだ。

小田原城は、源頼朝旗揚げのとき石橋山合戦で頼朝の危機を救った土肥郷（湯河原町）の豪族土肥次郎實平の嫡男遠平が戦功により早川荘の總預所となって小早川を名告り、荘内小早川村（小田原市水之尾）に築城した、

鎌倉時代はこの土肥・小早川党が拠っていたが、室町初期に公方と管領が対立した〈上杉禪秀の乱〉のとき駿河國鮎澤荘（御殿場市・裾野市）の豪族大森頼春が公方足利持氏に与力して小田原・箱根で禪秀軍を破り、平定に功績を立てたことから管領禪秀方に与した土肥・小早川党が追放されたあとの小田原城に入った。

大森氏は五代八十年つづいたが、この頼春の子氏頼の代が全盛期で扇谷家の重鎮として南相模を治めていた。

大森氏頼が歿して一箇月後にこんどは三浦半島先端にある新井城（三浦市小網代）で御家騒動が起こった。

当主三浦時高が養子入りした定正の兄高救の子義同（道寸）に攻められて自害してしまったのである。

時高にしてみれば、主家扇谷持朝の二男高救を養子に迎えて三浦家の安泰を図ったものの、晩年になって実子高教が生まれてみると上杉の血を引く高救の子義同に三浦家をとられるのが惜しくなり、わが子に家督を譲ろうとする態度が露骨になって義同の反発を買っていた。

義同の正室は大森氏頼の女であり、女を太田資長（道灌）の嫡男資康に嫁がせていたので、両家の助力で身の安泰を図れたが、定正は二人の重鎮を喪ってしまった。

これを知った顕定はますます意を強くして定正に起死回生の決戦を挑むべく軍容を整えて機会を窺った。

明應三年（一四九四）十月、顕定は鉢形城を出陣した。

定正は頼みの足利政氏や長尾景春に早馬を仕立てる余裕もないまま、慌ただしく河越城を進発した。

両軍は三度目に対決した高見原で出会い、布陣した。

今回は連敗している山内軍のほうが気負っていた。

はじめ押されていた扇谷軍が盛り返そうとしたとき突然異変が起こった。定正が落馬したのだ。

馬廻りの者たちが急拵えの簡易輿に乗せて後退すると、それを見た扇谷の将兵たちは一斉に逃散していった。

定正は敗走の途中で息を引き取った。骨折で命取りになることはないから、落馬したときの衝撃で蜘蛛膜下出血か心筋梗塞のような異常事態が起きたのであろう。

定正はこのとき五十一歳、呆気ない最期であった。

顕定は、五度目の対決でようやく定正に勝ったのだ。

しかも定正は戦死ではなかったが急死してしまった。
顕定は定正との抗争だったのだから当人が斃れれば結着がついたのだが、扇谷家のほうはすまされなかった。
定正には子がなかったので急拠兄朝昌の嫡男朝良が立てられ、扇谷宗家を継いだ定正のあとを継いだ。つまり先々代政真に子がなかったので叔父の定正が継いだのだが、そのまたあとを甥の朝良が継いだのである。
この上杉両家の内部抗争がつづいているあいだに伊豆を乗っ取った早雲が虎視眈々と関東奪取を狙っていた。
この年、顕定の父で越後守護の上杉房定が病歿したので弟の房能があとを継いで守護になった。
また、まえに述べた堀越公方足利政知の遺子清晃が還俗して名を義澄とあらため、十一代将軍になっている。
（つづく）

社告（内規）

☆同人参加へのお誘い
私達は広く同人の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。
☆維持会会員へのお誘い
本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

古い物・遠い夢

忠内正之

茶事日誌「桜散る」

はじめに

いつの間にか時は移って、すっかり夏の気配となってしまった。この原稿が活字になる頃はひたすら初秋を待つ気分になっていることであろう。
四月の桜の盛りの頃、私の家ではささやかな茶事を催した。その顛末を記録しておきたい。
茶の湯で客をもてなす会を茶会という。茶会は状況によって色々な形で開かれてきている。
今日では大勢の人々が参加する、大寄せの茶会が最も多く開かれている。大寄せの茶会と言っても一様でなく、目的や場所により規模や形式がかなり異っている。
その代表的な会として東京における「大師会」や京都の「光悦会」が広く知られている。
「大師会」は明治二十八年から、また「光悦会」は大正二年から始まり、以後毎年続けられている歴史の長い茶会である。
また一方で、少人数の客を招く個人的な茶会がある。この場合も目的や客数によって多様であるが、なかでも「茶事」と呼ばれる茶の湯の会が正式とされている。
茶事は、来客があれば茶を点て、また食事時にかかれば食事を供するという日常生活が基本にある。
日常的な茶の湯の会はすでに室町時代後期には盛んに行われていた様で、茶会記などにその様子が窺われる。茶会記とは茶会の内容を書きとめた日記であり、各時代を通じて書き継がれており、そうした記録のなかに茶の湯の時代性や、個人の茶の湯の傾向が読みとれる。（この日誌も茶会記と言いたいところであるが）
室町時代から盛んに行われていた茶の湯の会は、江戸時代初期頃より色々な約束事が成立し、更に江戸中期頃

には現在行われている茶事の形式が整った。
茶事の内容は会の目的や季節、時間によりさまざまに変化する。そうした変化を顕著にまとめられたのが七種の茶事である。
七種の茶事を列記してみよう。

茶事の種類
「暁の茶事」
暁の光を楽しむ茶事で、夜明けの遅い冬季に行われる。ことに懐石（お湯づけなど）が終わりに近づいた時に突き上げ窓を開け、さしこむ朝の光を楽しむ趣向である。

「朝茶事」
夏季の暑さを避けて早朝に行う茶事。涼やかさを第一とする。

「正午の茶事」
昼食時に行われる茶事で、茶事の基本とされる。昼食（懐石料理）を供し、濃茶と薄茶を点てる。最もスタンダードな茶事。

「飯後の茶事」
食事時にかからない時間に行われる茶事。したがって懐石はないが、吸い物・八寸・菓子は供される。

「夜咄の茶事」
夜の長い冬季に行われる茶事。手燭・短檠などの燈火のもとで行われ、温かさを第一とする。

「不時（臨時）の茶事」
突然の来客をもてなす茶事などをいう。食事を伴わない場合が多い。

「跡見（あとみ）の茶事」
正午の茶事などの後、客の所望で行われる。手続きが省略されることが多い。

以上茶事の種類について述べたが、茶道の流派によっては名称・内容に多少の変化はあるものと思われる。
正午の茶事の進行順序としては
玄関に到着→寄付→待合→腰掛待合→初座（炭手前・懐石料理）→中立→後座（濃茶・後炭手前・薄茶）→退席　となる。

さて今回の当家の茶事は正午の茶事を催すことになる。当然の事ながら懐石料理によるもてなしが必要となる。茶事には慣れている筈であるが、何か手落ちがありはしないか、礼儀を欠いてはいないかと初心に返って緊張

するのである。
妻との共同作業である。茶事の進め方と茶道具の選択について綿密な打合せを行った。
なにせ設備の整わない自宅の催しであり不備の点が多々あると思われるが、心のこもったおもてなしに徹するよう心掛けたい。
道具組みについては、テーマに合わせまた季節感に合うものを選ぶことにした。従来同様他人様に借りることなく、長年苦労して集めた道具のみで賄うのでやり繰りが難かしい。従って玉石混合であったり（玉があれば良いが）新旧入り雑じっての組合せとなるが、自分としては精一杯の苦心の作である。
それではささやかであるが当日の会記を記させていただく。

茶事の日時
平成二十六年四月三日　午前十一時
場所
自宅（練馬区）
テーマ
季節に合せて、また中心となる掛物の主題から「桜散る」とした。
招待客
私共夫婦の共通の友人三名　いずれも茶名を有しお弟子さんを持つ、この道に堪能な女性方である。しかし乍ら当日になって正客ともなるべきKさんが突然都合が悪くなり、ピンチヒッターとしてNさんがご出席下さることになった。Kさんは当家の茶事出席を期待するあまりの緊張から体調を崩された由で「欠席は極めて残念です」とのお詫びの連絡があった。

会費について
普通の茶会では、お祝という形でお包みするのが恒例とされるが、私共の仲間うちでは、明るく会費制としている。今回の場合は通常通り五千円とした。必要経費に対し充分とはいえないが、招いたり招かれたりするお互い同士の了解事項となっている。

さて茶事の当日四月三日は幸にして好天に恵まれた清々しい一日であった。
当地練馬周辺では、名所光ヶ丘の桜トンネルを中心として桜の古木が各所に点在して今や満開の盛りを競っている。まさに今日の桜散るのテーマにぴったりである。
予定時刻の十一時には、招待客三人全員が揃った。
先づ玄関寄付きの飾りを眺めて戴き、リビングで汲出しを差し上げる。次に二階の茶室に入り炭点前、懐石料理を済ませ中立ちとなり後座の濃茶となる。これが本命

の呈茶であり、三人で一碗を廻し呑みする。終って階下に降りて、立礼式の棚で薄茶を差し上げる。

拙宅での小茶事ではあるが、曲りなりに本来の形式を守って行事は終った。

このあたりを詳しく説明するのは、「道具茶」の私にとって不得手であり、省略させていただき苦心の「道具組み」に移りたい。

寄付　椿図　鈴木其一画
　　濃茶席
床　詠草色紙　烏丸光広筆
「金龍寺の花を」
花　牡丹
花入　青磁　蘇山造
香合　影青　木瓜型　南宋時代
釜　老松すき木　忠三郎造
炉縁　海仙在判　桐花紋　光春造
水指　砂金袋　古伊賀
茶入　小堀宗慶歌銘　瀬戸瓶子釜肩衝
茶碗　堅手熊川型　銘「桜散る」船越伊予守箱
茶杓　道安作　文叔筒書
建水　砂張
蓋置　青竹

強肴　竹の子土佐煮　春野菜みぞれ和え
小吸物　杏漬け
八寸　焼穴子　わらび
香物　練馬大根浅漬、しば漬

以上が料理の内容であり、すべて材料を仕入れての手料理である。御飯は炊きたてを、魚は焼きたてをお出しする様に心掛けた　全部きれいに召し上って下さり嬉しかった。

次に本命である道具組みの説明である。

先づ玄関の寄付きは、琳派の後継者鈴木其一（一七九六―一八五八）の茶碗と椿の墨絵である。椿の花弁に少し朱が加えてあるのが煩笑ましいとの評であった。

次に本席というべき濃茶席に移る。

床の掛物は、烏丸光広（一五七九―一六三八）の詠草色紙である。歌は、

「金龍寺の花を」　光広
あかなくのゆふへをのこす鐘のをとに
ちりしく花をかさねてそみる

出典は光広著「黄葉和歌集」巻第二・春の部である。

光広は安土桃山―江戸初期の公卿光宣の子で烏有子と号した。

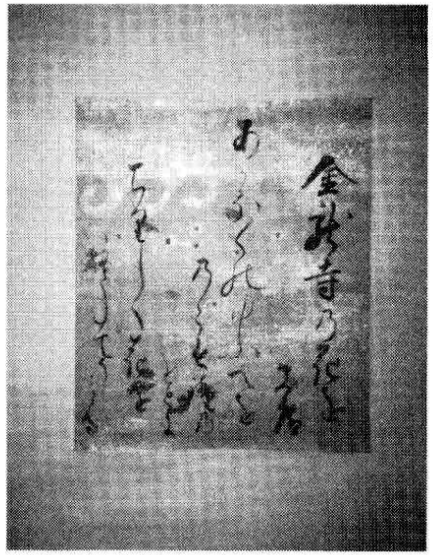
御茶　錦上の昔　柳桜園
菓子　花の精　鶴屋八幡
器　刷毛目　小林東伍造

薄茶席　立礼

棚　御園
水指　良寛詩文籠字　魯山人造
薄器　時代枝垂れ桜
茶杓　又紗斎　作　銘「卯月」
茶碗　赤　宗入造
替　蓮弁紋　安南
蓋置　七宝型　清水久嗣造
建水　銀盃洗
菓子　菜の花と蝶
器　根来盆

以上が濃茶席、薄茶席の道具組である。次に懐石料理を記す

懐石
向付　桜鯛昆布じめ
　　よもぎ麸
汁　海老真薯
煮物椀
焼物　鰆の木の芽焼き



光広卿の歌色紙

慶長十四年（一六〇九）、三十歳、参議・左大弁のとき、光広ら青年公卿たちは後陽成天皇寵愛の官女たちと集団輪姦事件を起してしまった。所謂「猪熊事件」である。

勅勘をこうむって夫々が死罪・配流の身となったが、光広は徳川家康のとりなしで慶長十六年許され、参議に復任し、権中納言から正二位権大納言に至った。

寛永十五年（一六三八）六十歳で没したが幕府の信頼が厚く、朝廷と徳川幕府間の斡旋役として活躍した。三代将軍家光より、江戸在府のための邸を与えられていたという。

茶の湯を好み、造詣が深かった。また和歌は細川幽斎より教えを受けた。

書は近衛信尹・本阿弥光悦・松花堂昭乗の「寛永の三筆」に伍してその盛名を讃えられる江戸初期を代表する能書家である。光広流ともいうべき独自の書風を形成して居り、それは数々の逸話を生んだ自由奔放なその性格を反映しているかのように闊達な筆使いにあるという。

この書跡について識者の鑑定を受けたところ「間違いなし」との評価を戴いた。更に色紙の華麗さ、墨量たっぷりに悠然と運ぶ筆には光悦流が垣間見える。油の乗った四十歳頃の作であろうとの説明であった。

和歌は金龍寺の桜を詠んだ光広の自詠である。金龍寺は摂津の国にあって寺のまわり一帯が桜の名所であった。また金龍寺からの日暮れの景観は西方浄土の姿を現世に彷彿させると、かねて信じられてきた。満山桜の中で鐘の音とともに散りゆく花を惜しんで光広はどの様な感慨をもって眺めたのであろうか？

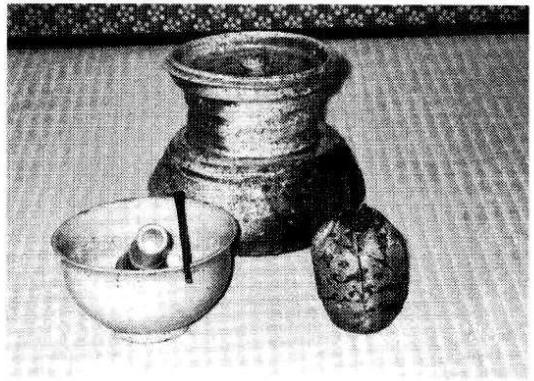
十年程前の情事の果てに失った女官たち（大方は流罪となった）への想いを重ねてこの歌を詠んだのではなかろうか。

この様に想像力を逞しくして鑑賞すると一段と楽しくなる。私のロマンチックな感想を加えてお客様方に説明させて戴いた。

花は牡丹、妻が丹精した開花直前の白牡丹一輪を切りとって飾った。

花入は牡丹に合う青磁の瓶、初代蘇山作であり宋青磁と見紛う程の出来である。なお略式の諸飾りを許していただいた。

香合は影青木瓜型の含子を香合に見立てたもの。十一・二世紀の南宋青白磁である。当家に入ってから既に数十年経つが、久方ぶりの舞台に出た。淡い緑が冴えて美しい。



古伊賀水差・熊川型茶碗・茶杓・茶入

水指は古伊賀の砂金袋型である。桃山江戸初期の作と思われ、焦げ、ビードロ釉、へら目などが時代を感じさせる。

茶入は瀬戸瓶子窯の肩衝茶入である。古瀬戸と言いたいところであるが、江戸前期の作と考えられる。最近の学説で瓶子窯（一六二四―一六五五）が解明され、瀬戸における連房式登窯期の焼物が認定された。

この窯の成立により多種少量生産が可能となり完成度の高い茶入が出廻ることになった様だ。当時の茶匠である、古田織部や小堀遠州らにより発注されたものが各地の大名や茶人に渡ったとの由である。この茶入も同じ手の出来と思われ古い挽屋（茶入等を保護するための容器）に入っており、古い茶入が大切にしていたものらしい。縁あって十数年前当家の所有するところとなった。後に小生等夫婦の金婚式茶会に際して小堀宗慶宗匠の歌銘を戴いた記念の品である。

過日根津美術館を訪ねた折、同種の瀬戸肩衝茶入の展示を見て驚いた。この茶入は根津青山翁が購入された物で、不味公の所持だった由。斑入りの釉の様子から「吉野山」と命名されていたが、同時代の瓶子窯の出来と思った。

茶碗は高麗茶碗の堅手熊川型である　船越伊予守の署名と紀貫之の歌「桜散る木の下かぜは寒からで……」が記されている。

「空知らぬ雪」とは落花の雪であると不勉強の私は、天声人語の欄を読んで初めて知った。

船越伊予守宗舟（一五九七―一六七〇）は徳川幕府の旗本であり、古田織部に続き小堀遠州から学んだ茶匠である。片桐石洲と共に晩年は将軍家の茶道指南に当った。名物裂「船越間道」「船越金襴」を所持したことでも有名である。（なお「空知らぬ雨」とは涙のことであるという）。

次は茶杓である。ここ一番当家の至宝ともいうべき道安の茶杓を使わせてもらった。

道安（一五四六―一六〇七）は千利休の実子であるが、利休の連れ子である少庵が二代目を継いだ。道安は「茶の道に秀れていても人柄が今一歩」と利休が評価したとか。少庵の柔・静の茶に対して、道安は剛・動の茶と対称されたという。石洲流及び宗和流は道安の茶の教えを受け継いでいるとされている。

茶杓はきりっとした出来であり、筒は武者小路千家二代文叔宗守（一六五八―一七〇八）の極書がある　そして堀田家伝来の外箱がついている

身分不相応とも思われるこの貴重な茶杓は妻の恩師が隠退なさる際、お願いして譲り受けたもので、戴いてか

り出したものである。価値観の相違から時として妻と争いの原因ともなったが今では茶道具に見立てられて大変喜ばれている。



道具を見る三人のお客様

ら既に十年以上が経った。

御茶はおなじみの柳桜園製、お菓子は花をあしらったきんとんで鶴屋八幡製、器は私の好きな小林東伍造刷毛目の皿である。

次に薄茶席の道具に移る。

薄茶席は階下のリビングに設えた立礼席である。狭い家うちを苦心しての利用である。

水指は魯山人作の染付大鉢を水指に見立てて使った。私の好きな良寛の詩「朝弄布袋暮布衣　弄来弄去知歳辰南無歸命老布袋　天上天下唯一人」が染付籠字で書かれている。

魯山人最高作の一つと黒田領治先生が箱書をして下さった。

北大路魯山人は明治十六年（一八八三）京都の社家に生まれ、昭和三十四年（一九五九）七十七歳で死亡した。ここでは詳細は略させてもらうが不幸な境涯を克服して波乱万丈の人生を送った。怪奇な性格によって様々な評価をされるが、芸術作品は行く処可ならざるはなし。陶器、書、絵、漆芸、篆刻等に多くの傑作を遺しており、現在に至って、益々評価が高くなっている。

この大鉢は、約四十数年前骨董狂の私が、市中から掘

薄器　点茶用の茶入を棗というが、薄茶に使う場合薄器という表現をする。普通は漆製が多いが、この茶入は桐製の生地に枝垂れ桜が金泥で画かれている。こちらも骨董品として昔私が探してきたもので、時代もかなりあり上品で美しい。漸く出番が来てお目見えとなったのは幸いであった。

茶杓　裏千家十一代又妙斎（一八五一―一九一七）作銘「卯月」　今日の茶事にピッタリである。三十四歳で家督を圓能斎に譲り山崎の妙喜庵に退隠した。作品は少いと思われる。

茶碗　宗入作　赤楽　無冠ではあるが出来上りは上々の作で、手に吸いつく様な肌合いである。

替茶碗は時代のある安南製で久方ぶりの出番であった。

蓋置は現代作家清水久嗣造七宝型。清水は遠州流に縁の深い作家である。建水は純銀製で広口の美麗な盃洗を見立てたもの。

菓子は菜の花と蝶をあしらった干菓子で、器は古い根来盆である。

懐石料理については省略する

かくして午前十一時に始まった茶事は午後三時迄に終った。あとはリビングで、デザートを食べながらの歓談となった。

話題は今日の茶事の感想が中心であり、皆さん一様に満足された様であった。

茶事のもてなしは五感即ち視・聴・嗅・味・触の感覚全般にわたって素直に訴えるものでなくてはならないとされる。

茶祖利休は次の様に言ったという。

「道具の披露や口切といった重要な茶会にかぎらず、日常の朝夕の茶会でも、露地に入ってから出るまで、客は一生に一度の茶会と思って亭主を執し（深く心にかけ）、威ず（恐れ入る）べきである。また亭主も心の底から客を執し、名人を迎えたときのような気持ちでいなければならない。」

この言葉は共感した山上宗二の「秘伝書」に書き留められているという。

後に幕末の井伊大老が「茶湯一会集」のなかで一期一会と要約した「一期に一度の参会のように」との茶会の心得となった。

私共の様な未熟者の茶事が之にかなっているなどとは露程も思い上ってはいないが、その心掛けだけには少し

でも近づきたいものと思い懸命に努力したつもりである。

お招きしたお三人からは、期せずして早々と丁寧な後礼の挨拶があり、後片付けに疲れた心身を和やかにさせてもらったのである。

その中のお一人Nさん（この方はピンチヒッターとしておいで下さった方で、明四日は自宅での茶事を予定されているお忙しい中参加して下さった）のお手紙を代表して記載させていただくことにする。（原文のママ）

忠内ご夫妻様

「春の心はのどけからまし」のような花模様日和が続いております。

三日は突然のお茶事のお招きながら誠に印象深い一刻をすごさせて頂きましたこと感謝申し上げます。

光広卿の行状記も合せてうかゞいますとお歌に広がりが、また人となりを感じさせて頂きました。

春牡丹もまだほんのりと赤葉の中に早みどりの蕾がういういしく素敵でした。

奥様先生のお心づくしの懐石の数々を目で愛でて舌で味わい料理にふさわしい道具に眼福を得ました。ご銘酒と合せて一段と心地よくなりましたのもご夫妻の心のこもったおもてなしのせいでしょうか。

そして再び濃茶席で堂々とした伊賀水指に春慶瀬戸の肩が張り口造りのひねり返しに節目正しい茶入れ、さらに道安茶杓も滅多に手に取ることができない時代の古作、お蔵の深さを感じるお席でございました。それから魯山人作良寛詩文水指もまさしくご自慢の一品かと存じます。

春の雨にて月は出ておりませんでしたが「春宵一刻価千金」のここちのお招きでございました。機会がありましたらおうわさの井戸茶碗にて一服をと願い奉ります。

楽しい一刻を過させて頂きましたこと改めて感謝申し上げます。終わりに家包までたまわり恐縮に存じます。

花冷えの頃どうぞご夫妻ともども呉々もご自愛下さいますよう。乱筆乱文にてお許し下さいませ。

かしこ

卯月五日

N より

追伸

（他事ながら翌四日私方もぶじ茶事を終えました）。

終

小説　田方農業高校物語（一）

堀内永人

一、明治時代、口伊豆の農村に農林学校ができる

時は、明治二十九年（一八九六）、田植えが済んだ六月の早苗饗（田植えを終えた農家の祝い）の日。

場所は、伊豆半島の入り口、口伊豆と呼ばれる静岡県田方郡仁田村（現在の田方郡函南町仁田）の農家の庭先き。

「茂吉さぁ　おめえ聞いているか？」

「薮から棒に何のことだべえ？　儀十さぁ」

「そうか、茂吉さぁ、お前ぇはまだその話を聞いてねぇな。実はな、近い内に仁田に学校ができるらしいぞ」

「おう、そのことか、儀十さぁ、そのことなら儂も聞いている。慶音寺（仁田村）の御坊様から聞いただぁ」

「茂吉さぁ、その学校は、仁田（大八郎）の旦那さまが創るそうだ」

「うん、口伊豆には、韮山中学校（現在の静岡県立韮山高等学校）があるというのに、なんでまた仁田に学校を創るんだべえか？」

「茂吉さぁ、その学校はな、農民に必要な学問を教える学校だそうな」

「そうか、韮山の中学校と教える中身が違うということか。なるほど、それなら新しい学校を創るという仁田の旦那さまのお気持ちも判るな」

「慶音寺の御坊様の話によると、仁田に創るという学校は、仁田の旦那さまご自身が帝大（東京帝国大学農学部＝現東京大学農学部）を卒業されているから、農民も学問しなければ駄目だ、ということらしい。なぁ儀十さぁ」

学校の新設を計画している仁田大八郎には、

「無知こそ農民の人格立ち遅れ」

の不変の真理があったのである

「そうだべぇ。それにしても、学校を創るといえば、何

反歩もの田畑を潰さねばなんねぇから、仁田家でなければ、できないことだなぁ、茂吉さぁ」

「まったくなぁ、儀十さぁ。それにしても、仁田の旦那さまは大したお方だ。自作農（農業をいとなむに必要な田畑を所有する農家）一軒分くらいの田地田畑を、学校のために用意しようというんだからな」

「そうさなぁ、茂吉さぁの言うとおり、仁田の旦那さまはお若いのに大したお方だ。まだ三十になっていなかんべぇ。しかしだな、農民は、お天道さまのお日柄次第で、米や麦ばつくるんだから、農民にゃあ、学問なんぞいらなかんべぇ。なまじっか農民が学問なんぞしたら生意気になってしょうがなかんべぇ。おらぁは、読書ができれば、それで十分だ」

茂吉のいうのにも一理があった。

それもその筈、この時代には、

「農民に学問は不要」

という考え方が、一般的であったのだ。

だから、仁田村の百姓塚本儀十と青木茂吉の二人は、こんな伊豆半島の片田舎の農村に、大事な田圃を潰してまで、学校を建てようとするお上や仁田大八郎のやることが、不思議でならなかったのである。

しかし、仁田大八郎には、

「無知こそ農民の人格立ち遅れ」

の真理があったので、

『伊豆に田方農林学校あり』

と、謳われるような学校を創ろうと、固く心の裡に決めていたのである。

仁田村のある伊豆半島は、地図を見れば誰でも気付くことであるが、古来より関東、関西の分界地点となっており、日本列島太平洋岸の中央部、富士山の南にあって、半島の中央部には、標高一〇〇〇メートル余の天城連山が聳え、これを境に北側の田方郡を口伊豆、南側の賀茂郡を奥伊豆と呼び、さらに天城連山周辺を中伊豆と呼んでいた。

口伊豆地域は、伊豆半島の穀倉地帯であり、塚本儀十と青木茂吉等は、自作農として村の中堅農家であったから、田圃を潰してまでも学校を創るという仁田大八郎の遠大な計画が理解できなかったのである。

明治六年（一八七三）、学制（近代化学校制度）が施行されると、口伊豆地域でも、伊豆の韮山村に県立韮山中学校（現静岡県立韮山高等学校）が開校し、同地方の有力者の子弟が入学した。

そして今度は、韮山中学校とさして遠くない仁田村に、農業に必要な学問を教える農林学校を創ろうということである。

「村内に農林学校ができれば、俺の倅もその学校に入れようかな。儀十さぁはどうする？」

「韮山の中学校と違って、農民の子供を教育する学校だから、米麦の作り方、牛馬や鶏の飼い方なども教えるだんべぇ」

「ふーん、それなら俺の倅にゃぁちょうどいいな」

「茂吉さぁのところの倅は新しい学校に入れればいいな。うちの倅は、もう学齢期を過ぎているから、親戚の倅でも入学させるか」

「そうすると、儀十さぁのところの親戚の倅と、俺ぁの倅は学校を通して友達になる、つまり『校友』ちゅうわけだ」

「学校の友達、校友か。だけんど、今度の学校は、農業の学校だから、『校友』ではなく、農林学校生徒同士の友達、つまり、田圃を耕す者同士の友達だから、『耕す友達』、つまり『耕友』だな」

「儀十さぁはうまいことを言うな、『耕友』か。うん、そうだな、『耕友』がいい」

「それにしても、学校を創るとなれば、何反歩もの敷地も必要だし、そのうえ、建物や、机、椅子、教材や什器備品などの道具もそろえなくてはなかんべぇ。それに一番肝心な教える人、教師を探してきて、この人たちに払う手当だって、大変な金額になるんべぇや」

「そうだ、お上から、ある程度の費用は出るんだろうが、目に見えない金もたくさんいるだろうから、また寄付の話があるかもしれんなぁ儀十さぁ」

「こりゃ他人事ではないな、茂吉さぁそう思わないか？」

「でも、村の将来のことを考えれば、学校も必要だから、村中で応援しなければなかんべぇ」

こうして、仁田村では、新しい農林学校の話しで持切りであった。

学校を創るためには何千円もの費用（当時の千円は現在の三億円くらいか？）がいる。仁田大八郎は、この多額の費用を投じて学校を創ろうというのである。

では、大金を投じて農林学校を創立しようという仁田大八郎とはどんな人物であったろうか、調べてみよう。

二、仁田家のルーツ

今から八百有余年さかのぼった建久四年（一一九三）五月二十七日のことである。

征夷大将軍源頼朝は、鎌倉幕府軍の兵力鍛錬を兼ねて、武威を天下に知らしめすため、三万余の兵を動員して、富士の裾野（現在の静岡県富士宮市）において大巻狩を挙行した。

巻狩の初日は、勢子たちの懸命な追立てにも拘わらず、雉一羽、野兎一匹出てこなかった。

不機嫌になった頼朝は、眉間の縦皺を露わにして、

「ちぇッ！　獲物はないのか。今日は終わりだ」

と、苛立ちながら、引上げの命令を出そうとした。

その時、西方向の草叢から、からだ全体を杉皮で覆っ

たような手負いの暴れ大猪が、
〝グオー　グオーッ！〟
と、唸り声をあげて、
ドドドドッ！
と、西の彼方から、頼朝の本陣目掛けて突進してきた。
「おう！　物凄い奴が出たぞ！」
あまりのすざまじさに恐れをなしたか、誰も立ち向かおうとする者がいない。
「誰かあの獲物を仕留める者はいないか！」
と口々に大声を上げて騒ぎ出し、囃し立てた。
その時、
「おう！我が仕留めようぞ」
と、破鐘のような雄叫びを上げて、狩り装束に身を固めた屈強な武者が、大猪の前に両手を広げて立ちはだかった。
子牛ほどもあろうかという大猪は、
〝グオッ　グオーッ！〟
と、荒々しい猪息を吐き、前脚で大地を叩かんばかりに激しく引っ掻くと、行く手に立ちはだかった武者を目掛けて、猛狂ったように突進してきた。
これぞまさしく猪突猛進である。
「わぁーッ！」
と、お狩場を取り巻いていた三万余の武者たちの間から、大歓声が沸き上がった。
大猪は、全身の毛を逆立たせ、前方に立ちはだかった武者を一蹴りせんと突進してきた。
武者は、一旦は豪弓に鏑矢を番えて射止めんとしたが、すでに間に合わずと思い、弓矢を捨てて、
「いざ参れ！」
と、大手を拡げて立ちはだかった。
三万余の武者たちが、手に汗握り、固唾を飲んで、この一騎打ちを見守った。
大猪が接近し、今まさに武者を跳ね上げんとした時、武者は、ひらりと身をかわして大猪の背中に、後ろ向きに飛び乗った。
大猪は、邪魔ものが背中に跨ったので、この武者を振り落とそうと暴れ出した。
大猪の背中に、後ろ向きに跨った武者は、左手で大猪の猛々しい尻尾をがしっと掴み、右手に持った脇差を大きく振り上げて、二度三度と大猪の腹といわず、尻といわず辺り構わず強烈に突き刺した。
大猪は、痛さのためか、荒れ狂い、背中の武者を振り落とそうと、一段と激しく飛び跳ねた。
さらに武者は、大猪の腹を立ち割らんばかりに、脇差を深々と大猪の尻に突き立て、引き裂いた。
さしもの暴れ大猪も、脇差を尻から腹の中へ、深々と突き立てられ、引き裂かれてはたまらず、
〝ドドオッ〟
と、荒野に打ち倒れ、四肢を痙攣させて息絶えた。
「伊豆の国、仁田四郎忠常、暴れ大猪を仕留めたり！」
と、大音響で名乗りを上げた。
「あっぱれ、あっぱれ。仁田四郎でかしたぞ。見事じゃ、一番手柄じゃ」
頼朝は、乗馬の鞍を叩いて、褒め囃し、褒賞として、富士の裾野に五〇〇余町歩（五〇〇ヘクタール）の土地を与えたのである。
さらに、広大な富士山の裾野のお狩場を埋め尽くした三万余の武者たちも、鐘や太鼓を打ち鳴らし、法螺貝を吹いて褒め囃し、四郎忠常の武運はくまなく全軍に鳴り響いた。
大猪を退治した武者、仁田四郎忠常こそ、この小説の主人公仁田大八郎のルーツであり、大八郎より三十七代前の仁田家当主である。
時に仁田四郎忠常二十六歳（仁安十一年《一一六七》四月十日生まれ）。
久々に行われた富士の大巻狩りは、猪退治のあった日の二日後につつがなく終了し、武者達はそれぞれ獲物を家来に持たせて、鎌倉に引き揚げた。

二、　貞女おきく

仁田家が、伊豆国屈指の名家として後世に名を残したのは、四郎忠常が武勲を立てたのが大きな要因であったが、それだけではない。
四郎忠常の妻おきくの内助の功も、見落とすことはできない。
鎌倉幕府の事績を記述した歴史書『吾妻鏡（東鑑ともいう）』（鎌倉時代に編纂）によれば、仁田四郎忠常の妻おきくは、日頃から信仰心が篤く、仁田の家から一里余（約五キロメートル）ほど北の伊豆一宮、三嶋明神（現在の三島大社）を深く信仰し、毎月八の付く日、即ち八日、十八日、二十八日には必ず三嶋明神に参詣し、仁田家の武運長久を祈っていた。
文治三年（一一八七）七月十八日のことである。昨夜から吹き荒れていた豪雨は、朝になっても一向に止む気配はなく、伊豆の暴れ太郎の異名を持つ狩野川と、その支流である大場川は、洪水で目をそむけたくなるほど氾濫していた。
仁田家に長年奉公する下女のおこうは、
「奥方さま、この豪雨の中、舟で大場川をさかのぼるのは難儀なことです。もし舟が転覆でもしたら大変です。今日の明神さまのお参りは、明日に延期なさった方がよろしいではありませんか」
と、奥方のおきくに申し上げた。すると、おきくは、
「ありがとう。心配してくれるおまえの気持ちはよくわかります。が、どんなことがあっても毎月欠かさず八の

日には、明神さまに参詣しており、未だ一度も怠ったことはありません。雨が降ったくらいで参詣を取り止めることはできません。早く雨具と舟の支度をして下さい」

と、下女のおこうに三嶋明神参詣の支度を命じた。

実は、仁田家には、最近悪いことが重なっていたのである。

というのは、おきくの夫四郎忠常が、正月頃から風邪を引き、高熱が続いて床に伏す日が多かった。

夫四郎忠常を深く愛するおきくは、夫の病は自分の信仰心が足りないため、と思っていたので、参詣日の十八日は、どうしても三嶋明神をお参りしたかったのである。

特に今日は、夫の高熱平癒を祈願する大事な目的があったので、参詣を取り止めることはできなかった。

幸い家を出る頃は、雨もやや小降りとなったので、

「ありがたや、さぁ、出かけましょう」

と、おきくは、船頭や郎党、下女を励まし、増水した大場川の船着場から舟に乗り込んだ。

仁田村の家から三嶋明神へ行くには、舟で大場川をさかのぼらなければならない。

船頭や郎党たちが、舟の舳先に麻縄を縛り付け、

「えいさ、えいさ」

と舟を引っ張り、川上へ向かった。

仁田の船着場を出発する時は、雨が降り出してからあまり時間が経っていなかったので、無事に三嶋明神近くの川原ヶ谷の船着場に到着できた。

おきくは、さっそく三嶋明神の神前に額づき、神職の神事のあと、

「明神さま、私の命は明神さまに捧げます。どうぞ、わが夫、四郎忠常の命をお救いください」

と、懸命に祈った。参詣を済ましたおきくは、一刻も早く家に帰り、夫の看病をしなければと、供の者をせき立てて舟に乗り込んだ。

ところが、仁田の家を出てからすでに二刻（現在の四時間）を経過しており、箱根山麓に降り注いだ雨は大場川に流れ込み、濁流となって川下に流れていた。

しかも、その水勢はすざまじく、いまだかって遭遇したこともない水量であった。

この荒れ狂う濁流を見た船頭たちは、口をそろえて、

「こりゃぁ凄えや、舟が濁流に呑み込まれて危険ぞ！」

「これじゃぁ、舟は出せないや。奥方さま、今日は修善寺街道を歩いて帰りましょうや」

と、口々に言い出した。

下女たちも、

「奥方さま、帰りは歩きましょう」

と、怯え声で言い出した。しかし、おきくは、一刻も早く家に帰りたかった。

歩いて帰れば、舟で帰る時間の四倍も五倍もかかってしまう。

「否、一刻も早く仁田に帰らなければなりません。そして、殿のご看病をいたさねばなりませぬ。さぁ早く舟に乗りましょう」

と、下女たちを叱りながら、船頭に向かって、

「さぁ、参りましょう。船頭さん、しっかり棹を握って下さい」

と、励ました。

「ようござんす。それでは舟を出しましょう。奥方さま、お女中がた、しっかり船縁を掴んで、川に落ちないように願います」

と言い、舟は船着場を離れた。

おきくたちを乗せた舟は、増水した大場川の奔流に揉まれて、木の葉のように揺れ動いた。

やがて舟が、大場川と夏梅木川との合流地点に差し掛かると、逆巻く濁流が渦を巻き、あっという間もなく、舟を川底に呑み込んでしまった。

舟には、奥方のおきく、船頭が二人、それに郎党、下女がそれぞれ二人、合計七人が乗っていた。が、その全員が、川底に沈んでしまったのである。

しばらくすると、まず始めに、船頭二人が川面に顔を見せた。

そのあと次々に郎党二人と、下女二人が浮かび上がり、上手に生えている柳などの木々にすがりつき、なんとか助かることができた。

ところが、どうしたことか、奥方のおきくさまだけが川面に浮かび上がらず、ついに溺死するという、悲しい結果になってしまった。

おきくは、大場川の洪水で命を落としてしまったが、

「わが命は失うとも、夫四郎忠常の病を平癒し給え」

と、三嶋明神に捧げた祈りが神様に通じて、数日後、四郎忠常は全快した。

この事実が世間に広まると、人々は、

『夫を想う奥方おきくさまの信仰心のおかげ』

『これぞまことの貞女の鑑』

と、褒め称えた。そして、

『伊豆に仁田家あり』

と、家名が全国津々浦々に知れわたった。

仁田家の名声が全国に知れわたったのは、奥方おきくさまの力も大きかったのである。

後日のことであるが、仁田四郎忠常は、鎌倉幕府の将軍後継者争いに巻き込まれ、不運にも三十七歳で命を失う羽目になるのである。

この将軍後継者争いは、世にいう『比企能員の乱』である。

つづく

つれづれの源氏物語

第三回　青年時代その1
―帚木三帖―

小田紘一郎

一、はじめに
―帚木三帖について―

これから三回にわたり光源氏の青年時代を見ていきたい。中年時代に先がけた重要な期である。

その1……帚木三帖といわれているもので、帚木の巻、空蟬の巻、夕顔の巻。

その2……若紫の巻、末摘花の巻、紅葉の賀の巻、花宴の巻、葵の巻、

その3……賢木の巻、花散里の巻、須磨の巻、明石の巻、

（一）帚木三帖は、光源氏が一七才の年令の時の話しであり、主に空蟬、夕顔という性格、生き方が対照的な二人の女性が登場する。中の品の物語、空蟬・夕顔物語とも言われている。三巻から成り、帚木の巻は、前半は有名な「雨夜の品定め」と呼ばれているものであり、後半は、空蟬という人妻が登場する。次の空蟬の巻は、前巻に引き続き光源氏と空蟬の恋物語であり、最後の夕顔の巻は、新しい女主人公として夕顔が登場し、光源氏との恋を経て死に至るという劇的な暗い内容である。

これら、空蟬との生き別れ、夕顔との死に別れ（「過ぎにしも、今日別るるも二道に」）は、青年源氏の人生に深い影響を与えずにはおかれなかった。

（二）上流女性と異なる中流女性の生き様を生々しく描いたものであり、読んでいて実に面白い。青年貴族達の恋への憧れも実に若々しく、それらを描く文章も第一巻の桐壺の巻のように固くなく、柔軟性に富んでいることや女性の心を適確にとらえており、大きな魅力となっている。

（三）この三帖の源氏物語における位置付けからまず考えて見よう。

①何故、第一巻の桐壺の巻より第五巻の若紫の巻に直接つながらないで、あえてそれをさえぎるような形で、この三巻が挿入されたのかは、古来から物語の構成論、成立論、本質論と関係して大きな議論がなされているところである。

②源氏物語を光源氏の一生を描いたものとして読むと、第一巻桐壺の巻は、主人公の出生から一二才で終っており（第二回で記述済）、この帚木の巻を含めた三帖は、光源氏一七才、若紫の巻は一八才という年令の事である。

従って、桐壺の巻と帚木の巻との間には五年間の空白がある。源氏物語には、二つの大きな系列（桐壺系＝紫の上系と帚木系＝玉鬘系）があることは既に第一回で記した通りである。

③帚木の巻は、この玉鬘系の序としてのみならず、源氏物語全体の序章（総序）とも言える性格を併せ有している。

それは源氏物語において語られている人生と人間という大きなテーマの問題提起が数々なされているもので、桐壺の巻がやや形式的な枠組設定であるのに対し、この帚木の巻はそれを大きく異なる実質的な意味を持っているという点で実に重要である。

ここで提起された問題（テーマ）が、以降の物語に次々と語られ考えられていくのである。

④帚木という名の由来であるが、昔物語に信州地方に帚木という樹があって、それは遠くから見るとよく見えるが、近ずくとよくわからないという伝説があるということである。この帚木の樹は、今で言う「ほうの木」（六月頃白い香りの良い大きな花を咲かせる）ではないかと推料される。

なか〳〵象徴的な意味を持っており、それは、様々考えられるが、

㋐この中の品の物語の女主人公・空蟬を表わしている。

この巻の由来ともなった光源氏と空蟬の贈答歌

「帚木の心を知らでその原の道にあやなくまどひぬるかな」（光源氏）

「数ならぬ伏屋に生ふる名の憂さにあるにもあらず消ゆる帚木」（空蟬）

前者は、あなたの身分、心も知らないで恋してしまったという光源氏の歌に対し、後者は、数ならぬ（身分の低い）自分は、とても愛を受け入れられるような立場になく姿を消してしまいたいというような空蟬の謙虚な正直な歌である。

それと後の一六巻の関屋の巻において夫が帚木（空蝉）を伴って在国することが記されている。

㋑空蝉のみならず同じく中の品の夕顔や斬端の荻それと上の品の女性達も青年光源氏にはよくわからない存在のように思えた。

㋒更に広く解釈して人生・人間そのものが帚木のようなものであるとのたとへではないかと思われる。

㋓又、源氏物語自体が多くの読者（古今を問わず）には帚木のような存在ではないか。

等に多義に考えたいのである。

（四）この帚木の巻名にからんでもう少し広く源氏物語の巻名について考えてみよう。

源氏物語は、五四巻（巻名のみの雲隠の巻を入れると五五巻）から成り、それぞれの巻の名は美しい名前がつけられているが、よくよく考えてみると意味合いの深いものがある。やや横道にそれるが、それらの幾つかについて考えてみたい。

①「薄雲の巻」（第一九巻）人生そのものは晴ればかりでなく、雨もあり、概して言えば薄い雲におおわれているようなもの。薄雲の巻は、極めて重要なもので明石の君の娘との別れ、藤壺の死、冷泉帝出世の秘密（桐壺の帝ではなく光源氏と藤壺との間の子供）、息子の嫁秋好中宮への恋慕、六条院造営への意図等が描かれている。なお薄雲女院は、藤壺の事である。ついでに言えば、雲は女性、これに対し峰は男性を表わしている。有名な定家の歌「春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別れる横雲の空」（新古今集）。この歌の女性は横雲であって、藤壺は薄雲である。何か横と薄というわずか一字が違うニュアンスを伝えているようにも思えるが……。

②幻の巻（第四一巻）光源氏の出家と死を描くはずの雲隠れの巻の前の巻で、紫の上の死を描いた御法の巻に次いでいる。五二年の光源氏の人生を振り返ってみると、様々の栄華と苦悩を味わい、人生は幻のようなものであったであろう。

③宿木の巻（第四九巻）宇治十帖の中頃の巻で、宇治の姫君・中の君は、姉（大君）と父（八の宮）に死に別れ、京都に迎えられ匂宮との結婚生活を始めるのであるが、経済力や頼り所のない中君は、男に頼らざるをえない宿木（他の木に寄生して生きる植物）のような存在であったであろうことを象徴しているように思える。

④蜻蛉の巻（第五二巻）宇治の男主人公薫君にとって女達（大君、中君、浮舟）のみならず人生そのものが蜻蛉のようなはかないものであったであろう。この巻の名の由来となった薫の歌

「ありと見て手にはとられず見ればまた行くへも知らず消えし蜻蛉」は、秀歌であり私の好きな一首である。

⑤夢の浮橋の巻　源氏物語最後の巻である。夢が五回文章に出てくる。橋とは何か。何かをつなぐもの。何をつなぐのか。それは男と女。生（現世）と死（来世）。肉体と精神。つまり人生と人間そのものである。

それは浮いたもの、浮わついたもの、又、憂きものに通じる。人生そのものは夢のようなものであり、「浮世は夢の如し」と言われている。光源氏と藤壺の贈答歌（若紫の巻の密事）にも両方に夢が入っている。次回若紫の巻でくわしく見てみよう。又、朝顔の巻の光源氏の歌「とけて寝ぬねざめさびしき冬の夜にむすぼほれつる夢の短かさ」にも夢が出てくる。

夢という言葉は、何か源氏物語を理解する大きなワードのような気がする。注意しながら今後読んでいきたい。

このように巻名を見てみると、源氏物語は単に恋愛小説というべきものではなく、しかし、それをも一つに含んだ人生と人間の全てについて深く洞察したものであるとの思いが益々強くなってくるのである。

二、帚木の巻

源氏物語第二巻は帚木の巻である。

（一）巻名の由来

前記のように光源氏と空蝉との間にかわされた贈答歌によっている。

（二）内容

帚木の巻は、前段が有名な「雨夜の品定め」といわれているもので、後段は、青年光源氏と人妻空蝉との恋の進展という二つの段によって構成されている。

（三）雨夜の品定め

①五月の雨（五月雨、今で言う梅雨）が降る中、つれづれにまかせ若い貴皇子（光源氏、頭中将、左馬頭、藤式部丞）による様々な女性談議、女性論が語られる。

注意すべき点は、女性が一人も入っていないこと、男性のみによって成されている事である。光源氏はもっぱら聴き役である。

②理想の女性論、主婦論、結婚論、階級論、それぞれの女性経験談等が真倹に議論されている。思いつくままに重要かつ興味ある点をいくつか記しておけば、

㋐世の中に理想の女はいない。原文では「これはじもと難つくまじきはかたくもあるかな」（頭中将）男にとって理想的な女性、結婚するのにふさわしい女は、「実直、まじめで心の落ちついた人」（原文では「まめやかで心静かなる人」）である。いつの時代も男の求める女性像は同じであり面白い。

㋑女性を三つの階級（上の品、中の品、下の品）に分類し、上と下とはともに少なくかつとるに足らぬもので、我々の関心のあるのは、中の品の女性である。親が四位・五位（主に受領階級）で家柄が安定し経済力もそれなりにあり、女に品位があり、個性があり教養がある女性が魅力的だとしている。

光源氏の中の品への関心への刺激となり、この物語の空蝉、夕顔等への布石となっている。

㋒「世にないと人の閉じられたらんこそ限りなくめずらしく、あばらやに……」（左馬頭）は、後の夕顔、末摘花更には遠く玉鬘物語への布石ともなっている。

③三階級論の基準（根拠）は、品、容貌、性格、経済力（にぎわわしさ）等によるとされ、中の品には上から没落した人（女）と下から上昇した人（女）が該当し、変動しつつ最近ふえている。

この階級論の発見はなか〳〵興味ある事実である。平安時代中期、女流文学の興隆期、摂関政治（貴族中心の官僚政治体制）の時代において、中産階級が社会を担う中間層として新たに登場しつつあるとしたことである。まだ、次の時代の担い手である武士階級の登場は予見していないものの社会の階層が動いている。その中心をなすのは受領階級であり、彼等は地方に降りていくも豊かな経済力を有している。やがて語られる明石物語の布石ともなっている。

又、現在の社会においても、米国や日本等高度に発達した資本主義の時代にあって、中産階級の肥大や没落が大きな社会現象となり問題化している事、更に我々が学んだ農業経済の世界においても、マルクスのいわゆる両極分解論（上層農が分解して地主＝富者と労働者＝貧者になる）に対し、現実的、統計的には中農が肥大化している＝いわゆる中農標準化論、ことが指摘されている事実を考えると一千前に既にこれらの考えの芽があり、これにより社会を見てきたという事実はまことに驚くべき事のように思われる。

④夫婦論についても現在から見てもなか〳〵興味ある事が述べられている。いくつかをつらつらと挙げてみよう。

㋐国家の役人はそれぞれ役目があり、上は下に助けられ下は上の命を受けつつ行政を行うもので、何より多数によるチーム・ワークが大切である。しかし、家庭の主婦（家刀自）は、すべて一人でやらなければならないから大変である。財務大臣と文科大臣と農水大臣その他諸々の大臣の役割を主婦は担っていかなければならない。

㋑「我思うにかなわねど、目初める契りばかりを持って思いとまらん人」が良い。結婚後もそううまくばかりにはいかないこともあろうが、縁を大事にし捨てたりせず（離婚せず）共に生きていくことが大事。

㋒妻たるには、「ひたすらおっとりとして子供ぽく、心のいやしくない人」を長く教育して育てていくが良い。ここに若紫の巻の伏線が張られている。

㋓恨み事があっても（例えば浮気）露骨に責めてはいけない。ほのめかす程度にしておいて事を荒たてない方が良い。

㋔男性は、昼は仕事で同僚ともいろ〳〵な事があるだろうから家に帰ったら女性（妻）は良くそれらの話を聞いてやるが良い。

㋕夫を放任して好き勝手にさせずある程度つないでおくこと。

㋖男女の仲、十人十色、一長一短がある。

良いところだけで欠点がまるでない女性は、吉祥天女のように仏くさくて面白くもなく困ったもの。

㋗よく知っているところでも、知らない振りをし、言いたいことも全部いわず一つ二つ残しておいた方が良い。

つい〳〵興味があり書いてしまったが、我々の夫婦関係にとっても現実的、切実な問題である。

古今を問わず女性諸氏からは、男性の一方的な見解だとのおしかりを受けるであろう。そして、このような男性の考えと主体的、積極的に生きようとする女性の考えがなか〳〵かみ合わず、以降の物語の男女関係を大きく規定いくのである。

⑤話しは最後には自らの女性経験談となっていく。

㋐左馬頭の話し……嫉妬深い女（指食い女）、趣味だけに生きる女（浮気な女）

㋑頭中将の話し……内気な女（常夏の女）

㋒藤式部丞の話し……学者の娘（才女）

この㋑の話し（常夏の女）こそ、頭の中将の愛人であった夕顔の事であり（常夏には床がなつかしいという意味もある）、三年ばかり関係し、ろうたき子供（女の子）までいたが、中将側よりおどかされて二人は別れたというもので、まさにこの娘こそ後の玉鬘として、一七年を経て物語に登場する（いわゆる玉鬘十帳といわれているもの）人であり、ここにも夕顔物語とともに次の物語の大きな伏線がかくされている。源氏物語の継続性、連続性に読者はただ〳〵驚くばかりである。

なお、光源氏はもっぱら聞き役に徹しつつ「人ひとりの御有様を心の中に思い続け給ふ」「足らずまたさし過ぎたることなくものし給ひけるかな」と思う理想の人、欠点のないその人とはまさに藤壺であり、今後源氏物語の重要かつ中心課題として展開されていく藤壺物語の布石となっている。

以上のように夕顔物語は、帚木系統に、藤壺物語は、桐壺系の中心となっていく。この帚木の巻にはそれらの両方の目がある点からしても源氏物語の展開に極めて重要な役割を持っている事であることを改めて認識する。

⑥源氏物語と雨

㋐雨夜の品定めは、夏の雨（五月雨、梅雨）の頃の話しである。「つれづれと降りくらしてしめやかなる宵の雨に……」。高校時代、一生懸命暗記したところであり今でもすら〳〵と出てくる。長雨は、何もやることがなく退屈なのである

しかるに、雨は、人間の心を外から内に向けさせる。

見てきたように、ここでは女性論、理想の妻像等が中心課題となる。

㋑同じく源氏物語二五巻に蛍の巻というのがある。やはり、五月雨の頃、光源氏は玉鬘を相手に小説論、物語論を展開する。そこで小説は、人生を書いたものであるとしている。

㋒第一九巻は、薄雲の巻であり、文章の一端に「秋の雨いと静かに降りて……」とあり、光源氏は事もあろうに息子（冷泉帝）の嫁（秋好中宮）に思慕の念を打ち明ける。

梅雨（夏の雨）は、人間を思索に導き、秋の雨（今で言う秋雨前線の頃）は人に思慕の念を起させる。

㋓それでは冬の雨はどうか。冬の雨は雪ともみぞれともなる。薄雲の巻の最初は、明石の君が娘を手放すところである。身分の低い自分のところに置いておいては、娘は幸せになれないと身を切る思いで紫の上の養女に送り出す背景が冬の雨（雪、あられ）である。母娘の別れに冬の雨をバックに置いているのである。母親の淋しい冷たい心を象徴している。

㋔更に夏の雨は激しく音を消してしまう効果があるので、光源氏と朧月夜の密会は、娘の父親（右大臣）の足音を消してしまい、現場をおさえられてしまうが、これは第一〇巻（賢木の巻）ことである。

㋕又、宇治十帖でも雨は重要な役を担っている。浮舟の涙は涙雨であるが、これは後に読む楽しみにしておこう。

以上のように雨は、効果的に物語の重要な借景をなしており、まさに景情一致であるが、まだ〳〵雨は多くの場面に出てくるので、楽しみながら今後読んでいきたい。又、人の心を外から内に向けさせるものに病気がある。入院等していると時間もあり、日常の生活や来し方の人生を考えたりする。旅も同じような効果がある。

⑦最後に長くなってしまっているが、帚木の巻の重要な点に触れておきたい。それは光源氏の性格、恋に対する基本的姿勢とも言うべき点である。この帚木の巻は、光源氏の青年時代の恋の秘密を作者があばくという設定になっている。冒頭「光源氏名のみことごとしゅう、言い消たれたまふ咎多かなるに……」難解な文章である。そしてそれは「なよやかな色めいたる話はなく」「軽はずみな浮気沙汰等好きでない性格」で、「気苦労の種となるような恋ばかりを一心に思い乱れる」というものである。

要するに、安易な恋ではなく、困難の多い恋に想を燃やすというのである。以降展開する藤壺、朧月夜、六条御息所、若紫等への恋はすべてここに原点がある。更にこれにつけ加えなければならないのは、母（亡き桐壺の更衣で三才で別れた）への思慕、満さされない心である。

光源氏は、このように帚木の巻に入ると桐壺の巻とは異なった好色人物（すき物）として変身し登場するのである。

⑨そうだ。もう一つ記しておいた方が良い点がある。それは正妻葵の上の性格であってはっきりと記されている。後半の空蝉との出会い・関心の傾斜の前提として出てくる。

㋐けざやかに気高う。
㋑乱れるところがない。まめ人というにぴったり。
㋒あまりにうるわしき御有様。（いろ〳〵に解釈できる）
㋓夫婦関係はとけがたい。
㋔恥かしげに思ひしずまり給える

これらの性格を光源氏は「そうぞうしく」（不満に、物足りなく）思っていた。あくまでも光源氏から見た葵の上像であり、葵の上はまた別の思いを持っていた。この二人の夫婦関係は、なか〳〵重要であり、源氏物語がこれを含めて様々の夫婦を登場させているのは面白いことである。男と女の関係を恋愛関係のみならず夫婦関係からも見ているのである。葵の上は、どうして和歌を一首も読まなかったのであろうか。

(四) 空蝉物語
——空蝉との出会い、関心をいだく、そして交渉へ——

①帚木の巻後半から空蝉が登場して、次の空蝉の巻、夕顔の巻へと続く。空蝉という名は後の光源氏との間にかわされる歌により呼ばれるのであり、ここではまだ女と呼ばれている。（前もって空蝉と言っておく）、源氏との経緯を記せば次の通りである。

②空蝉は、初老の伊予介（受領）の後妻である。父母に早く先立たれ、弟（小君）と一緒に嫁つぐ。経済的に困っていたからである。

③女・空蝉は伊予介の子供（紀伊守）の宅にきている。

④そこへ方違へで源氏が訪れ、小君の案内で女の部屋にしのびこみ空蝉を強引に犯してしまう。

その時の空蝉の対応と心を読むことが最大のポイントである。

原文には「心地はただわびしく、あるまじきことと思えば、あさましく…」とある。あさましという言葉が二回出てくる。

光源氏の「情々しくのたまひ尽すこと」に対し「現ともおぼえずこそ。数ならぬ身ながらも、思し下しける御心ばえのほども、いかが浅くは思うたまへざらん。いとかようなる際は際とこそはべなれ」と答える。

この空蝉の言い分を林望先生の訳（謹訳源氏物語）で見てみると「とても現実とは思えません　こんな物の数でもないような賤しい身の上ながら、それでもわたしをこ

く複雑な人妻の心境をよくあらわしている。これらを考えつつ、全体的には、経済と女性、生きることと経済、経済の重要性ということが強く印象づけられる。

三、空蟬の巻

（一）この巻は、源氏物語第三巻であり、帚木の巻に続く光源氏と空蟬との恋について記した短い巻である。

（二）巻名の由来、源氏と空蟬との贈答歌によっている。

「空蟬の身をかえてける木の下になほ人柄のなつかしきかな」（光源氏）

（訳）生身のあなたは、ふと姿を隠してしまって、あとは抜け殻だけになってしまった。その抜け殻の留っている木の下で、それでもなお蟬のではないという人間の抜け殻の衣を、そしてあなたのお人柄をなつかしがっているのです。

「空蟬の羽に置く露の木がくれてしのびしのびに濡るる袖かな」（空蟬）

（訳）あの衣は濡れておりましたでしょう。蟬の抜け殻の羽に置いた夜露が木陰に隠れ潜んでいるように私もこっそりと堪え忍びながら、涙に袖を濡らしておりますものを。（いずれも林望　謹訳源氏物語より）

（三）内容

①光源氏は、一度契った空蟬を忘れられない。

んなに侮られるお心のほどを思いますと、ずい分浅いお情のかけようだと思わずにはいられません。どうぞもうお揶揄いにならないで。賤しい身分の者にはそれなりの仕方というものがございます」。このように必死に抵抗するのである。

⑤その後わかる女の身の上や性格等について

㋐人柄がやさしい　年上で人妻。

㋑そこに強い心を無理やりに加えたもの、なよ竹のようでなか〳〵手折れない。

㋒今は身が沈んでいるが、以前は街門の督の娘

⑥光源氏はこの契りは前世からの因縁であると思う。「世こそ定めなきものなれ」「女の宿世はいと浮びたるなんあれれ」と思う。

⑦この女性は、

㋐若い頃親も入内を望んでいたがかなわなかった

㋑普通の人と結婚できず、初老の男の後妻となった。さらにその後（後でわかることだが）

㋒夫に先立たれる。息子に言い寄られる。出家する。

まったく不幸な境遇にあると言わざるをえない。

⑧空蟬は、光源氏の愛を二度と受けず拒否しつづけるものの、「ありし日の娘時代であったなら」や、「しかし取りかえすことも出来ぬ」となげきつつ、思し乱るのである。（二回出てくる）

夫に対する配慮、分別と光源氏への憧れとの間に揺れ動

②小君に案内させて三度中川の家を訪ねる。

③かい間見

空蟬とその継娘軒端荻とが碁に興ずるのを見る。

④空蟬の部屋にしのび入るも、空蟬は察して小袿を残して逃げ（まるで蟬がぬけがらからとび出したよう）、光源氏は軒端荻と契る。（彼女は初めて男を知ったと書いてある。）人違えである。

⑤光源氏、空蟬の残した小袿を拘いて帰る。

前記（二）の光源氏と空蟬の歌およびこのことからこの女性を空蟬と呼ぶ。

（四）かい間見

①のぞき目であり、光源氏の眼を通して二人の女性を読者は見知る。平安時代女性は、顔を人には見せないので、男性はこのようなかい間見によって女性を知るのである。

源氏物語のいろ〳〵な場面にこのかい間見は、効果的に使われており、全体として一七例（二一例との説もある）があるようである。

②ここでも空蟬と軒端荻が対照的（対比されつつ）に生々と描かれている。

◦軒端荻　白き羅の単襲、二藍の小袿、ないがしろに着る、胸あらわ、白くつぶつぶと肥えて、愛敬づき花やかな容貌、静かなる気を添へばや、品少しおくれる、

◦空蟬　濃き綾の単襲、頭つき細やか、小さき人ものげなき姿、手つき痩せ痩せ。静かにのどめて

目少し腫れ、ゆうきによれる容貌、心あらん人、

③この空蟬の描写は、女性の新しい魅力として容姿より心ある人（心上手な人）又、教養等で個性がある人としているのには注目される。

（五）光源氏の男色

帚木の巻の終りと空蟬の巻の始めに出てくる光源氏と小君の関係で源氏物語にはこの男色はめずらしいとされている。つれなき人（空蟬）にかわって共に寝る。

光源氏にとって空蟬は、つれなき人、つらき人、うれたき人、執念の人であった。

四、夕顔の巻

（一）巻名

①「心あてにそれかとぞ見る白露の光添えたる夕顔の花」（夕顔）による。

②和歌の解釈というものはなか〳〵難かしい。

前半部分は、推察するにあなたは光源氏様とおみうけいたしますがとの共通解釈だが、後半部分につき何人かの訳を見てみよう。異った解釈であることがわかる。

◦渡辺淳一――あなたさまの白露の美しさで、こちらの

夕顔の花も一段と美しくなれそうです。
○林望――白露が光を添えた……その光君のご来臨を得た夕顔の花でございます。
○瀬戸内――白露にぬれぬれてひとしく美しく光をまた夕顔の花のようなお顔は。
○円地――白露の光を添えた夕顔の花にもまごうお姿（光源氏様）

私は、この歌は夕顔から光源氏に対するプロポーズ（求愛）の歌で、花を添えてほしい即ち愛してほしいという事ではないかと思う。夕顔は、経済的、官能的にも有力なスポンサーを見つけていたのではないか。

普通は、和歌というのは男性から読みかけて女性がそれに答えるというものだが、これは女性から発せられている。何らかの意図、根たんがあると考えた方が自然であろう。

夕顔自身がつくったのか、侍女の代筆であるかとの議論もあるようだが、素直に前者ととっておきたい。

③なお、夕顔の巻には、古今集から和歌の引用が一三ヶ所ある。（鈴木一雄氏ＮＨＫテキストより）

④夕顔の花は、白で夏の花、あやしい垣根に咲く花で人めいているという。擬人的表現である。夕、夜咲くこと（逆に言えば昼咲きえない）と女主人公夕顔の人生とを重ね合せ考えるのである。

（二）冒頭および六条御息所

有名な「六条わたりの御忍び歩きの頃」という出だしである。その頃光源氏は、六条に住むさる高貴な女性のところに忍んで通っていたということで、後でこの女性は六条御息所だとわかる。夕顔の巻には、夕顔、空蝉、六条御息所が交互に出てくる。六条御息所を描写したところを林望先生の訳でかいつまんで見てみよう。

多少長くなるが、今後の六条御息所との関係を考える上に重要であるので省かず記しておく。

○もともと源氏の求愛になか〳〵応じようとしなかった。
○身分が高い方。夫は前の東宮。死に別れ今は未亡人。娘一人。
○源氏が無理やりに口説き落した恋人。
○いったん深い関係になってしまった後は、源氏は手のひらを返したような疎略なあつかい。（気の毒なことであった）

体の関係を持たなかった頃は、あれほど執着していたものをどうして今はこのようにあっさりした心になってしまったのか。（理解に苦しむ）

○物事を度を越して思い詰める性格。
○源氏よりはるかに年上（七才）。世間に漏れ聞こえることが気が気でない。
○一人ぼっちで夜も寝られず、ああでもないこうでもないと思い悩む毎日。

なお、邸宅も木立が多く立派で、使用人も気の気いた女

であるとしている。

この邸宅こそ、後の光源氏の大邸宅。六条院の一角（西南の町）を占めることとなり、娘の秋好中宮の里邸として使われるのである。

（三）夕顔という女性

①経過

㋐帚木の巻前半の雨夜の品定めで、女性経験談の中頭中将によって語られた常夏の女がまさに夕顔その人。頭中将の愛人（思ひ人）であり、三年間関係を保った。後別れる。三才になる子供がいる。（後の玉鬘）五条の宿へ方違い。なお、雨衣の品定めという言葉は、この夕顔の巻に「ありし雨夜の品定めの後」と出てくるところによる。

㋑光源氏との出会い

六条に通っていた光源氏が病気見舞に訪れたところが五条の乳母の家でそこで五条の宿（夕顔の宿）に関心を持ち光源氏と出会い・交渉／（恋愛の進行）

㋒何がしの院で怪死。六条御息所の生霊により殺される。（別の見解もある。）

㋓夕顔の死をいたむ光源氏と右近。（二条院の秋の夕暮）

②人柄、光源氏の見た・感じた夕顔、（　）内は林望訳

㋐あさましく柔か（ほれるほど柔和）

①おおどきて（おっとりとして）

㋒もの深く重き方遅れて（思慮は深くない）

㋓ひたぶるに若びたる（ひどくあどけない）

㋔世をまだ知らずにもあらず（男女間に無知でない）

㋕児めかしい（子供ぽい）

㋖ろうたし（かわいい、そして何かしてやりたくなる）

なお、この「ろうたし」という言葉は夕顔の巻で数えたら合計九回でてきて、夕顔自身には七回、子供と右近がそれぞれ一回づつ。

㋗又、夕顔の娼婦性については、円地をはじめ多くの人により指摘されている。

（四）白という色彩

夕顔の巻を読んでいて白という字・事柄が六回でてきて基調色彩である。

すだれ、花（夕顔）、扇、白露、白栲、袷である。表面上白というのは、清潔、純白、けがれていないのイメージであるが、夕顔の人生そのものは決して白ではなく、黒とまでは言わないが、灰色がかっているように見える。表面に白のイメージを出しながらその裏面にはそれと違う対照的なものを秘させているのはさすがうまいと思い感心する。こういうことがこれからも何回も出てくる。

なお、夕顔の巻は、白、次の若紫の巻は紫、その次の末摘花の巻は赤（赤い花＝紅花＝鼻）というコントラスト

も面白い。

（五）したたかな夕顔

以上見てきた夕顔は、あくまで一七才の青年光源氏の目に写る姿（もしかしたら虚像）であって、実像は違うのではないか。今回じっくり読んでいて改めてそのことを強く感じた。それは女のしたたかさと言ってもよいであろう。文章から拾い出してみると、

㋐冒頭の「心あてに…」の歌を女性から読みかけてくる。積極性。もしかしたらひっ迫した状況（経済的）にあった。生きていくのに必死。

㋑「光ありと……」の歌。光源氏が美しいのは、「たそがれ時のそらめなりけり」と煙にまく。光源氏様も大したことないさという度胸。男をいなしている。

㋒「海人の子なれば」と自分を名のり出ない。

㋓うちとけたる心ばてなどあやしく様変りて…の表現。

㋔つらきも憂きもかたはらいたきことも思い入れたる様ならで……

㋕あいなかりける心くらべ　等々の表現からそう思えるのである。

又、後に、玉鬘十帖のどこだったか、光源氏が娘の玉鬘と母親（夕顔）を比べて、娘が総明で快活であるのに対し、母は「晴るけどころがなかった」（晴ればれしていない。ゆううつであった）と回想している。

恋は盲目であり、美しい誤解（亀井勝一郎）であるとする見方からすれば（結婚はその証明である）なるほどこの違いは当然で、表と裏を読むことが源氏物語を読む大きなポイントであり、楽しみでもあるような気がする。

（六）恋の逃避行

源氏と夕顔はルンルン気分で五条の宿からなにがしの院に恋の逃避行する。満月。両人幸せ一っぱい。しかし女はさめている。不安である。陶酔していない。「山の端の心も知らで…影や絶えなむ」の夕顔の歌はそれを表わしており死すら予感している。

やがけ月は欠けていく。十七日の立待月。訪れる死。

ワーグナーの諸作品の恋愛と決定的に異なる。

ジークムントとジークリンデの兄妹の逃避行とは違う。

源氏物語にも夕霧と落葉の宮、匂宮と浮舟等の恋の逃避行が出てくる。さらに、曽根崎心中。艶歌「矢切りの渡し」……つれて逃げてよ、ついておいでよ。…親にそむいてまでも…」いつの時代にも恋の逃避行はあり、好んで文学に読まれ音楽に歌われる。そして、夕顔の死、光源氏は強い悲しみと衝撃を受ける。

（七）夕顔物語の終焉

夕顔の死により夕顔物語は終る。二条院で光源氏と侍女・右近の対話は実に美しく悲しい。夕顔の回想（追慕）である。名文である。私の好きなところで何回も声を出して読む所である。少し引用してみよう。

「夕暮の静かなるに、空の気色もいとあわれに、御前の

前栽枯れ枯れに、虫の音も鳴きかれて、紅葉のようよう色づく程絵にかきたるようおもしろきを見わたして……面影にろうたくと思し出でらるれば……一九にやなりたまひけん……父は三位中将……」

その後の「はかなびたるこそは、ろうたけれ」はよく考えなければならない、注意しなければならない言葉である。男の考えの本音が出ているからである。

その要旨は、（林望訳）

①弱々しい人がよい。

②賢くて人の言うことを聞かない人は感心しない。

③人にだまされそうなところがあって、それでも思慮深く、夫と頼む人の心に素直に従おうとする人が良い。

④そういう人を自分の思うままに教え諭して暮らすことが出来たら

夕顔物語を総括しているとともに、次の若紫の巻の布石が打たれているところである。

（八）中の品の物語の終り

筆は、空蝉と軒端荻のその後を描き、更に夕顔の四九日法要、空蝉の夫と共に任地（伊予）に下るところで終っている。夕顔とは、死に別れ、空蝉とは生き別れ（二道）秋の暮れでありもう初冬でもある。

光源氏一七才の夏の日の思い出、青春の一ページの終り

（九）夕顔の死は何を物語っているのか。作者はこれにより何を言いたかったのか。

①夕顔のようなよ〳〵した個性のない性格では、厳しい現実社会を生きられない。女は強くなければならない。

前記の「はかなびたる…」の光源氏や上流貴族への夕顔の最大の抵抗・反発であろうか。

②夕顔のような生活態度（情人）では身を滅すこと、しっかりとした経済的基盤をつくることが重要性。

③更に源氏物語における死の持つ意味、周囲への影響である。源氏物語程死を描いた小説はないのではないか。何故死をこれ程描くのか。死を描くことによって生が見えてくる。

そんな中にあって最重要人物・光源氏の死が具体的に描かれていないのは何故か。何回も触れている事である。

この夕顔も含めて多くの場合は女の死である。（柏木の場合を除いて）

これは何を意味しているのか。林望先生の「私抄」が参考になるが、（後日検討）そうなのかどうか。前々から言っているように今後も考えるべき重要なテーマである。

④死とは直接関係ないが、結婚について一言付しておこう。帚木の巻に朝顔の君がうわさの中でわずかに登場する。この君は、めずらしく光源氏になびかずに拒否し

続ける（後の朝顔の巻）即ち、結婚拒否の女性として知られている。源氏物語の女性達の中には、この朝顔の君を始め落葉の宮、典型的には宇治の大君等がその主な女達である。見方によっては、空蝉の場合もそうであったかもしれない。どうしてこの時代の女達の中に結婚拒否の考えがあったのかは興味あることであり、現在の結婚しない女性達との違い等を見ていくことも源氏物語を読む楽しみの一つである。

五、中の品の物語総括と若干の考察

（一）光源氏と中の品の女性

①この物語は光源氏一七才の夏から秋・冬の出来事である。

夏に恋をする等は、暑い京都で、しかも当時の衣裳を考えるとなか〳〵出来るものではない。それだけに強烈だったということが言えよう。相手の空蝉も夕顔も夏の景物である。又、いわゆる中流の女性である。光源氏の性格、恋に対する姿勢は、帚木の冒頭に書かれており既に書いた通りである。

この頃の光源氏は、

㋐既に十二才で葵の上という正式の妻と結婚している。父方は左大臣。姉さん女房（十六才であるので四才上）。政略結婚で夫婦仲しっくりいかず。

㋑父の后（義母）藤壺に秘かな恋心をいだいている。

そして若紫の巻でわかることであるが、一度だけ深い関係になったことがある。この頃と時期が重なる。

㋒同じく六条御息所のところへ通っていた。

㋓朝顔の君にも、深い関心を寄せている。

㋔この他に多くの忍ぶに通うところもあったであろう。

これらの女性達は皆上流の女性達であった。そして皆年上であり、（六条御息所が七才、藤壺五才、葵の上四才、夕顔二才。空蝉不明）世の中（男女関係）を知っている女性達であった。

この上流の女性達は、皆、窮屈で、気が置けて、個性は表面には出さない人が多く、又、気位が高くて、一緒にいると圧倒されることが多く、その反動として中の品への関心が高まっていったと考えられる。

（二）光源氏は、中の品の女性を自分の人生の中、生活の中でどう位置付け考えていたのであろうか。

①六条院の世界に一人も入れなかった。（玉鬘は花散里のところに居候。）空蝉、末摘花は二条の東院に住む。

②後に女性回顧をしている。

○朝顔の巻……藤壺　紫の上　朝顔の君　朧月夜
　明石の君　花散里

○梅ヶ枝の巻……六条御息所　藤壺　朧月夜
　（筆蹟論）　朝顔の君　紫の上

○若葉下巻……葵の上　六条御息所　明石の君　紫の上

以上のように中の品の女性は一人も回顧されていない。

桐壺系が先に書かれたとしても中の品の女性達が中に入っていないことは、中の品の女性は彼の人生にそれ程重要な役割を果さなかった、重要な位置を占めていなかったということとして理解してよいであろう。

一七才の青春の一時期、遊び心で中の品の女性に関心を示したに過ぎないだろうか。

光源氏は中の品の女達を結婚相手としてなどとうてい考えていなかったであろう。又、勿論中の品の女性達も光源氏を結婚の相手などとはおそれ多くて、考えなかったであろう。結婚と恋愛とは違うのである。

そして、結果的に、空蝉も夕顔も源氏から去っていった。源氏の本心を見すかしているようである。後々の話しになるが末摘花も玉鬘も皆同じように源氏を拒否している。中の品の生き方、プライドを見る思いである。

（二）明石物語について

源氏物語における明石の君および一族（明石の姫を含める）は極めて重要である。明石の君の父も播摩の国の受領（元は今衛の中将）であるので、明石の君も中流の身である。何故、帚木系統であつかわず、正統な桐壺系でとりあつかったのか。明石の君、および一族が光源氏家の繁栄に大きく関係していることによるからであろう。物語の本筋なのである。本流なのである。

中の品の物語は、帚木三帖においては、一家や女の没落の物語である。又、光源氏はことごとく女性との交渉に失敗している。

これに対し、明石物語は、一門および光源氏家の繁栄の物語であり、そのために、この巻を主流の桐壺系においたのであり、又、紫式部自身が中流の出であって一門の繁栄やその夢を明石物語に託したのでもあろう。

（三）脇役について

帚木三帖は、中の品の空蝉、夕顔が主役であることは言うまでもないが、同じく軒端荻も登場するし、これらの中の品の女性のみならず、上の品の女達、葵の上や六条御息所、藤壺もちらりちらり光源氏の心を通して見られ、あるいは朝顔の君も対照的に描かれ後々の物語の布石となっている。併せ興味をひかれるのは脇役達の生々とした動きでありその役割である。光源氏の腹心・惟光、夕顔の侍女・右近、空蝉の弟・小君、更には六条御息所の女房・中将のおもと等の人物達である。

（四）帚木三帖における対照性

①源氏物語においては、人間造型（女性造型）が対照的に描かれている。例えば藤壺と葵の上、葵の上と六条御息所、紫の上と明石の君、玉鬘と近江の君、女二の宮と女三の宮、大君と中君等々があるが、帚木三帖においても空蝉と夕顔のみならず、空蝉と軒端荻、六条御息所と夕顔等に多くの女性達が対照的（対比）に描かれてい

る。光源氏は何故六条御息所より夕顔に心引かれていったのか、男の本音を視点にすえて考えるとわかるような気もする。渡辺淳一の解説が面白い。

②そこでこれまで記してきた空蝉と夕顔について対比しながらもう少し考えてみたい。

㋐同じ点（共通点）

（ⅰ）父母がなくなっていること。従って家が没落している。経済的に苦しい

（ⅱ）父の地位が三位どまり。二位は大臣級でその娘は入内して女御になれた。三位はせいぜい更衣

このわずか一位の差が彼女達の人生を狂せる。

（ⅲ）父は、いずれも入内させたかったが望みはかなわなかった。

	空蝉	夕顔
性格	理想の人、倫理性を持った人	情念の人、多義的、矛盾的複雑
容姿	不美人	美人（ろうたし）
経済的	恵まれていた（結婚後）	恵まれていない
夫	有＝後妻	無＝情人（頭中将、光源氏）
子供	なし	あり（玉鬘）
男（光源氏）	一度受け入れ以降拒否	受け入れ
生死	生―出家	死

㋑違う点　大ざっぱに整理すると次のような事になろう。この二人の女性がかかえている問題は、共通していて大きくは経済問題と身分問題とである。更に加えれば、男の二心に対してである。

（五）女性と経済

①源氏物語の初期に登場する女性達は概して貧乏な人が多かった。桐壺更衣、空蝉、夕顔のみならず上流の藤壺や紫の上も見方によってはそうであった。六条御息所、葵の上等は豊かであった。今の時代と違い職業を持たない彼女達は親の経済力に頼るしかなかった。

②当時の結婚は、男性が女性のところに通うといういわゆる通い婚（むこ入り婚）であったため（光源氏は葵の上のおむことなった）親が面倒を見ることとなる。二位相当の大臣級の家は経済力もあり政治力（後見人）もあった。

前記の貧しい女達の父親は、既に見てきた通り三位どまりであり、又、早く死んだ人が多かった。従って経済力を失っている。

③人間は霞を食べて生きていけない。経済力を得る為に必死の努力をした。この中の品の二人の主人公は、空蝉の場合は後妻になることによって、又、夕顔は、情人（愛人）になることによってその道を求めた。その人生の結末は見てきた通りである。渡辺淳一氏によれば、空蝉は、愛を拒むことで自らの存在を示し、夕顔は簡単に

男を受け入れる魅力があった。その背後には、これら経済問題がある。氏の「源氏に愛された女性達」（集英社）は独特の見方をしていてなか〳〵面白い。是非一読をお勧めする。

かかるような二つの異ったタイプの女性（空蝉のような人妻、夕顔のような若い女）は、現在社会にも多く存在しているであろう。一〇〇〇年前の女性達がいだいていたと同じような悩みをいだき、生きている人もかなりいるであろう。

（六）女性と身分

中の品の女性特に空蝉は「数ならぬ」という言葉を何回も使っている。明石の君の場合もそうである。

空蝉が光源氏の進入（強姦）に対し、徹底的に抗戦したのは、そのやり方と、身分により光源氏が自分を見下していると思ったからである。悲痛な女性のさけびである。

人格に関係なく、身分や経済によって人間が、人生が規定されてしまうのはおかしい、男女平等でなければならない（当時は全くの男性優位の時代）という中の品の物語の女性達の声は、源氏物語の底辺を流れている大きなテーマである。女達にとって古今の悲願である男女平等が現在実際的に達成しているかどうかは、私には判断できない。

（七）作者紫式部との関係

作者紫式部も中流の出である。空蝉の考えや行為には作者自身が投影されているといわれている。明石物語には、その願望が書かれ、歴史上ありえないような事をもって（受領階級から中宮が出る）物語を終えている。当時の多くの読者達は宮廷につかえる中の品の娘達であった。拍手かっさいしたであろう。そして、上流階級、男社会への反発の為、彼女達は研賛にはげみ教養を身につけていった。彼女達は、歴史上まれに見る興隆した女流文学の担い手となった。そして、源氏物語が生まれ、枕草子が出来た。

この中の品の物語は、そうした女性達の生き方、苦悩に満ちた姿を反映したものであった。

中の品の物語の女性達は、概して個性的であり、積極的であり自己の行動に責任を持ち、主体的に生きようとし、この時代の新しい生方をした人々である。

時代はかわってもこの姿＝生き方こそ、現在にも通ずるし、一千年前に書かれた源氏物語から学ばなければならない最も大事な点ではないだろうか。カルチャーセンター等に参加すると、聴講生のほとんどが中高年の女性であって、私など場違いのところに来たのではないかと思うことがよくある。若い女性達がもっと源氏物語を読まなければならない。そんなことを強く感じながら三帖を読み終えた。

（八）おわりに

夕顔の人生は、不幸だったのか。一九才という若さで亡くなったのだから、常識的には不幸なことに違いない。しかし、渡辺淳一氏の本を読んでいると夕顔は、当代きっての二人の貴皇子（光源氏と頭中将）に魅力を感じさせ、愛されたのだから見方によってはこの上ない幸せであったのではないかとしている。本人が生きていたらどのように証言したであろうか。上流社会の女性が幸せで中・下流の女性が不幸だとは一概に言えない。紫の上は幸せだったのか。晩年の回顧（述懐）を読むとそうとばかりとは思えない。同じように光源氏はどうであったのか。又、我々の人生はどうなのか。出世したことがイコール幸せなことなのか。

一生県命生きてきた中の品の女達こそ幸せな生き方をしてきたのではないか。困難、苦悩があるから生きる価値があるとも言えるであろう。

「苦悩を乗りこえて歓喜にいたれ」（ベートヴェン）

物語を更につき進めて読んでいかなければならない問題である。幸とか不幸とかは相対的問題、価値観の問題である。源氏物語は、そういうことを考えさせ教えてくれている。

作者は決して結論を出さないで。読者に判断をゆだねている。問題を提起して考えさせ、後に少しづつ回答を示している。優れた物語を読むということは、そういうことかもしれず、なか〳〵難しいことである。人生は奥深いのである。

又、源氏物語は、救済の物語であるとよく言われている。苦悩に対し必ず救済がセットされていることは、林望先生の「私抄」で最近、教えられたことである。今後この視点をも十分頭に入れて物語を読み、書いていきたい。

（参考）和歌

		帚木	空蝉	夕顔	合計
	全体	14	2	19	35
	うち光源氏	3	1	11	15
	うち空蝉	2	1	2	5
	うち夕顔	2	0	4	6
歌贈答	空蝉と	1組	0	2	3
	夕顔と	0	0	4	4

次回は、本流の若紫、支流の末摘花、そしてまた本流にもどって紅葉の賀、花宴、葵の各巻を、次々回は、本流の賢木、花散里、須磨、明石の各巻を見て青年時代を終えたい。

これらの巻々では、この帚木三帖で問題提起されたこと、種がまかれたこと等が連続性と継続性とをもって記述されていくことになろう。源氏物語は、大河の如くよ〳〵大きく太く流れていくこととなる。そして、激動の中年期（澪標の巻以降）を迎えることとなる。

（26．7．25）

漢詩

潮騒錄（七十七）

鯨游海

糾彈京兆尹之黑錢

平成二五年臘月

收賄私藏三萬兩
虛言呼噓噓呼汗
何顏相迎五輪客
悔使彼登都政壇

押韻・汗　壇

〈京兆尹の黒き銭を糾弾す〉

賄を収め私に蔵したる　三万両
虚言が嘘を呼び　嘘が汗を呼ぶ
何の顔あって　五輪の客を相迎へんや
悔ゆらくは彼をして　都の政壇に登らしめしを

〔注　解〕

糾弾＝罪や悪を調べ糺して非難する。
京兆尹＝首都の長官。都知事。京は広大な、兆は人が多い。尹は長官。首領。黒銭＝賄賂（現代中国の俗語）。
收＝収の正字。賄＝賄賂。三万両は五千萬の詩的表現。
噓＝うそぶく。本来この字に虚言の意味はないが、敢えて用いリフレイン効果を狙った（うその意は和語のみ）。
壇＝ここは都庁の政壇。都政の表舞台。

〔口語訳〕

賄賂を受け取り私かに蔵した三万両。
（都議会で追求され、質問に答えて）嘘をつき追求され糊途する為また嘘をついた。嘘を取りつくろう為には嘘を重ねるしかなかったのだ。その為に汗が滝の如く流れ落ちた。
私たち都民はどんな顔をして五輪の客を迎えればいいのか。彼らに合せる顔がない。
然しそんな男を都知事に選んだ自分自身が悔やまれる。

☆嘘つきは遠慮されたし立候補
人騙す人見分けつかねば

世界文化遺産・和食

平成二六年一月

三蔬一汁不饒材
非必珍肴食指催
四季旬魚初物菜
紅梅白飯割烹魁

押韻・材催魁

〈世界文化遺産・和食〉

三蔬一汁　饒きざる材
必ずしも珍肴に非ざるも　食指催さる
四季の旬魚と　初ものの菜と
紅梅と白飯とは　割烹の魁なり

〔注　解〕

三蔬＝三皿の蔬菜。蔬菜＝野菜。ここはおかずのこと。
一汁＝一杯の味曽汁。「一汁三菜(蔬)」は和食の基本型。
起句「饒きざる材」とは味曽汁等質素で饒きない食材。
食指＝ご馳走を得る前の知らせ、暗示（左伝・宣公）
転じて「物を欲しがること」。紅梅＝ここでは梅干し。
旬＝魚や野菜の最も味の良い時、食べ頃（和語）。
割烹＝割いたり烹たりすることから「料理」のこと。
魁＝頭。首領。第一番に優れた者。王者。

☆梅干しの紅染む飯は美味かりき
　ときに敵はじ四季の魚菜も

新型萬能細胞虚乎實

平成二六年一月

誰創奇蹟細胞新
自在萬能如鬼神
飜弄千年生物學
和風白衣可憐人

押韻・新神人

〈新型万能細胞は嘘か実か〉

誰が創りしか　奇蹟の細胞の新らしきを
自在にして万能なること　鬼神の如し
千年の生物学を　翻弄したる
和風白衣の　可憐の人

〔注　解〕

理化学研究所の小保方晴子博士が開発したというSTAP細胞は、体細胞を酸性溶液に浸し刺戟を加えて創出したという触れ込みであったが……
細胞＝生命体を構成する最小単位。
鬼神＝超人的な力を持つ神。転句「飜弄云々」＝彼女の論文に対する英ネイチャー誌の反応は「愚弄」だった。
和風白衣＝研究室では祖母からプレゼントされた割烹着を着用していた。なお白衣には無位無官の意が有る。

☆新らしき細胞生まると告げし人
　愚弄したるや生命の神秘

靖國神社

平成二六年一月

戰犯何祠亡國人
聞言逝者總爲神
守京盍祀會津士
況復無辜塗炭民

押韻・人神民

〈靖国神社〉

戦犯何ぞ祀るや　国を亡ぼしたる人なるに
聞くならく逝者は　総て神と為ると
京を守りたるに盍ぞ祀らざるや　会津の士を
況やまた　無辜なるに塗炭の民をや

〔注　解〕

祠＝まつる。祖先の霊を祭る。祀＝まつる。神を祭る。
逝者＝死者（逝去＝死ぬことの敬語）。
況＝まして（副）。盍＝何不（再読語）何ぞ…せざるや。

〔口語訳〕

戦犯を何故祠るのか。国を亡ぼした人たちなのに……。
仄聞する所によれば「死者は総て神と為るから」だと。
では何故祀らないのか。京を守護した会津の士たちを、
ましてや罪もないのに塗炭の苦しみを受けた民を。

☆無辜の民白虎隊士は祀られず
　戰犯と汚吏篤く祠るも

《漢詩の流れ65》 中華民國2・魯迅②

白　嘲

運交華蓋欲何求　運は華蓋に交ふに何をか求めんと欲す
未敢飜身已碰頭　未だ敢へて身を翻さざるに已に頭を碰つ
舊帽遮顏過鬧市　旧帽　顔を遮りて　鬧市に過ぎり
破船載酒泛中流　破船　酒を載せて　中流に泛ぶ
橫眉冷對千夫指　眉を横たへて冷やかに対す　千夫の指
俯首甘爲孺子牛　首を俯けて甘んじて為る　孺子の牛
躲進小樓成一統　小楼に躲れ進みて　一統を為し
管他冬夏與春秋　他の冬夏と春秋とに管せんや

碰つ＝石で打つ。鬧市＝さわがしい巷。
頸聯の解釈＝眉を動かすことなく千人の男の指弾に対峙するが、家では頭を垂れて子供を背中に乗せる牛になることで満足している。孺子の牛となる＝子供の馬になることと同義。

毛沢東がこの詩を評して曰く「千夫とは敵を指す。我々は如何なる凶悪な敵に対しても決して屈服するものではない。孺子とはプロレタリア階級と人民大衆を指す」

贈沈松泉

文章如土欲何之　文章は土の如し何くに之かんと欲す
翹首東雲惹夢思　首を東雲に翹ぐれば夢思惹かる
所恨芸林寥落甚　恨む所は芸林の寥落甚だしきを
春蘭秋菊不同時　春蘭と秋菊は　時を同じくせず

一九三二年蔣介石政府から逮捕令が出た時友に送った。

人類の仲間（六）

鈴木守

第七節　仲間たちの横顔（二）

前号で猿人たちの横顔を紹介した。人類は猿人の時代を経て、現生人類を含むホモ属へ進化したことは衆知のことである。ホモ属は付表に示すように、ルドルフェンシス、ハビリス、エルガステル、エレクトス、アンテセソール及びサピエンスの6種が知られ、サピエンス種はハイデルベルゲンシス、ネアンデルタレンシス、イダルツ及びサピエンスの4亜種に細分される。

今回はサピエンス種を除くホモ属5種を取り上げるが、それに先駆けて〝生活環境と進化〟をテーマに、二五〇万年前前後の人類について触れておく。

付表　ホモ属の種と生息年代、並びに発見年と発見場所

種　類　名	生息年代(万年前)	発見年	発見場所
ホモ・ルドルフェンシス	250～150	1991	ケニア
ホモ・ハビリス	200～150	1960	タンザニア
ホモ・エルガステル	200～100	1971	ケニア
ホモ・エレクタス	115～12？	1891	ジャワ
ホモ・アンテセソール	78	1997	スペイン
ホモ・サピエンス・ハイデルベルゲンシス	100～20？	1907	ドイツ
ホモ・サピエンス・ネアンデルタレンシス	30～3頃	1856	ドイツ
ホモ・サピエンス・イダルツ	16～15	2003	エチオピア
ホモ・サピエンス・サピエンス	20～現在	1868	フランス

一．生活環境と進化

厳しい環境は生物の進化を促す。

今から三百万～二百万年前の時代は、今風に云えば〝異常気象の時代〟であった。地球規模で寒冷化が進み、北半球には氷河が出現し始めた。アフリカでは乾燥性気候が進展し、猿人たちの生活環境は厳しさを増した。

例えば、古人類化石出土遺跡の土壌分析結果をみると、東アフリカでは二五〇万年前頃を境にして、森林的環境から草原的環境へ推移していることが示された。それとは別に、東アフリカの動物化石調査結果においても、羚羊類の構成が森林性から草原性のものに変わっていた。したがって、二五〇万年前頃の東アフリカ住民の食環境は、森林由来のものから草原性食物への変遷を余儀なくされていたと類推される。

この当時の東アフリカ在住者を具体的に当て嵌めると、三百万年前頃には、華奢型のアファール猿人が生活しており、彼らは二五〇万年前頃までに姿を消した。アファール猿人に変わって、頑丈型のエチオピクスとボイセイ、華奢型のガルヒ、並びにホモ属のルドルフェンシスが二七〇万～二五〇万年前、続いて二〇〇万年前頃にはホモ・ハビリスとホモ・エルガステルが出没するようになった。

斯様に二五〇万年前前後には、自然現象の一環として人類種の消長が認められたので、人類種的な消長の歴史を、食生活と形質の変遷という立場で考察すると、アファール猿人たちは、森林性食物入手の道が細くなったため、その不足を補うため、結果的に草原性食物を選んで頑丈型猿人に分化したグループと、肉食によってガルヒ猿人に進化した群に別れた。

要するに、森林由来の食物が入手難に陥ると、アファール猿人たちは、已むなく草原性の固い食物を口にせざるを得なくなり、結果的に咀嚼機能が強化され、更に粗食に絶え得る頑丈な身体を涵養して、厳しい環境を克服可能な形質を培ったのだろう。その結果が頑丈型のエチオピクスとボイセイの誕生となった。これと同様の現象が南アフリカでも生じ、二五〇万年前頃に華奢型のアフリカヌスが消えて頑丈型ロブストスの出現を招いた。

一方、アファール猿人の一部がガルヒに分化し、肉食とともに人類初の石器使用を行ったと想定される。アファール猿人の時代にはサルのような鋭い犬歯は退化していたので、彼らの〝肉食〟とは、肉食動物が食べ残した死肉を漁ることであった。猿人たちは退化した犬歯の代わりに、石器を用いて死肉を削ぎ、骨を割って骨髄を食したのである。

ガルヒ猿人、乃至はガルヒ類縁の猿人が石器を使って肉食を続けているうちに、脳が拡大して二五〇万年前頃にホモ属へ進化したと想定される。即ち、石器を使って

肉を削ぐ行為は脳組織を刺激して脳容積拡張に寄与し、脳の活動は高エネルギー消費の運動であり、脳活動に必要なエネルギーは肉食によって賄われた。云わば、石器使用、肉食、脳運動の三点がセットになって、人類の進化に貢献したものと考えられる。

斯くして、二五〇万年前前後の人類は、厳しい環境変化に対応して、一つは粗食耐乏型の頑丈型猿人の道を歩き、他は脳容量を拡大してホモ属化する手段を選び、サバイバル対策とした。この二つの進化過程を比較すると、前者は一二〇万年前頃までに姿を消したのに対して、肉食の後者の場合は、ホモ属化して新たな種、亜種に変異しながら現代化の道を歩き続けて来たのである。

進化の過程とは別に、進化停滞の例を挙げる。〇八年に南アフリカで発見されたセディパは、一九〇万年前頃、頑丈型猿人と初期ホモ属が共存する時代に、進化の流れから外れて、最後の華奢型猿人として生存していた。彼らの下半身はホモ属の特徴を示していたが、木登りに便利な長い腕は猿人の特徴を呈していた。また、セディパとは〝泉〟の意である。したがって、セディパは豊かな森林を棲み家とし、平穏な生活をしていたため、進化の洗礼を受けることなく過ごしてきたのであろう。将に、厳しい環境が進化を促進するのに対して、「ぬるま湯の生活は進化の停滞を招く」好例のように思われる。

二、早期ホモ属の仲間

前項で述べたように、三百万年前頃は華奢型猿人の時代であり、気象条件は乾燥型に傾き始め、東アフリカの雨林地帯の疎林化が進み、猿人たちの食生活は森林性のものから草原性のものに移行せざるを得なかった。その結果、草原性食物を主食とする一部の華奢型猿人から頑丈型猿人に分化し、他の一群は人類初の石器を作り、且、肉食を開始し、脳容積を拡張させてホモ属（ヒト属とも云う）へ進化した。

初期ホモ属の人類として、ハビリス、ルドルフェンシス、並びにエルガステルが知られ、現在の人類学では脳容量七〇〇ml以上をホモ属の条件としているが、当時の人類の脳容量は、華奢型が三八〇～五〇〇ml、頑丈型が四一〇～五五〇mlであり、初期ホモ属では、ハビリスが五〇〇～八〇〇ml、ルドルフェンシス六〇〇～八〇〇ml、及びエルガステル七五〇～一二〇〇mlであった。

① ホモ属の発祥：　ホモ属発生説として、「ケニアントロプス猿人がルドルフ原人に進化」、或いは「アファール猿人からハビリスへ進化」とか、九九年にガルヒ猿人が発見されると。「アファール猿人がガルヒを介してハビリスへ」などがあったが、ホモ属発祥の定説は未だない。

一方、現在知られているホモ属の古い化石人骨は、エチオピア、オモ渓谷出土の二五〇万年前の歯、次いで二四〇万年前頃のケニア、バリンゴ湖畔の側頭骨片、マラウィ湖畔ウラハの下顎骨、並びに二三三万年前のエチオピア、ハダール出土の上顎骨である。このうち、種が特定されている骨片は、マラウィ湖畔の下顎骨だけであり、この骨片の主はルドルフ人である。したがって、現在知られている最古のホモ属は、ルドルフ人と云うことになる。それに加えて「ルドルフ人出土の地層は、ハビリスの場合よりも下層のことが多い」と述べている資料もあるので、ルドルフ人がハビリスに先駆けて発生したように窺える。

ところが、「形態学的立場から一定の系統論で推理すると、ヒトの根幹になりそうな原始的形態を有するのはハビリスであるから、ルドルフ人とエルガステルは、ハビリスから派生したと考えられる」と云う見解にも配慮すべきであろう。

② ハビリスとルドルフェンシス：　ホモ属人類発見の歴史を辿ると、六〇年にケニアのオルドバイ峡谷で、一八〇万年前頃の脳容量が六八〇mlの頭蓋が発掘され、六四年に至ってホモ属のハビリス種とされた。ハビリスは〝器用な〟を意味している。

その後、六九年にツルカナ湖北部、エチオピアのオモ川渓谷、次いで七一年にケニア、ツルカナ湖西岸のクービ・フォラ遺跡で数多くの化石人骨が出土した。これらの人骨をホモ属と猿人に類別する目安としてアフリカヌスの脳容積（四〇〇～五〇〇ml）を採用し、五〇〇ml以上の標本をハビリスとした。ところが、クービ・フォラの発掘が進むにつれて、ハビリスに大型と小型の2系統の存在が明確になり、両者を種単位の別系とし、大型種にルドルフェンシスの名を与え、小型種ハビリスと類別することにした。小型種ハビリスは身長一メートル、体重四〇キロ、大型のルドルフ人は一・五メートル、四〇～八〇キロであった。

ルドルフ人の骨格をみると、顔面は平面的で大きな鼻や顎は猿人的であり、頬骨は頑丈型猿人に似通っており、ハビリスより古代的であった。だが、ルドルフ人の脳容量（六〇〇～八〇〇ml）はハビリスより大で、大腿骨から推定される大柄な骨格は現代人的なプロポーションを示し、ハビリスより進歩的な側面も認められた。

蛇足ながら、ルドルフ人が発見された七〇年頃は、ツルカナ湖をルドルフ湖と称していたので、「ルドルフ湖畔のヒト、ホモ・ルドルフェンシス」が学名とされたのである。ホモ属の初頭を飾ったルドルフ人、ハビリスともに、頑丈型猿人ボイセイが健在だった、一五〇万年前頃には姿を消していた。

③　エレクトスとエルガステル：　一八九二年にウジェーヌ・デュボアが発見した、一般的に〝ジャワ原人〟と呼ばれている「直立したサル様のヒト、ピテカントロプス・エレクトス」が原人の第一号であり、次いで、一九二七年に中国周口店で出土した「北京のシナ人、シナントロプス・ペキネンシス」、通称〝北京原人〟が姿を現わした。ジャワ原人、北京原人ともにホモ属の同種人類と認定されて、直立するヒト「ホモ・エレクトス（直立原人）」と命名された。

七一年に至ると、「ケニアのクービ・フォラ出土の一九〇万年前前後の標本の一つは、ハビリスやルドルフ人とは異なり、中国周口店の北京原人に類似している」と報告され、〝アフリカ原人〟が登場したクービ・フォラには、猿人ボイセイとホモ属3種が同時同所に共存した可能性も窺えた。

その後もアフリカ原人化石の発掘が続き、八四年の国際会議でアフリカの初期原人（一九〇～一五〇万前）とアジアの後期原人（一〇〇～五〇万前）の同種性が論議され、アジア種はアフリカ種の遺伝的環境から隔離され、移住地の環境に適応した形質を確保した異種と認定され、エレクトスの名をアジア種に残し、アフリカ種を「石器製作者の意味を込めて、〝働くヒト、ホモ・エルガステル〟」と呼ぶようになった。

エルガステルのスター、約一五〇万年前のツルカナ・ボーイの頭蓋骨片がツルカナ湖東岸ナリオコトメで八四年に発見され、慎重に掘索が進められ、八九年に少年の全身骨格が出土した。この少年の遺体をナリオコトメ・ボーイとも愛称している。

少年の遺体は、手指と足指に損壊が見られるが、全身骨格の殆どが発掘され、ネアンデルタール人や現代型サピエンスのような新しい化石人骨は別として、古い遺体で一個体分の全身骨格が発掘された例は、このボーイと七四年に出土したアファール猿人、ルーシーの2例だけであり、全身骨格の回収率は、ルーシーの四〇％に対してボーイは六六％であった。

斯様に欠損の少ないボーイの全身骨格が出土したことによって、様々な情報が得られ、原人が猿人とは比較にならない程、進歩的であることが証明された。例えば、初期ホモ属は体型、大きさ、雌雄差などで現代的であり、しかも、熱帯性乾燥気候に適した体型を示し、現代的な無毛性と発汗による体温調節は、初期原人の時代から具備していたと推察される。

脳容量はハビリスより大で、骨盤の形から想定される産道は狭く、現代人の如く、比較的未熟な新生児を産み、幼形進化の様子を暗示していた。

次に、文化的進展について触れると、史上最高の発見の一つ、火の使用があった。火使用最初の形跡は、一四〇万年前頃のケニア・チェソワンジャ遺跡と一五〇～一

〇〇万年前の南アフリカ・スウォートクランスであり、エルガステルの時代のことである。それより若干前の一五〇万年前頃に、彼らはオルドバイ型の剥片石器を進歩させたアシュール式の両面石器を開発した。

④　出アフリカ：　初期人類の一大イベントとして出アフリカが行われた。第二次出アフリカについて、本誌一二八号と一三〇号で既に触れたが、今回は第一次出アフリカについて述べる。

一二〇～一〇〇万年前頃になると、一部のエルガステルが火種と両面石器を携えて、アフリカを北上し、ユーラシア大陸へ拡散した。彼らは移住地の環境に適合した形質を得て、エレクトスに進化した。

東アジアに進出したエレクトスは、一一五～一一〇万年前に、中国藍田に到達した。エレクトスの中でも有名なジャワ原人と北京原人は夫々、一〇〇～七〇万年前にはジャワのトリニール、並びに四六～二三万年前に北京郊外の周口店を生活の場にした。周口店には北京原人が火を使用した跡が残されている。藍田人の形質は、どちらかと云えば、北京原人よりもジャワ原人に近いとされている。北京より東、日本への侵出を示す確かな証拠は未見である。

他方、ヨーロッパへ移住したグループは、七〇万年前頃、イタリアのチェルプラーノとイゼルニア、並びに四〇万年前頃、ニース近郊のテラ・アマータなどに足跡を残していた。イゼルニアには赤色オーカーて着色した跡があり、テラ・アマータには、化粧用と思われる赤土の塊が残されていた。また、二〇万年前頃のイギリス・スウォンズクーム出土のアシュール式石斧には、中央に二枚貝の化石が配され、左右対称の構図は美意識及至は絵心の萌芽を感じさせた。

斯様に、西進したエレクトスは、七〇～二〇万年前頃までのヨーロッパ各地に足跡を残していた。この足跡は、前出第二次出アフリカの考察を思い出させる。即ち、第二次出アフリカを果たし、ヨーロッパに拡散した現代型サピエンスは、東へ向かったクループに比べて、距離的に近いにも拘らず、目的地到達に長い時間を掛けていた。第一次出アフリカを敢行したエレクトスたちの西進グループもまた、東漸組より長い時間を掛けて目的地へ到達した。欧州移住組のこの所要時間は、前出の考察で主張したように、「ビタミンD欠乏に基づく佝僂病の難儀に遭遇し、時間をかけて皮膚の退色に努め、白人化した後に、目的地へ移住した」のではなかろうか。したがって、エレクトスの社会でも現代人的に、地域環境に合わせて、アフリカの黒、ヨーロッパの白、アジアの黄色という人種関係が成立していたに違いない。

⑤　ホモ・アンテセソール：　九七年にスペイン・ア

タプリカ山中のグラン・ドリナ洞窟で石器と共に人類化石が発掘された。この化石はエレクトスがヨーロッパへ進出する以前の七八万年前の人骨で、ヨーロッパ最古の人骨と騒がれた。だが、エレクトスとは異種とされ、ホモ・アンテセソールの名を与えられた。アンテセソールの出自はアフリカにてエルガステルより派生したとされている。

いずれにせよ、アンテセソールに関する資料はグラン・ドリナにしか見られないにも拘らず、発見者たちは大胆にも次号で述べるハイデルベルゲンシスと現代型サピエンスは、この種から分岐したと主張している。

そのことはともあれ、七八万年前頃はヨーロッパはギュンツ氷期に相当し、ジブラルタル海峡はアフリカとヨーロッパを繋ぐ地峡だった可能性が高く、アンテセソールたちはジブラルタル地峡経由で、スペインの地に拡散したのではなかろうか？

三、偽造された仲間

ＳＴＡＰ細胞の真偽の程が喧しい。この細胞の真偽を論じるつもりはないが、残念乍ら眉を潜めたくなる科学論文もある。考古学の領域でも、旧石器時代の陸前高森遺跡に偽の石器が登場したことがあった。この項では、大勢の学会関係者を騙した偽造化石人骨の実話を紹介する。

時は一九〇八年（明治四一年）、所はロンドンの南五〇kmのサセックス州ピルトダウン村の砂利採取場。ここでアマチュア古生物学者として知られていたチャールズ・ドーソンが、一個の頭骨を発見した。ドーソンは直ちに大英博物館に化石頭骨を持ち込んだ。大英博物館の検討が済み、一二年夏、地学部門長ウッドワードがドーソンと一緒にピルトダウン遺跡へ赴き、人類の下顎骨と脳頭骨の破片を古い時代の獣骨と共に発掘した。

翌一三年には、下顎骨に噛み合う犬歯と鼻骨を掘り出した。一五年には隣接地から、前頭骨、後頭骨破片、大臼歯などを発見した。出土した数片の頭骨と下顎骨から復元したピルトダウン人の頭骨は現代型サピエンスの条件を満たし、大きく丸い脳頭蓋と比較的小さい顎を持つように見えた。しかも、同時に出土した埋蔵品から、この人骨の年代は約五〇万年前に相当するという結論が得られ、この化石人骨にエオアントロプス・ドーソニ（ドーソンの原始人）の名を与えられた。

当時二〇世紀初期の人類学者たちは、「初期人類は脳から進化した」と信じていたので、大きくて丸い脳頭蓋を発見したドーソンの業績は賞賛の声に包まれた。ところが、ドーソンはピルトダウン人が偽りの化石人骨とは知らないまま、一六年に他界した。将に知らぬが仏になってしまった。

時代が下がり、北京原人や南アフリカのアウストラロピテクス（タウングス・ボーイ）など化石人類の情報が得られるようになるにつれ、ピルトダウン人骨の化けの皮が剝がされて来たが、この人骨が真っ赤な偽者とされたのは、発見後四〇年以上も経た五三年（昭和二八年）のことである。ピルトタウン人の頭骨の実態は、脳頭蓋は約五〇万年前の現代型サピエンスの化石人骨であり、下顎骨は現代のオランウータンの骨であった。

この真相が明らかになると、仕掛け人探しが始まった。五〇万年前の化石人骨を承知で入手でき、それにオランウータンの下顎骨を上手く細工して、専門家を騙し通した知識と技術は、素人の仕事とは考え難く、人類学に精通した人物に嫌疑がかけられた。その仕掛け人候補に、シャーロック・ホームズの作者コナン・ドイルの名も挙がったが、一百年以上経った現在でも、仕掛け人は見つかっていない。

（次号に続く）

殉教(四)

加賀前田家客将として

鍋屋次郎

前田利家の「当家に客将として来てくれないか」の言葉に、右近は一瞬感謝で何も言えなかった。ただ、無言で利家に頭を下げ、暫くして

「前田様、有り難うございます」

とだけ言うのが精一杯であった。やや間をおいて

「高山殿、三万石の知行地は能登の七尾あたりに考えるが、高山殿は何か希望されることはおありか。あれば遠慮なく申されよ」

右近は利家を見つめて

「禄高、知行地は全て前田様のお心のままにお受けいたします。勝手ながらお願い事としましては、南蛮寺を一寺建立させていただきたいことのみでございます」

「そのことは予も考えている。高山殿がキリシタンとして過ごすのには必要であろう。加賀で落ち着いてから、建立されるがよかろう。考えがまとまったら遠慮なく申されよ」

右近がお礼を言う前に利家は続けて

「ところで高山殿は心の内が強いお人と、利長と感嘆していた。関白殿下から追放になって、とりあえず小西殿の領内に匿われていたのであるが、そのときは、右近殿の将来の道筋は全く決まっていない。小西殿はご自分の関白殿下への立場として自分の領内でキリシタンとしての活動をしてくれるな、と口では言はないまでも部下に監視させている。幽閉とは言はないが、自由は閉ざされた状態であったと思うが。そのような状態の中から自ら歩き出された。その強さはどこから来るのか」

「決して強くはありません。前田様ですから、また今後前田様の下でキリシタンとしての信仰生活も歩ませていただけることになりましたので、正直に申し上げます。博多の能古島から小豆島まで行く船中の自分の気持ちは、とても口では言い表せない苦しさでした。高槻や明石のキリシタン領民や家臣が、仏教徒や反キリシタンの人たちから迫害を受けていないか、その人たちが、右近とその家族のみが、小西殿の領内で安穏に過ごしていると思っていないか、と思うと張り裂けるような苦しみでした。小豆島にいる間に、この孤独からどのように歩いていったら良いのか、神に祈り続けました。そして今の関白様の世では、前田様におすがりするしかないと勝手に決めて、今日を迎えた次第です。本当に有難うございます」

「高山殿の苦しみは、よく分かる。今年の五月頃であったか、高山殿が篠田伊織を此処に寄越したとき、高山殿の意向は察していた。そこで大阪に出向いたとき、関白殿下の了承を得たことは先程話した通りだ」

一呼吸おいてから

「高山殿、これからの天下の形勢をどのようにお考えか」

「難しいご質問ですね」

右近はしばし考えてから

「前田様のご質問は、関白殿下がお亡くなりになられた後のことをどう考えるか、というご質問かと思いますが」

「はっきり言えばその通り」

「どこまでも秀頼様を後継者として盛り立てて行く大名と、今度は自分が天下人になろうとする大名の派閥争いになるでしょう」

「はっきり言えば徳川か」

「関白殿下がお亡くなりになられた後の豊臣家は、家臣集団で柱になる大名がいるのかいないのか分かりません。豊臣家の子飼いの大名と言えば加藤清正、福島正則あたりですが、戦は強いが衆望を集め得る人物ではないでしょう」

「そうなると、考えておかなければならないのは、徳川の動向一つにかかってくると思わなければならないか。この話はここだけとしてこれまでにしよう」

「ところで、屋敷は城から遠くないところに用意しておくので、一旦宇土へ戻って、いつごろこちらへ来られるか」

「はい。小西殿にもキチンとお礼を申し上げて、父と私ども夫妻と子ども三人、六人で参りたいと思います。篠田伊織ほか従者と内向き女中などもいますので、全部で十人程度かと思います。時期は寒くならないうちと考えますが今年十月、遅くても十一月中旬までには、と思っています」

「相分かった。高山殿ご一家の屋敷、従者用の屋敷、その他生活に必要なものは全て整えさせておくから、体一つで参るがよい。十月に来られても不自由ないようにしておこう」

天正十六年（一五八八）十一月二十日、右近一家は遠路の旅を終えて漸く金沢についた。用意された家は金沢城からあまり遠くない武家屋敷が並ぶ中で、先に来ていた篠田伊織と女中により、一家を迎える準備はできていた。

右近と父ダリヨは正装に着替えて登城した。幸い利家・利長に挨拶ができ、前田家一門衆や家老などとの顔合わせ日程が決まり次第再度登城する指示を得て下城した。

右近はその後、前田家一門衆や家老一同と挨拶を交わした後、日を改めて筆頭家老横山長知を訪ね、領内事情、各家老の職務分担などを教えて貰った。その折、拝借している屋敷内に茶室を建てることの了解を得た。

右近は金沢にある石工を回り、茶室の庭に置く蹲二個と石灯籠を注文した。侘び茶の茶室と露地にこだわっていた。

茶室は奥座敷につなげ、茶室の躙り口に面した露地には小さな飛び石を配し蹲を置き、露地の続きとして屋敷の奥庭とは趣を変えた坪庭的な庭を作り、そこにあと一個の蹲と石灯籠を置いて趣を出すことを考えていた。

茶室は深三畳大目とし、その中に床、炉、点前座を設

「有り難うございます」

そこへ利長が入って来た。右近が平伏して挨拶すると利長は

「昨夜、父から伺っています。よろしくお願いします。これからの前田家も、関白様の後の時勢を良く眺めて、どのように今のうちから対処していかなければを見通していかなければなりません。高山殿は蒲生氏郷殿、細川忠興殿、その他茶頭の千利休師などとご昵懇でおられるので、それら皆さんのお考えなども聞かれることもあろうかと思います。前田家の一員として宜しくお願いします」

と丁重な挨拶があり、右近は前田父子の一体感を強く感じた。続けて利家は

「加賀へ落ち着いた段階で、家老その他に引き合わせるので、何も心配しないで来るように」

との言葉に、右近は再び平伏してその場を辞去した。

十月十六日、右近は肥後宇土城で小西行長に今までのことのお礼と加賀へ行くことの挨拶をし、別れを告げた。小西行長は右近の思いに対して十分手を差し伸べることができなかったことの申し訳なさと、反対に、右近が自領から去ることでの一種の安堵感を感じていたが、右近の両手を握りしめ別れを惜しんだ。

右近は小豆島で茶室を設けて、自ら点てた茶を喫し、その所作の中で自分の心を見つめるとともに、キリシタンの右近にとって茶室は一人での祈りの場所でもあり、瞑想の場所でもあった。また、自分の心を落ち着かせる場所でもあった。

小豆島を出てから早や半年、右近はそのような場所がないのが、心に空洞ができたように感じ満たされなかった。小豆島から加賀へ。加賀へ来て城内での対人関係においても冷静さを失わないで、自分なりに「謙譲」でいられるように、新しい人間関係のなかでの自分を律していたが、茶道を通しての心の落ち着きと、一人で静かに祈りと瞑想をする場所がないのが、物足りないよりも右近にとっては苦痛であった。

け、心を通い合わせた一期一会の思いを深めることができるように、少人数での茶会を考えていた。客座の上は半分だけ蒲天井を張ることとし、横山家老宅を訪ねたとき、発注する大工も教えて貰っていた。大工に設計上の考えを言うと

「金沢ではこのようなお茶室は作ったことはありません」

と言ってから

「名誉なことでもありますので、殿様にお伺いしながらやらせていただきます」

といって帰っていった。

右近には、侘び茶で千利休師から教えられている「自分の心に何も飾ってはいけない。ありのままの自分を見つめる」ことから与えられるものと、キリシタンとしての祈りや、心の中での罪の告白によって与えられるものは、右近の中では同質のものであった。

また、侘び茶の世界での「一期一会」や「不均斉」は、キリシタンの教えである「慈悲の所作」を実行することや「十戒」の教えと通じている。従って、右近にとっては、侘び茶の世界とキリシタンの世界が異なるものではなく、自分の心の形成面では同じものであった。

天正一七年（一五八九年）十二月、金沢城内で小田原征討の軍議が開かれた。前田家に対する関白秀吉の小田原征討への従軍指示を受けての軍議である。右近は戦闘人員を全く持っていなかったが、利家から

「利長が二千の軍勢を引き連れて行くので、その内八百の軍勢の指揮をとるように。更に進むも退くも利長と打ち合わせるように」

との指示があり、更に

「高山殿の軍勢は高山殿の旗印として、十字架を遠慮なく使うように」

とも言われた。これは小田原征討の戦で、天下に右近の動きを知らしめる配慮であることを知った右近は

「有難き幸せ。必ずやご配慮に報いることができるよう

に戦います」
と答えた。

出陣は雪解けを待って三月末とすることとし、しっかり準備することの申し合わせで軍議は終わった。

天正十八年（一五九〇）四月、前田勢は小田原征討に出陣し、四月には上野松井田城を、六月には武蔵鉢形城と、八王子城を落とした後、一万八千の前田勢が小田原城を囲んだ。

右近のいるところには十字架の旗指物が翻り、華々しい軍功を立て、利家は秀吉にも話し、秀吉もほめたが、利家の期待する秀吉への右近目通りは果たせなかった。

しかし、右近は小田原滞陣中に蒲生氏郷を訪ね、また細川忠興や黒田官兵衛等とも会い、旧交を温めていた。

天正十八年（一五九〇）七月には小田原城が開城し、右近たちも八月には加賀に戻った。

天正一八年（一五九〇）七月二十一日、天正少年使節団が、天正十年（一五八二）二月二十日長崎港を出港以来八年五カ月ぶりに無事長崎港に戻ってきた。

ヴァリニャーノ神父がゴアで一行を迎え、日本ではバテレン追放令が出ている関係上、ヴァリニャーノ神父はバテレンではなくインド副王として天正少年使節団と共に長崎に戻ってきた。

早速上洛して秀吉への謁見を願い出たが、翌天正十九年（一五九一）三月三日、聚楽第で会うことができ、少年使節たちは持ち帰った西洋楽器を奏で、秀吉は見たことも聞いたこともない西洋楽器の演奏を聴き、更に、大きな海図で西洋諸国の場所の説明を受けて大変ご機嫌で、オルガンチーノ神父の京都滞在も許した。その席には在京の諸侯は招かれ、前田利長も陪席していた。

オルガンチーノ神父は右近の助言により、陪席した諸大名に陪席のお礼訪問をした結果、都でのキリシタンへの風向きは変わってきた。

オルガンチーノ神父は陪席諸大名への挨拶回りが終わった翌日、高山右近と父ダリヨを自分の宿舎に呼び、天正少年使節四人を自分の左右に座らせた神父は、おもむろに文箱から書状を取出し

「高山殿、これは少年使節が戴冠式に列席させていただいたローマ教皇シスト五世からの高山殿宛ての感状です。ゴアのイエズス会宛てに、日本の高山殿にお届けするようにと送られてきていたものです。少年使節一行は、東洋宣教の成功事例としてローマ教皇はじめスペイン・ポルトガルの両王からも大変歓待されました。一五八九

年（天正一七年）、その歓待の喜びが消えないうちに、バテレン追放と高山殿の追放の知らせがイエズス会から教皇にもたらされ、特に高山殿が信仰と大名のどちらを選択するかというときに、迷うことなく信仰を選択され、大名の地位も、領土も、俸禄も全てを一瞬のうちに失ったにもかかわらず、誇りと信念を失うことなく信仰を固く守っておられることは、全世界のカトリック信徒の中で称賛に値するところである、と教皇自らお褒めになられ、ここに教皇の感状を、教皇シスト五世に代わってお渡しする。お受け下さい」

驚いた右近はオルガンチーノ神父が差し出す書状と記念品を恭しくいただいた。

感状はポルトガル語で次のように書かれていた。

『愛子なる貴侯ユスト右近殿あて
（教皇シスト五世）

わが愛子なる卿に、予の挨拶と教皇祝福を贈る。

敬虔なるキリスト者は潔く顕職を棄て、勇敢にこの世の富を蔑み、苦しみを主の賜物と甘受し、もって成聖の道を全うするが常なり。卿はいみじくもその模範を示し、追放の刑をも厭わず、全ての富を失いて、しかも毅然と耐え忍べり。更に卿は、義のためにこそ忍ぶ苦難と困窮のうちにカトリック者の信・望・愛の徳が完成せられ、かつ、キリスト教が信者の死の軽視と殉職によりて、いよいよ栄え、益々弘められるべきことの範を、身を賭して示せり。

主の御栄のため、かつは卿とその国民の救いのため、忠誠にして卓越せるキリスト者は天国の報いを予期せるものたるを、身をもって立証し世の模範となせり、予は特にこれを喜ぶものなり。しかして予は、この故に卿に対し、熱烈な讃辞を呈し、教皇祝福を贈らんとす。

卿は主の御言葉のごとく、正義のため迫害を忍べるものが、天国にて至福を与えらるべきことを知れり。また卿はキリストに倣いて、自ら十字架を担える者は茨の冠を被せられたる頭の下で、肢体も共に苦しまざるを得ぬがごとく、主の御後に従うべきことを熟知しおれり。予は、卿が今までのごとく、将来にもこの確信を止め置かれんことを期待するものなり。

予は卿に勧告せず、そは、卿がすでに充ち満ちてる熱意に燃え居るが故なり。予がここに言わんとするは、卿に対するよりは、むしろ他の人々のためなり。卿がすでにこれを知悉し居るは卿の生活がこれを実証し居れり。すなわち、天国にて至福を与えらるべきことを知れり。また卿はキリストに倣いて、自ら十字架を担える者は茨の冠を被せられたる頭の下で、肢体も共に苦しまざるを得ぬがごとく、主の御後に従うべきことを熟知しおれり。予は、卿が今までのごとく、将来にもこの確信を止め置かれんことを期待するものなり。

予は卿に勧告せず、そは、卿がすでに充ち満ちてる熱意に燃え居るが故なり。予がここに言わんとするは、卿に対するよりは、むしろ他の人々のためなり。卿がすでにこれを知悉し居るは卿の生活がこれを実証し居れり。すなわち、天国の富は卿の喪失せる地上の富にはるかに勝れるものにて、卿は確乎たる信念の盾と熱烈なる愛徳の釵とをもって飽くまで天国の富を獲得せらるるに相違なきこと、これなり。

紀元一五九〇年四月二十四日、予の教皇在職第五年
羅馬、聖ペトロ聖堂の傍らにて

漁夫の指輪を捺印してこれを与う。（注①）

右近は読み終わって

「神父様、右近にとって、この感状はあまりにも勿体なく、また、これ以上の名誉はありません。これも神父様始め皆様方のご指導の賜物です。この感状に対する返書は、右近がポルトガル語で書く礼状を、イエズス会を経由して教皇様にお届けいただけますでしょうか」

「高山殿、まだ幾日かはここに留まっていますのでお書きになられたらお持ちください。責任をもってイエズス会経由で教皇様にお届けします」

この一部始終を見ていたダリヨは、感激して涙を拭っている。

右近父子は感謝してオルガンチーノ神父の許を去り、京都の前田屋敷に戻った。

右近は京都の前田屋敷の一室で、教皇にどのような御礼状を書くべきか、また、この感状に値するこれからの生き方はどのようにあるべきか、思いを巡らせているうちに、気が付くと外は白みかけ、明け方の寒さに気が付いた。

ダリヨの部屋の方から物音が聞こえる。やはり寝られなかったのだろうか。右近の部屋の灯りを見てダリヨが入って来た。二人は教皇からの感状の取り扱いについて「これはキリシタン内部ではこれ以上ない最高の名誉であるが、我国のバテレン追放令が出ている状況の中では、このことは高山家だけでとどめ、前田利家父子にも話さないこととする。巷間伝わってゆくことも考え、他のバテレン諸氏にも内密にする」

こととした。

それから三日後に右近は教皇宛ての返書としての礼状をオルガンチーノ神父に渡した。それはポルトガル語で書いていた。

『キリストの名において最も尊敬する教皇様へ

キリストの平安

わたしが少年時代に神聖な洗礼を授けられましたのは、神様の深いお考えによってであります。聖なる福音の真実であり、堅固な教えを頂きましてからは、主なるイエス・キリストに深く感謝しております。わたしを慰めるために巡察師の神父様に託されて教皇様の感状と聖なる贈り物二品を私に与えられました。この様な大きな恵みと名誉を決して忘れません。

教皇様もご存じのとおり、遠く離れた島国の日本国では無知や迷信に包まれており、善悪の判断がつきません。指導者の頭、関白豊臣秀吉の心に悪魔が入り込み、日本におられる神父様への迫害を始めました。聖なる福音を

弘めてはならないということでございます。・・・・神様の見守りによって私たちが待ち望む世を救うときがいつか来ましたら、多くの人を改宗させる門を開くことは間違いありません」（注②）

このように右近は日本にいる神父および修道士たちの困難が将来に豊かに実を結ぶ期待を認めている。手紙の最後には、「教皇様の不肖の子にして、僕である高山ユスト」とある。

注①　日・チースリク著「高山右近史話」（聖母の騎士社）二百九十三～二百九十五頁より引用

注②　バチカンの公文図書から発見された右近の返書の要約である。

右近父子は、これからの金沢生活の中で北國（加賀・越前・能登三カ国を指す）への伝道を最優先で考え実行することを語り合った。

天正七年（一五七九）九月、荒木村重の有明城落城のときに、荒木村重に加担していた高山飛騨守（ダリヨ）は、右近の信長への情状酌量依頼もあり、死を免れ越前北の庄（現福井）の柴田勝家に預けられていた。そのとき、ダリヨは自分の生活の周りの人々にキリスト教を伝え、賛同者も出ていたので、ダリヨは早く越前北の庄へ行きその人たちに会いたかった。

文禄元年（一五九二）四月、文禄の役が始まり、小西行長などが釜山に上陸した。

その少し前、秀吉が「右近の出仕を許す」という話が利家の所にもたらされたので、右近は利家と共に早速上洛したが、秀吉の「名護屋で会う」との沙汰で、都では日通りが許されなかった。

右近は利家に従軍して名護屋に向かい、名護屋で秀吉の日通りが許され、その二日後には利家と共に秀吉の茶会に招かれた。

その後しばらくして、秀吉の母大政所の病状が悪化し、名護屋は前田利家と徳川家康に任せ、都へ戻った。

右近にとっては、追放されている間は秀吉の社会では罪人であり、自由勝手に他の大名等を訪ねることもできなかったが、追放を許された、と言うことは「罪人ではなくなった」ことになり、右近にとっては鳥が鳥籠から空に放たれる自由と同じ価値を持っていた。

また、このことは前田家にとっても、前田家外交に右近の人脈を取り入れることができる大きなメリットがあった。

文禄二年（一五九三）、右近は利家から加賀へ戻ることを許され、秀吉の勘気も解けたことから、今まで罪人の立場で積極的に動けなかったキリスト教の布教を、再び積極的に行うこととし、途中京都でペレス神父を伴って加賀へ入り、右近の知行地である能登まで足を伸ばし、ペレス神父と共に各地で住民にキリスト教のことを伝え、数百人の人たちに洗礼を授けることができた。

右近が加賀へ戻ると、蒲生氏郷が會津から京都に出てきているとの情報が入り、蒲生氏郷のキリスト教信仰が揺らいでいることも不安に思っていたところでもあり、年が改まった文禄三年（一五九四）雪解けを待って右近は都に向かった。

京都の會津屋敷に蒲生氏郷を訪ねた右近は、氏郷が病をおして會津からはるばる都まで出てきたことを知った。

氏郷の

「高山殿、この体では朝鮮までは行くことができない」

「蒲生殿、そんな弱気では駄目だ。全てをデウスにお願いして、元気を取り戻そう」

右近は九州名護屋で秀吉の勘気も解け、茶席にも同席できたことを話すと氏郷は

「高山殿、誠か！」

と病人とは思えない声を上げ、右近の顔を見つめて喜んでくれた。

「良かったなー。良かった」

続けて

「俺は長くないと思うが、ここだけの話、遠からずやってくる関白の次の時代をどう生きるか、前田殿も考えていると思うが高山殿も前田家の一員としてよく考えられよ」

右近は都から遠い會津にいた病中の氏郷の、怜悧な頭脳と神経に驚いた。

しかし、氏郷のキリシタンとしての信仰が弱っていることも見抜き、氏郷を信仰的に励ましてから、近日中の再訪を約して會津屋敷を辞去した。

氏郷の病が重いことを知った秀吉は、天下の名医曲直瀬道三を氏郷の所に派遣し、氏郷の回復を願っていた。

右近は一旦加賀に戻って、翌文禄四年（一五九五）一月、蒲生氏郷の病を心配して雪の中を加賀から都へ向かった。

一月も末、蒲生氏郷を訪ねて信仰的に励ますと、氏郷は己の罪を口にして、彼の口から神父への告解的な発言が聞かれた。右近は氏郷が信仰に戻ったことを悟り、長居することは疲労させるので、その日はその場で彼を信

仰に戻してくれたデウスに感謝の祈りをその場で捧げて帰った。

その後、右近は毎日のように氏郷を見舞い、文禄四年（一五九五）二月七日、右近が枕元に行くと、右近の膝に氏郷の手が伸びてきた。何か言っているが聞き取れない。右近は氏郷の横に行き、氏郷を膝の上に抱き上げ、寒くないようにその上に布団を掛け、氏郷の耳に口を添えてパライソ（注③）の話をすると軽く頷くので

「デウス様がパライソで出迎えてくれるから心配するな。家族のことは全てデウス様が守ってくれる」

というと、周りにいる家族にもはっきり分かるように大きく頷き、やがて右近の腕の中でこと切れた。

注③・・キリシタン用語で「天国」のこと

右近には、何でも話せ、また率直に意見を云ってくれる氏郷を失ったことは大きかったが、それとは別に氏郷が最後に信仰に立ち戻ったことが何よりも嬉しかった。

昨年、秀吉に男子秀頼が生まれ、それまで秀吉の後継者と位置づけられていた秀次が、文禄五年（一五九五）七月、謀反の嫌疑ありとして高野山に追放となり、翌八月、一族妻妾すべて三十九人が三条河原で処刑された。

秀吉のこの狂気の沙汰ともいうべき行動に、内心

「とてもついて行けない」

と思っている大名が少なからずいることを右近は感じていた。

そこに前田利家が大名でただ一人、秀吉から

「常時都にいて、秀頼の傅役（もりやく）になってもらいたい。そなたしかいない。頼みます。加賀へ戻る必要があったら事前に連絡して欲しい」

と頭を下げられて、利家は秀吉の頼みを受けざるを得なかった。これは客観的に見れば、前田家が豊臣一族として飲み込まれたにも等しいことであった。

このことは直ちに大名間に知れ渡り、特に家康に「秀吉の後継は前田？」の疑念が浮かぶことは火を見るより明らかであり、右近としては秀吉亡き後の前田家のあり方に難しさを感じていた。

続く

千家尊福伝(四)

勅裁に従ったが論争に勝利した教法家

村上邦治

はじめに

明治八年、キリスト教の拡大を食い止めるため、神道の国民教化を、神仏合同で指揮してきた大教院は、仏教側からの分離独立運動により、廃止されることになった。神道側は、これに代わる神道事務局を、三月に設立した。

この事務局の、新神殿に祀る神々をめぐり、神道家や国学者を二分する、神道教義上の大論争が、繰り広げられた。この論争が、いわゆる祭神論争と呼ばれるものである。

この論争の発端は、出雲大社大宮司兼大教上千家尊福が、

「造化三神（天御中主神・高皇産霊神・神皇産霊神）と天照大神の四神と共に、大国主神を表名合祀すべし」と、建議したことからであった。尊福の主張には、多くの神道家や国学者の賛同を得たが、これに強く反対したのが、伊勢神宮大宮司兼大教上田中頼庸であった。

この論争は、五年におよび、二人の対立は、出雲派、伊勢派と呼ばれる、二派の抗争に発展した。次第に激化し、教義上の論争から逸脱した、個人非難や中傷合戦、さらには、裁判沙汰まで及んだのである。

神道界での和解は、最早困難な段階となり、天皇の勅裁という、最後の手段に委ねざるをえない、過ってない大紛争となった。

一　祭神論争の予兆

神道事務局設立伴い、この神殿に祀る神をめぐり、尊福と頼庸のあいだにおきた論争が、祭神論争と呼ばれる。

しかし、尊福の主張は、神道事務局設立以前より、一貫したものであり、彼の確固たる信念からであった。

まず明治四年、神社に社格が制定された時、出雲大社は、最高位の官幣大社に格付された。一方、伊勢神宮は、全ての神社の頂点に位置付けられ、その他の神社とは別格の扱いとされ、社格のない神社になったのである。

尊福は、このとき、大国主神の功業から、出雲大社を、一般の官社と同列にせず、伊勢神宮と同じく、「別格にすべし」と、請願したのである。

大国主神の功業として、次の諸点を揚げた。

国造りの大神と言われているように、国土を経営する大事業を成し遂げ、天祖に譲り渡し、皇孫を守護してきたこと。

顕界を統治する天皇と共に、幽冥界の主宰神として幽界を統治し、諸神社を統率してきたこと。

これらは、のちの祭神論争で、主張したものと同じもので、合祀論の根幹をなすものであった。

この尊福の請願に対し、教部省は、古代においては、出雲熊野大社（国幣中社）より下位であったことを、拠り所にして、却下したのである。

次は、明治六年、神道事務局の前身である大教院が、東京芝に設置されるときに、その奉祭神を、造化三神と天照大神の四神に決定するに際し、再び自説を建議し、四神と共に、大国主神をつけくわえ、祀ることを、要求した。

当時、大教院が神道に偏りすぎているとして、仏教界の分離運動が激しくなっていた。さらに、尊福が、神道における来世を説くことに、仏教諸派が、危機感を募らせたため、大教院は、大国主神幽冥界主宰神の主張は、認めるものの、八百萬神をくわえることで、尊福の合祀建議を、抑えたのである。

二　祭神論争の勃発

明治八年、神道界は、仏教派の大教院離脱後、これに代わる中央機関として、神道事務局を創設し、神道の振興を図ることにした。同年十二月、事務局は初めて、神官教導職を招集して、全国神官教導職会議を開催した。

この会議の中で、尊福は、かねてからの持論である、大国主神の偉業を述べ、事務局の新神殿に、四神とともに、大国主神を、表名合祀することを、提議したのでる。

この会議の議長は、頼庸（薩摩藩出身）であった。頼庸は、尊福が主張する、古義古典による大国主神の功績論を無視し、新政府の掲げる神道政策にもとづき、四神のみを祀ることを強調して、激論になった。

当時、本居宣長や平田篤胤による、国学や復古神道は、神道家に広く受け入れられており、尊福の主張は、出席者の過半の賛同を得ていた。

しかし、議長の頼庸は、採決によらず、議長の特権により、尊福の主張を退けたのである。

神道界のこうした内部抗争により、国民教化運動は、低調にならざるを得なかった。論争を終結させるため、明治十一年五月、再度尊福は、長文の意見書を提出した。

このなかで、『日本書紀』垂仁天皇紀に、天神の教意として、

天照大神は高天原を治せ
大国主神は大地を治せ
皇孫命は葦原中国八十魂神を治せ

と記されている。大国主神と天照大神の顕幽分治は、教意に基づくものであることから、大国主神を表名合祀することを、明論公議により、決定すべきである、と主張したのである。

これに対し、事務局は、すでに八百萬神を配し祀っており、大国主神もその中に含まれている、との解釈から、尊福の建議は、無視されたのである。

神殿造営は、十年十月より着手され、工事は順調に進んできており、十一年七月、事務局は、教導職を招集して、教導職心得や説教条例、その他事務局の運営規則等を決定すべく、第二回神道会議の開催を決定した。

この機会に、尊福は、第三次の建議書を提出した。この中では、これまでの主張にくわえ、大国主神の国土奉還と、公基を護ってきた功績を論じ、合祀の「大義名分」があることを、強調したのである。

しかし、この会議においても、大国主神表名合祀の件は、上程されなかった。伊勢派が牛耳る事務局では、合祀反対論が、多数を占めていたのである。

三　論争沸騰

このころより、尊福の建議をめぐり、神道界は、出雲派と伊勢派に分かれて、論争は大いに高まり、世間を賑わしたのである。

両派の論争は、神道教学上のものであったが、次第に熾烈化し、党派をなして論争し、ついには、個人攻撃や非難中傷合戦にまでになり、神明に奉仕する者の言動とは、とても思われない、醜い争いとなったのである。出雲派のあまりの激しい攻撃に、伊勢派が、出雲派宮司を、名誉棄損で訴える事件まで生じた。

これらの紛糾を、さらに大きく複雑にしたのは、神道事務局のおひざ元、東京府神道事務分局の反乱であった。

この分局を挙げての本局批判は、おおいに神道事務局をあわてさせた。この分局長は、尊福の主張を、早くから擁護し力となった、権大教上本居豊穎（東京神田神社祀官）であった。宣長の義理の曾孫にあたり、本居国学を継承する者で、尊福の右腕となり、支え続けた。

本居分局長は、『神道事務局保護方之檄』と題する檄文を、全国の分局に発送した。この中で、「神道事務局は、神宮司庁出張所の地域内にあり、事毎に伊勢派の圧力を受け、本来の事務局として所業をしておらず、伊勢派田中頼庸の支配下になっている。」と指摘した。大国主神の表名合祀についても、多くの賛同者がいるにもかかわらず、一向に進めようとしない、という批判をしたのである。事務局は、この内部からの反乱にたいし、分局長等を処分したものの、結束した府分局の抵抗と、各地の分局の抗議により、結局は、処分を撤回せざるを得なかった。

伊勢派の参謀格は、摂津湊川神社宮司兼権大教上折田年秀であった。同じ薩摩藩出身者として、田中の統率力を補うとともに、薩摩出身の松方正義内務卿や政府首脳との交渉を担う等、彼の果たした役割は大きかった。

伊勢派が、尊福の合祀論に反対したのは、次のような点であった。

大国主神が、幽冥界の主宰神とする古典はなく、一家の私言にすぎない。

大国主神は、天地が成った後に生まれた神であり、それ以前に生まれた神々の恩義を蒙っており、国神である大国主神は、天神と同列ではあり得ない。

国土造営の功は認めるにしても、表名合祀するのであれば、そのほかに表名合祀する神々（イザナギ・イザナミ・スサノウ等）がいる。

四神にくわえ、八百萬神が祀られるので、大国主神はその中に含まれており、単独で、表名合祀する必要はない。

尊福説では、皇祖天神も、幽冥主宰神大国主神の下位に、なってしまうことになる。

等と、論駁したのである。

四　神道大会議の開催

出雲派と伊勢派による教義論争は、互いに、引くことのできないものになった。一向に、祭神問題解決の糸口は見出せず、紛糾が続く状況を憂えた尊福は、明治十三年夏、多くの賛同者を背景に、一気に公論により解決すべく、神道大会議開催を要求したのである。しかし、神道事務局は、伊勢派の不利を見通し、開催に反対した。

すでに神道界の内紛は、新聞などで大きく報じられており、両派の見苦しい非難合戦は、社会的問題になっていた。また、仏教界においては、この論争を、仏教への挑戦とみており、「皇孫の顕世、大国主神の幽世、の統治が定まっているのであれば、顕世において、幽世主宰の大国主神を祀る必要はない。」と、見下していた。

神道界の、長くしかも激しい、中傷合戦にまで陥った祭神論争を、政府としても、このまま放置しておくことはできず、ついに十四年一月に、事務局組織、祭神、管長選定を議題とする、大会議開催を決定し、天皇の裁可を得たのである。

しかし、裁可を得て開催される会議では、祭神問題で、これまでと同様な、両派による論争を続けることは、許されず、決着が求められた。そのため、開催前に、調停すべく、折衝が続いた。しかし、両派とも、譲る気配は全くなかった。

こうした状況に、伊勢派は、祭神の問題は、信仰上の問題であり、会議により、決定すべきではない、と主張し始めた。すなわち、神道は、暦朝の天皇が、天訓を継承してきたものであり、我国の国体の精神、皇基と相よる本教であるとして、これまで、天裁を仰がず、祭神を定めたために、議論が沸騰したのである。今ここに、「勅裁で、祭神を奉じる」ことが、肝要であるとしたのである。

これに対し、尊福は、勅裁によることになれば、伊勢派が有利となることを見抜き、最後まで、徹底的に勅裁による祭神決定に、抵抗した。

尊福は、「神道事務局神殿の祭神問題は、教導職自身の問題であり、官営でもない事務局神殿に、政府はもとより、天皇の判断を求めるべきことではない。古典により、あくまで、神道家自らが、評議の上決めることである」と主張し、勅裁申請に反対し続けた。

しかし政府は、最早、神道界の混乱を、長引かせておくことはできなかった。この問題を解決するには、事前の調停でも明らかなように、神道界に委ねることでは、不可能であった。終結させるには、天皇の勅裁しか、残されていなかった。そして、勅裁を申請するには、事前に、両派の同意を求めたのである。

最後まで反対を続ける尊福に、政府は参議まで動員し、説得にあたらせた。政府まで動いて、勅裁を促す情勢から、尊福は、ついに明治十四年一月末、やむなく同意するに至るのである。

祭神問題を、議題から外したことから、翌二月に開催した大会議は、主要神社宮司、各分局長、事務局上詰など神道家百十八名を招集、政府からは、松方正義内務卿

をはじめ、政府高官が出席した。既に、祭神の議題は、取り外されていたため、大した議論もなく、終了したのである。

五　祭神の勅裁

明治十四年二月二三日、政府は、神道事務局神殿の祭神について、次のような勅裁を発表した。

宮中に斉祭被る所の神霊遥拝奉仕致す可事
別紙　宮中に斉祭被る所の神霊
　天神地祇
　賢所
　歴代皇霊

と、極めて簡潔なものであった。この勅裁により、宮中三殿すなわち、東側の神殿（天神地祇　日本国中の八百萬の神）、中央の賢所（皇祖神天照大神）、西側の皇霊殿（歴代の天皇と皇族）、に奉斎されている神霊を、遥拝することに、決定したのである。

この勅裁に、神道家としては、異を唱えることは許されず、さしもの大紛争は、ここに終結したのである。

しかし、この勅裁による解決は、教義上、もっとも重要な神々とする造化三神を、消してしまった。これ以後、造化三神は、忘れ去られてしまうのである。

伊勢神宮においても、祭神は、四神から、天照大神一神に変更された。この勅裁は、神道教義の大きな変更を、余儀なくさせたのである。

おわりに

ついに、尊福の主張は通らず、伊勢派の勝利に終った。しかし、祭神論争の経緯は、勅裁という最後の手段によるほかなく、政府や神道事務局の指導力の無さと、神道教義の曖昧さを、世に示すことになった。ともあれ、これ以後、維新政府が天皇を中心に据えた、新しい神道である、神道非宗教化（国家神道）が、完成することになるのである。

多くの神道家は、尊福の唱えた、幽冥界の教義に賛同し、仏教やキリスト教に対抗できる、神道宗教の確立を目指し、死力を尽くして、祭神論争に加わった。神道の、宗教として最大の欠陥であった、死後の世界を物語ることのできる、尊福の主張は、古来より、神道家達が、果たしえなかったものであった。神道を宗教として、完成させたい神道家と、諸外国からの信教自由の圧力をかわし、天皇中心とする新神道樹立を急ぐ政府との対立が、

「祭神論争の本質」であった。

これ以後、神道宗教化の夢を失くした神道家は、単に国家の祭祀を執るだけの、官吏としての神官になってしまい、祭神論争おける熱気は、一気に冷めてしまったのである。

一方、勅裁に従った尊福は、祭神論争で主張してきた、大国主神幽冥界主宰論の実現を図るため、明治十五年、神道事務局から離れ、「大社教」（現出雲大社教）を設立し、神道宗教の拡大に邁進することになった。

祭神論争により、既に大国主神の功徳は、日本全国に行き渡っており、この論争が、大国主神を、天照大神に匹敵する神に、押し上げたのである。

尊福の「大社教」信者拡大に、大きく寄与したのは、神道界を長く揺るがした、「祭神論争」であった、といえよう。

祭神論争の実質的な勝者は、伊勢派ではなく、出雲派千家尊福であった。

（つづく）

（参考文献は最後に記載します）

（司馬雑感　三十五）

「砂鉄のみち」を歩く

山田嘉久

コメと鉄

司馬遼太郎によれば、日本文化の特徴は「コメと鉄」だという。

司馬後半生のライフワーク「街道をゆく」でも多くの巻で、鉄について触れているが、その代表的な紀行文が鳥取県（因幡）から島根県（出雲）を経て岡山県（芸備）に至る古代製鉄の一大産地を歩いた「砂鉄のみち」（昭和五十年）であろう。

我々も約四十年後の平成二十六年春に同じ街道を歩いた。

一　渡来人としての製鉄業者

戦時中、司馬は兵役として満州（現中国北東部）に駐在していた頃、中国の農家では農器具の少ないのに気づく。日本の農家では用途に合わせて何種類の鍬やスキを所有しているのに、中国の農家では一、二種類しかない。

この事は中国（朝鮮も同じ）の「慢性的鉄不足」によるものと司馬は結論づける。

ヨーロッパでは鉱石から鉄を作ったに対して東アジアでは砂鉄から作った。

砂鉄から鉄を作るには膨大な木炭を必要とする。膨大な木炭を作るには膨大な森林を要する。（一トンの鋼を作るには砂鉄十二トン、木炭十四トンが必要といわれる）

しかし中国などでは一度森林を伐採すると長期間を経なければ再生しない。（そのため中国や朝鮮では禿げ山が多い。朝鮮ではこのほかオンドル用の薪を採り過ぎたのが理由ともいわれる）

それに反して雨量の多いモンスーン地帯に位置する日本では三十年ほどで再生する。このことが製鉄技術では後進国の日本が先進国の中国や朝鮮を凌ぐ鉄器文化をつくりあげた。

古来から「鐵（鉄）は国家なり」、「鉄を制するものは

天下を制す」とも云われるが、司馬はその例として沖縄を挙げている。

沖縄は本土に比べて製鉄は千年も遅れた。石器時代が本土の室町所代まで続いたせいである。そのため薩摩に侵略され、中国にも臣従を余儀なくされた。

替わりに穏やかな性格を形成するのに役立ったと論ずる。

〈製鉄は、まぎれもなく朝鮮半島から伝わったと思われる〉

朝鮮半島の製鉄の歴史は朝鮮北部が中国文明を早くから共有したということから黄河流域の漢民族のそれと同じくらいに古かったに違いないと司馬は考える。

そんな朝鮮の製鉄業者が迎日湾から古代航路のあった出雲地方に渡来してくる。古来より砂鉄の豊富だった出雲地方（特に雲伯国境付近）では容易にこれを受け入れ、江戸時代には全国の八十%を占める一大製鉄王国に発展していった。

また一方では出雲は神話の盛んな国だが、司馬の記述は神話にまで及ぶ。

アマテラスによって追放された弟スサノオは出雲鳥上山で八岐大蛇（やまたのおろち）を退治して天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を得たとする神話は有名だが、その八岐大蛇は鳥上山にいた古代の製鉄業者だという。

そういう鳥上山では、今でも日立金属が「鳥上木炭銑工場」として砂鉄を採取して鉄を作っている（たたら製鉄）というのも、神話がそのまま連続しているのも、いかにも出雲風だと司馬は書いている。

二　和鋼博物館と奥出雲たたらと刀剣館

〈安来にはなお、古代以来の製鉄システムが生きているのである〉

と書いた司馬はまず安来市にある「和鋼博物館」を訪れているが、我々もそれに習ってまず、たたら製鉄の概略を知るところから旅を始めた。

この博物館の前身は昭和十八年、日立金属安来工場が作った「和鋼記念館」である。館名の「和鋼」とは「たたら」で生産される日本（和）独特の鋼という意味だそうだ。

かっての製鉄王国の中心地安来には、鋼作りを受け継ぐ日立金属安来工場があって、いまもきわめて良質な安来鋼（YSS）を生産している。たたらと呼ばれる日本古来の製鉄法によって作られた鉄鋼は、高度に発達した現代の冶金技術をもってしても、とうてい再現ができないほどすぐれたものと云われている。

そのため国内では日本刀作りのすべてはこの「玉鋼（たまはがね）」であり、輸出ではアメリカのジレットに買われてカミソリ刃になっている。一トンの鋼で百万枚のカミソリ刃が

作れるという。

我々はまず「映像ホール」で日本古来のたたら製鉄の操業（古代ではどのように鉄を作っていたのか）を映像で見たのち、展示室に入る。

まず目に着いたのが「出雲風土記」だ。

「風土記」とは奈良時代に天皇が都にいながら日本全体のようすを知りたいため各国（六十二国三島）ごとに提出させた地誌であること、しかし現在、それらの原本はすべて失われ、写本でさえ出雲国ほか五国のものしか残っていないこと、なかでも出雲風土記は欠落部分がなく第一級の歴史資料であることを初めて知った。

その貴重な出雲風土記に鉄に関する記事が記されているとのことだった。

また、国の重要有形民俗文化財に指定されている天秤ふいごやたたら製鉄用具（鉄穴流し用具）などを見学した。

炉に風を送って高温を保つ天秤ふいごを踏み続ける人は番子と呼ばれ、あまりの重労働に交代で踏んだことから「かわりばんこ」の語源になったとのガイドの説明があった。

別の展示室では、たたら鉄の積出港として栄えた安来港の歴史（鋼積出港から鋼生産地へ）を知ることができた。

玉鋼から作られた日本刀剣も多く展示されていたが、翌日訪れた「奥出雲たたらと刀剣館」でより詳しく見学した。（当館は後述の世界で唯一、たたらの炎を上げる「日刀保たたら」が原則非公開のため（我々には特別公開されてくれたが）それに替わって常時公開されているたたら専門館。館長は我々の旅行中、ずっとガイド役を務めてくれた。）

印象的なことは、庭前にカツラの木が植えられていることであった。

カツラの木は古代以後、山で砂鉄を吹く人々にとって聖木となっている。

山中でタタラをおこすとき、必ず鉄の神の金屋子神を祀った。この金屋子神は天から天降りするときにカツラの木を伝わって降りてきたという。このため、タタラのそばに必ずカツラの木が植えられた。このことは翌日、訪ねた「日刀保たたら」の庭先にも同様のことが書いた標識板があった。

また、庭先には巨大な隕石のようなものが数個、展示されていた。

「鉧（けら）」です」

たたら吹きによる粗製品とのガイドの説明だった。

この後、「出雲風土記」にも登場するという由緒ある古社「揖夜（いや）神社」に詣でたが、禰宜の説明は当方のイヤ

ホーン操作が拙くてよく聞き取れなかった。
しかし彼の言葉が東北弁（ズーズー弁）だったことが気になったが、この地が松本清張の小説「砂の器」の舞台でもあったことを思い出した。
案の定、翌日、ホテルに帰る途中、JR木次線亀嵩駅の近くに清張の書による「小説砂の器、舞台の地」記念碑が建っていた。またホテルのホールには記念碑の前で佇む清張の写真が飾ってあった。

三　日刀保たたら（鳥上木炭銑工場）の操業体験

今回のツアーでの目玉は、日刀保たたらの操業体験だった。
現在日本で行われている唯一のたたら製鉄は、その発足から（財）日本美術刀剣保存協会が直接運営し操業している「日刀保たたら」である。昭和五十二年に復活した。
通常は非公開だが、我々のために特別公開してくれた。出迎えてくれたのは地元奥出雲町の井上町長、選定保存技術保持者である木原村下（技師長）と村下養成員数名だった。それに町役場の若い女性たちが手伝いに来ていた。
井上町長は大の司馬ファンだそうで、挨拶で昭和五十年冬、司馬が初めて此処を訪ねた頃の話をした。この夜の交流会にも木原村下とともに顔を見せ、司馬が亡くなった時の随筆や数年前、地元紙に載せた記事「奥出雲のたたら操業」を我々に配ってくれた。司馬遼太郎記念館上村館長の話によると、そもそも今回のツアーの発案者は同町長で、実現したことにより大満足だったようだ。
お陰で宴会でのアルコールの差し入れ、バス車中での菓子差し入れなど大歓迎を受けた。
翌日の地元紙（山陰中央新報）朝刊に写真入りの大見出しで「司馬ファンたたら製鉄体験」の記事が載ったのも同町長のお陰であったであろう。
操業体験の前に手拭、マスク、手袋を渡された我々はまず、たたらの神様（金屋子神）に操業の無事を祈願する行事から始まった。ついで工場内で「火入れ式」。記念館館長夫妻が代表となって鍬を入れた。
作業場内に司馬が書いた「玉鋼」の色紙が張ってあったのが目に着いた。
どうも前夜から木原村下らが本物通りに炉を作って迎えてくれたようだった。午前中の儀式を終えて、実際の体験実習は数時間経ったその日の夕方だった。その間、我々は奥出雲町内の関連史跡を回った。

① 各人が村下養成員たちの指導で燃えさかる炉の中に木炭を装入する。
② 大分、時間が経つと炉からノロ（鉄滓）が流出してくる。このノロの流出具合によって炉内での鉄の生

育状態を推察できるという。炎と流れ出るノロを村下は真剣に見つめていた。
③「釜壊し」は一連のたたら製鉄で最も気迫の漲る場面だそうだが、我々は気楽なもの。嬉々として釜を壊してゆく。
④「鉧出し」出来上がった鉧をクレーンで引き上げ、木のコロを噛ませて引っ張り出す。
⑤ コロの上を、鉧が姿を現す。鉧は破砕されて各等級に区分される。
⑥ 出来上がった玉鋼が重さを表示されて順次並べられる。

ツアーから帰って間もなくの四月初め、東京、お台場の日本科学未来館で「古代たたら操業体験」が実施されていたので再度、見学した。
初日に築炉作業、2日目は火入れ操業から鉧出しまで木原村下の指導、尾方館長の解説があった。

四　たたら御三家

「大原新田」は車窓から見学した。
中国山地の尾根にあたる奥出雲地域は良質な砂鉄を多く含有し、かつ多湿多雨のため豊富な山林資源を有していたことから全国屈指の製鉄地帯に発展していったことは前述したが、この地方の人々は効率よく砂鉄を採取する方法として「鉄穴流し」という独特な手法を生み出した。
丘陵尾根に水路を巧みに導き、山麓丘陵地を「打ち鍬」という道具で切り崩し、これを流して水流により比重選鉱するという独特なものだった。
さらに感心するのは、「鉄穴ながし」で流された跡地を放置することなく棚田に拓いていったことである。現在、奥出雲町の田畑の約三分の一は「鉄穴流し」によって開かれた耕地だそうで、これが見事な文化的景観ともなっている。
「日本の棚田百選」にも選定されているそうだ。
現在ではおいしい「仁多米」産地として評価を高めている。
勿論、我々が旅行中に食べたコメは全部、「仁多米」だった。
また「雲州そろばん」という看板も多く見受けられた。この地方は算盤の生産が盛んとのことだが、今は斜陽産業だろう。

このような広大な森林を有し、たたら製鉄業に乗りだしたものを「鉄師」という。松江藩には九人の鉄師がいたそうだが、なかでも絲原家、桜井家、田部家が三大鉄師頭取と呼ばれた。
我々はまず絲原家を訪ねた。

絲原家では天明八年（一七八八）に自宅内に主力炉である「鉄穴炉」を設け、大正十年（一九二一）まで約一八〇年間にわたってたたら操業を続けた。「鉄穴炉」の特徴は鉄師の住居内に主工場である高殿および付属施設を置き、従業員も同じ地域（山内）に住ませることだった。明治三〇年の記録によると山内には三十九戸（百九十六名）が生活を共にしていたとある。

いわば一種の閉鎖社会を形成したことになり、近隣の農民とは仲が悪かったとは司馬も書いている。このことが「オロチ」神話の解釈にもなっているのであろう。

現存する絲原家の奥行きのある佇まいや「出雲流庭園」の見事さは、往時隆盛を誇った鉄師頭取の面影を伝えていた。

桜井家は翌日に見学した。

十七代目の老当主が迎えてくれ、桜井家の歴史を語ってくれた。それによると桜井家は大阪夏の陣で活躍した塙団右衛門の末裔だそうで、元文二年（一七三七）に七千坪を超える広大な敷地内に鉄師頭取の屋敷き構えを造り上げた。

「菊一」印は当家の鉄ブランド名で、国友鉄砲鍛冶にも使われたことや、松平不昧公をはじめ代々の松江藩主もよく来駕したことを話されたが、底冷えのする玄関先では堪えた。

日曜日というのに井上町長も顔を出してくれた。

最終日に往時の建物を今に残している吉田町（雲南市）の古い町並みを歩いたが、その中心部には、かって松江藩九鉄師の筆頭を勤めた田部家の海鼠壁の土蔵が建ち並んでいた。また多くの番頭屋敷もある。

先祖は紀州の田辺から来たという田部家について司馬はかなりのページを割いて記している。二十三代目田部長右衛門とは話も弾み、案内役までさせている。田部氏は長い間、島根県知事を務めた。

その田部家が今でも所有しているのが、吉田町にある「菅谷たたら山内」である。

少なくとも江戸時代初期までは製鉄現場は露天で、いわゆる「野だたら」だった。

それが近世初頭以後は「高殿」と呼ばれる高大な木造建築物に変わった。

その「高殿」が全国で唯一残っているのが、吉田町の「菅谷たたら山内」である。大正十年（一九二一）までここで実際に製鉄がおこなわれていた。

高殿は嘉永三年（一八五〇）の設立。丁度、工事改修中だったが、特別に工事用の足場に乗ることも許され、屋根部分まで見ることができた。高さは八、六メートルあるという。

高殿の前にはやはり神木の「かつら」の大木が隆々とそびえていた。

高殿付近は田部家の城下町（山内）だけに村下屋敷や

「鉄の博物館」などが軒を連ねていた。

五　光明寺の朝鮮鐘

旅の最後は「朝鮮鐘」で名高い光明寺だった。

小山の頂にあるため、我々はバスから小型マイクロに乗り換えて登った。石段を登りきると本堂の建物が見えてきた。「光明寺」という古拙な文字の扁額がかかっていた。

司馬が此処を訪ねた時には庫裡にまわって案内を乞うたが無人だったようだが、我々の場合は半袖の僧衣を纏った元気そうな老住職が我々を待っていた。

その住職の弁舌爽やかなこと、漫談調の説明が我々を魅了した。しかしあまり能弁だと肝心の話を聞き漏らすもの。

「なぜこんな鄙びた古寺に朝鮮鐘があるのか」は鐘の脇に建つ「追銘」と司馬の解説に依るほかない。

それによると朝鮮鐘とは、新羅（四―十世紀）から高麗（十―十四世紀）の時代に朝鮮半島で作られた、主に青銅製の鐘であるが、日本では九州、日本海沿岸、瀬戸内海と朝鮮の航路にあたる地域に残存している。

その数は司馬は五十二口と書いている。

さて当鐘だが、どういういきさつで出雲にきたのかわからない。追銘によると康暦元年（一三七九）に出雲の富田の寺にあり、室町末期の明応元年（一四九二）に当寺に移ってきたという。

しかし今、鐘楼にある梵鐘はレプリカであり、本物の重文である鐘は土蔵の中に鎮座していた。住職の話では第二次大戦中は寺の土蔵に隠蔽され供出を免れたと云う。

六　銀の国―石見銀山

二泊三日の「砂鉄のみち」を終えた私は、更に延泊。日本海に面した温泉津温泉で疲れを癒して、翌日は世界遺産の石見銀山を見学した。

まず「世界遺産センター」で予備知識を得る。

石見銀山が最も輝いた時期は一六世紀後半から一七世紀初め。特に徳川家康が天領（直轄地）にしてからピークをむかえ、世界の銀の三分の一を占めた。

時あたかも大航海時代。日本の豊富な銀を求めてポルトガルやスペインの船が来航し、「石見」の地名は遠くヨーロッパに知れ渡った。そのため一六世紀末に印刷された日本地図には「Hivami」（石見）の名と説明があるという。

銀山最盛期の江戸初期には石見の人口は二〇万人に上ったとされる。当時の大阪の人口が二十八万だから、いかに賑わっていたかを窺えるだろう。

予備知識を得た後、銀山を支配した江戸期の大森代官所跡まで二キロの街歩きを楽しんだ。

古い江戸の道（銀山街道）は最大の商家熊谷家住宅をはじめ阿部家、三宅家、河島家などの武家屋敷が散在していた。武家と商人家が隣り合わせというのがこの街道の特徴とのガイドの話だった。

世界遺産になってから古い家屋を利用した、おしゃれな小物の店も増えたとの説明もあった。

通りに面して「山陰合同銀行」の看板を掲げた古い木造の建物が目についたが、いつ頃の支店だろうと興味を惹いた。

漸く昼ごろ、代官所跡に着く。

その跡地を利用した「資料館」で、初代代官が大久保長安と聞いて驚いた。大久保石見守長安といえば佐渡金山の採掘に関わった人物として有名である。彼は東西の金銀山奉行を兼務、統括していたことになる。後に勘定奉行、老中にまで出世。「天下の総代官」の名をほしいままにした。外様（旧武田氏家臣）から老中に昇進した唯一の人物だが、慶長一八年（一六〇三）彼の死後、家康はにわかに

〈家財のすべてを没収し、遺児七人を切腹させ、その家の根まで断ってしまった〉（佐渡のみち）

のは彼の不正蓄財の噂ばかりではないだろう。

観光用に公開されている「竜源寺間歩」（坑道）は時間の関係で割愛せざるを得なかった。

七　芸備のみち

司馬が「砂鉄のみち」を旅したのは昭和五〇年冬だが、それから四年経った昭和五十四年初夏に、

〈もう一つの古代の製鉄文化圏である吉備〉

を訪ねている。「吉備のみち」である。

五、六世紀にかけて、たたら衆（砂鉄製鉄集団）が大挙南朝鮮からやってきて出雲、伯耆、因幡あたりの山中に集まったのは既に述べたが、彼らの一部は更に足を延ばして、中国山脈を越えて三次（みよし）盆地を最前線基地としたのではないかというのが司馬の持論のようである。

今まで広島県（安芸国と備後国）で発見された古墳の数は約三千基だそうだが、そのうち二千基が三次盆地に集中している。その何割かはたたら衆のものだろうと司馬はいう。

そのうちの一つ「丸山鉄穴場跡（かんなばあと）」を見学している。

また、「三次（みよし）」という地名の由来についても司馬は独特の推論をしている。

朝鮮半島南部を裸にしてしまった彼らは三次盆地に達したとき、多分、付近を流れる水系（江の川）の美しさに感嘆して

「おお、水村（みずき）よ」と叫んだに違いないというのである。

「水」は古代から「美」という音であったこと、また「スキ」は古代朝鮮語では「村」のことだと述べている。

私には多少、コジツケのように思われたが、更に史実

に名高い百済の白村江の戦（六六三）を日本書記ではハクスキノエと訓ませているじゃないかと説明されては、「そうかな」と頷かざるをえない。

製鉄も稲作と同様に水辺から発達したが、このことから司馬は更に発展して、日本人の原型は「水辺の民」論に及ぶ。

〈日本人は「水辺の民」であったであろう。水田のできる低地が一等地で、蕪やネギなどの畑作しかできない丘は三等地であった。中世末期には、丘に住む者を「坂の者」として差別したほどである。〉

この当時、水辺から離れた高台に住むのは盗賊や浮浪人などの「よそ者、ならず者」に限られていた。このことは最初から高燥な地を好む欧州人や、水辺の地を「盗賊の隠れ住む場所」とする古代中国（水のほとりに住む盗賊の物語である「水滸伝」を例に挙げて）とは根本的に違う〈人類史上の奇観〉とさえ云っている。

それが戦国時代以降、水問題が多少でも解決されてくると、この傾向は逆転してきて、特に戦後になるとサラリーマンなどはやたらに〇〇台とか××丘など昔は盗賊しか住まなかった高台に住みたがると司馬は皮肉っている。

八「この国のかたち」の中の鉄物語

晩年の随筆「この国のかたち」においても「鉄」につ

いての持論を五回にわたって展開している。

（1）古代での鉄の使われ方

〈鉄は人間に好奇心を教えた。大工道具に使われ建物や船舶ができ、土木道具に使われて巨大構造を作るようになった〉

（2）我が国の農器具の大量生産

〈好奇心を刺激するものの一つは道具である。鉄のおかげでさまざまな木工道具、農器具ができた。〉

（3）渡来人が出雲に伝えた鉄生産

〈朝鮮半島の山が禿げてきた。それで彼らは出雲に渡来してきた。〉

（4）加賀平野を耕した鉄農具と国人、地侍

〈鉄が安くなったという事情によって）「百姓の加賀国」は大いなる穀倉地帯となり、浄土真宗の「講」によって結ばれた。〉

（5）幕末日本の鉄加工技術

〈いずれも外国の専門家の指導もなく、書物から解き起こして反射炉が築造された。江戸期の好奇心経験が結実された〉

また随筆「砂鉄がつくった歴史の性格」（「司馬遼太郎が考えたこと9」所収）でも同趣旨のことを書いている。

中国の歴史の中で、最も輝いた時代は春秋戦国から漢の時代で、それからの中国は衰退の一途を辿ったという

のが司馬の持論だが、その最大の理由は〈好奇心は悪であり、停滞こそ善〉と考える儒教の国教化に求められる。

それと同様に鉄器の慢性的不足が之に拍車をかけたと。

それに比し日本の好奇心の旺盛さは、七世期の大化の改新で鉄を中央集権が一手に収めて以来、〈鉄器の歴史はたかだか千数百年の若年社会でありながら、その後明治まで、鉄が豊富すぎたことに由来する。〉と書いている。

一方では好奇心が高じて、〈一種のたけだけしさになり、ときに他国に迷惑をかけた〉とも書くことを忘れない。

（註1）歴史メモ

紀元前一万一千年頃	中国で鉄器が出現する
六世紀後半	万燈山古墳が築造される
七三三年（天平五）	「出雲国風土記」成立
一四九二（明応一）	光明寺に朝鮮鐘が移される
一六一五（元和一）	田部家が菅谷でたたら製鉄を開始
一八五〇（嘉永三）	菅谷の高殿が建造される
一八九九（明治三二）	安来製鋼所の前身、雲伯鉄鋼（資）が発足
一九二三（大正一二）	田部家のたたら製鉄が操業を終了
一九二五（大正一四）	安来製鋼所が戸畑鋳物（現日立金属）に吸収合併
一九五九（昭和三四）	田部長右衛門が島根県知事に（三期）
一九七七（昭和五二）	鳥上木炭鉄工場内の「日刀保たたら」が操業開始

（註2）「街道をゆく7」（砂鉄のみち）は、古代朝鮮から伝わってきた鉄が主題だけに司馬の知人の在日文化人が多く同道している。作家の金達寿氏、考古学者の李進熙氏、そして雑誌「日本の中の朝鮮文化」主催者の鄭貴文、鄭詔文などである。特に鄭詔文氏は生まれが古代辰韓の地であることから迎日湾から古代航路のあった出雲への、さらにはその古代製鉄への遺跡への案内は自分でなければならいと自薦している。この当時、司馬はこの雑誌に深く関わっていた。

司馬とこれら在日文化人との対談集も多い。

作家の金達寿氏とは京大教授の上田正昭氏を交えて、古代の日本文化の形成に多大な影響を与えた朝鮮文化を語った対談集「朝鮮と古代日本文化」がある。ここでも鉄文化については沙鉄を鉄にする技術はおそらく古代朝鮮半島から技術者とともに出雲にやってきたに違いないと持論を展開している。

その他「古代日本と朝鮮」「日本の朝鮮文化」「日本の渡来文化」など数多くの対談集がある。対談者はいずれも金達寿氏、上田正昭氏の両者である。

また李進熙氏との対談集も多い。「古代製鉄と朝鮮をめぐって」「古代の朝鮮と日本」など。（いずれも中公文庫）

陶芸家沈儒官との対談でも「日本の鉄文化」について語っている。（「薩摩焼と鉄とアジア」）



司馬遼太郎書（日刀保たたら工場内）

目耕録（その十四）

――藻谷浩介・ＮＨＫ広島取材班著『里山資本主義―日本経済は「安心の原理」で動く―』を読む（二〇一三年、ＫＡＤＯＫＡＷＡ）――

山本鎭雄

目耕：目で紙田を耕す。読書することを譬えて言う（『世説新語』）。

手や同乗者が殺到した。そこで、村人は炊き出し、大雪をついて温かいお茶や汁物、避寒のために毛布を持ち込んだと言う。今度は、さすが隣家の村人は電話で「見に来いよ」とは言わなかった。

例年、当地は雪が降って積雪しても、一、二日程度で溶け、それほど交通の障害にならなかった。そのため、雪害防除に万全な対策をとらずに済ませてきた。ところが、今年の大雪で国道はやっと二、三日後に片道一車線が開通したが、電車は五日間も止まり、村人は家に閉じ込められ、東京への通勤もままならなかったと言う。二月下旬、私は中央線が順調に運行していることを知り、車窓から山々に例年にない残雪を見ながら、高尾を経由

冬来たりなば、春遠からじ

今年の二月八日と二月十四・五日、山梨県では記録的な大雪に見舞われた。ＪＲ中央線の高尾駅から三十分ほどの無人の最寄り駅から、十分ほど歩くと妻の実家に着く。二月八日、隣家の村人から電話で「お宅の玄関の廂（ひさし）が傾いているから、見に来るように」という連絡があった。天気予報を気にして、「どうしようか」と思案して数日が過ぎた。すると、十四・十五日の二日連続、記録破りの大雪に見舞われた。ＪＲ中央線は不通となり、中央自動車道と甲州街道（国道）は交通止めになった。二Ｍ近い積雪の様子を電話で教えてくれた。近くの公民館を緊急避難所に開放したら、国道で交通止めに遇った運転して山梨に出かけた。国道沿いの妻の家の北側の玄関口は、国道を除雪した雪が身長ほどに堆積していた。雪を掻き分けてやっとの思いで南側隅の台所の入口から家に入ることが出来た。

何枚も下着を着て、野良着に着替え、竹籠を背負い、畑に出かけた。新聞で覆っておいた白菜は、葉を何枚も剥いだが、凍みてとても食べられる状態ではなかった。昨年十一月に種蒔きしたエンドウと空豆の幼苗がこの大雪に耐えられたか如何か、一番心配だった。毎年、空豆の栽培に失敗した。空豆は種蒔きの時期を逸すると、十分に育たず、しかも空豆の若いさやや茎に小さなアブラムシが密生し、株を弱らせ、大きな実は収穫出来なかった。残雪を除くと、エンドウと空豆の幼苗がしっかりと見えた。今年こそはと意気込んで種蒔きをしたので、一（ひと）先（ま）ずほっとした。なかなか地温が上がらず、生長が遅かったが、五月なって収穫したスナップエンドウを湯掻いて口にすると、緑色のさやと豆は甘味が濃く、十分に菌ごたえがあった。

スズメやカラスなどの野鳥の姿はめっきり見かけなくなった。雪が消え、かき菜とキャベツの葉を見ると、椋鳥の一群に食害されていた。その周りに支柱を立て、防鳥用の黄色いテープを張った。五月の連休に孫に畑の苺をもいでナチュラルな味を堪能させようとして、保温用に透明のポリフィルムマルチを被せて、手でマルチを破り、苺の株を表面に出した。だが、白い花が咲いた後、小さな花托を摘果するのをうっかり失念したため、成った実は総じて小粒だった。久しぶりに畑仕事をしていると、馴染みの村人が畑に来て、「これからジャガイモの種芋を植えるのだ」と言って、種芋の蒔き方を教授してくれた。ただ、大雪後の長期の積雪で地温が上がらず、果たしてジャガイモが順調に発芽するか如何か、心配だった。そのため、種蒔きはしばらく様子を見ることにした。

ジャガイモと里芋の種井も

冬の農閑期が終り、早春の最初の畑仕事はジャガイモの種芋を蒔くことである。「これから始める」「もう終わった」などと、種芋を蒔く時期、さらに品種や数量について、村人は農道で弾んだ会話が交わされる。例年と比較して、今年はなかなか発芽せず、幼い葉がやっと生長した。すでに「八十八夜の別れ霜」、遅霜が降る五月二日も過ぎ、葉が枯れる心配もなくなった。たとえ熱心に中耕や土寄せをしても、収穫と収量は最終的には運を天に任せるしかない。昨年は種芋を植え過ぎ、畑の小屋に入りきらず、家の倉庫にも収納した。今年は寒冷のため凍みたジャガイモが多く、植える種芋が少なかった。

村人は食べ残した男爵芋のうち、傷んでいない芋を慎重に選び、長く伸びた芽を欠き、切り分けて種芋に使う。

それは、ウイルス病に侵され易いが、ある程度成長したら、葉や茎が枯れる前に小粒の新ジャガを収穫する。私も村人に倣って、食べ残したジャガイモの芽が出た男爵芋と秋作のテジマを種芋として切り分けて植えることにした。小屋に保存した芋は厳しい寒さのために傷みが激しく、その多くを捨ててしまった。のちに分かったことだが、このジャガイモの葉と茎の生長はまったく思わしくない。

今年は、保管したジャガイモの他、農協から購入した検査済みの男爵芋五キロ、自宅近くのホームセンターで買ったメークイン、北アカリとアンデス赤各一キロを種芋として植え、合わせて十キロ以上を植えたことになる。中耕や土寄せをして、しかも天候に恵まれ、立派に生長したら、種芋の五倍以上の収量があると言われている。ジャガイモは種芋を植えてから収穫までの期間が短く、しかも長く常温で保存が出来、根菜類のうちで最も有難い野菜だ。梅雨が終る頃の晴れ間に収穫出来るのが楽しみだ（だが、芽にはソラニンという有毒物質が含まれているので、しっかり取り除き、大量に食べると、中毒症状を起こすそうだ）。

畑で次の作業は里芋の種芋の植え付けだ。ただ、ジャガイモの種芋の植え付けと収穫が異なるのは、地中に埋めた里芋を掘り出し、それを種芋に使うことと、収穫まで半年以上も栽培期間が長いということである。地中から種芋用に里芋を掘り出すと、やはり大雪のためか、里芋は凍みて傷んでいた。腐敗した里芋を捨て、傷んだ部分を切除し、芽の付き具合を良く観察して、病害予防に草木灰をつけて種芋に使った。畝の作り方、種芋の植え方や肥料の置き方はジャガイモの場合と同じだが、防草のためにかまぼこ状の高畝の上を黒マルチフィルムで覆う点で異なる。里芋が発芽すると、フィルムはテントを張った状態になり、鋏で穴を開け、芽を地表に出し、後で芽欠きをして茎を一本にする。

今年は里芋四作を一先ず植え付け、これで終わったと思った。ところが、妻はアカメ（赤芽大吉、またはセルベス）が食べたいと言い出し、近くの村人に種芋があれば、貰えないかと頼んだ。所詮、この種芋を植え付けるのは言い出しっ屁の地主の妻ではなく、作男の私だが、貰った種芋二十個はたしかに赤い芽が芽立ちしていた。種芋を手に取ってひとつひとつ点検すると、なかにはやはり凍みて傷んでいた。この種芋も大雪の冷害の影響を受けたのであろう。結局、種芋二十個を植え、五作目になった。今後、温度が上昇する前に、畝間の雑草と水分蒸発にたいしてどうような対策をすべきか、対応しなければならない。昨年は妻の提唱で畝間に古いむしろ（畳表）を敷いたので、葉は立派に生長し、大収量だった。

次第に老いて風景を眺める

私は文字通り「花より団子」の類で、土をいじって花を観賞するよりも、畑作業をして収穫という実益を好む。そのため、野菜以外の畑の野草はすべて雑草と見なし、不倶戴天の敵として小鎌で、草刈機で、耕耘機でともかく除草することにしている。花壇の花を眺めても、繊細な花だ、可憐な花だ、ボリューム満点の花だ、豪華な花だと感じる程度で、花の特徴や名称、その名称の由来、花言葉などを詮索したことはない。木の花もまた同じで、四季の到来を知る程度である。ドイツで経験したことだが、盛んにドイツ人は「シェーネ・マイ（美しき五月）」と言う。寒く、うっとうしい長い冬を越し、五月になってクロッカス、福寿草、金盞花などの野草が一斉に開花する。大雪のためか、私は今年ほどこの日本で「シェーネ・マイ」と感じたことはない。

さて、定年退職して山梨県東部の桂川沿いの約二〇〇坪の畑作りをして早くも八年目を迎えた。この山地一帯は「郡内」（山梨県旧南・北都留郡の古称）と称し、とくに桂川の二段ないし三段の河岸段丘上の平地に集落が形成されている。「綱の上」という上段に妻の家と畑があって、空き家に一泊のいわばショートステーをして、野菜作りをしてきた。齢を重ねるにつれ、三、四回ほど鍬で畑の土を掘ると、直ぐに息が上がって、小椅子に座り、陽を浴びながら対岸の山々の景観を眺め、疲労を回復するようになった。小椅子に座り、飲料水で喉を潤し、菓子類を頬張り、山々を眺めている時間がますます長くなったのだ。

小雨が降りだすと、対岸の山々の谷間から霧（靄）が発生し、束に流れると、本降りとなる。霧が西に流れると、雨が上がる。村人はこの自然現象を熟知し、霧の行方を観察して天気を判断する。晴れていても、周辺の天空の太陽と雲行きを観察して、これからの天気の変化を予想する。雨が降りそうだと、畑仕事を切り上げ、早々と家に帰っていく。私は小雨程度であれば、畑仕事を続け、小雨が降り続けば、小屋に入って雨模様を見る。本降りになると、初めて畑を後にすることにしている。畑仕事は毎週一泊二日と決めているので、それも止むを得ないと思っている。

返えされた畑を花畑にする

昨年秋、河岸段丘の下段の「綱本」の貸していた一五〇坪の畑（もと水田）を、耕作していた借り主が高齢化したため、地主の妻に返された。この一帯は三島由紀夫著『豊饒の海』第二巻『奔馬』第二十二章以降に登場する。三島の描写によれば、そこは「丁度桂川が直角をなして瀬走る本沢というところに、川にせり出したひろい露台のような」農地と集落である（どうでも良いことだが、実際の地名は「本沢」ではなく、「綱本」である）。返された畑は桂川のすぐ近くにあり、寝泊まりする家や

耕作している農地からかなり遠く、しかも崖沿いの急峻で、起伏の激しい坂道を往復しなければならない。足腰の弱くなった私には、往復するだけでも実にしんどい。

返された畑を耕作放棄地にする訳にもいかず、上段の畑仕事の合間に下段の畑に行き、草を刈ったところに花の種を蒔くか、球根を植えて花畑にすることにした。昨年冬、その畑の西側に緑肥用の蓮華草の種を蒔いた。春になって、蓮華草は紅紫色の蝶形の花が輪状に咲き、畑の中央には埋めたチューリップの球根六個の花が桃色に咲いていた。その周りに、ひまわりとマリーゴールドの種を蒔いたが、まだ咲いていない。畦道を通る村人はチューリップの花を見て、さぞ驚いたに違いない。

ところが、おなじような紅紫色で輪状に花をつけた仏の座を三角ホーで刈ったついでに、間違えて蓮華草の一部も刈ってしまった。まだ小さな杉菜を刈り、畑の南側に緑肥用のホワイトクローバー二袋の種を蒔いた。その一週間後、クローバーは点々と発芽していた。初夏になれば、畑の作物はたしかに生長するが、同時に雑草もまたたくましく生長する。そうなれば、除草はもはや手鎌や三角ホーでは手に負えない。そこで、重い草刈機を担いで持ち込み、密生した雑草を刈ったついでに、緑化用のソバの種一袋（一kg）を蒔いた。クローバーもソバも遅くとも六月には白い花を咲かせるだろう。雑草防止と多少の観賞用になってくれれば、大変有難い。

この一帯に移動養蜂家が蜂蜜を採集するため、蜜蜂の巣箱を置いた話を聞いたことがあるが、今、巣箱は置かれてなさそうだ。畑に蓮華草やソバの種を蒔き、花を咲かせるなら、それらを蜜源として定地養蜂することも考えないことはない。ただ、そこには現に六枚の水田があって、散布された農薬によって、蜂が被害を受けることも考えられる。その都度、素人として巣箱の管理に難儀するに違いない。だから、巣箱を置き、食用として天然蜜蜂を採取しようと思わない。

近辺の村人はその畑の持ち主が私の妻だと知っているが、たびたび現れる私をあまり見かけることのない「よそ者」と見做しているようだ。村人は、よそ者が畑に来て、乱雑に草花を咲かせ、何事をしているのかと、さぞや奇妙に思うだろう。私は、この土壌の良い畑に雑草が生えるままに放置して、荒地にしておくよりも、とりあえず、草刈機で除草し、花畑にしておく方が結構なことだと思うことにしている。「花より団子」の私は、花の球根を植え、あるいは緑肥の蓮華草やソバの種を蒔くということは、何分にも初めてなことで、どうなるか皆目見当がつかない。だから、ガーデニングなどと言って、花の咲く時期、種類、色彩に凝る気はさらさらない。

「里と山」の内発的発展

今後、この畑に出掛けることになる。そのついでに、

この典型的な里山の集落、農民の暮しや農地の現状について観察し、知見を得たいと思う。「奥山」との対比で「里山」と言い、それは「人里近くにあって人々の生活と結びついた山・森林」（『広辞苑』）、つまり「里の山」を意味する。私はあえて「里と山」（農山村）、農業地域の類型で言えば、都市的地域や平地農業地域と異なる「中山間農業地域」（中間農業地域と山間農業地域）の事例と考え、この綱本を危機に直面した「里山」の一つの事例として観察したい。だが、梅雨に入ったため、思うように「晴耕」できず、この畑に出掛ける機会を逸し、雑草の茂るままになってしまったようだ。

『いま里山が必要な理由』（田中淳夫、二〇一一年、改訂版）によれば、森林ジャーナリストの著者は奈良県の西南の生駒山中腹に住み、高い樹上に二畳程度ツリー・ハウスを「森遊び研究所」と名付け、そこから展望し、里山は「雑木林と、棚田や田畑が広がる世界」、「森や農地、草地などモザイク状にさまざまな自然状態が配置されているから、視覚的にも変化に富んでいて好ましい」という「日本人の感性に合った癒しの場」と実感した（六〇頁）。

ところが、「中山間農業地域」（里山）と「離島」（里海）と言えば、それに属する市町村数は全市町村総数の過半数を占め、しかも人口の自然減少、若者層の就業機会の不足、高齢化と過疎化、耕作放棄と農地の荒廃がイメージされ、総じて農村問題の危機的状況が集中的に現れている。すでに言い古されたが、経済の高度成長期のいわゆる「エネルギー革命」による山村の薪炭生産の崩壊、減反政策の導入とコメの輸入自由化、貿易自由化のためのウルグアイ・ラウンド農業合意による農産物の原則関税化とその引き下げなどによって、政策的に対応を迫られ、日本の農業生産は変容し、家族経営的な小規模農業は衰退を余儀なくされ、農山村は危機的な局面に立たされている。しかも、現在交渉中のTPP（環太平洋経済連携協定）の実施によって、これまで以上に農産物輸入を容易にして、農畜産業の衰退が生じるであろう。

このような農山村、とくに「中山間地域」の危機に直面し、保母武彦は地域外から資本や企業を自治体が誘致する「従来型の外発的開発」にたいして、それぞれの地域の生態系の特色を生かし、持続的に維持可能な「内発的発展」を提唱し、そのための「基本政策」として（一）農山村の自前の発展努力、（二）農山村と都市との連携、（三）国家財政による中山間地域維持政策が指摘され、これら三つの政策の結合が強調されている。とくに貴重な事例として北海道下川町、宮崎県綾町、新潟県塩沢町石内区などが紹介している（保母武彦『日本の農山村をどのように再生するか』、岩波現代文庫、一五四頁以下）。

ところが、東日本大震災と福島第一原発事故（二〇一一）を契機に、日本経済の「成長神話」と「安全神

話」の終焉が提起され、現代文明の限界という歴史的認識をもらたした。それと同時に、持続的に維持可能にする日本の社会経済の展開、むしろ過疎、少子高齢化、農林業の衰退、環境の劣化に直面している農山村の「内発的発展」のために、保母は「農山村をなぜ再生しなければならないのか」、「どんな農山村を目標とすべきか」、「農山村をどのように再生するか」という課題を読者自身に投げかけることで締めくくった（同書、三三二頁）。本書を農山村の厳密な分析と克明な考察、農政批判の農政学の啓蒙書として読むことが出来るが、残念ながら、私には農山村を再生するための実践的な手引き書として読むことは出来ない。

里山への関心と拡がり

アメリカの巨大証券会社のリーマン・ブラザーズの破綻に始まるリーマンショックは、表面的な好景気のアメリカ経済に危機をもたらし、さらにユーロ圏にも飛び火した。世界経済を震撼させたサブプライムローンや高利回りの金融商品を頂点とするマネー資本主義、「お金がお金を生む」という経済システムが破綻を来たした。

ところが、すでに触れた田中淳夫によれば、それ以前の二〇世紀の終わりごろから静かな里山ブームが起き、それは一過性のブームに終わらず、むしろブームはとくに都市の若手層にも拡大していると実感するようにな

った（前掲書、一頁以下）。「里と山」の生物多様性と複合的生態系への関心を決定的にしたのは、二〇一〇年一〇月に名古屋で開催された生物多様性条約第一〇回締約国会議（COP10）で「SATOYAMAイニシアティブ」が世界に向けて提案・受け入れられるとともに、環境問題への関心から自然の保護運動、コモンズとしての里山や里海の保全に関心を持つ人々に共感と連帯が広がった。

さて、これから触れる藻谷浩介は『デフレの正体―経済は「人口の波」で動く』（二〇一〇年）で、メディアで流布している「デフレ」「不景気」「生産性向上」「成長戦略」などのスローガンは曖昧で具体性に欠けるとして、既成の官庁統計その他をもとに独自に分析し、かつ明快な統計図表を作成し、最後に「高齢富裕層から若者への所得移転を」「女性の就労と経営参加を当たり前に」「労働者ではなく外国人観光客・短期定住客の受け入れ」を提唱している。NHK広島取材班（日本放送協会広島放送局）の井上恭介、夜久恭裕は『デフレの正体』を読み、「目から鱗」が落ち、共同でテレビ番組を制作した後、新たに書き下ろして出版されたのが、『里山資本主義』である。出版当初からベストセラーであるから、すでに読者は読まれているかも知れない。

NHK広島取材班は中国山地の岡山県真庭市で木質バイオマス発電や木質ペレットの製材業者、同じ中国山地

の広島県庄原市総領町で暖房用や煮炊き調理用のエコストーブ、瀬戸内海の山口県の柑橘類の生産に盛んな周防大島のジャム製造家や養蜂業者などをテレビ取材し、さらに海外では国土の七割以上も山地を占めるオーストリアの製材所や木造の七階建て高層建築、森林マイスター制度などを取材した結果、巨大発電所が生み出した二〇世紀型のエネルギーシステムを転換し、小口の電力を地域の中で効率的に消費し、自立する二一世紀型の新システムが確立するようになると予言した。

「里山資本主義」とは、マネーにすべて依存する「マネー資本主義」の経済システムたいして、自ら生活に不可欠な水、食料、燃料の確保のために暮らし、必要以上のマネーがなくとも生活出来るサブシステムを再構築しようとして案出された造語である。それは森林や相互扶助の人間関係という資産に加え、たえず生活に直結した最新のテクノロジーを開発し、つねに安心で安全な未来を志向する生活方針である。

だが、全国的に取材したが、地図で見れば、単に点的存在であり、果たして都市遠隔の中山間地域が「全国どこでも真似できるモデル」となるであろうか。つまり、全国的に面的に広がりが可能であろうか。日本の高齢化と過疎地、かつて「里の山」で育った材木林は外国の安い輸入木材に押され、さらに薪炭林も石油・ガス・電気のエネルギーによって顧みられなくなって、ハイキン

グ・コースを除き、「里の山」は人跡未踏の「奥の山」になった。しかも田畑の多くは再生不可能な耕作放棄地となった。

たしかに、すでに触れた保母武彦の「農山村の内発的発展論の見地」で明らかにされた三つの政策、繰り返せば、「農山村の自前の発展努力」、「農山村と都市との連携」、「国家財政による中山間地域維持政策」（それは不利な生産条件をカバーするためであって、画一的に財政的補助金の支給を意味しない）という、地域に即したハードとソフトの資源を結合した各地域が、本書の「里山資本主義」の適切な取材対象となりえたと言えよう。だが、テレビの放映、異色の出版で大いに関心をよんだが、「里山」（里と山）が「課題先進国を救う最先端のモデル」だと断言することは出来そうもない。

見分した集落の現状

すでに触れた桂川の河岸段丘の下段の畑に行き、ただ草取りをして不作付け地にするなら、花の種を蒔き、花の球根を植え、周辺の荒廃した田畑にたいして、「花」を添えようと考えた。だが、上段の畑の野菜作りで疲労困憊し、崖沿いの険しい坂道を上り下りして、桂川沿いの畑に出掛けるには、身体的にも時間的にも余裕はない。梅雨の晴れ間に上段の国道の甲州街道から下段にある畑を見分したら、耕作放棄地並みに雑草が茂り、手刈りで

はなく、草刈機で刈りないと、処置なしだと判断した。ところが、重い草刈機を担いであの坂道を下り、雑草畑で草刈機を振り回した後、疲労困憊して坂道を上ることを考えただけでも、ぞっとする。

一般的に言って、『耕作放棄地』は希望の条件がすべて揃った理想的な環境」、「耕作放棄地活用の肝は、楽しむことだ」（NHK取材班）というには、荒地を市民農園として貸したり、あるいは淡水魚の養殖池に利用することで可能だろう。しかし、先祖伝来の田畑を自分の代で耕作放棄地にするのは何とも情けないが、如何せん、後継の耕作者が不在で、しかも耕作者自身が超高齢化したために、草を刈るだけの体力も残されていない。まだ体力のある高齢者は自分の畑を耕し、ただ自給用に野菜を収穫するのに精一杯で、一駅離れた農協直営の直売所へ商品として超新鮮な野菜を出荷する気力も体力もない。

この一帯三町歩は第一次農業構造改善事業によって田畑は整然と整備され、水田に不可欠な水は桂川から電気ポンプで揚水され、各水田にコンクリートで整備された水路に配水された。その当初、各農家は稲作に従事したが、減反政策と後継者不足で水田を野菜畑に変えた。現在は二戸の兼業農家だけが水田耕作を継続している。事情を知る村人の話では、揚水ポンプの電気代がかかり過ぎて、自家消費用に収穫した米と売られている米の金額を比較すると、大して変わらないだろうということである。日頃の水田の管理（見廻り）、田植えと稲刈りの家族総出の手間とひま、さらに田植えと稲刈りのそれぞれ専用の農機具とガソリン代を考えると、割の合う米作りではない。半世紀近く、修理して騙し騙し使ってきた揚水ポンプが完全に修復不能となれば、二戸の農家は米作りを中止するであろう。

すでに大半の農家は米作りを止め、野菜作りに変えた。しかもなかには野菜作りもやめて、耕作放棄地か、不作付け地にした。昔、桂川への土留めのために東側に真竹を植えた。ところが、真竹の地下茎が東側一帯の田畑に拡がり、村人は筍を存分に収穫出来た。その当初、村人は筍の収穫を満喫したが、その後は竹林となり、稲作や野菜も耕作不能地となり、すでに耕作放棄地となった。さらに東側の現存の田畑にも真竹の地下茎が延び、適切に対処しなければ、耕作不能地になるだろう。都市近郊の通勤可能な里山でさえ（そうである故に、田畑の荒廃を座視出来るのであろう）、もはや再生不能な農山村になった。

里山に未来を託すのはただの妄想に過ぎない

下段の畑から北側にある錯雑な家々を見ると、養蚕で栄えた時期の家屋の風情は、わずかに一軒を残すだけであった。それ以外は多少広いが、都市並みの家屋が大半

である。なかには空き家というよりも、窓ガラスは割れ、玄関口は歪み、記録破りの大雪で屋根のトタン板は破壊され、明らかに廃屋を見かけた。さらに土建業に励む農家もあって、数台の車の他、錆びた鉄管やおよそ使用不能な木材が乱雑に収納された二階建ての堅牢なコンクリート造りの倉庫も見られた。農道沿いの空き地に農機具や工事用の機具が乱雑に放置されていた。工事業を廃業したのであろう。今冬の二度に亘る大雪のため、屋根が破損したり、屋根瓦が移動したり、外壁が損傷したりして、地元の住宅建設業者などに緊急な発注が生じた。年度内に契約が成立したことから、三%の消費増税を免れたそうだ。ただ、夏になって緊急な修復が一段落すると、仕事の発注が続くかどうか分からない。

下段で耕作する村人は「土壌が良いから、収穫した野菜は抜群に美味い」と自慢している。残念ながら、私はここで野菜を栽培する手間とひまはなく、雑草が茂る耕作放棄地にしないため、手がりで雑草を刈ったが、初夏を迎えると、手に負えなくなり、急峻な坂道を下り、重い草刈機を持ち込み、雑草を刈ることにしたが、上段の畑作りに手間とひまがかかり、なかなか実施出来ないでいる。春、下段の隣の畑は他人に金を支払い、手がりで除草し、雑草の芽が出てくる頃、耕耘機を転がし、不作付け地にしたようだ。私は、ともかく草刈機で雑草を刈り、ついでにそこに緑肥のクローバーやソバの種を観賞用に蒔くこととしている。毎日が日曜日の我が身だが、都市生活に馴染む私は、この地で温かい人間的交流を実感するが、あくまでも余所者に過ぎない。だから、健康と趣味の野菜作りを終えたなら、さっさと畑を退散することにしている。都市近郊の狭苦しい生活とは異なり、天気の様子を気にしながら、野菜作りのために土に馴染み、くたびれて桂川対岸の山林を眺めていると、たしかに爽快な気分になる。村人のなかには、この山林では炭焼きが行われ、焼き人として定着した。その後、ハツリ屋とよばれる解体・土建業の一人親方として暮した。また一時期は分収育林としてスギやヒノキの針葉樹が植林されたが、すでに手入れのない「奥の山」として放置されている。スーパー林道がせっせと新設されているが、皮肉なことに、木材や林産物の運搬のための道路として使用されず、土砂を桂川沿いの岩壁に捨てるための大型トラックが走行する道路として利用されている。トラック一台分の土砂を捨てると、地権者に不労所得として一万円が支払われるそうだが、鮎の恰好の釣り場の桂川はどうなるのであろうか。しかもこの林道の各所の路肩に産業廃棄物の投棄禁止の警告板が立っている。「貧すれば鈍する」とはこのことを言うのであろう。

これまで触れた『日本の農山村をどう再生するか』、『里山資本主義』が紹介・取材された事例のように、農山村の特性を生かし、村人の自主的な努力によって、い

わば「内発的発展」を遂げた地域もあろう。すべて金銭に換算し、人間への敬意や自然の恵みを実感することのない「マネー資本主義」に代え、「里山資本主義」の要素を取り込むことで、果たして「明るい高齢化社会を生み出す」ことが出来るであろうか。現に、高齢の耕作者は足腰の痛みに耐えて野良仕事をしている。彼らは、都市でサラリーマン生活を送る息子、遠くに嫁に行った娘が先祖伝来のこの田畑をどのように考えているのか、絶えず不安がよぎるであろう。『里山資本主義』の結語として、藻谷浩介は「爽やかな風が吹き抜ける未来、もう、一度は忘れ去られた里山の麓から始まっている」と力説しているが、現実の大半の「里と山」は荒廃し、もはや再生不能で、そこに望みを託するには時期を失したと考える。

（擱筆、平成二六年六月末日）

付記

七月二日（水）、ジャガイモの収穫を終えた。例年になく、豊作だった。二月の大雪で、土中に大量に水分を含み、五月晴れの日々でジャガイモの成育条件に恵まれたのであろう。だが、ショウガとカボチャの芽は出なかった。

密室銀行（十六）

匠　克仁

〈前号までのあらすじ〉

M78星雲のバルタン星から遠く離れた銀河系太陽系地球アジア日本関東東京都港区赤坂二丁目3番6号の銀行の金庫室で密室殺人事件が発生した。

〈登場人物〉

【東西銀行赤坂支店の人々】

竹森　和久　主人公　融資係　東城出身　草食系
熊本　猛　被害者　支店長　西都出身　肉食系　将軍
沢木　雅子　出納係　発見者　竹森の♡　肉食系
草津　史郎　取引先係　発見者　ロールキャベツ系
鹿田　高志　取引先係長　発見者　通用口の正鍵を保有
鳥居　速実　副支店長　発見者　耐火扉の正鍵を保有
半谷　直樹　融資課長　格子扉の正鍵を保有
守屋　盛秀　前支店長　殿様
跡出　継道　後任支店長　元支店部部付長　仏様
冷泉　清春　預金課長　植物人間　耐火扉の副鍵（死体が握った鍵）の管理者　格子扉の副鍵を保有する預金主任の上司　支店の正鍵は交代で管理するので、銀行内で三つの鍵を同時に持つことのできた唯一の人物
岩木　長司　副上級主任統括担当部長代理補佐代行心得　赤坂支店に三十年以上勤務しているので、秘密の抜け穴を知っていても不思議はない
奥田　建志　取引先係長　鍵の仕組みに詳しいので、鍵に細工できても不思議はない

穴吹　由夫　取引裂係長　仕事ができず取引先を引き裂いている無能な出世頭　東西銀行グループの近玉証券（前近畿大阪西都あけぼのファイナンシャルＵＦＯ・ＵＳＪプレジデントじゅげむじゅげむ東城協和埼玉証券）社長の息子でコネ入社　父親はその後、日本ジャパン損害保険グループの、はるはあけぼのやうやうしろくなりゆくやまぎわすこしあかりてむらさきだちたるくものほそくたなびきたる生命保険株式会社の社外取締役となったが、そのことは小説に関係ない。また穴吹本人も犯人でなく今後は一度も登場しないので、全く覚えなくてもよい人物

【銀行以外の人々】

波戸田　耕造　熊本支店長の義兄　元建設大臣
和加　啓示　刑事Ａ
及川　出果　刑事Ｂ
匠　克仁　作者Ｃ
宅見　勝弘　作者Ｄ

【特別友情出演】

バルタン星人　空間を自由に移動できる（鍵のかかった金庫室に自由に出入りできる）。時間を止めることができる。人間に変装することができる。誰に変装しているかは、ヒ♡・ミ♡・ツ♡

和加刑事は犯人がバックから襲ったのでないと言った。
そのことは竹森自身もうすうす気づいていたことであった。いきなりバックから襲われたのは、酔いつぶれて先輩の家に泊まったときくらいだと、変なことを思い出した。
「あなたに見られたことに犯人は気付いていた。なぜ、あなたを殺さなかったのでしょうか」
及川刑事が不愉快な質問をした。
「それは犯人が恨んでいたのは支店長だけであって、僕ではなかったからです」
竹森自身も犯人を見たような気がしたが、記憶が無かった。密室という完全犯罪を計画する犯人が、証人を生かしておくのも一貫性が無いように感じた。
「あなたが記憶を失うことを犯人は予想することはできません。この点については、捜査本部でもいくつかの意見があります。例えば、本当は記憶を失っていないのでないかと…」
「本当に記憶がなくなったのです。証明しろと言われても無理ですが」
竹森が反論した。
「あなたが記憶喪失としたら、犯人はあなたに知られても、告発されないという親しい人物であるかもしれません。あなたが犯人を知っていても隠すような人は支店にいませんか」
この質問が矛盾していることに竹森は気づいた。
「殺人犯になってもかばう人なんて支店にいません」
かばう人が本当にいるのであれば、答える訳がないので、意味の無い質問である。
もし犯人が雅子だとしたら、竹森は言わないだろうと思った。雅子が踏み台を振り回すのは想像できない…こともないなあ、と竹森は思った。
「あなたを棚に押し付け傷つけたのは、支店長ではありませんか」
和加刑事がまた質問した。
「それはありません。支店長が暴力を振るう訳がありません。やはり犯人にやられたと思います」
竹森は内心では反対のことを考えていた。あんな粗暴な支店長なら取引先の倒産で担当者を殴りつけるくらいはやりかねないということである。
実際に土曜日に支店長と二人で休日出勤することになったとき、殴られる覚悟をしていた。
持井建設の稟議で何かミスをしたかと考えた。支店長の言う通りに書いたつもりだが、意に沿わない書き方をしたかもしれなかった。
「第三者があなたと支店長を金庫室に閉じ込めた。金庫室の中で何かトラブルがあり、あなたは支店長に殴られ、反撃して殺してしまった…というのは週刊誌でも報道されていますが、警察では別の考えです」
「意外です。警察もそう信じていると思っていました」
竹森は嫌味を言った。
「第三者がいなくても、このような状況は可能であると考えています」
及川刑事の言葉に竹森は驚いた。
「もし僕が犯人であったら、密室はどうして作ったのですか。金庫室は中から鍵をかけることができません」
この密室は単純な密室でなく、『逆密室』であると竹森は新しい概念を考えていた。
逆密室とは、密室の中に被害者と一緒にいたがゆえに、犯人であり得ないという設定である。
例えば、密室に二人いて一人が殺害されるが、外からの銃弾による犯行の場合である。密室内の一人が犯人であり得ず、密室外の不在証明（アリバイ）が成立する。
今回の事件でも竹森が犯人であれば、どのようにして金庫室の格子扉と耐火扉の鍵を施錠したのか、そのトリックを解明しなければならない。
しかも、密室の外では防犯カメラのデッキが盗まれており、これも竹森の犯行が難しいことを裏付けている。
「格子扉の鍵は、あなたの証言だけで、あなた以外に格子扉が閉められているのを見ていません。もっとも格子扉が閉まっていても、格子の隙間から手を入れて鍵をかけることができます」

及川刑事の説明が続いた。
「それでは、耐火扉はどうやって鍵をかけるのですか。耐火扉は内側から閉めることを想定していませんから、取手やハンドル等は全く在りません。鍵をかけるどころか、中から単に閉めることすらできないのですよ」
「耐火扉は大きく開いた状態で外から押します。重みでゆっくりと慣性で閉まるので、その間に隙間から中に入ることができます」
「勢いで閉めようとしても、耐火扉は反動で少し開いて、完全に閉めることはできません」
「耐火扉には開けたときに固定するための鉄のストッパーがついています。慣性だけではうまく閉まらなくても最後はストッパーを引けばしっかり閉まります」
竹森は耐火扉の構造を思い出した。ストッパーとは、耐火扉の内側下部に付いた、先端がゴムで覆われている三十センチ位の鉄製の棒である。通常は上向きにあるが、下ろして扉を固定する。
耐火扉に設置されているドアストッパーは硬くて動かしにくいので、普段は使用されていない。代りに、ドアに付属したものでなく、同じくドアストッパーという製品名の細長い三角形のプラスチックを挟んでいる。
「ちょうどL字型アングルがありますので、内側からストッパーと壁とを固定すれば、外から開けることをできなくなります。金庫室に鍵がかかっているとみせかけることはできます」
「開かない状態にしても、金庫室の中からシリンダー錠もダイアル錠も鍵はかけられないでしょう」
「ダイアル錠は外から目で見て、開いているか、閉まっているか、分かりません。シリンダー錠の鍵を外して開かなければ、ダイアル錠がかかっていると誤解するでしょう」
「ダイアル錠も最後の数字で止まっていれば、気付きます。それにシリンダー錠は副支店長が開ける時に鍵がかかっていなければ、分かります」
「混乱した状態では気付かないでしょう」
及川刑事の説明に竹森は納得できなかった。
金庫室を開けたときには、四人も証人がいるのである。
「四人全員がシリンダー錠の鍵がかかっていなくて中から閉めているだけだと勘違いすることはありえません」
竹森は反論した後、質問を変えた。
「防犯カメラのデッキが盗まれていました。私が犯人であれば、金庫室に閉じ込められて盗むことができません。これはどう説明しますか」
「そうとは限りません。デッキはあなたにも盗むことができます」
今度は和加刑事が説明しだした。デッキの盗難が自分の無実を証明すると竹森は期待していた。
「事前に盗んでいて、その後に殺せば良いでしょう。自

分が防犯カメラに映らないように前もって工作していたら、犯行は可能です」
当事者なので竹森は考えつかなかったが、客観的には自分がデッキを盗むことが可能であることは理解した。
「凶器の踏み台に残された指紋から多くの赤阪支店の行員の指紋がでてきました。あなたの指紋は、他の人の指紋をおおうように付いていました」
先日のメモ用紙だけでなく、凶器にも竹森の指紋がついていた。
「支店長の死体から踏み台をどかしたとき、指紋が付いたと思います」
凶器に指紋があるのは竹森も当然ととらえている。
「それに犯人は手袋をしたのでありませんか」
「犯人が仮に手袋をしていたら、他の人の指紋が消えているか、薄くなるでしょう。しかし、そのような事実は有りませんでした。握り締めた状態で残された指紋は、あなたのものだけです」
明らかに竹森とって不利な状況であることは分かったが、警察側も竹森を犯人と断定できる状況でない様子であった。
その後も二人の刑事の訊問が続いた。三十分ほどでようやく竹森は解放された。
こんな密室殺人は宇宙人でもいないと解決できないと竹森は思った。

十二

竹森は毎月に一回、歴楽会という歴史研究会の集まりに出席している。
歴楽会は、東城銀行のOBが友人と一緒に設立したもので、今年で三十年を迎えた。
会のメンバーで小論を執筆して、過去に三冊、単行本を出版している。
竹森自身も『奴隷王朝』と『源平交代思想』というタイトルで執筆した。
歴史好きの竹森は東城銀行のOBから誘われて、入会したのである。年配の人が多く、竹森が会員の中で最も若かった。
設立したもう一人は大学病院の医者であった。そのため、五十名の会員は銀行関係者と医療関係者とが半分ずつになっている。
毎月第二土曜日の午後から約一時間の講演が有り、その後に三十分程の質疑応答が行われる。
講演者は病院で働く監察医であるが、その経験を基にした著作もある。
竹森は今回の講演を楽しみにしていた。
講演の題は『武蔵坊弁慶の立往生』である。
武蔵坊弁慶の立往生は医学的に証明できると案内文に書いていたので、興味を持っていた。何か殺人事件の解決のヒントにならないかと竹森は期待していたのである。

地球征服

匠　克仁

ぼくには夢（アイ・ハブ・ア・ドリーム）がある。
それは地球征服である。
われながら、いかにも、ぼくらしい夢だなあ。夢はでっかい方がいい。
青年よ大志を抱け。燕雀いずくんぞ鴻鵠の志を知らんや。
天上天下唯我独尊・天下無双・天下布武（げ）・天下一品（か）の志なのである。いや、天地無用の志がしっくりくる。
ぼくはバルタン星人なのであるから、これくらいの夢を持って当然である。
地球征服など、バルタン星人のハサミで赤子の手をひねるくらい、ジャンケンで勝つくらい易しいのである。
なんせ、ぼくは必殺技を持っている。
ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーンと周りの空気を瞬間冷凍するという世にもおそろしいおぞましいおどろおどろしいおどろくべき必殺技である。
この必殺技をもってすれば、地球征服などたやすいのである。
アメリカ大統領だろうがロシア大統領だろうが国連事務総長だろうがかなうことはできないのである。
ぼくが必殺技をかけている間に、ぼくは地球代表との間に地球平和的無償譲渡契約を取り交わすのである。
ぼくの空気瞬間冷凍の恐ろしさをまだ知らない人がいるかもしれない。
この必殺技にかかると、相手は口をポカンと開けて、持っていたボールペンは床に落として、まるで彫刻のように固まってしまうのである。
前回は、この必殺技を使ったとき、三人くらいボールペンを落としたくらいしか書かなかった。
実は、他にも電話中の二人が受話器を落として、四人が椅子から転がり落ちて、階段を転がり落ちる悲鳴が響き渡り、入口のドアを開けて入ろうとした人は、途中で自分でドアを閉めて、体の真ん中をドアに挟んでのたうちまわっていて、コピーをとっていた人はコピー機の下敷きになっていた。
技にかかった相手の視線は虚空をただよい、左右の目は異なる方向に揺れ動き、口からはよだれを垂らすのである。
だいたい十秒くらいは周りの空間が静寂につつまれ、酸欠の金魚のように口をパクパクすることになる。
最近は使っていないせいか、ときどきこの技が漏れてしまう。ふだんからぼくの周りによく小バエが飛び交っているのであるが、独り言をいうと、数十匹の小バエが一気に凍って堕ちていった。
夏に蚊取り線香を使わないのは、ぼくが寝言を言うと、勝手に凍って落ちているからである。
バルタンでなくバルサンという密室殺虫事件用の殺虫剤を炊いたあとのようにゴキブリ軍団も裏返って死に絶える。ぼくは人間バルサンであり、バルサン星人である。
この前は、まんじのネタを思いついてぼくがつぶやいたときに、真上を飛んでいた飛行機があやうく墜落しそうになった。近ごろ全世界で行方不明になったり、墜落したりという飛行機事故があるが、実は全部ぼくのせいである。
まんじのネタを言い続けると、太陽は凍りつき、月は砕け散るのである。
瞬間冷凍の技はかけた当の本人も返り血を浴び、深い痛手を負うという捨て身の荒技なのである。
ぼくも随分とイタイ目にあった。未だに、ぼくはこの後遺症と付き合わなければならない。
本当にこの必殺技を出した時は、その後二週間ほど職場で誰からも口をきかれなかったなあ～。
二十年くらい前に出したこの必殺技のせいで、いまだにぼくのことを同性愛者だとかヤクザの親戚と勘違いしている人がいる。その後でわざわざ否定していないから、勘違いして当然であるが。
もっとも、そのおかげで、同性愛者であってもヤクザの親戚であってもあいかわらず付き合ってくれる博愛の人しかぼくの周りにいない。
事実は違うけど、誤解されるっていうのはマゾ的な快感があるのである。
誤解されたまま人生を終えてもいいかなと思って生きている。

＊

この瞬間冷凍の技をまんじでも読者に試したいなという誘惑に駆られている。

まんじの見開き2ページで黒地にドデカの白抜き文字を使って、『ぼくは実は女なんだあああ』と書こうかなあと思った。

次のページの冒頭に『というのは冗談』と入れるつもりであるが、毎度のことで必ずや忘れるだろう。

読者を瞬間冷凍するのはしばらく止めておこう。

＊

空気瞬間冷凍の必殺技を自ら使ったのは、ぼくの人生で二回しかないつもりであった。

他にも無意識の内に軽く空気瞬間冷凍の技を出していたことに、今さら思い出した。

銀行に入社して間もない頃である。

「バカ！」

ぼくがミスをして、上司がぼくを叱責した。よくある日常的な職場の風景である。

それまで、ぼくは上司に一切口答えをしたことがなかったし、非常に従順な部下であったと思う。ところが…。

「ぼくはバカじゃないです」

反論したのである。ぼくはどんなに怒られても右から左へ聞き流していたし、職場で怒ったことがなかった。

ところが、唯一「頭が悪い」みたいなことを言われると、非常に過激で過剰な異常反応をした。若気の至りで、学歴コンプレックスがあったのである。

「バカじゃなければ、お前は何だ！」

上司が大声で怒鳴り返した。上司は温厚な性格で、それまで一度も怒ったことが無い。このやり取りで、

ピキーーーーン

くらい空気が凍っていた。半冷凍くらいである。そういえば、このとき職場の同僚が彫像のように固まった。

だいたい、ぼくは都合の悪いことは一切忘れてしまうのであるが、前回のエッセイを書いて思い出した。

この場合、ぼくのミスで上司に迷惑をかけているのである。はたから見れば、ぼくの方が逆ギレしている状況である。

ぼくは温厚な上司を怒らせるのがうまい。

そのときのぼくは堂々と胸を張って答えた。

「ぼくはバカでなく、アホです」

今から考えると、よくそんなアホなことを怒る上司に言ったものだなあと思うが、自分で自分を誉めたい。

当時のぼくの感覚では、バカというのは『知能の著しく劣る生きる価値の無い人間』を指していたし、アホというのは『ドジだけど憎めない愛らしい人間』というものであった。

というのは、関西人のぼくの思い込みであり、事実とは遠う。ちょうど人生の半分を東日本と西日本で住んだ

ので、今では分かっている。

「愛してる」「バカ♡」とか「好きやねん」「アホ♡」みたいな、そんな会話をしてみたいなあ。

ぼくと上司の会話の成り行きを見守るかのように同僚たちの視線が上司とぼくの間を交互に行きかっている。

「ババババッバンングァガガアアホ～～～～～～」

上司はまた怒鳴った。

しばらく、はあはあ荒く息を吐いていた。ところが、この上司は根っから温厚なだけあって、すぐにいつもの自分を取り戻した。

「アホ。ほんっまに、お前はアホやなああ」

上司はいつもの柔和な表情で言ったのである。

「そうです。ぼくはバカでなく、アホです」

周りの凍った空気が解凍したのである。止まっていた周りの同僚も動き出した。

ぼくは瞬間冷凍だけでなく、瞬間解凍もできるのである。ぼくは人間電子レンジである。

ちなみに、このときは上司が名古屋出身、ぼくが大阪出身、職場が東京という状況であった。

この話は、日本の二大文明についての歴史的哲学的思索に基づいたエピソードである。

東日本にはバカ文明があり、西日本にはアホ文明がある。

中国における黄河文明と揚子江（長江）文明、中南米アメリカのおけるインカ文明とマヤ（アステカ）文明みたいなものである。

東洋文明と西洋文明のような二大対立文明である。

アホ文明とバカ文明の間に深い断絶があり、それが名古屋である。

ぼくは歴史研究が好きであるが、今後はアホ文明とバカ文明について研究していきたいと思っている。

＊

実は、他にも地球を征服できる必殺技がある。

ズボンとパンツを膝下までずらして、額と両膝の三点が正三角形になるように床に接する。その状態でお尻を突き上げる。

人間ピラミッドというか、人間テトラポッドである。

そこでお尻の穴と額と両ひざの四点が正四面体の頂点になったときに、ワームホールが発生する。

ワームホールというのは、宇宙物理学上の概念で、アインシュタイン＝ローゼンブリッジというのが正式名称である。アインシュタインの相対性理論により証明されている。

ブラックホールとホワイトホールとを結びつけるトンネルである。

異次元空間のひずみが生じ、ぼくのお尻の穴がワームホールとなり、バルタン星のミサイル発射基地と結びつくのである。

つまり、この状態になったとき、ぼくのお尻の穴から何百万発ものミサイルが発射される。

人生においてこのような状態になることはあまりないが、一度だけこの状態になりかけたことがある。

あの時、もう三ミリ直腸鏡の位置がずれていたら、ぼくのお尻の穴からミサイルが発射され、地球が滅んでいたかもしれない。

＊

ここまで読んで、多くの読者は信じたかもしれないが、冗談である。ぼくが冗談を書いたら信じる人が多いし、真実を書いても冗談としか受け取られない人が多い。

論文を書く際には、事実と意見とを明確に分けて書かなければならない。エッセイを書く際には、事実と想像とを分けて書かなければならない。

そうでないと、ぼくの他のエッセイまでも、でっちあげと勘違いされてしまう。

『液体のてんとうむし』は、ちょっとくらいでっちあげていると疑われそうだが、合成保存料なし、脚色料なしの無添加・無香料の天然生一番搾り100％である。

ちなみにこのときのエッセイはサンドイッチ式作文法と自分で勝手に名づけて書いていた。

二章は、面白くない文章がだらだら続いていて、これでは誰も読まない。それを一章の普通の文章と三章のお笑い文章とをはさみこんでサンドイッチにしたのである。

＊

地球征服といっても、ぼくの意味するのは少し違っているのである。

ぼくは、全地球の全人類を愛と幸福と平和で征服したいと考えているのである。

ぼくのようなバルタン星人からみると、地球上で地球人同士が地球上の土地争いをめぐって殺し合いをしているなんて、本当になげかわしい。

宇宙の広大さに比べれば、無に近いわずかな物質のことで、宇宙より大事な生命が失われる現実に涙を禁じ得ない。

ぼくはアフリカの最貧国のいたるところに向かって、大陸弾道弾ミサイルをぶちこみたいと思っている。

このミサイルには核弾頭の代わりに、栄養価の高い食べ物が入っている。

もちろんミサイル自体も食糧でできている。このミサイルがあれば、一回の発射で飢えに苦しむ何万人の人に食糧を届けるのである。

我ながらとてつもないスケールの大きい野望である。なんかカッコいいなあ。子どものヒーローになったみたいだ。

こうやって地球を征服するのである。

近ごろは地球よりも恥丘や乳球を征服したい…いかん。いかん。また頭の中を妄想ハリケーンが渦巻いてきた。

＊

ぼくには夢（アイ・ハブ・アートリーム）がある。

それは、全裸の女子大生の満員の電車である。

これも、いかにもぼくらしい夢だなあ。

おっぱいがいっぱいなのである。すっぽんぽんを見て、ぼくのすっぽんが亀首をもたげるのである。

ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

と読者が瞬間冷凍したかもしれない。

こんなことで、冷凍しているようでは未だ甘い。ぼくのいる世界はマイナス274℃である。誰も友達がいない極寒世界である。

またまたまたから、ぼくの煩悩くんが勝手にキーボードを打ち出している。

ぼくの一本勃打法は健在である。

ぼくは原稿を通勤電車内で書いていることが多い。最近は、向こう側の網棚の上にパソコンを載せてから座って、ろくろっ首のように煩悩くんが一本勃打法で入力しているのである。

打ち終わると、煩悩くんは電気掃除機のコードのように、オオアリクイの蟻がついた舌のように、しゅるしゅると股間に収納される。

先日は地下鉄で、煩悩くんが吊革にからまったまま、しまい忘れて、ぼくはホームに降りたのである。その状態で乗車ドアが閉まった。煩悩くんを挟んだまま、地下鉄が発車したのである。

ぼくは股間を乗車ドアに挟まれた状態で地下鉄に引きずられていった。トンネルの壁に激突死する、っと思った瞬間に急ブレーキで止まって、壁から三ミリのところで激突死をまぬがれたのである。

満員電車の乗客はみんなムンクの叫びのようであった。

原稿を書くのは、命がけだなあ。

さすがに、満員電車で勃ちっぱなし、いや立ちっぱなしだと、ノートパソコンで煩悩くんを使って、打ちにくい。

パソコンで原稿を書けないときには、携帯電話でメールを打って、自分あてに送信する。右手親指で打つことが多いが、たまにズボンのポケットに中で煩悩くんに打たせている。

ときどき、右手で携帯を持ちながら、煩悩くんを股間から右の腋の下を通して、長そでからコンニチハして入力する。

そのメールをコピーして原稿に貼り付ける。ぼくの原稿の一部は携帯電話のメールで打ったものである。

携帯で自分あてに送信したつもりが、宛先を間違えることがよくある。

ぼくからの携帯メールを間違えて受け取った女性は、煩悩くんとかお尻の穴とか全裸の女子大生で満員の電車とか文章が送られて凍りついたかもしれない。

（初校で、『小学生のときの肛門』となっていたのを訂正した。別に小学生のころ肛門の隣に冤罪とマジックで書いたのではない）

＊

全裸の女子大生で満員の電車は実際に見た夢だが、ぼくらしくオチがついている。オチの無い夢は見ない。

夢の中でぼくは車両を往復しているのだが、ぼくと全裸の女子大生の間では時間の進むスピードが違うのである。

ぼくの小説と現実世界との違いと同じ様である。

どうやら、ぼくが一往復する三分間が三年に相当するらしい。

ぼくはふだんから、女性の年齢差の三年を『一お姉さん』という単位を発明して、その単位で計算している。

三年というのは中学高校の学年から推測している。

実を言うと、職場の女性同士の人間関係の把握に苦労していて、苦労に苦労を重ねて、苦肉の策で生み出した単位なのである。

いわゆる女性というものは、自分が誰かより年上と勘違いされると激怒する生物であるというノーベル賞級のものすごい真実を、ぼくは大発見したのである。

夢の中では満員電車の車両内を行って戻ってくる間に周りは『一お姉さん』年をとっているのである。

二往復で『二お姉さん』つまり六年、十往復すると三

これくらい妄想が膨らむと、煩悩くんが大きくなりすぎて一本勃打法ができない。

股間から木が生えている感じである。まるで電信柱にかくれんぼしている子供のようにきょろきょろと左右に顔を出しながら、今は両手でこの原稿を書いている。

例えると、5本の短いヒゲ根のあるネギになった心境である。煩悩くんがネギの本体とすると、ぼくの頭と両手両足が5本のヒゲ根である。

＊

読んでの通り、ぼくは慎み深い性格である。思いついたこと書きたいことの0．00001%も表現できないシャイな性格である。

だから、今回のタイトルも脱肛いや脱稿直前で慎み深いものに変更した。もともとのタイトルは、『全裸の女子大生の満員電車』であったが、つつましいおしとやかなタイトルにした。

幽玄というか侘び寂びの世界である。秘すれば花の風姿花伝の心境である。

＊

それにしても、ぼくがチカン冤罪で捕まったら、この文章がぼくにとって不利な状況証拠にされるであろう。

冤罪はぼくが幼い頃から夢に見る恐怖である。小学生のときの校門の隣に『冤罪許すな』という、大きな真っ赤な文字で、書いていたのを思い出した。

十年も年をとっているのである。

何回か往復したところで、女性が女子大生から微熟女になった。さらに熟女となり、そのうち熟熟熟熟熟熟熟熟熟女になった。

いかーん。こんなこと書いていると、まんじの多くの女性読者から見放される。

それどころか、女性差別者と言われる。ぼくは誤解されるのが好きであるが、性差別者と思われることは嫌である。

女性専用車両というのがあるが、それなら男性専用車両があるべきだ。ぼくは男性専用車両に乗りたいのである。男性専用車両って聞くだけで、ウキウキするなあ。ぼくが国会議員になる際には公約として男性専用車両の実現を掲げる。

満員電車は、おばあさんだらけである。さすがに乳はもめない。ぼくは肩と腰をもみながら、往復するのである。

おっぱいがいっぱいと喜んでいたぼくであるが、おっぱいがしっぱいになって、いっぱいいっぱいになっているのである。

そのうち、電車内の元女子大生全員が老衰で死んでしまう。

その死体で満載した満員電車の中をひたすら往復するのである。そのうち死体が腐ってくる。その腐った死肉の中を歩くのである。

さらには、うじ虫がわいてきて、うじ虫の中を往復し続ける。

そのうち、最後には、うじ虫も死に絶えて、残ったのは、しゃれこうべだけになる。

しゃれこうべ満載の電車の中を往復し続けるのである。

というところで、夢から目が覚めた。

ぼくは満員電車の中で、たちっぱなしのまま、うたた寝していたのである。体の一部が吊革にからまったまま、汗でびっしょりになっていた。

実際には通勤途中の一駅分の瞬眠の夢である。誇張の夢か胡蝶の夢か、簡単の夢か邯鄲の夢か。なんとも仏教的無常観のある夢である。

＊

夢といっているから何ごとも願望が実現しないのである。夢をゴールとか目標とか計画と言い換えれば、実現するのである。

人間が月に行くというのも同じである。きちんと細分化してロードマップを描けば、どんなことも叶うのである。

例えば、先ほどの全裸の女子大生の満員電車である。これを夢といっていると、実現不可能である。

しかし、予定としてタイムスケジュールを組むと、実現可能である。例えば、こんな感じである。

1　国会議員になる
2　刑法のわいせつ物ちんれつ罪を改正する。
3　ヌーディストビーチをつくる。
4　ビーチ内に女子大を作る。
5　女子大の教授になる
6　女子寮を作る。
7　女子大と女子寮の間に鉄道を敷く。
8　その鉄道で通勤する。

最後なんか通勤するだけで夢がかなえてしまう。

どんな夢もこうやって細分化すれば、絶対に夢はかなうのである。現実感がわいてきた。

まず、男性専用車両を公約に国会議員になることから始めよう。

絶対に全裸の女子大生の満員電車はかなえられる。かなった後には必ず、しゃれこうべの満員電車が待っているだろう。

＊

文章を書いていると、物書きとしての夢を見る。

ぼくの夢は、直木賞を受賞すること…ではない。

直木賞の授賞式に、バルタン星人の着ぐるみ…いやいや本来のバルタン星人の姿で行くことである。

そして、自分の直腸鏡いやいやハサミで賞状を受け取ることである。

そうしたら、おそらく会場は

ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

と空気が瞬間冷凍するに違いない。

歴代の直木賞の受賞者は晴れやかな格好をしているが、バルタン星人のような宇宙人姿は初めてであろう。

＊

ぼくの本当の夢は何かというと…。

日本は国が経済成長して、自殺率が増えた。アジアやアフリカなどの国が日本の経済成長を見習うようにすると、経済的に豊かであるが、心の貧しい世界が増えてくるであろう。

ぼくの書いたものを読んで、クスッと笑って、自殺するのをやめたという人がいたら、作者冥利につきるのである。

七十億人の内、この地球上に一人でもいたら、二人分の人生を生きたことになる。ぼくのエッセイを読んで、自殺する気が百分の一でも殺がれた人が百人いたらいい。

ぼくの究極の夢は、ノーベル平和賞の授賞式にバルタン星人の格好で出てきて、地球を

ピキーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン

と瞬間冷凍することである。

地球全体がクスっと笑えるような奇跡を起こせば、ぼくにとって、ささやかな地球征服である。

ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ～～～～。

(Woke(V) (Woke(V) (Woke(V) (Woke(V) (Woke(V)

口紅（その十五）

池莉　原作
山本勉　訳

〈登場人物〉

【趙家の人々】
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親

【江家の人々】
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）

嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）
寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）
呉文彗（寧岸と結婚）
寧遠（寧岸と呉文彗の息子）
張喜（趙耀根の会社の同僚）
李主任（趙耀根の会社の上司）
張書記（趙耀根の会社の上司）
羅桂香（江暁歌の会社の同僚）
黎美娟（江暁鴎の恋人）
宗漢（江暁歌が作った会社の専務）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）
藍雲（宗漢の恋人、ラジオ局のディスクジョッキー）

第二十七章　罠

（一）

報道車が超人本社の正門を走り抜け、急ブレーキをかけて停まった。

数名の機材を担いだ記者と消費者協会の面々が車から降りて来て、玄関に向かってまっしぐらに駆けて行った。

警備員は、

「何をするんですか」

と慌てて彼らを遮った。

「私達は記者です。それに消費者協会の人もいます。趙社長を捜しているのです」

「どうかお待ち下さい。私達は、あなた方が面会の申し込みをしてあるか見に行って来ます」

記者と消費者協会員は、

「私達は予約の申込みをしていませんが、どうしても、直接趙社長にお目にかかって、お話がしたいのです。私達は通常の仕事をしているのです。あなた方は進んで協力してください」

と腹を立てた。警備員は、

「予約の申し込みのない者は、一律に何人たりとも通すわけにまいりません」

と意地を張って、頑なに彼らを拒否した。

記者は、ビデオカメラを警備員に向けて撮影を始めた。

警備員は彼らを阻止したが、記者達はそれをものともせず、保安員を押しのけて中に入って行った。この騒動は会社の従業員を驚かせた。

張喜は、数人を連れて追いかけて行き、その中の一人が、ぐいっと記者の腕を掴んだ。

張喜は、

「何をするんだ。君達は会社の中まで立ち入って、いったい何をするんだ」

と声を荒げた。消費者協会員が、

「私達は、消費者協会の者です。趙社長に会いたいのです」

と痛さで顔をゆがめながら言った。

「私は、副社長の張喜と申します。何か用事があるのでしたら、先ず私に訊ねてください」

「腕を捕まれて痛かったんです。あなた方はここで何をしようとしているのですか？殴りたいのですか？私達が入っていくのを阻止したいのですか？私はあなたとは話をしません。どうやらあなた方は皆、社長面をしているのですね。私達はどうしても趙社長に会いたいのです」

ビデオカメラは張喜に向けられ、撮影を始めた。張喜は手のひらを伸ばしてレンズを遮った。

「君達は許可も得ないで、みだりに何を撮るんだ」

張喜は、撮影している記者を押し倒した。

「私達は記者です。撮影機材を壊さないでください」

張喜は、

「記者が一体何だっていうんだ。何をそんなに得意満面になっているんだ」

と怒鳴った。

二度やりとりしている時に、趙耀根が突然現れて、大声で叫んだ。

「君達は何をしているんだ」

みんな急に静まりかえると、視線を彼に浴びせた。

趙耀根は、

「騒ぐな。話があるならオフィスに来て言いたまえ」

と語気を強めた。

趙耀根は、記者と消費者協会員を彼のオフィスに招き入れ、従業員を全て部屋の外に追い出した。

たった今、攻撃を受けたばかりの記者と消費者員は服装が乱れて、ハアハアと喘ぎながら、視線を趙耀根に向けた。

趙耀根は、

「お伺いしますが、皆さんはどこの会社の方ですか？」

と訊ねた。ある人が、

「私達は、消費者協会の者です」

と言って身分証明書を取り出し、左右に振って見せた。

一人が、

「テレビ局の者です」

と言って、手に持っていたビデオカメラを挙げて見せた。

「ほう、そうですか。皆さんは私どものお客様です。私は、皆さんが、今日お見えになるとは知らなくて、お待ちしておりませんでした。どうぞお許し下さい。たった今、ちょっとした誤解が生じましたが、一切の責任はこの私にございます。私は従業員への教育を強化し、今後このようなことが起こらないように努めてまいります」

「あなた方の警備員は、あまりにも無礼です。記者を取り囲んで妨害してきたんですよ」

「わかりました。私は、改めて皆様に深くお詫びを申し上げます。皆さんが、今日私どものところにお見えになったのには、きっと、何かご用がおありなのでしょう？」

「そうです。あなたの会社の永葆春内服液は、偽物であるという投書が寄せられています」

積み重ねられた投書のコピーが趙耀根に手渡された。

「ご覧下さい。あなた方の会社の内服液は、ただの砂糖水で、最初からサプリメントとしての効果がないとある人は訴えています。あなた方の内服液にはホルモン剤が含まれていて、服用後に大きな副作用があると訴えているんですよ」

趙耀根は、

「この二つの見解は、元来矛盾していますよ」
と言った。
「だから、私達は今日、あなた方の会社の内服液について調査とサンプリングをして、化学分析を行いたいのです。内服液が本物か偽物か、化学分析をすれば、直ぐに明らかになるのではないでしょうか。テレビ局は、私達の調査に協力してくれているのです。近頃、内服液は競争が激しく、社会の関心事になっていますので、私達は消費者協会に協力してもらい、あなた方の会社の永葆春内服液の情況について、ルポルタージュを行います」
と言うと、記者は無造作にマイクを趙耀根に突き付け、
「あなたのお名前をお伺いします」
と、インタビューを始めた。
ビデオカメラは、ザアザアと音を立てて回り始めた。
趙耀根は、
「趙です」
と思わず答えた。
「おー、趙社長ですか。お訊ねします。私達の今回の取材について、どのような感想をお持ちですか」
趙耀根は、
「私は、政治協商会議の委員だ」
と、ちょっと腹を立てて答えた。
記者は、
「私がお訊ねしていることは、何か感想をお持ちですかということです」
と言って、構わず続けた。
「私の感想はこうだ。今日の社会は自由主義経済の無秩序な競争に入っていて、天下大乱、流言飛語が飛び交っている。そうして見ると、あなた方が行っている行為は、我が国の改革開放と経済の発展のためにならないのです。意志の強い人は、どんな試練にも耐えられる。我が永葆春は歓迎され、いかなる検査にも耐えられます」
「どんな試練にも耐えられると言うなら、なぜ、社長の従業員は私達が会社へ入って行くのを阻止したのですか？」
「彼らは暴力行為をしたのではない。これは真実ではありません。彼らはただ、少し感情的になっただけなんです」
「わかりました。あなたの論法を借りれば、感情的になったということですが、彼らはなぜ、感情的になる必要があったのです？」
「私は言いましたよ。意志の堅い人は、どんな試練にも耐えられると。我が社の内服液が良いか悪いか、サンプル検査をしてもいいですよ。我が社の内服液と従業員の態度とは、何ら関係がありませんから」
記者は、趙耀根の傲慢で謙虚さがなく、どうにも手がつけられない態度を見て取ると、ますます不機嫌になり、気勢激しく趙耀根に迫り、一連の問題をたたみかけた。

（二）
連中が帰った後、趙耀根はドアを閉め、椅子に深く腰を落として、今日の問題の出所はいったいどこにあるのか考えた。
どうやら誰かの陰謀にかかったようだ。
内服液市場は世情騒然となっていて、彼の息の根を止めたいと思っている多くの競争相手がいる。彼らは誰でも、このような下司なことをやらかす可能性がある。
彼は、誰が自分の敵であるのかをはっきりさせないと対策が打てなかった。
電話のベルがけたたましく鳴り、彼をびっくりさせた。
彼は受話器を取ると、
「もしもし」
と元気のない声で話しかけた。
「耀根でしょう？」
なんと、その声は唐燕影だった。
「耀根、あなたのこと、テレビで見たわよ。あなたに同情するわ」
この売女め、他人の不幸を見て笑っている。
「今回、あなたの商売への打撃は小さくないわね。お大事に。東方紅（革命歌曲）、太陽は昇り、永葆春に趙耀根が現れる。私の心の中の太陽が、いつまでも沈まないことを願っているわ」
趙耀根は黙っていた。沈黙を守るしかなく、口を開けば自ら恥をさらすだけだった。
「耀根、あなたの元へ帰っていいかしら。私を信じてちょうだい。私が帰れば、あなたを助けることができるわ。さもなければ、あなたは死を選ぶしかないのよ」
唐燕影は満ち足りた気持ちで、ゆっくりと一息ついた。
「あなたはかつて、私にある秘密を教えてくれたことがあったわ。絶対多数の内服液は、厳格な品質検査に耐えられないってね。もしにわか成金になりたければ、二つの方法がある。追いはぎをするのでなければ、薬を売ることだと言ったことがあるわ。勿論、にせ薬だわ。趙耀根、趙耀根ったら。レベルの低い人の逆鱗に触れたら最後ってこと。あなたは何もかもわかっているのに。私は、決してその辺にいるつまらない人間にはなりたくないわ。でも、私にそうさせる人がいるのよ」
唐燕影は、話しながらケラケラと笑い出した。
これで、趙耀根は、やっと自分の敵が誰であるのかわかった。
このたちの悪い女は、意気軒昂な趙耀根の心を寒々とさせた。

（二）

超人会社のオフィスビルに入って行くと、宗漢は、軍隊が総崩れするということがどんなことなのかはっきりわかった。

厳寒の警備は放任状態で、たくさんの内服液が山のように積まれており、人がほとんど通ることができないほどだった。

超人会社の従業員達が、数人の人と言い争いをしている。それは返品か、あるいは金の取り立てだと、一目でわかった。

宗漢は、彼らに構わず真っ直ぐ中に入って行った。従業員がガヤガヤと騒ぎ立てているので、趙耀根のオフィスが何処なのか見当もつかなかったが、やっと一人の人を捕まえて聞いた。

「趙社長は、何処にいるんだ?」

その従業員は、

「今、みんな趙社長を捜しているんです。あなたはどなたですか。ひょっとして新聞記者じゃないですか?」

と疑念を抱いて、宗漢を見て言った。

「私は趙社長の友人です。趙社長は何処にいるのか、私に教えてください」

従業員は宗漢としばらく見合っていたが、遂に軟化した。

「わかりました。ついて来てください」

彼は宗漢を連れて、ガヤガヤと騒ぎ立てている廊下を通り抜け、曲がりくねりながら階段を数階上がり、とうとう趙耀根のオフィスのドアの前に来た。

入り口に腰掛けている女性の秘書を指していった。

「彼女に取りつがせましょう」

女性秘書は、

「お名前は?」

とデスクの受話器を取り上げて言った。

「趙社長に伝えてください。宗漢と言います」

宗漢は、遂に趙耀根のオフィスに入った。

趙耀根は宗漢を見ると、手を左右に振るだけで、挨拶をしたともとれた。

彼は椅子に深く沈み込んでいて、少しも立とうとする気配がなかった。彼は確かにダメになっている。心も体もボロボロだ。顔はむくみ、身なりもだらしなく、目尻に黄色い目やにが着き、白髪の入り混じった髪は、もじゃもじゃとしてうず高く積み上げられた枯れ草のようだった。

宗漢は、少しこの男が哀れに思えてきた。人は、本来このようにもろくて弱く、一撃に耐えられないものである。派手にうわべを飾り立てても、それははかない夢でしかない。金銀財宝を持っていても、一瞬のうちに乞食として罵られるのだ。

趙耀根のこの様子を見て、宗漢は心中大いに動揺した。

「あなたに会って、容易ならざることなのがわかりました」

「僕は、もうどうしようもないんだ。この二日間、返品や借金の取り立て、それに数人の小さな地方新聞社の記者があらゆる手段を講じて僕を捜そうとしているんだ。もし従業員のためでなかったら、とっくに雲隠れしてしまいたいよ」

趙耀根は、宗漢をじっと見つめていたが、ふと、

「暁歌が君を来させたんだろう?」

と訊ねた。宗漢は、

「私自身もあなたに会いたかったのです」

と頷いた。

「完全に御陀仏さ。彼女に合わす顔がないよ。彼女に体を大事にするように伝えてくれ。商業界は冷酷だ。今回のことは、彼女への教訓としてほしい」

「そんなに深刻に考えないでください。このご時世、金さえあれば奇跡を起こすことができるのですから」

「問題は、僕が既に貧乏になってしまったということだ。僕の会社の内服液は、一文の値打ちもない。たとえ僕を支援してくれる人がいて、金を工面してくれたとしても、企業家としての名誉やイメージはお金では買うことができないんだ」

趙耀根は落ちぶれてしまった。ぶるぶると震えながらワインボトルを開け、グラスにと酒を注いだ。彼は大きな口を開けて酒を飲み、ダークレッドの液体は彼のあごに伝わってワイシャツの襟に流れ落ちていった。

宗漢には彼を見る勇気がなく、体の向きをかえて、窓の外の鉛色の空を見るよりほかなかった。

趙耀根は、

「さあ、君も一杯飲めよ。最高のフランスワインだ。飲まなきゃ損だぞ」

と宗漢にグラスを挙げて言った。

(四)

江暁歌は宗漢から趙耀根の情況を聞き終わると、思わず眉をしかめた。そして、暫く考えた後で話し始めた。

「どうも変だわ。彼の受容能力は相当なもののはずよ。彼は、死以外のことはたいしたことないと言った事があるの。彼は多くの挫折を経験してきたけど、これまで自信を喪失したことはなかったわ。だから今回もそんなことはないと思っていたのに」

「しかし、人は変わるものです。人は、素手で立ち向かって奮闘している時は、一般的に忍耐力と心理的受容能力は比較的強いものです。このことが、彼が事業を成功させる助けになったはずです。しかし、一旦名声をほしいままにしてしまうと、かえってもろくて弱い人間に変わってしまうのでしょう。この種の無重力状態の感覚

は、人に目まいを起こさせ、崩壊させる結果となるのです。彼は私にこういいました。『今、軍隊が総崩れの状態だ』と。このことは、私に『崩壊』という二文字を思い浮かばせました。彼の会社のすべてのものが崩壊していて、人が主を失った下僕のようにあちこち逃げ回って、世紀末が来たようでした」

嘉児は、傍らで夢中になって話を聞いていて、口を挟んできた。

「そんなことないよ。私のお父さんは、打ちのめされるはずがないよ」

羅桂香も、

「嘉児の言う通りよ。趙社長のような頑健な人を誰が打ち倒せるっていうの。そんなことありっこないわ」

と言った。宗漢は、

「趙社長は、今日ここまで成功し、お金ばかりでなく会社も手に入れ、政治においてもある程度の成功を収めました。彼らの企業は、東方紅（革命歌曲）を歌い、歌詞の中で「太陽が昇り、我が社長、趙耀根は、太陽のようだ」と言っています。この意味は、趙耀根は全てを支配し、何でも彼の言う通りになるということです。しかし、突如として不測の事態が起こり、彼の企業はあっという間に致命的な打撃を受け、彼の偉大な人間像も大きな音を立てて崩れ去ってしまったのです。このとてつもないギャップに、どうして彼が耐えることができるでしょうか？耐えられるはずがないのです。今彼に必要なのは、紛れもなくお金はなく、精神的な励ましです。彼を奮い立たせる人なのです」

と、彼の状況を分析した。

江暁歌は宗漢の分析を聞いて、物思いに耽った。

嘉児は、

「もしお母さんがお父さんに会いに行くことができれば、お父さんは元気になってくれるかなあ？」

と言った。羅桂香は、

「もちろんよ」

と答えた。嘉児は、

「それなら、お母さんは行くべきだと思うわ。お父さんとお母さんは、離婚したけど、友達としてつきあえるでしょう？」

宗漢は、

「嘉児の見方は正しいよ」

と答えた。羅桂香は、

「私も、この時期に暁歌が趙社長に会いに行くべきだと思うわ。私達は会社を作ったことがあるわ。だから、私達だってこのような状況に陥るかもしれないわ。お互いに助け合っていかなくちゃね」

と言った。江暁歌は、

「わかったわ。彼に会いに行くわ」

と決心して答えた。嘉児はニコニコして、

「賛成！お父さんに電話するわよ」

（五）

江暁歌が趙耀根を見舞いに来ると聞いて、趙家は正月を迎えたように、いっぺんに忙しくなった。

趙耀根は数人の左官職人を呼び寄せて、昔ながらの古い家を修理し、部屋の中も外も新しく塗り替えた。

趙耀珍は街に出かけて料理の材料を調達し、煮物や揚げ物を作ったので、家中に酒や料理の臭いが漂った。

母親はじっとしていられなくなり、お茶はあるか、お茶うけの西瓜やカボチャの種があるか確かめた。

趙耀珍はあちこちひっくり返して、かつて江暁歌が家でなくした二冊の本を探し出し、当時、姉さん（江暁歌）に本を返したことにまで話が及んだ。

約束の時間になると、一家は身なりを一新して、賓客を迎えようと家の中でじっと座って待っていた。

みんなが真面目ぶっているのを見て、趙耀珍は昔のことを思い起こし、おかしくなった。

趙耀珍は、

「姉さんに会ったら、兄さんが何て言うか見届けてやるわ」

と趙耀根に言った。

趙耀根はしょんぼりして、何も言わずに、しょげかえった振りをした。

趙耀珍は、

「世界中で私が一番敬服している女性は姉よ。兄さんは、一人の男として甲斐性なさ過ぎよ。昔、死ぬの生きるのって騒いで、どうしても姉さんと結婚するって言ったわよね。兄さん達を助けるために、私はお母さんに口汚く罵られたわ。でも、兄さんは姉さんに楽しい暮らしをさせたかしら？今振り返ってみると、姉さんは私達の家でやりきれない思いをして、遂には離婚という結末を迎えたのよ」

と意気込んで言った。母親は、

「元はと言えば、本当は暁歌が離婚を言い出したんじゃない」

と口を挟んできた。趙耀珍は、

「誰が先に言い出そうと、離婚のことはみんなよくわかっているわ。姉さんは独身女性よ。孤軍奮闘して、こんなにも大きな服飾会社を作ったのよ。兄さんの会社も大きいけど、姉さんの会社も小さくないわ。凄いのは、姉さんは困難に直面すればするほど、勇気を持って前に進んだことよ。兄さんのように挫折してしょげかえっていないわ」

母親は、

「耀珍、人を責めるにも言い方っていうものがあるじゃないの」

と言った。趙耀珍は、

「私が、ことさら兄さんを責めているとでも言うの？でも、兄さんには、痛いところをついてやらなきゃ、物覚えが悪いんだから。それに、一日中東方紅を歌って、太陽が昇るとか何とか言って、恥ずかしくないの？」

と言った。趙耀根は、

「本当のことを言おう。目の前のこの小さな波風で、どうして我が航空母艦をひっくり返すことができようか？できっこないさ。僕は天下無敵さ」

と高ぶって答えた。趙耀珍は、

「また、ほらを吹いて」

とすかさず言った。趙耀根は、

「お前は可愛い妹だよ。僕は、本当にお前にほらなんか吹いていないよ。僕の財産は、でっかくて想像のしようがないんだ。今回ちょっとしくじったけどな。最初は、僕の胸中は確かに不愉快で元気がなかったよ。でも実は、その後お前達に芝居を打って見せたんだ。僕は、みんなが僕に対して、本当に思いを寄せているかどうかを知りたかったんだ。暁歌が僕のことを気に掛けてくれているかどうか、確かめたかったんだ。暁歌は、ずっと僕と接するのを断固として拒んできたんだ。僕が今回相手の計略の裏をかいた結果、暁歌自ら僕に近づいてきたんだ。ほら、うまくいっただろう」

と言った。趙耀珍は、

「なんてずる賢いの！本当に悪徳商人だわ。あなたの面倒を見ていると、ろくなことありゃしないわ」

と叫んだ。

趙耀根は微笑んだ。

ちょうどこの時、趙耀虎がまっしぐらに駆け込んで来て、

「来たよ。来たよ」

と立て続けに叫んだ。

急にみんなどうしたらよいかわからなくなった。特に母親は立ったり座ったり、おどおどしていた。

江暁歌が微笑みを浮かべながら、遂に長年離れていた家に入ってきた。羅桂香が江暁歌に付き添って来た。

趙耀珍は直ぐに飛んで行き、

「姉さん、本当によく来てくれたわね。私達は首を長くして待っていたのよ。特に兄さんはね」

と江暁歌の手を引っ張って言った。

母親は、ぎゅっと江暁歌の手を握りしめて、まだ何も言わないうちに老いの涙が頬を流れ落ちた。

（二八）

盛りだくさんの夕ご飯を食べ終わると、趙耀根は江暁歌と二人きりで話をしたくなった。江暁歌もちょうど趙耀根と相談したいことがあった。二人は彼らがかつ

て住んでいた部屋に入って行った。

部屋の壁は既に新しく塗り替えられていたが、古い家具は昔のままで、江暁歌を初めて来たような、懐かしい気持ちにさせた。

彼女は感動して、小さな机の表面に触れた。それは、彼女がかつて苦学した机であり、趙耀根を監獄から救い出すために、上告書を急いで書いた場所でもあった。

彼女は、この小さな机がまだ残っていて、しかも元の場所に変わらずに置かれているとは思いもよらなかった。彼女は、突然ある種の衝動を覚え、小さな机の引き出しを開けてみたくなったが、すぐに思い留まった。彼女は話を切り出し、要点を簡潔に話した。

「私はお金を用意してきたわ。今回の災難を乗り切るのに役立つかもしれないわ」

趙耀根は、

「暁歌、僕は君にとっても感謝しているんだ。でも、君のお金をもらうことなどできないよ」

と笑いながら返事をした。江暁歌は、

「なぜなの」

と驚き、いぶかって訊ねた。

「ありのままを言おう。近頃内服液や栄養ドリンクの商売は、競争がとても激しいんだ。だから、僕は他の商売に目を向けたのさ。栄枯盛衰、これは物事が発展していく上で必然の法則なんだ。僕は生産規模を縮小して投資も減らし、資金を別のプロジェクトに切り替えたんだ。今、内服液は僕の会社のバイの三分の一のシェアーを占めているに過ぎないんだ。たとえ人に根こそぎ持って行かれても、根本的な損失は受けないはずだ。僕は、とうの昔に自己資本経営をやめたよ。今の僕の会社は株式制度を導入した企業グループで、経営の範囲は多方面に渡っていて、今僕は株式をできるだけ早く上場させる仕事をしているんだ」

江暁歌はアラビアンナイトを聞いているようで、びっくりして目を大きく見開いた。

「僕は、長江遊覧が先行き明るいと見ているんだ。大山峡ダムの建設が進むにつれて、長江には、きっと旅行ブームがやってくると思うよ。だから、僕は旅行会社を作って、数十万元を投資して、五つ星級の豪華旅行客船を建造したんだ。今この船は、既にドッグに浮かんでいて、進水の準備をしている。一昨日、僕は船を見に行ってきたんだ。労働者は、ちょうど船に名前を書いているところだったんだ。この船に何て名前をつけたか当ててご覧よ」

江暁歌は、さっぱりわからないと、首を横に振った。

「僕が最も尊敬する君のお父さんを記念して、船を老船長と命名したんだ。同時に君にも深いお詫びの気持ちも込めたんだ」

趙耀根が突然謝ったので、心の準備ができていなかっ

た江暁歌は、どんな受け答えをすればよいのかわからなかった。彼女は、呆然として趙耀根を見ていた。趙耀根も彼女を見ていた。

彼の真心のある眼光が彼女の心を揺さぶり、再び彼女の心に火がつくことを願った。

(七)

江暁歌は視線を下に向け、あのよく慣れ親しんだ机の上を眺めた。その机には、古い傷跡が残されていた。それは、趙耀根が投獄された日に、彼女がうっかり付けてしまったものだった。歳月を経て、それは既に記念となっていた。

趙耀根は、

「暁歌、僕達は長江の水を飲んで育ってきたんだ。君のお父さんは一生船上の暮らしで、航海しながら、君に元気でいるかと汽笛でエールを送ったんだ。君が、長江や汽船、それに長江の水が岸に寄せる音や汽笛の音にどんな思いを寄せていたのか、僕は知っているよ。老船長号も、僕の気持ちを君に伝えることができると思っているよ」

と感情を込めて言った。江暁歌は、

「老船長を見ることができるかしら?」

と、突然顔を上げて、にっこり笑って趙耀根に尋ねた。

(八)

抑揚のあるスロー・フォー・ステップのダンスミュージックがそっと波打つと、趙耀根は、紳士らしく立ち上がり、江暁歌に誘いの手を伸ばした。

江暁歌は恥ずかしそうに一時ためらったが、喜んで席を立つと、趙耀根とダンスホールに入った。

彼らは抱き合いながら踊っていたが、ダンスを踊るというより、音楽に合わせてゆっくりと歩いているという方が正しかっただろう。

彼らは暫く黙って、心に再び湧き起こった激しさの中に陶酔していった。話したいことがたくさんあったが、どこから話せばよいのかわからなかった。

次第に最初の激しさは静まり、彼らは呼吸もピッタリと合った。

江暁歌は、服の下の筋肉の感触から、趙耀根が時間と共に円熟さを増した男になっているのを感じ取った。

江暁歌は自分の心が溶けて行くのを感じた。彼女は少女のように恋愛の息吹を感じ、少々酒に酔ったような気持ちになった。

厚化粧の唐燕影は、暗くなった片隅で、彼女のモデル達に指図して、ステージに上がって演じる準備をしていた。ふとダンスホールに目をやると、抱き合いながら踊

この笑顔は趙耀根を驚喜させた。

「とっても光栄だよ」

「あなたは不運な様子を装っていたのね。私を騙しているわ。それに、あらゆる人を騙してきたわ」

趙耀根は得意になって、

「僕は下心があるわけじゃなくて、それをうまく有利に導いただけだよ。僕自身でさえも、こんなに大きなパイを生み出すことができるとは思ってもみなかったんだ」

と言った。

「あなたはやっぱり傲慢ね」

「僕はずっと傲慢だったよ。この欠点は、直すのが難しいんだ」

彼らは益々気持ちがリラックスして、かつてお互いに気持ちが通っていたものが、またひそかに彼らの間に戻ってきた。

「時は一瞬のうちに過ぎ去ってしまったわ」

趙耀根は、

「随分と長い年月を経て、僕はやっと、君に申し訳ないことをしたと、身にしみてわかったんだ。僕は本当にろくでなしだ」

と、もう一度お詫びの気持ちを表した。

江暁歌は、黙って微笑んだ。

っている趙耀根と江暁歌が目に入った。彼女は突如として顔色を変えると、瞳の中に陰険で残酷な冷たい光が走った。

唐燕影は、趙耀根と江暁歌をじろりと見つめた。彼女は、一組のカップルが曲に合わせてダンスを踊り、ひそひそと語り合いながら顔に幸せそうな笑みが溢れているのを見た。

彼女は、にわかに趙耀根を破滅に陥れたことが、逆に彼ら二人のよりを戻すことになってしまったことを知り、怒りを抑えることができなくなった。

骨髄に染みこむほどの妬みは彼女の美しい顔を歪めた。ダンスの曲が終わると、パートナー達は手に手を取ってダンスホールを降りたが、彼女はがらんとしたホールを見つめてぽかんとしていた。しかし、モデル達が舞台に上がって軽快なリズムで演技をしたので、唐燕影はやっと我に返った。彼女はDJの前に歩み寄り、小声で繰り返し言い含めた。

ダンスが終わったとき、趙耀根と江暁歌の隔たりは消えていた。彼らは気持ちが高ぶり、飲み物を飲みながら言葉を交わし、モデルの演技など気にも留めなかった。

江暁歌は、

「嘉児は大きくなったわ」

と話しかけた。趙耀根は、

「そうだね。今では僕と大人の会話をするようになったんだ。話している言葉は新しい言葉で、僕でさえ聞いたことがないんだ」

と言った。

「嘉児の世代と私たちの世代では違うわ」

「違うね。特に価値観がね。僕達とは全く別物だね」

「昔、私は離婚が彼女の心に暗い影を落とすことを心配したわ。今思えば、私の心配は取り越し苦労だったようね。彼女の心理状態は極めて健康よ」

「それは、やはり君の心のこもったしつけと正しい導きのおかげじゃないのかなあ。嘉児の話だと、君はおばあちゃんを大切にするように教育してくれたそうじゃないか。これまで僕の母親は君に辛く当たったけれど、母親に恨み心も持たなかったそうじゃないか。君の度量が大きくて心の広い人柄が、僕達の子どもに良い影響を及ぼし、健全な人格を持たせたんだ」

「あなた、また悪い癖が出たわよ。おだてるつもり?」

「良心に誓うよ。僕は本当のことを言ったまでさ」

子どものことに話が及ぶと、二人とも一層関心が高まった。この時、唐燕影が舞台の前に現れてみんなにお辞儀をし、悲しみ哀れむ歌を歌い始めた。

彼女の朦朧とした視線は、聴衆をなめるように見渡し、ついに趙耀根の姿を捕らえた。彼女の視線につかまり、趙耀根は少し腹を立てたが、江暁歌はかえって水の如く静かで、唐燕影の歌を聞かぬ振りをした。

唐燕影はひるまずしつこく歌い、趙耀根をじっと見つめていた。聴衆は喝采の拍手を浴びせ、音楽は天地を震撼させた。

唐燕影は舞台を降ると、まっすぐ趙耀根の目の前まで歩いてきて、ヘビのように彼らを取り囲んで歌いながら踊り、顔の向きを変えて江暁歌に凶悪な笑いを浮かべた。趙耀根はその場にいられなくなり、立ち上がると、

「帰ろう」

と言って、ぶるぶる震えている江暁歌を引っ張った。

唐燕影は突然マイクロフォンを投げ捨て、

「江暁歌、趙耀根と別れるんだ。さもなければお前を一生恨んでやる」

と声をからして力の限り叫んだ。

唐燕影の失態はダンスホールを騒然とさせた。

趙耀根と江暁歌はどうしようもなくなり、この場を逃れた。

唐燕影はグラスの酒をいっぺんに口の中に入れると報復の心地よさが彼女の体にみなぎり、頭を高く上げてケラケラと笑った。

彼女の傍にいた、きざにめかした身なりの男は、一口でグラスの中の飲み物を吸るように飲み干した。

「燕影、今日はやけに痛快そうじゃないか?」

「勿論よ。彼奴らにみんなの前で恥をかかせてやったわ。恥ずかしくて、穴があったら逃げ込みたかったんじゃないの?しっぽを巻いてこそこそ逃げていったわ」

「君はあの趙っていう奴を気にしているのかい」

「勿論よ。気にしているわ。奴は金がありすぎるのよ。私が想像する以上に、もっと金を持っているわ。それなのに、彼は六千六百元しか私に寄こさなかったのよ。このケチな野郎め。私の青春、美貌、それに愛は、値段のつけようのないものだわ。彼に勝手に台無しにさせてたまるものですか。どうやら今回も私の負けよ。私ったら、また彼らの縁を取り持ったようだわ。私は大枚はたいて彼奴を中傷して、会社を倒産に追い込んだけど、結局奴の女房の同情を買って、彼らの仲直りに一役買ってしまったわ。私はどうしたら彼を殺すことができるかしら?」

「簡単さ。娘を誘拐するのさ。そうすれば、全ては解決する」

「あんたって頭いいわね。私、頭のいい人好きよ」

(九)

江暁歌は、逃げ隠れてばかりで電話も受けないし、趙耀根が寄こしたFAXもそのまま放っておいた。彼女はこの男と本当に関わりたくなかった。

今までずっと、趙耀根に対して比較的厳しく臨んでいた羅桂香だったが、彼女にこう言ってなだめた。

「趙耀根は心からあなたのことを思っているわ。男なんてみんな子どもよ。彼には成長する過程が必要だったの。違った環境や他の女を経験して、彼はやっとあなたが大切な存在だってわかったのよ。だから、あなたが癇癪を起こすのは間違っていると思うわ。ここで、趙耀根を拒むのはよくないわ」

「あなたが言っていることは道理にかなっているかもしれないわ。私は、彼の過去の過ちにできるだけこだわってはいけないって、自分に言い聞かせているの。でもね、考えてみてよ。彼らは8年も一緒に暮らしてきたのよ。私と過ごした時間より長いのよ。どうして彼らが深く心を通わしていなかったとわかるのよ。そんなことわかるはずないじゃない。唐燕影は私より若くて綺麗だわ。彼女が彼を一途に思い続けているのだとしたら、よりが戻ったってちっとも不思議じゃないわ」

「でもね、私にはあなたの心の奥深くに趙耀根への愛があることがわかっているわ。考えすぎて自分をいじめちゃダメよ。あなたは随分と辛い思いをしてきたわ。一人の人間の一生なんて、あっという間よ」

江暁歌は、

「そうよ。だから、また傷つくのが怖いの。心から愛が欲しいの。完璧な愛がね。昔はずっとこんな世界があると思っていたわ」

と言った。羅桂香は、

「あなたったら、あなたの理想主義があなたを苦しめているのよ。この世界に絶対なんてないわ。でも、誓って言うけど、趙耀根のあなたへの気持ちは、絶対に真心から出たものよ。他のカップルと違って、あなた達は幾度となくでこぼこの道を歩んできたじゃない。例えば、宗漢だってあなたのことが好きよ。でも、思い切って言うけど、あなたが彼の愛情を受け入れるべきかどうか、自信がないの。私は、宗漢をこれまでずっと、理解できなかったの」

江暁歌は、

「何バカなこと言ってるのよ。どうして宗漢のことを引き合いに出すの。そんなこと聞いてしまったら、一緒に仕事ができなくなるわ」

と言った。羅桂香は、

「もうよして。とぼけるのはやめて。ひょっとしたら、私達ずっととぼけてきたのかしらね。結局、宗漢は自分の気持ちを言わなかったわ。あなた方はうまくやっているんだから、私はもうこれ以上言うのをやめるわ。要するに、趙耀根にこのような態度を取らないでって忠告したいのよ。今まであなたと趙耀根は色々なことがあったから、これまで積み上げてきたことを大切にして欲しいのよ」

第二十八章　嘉児へのプレゼント

（一）

寧岸は、悲しみ憤り、原稿を机に叩きつけた。

原稿が四散したので、呉文彗は急いで身をかがめて拾い集めた。

「畜生、この世界ったら何だ。彼奴らはつまらない人間のくせに、他人より優れていると思い上がっているんだ。出版社の新米の編集小僧が、よりによって僕の本は自分で金を払って版権を買ったって、大胆にも言うんだ。こんなことデタラメじゃないか。たとえこの寧岸が無能だとしても、そんなことできるわけないじゃないか。僕の本が、もし読む人も買う人もいないのなら、僕は始めから出版するはずがないじゃないか。僕は、家の一角が本の山で占拠されないように燃やしているのさ」

呉文彗は、優しい顔つきで寧岸の傍に座ったものの、ため息をもらす勇気もなかった。

実は、彼女は寧岸が八つ当たりするのに慣れてしまっていた。折良く江暁暢がやってきた。呉文彗は大急ぎで立ち上がると、笑顔を見せ、身振り手振りで話をした。

「いらっしゃい」

呉文彗は、これでやっと寧岸がこれ以上当たり散らさないと思った。

江暁暢は、

「寧岸先生、こんにちは」

と、手を高く上げて挨拶した。寧岸は、

「こんにちは」

と無愛想に答えた。

呉文彗は、寧岸が江暁暢をそっけなくあしらったので、人一倍心を込めて彼女に座るように勧め、お茶を淹れるより他なかった。

江暁暢は呉文彗を呼び寄せ、身振り手振りで話をした。しかし、いくら話をしても自分の考えをしっかりと伝えられなかったので、江暁暢は苛立った。

「寧岸先生、ちょっとお話ししていいですか」

寧岸は、頭を上げて江暁暢を見たが、その表情は面倒くさそうに思えた。

江暁暢は、

「少し時間をくれない？決してあなたの貴重な創作活動の邪魔をしないから。あなたは大変なインテリね。一日中ずっと家にこもっているんで、あなたの代わりに体を動かして、健康を維持するものが必要ね。私は、それをあなたに代わって探して来たの。さっき文彗に説明したわ。彼女も大方買うことに決めたらしいわ。最後にあなたの駄目押しがほしいのよ。さあ、買うの買わないの、どっち？」

と迫った。寧岸は、

「それは、どんなものなんだい」

と訊ねた。

「高級で豪華な多機能付きのあんま機よ。ハイテクノロジー商品よ。値段もとっても安いわ。十五％引きにしてあげるから、四千百八十元だけくれればいいわ。四千元あまりで健康や長寿を買えるなんて、お得だと思わない？一台持って来るから試してみて。大丈夫よ。私達、古くからの親友じゃない。お二人なら私のあんま機を壊さないと思うから。たとえ壊しても構わないわ。私が全責任を負うから試してみてよ。効果がなければ、買わなくていいわ。このあんま機は輸入直販よ。店では売っていないわ。商店で売っていないわ。彼らは仕入れることができないのよ。今では多くの人がこのあんま機を買ったわ。ある広告では、『中国人は自分の家のお医者さんを持つべきである』と言っているじゃない。このあんま機は家庭のお医者さんよ。あんま機があれば、どんな病気になっても病院に駆け込む必要がないわ。作家というのは朝から晩まで家にいるんだから、このあんま機が必要よ」

「江暁暢、言い飽きただろう？」

「どうしてそんなにはっきり言うの？私はとっても遠くからあなた達の健康を心配して訪ねて来たのに。どうしてそんな態度で私と接するのよ？」

「江暁暢、口先だけのうまい話ではダメだよ。君は女房を騙せるけれど、僕は騙せないよ。君達は、このあん

ま機をマルチ販売して、僕まで食い物にする気か？君が訪ねてくれたことは感謝するよ。さあ、帰ってもらおうか」

江暁暢は突然顔色を変え、

「寧岸、いい加減にしてよ」

とどなった。寧岸は、

「今はどこにでもペテン師がいる時代さ。れっきとした船長の娘で、独りよがりの江暁暢は、意外にも人をだます手口で金を巻き上げるまでに落ちぶれてしまったのか。君には良心っていうものがないのか？」

と冷笑した。

「私が堕落したですって？そんなレッテルは、私には似合わないわ。あなたにお返しするわ。貧乏書生のくせに孤高ぶってさ。いい子になってみんなに認めてもらいたいんでしょう？一体何なのよ。私の姉に頼って、大枚はたいて出版許可番号を買って、やっとどうしようもない本を出して、明らかに女のひもになって飯を食わせてもらっているじゃないの。女に寄り添って金を稼いで、それでどれだけ優れた才能があるって言うのよ？あちこちで自分が売れっ子作家だってホラを吹いて。あなたの方こそ良識っていうものがないんじゃないの？」

寧岸は、一時ポカンとしていたが、突然烈火の如く怒り出した。

「やっぱり彼女だ。江暁歌だったんだ。くそ、独りよがりの愚か者め。僕は彼女だと思っていたけれど、やっぱりそうか。江暁暢、俺の前から消え失せろ。江暁歌も俺様の前から消えていなくなれ」

江暁暢と呉文彗は、寧岸の爆発した怒りにおののいた。江暁暢は、あんま機を抱えて、逃げるように寧岸の家を出て行った。

（二）

寧岸と呉文彗が訪ねてきたので、江暁歌は気持ちよく立ち上がった。寧岸は重苦しい顔つきで話しかけた。

「君の会社の玄関は入りづらいなあ。警備員や秘書が門前払いを食わせるなんてことをして、君の地位を高めることができるのか？」

江暁歌は、

「仕方ないじゃない。今じゃどこもそうよ。既に慣例になっていて、私も逃げられないわ。それに、特に用もないのに訪ねてきて、付きまとう人がいることも確かよ。あなた、今回はどうしたって言うの？」

と笑って答えた。

「僕は、君に訊きたいんだ。これはいったいどういうことだ？僕が出版したあの《窃窃私語集（ささやき集）》は、君が金を持って出版社まで行って、買った出版許可番号なのか？」

江暁歌は、ちょっとためらったが、認めざるをえなかった。

「そうだわ。でも・・・・・」

寧岸は、

「原稿料も君がよこしたのか？」

と荒々しく江暁歌の話を遮った。

「そうよ」

寧岸は、むっと顔色を変えた。そして、

「そうなんだ。お前っていう奴は、そんなことしか言えないのか。僕の文章が良いかどうか、出版すべきかどうか、自ずと読者の批評があり、出版社の批評がある。君は、なぜ金を持っていって、出版許可番号を買ったんだ？」

と怒った。

「私はあなたを助けたかっただけだわ。今、出版社は沢山の本が元本割れしている状況よ。私達企業を経営している者がスポンサーになって、どこが悪いかしら」

「君は僕を助けていない。僕を害したんだ。学問を侮辱したんだ」

江暁歌は、驚いて言葉が出なかった。

呉文彗は、慌てて江暁歌に身振り手振りで謝った。

寧岸は、

「僕のような人間は、他のことはダメだ。でも、自分の文章については自信があるんだ。歴史が証言している。著作は、人類の精神的な財産の一部になるだろう。著作として残しておけば、永遠に伝えられる。僕の文章は、絶対に質的にも量的にも勝っている。僕がこれまでずっと憎んできたものは、名刺のために恥も外聞もなく人に取り入る輩だ。彼らはまじめに学問もしないで、人に頼って名誉を求めて、売名行為をしている。僕は本を出版できなくても、作家乞食になる。出版社に媚びへつらって取り入ったりしないさ。君は、金で僕の顔に泥を塗っているんだ。僕の同僚は、この本が金で買ったものだとわかるだろう。面目丸つぶれだ。金で名誉を買うなんて絶対にできない。僕は、僕の書いた文章を引き出しにしまい込んで、僕の才能を認めてくれる人を待った方がいいよ」

と憤懣やるかたなく言った。江暁歌は、

「わかったわ。でも状況は既にこうなってしまっているわ。あなたは、私にどうしろって言うの？」

と仕方なく言った。

「どうしろって？状況は君が作り出したんだ。僕が、どうしてどうすべきかわかるんだ。しかし、僕は、絶対に君を許さないぞ」

言い終わると、寧岸は、突然体の向きを換えて出て行った。

呉文彗は、江暁歌に深々と詫びるしかなく、彼女に寧岸のことを怒らないように頼んだ。

汪暁歌は、
「安心して。私は彼の気持ちがわかるの。でも、彼も融通が利かなすぎるわ」
と不満をこらえて、呉文彗に言った。
寧岸が、また突然ドアから顔を突き出して言った。
「そうだとも。僕は、時代遅れで融通がきかない男だ。君のように機転を利かせて流行を追い、社会の情勢についていけないんだ。呉文彗、君は何をぐずぐずしているんだ。早く来ないか？」
呉文彗は、仕方なく汪暁歌に何度もお詫びをして、寧岸の後を追って出て行った。

（二）

寧岸は、またしても賭博をした。彼は袖をまくり上げて、口にマリファナをくわえ、上品さのかけらもなかった。両眼は真っ赤になり、物売りや使い走りの仲間と、叫び合いながらさいころを振っていた。
彼は賭博をしながら朦朧とし、夜も昼もなく喉が渇き、腹が減れば串焼きを食べ、旨くもないビールを飲み、眠くなると床に転がって眠った。彼は、とうとう負けてすっからかんになり、時計やオーバーや革靴を担保にした。
寧岸は、半ズボンとランニングシャツ姿でつまみ出された。
彼は、面目なくて家に帰れなくなり、仕方なく電話をして呉文彗に服を持って来させた。
呉文彗が彼に会った時、彼は項を垂れて人家のドアの隅に縮こまっていた。彼の、そのこせこせした姿は、目を向けるのに忍びなかった。
寧岸は、黙ったまま妻に家まで連れて行かれた。彼はとても恥ずかしくて、呉文彗をぎゅっと抱きしめて言った。
「文彗、君は、僕がどうかしていると思っているかい？僕は何ともないんだ。至って冷静さ。奴らの醜い顔つきや恥知らずな卑しい手口はわかっているんだ。この世は不公平さ。本当に才能のある人間が立脚する場所がないんだ。賭博をするのは公平だ。僕は、たった今三千元勝ったのに、欲張りし過ぎて負けてしまったんだ。僕は、大儲けしたら、家に帰って君に渡そうと思っていたんだ。文彗、僕についてくると損をするだけだ。僕の才能を認めてくれる人はいない。君も粗末な食事で僕と無為に日々を送ることになってしまう。君のように美しく、善良で、やさしく、賢い人は、当然、もっと幸せな生活を手に入れることができるはずだ。でも、この世はどうしてか不合理で、悪人は運が良く、善人はついていない。文彗、本当に済まない。許してくれ」
彼は、頭を呉文彗の胸に埋めて、子供のように泣きじゃくった。呉文彗は真っ直ぐ背筋を伸ばして座り、憐れ

み悲しんで、寧岸の髪の毛を撫でた。
寧岸は、妻が作ったご飯を食べ終えると、ベッドに横たわって寝入ってしまった。
十数時間あまり経っただろうか。ベッドから起き上がってきた時、彼は顔つきもさわやかだった。彼は、自分の草稿を綺麗さっぱり片付けた。彼の出版した本や彼が発表した文章、呉文彗が心を込めて彼のために作ってくれたスクラップブック、雑誌や出版社への返却原稿、それに、まだ書き終えていない原稿もある。彼は、これらを空き地に積み上げると、ガソリンをかけて火をつけた。
彼の行為は、文彗を非常に怖がらせた。しかし、彼女は彼を止めなかったばかりか助けを求めることもなく、ただ黙って片隅に縮こまっていた。彼女は恐怖に駆られ、美しい瞳を見張って、自分の夫が平素最も大切にしていたものが灰と化していくのを見守っていた。
寧岸は、灰と化した草稿を前にして、しばらく両手を垂れて立っていた。その姿は、まるで彼の草稿に哀悼の意を表しているようだった。寧岸は、
「これは、とことんまでやるという覚悟の証だ」
と振り返って、呉文彗に言った。
草稿は既に灰と化し、赤々と燃えている炎が彼の目に映った。
彼は呉文彗に手を差し出して、有無を言わさぬ口調で、
「通帳をくれ」
と言った。
呉文彗は、きっぱり首を横に振って拒否した。
「聞いてくれ、文彗。僕は、暁歌が君に二万元貸して、小さな本屋を経営してほしいと言ったことを知っている。しかし、彼女は何もかもわかっちゃいないんだ。今は露天商が無数にあって、商売がやりづらいことを彼女はわかっていない。僕は、自分の学校の正門で小さな本屋を経営して、この学校に出入りする野郎どもに頭を下げなくてはならない。この気持ちが、どんなに屈辱的なものかわかっちゃいないんだ。だからこの金を僕にくれないか。僕は、君のために大金を稼いで戻ってくるよ。今回は、どうか絶対に僕を信じてほしい。幸せは順番に巡ってくるんだ。来年は我が家に来るよ。物事は、極点に達すると、必ず逆の方向へ転化するって言うじゃないか。悪運は、行き着くところまで行き着けば、必ず運が向いてくるはずだ。成功は、往々にして、頑張って努力している人にやってくるんだ。僕には既に良い予感があるんだ。君が僕を愛してくれているならば、僕に思う存分戦わせてくれないか？今回一回限りだ。以後金輪際、君の手の中からびた一文持ち出さないから。もし僕が約束を反故にしたら、天の神様は僕にろくな死に方をさせないと固く誓うよ」
呉文彗は、顔中涙で濡らして驚き恐れ、寧岸の無理な要求に通帳を持ち出さなければならなくなった。

寧岸は、直ぐに意気込んで賭博場に戻って行った。

（四）

呉文彗が深夜の露店で皿洗いに没頭していると、寧岸が喜びに輝いた顔つきで現れたので驚いた。

彼女は、れっきとしたインテリの奥さんが露店で皿洗いをして、寧岸の面子を潰したのではないかと恐れた。このため、寧岸にアルバイトをしていることをごまかした。

しかし、寧岸は、今日は気分がとてもよかった。彼は呉文彗がアルバイトをしていることにこだわらず、カバンを彼女の前に差し出した。呉文彗はカバンの中を覗くと、札束が一杯詰まっていたので、思わずポカンとしてしまった。

寧岸は、

「こっちへ来てくれ。こちらのご婦人のために、手を洗わせてやってくれ。それから、僕達に酒と料理を持ってきてくれないか」

と露店の店主に大声で叫んだ。

店主はためらったが、寧岸が数枚の紙幣をつかみ取って彼に放ると、店主は直ぐに満面に笑みを湛えた。

たちまち、彼らの目の前は酒と料理で埋め尽くされた。寧岸は、呉文彗の恥ずかしがっている様子も他人の目も気にせず、愛情たっぷりに妻の手を握りしめた。

「文彗、僕は君がここでアルバイトをしているのを知っていたんだ。僕は君を責めちゃいない。ただ自分を責めているだけなんだ。ほら、君の美しい手がこんな風にひどくなってしまって。僕は能力がない自分を責めているだけで、君を養うお金を稼ぐことができないんだ」

呉文彗は、身に余るもてなしや待遇を受けて驚き喜んだが、それ以上に怪しんだ。彼女は、寧岸の気まぐれが怖くなっていた。

寧岸は、金の詰まったカバンを叩いて、

「僕は今、誇りを持って君に向かい合うことができる。僕は間違っていなかったろう？君のために三倍にして持ち帰ったよ。君を愛している。世界中で君だけを愛している。僕は誰にでも顔向けできるけど、君だけには顔向けできなかったんだ。僕は、全力を尽くしてやってきたんだ。ただ運が悪かっただけなんだ。君は、僕の言ったことをしっかり心に留めたかい？」

と言った。

文彗は頷くばかりだった。

「明日、僕達は子どもを連れて、街に出かけよう。君達のためにプレゼントを買いたいんだ。子供を連れてマクドナルドで食事をするんだ。彼に他の子供と同じように食べさせてあげたいんだ。残ったお金は、君が貯金して段々と使ってくれればいい。暁歌から借りたお金は、

僕が返しに行く。その金は他にあり、もう用意できている。僕は、明後日早朝に彼女の会社に出かけ、支払いを済ませてくる。これから僕は、勝利を勝ち取る準備をするんだ。大金を稼いだら帰ってくる。大儲けできなかったら、海に身を投げて君の大きな重荷を減らすんだ」

呉文彗の手が、寧岸の腕の中で小刻みに震えていた。

「何も心配することはないんだよ。君に話すことは全て将来の想像上のことなんだ。要するに、一人の男として、僕は君達親子に心地よい暮らしをさせてあげられないので、顔向けができないと思っているんだ。僕自身、こうして生きていても不甲斐ないんだ。だから大志を立て、大きな賭に出るんだ。君は、僕のことをわかってほしい。子どもの前では僕の良い話をたくさんして、僕の志を彼にしっかり伝えてほしい」

呉文彗は、じっと寧岸を見ていた。寧岸はどうみても少し変だと思ったが、いったいどこが変なのか、上手く言葉で表現できなかった。

（五）

江暁歌と宗漢が、少年刑務所の教官に付き従い面接室に入ると、思いがけず黎美娟にばったり会った。黎美娟と江暁鴎が向かい合って座り、ちょうど話をしている所だった。江暁鴎は農民のような出で立ちになっており、素足でズボンの裾をまくり上げ、皮膚は黒ずんでいた。しかし、精神状態は相変わらず良かった。

黎美娟を見て、江暁歌は意外に感じた。

「美娟、いつ広州から来たの」

「ずっと武漢にいるわよ。お母さんに面倒を掛けたくないだけなの」

「美娟、有り難う」

「御礼を言うには、及ばないわ。暁鴎は、私の夫よ。私は彼の面倒を見なければならないわ」

江暁歌は、黎美娟が江暁鴎との結婚に前向きであるとは全く思いもよらなかった。江暁歌は、彼らが気が合えば付き合い、嫌なら別れると、今までずっと思っていた。江暁鴎の判決の後、江暁歌は自ら南方に向かう飛行機に乗る黎美娟を見送った。彼女は、黎美娟が行ったっきり帰ってこないと思い込んでいたので、感激のあまりギュッと黎美娟の手を握った。

姉さんと宗漢が一緒にいるところを見て、江暁鴎は感情が高ぶり、とっさに話をすることができなかった。

江暁歌は、持ってきた包みを彼に押しつけた。彼は、包みの中から一カートンのタバコを取り出し、そこから一箱タバコをもぎ取ると、一本取り出して火をつけた。勢いよく一口吸うと、ゆっくりと青い煙が上がった。江暁歌は、彼に一枚のカードを手渡した。これは、嘉児が自分で作ったグリーティングカードで、数匹の可愛らし

い動物が描かれていた。動物達が江暁鴎の誕生日をお祝いし、カードには、

「おじさん、私、おじさんとダイヤモンドゲームがしたいわ」

と書かれていた。

江暁鴎は少し感傷的になり、頭を下げて暫く黙ったままグリーティングカードを見つめていた。

江暁歌は、

「お母さんも来たかったんだけど、出掛ける直前に血圧がまた上がったので、ここに来させないようにしたの。お母さんは何度も言っていたわ。ここで一生懸命仕事をして、刑を軽くしてもらうように努力しなくちゃってね」

と言った。宗漢は、

「友達が、『君に宜しく』と言っていたよ」

と伝えた。江暁歌は、

「美娟が、こんなに人情に厚いとは思ってもみなかったわ」

と続けて言った。江暁鴎は、

「そうさ。美娟は素晴らしい女さ」

と黎美娟をちらりと見て言った。

彼らは向かい合って、暫く黙っていた。

江暁鴎が突然言った。

「姉さん、僕は宗漢と二人きりで話をしたいんだけど、いいかなあ？」

江暁歌は頷いて、黎美娟と面接室を出て行った。

宗漢は、

「君の姉さんにどうしても聞かれたくない話があるのかい？」

と言った。

「何も隠すことじゃないよ。ただ、姉さんに面と向かって言うには言いにくい話なんだ」

宗漢は、理解を示す仕草をした。

「宗漢、姉さんの様子はよくわかっていると思うけれど、父が死んでから、姉さんは僕と一番親密なんだ。今僕は何も望んでいない。姉さんは、この世界でもう周囲に身を寄せる人もいないんだ。お願いだから、僕に代わって姉さんを助けてやってほしい」

「安心してください。全力で彼女を支えますから」

「姉さんと耀根兄貴は、本当はお互いに愛し合っているんだ。二人が復縁する方法を考えてほしいんだ。僕の姉さんは、外見は優しそうなんだけど、本当は強情なんだ。今や、過去の出来事はとうの昔に過ぎ去ってしまったよ。姉さんは、青春も命も惜しまずに、耀根兄貴に神経をすり減らしたけれど、何もそうまでしなくても良かったんだ。今、彼らの間には取りなし役が欠けているだけだ。本来、僕が取りなし役をしなくてはならないんだが、今の僕じゃダメだ。この役は、あなたしかいないんだ。あなたが進んで取りなし役を買って出てくれるんなら、きっと上手くいくよ」

宗漢は俯いて、江暁鴎の頼みを断る術もなく、黙って承知するより他なかった。

「全力を尽くしてやります。縁があるかどうかは、やはり彼らの様子次第だと思います」

「頼むよ。宗漢、僕は、来世は牛や馬になってでも、あなたの恩義に応えたいよ」

（六）

江暁歌は、

「暁鴎とあなたが何を話したのか教えてくれませんか？」

と宗漢に訊ねた。

「いいですよ。簡単なことです。あなたにはもう肉親がいないので、私に、あなたの面倒を見てやってほしいと頼まれたんです」

江暁歌は、悲しくなって手で目を覆った。

「暁鴎は、この話をあなたの前で言ってはいけないことがわかっていたのです」

「大丈夫よ。私は直ぐに良くなるから」

「あなたに報告することがあります。私達の主催するダンスパーティは、ほぼ予定通り準備が終わりました。しかし、私は広告の公布権利を他の会社に任せたいと思っています。実際には、リスクの転嫁のためです。どう思いますか？私達は、服飾業務を主力とした会社ですからね」

江暁歌は、ちょっと思案すると、

「いいわ」

と答えた。

「それでは、私が時間をやりくりします。どうか相手方の支配人とお会いしてください」

江暁歌は、

「わかりました。あなたの手配通りにします」

と答えた。宗漢は、

「それでは、今晩にしましょう。今から藍雲にあなたを美容院に連れて行かせます」

と言った。江暁歌は、

「なんでこんな面倒くさいことをするのですか？」

と眉をひそめた。宗漢は、江暁歌を個室の入り口まで送って行き、

「私は行きませんよ」

と立ち止まって言った。

「なぜですか？」

「支配人は、あなただけに会うと言ってきたのです。でも、どうかご安心ください。私は入り口で待っていますから」

「何という会社ですか？どうしてこんなに意地悪なの？」

「商売上の古くからの友人です。行けばわかりますよ。支配人は、あなたに驚喜するでしょう。ちょっと待ってください。言っておきたい話があります。男をとやかく責めてはいけません。男の持っている生理的な特徴によって、時には大きな過ちを犯すこともあるでしょう。彼らがそれをわかっていて、あらためようとする気持ちがあればいいじゃないですか」

「あなたは、何を言いたいのですか。私は入って行きませんから」

宗漢は、江暁歌を押すように部屋の中に入れた。

部屋の中で座っていたのは、趙耀根だった。

江暁歌が本能的に後ろを振り返ってみると、入り口がしっかり閉まっているのに気がついた。彼女は、これでやっと善意の罠にかかったことに気がついた。乗りかかった船だ。彼女は、泰然自若を装うより他なかった。腰掛けると、趙耀根に話しかけた。

「どうやら、あなたが提携するパートナーのようですね」

「その通りさ。僕は、彼からこの文化事業の広告公布権を買い取ったんだ」

「どうやら、宗漢自身があなたに買われたみたいだわ」

「どうか、宗漢の善意を誤解しないでくれよ」

江暁歌は、

「わざわざ苦心して私を捜さなくてもいいじゃない。私に他意はないわ。ただ突然で疲れただけ。あなたともめ事を起こすのは疲れるわ。私はもう小娘じゃないのよ。もう恋愛ゲームをして遊ぶ趣味なんてないわ」

と言って、ため息をついた。趙耀根は、

「唐燕影のことは、僕の人生で犯した最も許されざる過ちだ。でも暁歌、僕を許してくれ。世の中にはどれくらいの男が、似たような過ちを犯しているだろうか。なぜ、君は意地になって僕を困らせるんだ」

と真心を込めて言った。

「他の男はどうでもいいわ」

「君が、僕のことを心配してくれて感謝するよ」

趙耀根は、また口先だけだった。江暁歌は、用心しないと彼の計略にかかると思った。江暁歌が目を上げて趙耀根を見ると、昔は傲慢だった彼が、今は切望して自分を見ているのに気がついた。彼は、少しやつれて老けたように思えた。時は、彼の顔の硬い輪郭をやわらかくさせ、彼の揉み上げを幾ばくか白くさせていた。

江暁歌の胸に知らず知らずのうちに、憐れみ同情する気持ちが芽生えていた。眼光にも幾ばくかの優しさが差し込んでいた。

「暁歌、僕はわかっているんだ。悲しみは無情で、絶望ほど哀れなことはない。僕のような人の気持ちがわからない人間を、君はとっくに相手にしないだろう。でも、僕達は結局夫婦なんだ。嘉児もいる。まだ、ベースが残っているんだ。もう一度、僕にチャンスをくれないか？」

「もう一度チャンスって？」

「そうだ。禁欲主義の時代を過ごしてきた僕たち世代の男達は、小さな頃から異性との正常な接触がなく、男女の愛情において受けた束縛が多すぎた。このため、歪んだ性真理が形成されたんだ。今日の解放された華やかな現代の生活が、いっぺんに目の前に広がり、街には若くて綺麗な女の子達が溢れ、どうにも気持ちを抑え切れなくなったんだ。それに、既に中年になってこのような豊かな生活を目の当たりにして、昔は随分と損をしたなと思ったら、できることならそれを手に入れたいと思ってしまったんだ。これもこの世代の男の病気と言えるに違いない。昔は女に縁がなく、今では女に溺れ、将来はたぶん女で間違いを犯すだろう。君は善良で、人の気持ちのわかる女性だ。僕は、君が許してくれることを願っているよ。放蕩息子の改心は、金にも換え難いって言う俗諺があるけれど、今僕は、それは金よりもっと大切だと言っているんだ。君は、僕のことをもう色眼鏡で見ないでくれよ」

江暁歌は、

「あなたは、意外にも事の深刻さがわかっているのね。これは懺悔かしら、それとも自己弁護？」

と嘲笑した。

「勿論懺悔だよ。暁歌、復縁しよう。実際、僕は一日たりとも君のことを思わない日はなかったんだ。君だってわかっているはずだ」

江暁歌は黙っていた。彼女は、勿論わかっていた。彼女だって、彼のことを思わない日はなかったのだ。

「僕はこれまで、僕達が正式に離婚したなんて思ったことはないんだ。僕達は、ただケンカしただけなんだ」

江暁歌は、

「このケンカの時間が、ちょっと長かっただけなのね」

とやさしく話しかけた。

趙耀根は、急に心の中に湧き起こった感情の高まりに声を詰まらせた。

彼は、初恋をした若者のように感情が高ぶり、居ても立ってもいられなくなった。とうとう迷いから覚め、ギュッと彼女を抱き寄せた。彼らは世の中の辛苦をいやというほど嘗め尽くし、そしてまた結婚した当時の振り出しに戻ってきた。彼らは長い間抱き合っていた。

趙耀根は、

「直ぐに復縁の手続きをして婚礼の準備をしよう。賑やかに数十席の宴席を用意しよう。それに写真館に行って、披露宴の写真を撮らなくちゃね」

と興奮して言った。

「熱を上げないでよ。噂があちこちに広まって、みん

なの笑いの種になるわ」

「構うものか。僕達が楽しければそれでいいじゃないか。昔、僕達が結婚した頃は、何もなかったんだ」

「嘉児はもうすぐ十六歳になる。この婚礼を彼女へのプレゼントにしたいんだ」

「彼女はきっと、この贈り物を喜ぶと思うわ。ただ、嘉児の誕生日まで、まだ数ヶ月あるわ」

「それなら待とう。彼女に知らせるのが早過ぎちゃいけない。子供が興奮しないようにね。期末試験にも影響するからな」

「わかったわ。その時になったら、彼女を驚かせてあげましょうよ」

（つづく）

編集後記

まんじ誌の原稿掲載順は、前号から最初に「短編もの」次に「短歌」その次に「長編もの」の順番にしました。研究論文や論説などがあれば「長編もの」の次に掲載したいと思います。

どの方法が読者にとって読みやすいか、いろいろと考えながら編集をしたいと思います。

このところの新聞・テレビでは「集団的自衛権」に論議が集中しています。ここで政治談議をするつもりは全くありませんが、戦後日本の歴代首相が現憲法下で否定し続けてきた「集団的自衛権」を、憲法解釈一つで、いろいろな制約を掛けてはいますが「できる」と解釈することには首を傾げざるを得ません。

確かに日本の周辺では、日本との関係が従来通りではなくなった国や、軍備を拡張している国もあって、一時代前とは環境が変わっています。しかし、本当に行うのであれば憲法改正をすべき問題と考えます。安易な解釈変更に「安部さん、そんなのに急いでどこへ行く？」と聞いてみたいですね。

7月14日早朝のワールドカップ決勝戦、見応えがありましたね。一瞬のすきを突いたドイツが優勝しました。ドイツの健闘に「おめでとう」と言いたいですね。

いよいよ暑い夏がやってきます。同人皆様のご健勝を心から祈念します。

（鍋屋）

まんじ第133号

平成26年8月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について

「夢はなお　高きを目指して天駆ける」

田寺怜葦　画

まんじ

No.134

2014.11.1

まんじ第百三十四号　目次

半村良さんのこと……三戸岡道夫…4
「千の風」と「赤毛のアン」……新井宏…17
郷土の戦時遺跡……山田嘉久…24
田方農業高校物語（二）……堀内永人…33
敗走……太田精一…43
五月雨……横山正義…50
農地の社会化……古屋富雄…58
短歌　行雲流水（四十三）……石黒修身…61
短歌　三十首……曽根竣作…65
古い物・遠い夢……忠内正之…69
関東管領始末記⑮　山内顕定の最期……千坂精一…78
千家尊福伝（五）……村上邦治…85
漢詩　潮騒錄（七十八）《漢詩の流れ66》……鯨游海…93
人類の仲間（七）……鈴木守…96
目耕録（その十五）……山本鎭雄…101
殉教（五）……鍋屋次郎…113
つれづれの源氏物語　第四回　青年時代そのⅡ……小田紘一郎…124
　―若紫の巻より葵の巻まで―
口紅（その十六）……池莉原作　山本勉訳…152
密室銀行（十七）……匠克仁…181
太太太……匠克仁…187
編集後記……編集子…192
表紙　絵……田寺怜葦…192

半村良さんのこと

三戸岡道夫

都立両国高校卒。
紙問屋の店員を皮切りに、プラスチック成型工、バーテンダー、板前見習、コック見習、喫茶店、バーの経営、クラブ支配人、連れ込みホテルの番頭、肉の仕入れ、ビリヤードの支配人など、多彩な職業を経験。
割烹料理屋時代に水上勉の勧めに発奮して、昭和三十七年、「SFマガジン」のコンテストに応募して、小松左京とともに入選。広告業界に転進して、加賀まりこや円鏡らのディスク・ジョッキーのコント・構成・演出を担当。
昭和四十八年に「産霊山秘録」で第一回泉鏡花賞。昭和五十年「雨やどり」で第七十二回直木賞受賞。
主要著書「石の血脈」「産霊山秘録」「黄金伝説」「英雄伝説」「不可触領域」「平家伝説」「妖星伝」（全七巻）、その他多数

（一）作家への道

作家の半村良さんと最初に出会ったのは、昭和四十一年頃、私が協和銀行の広報課長をやっている時であった。
広報課というのは、銀行の広報活動（PR活動）をする部署であるから、いろいろな広告代理店が出入りする。その中の一つに創芸という広告代理店があり、半村さんはその協和チームのヘッドであった。
半村さんは小柄で、少し肥ったタイプであった。いつも顔に平穏な微笑をたたえ、人から好かれるタイプであった。いつも三、四人のメンバーを連れて、協和銀行広報課のある新丸ビルの三階へやってきた。
その半村さんの略歴を最初にちょっと紹介する。

本名　清野平太郎（きよの）
昭和八年十月二十七日、東京に生れる。

ほぼ以上の如くであるが、種々の職業を数多く経ながら、最後の職業が広告業だったのである。したがって私が知り合った時には、すでにSF作家としてスタートしていたのであるが、彼はそのことを言わなかった。したがって私たちはそのことを知らず、いつも、
「清野さん、清野さん」
と呼んでいた。
清野さんはとてもアイデアマンであり、協和銀行にこれまでなかったいろいろなPR方法や、PR媒体の作成を考えてくれ、非常に助かった。が、そのやり方は、広告代理店のプランを押しつけるというのではなくて、にこやかな口調と笑顔で説明されるうちに、いつの間にかこちらがその雰囲気に巻きこまれてしまって、その案をオーケしてしまう、といった工合なのであった。

その清野さんが広告代理店をやめて、作家としてスタートしたと聞いたのは、私が広報課長から白山支店長に転勤し、ふたたび本部に戻り、事務部長をやっていた頃であったと思われる。
その頃になると私は、清野さんがすでに小松左京と並んでSF小説賞を受賞していたことを知り、驚いた。そして小松左京のSF小説「日本沈没」が有名になり、SF小説ブームを引き起こすにつれて、半村さんもSF作家として有名になっていった。

そこへ昭和四十八年に、「産霊山秘録」という作品で、第一回の泉鏡花賞を受けたのである。
半村さんは、駄じゃれ、ユーモアの達人である。この時の様子を、
「出版社から電話がかかってきて、泉教科書の受賞、おめでとう、と言われた。私は教科書には関係ないから変だと思うと、実は泉鏡花賞だった。発音が同じなので、まちがえてしまったのだよ」
と、喜しそうに話してくれた。この間違いは、本当に間違ったのか、それとも半村さん一流の駄じゃれなのか、それは不明であるが、半村さんのうれしさの余りの駄じゃれにちがいないと、私は思っている。
そして続いて二年後、昭和五十年に「雨やどり」で、直木賞を射止めたのである。「雨やどり」は夜の銀座のバーを舞台にした小説であり、半村の若い頃のバーの経営、クラブ支配人など、数多い職業遍歴の経験に裏打ちされた、純粋度の高い作品であった。
これで半村さんは、堂々たる作家の地位を確立したのである。

（二）作家遍歴

すると直木賞をもらって暫くたった頃、
「記念に家を新築して書斎を作ったから、見に来いよ」

という連絡が入った。

渋谷から玉川電車に乗り、三軒茶屋のちょっと先であった。これまでの家の近くに、ちょうどいい土地があったので、買って建てたということであった。

行くと、ま新しい土地の上に、ま新しい二階建ての家が建っていた。まだ引っ越したばかりで、生活の臭いはなかった。

書斉は二階にあった。南側が開け放され、三面の壁は本棚でぎっしり埋った部屋であった。しかし他の部屋にはまだ家財道具が運びこまれている様子はなく、昼間だけ仕事しに書斉に通い、夜は家に帰るのかと思った。

半村さんはその書斉に満足げに坐り、

「この書斉は半文庫というんだよ」

と言った。半村良の文庫だから半文庫というのであるが、もう一つ、別の意味があった。本当はそれを言いたいのだった。それは駄じゃれで、

（半分っこ）

というのである。それは半村さんが直木賞を貰ったとき、半村良一人でなく、もう一人も貰い、二人が貰ったのだった。

「だから私の直木賞は、一人前でなくて、半分っこ、すなわち半人前。だから書斉も一人前でなくて、半人前、すなわち半分っこ（はんぶんこ）というわけさ」

と言って、あ、は、は、と笑った。書斉の名前も駄じゃれにしてしまうのだった。

駄じゃれが終ると、急に真剣な顔つきになって、

「これからは忙しくなる。書いて、書いて、書きまくらなくては、ならないからな」

と言った。

直木賞を貰うと、出版界へお礼をしなくてはならないのである。直木賞は、その作家をほめるために与えるのではなくて、それをネタに、出版界が稼ぐためにあるものなのである。

直木賞を貰うと、その作家へ原稿の依頼が殺到する。だが、それをいっさい断ってはならないのである。どんな出版社からの依頼も、どんな雑誌からの依頼も、断ってはならない。それが出版界の義理、義務なのである。その義理を果すために、直木賞を与えるのである。その義理を果さない作家は、やがて出版界から、干され、追放されてしまうというのである。

（義理がすたれば出版界は闇だ）

というわけである。

「だから、これから三年間ぐらいは、一切断らずに、書いて書いて、書きまくらなくてはならない。病気などしている暇はない」

と、半村さんはガラス戸の外に拡る大空の果てにむかって、眉尻を決するように言った。

事実、その後、何時であったか半村さんが何かの病で入院し、私が見舞いに行ったとき、半村さんはベットの上に起き上り、原稿を書いていた。

だがそうした話しの最中で、半村さんは急に表情をくるりと変えて、

「今度は俺の、銀座の女を見に来いよ」

と言った。半村さんの彼女が銀座のバーに勤めているのか、あるいは彼女に銀座でバーをやらせているのか、それはどちらとも判らなかった。

（直木賞を取ったチャンスに、家も建てたし、銀座に彼女も持ったぞ）

ということであった。

とたんに私の頭の中に、夜の銀座のネオンの灯がきらめき出した。

それからしばらくたったある日の夜、その銀座のバーへ行った。

資生堂のビルの角を曲がり、銀座七丁目あたりにそのバーはあった。

私はカウンターに座り、ちびり、ちびり、カクテルなどを飲んだが、半村さんの彼女は着物姿で背が高く、仇な感じの粋筋であった。やっぱりそれまで水商売の裏街道をいろいろ通ってきただけに、半村さんの女性観は見事だなと思った。

やがて半村さんもやって来て、しばらくカウンターで飲んでいたが、やがて、

「さあ、車が来たよ、送っていこう」

と半村さんの言葉で、私達は車に乗った。半村さんの彼女も一緒に乗った。

赤坂だか六本木なのか、わからない方角にむかって車は走り出したが、ある街角へ来ると、半村さんは、

「ストップ！」

と言って車を止め、

「ちょっと用事があるから、ここで降りてくれ」

と、私は車から降ろされてしまった。車はそのまま、ホテル群のような所へむかって走り去った。

どこが、どこなのか、わからない所に急に放り出されて、私は面くらった。場所がわからないのだから、電車の駅もわからない。聞いてみようと思ったが、人通りもないし、それらしい商店などもない。仕方がないので、じっと待っていると、運よくタクシーが来たので、とび乗った。

「一番近い駅は？」

と聞くと、渋谷だというので、渋谷まで乗り、山手線に乗り家に帰った。

それから半年か、一年ぐらい経たない頃であろうか。今度は書斉「はんぶんこ」を、東横線の方に移したとい

う連絡を受けた。
ある晴れた日、私のその新しい「はんぶんこ」へ行った。東横線の学芸大学駅で降り、線路沿いに歩くとすぐの場所であった。
それはマンションの二階で、かなり広い部屋だったように記憶しているが、それは書籍などがまだ運び込まれず、まわりがぎっしり本棚で埋っていないためだったかもしれなかった。
マンションの中はひっそりとして誰もおらず、半村さんがこのマンションに住んでいるのか、あるいは仕事をする時だけ、三軒茶屋の家から通ってくるのか、それはわからなかった。

その学芸大学駅のマンションへは、二、三回、行ったであろうか。
すると突然、今度は新宿のホテルに変ったという通知がきた。
それは新宿西口の住友ビルの隣にある、ホテルセンチュリー・ハイアットであった。
ある日訪ねていくと、部屋から出てきて、ロビーでしばらく話した。半村さんは元気そのものの顔で、
「いやあ、忙しくてね、とうとうホテルに缶詰めにされてしまったよ」
と、おだやかなにこにこ顔で言った。

昔ならば文士を閉じこめるには、伊豆や箱根の日本旅館と情緒的であったのに、最近は手っとり早く都内のホテルになってしまったということである。
直木賞をもらった時に半村さんが言った、どこからの原稿依頼も断らず、書いて書いて書きまくらなくてはならないという路線を、走りつづけているのである。
だから半村さんは弟子も取らない。弟子を取る暇があったら、書かなくてはならない。
しかし弟子を取って、弟子に下調べをさせたり、下書きをさせたりすることも出来るであろうが、いっさいそういうことを半村さんはやらなかった。全部、自分でやる。まさに一匹狼である。最近は夜銀座へ出掛けていって、酔っぱらって時間を潰すことも少いようであった。寝ている時のみはすべて執筆、まるで修業僧のようだと思った。
だから半村さんにとって、ホテルのロビーで私と無駄話をしているのも時間のロスである。一時間もこんなことをしていれば、原稿の三、四枚は出来上るであろう。
そんなことを考えると、私はあまり長い時間を邪魔しているのは、仕事の雅魔になるのだと思い、なるべく短時間で切り上げて帰ることにした。

そんなホテル生活が一年も続いた頃であろうか。
「病気で入院した」

というニュースが入ったので、驚いてお見舞いに行った。病院は、乃木坂と六本木の中間にある病院で、どんな工合かとおそるおそる病室のドアを開けると、
「やあ」
と半村さんは声をあげ、ベットの上に起き上って原稿を書いていた。
「大丈夫ですか、原稿なんか書いて…」
「大丈夫でも、大丈夫でなくても、書かなきゃならないんでね」
「決死隊ですね」
「そう、決死の覚悟だ」
なんて冗談を言うくらいだから、これと言う特別の病気でなさそうであった。過労で血圧に少し異変が起きたのかもしれなかった。が、いつも聞いている、
（書いて、書きまくらなくてはならない）
という真髄をそこに見たような気がして、出版界を泳ぎ切っていかねばならないプロのきびしさに、慄然となった。

間もなく病院からは退院したようで、私はほっとした。
そしてまたホテルの部屋に戻って原稿書きに専念しているであろうかと、私は西新宿の方角の空を時々見上げた。
そうして新宿のホテルには、二、三年は、いたであろうか。

ある日半村さんから便りが届いた。それは北海道の苫小牧からで、
「今度苫小牧に来たよ。また遊びにおいでよ」
と書いてあった。
「へーっ、なんでそんな遠い苫小牧へ…？」
と思ったが、転居好みの半村さんらしいと思った。だが、なぜ苫小牧なんて遠い所へ？　なにか事情があるのか、それとも偶然か。
その年の夏休みを利用して、私は家内と一緒に、北海道旅行をかねて、苫小牧へ行くことにした。
札幌まで飛行機で行き、あとはタクシーに乗った。
広い野原の中を一直線に通る広い道路には一台も車は走っておらず、雄大な景色であった。まるでアメリカやヨーロッパのハイウェイを走っているようだと思った。
苫小牧に着くと、予約しておいたホテルへ入り、翌日、半村さんの家を訪ねた。
家に着くと、それは木の香も匂うような新築の二階建てで、半村さんのスポンサーのような人が建ててくれたということであった。そのスポンサーは誰なのか、そしてスポンサーから贈与されたのか、あるいは建てた家を単に借りているのか、その辺のことまではわからなかったが、半村さんの人脈の広さが察せられた。
「ここなら静かで、原稿がはかどりますね」

「そうなんだ。出版社の人間がやって来ないから助かるし、原稿も郵便やファックスで送ればいいから、簡単でいいよ」

半村さんはまるで直木賞を受賞した直後のような、さわやかな感じであった。

この苫小牧で変ったことが一つあった。

それは女性が居たことであった。これまではどの「はんぶんこ」へ行っても、女性は居なかった。それが苫小牧では現われた。半村さんが苫小牧へ来たのは、その事と関係があるのか、ないのか。そんな事まで聞くわけにはいかなかった。

が、その女性は、いつかの銀座のバーの女性ではなかった。その筋らしい感じはあったが、家庭的な雰囲気を持った女性であった。

(やっぱり半村さんはこういう感じの女性が好きなんだな)

と思った。

せっかく苫小牧まで来てきたのだから、周囲を少し案内するよと言って、車で海岸沿いに東の方へドライブに連れていってくれた。

北側には日高山脈の山なみが続き、このままずっと行けば、有名な襟裳岬だという。しかし、そこまでは行けないので途中で引き返し、途中日高牧場に寄って帰ってきた。

翌日は札幌へ戻り、札幌から飛行機で函館へ飛び、函館に一泊して、東京へ戻った。

苫小牧へ半村さんは、二、三年、居たであろうか。ある日、突然、

「本土へ戻ったよ。いま浅草にいる」

という連絡があったので、浅草へ行った。

浅草は浅草寺の裏手あたりの、小さいマンションの二階であった。やはり女性がいた。が、それは苫小牧の女性とは、別の女性であった。

「苫小牧のときはお世話になりました」

とお礼を言った。

「とりあえずの住まいでね」

と半村さんは、まだ片付いていない部屋の中を見まわしながら、少してれかくしのように言った。しかし、そのてれかくしは、女性が変ったことのためのようでもあった。もちろん私は、その女性のことや、苫小牧から帰ってきた事情などは、一切聞かなかった。聞かぬのが礼儀であるし、聞いても、半村さん一流の駄じゃれで、都合よくフィクション化されてしまうにちがいないからだった。

その浅草住まいは、「とりあえずの住まいでね」と言ったように、たしか六カ月ぐらいで終わり、今度は目白

の方に移った。

目白通りを右に折れた、徳川黎明館のある辺りの、高級マンションであった。

今度は書斉などもしっかりしていて、浅草の仮住いから、本住いに移ってきたという感じであった。

その本住いに、どんな女性が現れるのか、私の関心はそちらに動いた。それは期待を裏切ったというか、期待通りというか、浅草の女性とは別の女性であった。

半村さんの引越し好きは、女性が変わったから引越すのか、引っ越したから女性が変わったのか、私の頭は混乱した。

目白に居たのは二年ぐらいであったろうか。次に移ったのは南大塚で、護国寺の南の方角にあるマンションだった。そしてこれが、東京における半村さんの最後のマンションになった。

それはがっちりした立派な大型マンションで、入口で暗誦番号を入れて操作しないと、ドアが明かない警備体制のマンションであった。入ってもう一度部屋へ連絡を入れ、オーケーを取らないと、エレベーターが動かないというシステムであった。

私が訪れたときは、すっかり内部は整備されていて、落着いていた。書斉とは別に応接コーナーが作られていて、それは日本式の広い囲炉裏であった。私達はその囲炉裏をへだてて、向いあって座った。半村さんは「妖星伝」という長編小説を連載中であり(全七巻で未完)、その雰囲気にふさわしい接客コーナーを作ったのかもしれなかった。

女性は、目白のマンションの時の女性であった。家庭的であるが、ビジネス手腕も持っている、そんな感じであった。

半村さんはこの南大塚のマンションが気に入って、東京では最後までここに居たから、彼のマンション歴の中では、一番長い滞在期間になった。

したがって私も数回、このマンションを訪れた。仕事の仕振りも落着いて、最初のように書いて書いて、書きまくりというのではなく、依然として量産作家であったが、半村さんらしい貫禄のある、落着いた仕事ぶりであった。そして女性も変わることなく、仲むつまじく暮していた。

そんな平穏な日がつづいているなと思っていると、ある年の年賀状が宇都宮から来た。

(あれ、変だな)

と思って聞いてみると、先日、東京から宇都宮へ引っ越して、それは病気療養のためだということであった。

くわしいことは判らなかった。あまり判らないのに、お見舞いに行くのも失礼からと思い、ついそのままにな

ってしまった

宇都宮で生涯を閉じられたのは、それから二年ほど経ってからであったろうか。

（二）いろいろ教えを受けたこと

半村さんは、弟子はとらない、そんな暇があったら原稿を書かなくてはならない、ということであったので、私は弟子にしてもらったわけではない。それなのに時々お邪魔して、貴重な時間をつぶして、申し訳ない限りであったと思っている。それはひとえに協和銀行の広報課時代の付き合いを、大切にして下さったのである。義理がたい人なのである。

したがって行く時も、私は書いた原稿を持っていったり、また殊更に原稿の話をすることはしなかったが、私が小説を同人雑誌「まんじ」に書いていることは知っていたので、時々は小説の書き方についてアドバイスしてくれることもあった。

そんな頃、ある新聞社が新聞小説を募集し、受賞作品をその新聞に連載するという企画が発表された。そして半村さんがその選考委員の一人になったのである。

そんな頃お伺いすると、

「この新聞小説に応募してみないか。私も選考委員になったので、選考委員会まで作品が上ってきたら、絶体推薦してあげるよ」

と、応募をすすめてくれた。

しかし選考委員会まで作品が上っていくのは、大変であった。一般にそのような作品募集があると、千から二千に及ぶ応募作品が集るということであった。まず編集部の人間などが手分けして作品を読み、絞り上げていく。そして最終的に選考委員会へ届くのは、五、六編ということであった。

確率にして〇・五パーセント以下である。それも小説であるから、確たる規準があるわけではない。その時々の流行、編集者の好み、出版したら売れるか、どうか―、いろいろな複雑な要素をくぐり抜けて上ってくるのであるから、何がどうなるか、まったく予測はつかないのである。

私はある一つの時代長編小説の構想を持っていたので、

「とても駄目でしょうが、とにかく書いてみます」

と言った。

それは上杉鷹山を主人公にした藩政改革の物語であった。銀行の中における経営改革、営業計画を、江戸時代の藩政改革に置きかえて、書いてみようと思ったのである。すると半村さんが、

「それだけでは固すぎて駄目だな。なにか面白いテーマをくっ付けないと…」

そこで私はM資金と合体させることにした。

M資金とは戦後しばらくの間、日本の金融界に出没した一種の詐欺事件である。M資金というアメリカ駐留軍の何千億円という資金が眠っている。それを預金として紹介するという話を持った人間が、あちこちの銀行へ出没し、その手数料として百万円とか二百万円とかを受取ると、そのままドロンして、後は姿を現わさないという斯事件であった。三百億円とか五百億円という預金がころがり込んでくるので、騙される銀行もあったのである。

私も一度、そのM資金の話を銀行の応接室で受けたことがある。とても話が上手で、嘘とわかっていながら、ずるずると引っぱりこまれ、引っかかりそうになったくらいであった。

江戸時代の話であるから、M資金というわけにはいかないので、太閤資金という名前にした。太閤秀吉は巨大な黄金を大坂城の中に貯めこんでいたので、大坂城落城の焼跡からその黄金が見つかり、太閤資金という名前で、ひそかに世の中に流れている、というわけである。

藩政改革には金が要る。そこに眼をつけた詐欺師が、太閤資金を売りこみに米沢藩を訪れ、まじめに働いている藩政改革の中に一石を投じて、藩政改革に大波乱を起すという筋立てである。

「うん、それは面白い。それで書いてごらん。出来上ったら、読んであげる」

太閤資金というフィクションを入れるので、米沢藩、上杉鷹山というわけにはいかず、藩は美春藩、藩主は美川修身、そして小説の題名は「男たちの藩」とした。

二、三カ月かけて「男たちの藩」を書き上げると、半村さんのところに持っていった。半村さんはパラパラとめくりながら、

「後から読んでおくけど、面白そうに書けているじゃないか」

と言ってくれた。私へのはげましであろう。

それから一週間ほどすると

「読んだから、取りに来てくれ」

という電話があって、受取りに行くと、全部ていねいに読んでくれて、どのページにも細かいところに至るまで朱筆が入っていた。

読んであげると言っても、忙しい時間を割いて、ここまで眼を通してくれるとは思わなかったので、私はありがたくて涙が出た。

原稿は清書すると、すぐ新聞社へ送った。

もちろん原稿は受賞圏へも入らず、駄目であったが、このような意味で「男たちの藩」は、私の貴重な作品である。

（「男たちの藩」は、後日栄光出版社より出版した）。

そんな事があって、しばらくたった頃であったが、あ

る日半村さんが、

「作品を応募する時は、たんに上手に書いたって駄目なんだよ」

と言った。何かコツがあるのだ。何だろう。

「上手いのは当り前なんだよ。応募する人は、みんな上手い人が応募するのだから、みんな上手いんだよ。上手いのが当り前。全部、上手い作品が集ってくるんだよ。だから上手いだけじゃ駄目なんだ」

「すると、どうすれば？」

「その人でなくては書けないもの、それを書かないと駄目なんだね」

（なるほど）

と、私は頭の中の霧がちょっと晴れるような気がした。更につづけて半村さんは、

「それに、すき間産業だね」

「すき間産業？」

「他人があまり書いてない分野を書くんだよ。すき間を狙うのです。そうすれば、他人が書かない新しい材料が見つかるし、またライバルも少いということで、競争上も有利なのです。私も駈け出しの頃はそれを一生懸命狙って書きました。今もその心掛けは忘れていません」

大作家になった半村さんにしてもこの心掛けである—、いいアドバイスを受けたと、頭の中の一角に、なにか希望の星がキラッと光ったような気がした。

それでは、さて、

（私にとって、自分にしか書けないものって、何だろう）

と私は考えた。そしていろいろ考えてみたが、考えた末に辿りついたのは、

（経済小説だな）

ということであった。つきつめて言えば、銀行小説である。

その頃流行していたのは推理小説と時代小説、それもポルノぽいもの。経済小説でヒットしているのは山崎豊子の「不毛地帯」だけで、あと経済小説を書く人は、一、二人しかいなかった。しかも銀行小説となると絶無に近い。

（自分にしか書けない小説は銀行小説だ）

そう思った私は「カラオケ挽歌」という短編小説を書いて、「まんじ」に発表した。それはカラオケが上手にならなくて苦労する、銀行支店長の話である。

昭和四十年代に入ると日本経済も興隆期に入って、好景気にあり、個人のお客さんも大切なお客さんになり、いわゆる銀行も大衆化の時代になった。そうなると銀行の支店長も床の間を背にしてふんぞり返っているわけにはいかず、町内の忘年会などには顔を出して、一緒にカラオケを歌うということも必要になってきたのである。

ところがその支店長はもともと歌が下手だった。そこでテレビの歌謡番組などを見て、歌の練習するのだったが、少しも上手にならなくて苦労するという小説であった。それを「まんじ」に掲載した。

するとそれを読んだ栄光出版社の石澤社長から、

「これを長編小説に書いたらどうか」

という話が来たのである。

栄光出版社はこれまで推理小説を主に出版していたが、そろそろ推理小説の峠も見えてきたので、次の分野としてビジネス小説の世界を計画していたのであった。

そこで「カラオケ挽歌」を長編小説にすることにしたが、題名は「降格を命ず」とする条件がついていた。それは出版社としてはマーケットリサーチをして、いろいろな題名のビジネス小説を書かせ、その中の一つとして私のところへは「降格を命ず」という題名が割り当てられたのであった。ということは、支店長はカラオケが下手だけでなく、降格も下せねばならないというわけである。これは大変なことである。

そこで単に「カラオケ挽歌」のストーリーを長編に引伸すだけでは無理なので、主人公の支店長を三人登場させ、それぞれにいろいろな運命を荷わせて、その中の一人の支店長を降格させて、長編として完成させたのである。

幸い「降格を命ず」はどうしたことか非常に売れて、私の出版第一号になったのであるが、そのスタートはこの半村さんのヒントにあったのである。

以上、半村良さんのことを思いつくままに書いたが、今でも、新丸ビルの広報課の部屋、夜の銀座、西新宿のビル街、苫小牧、目白、南大塚あたりの風景を思い出すと、その背景に半村さんのおだやかな笑顔が浮かんでくるのである。

なお、平成二十六年八月四日の産経新聞のコラム欄に、（「日本沈没」に衝撃　半村良さんの手紙）と題して、次のような記事が掲載されていたので、参考までに転載する。

昭和四十八年にベストセラーになった小説「日本沈没」を読んで衝撃を受けた作家の半村良さん（昭和八年～平成十四年）が、作者の小松左京さん（昭和六年～平成二十三年）に対し、

「もう小説を書くのをよそうと思いました」

と書いた手紙を送っていたことが分かった。手紙は、東京世田谷文学館で開催中の「日本SF展。SFの国」で公開されている。

手紙は便箋四枚で、「日本沈没」が刊行された直後の昭和四十八年三月二十五日の消印。半村さんは手紙で、

なるかも知れない。

そして、やっと作者不詳の十二行の英詩にたどり着く。しかし、難しい単語はないが、いざ翻訳しようとすると、つかみ所が無く、するっと逃げてしまう。

どうやらそれを解く鍵が「風」であり、これが「死と再生の詩」と気づくと、日本語の詩がすらすら出て来て、曲も五分とかからないうちにできあがった。三十枚だけの私家版CDを作り、それを偲ぶ会で披露した（二〇〇〇年頃）。

それから三年後の二〇〇三年、新井満の友人が、このことを朝日の天声人語に紹介する。「千の風になって」が大きく羽ばたきはじめた。

私は「千の風になって」はアイルランドあたりの原曲に新井満が名訳をつけたのだと思っていた。芥川賞作家としての新井満しか知らなかったからである。

私がはじめて「千の風になって」に出会ったのは「晋州会」の解散会である。

韓国の晋州市は、かつての南朝鮮の中心地で、私の世話になっていた国立慶尚大学があるところ。戦前、道庁の地位が釜山に奪われるなかで、在住日本人が現地の韓国人と共に激しく抵抗したことから親日的であり、晋州中学校には韓国人も多く通っていた。そのため、引揚げ者の親睦団体「晋州会」には韓国からも多くの参加者がいた。

しかし、会員の老齢化が進み、二〇〇七年に熱海で解散会を行うことになり、私も特別に招待されたのである。そこで、別れの会に相応しい感動的な合唱を聞く。

その頃には既に秋川雅史のシングルも出ていて、ブームが始まっていたが、八十歳近くの会員達の企画のようには思えない。調べてみると、二〇〇四年には新井満も参画して金秀吉という韓国系の映画監督が同名の映画を作っていた。そういえば、会場には韓国のテレビ関係者も来ていたように思う。

そしてつい最近、セウォル号沈没事故で「千の風になって」がその追悼曲に選ばれ大ヒットしていることを知る。この曲は二〇〇九年に故金寿煥カトリック枢機卿と故盧武鉉元大統領への追悼曲としても使われたという。

幼なじみの親友とその同窓の夫人の死、追悼文に寄稿した多くの人達、新井満の鎮魂への思いなどに、懐かしい青春を見たような想いであった。

その翌日、電車に乗っていると、週刊誌の広告に「花子とアン」とか柳原白蓮とか意味ありげな文章が踊っている。花子とアンは判らないが柳原白蓮なら知っている。大正三美人で大正天皇とは従妹の関係にあった歌人である。

る。

家に帰って聞くと、朝ドラのタイトルであり、アンは「赤毛のアン」、花子はその訳者の村岡花子と知る。

そこで、突然思い出した。「千の風」に「赤毛のアン」が重なり、自分達にもあった青春の日々の事を。

それは一九五三年に荏原四中を卒業してから今に至るまで毎年続いている「あさな会」のことである。

名称の「あさな」は私とS君、N君の頭音を採ったものであるが、その他にYさん、Uさんという女性も参加している。二百五十名ほどの卒業生の中で、学年を横断してのグループで、男性は小山台高校、女性は三田高校に進んでいる。当時の荏原四中では、いわばベストファイブであった。

とにかく賑やかな会で、「発言権」の確保が大変なのであるが、ある年、Uさんが、ホテルにご主人を残したまま、風雨の中、プリンス・エドワード島を夢中になって走り回って、赤毛のアンを追いかけ回したという話をしていた。七十歳近くなってからも、ひたむきに走り回る情熱にいささか驚いた。それが私達の青春の群像につながる。

私達の中学校時代は、専用校舎もなく小学校に教室を間借りしていた頃で、進学のことなどはあまり話題にならなかった。しかし、みんな当たり前のように「大人の本」を読んでいた。子供向けの本を読み終わると、大人の本しかなかったからであるが、藤村の「新生」などを回し読みしていた記憶がある。

村岡花子の「赤毛のアン」は一九五二年に出版され、少女たちに熱狂的にうけ入れられたというから、おそらくUさんの「想い」もその頃に形成されたにちがいない。

新制中学に通う生徒は総じて貧しかった。しかし貧しいのが普通なのでみんなのびやかであった。Uさんも最初は私立女学校に進んだが、父母が病気勝ちであったようで、転入して来た頃は、みんなと同じように貧しかった。お父さんが戦前の映画俳優だったとかで、侍姿のブロマイドを見たことがある。早熟で気が強く、夢見るところや肩肘をはるところなど「赤毛のアン」と似ていた。

何が彼女を惹きつけたのか。その答えは「赤毛のアン」の物語にあるに違いない。

相模原図書館に行くが、「花子とアン」のブームで全部貸し出し中である。残っていたのは英語版の「Anne of green Gables」とプリンス・エドワード島旅行記や解説本だけである。

まず、解説本の概要を見る。

一九〇八年、ルーシー・モード・モンゴメリーは、孤児に近い境遇で育った経験を元にして「赤毛のアン」を

書いた。

急ぐことでもないので、英語版で読んでみようかと、ページをめくるがすぐに眠くなってしまう。それならば手軽に済まそうと、インターネット上で「あらすじ」を探してみる。その中に、原文の四分の一近くもある「詳細なあらすじ」があった。あまり文章はこなれていないが、アニメの宣伝用に作られたものらしい。

カナダ東部のプリンス・エドワード島に住む初老で偏屈者のマシュウとその妹で厳格なマリラは、家の仕事を手伝ってもらうため孤児院から男の子を引き取ることにした。しかし、現れたのは十一歳の赤毛のアンであった。

戸惑うマシュウと怒り出すマリラ、泣き出すアン、一晩だけグリーン・ゲーブル（緑の切り妻）の家に泊めてもらえることになった。

孤児として恵まれない中に育ったアンは、気が強いが、明るく楽天的、豊かな想像力とおしゃべりで、いつのまにかマシュウとマリラの心をとりこにする。はじめは学校になじめなかったアンであるが、ダイアナという親友を得て、美しいプリンス・エドワード島の自然の中で元気いっぱいに育つ物語が前半の八割。

十五歳になったアンはクイーン学院に進み、更に大学を目指して、小学校から不仲の美少年のギルバートと競い合う。そして卒業。ギルバートが金メダルを得たと聞いて意気消沈する中に、アンがエイブリー奨学金に決まったとの知らせが入る。

卒業式に臨んで、マシュウとマリラは幸せをかみしめる。

しかし物語は暗転する。銀行が破産し、心臓の弱かったマシュウがショック死した上に、マリラにも失明の危機がせまっていた。アンは大学進学を諦めて、マリラと一緒に生活するため、村の小学校の教師の道を選ぶ。先に採用が決まっていたギルバートがそっとアンに譲ってくれたのであった。アンがギルバートと結婚することを予感させて後半が終わる。マリラにはギルバートの父とささいなことで結ばれなかった歴史があった。

通常、斜め読みばかりしている私が、この八万字ほどの「詳細なあらすじ」に一時間以上もかかった。後半になると眼が潤む。まだ涙の在庫があったらしい。Uさんもこの後半に感動したに違いない。

「あさな会」の例会は、いつも私の誕生日十二月二十四日、すなわちクリスマス・イブに行っていた。ある年の事、Uさんから急に出席できなくなったとの連絡が入った。後で知ったことであるが、その時に、今のご主人

からプロポーズされたのであった。

しばしばハイキングや山登りを共にした「あさな会」には、メンバー外からの参加者も多かった。しかし、一組のカップルも誕生しなかった。それが時代であった。

S君は、文才に恵まれながら、学生の頃は、漫画ばかり読んでいた。設立されたばかりの広告代理店、旭通信社に入り、アニメ全盛期を支える広告界の立役者となる。「巨人の星」や「どらえもん」などを手がけ、旭通信社の副社長も長く務めたが、これが意外にダメ男。

N君は日航のパイロット。こちらは山男で真面目人間、スチュワーデスと結婚、私以上に理屈っぽい。六十歳すぎてエベレストに挑戦したが成らなかった。しかし、お嬢さんと一緒に一ヶ月間も、スペインのコンポステーラ巡礼に出かけた幸せ者。

Yさんは中学一年生の頃からもう「女性の雰囲気」があり、いまでも「新井さんて、いつも洟を垂らしていたのよ」などと言う。成績もよく男の子は子供扱いされていた。高校卒業して就職してから短大に進むが、良縁あって結婚し卒業していない。

ひとりずつを紹介しながら、自分の青春時代を想う。

ところで、「赤毛のアン」は全世界で五千万部ほど売れた大ベストセラーだという。その中で、日本でも二千万人に読まれたというし、プリンス・エドワード島を訪れる日本人が、多い年には二万人を越えたというから、英語圏外では間違いなく一番であろう。

ところが、最近三十年間ほどの「赤毛のアン」の出版状況を調べてみて驚いた。日本では二十版ほどであるが、ポーランドでは四十版も出ている。版が出版部数を意味するわけではないにしても、ポーランドが圧倒的なのである。しかもポーランドの人口は日本の三分の一である。

「赤毛のアン」のポーランド語版は、スウェーデン語版やデンマーク語版に続いて一九一一年にでる。ボストン原版のわずか三年後である。なぜ北欧が先行しているのか、理由がよく分からない。プリンス・エドワードはスコットランド系移民の島で、「赤毛のアン」はスコットランド系の移民の物語であり、登場人物も全てスコットランド系だという。現在、島にはポーランド系住民は〇・一パーセントしかいない。

気になるので、更に調べてみたところ、作者のルーシー・モード・モンゴメリーは第二次大戦の戦中・戦後を通じてポーランドの英雄のような存在で、レジスタンス兵士達に彼女の本が支給されていたとの記述に出会う。

早速、「赤毛のアン」の中にポーランドを探してみるが、それらしい記述はたった一行、アンの暗唱詩の中に、スコットランドの詩人トーマス・キャンベルが二十二歳の時に書いた「ポーランドの崩落」が挙げられているだけである。キャンベルはしばしば義援金を募ってポーラン

ドの独立を支援していた。そこまでは判ったがまだ釈然としない。

そして別のことがひらめいた。もしかしたら「千の風」もポーランドと関係があるのではないかと。

新井満が「千の風」に出会った頃、間違いなく日本で「千の風」はあまり知られていなかった。いや、英詩の世界でも今ほど有名だったわけではない。

米紙によると一九七七年に映画監督ハワード・ホークスの葬儀で俳優のジョン・ウェインが朗読したとか、一九八七年にマリリン・モンローの二十五回忌にも朗読されたとある。しかし、この詩が世界的に有名になったのは、一九九六年、英国ＢＢＣが、アイルランド共和軍（IRA）のテロで亡くなった二十四歳の青年が両親に託した封筒に、その詩が残されていたことを放送したことであろう。新井満が初めて「千の風」に出会う二年前のことであった。

その後、二〇〇二年、ニューヨーク世界貿易センタービルの同時多発テロの一周年追悼集会で、父親を亡くした十一歳の少女が朗読して、人びとの涙を誘ったという。この時すでに、新井満は私家版ＣＤを作成していた。

このような経過の中で、原作者捜しにも大きな進展があった。諸説あった中で、メアリー・フライ説が確実になったのである。

メアリー・フライは孤児として育てられ、十二歳の時にパルチモアにつれて来られた。高い教育を受けていなかったが、記憶力がよく、読書家で、アンと実によく似ていた。

幸いなことに彼女は一九九八年九十四歳の誕生日にカナダのラジオ局とのインタビューで、作詩の経過を詳細に語っていた。

一九三二年、メアリーはドイツから脱出してきた亡命者マーガレット・シュワルツコップという少女と友達になった。ナチスによるユダヤ人排斥が激化する中、少女にとっては、高齢で手足が不自由な母親を連れての脱出行は不可能であった。

まもなく母親からの便りが途絶え、母親の死の知らが届く。彼女は神経がまいってしまい、慰めても泣きやまず、「何より辛いのは、母のお墓に行ってお別れを言えないことよ」と言う。

その場で、メアリー・フライは「千の風」を作って、シュワルツコップを慰める。

……私のお墓の前で泣かないで下さい……
……私はそこに眠ってはいません……

もしかしたら、メアリー・フライも、アンのようにス

コットランド詩人トーマス・キャンベルの詩を読んでいたかも知れない。キャンベルの長編詩「墓地」の中の有名なフレーズ「To live in hearts we leave behind is not to die」は、今でも墓碑銘に盛んに引用されているという、「風にのる遺骨の風景」も出てくる。

原詩の「千の風」は、しっかり韻を踏んでいる。だから素人には作れないとして、メアリー・フライ説を否定する要素となっていたが、キャンベルの詩を諳んじていたとすれば、納得できる。

そして「千の風」を聞いて泣き止んだシュワルツコップも「赤毛のアン」を読んでいたのではないか。その頃、ポーランド内には多数のドイツ系ユダヤ人が住んでいたし、名前のシュワルツコップはポーランド系に多く、有名な歌手エリザベート・シュワルツコップはポーランド系である。

だから、この詩もホロコーストの詩集に収録されていてもおかしくない。

調べてみると、「生徒と教師のためのホロコースト詩集」の中に「ホロコーストの薔薇」に続いて、「千の風になって」が出ているではないか。

かくして「千の風」から「赤毛のアン」まで、ポーランドを仲介としてつながった。前回の『まんじ』にも「ポーランドと韓国」のことを書いたばかりである。

それがどうしたの、と言ってしまえば、それまでである。しかし、小さな偶然の連鎖であっても心が弾む。弾み心が青春だ。

ちょうど、ここまで書いたところに、夏休みで孫達をつれて娘がやってきた。

「赤毛のアン」をいつ頃読んだかと聞くと小学校六年生の時だという。卒業生全員でタイムカプセルを校庭に埋めた時に、娘は「世界二周旅行」と題する作文を入れた。「世界一周旅行」ではなく「世界二周旅行」というのが娘らしいが、そこにプリンス・エドワード島のことを書いたのだという。三十年後に開ける計画で、それが来春に迫っている。

今まで、ヨーロッパはかなりまわったが、アウシュビッツを想うとポーランドには気軽に行く気になれなかった。しかし、夏の雲、秋の光、冬の雪、朝の鳥、夜の星を見てみたい気になった。

二〇一四。八・四

郷土の戦時遺跡

山田嘉久

かつて存在せしものは時代の価値観を超えて保存し、記念すべきものである。
それが、文明というものである。

司馬遼太郎

一　掩体壕のこと

今とき、若い人たちに「掩体壕」といっても分からない人が多いだろう。

戦時中、敵機の空襲から人命を護るのが「防空壕」としたら、我が軍の零式艦上戦闘機（ゼロ戦）や爆撃機を護るための有蓋掩体の施設が「掩体壕」と呼ばれた。

土を蒲鉾型に盛り上げ、その上に金網や鉄筋を張ってセメントを流し込み、固まったのちに土を掻きだすという簡易なものだった。当時はさらに土をかぶせて草を生やしたりして敵機に見つからないように工夫した。

その掩体壕が戦後七十年経った今でも、我が故郷（千葉県茂原市）でも戦時遺跡として大事に保存されている。しかも十一基と多く、これだけの壕数が現存されているのは日本でも此処だけだという。なお、平成十四年の市文化財審議会の調査により、戦時中には十七基あったことが確認されている。

そもそも、この場所は戦時中、海軍茂原航空基地（正式には海軍252航空隊）のあったところ。戦争末期、サイパン島陥落後、本土への空襲が激化し本土決戦が必死となったので、大本営は米軍の上陸予定地として九十九里浜を想定、そのために作られた基地である。

（戦後米国側の発表では、米軍では九十九里、湘南海岸上陸作戦を「コロネット作戦」と呼んだ。沖縄陥落後、南九州志布志湾上陸作戦（オリンピック作戦）に次ぐ本格的本土上陸作戦だった）

こうして茂原航空基地は本土決戦基地としての役割を担うことになったが、たまたま昭和十八年に、この基地に隣接した旧制中学（現県立長生高校）に入学した私はこの基地造成によく動員された。当時、「月月火水木金金」という軍歌が流行っていたが、海軍さんは休みなしで軍務に励んでいるのだから、お前らも見習えと日曜日に駆り出されることもよくあった。

特に昭和二十年（当時三年生）には義務教育以外の学校での「授業一年間停止」が閣議決定されたため、授業は全くなし。そのかわりに基地に通うのが日課となった。

九十九里浜沖から茂原飛行場を目標に来襲する敵グラマン機は日増しに多くなっていった。これに応戦する我がゼロ戦機は始めの頃こそ多かったものの、その後目立って少なくなって行った。

硫黄島や沖縄戦に優先的に動員されたため、またパイロット自体が不足してきたためだろう。

そのため我々が飛行場に動員されていた際に、空襲に遭遇した時には、滑走路に並べられた「虎の子」のゼロ戦機を滑走路から続く誘導路沿いに配置された掩体壕に運ぶ仕事をよく手伝った。

今、考えると非常に危険な仕事だったが、通常の基地の草むしりやモッコ担きなどの単調な作業に比べると数段スリルのある仕事だったので我々中学生は嬉々として参加したものだった。

最近、ひょんなことから大手旅行会社ツアーの戦時遺跡ガイド役を買って出た私だったが、これを機に掩体壕のことを更に調べてみた。

①多くはコンクリート製のかまぼこ型（有蓋）だが、中には単に爆風、破片除けの土堤だけの簡便な無蓋のものもある。

②同じ有蓋壕でも爆撃機用のものと、戦闘機用のものの二種類ある。それぞれ工法が異なり、爆撃用の大型のものは、まず土で小山を築き、その上に金網、木、筵などを並べてコンクリートを打設し、硬化後内部の土をかき出して作られた（Z5工法）。

③それに対して戦闘機用の小型壕は特殊な鋼製型枠を組み立て、上からコンクリートを打設する（Z6工法）と呼ばれたが、戦争末期には材料不足から鋼製ではなく木製のものが使われたものも多かった。

④有蓋壕は全国に分布しているが、比較的関東に多い。特に千葉県（茂原のほか館山、木更津など）が最も多い。

現在、私たちの戦争体験を物語る貴重な遺跡として、茂原市によって大切に保存されている「遺構番号三号」掩体壕（市文化財）は前記②の爆撃機用に作られた大型掩体壕で、壕内面積二八六平方メートル、最大高さ七メートルもある。

壕の前にある表示板を読むと、当時の人手不足から、長生中学生や茂原農業校生も動員して作ったとも書いて

あった。

当時の思い出が甦った。

戦争が終わって、数週間ほど経ってから基地を訪れたことがあった。嘘のような静寂の中に無人のゼロ戦が並べられてあった。想像したよりも多くの機数だったが、既に我々勤労奉仕隊の手入れもなくなった滑走路は夏草がぼうぼうだった。

このときほど芭蕉の「夏草や、兵どもの夢の跡」の句を痛切に感じたことはなかった。

その滑走路跡は現在、三井化学千葉工場の東側道路で一〇〇〇メートル道路と呼ばれている。

往時茫々。七十年前の思い出である。

二　風船爆弾のこと

風船爆弾をご存じだろうか

太平洋戦争末期、我が軍が米本土攻撃用に開発した兵器である。直径10メートルの和紙製の気球にこんにゃくの汁を何度も塗布して気密性を高め、気球内に水素ガスを充填、時限性の爆弾と焼夷弾を吊るして、ジェット気流に乗せて飛ばすと云う、なんともチャチな兵器である。

因みに昭和二十年二月十八日の朝日新聞には「新型兵器、風船爆弾出現」の見出しが躍っている。

しかし、戦争前期に開発されたドイツの新兵器Ｖ２号に比べても、かなりの見劣りがするし、ましてや同じ頃ようやく完成をみた米軍の新型爆弾（原子爆弾）とは比べくもない子供だましの兵器だった。だが、敗戦の様相濃く、景気のいいニュースの乏しかった当時にあっては朗報であったことには間違いなく、中学二年生であった私などはこの記事を見て、小躍りした記憶がある。

風船爆弾の研究、開発はすべて「陸軍登戸研究所」で行われた。同研究所の前身は第一次大戦後（大正八年）に設立された「陸軍科学研究所」（科研）だが、昭和十一年には電波兵器（く号兵器）の開発にも着手していた。

そして第二次大戦の始まった昭和十四年には第一課（電波兵器）のほか、第二課（生物化学兵器）が設置されている。

太平洋戦争が始まると第三課（中国偽札の製造）、第四課（中野学校の指導など）まで手を広げたが、第二課に属する毒物の人体実験を有名な七三一部隊で行ったとされている。

なお、人体実験については、昭和五十七年、作家森村誠一が「悪魔の飽食」として小説化しベストセラーとなったが、現在ではその信憑性が疑問視されている。七三一部隊の初代部隊長は千葉医専出身の石井四郎軍医中将のため「石井部隊」、また部下には石井と同じ山武郡芝山町加茂部落の出身者が多かったため「加茂部隊」とも呼ばれた。

戦後、東京裁判でもその存在が問題となったが、結局、今に至るも、その全貌は明らかになっていない。

生物化学兵器に比して、第一課に属していた風船爆弾（ふ号兵器）については戦後、次第に明らかになってきている。

同研究所で開発された風船爆弾は主に都心の映画館（日本劇場、東京宝塚劇場、有楽座など）で組み立てられた。前述の通り直径十メートルの大型であるので、天井の高い建物が必要とされたからである。それに当時の映画館はすべて休業中だったので格好の場所だった。

その組み立てには主に付近の高等女学校の生徒が駆り出された。（千葉県では市原高女など）

男子中学生は他の軍需工場に動員中だったし、なによりも風船ののり付けに若い女性の手が最適だったからである。女子の手先が軟らかく、作業中に和紙の気球に疵（きず）がつかないという理由だった。

上流階級子弟の多い雙葉高女の生徒たちは作業中、「御免遊ばせ」を連発したので、監督軍人から「非常時に、そのような言葉を使うな」と注意されたと証言している。

風船につめる水素ガスは昭和電工で作られた。このように組み立てられた風船爆弾は、千葉市天台にあった気球連隊によって同連隊の格納庫に運ばれた。格納庫は三棟あったようだが、現在は一棟だけが残っている。我が家の近く、川光倉庫として現在でも営業中で、備蓄米の倉庫となっている。貴重な戦時遺跡である。

いよいよ、昭和十九年二月に千葉県一宮海岸から風船爆弾のアメリカ本土向け試射実験が行われた。この試射には陸軍省、参謀本部、兵器行政本部の代表者が立ち会った。

以降、同年十一月から翌年四月まで六ケ月に渡って一宮海岸をはじめ勿来（福島県）、大津（茨城県）から発射されたのである。

それより前、昭和十九年春ごろから上総一宮駅から海岸まで鉄道の引込線が敷設され、陸軍兵器廠が設置された。千葉市天台にあった気球部隊から新たに「ふ号」要員が再編成されたのである。

しかし一般人は立ち入り禁止とされたので、なんのための基地なのか知らなかった。

天保年間、外敵に備えて加納藩により築かれたという一宮海岸お台場跡付近に風船爆弾発射跡が十三ケ所あったというが、今ではほとんどが草に覆われ分からなくなっている。

試射に成功した十九年六月には、東条首相が「ふ号」作戦の実施を天皇に奏上している。作戦実施を了承した天皇はソ連領上には落下させないように指示を出したという。

これら三基地から発射された風船爆弾は総計九千五百発に達した。中には風の向きで稀に太平洋方面に向かわずに陸地（茂原方面）に向かってしまい、慌てて中止したものもあったが、一割ほどが米本土に到達した。

此の爆弾によりオレゴン州住民六名が爆死している。太平洋戦争中、米本土における唯一の犠牲者であり、今でも現地にはその記念碑が建っていると云う。碑に曰く

「この地は第二次大戦のさなか、アメリカ大陸で敵の攻撃のため死者を生じた唯一の場所である」

被害こそ笑い話ほどの軽微なものであったが、米政府が受けたショックは相当なものであったらしく、そのうち風船爆弾に日本兵が搭乗して米本土に侵入するのではないかの危惧が米軍部内にもあった。

なにしろ攻撃側さえ予測できない場所に、文字通り、風任せで飛来する。レーダーでは一切捕捉できず、しかも無音で接近するのである。アメリカの科学力をもってしても漆黒の闇の中を相当の早さで接近する物体ほど不気味な兵器はない。

そのため米政府はその発見、発射基地の特定に躍起となったが、その基地が意外な所から発覚する。

風船爆弾の表面に上総一宮玉前神社のお札が貼られていたことである。そのために一宮は戦争末期には米軍艦載機の執拗な攻撃を受けることになった。

今、米国スミソニアン博物館には「ふ号」兵器（風船爆弾）が保管陳列されているという。

三　軍都千葉―つわものどもの夢コース

前述のように、完成した「風船爆弾」は、当時千葉市天台にあった気球連隊の格納庫に保管されたが、気球連隊は当初、所沢（埼玉県）にあった陸軍気球隊が昭和二年に移転してきたものである。

日中戦争が勃発すると、この近辺（小仲台）には陸軍防空学校（後の高射砲学校）が設置された。防空気球は昭和十四年のノモンハン事件にも出動している。

ほかにも、この付近には陸軍歩兵学校、鉄道連隊、戦車学校、さらに陸軍病院など軍施設が数多く進出して、まさに「軍都千葉」の名を高からしめた。

現在では、「つわものどもの夢コース」と名付けられ、市民の格好の散歩コースとなっている。

1　鉄道連隊（現千葉公園付近）

日露戦争後の明治四十年にこの地に進出した当時の交通兵旅団司令部、鉄道大隊、材料廠は大正期には更に増強され鉄道第一連隊となり、津田沼の部隊が第二連隊となった。

司令部は椿森（現千葉財務局）に置かれ、現在石碑のみが残っている。

また前方にある椿森公園内には将校集会所の庭園の築山が残されている。此処の高台で眼下の千葉市街を眺めながら旅団長以下の将校連が春は花見、秋は月見を楽しんだと云う。

公園の北側の草むらには鉄道連隊の記念碑も建っている。

主体の鉄道連隊の置かれた現千葉公園内の中心に現在、市内有数の桜の名所である小高い丘がある。「荒木山」と呼ばれているが、当初は連隊のラッパ手の訓練が行われていたことから「喇叭山」と呼ばれていた。その後、上海事変で戦死した鉄道連隊の荒木大尉の名をとって、以後「荒木山」と呼ばれるようになった。

その麓には鉄道連隊の架橋演習用橋脚台が、また公園中央にある綿打池畔にはトンネル工事用のコンクリートドームが残っていて、昔日の面影を今に伝えている。当時の同連隊の「レール施設練習」の写真も飾ってある。

同連隊は戦後の合作映画「戦場にかける橋」（The Bridge on The River Kwai 主題歌はクワイ河マーチ）で有名になった。

現在の新京成電鉄（津田沼―新松戸間）は鉄道連隊の練習線をそのまま使用したものであり、そのためかやたらにカーブが多い。

また戦前、房総半島中央部を走っていた南総鉄道（茂原―笠森間）は同連隊によって敷設された。（昭和十四年廃線）

千葉公園から約六百メートル北側にある千葉経済大学は鉄道連隊材料廠の跡地であり、キャンパス内には機関車の組み立て工場だった赤レンガ造りの煉瓦建築（県文化）とレールの一部が残っている。

この周辺の轟町の名も軍靴の音が響くことに由来するといわれている。

煉瓦造りといえば、公園近くの「国立病院機構千葉医療センター」は戦時中の陸軍病院の跡であり、入口には陸軍病院当時の煉瓦造りの門柱二本がそのまま残されている。

2　陸軍歩兵学校（現作草部公園）

大正元年には陸軍歩兵学校が都賀村作草部（現千葉市天台）に創設された。

現在は作草部公園となっていて、公園内には「陸軍歩兵学校の跡」の石碑が建っている。脇に「由来」を記した碑もあるが、歳月を経過したため殆ど判読できない。

付近には此処に通う陸軍士官たちの住居が多かったそうだが、特に中国清朝最後の皇帝愛新覚羅溥儀の弟溥傑（1907―1994）が自宅からこの学校に乗馬で通ったという話は有名である。彼の自宅は稲毛区の浅間神社内にあり、嵯峨侯爵の長女浩と新婚生活を送った家である。現在は「千葉市ゆかりの家いなげ」（市重文）として公開されている。

3　陸軍防空学校、陸軍戦車学校など「散歩コース」からは少し外れるが、日中戦争勃発前後には穴川に陸軍戦車学校、小仲台に陸軍防空学校なども次々と新設された。

戦車学校は当初昭和十一年に習志野に発足したが、その後千葉に移転してきたもの。

防空学校は昭和十三年、四街道の野戦砲兵学校内に設置されたが同年、千葉に移転してきた。その後「防空学校」、更に戦争末期には「高射砲学校」と改称された。

後に台湾総統となった李登輝は戦前、日本陸軍見習士官として高射砲学校に軍務し、昭和二十年三月一〇日の東京大空襲の時には自ら高射砲を操作してB29を迎え撃つたと自伝に記している。

私事ながら、私の実兄、義兄もこの学校で学んだ。

実兄は戦争末期に台湾沖で戦死、義兄は戦後、シベリアに抑留された。更に私事を許されるならば、戦後この学校跡に厚生省復員局が設置されたので、私自身、昭和二十三年夏休みに数日間、アルバイトをしたことがある。その際、当時まだ生死が判別されなかった実兄の状況を調べたが分からなかった。

現在は跡地に市立千葉高校が建っている。

市内郊外にあった下志津陸軍飛行学校の前身は大正末期、印旛郡にあった陸軍航空学校下志津分校である。戦時中は主に偵察機教育を行ったといわれるが、戦後は自衛隊下志津駐屯地となった。

敗戦時には、これら軍事施設の敷地総面積は約百四十万坪にも達したという。

四　騎兵の町習志野

以上のように千葉市の戦時遺跡は主に昭和時代のものが多いが、隣接の習志野市には、それ以前の明治、大正期の戦時遺跡が目立つ。

例えば、前記千葉戦車学校は昭和十一年に習志野から移転してきたことは前述したが、その前身は大正五年に設置された習志野の陸軍騎兵学校である。（更にその前身は明治二十一年設立の陸軍乗馬学校）

1　騎兵旅団

習志野には日露戦争に備えて、明治三十四年、日本で唯一の騎兵旅団が誕生した。

以後、習志野は「騎兵の町」として発展してゆく。

旅団長は秋山好古少将（当時）。司馬遼太郎の名著「坂の上の雲」の主人公の一人として有名であるが、好古はそれ以前（中佐当時）にも陸軍乗馬学校（後に騎兵実施学校）の二代目校長も経験しているので、「騎兵の父」といわれた。

なお好古は酒豪として知られたが、彼の愛用の酒屋も現残している。（秋山好古については拙稿「習志野と秋山好古」「まんじ」116号参照）

旅団司令部跡は現在、習志野郵便局となっており、隣の八幡公園内には「習志野騎兵旅団司令部跡」の碑が建っている。

富国強兵政策が強力に推進された明治三十四年に開設されたのは前述の通りだが、前方にある東邦大学、日本大学は第一旅団隷下の騎兵第十三連隊、第十四連隊跡であり、その後方には第二旅団隷下の十五、十六連隊があった。（現東邦高校）

なお第二旅団長は閑院宮載仁親王だが、お飾り宮様のため実質はすべて好古が指揮を執った。

日本初の快速兵団であり、佐倉の歩兵連隊と並んで首都防衛の役を担っていた。そして明治三十七年の日露戦争勃発とともに、連隊に動員令が下った。その活躍ぶりは「坂の上の雲」に描かれた通りである。

また昭和六年の満州事変の時にも満州に進出し、日中事変まで大陸を転戦した。

なお、本文冒頭の司馬遼太郎の碑文は十三連隊跡、東邦大学キャンパス内にある。司馬の亡くなった平成八年に連隊有志会が建てたものという。

2　陸軍騎兵学校

明治二十一年に東京麹町に開校した陸軍乗馬学校が習志野に移転したのは大正五年であり、同時に騎兵学校と改称された。

卒業生には硫黄島で玉砕した栗林忠道中将やロスオリンピック乗馬金メダルの西武一大佐（当時中尉、海外ではバロン西として有名）などがいる。蒋介石も一時、留学したという。

なお、戦前のオリンピックで乗馬の日本代表は殆どこの学校の教官で占められていた。

現在、自衛隊習志野空挺団内にある「空挺館」は「騎兵学校迎賓館」をそのまま利用したもの。騎兵学校に行幸した天皇の「御馬見所」もそのまま残っている。（ただし現在、見学するには事前に自衛隊の許可が必要）

大正十五年に京成電気軌道（現京成電鉄）が施設されるとともに開設された京成大久保駅斯の商店街は、いかにも軍都らしく兵隊さんを相手にする時計店や写真館、除隊記念の銘入り手拭、煙草盆、さらに飯ごうや水筒のフタなどを扱う雑貨店などが軒を並べていたという。

いまでも「秋山好古」を町興しの材料として、秋山好古顕彰碑や閨連資料室が商店街の真ん中にある。

（騎兵から戦車へ）

騎兵中心であったこの連隊も、機械化の進歩に伴い装甲部隊になり、更に戦車隊へと脱皮していった。

戦車が近代兵器として登場したのは第一次大戦からだが、騎兵学校では早くも大正九年にルノー製戦車を導入している。それ以前の大正七年から自動車、装甲車、戦車の研究に着手していた。

大正八年には機関銃中隊が騎兵旅団内に新設され、昭

和に入ると騎砲兵中隊、装甲自動車中隊も設置され、満州ハイラルに進出した。

日中戦争の始まった昭和十二年には装甲自動車隊は戦車隊に改称され、いよいよ「戦車の時代」に入った。騎兵第十四連隊は戦車第二連隊に変わった。

千葉市内に陸軍戦車学校が新設されたのもこの頃である。

昭和十四年のノモンハン事変は日ソの戦車の戦いだったが、その直後に騎兵旅団の解散が始まり、太平洋戦争が始まる頃には完全に騎兵部隊は姿を消した。ここに秋山好古が作り上げた日本騎兵の歴史は幕を降ろした。

3 習志野捕虜収容所

習志野に捕虜収容所が設けられたのは、日露戦争末期の明治三十八年五月であり、一万五千人のロシア人捕虜が収容された。当時の習志野町の人口は六千人強だから、それに倍する捕虜の数だった。外出を許された休日などは、習志野の街はロシア兵で溢れていただろう。

現在の市立習志野高校から東習志野幼稚園まで約五十五万坪の敷地に七十五棟の収容所が建ち並んでいたという。

この収容所跡には第一次大戦時にも収容所が設けられたので（ただし建物は別）、収容された捕虜は当然、ロシア兵からドイツ兵に代わった。

収容所長は西郷隆盛の嫡男西郷寅太郎大佐。人望厚かったが、当時世界的流行だったスペイン風邪で死亡した。多くのドイツ捕虜たちも罹病し命を落とした。

船橋市習志野一丁目にある習志野霊園は旧陸軍墓地だが、霊園正面奥に「三国戦没者の碑」がある。日露戦争のロシア人捕虜、第一次大戦のロシア人捕虜そして日本人の慰霊碑が仲良く並んでいる。

収容所跡にある東習志野幼稚園の脇にはこの経緯を示す表示板がひっそり建っていた。

小説 田方農業高校物語（二）

堀内永人

四、仁田甲子郎、三田英語義塾と東京帝国大学で学ぶ

話を、仁田大八郎に戻そう。

仁田大八郎は、幼名を『甲子郎』といい、明治二十九年（一八九六）に家督（仁田家三十七代）を相続して「大八郎」を襲名した（大八郎としては七代目）。

（なお、現代の戸籍法では、姓は勿論、名を変える場合にも、家庭裁判所の許可を得なければならいのが原則である。しかし、明治の初期までは、成人すると名前を変える人が多かった。士農工商の身分制度がきびしかった江戸時代には、名字（姓）は武士のみで、百姓町人は、名のみを名乗り、名字は名乗らず、屋号で識別した。明治四年に戸籍制度ができて、士農工商の区別なく名字を付けるようになり、さらに、明治三十一年、旧戸籍法が制定されて氏名制度の原型が確立した。さらに昭和二十三年、新戸籍法が制定されて現在の氏名制度になったのである）

さて、甲子郎（仁田家三十七代当主）を述べるについては、祖父の常種と父の忠順に触れておかなければならない。

祖父の仁田家三十五代当主大八郎常種（大八郎としては五代目）は、幼名を滝次郎といった。

二十五歳の時、仁田家を継いで大八郎を襲名、常種と称した。

常種は、時の韮山県令柏木忠俊（元、江川太郎左衛門の家臣）と協議のうえ、

① 伊豆産馬会社を設立して、牛馬の飼育、改良の普及

② 天蚕飼養所を設立にして、養蚕の振興勧奨
③ 道路橋梁の新設補修工事の費用負担するなど、公益を目的にした社会事業に力を注いだ。

父の仁田家三十六代当主大八郎忠順（大八郎としては六代目）は、幼名を小三郎といった。

① 産馬会社を設立し、農家の経済力向上のために、父の常種と同様、畜産を奨励し、馬や乳牛を輸入して、牛馬を改良

② 獣医伝習所を設立し、畜産の振興に必要な動物の病気対策を実施

するなど、地域産業の振興に努めた。

幼児の頃より、祖父や父の仕事を身近に見聞していた甲子郎は、その感化を受け、社会貢献を当然のこととして成長した。

甲子郎は、農村の振興には、畜産の専門知識を持つ指導者が必要であるという信念を持つ父、忠順の勧めもあって、一旦入学した韮山中学校を中退し、新しい学問を修学するため上京した。

この時、甲子郎は弱冠十五歳。

甲子郎は、明治十八年（一八八五）九月九日、菊の節句の良き日に、祖父の常種と、たまたま東京に所要のある親戚の花島輸吉と三人で、上京した。

この当時は、まだ鉄道が敷設されていなかったので、上京するには箱根峠を越えるか、御殿場街道を通るかのいずれかであった。

（東京と神戸を結ぶ東海道線の全面開通は、明治二十二年《一八八九》七月一日で、東海道本線と呼ばれるようになるのは、さらに二十年後の明治四十二年《一九〇九》である）

当日、三人は、朝早く山駕籠を三挺雇い、一番前が常種、次が花島、三つ目の駕籠に甲子郎が乗って仁田の家を出発した。

韮山街道から玉沢路を通り、妙法華寺の山門をくぐり、三ツ谷新田に出た。

いよいよ、

〝箱根の山は天下の険・・・・〟

と謳われた東海道の難所、箱根路である。

北の方を見上げれば、紺碧の空に富士山がすっくと聳えている。

なるほど、聞きしに勝る急坂である。

三間先に視線を向けると、あたかも地面が額に付くのではないか、と思わせるほどの急坂である。地元の人は、この急坂を、

『強飯坂』（現在の静岡県三島市笹原新田）

と呼んでいる。

強飯坂とは、昔、旅人が、あまり急坂のため、体力を燃焼して大汗をかき、その汗の熱気で、背負ったお米が蒸れて、強飯（蒸し飯）が炊けたという逸話が生まれたほどである。

強飯坂は、それほど険しい坂である。

箱根路には、強飯坂のような険しい坂道が随所にある。

箱根路は、三島の宿から峠まで約二里二十八丁（約十キロ）、道の両側には老松や杉の巨木が植えら、昼なお暗い道が延々と曲がりくねっている。

三挺の駕籠を担ぐ人足たちは、調子を揃えて、

〝エイホ、エイホ〟

と威勢よく声を掛け合いながら登っていく。

すると、年老いたといえども、血気盛んな祖父の常種が、

「よう、駕籠屋さん。酒手（現在のチップ、心づけ）を弾むから、三挺のうち、誰の駕籠が一番早く峠に着くか競争してみようじゃないか」

と駕籠舁きの人足に嗾けた。

「おーい、相棒よ。旦那さまが、『誰が、一番足が達者か、競争して見ろ』とおっしゃっている。一丁やってみるか」

「こりゃあ面白い。やってみべぇ」

「おらぁ、山登りなら誰にも負けねぇ、任せておけ」

ということになり、強飯坂を登り切った笹原一里塚で小休止し、ここをスタート地点として、早駕籠競争が始まった。

六人の駕籠舁きは、常種から、過分な酒手を弾んでもらい、張り切った。

三挺の駕籠は、急坂を抜きつ、抜かれつして登った。途中、接待茶屋で一服し、元箱根の町に着いたのは、昼少し前である。三丁の駕籠はほぼ同時に茶屋に着き、そこで昼食をとった。

早駕籠の競争をさせたおかげで、予定より少し早かった。

昼食を食べ終わった常種は、元箱根の茶屋で、仁田村から乗ってきた駕籠を帰し、今度は小田原へ戻る駕籠を捕まえて乗り換えた。その方が、駕籠賃が安く済むからである。

元箱根の茶屋から小田原まで、四里八丁（約二十キロ）である。茶屋を出てしばらくすると、山道は、旅人も少なくなって寂しくなってくる。

この辺りが、駕籠舁き人足が駕籠賃をせり上げるために、お客に脅しをかけるところである。

常種は、心得たもので、駕籠舁き人足が駕籠賃をせびる前に、

「駕籠屋さん、少ないがこれを取ってくれ。急ぐ旅ではないが、頑張って小田原までお頼みしますよ」

と言って、酒手（こころづけのお金銭）を弾み、奉書に包んで人足に渡した。

人足は、

（この客は、旅慣れた上客だ）

と見て、

「おーい相棒、たくさんお鳥目（銭のこと）をいただいた。お礼を申し上げろ」

「旦那さま、おありがとうございます。相棒、ひとつ頑張ろうぜ」

と、それぞれ常種にお礼を言った。そしてねじり鉢巻きをきつく巻き直し、息杖を大きく振って走り出した。

一行が小田原に着いたときは、陽はまだ高かったが、常種ら三人は、小田原本町の一流旅籠『小伊勢屋』に投宿した。

ここは、かねてから常種が小田原に来たときに投宿する宿屋である。

常種は、旅籠では、主以下、番頭、仲居、玄関番、三助の吉蔵に至るまで、みんな顔馴染みである。三人は、鄭重に迎えられ、箱根越えの疲れをいやすことができた。

翌朝、常種は、馬車を一台雇って、相模湾から吹いてくる潮風を全身に受け、大磯、平塚、藤沢、程ヶ谷を通り、横浜に着いた。

横浜は、貿易港として栄えており、外国の国旗をはためかせた汽船がたくさん停泊していた。

甲子郎は、初めて見る外国の大型商船の威容に驚くと同時に、おぼろげながら、

（これはすごい！　日本でも、この外国船に負けない船を造らなければ、やがて日本は外国に隷属するようになる。イギリスやアメリカなど欧米列強国と対等に交易するには、日本人の知的レベルを上げなければ駄目だ。そのためには、学校を創り、大いに学問を学ばなければならない）

と思った。

横浜から東京の新橋までは、明治五年（一八七二）九月に開通した汽車を利用した。

長い不格好な煙突から、黒い煙を出して走る小さな蒸気機関車、その機関車に引っ張られて走る木箱のような客車に、甲子郎ら三人は乗った。

客車は、現在では想像もできない小さな箱型の車両である。座席は、藺草の筵が張ってあるだけの硬い二人掛けの椅子、この椅子に向かい合って腰かけて新橋へ向かった。この玩具のような汽車であっても、人力車は勿論、馬車よりはるかに速いので、車内は、大勢の乗客で混みあっていた。

甲子郎は、汽車、建物、乗合馬車、道を行きかう老若男女の服装などなどに、目を見張った。

その夜は、芝（現在の東京都港区新橋）の旅館「和泉屋」に泊まったが、甲子郎は、昼間目にした風俗が、伊豆の田舎とはあまりにも隔絶していたため、強烈なカルチャーショック（異文化による精神的な衝撃）で興奮し、なかなか寝付かれなかった。

祖父の常種は、甲子郎が時々寝返りを打つのを察し、

「甲子郎、眠れないのか」

と、暗闇の中で声をかけた。

「うん…」

甲子郎は、昼間受けたカルチャーショックを祖父になんと説明してよいのか、咄嗟に言葉が出なかった。

「うむ、甲子郎は、伊豆の田舎しか知らないのだから、東京を見てびっくりするのは無理もないことだな…」

と常種は、弱冠十五歳の甲子郎青年の心中を思い遣った。

この度の上京に同行している親戚の花島輸吉も、やはり眠れないと見えて、

「横浜の海に停泊していた外国船の威容は、物凄かったな。甲子郎ならずとも初めて見る者は、驚嘆し胸が熱くなってくるだろう」

と、言って話に加わった。

「ね、お祖父さん、あの外国の船は、どこの国の船か知らないが、地球の向こう側からやってきたんだね。日本でもあのように大きな船や、今日乗った汽車を造れるようになるんだろうか？　伊豆の人たちもしっかり勉強しなければ、置いてきぼりをくってしまうね」

と興奮気味に言うのであった。

そして、まんじりともせず一夜を明かした甲子郎は、翌日の早朝、

「なっとぅー」

という、東京新名物の納豆屋の売り声に目を覚ましたが、

（そうだ、俺は勉強するために東京に来たんだ。納豆売りや新聞配達の売り声に驚いていてはいけない。よーし、しっかり勉強しよう！）

と、ひそかに心中に誓った。

甲子郎は、明治十八年（一八八五）九月、から、芝浜町に下宿住まいをして、三田の英語義塾に通って勉強を始めた。

この年の十二月、明治政府は内閣制度を施行し、伊藤博文が初代総理大臣に指名されて、第一次伊藤博文内閣が誕生した。

また、経済面では、日本銀行が『銀兌換の日本銀行券』（銀正貨と交換できる紙幣）を発行し、日本の近代産業化が始まった。

甲子郎は、学校の登校日には授業が終わると、脇目も振らず下宿に帰り、夕食を済ませて休む暇もなく今日学んだところを復習し、そのあとは、就寝時刻まで、予

習に余念がなかった。

甲子郎の勉強態度は、几帳面な性格そのもので、自らたてた修学計画を忠実に実行していた。このようなところは、律儀な性格そのものである。

この当時は、まだ電気が引かれていなかったので、石油ランプを灯して、その灯りの下で一心に勉強した。

石油ランプは、一日灯りを灯すとランプの火屋（ランプの灯を覆うガラス製の筒）が油煙で煤けて暗くなるので、毎日火屋を掃除するのも甲子郎の日課の一つであった。

甲子郎は、その翌年の明治十九年七月、十五歳で三田英語義塾を卒業、すぐに東京駿河台（現在の東京都千代田区神田駿河台）の予備校成立学舎に入って受験勉強を始め、明治二十一年九月に、東京駒場（現在の東京都目黒区駒場、現在、東京大学教養学部がある）の農林学校農学科（明治二十二年に東京農科大学と改称。現在、東京大学農学部）に入学した。

甲子郎は、三田英語義塾に通学している時には、韮山出身の叔父で、洋学者の大石勉吉の家に下宿した。

大石勉吉は、元韮山代官所の漢学の教授、大石省三の養子で、三田英語義塾に近い芝愛宕下（現在の東京都港区愛宕）に住んでおり、身元保証人にもなってもらうなど、諸事都合が良かった。

また、受験勉強のため、成立学舎に通学している時は、叔父の仁田桂次郎が下宿していた本郷真砂町（現在の東京都文京区本郷）の下宿屋から通学した。

この下宿屋は、田方郡函南村桑原（現在の田方郡函南町桑原）出身の中村政五郎氏が営んでいる下宿で、同氏は、高潔な人柄で、後輩の面倒をよく見る頼もしい人物であったので、学生たちの評判が良かった。甲子郎も、居心地が良かった。

さらに、駒場の農林学校に入学してからは、仁田桂次郎と一緒に麻布笄町（現在の東京都港区西麻布）に家を持ち、そこから通学した。

甲子郎は、駒場の農林学校に通学していた時は勿論、三田英語塾に通学していた時も、予備校に通学していた時も、周囲の人が驚くほど熱心に勉強したので、たちまち手持ちの本を読み尽してしまい、人力車を雇っては、日本橋の丸善書店や神田神保町の書店へ行って、次に読む本を購入した。

このように次々と甲子郎が本を買うので、彼の下宿は、読み終わった本が山となり、自分の寝るスペースがなくなるほどであった。

この頃の文明は、欧米諸国、それも和蘭（オランダ）から入ってくることが多かったので、学問といえば、オランダの本を読むことであり、甲子郎の買う本もオランダ語の本が多かった。

甲子郎の下宿を訪れた学友たちは、おびただしい彼の蔵書に驚き呆れ、彼を、

『蘭書家』（オランダの書物ばかりを読む人）と呼んだ。

それほど、甲子郎はオランダ語の本を買っては読み、読んではまた買うという日々であった。

だが、この時の猛烈な読書力が、後年になって彼の人生に大きく寄与するのである。

農科大学（現在の東京大学農学部）の卒業時期が近づいてくると、大学側でも、甲子郎の能力を高く評価し、卒業後は、助教授の椅子を用意して、大学に残って欲しいと要請したほどであった。

しかし、彼としては、学問を身に就け、地元の学校に就職して、地域に貢献したいという初期の目的があったので、大学の要請を固辞した。

甲子郎は、農科大学に足掛け七年在籍した。

当時の学生風俗は、蛮カラ（ハイカラの反対）をヨシとしていたので、学生の多くは、わざわざ醤油で煮しめたような手拭を腰のベルトに引掛け、厚くて高い朴歯の下駄を履き、一見、不良学生風を装った若者が多かったが、彼は、当世の学生風俗に毒されることなく、常に真面目な学生として生活していた。

当然のことながら、勉強家、甲子郎の学業成績は常にトップクラスで、かつ、人格も優れていたので、特待生となった。

大学の農学科に籍を置いた甲子郎は、多くの学生が敬遠した植物病理学を研究し、堅実な学生生活を送った。

だが、彼は、ただただ真面目で、堅物の学生というだけではなかった。

学友に誘われれば、決して否とは言わず、ニコニコと笑い、

「よーし、待っていました」

と言わんばかりに快諾し、銀座に飲みに出かけたものである。

この頃の交通機関は、鉄道馬車（機関車の代わりに馬が車両を引っ張って線路の上を走る馬車）が主流で、乗り心地も良かったので、一区間二銭の乗車賃を払って、この鉄道馬車を利用して、夜の銀座へ繰り出したものである。

夜の銀座は、街頭にはガスが灯り、明々と道路を照らし、柳の街路樹の下では、モダンボーイとガールが肩を寄せ合い、愛をささやいていた。

同時期に、弟、直も農科大学獣医科に在籍し、同じ下宿から通学していた。

明治の時代には、いろいろな迷信や偏見があり、獣医をケモノ医者といって忌み嫌い、蔑む人が多かったが、

弟の直は、農業を営むには、牛馬の飼育は不可欠であるので、敢然として獣医科の道を選んだ。

なお、同じ下宿には、静岡県出身で、後にビタミンB1を発見し、東大教授、農芸化学者となる鈴木梅太郎博士も寄居し、机を並べて勉強していた。

五、名前を大八郎に改め、実業家の道を進む

明治二十八年（一八九五）三月、甲子郎は二十四歳になり、農科大学を卒業、今まで買い求めたおびただしい蔵書を持って帰郷、初期の目的通り、直ちに韮山中学校に奉職、教師となって生徒を教えたのである。

「おい、儀十さぁ、仁田の旦那さまは、仰山な本を持って東京から帰って来なさった。ご自分でも何冊かわからないじゃないのかのぉ……」

「聞くところによると、何千冊もあるんじゃぁないか、ということらしい」

と青木茂吉と塚本儀十は、村人から聞いた噂話をしていた。

仁田家では、その翌年、父親の三十六代仁田大八郎（忠順）が五十歳で死亡した。少し早すぎる死であった。二十五歳となった甲子郎は、長男であったので、長子相続制のしきたりに従って、仁田家三十七代大八郎（大八郎の名前としては七代目）を襲名して、家督を相続した。

（以下、名前を「甲子郎」改め『大八郎』という）

明治二十九年（一八九六）大八郎が二十五歳になり、家督を継ぎ、かつ、大学で学んだ農業学の知識と技術を惜しみなく地域農民に教え伝えたので、彼の信望はますます高まった。

地域の住民は、大八郎の豊富な知識と技術、高い信望を放っておかなかった。

大八郎の能力を評価していたのは、農家の人たちだけではなかった。

明治の御代になって約三十年、我が国の産業界も、政治、文化、軍事などの充実、発展とともに次第に力をつけてきた。

この傾向は、地方においても同じであった。

静岡県東部の事業家は、文明の発展に必要な動力、すなわち、電気の確保に奔走していた。

電気の必要性を感じていた仁田大八郎は、明治二十九年（一八九六）に、函南村平井の小柳津五郎氏ら地元の有力者と協議して、

「駿豆電気株式会社」

を設立し、社長に就任して電力事業に乗り出したのである。

電力事業を始めるに当たって、一番苦心したのが電気技術者（エレクトリック・エンジニア）の確保であった。

幸い、大八郎が、東京の予備校、成立学舎で学んでいた時に、一緒に勉強した学友で、後に日本の産業界の実力者となる、野口遵氏（日本窒素社長）が、駿豆電気株式会社の事業に興味を持ち、一肌脱いでくれることになった。

さっそく話し合ったところ、快く取締役に就任してくれた。

「野口さん、あなたが取締役に就任してくださったので、わが社は千人の味方を得た以上の力強さを得ました。ありがとうございます」

と、大八郎と小柳津五郎は、代わるがわる謝意を述べるのであった。

すると野口氏は、

「いえいえ、お二人から、そのように感謝されますと、かえって荷が重くなります。私とて、果たしてどれだけの仕事ができるかわかりませんが……」

と、恐縮するばかりであった。

「さっそくですが野口さん、駿豆電気株式会社は電力会社でございますから、まず、最初に発電所を建設しなければなりません。いかがしたものでしょうか」

「そうですね。発電所といえば、火力発電所か、水力発電所のどちらかに決めなくてはなりませんが、仁田さん、当地には水量の豊富な川がありますでしょうから、その水力を活用した発電所にしてはいかがなものでございましょうか」

「さよう、火力発電の燃料を考えますと、野口さんがおっしゃる水力発電所がよいですね」

と、大八郎自身も水力発電所を考えていたので、水力発電の線で計画は進んでいった。

「仁田さん、伊豆には、狩野川という水量豊かな川があると聞いておりますので、その水力を活用したらよろしいでしょう」

「ところが野口さん、狩野川は、総延長が約四十キロメートル、水源を天城山中に発する伊豆で一番大きな川でございますが、天城の湯ヶ島村から函南村仁田に至るまでさして急流ではありませんが、川床には巨岩が重なりあうようにありますので、洪水が出ますと、川が氾濫して絶えず流れが変わりまして、貯水することができないではないかと思います」

と、大八郎は、洪水時の惨状を思い出して眉を曇らせた。

野口遵は、意外そうな顔をして、ちょっと思案していたが、

「そうですか。それでは、狩野川の他に大きな川はありませんか」

「狩野川に匹敵するような大河はございませんが、大場川、来光川、柿沢川などの河川がございます。さてどの川がよろしいでしょうか」

「仁田さん、私は、現地を観ておりませんから、どの川が水力発電に適しているかわかりません。皆さんで現地をよく調査されてお決めになったらいかがでしょうか」

ということで、大八郎は、株主たちと協議した結果、田方郡函南村を流れる柿沢川の水力を活用することになり、同村平井に発電所を建設し、電力事業が始まった。

平井発電所で造られる発電量は二七五キロワットで、当地方第一の発電所である。

駿豆電気株式会社が、実際に電力の供給を開始したのは、四年後の明治三十三年（一九〇〇）、で、電力の供給は、田方郡三島町（現在の静岡県三島市）を中心にした北伊豆地方から開始され、逐次田方郡下、沼津地区、次いで熱海地区に範囲が広がった。

この頃の照明器具といえば、行燈か蝋燭を灯すものが多く、最近ようやく石油ランプが使われだしたばかりであり、東京銀座のガス街路灯などは、特殊な例であった。

それが、石油ランプの数十倍の明るさのある電気が普及し始めたのであるから、初めて電灯に接した人は、皆一様に、その明るさに驚嘆し、仁田大八郎の名声は一段と高まった。

残念なことであるが、駿豆電気株式会社は、丹那トンネル開鑿による地下水の異常湧水により、柿沢川の水量が激減し、水力発電に必要な水量を確保できず、大正末期に解散した。

当然のことながら、田方郡下の地域住民は、大八郎の政治力を高く評価し、

「田方郡函南村の村議会議員」

「田方郡会委員」

に推した。

こうして大八郎は、各方面において活躍した。

一方、田方郡下の経済界においても、事業資金円滑化の機運が高まり、大八郎は、田方郡下の有志と図って、

「三島銀行」

を設立、その取締役にも就任した。

そのほか、大日本畜産会北伊豆支部長、静岡県畜産組合連合会幹事に選出されるなど、公私にわたって、多くの役職に就任した。

つづく

敗走

太田精一

……雨が激しく降っている。慶応四年五月十五日、早朝から始まった東征軍の砲撃は、午後になって、ますます激しくなった。

無数の砲弾が雨中を飛び交い、彰義隊の陣地に炸裂し、木柵や保塁を破壊している。

遠く本郷の大地から撃ち込まれる砲弾は避けようもない。隊士は、立てこもった陣地の泥濘の中を右往左往するばかりで、次第に戦闘能力が失われて行った。

火力、兵力に劣り、指揮系統も乱れがちな彰義隊は、たった一日の戦闘で壊滅した。

この戦いで、寛永寺の堂塔伽藍の多くは、焼失し、千二百軒の家屋に被害が及んだ。彰義隊の死傷者は、二百数十人。これに比し、東征軍は、戦死四十人、負傷七十人と軽微な損害に留まった。

尽忠隊に所属し、上野下寺の宿坊に立て籠もった兵藤三之助と大井藤三郎は、敵砲弾による死傷者が続出する中じっと耐えていた。夜になった。辺りが闇に包まれたが、雨は依然として降り続いている。

東征軍に向けての切り込みの命令が下った。

兵藤と大井は、数十名の仲間と共に白刃をかざし敵中に突入した。だが、敵は遠くから鉄砲を撃ちかけて来るばかりで、刀を振り下ろす相手がいない。そのうちに次々と仲間が敵弾に倒れ、気が付くと隊は壊滅し、二人は離れ離れとなった。

兵藤三之助と大井藤三郎の逃避行は、それから始まった。

兵藤と大井は、八丁堀の組屋敷に住む同心で、共に三十俵二人扶持の小禄である。兵藤は、榊原健吉門下で直新陰流を学び、いささか腕に自信があった。

一方、大井は、北辰一刀流千葉定吉の門弟となったが、生来の不器用からか、剣術はいま一つである。兵藤は、二十三歳。大井は、二つ違いの二十一歳であった。

江戸城開城は、守旧派の幕臣にとって屈辱の変事であった。加えて東征軍の横暴が目に余る。そのため町民から反感を買い、治安も悪化した。義憤を感じた兵藤は、彰義隊に志願し、江戸町民の盾となろうと考えた。

彰義隊は、徳川家の資金援助を受け、正規軍ではなかったが、御家人の二、三男を中心に、諸藩の藩士及び佐幕派の浪士を加え三千人も達していた。それが上野寛永寺の堂塔にたてこもって、東征軍に反旗を翻したのである。

有栖川宮熾仁親王を大総督とする東征軍は、官軍と称しているが、彰義隊は、官軍とは認めていない。

「大井殿、それがしは、どうにも東征軍の横暴が、我慢できぬ。江戸の町を我が物顔に歩き、略奪、暴行を重ねているが、それを取り締まる力が、われわれ同心には最早ない。この上は、彰義隊に加わって、横暴な東征軍を懲らしめ、江戸の町を再び住みよい町にしなければならぬ。どうだ、お主も彰義隊に入隊しないか」

大井は、あまり乗り気ではなかった。荒事には自信がない。同心ではあったが、殺伐な捕り物は好みではなく、むしろ町民のよろず相談ごとに、親身に応じている方が性に合っていた。だが、時代は大きく変貌している。幕府の瓦解が、同心の地位を失わせることになり、大井は、不安な毎日を過ごしていたのである。

「分かった。兵藤さんの言うとおりにしよう。彰義隊に加わることにする。だが、斬り合いは得手でない。だから、命令の伝達や兵糧の調達などの仕事で役に立ちたい」

大井は、兵藤の説得に応じた。

「そうか。お主は、捕り物はあまり得意でなかったからのう。彰義隊にもいろいろな仕事がある。お主に適した仕事に就けるよう頼んでみよう」

兵藤は、一人でも多くの知った仲間が入隊して欲しかったため、調子のいい返事をした。ところが、いざ入隊してみると戦闘員が不足していて大井は、鉄砲隊に回された。

彼は、鉄砲の撃ち方もろくに知らない。まごまごしているうちに、千葉定吉道場にいたことがバレ、心ならずも兵藤と同じ切り込み隊に回されてしまったのである。

切り込みで多くの仲間を失った兵藤三之助は、混戦の中大井藤三郎を見失ってしまった。切腹する者、再挙を図り逃亡する者の蠢く中で、自分は、どうすべきか迷った。まずは上野のお山を下り、それから考えることにした。

坂本へ下り、小野照崎神社脇にかかると一軒の花屋があった。彼は、袴と陣羽織を脱ぎ捨て花屋に頼んだ。

「彰義隊の者だが、戦況利あらず敗戦となった。匿ってはもらえないか」

「それは難儀なことでございましょう。お匿いしたくは存じますが、いつ官軍に踏み込まれるか分かりません。そうなると私共も危なくなりますので、一刻も早くお引き取り頂きとう存じます」

兵藤は、思いもよらない言葉に愕然とした。彼が、彰義隊に加わったのは、横暴な東征軍を懲らしめ、江戸の治安を守るためである。町民に歓迎されこそすれ、厄介者扱いにされようとは思ってもみなかった。彰義隊の結成を喜んだはずの町民が、敗戦と同時に手のひらを返すように冷たく当る。

(やはり戦は勝たなければならない。勝てば官軍、負ければ賊軍として扱われる)

町民を思い、義に殉じようとした心が折れ、兵藤はこれまでの行動が、独りよがりであることに気づき、急に命が欲しくなった。そして、何としても逃げ延び、王政復古とやらの政がどのように世の中を変えて行くか見てみたいと思った。

「年来、徳川家のご恩沢を受けながら何と薄情な言い草だ。この上は、匿えとは言わぬが、せめて逃亡に必要な古着など出せ」

兵藤は、刀を抜いて脅した。すると花屋の主人は、震え上がってしぶしぶ単衣の着物一枚と花売りの道具を差し出した。そこで兵藤は、髷を町人風に変え、上を顔に塗って花売りに化け落ち延びた。

勝ち誇った東征軍は、三日間切り捨て御免と称し敗残兵狩りを行っている。

兵藤は、難を逃れるため、三河島村の知り合いの家に身を寄せた。幸いにしてまだ東征軍の手は廻っておらず、一夜匿ってもらった。秣小屋の臭い藁の中に隠れ、握り飯を与えられた。

「あの時の握り飯の旨かったことと言ったら今も忘れられない」

兵藤は、その時のことを、後になってしみじみと述懐している。

翌朝、印半纏を借り、花売りに化けて下谷根岸御院殿にかかると、芋坂に東征軍の関門があって、通行人は一人ひとり改められていた。

「その方は、何れの者だ」

「へえ、下谷坂本で焼け出された花屋でございます」

兵藤は、上手く切り抜けほっと一息ついて、谷中天王寺に出た。すると「花屋さん。花屋さん」と呼ぶ女の声が聞こえる。彼は、脛に傷持つ身、偽花屋と分かってしまうことを恐れてその場を逃げ去った。

「おや、嫌な花屋さんだよ。私の声を聞いたら逃げちまった」

女は、不思議そうな顔をして、後姿を見送った。

兵藤は、駒込の親戚を訪ねることにした。同家にやっ

と辿り着き、匿って貰いたいと頼むと、疫病神でも舞い込んできたような目で見られた。

「今朝も根津総門で彰義隊の脱走者が二人切られた。早く奥州にでも逃げた方がいい。あれだけ反対したのに彰義隊などに入って、こちらもいい迷惑だ」

親戚からも疎まれ、敗残の悲哀を噛みしめながら兵藤は、肩に食い込む重い花売りの道具をかなぐり捨てた。その時ふと深川の貸座敷引手茶屋に嫁いだ叔母がいることを思い出した。

彼は、そこが隠れよさそうに思え、頼ることにした。だが、途中腹が減って動くことができない。

一軒の居酒屋を見付け入りかけると、東征軍の雇い入れ人夫共が話をしている。

「おら今日は二つでやっと二両にありつけた」

彰義隊の敗残兵を二人とらえ二両もらったと言っているようだ。一人とらえるとどうやら一両の褒美にありつけるらしい。

兵藤は、危険を感じ、空腹を抱え、両国まで行くと、またもや関門が設けられていた。そこでも何とか言い抜けて、深川に辿り着き、叔母に匿ってくれるよう頼んでみた。

「甥であろうが、兄妹であろうが匿った者は同罪とお触れが出ているから、もし発覚すれば家が絶える」

そう言って中に入れてくれない。悄然として同家を出たのは、すでに深夜子の刻近くであった。

兵藤は、泊まるところもなく途方に暮れ、近くの神社の軒先で仮眠を取った。

翌日、逃亡三日目となって、彰義隊の生き残りが、下谷入谷町に集結しているとの噂を聞き出したので訪ねて行った。すると、榎本艦隊が新天地蝦夷地を目指して品川から出帆するので、それに乗り再起を図るという。

兵藤は、その船に乗り、旧幕臣と共に蝦夷地で再起を図ろうと考えた。だが、運悪く品川に到着するすぐ手前で捕えられてしまった。

獄中にあって何時処刑されるかと恐怖に戦きながら兵藤は、彰義隊に入隊したことが、そんなに悪いことだったのかを考えてみた。

人は、風評に踊らされて善悪の判断をし、権力に媚び、義理も人情もかなぐり捨てて、自分の身を守ろうとする。正義と思ってしたことが、自分にとって何であったのか。江戸町民の命と財産を守るためには、やはり慶喜公が選んだ恭順しかなかったのか。

兵藤は、大井藤三郎を誘ったことを悔いた。心ならずも彰義隊に入った大井は、今頃どうしているだろうか。うまく落ち延びることができたであろうか。目を閉じてみると、同心時代の彼の穏やかな笑顔が浮かんで来た。

兵藤が、いよいよ処刑される寸前「明治天皇ご即位につき、旧彰義隊士の斬首は罷りならん」との太政官令が出た。

兵藤は、この天啓に感謝し、二度と剣を取ろうとはしなかった。三カ月半を超える逃亡生活は、彼に人の心の移ろいやすさを味あわせ、武士の世の終焉を感じさせるものとなった。その後、彼は、茶商人として江戸の市井の片隅でひっそりと暮らし、大井の消息を訪ね歩いた。

一方、大井は、兵藤と離ればなれになった後、野袴を脱ぎ捨て刀を菰包に巻いて下谷の空店に潜り込み、そこにあった畳をはがし、その畳を抱えて東征軍の陣地に駆け込んだ。

「鉄砲防ぎの畳を持って来た」

大井はそう叫び、あたかも味方であるがごとく振る舞った。

「ご苦労」

東征軍の兵卒は、味方だと勘違いしてその労をねぎらった。だが、いつまでもそこに留まっているわけには行かない。いつ化けの皮がはがれるか不安である。大井はすぐにそこを立ち去る決心をした。

彼は、菰に包んだ大小を背負い、ひとまず自分の屋敷に帰ってみた。すると奥州へ逃げる者、傷を受けて死んだ者、自刃した者が数知れずいて、屋敷の周りは、収拾のつかない状態となっている。

そこで彼は、叔母の嫁ぎ先上州沼田の料理屋「喜代すみ」に匿ってもらうことを思い立ち、家を出た。沼田に着くとすでに東征軍の手が上州一円に伸びている。こうなったらしばらく「喜代すみ」に腰を落ち着けるより仕方がない。

そこで、いっそ料理屋の雇い人にしてもらった方が安全ではないかと考え、主人喜平に頼んでみた。幸いにして料理を作るのは子供の頃から得意であった。

「喜平さん、匿ってもらうだけでは心苦しい。しばらく料理人として店を手伝わせてもらえないだろうか。その方が、反って人目につかなくて済む」

喜平も大井の料理は、素人離れしていることを承知していたので、異存はなかった。

こうして大井は、習い覚えた料理の技を生かし、板前として雇ってもらったのである。「芸は身を援ける」とはこのことを言うのだと彼は実感した。

だが、しばらくするうちに上州での彰義隊の残党狩りは下火となった。江戸育ちの大井にとって、やはり江戸は恋しい。一カ月沼田で過ごした後、江戸に舞い戻ることにした。

「喜平さん。いつまでもここで厄介になっているわけにはいかない。残党狩りの詮議も和らいで来たようだし、江戸に戻って様子を見ることにしたい」

下火になったとはいえ、江戸では彰義隊残党の詮索は

まだ続いている。危険を感じた大井は、千葉道場で知り合った上総姉ヶ崎の幕臣大野喜十郎の屋敷にひとまず身を寄せることにした。

大野喜十郎は、東征軍の追求から逃れ、集まって来た旧幕臣や彰義隊の残党数十名を屋敷に入れ、一矢報いようとして東征軍と戦ったが、額に弾丸を受け倒れた。大野は、痛みをこらえ大井に頼んだ。

「東征軍の奴らに首を取られるのは、どうにも癪だから切腹する。介錯してくれ」

大井は、これまで人を切ったことはない。だからと言って苦しい息の中から、懇願する大野をそのまま放置できない。

最早助からないことは、彼にも分かった。世話になった大野の目が、決断を促し、叱っているように見える。

刀を抜き上段に構えた大井の手が震えている。思い切って振り下ろしたが、首の骨にかかって、斬り落とすことができない。彼は焦った。首からは、血しぶきが上がり、頭が前のめりに傾いている。

大井は、再び刀を構えて柘榴のように割れた傷口めがけて、渾身の力を込めて泣きながら振り下ろした。首は、ようやく胴を離れ切り落とされた。彼は、その首を風呂敷に包んで小脇に抱え、山中に逃げ込み、人目のつかない場所に埋めた。

もともと刀を振りかざすことの不得手な大井にとって悪夢のような出来事であった。山中を当てもなくさ迷った後、彼は、最早どこに逃れても、無駄のような気がして、再び江戸に舞い戻ることにした。直接江戸に入るのを避け、木更津に出て江戸湾を船で六郷に出た。

六郷在矢口の渡し付近に差し掛かった時、寺を見付けた。大井は、その寺の住職に一夜の宿を借り受けたいと頼んだ。

「それがしは、元八丁堀同心の大井藤三郎と申す者ですが、友人に誘われ彰義隊に加わりました。ご坊もご承知のように東征軍と上野のお山で戦となりましたが、戦いは利あらず、味方は総崩れとなり、これまで逃亡生活を続けて参りました。しかし、最早逃げることにも疲れ果て、そうかと言って名乗り出るほどの勇気もありません。まことに迷惑とは存じますがしばらく匿って頂けませんか。もし、ご坊が厄介払いをしたいとお考えであれば、東征軍に訴え出ても恨みに思いません」

大井は、心身ともに疲れ果て、自分の運命を仏の慈悲に託してみようと考えたのである。

「窮鳥懐に入れば猟師もこれを撃たずと申します。ましてやここは寺でございます。助けを求めて来られたものをどうして無下に追い返し、官軍の手に渡せましょう。どうぞご安心下さい。しばらくご逗留いただき、お心安らかにお過ごし下さい」

「ありがたき幸せ。ただご厄介になるのも心苦しく思いますので、せめて寺男として仕えさせていただきとう存じます」

「どうぞ心置きなくご逗留下さい。ご貴殿が何もせずただいるだけでは気が済まぬとお思いでしたら、お気の済むようになさって下さい」

こうして大井は寺男に身をやつし、探索の目を逃れてしばらくの間ひっそりと時を過ごした。

その後、大井は料理の腕を買われ、知り合いの紹介により、柳橋の料亭で板前として働くことになった。大井にとっては、水を得た魚のごとく生き生きとし、充実した毎日であった。

三年の時が流れた。

その間、伝手を辿って、兵藤は大井の行方を探し続けた。気乗りのしない大井を強引に彰義隊の仲間に引き込んだ兵藤は、彼の行方がずっと気にかかっていたのだ。

戦死したとの噂はなかったが、もし怪我でもして不自由な体にでもなっていたら、痛恨の極みである。

兵藤は、やっと大井の居場所を探し当てた。明治四年、廃藩置県が行われ、武士の時代が終焉を告げた年のことである。彼は大井に、日本橋で会いたいとの書状をしたため、使いに届けさせた。

二人は、日本橋で顔を合わせ、お互いの無事を確かめ喜びあった。

「彰義隊に入隊したのは、今思えば熟慮の結果ではない。熱に浮かされ、まわりの空気に踊らされ、何かに取りつかれたように、ただ無我夢中で参加した。徳川の世が、変わることが不安で、何としても食い止めなければと、得体のしれない衝動に駆り立てられ、戦争に加わった。そのため、大井さんまで巻き込んで、危ない思いをさせて申し訳なかった。それがいつも気がかりで、会って一言謝りたかった」

兵藤は、当時を思い起こし、大井に深々と頭を下げた。

「いいえ、何とも思っていませんよ。兵藤さんの誘いに乗ったのは、やはり私にも幕臣としての誇りが、少しはあったからでしょう。それにしても、こうした泰平の世が来て、まだ生きているなんて全く夢のようです。あの上野戦争とその後の逃避行の恐ろしかったこと、今でも時々夢に見ます」

兵藤と大井は、日本橋の欄干にもたれながら、生きていることの喜びをしみじみと味わった。江戸から明治になっても日本橋の賑わいは変わっていない。

夕日が、赤々と輝き西空を照らしている。秋の気配が感じられる風が、二人の頬をそっと撫で川面を揺らしていた。

完

五月雨（さみだれ）

横山正義

一、景色

私の家は平らな三町歩ほどの段丘の上にあります。段丘の下は田が開け、段丘には家が三十軒ほどと茶畑があり散村です。北部は山に連なり、綺麗な地下水が出ます。水道が無い昔は井戸がなければ生活できなかったからです。段丘の前方は尖って、紀伊半島に似た地形です。従って仏教の発祥の地、インドにも似て、そしてこの段丘を不堕落浄土と云っています。紀伊半島と同じように薬師堂（速玉神社）、阿弥陀堂（本官）、観音堂（那智大社）、段丘前方に若一王子権現（那智大社）、教塚などがあります。経塚は大谷（粟田）家で管理しています。大谷家は古来、大谷（粟田）惣右衛門家と云われ、この地方を支配していたと、伝えられています。粟田は京都東山大谷の一部です。

経塚に卵塔の墓石があります。高さ三十センチ、径が下部で十三センチ、卵塔上部で十五センチです。朽ちた石の表面から浄誉良信座と読めます。

そして不堕落浄土の中央部に、八幡神社があり、前方に神僧屋敷、僧屋敷があったと、伝承があります。

神社裏、山頂に奥の院があり、その西、山懐に大蔵寺があります。

二、良信とはどんな人物であったのか

源氏の棟梁、源義朝に妾、常盤御前がいました。今若（阿野全成）、乙若（義円）、義経（牛若）等を儲けました。

常盤御前は源義朝死後、平清盛の妾となり、廊の御方を儲け、最後に、一条（藤原）長成と結婚しました。一条（藤原）長成の先妻がすでに能成を生んでおり、その子として良信がいたのです。常盤御前は一条（藤原）長成との間に姉と一条（藤原）能成を生みました。常盤御前は良信の義祖母であったのです。

三人の男と常盤御前の閨係系図

常盤御前一人目の男

（熱田社大宮司藤原季範の女）――頼朝
＝
源義朝
＝
（常盤御前）――今若（阿野全成）
　　乙若（義円）
　　牛若（義経）
源行家

常盤御前二人目の男

（平時忠二女）――花山院兼雅令室
＝
平清盛
＝
（常盤御前）――廊の御方（花山院兼雅女房）

常盤御前三人目の男

（法連尼）――一条（藤原）長信――良信
＝
一条（藤原）長成
＝
（常盤御前）――一条（藤原）能成――一条（藤原）兼成

内田（静岡県菊川市内田）は、青連院、円城寺（三井寺）、大炊御門頼実太政大臣などの荘園でした。

三、法連尼の京の思い出

時は西暦で言えば千百年代、時代で言えば鎌倉時代始めの頃。

粟田信麿は法名を良信と称し、青連院座主慈円の弟子で、荘官として、祖母・法連尼とともに内田に来たのでした。のちに良信は慈円の弟子忠快の弟子となり、小川派を発展させます。

法連尼は僧坊屋敷に住んで、近くの阿弥陀堂（増光寺）で読経の毎日です。最近、柿木長者の女を娶つた孫、良信の家、神僧屋敷に、祖母法蓮尼が訪ねて来て話ました。

「よく降るねー」

「西の小笠山に竜が大地から昇るような神秘的な暗雲がかかっていたからねー」

「五月雨で思い出すねー」

「こんな雨に何を」

「私が京都にいるころ、以前、一条（藤原）長成と住んでいた近く、京都一条大路、堀川に架かる、盆には死者が戻るという戻り橋に、主人一条（藤原）長成を偲び、

訪れると、急に五月雨が降ってきてね。しかたなく急いで、茶屋に入り、茶をすすりながら、雨をながめていると、見る影もなく、老いぼれた老婆が雨を凌いで入ってきました。よく見ると憎き常盤御前に面影が似ているので尋ねたところやはりそうでした。そして私は話を聞き、胸に詰まる物を言ってやりました。」

四、常盤御前最初の男

常盤御前の話

「近衛天皇の皇后九条院（藤原呈子）に使える雑仕女を、採用するに当り、私は京都中から容姿端麗の一番で採用されました。

のちに私は見初められて、源氏の棟梁源義朝の妾となり、今若、乙若、牛若三人を産みました。

夫源義朝は、（注1）平清盛の勢威を不満とし、平治の乱を興し、敗走中、知多半島尾張野間で長田忠致（おさだただむね）に殺されてしまいました。

義朝が殺害されたので、平家によって、源氏狩りが行われ、私は身の危険を感じ三人の子供を連れて寒さ厳しい雪の中を逃げました。

今若は八歳、乙若は六歳、そして牛若は乳飲み子でした。

私は幼い今若・乙若に乳のみ子の牛若を連れて、余寒厳しい二月、死骸の転がる都大路を落ち延びました。

裸足で歩く子供たちは「寒いよ、ひもじい」と泣きじゃくる。私は彼らをかばいながら、乳房を求める牛若をあやし、都を逃げました。

私は京都周辺の農を営む家の育ち、この季節はどこに芋、野菜、柿など保存食がどこにあるか分かりましたので、それをあさり、子に食べさせながら、さ迷い歩きました。

私はあっちこっち転々としながら、ようやくたどりついた大和（奈良県）で叔父の家にかくまわれました。

すると、叔父によって、京都で母親・関屋が囚われ、常盤親子の行く方が、厳しく追求されていることを知らされました。

私は罪のない母親を見捨てるわけにいかず、三人の子供を連れてまた京都に舞い戻りました。

そして捕らえられ牢にいれられ、板筵で平清盛に取り調べをうけました。

私は乳呑み児を抱き、二人の子は震え抱きついてくる、子供三人の命乞いをしました。

私は私の命はおしくはありません。子供を殺すなら、私を先に殺してからにしてください。どうか老いた母親には罪はございません。解放し下されますようお願い申しあげました。子供や母が殺されるのを、見るのはしのびないと訴えました。

平清盛はこんなことを言いました『そなたに罪があるわけではない。悲しむことはない、おって沙汰をする』

四の一、平清盛の気持ち

（きれいでかわいい女子だが、わしの命を狙うかもしれない、源氏のスパイとなるかもしれないクワバラ、クワバラ。

子等は仏門にいれてしまえば菌向かうこともないであろう、頼朝も伊豆で読経の毎日と聞く。

しかし、河豚（ふぐ）は毒があると、舌がしびれて美味絶品だ、死と生のハザマで知る、旨味だ、きのこの毒もそうだ、この旨味は味わったものでないと、その境地はわからない、そして女もそうだ、ましてや女は、権力のためなら謀略策略、殺戮の権化、源氏の棟梁の女だ、そして子供だ。）

平清盛は嫡子重盛と相談し、継母池の禅尼の希望にしたがい、頼朝の命を救っていました、そしてまた常盤御前親子の命も救ったのでした。

常盤御前

「私は牢屋より小館に移され、そこに平清盛が通って来るようになりました。私は子や母親の命のためならと決心しました。囲われ者になることを。」

日本歴史上、公家政治から武家政治へ権力の移譲を、成し遂げたナンバーワンの武将、ひらめかないわけは無い。

後年、当時の乳飲み子三番目牛若（義経）によって、源平の戦いで平清盛の一族は絶滅するのです。

四の二、一子今若（阿野全成）の生涯

時は移って一一九九年（正治元年）正月、源頼朝が死去しました。相模川橋供養（落成式）の帰途、平家、義経などの亡霊が出て、落馬したことが原因という。

頼朝の女子・大姫の死は前々年でありました。大姫の入内は失敗したのでした。

嫡子頼家の家督相続は実現され二代目将軍となりました。

しかしその評判は芳しいものではなく、梶原景時ほか、少数の側近だけの意見を重用していました。そのほかにも頼家は安達景盛の妾を横取りし、非難をあびていました。

頼家の乳母は比企尼の娘、頼家の妻は比企能員の娘（わかさの局）であり、頼家は比企氏のあやつり人形になってしまいました。

実母政子の意見も無視するようになり、頼家は政治力が乏しく、武勇のみ好むのは富士のまき狩りの好評に気をよくしていたからです。

争論にさいしても、公平性を欠いていたので、同年四月頼家の親裁権は停止され、集団指導体制がひかれました。

このとき起きた事件でありました。

常盤御前の話

「今若（阿野全成）は幼くして醍醐寺で出家して血気盛んで暴れ者「悪禅師」とも呼ばれました。成長してから、妻は頼朝の妻である北条政子の妹です。阿野全成と名乗り沼津近辺に城を構えました。しかし妻が頼朝の庶子実朝の乳母であったことから、頼朝の嫡子二代目将軍頼家は庶子実朝に将軍の座を奪われることを危惧し、ありもしない謀反の角で全成は殺害されました。」（注2）

四の三、二子乙若（義円）の生涯

常盤御前の話

「乙若（義円）幼くして出家して園城寺の円恵法親王に使えましたが、頼朝が挙兵したとき駆けつけ、義朝の弟・行家の配下で平重衡と、墨俣川の戦いで、二十七歳で戦死しました。（注3）

今若、乙若が幼くして出家したのは、早く出家させれば清盛は自分に歯向かうことはないだろう、ということで、牛若（義経）は乳飲み子であったので、許され私の手元においたのです。」

女は壇ノ浦で囚われ、異父兄の義経によって護送され、入洛しました。（注5）

花山院兼雅は平清盛と平時忠の妹との女子、二女の婿でありました。

わが子廊の御方は左大臣花山院兼雅に仕える女房となり、廊の御方、もしくは三条殿と呼ばれ、娘がひとりあり、また、和琴と書の名手でありました。」

清盛は教養のある嫡子重盛に「敵対し、殺害した源氏の棟梁の女を妾にするとは節操がない」と、とがめられました。

六、常盤御前三番目の男

一条（藤原）能成の生涯

常盤御前の話

「清盛はしかたなく、私を大蔵卿一条（藤原）長成に譲り渡し、私は再婚しました。（注6）

妻子があるにも係らず、『平家にあらずんば人にあらず』の時代、ましてや平清盛の命、一条（藤原）長成は従ったのでした。私は一条（藤原）長成との間に女子と一条（藤原）能成を生みました。（注7）

義経の義弟に当るので、義経が頼朝に謀反を疑われ、追われて西国におもむいた際、私は能成に『お前、兄の

四の四、三子牛若（源義経）の生涯

常盤御前の話

「牛若（義経）は私の結婚相手、一条（藤原）長成の所で育ちました。七歳の時、鞍馬寺にあずけられ、十六歳の時、長成の紹介で、奥州の藤原基成を訪ねて行き六年間をすごしました。

頼朝の源氏の旗上げに賛同し配下で、牛若（義経）は源平の戦いで平家を平らげてしました。

しかし後白河法皇によって検非違使・左衛門の尉、伊予の守を任じられる。その上に平清盛正室の令弟、平時忠女を正室としました。

これは野心ありと、恐れた兄頼朝により東北平泉で殺害されてしまいました。」

五、常盤御前二番目の男

廊の御方の生涯

常盤御前の話

「私は二十三歳、清盛四十四歳でした。（注4）

私は子を助け、親を助けるため、平清盛の女となり、廊の御方を生みました。

廊の御方は源平の戦いに平家方として、就いて行ったので、義経は源氏なので兄妹で戦ったので、二十三歳彼

義経が助殿、頼朝に命を狙われて逃げ回っているという、心配だ。励ましてきてくれないか。』と頼みました。（注8）

侍従の役にあった一条（藤原）能成（妻は高階光兼女）は途中まで義経に同行したため、頼朝により捉えられ、上野（群馬県）に流刑されましたが、しかしのちに従三位までのぼりました。（注9）

能成の姉と私は賀茂川と高野川の合流点に面して建っていた川崎観音堂の付近で捕らえられ、義経の行方について厳しく追求を受けました。」

法連尼の話「清盛様、重盛様お身勝手に困ります。主人の鬱け者をいいことに、美人で名高い、常盤御前様を押し付けてよこしたので、私は押し出され、嫡子長信があるにもかかわらず押し付けてよこすとは、私の立場はどうなるの、他に生きる道もない、法然様にお願いし仏門に入り、尼になり、法然様の第一の弟子、法連坊信空様の坊に入坊し、専修念仏を唱える日々です」

常盤御前の話「それはご迷惑をおかけいたしました」

法連尼の話「あなたも苦労したね」

常盤御前の話「死んだ三人の子供を偲ぶと、つらい日々です」

法連尼の話「この戦乱の世、下の子等三人は健在で、幸せではないかえ」

常盤御前の話「上の三人の子達は苦労した子ゆえ、死ん

でしまい不憫です。親は子供全員が幸福でないとつらいのです」

七、良信

一条長成（藤原）その子が良信権僧正。

良信は青連院の荘官として菊川市内田にきたのでした。伝承では内田で粟田信麿と呼ばれていました。（西暦一二百年ごろ、粟田は京都・大谷・粟田、青蓮院のあるところです。信は長信、良信と信の字を通し字としているからです。麿は公家藤原姓からでしょう）

そして祖父が大蔵卿であったことから良信は仁治元年（一二四〇）権僧正に任じ、「大蔵卿弾正」と呼ばれていました。

粟田信麿（良信）は内田では大蔵寺を創建し、八幡社を創建したと伝えられています。

八、時代

世の中は変わっていきました。

頼朝の嫡男二代目将軍源頼家は、修善寺に幽閉され、翌年殺害されました。

新たに庶子頼実が三代目将軍となり、頼家の嫡男に殺害されます。

慈円の兄摂政関白九条兼実のひ孫・九条頼経が鎌倉幕府四代将軍になるのに伴い、良信はその後、御付きとして鎌倉幕府祈祷僧となり、そして大活躍するのです。

良信は、慈円の弟子の忠快の教学を受け、晩年、近江の国、妙法寺法寺院を中心に多くの優秀な弟子を育て、小川流を伝えたのでした。

忠快は源平合戦に父、平教盛らと参戦したので、罪を問われ、伊豆に流され、そこで狩野宗茂に預けられました。

忠快の惨殺を命じた源頼朝が大日如来の夢告によって処刑を中止し、鎌倉に留まるようお願いしたが、忠快が母を心配したので、沢山の贈り物を送り、京にかえしたという。のちに忠快は源頼朝と兄弟子慈円の仲をとりもちました。

忠快はなお、三代目将軍頼実とは大変信頼しあう仲でした。

良信は内田ではこの地を支配していた、八幡神社伝承では、柿木の長者（狩野内田宗茂）の娘と結婚したが、当時の結婚は女性の通い婚でしたので鎌倉幕府に連れていくことはありませんでした。娘は出家して尼となりました。

残された家族が大谷惣右衛門家とつながるのです。

九、法統

覚快―慈円―忠快―良信
　　　　―法然―信空―感西
　　　　―親鸞

（良信の弟子として次の人達がいました。

雲真、親源、最真、雅賢、良意、良明、静宴、俊承性範、性淵、禅信等でした。）

法連尼が内田に来たのには根拠がありました。

慈円は青連院座主であるとともに、比敷山延暦寺の座主をも勤め、内田応声教院を弟子法然のために天台宗を浄土宗の根本道場に改宗し、便宜を図ったからです。感西上人は内田で布教に努めていたのです。

注1　保安四年～永暦一年（一一二三～一一六〇）
注2　五十三歳。仁平三～建仁三・六・二十三
　　（一一五三～一二〇三）
注3　養和元年（一一八一）
注4　応保元年（一一六一）
注5　寿永一年（一一八二）
注6　長寛元年（一一六三）
注7　同じ
注8　文治元年（一一八五）
注9　嘉祿元年（一二二五）六十三歳のとき出家した。

『参考文献』
国史大系　第五十八巻　尊卑文脈　第一篇
編纂者　黒坂勝美国史大系編集会代表　丸山二郎
　　吉川弘文館

農地の社会化
～パブリックフットパス～グリーンツーリズム～

古屋富雄

私は、平成10年以来、花による地域おこしを地域住民とともに進めて来ました。

そして、その花のエリアは、農道や河川などの公共用地を活用しました。

次に取り組んだ花による地域おこしの花のエリアは、遊休化した農地に求めました。

農地は、本来、私的な資産でありますが、公共的な資産として、活用すべきという考えに基づき、誰でもが入ることができるよう農地を解放することにしました。

私は、この取り組みを「農地の社会化」と称しています。そして、遊休化した農地に、ザル菊（ザルを伏せたように咲く菊）を植え、その周りに回遊路を設置しました。回遊路には、幅1.2mほどのゴムシートを敷き、車椅子の人でもスムーズに通行ができるよう工夫をしました。

グリーンツーリズムとは、ヨーロッパで発祥した都市と農村の交流のことで、都市住民が農村で休暇を過ごす余暇活動のことです。

グリーンツーリズムの基本的な考え方は、農山漁村に住む人々と、都会に住む人々とのふれあい、つまり、都市と農山漁村との住民どうしの交流の場であります。

ヨーロッパでは、都市住民が農村や漁村などに長期滞在してのんびりと過ごすことが定着しています。

しかし、我が国では、長期休暇が取りにくい労働環境のため、日帰りや短期滞在が多いのが現状です。長期休暇が取れるような環境づくりを法的に整備する必要があると考えます。

このグリーンツーリズムを我が国で定着、発展させるためには、農家の農地への所有、使用に対する意識変革が必要と考えます。



自由に入れる回遊路　南足柄市ユートピア農園

このような発想の原点は、1949年に制定されたというイギリスのパブリックフットパスの制度にあります。

パブリックフットパスとは、主に歩行者に通行権が保障されている小径で、イギリスで発祥した「歩くことを楽しむための道」のことです。そして、農村部の農場や牧場などの作業路を公共の散歩道として認めているものです。

そして、現在、イギリス全土に網の目のごとく存在し、その長さは、約17万kmにもなるとのことです。

イギリスでは、農地そのものを国民の共有の財産だという理念に基づき、農場や牧場などの作業路を公共財的に使用し、農村空間そのものを共有化しました。このパブリックフットパスが制度化されることにより、市民は、農家に迷惑がかからない範囲で、作業路の通行が許可されています。

市民は、この作業路を利用して、例えば、綿花畑の綿を触り、その柔らかさを感じたり、牧場の牛を直接撫でて、その体温の温かさを知ったりすることなど都会では得ることのできない体験ができることです。

そして、一番の魅力は、農場主や牧場主などとの会話を通して知る、親しみや、癒しなどの心情面での満足度にあるようです。

このように、イギリスでは、１９５０年代すでに、農地を公共財として、活用することにより、農村へ都市住民を呼ぶ環境づくりを法制化していました。

その結果、パブリックフットパスが全国に広がり、都市住民が農村に癒しを求め、旅をするグリーンツーリズムが、新たな農村のビジネスとして発展しました。今では、このグリーンツーリズムによる収入が、農家の年間収入の3割を占めるほどになっているとのことです。

そして、こうした農村の暮らしが人間らしい生き方として、国民に理解され、農村で農業をして生活することにあこがれる人々が増えているとのことです。

従って、農村の嫁不足も解消され、農業の担い手も心配することはなくなったとのことです。

こうしたイギリスのパブリックフットパスからグリーンツーリズムへの発展を参考にして、我が国でも農地を公共財として国民全体で共有する、すなわち、「農地の社会化」を国策として取り組み、農業・農村の活性化を目指す時代がきていると考えます。

時を同じくして、安倍晋三首相は、地方の人口減少や地方経済の衰退などの課題に国を挙げて取り組むため、２０１４年9月3日に行った内閣改造で「地方創生」の担当大臣に石破茂衆議院議員を任命しています。そして、首相みずから本部長とする「まち・ひと・しごと創生本部」を立ち上げました。

地方に、「まち・ひと・しごと」を作り出すことの必要性は誰しもが理解するところです。しかし、如何なる手法を持ってその課題解決をなすべきかを考えた時、１９４９年に制定されたというイギリスのパブリックフットパスの制度を参考にした日本版の法制化は、地方に光明をもたらす未来志向の政治主導と考えます。安倍さん、石破さんにこの声が届くことを願いつつ、「農地の社会化」～パブリックフットパスからグリーンツーリズム～を結びたいと思います。

短歌

行雲流水（四十三）

石黒修身

近詠二十五首

身辺・日常

老齢の自覚が何より大切と互みに諭す吾ら八十路は

世界一長寿の国になると聞く実感湧かぬ忙しない世に

吾が齢漸く平均になると云う良くぞ生きたが実感なるに

老人の多き病院待合室吾も加わる一病を得て

迸る時代の波に棹させぬ吾が足許の危うさ怖る

旬日の帰国休暇をはらからと知友と睦む息の心根は

パリにて求めし「パン」は万能で調理楽しと自炊の息には

息の住めるパリを訪うのは何時にせん老いし夫婦の悩みのひとつ

少年は愛玩のインコ病みたるを悲しむあまり他事手につかず

少年は瀕死のインコ掌にさめざめと泣く吾の孫なり

朝ドラが契機となりて更めて来歴を知る「歌人白蓮」

「花子とアン」酣になれば観光で盛り上るらんカナダの島は

世相・時局

何をもて正義と謂うかモラルなき集団となれる世界の大国

抑止とは互いに軍備の見せ合いか何時か火を吹く危険を孕む

中東に戦争の火種燻れり火を付ける国出してはならぬ

政権の維持には権謀渦巻くか「石破の乱」は如実に語る

大新聞己が誤り他人事と報ずるを聞く空耳のごと

六十年講読続けたる新聞を倦むこともなく読む吾が居る

「天皇の実録」礼かく読むべきか昭和治世を生きし身なれば

季節・花

札幌の巾広き道の公園にリラの香漂う六月となる

「リラ冷えの街」の語感に親しめり吾六月に札幌に在れば

紫紺色「りんどう」店に並ぶ頃炎暑も去りて秋の気配が

「ラベンダー」店先に出る時季となり「富良野ファーム」の盛りを憶う

相当な不漁と聞けど習慣（ならい）にて秋刀魚を焼きて旬を味わう

些かの所縁（ゆかり）もありて庄内の「だだちや」を茹でて里人偲ぶ

短歌　三十首

曽根竣作

航跡

香魚（あゆ）のわたにがきを嫌ふ人ありぬ深き味こそ晩年のもの

視てゐるのか見てゐないのか埴輪（はにわ）の眼遠く鰯雲眺めてゐたり

航跡を曳きつつ走る船あまたそれぞれ白波が異る海の日

霾（つちぶ）る日けぶる河口にいう然と時措きてしまし夕日落ちゆく

夏帽に去年（こぞ）別れたる君逝きてへんぽんとして日向（ひなた）が香る

花冷ゆる暫くの間にじつくりと時計台を指しはららぐを待つ

花疲れかも知れずして中高年流浪の果ての帰雁をおもふ

突走る電車に乗りて葉ざくらの頃ほひをを知る東京帰り

あの山もこの川にも名前はあれど故郷の山河ただに静もる

蛮声をあげて「士林」の森に佇つハイネのために心許さう

（注）…「士林」は昔、台大・予科のあった所

昭和の日

引き潮に足裏を任す午後なりき近くに巨船じっと動かず

ふるさとの方角に続く遠き空天の夕顔音低くとぶ（天の夕顔＝花火）

鎌倉の施設に存ふ原節子グレタ・ガルボに退け際が似る

中空にオリオン冴ゆる時ありて知覧とほくに見え隠れする

青葉すぎけふは松魚の珍味なり夕空はなほ明るむあひだ

故郷の「佐伯」はすでに知人なく思へり遠き地の果のごと

昭和の日尖んがってゐしわれにしてレイテに没せる学友を思へり

ぼた山の幾つか残る「小城」めぐり昭和の化石に黄砂舞ふなり

鳧が舞ひ亜麻鷺しばし彳つ川に米寿の年をひとり老いづく

さうさうに歩き疲れて仰ぐ空ビル屋上に三日月刺さる

大和魂

ぼうたんとゆつたり呼ぶ名その上の秦の皇帝国花と名付く

東風吹けば次第に暗く山河にやうやく夕日落ちさうになる

癖(くせ)のある文字に音信書きをればホームの友よ立ち戻り来る

沖縄の長き従属哀れなりフェンスの中の星条旗見つ

海棠(かいとう)の眠りの足らず「楊貴妃」の花閉ぢいちめん月ほのかなり

栄螺(さざえ)かご抱へて来たる浅黒き海女らしき人と擦れ違ひたる

幸せかと自ら問へど否と言ふこれ迄の幸をかへりみもせで

救命艇に真先に乗るは船長ぞその振舞ひに目を覆ひたり

船長は船と運命を共にすべき　大和魂なき国ぞかなし

雲湧ける安達太良(あたたら)しづかレモン忌よほんとの空あり十月が来る

（レモン忌…高村智恵子の命日）

古い物・遠い夢

忠内正之

「織部」・いま（茶道史余滴）

「織部」いまと、勢い良く出だしを書いてみたものの、「いま」とは「今こそ」の「いま」か？「今さら」の「いま」か？読まれる旁々(かたがた)は疑問に思われるに違いない。私にとっては今こそ織部にとり組まなければと思い立った「いま」なのである。

織部とは、千利休、古田織部、小堀遠州、片桐石州と続く、近世の茶の湯名人の一人である古田織部（一五四四―一六一五）のことである。

茶道の歴史について七回に及んで「まんじ」誌に寄稿させていただき、かなり勉強させていただけたと思う。その中で特に興味と好奇心をもつことになった人物が古田織部であった。

歴史は面白い、真実は一つなのにその真実が伝わっていないことがままある。ミステリアスな場面も多い。僅か四・五百年程以前に生じた事件なのに様々な解釈がなされたり、不明瞭な説明がされている。

古田織部もその悲劇的な末路を辿った故か歴史上で不可解とされる部分の多い人物である。

いつの日か織部について更に調べたいとの強い意欲に燃えていたところである。

その動機づけとなる巡り合いが期せずして到来した。

今年（平成二十六年）春のある日の事である。趣味を共通する友人から、急な招きをもらい何事かなと期待して訪問した。

この友人は若くして高知から上京してきた。大学を終えてサラリーマンとなった。やがて自分の会社を作って独立し大成功した。

盛業中だった自営の会社を都合で見切りよく第三者に

譲り、自らは好きだった美術骨董品収集三昧の生活を続けたが、趣味が昂じて遂に美術商となりこちらでも成功した。

その間、様々な優品を世に出す等の成果を挙げた。文化庁の評価委員にも推挙された。十数年前廃業して悠々自適の生活を送っているが、現在でも目利きの力と美術への憧れは相変らずで、彼の蔵の中は奥深く優美品が数多く納っているらしい。

美術界でも彼の存在は隠れた実力者として懼れられているという。

その人の名はIさんと言い、私は彼から美術品について教わった。つまり弟子である。彼に言わせると、二人の弟子を教えたそうである。

一人は私で、もう一人は今や箱根の小湧谷に突如として現出した、大型美術館Oを仕切るT氏である。T氏を初心者の段階から懇切に指導応援したのである。T氏は出藍の誉れとでも言うべきであろうが、私の方は職業柄もあってダメ弟子であった。

しかし乍ら諸々の茶道具購入について、Iさんのお陰をもって支援してもらった。彼とのおつき合いが無かったならば、現在我家が所有する茶道具の半分も集められていなかったであろう。

前おきが長くなったので本題に入りたい。Iさんは現在でも美術品に対する強い関心と収集心を堅持しており、日頃市中を渉猟歩きしている感さえある。その意欲の力であろうか、数次に及ぶ難病を克服し極めて元気である。

私に声が掛ったのは何か珍らしい物を見つけたことからしい。

私も好奇心についてはひとに負けない自信がある。購入して手に入れることはできないまでも眼の保養になるのである。

お呼びがあれば喜んでIさん宅に参上するのを常としている。

Iさんの自宅は高級住宅が犇めく、渋谷区代々木上原にある。クラシックな洋館だてのシックな住いである。

早速見せてもらったのは、だいぶ古いものと思われる竹の一重切り花入と、変り竹の蓋置きである。いずれも茶道具である。Iさんの長年にわたる友人である蔵出し名人の方の掘り出し品であるという。なるほど生な姿である。

よく見ると、極めも箱もない裸のままであるが、侘びた風格があり、かなり時代を経ているらしい。箱は？と聞くと古い当時の箱は澱粉質の糊（飯つぶか）が使われているため腐食してしまい元の箱が満足な形で残っていることは殆んど無いそうである。

茶道における花入は必須の道具の一つである。花入は

元来金属製であったり陶器製であったりするのが本筋と思われるが、侘数寄の時代になるに従って竹が利用された。

利休が小田原陣中で韮山の竹から造って秀吉他に贈ったといわれる「園城寺の花入」などが、その好例である。



古田織部の花押のある竹の花入と蓋置き

竹の蓋置きは珍らしくないがこれ程変形した竹も珍らしい。

なおよく見ると両方とも裏面に金漆で書かれた花押がある。花押とは大名・茶人・数寄者が用いるサインのことである。それぞれ独特の個性をもっており、余人では真似のできない性質のものである。

しからばこの花押は誰のものか調べて見ると、古田織部の花押に相違ないことが判明した。

花入と竹の蓋置きの現物は写真でお示しする。また花押は写真には写らないので花押帳より転写する。花押は金漆の優美なサインである。



古田織部の花押

花入と蓋置きは織部が作って花押をした上で自ら使用したものか、また知人に贈ったものか、今となってははっきりしないが、織部ゆかりの品であることは間違いなさそうである。

到底買えそうもない道具と思うので拝見だけで、楽し

ませてもらった。

茶道史にとり組んで以来の憧れであった、古田織部ゆかりのうぶな道具との出合いである。これは織部について更に勉強せよとの天の啓示でもあろうかと胸を躍らされ、興奮した。

調べて見ると織部の没年は豊臣氏崩壊の年と同じく一六一五年である。明年が没後四百年になる。「偶然とは必然の一部分である」と言う言葉もあるが、これは不思議な巡り合いである。

こう考えるとき、「今こそ」古田織部について本格的な勉強を始めるべき〝とき〟が来たと痛感したのである。

古田織部とはところで如何なる人物であったのであろうか。極めて簡略にして要を得た学者の説明があるので先づこれを読んでみたい。

古田織部　「かぶく美」

古田織部、略して古織、名は重然といった。信長ついで秀吉の家臣として活躍、利休七哲の一人。

天正十年前後から利休との接触が認められ、年ごとにその交情は深まっている。天正十九年二月、堺に蟄居を命ぜられた利休を細川三斎と淀の舟本に見送っているが、その剛気が、後年における自身の死の底流となっているように思われる。

秀吉の最晩年にはその御伽衆に加えられ、おそくとも慶長四年には茶の湯名人、天下一の宗匠の名を得、徳川秀忠に点茶の式を伝授したのをはじめ、武家社会を中心に茶の湯界を領導するに至る。ところがそうした評価が確立したのちにおいても、茶の湯下手の評が消えないのは、ひずみ（沓形）茶碗や南蛮意匠に見られる斬新な美意識に対する反発もあろうか。その「人とちがって」した作意から、利休の茶の忠実な祖述者であった三斎と対比されることが多いが、茶の湯に限らず学問芸能の継承における二つの形を示しているともいえよう。

多窓形式の茶室、鎖の間の利用、景気を好んだ露地と、書院茶の湯の近世的展開をはかり、その意味では利休の求道的な茶の湯を大きく転換させたといってよい。

元和元年の大坂夏の陣に、豊臣方に内通したかどで子息らとともに切腹を命ぜられて自刃。その師と同じような最期をとげる。その茶は小堀遠州に伝わる。

（村井康彦）

以上の文章を参考にしながら織部の生い立ちからとりかかってみたい。

（一）古田織部の生い立ち

古田織部は天文十三年（一五四四）岐阜県本巣市山口

で生まれている。そこはむかし本巣郡山口村と言った。

スボミ谷の根尾谷淡墨桜が千五百年の樹齢を保って、春にはうすずみ色の花を咲かせて有名である。かつて宇野千代の小説「薄墨の桜」の舞台ともなったことがある。南は糸貫町をへて国道一五七号線を通じて岐阜市忠節橋に入っている。また大垣からは樽見鉄道が走っている。

余談だがかつて私は勤務上岐阜にしばらく住んだことがあり、ときたまこの地区を訪れたことがあったが、水が滅法おいしくて、山紫水明、農産物も豊かであり、人情も厚く、住み心地の良いところと思った。

古田家は阿保親王（七九二―八四二）に源を発する大江広元（一一四八―一二二五）の流れをくみ、代々美濃に住み、古田織部の祖父・古田総兵衛は土岐頼芸に仕え、頼芸が斎藤道三に追われたのちは道三にくみし、さらに織田信秀に仕えたといわれ、その総兵衛には長男が可兵衛・重安、次男が主膳正・重定、三男が与兵衛・重俊の三子があった。

長男、重安は家督をつぎ織田信長に仕えたが選ばれて足利十五代将軍・足利義昭に付けられたということであるから、それは信長が義昭を奉じて上洛をはたした永禄十一年（一五六八）九月前後の頃と考えられる。重安五十一歳のときである。そのとき山城国山城西の岡万吉領を与えられた。（現在の長岡京市の山手にあたる）

しかし信長は義昭の失政と背反を責めることとなり、逆に義昭が信長排除を策するという事態を招き天正元年（一五七三）室町幕府は崩壊する。この間に、重安は義昭擁立に努力した細川藤孝らとともに、義昭を直諫したがきき入れられなかった。ために義昭に追われて細川藤孝の許に身を寄せたという。

古田織部が天正元年養父重安の所領、山城国西の岡万吉領を三十歳のとき継承するには、重安の身にその様な事情があったものと推察される。藤孝の許を去って後、織田信長のもとで大小の合戦に参加、天正六年（一五七八）西の岡で没した六十一歳であった。

次男の古田主膳正・重定は、美濃土岐氏の支流である桑原氏をついで桑原姓を名乗ったが、同家に実子の次右衛門が生れたため古田姓に戻った。重定は武野紹鷗に茶をまなび勘阿弥と称した。

古田織部はこの重定の子である。重定がまだ桑原家にある頃、天文十三年（一五四四）に生まれた。ところが古田本家の重安に子がなかったことから養子となり古田本家をつぐことになった。

古田織部が生れた天文十三年、実父古田重定は美濃の守護大名土岐氏に属し三千石を得ていたが、土岐氏は岐阜の斎藤道三に攻められ、美濃を追われる状況下にあっ

た。これをみて織田信秀が土岐氏を援けて、稲葉城を攻めたが、却って戦に敗れてしまった。そのため主君の土岐頼芸は尾張の織田氏の許へ敗走した。

天文十七年（一五四八）織田信秀は再び斎藤道三を攻め、道三が和を請うというところまで追いこんだ。そして道三の娘を織田信長はめとった。信長十五歳であった。しかし天文二十年（一五五一）四十二歳で信秀が没したため、信長があとを継ぐ、十八歳であった。

一方古田織部は養父・重安と共にあったが、古田一族は土岐氏から織田氏（いっとき斎藤道三のもとにあったとも考えられるが）との係わりを深くもってやがては家来となったと思われる。

後年古田織部が茶道の名人として、当地の織部焼き等にみせたデザイン感覚は、キリスト教文化の影響を受けていることも確かだが、風光ゆたかな本巣の自然と実父重定の茶の湯に対する教養が古田織部の人間形成の過程で大きな影響を与えたと思われる。

加えて、養父重安は、やがて戦国武将のなかでも随一の歌人とうたわれた細川藤孝（のちの幽斎）と親密な間柄で、その関係から藤孝の影響を深く受けたものと考えられる。

三者の年齢差をみると、養父重安と古田織部の差は二十六歳である。そして織部と細川藤孝とでは藤孝が十歳年上である。

（二）織部の仕官から本能寺の変まで

永禄三年（一五六〇）古田織部は織田信長に仕えることとなった。使い番であったといわれる。使い番とは軍団の編成のなかでは一族衆譜代衆につぐ直臣として、母衣衆となり信長に近侍し、主君を守り、戦場にあっては主君の命令を伝え、また敵陣へ使者として行く重要な役目であった。

この年は織田信長にとって乾坤一擲の桶狭間の戦いで宿敵の今川義元を倒すことに成功する。信長二十七歳、義元四十二歳、織部十七歳であった。

永禄五年（一五六二）、織田信長は三河の松平元康（のちの徳川家康）と同盟を結ぶ。一説には信長と元康が清洲城で会見したともいう。

駿河、遠江、三河の三か国を領していた今川義元を破った織田信長の声望は京都においても高く、密勅が清洲へ届けられたと記録されている。

また秋には岩倉城の織田信賢を攻め、これを滅して尾張は完全に信長のもとに統一制覇されていった。

古田織部にとっては、この時期平穏な近習生活であったと思われる。

永禄六年（一五六三）、織田信長は五条川の氾濫で不便となる清洲城をでて、小牧山に要害を設け居城とした。また「瀬戸六作」を定め、窯印を与え、瀬戸物商売の制札を出した。

瀬戸六作とは、加藤宗右衛門、長十、俊白、新兵衛、市左衛門、茂右衛門である。

当時瀬戸の窯業は疲弊していた。そこで信長は尾張を平定し、産業振興の一環として窯業保護をうちだしたものと思われる。

なお、自慢となり面映ゆいが、私は茂右衛門作の茶入を所有している。この茶入はIさんが提供してくれた品である。

後年、織部は信長の例にならって、織部十作を制定することになる。

この年細川藤孝（のちの幽斎）の子息として細川忠興（のちの三斎）が生れている。後年、千利休の門にまなび、利休七哲の一人に数えられる。

また高山右近（一五五三―一六一五）が宣教師ヴィレラのもとで洗礼を受けたのもこの年である。（数え年十一歳）

一方三河では一向一揆がおこり松平元康は苦戦を強いられていた。七月元康は家康と改名している。

明智光秀の娘・玉（のちの細川ガラシャ夫人）が誕生したのもこの年である。

永禄十年（一五六七）、織田信長は念願であった美濃国を平定した。信長は三十四歳であった。斎藤氏を滅ぼした信長は、その地の百姓に帰住を命じ、加納（岐阜市）には「楽市楽座」を設け、ついで秋には「天下布武」の四文字を掲げて天下統一への夢をもやして上洛の意志を示した。

以後信長は天正四年（一五七六）近江の安土城に入るまで、ここ岐阜城を居城として、井ノ口を岐阜と改めた。

永禄十一年（一五六八）、この秋織田信長が特軍義昭を奉じて入洛した。これにともない、古田織部も信長に従って上洛している。

九月、信長の上洛にたちはだかる、近江の六角承禎を破った。古田織部も尖兵として戦ったものと思われる。

九月末には信長の軍勢は山城の勝竜寺城を攻め、さらに摂津、河内を電撃的に降している。また大和の松永久秀も降って、名器「九十九髪」（大名物茶入で現在静嘉堂文庫にある）を差し出す等々で、信長の茶器への関心とさらに名器への執心がうまれる。

この頃から朝倉義景のもとにいた足利義昭を細川藤孝とともに上洛せしむるべく工作をしていた明智光秀が、信長の信任を得るようになった。

永禄十二年（一五六九）、古田織部は織田信長の口き

きにより、摂津の茨木城主中川瀬兵衛・清秀の妹・せんと結婚する。

この時織部は二十六歳、信長は三十六歳、秀吉は三十四歳、家康は二十八歳、千利休は四十八歳であった。

この後の経緯は重複する場面があるので織部関係年譜により説明する。

元亀元年（一五七〇）　織部二十七歳

千利休が信長に茶湯をもって仕える。信長・家康の連合軍、姉川の合戦で大勝する。

天正元年（一五七三）　織部三十歳

信長は十五代将軍足利義昭を追放する。織部は養父・重安の所領、山城国・西の岡方吉領を継承する。

天正四年（一五七六）　織部三十三歳

信長、安土城を築城して移る。

天正五年（一五七七）　織部三十四歳

加藤源十郎、可児市・久々利で「大萱窯」で開業。信長カラベラ船で毛利水軍を大破する。

天正六年（一五七八）　織部三十五歳

織部の養父・重安没す（六十一歳。織部は播州・神谷城攻撃に参加。荒木村重の叛乱にあたり義兄・中川瀬兵衛を誘降せしめる。上杉謙信没す（四十九歳）

天正七年（一五七九）　織部三十六歳

織部は丹波・丹後攻略のため出陣。

天正九年（一五八一）　織部三十八歳

織部は千利休につき茶の湯をまなぶ。

天正十年（一五八二）　織部三十九歳

織部は信長の甲州攻めに先陣として出発。六月二日、信長、京都本能寺で明智光秀の謀反により自害する（四十九歳）。

同十三日、豊臣秀吉が光秀を討つ。

天正十年二月、織田信長は武田勝頼の家臣木曽義昌の内応により甲州攻めに入り、徳川家康との連合軍で、勝頼を天目山の戦で破り、ここで武田家は滅亡し甲斐を平定した。

安土城に戻った後、三男信孝および豊臣秀吉を支援するため上洛した。五月二十九日であった。

一方の明智光秀は中国討伐の援軍として五月二十六日、丹波・亀山城に入った。

六月一日、信長は本能寺の書院で、博多の豪商・鳥井宗叱他を招いて、名物茶器を披露して茶会を開いた。信長は僅かの手勢であった。その隙をついたのが明智光秀の謀反であった。中国への援軍ということで光秀勢は、六月二日、一万三千人の兵を夜中行軍させて全軍が桂川のところで本能寺襲撃を命じたと伝えられている。

午前六時頃、本能寺は光秀勢に包囲され、信長は防戦したが多勢に無勢、午前八時まえに信長は本能寺に火を放って自刃し果てた。四十九歳の波乱・万丈の生涯をとじたのである。

信長死去の報せを受けた秀吉は六月十三日には、光秀を山崎の合戦で破り、やがて天下を掌握することになる。この山崎合戦に古田織部は義兄中川瀬兵衛とともに豊臣側にあって、先陣を駆けて大きな手柄をたてている。

秀吉は他の諸将より一足早く主仇の恨みを晴らし、有名な清州会議をへて山城国を検地し、山崎に居城を築き、つづいて紫野の大徳寺で織田信長の葬式を盛大に催している。

織部にとっては十七歳の年少時から仕え、その精神形成に大きな影響を受けた信長の死は、痛恨のきわみであったに違いない。

山崎の戦いで光秀を滅した豊臣秀吉は、山城国・山崎の妙喜庵の二畳台目の茶室「待庵」で秀吉茶会を催した。

この時千利休は津田宗及などと参席しているが、この待庵の茶会で初めて豊臣秀吉と出会っており、やがて御茶頭となっていくことになる。

妙喜庵へ利休を呼び寄せ、豊臣秀吉との面接を仲介したのが織部であったといわれる。

秀吉四十七歳、千利休六十一歳、織部は三十九歳であった。

（続く）

関東管領始末記⑮

山内顯定の最期

千坂精一

一

扇谷上杉の家宰太田資長（道灌）謀殺に端を発した山内顯定と扇谷定正との内部抗争は決着に七年かかった。

はじめの二年で山内顯定が四戦して四敗してしまったのは、扇谷定正が前公方で古河へ追い遣られた足利成氏と、主君山内顯定に遺恨を抱いて敵対した家宰家の嫡男長尾景春を抱き込んで戦力増強したためであった。

顯定は山内軍の戦力増強を図ると同時に、定正に加担している成氏と景春軍の戦力衰退をじっと窺った。

そして、隠忍自重すること五年――。

時機到来とみた顯定は明應三年（一四九四）十月、軍容を整えると機先を制して勇躍鉢形城を出陣したのだ。

その報らせに慌てた定正は足利成氏、長尾景春に出兵要請の余裕もなく、慌てて単独軍で河越城を進発した。

この五度目の雌雄を決する対決は定正の落馬事故死で飽気なく終わり、山内軍の思い掛けない勝利となったのだが、顯定はなにはともあれ管領家の面目を施した。

顯定は定正との個人抗争だったのだからこれで鳧がついたことになるのだが、扇谷家のほうは当主を喪い河越城へ退いたままの状態では引っ込みがつかなかった。

そこで定正の養子になっていた甥の朝良を棟梁に戴いて再起を期すべく着々と軍容を整えていった。

油断なく扇谷の動向を探っていた山内顯定は、おくれてはならじといつでも迎え撃てる戦闘準備を急がせた。

こうして、管領の山内上杉が扇谷家との同族争いに現を抜かして領国経営を疎かにしている隙を狙って伊豆國を略取した早雲宗瑞がこんどは関東奪取に動き出した。

まず標的にされたのは、小田原の大森藤頼であった。

藤頼は氏頼の二男であったが、嫡男實頼が早世していたのであとを嗣いだのだが、扇谷家の重鎮として小田原城を拠点に西相模地方に威を振るってきた祖父頼春、父氏頼には似ても似つかぬお人好しの御曹子であった。

若輩で軟弱な藤頼の許では士気統制が弛緩しているに違いないと見て取った早雲は、乗っ取りに動いた。

早雲はまず小田原衆といわれている西相模の松田ら在地国人たちを巧みに手懐けることからはじめた。

そして、国人たちを通して藤頼に近づいていった。

藤頼は主君定正が父と東相模の三浦時高を喪った穴埋めに隣国の早雲に協力を求めているときいていた。

事実山内軍との五度目の対決のとき早雲は出陣したが、定正の事故死で合戦にいたらず軍を退いたという。

名を遺した名将はみな中国の戦国時代に魏の范雎が唱えた外交政策『遠交近攻策』を採った。

すなわち、遠国とは親交を結んでおいて近隣諸国を攻め奪り領国を拡大してゆくのが得策だということだ。

藤頼はこの教訓を生かさず、隣国と友好を保っていれば安泰なのだと思い込んで早雲に媚を売っていた。

ある日、その早雲からとつぜん使者がやってきた。

藤頼は、なにごとかと狼狽えて恐る恐る対面した。

使者の口上は、

「このところわが主が伊豆の山で鹿狩りを催しておりますので他の山の鹿がみなご領国の箱根山へ逃げ出してしまいました。そこでわれらの勢子をご領国へ入れさせていただきそちらから伊豆へ追い戻したいと思うのですが如何でござりましょう。まことに恐れ多いことではござりまするが枉げてお許しをいただきますれば有難くお伺い致して参るよう申しつかって参上いたしました」

その言上は丁重な申し入れであった。

なにごとかと不安だった藤頼は、使者の話を聴いてなんだそんなことだったのかと密かに胸を撫で下ろした。

安堵で緊張が解れるとお人好しの性癖が頭を擡げた。

そして、なんの疑念も抱かず、

「左様なことなればいと易し」

そう微笑むと、その場で許可を与えてしまった。

あとで重臣たちから擬議が出たが取り合わなかった。

重臣たちは万一に備えて防備を固めようと図ったが、生憎山内家との抗争に動員されていて手薄だった。

はたして早雲は動いた。

足軽を勢子に仕立て、腕利きの若侍数百人を犬飼に見立てて竹槍を持たせると夜討ちの準備にとりかかった。

明應四年（一四九五）九月、それらの人数を熱海の日金山（十国峠）越えで相模國に侵入させると源頼朝が旗揚げした石橋や箱根山麓の湯本あたりに潜ませた。

日暮れを待って千頭の牛の角に松明を付けると、勢子がのちに秀吉の小田原攻めのときの一夜城で知られることになる石垣山や箱根山へ追い上がらせた。

いっぽうの若侍集団は石橋や米神（ＪＲ東海道線早川駅と根府川駅のあいだ）のあたりから法螺貝を吹き立て関の声を挙げて城下の板橋へ雪崩込み町家を焼き払った。

大森氏時代の小田原城は現在の市街地からみて小田原厚木道路の外側山寄りの水之尾（箱根登山鉄道風祭駅の北方）にあったから板橋、風祭は城下町といっていい。その城下町を焼き払われたのだから穏やかではない。

早雲の軍勢に急襲されて城下町まで攻め込まれた大森方は慌てふためいて小田原城は大混乱に陥った。

石垣山や箱根山に群がる無数の松明の灯りを見た城兵たちは、その牛の角に付けた灯りを何十万の大軍と見誤って恐怖に脅え、戦わずして戦意喪失してしまった。

藤頼は僅かの供に護られて城を脱出すると、三浦一族の岡崎城（平塚市と伊勢原市の岡崎）へ落ちていった。

こうして、関東管領家が同族争いに鎬を削り戦力を消耗している間隙を狙われて、隣国伊豆の早雲宗瑞に扇谷家の領国相模國の西部一郭を掠め奪られてしまった。

二

ついに扇谷定正を斃して勢いを得た山内顕定は、扇谷家が小田原を早雲に奪われて動揺している機に乗じて前公方足利成氏の嫡男政氏を奉じて武蔵國に出陣すると扇谷朝良を討ち、相模國にも派兵して長尾景春を破った。

その翌年にあたる明應六年（一四九七）九月三十日に幕府の命を受けた関東管領上杉房顕に鎌倉公方の座を追放されていた足利成氏が六十四歳で歿した。

その四年後の文亀元年（一五〇一）には山内顕定が家宰に取り立てた長尾忠景が閏六月二十九日に歿した。

そしてさらに三年後、永正と改元された年（一五〇四）の九月に、河越城の扇谷朝良が動いた。

上戸（川越市）に布陣していた山内顕定が河越城を攻め倦んで江戸城攻めに切り換え白子（和光市）に移動しているとの報らせを受けた扇谷朝良は、駿河守護今川氏親と伊豆韮山の早雲宗瑞に早馬を送って援軍を求めた。

早雲とは小田原を奪われて敵対したはずなのになぜ救援を求めたのか不可解な向きもあろうが、前年早雲は、甲斐國（山梨県）を攻めたが阻止され失敗していた。

そこで早雲は、上杉と武田が結ばぬよう朝良に和を求めてきたのだった。朝良とても、山内と早雲の腹背に敵を受けるのを避けることで両者は一致したのである。

だが早雲は和睦はしたが小田原は返さなかった。若輩の朝良は交渉で狡猾な早雲に翻弄されたにちがいない。

扇谷朝良からの依頼を受けた早雲はさっそく軍勢を率いて桝形城（川崎市多摩区生田）に出陣してきた。

桝形城は小澤城（同区菅）を本拠にしていた平氏の分流秩父系の小山田有重の嫡男稲毛重成が寺尾城（同区菅）、作延城（高津区上作延）とともに出城にしていた。

ついでながら稲毛重成の室は北條時政の女で源頼朝の室北條政子の妹であるから関東の有力豪族に違いない。

いっぽうの今川氏親も一日遅れて桝形城に着陣した。

これを知った山内顕定は古河の足利政氏に出陣を求め、甲斐の武田信虎（信玄の父）に援軍を依頼させた。

そして九月二十七日、山内顕定軍と扇谷朝良、今川氏親、早雲宗瑞の連合軍は武蔵國立河原（東京都立川市柴崎町付近）で激突し、ここに大遭遇戦が展開された。

山内軍は単独軍で奮闘したが勝利を得られず、両軍合わせて千八百を数える死者を出して痛み分けになった。

鉢形城に退いた山内顕定は弟の越後守護上杉房能に援軍を求め、兄の窮状を知った房能はすぐさま守護代長尾能景（謙信の祖父）に命じて救援に向かわせた。

越後勢が到着すると顕定は直ちに出陣して十二月一日に武蔵國椚田砦（八王子市椚田町）を攻略すると、二十六日には相模國實田砦（平塚市真田）をも陥とした。

そして翌永正二年（一五〇五）三月扇谷朝良の息の根を止めるべく勇躍鉢形城を出撃して河越城に向かった。

河越城を包囲された扇谷朝良は、昨年からの相次ぐ敗戦ですっかり戦意を喪失していたので、家宰の曽我ら重臣たちの勧めもあって河越城を明け渡し、江戸城に隠遁することを条件にして顕定に和睦を請うて許された。

こうして文明十八年（一四八六）以来二十年つづいた山内・扇谷両上杉家の抗争は終止符を打ったが、得るものなくして失うものの多かったこの無益な啀み合いをつづけているあいだに伊豆の早雲宗瑞に関東侵攻の機会を与えてしまい、こんどは早雲との抗争に発展してゆく。

三

扇谷朝良と和睦のあと山内顕定は古河の足利政氏の弟を養子に迎えて顕實と名告らせ、さらに政氏の二男義明を鎌倉鶴岡八幡宮別當に据えて公方家との絆を固めた。

だが、政氏に異議を唱えた嫡男高基が下總國関宿城（野田市関宿町）に拠って父子の対立を鮮明にした。

戸惑った顕定は出家して可諄と号し説得につとめた。

顕定の懸命な努力の甲斐あって、ついに高基が折れて父政氏に詫び状を届けることでようやく一件落着した。

そのころ、顕定の実家の越後國も緊張状態にあった。

隣国の越中（富山県）に一向一揆が、その南に接する美濃（岐阜県）には土一揆が蜂起し、それが燎原の火のように拡がっていって加賀・能登（石川県）を含めた一向宗徒が越前（福井県）に侵入していった。

越前守護朝倉貞景はこれを撃退すると、一向宗の本拠吉崎（福井県あわら市吉崎）を破壊した。

一向宗とは、親鸞が開祖した浄土眞宗のことである。

加賀國の一向宗徒は、應仁の乱で東軍細川方についた守護富樫政親が一部の家臣に担がれて西軍山名側についた弟幸千代丸に逐われたとき協力して回復に努力した。

そのことがあってから我が物顔に振る舞い手に負えなくなってしまったので、政親は近江六角高頼攻めのとき鉤安養寺の陣で将軍足利義尚に討伐の協力を要請した。

政親は拠点として高尾城（金澤市高尾）を築城した。

それを知った一向宗は檄を飛ばして二十万人を召集すると、翌長享二年（一四八八）五月高尾城を包囲した。

一万の軍勢で籠城をつづけた政親は七日に討って出て敗れ、九日の激戦にも敗れてついに自刃して果てた。

援軍は本願寺門徒衆に阻止されて間に合わなかった。

この政親の死によって富樫氏は滅亡し加賀國は守護大名がいなくなったので、本願寺八世恵燈大師（蓮如）の子本泉寺蓮吾、松岡寺蓮綱、本教寺蓮誓が支配する一向一揆と、農民の一味同心する土一揆の共和国になった。

永正三年（一五〇六）九月、その加賀の一向一揆が主君の守護畠山尚順に叛いて内応してきた守護代神保慶宗の手引で越中へ侵入してきたので、窮地に立たされた畠山尚順が越後守護上杉房能に助勢を求めてきた。

だが、越後國内においても土豪たちが上越（頸城・魚沼地方）、中越（三島・古志・刈羽・蒲原地方）、下越（阿賀野川の北地方）それぞれの地域でたがいに領地の拡大を謀って争乱を起こしていたし、その頂点に立つ守護代長尾一族のあいだでも栖吉城（長岡市栖吉町）の古志長尾房景、坂戸城（南魚沼市六日町）の上田長尾房長などが春日山城（上越市中屋敷）の府内長尾能景の守護代の地位を虎視眈々と狙って暗躍をつづけていた。

守護上杉房能はその長尾一族の対立を巧みに利用して操り、長尾能景の行動を牽制して権力の衰退を謀った。

一昨年十月武藏國立河原で扇谷朝良に敗れた兄山内顕定の救援に遠征させたのもその現れのひとつであった。

畠山尚順の依頼を受けた房能は、躊躇うことなく長尾能景に救援を命じて、急ぎ越中國へ出陣させた。

一向一揆の拠点は瑞泉寺（南砺市井波）で、そこに井波城を築城して一向宗二七〇寺を支配していた。

越中國へ進軍した長尾軍は常願寺川と神通川を渉って富山平野から砺波平野へ入ると、庄川を渡河した先にある井波城を攻めて敗走する一向宗徒を追撃して加賀との国境近くの蓮沼口（小矢部市蓮沼）まで追い詰めたのだが、一向宗徒を救援する神保慶宗勢に背後を衝かれて苦戦に陥り、十九日に般若野で敗死してしまった。

悲報を受けた嫡男爲景は、強大な本願寺勢力の一向宗討伐に上杉軍団のなかから長尾勢だけを選んで差し向けた主君房能の判断の甘さが父能景を死地に追い遣ることになったのだと怨んでいたが、いろいろな噂話のなかで、（お屋形さまが守護代長尾能景さまの権力を恐れて、その威勢を殺ぐために敵わぬことを承知で出陣させた）のだという尤もらしい話が爲景の耳に入ってきた。

（お屋形が父を抹殺しようと謀ったにちがいない）

そう思い込んだ途端、爲景は怒り心頭に発した。

そのことを契機にして守護房能の治政に不満を抱いている多くの国人たちが爲景に同情して集まってきた。

守護代長尾をはじめ有力国人たちの不満というのは、それまで与えられていた特権を剥奪されたことだった。

その特権というのは室町幕府が全国各地に一国乃至数箇国を領する守護大名をおくについてこれまでの国人たちの利権との紛糾を避けるため一部の有力国人たちに守護大名の領内検察や課税を拒否できる制度を設けた。

越後國は長尾守護代が頸城、魚沼、刈羽、三島、古志、蒲原、岩船七郡の代官としてその特権を持っていた。

房能が守護になったとき、その特権を剥奪したのだ。

守護代の特権がなくなれば有力国人たちへのお零れもなくなるわけで、房能への不満が燻りつづけていた。

それが能景戦死の疑念を契機にして表面化した。

爲景は一年がかりで与党の国人たちと構想を練ると、守護家の重臣たちがそれぞれの知行地へ帰って府中を留守にしている隙を狙って蹶起し、房能の従弟定實を守護に奉じてみずから守護代となって房能を幽閉監禁した。

身の危険を感じた房能は辛うじて脱出すると、僅かの供に護られて松之山（十日町市）から秋山郷（長野県下水内郡栄村）を経て三国峠（南魚沼郡湯沢町）越えで関東に入り、鉢形城の兄顕定を頼ろうとした。

だが、松之山郷の天水越で爲景の手勢に追いつかれて自害したので、爲景は無念を晴らして溜飲を下げた。

四

爲景は国内の動揺を鎮めると、幕府に手蔓を得て管領細川高國に取り入り越後守護上杉定實、守護代長尾爲景を正式承認させたので非合法的手段は成功した。

このとき山内顕定は公方家父子の調停に心血を注ぎ、古河の政氏と関宿の高基のあいだを行き来して取り持ちに懸命だったので、越後鎮圧が後手に回ってしまった。

山内顕定は関東管領家の養子で越後守護家の出身であったから、こんどのことは実家で起こった騒動であり、しかも実弟房能が討たれているので無念このうえなく、逆臣長尾爲景鎮圧に心が逸ったが、扇谷領を侵蝕してきている早雲の動きが気になって迂闊には動けなかった。

翌年、その早雲が駿河守護今川氏親の命を受けて三河國（愛知県）の諸城攻撃に邁進して関東には見向きもしない情況を見て取った顕定は、ようやく立ち上がった。

永正六年（一五〇九）七月、顕定は養子憲房とともに武藏・上野両国の兵を率い三國峠越えで越後へ入った。

坂戸城主長尾房長、栖吉城主長尾房景らの長尾一族が府中への案内に立ち、顕定の実家で爲景が守護に据えた定實の父上條上杉房實や葎生城（小千谷市）の平子氏ら中越の部将たちがみな顕定の許に馳せ参じた。

顕定は関東管領であり越後守護家の出身であるから越後國人として弓矢を向けるわけにはいかなかったのだ。

爲景には長尾の支族や高梨政盛をはじめとする井上氏、小笠原氏などの北信濃衆が支援してくれたが衆寡敵せず、爲景は春日山城を捨てて隣国越中へ落ちていった。

爲景は顯定の追撃を躱すため、支援してくれた国人衆と信濃衆を帰国させて、僅かの人数で佐渡へ渡った。

顯定は爲景を国外追放でよしとして執拗な探索はせずに、その年は実家の上條城（柏崎市黒滝）で越年した。

だが、爲景はそんな顯定の動きを探っていたのだ。

そして、年が明けて永正七年（一五一〇）を迎えた。

越後國は、雪深く冬の季節が長い。

雪解けを待って顯定は、帰国していた爲景派の長尾支族や国人たちを片っ端から捕えて極刑に処しはじめたので、それらの国人たちを支持する農民たちが立ち上がって土一揆を起こし、関東管領の越後掃討に抵抗した。

高梨政盛からの報らせを受けてそれらの状況を知った爲景は、政盛の手引きで佐渡を脱出すると蒲原津（新潟市）へ上陸して密かに軍容を整え反撃の機会を窺った。

そのころ、顯定の許に鉢形城から急報が届いていた。

伊豆の早雲宗瑞がまたも動き出しているというのだ。

顯定は、養子の憲房に扇谷朝良と連携をとるよう命じて遠征した大半の軍勢を預け、急ぎ鉢形城へ戻らせた。

椎屋（柏崎市椎谷）まで迫っていた爲景の軍勢は顯定が上條城を出発したのを確かめるとあとを追った。

はやる爲景軍は、六月二十日に上田荘の長森原（南魚沼市六日町）でついに顯定軍に追いついた。

ひとあし先に軍勢の大半を帰国させていて、ほかには長尾一族の助勢軍もいない手薄の管領軍だけではいかんせん抗し難く、一方的に敗れて顯定は返り討ちに遭ってしまった。五十七年の生涯であった。

越後守護上杉房能と関東管領上杉顯定の兄弟を斃した長尾爲景は二度も下剋上を遣って退けた大罪人であるが、それにとどまらずこのあとみずから越後守護に据えた女婿の上杉定實をも追放して守護の座を奪い取った。

このときはさすがに上杉守護家の重臣や家臣たち、爲景に不満を抱く国人たちが一斉に蜂起したが、爲景は国人たちを制圧すると守護家の重臣たちには知行地安堵を約して反抗を抑え、名実ともに国主の座を得た。

この長尾爲景のように幕府体制下にあって三度も下剋上を繰り返した人物は寡聞にして知らない。

しかし、爲景のような秩序を乱す悪党が現れたことは、やがて室町幕府の守護・地頭制度が崩壊して、それぞれが自分自身の所領確保と利害得失のために行動するようになり、その結果実力者が頂点に立ついわゆる弱肉強食の戦国時代に入ってゆく前兆でもあったのである。

（つづく）

千家尊福伝（五）

布教拡大に邁進した生き神様

村上邦治

はじめに

明治十年代、神道界を二分する大論争に沸き立った、神道事務局神殿の祭神論争は、明治天皇の勅裁により、さしもの騒動も、ようやく治まった。

これに懲りた政府は、神道の非宗教化に拍車をかけ、矢継ぎ早に、これまでの政策を変更していった。

まず、神官の教導職兼務と、葬祭の取り扱いを禁止した。これにより、大神社を網羅した官国幣社の神官は、以降、宗教活動ができなくなった。

さらに二年後、維新当初、キリスト教拡大を阻止するため、躍起となって、国民の教化に努めた教導職制度であったが、それ自体を廃止したのである。

一方、幕末から明治にかけて、古来の神道とは異なる、神道系の新しい宗派が幾つか起り、貧困層の農民を中心に、信者を増していた。黒住教、天理教、金光教などである。いずれも神が降臨したとする創始者を、教祖とし、病気や怪我の快癒や、生活上の悩みの解消など、ご利益が得られることから、次第に広がっていった。長く続いた幕藩体制に、幾つかの動揺がみられ、民衆の高まる不安感が、その背景にあった。

また当初政府が、あれほど恐れたキリスト教に対して、明治六年信教禁止を解除せざるを得なくなった。各派は競って宣教師を我国に派遣し、西欧流の高度な教育指導や貧者救済活動により、着実に信者を増やしていった。

こうした中、伝統的な神道は、内（神道新宗派）と外（キリスト教）からの攻勢にあい、祭神論争という内部抗争も影響し、次第に衰退に向かっていった。

この猶予すべき事態に、敢然として立ち挙がったのが、尊福であった。

一　神道非宗教化の進展

明治一五年（一八八二）一月、政府は次のような内務省達を布告した。

「自今神官は教導職の兼補を廃し、葬儀に関係せさるものとす、此旨相達候事

但府県社以下神官は当分従前之通」

一般に「神官教導職分離令」と呼ばれるものである。明治五年、神官全員に教導職を兼ねさせ、国民教化にあたらせてきたが、今般これを改め、神官の教導職兼任を禁止したのである。神官は、宗教活動を禁じられ、「国家の祭祀」に専念することになった。教導職を辞任して、宗教活動に携わらず、神官職に専念すれば、国家の官吏として、身分と生活は保障されることから、大半の神官は、教導職を辞し、国家官吏としての、安定した道を選択したのである。

この先、神官に残された仕事は、神饌の調理と神社の清掃以外には、ほとんど何もなくなった。以前は熱心に取り組んできた神道教義や神典の研究、古代から続く神道の歴史や神社由来の調査などは、神官にとって、最早不要となったのである。その結果、神職は誰にでも務まることになり、次第に有能な人材は離散し、社会的地位は低下することになった。

続いて、明治一七年（一八八四）八月、教導職制度自体を廃止した。キリスト教拡大を阻止するため、神道・仏教合同で、「三条の教憲」（敬神愛国、天理人道、皇上奉戴・朝旨遵守）を説き、国民教化の先導役を担ってきた教導職制度であったが、その役割を終わらせた。

これら一連の施策により、神道の宗教部分は排除され、非宗教化が成し遂げられた。諸外国と約束した信教の自由と、維新政府が目指した天皇制国家体制が確立したのである。

二　神道系新宗派の勃興

二百年続いた江戸幕府体制は、西欧諸国からの来航による鎖国制度の揺さぶり、武士層の経済的没落と商人の台頭、天候不順による飢饉と一揆の続発などにより、その綻びが、次第に大きくなってきた。

こうした不安定な世情から、農民層を対象に、神道系の新しい宗派が誕生し、西日本を中心に、次第に広がりを見せ始めてきた。その嚆矢は、岡山藩守護神社今村宮の神職であった、黒住宗忠（一七八〇～一八五〇）が立教した、黒住教であった。「日本古来の神道に近い教えをもった神道教団」といわれ、御三神として、万物の親神である天照大神を最高位の神とし、神道の神々である八百萬神、立教した教祖宗忠神を祭神とした。

黒住教は当初、病治しや失明開眼などの奇跡から広まったが、教祖死亡前に、門弟による平等な立場で運営する、当時としては開かれた教団になった。拡大に伴い、迫害を受け、存続の危機に陥ったが、孝明天皇・皇后をはじめ公卿の信奉や、古来の神道に近い教えなどから、明治五年（一八七二）、「黒住講社」として政府から、認められた。

神道系宗教団体は、全て神道事務局に所属することになっていたが、明治九年、独立して「神道黒住派」として、最初に政府から公認された。信者は、現在の岡山県（備中、備前、美作）を中心に、兵庫県や、山陰、四国地方にも広がった。京都では、孝明皇后の病気快癒に霊験があった経緯から、神楽岡に「宗忠神社」が建立された。公認以後は、東京に大教会所を設け、その後各地に教会所を設置していった。

嘉永三年（一八五〇）教祖が亡くなったあとも、門弟の運営により、維新後の混乱する神道政策を乗り越えて、独立と拡大を果たし、そのほかの新神道教団に大きな影響を与えた。

黒住宗忠から四五年あと、同じ岡山藩の備中国占見村（現金光町）で、後に金光教を立教する赤沢文治（一八一四～一八八三）が、方位の神で、七殺と恐れられていた金神から、お告げを受けたことから始まった。人々の願いを神に届け、神の思いを人々に伝える「取次」を行うことにより、周辺から信者が集まってきた。

金光教は、他の宗教を否定せず、「天地すべてに神様は宿る」、とする身近でやさしい教えのため、信者は全国に拡大した。しかし、明治初期では、「記紀神話の神以外は神と認めない」とされ、迫害を受けたが、教え自体が、温和なものであったことにから、文治の死後、明治一八年「神道金光教会」の設立を許された。そして、「金光教」として独立宗教団体の公認を受けたのは、明治三三年であった。

願い事は、病気、経済問題、人間関係、子供の教育など日常生活に関するものが多く、「取次」は多くの民衆に受け入れられ、中四国地方に広がり、やがて、全国に教会は設立されていった。

一方、大和国（奈良県）に、中山みき（一七九八～一八八七）が立教した天理教は、当初、「男女がみだりに集合」「医薬の無視」「寄付の強要」などとうわさされ、邪教的な集団とみられた。また「搾取の宗教」との新聞報道が続き、政治権力や社会諸方面から、厳しい弾圧を受けながらも、多くの信者を集めたことから、明治四一年公認された。

これら、黒住教、金光教、天理教は、生きた信仰を求める民衆の要望に応え、教祖信仰として、「幕末三大新宗教」といわれた。この内、黒住教、金光教の両教は、古くから出雲大社と関係が深い、備前・備中・美作を拠点としていた。

三　キリスト教の浸透

明治維新後政府は、祭政一致による政治を宣言し、キリスト教を禁止した。さらに、神道を国民教化することにより、キリスト教の拡大に備えたのである。しかし、信教の自由を迫る西欧諸国の圧力と、文明開化による近代化を急いだことから、明治六年（一八七三）切支丹宗禁制の高札を撤去し、事実上、キリスト教は解禁となった。明治八年には、信教の自由を口達し、キリスト教は、日本で自由に布教活動ができるようになった。そして、明治二二年大日本帝国憲法制定により、信教の自由は、憲法により保証されたのである。

この間、ローマ・カトリックは、横浜及び長崎（浦上）を拠点として、巡回宣教師と聖堂定住宣教師に分けて、全国に信者拡大の布教活動をおこなった。特に孤児救済、小学校など初等教育事業、病気・怪我の医療分野で、貧困層への奉仕活動を地道に続けたことにより、信者を増加させていった。明治中頃からは、高等女子教育にも力を入れ、上流階級の中からも、賛同者があらわれてきた。

プロテスタントは、アメリカ人を中心として、横浜（ヘボン）・札幌（内村鑑三）・京都（新島襄）・熊本などに拠点を設けた。その教えが、合理的な考え方や行動であったため、文明開化に積極的な学生や、中産階級の人々に受け入れられた。主な教派は改革派教会・長老派（日本基督教会）、メソジスト派（日本メソジスト教会）が中心であった。イギリスからは、聖公会派（日本聖公会）、救世軍などが、進出、活動した。

ギリシャ正教の流れをくむ、ロシア国教のハリストス正教会は、ロシア領事館が函館に設けられると同時に始まった。ロシア人ニコライにより、仙台、盛岡、東京（駿河台）に、信者を増やしていった。「国家の改造は、まず人心の改造を、人心の改造には真正な宗教＝ハリストス教を、以てする」と説き、東北地方の敗残士族に受け入れられた、北関東では、当時の輸出産業である製糸工場経営者など、地方資産家に広まった。

キリスト各派は、統一した布教活動を行っていたわけではないが、条約改正を悲願とする上流階級や一部の資産家、西欧流の高等教育受けた中産階級者、経済援助の対象となった農民や都会の民衆など、あらゆる階層に、その勢力を伸ばしたのである

四　神道大社教の誕生

「神官教導職分離令」布告後、尊福の行動は、極めて迅速であった。

明治一五年三月、出雲大社宮司の辞任とその跡を弟尊紀に譲り、本人は、教導職（大教上）に留まる旨を申し出て、そのまま受け入れられた。無論、出雲国造職も尊紀に譲り、尊紀は第八一代継承の神事を行ったのである。

五月には、「出雲大社教会」を、「神道大社派」に改称した。新たに神殿も設け、尊福は管長に就任、その認可を受けた。

一一月には、「神道大社派」を、「神道大社教」と改称し、名実ともに、神道事務局から独立した神道宗教団体になったのである。

こうした素早く、新宗教を立ち上げることができたのは、予てより、神道国教化に反対し、大国主神の神徳を広げるために、「出雲大社敬神講」を組織化したことにあった。その後改称した「出雲大社教会」において、教理規約、誓約、条例、教師養成機関（生徒局後の出雲大社国学館）を制定するなど、既に、一宗教団体として組織化され、運営されていたのである。

神官の教導職兼務を、禁止したことを契機に、尊福は、以前から抱いていた、出雲教学による布教拡大の信念を、直ちに、実行に移したのである。しかし、まだ四十歳前であり、出雲大社宮司と出雲国造職を、弟に委ねることは、悩みもあった事であろう。宮司を辞す際に、教信徒に対しての訓示書が、残されている。その中で

「祖宗以来由緒ある神官を奉務せんと欲すれば、則神道を振興する能はず、神道を振興せんと欲すれば、祖宗以来奉仕の神官を辞せざるべからず」

と、苦衷した胸の内を語っている。

「尊福の心事其如何そや」

と、悩み苦しんだ。

しかし、

「当今洋教外に誘い、人心内に惑ふ」

と、我が国の現状を憂い、今こそ、神道の教化が最も重要である、との思いは揺るがなかった。その実現のために、古来の神道及び大国主神の神徳を、広める決意を披瀝したのである。

キリスト教各派は、日本各地で、派遣元の莫大な資金援助と地道な活動により、信徒を増やしていた。維新当初から、キリスト教の拡大を危惧していた尊福には、最早、これ以上キリスト教徒の増大を、見過ごすことはできなかった。かれの考える最大の防御策は、神道自体の振興とその教化に外ならなかった。

さらに、この訓示書には一切触れられていないが、足元において、見過ごすことのできない事情があった。キリスト教の進出は、山陰地方では未だ顕著でなかったが、新興神道宗派との摩擦が、激しくなってきていた。信者間では、深刻な争いが、続発していたのである。

大社参拝に便利な備作・播州（備前・備中・備後・美作・播磨）は、古くから出雲大社への参拝者が多く、熱心な信者による講が、これら町村に結成されていた。まさにその地から、神道系新宗教である黒住教、遅れて金光教が、相次いで、誕生したのである。そして幕末以降、もはや無視できない勢力に、成長していた。

慶応四年（一八六八）四月、美作国高尾村にて、村民に熱病が流行した。熱病者の一人が、黒住狸と口走ったことにより、杵築社人（出雲大社所属の社人）に祈祷を依頼した。社人が、病気は黒住教のせいだとして、「邪法を行う黒住教の社祠は、焼き払うのがよろしい」と申した為、村民が、新教の祠を焼き払った、という事件が起きた。

明治七年には、出雲大社の地元島根県で、黒住教講社が施す御禁厭（おまじない）は、人民を眩惑させているとして、黒住教の統制を、教部省に申請したのである。例えば、病気を治すとして、太陽の気を呑んで、これを吹きかけ、また一滴水を授け、これを天の真名井の水と唱えるなど、無稽であり弊害が生じているので、県内では禁止することにしたい、とするものであった。島根県と同様な申請は、兵庫県、愛媛県、名東県（現徳島県と淡路島）で発生していた。

黒住教は、摩擦を回避するため、新時代にふさわしい活動に、改める努力を重ねた。明治五年、教部省より神道系では初めて、「黒住講社」として認められていたので、教部省は、島根県を始め各県の講社活動禁止の申請を、すべて不可としたのである。

備中国で、安政六年（一八五九）に立教された金光教は、「人あっての神、神あっての人」とし、「人と人の関係」も同様に、お互い助け合うものとする教えから、農民層に受け入れやすく、瞬く間に波及した。

これまで、出雲大社の信者を多く抱えていた岡山県が、この二つの新宗教に侵されてきており、このまま放置しておくことのできない、厳しい状況に陥っていたのである。

尊福は、これら新宗派に対し、一部神道教義に似通っているものの、天御中主神・高皇産霊神・神皇産霊神の造化三神を中心とし、顕界の天照大神と、幽界を統治する大国主神が、神道教義の核心であり、創始者を祭る事など、論外との思いであった。古来の神道を正しく継承するのは、唯一、神道大社教である、との強い自負をもつ尊福は、躊躇せず神道事務局から独立し、神祭論争で

主張してきた神道教義による、伝統神道の拡大に専念するとともに、新教派との対決を決意したのである。

五　大社教布教の巡教活動

明治一五年五月、「神道大社派」に改称、その特立が認可され、一一月、さらに「神道大社教」と改称し、尊福の巡教活動に、拍車がかかった。

この年は、足元で拡大していた黒住教や金光教の進出を食い止めるため、中四国地方への巡教が中心であった。翌一六年は、東京出張所を東京分祀として創建し、東日本の拠点としたのである。その為大半は東京に在住し、関東周辺の巡教が中心であった。

その後明治二一年六月、管長を辞任するまで、東北地方から九州まで、神道大社教布教のため、巡教に次ぐ巡教の連続であった。

しかも、当時の巡教は、苦難を伴った。都市間は鉄道、東京などの都市では、馬車か車が利用できたものの、地方の巡教は、馬による移動しかなかった。道路は悪路が続き、しかも衆人の見守る中での移動なので、肉体的、精神的疲労は大きいものであった。しかし、四〇歳の教祖にとっては、大国主神の神徳を広め、古来の日本神道を教化していくという信念の前には、少しも苦労とは、思わなかったに違いない。各地の教会所や分院からの相次ぐ要請を、決して厭わなかった。

巡教中、教会開所や祭典式での、信者や民衆の前では、講話や説教を説き、大社教分会長や役員層には、教義の教授や教団運営の指導を行った。夜は大抵、町村長、警察署長など、地元の名士との懇談や、篤志家や資産家からの招待が組まれていだ。また、古典・教義、和歌などの揮毫を、懇請されることも多く、一時の暇もなかった。

この時代まで、出雲国造職は、地元では、国造様と呼ばれ、尊敬されてきた。民俗学者の柳田国男は、明治八年、現兵庫県神崎郡福崎町（姫路市の北）の生まれで、一三歳になるまでこの地で過ごしたが、彼の書いた『故郷七〇年』のなかに、次のようなくだりがでてくる。

「出雲から但馬路を経て、この村を通過した国造家（出雲大社の千家）を迎えたことがあった。生き神様のお通りだというので、村民一同よそ行きの衣装を着て道傍に並んだ。若い国造様が五、六名のお供を従えて、烏帽子に青い直垂姿で馬で過ぎていった時、子供心にその人の着物にふれでもすれば霊験が伝わってくるかのような敬虔な気になったようである。その国造様の姿が今もくっきり瞼に浮かんでくる。」

当時の地方巡教の様子と、迎える地元民衆の熱狂ぶりが窺えて、興味深い。

古から国造は、直接土に触れてはならない、とされており、やむなく土の上を歩くときは、新薦などを敷き、その上を移動した。その敷かれた新薦を、群集は打ち寄り掴みあって、持ち帰ったことや、尊福が浴した風呂の湯は、宿の主人が、銘々徳利に一滴も残さず入れて、親戚知人に配った、事などが、新聞に残されている。また、尊福の食べた箸は、皆が競って、手に入れようとしたので、後には、大社より持参することにしたほどであった。尊福は、こうした迷信の類には、閉口し嫌がり、その解消に努めたのである。

祭神論争を主導した管長尊福の巡教は、信者獲得には絶大であった。尊福の精力的な巡教活動は、明治二一年まで五年間続いたが、この間、中四国における新宗教の浸食を、食い止めるとともに、神道大社教の教会所や分会所を全国に設け、その基盤を揺るぎないものとしたのである。

おわりに

明治十年代後半は、欧米諸国との不平等条約改正を最大の目標とする政府は、近代立憲国家体制の確立を急いだ。

明治一四年（一八八一）勅諭を出し、二三年に国会開設を宣言した。上院（貴族院）の土台づくりとして、明治一七年「華族令」制定、一八年には、太政官制を廃止し、内閣制度を設け、初代総理大臣に伊藤博文が就任した。二一年、地方制度確立のため、「市制」・「町村制」さらに「府県制」・「郡制」を公布、そして明治二二年、大日本帝国憲法発布にいたるのである。

尊福の神道大社教管長の五年間は、立法、行政、司法など、諸制度の整備を急いでいた時期であった。そうした時代に、人心収攬に秀でており、何事にもぶれない信念を持ち、どんな障害にも負けない強靭な精神力と、目的を実現させる行動力を持ち備えた尊福を、神道大社教管長という一宗教家に押しとどめることを、許さなかった。新しい近代国家体制の確立を急ぐ、政治、行政及び実業の各界から、熱望された人物であったのである。

尊福は、その求めに応じ、神道界から、まったく未知の世界に転身し、波乱の半生を送ることになるのである。

（つづく）

（参考文献は最後に記載します）

漢詩

潮騒録（七十八）

鯨游海（くじらゆうかい）

哀悼畏友中山喬央大兄急逝・其一　平成二六年二月

金印謎深端緒無
霧中耶馬臺王都
雖今欲恃君知見
何急怱怱逝置吾

押韻・無都吾

〈畏友中山喬央大兄の急逝を哀悼す・その一〉

金印の謎深くして　端緒なく
霧中なり　邪馬台の王都は
今君の知見を　恃（たのま）んと欲すと雖（いへど）も
何ぞ急なる怱々と　吾を置きて逝（ゆ）くとは

〔墓誌銘1〕

噫、何たる悲哀ぞ。何ぞ兄や急逝したる！

考古学や古代史に於ける貴兄の眞摯なる研鑽と深渕なる学識とは、人みな畏敬し感嘆措く能わざる所なるに…

金印の「謎深」は福岡市立博物館に鎮座する国宝「漢の委（わ）の奴（な）の国王」印。史書では後漢の光武帝から特に下賜されたという。それが博多湾上志賀島の田圃（たんぼ）から出土した。然し金は自在に鋳造可能である所から、発見当初より偽造説が提起され今なお侃侃諤諤と論じられている。

また女王卑彌呼の國都は何処に存在したか。邪馬臺國（やまたいこく）の九州説と大和説は猶決着してはおらず五里霧中である。

今こそ大兄の学識によってこの問題に明快な示唆或は明解な解答を得んものと期待していたのだが……

嗚呼！　何ぞ急なる。

怱々と吾を置き去りにして逝って了うとは……

嗚呼、悲しい哉！　嗚呼惜しい哉！

☆邪馬台の卑弥呼の都何処にや
　君に問はんも君既に逝く

又・其二

平成二六年二月

茫漠相知五十年
君探薪炭我斟泉
倶論同哭擧杯笑
人曰公眞兄弟焉

押韻・年泉焉

〈又・その二〉

茫漠たるかな　あひ知りて五十年
君は薪炭を探り　我は泉を斟む
ともに論じともに哭し　杯を挙げて笑ひしが
人曰く「公らは眞の兄弟なる焉」と

〔注　解〕

相知＝漢語の知は単に知るを越えた深い意がある。喩えば「理解する」等に昇華する。史記・刺客傳「士爲知己者死　女爲説己者容」

承句は廣瀬淡窗・桂林荘雑詠示緒生「休道他郷多苦辛　同袍有友自相親　柴扉暁出霜如雪　君汲川流我拾薪」より転用した。塾生らの厳しい勉励の様子を表現している。

結句の焉＝詠嘆の終尾詞。…かな。

公＝ここでは半ば揶揄して、半ば尊敬しての公。

〔墓誌銘2〕

茫漠たるかな。両人が知己となり互に理解して半世紀。貴兄は薪炭を探求し私は泉水を斟んだ＝刻苦勉励した。倶に論じ、同に哭し、また共に大好きな酒を斟み交し過ごして来た仲なのに……

両人の仲の良さは、人々に度々「公らこそ眞の兄弟なる焉」と云われる程であった。

☆何時よりか肝胆照らす仲なりき
　我れ生むは母我知るは君

見教淺田眞央嬢

平成二六年三月

眞央轉倒降肩荷
喪物皆無心自和
終幕遂成天女舞
見教色卽是空那

押韻・荷和那

〈淺田眞央嬢に教へらる〉

眞央転倒して　肩の荷を降ろす
喪物皆無にして　心おのずから和む
終幕つひになる　天女の舞
「色即是空」の那たるかを　教へらる

〔注　解〕

ソチ五輪が終わった。

日本の獲得した牌は、金1ケ、銀4ケ、銅3ケの計8ケだった。

前回より増えたことは好しとしても、絶対に金が確実と思われていたフィギアの浅田眞央と、スキージャンプの高梨沙羅の二人が共に選外に終わった。

現実の競争は厳しいものだ。

浅田選手は競技前半のショートプログラムで再三転倒した。一度なら未だ可能性はあったのだが。

この瞬間、浅田の金は絶望的となった。

然し、同時にこの瞬間、彼女は国民の期待の重圧から解放されたのだった。

もう失なうものは皆無となった。

従って、終幕の演舞は一片のミスなく、華麗に神妙なる技を披露することが出来たのだ。

わたしたちは彼女に『色即是空』の何たるかを、はからずも教えられたのだ。

☆よくころぶころころとまたころぶ
　いざかまくらもしかところびつ

女性とは思えぬ激情ほとばしる強い詩である。

「船内で地図を見せられたが、日露が戦っている土地は我が中国の領土ではないか」「拠灰に付す」とは戦火に焼けること。頭顱とは髑髏。

《漢詩の流れ66》 中華民国3　秋瑾。

秋瑾（女流・一八七五～一九〇七）

日清戦争に敗れ、義和団事件による八ケ国の北京常駐という国辱的事件が続く末期の清朝。絶世の美人だった秋瑾は国難に煮えきらぬ夫と離婚、東京に留学し、同時に革命運動の急進派に参加した。後密告され捉えられる。

下田歌子が彼女を支援したという。青山実践女学校（現青山学院大学）で看護学、教育学等を学び、休暇で帰国する際、七律一首を作った。

丁度日露戦争の最中だった。明治四〇年斬首の刑。

春雷

萬里乘風去復來　万里風に乗じて　去って復た来たる
隻身東海挾春雷　隻身東海に　春雷を挟ふ
忍看圖畫移顏色　図画顔色移すを看るに　忍びんや
肯使江山付劫灰　江山をして劫灰に付すを　肯んず
濁酒不銷憂國淚　濁酒もても銷えず　憂国の涙
救時應仗出群才　時を救ふは　応に出群の才に仗るべし
拚將十萬頭顱血　拚ふに　十万頭顱の血を将ってし
須把乾坤力挽回　須らく乾坤を把って　挽回に力めよ

人類の仲間（七）

鈴木守

第八節　ホモ・サピエンス種の仲間たち

ホモ・サピエンス種には、ハイデルベルゲンシス、ネアンデルタレンシス、イダルツ及びサビエンスの4亜種が属している。

進化の指標とされる脳容量は、ホモ属の場合、原則として七〇〇ml以上、ホモ・サピエンス種は一〇〇〇ml以上とされ、現代型サピエンスの平均値は、一三七〇mlでネアンデルタール人の一四七〇mlより小さい。だが、人類進化の特徴である脳表面の皺曲は、現代型に際立ち、脳表面積はネアンデルタール人より遥かに広い。

ところで、一九八二年（昭和五七年）文部省検定の高校歴史教科書には、懐かしい名称、猿人（アウストラロピテクス類）、原人（ジャワ原人、北京原人、ハイデルベルグ人）、旧人（ネアンデルタール人）、新人（クロマニヨン人、グリマルディ人）が記載されていた。この当時は、人類の属や種の分類が未確定であり、ハイデルベルグ人は原人とされていた。現在では、ハイデルベルグ人という呼び名は、『ホモ・サピエンス・ハイデルベルゲンシス』と云う亜種の名称に使われ、かって、ハイデルベルグ人と呼ばれていた人骨は、出土したハイデルベルグ郊外の地名・マウエルに因んで『マウエル人』と呼称するようになった。

一．ホモ・サピエンス・ハイデルベルゲンシス（古代型サピエンス）

亜種ホモ・サピエンス・ハイデルベルゲンシスは慣用的に『古代型サピエンス』と呼ばれているので、『古代型、乃至は古代型人類』と表記し、以下、古代型人類の歴史を復習うことにする。

古代型発見の第一号は五〇万年前頃の前出マウエル人であるが、それ以前、一〇〇万年前頃、紅海を望むエリトリアで、ホモ・エルガステルから分岐して、呱々の声を上げたとされている。次いで、エチオピア・ボドでは六〇万年前頃に古代型活躍の痕が残されている。

ヨーロッパへ進出した古代型人類の足跡は、前出のマウエル人を始め、ドイツのシュタインハイム人（三〇万～二五万年前）、イギリスのスウォンズクーム人（四〇万～二五万年前）、フランスのトータヴェール人（四〇万～二〇万年前）、ギリシャのペトラローナ人（三〇万～二〇万年前）、ハンガリーのヴェルテシュセレス人（二二万～一六万年前）などが残している。

アジアでは、中国の金牛山（二八万年前）、大荔（ダーリ）（一三万～一八万年前）、馬壩（マーバー）（一四万～一二万年前）、インドのナルマダ（二〇万年前？）、インドネシアのガンドン（ソロ人、二〇万～一〇万年前）などに古代型人類の影を見ることができた。

アフリカでは、前出ボドの六〇万年前に次いで、ザンビアのブロークン・ヒル（三〇万年前）、モロッコのザレー（二五万～二〇万年前）に古代型の足跡が印されていた。

二．ホモ・サピエンス・ネアンデルタレンシス（ネアンデルタール人）

ネアンデルタール人発見の第一号は、一八五六年にドイツ・ネアンデル渓谷出土の人骨だとばかり思っていたが、それ以前、一八四八年に地中海入口のジブラルタルで発掘されていた。ネアンデルタール人は、ヨーロッパにて古代型人類から分岐したとされており、最古のネアンデルタール人骨は、三〇万年前頃のスペインのシマ・デ・ロス・ウェッソス洞窟で発見された。

ネアンデルタール人が発祥した三〇万年前頃から二五万年前頃の時代は、ステージ8の寒冷期であり。恐らく彼らは寒冷気候適応型人類に進化したのであろう。ネアンデルタール人誕生後、二五万年前頃から二〇万年前頃までではステージ7の温暖期に入り、この時代にヨーロッパに定住したようである。その後、一二万年前頃まではステージ6の寒冷期となり、彼らはこの間に耐寒形質を強化したに違いない。

その後、ステージ5の温暖期が七万五千年前頃まで続き、ステージ4の寒冷期を経て、ステージ3の温暖期となった。この間、彼らはドイツ、フランス、スペイン、ポルトガル、イタリア、クロアチアなどの欧州圏だけでなく、イスラエル、シリア、イラクなどの中東地域、更には中央アジアのウズベキスタンまで進出している。しかし、寒冷地適応を果たしたネアンデルタール人も衰退の時期を迎え、二万七千年前、スペインのマラガ近郊にあるサファラヤ洞窟を最後に消息が途絶えてしまった。

それにしても、身体強健にして寒冷環境にも適応したネアンデルタール人たちが何故滅び去ったのか？この謎について、彼らは現代型サピエンスと同時同所で共存していたので、現代型人類たちに亡ぼされたとか、混血したという説が唱えられたが、現在では「寒冷気候など特殊な環境に余りにも適応し過ぎたため、後氷期へ向かうに連れて温暖化が進み、温暖な生活環境に適応できなくなった結果であろう」と説明されているが、確かなことは不明である。ともあれ、現代型人類がネアンデルタール人の子孫と云う可能性を肯定する資料は見当たらない。

ところが、一九九九年、ネアンデルタール人を研究しているE・トリンカウスは「リスボンの北方約一三〇粁のレイリアで発見された二万四千年前の人骨は、ネアンデルタール人と現生人類の双方の特徴を備えており、混血することによって現生人類が生まれたかも知れない」と発表した。

三　ホモ・サピエンス・イダルツ

二〇〇三年にホモ・サピエンス・イダルツの男性2人と子供1人の頭骨などが、エチオピア・アディスアベバ北東約二三〇粁のヘルト村周辺で出土し、その報が朝日新聞の紙上を飾った。

放射年代測定法で特定し、一六万から一五万四千年前の化石と同定された。イダルツはホモ・サピエンス種の亜種であり、古代型と現代型人類を結ぶ可能性が示唆されているが、ホモ・アンテセソールの場合と同様に、第二弾の証拠が未発見のため、その真偽は定かでない。〝イダルツ〟は現地語で「長老」の意である。

四．ホモ・サピエンス・サピエンス（現代型サピエンス）

現存している我々現代人と雖も、クロマニヨン人などの化石人類と同じ仲間のホモ・サピエンス・サピエンス、慣用名、現代型サピエンスである。この両者を区別して、現存している人類を現代人或いは現生人類とし、化石化した人類を現代型人類と表記する。

扨て、クロマニヨン人は化石化した現代型人類の代表と見做されているためか、現代型人骨の発見第一号は、一八六八年に出土したクロマニヨン人と認識している人が多い。しかし乍ら、それ以前、一八二九年にベルギーのアンギスで発見されているが、アンギス人を知る人は少ない。

現代型人類はアフリカにおいて、古代型人類から分岐したことは確からしい。事実、アフリカには四万年前頃のクロマニヨン人より遥かに古い現代型人類の化石が幾つか発掘されている。南アフリカには、現代型の人骨が、七万五千年前のブロンボス洞窟、九万～七万年前のボーダー洞窟、十二万年前頃のクラシーズ河口洞窟で見出だされている。このクラシーズ化石人骨の骨格は、現代のホッテントットやブッシュマンに類似しており、彼らの祖先と目されている。

その他、現代型人類誕生を示唆する資料として、「六七年に出土したエチオピア・オモ一号化石が現代型最古の化石」とか、「現代型人類最古の二六万年前の頭蓋骨断片が南アフリカのフローリーバッドで発見」とかがあり、モロッコのジェベル・イルードにも十万六千年前の人骨が発掘されているので、現代型サピエンス発祥の地はアフリカであることは間違いないが、生誕地がアフリカの何処なのかは確定し得ない。

一〇万年前後の頃になると、レバントの地に現代型の化石人骨が認められる。イスラエルには、九万二千年前のカフゼー、一〇万年前頃のスフール、それ以前のタブーンの各洞窟がある。この時期には氷期に入ったヨーロッパから脱出してきたネアンデルタール人と共存していた。

五万年前以降の時代に入ると、各地に現代型人類の進出が認められる。五万年前頃には東アジア中国に柳江人が進出し、次いで、三万年前から一万年前には周口店上洞人の姿が認められるようになり、彼らがモンゴロイドの祖となって柳江人は東南アジアや日本人系を構成し、上洞人は中国、モンゴル系の祖となった節がある。アメリカ・インディアンやイヌイット等新大陸の住民や太平洋に浮かぶ島々の人たちもモンゴロイドの流れである。オーストラリアでも四万年前から一万三千年前には、ウィランドラ湖畔、マンゴー湖畔、キーラーなどにオーストラロイドの滅収見んアボリジニが出現した。

ヨーロッパでは、フランスの四万年前頃のクロマニヨンに現代型サピエンスの姿が認められるようになり、他にフランスのソリュートレやオーリニャック、イタリアのグリマルディなどヨーロッパ各地で四万年前から一万年前の化石人骨が発掘され、遺跡は30箇所強に及んでいる。

引用文献

小金井良精、人類学雑誌三五巻、一九二〇

新規矩男他、世界美術全集1、原始、平凡社、一九五六

芹沢長介他、石器時代、世界第百科事典7、平凡社、一九七二

富村傳、文明のあけぼの、講談社新書、一九七三

高橋秀ほか、高等世界史、帝国書院、一九八二

池田次郎、日本人の起源。講談社、一九八二

W．ピルツ、ハーマンライマー・コンタクト　四二号、一九八七

中屋健一ほか、世界史。三省堂、一九八四

今西錦司他、人類の誕生、河出書房新社、一九八九

F・ファッキーニ著、片山一道訳、人類の起源、同朋出版、一九九三
馬場悠男他、人類の起源、集英社、一九九七
諏訪元、『人類を育てたアフリカ大陸』、新書アフリカ史、講談社現代新書、一九九七
葉山杉夫、ヒトの誕生、PHP新書、一九九九
河合信和、ネアンデルタール人と現代人、文春新書、一九九九
貝塚茂樹、伊藤道治、古代中国、講談社、二〇〇〇
平松隆円、化粧にみる日本文化、水曜社、二〇〇九
朝日新聞記事
猿人Q&A95・12・10日刊
猿人ガルヒ99・04・23日刊
人類の祖先猿人？99・05・15日刊
猿人ケニアントロプス01・03・22日刊
猿人オロリン01・04・25夕刊
ラスコー以前の線刻画発見01・07・05夕刊
猿人ラミダス亜種01・07・12日刊
新人の起源実証02・01・11日刊
猿人サヘラントロプス02・07・11日刊
16万年前のホモ・サピエンス03・06・12日刊
熱帯びる人類起源追及03・06・29日刊
人類最古の装飾品04・04・16日刊
南ア・ブロンボス洞窟05・06・03夕刊
ラミダス全身骨格09・10・02日刊
猿人セディパ10・04・09日刊
セディパ11・10・20日刊

（次号に続く）

目耕録（その十五）

――徳野貞雄『農村の幸せ、都市の幸せ――家族・食・暮らし』を読む（二〇〇〇年、NHK出版、生活人新書）――

山本鎭雄

真冬に泣き、真夏に慌てる

今年二月、山梨では二度も記録破りの大雪が降り、五日間もJR中央線が不通になった。妻の実家の北側の玄関の廂が傾き、国道の歩道沿いの生垣の低い樹木は折れた。この大雪のために、土中に水分を含み、その後は順調に晴れたり、雨が降ったりして、梅雨の終期の晴れ間にジャガイモを収穫したら、意外にも例年以上に大豊作だった。男爵芋、キタアカリ、メークイン、アンデス赤を掘り、乾燥させて一先ず畑の小屋に収納した。一年中、ジャガイモは長期間保存しても痛まないので、大粒・中粒を選び、迷惑を承知して親戚・友人にユーパックで郵送した。小粒のジャガイモは「煮転がし」と言う調理法、つまり食用油で炒め、味噌で味を付けて食べた。

前年の苺がそのまま生長した。テキストでは苺の苗をマルチフイルムで覆い、破って表面に出しておくと、実った果実に泥が付かないと書いてあった。黒マルチを覆うと、どこに苗があるか分からない。そこで、透明マルチで覆えば、苗の所在が分かり、穴を開けて破いて苗を表面に出すことが出来た。畑で真っ赤に熟した果実をもぎ、小椅子に座り、爽やかな五月の天候の下で苺の果実を口に入れると、濃厚な甘味があって、僅かな酸味は甘さをさらに倍加させた。それが本当のナチュラルな苺の醍醐味だろう。苺ミルクや砂糖にまぶされたショートケーキの上に赤く飾られた苺などは本来の味を抹消した見

栄えの良いただの加工品に過ぎない。

だが、梅雨が明け、真夏になって、透明マルチを使用したことが失敗だったことを、いやという程、思い知らされた。収穫期を終え、マルチを剥ぎ、雑草を小ガマで除草した。梅雨が明けると、逞しい夏草がまた茂り出し、ほったらかしにしておいた。なぜなら、親株から無数に赤いランナー（走り蔓）が伸び、活着した子株、孫株を採り、培養土を入れた育苗ポットに植え替えようと思った。昨年、それを試みたが、ポットから苗が浮き上がり、活着は上手く行かなかった。その失敗を繰り返さないつもりで、雑草を放置した。

真夏には苺の株よりはるかに長く太目の花穂が目立ち、その先端に細い針状の毛のあるネコジャラシ（和名はエノコログサ）によって、苺の株は見えなくなった。しかもランナーの子株や孫株の行方も分からなくなった。五月以前、春蒔きの大根、カブ、春菊、小松菜、ほうれん草の種蒔き、さらに玉ねぎやニンニク、冬越しのエンドウと空豆、かき菜の収穫に追われた。とくにスナップエンドウは肉厚のさやと緑色の豆は甘味と歯ごたえがあってうまかったが、蔓から一つ一つを鋏で切り取るのに時間がかかった。そのため、苺の畑に生えた雑草を刈り、子株、孫株の生長を観察する余裕はなかった。

軽い熱中症になる

梅雨明けに、畑でもう一作、大根、にんじん、カブの種を蒔こうと、耕耘機で耕し、両サイドを鍬で土を掘り、高畝をつくろうとしたが、二回、三回、鍬を振り上げると、猛烈な疲労感を覚えて作業は続けられなくなった。小屋の日陰で小椅子に座り、用意した水を飲み、もいだキュウリをほおばった。しばらくして立ち上がると、眩暈がして、目がちかちかした。これはまずいと思い、鍬、レーキ、三角ホー、鎌を畑にほったらかしにして、竹籠を背負い、炎天下の農道をとぼとぼと歩き、その途中、何度も耐えらくなって、木陰に座り込み、やっとの思いで家にたどり着いた。

着ていた上着は汗で肌にべったり付いて、脱ぐのに手間がかかった。ともかくシャワーを浴びて、水風呂に入り、浴槽でしばらく静かにしていた。風呂から出て、扇風機を点け、水を飲み、畳の上に大の字になって寝転んだ。しばらく寝たが、急に吐き気がして目が覚めた。トイレに駆け込み、嘔吐した。また寝転がった。今度は便意を感じ、トイレに行ったが、下痢気味だった。多少、元気になったので、畑に出かけ、散乱した農具を畑小屋に収納した。家に戻り、リュックサックを背負い、山梨の梁川駅からＪＲ中央線の高尾駅で乗り換え、小金井の自宅に戻った。梅雨明けで湿気があり、暑さに慣れていないため、脱水症状となり、軽い熱中症にかかったのだろう。

その翌日、右の膝頭が痛むので、自宅の近くの整形外科の看板のある診療所へ行き、患部に注射してもらった。医師に昨日の熱中症の症状を話したら、早速、血液検査のため、注射で静脈血を採取され、さらに点滴注射をしてもらい、レントゲン撮影、心電計の検査も受けた。その翌日、診療所からの電話があり、来診するように言われた。すでに血液検査のデータが届いていて、医師からクレアチニンなど腎臓に関するデータが極めて異常値を示していること、さらに「恒常性」維持（ホメオスタシス）の機能が低下していると診断され、かかりつけの診療所で受診するように指示された。

かかりつけの診療所の血液検査の結果、検査のデータはいずれも正常値に戻り、軽い一過性の熱中症と診断された。以後、私は真夏の高温時には水分の補給に努め、熱中症にたいする自己免疫性が形成されることを期待した。村人と異なり、遅寝遅起きの生活習慣のある私は、真夏でも温度が上昇する時間に畑に出掛ける。自らの体調に気を使い、耕耘機や草刈機を操作して、雑草を始末し、とうもろこし、枝豆、ナス、トマトなどなどを収穫した。この真夏に畑で収穫と草刈の作業をしたが、二度目の熱中症にかからずに済んだ。

「一人遊び」の土いじり

「生体の恒常性」とは、アメリカの生理学者キャノンが提唱したホメオスタシスの訳語である。例えば、外気が上昇すれば、生体は生存に適した体温を保持しようと、皮膚から激しく放熱し、発汗する。ところが、真夏日に外気や湿度が非常に高いと、ホメオスタシスの機能が低い高齢者や乳幼児は、熱中症にかかり易い。私はポピュラー・メディカル（通俗医学）の知識から、病気とはホモスタシスの「逸脱」と理解していたが、「機能の低下」という生体の生理学的な現象について理解していなかった。高齢者が自宅で熱中症により死亡した報道に接し、高齢者の死はホメオスタシスの機能が低下し、「逸脱」（病気）の状態となり、しかも異常な高温を知覚出来ず、死に至らしめたのであろうか。

今、高齢者となり、メタボの体型の私は座っている状態から「どっこいしょ」という思いで、立ち上がるようになった。杖をついて、歩く状態ではないが、歩行はますます遅くなった。私は野菜の種蒔き、苗の植え付け、雑草の手刈り、間引きや収穫では、中腰で作業することは身体的に耐えられず、小椅子に座り、手の届く範囲で作業する。極めて効率が悪いが、それも止むを得ない。それでも、当分は畑での耕作を止めようとは思わない。この土いじりは私の趣味と健康のために向いているだけではなく、退職して「毎日が日曜日」の私には自然に触れながら、畑の「一人遊び」は最適な人生体験だ。

在職中、本読みと物書きに多くの時間を割き、「一人

遊び」が出来る己が人生に無常の幸せを感じた。畑仕事の原稿を書いているのも「一人遊び」の延長だが、もともとエッセーの類を書くのは苦手の部類に属し、今でもそれは変わらない。これまで本誌に自らの畑仕事のエッセーを載せてもらって来たが、畑仕事は毎年の繰り返しのため、新たに書くことも無くなったし、読まされる読者も「またか」と思うに違いない。「何時、中止しようか」と考えないことはない。

時期外れの台風の來襲

八月になって、季節はずれの大型台風十一号と十二号が來襲した。その後、畑の土が泥濘、畑に入ることが出来なかった。しばらくして畑に行くと、ナス、ピーマン、シシトウなどの支柱が傾き、さらに生長したネギもまた無残に倒れていた。実ったとうもろこしと枝豆を収穫したが、時期を失したため、枯れてただの野菜のくずになってしまった。しかも水分を含んだ雑草はさらに逞しく茂っていた。とまれ、台風の爪痕を修復するのに、丸一日を要したため、最初の秋冬野菜の大根、ニンジン、小カブの種を蒔くことが出来なかった。しかも、五月上旬に植えたキュウリは最盛期を過ぎ、葉と蔓は枯れてしまった。新たに植えたキュウリの苗はなかなか生長してくれない。それもまた時期を逸したようだ。

トマトの支柱も傾いていた。本来、高温多湿の日本の夏はトマトの生育環境に適していない。毎年、苗を植えつけ、整枝せず、放任しているので、わき芽が伸び、茎や葉が繁茂した。藪のような状態のなかから、実った赤いトマトを収穫するのも厄介だ。しかも雨に当たると、果実は裂果してしまう。そのため、通常は畝の上に雨よけのシートをかぶせるが、大型の台風に見舞われると、シートが破れて、ヒラヒラと舞うことになるので、シートをかぶせないことにしている。さらに、大玉トマトの裂果を見ると、見た目が悪いし、食べても美味くない。そこで、もっぱらミニトマトを栽培することにしている。それでも、雨に当たると、裂果する。だが、熟した赤いミニトマトをもいで口にすると、最高に美味い。

大型台風は大量の雨を降らした。そのため、土中に大量の水分が含まれ、天候が回復すると、きゅうり、ナス、ピーマン、オクラ、シシトウなどの果菜類の果実を収穫することが出来るようになった。台風で傾いたネギを小椅子に座って、周囲の雑草を除草し、化成肥料を追肥し、スコップで土を寄せた。七月に苗を植えた根深ネギは軟白部が太くて長く生長した。収穫し残した別のネギにネギ坊主が生長した。そのネギを半分ほど切って、移植したが、ネギは十分に生長しなかった。今後、この二種類のネギはどのように生長するのか、その味覚はどうか、十月以降に収穫するまでの楽しみだ。

雑草との闘いで考えたこと

台風の後始末に追われ、雑草もますます繁茂した。小鎌で除草するには時間がかかり過ぎる。そこで、五、六月、本格的に夏草が茂る以前、耕耘機で耕した個所を再び耕耘機で雑草を刈ることにした。ところが、雑草が耕耘機のロータリーの爪に絡まり、その都度、運転を停止して、絡まった雑草を鋏で取り除き、再び耕耘機を操作した。それでも、雑草はしぶとく畑に刈り残され、完全に除草出來ていない。刈り残した雑草を草削り鍬か、鍬の一種のレーキで除草すればよいのだが、秋冬野菜の種を蒔くか、苗を植えるかする前に、土壌の酸度調整のために畑に石灰を蒔いたあと、さらに有機肥料を蒔いたあと、いずれ二回は耕耘機で耕すことになるから、除草は後回しにした。

夏草が生い茂る個所は草刈機で刈ることにした。雑草の根元から刈るため、草刈機の刃先を土のなかに入れて刈ることにした。ところが、土が乾いていたので、盛んに土煙をあげ、目の前が見えなくなった。肩に掛けた草刈機は重く、しかも急速回転する金属製の刃先に手足が触れると、大怪我をする。そのため、草刈機の操作には十分な注意が必要だ。とまれ、刈り残した雑草が多い。週一回の農作業では、それ以上、対応出来なかった。

草刈りの作業のあと、刈った草の処分が問題だが、数か所に集め、枯草を燃やし、カリ、燐酸などに富む草木灰として肥料に使用することにしている。ところが、枯草は炎天下でも、積み上げた除草の下は腐ってなかなか燃焼してくれない。たき火も大変厄介な作業だ。

私はただの「作男」

あとの雑草退治は、いずれも小鎌で処理することになる。苺畑の個所は茂ったエノコログサを除草しなければならない。親株のランナー（走り蔓）から子株や孫株を見つけたら、大事に越冬させて、来年の初春に移植し、大型連休の頃には成熟した真赤な苺の果実を堪能したい。サツマイモは黒いマルチフィルムを張って蔓苗を植えたが、雑草予防の黒いマルチの両脇の畝間に雑草が茂った。除草しながら、蔓返しをすることになる。昨年は小芋しか出来ず、生育に失敗した。今秋こそ立派な芋を収穫したいものだが、掘ってみないと分からない。サツマイモの葉と蔓が元気に成長していたが、試し掘りをして焼き芋にして食べた。ホクホクしていたが、サツマイモ特有の甘味に欠けていた。

さらに黒皮スイカの種と白皮の中玉カボチヤの種（サカタのタネ、商品名は雪化粧）を蒔いた個所に雑草が茂ったが、一個だけ成った。このカボチヤはスーパーの野菜売場ではほとんど見かけない。多分、高級料理店などで使われているのであろう。ホクホクした食感と品の良い甘味は最高だが、今年は何かの手違いで蔓だけ伸びて、

自給農家の安気と不安

私が週一回、一泊二日の予定（農繁期には二泊三日、農閑期には日帰り）で通う畑は、山梨県のいわゆる「郡内」に属する。JR中央線の高尾駅で乗り換え、最寄りの駅は最初の無人駅だが、三十分程で到着する。そこは農山村というよりも山狭村であるが、八王子、立川などは優に通勤圏である。だから、中学校か、高等学校を卒業すると、後継ぎは両親と同居しながら、市役所、郵便局、消防署、国鉄などに通勤し、主に現業部門で働き、定年退職後は年金で生活を支えながら、先祖伝来の畑で自給用の野菜を栽培している。

なかには、生産した野菜を商品として近くの農協経営の直売所へ出荷する農家もある。ただ、葉菜類であれば、商品として見映え良く整形し、サイズも均一にして出荷しなければ売れない。売り残れば、その翌日に直売所へ行き、引き取らなければならない。多くの農家は野菜の生産に励んでも、年金で十分に生活出来るので、生産した作物を商品として出荷することまでしない。自給用の耕作であれば、有機肥料や化成肥料の支出を考えると、スーパーの野菜売場で野菜などを買った方が安いと言う。年金生活で暮らす本人の本根なのかも知れない。

古い乳母車を押して畑に現れ、畑を這うようにして耕作していた高齢の老婆を見掛けたことがある。すぐ近く畑で仕事をしている多忙な村人は、手を貸すこともなか

実は成らなかった。カボチヤは雑草に負けたのか、受粉が上手くいかなかったのかも知れない。

とまれ、アジア・モンスーン地帯（亜熱帯・温帯）の長い日本列島では、稲作も畑作も雑草の除草が最大の作業である。雑草退治は、種蒔きや苗の植え付けとともに、大切な野良仕事であろう。ところが、週一回の一泊二日の野良仕事ではとても完全に除草することは出来ない。畑の「地主」の妻はただの「作男」の私に携帯電話で除草しろと厳命しただけで、この面倒な除草が終了すると考えているようにしか思えない。

自然に恵まれた耕地で健康と趣味のためにただの「作男」として野良仕事を遂行することで満足するのか、あるいは戦後の農地改革で「不在地主」の立場は大きく変わったが、なお、ただの「地主」の伝統的な野良仕事の提案に、「作男」が黙従するには耕作の経験則から言って、大いに疑問が残る。歴史的に「地主と作男」の認識の落差は意外に大きいことを感じた。改めて、日本史における「地主と小作人」の身分的な関係ではなく、「地主と作男」の身分的な落差を想像してみた。たとえ、「作男」が畑仕事で励んでも、その畑の「地主」の意向次第で中止せざるを得ないのである。もっとも「作男」の私は体力が衰え、野良仕事を継続するには困難な状況にある。

った（私は、老婆が畑にネギの苗を植え付けたあとに、残ったネギの苗を「持っていけ」と言われて、畑に植え付けたことがある）。その直後、その老婆は骨折して歩行困難になったというわさが流れ、畑に現れなくなった。ところが、老婆の跡継ぎであろうか、しばらくして、その畑に来て、夕刻までひとりで野良仕事に励んでいる。私は余所者だから、詳しい家庭の事情は分からない。とまれ、その畑は耕作放棄地、あるいは不作付け地にならず、耕作は継続されている。

過疎化の山狭村

この山狭村は小・中学校はすでに廃校となり、近辺に診療所さえなく、金融機関の支店もなければ、農協の支所は閉鎖された。またコンビニもないため、日常生活には大変不便だが、自家用車があれば、その不便は解消出来る。しかも住むには広い家があり、多分、住民税も固定資産税も安く、野菜は自給することが出来るなど都市と比べると、生活費ははるかに安くつく。それで、年金で生活が出来れば、なんら生活上の不安と不満はないはずである。ところが、一夏でも耕地に雑草を繁茂させたら、正常な耕地に戻すには、数年間の丁寧な草刈りを要とするという根強い経験則がある。だから、定年退職するまで、広い耕地に農作物を育てる意図がなくても、農用トラクターで耕し、一挙に除草し、不作付け地にしておき、自給用にのみ僅かに野菜を栽培している。

ところが、家の跡を継ぎ、結婚して、親と同居し、耕地を相続した。最大の不安は、成人した息子か、娘がその家に住むか、空き家にしてしまうのか、将来の目論見だろう。私は例外として、そこに日常的に定住しなければ、当然、耕地を貸地にしない限り、耕地は荒地になるだろう。都市僻遠の農山村に限らず、通勤可能な都市近郊の農山村でも、人口の自然減、若年層の流出、少子高齢化、耕作放棄による耕地の荒廃、空き家と廃屋の増加など、家と集落の継続危機が確実に進行している。農地を宅地に転用し、住宅を新築するケースもないではないが、それ以上に空き家が目立ち、その空き家を売りたいというケースをよく耳にする。

農業経済学よりも農村社会学は面白い

私は農山村の一隅で週一の畑仕事をしながら、たえず農山村の現状や将来はどうなのかと、しきりに考えさせられる。そのため、農政学者や農業経済学者が農山村の危機的状況をどのように考察しているのか、彼らの啓蒙的な著作をよく読んだ。ところが、直ぐに厭きて放り出してしまった。私にはこの方面の基礎知識に欠けることにその原因の一つがあるのだろう。農政学や農業経済学はあくまでも実践の学問であろう。だが、農業従事者に実践的にどれほど役に立っているのであろうか、大いに疑

問だった。

ただ、研究のために頻繁に農村を訪れ、農民に農業の現状を静かに聞き、ネオ農本主義者と批判された異端の農学者の守田志郎の一連の著作は、厭きずに、流し読みをした。そこで、彼の『対話学習　日本の農耕』（一九七九年、農山村漁村文化協会）をとくに読み、検討したことがある（『まんじ』一二九号、「目耕録〈その十一〉」）。

要するに、守田は日本の農業は自然との循環と継承を基礎に、小規模経営のもとで稲作と畑作の輪作、役牛や豚を飼育し、鶏に卵を産ませて、その糞尿を主に堆肥を作って肥料にする。守田は稲作、畑作、畜産による、単一の農畜産物の選択的拡大を提唱した農業基本法農政を批判した。

主流派と思われる農業経済学者の著書を瞥見すると、『農林業センサス』などのいわゆる官庁統計をもとに、パソコンで時系列に整理したり、地域間の相違を比較してその特性を明らかにしようとしている。そのことは、たしかに統計的な分析として説得的だが、農業も農村も、そして「食」もあくまでも「ヒトビト」が主体である。その「ヒトビト」がどのように合理的、ないし非合理的（とくに画一的な官庁、農協などの政策・経営と指導によって）な選択的に行為した結果が、もろもろの統計上の数値に表れるのであろう。

その点、農村社会学は官庁統計を無視することはないが、農村の現場で「ヒトビト」に直接にインタビューしたり、さらに農村調査の一定の目的から「作業仮説」を設定し、手作りの調査票を作成し、学生や研究生を調査員として動員し、「ヒトビト」（調査対象者）に配布する。調査票の回収のさいには、調査員が直接面接し、回収した調査票を統計的に分析するが、とくに自由回答欄に記載された各票の自由回答は調査の大切なヒントになる。農村調査を分析して、農村の「ヒトビト」のビビッドな意識と行動は、一つの試論に過ぎないとはいえ、その地域の特性を考慮し、モノグラフとして調査結果を公表する。

イエとムラの変容

かつて農村社会学、あるいは学際的な村落研究はイエ（家）とムラ（村）の解明を中心に、同族団やマキ、講と村組、通婚圏や伝統的な儀礼などなどが在野の研究者を含めて、盛んに研究された。日本のムラを近隣の相互扶助に基づく家連合としての「村落共同体」と規定し、その共同体的・封建的な規制がときに問題とされたが、農地改革や高度経済成長以降は農村をめぐる変容によって村落共同体の研究は大いに変容した。

徳野貞雄の『農村の幸せ、都市の幸せ』でもムラを単に「村落共同体」と考えるのではなく、「機能的共同体」と規定し、ムラは「法人的性格」を持ち、例えば、農道

の整備や集会施設の建設などの共同の目標に向かって機能的に活動すると言うのである。マチの町内会にたいして、ムラではイエを構成単位として地域的・伝統的な組織体が「部落会」であろう。「部落会」はムラの神社の祭礼の開催、寺院の檀徒役、運動会の主催、公民館の運営など自治的活動とともに、地方自治体の末端の行政の補助的な組織であって、必ずしも法律的に認可された「法人的性格」を備えていない。

危うい社会学の分析と認識

「社会の構造と機能」とは、社会学史はもとより、社会学理論、さらに代表的な農村社会学、都市社会学、家族社会学などの分科社会学の主たるテーマである。農村社会学者の徳野は日本のムラを「機能的（村落）共同体」と強調したが、共同体のシステムとしての「構造」を捨象してしまった。農村社会学では、衰えたとしても、依然としてイエおよびムラはそれぞれの目的を達成するために、存続する全体社会と言うシステムに開かれた下位システムである。それぞれの要素の「働き」および作用が機能である。「機能的共同体」とは、特定の機能を遂行するために計画的・意図的に形成された集団＝アソシエーション（結社）であって、所与の共同生活の諸条件、あるいは特定の地域性と共同感情を持つコミュニティ（共同体）とは異なる。だから、徳野の言う「機能的共同体」とは、農村社会学としても奇妙な概念である。

「村落共同体」は生産と生活を基軸にした強い社会的統一性を持つ「部落連合」として存続しているが、戦後の農地改革をはじめ高度経済成長以降、ムラは兼業化と脱農化、さらに非農家の混住化地域となって、伝統的な村落共同体的秩序は変容した。ところが、徳野は「企業組織の原型はムラの機能的共同体」だ、「ムラの行動原理と精神が、日本のサラリーマンの原型を作ってきた」と指摘している（四六―七頁）。徳野は個人の自由な生活を優先する「個人主義」にたいして、個人を包摂する集団重視の「集団主義」、あるいは経営家族主義として表徴される「日本的経営」をイメージしているのであろうが、そのことと「ムラの機能的共同体」や「ムラの行動原理と精神」と必ずしも無関係ではないが、両者の直接的な関係性を主張することはあまりにも短絡的である。

だが、徳野の「水虫から見た日本」の記述は面白い。明治政府は近代化・産業化（私は「産業化」というよりも、「工業化」と言いたい）のために「脱亜入欧」を進め、導入した欧米の生活スタイルの結果、サラリーマンは湿気の多い夏でもネクタイで首を締め、袖をボタンで留め、しかもズボンをはき、足に靴下をはいている。そのため、湿度の高い夏に水虫になったというのである。しかも日本の夏向きの木造建築物は、欧米の冬型のモルタルか、コンクリート仕様の密閉式になった。夏は室内

で電気を使って冷房して過ごす。そのため、とくに女性は冷房病で体調を崩すと指摘している。農村社会学者の徳野は「ならなくてもよい水虫になり、なぜ〔女性は冷房病で〕体調を崩さなければならないのか」と余計な心配をする（一三一頁）。それは日本の近代化・産業化の結果だろうと推測しているが、たしかに読んで面白い推測だが、農村社会学者として真面目に言及に値するかどうか、大いに疑問である。

すでに触れたが、私はこの猛暑の畑で軽い熱中症になった。畑で鍬を振って、土を掘ると、直ぐくたびれて中止し、日陰で小椅子に座り、休息した。そのうち、軽い頭痛がし、眩暈がするようになった。これはヤバイと思い、歩いて家に戻って、野良着を脱ぎ、しばらく水風呂に入り、扇風機にスイッチを入れ、居間の畳の上に大の字に寝ころんだ。吹き込んだ風と、扇風機の風は涼しいと感じたが、起き上がると、なぜか蒸し暑いなと感じ、再び畳の上に寝転んで休養することにした。この旧式の家はとくに夏の蒸し暑さを考えて作られた建物である。

だが、ユニークな発想と考察

私は、現代の日本はすでに「全般的都市化の時代」だと思う。つまり、都市においてはゴミや道路などの専門的な処理への依存、しかも隣近所を知らず、インパーソナルな一時的・断片的な近隣関係、職場と住宅の分離、合理主義と個人主義など「都市的生活様式」が支配的である。この種の「都市的生活様式」は都市においてはますます深化し、農村にも浸透した。農村の伝統性、地域性、統一性は一応に衰退し、テレビ（とくにコマーシャリズム）や雑誌（とくに若者向けのファッション雑誌）などがそれを促進している。

とはいえ、都市地域と都市住民が着増し、農産物について言えば、生活者は農産物の生産者と消費者に分断した。消費者は農産物をただの「商品」として安く、かつ見栄えの良いものを購入する。そこで、生産者は一定の規格に適合するように収穫し、安定的に定量を出荷するように強要されるだけではなく、産地間の競争を強要される。さらに諸外国から安価な農産物が輸入されるようになって、次第に食料自給率は低下した。とくに牛、豚、鶏の飼料となる、とうもろこし、大豆などの穀物自給率は低下し、三〇％以下である。

徳野は「外材和食」という奇妙な造語で、「今の日本人が食べている和食のほとんどが、外材を使っています」と指摘している。ちなみに、味噌、醤油、豆腐、油揚げなどは大豆製品だが、その食用大豆の九十％以上が外国からの輸入品である。小麦粉もまたそのほとんどは輸入品である。「和食」と言っても、その食材は、例えば、ジャガイモ、ニンジン、玉ねぎなどを除き、そのほとんどが輸入品である。それが事実であるならば、私は「外材和食」だけではなく、「外材洋食」、さらに「外材中華」などもそう言える。しかも、徳野によれば、食のあり方が複雑怪奇になり、農家にとって「農産物」が、行政にとっては「食糧」となり、流通業者にとっては「商品」となり、そして消費者には「食品」である。つまり、今や「食と農」は概念的に異なり、大混乱していると指摘している。

最後に、徳野のユニークで、概略的な「暮らしの生活社会指標」を簡単に紹介する。「都市のサラリーマン」（以下、「サラリーマン」と略記）と「農村の安定兼業農家の人」（以下、「兼業農家」と略記）を比較し、両者の生活社会指標を作成した。「サラリーマン」（とくに大企業のサラリーマン）は「所得」が高く、さらに「教育／学歴」は有利である。ところが、「家族／世帯員数」や「七十歳時点の仕事」などの「地域の人間関係資源」は「兼業農家」が有利である。さらに「家屋／部屋数」や「自然／環境」などの「地域が固有にもつ空間資源」はやはり「兼業農家」の方が恵まれている。このように、徳野は「兼業農家」に軍配を挙げている。一般に、農村が都市よりも「暮らしの生活社会指標」が恵まれているならば、なぜ、人口が膨張した都市から有利な農村へ人口移動しないのであろうか。

「食と農」の理想と現実

都市のサラリーマンはたしかに土遊びの「農」に憧れているであろう。その擬似体験として、使用料を払って僅か一坪半程度の市民農園で野菜の種を蒔いたり、ホームセンターで苗を購入し、さらにガラス繊維強化プラスチックのダンポールという支柱を半円形にして、その上に長繊維不織布のシートを掛け、無農薬のトンネル栽培で、収穫の喜びを享受している。その合間に利用者同士で盛んに談話しているのは、サラリーマンの業績至上主義の職場とは異なった体験に違いない。だが、露地栽培ではなく、費用のかかるトンネル栽培までして、利用者同士には直接の利害関係はないが、収穫という業績至上主義を争っているとしか思えない。

今、地方公務員、郵便局員、農協職員なら別だが（もっとも、地方自治体は財政難のために新たに正規職員を採用しない。農協もまた規模を縮小して新たに正規職員を採用しない）、この経済の縮小時代に農村や自動車で通勤出来るような場所に、果たして安定した企業や職場に就労することが出来るのであろうか。しかも一般企業は競争で生き残るために、早朝出勤、残業をすることは当然であろう。そこで、例え、年功序列で部課長の役職者にでもなれば、業績至上主義と職員の業務の管理のため、精神的・肉体的に疲労は蓄積されるだけではなく、早朝五時の電車に乗り、夜遅く、家で遅い夕食と、ただ休息と寝るために帰宅するだけであろう。私が週一で上

遊びをしている畑の西隣の畑の耕作者は、たしかに農村の安定兼業農家だが、休日か、非番の日に自家用車で現れ、ガソリンを持参し、畑に放置している農用トラクターでさっさと除草し、作付けすることなく、不作付け地のままにして、ガソリン代がバカにならないと言い残して、さっさと家に帰る。

一人でする土遊び

徳野は「農」と「農業」とは異なると指摘している。私の場合、「農」によって自然の景観を堪能し、四季の変化を実感出来る農山村で、それぞれ自給用の農産物の生育する適期を考え、しかも晴雨の天気を予測しながら耕作する。趣味と健康（さらに収穫という実益）のために、身体的に無理をしても「一人で土遊び」をすることは、世俗の生活の邪念を払拭することが出来、私には人生最高の生活体験に違いない。すでに村人とも親しくなり、野良仕事をする村人と農道や畑で立ち話をするようになり、それぞれの村人の性格や農法も理解するようになった。

今秋は親しい村人から白菜の苗二十本以上をもらい、早速、畑に植えた。またかき菜（東京・多摩では野良坊菜と称している。葉菜類が乏しい時期には貴重なビタミン源となる）の余った苗十五本をもらった。白菜やかき菜の苗は、晴天が続き、根付くかどうか分からない。早天の慈雨を大いに期待している。そして、私が植えた四作の里芋の葉と茎は逞しく生長し、農道で村人に「立派な里芋が出来そうですね」と声を掛けられるようになった。だが、私はこの農山村に定住しようとは思わない。都市で生まれ、都市で育ち、都市の利便性とともに、都市の文化と生活様式にあまりにも慣れてしまった。もはや高齢となり、改めて農村に定住するのは誠に煩わしい。

「毎日が日曜日」の私は週一回一泊二日、「農」に励み、それ以外の日々を休息と本読み・物書きの「一人遊び」で過ごすことは、たしかに今日風に「農村の幸せ、都市の幸せ」を享受していると信じている。

（二〇一四年九月二二日、擱筆）

殉教（五）

鍋屋次郎

関白秀吉が、誕生した秀頼のことで夢中になっている間、都では表向き何事もなく過ぎていた。

右近は客将として招かれたとき、利家から三万石の知行地として与えられた能登の末吉城に向かった。

末吉城は応仁の乱後に能登に戻った畠山義続（よしつぐ）が、文明年間（一四七〇年代）に能登の防衛のために、七尾城出城として交通要衝のこの地に築城したもので、前田利家が天正九年（一五六一）に織田信長より能登一国を与えられたとき、前田家のものとなった。

右近はこの城の留守居役には、篠田伊織ほか数人を残し、年貢の受け取りや知行地の治安その他一切を従来からの地元代官に任せていた。

右近は城内書院で机に向かい、もう二年前になるオルガンチーノ師の言葉を思い出していた。それはローマのシスト教皇からの感状を頂いたとき、オルガンチーノ師は

「シスト教皇様は、右近殿が再度大名として復活し、日本のキリシタンの大旦那として活躍されることを期待しています。一昨日の関白殿の右近殿に対するご様子では、勘気は間もなく解けると思います。その折は是非、関白殿の政治に関与することで、この国にキリシタン宣教を一層盛んにして欲しい」

という期待を寄せられた。

右近はその時、シスト五世の感状を頂いたときでもあり、また勘気が許されていない状況でもあることから、具体的な返事はしていなかった。

その後右近は、仮に関白の勘気が解けた後、どこかの大名として再び関白に仕えることは、自分の信仰の良心

が許さない。関白の政治は他者を顧みることなく、すべて社会的善悪を超越した自己本位な独善的・独裁的なものであり、とてもついて行くことはできない。まして今回の朝鮮出兵などは納得できるものではない。あの時名護屋まで出かけたのも、利家の

「関白は名護屋で勘気を許すと言っている」

の言葉で名護屋まで出かけたに過ぎない。徳川家と前田家は国内にいて国内政治の補佐に任じられていたから、朝鮮に出兵することはない。これからの自分は、政治がどのように動いて行こうとも、どの道が前田家にとって最良の道であるかを見極めて行くことが、自分の役割だ、と自分なりに結論したことを思い出しながら再確認をしていた。

この末吉城は、日本海沿いに加賀から能登に通じる主要道路を抑える場所にあるが、右近には、七尾城下にある法華宗の古刹、揚柳山本行寺の別棟にある茶室「きく亭」が気に入っていた。

この茶室は、「茶の湯」で名高い丸山梅雪が京の室町文化、王朝文化を能登に伝えるため、永正十年（一五一三）に寺の建立と同時に建てたもので、それにより風雅な「茶の世界」が能登に出現した。

茶室内部は右に床の間のついた書院があり、左に八畳の広間座敷があって、茶会はその広間で行われていた。

茶室につながる露地には、石灯籠を囲むように、左右と後ろに自然の岩が並べられ、背後に背丈はあまり大きくない老木が植えられ、それらにより茶室「きく亭」は落ち着きと優雅さを漂わせていた。

利休以前に作られたこの茶室内部は、右近の好みとは違っていたが、武士茶道から考えれば一度に十人くらいでの茶懐石ができたほうが、武士の世界にはあっていると思っていた。

天正九年（一五八一）、前田家が能登を領有したときには、利家が七尾城に入り、「きく亭」を見て、「これからの武士の嗜みは茶道にあり」と、上級家臣を対象に、重陽の節句茶会など、積極的に茶会を催していた。

この茶室を、表向きは茶会と称して密議の場所としても使うことがあった。

右近は利家の了解のもとで七尾城城代家老前田利好に連絡して、この茶室を使わせてもらった。また、城代家老や住職を客に招いて、内々の茶会も行っていた。しかし、右近はこの茶室内で、これからどのような方法でキリシタンの教えを地域に弘めて行き、過去の高槻のようなキリシタン世界を作り上げて行くかを、祈りながら考えていた。

文禄五年（一五九五）九月、二年間病床にあった父ダリヨを天に送り、その後半年経ってから、父の生前の希望による長崎のキリシタン墓地での葬儀は、長崎在住の多くの宣教師と信徒の参列を得て、父とのお別れが盛大にできたことを思い出し、今、相談できる父のいない寂しさを感じていた。信仰的には、右近よりも一歩先を見つめて歩いていた父の偉大さを改めて感じていた。

父の生前、そんなに相談したことがあったかどうか思い出せないが、右近が重大な決心をした後に、それを父に話すと、父が

「うん、そうだな、そうしたら」

と一言答えてくれるだけで、右近は大きな自信と安心感に満たされていた自分を、今、懐かしく感じていた。

末吉城に戻ると、京にいる細川忠興から一通の書状が届いていた。開けると、スペイン船座礁問題からキリシタン摘発の動きがある、という連絡であった。

事情が良くわからない右近は、先ず金沢に戻ったが、利家も利長も京に行っていて不在だったので、自宅に一泊したのみで京に急いだ。

京に着いた右近が早速調べると、事情は次のとおりであった。

「文禄六年（一五九六）九月、スペイン船が台風に遭い土佐の海岸の浅瀬に乗り上げ、多くの荷物が浅瀬に散乱した。この船はマニラからメキシコへ向かうスペインの貿易船サンフェリーベ号であった。船員の話を聞くと、スペインでは最初に宣教師を上陸させてキリスト教の教えを弘め、弘まった所に軍隊を送りその国を征服する、と言っていた。長宗我部は驚いて早舟で京都の奉行増田右衛門尉に知らせた。スペイン船の数名は関白への献上品を携えて京に向かったが、増田はそれを阻止して、自らは積載品没収のため浦戸に向かった。関白は全ての積載品の京への到着を確認した上で、船員の日本征服の話を罪状として、マニラから来ている宣教師とその信者を捉える命令を出しており、奉行所は捕縛に動き出していた」

これを知った右近は「殉教のときが来た」との思いで、大切にしていた茶器を一つ持って、利家に別れの挨拶に行った。利家は

「このことは右近殿には関係ない。京でのキリシタン名簿には右近殿の名前はなく、フランシスコ会のマニラからきている宣教師とその信徒が対象である。早まりなさんな」

といわれ、引き下がらざるを得なかった。

当初、三成の所に届けられてきた京のキリシタン名簿

の筆頭に高山右近の名前が書かれており、三成は
「高山右近は関白殿下がすでにお許しになっている御仁だ。取締りの対象にはならない」
と消させ、利家がキリシタン捕縛についてそれとなく聞くと、三成は
「今回はマニラのフランシスコ会宣教師と、その筋でキリシタンになった信徒を対象としているので、高山右近は対象にはならない」
との回答を聞き安心していた。

その後、京で捕えられた二十六人が、長崎に送られて、西坂で殉教したことの知らせが流れてきた。

それから暫くして
「関白殿下御病気」
の噂が流れ、右近は確かめようにも、利家は秀頼の傅役として大阪城内にいることが多く、会うことができなかった。

翌慶長三年（一九九八）夏の気配が感じられるようになった五月のある日、京に設けた右近の私邸に、細川忠興から一通の書状が届いた。文面は茶会の案内であった。

右近が京の細川邸を訪ねると、早速茶室に案内され、忠興の点前で一通りの茶事作法が終わったとき

「まだ、利家殿にそこまで突っ込んで聞いてはいないが、前田家の大勢としては戦いを避けて通りたいと考えている。しかし、それが許されなくなった場合、どうするか。家の存続が可能かどうかの判断になると思う。どっちにしても一方の旗頭にはならないだろう」

私邸に戻った右近は、細川忠興の情報を、利家がどこまで知っているか聞きたかったが、利家は秀頼の傅役で大阪城に詰めており話はできない。前田家の京都屋敷で利長に会い、細川忠興の話を要約して伝えた。この頃、利家の健康状態がやや心配な日が続いていたので、利長も、関白をめぐる政局の変化には神経をとがらせていた。

右近の話を聞いて
「そうか。一戦は避けられないか。その前に、徳川は豊臣方諸大名の分裂を画して、徳川として最も侮りがたい前田家に難癖をつけるか、または戦を挑んでくることはないだろうか」
の問に、右近は
「仰せのことはあり得ると考えます。大殿はどのようにお考えになられるかは分かりませんが、徳川に対しても当面は毅然たる態度で臨みましょう。ただし、徳川相手の戦は避けるように考えましょう」
の答えに、利長は大きく頷いた。

「右近殿、関白の死後、一戦は避けられそうもない状況になってきた。石田三成を筆頭に前田玄以・増田長盛らが、豊臣政権を維持するための行政組織を設けようとしている。これは徳川家康が承知する訳がない」
「三成側ではそこまで進んでいるのか」
「この行政組織設置を関白の遺言にして、正当化しようとしている」
「どのように？」
「関白はどのようなことがあろうと秀頼様が成人されるまで、徳川・前田・毛利などの大大名の下に、石田三成・前田玄以・増田長盛などを行政実務担当として、豊臣家を支えて行く集団を作りたいと思っている」
「それは三成の入れ知恵か」
「三成一人ではどうにもならないので、集団で徳川を牽制してゆく魂胆であろう。だが、関白が亡くなってからは、家康は三成潰しに出ることは火を見るより明らかだと思う。理由はいか様にも付けることはできる」
「細川殿、貴公はどのように動かれる」
「徳川・石田の戦は避けられない。これから天下を治めて行くことのできる大名はやはり徳川しかいないであろう。自分は当面高見の見物を決め込むが、いざとなれば双方から声がかかるだろうが、内々は徳川と組むことが細川家の維持につながると思っている。前田殿はどのようにお考えか」

それから二か月半ばに、関白が徳川家康・前田利家・宇喜多秀家・毛利輝元・小早川隆景を大阪城に呼び寄せた。そこに浅野長政・石田三成・前田玄以・長束正家・増田長盛も呼び寄せられ、全員が関白の枕頭に集められ
「予の亡きあとは、五人の大老の合議により政を行って豊臣家を支え、五人の奉行はその指示に基づき政務を司ること。皆には秀頼が成人するまで、くれぐれも秀頼のことを頼みます」
と言い、五大老・五奉行は一人ずつ誓詞をその場で書いて差し出した。

ある朝、まだ暗いうちに京都での右近の私邸の門を激しく叩く音に目覚めた。細川忠興の使いで、
「昨日夕方、関白殿下が亡くなった。明日、秀頼君の傅役前田利家殿が筆頭大老の徳川殿に連絡して、徳川殿から関白の死を公にすることとなった模様」
と教えてくれた。

右近も朝早く私邸を出て、このことを利長に伝えた。
利長の所には、昨夜遅く大阪城にいる利家から、早馬で知らせが入っていて、右近に来てもらおうとしていたところであった。
利長が今最も気にしているのは父利家の健康であっ

た。

それから半年経たないうちに、心配していた利家危篤の知らせに、利長と筆頭家老の横山長知が大阪城に駆けつけ、利家は二人の見守る中で息を引き取った。

この時のために、既に二か月前に利長が家督を相続し、その時に五大老の地位も引き継いでいたが、秀頼君の傅役は利家個人に対する依頼であったことから、父の死と同時に利長が引き継いだ。

利長は加賀での父の葬儀が終わると、領国内のことは全て家老に任せ、父の遺言もあったことから五大老の一人としての職務と、秀頼君の傅役として淀城内に詰めていた。

それから三か月後、五大老間、また五奉行間の確執もあり、家康は利長に対し

「亡き利家殿の家督を引き継いでから、お父上の御葬儀以外には領国に帰っていないのは大変気になることであろう。どうぞ遠慮なく帰国されたい」

と、むしろ帰れと言わんばかりに強引にすすめられ、金沢に戻った。

慶長四年（一五九九）八月、金沢に戻っている利長より、右近に対し「至急登城せよ」の命令があり、登城すると筆頭家老横山長知他数名の家老が評議の間に控えている。右近もその中に座った。

暫くすると利長が入室し、一同は平伏して利長の次の声を待った。

「登城ご苦労。用向きは今朝早く宇喜多秀家殿から至急の知らせがあり、内容は徳川が前田征討の準備をしているとのことだ。我が前田家を討つ理由は何も書いてない。宇喜多秀家殿は皆も知る通り、予の姉が嫁いでいる親しい親戚だ。徳川の極秘情報を知らせてくれたもので虚報ではないと信ずる」

ここまで利長が言うと、筆頭家老の横山が

「殿、早速戦支度も考えなければなりませんが、先ずはこの横山が徳川家に出向いて、徳川家が何を考えているのか率直に尋ねてまいりましょう」

他の家老からは

「横山殿、そんな弱腰では駄目だ。戦支度をして、一挙に徳川に泡を吹かせましょう」

ここからは次々と勇ましい意見が飛び出していた。そこに利長から

「高山殿、貴殿はどうして徳川がこの様な態度に出てきたのか、お考えをお聞きしたい」

の声に、右近は座り直してから

「徳川は真面（まとも）に前田を討つつもりはないと思います。徳川の本心は、徳川が天下を狙って石田三成や毛利と一戦をするとき、前田家が豊臣家との関係からそちらに加担されるのをいかに防ぐかにあると考えます。つまり、豊臣側に加担すると思われる陣営の分断作戦かと思います」

「成程、そういう見方もあるな。ではいかがいたしたらよいか」

の利長の声に

「はい、先ほど横山家老が言われました通り、先ずは徳川家に赴き、家康と直談判をして、相手の出方を見ることだと思います」

「そうか、皆、その意見で行こうと思うがどうか」

と全員の賛同を取ってから

「横山、徳川家に連絡して行ってきてくれ。連絡相手は今を時めく本多正信が良かろう。そして高山殿、貴殿も横山と一緒に行っていただきたい」

この後、利長は横山家老と右近を別室に招き

「高山殿、どのような戦略をお持ちか」

「戦略は特にありません。徳川も当家を完全に敵に回す愚かなことはしないと思います。でも、ギリギリの外交的攻防は避けられないと思います。今、徳川に加担する勢力は伊達・北条の東日本勢に加えて、反三成から加藤清正・福島正則・黒田長政・藤堂高虎などで、徳川が必勝するには十分ではありません。しかし、これから天下を治めて行く人物は徳川殿をおいて他にないと思います。前田家は徳川から常に一目置かれる位置にいて、徳川から信頼される立場をとることこそ、前田家が幾久しく存続する道かと考えます」

「具体的な戦略は」

「はい、まだお若いですが、ご子息利常様の御正室に、秀忠の次女珠姫の御輿入れをお願いしたいと思います」

「喧嘩の相手に人質を要求するようなものではないか。そんなに上手く行くと思うか」

「いや、それは前田家として最終的にそうなればよいと思っています。前田家が徳川に反しない証しとして、逆に人質を要求してくるかもしれません。先ずは相手の出方を見ましょう」

横山家老が在京の徳川家に打診したところ、「横山家老が一人で来ること。高山右近は来るに及ばず」ということで、横山家老が単身で乗り込んだ。

本多正信は、徳川の前田征討理由については

「利長殿が金沢へ戻り、昨年（慶長四年）暮れから堀の掘削と大手門一帯の増築工事を始めたと聞く。これはそもそも戦準備ではないのか」

と高飛車に出てきたが、横山は

「何を仰せられる。何時かはやらなければと考えていた前田家の長年の計画の一つで、たまたま築城の名手、高山右近殿にお出で頂いているので始めたこと。これを徳川殿に対する戦準備とは、難癖ではなかろうか」

と、一歩も引かない交渉が続いた。

最終的には、本多正信も徳川・前田が手を握ることで天下は安泰になる。前田家が徳川に反しない証しとして、利長の生母芳春院の江戸生活を要求してきた。横山家老は

「それは人質ということか。それでは前田家が徳川に屈したことになる」

といったが、本多正信は

「決して人質という考えで言っているのではない。徳川・前田両家の和の証しと思っていただきたい」

と、当初の半ば喧嘩腰の姿勢から大分軟化してきた。

横山は一存では返事ができない旨説明して、一旦金沢に戻り、利長に報告した。それを聞いた芳春院は

「今の時期、またこれからも徳川とは争ってはならない。自分が江戸に行くから、それで徳川との和を整えよ」

と、利長と横山に毅然とした態度で、命令調に言った。

ここで利長は横山に、かねて右近が提案していた徳川秀忠の次女珠姫を、息子利常の嫁としてもらうことを条件に出せ。その答えにより徳川の腹の底が読める。相手には条件と取られないように話せ、と指示した。

横山家老は再び京の徳川屋敷に本多正信を訪ね

「芳春院様の江戸下向を承知します。下向の時期と。江戸のどの辺に居を構えるかは、追ってご相談させていただきたい」

これを聞いた本多正信は、前田家の姿勢に安堵した。更に横山は

「一つお願いがございます」

「願いとは何事か、ご遠慮なく申されよ」

「はい、我が殿の御嫡男利常殿は六歳になられます。徳川秀忠殿の次女であらせられる珠姫様を御正室としてお迎えさせていただきたくお願い申し上げます。それにより、徳川家と前田家は幾久しく繁栄してゆくことができると存じます。我が殿も是非にと申しております」

「して、お輿入れ時期は」

「はい、早い方がよろしいかと。明年春にはいかがでしょうか」

本多正信はしばし考えている様子であったが、この席では断らなかった。横山は更に

「お受け頂ければ、我が殿が徳川様に改めてご挨拶にお伺いいたします」

と続けた。

本多正信がこのことを家康に報告すると

「そうか、前田は徳川方になったか。良かろう。直ぐ秀忠に早馬を出せ」

と指示した。

利長は全てを芳春院に報告して了解を得たときに、この一連の解決は、芳春院の前田家を思う一念の決断と、更には右近の情勢の読みの深さからの提案であることを芳春院に話した。芳春院は

「利長殿、今は貴方が前田家の当主ですが、心のあり方は、高山右近殿の常に謙虚な姿勢と生活態度を、自らの目標にするといいですね。できればこの私も、利休居士の茶の精神である「一期一会」の心をも併せ持って、その上で人に接したい。高山右近殿はまさにこの二つを併せ持ったお人です。以前、キリシタンの守るべき十四箇条の慈悲の所作（注①）を聞きましたが、あれを少しでも自分のものとすることができればと思います。許されるのであれば、私も今からでもキリシタンになりたいくらいです」

「母上に江戸住まいをしていただくのは、誠に心苦しい次第です。お許しください。召使など一緒に連れて行きたいと思う者は、どうぞご自由にお連れください。また、お住まいの警備は別に手配させていただきます」

（注①）まんじ一三二号　一四一頁　参照

慶長四年（一五九九）十一月、本多正信と横山長知が三度目の会談を行い、来春、芳春院の江戸下向と、珠姫の前田家への輿入れが決まった。

翌慶長五年（一六〇〇）正月、前田利長は、秀頼への年賀挨拶のため大阪城に行った帰り、伏見城にいる徳川家康を訪ね、年賀挨拶を兼ねて珠姫の利常への輿入れのお礼を言った。

慶長八年（一六〇三）、関ヶ原の戦いも二年前に終わり、前田家は徳川方に組して戦い、四十万石の加増を得て、百二十万石を領有することとなった。前田家の中で、徳川との縁を作り上げる右近の戦略と、それを実行した横山長知の存在価値は高まっていた。

そんなある日、右近邸に筆頭家老横山長知と、長男康玄の二人がやってきた。

横山長知は挨拶の後

「高山殿、突然のお願いではありますが、ご息女ルチア様を、息子康玄の正室にお願いできないでしょうか。このことは殿様にも申し上げ、良き縁ではないかとお認め

頂きました。いかがでござろうか」

との申し出に驚いた右近は

「いや、驚きました。娘ルチアを横山家の御嫡男の嫁にとは。誠にありがたい話ではありますが、当家はキリシタン。一旦は関白殿下から追放になった身、また、どのようになるか分からない身の上です。高山家の娘が横山家に嫁ぐことで、将来横山家にご迷惑をおかけすることも考えられます。そんなことで、有難くお受けします、と申し上げられません」

「高山殿、我々は高山殿始めご家族全員がキリシタンであることは承知の上で、そのお人柄たるやこの金沢では並ぶものはないと思っております。また、康玄から聞けば、キリシタンの集いでルチア様と康玄は親しく口をきいている様子で、康玄はルチア様との結婚を切に望んでいます。ルチア様が横山家にお越しになることにより、高山家の素晴らしい血統が横山家にも入ることになります。是非ご承引いただきたくお願い申し上げます」

「横山殿、一旦は関白殿下から死以上につらい追放の刑を受けた身です。まだ、関白殿下の生前、スペイン船とのトラブルから、キリシタン二十六名が殉教しました。この先、何があっても高山一族は殉教を覚悟しています。また、一面ではそれを望んでもいます。お話は有難く聞かせていただきました。それでもお望みか、ご再考の上お越し願えませんか」

ここまでの右近の話で、その日横山親子は帰ったが、二日後の午前に再び右近邸を訪ね、横山長知は

「高山殿、過日は高山殿のキリシタンとしての御決意のほどは伺いました。帰宅して、息子康玄や家内と三人で高山殿のお話と御決意を前提にして話し合った結果、ここに再度、ルチア様を康玄の嫁としていただきたくお願いに上がりました」

の横山家老の言葉が終わると同時に、康玄も右近の前に平伏した。

暫く腕を組んで考えていた右近は

「そこまでの仰せ、有難くお受けさせていただきます。結婚の儀式その他すべてキリシタンの流儀でやらせていただきたいのですが、それはご了承いただけますか」

「はい。康玄は横山家の嫡男ということから洗礼こそ受けていませんが、心のうちはすべてキリシタンを受け入れています。従って高山殿の今のお申し出はお受けします。良しなに願います」

「では、式の日取りその他はこれから準備して相談することとして、殿への事前報告は横山殿に日程を決めて頂いて、ご一緒に報告に伺いたいと存じます」

この後は和やかな歓談の後、横山父子は帰って行った。

それから二か月後、横山家を会場としてキリシタン式で行われた結婚式には、前田利長を始め前田家重役方が揃って出席して盛大に行われた。丁度、能登地方のキリシタンを訪問していたロドリゲス神父が結婚式を司式した。

右近はこの結婚式の後、自宅の茶室で一人、娘ルチアの結婚がキリシタン式でできたことをデウスに感謝するとともに、「キリシタン」そのものが、この加賀の国でよそ者ではなく、身内として受け入れられたことが嬉しく、感謝の祈りをささげていた。

丁度この時、右近のただ一つの願い「耶蘇寺の一寺建立」が昨年、金沢城石川門から出て、左に行った紺屋坂に建築を許可され、右近の設計により工事に着手していた。右近は大きな礼拝堂（ミサを行う）、神父が告解を聞く小部屋、少人数が集まる小集会室、神父（司祭）室、修道士室、事務室、キリシタン祭祀用具とその保管庫、茶室などの配置を紙に描き、大工に注文していた。また、建物の正面はどうあるべきかなど、京都の南蛮寺を何度も見に行っていた。

さらに右近は、この寺に常駐して、信徒の教育や相談に乗りながら、前田領である加賀・能登・越中三か国内を宣教する神父と修道士の派遣をオルガンチーノ師に依頼していた。と同時に、宗教用祭祀用具の調達も依頼していた。

続く

つれづれの源氏物語

第四回　青年時代そのⅡ
―若紫の巻より葵の巻まで―

小田紘一郎

この一八才から二八才までのおよそ一〇年の光源氏の人生は、まさに激動ということに尽き、源氏物語にとっても極めて重要な内容を持っているものである。具体的には、若紫（生涯の妻）との出会い、藤壺との密事、六条御息所との別れ、須磨流摘等々様々な重要な出来事が起きている。読んでいて興味がわくことが多々あり、実に面白いのである。

それらの事態をこれから二回に分けて記述していくこととなるが、そもそも分けるのは、分量が多いからであり、内容としては一つの流れとしてつかまえる必要がある。従って概要等においては、一体的に考察していきたい。いつものように概要を一表にしてみた。

はじめに

前回は、青年時代そのⅠとして、帚木、空蝉、夕顔の各巻、いわゆる帚木三帖と言われているものを取り扱った。中流女性達との恋をテーマにした光源氏一七才の時の物語であった。そして、それは本筋とは離れた短編的、挿入的なものであった。

今回は、青年時代そのⅡとして、光源氏一八才―二二才頃までの主に上流女性との恋を中心とした物語であり、巻にすると若紫の巻から葵の巻までである。桐壺糸の巻が主流を占め、本格的な内容となっていく。物語の重要な骨子が形成されていくのである。以降、物語りは、賢木の巻から明石の巻へと続いていく訳であるが、光源氏のほぼ二八才の頃までである。

一、青年時代概観（帚木三帖を除く）

光源氏のこの青年時代ほぼ一〇年間の主な動きと特徴という観点から概観することから始めよう。

第一には、まず政治的状況およびその変化いわゆる政変を挙げなくてはならない。その最も大きなものは、御代変り（天皇の交代）であり、それは、第八巻に当る花宴の巻において行われた。

（葵の巻では、すでにそのことがあったという記述がある。後述する）

桐壺帝から長男への譲位であり（朱雀帝誕生）それを支える勢力が、左大臣側より右大臣側に移ったことである。そのことは、様々の影響を物語、特に光源氏の人生に及ぼした。

この頃の光源氏の官僚、政治家としての位置は、近衛府の中将、右大将であり、まだ国家の重鎮にはなっていなかった。明石の巻になって重要な職である権大納言についたのである。

なんと言っても光源氏は、臣下になったものの帝の第二皇子であり、妻は時の有力者であった左大臣（妻は桐壺帝の実妹）の一人娘（葵の上）であったため、両者の庇護の下にあり、何をやっても許されるという雰囲気であった。そこに人生に対する厳しさがややもすれば欠け、傲慢な態度になることもしばしば見受けられた。この政変によりそのような環境が大きく変ったのである。

第二には、光源氏の恋愛についてである。これまでもくり返し記しているように、帚木三帖は中の品（中流）の女性達との恋愛であったが、この青年期は、いわゆる上の品（上流）の女性達との本格的な恋愛、交渉が展開された。

中年時代、晩年時代とも光源氏にとって恋は大きなテーマではあるものの、この青年時代は、職務よりも恋に没頭した時期であった、といっても過言ではない。

第三は、これと関連するが、様々の多くの女性達が、恋愛相手として、又夫婦として、本格的に物語に登場してくるのである。源氏物語に登場する主要な女性達のほとんどと言っていいくらい多くの女性が描かれている。

素描して見よう。正妻葵の上　正妻格若紫（紫の上）永遠の女性、理想の女性藤壺、教養と美貌の未忘人六条御息所、その娘、（後の梅壺女御、秋好中宮）、結婚拒否の朝顔の君、積極的、官能的な朧月夜、人間味あふれる花散里、苦渋に満ちた明石の君、更には年老いた好色の源典侍、等々と実に多彩に物語を色どる女性達であり、表面の華やかさとは裏腹に苦悩に満ちた人生を我々読者に示してくれている。宇治十帖の女性達を除けば、後登場する人物（源氏と係りを持った）としては、玉鬘、女三の宮位であろうか。

源氏物語　青年時代（帚木三帖を除く）概要図　（筆者作成）／No.1−②

光源氏の運勢				御代変り（護位）									備考
天皇	桐壺帝				朱雀帝								冷泉帝
大臣の勢力	左右大臣	左大臣		右大臣									左大臣
光源氏年、位置	中将 18才	18〜19	（正三位） 18〜19	大将 20	（〃） 22〜23	（〃） 23〜25	（〃） 25	（無冠） 26〜27	（権大納言） 27〜28	（内大臣）
主な女性（年齢）	●若紫（10） ●葵の上（22） ●藤壺（23）	●紫の君（10〜11） ●末摘花（？）	●紫の君（10〜11） ●葵の上（22〜23） ●藤壺（23〜24）	●紫の君（12） ●葵の上（24） ●藤壺（25）	●六条御息所（24〜30） ●紫の上（14〜15） ●葵の上（26） ●藤壺（27〜28）	●朧月夜（？） ●六条御息所（30〜34） ●紫の上（15〜17） ●藤壺（28〜30）	●中川の女 ●花散里	●花散里 ●朧月夜 ●六条御息所（18〜19） ●紫の上（18〜19） ●藤壺（31〜32）	●明石の君（18〜19） ●紫の上（19〜20） ●藤壺（32〜33）	
巻番号	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
巻名	若紫	末摘花	紅葉賀	花宴	葵	賢木	花散里	須磨	明石	澪標
季節	春秋冬	秋冬	秋	春	夏秋	秋冬	夏	春夏秋冬	夏秋	
ページ	56	36	31	11	60	57	3	51	45	1ページおよそ500字
和歌（光源氏）	25（12）	14（9）	17（9）	8（4）	24（13）	33（16）	4（2）	48（28）	30（17）	全体 795首
主な出来事	●〃ひき取り ●若紫を所望 ●藤壺との密事 ●若紫発見	●〃失望 ●末摘花に合う	●源内侍との恋 ●藤壺出産 ●朱雀院行幸	●藤の宴（右大臣） ●朧月夜との出会い ●桜の宴（帝）	●若紫と新枕 ●六条御息所との恋 ●葵の上の死 ●車の所争い	●朧月夜との密事露見 ●藤壺出家 ●桐壺帝の崩御 ●伊勢下向 ●六条御息所	●花散里を訪問	●突風暴風 ●須磨での侘び住い ●都との別れ	●都での政治活動 ●離別 都へ帰る ●明石君と出合 ●明石へ脱出	
明暗	明 暗 明	明 暗	明 暗 明	明 明暗 暗	暗 暗 明	暗 暗 暗	明	暗 暗 暗	明 明 明	
その他特徴	●二条院の別世界 ●葵の上と不仲 ●北山の春	●若紫と末摘花 ●醜女 ●頭中将との争い	●藤壺立后 ●源氏、藤壺苦悩 ●源氏青海波の舞	●朧月夜との恋 ●護位と新帝 ●御代変り	●光源氏と紫の上 ●左大臣家を去る ●正妻の座争う ●もののけ	●弘徽殿女御画策 ●右大臣勢力急勢 ●野の宮の別れ ●嵯峨野の秋	●なぐさめ	●最大のピンチ ●都の女性との手紙 ●須磨下向	●中年時代の始まり ●政治家として復帰 ●運勢プラスに	

第四には、光源氏とこれらの女性達との関係では、様々な重要な出来事（事件と言って良い）が起きており、物語を大きく動かしていくことである。青年時代そのⅡにおいて、事が発生しそのⅢにおいて事の結果があるという因果応報の世界が展開されている。この因果応報は、光源氏の中年時代、晩年時代にも引き継がれ更には子供や孫の世代にまで（宇治十帖の世界）も語られていくのであり、源氏物語の大きなテーマなのである。

ここでもまず主な出来事を点描してみれば、

若紫発見（若紫の巻）、藤壺との密事（若紫の巻）、子供（後の冷泉帝）誕生（紅葉の賀）、朧月夜との恋（花宴の巻）とその露見（賢木の巻）、葵の上の死（葵の巻）、若紫との新枕（葵の巻）、六条御息所との愛・交渉（葵の巻）と別れ（賢木の巻）、花散里との出会い（花散里の巻）、都落ち（須磨の巻）、明石の君との出会い、別離（明石の巻）等々であるが、その詳細についてはそれぞれの巻においてじっくり見てみたい。

第五には、光源氏の運勢という点から考えてみよう。概要図にも記した通りに、明と暗をくりかえしつつ動いており、上向と下向の過程がはっきり認識できることであり、上向のピークは、花宴の巻で、下向のそれは須磨の巻で、明石の巻より再び運勢は上向過程に入るのである。更に物語全体を通してごく大まかに言えば、中年時代は直接的な上向過程で、藤裏葉（三三巻）をピークに若菜上以降は下向過程をたどっていると言ってもさしつかえなかろう。

この光源氏の運勢に大きな影響を与えたものとしては、前記の御代変り（花宴の巻）、桐壺帝の死（賢木の巻）、藤壺の出家（賢木の巻）、朧月夜との密事露見（賢木の巻）、須磨下行、侘び住い（須磨の巻）、政界復帰（明石の巻）等が挙げられる。こう見てくると、この期のいずれの巻々も重要ではあるが、賢木の巻は特にそうであり、明石の巻が一つのターニングポイントであると言えよう。あえて一言付け加えておけば、光源氏の人生にとって須磨の巻、明石の巻の前半位まで（二年間位であろうか）は、女性との交渉（手紙のやりとりは別として）が無かった特異な時期であったといえる。

このように改めて見てみると、青年時代そのⅡ（若紫の巻より葵の巻）とそのⅢ（賢木の巻より明石の巻まで）は、極めて激動した時期であったという表現以外に適切な言葉は見つからないという印象である。

第六に、文章に優れたものが多く、又、和歌にも心のこもった魅力的ものが多い。これは源氏物語全体に言えることであるが、賢木の巻の六条御息所との嵯峨野の秋の別れ、須磨の巻での侘び住い等の文章はこれまでも既に何回も記しているように素晴らしく、改めてこれらの巻においてじっくりと声を出して読みたいところである。和歌も男の女の出会い、別れをそれぞれ歌った贈答

歌にも素晴らしいものが一つぱいある。六条御息所の歌は特に心に響く。

第七に、文章の優れたものの中には、和文と漢文との融合したものも多く（なかんずく須磨の巻）自然描写の優れたものがあり、それに接することはこの物語を読む大きな楽しみなのである。出来事の背景にある春夏秋冬の描写、月等がきめ細かく描かれている。特に月に注目したい。

第八に、第一、第五の点と深く関係することでもあるが、桐壺帝の政治的意志の問題である。天皇（皇族）と藤原氏（貴族）との政治的な権力争いが、物語の底流にあり、それに根ざす人間関係がある中で、天皇制の維持という帝の政治的意志と摂関政治の達成により貴族官僚制の構築という藤原氏の野望を、決して女は政治について語ってはならないと自戒しつつ、大胆かつ見事に描いている。特に中年時代にも受け継がれていく政治的視点という重要なテーマに注目しておかなければならない。

そのような政治（権力）と政治家（人間）の関係は、源氏物語の最大のテーマではないかという風に最近強く思うようになってきた。これは、折にふれて更に考えていきたい。

その問題は、光源氏個人についても言えることであり、人間の中に政治権力を志向する心と、より人間的なものを志向する心（場合によっても前者を否定する場合もある）の葛藤があることにも興味を持っていく必要がある。そういう意味において、若紫の巻から既に何らかの出家願望が光源氏の心のどこかにあったということにも今回改めて気付いたことであり、以降それがどのように描かれていくか注目したい。最終的には、死ぬまでそれは出来なかった。

第九に、対照性ということであり、次にやや詳しく検討してみたい。

二、対照性

第一回でも指摘しておいたことであるが、源氏物語全体を通じてあらゆる事に対照性が極めて見事に見られ、それを柱にすえて読んでみると難かしいこの物語がよりよく理解できるように思われる。

対照的に物を見ることは、左右両方を見ることであり、単眼的でなく複眼的に見ることでありかつ中庸の精神、バランス感覚の大切さにも通じよう。我々の人生にとっても物を見る際の重要な指針等でなくてはならないものであり、又そうしなければならない重要な事であると思う。源氏物語をよく読むと、これを鍛えてくれる。

この対照性が青年時代の記述の中にどのように散りばめられているところからまずは考察してみたい。

(一) 物語の全体構成

○青年時代Ⅰと青年時代Ⅱ、Ⅲ……桐壺系（紫の上系）と帚木系（玉鬘系）しかし、この期Ⅱ、Ⅲにおいて帚木系は一巻のみ。（末摘花の巻）
○青年時代Ⅱと青年時代Ⅲ……因と果

（二）個々の巻名

五巻（若紫）から一三巻（明石）までも各巻が交互に対照的に並べられている。

巻名は省略して、

○若紫と末摘花……美女（若紫）と醜女（末摘花）
又、幸せ（上向）と不幸（下向）
○紅葉の賀と花宴……表面優雅な宴会と政治、と苦悩の人生、秋と春、天皇の退任と就任、舞と漢詩
○葵と賢木……賀茂の斎院と伊勢の斎宮、夏と秋、家庭内のピンチと外部（政治的）からのピンチ
○須磨と明石……都（政界）との離別、と都への復帰

以降の物語の巻々も多くに対照性が見られる。

（三）出来事

○生と死……夕霧（光源氏の長男）の誕生と葵の上（同妻）の死
○男と女……様々な恋愛、夫婦関係、父と娘、母と息子
○妻の交代……葵の上の死と紫の上との新枕
○出会いと別れ……若紫（後の紫の上）との北山での春の出会い、六条御息所との嵯峨野での秋の別れ、又、明石の君との出会と別れ
○その他……さがせばまだ〳〵ありそうな気がする。

（四）人物

○桐壺帝と朱雀帝……長期政権と短期政権
○朱雀帝と光源氏……兄弟、帝と臣下、主役と補佐役
○光源氏と頭中将……皇族と貴族、友情（親友）と政敵（ライバル）
○左大臣と右大臣……名支え役と迷支え役（？）
一人娘と六人の娘の父、慎重さとがさつさ
○その他、葵の上と六条御息所、若紫と末摘花、藤壺と若紫、藤壺（中宮）と弘徽殿の女御、藤壺と源内侍、更には紫の上と明石の君、等々。

今後の展開にとって、この紫の上と明石の君が対照的に描かれていることについては特に注目したい。

三、帚木三帖について

青年時代Ⅰの帚木三帖の意味・意義について、青年時代Ⅱ・Ⅲを読み終えて改めて考え直してみた。

何故源氏物語が桐壺の巻を書いて直ちに若紫の巻という正論に進まずして、帚木三帖を挿入したかという点であり、このことは帚木三帖のところでも触れたが、もう一度思いつくまま補足的に整理しておきたい。

（1）読者は、帝をはじめ貴族男性等の他に大多数を占めるのは宮中につかえる中級（上流の女性になりえない）の女性である。彼女達は、宮中の官僚貴皇子等（なかんずく光源氏）との恋は憧れであり夢の又夢であった。

その現実で満たされない思い、憧れをせめて物語の世界でも体験できることは日常の平凡さをぬけ出す事でもあった。このように、まず多くを占める読者の気持を強くつかんでおくためである。

（2）源氏物語の重要かつ主要なテーマは「女の生き方」である。紫式部自身が中の品の出身であり、宮中につかえる女性でもあった。自身の体験と思いを中の品の視点から描きたかったのであろう。

女と経済、社会という切実な問題からまず切りこんで行った。それは上流の女性の豊かさに対し中流女性の貧しさという経済的問題、当初に登場する女性達の多くは、貧乏であった。更には身分の差がその人の人生を大きく規定するという社会的な問題なのである。それを認識することが極めて大事であると思ったのであろう。

（3）話しがどうも前後するが、本筋の上流社会の女性を描く前に地ならし的にまず中流の女性の話しを短編的に挿話的に語ったものと思料される。

（4）これに関連するが、光源氏と上流社会の恋、夫婦関係、例えば、藤壺、若紫、葵の上、六条御息所、朝顔の君、朧月夜等との出来事は、中流女性との恋のやり取りに比べて比較的はっきり書いてないことが多く（特に出会いの場面や密事等）、対照的になっており、時を経るにつれて少しづつわかってくるケースが多い。これは帚木糸が後に書かれ挿入されたことや作者の見る眼がまだ単眼的であったから書けなかった等々の見方があるが、私はあえて当初からはっきり書かないという作者の意図があったのではないかと考えている。物がはっきりわからないと読者はより知りたくなる。隠されたものは余計見・知りたくなる。そういう読者心理をつかんだ巧妙な文学手法ではないかと思われるのである。

このことを強く感じたのは、光源氏と藤壺との密事との書き方であり、更に光源氏は葵の上や六条御息所については始めから、又途中から疎むようになるのと対照的に藤壺を益々慕う気持が強くなっていくという事実が、藤壺についてはあまり多くの筆をついやしていないという事実もあるからではないかと思われる。藤壺は、語られることが割合に量的に少ないものの、源氏物語に占める重要性は許り知れないものがあるので、この私のこの物語の記述においても相当の枚数をさかなければならないと思っている。

話しがいつものように蛇行し、多くの枚数を費してしまったが、第五巻に当たる若紫の巻から物語の中味を具体的に概観してみることとしたい。

四、若紫の巻

（一）巻名の由来

本文の歌「手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草」（光源氏の歌、紫のねにかよひかけは、藤壺と似ているという意味、紫は両者にとって共通かつ最高の色、手に摘みては手に入れて、又は想って、見むは、結婚したいという意味）

（二）冒頭文

源氏物語の冒頭文は、簡潔にその巻を表現している場合が多く、文章的にも優れているので、これから記すことにしよう。

「わらわ病にわづらひたまひて、よろすにまじなひ、加持などまゐらせたまへど、験なくて、あまた度おこりたまひければ…」。なお、わらわ病とはマラリア風の病気である。

（三）意義・内容

大変重要な巻であり、桐壺の巻より帚木三帖を中に入れて、直接的につながっており（桐壺糸、紫の上糸）、物語の太い骨子を形成している。

①若紫の発見、

病気を回復させる目的で訪れた（冒頭文）北山で、偶然に一〇才という若い少女に出会う。その少女は将来の光源氏の正妻格に成る人で、「限りなう心を尽し聞こゆる人」（藤壺）に似た人であった。

紫のゆかりとして登場し、最後の方の御法の巻で死ぬまで苦難に満ちた女の人生を貫ぬくのであるが、その若き日の描写である。

これを契に若紫との交渉が始まり、引き取り（略奪、拉致）二条院で童話的な共同生活をする。

若紫は、今後苦悩の人生を送るのであるが、その代償として成長する女性として描かれていく。

②藤壺との密事

文章の量からすれば、若紫の巻全体のおよそ1／14程度とわずかしか出てこないが、極めて重要で源氏物語に大きな様々の影響を及ぼす。要は、骨子をなすものである。紫の上の明るく軽い描写と対照的に藤壺は暗く重々しい。物語に占める意味合いは、極めて重要なものがある。

③明石物語の伏線

紫の上と共に光源氏の人生に深く関係する重要な女性である明石一族および明石の君の話しがうわさ話としてちらりと出てきて、後々の明石物語の重要な伏線をなしている。

（四）若紫との事

①若紫発見以降の事実をＮＨＫテキストよりごく簡単に記しておけば、

㋐光源氏　若紫を所望　㋑光源氏　尼君に訴える

㋒北山の別れ　㋓若紫への執心　㋔若紫の運命

㋕若紫連れ出し　㋖二条院の別世界

②発見時の若紫の様子

美しく描写されているがその中より、特徴を原文よりいくつか拾い出してみよう。

「白き衣、山吹などの萎えたる着て」「あまた見えるつ子どもに似るべうもあらず」「うつくしげなる容貌」「髪は扇をひろげたやうゆらゆらとして」「顔はいと赤くすりなし」

更に見ていくにつれて（垣間見である）、

「頬つきいとうつたげ」「眉のわたりうちけぶり」「額つき髪ざしいみじううつくし」「ねびゆかむ様ゆかしき人」。

そして、最終的には、「限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるが、まもらるるなりけり」とあり、藤壺に極めて似ているのである。血縁的には、若紫の父（兵部卿の宮）と藤壺は兄妹であり、従っておばとめいの関係に当るのである。

③光源氏は若紫をどうしようと思ったのか。

「あわれなる人を見つるかな」「いとうつくしかりつる児かな」と心を深く寄せ感動し、「かの人の御かはりに明け暮れの励めに見ばや」と藤壺の代りとして、一緒に生活（結婚）したいと思ったのである。その為に心にかなったようにおしえ（教育）ていくのである。雨衣の品定めの具体化である。

④若紫、紫の君、紫の上の名称について

この少女は、以降の物語の中でこのように名称をかえていくのであるが、その時の置かれた状況・身分、立場等を微妙に表わしていてなか〳〵面白く意義のあることであると思う。

その他に、女君、女、姫、二条の君、二条院の君、春の君等々と呼ばれており、場面〳〵に名をかえて登場する。若紫に対し「上」というのが使われたのは、いつからであったか。葵の巻の新枕以降は、形式的には「上」ということになろう。実質的にはいつ頃と見るのが適切であろうか。なお、明石の君には絶対上は使わず「山里の人」とかせいぜい「明石御方」という表現にとどめている。これからも身分制度の厳しさや光源氏の女性へのランク付けがよくわかる。

話しは少しそれるが、カルチャーセンターの講義等の中で有名大学の教授級の人が平気で「紫の上を発見した」とか「明石の上」というように言葉を安易、不用意に使っている事に出会うと、私がそのように思うことはつまらないことであり、大したことでもないととも思いつつも、妙にしらけてきてかつ残念に思うことがよくある。

作者は、細心に微妙に書き分けているのである。

また、一言つけ加えておけば、それらの講義においてテキストを読み、解釈することにほとんどの時間を費し、

肝心の物語の本質、人間と人生とも言うべき点にほとんど言っていい位話しが及ばない、又、質問時間もほとんどとらない（とっても形式的）ことについて、かねがね不満をもっているものである。

我々は大学生ではないのであって、社会人となって何十年も様々な人生の辛苦の経験に会っているのであるから、そういう視点から読み、話をしてくれたらなあといつも思っている。そうしたら源氏物語は、益々光を増してくるのではないか。私自身もそういう点で源氏物語を読み、語ってみたいという思いがいつもありながら話しを聞いている。

（五）藤壺との密事

（1）問題意識

①これまでも度々、問題意識として触れてきたが、密事がどうして源氏物語の重要かつ大切なテーマなのか。それを描いた源氏物語は、どうして名作なのか。密事の本質は何なのか。源氏物語研究家達はどのように整理してきたのか。我々読者はどう理解したらよいのか。

②又、光源氏、藤壺といった当事者達の真の心はどうであったのか。その辺りをどのように理解すべきか。はっきりとは書いてないことを全体の流れやデリケートな文章、又、行間からどう理解し、考えたらよいのか。

③密事が前記①とも関連するが物語全体に又光源氏の人生、藤壺の人生にどのような影響を与えたのか。

これらの点に関してつらつら考えてみれば、

①物語りを面白く多彩なものにし読者の関心を引きつけること。物語とは、非日常的な事、事件をとりあつかうものである。密事等絶好の材題であった。

②歴史的に見ても天皇の后が夫以外と関係をもったことは事実としてあったことであった。それを物語の中にとり入れた。

③この密事により物語は大いなる緊迫感と興味と盛り上りを見せるとともに以降の物語の展開に重大な意味を持ってくるのである。

事実、密事の結果として子供の誕生となり、桐壺帝の次の（朱雀帝）次の天皇（冷泉帝）となるのであり、光源氏はその政治的補佐役として栄耀、栄華を築き上げるのである。又、藤壺は出家し、光源氏も須磨下向の下地をなすなど、男と女の人生に大きな影響を与えることとなった事件であり、この物語の基本的な筋と方向性を示すものとなった。

④更に「女は二夫に交わってはいけない」という儒教的教えを具体化したものであろうか。

（2）藤壺という女性

①藤壺は、先代の天皇の第四姫で亡くなった桐壺更衣に生き写しということで、女御として入内（桐壺帝の

妻・光源氏の母）したのであるが、光源氏にとっては血縁はないものの義理の母という関係である。自分の父の妻と不義密通をしたというのであるから大変な事である。光源氏にとって手の届かない理想の女性、永遠の女性なのであるはずなのに手を出してしまった。

②源氏物語は、これまでの巻々において人の描写において実名ではなく間接的な表現によるものが多いが、藤壺についてどのような表現があったかをまず整理してみると、

○桐壺の巻　「思ふようならん人」（据えて住まばや）
○帚木の巻　「人ひとりの御有様」（思ひ続け給ふ、思すことのみ心にかかり）
○夕顔の巻　「心づくしに思い乱るる事」
○若紫の巻　「限りなう心を尽しきこゆる人」
「かの人の御かわりに」（なぐさめに見……）
「心にいとまなく思し乱るる人」
以降も
○末摘花の巻「気色ばみ心深き方」
○葵の巻　「われにつれなき人」　等々が見い出される。

③当時の藤壺の置かれた立場を考えて見よう。

㋐夫は既に初老の人（？）、夫人（中宮、女御更衣）が何人（一〇名位か）もいる。㋑宮中での厳しい生活、夫人同志の競いあい　㋒藤壺は女盛り（二三才位）。光源氏は、五才年下の美男子、家柄も良く将来が約束されている。㋓自身の子供がいない

このような状況の中で、青年光源氏は藤壺にとって極めて輝やかしくまぶしい存在に思えたであろう。

藤壺自身公的な立場と私的な立場の葛藤が心の奥深くにあったのではないか。かって、あるいは今でも日本の中年女性の中に、韓国の若い男性俳優への強い憧れがあるようであるが、千年前も同じようなことがあったのであろうか。

（3）密事の実態

①わずか六〇〇字程度という短い文章は、推敲に推敲を重ね、助動詞や副詞に重大な意味を持たせ、くどくどと書かなく省切れがよく、事の本質をずばり表現している名文であって、様々な事を読者は推察する。光源氏は、藤壺を思う激情にあふれているが、藤壺は、「あさましかりし」である。このしは、過去の助動詞で、わずかこの一字により、光源氏と藤壺の密事が今回始めてでなく過去にもあったことを示している。一回きりなのか、光源氏がいくつの時のことなのか。そして藤壺については、作者が過去のこととして書いた書物があったが、失われてしまった等の見方もある。真実はどうか。

②更に文章をじっくり読んで行くと「なつかしうらうたげにさりとて打ち解けず心深う恥づかしげなる御もてなしなど……」このわずかの文章から藤壺の心をどう理

解すべきか。

③王命婦という侍女が「たばかった」となっているが、主人藤壺と部下王命婦との間にどのような事前の了解があったのか、無かったのか。王命婦は、源氏に激しく攻められ、藤壺の意志にそむいて事を図ったのであろうか。現在のサラリーマン社会においても、少なくとも重大案件については部下は、上司に必ず相談し了解(正式か暗黙は別として)なしに事はしないであろう。

そういうことを考えると両者(藤壺と王命婦)の間には何らかの合意があったと考えるのが自然ではなかろうか。

④光源氏は「現とはおぼえぬぞわびしきや」宮も「いと憂(う)くて」又、「再び罪を重ねてしまったことが辛くて悲しくて情けない」となっており、両人の心が贈答歌に示されている。

源氏「見てもまた逢う夜まれなる夢のうちにやがて紛るるわが身ともがな」

藤壺「世語りに人や伝えむたぐいなく憂(う)き身を醒めぬ夢(ゆめ)になしても」

㋐夢という言葉が両方に出てくる。その心をどう解釈したらよいか。夢と現実、現実と夢。

④愛の絶唱の歌である。男の歌は、「夢の中に消えてしまいたい」、女の歌は、「死んでしまってこのまま醒めない夢にしてしまいたい」二人は愛しつつ、この絶頂のままで夢を終らせない為には死しかないという「愛と死」の一体化を望んでいるのである。

⑤この愛と死の問題は、西欧文学の主題なテーマであり、ワーグナーの数々の楽劇の中の主要テーマでもあり、「トリスタンとイゾルデ」や「ニーベルングの指環」においてくり返し取り扱われていることである。

事実、ワーグナーの世界において、男と女は、愛の果てに必ず両者とも同時に死に致るということであるが、源氏物語の場合はその思いだけで、男と女とは別々に死ぬのである。この場合も死に致らず、藤壺は薄雲の巻で死に、光源氏は、雲隠の巻でその死が暗示されているように別々なのである。しかし、ワーグナーに先立つこと八〇〇年以上前に、概念的と言えども「愛と死」のテーマが取り扱われているということを読んで改めて感じさせられることは、実に驚きであり、更に宇治の世界においても薫と大君との関係に見られることは、源氏物語の深さとすごさを示しているように思われる。

又、このことは、渡辺淳一の「失楽園」の主要テーマでもあることは、前にも記した。

(4)藤壺の心

密事などと言う事は、くど〳〵詳細に書くべき性格のものでない、深くオブラートにつつんでおくべきものであるという作者の美学からして、又、読者にその真相・真意をよく考えてほしいという作者の意図からしてその

ことは理解できるのであるが、微細に書かれた短文から藤壺の心を推察するしかないのである。

①空蝉の場合との比較…前回記した通り光源氏の行動に対し空蝉は激しく抵抗(てい)しなじったが、藤壺の場合はそれがない。

②前述の密事の実態の記述の文においても自らも受け入れたようにも読めること。

③後に三二巻に梅ヶ枝の巻というのがあり、女性の筆せき論が語られているが、藤壺の字体には、「優美であるもののどこか弱いところがある」としている。村上りゅう氏の指摘(講演テープ)しているように、作者は、ここで密事のヒント、答えを出しているのではないかとも思われるのである。

④藤壺の真の深層の心は、自分の血を分けた子供がほしかったのではなかったか。(老天皇との間に子供はなかった)その際の男性は、血筋のことの他良い光源氏が最適であると考えたのではないか。

こんな事を本音で語るべきではなく秘しておく方が良くこの推測は下衆の見る眼であると思いつつ、カルチャーセンターである時某有名教授に廊下の立ち話しとして聞いてみたら、一刀両断に「そんなことどこに書いてある。それは違う違う」と言って一笑された。どうもふに落ちなかった。単なる男と女の青春の誤りであったであろうか

文学や物語は、書いてないことでも、前後の文章や文章の微妙なニューアンスから様々に読み解釈してもよいのではないか。それが物語を読む楽しみだと思うのだが、読者諸氏はこの密事を、この深層についてどのように考えているであろうか。

⑤以降物語を読み進めていくと、藤壺の

㋐子供への異常な執着(母性愛)

④光源氏と出家後も政治的協力関係をつくっていくこと

㋒亡くなる際に光源氏への深い感謝等を考えると子供が欲しかったということもあながち的はずれではないように思えるのだが……。

(5)他の密事との関連

源氏物語においては、光源氏と藤壺との間に展開された恋愛、常識的、道徳的に決して許されない密事が他にもいくつか登場する。まず思いつくのは、光源氏の正妻女三の宮と青年官僚柏木との密事(若菜下以降)と薫の誕生である。

又、光源氏の息子の夕霧と妻の紫の上との微妙な関係は、野分けの巻によく描かれているが、このケースは実事に到らなかった。宇治の世界では、浮舟という一人の女性をめぐって薫と匂宮との争いにもなるのである。

いずれもこれらの場合は、女一に対し男二という関係である。

何故この物語において密事という（実事の有無はあるが）事をくり返し書いたのか、何が同じで何が違うのかを今後じっくり洞察しつつ読んでいきたい。光源氏の場合と夕霧の場合との違いは何なのか、作者の言いたいこと、我々の理解すべき事は何なのか。又、光源氏と柏木の場合は、単なる因果応報の世界として理解してよいのか。晩年期の若菜以降の重要なテーマなのである。いつの段階でか、これらの関係を一覧表にでもして見、考えてみたいと思っている。

（6）密事の本質

何故密事は悪いのか。何で誤り・罪を犯したと言うのか。当事者は罪の意識をもつのか。道徳的や慣習から見たらそうかもしれない。これらのものは時の権力者側がつくり出した規範である。

しかし、この密事という男と女の問題は、男と女の心の闇に関する問題であるが、同時に権力対人間という関係を人間対人間の関係にしようとするものであって、あえて本質を言えばそういうことになるであろうか。私は物語を読み進めてそう思う。愛はすべてを越える、不義は最高の愛の形態であると言う人もいる。ほんとうか。しかし、仏教的、キリスト教的な世界から言えば、罪ということになろうか。

仏教やキリスト教について改めて勉強しなければならない。

これらのことを考えている時、日向一雅著「源氏物語の世界」（岩波新書）を改めて読み直していたら、そのP95に次のような文があった。

「本居宣長はで、……物語は「もののあはれを読者に教えるのが本質である……　冷泉帝の出生にかかる源氏と藤壺の密通は『恋の物のあはれのかぎりを、深くきはめつくして見せんため』であり、許されない恋にこそもっとも深い『あはれ』の感情を表現できるのであって、物語はそれを目的としたと論じた・」（玉の小櫛）

なるほど、と深く感心しつつこの密事の本質について更に考えている。

（7）藤壺と光源氏の関係。以降の巻のポイントだけ記しておこう。

㋐子供出産、（紅葉の賀の巻）…藤壺と光源氏の苦悩、罪の意識子供東宮、藤壺中宮

㋑藤壺出家（賢木の巻）…光源氏の手のとどかない女性に。

㋒藤壺との別れ（須磨・明石の巻）…便りの交換

㋓政治的問題（澪標、絵合せの巻）…男女間の関係ではなく子供を守る為、又出世の為の政治的同盟関係

㋔藤壺の死（薄雲の巻）……ともしびが消えるように死（藤壺は光源氏の心のともしびであった）。

（8）光源氏と藤壺の密事総括

こんな様々な事を考えていたら三〇年位前に買って本

棚においてあった円地文子「源氏物語私見」に次のような文章が朱線でぬられているのに出会った。（P一四六）

「光源氏の後半生の栄華は、実はこの不倫にして純粋な恋の実を結んだ結果なのであった」。

恋の不倫と純粋、相反する事（パラドック又矛盾するもの）が同じ一つの中に存在するということ

それこそ源氏物語、ひいては人生と人間の本質ではなかろうか。

（1）正編の明と続編の暗。みやびとわび。都（京）の世界（政治）と田舎（宇治）の世界（脱政治）

（2）六条院の栄華栄耀の権力の男の世界とそうでない悲しい暗い女達の世界。

（3）若菜という表面的にはめでない一見明るい世界と実態的には苦悩に満ちた人間の暗い世界。

（4）権力志向と人間志向の人間の心（光源氏と薫の外と内の世界）

（5）人生と人間について、これまで書いたよう人を分けると生と死、男と女、精神と肉体。

（6）光と闇の世界の対照の同時存在。かつ因と果、そのくりかえし。因果応報の世界。源氏物語の深さであり、大きさであり、本質のように思えるのである。

（7）今、校正をしつつ被害者とでも言える夫・桐壺帝の思いを書いていないことにはたと気付き、次回において若干触れてみたいと思っている。

五、未摘花の巻

（一）巻名の由来

光源氏の歌「なつかしき色ともなしに何にこのすゑつむ花を袖にふれけん」

未摘花とは、紅花のこと。親しみを感じる色（好ましく思っていない）でないのになんだって紅花をば袖に触れたのであったろう。（林望訳）の意味。

（二）冒頭文

「思へどもなほ飽かざりし夕顔の露後れし心地を、年月経れど思し忘れず……」

「なお飽かざりし」はどうしても満たされぬ思いにつながれていた。「愛しても愛してもなお、愛したりない思いのした」の訳もある。（瀬戸内源氏）

「夕顔の露」は、その夕顔の花に置いた儚い露、未摘花は夕顔の露のゆかり。

「後れし心地」は、自分ばかりは生き残ってしまったという索漠たる気持の意。（林望訳）

なお第二巻の「玉鬘の巻」の冒頭文において、同じような表現がなされている。

「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず、心になる人の有様どもを、見たまひ重ぬるにつけ

ても、あらましかばと、あわれに口惜しくのみ思ひ出ひず」。未摘花の巻より一七年経っている。

(二) 意義、内容

(1) 若紫の巻から明石の巻まで九巻あるが、唯一の帚木系の物語である。前に若紫の巻、後に紅葉の賀の巻がありこれらは、いずれも光源氏と藤壺との事が中心であり、常に緊張感があるが、この巻はユーモラスな面もあり、そう意味では両者とは、対照性を持っている。

(2) 夕顔の追憶

死んだ夕顔に似たような人はいないかとさがし求めていた人がこの未摘花で、一七年後には玉鬘という夕顔の実の娘が出てくる。(前記玉鬘の巻)

(3) 前後の巻々で、密事、出産、愧悩といった重苦しい話しが語られているが、その雰囲気とは全く異なる話題である。

(4) 頭中将との関係 (後述)

(5) 未摘花の巻では、女主人公の肉体的、外面的な事が描かれ、後日談である蓬生の巻 (第一五巻) では、精神的、内面的な事を語っており、対照性が見事である。女性は何が大事であるかを示唆している。すなわち、外見よりは内面 (精神的なもの) が重要でる。このことは、物語全体の底流にある作者の思いでもある。

(6) 色に注目してみよう。若紫の紫とも対照をなし、白……雪の日に光源氏と会う。夕顔は、前回記したように白が基調。

赤……未摘花 (紅花の色) 花＝鼻、鼻が赤い

黒……着ている黒貂(くろてん)の皮衣。(貴人の着物で男性用、時代遅れ)。このように紫と赤と白と黒というカラフルな色彩。

(7) 光源氏はこの姫に当初思い込みで夕顔の再現を期待していたが、いざ会って見ると失望し、がっかりしてしまうという話しである。

(四) 未摘花という女性

(ア) 普通の他の女性とは異なるキャラクターで (イ) 沿落親王 (常陸の宮) の娘、(ウ) 経済的に貧しい、(エ) 琴の名手だとのふれ込み、(オ) 美人ではない、いわゆる醜女、(カ) 古風なところがある、(キ) 性質は誠実、純真、一途、(ク) 光源氏と初めて契る、(ケ) 和歌は、上手とは言えない、(コ) 無口である

未摘花と会った時の光源氏の雪明りで見た印象を原文に沿って見てみると、「居丈の高く、を背長」「鼻は普賢菩薩の莱物とおぼゆ」とある。ひどい書き方である。姫君の容貌の醜さに驚いたのである。美女である若紫とは対照的であるが、あわれさも加わって光源氏は、後に二条の東院に引き取る等一生面倒を見るのである。一面、心優しい男である。

(五) 未摘花物語の意味

女は、誠実に対応すれば、男は必ず心打たれ心を寄せ

てくれる。肉体的なものより精神的なものが大事。このことはこの物語で作者が言いたい大きなことで、源氏物語の様々な場面でも強調されている。当時の社会においても、美人ばかりではなく自らの容姿に自信のない女性達が多くいて、そういう彼女達へのなぐさめとはげまし(人生応援歌)でもある。又、男は、一回係り合った女性とは最後まで誠意を持って対応すべきである事等々を男性読者にも教えているようにも思える。

(六) 光源氏と頭中将

源氏物語は、男と女の物語が中心ではあるが、男と男の関係にも注目しなければならない。その中心をなすのが、光源氏と頭中将であり、これまでの巻にもいろ〳〵な場面、事柄において両者は登場する。

(ア) 頭中将は、左大臣家 (藤原氏) の長男、後継者である。光源氏の妻葵の上とは兄妹関係であり、従って光源氏の義兄という立場である。生涯光源氏とは遊びをも学びをも共にするよき友人であるが、月日がたつにつれてよきライバル (政敵) となっていく。

(イ) まず登場するのは帚木の巻の「雨衣の品定め」である。常夏の女 (はかない、頼りない女、具体的には夕顔) を愛人に持ち、一人の娘をもうける。後の玉鬘である。

(ウ) 女性をめぐり光源氏との間に様々な事が起きる。この未摘花の巻では、未摘花をめぐり、次の紅葉の賀の巻では色好みの老女源典侍をめぐってである。

(エ) 以降注目して読んでいきたいが、その後の概略を記しておこう。

○紅葉の賀、花宴の巻……光源氏と舞、漢詩等の共演

○葵の巻～須磨の巻……失意の光源氏 (妻の死、流摘(つく)) をなぐさめる為、須磨まで世間の目を気にすることなく訪ねていく。

○絵合わせの巻、少女の巻……政治的ライバル。いろ〳〵な面で対立

例えば中宮争い。(光源氏＝梅壺女御、頭中将＝弘徽殿女御) 夕霧 (光源氏の長男) と雲井雁 (頭中将の娘) の結婚問題。

○行幸の巻……和解 (母、大宮の仲介)。

こうみてきて言えることは勝つのは常に光源氏、敗れるのは頭中将ということになる。英雄は敗けないのである。おっとおっと光源氏は英雄か。。

(七) 最後の文章

未摘花の巻の最後の文は、「かかる人々の末々、いかなりけん」となっており、後日談のあることを示唆している。かかる人々とは、未摘花や空蝉、夕顔の娘等いわゆる中の品の女達である。

○未摘花…(蓬生の巻)…貧窮生活、光源氏の帰京、再会、二条東院へ

○空蝉…(関屋の巻)…逢坂山で光源氏と再会後出家、

二条東院へ

○夕顔…（玉鬘十帖）…夕顔の娘（玉鬘）として登場。光源氏の中年の恋の対象、六条院での生活、光源氏の愛を受入れず髭黒大将との結婚

…（竹河の巻）…未忘人、娘の結婚問題等で悩む。

このようにそれぞれの人生を歩いていくのである。

六、紅葉の賀の巻

（一）巻名の由来　朱雀院で行われた紅葉の賀の宴による。

（二）冒頭文

「朱雀院の行幸は、神無月の一〇日あまりなり……」

（三）意義・内容

（1）直接的には、若紫の巻に続く性格のもので桐壺系の重要な巻。

（2）公的な政治的状況と私的な光源氏と藤壺との密事以降の事態の進展が語られている。密事の結果としての子供誕生につき光源氏の戸惑いと藤壺の苦悩、罪の意識の大きさが語られている。

（3）バックをなす紅葉（秋）は、帝の退位にふさわしい、又光源氏の発らつとした若さ（青海波の舞い）と秋のわびしさの対照は見事である。

（4）次の花宴の巻は、新帝の誕生で季節は春、（桜）でありここも見事に対応しており、これもまた巻として対照をなしていることは前記の通りである。

（5）源典侍の登場。好色な老女と青年達（光源氏と頭中将）の恋のたわぶれ、藤壺の重苦しい雰囲気と対照をなしており、くり返しになるが、源典侍との交渉は、読む人を緊張感から解いてくれる役割を果す。

（6）なお、付け加えておけば、朱雀院の行幸は朱雀院（上皇の御所）に住まう一院の巻賀（長寿の祝い）を催すための行幸。

準拠として醍醐天皇による宇多法皇の四〇の賀（延暦六年十一月七日）や五〇の賀（同十六年三月七日）が有力。（NHKテキストの解説より）

（四）政治的状況

（1）桐壺帝の退位の意向

長年政権を維持し特に混乱もなかった政治状況の下、桐壺帝は何故地位を降りる意向を示したのか。（実際に譲位が行われたのは次の花宴の巻）

（ア）権力者から一人の人間への変（転）身。私的生活の充実を求めた。

（イ）花道を後進にゆずり政治に新しい風を。

（ウ）余裕を残して退位すれば、以降、上皇として重要な影響力を残せる。事実、第一王子の朱雀帝の御代には、上皇として影響力を残した。賢木の巻で、桐壺帝が死去してから右大臣側の勢力が決定的となる等急激な政治状

況の極めて大きな変化が起きた。

（2）帝は将来の布石を打つ

（ア）子供を天皇に（朱雀帝）

（イ）妻藤壺を中宮に。弘徽殿女御は皇太后にして右大臣側や本人の不満をやわらげる。

（ウ）子供光源氏は、右大将にし、将来政治の補佐役へ。

（エ）関係者へ進言、諫め、更には遺言（賢木の巻）

（3）このような桐壺帝の政治的意志を読むことは極めて重要であり、朱雀帝の譲位（澪標の巻）や冷泉帝の譲位（若菜下の巻）と比較してみると面白い。

なお、前にも書いて問題提起しておいたように、光源氏と藤壺との密事に帝は、直接的か間接的にか係わっていたのか、いなかったのか。光源氏と藤壺との密事に全然気付いていなかったのか。そんなことはあるまいと思わざるを得ないし、帝が仕掛けたということも言われているが、なか〳〵面白く、重要な問題でもある。

（4）帝を支える勢力は、左大臣側より右大臣側に大きく傾いていく。朱雀帝の生みの母（弘徽殿の大后）は、右大臣の姫（長女）であり女政治家として相当政治に関与したと考えられる。そのことが朱雀帝が比較的短期政権として終った一つの要因とも思料される。

（5）桐壺帝の御代が長く続いた（長期政権）のは、左右大臣が争いつつ、牽制しつつ存在し、かつ天皇がうまくそのバランスをとってきたからであろうか。右大臣側が単独強くなることは、その政権地盤を弱体化させていったのではないか。このことも背景に加わって、朱雀帝は短期で終ったのではないかと思われる。

現在の日本の政治状況、政権交代等を併せ考えて読むと面白いところである。

（五）光源氏と藤壺

（1）中将である光源氏は、試楽の御前で藤壺のために青海波を舞う。藤壺は「おほけなき心のなからましかばましてめでたく見えまし」（林望氏の訳によれば、「源氏があいうふうにけしからぬ恋慕などせずにいてくれたら、このすばらしさを素直に喜べるにと、なんだか夢を見ているような気持になった」としている）

光源氏と藤壺の贈答歌の見事なものの一つである。

（2）秋の夕日に映える紅葉と光源氏の舞いのすばらしい対照的描写は、もののあわれ、みやびの世界の極地を感じる。傍で舞う頭中将は、「花のかたわらの深山木」である。

（3）予定より遅れて誕生した子供は、光源氏とうり二つ、二人は秘密にしつつ父、夫、子供に会う。

源氏の感動と戦慄は、「中将の君、茜の色かは心地して、悲ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あわれにも、かたがたうつろう心地して、涙落ちぬべし」と原文にある。

七、花宴の巻

紅葉の賀の巻に続いて花宴の巻であるが、源氏物語の第八巻目に当る。秋と春の行幸、帝の退位と就任をバックに、光源氏と朧月夜との恋愛が語られる。

(一) 巻名の由来　南殿で行なわれた桜花の宴による。

(二) 冒頭文

「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ。…日いとよく晴れて、空の気色、鳥の声も心地よげなるに……」、美しい情趣的な表現である。

(三) 意義・内容

(1) 表面上の優雅な賀である春の桜の宴（天皇主催）、と初夏の藤の宴（右大臣主催）を背景に、一言もふれられていないが天皇の交付（御代変り）が行なわれた。

(2) 光源氏（二〇才）と朧月夜との恋の始まり

桜の宴で出会い、藤の宴で再会する。

(3) 極めて短い一編であり、この時譲位した朱雀帝の御代が長くないことを暗示しているようにも見える。

(4) 政治状況の大きな変化（左大臣側より右大臣側に権力が移る）の下、光源氏（左大臣側）と朧月夜（右大臣側）の恋愛は光源氏の運命に須磨下向という決定的な方向性を示す根拠となる。

(四) 譲位

(1) 我々は次の葵の巻の冒頭「世の中変りて後…」という文に出合い、譲位後の事が語られていることを知る。前巻の紅葉の賀の巻では、「帝おりゐさせさまはむの御心づかい近うなりて…」とある為、花宴の巻ではこの事につき一言もふれていないが譲位が行なわれたことになる。

(2) 私のこれまでの記述において譲位が行なわれたのは、葵の巻であるとしてきたのは誤りで、おわびしつつ訂正する。わずか「後」という一字を見落していたためこういうことになった。前に起ったことを後で記すという源氏物語でよく使われているテクニックである。

(五) 宴について

譲位の記述は、紅葉の賀という秋の衰えていく季節をバックに、就任のは、花宴という春の盛んになっていくという季節をバックにしており、更に藤の宴は、右大臣の主催であり、右大臣が勢力をのばしていることを暗示している。

人事と自然が一致したいわゆる景情一致が見事という他はない。

(六) 朧月夜という女性

(1) 特徴　本文を読みながら私なりに認識した朧月夜という女性について記してみれば、

(ア) 美人、若く、積極的で物事をおそれず、個性あり、教養もあり、和歌も筆も上手。

(イ) 上流出身、父は右大臣、姉は弘徽殿の女后（右大臣の長女で、桐壺帝の妻）この女性は六番目の姫君、三女は蛍の宮、四女は頭中将の妻（四の君）

(ウ) 光源氏を知る前は処女、これは藤壺、六条御息所、空蝉、夕顔等と異っている。

(エ) 家柄も気にせず、中宮などのポストには無とんじゃくで自分本意に生きる。事実朱雀帝へ輿入りすることが決っていたが、光源氏との恋によりそれが破産となった。

(オ) 有明の君とも呼ばれている。

何か性格に欠けたことがある。又、光源氏の心に忘れられない印象を残した（有明の月は、陰暦二〇月過ぎの月で明け方まで輝いている）ことを暗示しているようだ。

(七) 出会いと桜

源氏物語において出会いの場合に借景として、桜（古文で桜と言えば山桜）の風景が使われている。

○若紫と光源氏…（若紫の巻）…北山で桜が散る頃

○朧月夜と〃……（花宴の巻）…宮中での桜の宴

○女三の宮と柏木……（若菜上の巻）…桜の下でのけまりのシーン

桜は美しいが花が短かく散りぎわがはかない、女性の性格、これらの恋の性格、恋の行く末を暗示しているように思える。勿論、春の女性と言えば、紫の上である。

(八) 藤について

藤の宴で、「朧けならぬ契り」を結んだこの女性と光源氏は勿論再会するのであるが、藤は藤原氏の花で、又藤は淵に通ずる。がけっぷち、あぶないという意味もある。事実この恋は、左右大臣の敵対関係をバックにしており、密事が露見（賢木の巻）、須磨行きの直接的原因になるのである。

なお、藤の花にたとへられる女性に明石の姫君（後の明石中宮）がいる。源氏の息子の夕霧の目には、桜は紫の上、山吹は玉鬘、藤は明石の姫君という風に写った。（野分の巻）

明石の姫君は、光源氏の娘で今上帝の中宮になり宇治十帖で活躍する匂宮の母であり、源氏一門の繁栄を支え、明石一族の再興を担った幸せ人である。後の話しである。

藤が淵に通ずるというこの朧月夜の君の場合と異なり平穏幸福な生活をするのである。ここでも一つの事に両面（あぶない面とあぶなくない面）が含まれていることを示している。源氏物語の物を見る目の大きさにただ〳〵感心するばかりである。

(九) 出会いの偶然性

源氏物語における男と女の出会いは、作者により巧妙に偶然性をもって演出させられている。朧月夜以外の女性との例として

○空蝉……片違へで光源氏が中川の紀伊の守宅へ…（帚木の巻）

○夕顔……六条渡りの忍び歩きの途中……（夕顔の巻）

○若紫……病気治療の為北山へ……（若紫の巻）
○花散里……ふと思い出し女を訪問……（花散里の巻）
○明石の君……明石へ転居……（明石の巻）
（父の意志、作者の中流階級という共通の思いもあり、明石の君の描写には力が入る。）
（十）朧月夜の君との今後
○賢木の巻……密事発覚
○須磨の巻……手紙のやりとり、歌の贈答
○澪標の巻……交際をやめられず、夫朱雀院も認めざるをえない状況。子供がいないため、右大臣側が後継者がいないとひどく嘆くのである。
○若菜上……二〇年振りの再会、美しい描写。
○〃下……出家、全く源氏から離れる。
波乱に富んだ人生をこの女性も送り源氏物語において、忘れられない女性の一人である。

八、葵の巻

（一）巻名の由来
源典侍と光源氏の贈答歌による。
○「はかなしや人のかざせるあふひゆえ神のゆるしのけふを待ちける」（女）
（自分も神のお許しを得て貴方様に逢ふ日となるかと、この日を待ち焦がれていましたものを）
○「かざしける心ぞあだにおもはゆる八十氏人になべてあふひを」（男）
（そのお心はどうも浮気なことではないかと思われますね。葵祭は八十氏人に逢う日だというくらいですから、あなたもきっと八十氏人に逢う日を重ねられたんでしょう）（いずれも林望訳より）
（二）冒頭文
「世の中変りて後、よろずもの憂く思され御身のやむごとなさも添ふにや、軽々しき御忍び歩きもつつましうて……」
（三）意義・内容
（1）政変（御世代り）の後の政治状況が語られる。
光源氏は、その際、宰相の中将（花宴巻）から参議である右大将に昇進している。「御身のやむごとなきも添うにや」とはこの事を指す。二二才～二三才の頃の話しである。
（2）光源氏の家庭内のピンチを描き、次の賢木の巻の外部からの圧力（ピンチ）を描いたのと対照的。（鈴木一雄ＮＨＫラジオ講義より）
（3）女同志（葵の上と六条御息所）の争い。従来の物語にはない書き方。具体的には、葵祭見物での葵の上と六条御息所との車の所争い。
（4）これまでもしば〳〵書かれてきたが、葵の上（妻）と六条御息所（愛人）が本格的に対立関係をもって登場

する。六条御息所の嫉妬と愧悩が見事に描かれ、秀歌も多くある。巻全体で24首、光源氏13首、六条御息所4首。
（5）葵の上の死（生霊事件、いきずだま事件による）と息子夕霧の誕生。六条御息所とは心が段々隔たっていき、次の巻で別れる。
（6）前半は、葵の上の死が描かれ、後半は、その死を傷む愛傷の歌と言ってよい。暗い悲しい表現が多い。
（7）最後は、若紫（紫の君）との間での新枕（結婚）があり暗からやや明への転機となることを思わせつつ巻を終る。
しかし、次の賢木の巻では、様々の別れが語られ、須磨下向の下敷を成している。両巻と合わせ光源氏の人生にとって激動と波瀾の時期である。そういう意味でも両巻は源氏物語を大きく動かす要素を多くもった大変重要な巻々である。
（四）六条御息所という女性
（1）これまでもしば〳〵語られてきた。例えば思いつくままに主なものを挙げれば、六条の大邸宅に住む高貴で教養ある未亡人。夫は先の東宮。夫は生きていれば、中宮にもなりうる立場の人。光源氏といつの頃からか精神的にも肉体的にも親しくなり、彼の有力な愛人の一人。七才年上。性格は、ものを思いつめるタイプで常に光源氏の事を思っている。
（2）嫉妬心が極めて強い女性。
○車の所争いにより葵の上側よりはずかしめられ心に大きな傷を負う
○光源氏とは当初うまくいっていたが、段々と両者の心は隔たっていく、愛がさめていく。光源氏のつれない態度は心に懊悩になって積っていく。そして底には左右大臣のなんらかの争いの後遺症も残っていたのかもしれない。（葵の上・左大臣、六条御息所・右大臣） 更に葵の上の妊娠という現実も六条御息所の心に錯乱の度、憂うつな気分を増していったのであろう。光源氏側から見て、どうして心が隔っていったであろうか。
○決定的には、生きすだま事件によりはっきりその生体を見てしまったことである。（芥子の香り）それだけなのか。
（3）六条御息所には秀歌が多くあると書いたが、この巻の心に残るいくつかを書いて味わおう。（訳 円地文子による）
○「影をのみみたらし川のつれなきに身のうきほどぞいとど知らるる」
（恋人の姿を見つめつけても、情ない御様子にわが見の辛さが嘆れる）
○「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみずからぞうき」
（未とげぬ恋と知りながら、田の泥にまみれる農夫の

ように恋路に迷う自分が辛い。）

○「なげきれび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがいのつま」

（空に迷っている私の魂を着物の下前の褄を結んでもとの体に返して下さい）

○「人の世をあれれと聞くも露けきにおくるも袖を思ひこそやれ」

（あの方に先立たれたあなたの悲しみをお察し申し上げます）

なお、光源氏と六条御息所との間には、他の巻も入れると全部で六回の贈答歌があるが、六条御息所の方から、即ち女の方から四回読みかけており、心のかわき、光源氏への思い等が強かったことを示している。

普通、この時代は女から読みかけることなどなく男の贈歌に女が返歌するのが一般的であった。

（4）以降　六条御息所と光源氏の関係は、賢木の巻で別れ、伊勢下向（娘を伴って）、須磨の巻で手紙の交換、澪標の巻で伊勢より上京、病気、出家、死を迎える。

光源氏はその娘（斎宮、前斎宮、梅壺女御、秋好中宮）に関心を示していく。いわゆる中年の恋の展開である。（薄雲の巻）、又、六条御息所の遺言は重要な意味をもっている。（後述）

なお、光源氏の壮大な大邸宅・六条院は、六条御息所邸の一部（西南の町）を基礎に拡張・整備されたものであり、そこを舞台として光源氏の栄耀栄華が語られ、同時に中年光源氏と若い玉鬘の恋物語が展開していく。楽しみな場面である。（いわゆる玉鬘十帖）

（五）葵の上の死、葵の上という人

（1）葵の上の死は、NHKテキストによれば○もののけ（一）、○もののけ（二）、○葵の上の死、○野辺送りと四回に渡り放送され、その後は

○傷心（一）、○傷心（二）、○源氏左大臣家を去る（一）、○源氏左大臣家を去る（二）、と同じく四回に渡り講義が行われている。長々とした描写である。

前半ではじっくりと正妻葵の死を描き、後半においても丁寧にその死を傷む夫光源氏と父（左大臣）と母（大宮）の姿、心を描いていて名文のところが多く心を打つ。秋の時雨の描写が悲しみと重なっている。又、死の野辺りは、有明の月がバックで葵の上は様々の人に強い心残りをきざみこの世を去っていったが、その月は象徴のようだ。

（2）何故、光源氏と葵の上との結婚生活は不仲であったのか。

（ア）結婚が政略結婚であり初めから二人の心がしっかりと結ばれていた訳でない。

（イ）光源氏の心には、永遠の女性・藤壺が常にあり又、この満たされない気持を多くの女性遍歴に

よっていたこと。

（ウ）光源氏側より見れば葵の上の性格（後述）もあり、打ち解けず、又妻の方から見れば夫の浮気心が好ましくなかったこと。

（エ）一〇年間子供がいなかったこと（死とひきかえに長男夕霧の誕生。）

等々が考えられる。子は夫婦のかすがいということがなかった。

（3）死の直前にようやく夫婦和合らしい姿が見られるのが、せめてもの救いであるようにも思える。どの解説書にもそう書かれている。しかし、妻の死に夫は立ち会っていない。葵の上の夫に対する最後の抵抗なのであろうか。

（4）源氏物語には、実の多くの死が語られており、その死をいたむ心が名文で語られているが、若冠二六才という若さで亡くなった葵の上の死をいたむ長い文章で、しかも切々としたものは他の死の場面にはないのではないか。

何故生前もっと和合した夫婦生活が営めなかったのか。何故物語をそのように作者は語らなかったのか。葵の上の死を読者我々はどのように理解したらよいのか。晩年光源氏が人生や女性を回顧する場面がある。（若菜下巻）

「仲は良くなかった、どこか隔心を持ったまま。今思えばまことに労しい、心残り。私一人の過ちばかりではない。いつも端然として（うるわしい）乱れず、重々しい態度、気を許したところなく、愛嬌がなく、賢過ぎる。頼み甲斐のある人だが、いざ妻として人生を共にするとなるといささか面倒なお人柄であった」（林望訳）としている。

（5）葵の上は間違ったことはやっていない、筋の通った理屈に合った人生態度である。しかし、それだけでは人の世、夫婦の仲というものは生きていけない。相手をも思い、妥協もしなければならない。それが出来なければ、人の世は生きていけない（即ち死）

作者は、妻の心にそむいて女性遍歴をくり返す男に対して厳しい鉄拳を与え、世の男性諸氏のいましめにしたかったからでもあろうか。男と女の両方を諫めてもいるようだ。

今の世には多くの離婚が現実にある。葵の上との結婚、不仲、死をどのようにとらえたらよいのか。

（6）葵の上について一言加えておけば、数多くの女性が秀れた和歌を読んでいるが、彼女は、一首も歌を読んでいない源氏物語においては珍しい存在である。

左大臣家のお嬢様だから教養もあっただろうし、和歌の心も理解したと思われる。読む才能もあったであろう。ただ情が遅れ、情趣の心を解することが少なかったかもしれないものの、それでも読めば読めたであろう。読まなかったのは、夫との生活等においてそういう心境にな

りえなかったからではないか。その愛の喜びや悲しみも歌わないと同様怒りや愚痴等も歌に託さず、もっぱら行為・行動によって示していたのではないか。そういう意味でも葵の上は、良家のお嬢さんであった。夫以外の事については苦労をしたことのない上流の人であった。中流女性である作者は、そういう上流女性の姿を書きたかったのであろう。

(七) 物語における結婚

光源氏と葵の上の結婚生活を見てきたが、源氏物語には多くの夫婦が登場する。

①これまでも（葵の巻まで）桐壺帝と更衣、光源氏と葵の上

②更にこれ以降も桐壺帝と藤壺、光源氏は紫の上と本格的になるし、明石の君、花散里とも夫婦の関係を築くのである。

③次世代の夕霧と雲井雁、柏木と落葉の宮の夫婦関係も登場する。前者は波乱、後者は破たん。

④晩年期においては、光源氏は女三の宮と髭黒大将は北の方をさしおいて、玉鬘とそれぞれ結婚し様々の問題を起し物語を大きく動かしていく。

⑤更に宇治十帖の世界においては、匂宮と中君が結婚し、浮舟と薫、匂宮の三角関係の恋と対照的に描かれていく。

これらのそれぞれの夫婦がどのように描かれているかは、実に興味のあることであり、源氏物語は、一面、恋愛小説であるとともに、他面、夫婦物語の側面も大きく併せ有しているのである。

又、これらの夫婦関係において、純愛のみならず、政治的要素がなかったかどうか、よく考えて読んでみるとなか〳〵深いものがあるように思える。

(八) 紫の君との新枕

(1) 正妻葵の上は亡くなり、藤壺には手が届かず、六条御息所は期待にもかかわらず光源氏の妻の座につくことが出来ず別れ、朝顔の君も光源氏にはなびかなかったため、自然に紫の君が妻の座につくことになった。いわゆる新枕である。

「男君は早く起き女君はいつまでも起きず床の中にいる」という表現でこのことを示している。

(2) その時の紫の君（これより実態的には紫の上となる。新妻となる）の心と状態を訳文の中から拾って見よう。

○あんなひどい事をする心を持った人（源氏） ○思いもよらない事 ○嫌々しいことをする ○あきれた

○賑かしい ○源氏の君に憤慨

○全身汗ずく ほうも汗でびっしょり

○ひどい事 一言も口を開かない ○思いつめる

これに対して光源氏は、

○幼いこと ○かわいらしい ○いたわってやりたい

次回は、引き続き光源氏の青年時代を賢木の巻、花散里の巻、須磨の巻、明石の巻でじっくり追いつつ、総括的に光源氏の恋愛と女性の生き方を整理し、青年時代とは何であったのか、それが中年時代、晩年時代とどのように結びついていくのかという視点で書いてみたい。

(26. 9. 13)

口紅（その十六）

池莉　原作
山本勉訳

〈登場人物〉

【趙家の人々】
趙耀根（小説の主人公、江暁歌と結婚）
趙耀虎（趙耀根の弟）
趙耀珍（趙耀根の妹）
趙耀根の母親

【江家の人々】
江暁歌（小説の主人公、趙耀根と結婚）
江暁鴎（江暁歌の弟）
江暁暢（江暁歌の妹）
沈鳳宜（江暁歌の母親）
江暁歌の父親
田曼（江暁歌の実母）

嘉児（趙耀根と江暁歌の娘）
寧岸（趙耀根と江暁歌の友人）
呉文彗（寧岸と結婚）
寧遠（寧岸と呉文彗の息子）
張喜（趙耀根の会社の同僚）
李主任（趙耀根の会社の上司）
張書記（趙耀根の会社の上司）
羅桂香（江暁歌の会社の同僚）
黎美娟（江暁鴎の恋人）
宗漢（江暁歌が作った会社の専務）
唐燕影（後に趙耀根と江暁歌に深く関わり、この物語の行方を左右する女）
藍雲（宗漢の恋人、ラジオ局のディスクジョッキー）

第二十九章　別離

（一）

寧岸は、激しくドアを押し開けて江暁歌の目の前に現れた。

江暁歌は、大きなデスクから頭を覗かせ、目を細めて寧岸を見た。寧岸は、江暁歌が少し化粧していることに気づいた。初々しい美しい蓮の花のような美しさは、若さの特権だ。人は年を取ると、化粧で歳月の浸食をごまかすが、どうしてもほころびが現れる。

江暁歌も例外ではなかった。寧岸は、知らずのうちに、万感胸に迫ってきた。今回ここに来た目的をほとんど放棄しようとしていたが、直ぐに気を強くもって、目には毅然とした光が宿った。

江暁歌は、

「寧岸」

と話しかけ、生気を取り戻した。

「寧岸、今日は、どうしてこんなに早く来たの」

寧岸は、体の向きを変えてドアを閉めると、

「僕は、君に別れを告げに来たんだ」

と言った。

「別れを告げにって、何処へ行くの？」

「南方さ、マカオだ」

「マカオ？賭博をしに行きたいの？」

「その通りさ。僕は博打を打ちに行くんだ。僕の一生の願いなんだ」

「あなたは、賭博が底なしだってわからないの？あなたの全てを飲み込んでしまうわ。命までもよ」

「わかっているよ。でも、マカオは、チャンスが溢れている街だ。一夜で大博打を打ち、億万長者になる可能性もあるんだ」

「寧岸、あなたがやることじゃないわ。絶対に博打なんてやってはダメよ。あなたの読書人気質は何処へ行ってしまったの？なぜ博打を打ちたいの？なぜ博打で金儲けをしたいと思っているの？」

「そりゃそうさ。博打は公平だからね。いずれにせよ、貧乏暮らしには飽き飽きしたんだ。命を懸けて国際大賭博場に行って、一回で勝負を決するんだ。今年は博打運があるんだ。今日は、僕が旅立つ良い日だ」

「文彗は、あなたが出掛けることを知っているの？」

「もちろんだとも。家のことは、ちゃんとやりくりしているよ。必要なものは全て整った。しかし、最も重要なものが一つだけ欠けているんだ。元手の金だけが、少しばかり足りないんだ。最後のお願いだ。僕は、何も言うことはない。僕と君は、この世で縁がなかっただけだ。『この世で結ばれない』この言葉が僕の全てだ。どうか僕に卑怯なことをやらせてくれ。僕は、この言葉を君に

売りたい。これは僕の心の中に秘めた思いで、生涯の心残りだ。僕が自暴自棄になり、落ちぶれ、惨めな思いをした根本的な原因だ。君にノーと言える権利はない。君は、僕のこの気持ちを買わなければいけない。君が買わなければ僕を謀殺したのと同じだ。僕は、君に殺されるなら本望さ」

「そんな事考えちゃダメよ」

「買うのか？買わないのか？はっきりしろよ」

「寧岸・・・・」

「どうだ、買うのか？買わないのか？」

「わかったわ。買うわ。値段のつけようのないものよ」

「いや、それは価値がある。僕は、たった五万八千元必要なだけだ。高くないはずだ」

「わかったわ」

「安心してくれ。金は君に返すから。文彗が本屋を開いたときに君から借りた金も一緒に返すよ。僕は、絶対勝負に勝つ自信があるんだ。むろん、万が一ということもあるけどね。もし僕が勝負に負けたら、自らこの世からおさらばするさ。死を以て謝罪するよ。僕は、二度と帰ってこない。二度と君に迷惑をかけないよ」

寧岸の話を聞いて、江暁歌は少し悲しくなり涙ぐんだ。凄い剣幕で目の前に立っているこの人が、果たして寧岸なのか？

才気溢れる寧岸、

あか抜けた含蓄のある言葉で語ってくれた寧岸、

気配りのできる寧岸、

彼はいったい何処へ行ってしまったのだろうか？

目の前のこの人は、どうして、ごろつきの容貌をしているのだろうか？寧岸は魂を売ってしまって、抜け殻が残っているだけだ。彼の皮膚はろうのように黄色く、髪はぼうぼうと乱れている。顔は垢だらけで痩せこけ、むくんだ感じだ。彼の目の深く窪んだところに、凶悪な光が見え隠れしていた。しかし、外見の強がりとは裏腹に、はっきりと臆病さが見て取れ、哀れさを感じた。彼は既に精神的に破綻していた。ある種病人になってしまっていた。彼を見知らぬ土地で生活させることは危険である。江暁歌は今の状況を説明し、彼を思いとどまらせる方法を考えたかった。

寧岸にも、江暁歌の意図が読み取れたかもしれない。彼は激しい口調で言った。

「江暁歌、買うんなら早く金を持って来いよ」

江暁歌は立ち上がると、

「カッカしないで。寧岸、大丈夫よ。冷静になってじっくり相談しましょうよ」

とさらりと寧岸に言ってのけた。

彼女は手を伸ばして受話器を持った。

「そんなに緊張しないで。私の手元にあるお金は、これまで三百元を超えたことなんてないわ。五万八千元は、

少なくないお金よ。私は経理に電話をして、小切手を切らせるわ。それか現金を用意させるわ」

寧岸は、初めから江暁歌に電話をさせるつもりでいた。しかしこの時、ドアをノックする人がいた。続けて宗漢の声が聞こえて来た。

「江社長、どうしましたか？」

寧岸は、ギュッと受話器の突起を押さえた。

「彼に、入ってこないように言ってくれ」

江暁歌は、

「宗支配人、暫く入って来ないで」

とドアに向かって呼びかけるより仕方がなかった。

寧岸の顔には、凶暴で厳めしい表情が漂っていた。

「直ぐに金をくれないか？金をくれれば、僕は直ぐに出て行く。電話を掛けてはいけない。時間を引き延ばしてはいけない。僕は、病気なんかじゃないんだ。僕は、誰よりも健康だ。冷静なんだ。世の中の人が酔っていて、僕だけ一人醒めているんだ。ワッハッハ・・・」

彼は電話線をギュッと引っ張ると、ズボンの尻のポケットから一本のナイフを取り出した。

江暁歌はハッとした。彼女は、このナイフがドイツの『ヘンケルス』ブランドの小型ナイフだとわかった。彼女は、かつて、寧岸の家の台所でこのナイフを使ったことがあったので、それが驚くほどよく切れることを知っていた。

鮮血が四方に飛び散る情景が、まざまざと彼女の目に浮かんだ。

彼女は、

「寧岸、やめて！」

と思わず叫んだ。

寧岸の口調は、突然和らいだ。

「暁歌、怖がることはないんだ。君を傷つけやしないよ。僕がこの世に生まれてきたのは、君を守るためだ。いま僕は、君に商売というものをわからせたいだけだ。商売人は信用を第一にすべきで、合意に達すれば約束を果たさなければならない」

刃が冷たく光ったかと思うと、彼は自分の小指を切り落とした。予想もしない激痛が、寧岸にウオーという狂った声を上げさせた。彼は顔を歪めて、無意識のうちに傷口をギュッと摘まむと、どす黒い赤色の血が彼の指の間から流れ出落ちてきた。

江暁歌は、びっくりして顔が真っ青になり叫んだ。

「寧岸、やめて！・・・・・お金をあげるわ。お金をあげるから！」

江暁歌の悲鳴を聞くと、宗漢はドアを開けて飛び込んで来たが、既に理性を失った寧岸に首を締め付けられた。寧岸は、小刀を宗漢の喉に押しつけながら足でドアを叩き蹴って、凶暴に叫んだ。

「お前、死にたいのか？」

「寧岸、落ち着いて。落ち着いてったら！宗漢を離して。彼はこの件に関係ないわ」

江暁歌は白いハンカチを取り出すと、寧岸の傷口をくるもうとした。

寧岸は、宗漢を抱きかかえながら後ずさりすると、体をドアにもたせ掛けた。

「嘘つき。お前達は、みんな嘘つきだ。彼はなぜ、この場所を占拠しているんだ。彼がせしめたものは、もともと僕のものなんだ。彼は、君を愛しているんだ。こいつは、君に惚れているんだ。こいつは、何ていう奴なんだ。何の資格があって君を愛するのか？僕は、いかなる時でも奴を殺す権利がある。止まれ。近づくな。ハンカチなんて要らない。君は、僕が何が必要であるか知っているだろう？」

「あなたは、お金が欲しいんでしょう。あなたが宗漢を放してくれれば、直ぐにお金を渡すわ」

江暁歌が金庫を開けると、寧岸は金庫の中にある札束に目をやった。彼は冷ややかに笑って、江暁歌に言った。

「五万八千元数えてくれ」

「自由に持って行ってください」

寧岸は、

「君は、僕の人格を汚してはいけない。君は、僕が勝手に人の家の金を持っていくとでも思っているのか？君は、お金がありさえすれば、思いのままに他人を支配し、他人を軽視できるとでも思っているのか？この点が、君の現時点における最大の過ちだ。全く胸くそ悪い。僕のために五万八千元数えてくれ。一分（貨幣の単位）たりとも多くてはいけない」

と言うと、また一声冷ややかに笑った。

江暁歌は寧岸の言う通りにするしかなく、五万八千元数えるとお金をスーツケースに入れた。

寧岸は、江暁歌にスーツケースを彼の足下に置くように指図すると、外側から鍵を掛けて宗漢をトイレに閉じ込めた。

彼は望み通りになると、五万八千元が詰まったスーツケースを手に持った。彼は、もう一度笑ったが、その笑い方に残酷さが見え隠れしていた。彼の血の気のない顔に、冷や汗が流れた。

彼は、

「君は、ずっと僕を騙してきた。言っていることが嘘ばかりだ。君自身は自分が崇高な人間であると思っているかもしれないが、君は、江暁暢と同じ穴の狢だ。江暁暢は君よりましだ。彼女は言ったことは実行するが、君は言っていることとやっていることが違うじゃないか？嘘偽り極まりない。僕は、君が可哀想で仕方がないよ」

と哀れみたっぷりの口ぶりで江暁歌に言った。

江暁歌は苦笑いするだけだった。

寧岸は突然朦朧としてきて、目に涙がきらりと光ったように見えた。

彼は、素早く江暁歌の手を掴むと、中世の貴公子のように、彼女の手の甲に軽く口づけをした。

「さようなら」

やさしく一声掛けると、亡霊の如く忽然と姿を消した。

（二）

フロアーに残された点々とした血痕を除けば、全てが嘘のようで、何事も起こらなかったようでもある。

江暁歌は、ぼんやりとドアを見つめていた。寧岸がどこから入ってきて、どこに姿をくらましたのか、信じる勇気がなかった。

彼女はただ泣きたかった。彼女はこの時、一人の真の友、彼女と苦楽を共にした友人を失ってしまったことを知った。彼女の生命の一部が崩れ落ちていくのを感じた。もはや修復も繕う方法もないのだ。

この苦難に満ちた日々、悲惨な境遇、一人ぼっちで身よりもなく、孤独で夫もいない、身内もいない日々、もし友達さえもいなかったら、江暁歌はぬかるみの生活をくぐり抜けて来ることができただろうか？長い道のりを今日まで歩んでくることができただろうか？

あの当時、彼女の友達は、言うまでもなく寧岸だった。彼女の唯一の友だった。

江暁歌は暫くじっと座っていたが、トイレの中から宗漢のドアを叩く音で、はっきり意識を取り戻した。

この日以来、寧岸は行方がわからなくなった。

宗漢は全力を尽くして捜した。趙耀根は、極道と堅気の両方の友達に頼んで寧岸を捜し、マカオはむろん、太平洋の対岸ラスベガスまで足を伸ばしたが、寧岸の形跡を発見できなかった。

寧岸は、まだこの世に生きているのか？彼は戻って来ることができるのか？

寧岸のことを思うと、江暁歌の心は震えた。親愛なる友人、寧岸。苦楽を共にし、艱難を同じくした義兄弟、寧岸。あなたは今、何処にいるの？みんながあなたのことを心配していることをわかっているのかしら？呉文彗は、あなたのことで憔悴しきってしまったのよ。一日中涙で顔を濡らしているわ。寧遠もいつも泣き叫び、お父さんに会いたがっているのよ。あなたは、私が見えますか？私の声が聞こえていますか？みんなは、あなたが既に死んでしまったと思っているわ。

江暁歌だけは、寧岸が見知らぬ土地で生きていて、苦しみながら卑しい身分に身を落として生き続けていると思っていた。

（あなたは、みんなのことを知っているわ。でも、みんなはあなたがどうしているか知らないのよ。こんなこと

って不公平過ぎるわ。なぜ、いつまでもあなたのことを心配しなきゃいけないの？あなたは、まだ中年じゃない。チャンスはいくらでもあるわ。自暴自棄になっちゃダメよ。私達のところに帰ってくるべきだわ。最初からやり直すのよ）

（二）

趙耀珍は、健康肩叩き機で母親の体の凝りをほぐしている。母親は、根気の良い念入りな按摩に気持ち良さそうだ。

母親は目を閉じ、親孝行な娘の按摩に満足げで、ほとんど眠りかけていた。

「お母さん、立ってみて。二、三歩歩いてくれない。関節の痛みがどうか見てみるわ」

趙家の母親は目を瞠ると、苦労して立ち上がり、行ったり来たりしながら、趙耀珍の手から健康肩叩き機を受け取って言った。

「少し楽になった。自分でやるよ。お前は毎日時間を割いて、私の世話をしに来る必要はないんだよ。わたしゃ、まだ死ねないからね」

「お母さんが叩けないところもあるでしょう。みんな、按摩院に行ってやってもらっているわ。自分で按摩なんてできないでしょう。お母さんのところに通っても、一向に構わないわ。平気よ」

母親は、

「耀珍、お前のような娘を持って、本当に幸せだよ」

と感動して答えた。趙耀珍は、

「お母さん、よしてよ。そんなこと言われるとむず痒くなるわ」

と言った。

「お前は、何とかして仕事を探さなくちゃね。お前のこの若さでリストラされて、これからどうするんだい？」

「私、ずっと探しているのよ。私のような人間は、仕事が見つからないのよ」

母親は、

「やっぱり、耀根に方法を考えてもらったら？あの子の会社で、仕事をしたらどうなの？お前はまじめだから、耀根に頼めないんでしょう。私が話をするから。あの子には、たった一人の妹しかいないんだからね」

と言った。

「お母さん、余計なお節介を焼かないでちょうだい。兄さんの会社は、若い人が必要なのよ。私が行って何ができるって言うの？一人給料をもらう人が増えるに過ぎないわ。評判を悪くするだけよ。私達一家は、兄さんに食べさせてもらっているのよ。それで十分じゃないの。お母さんは、兄さんが疲れも感じず、面倒くさがらないとでも思っているの？兄さんに頼むなんてやめましょうよ。言っておくけど、兄さんになんか仕事を探してもらわないから」

「お前ったら、本当に強情なんだから。でもね、お前が一生涯みんなのために家事をすることなんてないんだよ。こうしてお前を巻き添えにするくらいなら、私は早く死んでしまったほうがましだよ」

趙耀珍は、

「私は、自分に合った仕事を見つけるから安心してちょうだい。お母さんが健康で、嘉児が元気で勉強が良くできて、一家が平穏無事で健康でありさえすれば、不満なんてないわ」

と言った。母親は、

「寧岸は、まだ生きているか、死んでいるか、わからないのかい？」

と訊ねた。趙耀珍は、

「そうよ」

と答えた。母親は、

「可哀想に。私は、本当に寧岸が好きだったのよ。汪暁暢は、外国人に嫁いだそうじゃないか？彼女はいつも化け物みたいで、人をびっくりさせたよ。彼女がこんな年になってまで結婚するとは思わなかったね」

と言った。趙耀珍は、

「外国人と結婚したって、何も良い事なんてないと思うわ。二人の会話はなかなか意思の疎通ができないわ」

と言った。母親は、

「それもそうだね。お母さん（汪暁歌・汪暁暢の母親、沈鳳宜）の病気が良くならないのもうなずけるね。もし暁歌が江家を支えていなければ、おそらく暁暢のお母さんは、とっくにくたばってしまっていただろうよ」

と言った。趙耀珍は、

「そうよ。江家は、暁歌姉さんに全て頼っているのよ」

と言った。母親は、

「暁歌と言えば、私の気持ちも辛いんだよ。彼らは復縁することになったのよ。復縁すれば、私達の家は万々歳さ」

と言った。趙耀珍は、

「彼らは復縁に前向きになったみたいよ。最近、嘉児ったら、家に入って来た時も、出て行く時もウキウキして、鼻歌を歌っていたわ。彼らは今忙しくて、一段落してから復縁するみたいよ。兄さんが言っていたわ。今回は賑やかにやりたいってね」

と言った。母親は、

「それはいいね。賑やかに披露宴をやるのはいいことだよ」

と言った。趙耀珍は、

「お母さん、私は、いい加減な話をしているんじゃないのよ。暁歌と兄さんは、こうなる運命にあったのよ。縁談をぶち壊す事なんてできないんだから。お母さんど

う思う？」
と自信ありげに言った。
母親は、恥ずかしくて決まり悪そうだった。
「しょうがない娘だねえ。昔のことを話題にして何をしようと言うのかね」

（四）

藍雲は、手の中で赤青鉛筆を転がしていた。毎回番組を制作する時、彼女は終始こうして無意識な動作をしている。彼女は、既に放送の準備を終えていた。彼女の真夜中の生番組〈深夜あなたに語る〉は、夜が更けるにつれて、リスナーが多くなって来る。
時計が黙って時を刻み零時を知らせると、彼女は軽く深呼吸して顔に笑みを浮かべ、マイクロフォンに向かって語りかけた。
一人一人のリスナーが、彼女の微笑みを見ていてくれると信じていた。
「ハーイ、藍雲です。親愛なるリスナーの皆さん、こんばんわ！二十四時間時は巡り、また〈深夜あなたに語る〉の部屋でお目にかかることができましたね。夜が更けて人々が寝静まる時間に、皆さんと私は、縁あって飽きることもなくおしゃべりできます。
ピッタリ、私達の呼吸は合っています。深夜、一番リラックスでき、おしゃべりに最高の一時、思い切り心の扉を開け放ち、耳を傾けてください。
何か苦しみ思い悩み、人には言えないけれど、その気持ちをわかってほしい、小さな秘密、そんな秘密がありませんか？何かわだかまりが解けないでいるのなら、一六八四四四六八にダイヤルしてくださいね。
ディスクジョッキーの藍雲と、人生の秘密を語り合いましょう。そして、共に深夜の時間を過ごしませんか？OK！電話がつながりました。もしもし・・」
返事が返って来なかった。混線しているようだ。受話器の向こうからかすかに聞こえてくる歌声と笑い声は、道楽の限りを尽くした未知の世界とつながっているようだ。藍雲が辛抱強く暫く待っていると、受話器の向こうに、そっと音を立てないように息をしている人がいるのが聞こえてきた。
「もしもし、どうぞお話してください」
相手はやはり何も言わなかったが、呼吸は明らかに荒くなっている。
電話を取り次ぐ当直の担当者は、藍雲にこの電話を切る合図をしたが、藍雲は手を左右に振って、受話器を置かないように頼んだ。
この電話はただごとではないと、ある種の直感が走った。
彼女は、

「もしもし、あなたが、話したくないのなら、電話を切りましょうか？」
と話しかけた。相手は、
「切らないで」
と慌てて答えた。
相手が続けてケラケラと笑ったので、藍雲は怖くなり、ぞっとして身の毛がよだった。
「私は不幸な女よ」
「あなたの不幸な境遇に深く同情します」
「私は男に弄ばれて、捨てられた女よ」
藍雲は、
「別の見方をすれば、あなたは、既に自分を取り戻した女性だわ」
と言った。相手は、
「ありがとう。あなたの話は私にとって心地いいのよ。今の女の子達は、『相手の言葉を善意に解釈する』という言葉が好きだわ。でも、彼女達は、相手の言葉を善意に解釈するということがどういうことかをわかっているのかしら？あなたこそ、相手の言葉を善意に解釈する女性だわ。あなたは、女性の心を掴むことが上手ね」
と言った。藍雲は、
「ありがとう」
と答えた。相手は、
「いいえ。私の身の上話、聞きたい？」
と言った。
「話してみてくれない？」
「私はとっても美人よ。小さい頃から歌にも踊りにも優れていたのよ。男達の目には、傲慢なお姫様に映っていたわ。私はずっと幸せな生活を送っていたわ。私には強い優越感があったの」
藍雲は、静かに相手の身の上話を聞いていた。彼女はとても辛抱強かった。深夜番組の制作に必要なのは根気だった。慌てることなく、焦ることなく、他人のつぶやきに耳を傾けることができなければならない。一部の人間、特に女のつぶやきは、老婦人のてん足の長い布のように、臭くて長く、聞いていて眠気を催しそうになる。しかし、藍雲は興味のあるかの如く装い、この話と渡り合うことができたので、相手に心地よい感触と心のいたわりを感じさせることができた。
藍雲は、二年連続で最優秀キャスター大賞を受賞していた。彼女の受賞は偶然ではなく、彼女の技量によるものであった。
相手は、
「彼と知り合ってから、私の全てがぶち壊しになったわ。彼と知り合ったのは、私の最大の誤算よ。悪夢はここから始まったの。私は彼を愛していたわ。心から彼のことが好きだったの。彼だけを愛していたわ。彼も愛していると誓ってくれたの。私は彼の日常生活の面倒を見

て、事業でも彼を助けたわ。彼のために黙々と尽くしたのよ。最大の努力をし、彼の精神と肉体のいかなる要求も満足させ・・・・・・・。でも、ある一人の盛りを過ぎた女のために、私を足蹴りにして追い出したのよ。私は今、一文無しの弱い女よ。落ちぶれて、放浪しなくちゃならないわ。あっちこっちの舞台で踊ったり歌ったりして金を稼ぎ、どうにか生計を立てているのよ。もう何もかもが終わったわ。夢も希望もないのよ」

と身の上話をした。

相手の女性は、社交クラブの女だったんだ。芸術家と舞台で踊るダンサーの中間的なような存在だ。この話を聞いて、藍雲は多情な女が裏切られた物語であると思った。この類の話はよく聞くが、順序立てて効果的に対処し、仲裁する方法がある。彼女は先ず、相手の話を最後までしっかり聞き終えなければならない。時に、相手はリスナーに聞いてもらいたいだけで、話し終われば気持ちもすっきりするのだった。

「藍雲さん、この男は罪を受けるべきだと思いますか?」

これも、ホットラインではよく出くわす質問である。

藍雲は、

「あなたの気持ちはよくわかるわ。でも冷静に考えてみて。人を処罰するのは、私達の任務ではないわ。御上がすることと知るべきよ」

と話しかけた。相手は、

「御上って誰なの?これまで救世主なんていなかったわ。全て自分だけが頼りよ。私は彼を処罰したいわ。絶対に厳重に処罰してやるわ」

と答えた。藍雲は、

「どうやって処罰するつもりなの?」

と声を落として訊ね、そして、

「行き過ぎないようにね。法に触れてはいけないわ」

と言った。相手は、

「手痛く罰してやるのよ。彼が今までしてきた代価を払わせてやるわ。彼を死ぬまで後悔させてやるわ。苦しめてやるのよ。法律なんて何の関係もないわ」

と言うと、思いっきり笑った。

藍雲は、少し緊張していた。悪い予感がした。

当直のディレクターは、この電話を切りたかった。しかし藍雲は、彼に電話を切らないように合図した。藍雲は、

「お嬢さん、絶対に極端に走ってはいけないわ。お互いにとって良くないと思うの。あなたが思いやりの心で彼に接すれば、彼は後悔するわ。それに、良心の呵責を受けるわ。これが、彼への一番良い処罰の方法だって信じたいの」

と老婆心ながら繰り返し忠告した。

「ちがうの。私はあなたの考えに同意できないわ。藍雲

さんは善良すぎるわ。私は長い時間準備してきたわ。そして、長いこと待ったの。私は、居ても立ってもいられないほど結果を知りたいの。原因があれば、結果が必要よ。時計を見て!もう夜が明けたわ。今日が始まったのよ。今日、この街の何処かで、間もなくハリウッドのようなアクション映画が始まるわ。きっと最高に痛快よ。私は今、とっても緊張しているわ。とても興奮しているの。私は、麻薬を吸いたくてたまらないわ。でも私は今、この最高の道楽に染まっていないのが残念よ。私は電話をするわ。この幸せと興奮の時を私と分かち合う人がいるためにね。私が受話器を握った手が、興奮して震えているのがあなたに見えるかしら?私の声はまとも?私は自分を抑えられないわ。全身がブルブル震えているの。あなたに伝わっているかしら?」

「お嬢さん、どうか顔を隠さないで。私達、よく話し合いましょうよ」

「私が、なぜ顔なんか隠さなければいけないの?逃げも隠れもしないわ。私は公明正大よ」

「私は、あなたがただゲームをしているに過ぎたいと信じているわ。そうでしょう?私達は、直に会って話をすることができるかもしれません。良い案があるわ。ひょっとしたら興味があるかもしれません。私にあなたの電話番号と連絡方法を教えてください。それに、あなたの名前も教えてくれませんか?」

「私は何も言えないわ」

「お嬢さん、あなたは本当のことを言っていないわ。そうでしょう?天が張り巡らした法の網は広大で、目は粗くとも、悪人や悪事を逃がすことはないって言うわ。もしあなたが本当に法に触れたら、警察はいずれあなたを探し出すでしょう。あなたの考えていることは、ただのゲームよね?」

「ちがうわ。ゲームは嫌いよ。ゲームは小さな子供のすることよ。私は大人よ」

ガチャンと電話は切れて、受話器の中から通話中の信号音が聞こえてきた。

(五)

藍雲は、椅子にもたれ掛かって深呼吸をした。彼女はいささかめまいがし、低血糖のような感じだった。そんなに長くない電話だったが、とても疲れてしまった。彼女は、

「電話のディスプレイを見てくれない。彼女の電話番号が残っているかしら?」

と当直のディレクターに訊いた。

彼はOKの合図を出して、電話番号が残っていることを藍雲に伝えた。

「携帯電話局に電話をすることができるかしら?誰が

名は、『予告された謀殺事件』だった。どのような謀殺事件が事前に予告できるのかを、この本を読む前にかつて考えたことがあった。この本を読み終えた後も、釈然としなくて、結局それが、そもそも小説に過ぎないのか、この小説がフィクションなのかと考えた。しかし今、現実の生活の中で、本当に『事前に予告した犯罪』が起こったら、謀殺事件を起こすかどうかは別として、事前予告するだけの勇気があるだけでも人を驚かすのに十分だった。万に一つの失敗もない策略と準備が周到にでき上がっていて、事件が起こらないならともかく、事件を起こす以上、必ず絶対の自信があった。だから、犯人はホットラインに電話を掛けてくる勇気があったのだ。天が張りめぐらした法の網は広大で、目は粗くとも、悪人や悪事を逃すこともないというのも一つの考え方だ。

しかし、もう一方で茫々たる人の海の中に、法の隙間をくぐり抜けた魚がいるとしても、どれだけいるのか知り得ようか？誰も知らないのだ。

藍雲は、犯罪の発生を阻止することができるかは別として、少なくとも全力を尽くせば、犯罪によって招いた最悪の結果を軽減することができると思った。そして、自分は何をすべきか考えた。

藍雲は、先ず警察に電話を掛けることを思いついたが、直ぐにこの方法を取り下げた。警察に電話がつながった後のやりとりは、火を見るよりも明らかだった。――

電話をしてきたのか調べて」

「調べる必要がありますか？」

当直のディレクターは、

「彼女は気がおかしくなっています。少なくとも精神障害の持ち主です」

と答えた。

当直の編集者は手振りで合図した。彼女にホットラインをつなぐ合図をした。生放送は中断することができなかった。

リスナーは、やきもきしながら待っている。藍雲は、片方の手でみぞおちを押さえて自分を落ち着かせ、もう一方の手で受話器を握った。

今度電話がつながった人は男の人で、話が始まると大いに褒め讃えてくれた。

藍雲は、気もそぞろにこの男の人が過分な賛美をしてくれているのを聞きながら、「これは絶対ゲームではない、ゲームなんかじゃない」と思い続けていた。

この町でまもなく起ころうとしている犯罪がある。それは、どんな人の身の上に起こるのか？

犯人は、意外にも大胆に事前にラジオ放送局のホットラインに電話を掛けて通告して来た。報復と懲罰のわめき声を上げ、大胆で無謀と言うべきであった。

藍雲は、一冊の本を読んだことを思い出した。本の題

あなたはなぜ警察に連絡してきたのか？ホットラインにかかってきただけじゃないか。あなたには何の証拠もないじゃないか。ディレクターが言っていたように、相手はもしかしたら精神病を患っている病人かもしれない。彼女の常軌を逸した話しぶりは、警察に出動を要請するのに値するのか？この七百万人の大都会、武漢には、この種の妄言を言う人が沢山いる。警察が彼らのために出動したら、たまったもんではない。

あなたに予感があり、その予感が正しく、これまで外れたことがなかったとしても、予感は予感に過ぎず、予感のために多くの人を動員し、その手を煩わすことはできない。今は、事態の推移を静観するだけである。犯罪の手がかりが露見してこそ、他人の救援を得ることができるのだ――

事件が起こる前に、全ては自分が対処するしかないのだ。

（六）

生中継が終わると、藍雲は直ぐに宗漢に電話を掛け、彼を眠りから覚ました。

「この電話は得体のしれないものではなく、恐れる必要もない。ただ冗談に過ぎないと思うよ。現代の生活リズムは速すぎる。みんな緊張して生活していて、心理状態が正常でない人が多いのさ。君達の番組それ自体、時代の要請で生まれてきたものだ。社会の電圧を下げる効果があるのさ。鬱憤晴らしと妄想をみんなに抱かせているんじゃないのか？」

「宗漢、私を信じてよ。私の予感は間違っているかしら？彼女はマスクをかけているけど、彼女の声からは真実を感じるの。彼女はまともよ。間違いないわ。でも、どうしても彼女が誰なのか思い出せないの。彼女は、私の近くにいるわ。私の側で事件が起こりそうな気がするのよ。私はびくびくしっぱなしよ」

「わかった。別にたいしたことはないよ。街全体がひっそりしているよ。みんなぐっすり眠っている。さあ、寝よう。また明日、あ、そうか、もう今日になっている。今日は週末だ、晩ご飯でも食べよう」

藍雲は、

「いいわ」

と無理して答えた。

宗漢は受話器を置いたが、なかなか寝付けなかった。たった今藍雲を慰めあれこれ妄想を起こさないように言ったばかりで、ぐっすり眠るように言ったものの急に何か思ったのか、彼はよく考えてからためらうことなく受話器を持って、ダイヤルを回した。

一しきり長い電話の呼び出し音が鳴り響いた後で、江暁歌はとうとう電話に出た。彼女は、深い夢の世界から

呼び覚まされた。声もうつろに受話器に向かって、
「もしもし」
と一声呼び掛けた。
「宗漢です」
江暁歌は、驚いて目を覚ました。
「宗漢、何、こんな時間に？」
「あなたのところは、特に変わったことはないですか？」
「私は眠っていたわ。大丈夫よ。何かあったの？」
「何もありません。早く休んでください」
「電話を切らないで。何が起こったのか教えて」
「本当に何もありません。嫌な夢を見たのです」
江暁歌は、
「不吉な夢なんて見ていないわ。全て上手くいっているわ。休みましょう」
と笑って受話器を置いた。
宗漢はベッドに横になったが、どうしても寝付けなかった。
江暁歌が事件に巻き込まれるかもしれないという思いが、彼の脳裏にしっかりとこびりつき、拭い去ることができなかった。
彼はベッドから這い出て服に着替え、部屋を出た。
宗漢は、愛車のチェロキーのエンジンを掛けると、人っ子一人いないしんとした大通りを走り抜けて行った。
江暁歌のアパートの前まで来ると、駐車場を探してエンジンを停止させた。そこからは、ちょうど江暁歌の家の窓を見ることができる。宗漢は、座席にもたれて気持ちを落ち着かせた。彼は、じっと江暁歌の家の窓を見つめて様子を窺っていた。全てが静かで穏やかだった。たまに夜中に行き来する人が、ぱたぱたと音を立てて通り過ぎて行った。
眠気が宗漢を襲った。彼の目は次第に閉じて行ったが、またぶるっと身震いして、目をしばたたき、顔をこすって意識をはっきりさせた。そして何度も江暁歌の家の窓をしっかり見つめた。
夜が明けた。宗漢は、依然として大通りの真向かいのあのドアを見つめていた。通行人は次第に多くなってきて、どうやら昨夜は何事もなく済んだらしい。江暁歌は、遂に元気はつらつとドアを開けた。宗漢は興奮してクラクションを鳴らし、江暁歌に知らせた。そしてすぐに車から降りると、江暁歌に手招きした。
江暁歌は下に降りてきて、驚いて言った。
「宗漢、こんなに早く何しに私のところに来たの？」
宗漢は、
「そうだね。早いかなあ。でも、あなたも出勤しなければならないんでしょう？」
と言葉を濁した。
「宗漢、何があったの？真夜中に電話を掛けてきたりして、いったいどういうことなの？」
「何でもないよ。真っ昼間に思い出すと変ですね。悪夢さ。あなたを追いかけて回して、殺そうとする奴がいるんだ。騒がせて、あなたを起こしてしまって申し訳ありません」
しかし、江暁歌は嬉しかった。
「私をつけねらっている奴がいるって？あなた、アメリカのアクション映画の見過ぎじゃないの？でも感謝しているわ。ありがとう。上がっていってよ。朝食でも食べていかない？」

第三十章　口紅

（一）

彼らは何度もチャンスを取り逃していたので、今回は絶対失敗するわけにはいかなかった。
今回はあの娘の行動範囲を既に掴んでおり、単独行動を取り、誰の監視下にも置かれていないことがわかっていた。
彼らは最も成功率の高い時間に脅迫しようと、車の中でその時間が刻々と近づいているのをじっと待っていた。
「兄貴、依頼された仕事は難しいですよ。何度も尾行したんですが、今回はしくじりが許されません」
「お前はもう少し冷静になれないのか？大それたことをやろうと思えば、それ相応の覚悟が必要なんだ。沈着冷静に頭を働かせ、機を見てしかるべく行動し、安全第一、冷酷で素早い手口でやるんだ。お前達はアメリカのポリスアクション映画を観ていないのか？」
「何度も観ましたよ。最後に警察が勝利するんでしょう？」
「その通りさ。でもな、現実の生活の中では警察が敗北するんだ。彼らは警察を励ますために映画を撮影し、警察に勝利させるんだ。でなければ、誰が警察官になりたがるって言うんだ。誰も警察官になる人なんていないぜ」
「おー兄貴は随分と研究しているんだ」
「もしできることなら、俺も警察官になりたいよ。でも俺は既に監獄に入ったことがあるからな。警察官になる資格なんてないんだ」
「気をつけろ。お目当てが現れたぞ。この馬鹿野郎、何震えているんだ。娘は虎じゃないぞ」
江暁歌はマクドナルドからそう遠くない駐車場に車を止め、マクドナルドに向かって歩いた。角を曲がって大通りに出ると、潮のような人波にぶつかってよろめいたが、人混みをかき分けて前の方に進んでいった。遠くの

方にマクドナルドの、赤い看板に黄色のMという文字が見え、入り口に立っている嘉児が目に留まった。江暁歌は手を挙げて娘に合図を送りたかったが、凄まじい人の波が娘の姿をかき消してしまった・・・・

彼女は、宗漢がずっと自分の身辺警護をしていることを知っていた。

宗漢は、どうやらちょっとおかしくなったみたいだ。なぜなら、夜になると恐ろしい夢を見るからだ。今日は、昼間ずっと彼女の側にぴったり付き添っていて、ボディガードさながらだった。宗漢は、今日彼女に何か良からぬ事が起こると確信していた。どうして事件を起こすことができるのだろうか？そんなはずはない。今日は天気がいいし、気候はうららかだ。空は真っ青に澄み切って大気汚染指数は低く、体に感じる不快指数はゼロだ。街ゆく人々はみな喜びに溢れている。警察官がパトロール中で、事件が起こる兆候など全くなかった。

宗漢は、藍雲の影響を深く受けていた。藍雲が担当する深夜番組は、いつも神経過敏な人を相手にしているので、幻視や幻聴が現れるのもごく自然なことだった。しかし、もし幻覚を本当のこととして捉えたら、それこそとんだお笑いぐさだ。

江暁歌は宗漢を相手にしなかった。彼が私の身辺警護をしたいのならそうさせよう。たとえどうであれ、宗漢のひたむきな気持ちは江暁歌を感動させるに十分だった。彼女は、自分に対して心の奥深くしまいこんだ宗漢の気持ちを知っていた。彼女は、これまで彼にそのことについて触れたことはなかった。彼に恥をかかせたくなかったし、同時に自分も恥をさらしたくなかった。

嘉児は、大人のように大きくなっていた。彼女はリュックサックを背負ってジージャンを羽織っていた。そしてマクドナルドの入り口に立って首を伸ばしてあちこち眺めていた。

彼女は母親と会えずにいる。時計を見ると、約束の時間まで後二分ある。普通なら母親は遅れるはずがない。間違いなく直ぐ近くまで来ている。

一台の乗用車が嘉児の近くに滑り込んで来て、慈悲深く優しい運転手が、

「嘉児」

と声を掛けて来た。嘉児は、

「ハーイ」

と彼に手を挙げた。

「どうして僕を知らないんだい。僕は、君のお母さんの会社の運転手だよ。江社長は急に予定を変更したので、あなたを迎えに行って、帝苑ビアガーデンに連れて来るように言われたんです。早く車に乗りましょう」

嘉児は、

「私はビアガーデンに行かないわ。マクドナルドに行くのよ」

と躊躇しながら答えた。運転手は、

「街は人で溢れています。早く車に乗ってください。ほら、他の人の邪魔になっていますよ。車に乗ってから話をしましょう」

と微笑んで答えた。

嘉児は車に乗り込んだ。乗用車は突然クラクションを鳴らして、渋滞を突破して出て行った。

江暁歌は、人混みの中で嘉児の姿が現れるのを見かけた。しかし、なぜかわからないが、嘉児は一台の見知らぬ車に乗り込むところだった。江暁歌は一瞬ポカンとしたが、直ぐに事件が起こったのだと悟った。人混みをかき分けて突き進んで行くと、大声で狂ったように叫んだ。

「嘉児、・・・ダメよ」

彼女の声は、都市の喧噪の中でかき消されてしまった。彼女はどうすることもできず、ただ車が空を飛ぶように走り去っていくのを見ていた。

彼女の背後にピッタリと付き従っていた宗漢は、この光景を目の当たりにして大声で叫んだ。

「道を開けてくれ！女の子が誘拐されたんだ！嘉児が誘拐されたんだ！」

宗漢は江暁歌に向かって走りながら、携帯電話を取り出して電話を掛けた。

趙耀根は宝石店の貴賓室に座って、まもなく訪れる婚礼のために結婚指輪を選んでいた。宝石店の社長が彼の相手をしていた。

「結婚指輪がほしいんだ。僕の妻にプレゼントするんだ。一番良いものをね」

「最高の指輪は、勿論ダイヤモンドです。値段はとても高いですが、品質は絶対に間違いありません。手を伸ばして見ると、キラキラと四方に輝きます。高貴な方のステータスと愛の誓いの象徴です。他ならぬ趙社長ですから、十二%引きに致します」

趙耀根がちょうど結婚指輪を手にとってしげしげと眺めていると、携帯電話が鳴った。彼は電話を手にとってもしもしと言ったかと思うと、突然顔色を変えて立ち上がり、

「結婚指輪はここに置いたぞ。改めて出直して来る」

と社長に言い残し、何も顧みずに飛び出していった。

江暁歌はブルブルと震えていた。

趙耀根は、

「心配するな。暁歌、僕がついているよ。必ず娘を救い出すことができるさ」

と彼女を慰めた。宗漢は、

「あなた方の携帯電話とポケベルは電源を入れておい

てください。誘拐犯は、必ず電話を掛けて来るはずですから」

と言った。趙耀根は、

「暁歌、君は、誘拐犯をはっきり見たのか？」

と訊いた。江暁歌は、

「私は濃い色の乗用車を見ただけだわ。車種はたぶん富康よ。ナンバープレートは見えなかったわ」

と頭を横に振った。宗漢は、

「警察に通報すべきじゃないですか？」

と言った。

「焦らないでくれ。誘拐犯がどう出るか、暫く待ってみよう」

彼らはテーブルに置かれている電話をじっと見つめていたが、電話は鳴らなかった。

彼らは非常に苛立ち、江暁歌は一層焦って、涙がとめどなく流れてきた。彼らが気を揉んでいると、江暁歌の携帯電話が突然鳴り出した。江暁歌が慌てて耳に当てると、電話の向こうから女の子の声が聞こえてきた。

「お母さん、嘉児よ。早く助けに来て」

続けて一人の若い男の悪意を抱いた声が聞こえてきた。

「江社長、あなたの娘は私の手の中にある」

趙耀根は電話を奪い取ると、鷲掴みにして、

「お前は誰か言え」

と叫んだ。

「むやみに人を疑ってはいけません。やはり警察へ通報しましょう」

「いや、待とう」

「なぜ待たなくてはいけないの。耀根、ヤクザに頼んで嘉児を救いたいの？あなたは本当に馬鹿よ。ヤクザが腕前があるからって、どうして暴力を鎮圧してくれる警察にかなうかしら。警察にはかなわないわ」

「そうですよ。警察には数多くの近代的な偵察手段がある。必ず誘拐犯に勝つことができます」

趙耀根は暫く考え込んでいたが、遂に決心して、

「わかった。警察へ通報しよう」

と言った。

（二）

宗漢が彼の携帯を手渡すと、趙耀根は一一〇とプッシュした。誘拐犯が再び電話を掛けてきたのは、二日目の午前だった。次の日の明け方五時に、防洪堤東段（地名）の広々とした場所で、身代金を手渡して子供を引き渡す約束をした。

江暁歌一人が、現場に行くことを許されていた。さもなければ約束に背いたものとみなされる。

刑事事件担当の捜査官は、迅速に人質救出準備をした。

と言った。

「趙社長ですね。つけあがらないでくださいよ。あなたの娘は今、私達の手の中にあるのですよ。私達は、暫くお嬢さんの命の安全を保障します。但し、まとまったお金を用意してくれなければなりません。百万元です。あなた方にとっては大したお金ではないでしょう？現金で用意してください。二十四時間以内に、現金と引き替えにお嬢さんを引き渡します。警察に通報してはいけません。さもなければお嬢さんを殺害します」

ガチャンと音を立てて電話は切れた。

三人は、向かい合って黙っていた。

暫くして宗漢は、

「昨日、藍雲は予感したんです。彼女は早朝、リスナーからの電話を受けたんです。リスナーの女はある金持ちの男に捨てられた。今日、復讐の計画を実行すると言っていたそうです。私には、この事が嘉児の誘拐と関係があるように思えるんです」

と言った。

「道理であなたは丸一日、私に付きっ切りだったわけだわ。あなたは私が事件に巻き込まれるのを心配していたのね。結局、嘉児の身に降りかかってしまったわ」

「電話してきたのは女で、マスクをしていたんだ」

趙耀根はハッと悟って、

「唐燕影？あの売女め！きっとあいつだ」

趙耀根は、お金の入ったトランクを用意した。彼らは地形を巧みに利用して現場に進入して待ち伏せ、魚が網にかかるのを待つだけだった。明け方五時十五分、空がぼんやり明るくなってくると、誘拐犯はやっと現れた。

やはり、あの濃い目のボディの富康だった。その車は、江暁歌の白のボディのホンダから約二十メートル離れた場所に停車した。

人が車から降りてきた。嘉児だった。

嘉児は、スーツを着て革靴を履いた二人のヤクザ風の男に両側から挟まれるように腕を抱えられ、口には粘着テープを貼られていた。彼女は少しも恐れることなく、うろたえもせずあたかもゲームでもしているようだった。しかし、顔色だけは少し青白かった。

一人の男は五連発のピストルを持っていて、赤のネクタイが風に揺れ動いていた。富康の運転席にはもう一人の男が座っていて、手にハンドルを握りしめ、いつでも逃走できる用意をしているかのようだった。

この光景は、まさにポリスアクション映画さながらだった。人里離れた荒野、誘拐犯と人質、札束をいっぱい詰め込んだダイヤルロック式のトランクを手にして、誘拐犯から札束と引き換えに娘を連れ戻そうとする母親、土手の後ろで張り込みをしている警察。しかし、決して映画ではなく、生々しい現実だった。実際に起こっている事実は、映画そのもののようだ。

道楽の限りを尽くし、金品をペテンや暴力で奪い取り、贅沢三昧の生活を送る、奇怪な戯曲であり、物語でもあり、サスペンスでもある。三角関係あり、多くの人間模様あり、精彩を放った始まりと、意表をつく予想外の結末がある。だが、映画には仮説があり、ハッピーエンドがあるといってもいい。

あなたは、あなたの意志で結末を設定することができる。しかし、現実は残酷すぎる。結末には、たった一つの結果だけが待っている。結末は起こり、取り返しがつかないのだ。人は、一度死ねば二度と目覚めない。結末はあなたが決めることができないのだ。

(四)

趙耀根は非常に緊張して、両方の大きな手から冷や汗がどっと流れてきた。

彼はとっさに、警察に通報したことを少し後悔した。嘉児は、警察とヤクザが交戦する危険な場所に身を置く可能性がある。

彼はひそかに、警察が先ず段取りしたように、人質の受け渡しが成功した後で、ヤクザに追い打ちをかけることを祈っていた。彼は、ヤクザが最終的に逮捕されるかどうかなど眼中になく、ただ娘が無事に帰って来ることだけを願っていた。落ち着かなければいけない。

ヤクザであろうと警察であろうと、みんな衝動に駆られてはいけない。ルールに従って事を処理するのだ。彼はお金などどうでもよかった。彼は娘が助かれば、それで良かった。男達がお金を手にした後で、嘉児を解放してくれることを望んでいた。この時、彼の抱いた最大の願いは、着実に娘をこの手で抱きしめ、もう二度といかなる危険にもさらさないことだった。

彼は、江暁歌がちょうどヤクザ達の要求したダイヤルロック式のトランクを提げて、彼らに近づいて行くのを見ているところだった。江暁歌は落ち着いていた。命を失っても惜しくないようだった。

江暁歌は数限りない苦難を経験し、この世の辛酸をなめ尽くして来た。鍛練によって冷静沈着さが備わり、異変に遭遇しても動じなくなっていた。目の前に映し出される全ての人物の中で、彼女だけが趙耀根を安心させた。

彼女は最も危険な役柄を演じ、完全にこの役柄を全うすることができた。かえって彼女の冷静さが二人のヤクザを緊張させたかに見えた。そのうちの一人のピストルを持つ手は震えていた。しかし、初めて世間に出る新人社員のように、かっとなって興奮し、愚かなことをしないことを願っていた。この女は、たとえ冷静であっても、所詮は一人の女でしかないのだ。彼女はお前達に脅威をもたらすものではない。二人の男は瞬きもせず、目を凝らして江暁歌をじっと見つめていた。ピストルを持った

男は彼の五連発銃を水平に構え、銃口をぴたりと江暁歌に向けていた。空気はにわかにピーンと張り詰め、一時凍った。

江暁歌は依然として冷静沈着に前に向かって歩いている。

ヤクザは、

「止まれ」

と大声で叫んだ。

「もうこれ以上動くな」

江暁歌は、言ったとおりに立ち止まった。

「トランクを置け。下がれ！」

「先ず人質を解放して、娘を自由の身にして」

趙耀根は江暁歌に、彼らの言ったとおりにトランクを置いてもらいたかった。

彼らを怒らせてはならない。彼らに危険のにおいを嗅がせてはいけない。彼らの目の前で、とやかく言っても何の意味もない。それにはいかなるメリットもない。江暁歌は所詮女だ。世の中の苦労をなめ尽くしてはきたが、やはり男のように駆け引きはできない。

趙耀根は、彼女に向かって叫びたかった。彼女に気づかせたかった。冷静さを取り戻し、自分の気持ちをコントロールさせたかった。しかし、叫ぶことも注意を促すこともできない。彼にできることは、心の中の強烈ないらだちを一生懸命抑え、事態の推移を静観することだけだった。

男は、

「トランクを置け」

と今一度叫んだ。

江暁歌は、彼らが人質を解放するように言わなかったし、トランクも置かなかった。

彼女はためらった。どうやら彼女は自信のない商売、百万元を失った上に娘を救出できない商売をしたくないようだった。しかし、百万元など取るに足りないものだ。娘は一番大切だ。トランクを置こう。トランクを置けば、娘の安全を確保することができる。娘が生きていさえすれば、彼女を救い出すチャンスはあるんだ。

(五)

趙耀根は、草木がうっそうと茂っている後方に隠れていた。彼は、江暁歌と男がやりとりしている直ぐ近くにいた。男の白いシャツの襟元の灰褐色の汚れがわかるほど近くにいた。

江暁歌が表情をこわばらせ、無表情でトランクを提げた手の関節の血の気がなくなり、青白くなっているのが見えた。彼女の緊張が頂点に達しているのがわかった。

情況は既に臨界点に達し、一本の弦がぴーんと張られ、これ以上張り詰めたら切れてしまうことがわかってい

た。

一触即発の状態だ。彼は、危うく呼吸が止まりそうになり、窒息寸前だった。最も危険な時間だ。この時、手柄を立てたいと意気込んでいる警官が軽率に飛び出して来て、男を捕まえないことを願った。そして男がしきたりを無視して金を巻き上げ、人質を殺害して逃走してしまうことを恐れた。今の世の中は法を無視し、規則を重んじない時代だ。人はほしいままに振る舞い、やりたいようにやれば、デタラメな事態が起こるだろう。しかし、彼はいかなる突発的な事件も娘の身に起こってほしくないと願っていた。

よかった。江暁歌は突然納得したように表情を和らげた。そして男に向かって微笑むと頷いて合図し、トランクを置いた。トランクを置くと、彼女は意外にも外国映画のシーンのように両手を挙げて、男に和平と誓いを現し、彼らへの敵対感情を鎮めた。

男は案の定胸を撫で下ろし、二人は互いに目配せした。彼らには、おのおの演じる周到な役柄があった。江暁歌は、まさに手を挙げながら後ずさりし、ピストルを持った男は直ぐに周囲を見渡し、何も手にしていないもう一人の男が、トランクを取りに行く準備をしていた。

この時、趙耀根はチャンスを見つけた。これは、真に熟練した人間だけが見いだすことのできる間隙であった。一瞬、男達は体力や気力が抜け、注意力が散漫になった。ただ、これは心の中で悟ることはできても、言葉では伝えることのできない感覚だった。もしこのチャンスを掴んで戦いに挑めば、ひょっとしたら一撃で相手を倒し、嘉児を救い出すことができるかもしれない。しかし、趙耀根はこのチャンスをものにしたいとはあまり考えなかった。もし、土手の背後に隠れている警官も、このチャンスを利用できるということかわかったとしたら、このチャンスを利用しないでほしいと趙耀根は思った。なぜなら、このチャンスの成功率は最大で七十%しかなく、嘉児には危険すぎた。嘉児のために、先ず男にお金を受け取らせることが、やはり適切な処置だった。

しかし、趙耀根は、嘉児もこのチャンスを見つけたとは思ってもみなかった。

嘉児の体には、趙耀根の遺伝子がある。彼女は戦機を捕らえることに天性の才を備えていた。趙耀根が心配そうに土手の背後に隠れていた警官の動静を気に掛けていた時に、嘉児は迅速に行動した。嘉児は不意に体の向きを変えて、ピストルを手にした男に飛び掛かり、彼にきつく抱きついた。そして膝で彼の股間を猛烈に突き上げた。この思いがけない打撃に、男は悲鳴を上げた。嘉児は必死に男の支配を逃れて、草むらに飛び込んで来た。彼女は、まさか父親が隠れているとは思いもよらなかった。二つの魂が引き寄せ合う、こんな事があるだろうかと思った。

趙耀根は娘の前に現れ、一切を顧みずに娘に突き進んで行った。足には草木が突き刺さり、血が滲み出た。彼は走りながら娘に向かって叫んだ。

「嘉児・・・嘉児・・・」

彼には、娘の顔から驚きと喜びが溢れているのが見て取れた。娘は父親が、ここで自分を待ってくれているとは夢にも思わなかった。

娘は両腕を挙げ、甲高い声で、鷹の爪を必死になって振り切って逃げる鳩のように、父親の懐めがけて飛び込んで来た。

ピストルを持った男は痛手を負いながらも立ち上がると、歯ぎしりしながら手の中の五連発銃を水平に構えた。

父親は、両手を伸ばして娘を迎え入れた。娘は彼の掛け替えのない子で、彼の命そのものだった。娘のために、彼の全てを投げ出しても良いと思った。

この時、彼は娘の背後にゆっくり銃口が上がるのが見えた。

彼は何のためらいもなく前の方へ飛び出して、娘を押しのけた。

彼は、男の銃口にさらされた。彼にはこの時、男の田舎っぽい顔がはっきりと見えた。彼は、此奴が数千元果して雇い入れた殺し屋だと知った。殺し屋の背後に誰がいるのか？唐燕影か？彼に時間をくれさえすれば、調べ上げることができると思った。しかし、どうやら彼に残された時間は少ないようだ。真っ黒な銃口から突然光が炸裂した。

ひとしきりの乱射の後で、一人の男はその場で屍となって横たわり、二人の男はおとなしく捕らえられ、趙耀根は荒れ果てた土手に倒れた。

嘉児は父親の方に突進して行き、悲痛な叫びを上げた。

「お父さん・・・」

江暁歌は、趙耀根の元に駆け寄り、手で彼の傷口から噴き出る血を塞ごうとした。が、鮮血は手の隙間からとめどなく溢れ出し、止血することができなかった。彼の命が流れ出ていた。

江暁歌は、

「彼を助けて。彼を助けて」

と一切を顧みずに大声で叫んだ。

宗漢も草むらに飛び込んで来てシャツを引き裂き、趙耀根の傷口をくるんだ。

堤防に停車した車を運転して、みんなで趙耀根を車に乗せた。

江暁歌は、

「耀根、頑張って！頑張るのよ！」

と彼に向かって大声で叫んだ。

(十八)

救急外来のすりガラスのドアに、ライトブルーの人影が揺れ動いていた。

江暁歌は、ガラスの向こうでせわしく動いている様子が想像できた。数人の医師や看護師達が虫の息の趙耀根を取り囲み、彼の命を救うため、現代医学がなしえるあらゆる治療を施していた。江暁歌は、いかなる代価も惜しくないと病院側に伝えてあった。

病院側も全力で治療に専念した。

今、江暁歌にはお金があった。お金は本来万能であってほしい。趙耀根を何とかして死線から連れ戻してほしい。

みんな、江暁歌を取り囲んで座っている。宗漢、藍雲、呉文彗、趙耀虎、趙耀珍、そして、張喜、それに、ずっとこれまで彼女と難儀を共にしてきた羅桂香……

彼らはみな黙っていた。宗漢の服には、まだ趙耀根の血痕が残っていた。趙耀虎は涙で顔を濡らしていた。

江暁歌は、涙が流れて来なかった。ただ厳しい眼光で、必死になってあのすりガラスのドアをじっと見つめていた。あのドアの中には、強健な男が横たわっている。奇跡を起こすことができる男だ。彼女は、この男が目をカッと見開き、ベッドから起き上がって、この世と冥土を隔てたようなすりガラスを通り抜けて、再び彼らの中に帰ってくると堅く信じていた。

彼女には、彼がいないなんて考えられなかった。娘の嘉児だってそうだ。彼らみんなが、趙耀根を必要としていた。

耀根、耀根！頑張らなきゃだめよ。必ず生きて帰って来られるわと、心の中で彼にエールを送った。

あなたは今、まるで空高く昇っていく太陽のようだわ。私も遂に苦労を乗り越え、これから楽しい生活が始まるのよ。太陽は、まさに昇り始めているわ。私達には、もう幸せな生活の光が見えているのよ。娘も私達に光り輝く笑顔を見せているじゃない。

憶えているかしら？あの頃、私達が結婚したあの頃、みんなで歌ったように、今、私達の生活には陽光が溢れているわ。太陽の光があまねく降り注いでいるのよ。こんな時に、あなたはどうして、みんなを残してこの世と別れようとしているの？いやよ、そんなの絶対にいや！私達が幸せに暮らせる日が、とうとうやって来たのに。

すりガラスのドアが、遂に開かれ、中から一台のベッドが押されて出てきた。ベッドに横たわっている人は、頭から足まで全身白いシーツで覆われていた。みな直ぐに結果を悟り、にわかに泣き声が漏れて来た。

江暁歌は悲痛な叫びを上げたかと思うと、その場で気を失ってしまった。

（七）

一ヶ月後、江暁歌はやっと頑張って元の精神状態を取り戻し、久しぶりに事務所に来た。

事務所は普段のようにきちんと整えられ、清潔で明るく、主が不在であってもちり一つ落ちているということはなかった。会社も通常通り機能しており、従業員達はいつものように出勤していた。生活は別に止まることなく、時は今なお流れていた。ただ趙耀根だけが、写真の中で微笑んでいるだけで、彼女の前に歩み寄って来ることはなかった。

机の上に、一通の手紙が置かれていた。

江暁歌が封を開けると宗漢からで、それは、簡潔に書かれた辞職願だった。

書面には次のように書かれていた。

尊敬する江社長

どうか、私が暁歌服飾会社で担当する一切の職務を辞することをお認めください。お身体を大切に　宗漢　吉日

江暁歌は、一時呆然とした。

（「吉日」って何時なの？今日？それとも昨日？）

暫くして、彼女は意識がはっきりすると宗漢の携帯に電話したが、この電話は電源が入っていないというアナウンスが聞こえて来た。彼女は宗漢のポケベルにかけて、暫く待ってみたが、電話もかかって来なかった。

宗漢がいなくなってしまった。

藍雲が江暁歌の事務所に入って来た。

江暁歌は、ストレートに藍雲に宗漢の行方を訊かなかった。彼女は先ず天気やニュース等の世間話をして、藍雲に彼女のコレクションを見せた。

趙耀根や寧岸、それに宗漢も含めて、江暁歌が口紅も集めているのを知っている人は誰もいなかった。

江暁歌は、産みの母親の形見を手に入れてから、口紅を集め始めた。どこに出かけても、いかなる状況下に置かれても、彼女は口紅を集めることを忘れなかった。彼女は様々な種類の口紅を二百本以上収集していて、上等なものから非常に品質の悪いものまであった。ニセブランドの模造品もあった。その中で一番安い一本は、彼女が南方へ出かけて行き、古着を仕入れた時に使ったものだった。色は個性的で素敵だったが、質はお世辞にも良いとは言えなかった。

逸品揃いの口紅を見ていると、平素から無頓着な藍雲もわずかに興味が生まれた。女は結局、天性小物が好きである。

藍雲は、

「どんな色の口紅が好きなの？絶対、本当のことを言ってね」

と江暁歌に訊いた。

「みんな好きよ」
「どうしてなの？」
「私は色々な色が好きで、特に濃くて鮮やかな色の口紅が好きよ。口紅は、私にとって希望と幻想よ」。
「わかったわ」
二人の女は、沈黙したまま向かい合っていた。
江暁歌は、彼女に宗漢の消息を尋ねなければいけないと思ったが、藍雲はそれを察したようだ。
「宗漢は、行ってしまったわ」
江暁歌は、
「彼は会社を辞めてしまったのよ」
と言った。藍雲は、
「彼は何も言わなかったの。ただ私のポケベルに『さらば』とだけ残して行ってしまったわ」
と答えた。
「彼は、どうしてあなたにこんなことができたのかしら？」
「私は別に、突然とも意外だとも思っていないわ。私と彼の別れは、遅かれ早かれやって来る運命だったのよ」
「なぜ？」
藍雲は、
「人と人との間では、出会いと別れはつきものよ。宗漢は本気で夢中になれる人だったわ。でも私は飄々と生きていくタイプだから。二人は全く考えが違うのよ。一緒になんかいられないわ」
と江暁歌をしげしげと眺めて言った。
江暁歌は押し黙ってしまった。
藍雲は、
「あなたに知らせたいことがあるの。私も間もなくここを出て行くわ」
と言った。
江暁歌は、驚いた。
「どこへ行くの？」
藍雲は、
「私は元々農村出身の娘なの。十五歳の時生まれ故郷を後にして、南方に出てアルバイトをして、ホテルと美容院を経営したことがあるわ。ダンスホールで受付嬢になったこともあるのよ。青春を切り売りして金を稼いでやっと大学に入り、私の目標だった勉強するという夢が実現したのよ。私の好きな職業にも就けたわ」
と言った。
藍雲の言うことは、いちいち驚くことばかりだった。
江暁歌は、聞いていてポカンとしてしまった。
藍雲は、
「宗漢は私の今まで送ってきた生活について何も知らないわ。彼と私が知り合った頃、私は大学生になっていたわ。彼は私のことが全くわかっていないの。過去の私も今の私もわかっていないの。彼は私の外見だけを見て

いて、永遠に私の心の奥底に入る術がなかったのよ。実際私は俗世間の喧噪にとっくに嫌気がさしていて、清涼な境地を渇望していたの。宗漢は私のこの世での一番の心残りであり、最後の希望でもあったわ。私は、全力で私達の気持ちを育てようとしたけれど、やはりダメだったわ。自分の心が日一日と遠くに行ってしまい、俗世間から何とかして必死になって逃げたいと思っていたの。そして、最後に気がついたわ。たとえ宗漢であっても、その気持ちをつなぎ止めておくことができないってね。どうやら全てのことは、人の力で強要する事ができないってことがわかったの。一昨日私は霊泉寺に行って、手続きを済ませて来たわ。出家して修行するの。宗漢にお別れを言おうと思っていたのよ。でも、彼に先に出て行かれてしまったわ」
としみじみと語った。
江暁歌は聞いていて心が塞ぎ、悲しくなって涙を流したくなった。
彼女は藍雲をなだめたかったが、どこから話して良いのかわからなかった。それに、今はどんな言葉も無駄だった。
藍雲は、
「もし、あなたが将来宗漢に出会ったら、私のことを伝えてください」
と言った。江暁歌は、
「私もたぶん、永遠に彼に会うことはないわ」
と答えた。藍雲は、
「会えるかどうかなんて、誰にもわからないわよ」
と言った。
江暁歌は藍雲のために涙を流した。
藍雲は、何事もなかったかのように穏やかな様子で、心は水が止まっているかのようであった。

(八)

江暁歌と嘉児は、あの昔懐かしい路地に入って行った。
江暁歌は、既に中年の女になっていた。
嘉児は、今まさに青春真っ盛りだった。
母と娘は、玄関に腰掛けている母親（趙耀根の母親）のところに歩み寄って行った。
母親は長男を亡くした痛手のためか、腰も背中も曲がり、髪は真っ白になっていた。
彼女は江暁歌と嘉児を見たが信じられず、目をこすると、もう一度二人であることを確かめた。
母親が立ち上がると、肩叩きが地面に転がった。
母親はよろよろと歩きながら、
「嘉児・・・暁歌・・・」
と叫んだ。
江暁歌は、微笑みながら近づいて行った。

嘉児も駆けて行った。
「おばあちゃーん！」
一陣の秋風が木の葉を舞い上げた。
この街、この路地は、昔と変わらぬたたずまいを見せていたが、どこかに世の激しい移り変わりを感じさせていた。
（完）

社　告（内規）

☆同人参加へのお誘い
私達は広く同人の参加を歓迎致します。
「まんじ」は作品発表のための共有の（ひろば）として季刊発行しております。
同人は同人費として月額二、〇〇〇円を拠出し、雑誌発行の経費の一部にあて、執筆同人は別に作品分量に応じた経費負担をするものとします。
☆維持会会員へのお誘い
本誌愛読者のうち、一部有志の方々が、誌友として維持会員になっていただいております。維持会員の会費は月額五〇〇円也として、数ヶ月分をまとめて前納して頂いております。
季刊の「まんじ」を発行時にお届けし、合評会のご案内、同人著作の単行本の紹介等を行い、また出版記念会や「まんじ」記念号パーティーへのご案内などを差し上げ交流を行っております。
＊同人費・維持会費の納入は郵便振替口座への振り込みを左記へお願い申し上げます。
郵便振替口座　〇〇二七〇―〇―六四五九二
加入者名　まんじ

密室銀行（十七）

匠　克仁

〈前号までのあらすじ〉
殺人事件に巻き込まれた竹森は、歴楽会（歴史研究会）に出席した。『武蔵坊弁慶の立往生』の講演である。
「もともとは二話完結の予定であった。だから、初回は題名の次に（前）と付けて書き始めた。
一回目の原稿が予定より進まなくて、（一）に替えた。もし、前編のままだったら、今回はタイトルの後に、後編第二部第三節パート4エピソード5その6…と付けていたかもしれない。
余白に遊び心で銀行合併の話を書いた。それで本スジから外れて、右往左往している。『文学』学的には揺蕩（ようとう・アポリア）というのだろうか。訓読みだと揺蕩う（たゆたう）であるが、ストーリーも人物の行動もたゆたって（揺れて）、作者もどう展開するのか分からない」

十三（続き）
竹森は講演会場で席に着くと、殺人事件の現場を思い出した。どうしても目の前の現実よりも常に事件のことを考えてしまう。
（武蔵坊弁慶の立往生が、今回の殺人事件関係がある訳がないな）
そのことは竹森も頭の中では理解していた。事件解決の糸口を何とか見付けたいという悪あがきである。
太って大柄な体格の支店長は、テレビで見た弁慶役の俳優に似ていた。弁慶と支店長の死体が想像で重なった。
（なぜ、鍵が死体の手の中にあったのだろう）
事件の謎の一つは、三本の鍵が死体の掌に固く握られたという事実である。
鍵は単に密室の中に放り込まれていたのでない。死体掌の中にあったことが密室の解明を困難にしている。
固く握った拳そのものが小さな密室のように竹森は考

えていた。
事件の時に竹森は死体の拳をこじ開けるようにして、三本の鍵を取り出した。
まるで支店長が犯人に奪われないように、固く握っていて、その状態で殺害されたような印象を受けた。
鍵が単に密室の中にあるのであれば、何らかの方法で密室の中に放り込んだと考えられる。
しかし、今回の事件では三本のシリンダー錠の鍵が密室の中にあっただけでなく、死体が握っていたのである。
耐火扉も通用口も閉まっていなくても、格子扉の鍵が死体に握られていただけでも、密室が成立する。
死体の手の位置は格子扉から離れていたのである。仮に犯人が格子の隙間から手を伸ばして、死体に鍵を握らそうとしても、それは不可能であった。
個々のシリンダー錠をどのように閉めたかというトリックと別にこの謎を解かないといけない。
死体が鍵を握っていた点で二つのケースに分けて、竹森は考えていた。
第一は、支店長がずっと鍵を握っていたことである。
鍵が被害者の手から離れなければ、犯人は鍵を使わず、格子扉と耐火扉と通用口の三つのシリンダー錠を閉めたことになる。この解釈では明らかに不可能犯罪である。
第二は、犯人が犯行後に死体に鍵を握らせたことである。
犯行後の犯人の行動を竹森は想像した。格子扉のシリンダー錠の鍵を掛けて、耐火扉のシリンダー錠の鍵を掛けてダイアル錠を回した。通用口を出てシリンダー錠の鍵を掛けた。最後に三つのシリンダー錠の鍵束を支店長の死体に握らせた。
そこまで考えて竹森は自分の推理に行き詰った。第二の解釈でも同じく不可能犯罪である。
第一、第二のどちらで考えても密室を解くことができないのである。
殺人事件の現場が複雑で、竹森はあらためて現場の状況を整理した。
密室を構成しているものを7つに分けた。

1 金庫室の格子扉のシリンダー錠
2 金庫室の耐火扉のダイアル錠
3 金庫室の耐火扉のシリンダー錠
4 支店の通用口の数字錠
5 支店の通用口のシリンダー錠
6 鍵を握る死体
7 時間的な密室

もちろん、7つは複雑に絡み合っている。
ダイアル錠と数字錠は外からは自由に閉められるので、シリンダー錠との組合せでどんな働きをしたかを考える。
最後は、全ての鍵がかかっていないとしても、時間的に犯行が不可能なので、殺人現場は密室といえる。

竹森と支店長が出勤してから、発見までの間に第三者が侵入して犯行をすることが時間的に不可能なのである。
鍵のトリックが全て解明されたとしても、犯行から発見までに犯人が侵入して殺人することが不可能なので、密室になる。
時間については実際に警察の方でも検証したと竹森は事情聴取の間に分かった。
通用口から地下の金庫室まで急いで往復するとしても一階の営業室を経由しなければならない。
表通りに面している営業室と裏口の通用口とは建物の反対の位置にある上に間に部屋をはさんで、廊下はS字になっている。
かなり迂回することになり、時間がかかる。しかも犯人は防犯カメラのデッキを盗むことまでしている。
その状況で殺人を実行して、密室を工作するにはどんなに急いでも最低でも二十分の時間は必要である。
しかし、竹森と支店長が入室してから、発見者が赤坂支店に到着するまで二十分もなかったのである。
時間の密室も全く見当がつかなかった。
今回の講演会は、死体が鍵を握っていたことの解決に役立つのでないかと竹森は思っていた。
武蔵坊弁慶の立往生は薙刀を杖にしている。弁慶が薙刀を握るのと支店長が鍵を握るのとを同一視して想像していたのである。
竹森が推理にふけっていると、講演会が始まった。
「弁慶の立往生は医学の面から可能性が有る、と私は考えています。今日は最後にその話をしたいと思います」
植野医師は冒頭で語った。
「私が弁慶を調べるようになったのは、医者の立場から立往生というのに興味を持ったからです。まずは弁慶の生涯と義経との関係について語りたいと思います」
講演の前半は、武蔵坊弁慶の人生や義経との関係について語られた。半ば過ぎた頃に立往生の話が始まった。
「武蔵坊弁慶は衣川の戦いで主人の義経を守り、無数の矢を浴びて殺されます。この時、立ったまま死亡したというので、弁慶の立往生として有名です」
核心部分になったので、竹森は集中して耳を傾けた。
「この話は後世の作り話と言われています。人は死亡すると、筋肉が弛緩するので、死亡した人間が立ち続けることはできないからです。しかし、本当に不可能と言えるでしょうか」
植野医師は受講者を見渡して問いかけた。
「死後硬直という現象から検証します」
歴楽会のメンバーは半分が医療関係で、半分が銀行関係であったので、植野医師の説明も専門用語を少しまじえて解説していた。
「死後硬直というのは死体の筋肉が硬くなる現象です。死亡により筋肉への酸素が届かなくなります。酸素が

必要な代謝はできなくなりますが、酸素の不要な代謝は死後も続くのです。その結果、筋肉中のＡＴＰ、アデノシン三リン酸というエネルギー源が使われて、グリコーゲンが分解されて乳酸を作ります。少しずつ筋肉のｐＨが下がります。筋源繊維のタンパク質であるミオシンとアクチンが結びついてアクトミオシンを生成し、筋肉が固くなります」

竹森は専門用語がよく分からなかったが、大筋は理解できた。鍵を取り出すとき指が固くなっていたのを竹森は思い出した。

（あれは死後硬直だったのでは）

植野医師の説明で、死後硬直の可能性を考えた。

「死後硬直は死後二、三時間で顎・首から始まります。死後六、八時間で手足その指に及びます。死後硬直が全身に及ぶのは死後十二時間くらいと言えます。硬直は一日から一日半続きます」

医学的な知識が無かったので、数分単位で発生すると勘違いしていたのである。

まさか六時間や十二時間や一日半といったそんな長い時間であるとは想像もしていなかった。

（死後硬直と違うのか）

竹森の素人考えはあっさりと否定された。

「しかし、例外的に硬直が早く進行する場合があります。例えば死体が特定の病気であることです。特定の病気というのは糖尿病です。糖尿病の人は正常な人と比べて死後硬直が早く進行します」

植野医師の言葉で竹森は思い出した。

（支店長は糖尿病だった）

葬式での義兄の波戸田元建設大臣が語っていた。

あの時は、まさか糖尿病が死後硬直と関係するとは想像もしなかった。

「死後硬直が糖尿病患者に早く現れるという事実は、医学界だけでなく、ご存じの方もいらっしゃるかもしれません。推理小説が好きな方でしたら、エラリー・クイーンの『オランダ靴の謎』を読んだことがありますか。冒頭のエピソードで死後硬直が早い理由は糖尿病であったと書かれています」

その推理小説を竹森自身は読んだことがなかった。読んでいればもっと早く気付いたかもしれないと思った。

支店長はかなり太っていて、１００ｋｇを越えていた。普段から「おれの体重は０．１ｔだ」と言っていた。

太太太（おおたふとし）というあだ名も付けられた。

もともと旧西都銀行の支店長や役員は太った人が多かった。太っているのは貫録があると言われていた。

一方、旧東城銀行の支店長・役員には太っている人は少なかった。自己管理ができない人間が部下を管理できないという理屈である。東城系の赤坂支店の行員も痩せた人が多い。

誰が調べたのか、合併当時の役員の平均体重は２０ｋｇ以上、西都の方が東城よりも多いと言われた。

「死体の体格によっても影響されます。例えば、筋肉質な人は死後硬直が早くなります」

熊本支店長は太っていて、糖尿病になるくらいだから脂肪もついていた。しかし、相撲やゴルフなど多くのスポーツをしていただけあって、筋肉量も相応にはあったであろうと思われる。

特に支店長の指は肉体労働者のように逞しかった。指であれば脂肪もあまりついていない。そもそも死後硬直は筋肉に働くものだから、その指の太さも影響があったかもしれなかった。

「生前に極端に疲労していた場合も早く進行します」

（そういえば金曜日は接待ゴルフだった）

事件の朝、「昨日は働き過ぎで疲れた」と支店長が言ったのを竹森は思い出した。タフな支店長が疲れたことを聞いたのが初めてだったので、相当な筋肉疲労がたまっていたのであろう。

「死体の状況だけでなく。周りの環境も死後硬直の速さは変わります。外気温が高いほど、死後硬直が早く進みます」

金庫室の中は死の危険を感じるくらい蒸し暑かった。あの時は金庫室の暑さで、自分も助からないと恐怖で怯えていたのであった。

（糖尿病・筋肉の量・疲労度・気温の条件で死後硬直が早く進むことを示している）

支店長の死体の状況は確かに死後硬直を早く進めるようになっていた。

（いくら複数の条件がそろっていても、何時間も経ってから始まる死後硬直がすぐに始まるとは考えられない）

竹森は素人なりに自問したが、講演を聞いていると、ますます現実的でないと思った。

しかし、その考えは植野医師の続く言葉で否定されることになった。

「実は死後十数時間でなく、死の直後に硬直が起きる例があります。これは即時性死後硬直と呼ばれる現象です」

植野医師の言葉に竹森は衝撃を受けた。

「即時性死後硬直」

竹森は思わず口に出した。

「脳幹が破壊されて死亡に至った場合に、死後硬直が即時に発生することがあります」

竹森は自分が脳を殴られたような感覚がした。

「脳幹というのは…」

植野医師はホワイトボードに漢字と大脳の断面図を書いて、ここですと指さした。

「プロレスを見たことがあれば、延髄斬りを知っているかもしれません。後頭部に蹴りを入れる技です。あの延髄も脳幹の一部です。他にも中脳や、橋（はし）と書い

て橋（きょう）という部位があります」
図の大脳と脊髄との間を黒く塗りつぶした。
「弁慶は仁王立ちの状態で無数の矢を受けて死にました。死因は何でしょうか。失血死でしょうか。刀傷と違い矢の傷ではその可能性は低そうです。
それに失血死では即死はしません。心臓を射抜かれたのでしょうか。それでも立往生の説明はできません。
弁慶の死因は脳幹の損壊によるものと私は考えています。無数に帯びた矢の内の一本が弁慶の脳幹を射抜いたのだと考えています。脳幹損傷で即死したために立往生という現象が発生したのです」
植野医師は脳の図に突き刺さる矢の絵を描いた。
「弁慶だけでなく、歴史上にはもう一つ有名なエピソードがあります。日清戦争のラッパ兵の話です。昔の教科書に日清戦争のラッパ兵が死んでもラッパを離さなかったという話が美談として載っていました。死んでも離さなかったのは、別に軍人の敢闘精神だからというのでなく、即時性死後硬直だと思われます」
（脳幹機能が破壊されて死亡した場合……まさに支店長が殺されたときが同じ情況だ）
支店長の死因は踏み台により脳幹を破壊されたことである。死の現象としては、弁慶やラッパ兵と大いに類似している。
（死体が鍵を固く握っていたのは、即時性死後硬直に違いない）
竹森は確信を抱いた。
歴楽会が終わってすぐ、竹森は和加刑事に電話して、即時性死後硬直の話をした。
しかし、刑事の反応はあまり良くなかった。素人が余計な意見をというような感じを竹森は受けた。
鍵を死体が持っていたことは、竹森の証言に基づくものである。
死体発見時には既に拳が開かれて、鍵が取り出されていた。鍵が握られていたという証拠は無いのである。
鍵が死体の手の中にあったかどうかは、警察では最初から重要視していなかったようである。
死体が鍵を握ったことを即時性死後硬直と証明できたとする。それでも、犯人が鍵を奪わずに、密室を出たのか、密室を出た後に鍵を握らせたのか判断がつかないのである。
そもそも即時性死後硬直が発生するのを予想して、犯行をすることなどできない。考え方によっては謎がより深まったかもしれない。
だからといって、竹森は落胆しなかった。
即時性死後硬直というのは、密室の謎の中では何十分の一に過ぎない。しかし、何十分の一でも少しは密室のトリックが明らかになった。解決に近づいているのは間違いない、と竹森は感じたのである。

太太太

匠　克仁

太った。
太（おお）いに太った。
太（はなはだ）しく太った。
太太（ふてぶて）しく太った。
太るという表現では不十分だ。大太りだ。激太りだ。極太りだ。超太りだ。メガ太りだ。
太った大きな犬ほど太った。ペンネームを変えて、大犬太（おおいぬふとし）にしようかな。
太太太（おおたふとし）の方が恰好いいかもしれない。
太太太に改名すると、次から取返しがつかなくなり、地団太を踏みそうだ。著者名でなく、題名にしよう。それに太田姓が、まんじに多いので、迷惑だしなあ。
太（ふて）い野郎だと悪徳代官のように言われそうだ。
太っ腹で、サービス精神旺盛なだけである。ぼくは一本太い筋を通す人間なのである。
太ったといっても、体のことだけではない。心の方でも太くなった。トコロテンのようにたくましくなった。心太つまりトコロテンで、ぼくの心は作られている。天下太平という江戸時代の小説の主人公として描かれた一心太助のように、精神的に強くなったと思っている。
太ったのは心だけでなく、志もである。大志ではなくて太志を抱いている。ぼくには夢がある。地球征服の次は太陽征服である。ふぉっ。ふぉっ。ふぉっ。
太ぉっ。太ぉっ。太ぉっ。太ぉっ。太ぉっ。
太ったのは、ｋｇ単位でなく。十ｋｇ単位である。いや太ったのは、十ｋｇどころではないのである。正確に

は50kgも太ったのである。

50kgも太るというのは異常なことであろう。なんと50，000gも太ったのである。単位を小さくすると50，000，000mgも太ったことになる。じつに50，000，000，000μgも太った。さらには50，000，000，000，000，000ygも太ったと言える。50，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000，000yグラムというととてつもなく0が多すぎて、本当に太った気がする。

1ygは、1ヨクトグラムと読む。1ygという単位は1gのマイナス24乗である。

0が多すぎて訳が分からないので、漢数字にしよう。

1兆より大きい数で考えてみる。まず、1兆という数は1，000億である。以下は同様に記すと…

1京（キョウでなくケイ）＝1，000兆。

1垓（ガイ、核・咳でない）＝1，000京。

1秭（ノギヘンに予、ジョ）＝1，000垓。

1穣（ジョウ、譲でない）＝1，000秭。

5穣ygもぼくは太ったのである。単位を変えると何か5穣ygって大したことなさそうだなあ。

50kgを大きい単位つまり、t（トン）で考える。

4捨5入すると、ぼくは0．1tも太ったのである。

0．1tとなると、もう人間ではない。

1匹の豚（ぶた）でもない豚野郎だ。豚足で豚（ぶた）れそうだ。

50kgは、500gのステーキが100人前分だ。

50kgは、500mlのペットボトル100本分だ。

50kgは、綿菓子でピル1棟分だ。

50kgは、ヘリウムガスで星1個分だ。

50kgの鉄のバーベルを体に括り付けているようだ。

50kgも太った、ぼくの現在の体重は、正確に書くと53kgである。

48年前に生まれたときより50kgも太った。

3，150gが、ぼくが生まれたときの体重である。

53kgというと、成人男性としてはかなり軽い。

14歳児の男性の平均体重が53kgである。

20才以上の成人女性の平均体重が53kg。

53kg。たったそれだけである。日中の変動を含めて55kg台までにぼくの体重は収まっている。

48年かけて徐々に増えたのでない。

25年間はたったの1kgも太っていない。

23歳で社会人になってからは、ずーっと53kgから56kgくらいの間を維持し続けている。

80年後に老衰で死ぬまで、変わらないだろう。

30年近く、毎日2～5回は体重を測っている。

1回目は目覚めてトイレに行ってから測る。そのときに53kgであることを確認している。多い場合に食事

10分の1豚である。○．一豚（トン）だ。

を1回抜かすなどして調整する。

1日に何度も測るのは、レスリング経験のためである。48kg級に出場したとき、減量前の通常の体重は、56kgあった。そこから、2週間で努力して、なんとか8kg減量した。計量が終わって、その日の1日だけで8kg戻り、56kgになった。

2日目にリバウンドでさらに2kg、つまり2日間で10kg増量して58kgになったのである。

10kg増えても、太った人は大したことないだろうが48kgからだと5分の1以上の増量である。

48時間くらいで、48kgから急激に10kg増えて58kgになると、映画の特殊撮影みたいで面白い。

2日ぶりにクラスメートに会って、誰？と言われた。

48kg級でなく、4．8kg級に出たかった。

4．8kg級なら生後間もない、ぼくが優勝である。

53kgの体重に対して、身長はどれくらいかというと159cmである。横も縦もミニサイズである。腹囲は69cmで、胸囲は90cmである。かつては、胸囲が1mあったが、なんとか筋肉を維持している。腹囲も59cmから増えているが、メタボには全く縁がない。逆3角形の体型なのである。

30年間というもの毎日、腕立て伏せをしている。昔は1，000回を1日でしていたが、今はだんだん減って10回だけである。100分の1に減ったが、それで

も0回と比べると、無限大倍である。

10%台しか体脂肪率もないので少ない方だ。学生の頃9%と1ケタだったので、少し悔しい。

80cm以上に腹囲がもし増えたら、ぼくはいさぎよく1文字に腹をかっさばいてみせる。

80cmになったら、腹を切って脂肪吸引手術をする。

159cmの身長と書いたが、正確には端数がある。

159．6cmがある年の健康診断の結果である。翌年159．7cmになった。0．1cm伸びた。次の年が159．8cmである。あと少しで大台だ。その翌年は159．9cmになったのであった。「なんで、こんなに1段1段なんだろう」おそらく、ぼくは、この世の中で1番、モーグルの上村愛子選手の気持がわかる人間だ。

1mmずつ1年間で確実に成長しているのである。

160cmの大記録に次こそ達成と思った。翌年測ると159．5cmと大きく失速してしまった。

160cmのK点越えができなかったのである。世界で1番、ジャンプの原田選手の気持がわかる人間だ。

159cm・53kgのぼくは小肉小背であり、つまりちびである。アカデミックに分類するとヒト科コビト族ちんちくりん属なのである。

ちんちくりんというのは、なんか変である。

ちいさい体の人をちんちくりんと呼ぶと思ったら、服

がちいさくて、反対に相対的に体の方がおおきいのもちんちくりんと使っている。
ちがう意味というより、真逆の意味である。
ちんちくりんというよりも、毎日お風呂に入ってるからちんちんクリーンである。
ちんちくりんというのは人をバカにしているようなのでちんちくがんとぼくのことを呼んで欲しい。
ちんちくがんについては、その題でエッセイを書く。
ちんげ、いや、ちんけな奴と思われている。ぼくは乙女ちっくでメルヘンちっくである。
ちきゅうを征服するのが、ぼくの夢であるが、同時にちちきゅうも征服したいのである。
ちびは年季が入っていて筋金入りである。
ちいさい頃から整列するときは、先頭ばっかりである。
ちいさい順番にばかり並ばすのは不公平な気がする。
ちょっと後ろの方にも並びたかった。
ちん長順なら、もう少し後ろになったはずである。ぼくちんは、前へならえ!号令で、条件反射で腰に拳が行っちゃうのである。
ちいさく前へならえ!でも堂々としている。
ちいさい女の子よりも男の子のぼくの方が小学生やようちえんじの頃はちっちゃかったのである。
ちに働けば角が立つ不自然な文章になった。
ちょー変な文である。調子に乗ってもっと変に書こう。
ちちちちがちちちだ。
ちちちち（父乳）は男性の乳腺から分泌物がでること。
ちちち（血乳）は乳腺から赤い分泌物がでること。
ちくびから赤い汁がでたのである。
ちちちちのちちちはちちのちちちちのちちだ。
ちくびの赤い汁は父も同じで、その血（遺伝）だ。でっち上げである。
ちっ!舌打ちをしてしまった。われながらくだらない。
ち的な話をしよう。痴的でなく知的である。
ちちは格物致知の致知で、知にいたる意味である。
ちちは誠意・正心・修身・斉家・治国・平天下に繋がる。
ちの字がひらがなばかりになっているが、適当に漢字にちかんして欲しい。痴漢でなく置換なので、けっして勘ちがいをしないように。
ちちとして進まないので、普通に書こう。
ぼくは生れてから一度も前へならえをしたことがない。
ぼくが前例に従うことができず、会社や社会で孤立するのはそのためである。そうだ、絶対にそうに違いない。
ぼくの小説がアホにされるのは、ちびのせいなのである。電信柱が高いのも、郵便ポストが赤いのも、地球温暖化もぼくの身長のせいである。
ぼくはランドセルに苦い思い出がある。
ぼかっと後頭部に真っ赤なランドセルがぶつかった。

ぼきっと心が折れるほどショックだった。
ぼくの身長が女子小学生のランドセルの高さなのだ。
ぼけーとぼくは女の子が歩いていくのを見ていた。
ぼこぼこにされたようにぼくは打ちのめされた。
ぼくがちびなだけでなく、その小学生の女の子が180cm以上あったのである。ぼくだけでなく、すれ違う人が振り返っていた。
ぶつからないように気を付けましょうと頭をなでなでしようにも手が届かない。
大人でランドセルに頭をぶつける体験をした人は珍しいであろう。
この原稿を書いている間に健康診断があった。肝機能で引っかかったのであるが、その話は別のエッセイに書く。
体重　53．9kg
腹回り　69．5cm
という結果は予定通りである。肝臓が腫れて腹回りが大きくなったが、こんなものだ。
身長　159．1cm
げげげげげ。
ぼくは、ぼかっと、ぼきっと、ぼけーっと、ぼこぼこにショックを受けた。
痴人でいる…じゃない、縮んでいるではないか。
恥丘の陰毛…じゃない、地球の陰謀に違いない。
おそらく、ぼくが地球制服をたくらんでいるので、地球が重力を使って、ぼくの身長を縮めたのだ。そうだ。絶対にそうに違いない。
ぼくは生まれてから一度も判断を間違えたことは無い。生まれてから一度も誤字脱痔をしたことがないくらいである。
ぼくのエッセイは、個人的な話ばかりだなあと、われながらあきれてしまう。
いくらエッセイでも他人に共感される普遍性が必要であるが、ぼくのエッセイはそのかけらも無い。普遍的すぎて、この作者はAさんでなくてもBさんでも誰でもいいと思えるのもあるが。
今回は自分の体重と身長だけでエッセイが書けてしまった。ふつうだったら、体重と身長だけで文章は書かないだろう。
将来、このエッセイが大学入試に使われ、要約問題が出るかもしれない。ぼくはそこまで見込んで書いているのである。
答えは「ぼくは53kg・159cmである」である。
ぼくは自分の体が好きなのである。アイラブミーである。とても傷つけるなんてことはできない。
このエッセイのネタ、ぼくの肉体を与えてくれた両親に感謝である。
それに人智を超越した摂理（お大道様）にも感謝する。

編集後記

十月も半ばを過ぎると、近くの住宅街を歩くだけで、満開の金木犀の華と香り、色づいた柿の実が目を楽しませてくれます。自然が私たちに与えてくれる四季折々の豊かさ、美しさに、人として謙虚に感謝すべきであろうとの思いを深くしました。

まんじ一三三号まで七回にわたって連載された忠内正之氏の「古い物・遠い夢」では、私たちに千利休以前の時代から江戸末の武士茶道に至るまで、いくつかに分れた流派の特徴、流れを時代ごとに教えて頂き、一三四号では、その中で特に興味と好奇心を持たれた「古田織部」について「茶道史余滴」として寄稿されています。氏の茶道史研究に心から敬意を表します。

まんじ一三四号では、一六回にわたって連載された山本勉氏の連載翻訳小説「口紅」が今回で完結しました。氏の熱意とご努力に敬意を表し、やがて単行本としての出版のご計画もあるとのこと、お祝い申し上げます。

十月初め、致知出版社から拙宅に送られた「致知」十月号を開くと、三戸岡道夫氏と山谷えり子氏との対談が目に飛び込み、「あれ！」と思い、出かける間際だったのでそのまま「致知」を片手にバスの中、電車の中で読ませていただきました。お二人の子どもたちへの道徳教育の必要性への思いに、改めて共感を深くしました。

次回発行はお正月を過ぎて来年二月です。同人皆様がご健康で、心豊かに新しい年をお迎えになられることを、心から祈念申し上げます。

（鍋）

まんじ第134号

平成26年11月1日発行（非売）

発行人　三戸岡　道　夫（みとおか　みちお）
編集長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）
事務局長　鍋　屋　次　郎（なべや　じろう）

（事務局）　〒223-0056　横浜市港北区新吉田東五丁目76-35　太田善朗方
TEL・FAX 045（544）5947
（郵便振替口座）　No.00270-0-64592　加入者名　ま　ん　じ
（印刷製本）　日東印刷株式会社
〒142-0054　東京都品川区西中延2-15-16

表紙の絵について
「夢はなお　高きを目指して天駆ける」
田寺（でら）怜葦（れい）画